

ロビーの冒険

ゼルダ・エルリッチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファンタジー世界アークランドを舞台とした、おおかみ種族のロビーとひつじ種族のライアンの友情をメインとした物語です。

世界の救世主であることを告げられたロビーが旅に出発し、2つの大国の大戦をからめながら、悪の魔法使いアーザスと対決するまでの冒険を描きます。

全30章、単行本サイズで1800ページに渡る長編ですので、様子を見ながら1章ずつ掲載していきたいと思えます。

子供たちに、人としての在り方と、成長を促すための物語です。ぜひ、多くの人に読んでもらいたいと思います。

まずは第1章、「かなしみの森のおおかみ」から。
ゆっくりと、少しずつ、聞いていってくださいね。

目次

1、	かなしみの森のおおかみ	1
2、	騎乗の旅立ち	54
3、	セイレン大橋	102
4、	あらしの夜の出会い	169
5、	シープロンド	222
6、	進むべき道	263
7、	オーリンたちのむかしのなごり	330
8、	はぐくみの森の子ぎつね	380
9、	夜の底	436
10、	ゆうれい都市モーグ	502
11、	おばけのまちでおるすばん	
12、	カルモトさがし	567
13、	木の塔とブリキの塔	688
14、	たましいかいほうボタン	752
15、	ベーカーランドへいっちょくせん	821
16、	エリル・シャンティーン	879
17、	明かされたしんじつ	949
18、	ノランベつどう隊まいる	1012
19、	リズのおうちへいっちょくせん	1091
20、	黒の軍勢きたる	1151
21、	アップルキントのラググリーン	

2 2、	それぞれのむかうさき	—
2 3、	精霊王のふしぎのくに	—
2 4、	ほんとうの強さ	—
2 5、	背中に乗ってもういちど	—
2 6、	なまり色の空の下	—
2 7、	人の心	—
2 8、	戦いのゆくえ	—
2 9、	けつちやくのとき	—
3 0、	つづくみらいへ	—

186717961732166516091543145113731294

1、かなしみの森のおおかみ

あなたたちの世界から、どのくらいねん月と場所が、はなれているのか？ 著者のわたしにもわかりませんが、おとぎのくにというものは、たしかにそんざいしているのです。

そこでは、わたしたちの見たこともない木々がしげり、ふしぎな実がえだいっぱいみのに、住人である動物たちは、それぞれすばらしい社会をきずいていました。かれらは、おたがいにささえあい、助けあいながら、人間も犬もねこも、鳥もうさぎも、きつねもくまも、みんな、自由な暮らしを送っていたのです。

ですが、動物の種族の住人たち、それは、おとぎのくにに住んでいるさまざまな生きものたちの、ほんの一部にすぎませんでした。住人の中には、(そしてこれが、おとぎのくにのすばらしいところなのですが) こちらの世界に住んでいるわたしたちにとつて、とてもきみようにうつるすがたかたちをしている者たちも、たくさんいたのです。

どんな住人たちが住んでいるのか？ そうぞう力ゆたかな読者のみなさんでしたら、わたしなんかよりも、もっとたくさんの、ふしぎで、みりよく的で、おかしな住人たちを思い浮かべることができるでしょうが、とにかく、その一部をあげてみるだけでも、全

身が色とりどりのもみじの葉っぱでできた、森のため。身長が一フィートほどしかない、小人の種族。つめもののされた、生きているぬいぐるみ。空飛ぶねこの種族。岩でできた、巨大な顔だけの種族。などなど、じつにたくさんで、にぎやかな種族の者たちが、このおとぎのくには住んでいました。

さてさて、物語は、そんな世界からはじまるのです。

このおとぎのくにの、ずっと北の果てに、かなしみの森とよばれる暗い森があります。そこに住んでいる生きものたちは、みんな、かなしげな顔をいつもしていたのです。かなしみを持った者たちがこの森に集まってきたのか？ この森にきたからかなしくなったのか？ 今ではぜんぜんわかりません。じつさい、この森に住んでいる者たちでさえ、なぜ、自分がこんなにもかなしいのかは、説明できないことでしょう。しかし、いくらかなしいといっても、それは、朝からばんまで、ずっと、なげき、かなしんでいたほどの、強いかなしみではなくて（もしそんなだったら、だれもこの森には住んでいないでしょう！）、ほかのくにの人々と同じように、森の住人たちは、それなりに、へいわな暮らしを送っていたのです（もちろん、歌っておどつてというぐあいにはいかないでしょうけど）。

そんなかなしみの森に、ひとりのおおかみが住んでいました。おおかみは、このかなしみの森の中でもいちばんとっていいくらいに、かなしげな目をしていました。いつもひとりぼっちで、森のはずれにあつてすみかにしているほらあなから、めつたに出かけることもありませんでした。ですから、森の住人たちも、めつたに、このおおかみのすがたを見ることはなかったのです。ただひとり、森でゆいいつの、「ぎつか屋および食りよう品店」の店主、あなぐまのスネイル・ミンドマンだけが、文ぼうぐや食りよう品など（お茶や砂糖やコーンビーフなどでした）をときどき買いにくるおおかみと、会話をしたことがあります。けれども、それでも、しほらいのときにおこなう、すこしばかりのあいさつでしかありませんでした。

そんなふうでしたから、住人たちは、このおおかみについて、さまざまなうわさ話を立てたのです。このおとぎのくからはちがう世界からまよいこんできた、旅人なのだとか、遠い南のやばんなくにからついほうされた、けものの軍隊のうちのひとりなのだとか、あることないこと、つきつきに、うわさが飛び出していききました。けれども、住人たちにとっての問題はただひとつ。このおおかみが、敵か味方か？ ということにつきたのです。

なにしろ、このかなしみの森には、おおかみがい、強くてこわそうな住人は住んでいませんでした。うさぎやたぬき、あなぐま、しか、りす、ビーバーに、あらいぐま、そ

のほか。とにかくかれらは、ひっそりとおだやかに暮らすことを好む者たちでした。ですから、もし、おおかみが悪いやつであったとしたら、自分たちのせいかつがあやぶまれるのです。今は、なんのひがいもほうこくされていませんでしたが、いつなんどき、さいしよのぎせい者があらわれても、おかしくないわけでした。

ですけど、だからとはいえ、森の住人たちは、このおおかみを森から追いはらつたりするようなことは、しませんでした。悪いやつだときまつたわけではなかつたし、今のだんかいでは、森の住人のひとりとして、受けいれるほかはなかつたのです。それに、もし追い出したりなんかしたら、おおかみがかわいそうだという意見も、すくなからずありました（こわがりなばつかりに、おおかみのことを遠ざけてしまつてはいたものの、住人たちは、ほんとうは、心やさしい人たちばかりだつたのです）。

さて、おおかみ自身はといいますと、これは、多くの住人たちのおくそくとはうらはらに、とてももの静かで、おちついた、しんしであつたのです。加えて、とてもやさしく、だれよりもへいわを好むおだやかな心を持つていて、そのうえ、けんきよでした。おおかみがあまり出かけなかつたのも、じつは、自分のせいでみんなをこわがらせてしまうことを、おそれることからだつたのです。

このおおかみの生い立ちについては、これからの物語の中で、すこしずつ語られていくことになります。だいじなことは、このおおかみが、まだずっと小さかつたころに仲

間のもとからはなれ、そしてあるときから、ひとり、この森で暮らしはじめたというこ
とでした。

とはいえ、おおかみは、そんなにとしを取っていたというわけではありませんでした。
からだも大きく、するどいきばも生えておりましたので、とより大人に見えてしまっ
こともありましたが、みなさんの世界のねんれいでいえば、まだ十五さいくらいの、少
年だったのです（ちよつと、いがいですね！）。

はつきりとしたねんれいは、かれにしかわからないでしょうし、ひよつとすると、か
れ自身、わからないのかもしれませんが、ただひとついえることは、かれがまだまだ、弱
さやもろさをその心の内がわに持っている、子どもなのだということでした。かなしみ
の森のはずれの、暗くてさびしいほらあなの中で、かれは、なんどもなんども、ひとり
ぼっちのかなしみにうちひしがれていたのです。

これは、かれくらいにねんれいの少年には、どんなにかつらかったことでしょう。で
すけど住人たちは、みな、おおかみがそんなとであるとは、ぜんぜん知りませんでし
たし、そもそも、おおかみという種族のことも、よく知らなかったのです。ですから住
人たちは、おおかみの、大きなからだや、するどいきば、そんなところばかりを見て、と
ても強くてこわいという、イメージを作り上げてしまっていました（そのうえおおかみ
は、いつも、黒のズボンに黒のシャツを着て、黒のマフラーまでしておりましたから、な

おさらこわそうに見えたのです。ほんとうは、黒い服しか持っていないだけなのですが……)。

ところで、いつまでもおおかみのまんまじや、みなさんも、そつげなく感じることを思いますので、このあたりで、かれを、その名まえでよんであげたいと思います。かれの名まえは、ロビーといいました。小さかったころのかれのきおくは、ほとんど残っていませんでしたが、この自分のロビーという名まえだけは、はつきりとおぼえていたのです。ロビーは、この自分の名まえを、とても気にいっていました。そして、とても、ほこりに思っていたのです。しかし、かなしみの森には、かれの名まえを知る者は、ただのひとりもいませんでした。それもそのはず。かれは、人とおしゃべりをするどころか、めつたに人とさえ会わなかつたんですから、とうぜんのことなのです(なにしろ、自分の家のほらあなにさえ、ひょうさつを出していませんから。これはつまり、だれもかれの家をおとずれてくる者が、いながつたからなのです。ぎつか屋のスネイルだって、このお客さんの名まえは知りませんでした)。

だれにも、名まえすら知ってもらえていない。それは、ロビーにとつて、とてもつらいことでした。とてもかなしいことでした。ロビーは、できることなら、みんなとお話して、なかよくしたいといつも思っていました。自分のせいで、森のへいわがみだれるようなことがあつてはならないと、ぐつとこらえていたのです。だれもたずねてく

ることのない、森のはずれの暗いほらあなに、いつもひとりでいたとき。ロビーはさびしくてなりませんでした。

このほらあなに、たくさんの友だちをよんで、パーティーができたなら、どんなにかすきだろうな。ロビーはいつも、そう思っていました。そしてそれが、かなえられない願いだとわかっておりましたから、かなしみは、よけいに、大きなものとなったのです。

しかしロビーは、いつもかなしんでばかりで日々をすごしていたわけでは、ありませんでした（そんな毎日じや、ぜんぜん楽しくありませんもの）。ロビーには、とても大きな、のぞみがあったのです。

そののぞみとは、「姓」を受けつぐことでした（せいとは、みょうじのことです）。ロビーは、こののぞみをぜったいに果たしてやろうと、ちかいを立てていたので。みなさんは、まだ、ごぞんじないことかと思われませんが、この世界のおおかみ種族の者たちは、みょうじをとても、ほこりに思うのです。どんなおおかみの家にも、りっぱなみょうじがあつて、それは代々、受けつがれてゆくものだったのです。もしもだれかに、自分の家のみょうじをぶじよくされれば、おおかみたちは、いのちをかけてでも、みずからほこりと、そのそんげんを、守ろうとします。そのくらい、それは、だいじなものでした（わたしたちの世界でいえば、ちようど、きぞくのほこりのようなものでした）。さきほど申しました通り、ロビーは、おさなくして、家族とはなればなれになつてし

まっておりますので、自分のみょうじをおぼえていませんでした。ゆいいつ、ロビーという名まえだけを、おぼえていたのです。もちろん、このロビーという名まえだって、じゅうぶんに、りっぱでほらしいものだど、かれは思っていました。やはり、自分の血すじをあからしめる、姓というものは、それ以上に重要なものでした。ですからロビーにとつて、これは、たいへんな問題だったのです。成人になつたおおかみは、成人しきのおいしいの日に、はじめて、自分の家の姓を正式に受けつぎます。これは、いちにんまえになつて、血すじを守るべき者としてふさわしいとみとめられた、あかしでもあるのです。それが、自分には、かなわなかつたのです。

ロビーは、そのことをいつも、かなしんでいました。ロビーは、おおかみ種族の者の中でも、とくに、ほこりをそんちようする人でしたから、その気持ちは、痛いほど、かれの心をしめつけたのです。ロビーにとつて、こののぞみは、ぜつたいに果たしてやろうとちかうのに、じゅうぶんなのぞみでした。

そしてロビーは、もう、待つことはできなくなっていました。ひそかにこの森を去り、みずからのそののぞみを、たつするため（たとえ、せいこうののぞみがわずかであったとしても）、旅に出ることをけっしんしていったのです。

旅に出る。旅に！ 思いこがれ、あこがれつづけた旅です。自分を取りもどす、自分を自分とするための旅なのです。

かれは、ずいぶん成長しました。はじめてこの森にやってきたときのかれは、今ほど、からだがいじょうぶでもなかったし、大きくもなかったのです。ロビーにとつて森のそとは、危険な未知の世界であるといえました。まだ小さかったころ、自分がどうやって、このそのの世界を越えてきたものか？ ロビーにはけんとうもつきませんでした。きおくはつぎはぎにしか残つてなく、はつきりと思い出せるものは、ほとんどありません。河がありました。大きな河が。そして、高くてけわしい山々。それがどこなのか？まったくわかりません。そしてロビーは、そのときは、ひとりではなかつたように思うのです。自分のそばには、自分と同じ、おおかみ種族の者たちがいたように思います。なんくらしいたのかまでは、わかりません。二、三人でしようか？ それとも、もつとたくさんいたのかも知れません。みんな、馬に乗つて……。そう、馬です。ロビーはそのとき、馬に乗っていました。大きな広い背中にゆられながら、どこか遠くのくにを、進んでいたようなのです。自分のうしろには、大きな男の人がひとり、自分のことを守るようになって乗っていました。そして、その男の人が、自分のことを、こうよんだのです。ロビーと。

その人は、ロビーのお父さんなのではようか？ しんせきかもしれません。それも、ただの知りあいなのではようか？ そのすがたも、もはや、影のようなえいぞうにしか、ロビーのきおくの中にはうつりませんでした。

こうしてロビーは、それらのわずかな思いでのことをたよりに、この森を出ていこうとしていたのです。それらは、旅の手がかりとしては、まったくとぼしいものでした。ですから、ロビーにとってこの旅は、大きな冒険であったのです。なにが待ち受けているのかも、まったくわかりません。そして、じつさいこのころ。このおとぎのくには、未知なるきょうふに、おびやかされています。なにかがくらやみの中を動いているのが、このかなしみの森の中にまで、伝わってくるのが感じられました。それがなんであるのかは、住人たちにも、ロビーにも、まったくわかりませんでした。しかし、それは、たしかにそんざいしているのです。なにか、よからぬことが、このくにに起こりはじめているということでした。もしかしたら、もうすでに、ひどいことになっているのかもしれない。ですからロビーは、自分の目で、そのしょうたいをつきとめたいとも思っていました。そしてその中で、自分にも、みんなのために、なにかできることがあるかもしれない。ロビーは、このかなしみの森の、暗いほらあなの中で、日に日に、その思いをつのらせていったのです。

そしてついに、その日は、やってきました。それは、冬も近い、ある秋の日のことでした。ロビーが、旅への出発にむけて、さいごのあとかたづけをはじめていたころです。夕方でした。かなしみの森のかなしみの力が、もっとも強くはたらく時間でした。

ロビーが自分のほらあなの入り口で、わきに作られたそうこから、だんろに使う、まきを、はこぼうとしていたとまきのことです。つめたい北風が吹きすさび、なにかのさけび声のようなびきが、空の上高くから、きこえてきたように思えました。ロビーは、まきをかかえながら、空を見上げました。夕暮れにそまった空が、あるだけでした。それは、とてもきれいで、そしてまた、おそろしげでもありました。

ふたたび、しせんを森の中にむけてみますと、ずっとむこうの方から、なにか、地面がゆれているかのような音がきこえてきました。そしてそれは、だんだんと、こちらの方へ、むかつてきているようだったのです！ ロビーは、背すじがふるつとしました。寒さと、そして、すくなくならずのきようふのためでした。

そうしているうちにも、音はますます近づいてきて、やがてあるときから、それは、馬のひづめの音なのだ、わかったのです！ ロビーはびつくりしました。遠いきおくの中の、馬の思いだが、よみがえってきたのです。まさか、この森の中で、ふたたびそれをきくことになろうとは、まったくもって、思ってもいませんでした。住人のだれひとりとして、これまでいちどだって、この森の中で、馬のかける音をきいたことなんて、なかったはずなのです。

ロビーは大あわてで、自分のほらあなにかけこみました。とつぜん、思いもよらないものがこちらへせまってくるとわかったら、だれだって、身をかくそうとするはずです。

ロビーもそうしました。入り口の古びた木のとびらをぴったりとしめて、ロビーは、こ
うしのはまつたげんかんわきのまどから、そーっと、そとをのぞいてみました。

うすくもつたガラスまどのむこうに、三頭の馬たちが立ちつくしていました！

みな、荒々しい息使いをしていて、つかれているようすです。ずっと遠くから、休みな
しにかけてきたような感じでした。馬たちのうちの二頭は、はい色で、もう一頭は白い
馬でした。それらの馬たちは、とてもりっぱなかざりのついた、くらを乗せていました。
そして、それらすべてのことよりも、まつさきに注意のそそがれるものが、そのくらの
上にまたがっていたのです。

！ おおかみです！ おおかみがふたり、それぞれのはい色の馬の背に乗っていたのです

かれらは、かれらの馬と同じくらい、りっぱな服そうをしていました。美しいししゅ
うのされた、はい色のジャケツトを着ていて、腰には、ぴかぴかかかやく、銀色のベル
トをまいております。白いマントをなびかせて、そしてそのマントの下に、ちらちらと、
腰におびた剣が、見えかくれしていました。さらに、ジャケツトの下には、これまたみ
ごとな、銀色のくさりかたびらを着こんでいたのです。

かれらが、どこかのくにのゆうかな騎士たちであるのだということは、ロビーにもすぐにわかりました。顔立ちもりっぱで、どうどうとしています。ですがその顔は、なにか、深い心配ごとがあるかのように、くもつても見えませんでした。そしてこれは、重要なことですが、かれらのかみの毛としっぽの毛の色は、ロビーのような黒ではなくて、はい色でした。それは、はい色といつても、暗いはい色ではなくて、全体に光を放っているかのような、つやつやとした、明るいはい色だったのです。

そして、もう一頭の白い馬には、白く美しい服を着て、白のマントをひらめかせた、ひつじの種族の者がひとり、乗っていました。ロビーは、ひつじというものを本などで読んで知っていました。じつさいにほんものを見たのは、これがはじめてでした（すくなくとも、かれのきおくの中でははじめてでした）。そのひつじは、おおかみたちにくらべたら、だいぶ小がらで、はだの色はすき通るように白く、かみの毛は、ふわふわさらりん。風にそよぐ、美しい銀色のかみでした。腰にまいた茶色のベルトには、おおかみたちのものにくらべれば、これまただいぶ小がらでしたが、小さな短剣がさしてあります。見たところ、男のようでしたが、とても美しい顔立ちをしているため、はつきりしません。ですが、ねんれいは、ほかのふたりよりも、ずつと若いようでした。

こういったものを、ロビーは、自分のほらあなの、その小さなまどから見たのです（見れば、ぱつとすぐにわかることを、文章で書くというのは、けっこうたいへんです）。そ

してかれらは、馬をせいしておとなしくさせると、さつと身をひるがえして、馬の背から地面におり立ちました。それから、なんてこと！このほらあなの入り口に、やってくるようだったのです！ロビーはなんだか、こわくなってしまいました。今までだれひとりとして、この自分のほらあなにやってくる者などなかったのです。そのうえそれが、馬に乗ってやってきた、よろいや剣に身をかためた、おおかみの騎士たち（とひつじ）だなんて、いったいだれが、よきできたことでしょう。

ですがロビーは、こわがるのと同時に、強いこうき心をもおぼえたのです。自分と同じおおかみ！自分のことを知る、ぜつこうのきかいであるかもしれない。しかしながら、そんなことに気をまわすよゆうは、今のロビーにはありませんでした。ひよつとしたらかれらは、自分に害をなすためにやってきた、悪者たちであるかもしれないなかつたのです。ちようど、かなしみの森の住人たちが、ほかならぬロビーに対して、そう感じていたのと同じように。ロビーはおそれました。

なに者なんだろう？なにをしに、このぼくのところまでやってきたんだろう？ロビーはとてもきんちようしてきました。手には、あせがにじんでおります。ほらあなの中は、そんなロビーの胸の中とはたいしよう的に、しんと静まりかえっていました。自分のしんぞうの音だけが、大おんききょうのこだまとなつて、ロビーのからだの中にずんずんとひびき渡っていました。

そしてついに、かれらが、げんかんのそのとびらの前までやってきたのです。

どん！ どん！ どん！

とびらがたたかれました。おおかみのうちのひとり、とびらをノックしたのです。ロビーはすっかりこわくなって、床にちぢこまってしまいました。げんかんのとびらが、まるでおそろしいかいぶつであるかのように、ロビーには感じられたのです。

どん！ どん！ どん！

ふたたび、とびらがたたかれます。ロビーは勇気を出して、それにこたえるべく、とびらに近づきました。

そのとき。とびらのそこから、よくひびくたくましい声が、ロビーのことをよばわたのです。

「北のくにのおおかみどの！ お目通り願いたい！ われらは、南のくにのおおかみです！ あなたにぜひにも、お願いがあつてまいったのです！」

ロビーはとてもおどろきました！ なんとかれらは、自分のことを知っているよう

だったのです（そしてどうやら、かれらが悪い人たちではなさそうだったので、ロビーはすこしだけ、ほっとしました）。

そうしているうちに、ふたたび同じ声がひびき渡りました。

「お目通り願いたい！ いらつしやることはぞんじております。われらに力を、ぜひにも、お分け与えてください！」

それから、すこしあいだをおいて、さらに大きく声がひびきました。

「お目通りを！」

そしてついに、ロビーは意をけっして、そのげんかんのとびらに手をかけたのです。大きな木のとびらが、ゆっくりと内がわにひらきます。そして、そのすぐそばに。さきほどロビーが目にしました、ふたりのおおかみたちと、もうひとり、白いひつじの種族の者が立っていました。さきほどは、はつきりと顔を見られませんでした、近くで見ると、やはり、このひつじの種族の者が美しく気品のある顔立ちをしていたということ、よくわかりました。そしてやつぱり、このひつじは男せいです。それでやつぱりとしは若く、まだロビーと同じくらいのおねれいであるかのようにでした。

おおかみの騎士たちが、ロビーに深々とおじぎをしました。右手が胸にあわされ、ロビーはあとで知ったことですが、これは南のくにおおかみたちの、敬礼にあたるものでした（ふたりのうしろでは、ひつじの少年が同じようにおじぎをしておりましたが、こ

れはひかえめでした。

まず、さいしよのおおかみの騎士が口をひらきました（この騎士は、もうひとりの騎士よりも年上で、この三人のうちのみとめやくとといった感じでした）。

「おはつにお目にかかります、北のくにのおおかみどの。そして、お目通り、心よりかんしゃいたしますぞ。」

ふたり目のおおかみも、同じくかんしゃの気持ちをあらわしながらいいました。

「お目通りかんしゃいたします、北の同ほうよ。お会いできてなによりでした。」（どうほうというのは、祖国を同じくする、家族のような仲間のことをさす言葉です。）

そして、さいしよのおおかみが、ふたたび口をひらきました。

「われらは、南の地、ベーカールランドよりの使者であります。わたくしは、王の騎兵師団にぞくしております、ベルグエルムと申す者。メルサル家です。」

ふたり目も同じく、じこしょうかいをします。

「同じく、フェリアルと申します。ムーブランド家の長子です。」（ちようしとは長男のことです。）

そして、ベルグエルムがうしろをさししめし、残るひつじの少年のことをしようかいました。

「これなるは、ひつじのくに、シープロンドよりつかわされました、ライアン・スタッ

カートであります。」

「おおかみたちのうしろから、ひつじの少年が進み出て、ちよこんとおじぎをしました。」「やつとお会いできました。ぼくはライアンといいます。このかなしみの森から南東にくだった地。うつしみ谷のすその白きひつじたちのくに、シープロンドより、あなたをおむかえにあがるべく、やってきたしだいです。ぼくらはあなたを、ずっとさがしていたのです。つまり、北の地にたつたひとりだけの、黒のウルファを。そして、いい伝えはほんとうでした。ついにぼくらは、あなたを見つけることができたんだもの。」

「いい伝え？ たったひとりの黒のウルファ？ このおかしならい客たちのことを前にして、ロビーはすつかり、こんらんしてしまいました。それで、わけもわからず、話の内ようもつかめないままに、この三人のことを、自分のほらあなの中へとまねきいれてしまったのです。思わず、気がどうてんして、騎士たちの言葉使いのいりまじった、おかしなへんじまでしてしまつて。」

「ごていねいなるじこしようかい、きようしゆくのいたりにございます。ぼくは、ロビーと申しました。さあ、長旅で、さぞやおつかれのことでしようから、こんなきたないほらあなで、たいへん失礼かとぞんじますですが、どうぞ、お上がりくださればとぞんじます。」

ベルグエルムがいちれいをして、そのロビーの言葉にこたえました。

「これは、まことにかたじけない！」

それから、ライアンを先頭に、ベルグエルム、フェリアルとつづいて、げんかんにながっていた居間の、木の長テーブルに、三人は腰をおろしたのです（この長テーブルは、ロビーが住みついたこのほらあなに、もともとあったものでした。ロビーひとりです）。使うのには大きすぎましたが、これでようやく、ほんらいのやくめを果たしてくれたわけです）。いつぼうロビーはといいますと、とつぜんのらい客にすつかりあたふたして、だいどころをかけたまま置いていました。なにしろ、お茶のじゅんびをしようにも、まったくなんの用意もしていなかったのです。大急ぎでお湯をわかし（居間のだんろの火に鉄のやかんをかけ、さつきそとから持ってきたまきを全部くべました）、お茶をそそぐカップをさがしましたが、ティーカップはふたつしか、だいどころにはありませんでした。あとは、大きな木せいのジョッキがひとつあるだけで（これは、ロビーがいつも自分用に使っているものでした）、そのほかでなんとか、かわりになりそうなものといえば、底のわりと深い、スープ用のおわんしか、ここにはなかったのです。

ですけど、ほかにしようがありませんでしたので、ロビーはライアンとフェリアルにはティーカップを、ベルグエルムには木のジョッキを、そして自分用には、（いちばんみつともない）スープ用のおわんを使いました。そしてなにか、お茶菓子をさがしまし

だが、これもまったく、まともなものではなく、なんとか食べ残して取ってあった、はちみつがけのポップコーンをすこしと、かんそうしたくだもの（ほしぶどうとほしたプラムでした）を、ほんのわずか、お皿に取って出すことができたのです。

こうしてじゅんぴがすみますと、ロビーは自分もテーブルについて、三人とならびましたが、とたんにとても、はずかしくなっていました。それもそのはずです。テーブルについている三人を見てみますと、三人ともみんな、りっぱないで立ちで、とても品かくのあるお客さんでありましたのに、そのテーブルに乗っているものときたら、カップはばらばら、お菓子はさんざん。しかも、なんのかざり気もありません。ロビーはすっかり赤くなつて、いすにちぢこまつてしまいました。

「ほんとうにはずかしいです。こんなものしか用意できずに……。みなさん、どうかゆるしてください。」

ですが、ベルグエルムはまったく気にもしていないようです、与えられた木のジョッキから、おいしそうにお茶を飲み、お菓子をいただきました（見れば、みんな同じく、よろこんでお茶をごちそうになっているようでした。ライアンなどは、あつというまにお茶を飲んでしまつて、「すいませんが、おかわりを。」といったくらいです）。

「なにをおっしゃいますかロビーどの。どうか、お気づかいなさらないでください。とつぜんにおしかけたわれらこそ、あなたにおゆるしを願わなければならない方です。」

お心くばり、まことにきょうしゆくです。われら一同、心よりかんしゃいたします。」
ベルグエルムは、そういつて、右手を胸においていちれいしました。フェリアルとラ
イアンも、それにならいます。

こうして、このおかしなお茶会は進んでいきました。

しばらくのあいだ、一同はおしだまつてお茶を飲み、お菓子をつついていましたが、それも、わずかばかりの時間でしかありませんでした。つまり、お皿のお菓子は、もうすっかり底をついてしまいましたし、お茶の葉っぱも、そんなに多くは残っていないなかつたのです。しかし、そんな問題よりも、もうひとつのべつの問題の方が、このお茶会にひとまずのまくをおろすために、がんばつていました。その問題とは、つまり、ロビーのきょうみとぎもん、その気持ち、が、どんどんと、大きくなつていったということです。ぼくをさがしていただつて？ いったいなんのために？ それに、さつきいつていた、いい伝えつて？ それらのぎもんは、まだ、なにひとつ、あきらかにされていませんでしたから。

そして、がまんができずに、ロビーが口をひらこうとした、まさにそのとき。ベルグエルムが、この静けさにつつまれた空気を、ふいに破りました。

「ロビーどのが気にかけていらつしやることは、まったくどうぜんのことです。話を

切り出せずにおりましたことを、どうぞおゆるしてください。あまりに長く、しんこくな話のゆえ、どこからお話ししてよいものか？ そのことを考えておりました。ロビーどのおおゆるしくださるのであれば、そろそろ、わたくしどものことを、語らせていただきます。ぞんじますが。」

もちろんのこと、ロビーはその申し入れを、よろこんで受け入れたのです。

「もちろんですとも！ ぜひ教えてください！ ぼくは、あなたたちのことが、気になつてしかたありません。どうして、こんなぼくのところまで、はるばるやってきたんですか？ いい伝えって？ 黒のウルファって？ 教えてください！」

ロビーはすっかりこうふんして、さつきまでの話し方（この南のくにのりつばな騎士たちのような、ていねいでおちついた話し方です）から、うって変わったいい方で、いき胸のつかえをはき出してしまいました。するとベルグエルムは、フェリアルとライアンの方を見やって小さくうなずくと、ロビーにあらためてむきなおり、両手を前にくんでから、ゆつくりと話しはじめたのです。

「われらがこの地をおとずれたのは、ロビーどの、あなたにお会いするためです。」

ベルグエルムの話しぶりは、ゆつくりかかつていねいでした。そしてその声には、なにか人の心をおちつかせる、ふしぎなこうかがあるように感じられました。これから、かれのその話を、できるだけくわしく、語っていききたいと思いますが、ちよつと長くて、む

ずかしい話になるかと思えます。でも、すごくだいじな話ですから、ゆつくりとすこしずつ、きいていってくださいね。

「われらは、あなたをさがしておりました。それもすべて、南のくにに伝わる、ひとつのいい伝えによるものなのです。それは、われらおおかみたちのくに、レドンホルルの、古きいい伝えです。」

そういつて、ベルグエルムは、とあるひとつのうたを口にしました。それは、とてもみじかいうたでしたが、きく者の心にしみいる、ふしぎな力のあるうたでした。

西の白き王、かぞえて第四の治世のさなか、

世界はやみにおおわれた。

はらうはだれぞ、光はどこぞ、

それは北の地ゆいいつの、われらが黒き同ほう。

自分がだれかもわからぬ者が、南の地へとくだりゆく。

黒き同ほうつばさにゆられ、

深きやみへとはいりゆく。

すべては古き、おのが運命のみちびきのままに。

そして光はよみがえる。空に、山に、みずうみに、河に。

とうときぎせいを乗り越えて、わかれたものはひとつにもどる。

よろこびは心に、人々は家に、

あるべき場所へと帰りゆく。

自分がだれかを知り得た今は、

黒き同ほうかれもまた、

あるべき場所へと帰りゆく。

おしまいまでいうと、ベルグエルムは静かに目をとじました。そして、「ほうっ。」と大きく息をつくと、目をあけて、ふたたび、話をつづけたのです。

「そして今、まさしくこのいい伝えの通り、このアークランド世界をやみがおおいつくそうとしているのです。われらが祖国レドンホールは、今や敵の手中に落ち、王はやみにとらわれております。それもすべて、かの山の魔法使いめのためなのです。」

魔法使いという言葉に、ロビーはとてもきようみをひかれました。いぜん読んだことのある本の中に、魔法使いのことが書いてあったのです。魔法使い、まじゆつし、魔女、けんじゃ、いろいろなよび名がありました。かれらの中には、よい者もいれば、悪い者もいるのだと。遠い遠いには、おそろしいかいぶつや、悪い魔法使いがいて、人々

のことをこまらせているのだ、とも。今、話に出てきた魔法使いは、とびきり悪いやつ
のようだ。とロビーは思いました。

「今よりさかのぼること七年前のこと。このアーランドの北東の果て、なにものも
よせつけぬ、怒りの山脈。そこにひそむ魔法使いめが、レドンホールの北のくに、ワッ
トの王に取りいつて、かれらと手をくみました。ワット国は、がんらい、よくの強い人
間たちによつておさめられておりましたが、かの魔法使いめは、そこにつけこみました。
人間的な心のすきをうまくりようして、魔法使いめのとくいとする、たぶらかしの
じゆつをもちいて、かれらを意のままにあやつりはじめたのです。ワットの王、黒の王
アルファズレドは、今や、このアーランドでもいちばんのぼうくんとして知られるよ
うになり、配下の強力な軍勢をひきいて、れっこくをつぎつぎとしんりやくしておりま
す。

「ですが、そんな黒の軍勢に、たいこうする勢力があらわれました。それは、レドン
ホールの西のくに、アーランドにおいては南のくににあたる、ベーカーランドの白き
勢力です。ベーカーランド国の王、白き王、アルマーク王は、ワットの悪ぎようにたえ
かね、せいえいぞろいの騎兵師団をけつせいして、ワットのしんりやくをおしとどめよ
うとしました。そして、たび重なる戦いののち、ベーカーランドの白き勢力を相手にし
て、ワットの黒の軍勢は、しだいにその力を弱め、うばい取った土地も、もとにもどさ

れるようになったのです。こうして、ときを重ねるにつれ、いくつもの小国が、ワット
のしんりやくからかいほうされることとなりました。

「しかし、ワット国は、それだけでは終わらなかつたのです。かの魔法使いめと、黒の
王アルファズレドは、なおいつそう、よこしまないんぼうをくわだてました。魔法使い
めは……、ああ、なんたることか！　ワットの南に位置するわれらが祖国、ぜんりよう
なるおおかみたちのくに、レドンホールにまで、その悪しきやみの力をはたらかせたの
です！

「魔法使いとアルファズレドは、レドンホールの王、われらが王、ムンドベルク・アル
エンス・ラインハットへいかにつめより、へいかによこしまなるけがれた魔法をかけ、へ
いかを黒のやみに落としこんでしまいました。それまで、せいなる山々のごとくほこり
高く、大河の流れのごとくゆうだいであつたへいかの心は、やみにむしばまれ、へいか
は、そのけがれなきおん目から、ちつじよの光を失われてしまつたのです。」

ベルグエルムは思わず、目頭をあつくしてうなだれました。

「なんとというひげきでありましょう！」フェリアルががまんできずに、声を張り上げま
した。ライアンはただだまつたまま、うつむいて、かなしげな表じようをしていました。
ベルグエルムが深く息をついて、さらに話をつづけます。

「へいかを失つたレドンホールは、なすすべもなくワットの手落ち、くには、晴れる

ことのないやみにおおわれました。かつての美しかったフレイムロンドの王城は、今や、見る影もありません。くにたみはみな、ワットののしは下におかれ、兵士たちは、ワットのほりよとしてつれていかれました。

「しかし、そのよこしまなるやみの力から、からくものがれ、レドンホールから西へ、のぞみをつないだ者たちがあつたのです。それが、われら、はい色のウルファたちでした。ウルファというのは、われらのおおかみ種族の者たちのことをさす、種族のよび名です。

「レドンホール国には、ふたつのしゆるいのおおかみたちがいます。ムンドベルクへいかをふくめる、黒のウルファたち。そしてわれら、はい色のウルファたちです。われらはい色のウルファたちは、まったくのぐうぜんにより、魔法使いのやみの力からのがれ、レドンホールとかねて親しくむすばれていた、ペーカーランドへと、すくいをもとめてうつりゆきました。そして、ペーカーランド王アルマーク王は、われらをこころよく、受けいれてくださったのです。

「われらは、ことのしだいをアルマーク王に伝え、じたいのしんこくさを伝えました。レドンホールは今や、よこしまなるやみにおおわれ、ムンドベルクへいかもまた、やみにとらえられ、魔法使いの手に落ちてしまったということ。そしてなにより、レドンホールの土地を手にいれた黒の軍勢が、急そくにその力をたくわえ、今では、おそろし

い魔物の軍隊までむかえいれて、いぜんにもまして、強力な勢力になってしまっているということ……。

「かのじやあくなる魔法使いめが、そのすべてのはいごに立ち、黒の軍勢をしいしていいいます。しかし、魔法使いめのしんのもくてきは、ここからだたのです。

「ベーカーランドの力のみなもとたる、青き宝玉。これこそが、魔法使いめのほんとうのねらいでした。宝玉は、このアーランド世界の力のバランスをたもち、ぜんなる者たちに、大いなる力をさずけてくれるもの。その力を、かの魔法使いめはほっしているのです。なんとという、ばちあたりなことでしょうか！

「ベーカーランドは代々、この大いなる宝を守りついでゆくべき国家として、このアーランド世界のことをささえてきました。宝玉は、ベーカーランドの王城にあつてかたく守られ、そしてその力によって、ベーカーランドのくに自体も、あつく守られていたのです。

「しかし、魔法使いめのさくりやくによって、今、アーランドの力のバランスは破られつつあります。そして、宝玉のかがやきも、じよよに失われつつあります。魔法使いめは、宝玉の守りのうすれつつある今をねらい、ベーカーランドをほろぼし、宝玉の力をわがものにせんとたくらんでいるのです。宝玉が魔法使いの手に落ちれば、そのときこそ、このアーランド世界のすべては、よこしまなるやみにおおわれてしまうこと

でしよう。それですべては、終わつてしまいます。すべてののぞみは、ついでてしまします。

「それを防ぐためにも、われらは力をけつそくさせ、黒の軍勢に立ちむかわなければなりません。げんざいわれらは、ベーカールランドの兵とはい色のウルファたちとでけつせいた、白の騎兵師団を作り上げておりますが、このアルマーク王の白の騎兵師団の力をもつてしても、せまりくる黒の連合軍をうちはらうことは、かなわぬでしよう。ですからわれらは、われらのすくいとなる、新たなる力をもとめているのです。この世界をおおいつつあるやみを、うちはらう力を。」

「そしてわれらは、祖国レドンホールに古くから伝わる、ひとつのいい伝えにのぞみを見出したのです。くにを追われて逃げおおせたわれらは、この古いい伝えのことを、アルマーク王に伝えました。そしてアルマーク王は、このいい伝えが、まことに正しいものであるということ、かくしんされたのです。」

「それもそのはず。いい伝えのさいしよのいっせつである、西の白き王、かぞえて第四の治世とは、ほかならぬ、アルマーク王ほんにんのことを、さししめしていたのですから。」

「ベーカールランドの治世がはじまつていらい、白き王とうたわれ、人々のそんけいをその身に一身に受けるようになったさいしよの王は、今より三だいむかしの世の、しよだ

いの白き王、イエヒュリー王です。そして、げんぎいの白き王。それこそが、第四の治世をおこなう、アルマーク王なのです。

「いい伝えの内ようは、このやみにおおわれはじめた今のアークランド世界のことを、まさに、さししめしております。そしてアルマーク王は、わたくしに大いなるやくめを与えられました。それは、いい伝えのしめすところの、『北の地ゆい一つの黒き同ほう』をさがし出すことであります。黒き同ほうとは、われらが祖国、レドンホルの黒き同ほう。すなわち、黒のウルファのことを、まさしくさししめしていたのです。」

なんだって！ ロビーは心の中でさげびました。ひよつとして、ぼくがその、黒き同ほうだっていうんじゃないだろうか？ いやいや、そんなことはない。きつとなにかの、まちがいだ。

ベルグエルムがロビーの顔を見つめました。ロビーは、どきつとして、思わず下をむいてしまいました。

さらに、ベルグエルムの話はつづきます。

「われらはひそかに、この大いなるやくめを果たすため、かぎられたわずかな者たちばかりをひきつれて、いい伝えのしめすところである北の地をめざすべく、出発しました。ペーカーランドから東へ。大河ティーンティーンをさかのぼり、切り分け山脈のふもとを通り、そして、長い道のりのすえ、われらは、うつしみ谷のふもとにある、ぜんなる

ひつじたちのくに、シープロンドへと、たどりついたのです。ここでわれらは、この一部しじゆうを、ひつじの種族たるシープロンの王、メリアン王に伝え、力を貸していただけるようお願いしました。そしてメリアン王は、われらに進んで、協力してくださいました。」

「すばらしき王です。わがシープロンのほこりであります。」ライアン・スタツカートが、ほこらしげに、そして、ひかえめにいいました。

「そうです、メリアン・スタツカート王は、すばらしい人物でありました。その通り、これなるライアン王子の、父上でいらつしやいます。メリアン王は、北の地のそうさくを、一手にひき受けてくださいました。そしてついに、いや果ての北の森、土地の者からは、かなしみの森とよばれているこの森に、ひとりの黒ウルファが住んでいるとのほうこくを受けたのです。」

「やっぱり！ ロビーのよかんはてきちゅうしました。こまったぞ、この人たちは、とんでもないかんちがいをしているんだ！ ぼくが、そんないい伝えに、かんけいあるわけがないもの（ところでライアンは、ひつじのくにシープロンドの、王子さまだったんですね。どうりで、気品にみちた顔立ちと、たたずまいをしているはずです）。」

「ロビーはおろおろしてしまいました。ベルグエルムはそれにおかまいなしでした。」「われらはよろこびいさんで、これなる武勇すぐれまするフェリアルと、そして、シー

プロンドをだいひょうして、ライアン王子に、この旅のさいしゅうもくてき地へのともをお願いしたいのであります。そうしてわれらは、ついにここに！ いい伝えの黒のウルファを見つけることができましたのです！

「ロビーどの！ ロビーどの！ ぜひにわれらに、力をお貸し与えいただきたい！」

このアークランドを、やみからすくつていただきたい！ それができるのは、あなただけなのです。われらに残された光は、もはやほとんど消えかけております。ロビーどのの助けが、ふかけつなのです。ぜひに、われらとともにお越し願いたい。ベーカーランド国のアルマーク王のもとまで、お越し願いたいのです。どうか、お願いであります！」

「お願いでありますロビーどの！ どうか、世界をすくつていただきたい！」

ベルグエルムとフェリアルは、そろっていすから立ち上がり、ロビーの横にひざまずいてお願いしました（そしてライアンもまた、そのうしろについてひざまずきました）。

ですけど、すっかりこまってしまったのはロビーです。なにしろ自分は、ただの少年でありましたし、そんなごたいそうな力など、持ちあわせているはずありません。ロビーはあわてふためきながら、いすから立ち上がって、三人にむかつて、なんとかとりつくろおうと努力しました。

「ちよつと待って！ 待ってください！」ロビーは、なかばひめいのように、声を張り

上げました。

「お願いです！　お願いです！　どうかそんなに、かしこまらないでほしいんです！

「あなた方のお話は、よくわかりました！　いや、ほんとうは、むずかしくて、全部は
りかいてできなかったのだけど……、でも、南の地でおそろしいことが起こっているん
だつていうことだけは、よくわかったつもりです。このくになが、そんなたいへんなこと
になつていたなんてこと、ぼくはぜんぜん、思つてもいませんでした。」ロビーは、むが
むちゆうになつて、三人につめよりました。

「とても重大で、しんごくで、たいへんな問題だつて思います。でも、ですけど！　あ
なた方は、大きなかんちがいをしているんです！　なにかのまちがいですよ！　ぼくに
は、そんなりっぱな力なんてありません。ただの、ふつうのおおかみです。たとえぼく
が、つるぎを持つて敵の前におり立つたとしたつて、あつというまに、うち負かされて
しまうことでしょう。そんなぼくに、いったいどんな力があるつていうんですか！」

このくにに起こつていいるという、おそろしいわざわい。おそろしい軍隊に、やみの魔
法使い。それらのものが、自分の前に、とつぜん、みんなまとめてつきつけられたので
す。ロビーの心は、まるで、しなびたりんごのようにちぢこまつてしまいました。すつ
かりおそろしくなつてしまったのです。ですけど、だれにロビーのことを、せめること

ができるでしょうか？ あらそいや戦いなどは、むえんのせいかつをしてきた、まだ十五さいほどの少年が、とつぜん、世界のきゆうせいしゆだなんていわれたって、ぴんとくるはずありません。おそろしい話におびえて、身をちぢこませてしまうのが、ふつうのことなのです。

三人のほうもん者たちにも、それはよくわかつていました。よくわかつていましたが、かれらもここで、ひき下がるわけにはいかなかったのです。

「ロビーどのがそうおっしやるのも、むりはありません。しかし、まちがいではないのです。北の地には、あなたがいい、黒のウルファはひとりもいないのですから。」

ベルグエルムがいましたが、ロビーには、まだぜんぜん、それを受けられるだけの気持ちのせいりがついていませんでした。なにがなんだか？ わけがわからなくなつて、頭の中がちやごちやになつてしまつていたのです。

そんなロビーに、もうひとりのおおかみの騎士であるフェリアルが、さらにつめよつてきました。じつはこれは、あんまり正しいはんだんではありませんでしたが、ロビーになんとか、いつしよにきてもらいたいと、かれもやつきになつていたのでした。

「お願いですロビーどのお！ ロビーどのの身は、われらがいのちにかえても、お守りいたしますゆえ！」

この「いのちにかえても」という言葉が、ロビーの心に、ぐさつとつきささつてしま

いました。どうしたって、いのちの危険はさけられないと、いつているようなものでしたから。ロビーはさらに、こわくなってしまいました。

そんなロビーのことをさっして、ベルグエルムがいました。

「ロビーどの、われらはあなたを、いくさの場に投げ出そうとしているのではありません。すくいのは力は、武力だけであるとはかぎらないのです。あなたには、その力があるのです！」

ベルグエルムのいうことは、ロビーにはよくわかりました。まったく正しいことをいつているのだということも、よくわかったのです。ぼくにできることがあるのなら、立ち上がらなくてははいけない。みんなのやくに立てるのなら、前に進まなくてははいけない。それもよくわかっていました。ですけど！ からだがどうにも、ついていきませんでした。ロビーは、自分のからだがぶるぶるとふるえているということに、気がつきませんでした。いったいどうすれば、このふるえがおさまるのか？ ロビーは自分でもわかりませんでした。ロビーは、とてもなげない気持ちになりました。でも、どうしたらいいのか？ わからなかったのです。

それからしばらく、ふたりのおおかみの騎士たちは、なんとかロビーのことを説得しようとはがんばりましたが、しだいにかれらも、言葉を失っていつてしまいました。いやがる者をむりにつれ出していくことが、はたしてほんとうに正しいことなのか？ 自信

がなくなつてきてしまつたのです。これが運命なら、われらはその運命に、したがうしかないのか？ と。

ベルグエルムはなにもいえず、うつむいたままでした。さまざまに思いが、その胸の中にうずまいてるようでした。

フェリアルもまた、大きく首をうなだれて、力を落としてしまいました。

われらはつとめを果たせないのか……？ かれらの頭の中に、そんな思いが生まれはじめていたころでした。

ちがいます！ あきらめるのは早すぎです！

ロビーはそんな、弱虫なんかじゃありません！

ただ、あまりにもとつぜんに、あまりにも多くの問題におそわれたがために、心が一時的に、ペちゃんこになりかけてしまつたというだけなのです！ ロビーは、ほこり高きおおかみの種族です。ロビーのことを、信じてあげてほしいのです。

ロビーのばかばか！ なにをやっているんだ！ おまえはそんなに弱虫なのか？

さあ、立ち上がれ！ おまえのあこがれた、旅に出るんじゃないか！

ロビーはずっと、心の中で、自分にそいいいきかせていたのです。こわさと戦つてい

たのです。きようふに負けているときなんかじやないぞ。そんなことじや、ぼくはこのさき、ずっと、ただの負けのおおかみだ。しっかりしろ！

そしてロビーが、かれの心をぐるぐるまきにしていた、そのきようふに、あとちよつとで、うち勝とうかというそのとき。

みなさんは、さきほどからひとりの人物が、ロビーの説得に加わっていないということに、お気づきでしょうか？ それは、そう、ライアン・スタックカートです。かれは、ふたりのウルファたちがけんめいになつてロビーの説得にあたっているのを、じつと見守っていました。ですが、ただ見ていたというだけではありません。かれには、考えがあつたのです。ここにきてライアンは、その考えを、じつこうにうつしました。というより、ここしかないと思つたのです。

ライアンは、そつと、ふたりのウルファたちの耳になにかをささやきました。それをしてきて、ウルファの騎士たちは、とてもびっくりしたようですが、やがて小さくうなずくと、そのまま、ライアンのうしろについて、したがうことにしたのです。

ライアンが静かに、ロビーに歩みよりました。そしてかれは、こんな、いがいなことを口にしたのです。

「おじやましました。わたしたちは、これで失礼します。あなたは、わたしたちがさがしている人ではなかつたようです。ごきげんよう。」

そういうと、ライアンは、ふたりのウルファたちのことをしたがえて、げんかんのとびらから出ていってしまいました。そして、とびらがばたんととじられると、あとにはただ、ロビーひとりだけが残されたのです。ロビーには、もう、わけもわかりませんでした。ほうもん者たちは、帰ってしまったのです！

ひとりになると、部屋の中は、まったく、もとのがらんとしたほらあなにもどつてしまいました。ロビーは、テーブルの上を見ました。四人ぶんのカップやお皿が乗っていました。ロビーはなんとも、やるせない気持ちになってきました。

そのとき、げんかんのとびらのそとで、馬のいななく声がひびきました。かれらが、馬たちに乗ったのでしょうか。つぎは、馬たちのかける足音が、遠くに去っていくはずですよ。帰ってしまう！ ロビーは心の中でさげびました。

「だめだ！ 帰らないで！」

ロビーは、そうさげんで、大あわてでとびらに走りよりました。そしてむがむちゅうで、そのとびらをあげ放つと、ぜんそくりよくで、そとにかけ出たのです。

馬たちが三頭、そのまま木につながれて待っていました。だれも乗っておりません。

ええっ？ ロビーはあつけに取られてしまいました。そして、げんかんのわきを見てみますと……、そこに、三人のほうもん者たちが、きれいにならんで立っていたのです。きよとーんとするロビーのを見て、ライアンが、くすりと笑いました。ベルグエルムとフェリアルは、なんとも申しわけなきような感じで、気をつけのしせいを取っています（まるで、先生に怒られているせいとのように）。

「こんばんは。お会いするのは、これで二回目ですね、ロビーさん。」

ライアンが、にこにこしながらロビーにいました。ロビーはそこで、ようやく気がついたのです。自分はライアンに、はかられたのだと。

そうです、つまりライアンは、しりごみしていたロビーの背中をたたいたわけでした。もうすぐロビーさんは、自分から「いっしょにいけます」といつてくるだろう。でも、そのほんのちよつと前に、こちらからそういわせるようにしむければ、ロビーさんのけっしんは、よりいっそう、強いものとなる。それに、ロビーさんはまだ、こわがってる。ロビーさんの心は、今、ぼくが、ほぐしてあげなくちゃいけないな。

ライアンは、このみじかい時間の中で、ロビーという人物のことを、すっかりかんさつしてしまいました。このロビーという人は、ほんとうは、しんの強い、せいぎ感にあふれた人物であると。ライアンの目には、このロビーこそが、いい伝えのきゆうせいしゆにまちがいないとうつつたのです（ただ、ちよつとおくびようで、ぶきようなどこ

ろがあるみたいだな、とも思っていたのですが。ですから、ほこりとせんげんを失ったままで、ひっこんでいられるはずがない。きつと、自分の作戦に乗ってしまうことだろうと。けっかは、みなさんに見ていただいた通りです。

「あなたなら、ぜつたいに出てくるだろうと思いました。ぼくにはわかっていました。」ライアンが、自信まんまん、とくいげにいました。ですが、すこしもいやみなどころはありません。かえってロビーは、そんなライアンのことが、いつぺんに好きになりましたし、また、とても、すがすがしい気持ちにもなれたのです。

「申しわけありません、ロビーどの。こんなまねは、したくはなかつたのですが……」ベルグエルムとフェリアルは、すっかりきょうしゅくして、ロビーに頭を下げ通しました。かれらは、王さまにつかえる騎士でしたので、目上の人には、とても気を使うのです。この場合では、もちろん、ロビーがその、目上の人でした（ですから、もしほうもん者たちがかれらふたりだけなら、こんな作戦は、ぜつたいに思いつかないことでしょう。かれらは、しようしよう、まじめすぎるところがありましたから。こんなまねをしたことが、あとで王さまに知れたら、きつと怒られるだろうと、かれらはひやひやしていたのです。いつぽうライアンは、王子という身分にあるわりには、ずいぶんと、自由なせいかくなようですね）。

さて、ロビーはもう、すっかりしてやられてしまったわけです。こんな手に乗ってし

まったからには、もう、笑うしかありません。ロビーはとてもおかしくなって、「あはははは！」と、大声で笑ってしまいました（どうやら、ロビーの心をほぐそうとしたライアンの作戦は、すばらしく、ききめまんてんだったみたいですね。よかった）。そしてそれから、ようやく、口をひらいたのです。

「すみませんでした、みなさん。みつともないたいどを取ってしまつて。ぼくは、自分がかはずかしい。まったく、なさけないです。ぼくに、あなた方のそのりつぱさの、半分でもあつたらいいのと思います。」

ロビーはまず、ペこりと頭を下げて、みんなにおわびをしました。それが、今の自分のすなおな気持ちだったのです。そして、自分の気持ちがよくやくおちつくと、ロビーは、そのあとにすぐ、みんなにむかってこういいました。

「それはそうと。そとは寒いですよ！ さあ、中にはいつてくください。お願いしますから。」

その言葉をきいて、ベルグエルムとフェリアルは、ここぞとばかりにロビーにつめよりました。

「おお！ それではロビーどの。われらとともに、お越しくだされますのか？」
ですが、ロビーがそれにこたえる前に。ライアンが口をはさんだのです。

「あたりまえじゃない。もうかれは、こたえをしめしているよ。かれは、いい伝えの

きゆうせいしゆ。ウルファの中でも、とびきりにほこり高い人なんだから。ね？　ロビーさん？」

ライアンが、いたずらっぽいなぎしをして、ロビーのことを見上げてきました（ひつじの種族のライアンは、おおかみ種族のロビーよりも、一フィート以上も背がちつちやかっただのです）。ロビーはちよつと、こまつてしまいました。出かけるけつしんはついている。ライアンのそのはじめの言葉は、たしかにあたりでしたが、あとの半分（ロビーがほこり高ききゆうせいしゆなのだということ）は、ロビーが自分できめられることでは、ありませんでしたので（「そう、ぼくはとびきりにほこり高い、きゆうせいしゆなんです。」なんて、けんきよなロビーが、自分からいっこありませんもの）。

ですからロビーは、しんちように言葉をえらんで、つぎのようにこたえるのでせいっぱいだったのです。

「ええと、その、みなさん。ぼくは、みなさんのきたいしているような力を、なにも持っていないかもしれないません。それどころか、ぎやくに、とんでもないごめいわくをかけてしまうかも……。ですから、あんまりかつき上げられては、こまるんです。」

ロビーはそこで、おそるおそる、みんなの顔を見渡しました。ですが、みんなはいたつてしんけん、ロビーの話をきいてくれているようでした。

「でも、ぼくがその、きゆうせいしゆであるかどうかは、べつのこととして。それでも、

ぼくがいくことで、なにか、みなさんのおやくに立てることがあるのなら。このくにに、ぼくが、なんらかの助けをもたらすことのできる、かのうせいがあるというのであれば。ぼくは、よろこんで、みなさんとともにいきたいと思えます。いえ、ぜひとも、おともさせてください。」そういつて、ロビーは、また、ぺこりと頭を下げました。

これをきいたふたりの騎士たちの、よろこびようつたらありませんでした。

「おお！ ありがとう！」「ベルグエルムが声を張り上げていいました。

「光がおりた！ きぼうの光だ！」「フェリアルもたまらずに、全身でよろこびをあらわにしました。

さて、ライアンはどうでしょうか？

「やった！ やった！」

その声にみんながふりかえると、ライアンは、うしろの方で、びよんびよんとびはねながらよろこんでいました。どうやら、このライアンという少年は、思っていた以上に、むじやきなようですね。さきほどまでは、ちよつと、大人びてみせていたようですが、うれしいときには、すなおに、そのままのライアンにもどってしまふようです（おかげで、あんまりはしやぎすぎて、石につまずいて、地面に、べちーん！ フェリアルに手を貸

してもらって、ようやく、起き上がりましたが。

「さあみなさん。中にはいつてくください。お話しをつづきは、それからにしましょう。」

ロビーが、げんかんのとびらの横に立って、みんなのことをまねきました。そしてみんなは、ロビーにおじぎをして、ふたたび、しきりなおし。「かたじけない。」とか、「きょうしゆくです。」とか、「おじやましませす。」とかいいながら、それぞれの席へともどつていったのです（ちなみに、さいしよのせりふはベルグエルム。二番目がフェリアル。そしてさいごは、いわなくてもおわかりですよ。ライアンでした）。

さて、ふたたびみんなが、居間の木の長テーブルにつきますと、こんどはそこは、かぎの席となりました。つまり、これからみんながどうするのかを、ロビーにちゃんと説明しておく必要がありますから。

しかし、それは、長くはかかりませんでした。たんじゆんめいかい。みんなの取るべき行動は、かいつまんでいえば、つぎのようなものだけだったのです。

われらはこれより、ペーカーランド国へとむかう（ただしとりあえずは、ここからいちばん近いつか点である、シープロンドへとむかうことになる）。

ペーカーランドへついたら、ただちにアルマーク王に会い、王からの新しいしじを

あおぐことになる。その内ようは、そのときになつてはじめてあきらかにされる。

はつきりいつてしまえば、これだけでした。つまり、ベーカーランドについてみなければ、そのあとになにをするのか？ ということまでは、ベルグエルムたちにもわからなかつたのです。かれらのにんむは、いい伝えのきゆうせいしゆのことを、ぶじに、ベーカーランドまでつれて帰るといふものでしたから。

しかし、これだけはいえませんでした。いくら、もくてきはたんじゆんだとしても、ベーカーランドまでの道のりは、そんなにかんたんなものではないと。このアーケランド世界のじょうきようは、今このしゆんかんにも、こくいつこくと変わっているのです。やみがどんどん、広がっているのです。アルマーク王が、こんかいのにんむにベルグエルムたちをえらんだのは、正しいはんだんでした。かれらは、白の騎兵師団の中でも、ぴかいちの勇士たちでありましたから。

説明がすむと、白の騎兵師団の長、ベルグエルムが、話しをつづけました（ベルグエルムは、白の騎兵師団の中の隊長だったので）。

「ロビーどの、われらはすぐに、旅立たねばなりません。出発には、だいぶおそい時間ではありませんが、いたしかたありません。たとえ、夜がふけようとも、進めるかぎりは進まなくては。もちろん、安全にはじゆうぶんに気をくばってまいります。どうぞわれ

らを、お信じください。」そういつて、ベルグエルムはフェリアルの方を見ました。フェリアルは、それにこたえ、右手でこぶしを作つて、胸の前にあわせてみせました（これは、「おまかせください。」という意味でした）。

ベルグエルムがつづけけます。

「われらはこれより、ひつじの種族たるシープロンのくに、シープロンドへとむかいます。じゅんちようにゆければ、馬の足で三時間ほどの道のり。シルフのこくげんのころまでには、たどりつけることでしょう。」（シルフのこくげんとは、この世界の時間をあらわす言葉で、だいたい、午後の九時ころをさしています。）

「われらのけいかくは、このようなものですが、ロビーどのお考えはいかがでしょうか？」

ベルグエルムがたずねました。そしてロビーは、ここにきてひとつだけ。ですが、いたつてまとをいた、しつもんをしたのです。

「あの、そんなに急がないといけないんでしょうか？　もう、夜になっていますし、みなさん、だいぶ、おつかれのようすです。朝になつてからの方が、いいんじゃないでしょうか？　こんなほらあなで、すいませんが、ぜひとも、とまつていつてくだされば……。」
ロビーはそこまでいいましたが、ベルグエルムの表じようは、かたいままでした。どうやらなにか、じじようがあるようだったのです。

「ロビーどのお心は、よくわかります。このような時こくに旅立とうなどと、まこと、じょうしきにはずれているということも、しようちしております。しかし……」ベルグエルムは、そこでいったん、言葉をにぎりましたが、やがて、けっしんしたかのようにな、話をつづけました。

「ロビーどのに、これ以上いらぬ心配を与えるべきではないと思いましたが、やはり、お話ししておかなくては。じつのところ、われらにはもう、時間がないのです。じつは、さきほどわたくしが話しました中では、あえてふれずに、ふせておいたことがあるのです。申しわけありません。」

ベルグエルムが頭を下げ、ロビーにあやまりました。そしてかれは、こんな、おそろしい話をつづけたのです。

「われらがベーカールランドを出発する、ほんのすこし前のこと。ワットのくにより、使者がまいったのです。それは、ベーカールランドがこうふくに応じなければ、近く、ベーカールランドに全軍をもって、せめいるとのたつしでありました。もちろん、そんなこうふくになど、応じられるはずありません。今ごろワットの使者は、そのへんじをたずさえて、黒の王、アルファズレドのもとへと、帰りつくころであります。かれらはすぐにも、行動を起こしてくるはず。黒の連合軍がせまりくるのです。」

「そしてさらには、使者のいうことには、そのさいごの戦いにおいて、かのよこしまな

る魔法使いめが、われらのさいごのきぼうをもうちくたくべく、そのいちばんのまがまがしきやみの力を、くだしてくるということでありました。それがどんなものであるのか？ そこまでは、使者の口からも語られることはありませんでしたが、おそろしいきょういであることに、ちがいはありません。

「ですからわれらは、手おくれになる前に、いつこくも早くベーカークランドへともどり、それらの悪の力にたいこうするすべを、ととのえなくては。このアークランド世界のそんぼうは、われらの手に、かかっているのです。」

なんてことでしょう！ ロビーのそうぞう以上に、じたいはしんこくをきわめていたのです。ロビーはこんなにひどい話は、ほかにないと思いました。今までに読んだ、たくさんの旅の物語。それらはみんな、ふしぎで、楽しくて、心おどつて、はらはらして。そしてさいごは、かならず、ハッピーエンド。ですからロビーは、旅というものに、心からあこがれるようになったのです。でも、それらはみんな、本の中だけのお話にすぎないのだということを、ロビーはここで、あらためて、思い知らされました。今、ロビーがげんじつにきかされた、この話は、そんなロビーの、りそあの物語たちとは、ほど遠いものだったのですから（あなたの住んでいるくが、とつぜん、おそろしい敵にこうげきされるときかされたら、あなたはどう思いますか？ 戦おうとするか、逃げたくないか？ どつちにせよ、こんなにおそろしい話はないはずです。今のロビーも、同じ気

持ちでした)。

「じたいのしんこくさはよくわかりました。そして、旅の重要さも。ぼくたちは、すぐに、旅立たなくちやならないんですね。だいじょうぶ。もう、ぼくは、かくごをきめています。」

ほんとうは、ロビーはまだまだ、こわい気持ちでいっぱいでした。ですけどロビーは、もう逃げません。みずからのしめいのため、そして、ちかいのために、ロビーは旅立つのです。

ロビーはここで、自分のことを話しておくべきだと思いました。旅立ちの前、今が、そのときだと思ったのです。かれらには、すべてを話しておきたいと思いました。

「みなさんは、とてもりっぱな人たちです。みなさんのような方々と、ともにゆけることを、ぼくは、とてもこうえいに思います。」ロビーはそういって、右手を胸にあわせ、かれらのまねをして敬礼のしぐさを取りました。みんながそれにこたえて、ロビーが近づきます。

「旅立つ前に、みなさんには、ぼくのことを、みんな話しておくべきだと思う。ぼくには、やりとげなければならぬとちかった、しめいがあるのです。みなさんもお気づきのことでしょうが、ぼくには、みようじがありません。ただ、ロビーという名まえだけを、おぼえているだけなんです。ぼくは、まだ小さかったときに、どこか遠いところか

ら、このかなしみの森にやってきたようなんです。それからたったひとりで、この森に住むようになっていました。どこからきたのか？ なんのためにきたのか？ ぼくにはまったくわかりません。きおくもほとんど、残っていません。」

それからロビーは、すこし考えてからつづけました。

「だからぼくは、自分がなに者であるのか？ 知りたいんです。なぜ、こんなことになつていいのか？ 知りたいんです。そして、ちゃんと、姓を受けつぎたい。ぼくは、おおかみ種族です。ぼくにだって、ほこりはあります。」

「この願いを果たすこと。それが、ぼくのちかいであり、しめいなのです。どうあつても、たとえ、この身をほろぼすことになろうとしてもです。みなさんにくらべれば、ちつぽけなしめいかもしれません。ですが、ぼくにとつては、これもまた、大きなしめいなのです。みなさんにならわかつてもらえると、お話ししました。旅ゆく前に、知っておいてもらいたくて。」

話し終えると、ロビーはみんなの顔を見まわしました。世界のいちだいじの前に、つまらないことをいつてしまったんじゃないか？ ロビーは、そう心配したのです。

ですが、みんなはいたってしんげんに、ロビーの話を受けいれてくれました。ベルグエルムがその先頭を切つて、こうふんぎみにこたえます。

「ロビーどのの、高きおこころぎし、われら一同、深く感じりました。われらはみな、

あなたのほこり高きちかいをうやまい、ささえ、おともいたします。そのちかいの果たされるときまで、われらは力のかぎり、お助けいたしますぞ。そしてきつと、ちかいは果たされましょう！」

ベルグエルムもまた、ほこり高きウルファ種族の者。ですからかれもまた、ロビーのちかいを、心からうやまいました。ほんとうに、ウルファという種族は、ほこりをだいにする種族でした。仲間がちかったことならば、まるで、自分のちかいのように思っ てくれるのです。それはフェリアルも、そして、種族はちがっても、ライアンとて同じ ことでした。

「まこと、ベルグエルム隊長のいう通りです！ ロビーどののちかいは、かならずや、果たされることでありましょう。どんなくらのやみるときであつても、光は、かならずおとずれます。のぞみは、いつでも、みずからのそばにあるのですから！」

フェリアルの言葉は、とてもたのもしく、きぼうを感じさせてくれるものでした。

ですが、今のロビーにとって、いちばんうれしかったのは、つづくライアンの言葉だったのです。

「だいじょうぶ！ きつとうまくいくから。ぼくたちがついてるじゃない。みんなでがんばればさ、なんだつてできるよ。もう、ロビーひとりじゃないんだから。ぼくも、ベルグも、フェリーもいるよ。もう、ぼくたちは、仲間なんだから。」

ロビーは、このライアンの言葉に、心の底から助けられました。ずっとひとりで、ひとりぼっちで、くる日もくる日もすごしてきたロビーにとつて、こんなにも心あたたまる、すてきな言葉もなかったことでしょう。ロビーは胸があつくなくて、こみ上げてくるものをおさえることも、できませんでした（ちなみに、ライアンはなかよくなつた相手のことを、ニツクネームでよんでしまうようですね。ベルグエルムならベルグ、フェリアルならフェアリーといったように。でも、ロビーはもともとロビーでしたので、それは、そのままなのでした。それにライアンは、親しい相手に対しては、とつてもくだけた話し方をするみたいです。はじめにこのほらあなにきたときのライアンとは、ぜんぜん感じがちがつてしまいましたので、ロビーはちよつと、びつくりしてしまったもの（でした）。

「ありがとう、みなさん、ありがとう。」ロビーは、感きわまつていいました。

「みなさんの気持ちは、ぼくはけつして忘れません。このさき、どんな危険が待ちかまえていようと、ぼくは、みなさんとともに乗り越えてゆけます。立ちむかつてゆけません。」

それが、出発のあいずとなりました。そして、ベルグエルム、フェリアル、ライアンの三人は、ロビーのその言葉にあわせて、高らかに、せんげんしたのです。

「南へ！」ベルグエルム、フェリアルがいいました。

「しゅっばくつ！」ライオンが、右手を天につき出してつづけました。

そしてロビーは、それに負けないくらい高らかに、力強くこたえました。

「南へ！ ともにゆきましよう！」

こうして、ここ、かなしみの森の、暗くてさびしいほらあなの中で、かれらの同めいはむすばれたのです。それは、せまりくるやみの敵に立ちむかうための、大きな同めいでした。

しかし、かれらがそうしているあいだにも。南の地では、新しいやみが、広がりとつあるところだったのです。

2、騎乗の旅立ち

かなしみの森の中に、大きな馬のいななき声がひびき渡りました。日は、もうとつぷりと暮れてしまつて、空はいちめん、黒のカーテンをしきつめたかのようにまつ黒でした。それというのも、急にわき起こつてきた暗い雲が、かすかに光を放つていた星々をも、そのえじきにして飲みこんでしまつたからなのです。つめたい風が、ぴゅうぴゅうとかなしげな音を立てて、森の黒い木々のあいだを通りすぎていきます。木々の葉っぱはざわざわとゆれ、まるで、すがたの見えないらい客をむかえいれているかのように、くらやみの中で、すぎてゆく風の声にこたえました。

そんな、ふきつとも思える夜の空の下に、今、三頭の騎馬たちが、その主人たちとともにたたずんでいました。それらの馬たちは、このうす暗さの中でもはつきりとわかる、美しい毛なみを持つていました。二頭は、銀のような美しさのはい色。もう一頭は、おひさまの下にかがやく白い花のようにいんしよ的な、白い馬でした。そして、それらの馬たちの背には、あわせて四人の人物たちが、馬たちと同じくらい美しい、りっぱなくらにまたがつていたのです。

二頭のはい色の馬たちには、それぞれひとりずつ、きらびやかな衣しように身をつつ

んだはい色のおおかみの者たちが乗っていました。そしてもう一頭の白い馬には、この馬と同じくらいに白くて美しいすがたをした、白のひつじの種族の者がひとり、そして、それとはとても対しような、全身まっ黒の衣服に身をつつんだ、黒のおおかみ種族の者がひとり、乗っていたのです。この黒のおおかみのかっこうは、ほかのふたりのおおかみたちにくらべて、やや見おとりする感じで、着ているものにもなんのそうしよくもありません。黒のジャケットに黒のズボン、黒のマフラーをしていて、そしてその上から、全身をおおうようなかたちで、大きなぼろのような黒のマントをはおっています。した（これはもう、なん年もたんすのおくにおしこんであったものを、あわててひっぱり出してきたものでした）。そのほかには、肩からくたびれたかばんをひとつ下げているだけで、これも、とてもきちょうな品であるとは、とうていいいがたいものだったのです。

ですが、だからといって、この黒のおおかみのことをかんとんに「みすばらしいおおかみ」ときめつけてしまうのは、まちがったことだといえるでしょう（いいかえれば、ほかの三人の者たちの身なりがりつぱすぎるのです）。すくなくとも、おおかみらしいじょうぶなからだを持っているという点では、ここにいる三人のおおかみたちは、それぞれおんなじくらいりつぱでした。でもやつぱり、じやつかんではありませんが、黒のおおかみの方がほかのふたりのおおかみたちよりも、ひとまわりくらい、小がらである

といえると思います(せいせいニインチていどでしょうけど)。ですが、そんなことをくらべっこしてもしかたありませんし、意味のないことだといえることでしょう。だって、もうひとりのひつじの種族の者は、この大きなおおかみ種族の者たちとくらべて、ふたつもみつつも、小がらでしたから(白い馬一頭にふたりが乗れるのも、そのためでした)。

さて、この騎乗の者たちがだれであるのか? みなさんはすでにごぞんじでしょうから、このあたりでかれらを、かれらの持つ、ほこり高き名まえでよんでいきたいと思いません。

「ロビーどの、旅立ちのじゅんびは、すっかりおすみになられたでしょうか?」

口をひらいたのは、はるか南の地、ベーカールランド国の白の騎兵師団の長、ベルグエルムでした(ベルグエルムは、素晴らしいながらも、はやりたつ馬をせいするので手いっぱいでした。ベルグエルムの乗る美しいは色の騎馬は、「早くいこうよ」といった感じで、主人であるベルグエルムのことをせかし立てつつつけていたのです)。そしてロビーは今、出発の前に、かばんの中にもつをもういちどかくにんしているところだったのです。

「なにかもすみました。このほらあなの中にあつた、ぼくのたいせつな品物は、すべ

て、このかばんの中にはいっています。着るものと、食べるもの。インクに、まんねんひつ。本が二きつに、ペンダントがひとつ。このペンダントだけは、ぼくの首にかけてありますけど。みんな持ってきました。もう、このほらあなの中には、持っていくようなものは、なにも残されていません。それがいはいは、ただ、くらやみばかりがつまってるだけです。」

ロビーはそういって、長い時間をすごした自分のほらあなのことをながめやりました。今は、とぎされた重い木のとびらが、なに者であろうと、その中へまねきいれることをこぼんでいるのです。そのとびらのわきには、すすけてうすよごれたガラスのはまった、小さなまどがありました。中はまつくらでした。ついさきほどまでは、ロビー自身が、そのまどの内がわにいたのです。それが今では、このほらあなは、もうなん年もうちすてられていたかのように、まったく人のけはいを感じさせないものになりました。

「もう、なにも残っていません……」

ロビーはもういちど、だれにいうともなくつぶやきました。なぜだかはわかりませんでした。ロビーはふいに、なにかいちばんたいせつなものを中においてきてしまったのではないかと、という気持ちになったのです。ですがそれは、品物ではありませんでした。しいていうのであれば、それは、このほらあなそのものでした。ひとりぼっちで

毎日をすごしてきた、自分のほらあな。自分がいなくなれば、あとはただ、くち果て、荒れていくだけでありましょう。ロビーはなんだか、とてもかなしくなってきました。かなしみの森の、かなしみの力のせいかもしれません。思いもかけず、なみだがあふれ出てきました。ロビーは自分にとって、とてもたいせつな人が去っていつてしまうときのような、そんな気持ちになったのです。ほらあなの気持ちになったのです。

いつか、もどれるときがくるだろうか……。ロビーは心の中で思いました。でも、たぶん、もどれることはないだろうな……。

いちどもだれもおとずれることのなかった、自分の家（今日きたみんなのことはべつとして）。そして、さいごのひとり、自分自身が去ろうとしている家でした。ですがそれは、ロビーにとっての、大いなるしめいのためなのです。ほこりとそんげんのためなのです。そのためならば、きつと、この暗くてさびしげなほらあなも、やさしく、主人を送ってくれることでしょう。旅立ちとは、そういうものなのです。そして、人が旅立つことは、だれにもとめられないのですから……。

ロビーはげんきを出して、わが家にさいごのおわかれのまなざしを送ると、ゆつくりと、前にむきなおつていいました。

「やあ、いきましょう。」

そして、三頭の馬たちはかけ出していききました。もうすつかり、夜のとばりにおおわれてしまった暗い森の中を、まようことなく、はつきりと、かれらは進んでいったのです（ベルグエルムを先頭に、ライアンとロビーの白馬がすぐうしろにつづき、フェリアルがさいごにつきました。これは、守るべきたいせつな人をまん中にすることで、前とうしろの守りをかためることができるためなのです）。

ロビーにとつて、馬に乗ったのは、これがはじめてといつていいものでした。せいかくには、小さかったころの遠いむかしに、乗ったきおくがあるわけですが、それは、ただのきおくでしかなく、馬に乗ったけいけんおよびのには、ほど遠かったのです。ですからロビーは、まったく馬というものになれていませんでした。とうぜん、馬をあやつるなんてことはできっこありませんでしたし、じつさい、この馬にまたがるときにだつて、そうとうくろうしたのです（みんなの手をかりて、よいしょよいしょ！ ひとしごとでした）。

ですから、これまたとうぜんのことながら、たづなを持って馬を走らせているのは、前にすわっているライアンで、ロビーはライアンのからだにしがみついて、うしろにまたがっていました。そのおっかなびっくりにしがみついているすがたは、ちよつとおかしくも見えましたが、ロビーにとつては、そんなことにかまっているよゆうなどはありませんでした。つまり、なんとかふり落とされないようにがんばることだけで、せいいつ

ばいだったのです（ライアンの方は、大きなおおかみのロビーにしがみつかれて、うん、といった感じでしたけど）。

こうして一行は、夜の森の中を進んでいきました。いくつものしげみをぬけ、急な坂道をのぼり、おり、たくさんの広場を越えました。森の住人たちは、もう自分のすみかにもどつて夕ごはんのしたくに取りかかっているころあいでしたので、森の中には、だれも出歩いている者はおりません。もつとも、馬のかける大きな音にびつくりして、みんなどこかに、ひっこんでしまっているのかもしれないようにとお願ひしていました（かれのやさしさで、なるべく人の家のそばはかけていかなないようにとお願ひしていました（かれのやさしさと気づかひが、よくあらわれていますね））。

しばらく進んでいくと、やがて、ひとつのあけた広場に出ました。ここは、森の街道が重なりあうところで、住人たちが集会をひらいたりおしやべりをしたりするのに使っているところでした。切りかぶりをりようしたベンチがいくつもならんでいましたが、そこに腰かけている者は、今の時間ではだれひとりとしていません。そして、すぐにわかるこの広場のとくちようが、ひとつありました。この広場の地面は、ほかの広場とちがつて、すみずみまで草がきれいにかり取られていて、手いれがよくゆきとどいていたのです（これまでも広場はいくつも越えましたが、どれもみんな、草がぼうぼうに生えておりましたから。そのちがいは、この暗い森の中でもすぐにわかつたのです）。

さて、それはなぜかといいますと、この広場のすみには、ほかの広場にはない、あるとくべつなものがあったからでした。それは、いつけんの家でした。そしてそれは、ただの家ではなかったのです。お店でした。そう、それは、かなしみの森の中でゆいいつのお店。「ぎっか屋および食りよう品店」である、スネイル・ミンドマンのお店だったのです。店のまわりには、手いれのよくゆきとどいた大きな花だんがあつて、花だんは色とりどりの花々でかざられていました（さんねんながら、今は暗くてよくわかりませんでした）。そしてその手いれのよさが、店のまわりのみならず、この広場全体にまでゆきとどいていたのです。

この広場がよく手いれがされてぴかぴかなわけ。それはつまり、店主であるあなぐまのスネイル・ミンドマンの、人のよさと、草木に対する深いじょうねつのためでした（なにしろかれのお店には、ありとあらゆる庭いじりの道具や、なえどこが、そろつているくらいでした。おかげで、一部の気心の知れた住人たちからは、「スネイルのえんげい用品店」という店の名まえに変えたらどうだ？ とからかわれていたのですが）。

そしておりしも、ロビーたちがこの広場にやってきたちようどそのとき。このスネイルのぎっか屋および食りよう品店は、店じまいの時間をむかえたところだったのです。つまり、野うさぎのこくげん（みなさんの世界でいえば午後の六時くらいでしょうか？）にあたりました。そのため、店のまわりにあかりはなく（暗くなつてから店がしまるま

では、店のまわりにランプのあかりがともされています、入り口からもれる店内のしよ
うめいだけが、ぼんやりと、広場をうすく透らしていたのです。空はまっくらでした。
暗い雲はどんと立ちこめていつて、ほんらい星空のあるべき場所にじんどつて、あ
つきたれこめていました。そして、そんな暗い空の下。店のそとでは、ちょうど、店主
であるスネイルほんにんがいて、店じまいのしたくにあたっているところだったので
す。

スネイルが馬のかける音に気づいてこちらをふりかえり、ロビーたち一行とはちあわ
せたのは、ロビーたちがこの広場にはいったのと、ほとんどいつしよのときでした。で
すから、もしロビーがスネイルのことに気がつかなかったのなら、ロビーは馬の背に
乗ったまま、自分がこの広場を通ったということにすら気づかないうちに、この場所を
通りすぎてしまっていたことでしょう。それほど、一行の馬ははやくかけていたので
す。

「すいません！　どうか馬をとめてください！　すこしのあいだけ、とめてくださ
い！」

ロビーは大声を上げて、みんなに馬をとめてくれるようにたのみました。ロビーの声
にこたえて、三頭の騎馬たちは、それぞれ「ひひん！」と大きくいなないて、そのかけ
足をとめます（といっても、あまりにはやかかったので、とまったころにはこの広場を大

きく越えてしまつて、それからひきかえしてきたのですが。

ロビーは、この森を去つてゆく前に、どうしても、そのことを森のだれかに伝えておかなければならないと思ひました。それは、自分のためにみんなにこわい思いをさせてしまつたという、つぐないの気持ちからでした。どういふかたちにせよ、自分が森から出ていけば、森の人たちは、このさき、安心して暮らしていくことができるでしょう。ロビーはそのことを、だれかに伝えておいてもらいたいと思つたのです（いずれしぜんとうわさが広まるとは思いますが、今いつておけば、もつと早く安心できるでしょうから）。

それには、このあなぐまのスネイル・ミンドマンにたのむのが、いちばんだと思われましました。なにしろここは、森でゆいいつのお店でしたので、森中からお客さんがやつてくるのです。ですから、まつさきにうわさ話が広がるのも、この場所からでした（そのうえ、スネイルはロビーと話しをしたことのあるゆいいつの森の住人でしたので、ロビー自身もかれに対して、話しがしやすいということもありました）。

ですが、とうのスネイル自身は、これはもう、おどろきときようふでいっぱいになつてしまつていて、とてもれいせいには、ロビーたち一行に対してせつすることができずにいました。それはつまり、スネイルが明るい店の前にいたのに対して、ロビーたち一行は、はんたいに、そとの暗がりの中にいたからでした。それつてどういふこと？こ

れは、じつさいにたいけんしてみればよくわかるのですが、暗い場所から明るいところにいる人は、よく見えるのですが、明るいところにいる人からは、その暗がりの中のようにすは、はつきり見て取ることができないのです。ですからスネイルには、とつぜんにやってきたこのしつ黒の騎乗の者たちが、どういう者たちであるのか？ ぜんぜんわかりませんでした。とうぜんそれが、森はずれのほらあなに住んでいるおおかみだなんてことは、このときのスネイルには、まったくわからなかつたのです。スネイルにとつては、なにかとてつもなくおそろしげな魔王の使いかなにかが、自分に害をなさんとして、とつぜん、このくらやみの中からあらわれたかのように思えました（はじめ、ロビーが自分のところにやってきたベルグエルムたちに対して、おそれをいだいたときのことを、思い出してみてください。ちようど、あんな感じだつたのです）。

「みなさん、すこしの時間だけ、かれにおわかれのあいさつをしてくることをゆるしてください。」ロビーは、みんなにことわつて馬からおりると、スネイルの方に静かに歩みよつていききました。しかし、これできようふがさいこうちようにたつしてしまつたのは、スネイルだつたのです。なにしろ、顔の見えないまつ黒で大きななにかが、同じくしようたいのわからない仲間たちのことをしたがえて、自分のもとへと近づいてこようとしていたのですから、それもそのはずでした。

スネイルは、思わず身がまえて、えんげいの道具るいを見やつていちばん「武器」に

なりそうなものをえらんでひつつかむと（さきの分かれた長いすきでしたが）、きょうふにかられてさげんでしまったのです。

「そこでとまれ！ とまるんだ！」スネイルは、あらんかぎりの声でさげびました。ロビーは思わず、びくつとして、その場に立ちすくんでしまいました。

しばらくおいて、スネイルがふたたびどなりました。

「おまえたちがなに者であろうと、わしの家をきずつけるようなまねは、だんじてさせんぞ！ だんじてだ！ 今すぐ帰れ！ さもないと、このすきのいちげきをくらわせてやるぞ！」

スネイルは、自分の持つ勇氣のそのさいごの一てきまでふりしぼって、このしようにいふめいのやみの者に立ちむかいましたが、そういいながらも、からだ中ががくがくふるえて、顔はあせでびっしょりになってしまっていました。

このスネイルの反応には、ロビーだけでなく、うしろにいるベルグエルムたちも、とてもびくくりしてしまいました。じっさい、ベルグエルムとフェリアルは、ロビーのことを守ろうと、もうすこしで腰の剣に手をかけて、ふたりのあいだにわつてはいろいろかとしたほです。しかしそれも、ロビーが口をひらいたつぎのしゅんかんまでの、ほんのつかのまのことにすぎませんでした。ロビーは、さいしよはびくくりして、思わずしりごみしそうになってしまいました。すぐに、相手の気持ちを考えてものごとをおこ

なおうとする、自身のその思いやりの気持ちを、はたらかせたのです。つまり、スネイルの気持ちをおしはかつて、かれをこわがらせないように、すぐにごかいをとこうとつとめました（これには、ベルグエルムたちのごかいをとくこともふくまれていました）。

「待つて！ 待つてくださいスネイルさん！」ロビーは両手を大きくかかげて、けんめいになっていいました。「ぼくは、森はずれのほらあなの、おおかみです！ ぼくは、あなたをきずつけようとしているではありません。あなたにお話ししておきたいことがあつて、こうして、やつてきたわけなんです。どうか、ごかいなさらなくてください！」

これをきいて、スネイルはさいしょ、いぶかしげな、うたがわしげな顔をして、この声のもととなる人物のことを、じろじろながめやつていましたが、やがて、どうにかなくなつてくしたかのように、こわごわ口をひらきました。

「森はずれの、おおかみさんですつて？ これはこれは、いったい、どういったわけなんです？ 近ごろじゃ、めつたに、買ひものにだつてお見えにならないというのに。それも、こんなおそくに。」

そういつて、スネイルは持つていたすきをおろしました（それでもすこしだけ、まだ用心しながら、そのすきをにぎりしめていましたが）。

ロビーは、やつとのこと胸をなでおろして、スネイルのそばに歩みよりました（ね

んのため、両手は頭の上に高くかかげたまま、ゆっくりと近づいていきました(が)。近づいていくにつれ、スネイルの顔からはきょうふの色が消え、もとの人のいい、あなぐまのスネイル・ミンドマンにもどっていきます。そしてかれは、ロビーのことを見上げると(ロビーの背だけは自分の二ばいほどもありましたから)、それがまぎれもなく、自分の見知っている森はずれのおおかみであるとかくにんして、大きく肩で息をつきました。

「ふう！ わたしはまた、なにか、どこかの魔王の手さきかなにかがやってきたのかと思いましたよ。ほんとうに、きもをひやしましたぞ。もうちよつとで、わしは、あんたと、さしちがえるかもしれないところだった。」

スネイルは、なかば怒ったような口ちようでいいましたが、じつさいに怒っていたというわけではありませんでした。ですが、言葉の中身はほんとうのことで、スネイルは、それがごかいだということがわかって、今、心の底からほつとしていたのです。そしてロビーはといいますと、これは、思いもかけず、スネイルのことをこわがらせてしまったことで、すっかり申しわけない気持ちになってしまっていました。ですけどどうか、ごかいもいってもらえたようなので、その点にかんしては、ロビーはスネイル以上に、ほつとしていたのです。

「ほんとうに申しわけありませんでした、スネイルさん。あなたをこわがらせるつも

りは、ぜんぜんなかったんです。ほんとうにすみませんでした。」ロビーはぺこぺこ頭を下げて、スネイルにあやまりました（それでもスネイルの背がちっちゃいので、ロビーの頭はまだ、スネイルのずつと上にありました）。

「ぼくがここにきたのは、スネイルさん、あなたにぜひとも、しらせておきたいことがあつたからなんです。つまりぼくは、もう、この森を去らなくてははいけません。去らなくてはいけないときが、やってきたんです。南の地へむかうときが、やってきたんです。」

これをきいて、スネイルはとてもびつくりして、目をまるくしてしまいました。そしてかれは、たじろぐような、ひるむような、そぶりを見せながら、しばらくぼうぜんとしていましたが、やがて、すべてになつとくがいったかのように、なんども小さくうなずいて、ロビーの手を取っていいました。

「お、お、なんということだ……。なんということです。やはり、そうでしたか。旅立つときが、やってこられたのか。」

スネイルはロビーの手をにぎりしめながら、すつかり感きわまつてしまっていました。ですが、この反応にすつかりおどろいてしまったのは、ロビーです。なにしろ、自分が旅に出ようとしていたことなんて、もちろん、だれにも話しておりませんでしたから、それもそのはずでした（もちろん、ベルグエルムたちが前もって、スネイルに話し

たわけでもありません。どうしてスネイルが、そのことを知っていたのでしょうか?)。

「さあさあ、中へおはいり。火のそばへ。あたって、話しをしよう。」

スネイルはロビーのことをひっぱって、店の中へあんないしようとなりましたが、ロビーには、それにこたえることはできませんでした。ロビーはふりかえって、ベルグエールムたちのことを見ました。かれらはただだまって、こちらのようすを見守っております(ですが、ロビーとスネイルの話は、すべてかれらの耳にもどいていました)。

ロビーは、この旅がさきを急ぐ旅であるということ、じゅうぶんにしようちしていました。ですからここで、あんまりぐずぐずしているわけにはいかなかったのです(今もむりをいって、時間をもらっているのですから)。ロビーはスネイルのさそいをていちようにことわって、「さきを急がなくてはならない」ということを伝えました。

「申しわけありません、スネイルさん。ぼくは、さきを急がなくてはなりません。あそこにおります、ゆうかんなる旅の友人たちといっしょに、南の地へとむかうんです。ですから、スネイルさん、どうか森のみんなに、よろしくお伝えくださるようお願いしたいんです。」

これをきいて、スネイルはともぎんねんそうに、ロビーの手を放しました。

「そうか……、ぎんねんだ。もうすこし、あんたの話をききたかったのだけど。」

しかし、そこでスネイルは、急にとてもだいじなことを思い出したらしく、手をぱん！と大きくたたいていったのです。

「そうだった！ そうそう！ あんたに、ぜひ、渡したいものがあるんだ。ちよつと、待つてくれよ。そのくらいならよかろう？」スネイルは、そういつて、店のわきにあるものおき小屋の中にかけていききました。

小屋の床にはところせましと、じゃがいものふくろや、とうもろこし、らつかせいのふくろなどがつまれていました（そのため、なんどとなく、スネイルはふくろに足をひっかけて、ころびそうになつていましたが）。そして、たくさんのなえどこや若木のたばを乗り越えた、そのさき。いちばんおくのたなの上に、大きくて長いがんじようそうな鉄のはこがひとつおかれていて、それには、これまたがんじようそうな、大きなじようまえがひとつかけられていたのです。

「ほい、かぎは？ と。どこいつた？」

スネイルはあちこち飛びまわつて、いつたりきたりをしていましたが、やがて、かぎをかくしておいたえんとつのすきまのことを思い出すと、その場所から、まるでこわれものでもあつかうかのようにしんちようになつて、そのかぎを取り出しました。それは、すすけてほこりだらけになつてはいたものの、美しいしゆうのはいつた青いぬのにくるまれていて、だいじにしまつてあつたようでした。スネイルは、そのぬの中か

ら銀色にかがやく大きなかぎをひとつ取り出すと、その手ざわりをしばらくたしかめたあと、それをはこのじょうまえにさしこみました。かぎがまわり、はこがひらきます。それからスネイルは、大きく「ほおーつ。」とため息をついてから、その中にだいじにしまってあつたものを取り出しました。

それは、ひとふりの剣でした。そうしよくはひかえめでしたが、にぶくふしぎなかみやき方をするさやにおさめられていました。スネイルは両手でそれをかかえ（その剣は小さなスネイルにとつては大きすぎました）、そしてそれといっしょに、肩にはじょうぶそうなりユックサック（これまたかれには大きすぎるものでした）をひとつしよつて（というよりも、ほとんど地面にひきずつて）、ようやく小屋の中から出てきたのです。そして、ロビーのところへひよこひよこやってきますと、かかえた剣をロビーにむかつてさし出しました。

「ほら、こいつだ。」

ロビーはびっくりしながら、おそろおそろ、その剣を手に取りました。長すぎもせず、重すぎもしません。それは、ロビーにぴったりのつくりになっていました。ロビーはつかをにぎつて、その剣をすこしだけぬいてみましたが、そのやいばはとても美しく、そしてすこしだけ黒つぽく、かがやいていました。まるで、やいば全体が、つめたいきよらかないずみの水にひたっているかのように、にぶく、そして、こうごうしく、光つて

いたのです。

「どうだね？ りっぱなもんだろう？ じつは、こいつをおまえさんに渡すようたのまれて、わしは、もう、なん年ものあいだ、ずっとあずかっていたんだよ。おまえさんが南の地へ旅立つという、そのときに、渡してほしいとな。もし、これを渡すそのきかいがなければ、こいつはこのさき、ずっと、このわしの家眠らせておいてもかまわなということだったんだがね。だが、とうとう今日、ついに、そのきかいがおとずれよつた。」

剣を手にしたロビーのことを見て、スネイルはすつかり、こうふんしてしまっていました。それにくらべて、ロビーの方は、なんとも、きまりが悪そうです。

「これはいつたい、どういうことなのでしょう？ なぜ、ぼくにこんなものを？ いったいだが、なんのために、おいていったんでしょうか？」

剣をもてあましながら、ロビーがたずねました。するとスネイルは、ちよつとのあいだ、頭をひねっていました。やがて、やつと思ひ出したようで、こんなふしぎな話を始めたのです。

「あれは、今から三年前の、冬の日のことだったと思うが。それとも、四年前だったかな？ そう、こんな、暗い夜のことだったよ。わしが、店のかたづけをはじめたころだ。だからやっぱり、野うさぎのこくげんだったんだな。ふいに、くらやみのむこうから、な

にか、地面をたたくような音がきこえてきた。すぐにそれは、馬のかける音だとわかったんだが、その音は、まばらな感じだった。わかるかね？ まばらなんだ。地面をかけた、とびあがりたりしているかのよう、まばらだった。そしてすぐに、それは、わしの店の前までやってきた。まっ黒な馬と、まっ黒な騎士だったよ。わしはもう、おそろしさに、ふるえ上がったもんだ。それらは、まるで影のように、ゆらゆらと、やみの中であつておつた。わかるかね？ まるで、だんろにかかったやかんの湯気みたいに、ゆれてるんだ。わしは、もしかしたら、まぼろしか夢でも見てるんじゃないかと思つたんだが、すぐに、そうじゃないということが知れた。そいつが、口をひらいてしゃべつたからだ。

「そいつは、からだ中をまっ黒なマントでおおっていて、顔もまったく、見えなかつたが、しゃべっている、その口もただけは、見て取れたんだ。ひげがあつたように思つたかな？ そうじゃなかつたかもしれんが。とにかくそいつが、わしに話しかけてきた。それは、思つていたよりもずつとおだやかな口ちようで、わしはびつくりしたもんだつた。こういったんだと思うよ。」

『わたしは、南のくにの者です。あなたに、ぜひ、たのみたいことがある。』そういうと、そいつは、ゆつくりと、マントのすそを広げた。マントの中には、ひとふりの剣があつた。そいつの腰にさしてあつたんだ。そいつは、静かにその剣をはずすと、わしに

さし出して、こういうんだ。

「『この剣を、あずかってほしいのです。わたしのくにの剣です。見つからないように、どこかにしまっておいてくださいばけっこう。』そして、おまえさんが今持っている、その剣を、わしにあずけていったんだ。わしは、ひと目で、それがひじょうにすぐれた、かちのあるものだ、と、わかったよ。だから、いつてやったんだ。『こんなどいじなもの、見ず知らずのわしに、たくしてしまつていいのかね？ わしは、これを、お金にかえてしまふかもしれんぞ。』つてな。するとそいつは、ひるみもせず、こうこたえたんだ。

「『あなたがそうされたいのなら、そうしてくださいさつてけっこう。すべて、あなたにおまかせしよう。それは、あなたにたくしたものだから、売つてしまおうと、すててしまおうと、あなたにしたいです。それと、わたしはあなたに、もうひとつ、たのみたいことがある。』」

「『この森のはずれに、ひとりのおおかみが住んでいる。かれは、今はまだ子どもだが、いずれ、このくにをになう者となるだろう。そして、かれが南の地へ旅立つときが、きつとやつてくる。そのとき、かれに、その剣を渡してやつてほしい。きつと、助けになるだろうから。ぜひ、そうしてやつてほしい。』」

「そのあいだ、わしは、だまつてきいておつたが、なんともいえない、ふしぎな感かく

におそわれたもんだった。まるで、わしの心が、そいつのからだの中に、すつぽりすいこまれてしまったかのような、からっぽな気分になったんだ。そいつはつづけた。

『だが、もし、あなたにそうする気持ちがないのなら、それはそれでよろしい。剣は、あなたのものだ。売ってしまうのもよいだろう。それに、かれが旅立つ、そのきかいに、あなたが出会えなければ、それもまた、さだめというものだ。そのきかいがなければ、剣は、とこしえに、あなたの家のそうこに、眠らせておいてもかまわない。すべては、運命のみちびくところによるものだから。』

「それだけいって、そいつは、ふっと、音もなく馬をあやつって、もときたくらがりの中へと消えていった。あとに残ったわしは、ただ、ぽかんとして、その場につつ立っておった。すべて、夢の中のできごとだったんじゃないかと思つたよ。だが、自分が手にしている剣の重みが、夢じゃなかったということ、ゆうべんに語っておった。わしは、その剣を手しているうち、これは、わしにたくされた、しめいであるにちがいない、と思うようになった。これは、だいにじにしまっておかなければならない。手放すわけにはいかない、とな。なぜ、そう思つたのかは、わしにもわからん。しいていうならば、剣がそれをのぞんでおつた、とでもいうほかない。だからわしは、この剣を長年に渡つて、だいにじにしまいつづけた。いつとうがんにしようなはこにいて、いつとうねだんの張るとつづつなしようまえをかけた。このしようまえには、ふしぎな力があつて、対になる

かぎをもちいないかぎりは、はこはぜつたいにひらかんようになつとるんだ。

「これが、わしとこの劍との、いきさつだよ。そして、劍はあんたのものだ。ぜひ、受け取つてくれ。劍もそれを、のぞんでいるはずだ。」

そのころには、ベルグエルムたち三人もロビーのそばへやってきて、その場にいたぜんいんが、ねっしんに、スネイルの話にききいつていました。そして、スネイルの話が終わると。ロビーはとてもおちついて、ゆつくりと、スネイルにむかつていったのです。

「この劍は……、きつと、ぼくを助けてくれるものと思います。大きな危険の中で、きつと、やくに立つてくれると思う。スネイルさん、あなたはとてもりっぱな方だ。あなたのような方に、この森で出会えて、ぼくはとてもしあわせでした。」

ロビーは、自分でも知らず知らずのうちに、ウルファの敬礼のしぐさを取つていました。そのすがたはいげんにみちており、その場におりましたベルグエルムたちみんなにくらべても、なんら、見おとりすることはありませんでした。

「わしはただ、自分が正しいと思つたことをしたまで。わしのかつてでしたことだよ。こんなきかいがなければ、おまえさんに、さいごのわかれをいうこともできなかつただろうね。それはそうと、もうひとつ。これは、わしから、あんたにおくりたい。持つてつてくれんか。」

スネイルはそういうと、肩にしょつていたりユックをおろして、ロビーに手渡しまし

た。

「旅に出るのなら、こういったものがいり用だろうからね。」

リュックの中には、旅に必要な品々が、いろいろつまっていました。ロープや、くさびや、火を起こすための小ばこ。ランプに、油に、せんめん用具。ナイフに、はさみに、紙にペン。ばんそうこう、ほうたい、きずぐすり、などなど。ふわふわであたたかさうなもうふも、ひとつはいつていました。しかも、どれもねんいりに手いれがなされてあつて、それもいちばん上とうなもの、えらんであつたようでした。

「いつかおまえさんが、あの騎士のいうように、旅に出ていこうというのなら、なにかわし自身としても、手助けしてやれることがないかと思つていたんだが、あいにくこんなものしか、わしにはおくつてやれん。だが、それでも、わしの店でいちばんの品ばかりを集めたつもりだよ。」

ロビーは感げきのあまり、言葉も出ませんでした。まさかこの森で、自分のことをこんなにも気づかってくれている者がいようとは、思つてもいませんでしたから。

「わしはいつも、おまえさんのことを心配しとつたよ。みなは、おまえさんのことをごかいして、こわがつておるが、わしにはどうしても、そんなような者には見えんかつたな。いつも、さびしそうな目をしとつたからね。こんな目をした者が悪いやつだとは、どうてい思えんよ。だからといって、わしがどうこうでできることでもなかつたから、な

にもいえずにいたんだが、今日、こうして、おまえさんと話しができて、うれしいよ。「だが、もう、いかなきやらんようだな。これ以上、ひきとめるわけにもいかん。さあ、ゆきなされ。おまえさんの旅の安全を、わしは願っておるよ。」

ロビーはもう、胸がいつぱいになって、声も出せませんでした。ただただ、このあなぐまのスネイル・ミンドマンに対しての、かんしやの気持ちで、いつぱいになっていたのです。ひとみをまつ赤にはらして、ロビーはしゃくり上げて、泣いてしまいました。

「ありがとう……、スネイルさん。ありがとう……」ただ、それだけ、そういうので、せいっぱいでした。

そしてロビーは、スネイルからのおくりものをしっかりと身につけて、ライアンの乗る白馬にまたがったのです（やっぱり手伝ってもらって）。それからロビーは、ふたたび、スネイルにむきなおつて、深くおじぎをしました。

「さいごに、」スネイルがいました。「あなたの名まえをきいたときたいんだが。」

ロビーは、馬上からせいっぱいの敬意をあらわしながらこたえました。

「ロビーです。」

「ロビー、たつしやでいけよ。わしは、おまえさんのことを、忘れはしないよ。げんきで、そして、できることなら、ふたたび、ここへもどってきておくれ。そのときには、わしは、おまえさんのことをみなにふれてまわつて、おまえさんのかんげいできるように

しておくよ。」

ロビーは出発しました。そしてスネイルは、あとを見送って、さいごにひとこと、大きな声でよばわったのです。

「ロビー！ おまえさんは、ひとりじゃないんだ。ひとりだと思っではいかなぞ。それを、忘れんようになあ！」

ロビーはふりかえってさげびました。

「ありがとう！」

そして、三頭の騎馬たちは、ふたたび、夜の森の中をかけていきました。

しばらくのあいだ、四人はだまってかけていきました。森の街道はまっくらで、人っこひとり見あたりません。道はぼはせまく、そのため、馬はいちれつになって進んできました。やみはますますたれこめるばかりで、十ヤードさきのようすですら見通せません。ですが、先頭をゆくベルグエルムの騎馬は、まるで道をすべておぼえているかのように、まがりかどのひとつひとつを、すいすいとかけぬけていきました。

かどをまがるたびに、ロビーは、腰におびた剣のそんざいを感じました。今ではすっかり、剣は、そこになじんでいるかのようでした。まるで、あるべきところにもどったかのように、剣もロビーも、そこにそれがあることがあたりまえのことだというように、

おちついていたのです。これは、ロビーにとつてもふしぎなことでしたが、「この剣に守られている」という気持ちと同時に、「この剣を守らなければならぬ」という気持ちも、心の中で、しだいに、大きさをましてきていました。剣は、ロビーの腰にあつて重すぎず、かといって、かるすぎずに、新しい主人であるロビーに、そのそんざいをうつたえかけているかのようでした。

ロビーはもういちど、やみの中で、腰の剣にさわってみました。ひんやりとした、つかの感しよくが伝わってきます。そしてそれは、同時に、まるで生きているかのように、ロビーの手の中でふしぎないのちの力を感じさせました。

「その剣には、「ふいに、前にいるライオンが口をひらきました。「なにか、ふしぎな力があるような気がするね。」

見ると、ライオンは、静かにさきを見つめたまま、まじめな顔をしているのです。

「ぼくも、そんな気がする。まるで、わたしを手放してはならないと、剣がぼくに、語りかけてきているかのようなんです。ふしぎな感かくです。」ロビーが、剣のことに目をむけながらこたえました。

「シープロンドについたら、ぼくの父に、その剣を見せるといいよ。父はもの知りだから、その剣について、なにかわかることがあるかもしれない。」

ライオンの言葉に、ロビーはうつむいて、旅のことを考えました。どこまでいって、な

にが待ち受けているのか？ ロビーには、まだ、なにもわからなかったのです。

「ぜひ、お願いします。ぼくも、それを知りたいから。」

ロビーは、そういつてまた、ライアンのことを見やりました。白いマントのむこうに、ととのつた顔立ちが見て取れます。しかし、その表じようは、つねになにか考えごとをしているかのように、くもって見えしました（さきほど、ロビーのほらあなでは、あんなにもむじやきでしたのに）。ロビーは、そんなライアンのことを見て、すこし、心がさみしくなつてきました。

「スネイルさんという人は、しんせつな人だね。」ライアンが、そんなロビーの心をさつしたかのように、やさしくほほ笑んでいました。ロビーはまた、スネイルのことを思いました。胸にあついものが、ふたたび、こみ上げてきました。

「ぼくは、また、この森にもどつてこられるだろうか？ 気がかりです。いつか、また、かれにもういちど、ちゃんとしたおれがいいのだけれど。」ロビーがいました。

ライアンはだまつたまま、こんどはなにもいませんでした。ロビーは、ライアンがだまつていることの意味を、りかいしていました。この旅には、このさき、安全の保しようなど、どこにもないということだったのです。ロビーがそうぞうできることの、きつと、なんばいも、ライアンはさまざまを知っているのでしょう。遠いくにのことや、旅の道のりのこと。そして、たくさんの危険のことも。

だいたつてから、ライアンはようやく、口をひらきました。

「なんともいえない。ぼくたちは、さきの見えない道を進もうとしているんだから。じたいはますます、しんこくになっていくばかりだもの。きのうまでの道が、今日は安全だという保しようも、どこにもないんだ。」

ロビーはうつむいてしまいました。気持ちががしずみかけていきそうでした。そんな気持ちをふりはらうかのように、ロビーはまつすぐ、前を見すえました。そこにはただ、やみがあるばかりで、さきのようなすはまつたく見えませんでした。

そのときには、すでに、ベルグエルムやフェリアル騎馬たちでさえ、はつきりとすがたを見て取ることができなくなっていました。ただ、たしかにそこにいるのだということをしらせる馬のひづめの音だけが、くらやみの中に、ひびいているばかりだったのです。

「でも、きぼうはいつも、ぼくたちとともにある。フェリーもいつてたね。うん、そんなに深く考えこむのは、よくないね。ぼくも、すこし、悪いふうに考えすぎちゃった。ごめんねロビー。」

そういうとライアンは、また、ロビーのほらあなで見せたような、むじやきな笑顔を見せました。それは、ロビーのしずみかけていた心を、やさしくいやしてくれる笑顔でした。ロビーはかんしゃしました。そしてそれと同時に、ライアンも自分と同じに、お

それや不安を感じているのだということを、知ったのです。ロビーは、自分がライアンにたよりすぎたということ、はずかしく思いました。

「ごめん。ぼくの方こそ、すっかりなくちやいけない。ありがとうライアンさん。おかげで、げんきが出ました。きみがいつしよにいてくれて、ぼくはうれしい。みんなでがんばりましょう。」

ロビーの言葉に、こんどはライアンがはげまされた番でした。

「どういたしまして。こつちこそ、ロビーみたいな仲間がいてくれてうれしいよ。いい伝えのきゆうせいしゅが、こんなにもやさしい、ふつうの少年だったなんておもしろいね。でも、だからこそ、世界をすくう力があるのかもしれない。」ライアンは、そこで思わず、「ふふふ。」と笑いました。「悪い意味じゃないよ。ほんきでそう、思ってるんだから。ロビーなら、きつとやってくれと、信じてる。」

ロビーは、ふくざつな気持ちになりました。自分にそんな力があるとは、まだ、どうしたって、思えませんでしたから。でも、なにごとも、やってみるまではわからないですものね。はじめからあきらめていては、なんにもできないのですから。ロビーはあらためて、気持ちを強くかためました。

「ぼくは、さきへ進みたい。そしてこの目で、さまざまなくにを見てまわりたい。こまつている人たちを助きたい。」ロビーは、そつと、ですが力強く、自分のすなおな気持ち

ちをいいました。おおかみたちのくに。人間たちのくに。きつと、自分のことを知る手がかりも、そこにあるはずです。

「ぼくも、同じ気持ちだよ。ぼくの力は小さいけれど、やれるところまではやってみたい。」ライアンも同じく、力をこめていいました。

「ロビーなら、うまくやれるさ。気持ちの強い人だもの。」

そしてふたりは、ふたたび、やみの中へとむかつて馬を走らせていきました。

かなしみの森は、もうすっかり、夜になっていました。かなしみの力がはたらくのかの森の夜にくらべて、ことさら暗いように思えます。そのうえ、今日はとくに、それに追いうちをかけるかのように暗く見えました。暗い雲はどんどんとひきよせられるいっぽうで、まったく、吹きちつていくそぶりを見せません。風がびゅうびゅうと吹いています。北の、名まえも知らない山々から吹きおろされるつめたい風が、馬上にいる四人には、ますますきびしいものとなってどきました。

それからまた、どのくらいいきよりを走ったでしょうか？ 一行は、ふいに、水音のひびき渡る川の流れのふちにたどりつきました。足もとは、もう、水ぎわにまでたっしっていて、あやういところで、馬はそのまま、川の深みの中にまで飛びこんでいっしま

うところだったのです。

みんなはあわてて馬の足をとめると、流れのふちに立ちつくしました。水ぎわは、このまっくらな森の中でもびかびかとかがやいて見える、きれいな小石やじやりに、おおわれております。そのため、馬が足をふみしめるたびに、ざくざくという、ここのよい音を立てました。

さきに立つベルグエルムとフェリアルは、しばらく、ふたりでよりあつて言葉をかやしあつていましたが、やがて、ロビーとライアンの白馬に歩みよつていいました。

「この場所は、よそうがいです。わたしたちはじめにここに来たときには、ここは、あさせであつたのに、今ではすっかり、水かさがましてしまつています。これでは、馬で渡れることはむりです。なにか、ほかの手を考えなくては。ロビーどの、なにか、よいお考えはないものでしょうか？」

ベルグエルムは、すっかりこまつて、川の流れを見渡しました。水音は、ごうごうとはげしく、水の流れは、まるで、おしよせるたきのようでした。そのうえ、川の上流も下流も、くらやみの中へと消えているばかりで、まったく見通すことができなかつたのです。まわり道をしようにも、いったいどこに、この川を渡れるようなところがあるものか？ まったくけんとうもつきませんでした。

ですが、この川のことをよく知っている者が、かれらの中にはひとりいたのです。そ

れはロビーでした。知っているというよりは、ロビーはこの場所のことを、よく「おぼえて」いたのです。なぜかといいますと、ロビーはいぜんに、この川にきたことがあったからです。去年とおとの夏のことでしたが、ロビーはこの川に、魚つりに出かけてきたことがあったのです。あまりつれなかつたものですから、くやしくて、よくおぼえていました（ですから、今年の夏はほかの川へいききました。ちなみにロビーは、自分のほらあなからずと歩いてここまでやってきましたので、ずいぶん遠くに感じていました。その川にもう、ついてしまったということを知って、今、いささか、おどろいていました。あらためて、馬という生きものの足がはやいのを、思い知らされたものだったのです）。

さて、ロビーはこの川のことについて、森の住人たちがうわさ話をしているのをきいたことがあります（それはもちろん、スネイルのお店でした）。つまり、この川は森の精霊たちのしはいているところなのであって、川の水の流れは、その精霊たちの力によって、さまざまに表じようを変えるところらしいのです。このあたりに住んでいる精霊たちは、水をなによりもあいする、水の精霊たちであり、とくに、この川のきよらかな流れを好んでいました。まいばん、自分たちの力のもつとも強くはたらく時間には、精霊たちはより集まって、はるか上流にあるというみずうみから、かがやく水のしずくをはこんでくるといいます。そのため、夜の川の流れはいきおいをまし、水か

さは、ひるまとはうって変わって、ふえるのだそうでした。そして精霊たちは、その流れのエネルギーを、みずからの力としてたくわえるのだということ（あくまでもうわさ話でしたので、ほんとかどうかはわかりませんが。それにロビーは、そんなにしっかりと話をきけたわけでもありませんでしたし。それはつまり、ロビーがそばによつたら、住人たちはこわがって、逃げてしまったからなのです）。

「この川の流れは、この森に住む精霊たちの力によって、いきおいをましているそうです。たぶん、ですけど……。夜のあいだには、この流れがおさまることはないと思う。でも、ここで朝を待つわけにはいかないから、やつぱり、ほかの方法を考えなきゃならないと思います。」ロビーは、せいっぱいの言葉をえらんで、そうこたえました。

ロビーの言葉をきいて、それからみんなは、しばらく、じつと水の流れに目をこらして考えこんでいました。なにか、川を渡るうまい手は、ないものでしょうか？（みなさんならどうしますか？）

そんなみんなの目に、川の水しぶきがいたずらっぽく、きらきらとかがやいてうつりました。ふしぎなことに、その水しぶきは、このかなしみの森の、このまつくらな夜のやみの中でも、はつきりと見て取ることができたのです。まるで、水そのものが、いのちを得ているかのように、空中で、はねとび、まいおどり、あちらこちらへとちつていききました。

そのようすをもっともねっしんに見つづけていたのは、白きシープロンの王子、ライアン・スタツカートでした。ライアンは、まるでそこになにかがいるかのように、水しぶきのひとつひとつを目で追いやりながら、ながめていました。ふいになにかを思いついたかのように、馬の背から、水ぎわの美しいじやりの上へとおり立ったのです（残されたロビーも、あわてて、馬の背から地面に飛びおりました。ひとりで馬に乗っていたら、落っこちるかもしれなかったからです。ライアンは思わず、「あ、ごめん。」といいました）。

水ぎわの美しいじやりの地面と、負けないくらいに美しく気品のある、ライアンの白馬。そして、白の衣服に身をつつんだ、美しいライアンほんにん。その光景は夢のようげんそう的で、まるでそこだけ、夜のやみが取りのぞかれてしまったかのようにでした（これぞまさに、ファンタジーの光景！ポスターにしてかざっておきたいくらいです）。

その中に立って、ライアンは、その美しい白いきぬの衣服のポケットから、なにかのふくろを取り出しました。それは、見たこともないような、ふしぎな生きものの羽から作られた、白くふわふわとしたふくろでした。そしてライアンは、ふくろの口をあけて、中のあるものを取り出しながらいいました。

「ロビーのいったことは、まったく正しいね。この川の流れは、精霊たちの力によるも

のだよ。精霊の力には、ぼくたちの力ではかなわないんだ。たとえ、いちばんゆうかなな兵士が、たばになってかかったとしてもね。精霊たちの力を、けがしてはいけない。」
ライアンはそういって、仲間たちの方をふりかえりました。

「つまり、精霊たちの力は、強さだけじゃ、はかれないってことだよ。だから、ぼくらのやることはひとつ。精霊たちの言葉に耳をかたむけ、かれらに話しかけて、この川を渡らせてください、って、心からお願ひすることだね。」

そしてライアンは、ふくろの中身をかかげたのです。それは、美しくかがやくすいしょうの小びんでした。びんの中には、さまざまな色に変わって見える、とうめいなえきたいがおさめられております。ライアンは、それを頭の上に高くかかげると、川の流れの前にさし出しました。

「このびんの中には、シープロンドの聖地、タドゥーリ連山の源流からくまれた、わき水がはいってる。ぼくたちは、これを、土地の精霊たちとの交流のために使ってるんだ。水の精霊に対しては、ききめがあると思うよ。この水の力をかりて、この川にいる精霊たちと話ができるか？ やってみる。」

ライアンはそういって、川の流れに近づきました。白いブーツのつまさきが水についてぬれるくらい、水ぎわのすぐそばにまで歩いていきます。みんなは、そのようすをうしろからじっと見守っていましたが、ふしぎなことに、ライアンのいるそのまわりだけ、

なにか、かげろうが立っているかのようには、ゆらめいたり、ぼやけたりして見えませんでした。その中でライアンは、手にしたすいしよのびんを流れの中にむけてかかげ、なにかをてらし出しているかのように、その位置や、むきを、なんでも変えていたのです。

しばらくすると、もつとふしぎなことが起こりはじめました。びんの中の水が、きらきらとした青いかがやきを放つようになったのです。そしてそのかがやきは、やがて、びん全体をつつんでいくほどに強くなりました。びんを持つライアンのまわりには、青と白にかがやく、たくさんの光がまいちついています。その光は、まるでダイアモンドのこなをちらしたかのように、きらきら、ぴかぴかと、またたいていました。

そして、よく見てください。その光の中を美しいかがやきにつつまれながら飛びまわっているのは、まさしく、この森に住むという、水の精霊たちではありませんか！（そのすがたはとても小さなもので、ひとりひとりの精霊の大きさは、ほんの一寸ちにもみたくないのです。）かれらは、びんの中のきよらかな水の力にひきつけられて、ついには、ロビーたち旅の一行の前に、そのすがたをあらわせるほどまでに、その力を大きくさせていたのです。それほど、ライアンの持つ、このせいなる源流のわき水の力は、たぐいまれなる、「くらい」の高いものでした（みなさんは精霊というものを見たことがないかと思いますが、それはどうぜんのことでした。精霊というものは、空気の中にひっそりとかくれ住んでいる者たちなのであって、わたしたちの目には、見えなかったのだ

すから。よつぼど、その精霊が力にあふれていないかぎりは見えません。ここで、ロビーたちの目に精霊たちが見えたのは、この精霊たちの力が、ライアンの持つせいなるわき水の力によって、それほどまでに強くなっていたからでした。

精霊たちは、ライアンのまわりにより集まって、その手もとからあふれる水の光を、からだいっぱいにあびようと、あつちへすいすい、こつちへふわりと、その小さな美しい青い羽をはばたかせていきます。

りる、る、る、りる、きれいだな。

らり、ら、ら、らり、ら、いいきもち。

りる、る、る、りる、いいよいいよ。

らり、ら、ら、らり、みずをおくれ。

光の中から、小さな小さな歌声がきこえてきました。それは、とてもかすかな、ささやきのような歌声でしたが、その声はとても美しく、まるで、心の中にちよくせつひびいてくるかのようにでした。そしてその歌声は、ひとつまたひとつと、あちらこちらからさそわれて、つぎつぎとわき起こっていったのです。

いいよ、みずをおくれ。
きれいな、そのみずをおくれ。

今や、あたりはたくさん美しい光と、その中を飛びまわる水の精霊たちのすがたで、あふれかえってしまいました。青白くかがやくその光は、どこまでもすみきつたきよらかさを、放っております。そしてその光は、ただしんしんと、目にうつす者の心の中にしみこんでいきました。

ベルグエルムもフェリアルも、もうとつくに馬からおりて、この美しい光景に見いつてしまっていました（たとえだめだといわれても、とてもがまんがでなかつたでしょう）。かれらは精霊というものを、今までいちども見たことがなかつたのです。それは、この森に長らく住んでおりましたロビーであつても、同じことでした。しかも、こんなにかくさんの精霊たちをまのあたりにすることができるなんて、思つてもいないことだつたのです。さらに、さきほどまでは水のしぶきにしか見えませんでした、川の水めんではねまわっているものが、すべて、精霊たちのまいおどっているすがたなのだといふことを知つたときの、三人のおどろきようつたらありませんでした。

かれらはただ、口をぽかんとあけたまま、なにもいうことができませんでした。それにひきかえ、とうの精霊たちは、そんなかれらにはまつたくおかまいなしに、歌つてお

どって、まるでせいだいなダンスパーティーでもひらいているかのように、にぎやかに楽しくやっていたのです（かなしみの森のかなしみの力なんて、この精霊たちにはまったくききめがないみたいですね）。

そして、さあ、それではいよいよ、ライアンとかれらの話しあいが始まるようです（じつのところ、精霊たちとの交流にはなれているはずのライアンでさえ、こんなにもはつきりと、しかも、たくさんの精霊たちに出会えるなんて、思っていませんでした。ですから、かれもまた、ほかの三人のウルファたちと同じに、感げきとおどろきの気持ちでいっぱいになってしまっていて、精霊たちのことを、ただ、ぼーつとながめてしまっていたのです。ほんとうなら、もうとつくに、かれらに話しかけてもいいころあいでしたのに、なかなか話しあいをはじめられなかったのは、こういうわけがあったからでした。もちろんライアンは、みんなにそのことを気づかれないように、いたってれいせいなようすをよそおっていました）。

ライアンは、自分にきたいしている三人のウルファたちのあついしせんに、目くばせしてこたえると、まずは、「おほん。」と小さくせきばらいをしました（これはまあ、「ぎしき」みたいなものですから）。そしてライアンは、すいしょうの小びんを両手でしっかりと持ち、それを自分の胸の前にさし出してから、ゆっくりと語りはじめたのです。

「せいなるタドウーリの名において、かなしみの森の、水の精霊たちよ。このきよらか

なる流れの守り手たる、水の住人たちよ。われの語りかけに、耳をかたむけたまえ。この声をききたまえ。」

ライアンは、いげんにみちたいい方で、おごそかに精霊たちに話しかけました（まるで、今までのライアンとはべつじんのようだ、ロビーは思ったものです）。すると、あたりの空気が、いつしゅん、波が立ったかのようにざわめきました。さきほどまで、あつちへふらふら、こつちへふわふわと、ただまいちつていただけであつた精霊たちが、あきらかに、ライアン自身に対して、心をかたむけはじめたのです。歌声のようにきこえていたささやきが、はつととまりました。それからすぐに、そのささやきは、なんともきき分けることのできないふしぎな言葉による話し声に、取つてかわつていったのです。

いくつかの精霊たちのグループが、かたまりとなつて集まり、ひそひそという話し声、あちらこちらからきこえはじめてきました。その中でライアンは、精霊たちのグループの中で、いちばん大きく、いちばん強い光を放つていた者たちに、目星をつける、いしきを集中させ、さらに言葉をつづけていったのです。

「水の精霊たちよ、わたしたちは旅の者です。そして、わけあつて、さきを急がなければなりません。そのためには、あなた方のこの川を、どうしても今、渡らなければならぬのです。わたしたちには、ここで朝まで、あなた方といつしよにすぎず時間がない

のです。すぐにでもこの森をぬけ、南の地へとむかわなければなりません。ですからどうぞ、お願いです。わたしたちにこの川を、渡らせてください。」

ライアンは、せいいつぱいの気持ちこめて（そして、すつごくわかりやすく）、精霊たちにお願いました。

さあ、精霊たちのこたえは？

精霊たちはライアンの言葉を受けて、しばらくのあいだ、ざわざわとゆれ動いていました。それが、そうだなのかなんのか？　そこまでは、ライアンでさえもわからないことでした。そして、そうするうちに、ついに、精霊たちからのへんじがあつたのです。はじめはやはり、小さなささやきでしたが、そのうちそれは、はつきりと耳にきこえるようになりました。かれらのその歌声のような声は、つぎのような言葉にきき取ることができるようでした。

いいいいいよ、きれいなみずよ。

きれいなみず、みんなこのむ。

みんなこのむ、みんなこのむ。

そして、それにひきつづいて。まるでせきを切ったかのように、まわりの精霊たちが

いつせいにしゃべりはじめたのです。

いいいいいよ、きれいなみずよ。

きれいなみずを、くれるんならね。

とおしてあげる、とおしてあげる。

みんなこのむ、そのみずをおくれ。

きれいなみずを、おくれ、おくれ。

もう、あたりは精霊たちのおまつりさわぎでした。かれらのめざすものはただひとつ。ライアンの持つているすいししょうの小びんです。せいにかくには、その中にはいつている、せいなるわき水の力をもとめているのです。ライアンのまわりは、われさきにと水をもとめる、なん百なん千といった数の精霊たちで、あふれかえっていました（そのせいで三人のウルファたちから、ライアンのすがたがほとんど見えなくなってしまうているほどでした）。そしてライアンは、そのまっただ中で、手にしたすいししょうのびんの口をあげたのです。

とたんに、びんの中から、まるでスノーボールの中の雪のように、さらさら、きらきらと、小さな水のつぶが空中にまいちつていきました。そしてそれは、あつというまに

あたりいちめん広がって行って、ライアンのまわりを、すっきり、おおいつくしてしまつたのです。そしてさらに、その中をよくながめてみますと、まいちる水のおつぶの、そのひとつひとつを、精霊たちがしつかりと両手にかかえながら飛んでいるということが、わかりました。

「ここに、われらシーブロンをだいひょうして、かなしみの森のきよき水の精霊たちに、敬意をひょうし、このせいなるわき水をおくります。この水の力は、あなた方を助け、この川の流れを、ますます、きよらかなるものとしてくれることでしょう。あなた方がこの川を守ることを、やめないかぎり。」

ライアンはそういって、びんのふたをしめました。びんの中にはもう、いつてきの水も残っていません。せいなるわき水は、すべて、空中をまう精霊たちの手によつて、はこばれていったのです。そして精霊たちは、ひとりまたひとりと、いずこともなくすがたを消していきました。おしまいには、ほんのすこしの精霊たちだけが、ちらちらとただようだけとなり、やがてそれも、どこかへと消えていつてしまつたのです。

それとときを同じくして。

目の前の川におどろくべきことが起こりました。

ライアンの立つその水ぎわから、むこうのきしにかけて、どうどうと流れる水のいき

おいが弱まっていき、まるでそこだけ、いつぼんの橋がかかったみたいにな、道がひらけていったのです！ みんな（ここでいうみんなとは、ライアンをのぞく三人のことです）はただただびつくりして、口をぽかんとあけたまま、目の前の光景に心をうばわれるばかりでした。なにしろ、道がひらけたその場所「だけ」が、わずか一インチほどの深さのあさせになっていて、その上流と下流には、いぜんとして、いきおいをました水の流れが、そのままごうごうと流れていたのですから！ こんなにふしぎなことって、ほかにあるでしょうか？

「さあ、今のうちだよ。みんな、早く馬に乗って。出発しよう。ここを越えれば、森の終わりまでは、すぐそこだから。」

ライアンがみんなによびかけると、みんなははつとわれにかえって、あわてて、それぞれの騎馬たちにふたたびまたがりました（あまりのできごとに、みんな気もそぞろになつてしまって、ロビーだけでなく、ベルグエルムやフェリアルでさえ、じょうずに馬にまたがることができないくらいでした）。そして、みんなの騎馬たちは、そろそろとおつかなびつくり、この新しくひらけたあさせの橋の上を渡っていったのです。

馬の足のふむ場所からは、かたい地面の上を歩いているかのように、しつかりとした感じよくが伝わってきます。そして、さらにびつくり。見れば、ひづめのいつぽいつぽの落ちる、ちょうどその部分だけ、まるで待っていたかのようにぽっかりとまるく水が

ひいて、川底のきれいなじやりが、そのすがたをあらわしていききました！（つまり、馬の足はまったくぬれていませんでした！）

「こんなことははじめてだ！ わたしは、なんてすばらしいたいけんをしているんでしょう！」声を上げたのはフェリアルでした。

「このことは、長くのちの世まで、守り語りついでいかなくは。この川も精霊たちも、すばらしい、しぜんのおくりものです。こんなにすばらしいものは、だれにもけがさせるわけにはいきません！」

そして、フェリアルという通り、このたいけんは、長くかれの子やまごのだいにいたるまで、語りつがれていくこととなったのです。そしてそれは、人々の心に、しぜんのすばらしさ、しぜんを守ることのたいせつさを、いつまでも伝えていくこととなりました（ほんとうにすばらしいことです。ところでフェリアルは、けっこういろんなものごとくに、はげしく心が動かされやすいみたいですね。ベルグエルムのおちついたもの腰とは、ちよつと、たいしよ的などころがあるみたいですよ）。

しばらくののち、三頭の騎馬たちと四人の仲間たちは、ぶじに、この川の流れを渡ることができました。するとどうでしょう！ 今さつきまで水がなくなつて、あさせの橋になつてくれていた場所が、あつというまに、また水に飲みこまれてしまつたではありませんか！ 今ではいぜんと変わらないくらい、いえ、シープロンドのせいなるわき水

の力をさらに得たぶん、水の流れはますます強く、そしてますます美しく、なっているかのようでした。

川を渡り終わったところで、ライアンはふりかえって、もういちど、精霊たちにさいごのおいしいの言葉をのべました。

「水の精霊たちよ、ありがとう！」

すると、川の中ほどに、ひとつの青い光が上がったかのように見えました。それはしばらくゆらめいたあと、ふっと、水の流れの中に、そのすがたを消していったかのようでした。

きれいなみずを、ありがとう。

ライアンには、そうきこえたように思えました。

そして、三頭の騎馬たちは、今ふたたび、つづく森の街道にそって進んでいったのです。あたりに生きもののすがたはまったくなく、やみはたれこめつづけ、つめたい風はますます、そのいきおいをましていつているかのようでした。森の黒い木々たちのざわめきが、すぎてゆく景色の中にあらわれては、消えてゆきます。その中を四人は、ただ

ひとつのものにむかって、気持ちも新たにまっすぐかけていきました。そして、ちょうどそのころ。かれらの頭の上から、しんしんとしたつめたいものが、落ちはじめてきたのです。それは、くらやみをかける四人にとっては、なにか、ふきつなしらせであるかのように感じられました。道のゆく手をはばみ、からだのねつをうばい、つかれを大きくさせる、やっかいな相手でした。

雨がふり出しました。いやな雨でした。

3、セイレン大橋

アークランドというくにの北のはずれ。ものさびしい荒れ野が広がる土地の、さらに北に、まっくらでうすきみ悪く見える森が広がっていました。東は、はるかむこうのゆうだいでけわしい山々にまでとどき、西は、果てしなく光のとどかないかなたまでつづいているかのような、とても大きな森でした。その森は、日の落ちた今では、まったく光を受けいれることをこぼんでいるかのようにでした。そして、まるで森全体が、そこからの生きものの立ちいりをこぼんでいるかのように、中にはいろいろとする者の気持ちをしずませるのです。

このなんともさみしげな森を、みなさんの感じようであらわすのなら、どんな言葉がぴったりくるのでしょうか。ぜつぼう？ そこまではいきません。きようふ？ これもちがいます。そんなにおそろしげなものでもないのです。もつとささやかなもの。おおげさすぎることもなく、小さすぎることもないもの。そう、「かなしみ」です。この森には、かなしみという言葉がぴったりでした。雨にぬれて立ちつくしている森の木々も、水をあびて生き生きとというよりは、つめたい雨にうたれて、しょんぼりしているように見えます。まるで、よくないしらせにかなしみ、しずんでいる者たちが、より集

まっつて肩を落としているかのように。そんなかなしみに、この森はつねに、つつまれていました。

さて、物語は、そんな森の南の終わり。そして北へむかうのならば、森の入り口でもありました、ものさびしい岩だらけの荒れ野からつづいてゆくのです。

雨はいぜんとして、さあさあとふりつづけていました。寒すぎるといふほどではありませんでしたが、このつめたい雨のせいで、気温はじつさいよりもだいぶひくく、感じられたのです。そしてさらに、はるかな山々から吹き下ろされるつめたい風が、雨に味方して、あたりのいごこちをますます悪いものにしていました。

そんなさびしい荒れ野に、いつぼんの古い街道が走っていました。南北にずうつとのびていて、南ははるか切り立った岩山の中へと消えていき、北は暗くしずんだかなしみの森の、そのせまい入り口の中のやみへと消えている、そんな道でした。

この道は、街道といつても、馬車のいきかうようなかつきのあるものではなくて、石やでこぼこのまじりあう、すたれた道でした。もう、なん年もだれも通つたことがないかのように荒れ果てていて、馬車のあとはおろか、ひとつの足あとすらも見受けられなかつたのです（もつとも、この道をもしだれかが通つていたとしても、その足あととはすべて、この雨によつてあらい流されてしまつていふように）。それほどこの道は、だれからも忘れられてしまつたかのように、ただひっそりと、消えかかりながらのびて

いました。

しかし、じつは、この道をごくさいきんになって通った者がいたのです。せいにかくに
いえば、「通った者」ではなくて、「通った者たち」。はつきりいつてしまえば、三頭の騎
馬たちと、三人の騎乗の者たちでした。かれらは南の方からこの街道にそつてやつてき
て、そして、まよいなく、このかなしみの森の中へと進んでいったのです。それは、今
からすこし前のこと。日のしずむ前。かなしみの森の力が、今よりもつとう
すかつた時間。雨のふり出す前のことでした。そして今、その森の中から、かれらはふ
たたび、この荒れ野へともどつてきたのです。いぜんと変わらぬ、まよいのない心をい
だいたままで。ただひとつ変わったところはといえば、かれらが今では、三人ではなく、
四人になっているというところでした。

かれらは、どこにむかうのでしょうか？ なんのもくてきがあつて？ 読者のみなさん
には、もうおわかりですよ。かれらは、この古い街道を越え、丘を越え、山を越え、南
の地へと旅ゆくところなのです。世界のやみを、晴らすために。

ロビーたち旅の者たちは、騎馬をとめ、目の前の景色を見やりました。まつくらな森
の中から出てきた四人には、そこはまるで、ひるまのような明るさに思えたことでしょ
う。そしてロビーにとっては、ひさしぶりの、ほんとうにひさしぶりの、森のそとの世

界でした。これが、こんなにしんこくな旅のとちゆうでなかつたのだとしたら、ロビーは、このそのの世界を、どんなにかかんげいしたことでしょう。ですが、さんねんながら、今はとても、そんな気持ちにはなれませんでした。この寒空の下、つづくこの道のさきに、どんな危険が待ち受けているのか？ それはまったく、わかりませんでしたから。

空はあいかわらず真っ黒で、つめたい雨はあいかわらずふりつづけていました。四人は、マントのフードを深くかぶって、このいやな雨をさけていましたが、それも、ほんの気休めにしかありませんでした。つまり、もうぜんいんが、からだじゆう耳の中までぐっしりになってしまっていたからです（動物の種族であるかれらは、耳の中がぬれるのが、いちばんきらいだったのです）。かれらはいったん、耳をびんびんとふるわせて水てきを飛ばし、しつぽをぎゅつとしぼって水を切ると、馬をよせて、まるく輪になりました。

「あの丘のむこうまで、これから進んでいきます。丘を越えると、そのさきには、大きな河が流れています。セイレン河とよばれる河です。いや、むしろ今では、そうよばれていたといった方がいいでしょう。かつての美しいセイレン河は、今やすっかり変わりました。果て、いやなにおいのする、どろの河になり下がってしまったのです。」ベルグエルムがそういって、くやしそうにこぶしをにぎりしめました。

「それもすべて、かの魔法使いめのしわざなのです。セイレン河のはるかな上流は、魔法使いのすみかとなつている、怒りの山脈にまでたつしているのです。魔法使いは、そこで、よこしまなじっけんや、悪きをおこなつていて、セイレン河の水をでたらめによごしているのだ。なんとる、おうぼうだろうか！」

ベルグエルムが、感じようもあらわにいました。しぜんのはかい。美しいもののはかい。このアークランド世界の中で、今それがおこなわれているのです。この世界をあいする者たちにとって、それは、たえがたいくるしみでした（ベルグエルムも、フェリアルも、ライアンも、みんな同じ気持ちでいました。そしてロビーも、これを読んでいるあなたも、今のアークランドのそのじょうきょうのことを知れば、もちろん同じ気持ちになることでしょう）。

「この世界は、いつこくも早くすくわなければなりません。」フェリアルがつづけていました。「その思いは、日を追うごとに、ましていくいつぼうだ。わたしたちは、とにかく、急がなければなりません。」

ベルグエルムがこたえます。

「その通り、われらは、急ぐ上にも急がなければならぬ。そのためには、すくなからずの危険も、かくごしてゆかなければならぬ。」

ベルグエルムはそういつて、みんなの顔を見ました。みんなは、「それはじゅうぶんに

しようちしている」といったふうには、ただだまって、うなずいてみせました（ほんとは、ちよつとだけ、ベルグエルムの言葉に、ロビーはびくつとしたのですけど）。

ベルグエルムが前方の岩山のことを見つめます。それは、ごつごつとした、いやな感じの岩山でした。

「ロビーどの、このさきは、岩だらけの危険な道となります。じゅんちように進めればよいのですが、なにが起こるのかはわからない道のり。気を張ってゆかねばならない道のです。ロビーどののぜんなる光の力が、われらとともにありますように。」

ベルグエルムがそういつて、右手を胸においていちれいしました。しかしロビーは、またしてもこまり顔です。しめいのために、世界をすくうために、大いなるこころぎしを持って出発したのはたしかでしたが、まだまだ、きゆうせいしゆだとか、光の力だとかいわれても、どう受けこたえしたらいいものか？ わかりませんでしたから。ですからロビーは、ただ、自分のすなおな気持ちをもつて、それにこたえることにしたのです。

「ぼくはまだ、自分になにができるのか？ ぜんぜんわかりません。でも、ぼくで、みなさんの助けになれることがあるのなら、よろこんで、力になりたいと思うから。」

ロビーの言葉に、ベルグエルムはやさしく、にこやかにこたえました。

「そのお心づかいが助けとなるのです。あなたには、ご自分が思つてらつしやるよりも、はるかに大きな力があります。その力は、遠からず、かならずこの世界の助けとな

ることでしょう。今はただ、いつも通りのロビーどののままでいてくださればけっこう。それでわれらには、じゆうぶんな力となりましょう。」（そのあとライアンが、「ま、かたく考えなくていいんじゃない？」といつて、ロビーの腰をぽんとたたきました。「きらくにいこうよ、きらくに。そのまんまでさ。」）

そうして、旅の仲間たちはふたたび騎馬を走らせ、このものさびしい荒れ野の、忘れられた街道の上を、急ぎ進んでいったのです。そのとき、すこしはなれた岩山の上に、そんなかれらのことを見つめる、なにかの影がよぎったかのように思えました。それは、鳥のような、馬のような、まっ黒なけものすがたと、まっ黒な人影のようでした。そしてそれらの影は、旅の仲間たちが走り去ってゆくと、そのあとを追うかのように、くらがりの中へとすがたを消していったのです。

そこからの道のりは、とてもさびしいものとなりました（今までの森の道のりも、じゆうぶんさびしかつたんですけど、それよりさらにさびしくなりました）。まわりはごつごつとした岩だらけで、街道は、その岩のあいだをぬうように、くねくねとうねりながらつづいていたのです。そのため旅の仲間たちには、ことさらに注意と、安全への気くばりが必要となりました。まがりかどのそのひとつひとつのさきから、なにがとつぜんにあらわれるか？ わかりませんでしたから（それが、仲のいい友だちだったのなら問

題はないんですけど。」

先頭のベルグエルムをはじめ、うしろのフェリアル、そしてライアンも、危険をいつでもむかえうてるようにと、けいけいをおこたりませんでした。ベルグエルムとフェリアルは、腰の剣に手をかけつづけ、ライアンも、あたりをきよるきよる、ゆだんなく見張りつづけていたのです。そしてロビーも、そんなかれらにならつて、あたりにぴりぴりと気をくばりながら、スネイルにもらったおくりものの剣のつかをにぎりしめました。

そして、しばらくじゅんちように歩を進めていったときのこと。まったくとうとつに、先頭のベルグエルムが手をかざして、みんなに「とまれ」のあいずを送ったのです。三頭の騎馬たちは、ひっそりと、なるたけ音を立てないように、岩かべの影に身をよせて集まりました。そして、みんなが小さくなつて集まったところで、ベルグエルムが小さな声で、仲間たちにささやいたのです。

「なにか物音がきこえる。敵かもしれない。」

みんなの顔に、きんちようが走りました。ロビーは思わず、背すじをふるわせます。

「それだと、やっかいなことになる。わたしはここから馬をおりて、さきのようにしてらべてくる。わたしがもどつてくるまで、みんなは、ここで待っていてほしい。音を立てないように。ロビーどのも、どうか、ここでお待ちを。」

そういつて、ベルグエルムは馬をおりました。その手は、ゆだんなく、腰の剣のつかにかけられております。ベルグエルムのその身のこなしには、まったく「すき」がありませんでした。このベルグエルムという騎士が、ひじょうにすぐれた勇士なのだということは、戦いにはしろうとのロビーの目から見ても、あきらかでした。

「お気をつけて、隊長。」ベルグエルムの馬のたづなをあずかりながら、フェリアルが小さくささやきます。ベルグエルムは、それにうなずいてこたえると、さいごにひとこと、ロビーの方を見ていました。

「なに、すぐにもどってきましよう。」

ベルグエルムがいつてしまうと、あたりはますますものさびしくなりました。三頭の騎馬たちと自分たちの、息使い。そして、ふりしきる雨の音がいには、なんの物音もしません。フェリアルもライアンも、それがいの音になんて気がつかなかったようでした。ほんとうに、なにかきこえたのでしょうか？　ですがみんなは、ベルグエルムのことをとてもしんらいしておりましたので、かれの耳を信じ、言葉を信じて、待ったのです（ロビーははじめ、「ベルグエルムさんは耳がいいんですね。」とふつうの大きさの声でしゃべってしまい、フェリアルに「しーっ、お静かに。」と注意されてしまいました）。

それから、どのくらいの時間がたったのでしょうか？　ロビーには、ベルグエルムが

もう、なんマイルもさきにまでいつてしまったかのようには思えてきました。じつさいには、それほど時間はたつていませんでしたが（せいぜい十分くらいでしょう）、つめたい雨のふりしきる、この荒れ野の岩影にかくれて、じつとしていたのは、とてもこたえることだったのです。そして、ロビーにとつてはもう、なん時間もたつたかのように思えて、ベルグエルムの身が心配でならなくなったところのこと。さきの岩の影から、ようやくかれがもどつてきました。ベルグエルムのからだには、どうやらなにごともないようでしたので、みんなはとりあえず、ほつとしたものだったのです。ですが、じたいはそんなに、安心のできるようなものではありませんでした。もどつてきたベルグエルムの表じようはかたく、また心配げでした。そしてベルグエルムは、みんなのそばまでそつとやつてくると、大きくこきゆうをととのえてから、ようやく口をひらいたのです。

「このさきの岩場のしやめんには、動くものがある。ガイラルロックだと思う。」

「ガイラルロック！」フェリアルがさげびました（もちろんみんなから、「しーっ！」と注意されてしまいました）。フェリアルは気まずそうにせきばらいをしました。

「かれらはとてもきようぼうで、戦いを好むかいぶつだときいておりますが。」（フェリアルがこんどは、小さな声でそつといいました。）

フェリアルのように、ベルグエルムがこたえます。

「そういわれている。だが、それがすべてとはかぎらない。しかし、そうであっても、

かれらとの交戦は、きよくりよくさけなければ。今は、とくにだ。かれらにかかわっているよゆうなど、われらにはまったくないのだから。」

ふたりの会話をきいて、ロビーは思わず、背すじをふるわせました。ロビーにとって、この冒険での、さいしょの大きな危険のときがせまっていたのです。ロビーはそんなかいぶつのことなんて、ぜんぜん知りませんでした。ですから、まったくしぜんに、こんなしつもんをしたのです。

「そのガイラルロックというのは、どういう人たちなんですか？　患者なんですか？」

ベルグエルムとフェリアルルの会話をすこしきいただけでも、このガイラルロックというのが、かなり危険で、きようぼうなかいぶつであるということが知れましたが、それでもロビーは、そんなかれらのことを、すべて悪いやつだときめつけることはできませんでした。これは、長年ひとりぼっちだったロビーの生い立ちが、大きくかかわっていました。かれもまた、自分の見た目のすがただけで、おそろしくてこわい者というあつかいを受けてきたのです。ですからロビーは、だれかがそんなあつかいを受けるといことが、なによりつらいのでした。たとえそれが、おそろしいかいぶつであったとしてもです。

このロビーのといに、ふたりの騎士たちはすこし、めんくらってしまいました。そ

んなふたりのかわりにこたえたのは、ライアンでした。

「このあたりの岩山に、むかしから住んでる、岩のかいぶつなんだ。からだはなくなつて、おつきな岩の頭だけのすがたで、ちゆうにぶかぶか、浮きながらいどうするんだよ。それで、岩をまるで、りんごみたいに、ぱりぱりかじって食べるんだ。」

ロビーはぎょうてんしました。そんな生きものがいたなんて！ ロビーはあらためて、その世界の大きさを感じたものだったのです。

ライアンがつづけます。

「日の落ちる前、ロビーをたずねにいくときにも、ここは通つただけけど、かれらのすがたは見られなかった。だから、このあたりには、かれらはこないんじゃないかと思つただけど、あまかつたみたいね？ ベルグ。」

「かれらは、夜こうせいなのです。」ベルグエルムがこたえていました。「ひるに動きまわることもあるが、それは夜にくらべたら、もの数ではない。だから、わたしはできれば、ここは通りたくなかつたのだが、ここをうかいしていけば、シープロンドまではなん日もかかってしまう。それは、さけなければならぬ。たしよの危険をおかすことにはなるが、われらは、どうしても、この道をゆかねば。」

どうやらかれらは、このあたりの道が、ガイラルロツクたちに出会うかのうせいの高い、危険な場所であるということを、しようちしていたみたいでした（フェリアルは知

らなかつたみたいですけど。「さきにいつてくださいよー!」とフェリアルは、ちよつとベソをかいていました。ベルグエルムは本などを読んで、ガイラルロツクたちのことをよく知っておりましたし、ライアンにいたっては、じつさいに、かれらに会つたことさえあつたのです（といつても、遠くからそつとながめただけでしたが。すぐ逃げましたから）。

さて、みんなはどうするのでしょうか？　しかし、みんなの気持ちはすでにかたまつていました。かれらは急いで、さきへ進まなければなりません。となれば、やることはひとつ。ベルグエルムのいった通り、たとえ危険な道だとわかつていても、みんなはここを、通つていくしかなかつたのです。

ですけど、ただやみくもに進んでいくというのは、あまりにも危険でした。こんなんに対しては、それにうちかつたためのそなえが、なによりたいせつです。そのこたえを出したのは、ライアンでした。かれは、さきほどから空を見上げて、ふりしきる雨をながめていましたが、ふいに、なにかを思いついたかのように、につこり笑つて、空をゆびさしていったのです。

「さういふときは、この雨を、味方につけちゃうことだね。」

みんなはびつくりしました。雨を味方につけるとは、どういふことなのでしょう？

みんながそのしつもんをする前に、ライアンがふたたび口をひらきました。

「かれらは、鼻がいいんだって。こんな雨の中でもね。それに、夜でもよく、目が見えるらしい。このままうまくかくれて進んでいけたとしても、かれらに見つからずにこの岩場を通りぬけることは、むずかしいと思う。」

かれらのことをよく知っているベルグエルムが、静かにうなずきます。

ライアンがつづけました。

「だから、この雨の力をかりて、ぼくたちのにおいとすがたを、わかりにくくさせるんだ。いい？ 見ててね。」

ライアンはそういうと、右手を目の前にさし出して、ひとつふたつ、空中になにかのようをえがいていきました。するとどうでしょう。その空中に、水色にかがやく毛糸のような光の線があらわれて、それがライアンのまわりを、くるくると、まわりはじめたではありませんか！ そして、見てください。その光の線にさそわれるかのように、ライアンのまわりにふりしきっていた雨が集まって、ライアンのからだをすっぽりと、おおいかくしてしまつたのです！ それはまるで、中を見ることのできない、水のバリアーのようでした。近づいてよくよく見れば、それが作りものなのだとわかつてしまいました。ちよつとはなれて見るのであれば、そこにライアンがいることすらも、ぜんぜんわからないほどだったのです。これはすごい！（それにこのバリアーは、においがそとにもれることも防いでくれるのでした。鼻のよくきく相手に対しては、まさにうっ

てつけだったのです。」

「ぼくには、しぜんの力をかりるわざがあるんだ。しぜん、ほんらいの力をかりるんだよ。」水のバリアー（とりあえずこうよぶことにします）の中から、ライアンの声だけがきこえてきました。

「だからその力は、しぜんのそれ以上でも以下でもない。もらうわけでもしはいするわけでもない。ただ、かりるんだ。」

「みんなのこともつつんであげる。近くによつて。あんまりはなれると消えちゃうから。」

そしてライアンは、さらにいしきを集中させて、三人の仲間たちと三頭の騎馬たちをも、そのすがたを消せる水のバリアーでつつんでくれたのです（それぞれひとりずつ、一頭ずつを、バリアーでつつんでいきました。その方が、みんなまとめてつつむよりも、バリアーの大きさをさいしようにげんにおさえることができ、敵の目からものがれやすかったのです）。

中にはいった三人が、まずおどろいたことは、そとからは中のようすがぜんぜん見えないのに対し、中からは、そとようすがよく見えるということでした（これにはみんな、とてもほつとしました）。そしてさらに、このバリアーの中からは、ほかのバリアーの中にいるみんなのことも、よく見えたのです。じつに、ふしぎな力です（それから、も

うひとつのとくちよう。これはあんまりうれしくないものでしたが、このバリアーは、雨そのものを防いでくれるというわけではありませんでした。だって、このバリアーの中にも、しつかりと、雨はふりつづけていましたから。みんなは、バリアーの中にはいればこれ以上ぬれずにすむかと思っておりましたので、ちよつと、がっかりぎみでした。そんな三人に対して、ライアンは、「ぜいたくいわないの！」とぶんぶんいいましたが。ちなみに、このバリアーのききめはみじかくて、一日にせいぜい三十分がげんかいだということでした。このバリアーを張りつづけるのは、とても集中を必要とするさぎょうなのだそうで、ライアンのいうことには、「こんなのずっと張ってたら、ぼくはつかれてたおれちやうよ！」とのことだそうです。

「さあ、これでもう、できることはみんなやったから、あとは、こううんをいのるだけだね。」

ライアンがそういうと、みんなはもういちど（バリアーの中から）顔を見あわせて、出発の意志をたしかめあいました。

「なに、いぎとなつたら、わたしの剣がやくに立ってくれることだろう。」ベルグエルムがじょうだんぎみにそういつて、ここにきてはじめて、笑顔を見せました。それは、みんなを勇気づけ、気持ちをおちつかせてくれる、たよれる笑顔でした。

そして一行は、ゆつくりとしんちように。それでいて、いっぽいっぽをかくじつに。

この危険へとつづく岩の道を、進んでいったのです。

しばらくいきますと、一行はなだらかなしやめんのある丘の前にやってきました。ここが、ベルグエルムのいつていたその場所のようです。みんながベルグエルムの顔を見ますと、ベルグエルムは、だまって小さくうなずきました。そして、しやめんの方を見てみますと、そのまん中あたりに、ごつごつとした岩のかたまりがふたつ、よりそつているのが見えたのです。そしてやっぱり！ それらの岩は、ただの岩ではありませんでした。動いているのです！ あつちの岩からこつちの岩へ。空中をすべるように、すすいと進み、その大きくてがんじょうそうなあごを動かして、岩の山に、がぶり！ おいしそうにかぶりついていました（それも、とつてもおぎようぎ悪く、食べこぼしの岩をぼろぼろとこぼして）。これはまさしく、さきほどの話に出てきました、ガイラルロツクというかいぶつたちにまちがいありません。

みんなは、ここでいったん足をとめ、あたりのようすをもういちどどうかがいきました。ベルグエルムは、ガイラルロツクたちに気づかれずに通りぬけられそうな道を、もういちどさがしましたが、やっぱりだめでした。どうしても、岩のかいぶつたちからよく見えてしまう、この目の前の道を進んでいくほかは、なかったのです（頭の上にあるがけの上の場所まで、三頭の騎馬たちといっしょに、びよん！ 四十フィートほどジャンプ

できれば、かれらをやりすごすこともできるのですが。

「さいごまで身をかくしながらゆける道は、さんねんながらここにはない。」ベルグエ
ルムが小さな声で、みんなにいいました。「みんなかたまつて、ひそかに通りぬけるほか
はないだろう。かれらが立ち去るのを待っている時間は、われらにはないのだ。ライア
ンのおかげで、われらのすがたにおいては感づかれにくくなつてはいるが、それでも、か
れらに見つかかるかのうせいは大きい。もし見つかつたなら、かれらはうむをいわさず、
おそいかかってくるだろう。かれらは、からだを持った生きものたちのことを、にくん
でいるのだ。しかし、そうなつても、かれらと戦うのはさいしようにげんにとどめなけれ
ばならない。むだな戦いは、できるだけ、さけなければ。」

岩から岩へ。一行は、かくれながら地面をはうようにして、進んでいきました。道の
りのいっぽいっぽが、重く長いものに感じられます。たづなをひいてつれていく騎馬た
ちが、とてつもなく大きなものに思えました(じっさい、かくれて進むのにいちばんやつ
かいなのは、この騎馬たちでした。からだの大きさはみんなのなんばいもありまし
し、そのうえ、旅の者たちがどんなに静かにしんちように歩いたとしても、馬のひづめ
の音だけは、かんぜんにはかくしようがなかつたのです。ライアンがバリアーでつづ
んでくれたあと、馬の足音を消すために、それぞれの馬たちのひづめには、ベルグエルム
が、持っていたぬのを破つてまきつけていましたが、それでも、まったく音がしないと

いうわけではありませんでしたから。ひづめが小石をふんで、がりっ！ という音を立てるたびに、みんなはきもひやしました。

そうして一行は、いよいよ、岩のかいぶつたちのそのすぐ近くにまでやってきたのです。かれらが岩をばりばりかじる音が、おそろしげにひびいてきました。そしてその音にまじって。かれらがなにやら、ぶつぶつと話しあっているのがきこえてきたのです。それはどうやら、ふたりの（人とよべるかどうかはわかりませんが）ガイラルロックたちが、岩の味についていいあらそいをしている声のようでした。

「やい、ねぼすけ！ うそばっかりいいやがって。ここの岩はさいこうにうまいときいたから、おれははるるる、東の岩山からやってきたんだぞ。これなら、おれたちの岩山の岩の方が、よっぽど美味だつてもんよ！」

「でこぼこ！ おめえの舌がどうかしてんじやねえのか？ ここの岩場は、どこの岩山にも負けはしねえぞ。アーランドでだつていちばんだ。このぜつみような鉄のまじりぐあいが、東のばかもんにはわからねえつてのかい？」

「いいや、ちがうね。鉄は、もつと多い方がうまいんだ。おめえは知らねえのか？」

鉄つてのは、多ければ多いほどいい。おれはよ、鉄だけつてのを食ったことがある。考えられるかよ？ そのもの、鉄だけだぜ？ あのまるやかな舌ざわりと、うつとりするほどのかぐわしいかおり！ こたえられねえや。」

ねぼすけとでこぼこというのは、このふたりのガイラルロックたちの名まえのようです。そして、かれらの声はひくくぐもっていて、まるで地面の底からひびいてくるかのような、なんともおそろしげなものでした（それに、そのかなりらんぼうで品のない言葉使いも、そのおそろしさに、ひとやく買っていたのです）。

かれらの会話はつづきます。

「信じられねえな。おめえの作り話じゃねえのか？ でこぼこ。いくらよくできた岩だつて、鉄だけなんてぐあいじゃ、いかねえぞ。」

「こたえはな、ねぼすけ。『人』よ。あいつらは、鉄を道具として使うつて話よ。それも、いろんなものに、かたちを変えちまつてよ。剣だのよろいだの、つてすんぼうよ。やつらはむかし、おれたちのからだをうばつていった。おれたちに手足がねえのもよ、みんなあいつらのせいよ。あいつらはゆるせねえれんちゆうよ。そしてこんどは、おれたちのもんだつた鉄まで、うばおうつてのよ。しかも自分たちは、そのよく動く手足を使つてよ、その鉄を好きほうだいに變えちまつてるのよ。こんなことはゆるせねえ。だからおれは、れんちゆうの持つてゐる剣やらよろいやらつてもんをよ、残らず食らいつくしてやるのよ。」

かれらのからだを、ほんとうに人がうばつたのかどうか？ それを知るためには、遠い遠い、神話のじだいにまでさかのぼらなければならぬことでしょう。今となつて

は、だれにもわからないことです。いちばん長生きの種族の、いちばん長生きの長老でも、知らないでしょう。いちばんちえのあるけんじやの持つ、いちばん古い書物をひもといてみても、そのことはのっていないでしょう。それは、それほど古い、はるか大むかしのできごとだったのです。

ですけど、鉄をかれらから人がうばっていったというのは、たしかに、じじつであるといえなくもありません。ですが、それもまた、遠いむかしのことです。それに人々だって、「うばった」などとは思っていないことでしょう。文明が進めば、いろんなものがなくなつてゆくのです。ガイラルロックたちの暮らしから、鉄が失われていったように。

こんなふうないあいをききながら、一行はさらに進んでいきましたが、その道のりは、じゅんちようなものではありませんでした。しばらくゆくと、道はどんどんとたいらなものになつてしまつて、おしまいには、身をかくせるような岩影が、まったくなくなつてしまつたのです（ですが、それははじめから、わかっていたことでした。さきのようにすは、ちゃんと見えていましたから）。このさきに進むためには、どうしたつて、岩のかいぶつたちのその目と鼻のさきを、そのまま通りすぎるほかありませんでした。

一行は、さいごの岩の影にかくれて、身をよせあいました。おそろしい岩のかいぶつたちは、かれらのすぐさきのしゃめんから、ぜんぜんはなれそうにありません（かれら

はなん時間でも食事をつづけるのです。あいかわらず岩をかじりながら、岩の味と人のことについて、ぎろんをかわしつづけていました。

「進みやすいたいらな道が、これほどとましく思えたことはない。今では、岩だらけのでこぼこ道の方が、よっぽど、われらに必要とされているのだから。」身をかくすところのない、目の前のたいらな道をにらみつけて、フェリアルが思わずいいました（とつても小さな声で）。

「きみのいう通り、ひにくなものだな。」ベルグエルムがこたえてそういいます（とつても小さな声で）。「だが、これも野の道のさだめ。しかたのないことだ。のぞみのままにことが進むとはかぎらない。すべてが、しぜんのなりゆきのままに動くのだから。」

フェリアルは、ゆうもうかかな騎士でしたが、野山をゆくことにはなれていませんでした。かれはほんらい、騎士をひきいて戦う騎兵師団のしよぞくでしたから、とうそつやきりつといったものを、もつとも重んじるのです。そのはんめん。きてんをきかせたり、野山の中に分けいつたりするというようなことは、ちよつとにがてなようでした。

それとは対しよう的に、ベルグエルムの方は野山のことにとてもくわしいようでした。ここまでの道のりにおいても、かれのあんなにたくしては、そうかんたんにはさきに進めなかつたことでしょう。かれは、この旅の仲間たちの、よきみちびき手であり、よきそうだん相手であるといえました。ですからみんなは、ベルグエルムのことを、とて

もしんらいしておりましたし、今もかれが、どのようなはんだんをくだすのか？ その
けつだんを待っているところだったのです。

「かれらは、とうぶん、立ち去ってくれそうにないだろう。ここまできたのなら、あと
はこのまま、乗りきるほかはない。進むべき道は、ほかにないのだ。」

ベルグエルムのこたえは、たんじゅんめいかいなものでした。ですが、今のこのじよ
うきようでは、もつともれいせいで、それでいて、もつともよいはんだんであると思わ
れました。

「雨が強くなってきた。ぼくのバリアーも、力をましてくれると思うよ。」ライアンが、
空を見上げていました。

「もし見つかつたら、すぐに馬に乗ってかけるのだ。戦いは、のぞむものではない。う
まくいけば、ついできをかわして、丘のむこうまでのがれられるかもしれない。そうす
れば、あとはまつすぐ、セイレン河まで、道はつづいてくれることだろう。」ベルグエル
ムがさいごにいました。

そして一行は、とうとう、この危険なつな渡りのような道へと、ふみこんでいったの
です。すぐそこにまで、岩のかいぶつたちがせまっていました。みんなは、このふりし
きる雨を、どんなにありがたく思ったことでしょう。ライアンの水のバリアーがなかつ

たなら、とても、こんなところを歩いてなどはいられませんでしたから（あなたが、ひるねしているライオンの目の前を、そうつと通りぬけようとしているところを、そうぞうしてみてください。今がまさに、そんな感じだったのです）。

みんなは、ガイラルロックたちがこのまま食事にむちゆうになつていてくれることを、願いました。こつちを見ないでくれよ、という気持ちだが、声になつて出そうなくらい、大きなものとなつていました。

「ゆるせねえれんちゆうよ……。生かしておけねえれんちゆうよ……」

おそろしい話し声が、旅の者たちの耳にひびいてきます。さいわいなことに、岩のかいぶつたちは、ずつとぎろんをつづけ、食べることをつづけていました。

雨のバリアーは、すばらしいこうかをはつきしていました。どうやら岩のかいぶつたちには、ロビーたち一行のすがたやにおいは、とどいていないみたいです（いちどかに、ガイラルロックのひとりだが、ちらつとこちらを見たように思えて、仲間たちは、ひやつとさせられました。かれらには、こちらのすがたが見えていないようでした）。

そしてそのまま、ときはすぎていき……。

このままなら、ぶじにむこうの岩場までたどりつけそうだ。危険な道のりも、あとちよつとで終わりというころ。もうだれもが、このまま安全な岩場までたどりつける、そう思ったころのことでした。

ベルグエルムはゆだんなく、あたりのようすをうかがっていました。フェリアルも、ベルグエルムのはんたいがわを受け持って、気をくばりつつづけていました。ライアンはずっと集中して、水のバリアーの力をたもちつつづけていました。

そしてロビーは……、ロビーはどうしているのでしょうか？

安全な岩場を前にして。早くたどりつきたいと心の底から願っていた、その岩場を前にして。ロビーはなんと、岩のかいぶつたちのすぐそばで、立ちどまってしまったではありませんか！ みんなはびっくりきょうてんして、あわてて、ロビーのそばに近よりました。

「どうされたのです！　すぐにでも身をかくさねば。危険すぎますぞ！」ベルグエルムもフェリアルも、小さな声でささやいて、ロビーのことをせかしました。しかしロビーは、いつこうに、動くそぶりを見せません。

そして、ロビーがついに、口をひらいてこんなことをいったのです。

「ここはいけない……。あの岩場へいつてはいけない。みなさん、馬に乗って、あのしゃめんにかけるんです。すぐに！　助かる道は、それしかない！」

ガイドラルロックたちのいるしゃめんへむかって、かけるですって？　みんなはもう、なにがなんだか？　わかりませんでした。かいぶつたちの、そのまっただ中につっこんでいくだなんて、それこそ、危険きわまりないことでしたから。ですが、ああ、なんだ

ること！ みんなはつぎのしゅんかんには、ロビーの言葉がまことに正しいものであるということをも、知ることとなったのです。

それは、おどろきの光景でした。一行がまさにたどりつこうとしていた、岩場の岩が、たくさん、安全に身をかくせはせずの、その岩のすべてが。一行の目の前で、ぐらぐらと、動きはじめたのです！ そして、それらの岩のすべてが、地面から空中へ、ゆっくりと浮き上がっていききました！

両方の目がぼつちりとひらき、大きな口が、がぼつとひらきました！ そしてそれと同時に、なん十ものおそろしいうなり声が、あたりいちめんひびき渡つたのです。

そう、旅人たちがめざしていた岩場。その岩場の岩は、すべて、ガイラルロックたちのかたまりだったのです！

これでは、いくらゆうかんなる騎士たちといえども、とても、たちうちできるものではありません。みんなはすぐさま、それぞれの騎馬たちに飛び乗りました。

「全力でかけるんだ！ あのしやめんへ！」ベルグエルムがただ、それだけ、いうのでせいっぱいでした。

それからあとのことは、もう、なにがなんだか？ わかりませんでした。丘のしやめ

んでも、追いかけてきたガイラルロックたちが、たくさん、一行の前に立ちふさがったのです。ベルグエルムは馬でかけながら、なん回も、岩のかいぶつたちに剣をふりおろしました。フェリアルも休みなく剣をふりつづけました。ライアンとロビーの白い騎馬は、なんどもなんどもかいぶつたちのあいだをすりぬけ、身をかわしつつづけました。そして、三頭の騎馬たちは、丘のしやめんをかけのぼり、さいごに立ちふさがったガイラルロックの一体をふりきると、いちもくさんに、セイレン河へとつづく街道へとむかってかけていったのです。

この戦いで、たくさんの者たちがひがいをこうむりました。ベルグエルムは、左肩にけがを負いました。せまりくるかいぶつたちのこうげきを、防ぎきることができなかつたのです。ですが、急所をはずれていたのがさいわいでした。動かせないほどではなかつたのです。フェリアルはなんとか、かすりきずていどですみましたが、自分の剣をおつてしまいました。ガイラルロックたちのかたいからだに切りつけたときに、剣のまんな中ほどから、ぽつきりおれてしまったのです（おれた剣のやいばは、ガイラルロックのひとりが飛びついて、あつというまに食べてしまいました）。

ライアンとロビーは、こううんにも、むきずでなんをのがれることができませんでした。これらの白い騎馬が、かいぶつのはき出した岩のつぶてを受けて、大きなきずを負ってし

まいりました。首のつけねのあたりに痛々しいきずを負って、白く美しいその毛なみを、赤い血でよごしてしまつたのです。

敵の方にも多くのひがいが出ました。あのねぼすけとでこぼことよばれていた、ふたりのガイラルロックたちは、まっさきに旅人たちにおそいかかり、そして、ゆうかんなる騎士たち、ベルグエルムとフェリアル、その剣の前に、やぶれ去ることとなつたのです。ねぼすけはその目をつかれ、こんごのその岩の人生を、ずっと片目のままですぐすはめになりました。そしてでこぼこは、なんども切りつけられて、でこぼこしたその顔をもつとでこぼこにしたのち、にどと起き上がることはなかつたのです。

そのほかのガイラルロックたちも、ふたりのゆうかんなる騎士たちを相手にして、たくさんの者が切られ、つつかれ、いのちを落としました。あちらにもこちらにも、今ではもはや動き出すことのなくなつた、岩のかたまりが、ぼらぼらになつてちらばつていました。ですから、この丘のしやめんは、このち長くに渡つて、ふしぜんなまでに岩だらけのふしぎな場所として、知られるようになったのです。ですが、その中の岩のひとつが、かつて、でこぼこという名まえの岩のかいぶつだつたなんてことは、このさきにおいても、だれも知る者はないでしょう。こうして、四人の旅の者たちは、くるしい戦いののちに、このたいへん危険なさいよのこんなんを、乗り越えることができました。

雨がどんどんと強くなってきました。風もぴゅうぴゅう、吹きつづけています。旅の一行は、セイレン河へとつづく古い街道をひた走っていました。このあたりの道は、道はばも広く、三頭の騎馬たちがならんで走っても、まだあまるほどでした。ですからみんなは、横にならんで、ともにおたがいのことをたしかめあいながら、かけていったのです。

とくに今では、またべつの、新たな問題も生まれてしまっていました。それは、ライアンの白い騎馬のことです。ライアンの騎馬は、さきほどの戦いで、ひどくきずついてしまっていました。ライアンが自分の服のかえを使って、すぐにきず口をしぼりました。が、それでも血がとまりませんでした。ですからライアンが、しぜんの風の力をかりて、きずのまわりを空気のまくでおおうことで、ようやく血がとまって、ゆつくり走れるくらいにおちつけることができたのです（このわざは、いってみれば「ぼんそうこう」みたいなものでした。そしてそれは、ベルグエルクムの肩にもほどこされたのです。べつに、ついでというわけではありませんよ、もちろん。

ちなみに、水のバリアーはもう消えています。こんな戦いのあとでしたので、バリアーがあつた方が、このさきもちろん、安全ではありましたが、ライアンもつかれてしまつて、今日はもう、バリアーを張れるようなじょうたいではありませんでしたので。

しかしそれでも、あまり長く走らせるわけにはいきません。むりをすれば、ゆっくり走ることさえできなくなってしまうことでしょう。ライアンは、この馬をメルと名づけ、小さいときからずっとかわいがってきました。ですからかれにとつて、この馬を失うなんていうことは、とても考えられないことだったのです。

とにかく今は、メルのためにも、いつくも早くシープロンドまでたどりつかなければならぬときでした。シープロンドには、鳥や動物たちのための、せんもんのお医者さんたちもいたのです。ゆうしゆうなお医者さんたちにみせれば、メルもきつと、げんきになってくれることでしょう。

「あまり、むりをさせてはならないだろう。」ベルグエルムが心配して、ライアンに話しかけました。「このさきは、なだらかな走りやすい道だから、ふたんはすくなくてすむだろうが、それでも、そくどは、もつと落としてゆかなくては。」

そんなベルグエルムの言葉に、ライアンはにっこり笑ってこたえます。

「ありがとう。でも、シープロンドにつくまでならだいじょうぶ。強い馬なんだ。ぼくといっしょに、もうなんども、こんなんを乗り越えてきたんだから。」ライアンはそういつて、メルの首をなでてやりました。

しかし、そうはいつても。ライアンがメルのことをとても心配しているのだということ、だれの目にもあきらかでした。とくにロビーには、ライアンの気持ち、痛いほ

どよくわかったのです。長年つれそってきた友人を、失ってしまったとしたら……、こんなにかなしことはありません。ですがロビーには、なにもしてやれることがありませんでした。ですからロビーは、よけいに、つらかったのです。早くシープロンドにたどりついてほしい。そう願うほかはありませんでした（さいしょロビーは、けがをしたメルに乗るのをことわりしましたが、ライアンに「だいじょうぶだから。」といわれて、しぶしぶ乗っていったのです。メルは、ライアンいがいの者にはたづなをにぎらせようとはしませんでしたし、かといって、ほかの二頭の馬たちの一頭に、大きなウルファがふたり乗っていくと、重すぎて、走ることができなくなってしまいました。ライアンはそのことを、よくわかっていたのです）。

「このままもうしばらく進めば、じきにセイレン河に出る。河を渡ることができれば、シープロンドまでは、すぐそこだ。旅のつかれも、そこでいやされることだろう。」

ベルグエルムがそういって、みんなに笑顔を見せました。しかしかれもまた、メルと同じく、かなりののがまんをしていたのです。ガイラルロックたちにおそれられたきずが、ずいぶん痛むようでした。ライアンの手あてによって、だいぶ、痛みはおさえられてはいましたが、騎馬がときどき大きくゆれるたびに、大きな痛みが走るのか？ 声をおさえて、くつうに顔をゆがませたのです。

「だいじょうぶですか？ ベルグエルムさん。むりはしないでください。ぼくにはと

ても、見ていられない。」ロビーが心配して声をかけました。ロビーは、さきほどからずっと、仲間たちのからだのことを気づかっていたのです。自分にけががないぶん、その気持ちはさらに、強いものとなっていました。仲間のくるしむすがたを見るのは、ロビーにとつて、なによりもたえがたい、くつうだったのです。できることなら、自分がかわつてやりたい。それがロビーでした。

ベルグエルムは、そんなロビーの心配にかんしゃして、静かにほほ笑みかけると、心をこめてこたえました。

「心配にはおよびません。このていどのきずは、わたしはなれておりますので。いくさではたくさんの者たちが、もっと重いきずを負うことも、しばしばあるのです。ありがとう。」

ベルグエルムは大きく息をついて、こきゆうをととのえました。まことに、このベルグエルムという騎士は、勇士とよぶのにふさわしい人物でした。痛みやくつうにたえる、強いせいしん力と、肉体を、かねそなえていたのです。

「ロビーどの。」こんどはベルグエルムが、ロビーにたずねました。それはだれもが、ふしぎに思っていたことでした（きつと、読者のみなさんもそう思っていたであろうことです）。

「さきほどの戦い、あのときどうして、あの岩場が危険であるとわかったのでしょうか？」

わたしもみなも、あの岩場を注意深く見張っておりましたが、なんの物音も、生きもののけはいすらも感じられなかった。よもやあの岩場が、ガイラルロックたちのかたまりであるなどということは、夢にも思っていなかったことです。

「つまりかれらは、われわれのことに、さいしよから気がついていたのだ。かれらは思った以上に、頭が切れるらしい。それで、ただの岩のふりをして、われわれが近づいてくるのを待っていたのです。おそらく、しやめんにいたあの二体のガイラルロックたちも、われわれのことをささい出すための、おとりだったのでしょう。うかつなことでした。ロビーどのがとめてくれなければ、われらはそのまま、かれらの中に飛びこんでいて、ひとたまりもなくやられてしまっていたはずです。ほんとうに、あやういところでした。」

（ベルグエルムという通り、じつはあのガイラルロックたちは、旅の者たちがあのしやめんにやってきた、そのずっと前から、一行のことに気がついていました。それは、ガイラルロックたちの、あるとくべつなのうりよくのためでした。ガイラルロックたちは、地面にひびくかすかな「ゆれ」を、まるでレーダーのように、空中で感じ取ることでできたのです。その力は強力なもので、ふりしきる雨の中、たとえ百ヤードはなれたところをりすが歩いていたとしても、わかつてしまうほどでした！

ですから、ベルグエルムがどんなに静かに歩いたとしても、ライアンがどんなにじよ

うずにすがたをかくしてくれたとしても。みんなのことは、ガイラルロックたちには、つつぬけだったのです。そして、その力のことを知っていた者は、このアーケランドに住む者の中では、ほとんどいませんでした。かれらのことにくわしいベルグエルムも、ライアンも、知らないことだったのです。もちろん、フェリアルとロビーも。

目もいしい鼻もいしい。そのうえ、地面のほんのわずかなゆれまでをも感じ取ることができる。ほんとうにガイラルロックというのは、おそろしい生きものです。」

ベルグエルムの言葉に、ロビーは深く思いをめぐらせました。

あのとき……。

ロビーはたしかに、ふしぎなものを感じ取りました。しかし、せいいつぱい考えましたが、それは自分でも、説明のできないことだったのです。あのときはただ、こわくて、とてもいいせいな気持ちなどではいられませんでしたから。ですからなぜ、危険が知れたのか？ それはロビーにもわからないことでした。

「ごめんなさい。ぼくにもわからないんです。ただ、あの岩場には、ほかとちがう感じがあったということしかいえません。まるでそこだけ、まつくらなやみにおおわれているかのような、そんな感じがしたんです。ぼくの中で、だれかがさげんでいるような気がしたんです。あそこへいってはならないと。それ以上のことは、ぼくにもわかりません。りかいすることもできないんです。」

みんなは、マントのフードから耳だけをぴんとのばして、ロビーの言葉にききいっていました。みんな、ロビーのふしぎな力のために、あれこれ考えをめぐらせているようです。でも、けつきよくこたえは出さじまい。ロビーほんにんにもわからないのですから、むりもありません（ちなみに、さきを急がなければならぬみんなは、そのしつもんをロビーにするのをシープロンドにつくまでは待とうかと思っていました。やっぱりだめでした。それでベルグエルムが、いちばんにロビーにたずねてしまったのです）。

「とにかく、」ベルグエルムがいました。「わたしたちはロビーどのおかげで、いちびろいをする事ができたのです。このていどのけがですんだのが、きせきというほかありません。ロビーどのがいなかったのなら、この旅も、あの場ですべてしまっていたことでしょう。まことに、かんしゃの言葉もあります。」

ベルグエルムはそういって、ロビーに深くいちれいしました。フェアアルもそれにつき、そしてライアンも、「助かったよ。いいしごとしたね。」とロビーのからだをぽんとたたきました。

「そんな、やめてください。ぼくは、なにもしていません。危険を乗り越えることができたのは、ゆうかんなみなさんのおかげなのですから。あんなおそろしい相手になんて、ぼくではとても、たちうちできませんもの。ぼくの方こそ、おれいをいわなければ

ならないです。」

ロビーはそういつて、頭を下げましたが、みんなはすでに、ロビーのそのけんきよなせいにかくのことをりかいていました。ロビーは今まで、ずっとひとりぼっちでおりましたから、だれかにほめられたり、みとめられたりすることなどに、なれていなかったのです。みんなはいい伝えのことをぬきにしても、そんなロビーのことを、とても好きになつていました。

「ロビーどの、われらは仲間です。」ベルグエルムのとつぜんの言葉。その言葉に、ロビーは思わず、どきんとしてしまいました。

「われらには、それぞれに力があるのです。わたしとフェアリアルには剣が。ライアンにはしぜんの力をかりるわがが。そしてロビーどのには、そのやさしさと、この世界のきゆうせいしゆたる、大いなる力がある。それぞれが助けあつて、はじめて、われらは仲間としてなり立つのです。ロビーどの、あなたはもつと、ご自分を信じていいのですよ。」

ベルグエルムの言葉は、ロビーの心に大きくひびき渡りました。自分の力を知り、自分を信じ、それぞれが助けあうことで、はじめてみんな仲間となり得る。

みんなのために、ぼくはなにをすべきなんだろうか？ ロビーは考えました。

そしてロビーは、このさき、このことをずっと、心の中に持ちつづけることとなったのです。

「もう、すぐにあたりは、もつと暗くなってしまうことだろう。」ベルグエルムがいました。

「だいぶ、時間をくってしまった。夜がこくなれば、それだけ危険もます。これから、今まで以上に気をくばってゆかねば。」

それから、しばらくの時間が過ぎていきました。雨はずつとふりつづけ、風もますます、強くなつていくいっぽうです。そしていつからか、それらに加え、もうひとつのものまでもがあらわれはじめるようになっていました。いなずまです。遠くの空がぴかぴか光り、ごろごろといういなずまの音が、なんととなく、頭の上になりひびいていました。

みんなは、またいくつかの岩場や丘を通りすぎましたが、さいわいそれらの場所では、一行はなにごともなくさきへ進んでいくことができました。そこからまたしばらくゆくと、道は大きな岩にはさまれた、せまい道に変わりました。そのため一行は、いちれつになつて進んでいきましたが、ロビーはどうしても、この道が好きになれませんでし

た。岩かべの上から、だれかにのぞかれているような気がしてならなかったのです。ロビーはなんどとなく、上を見上げました。ですが、そこにはまつ黒な空があるばかりで、だれもいるはずもなかったのです。

道はなんどもおれまがつて、えんえんとつづいております。ですからこの道は、じつさいのきよりよりも、はるかに長く感じられました。そしてロビーが、早くこの道をぬけてしまいたいと、心の底から思いはじめたころ。岩かべにはさまれたこのまがりくねった古い街道は、とつぜん、その終わりをむかえることとなったのです。

それは、まったくとうとつにあらわれました。まるで、暗くてせまいトンネルの中から、急にその大平原の中へと飛び出していったかのように、あたりはいっしゅんにして、ひらけた場所へと変わったのです。

一行の目の前にあらわれたもの。それは、大きな河でした。

そう、みんなは、ベルグエルムの言葉に出てきた、そのセイレン河のほとりへとやってきたのです。

みんなはいったん立ちどまって、あたりのようすをうかがいました。ぎぶんぎぶんと、水の流れる音がきこえております。ふりしきるこの雨のせいで、河の水はだいぶ

えているようでした。

道はまっすぐ、いつぼんの巨大な石づくりの橋へとむかっています。セイレン大橋とよばれる橋でした。まず思ったことは、あたりが変に明るいうことでした。もう夜もだいぶすぎていたというのに、おひさまがまだしずみきつていないんじゃないか？というくらいに明るかったのです。そしてそのこたえは、すぐに知れました。橋が光っているのです。それはまるで、ほたるの光のように、ぼんやりとあわい光でした。そしてせいかくという、橋がというより、この橋に使われている石が光っていたのです。それは、こがね色がかつたみどり色の石で、その光が、河の流れやあたりの道を、ぼうつとてらし出していました。

右と左には、セイレン河の流れにそって、どこまでもつづくかと思われるじやりの道が、果てしなくのびていました。河の上流も下流も、そのさきはまつくらなやみの中に消えていて、いったいこの河がどこまでつづいているのか？ まったくそうぞうするのとさえできないくらいでした。

ベルグエルムが馬を進め、橋のそばまで近づいていきます。河の流れはおそろしいほどに、そのいきおいをましていました。もしこの流れにまきこまれれば、どんなにおよぎのじょうずな者であったとしても、ひとたまりもなくおぼれてしまうことでしょうか。(とくに、ロビーはおよげませんでしたので、なおのことおそろしく感じたのです)。

「これこそが、かつてのきよらかなるめぐみの河、セイレン河なのです。ところが、まさにごらんの通り。今やすっかり、その流れはけがれてしまった。ごみや、へどろや、そのほかのよれたものすべてが、この美しき流れをだいなしにしてしまったのです。」

まさしく、ベルグエルムのいう通りでした。ロビーは、こんなにもよれている河は、今までに見たことがありませんでした。水の流れというよりも、「きたならしいへどろがより集まって、それがうねりをなして進んでいる」といった方があてはまると思います。見れば、その中のあちらこちらには、さまざまなものまじって流されていました。ガラスのびんや、たるのこわれたもの。かわでできたよろいや、かぶとや、われたたてくさつたくだものや、食べ残しのパンや肉。そんなものは、まだましな方です。なかだかわけのわからない、ぶきみな色をしたかたまり。人の手の骨。そして、もとがなんであるのか？ わからないほどにくずれた、大きな生きもののなきがらが流されてきたのを見たとき、ロビーは思わず、言葉を失ってしまいました。

「だれがこんなことを……。とても、見ていられない……。これじゃ、あんまりです。」

ロビーは、ふりしほるようにつぶやきました。この河を見れば、あなたも、ほかのだけれども、ロビーと同じ気持ちをいだくことでしょう。そして、はげしい雨のふりしきる中でもわかる、この河のひどさをけつていづける、あるものが、ここにはあつたのです。それは、においでした。この河からのぼるひどいにおいが、あたりいちめん立ちこ

めていたのです。そのにおいは、まるで、へどろがくさったかのような、それはそれはひどいにおいでした（みなさんは、ひあがつたどぶ川のおいをかいだけいけんがありますでしょうか？ それに、生ごみのつまったバケツの中のおいを足してみれば、この河のにおいに近づくと思えます。それほどひどいにおいだったのです）。

「これがげんじつなんだよ、ロビー。ひどいでしょ？」目の前のことがとても信じられないといったようすのロビーに対して、ライアンが静かに声をかけました。

「この河のことには、みんなが心を痛めてる。ぼくたちシーブロンたちは、とくに。ほんの数年前までは、この河はとても美しかった。すみきつた流れを通して、川底のきれいな石が、おひさまの光をあびてきらきらかがやいてた。」

ライアンの声は、とてもさびしげでした。思わずロビーは、ライアンの顔を見ました。ライアンはじつと、セイレン河の流れを見つめていました。雨に流されてわかりませんでした。ライアンのそのひとみからは、きつと、なみだがこぼれていたことでしょう。ロビーはなにもいえませんでした。

「ぼくとメルは、よくこの河にまで、水あびにきていたよ。だからメルも、この河のことは、よく知ってる。かつてはたくさん動物たちが、この河にきていたんだ。河べりには、色とりどりの花がさいいて、たくさんのおちようもやってきていた。それがどうして、こんなことになっちゃったんだろ。」

ライアンはそういつて、メルのをやさしくなでました。メルは首をうなだれたまま、河の方を見ようとしません。変わり果ててしまったセイレン河の顔を見るのが、メルにはつらかったのでしょう。ロビーはなんとも、やるせない気持ちになりました。

ロビーにとつて、これは、このアークランド世界に広がりつつあるやみの力を、自分の目で見た、さいしょのたいけんでした。ですが、ライアンは、ベルグエルムは、フェリアルは、きつと、もうなんどもなんども、こんなたいけんをしてきたのでしょう。見たくないものを、たくさん見てきたのでしょう。ロビーは、なにも知らずにいた自分を、はずかしく思いました。

「つらいことですが、今はどうすることもできません。今のわれらにできることは、のぞみを信じて、さきへ進んでいくことだけなのです。」ベルグエルムがいました。ロビーの心をさっしての言葉でした。

ロビーは思いをかためました。早く、さきに進まなくては。いつこくも早く、こんなことは、やめさせなければならぬんだ。

「いきましよう、みなさん。」ロビーは静かにいいました。しかし、その言葉は力強く、そして、とても重たいものだったのです。みんなは、このときのロビーの顔を、ずっと忘れることはありませんでした。

それからみんなはいちれつになって、セイレン河にゆいいつかけられた石の橋、セイレン大橋のもとへと、その歩みを進めていったのです。橋は石づくりのがんじょうなもので、また、とほうもなく大きなものでした。全体が光っているせいで、その橋はまるで、はるかなやみの中へとのびる、光のかいだんのようにも見えました。橋の石だたみは、やみのむこう、ずうつとさきにまでのびております。もし橋の石が光っていなかったのなら、橋の終わりはやみにつつまれたまま、とても見通すことなどできないことでしょう。それほどに、この橋は大きいのでした（さすが、大橋というだけのことではありませんね）。

こんなに大きくてりつぱな橋を、いったいいつ、だれがつくつたのか？　じつはそれはまだ、わかっていませんでした。ですが、この橋が気も遠くなるほどの大むかしにくられたのだということだけは、たしかなことです。東の地から人々がこの地にうつり住んで、さいしよの街道がつくられたころには、もうすでにこの橋は、この河にかかっていました（それが今から二千年ほども前のことです）。そののち、ひつじの種族であるシープロンたちが、この地に王国をまとめ上げ、シープロンドというみやこをうつしみ谷の中にきざき上げたとき。この橋もかれらのくにの一部となりました。きよらかで美しいセイレン河の流れ。その流れにみごとにとけこんでいるこの美しい石の橋は、まことに、かれらのほこりそのものだったのです（ですから、シープロンであるライアン

にとつて、この河に起こつたひげきは、ことさらにつらいものだったのです。

セイレン河がけがされてしまった今。ですが今でも、この橋の美しさだけは失われていませんでした。とくに、その石にほどこざれているちようこくは、かんたんには、ほかのものとはくらべることもできないくらいに、じつにみごとなものだったのです。まるで、ほんものの木のみきかと思われるほど、木そつくりにはほられたはしらが立ちならび、そしてそれぞれのはしらには、今にもはらはらとまいちりそうなくらいによくできた、いちまいいちまいの葉つばがほりこまれていました。橋のらんかん（らんかんとは橋の手すりのことです）には、つたのつるがまきつき、さまざまな花がきそつてさきほこつております。そして、そういつたもののすべてが、こがね色がかつたふしぎなみどり色の石からほり出されてきました。

今がおひさまの光のふりそそぐ、気持ちのいいひるさがりだとしたら、この橋の美しさもつとよくわかることでしょう（河のよここれはまたべつの問題として）。ですが今は、この橋をながめるのには、いちばん悪いときであるといえました。なにしろ、ざあざあぶりの雨のふる夜なのですから。しかし今は、そんなことをいつている場合にはありませんでした。旅の者たちは、この橋の美しさにもろくすっぽ気をまわさず、まわしているよゆうもなく、ただ一点、橋のむこうがわの地をめざして、かけていかなければならなかったのです。

石の橋の上に、馬のひづめの音がひびき渡っていきます。ふりしきる雨のせいで、あたりははっきりとは見えませんでした。ロビーは橋の終わりの方を見ましたが、むこうぎしは、はるかかなたにあるかのように思えました。じつさいには、いくら大きな橋とはいえ、橋がそんなに長くつづくものではありません。ですがロビーには、この橋が、深いならくの底にまで、どこまでもつづいているかのように思えてなりませんでした。

ふりしきる雨はようしやなく、一行のことをうちつけてきます。強い風は騎馬たちをあおつて、そのまっすぐな走りをさまたげつづけていました。ごろごろといういなずまの音は、いつしか、旅の者たちのそのすぐそばにまでやってきていました。そしてそのうなり声は、まるで、せまりくるかいぶつのなき声であるかのように、この場所のすみずみにまで、おそろしげにひびき渡っていくのです。

水かさをましたセイレン河のだくりゆうが、橋げたにあたつて、ばしやんばしやんと大きな音を立てて、くだけちつていききました。らんかんのあいだを通りぬける風は、ひゆうひゆうと、すすり泣きのような音を立てていきます。ロビーにはそれらのものが、なにか、大きなひとつの生きものであるかのように感じられました。悪意を持った巨大なかいぶつが、セイレン河の水の中から、自分のことをつかまえにやってきているのではないか？ そんなふうにさえ、ロビーには感じられたのです。

ロビーは、セイレン河のだくりゆうの中を見ました。もちろん、そんなかいぶつがい

るはずありません。しかしロビーは、この場所に、なにかほかの、もつとべつの大きな危険があるような気がして、なりませんでした。

ロビーはふいに、空を見上げました。雨のつぶが、たくさんのおののずくの矢となって、自分の顔にふりかかっています。空はまっ黒でした。なにも見えるはずがありませんでした。ですがロビーには、そこに、たしかに、おかしなところがあるように感じられたのです。さきほどガイラルロックたちと戦った丘でも感じた、やみが動いているかのような、いやな感じ……。それも、ひとつだけじゃなくて、いくつか。

前にいるライアンも、さきをゆくベルグエルムも、なにも感じてはいないようでした。ロビーはうしろをふりかえりました。フェリアルルの騎馬が歩いてきていました。フェリアルルにもなにも、おかしなところはありません。ロビーはなんだか、いてもたってもいられなくなってきました。暗く不安な気持ちは、ますます広がっていくばかりです。そしてとうとう、ロビーはたえきれなくなつて、ライアンにその思いをうちあげました。「ライアンさん、なにかがくる。なにかがきます。空が、空が動いている。ここにやってくる。おそろしいです。くらやみの中からぼくにむかつて、ほのおのようにゆれる赤い光が、むかつてくるような感じですよ。目には見えないけど、たしかに感じるんです。」

ロビーはおそろしさのあまり、小さなライアンにしがみついてしまいました。ライア

ンはびっくりして、ロビーのいった空を見上げましたが、それらしいものはないも見えませんでした。

「どしたの？ ロビー。なんにも見えないよ？ なにがくるの？」

ロビーはもう、空を見ることができませんでした。マントのフードを深くかぶって、ライアンにしがみついているのが、やっとだったのです。

「わかりません。わかりません。早く、ここを渡ってしまいたい。とてもたえられない。」

ベルグエルムもフェリアルも、ロビーのいへんに気がつきました。それでふたりとも、橋のまわりや河の上流下流にいたるまで、注意深く目をこらしましたが、なんもおかしなところを見つけることはできなかつたのです。

すくなくとも、目には。

そのとき、いへんは耳に感じられました。それも、空の上の方から。

さいしよはなにか、鳥のはばたきのような音がきこえてきました。ですが、こんなざあざあぶりの雨の中を、しかも、こんな夜のやみの中を、飛びまわる鳥がいるでしょうか？ もし「夜こうせい」の鳥かなにかがいたとしても、この雨風の中をかくぐつてきこえるほどのはばたきならば、そうとうの大きさがなければならぬことになりません。人間くらい、いや、この騎馬たちくらいの大きさがなければ……。

「みんな、馬をとめるんだー」

さけんだのはベルグエルムでした。それと同時に、三頭の騎馬たちは前足立って大きいいななき、セイレン大橋のその石だたみの上に、歩みをとめたのです。そして……。ふりしきる雨の中。四人の旅の者たちは、そのやみの中にそいつを見ました。そいつは大きくゆつくりとはばたいて、橋のまん中ほどに静かにおり立ちました。

それは、これまでにだれも見たこともないような生きものでした。まつ黒なからだに、まつ黒な羽を持っております。その羽は鳥のようでもあり、こうもりのようでもありません。からだは馬のようでもあり、大きなとかげのようでもありました。長い首を持ち、そのさきについているぶかっこうな頭には、大きな赤い目と、もつと大きな口があつて、その口には、おそろしいきばがたくさんならんで生えていました。

それはまるで、悪夢そのものが、あらしの空からまいおりてきたかのようにでした。しかも、その生きものは、いっぴきだけではなかつたのです。一行のゆく手をふさぐようにおり立ったさいいしょのかいぶつにつづいて、二ひき目のかいぶつが、こんどは、一行のはいごをふさぐようにおり立ってきました。そしてさらにもういっぴき。そいつが、さいいしょのかいぶつとなりにおり立ったのです。

今や旅の者たちは、三びきのこの悪夢のようなかいぶつたちに、すっかり取りかこまれてしまいました！ 橋の上では、まったく逃げ道はありません。どうしたって、戦つ

て切りぬけるほかはなかったのです（相手が敵でないのであればべつですが、どう見てもそうは見えませんが）。

四人はみな、あわてふためいて、かいぶつたちのことを見渡しました。ベルグエルムもフェリアルも、すでに腰の剣をぬき放っていました（剣のおれてしまったフェリアルは、「よび」としてしまつてあつたみじかい剣をぬきました）。ライアンも、よらぼうたんと、しぜんの力をかりるそのわざを使うじゅんびをしております（どんなわざを使うのかは、まだわかりませんでした）。そしてロビーも、もういちどもとの勇気をふるい起こして、スネイルにもらつたそのおくりものの剣に手をかけて、いつでもそれをぬけるようにと、身がまえしました（剣で戦つたことなんて、いちどもありませんでしたけど）。

かいぶつたちが、ゆっくりとすこしずつ、一行の方へ近づいてきます。そしてよく見れば、それは、そのかいぶつたちだけではありませんでした。まるで、馬にまたがる騎士たちのように、かいぶつたちの背中には、かいぶつたちと同じくらいにまつ黒なすがたをした、人間たちが乗っていたのです。それぞれのかいぶつたちの背中に、ひとりずつ。

かれらは、まつ黒なよろいを着て、まつ黒なかぶとをかぶり、まつ黒なマントをはおつていました。ですから、旅の者たちはさいしよ、かれらがこのやみの中からあらわれた、悪霊かなにかなのではないか？ とさえ思つたのです。それほどに、かれらのすがたは

おそろしいものでした。ですが、たしかにかれらは、生身のからだを持った人間たちだったのです（かといって、かれらが悪霊よりおそろしくはないとはいいきれませんでした）。

かいつつたちに乗ったこの黒の騎士たちは、旅の者たちのそばまでやってくると、そこでいつせいに、腰の剣をぬき放ちました（かれらが敵であるということはこれできまりでした）。そして、かれらのうちのひとりが、旅の者たちにむかって、大声でこうよばわつたのです。

「しよくん！ ざんねんながら、しよくんらの旅もここでついでなこととなろう。なぜなら、このセイレン大橋の上が、しよくんらのふみしめる、さいごの場所となるのだから。すくなくとも、生きてはな！」

黒騎士はそこで、ぶきみな笑い声を上げました。

「われら、ワットのディルバグ黒騎士隊が、じきじきに、しよくんらをほうむり去ってくれよう。あとはたつぷりと、あの世での旅をつづけるがいい。」

まことに、一行の前に立ちふさがったこの黒の騎士たちは、かの悪名高き、ワット国の者たちであったのです！ かれらは、かなしみの森から出てきた旅の者たちのことを、空の上から見つけると、そのあとをずっと、つけねらってきました。そして、逃げ場のないこのセイレン大橋の上まで、一行がたどりつくのを見はからってから、つい

に、そのすがたをあらわしたというわけだったので（さきほどのガイラルロックたちとの戦いのときも、かれらは遠くから、高見のけんぶつをしていたのです。なんていやらしいれんちゆうなんでしょう！）。

黒騎士のひとり、ふたたび大声を張り上げていました。

「はい色ウルフアどもが、こんな北の地でなにをしていた？ こたえろ！」

しかしもちろん、こんなといかけに、われらが仲間たちが応じるはずがありません。ベルグエルムは、その手にぎったせいぎの剣を、その黒騎士につきつけていました。

「こたえるぎりはなし！ われらはせいぎ。おまえたちは悪だ！ 悪がさかえることなど、いつの世にもあり得ぬ！ そうそうに立ち去るがいい！」

これをきいて、黒騎士たちはみんなそろって大笑いしました（ほんとうにいやなれんちゆうです）。

「まあいい。おまえたちがなに者であろうと、知ったことではない。だれであろうと、われらが主君、アルファズレドへいかにはむかう者は、われらデイルバグ黒騎士隊が、うち果たしてやるのみだ。ペーカーランドの負け犬どもめ！ かくごするがいい！」

その言葉が、戦いのあいずとなりました。黒騎士たちは、いつせいにふわつと空にまいたがると、ベルグエルムとフェリアル騎馬たちにむかつて、まつしぐらにむかつてきたのです。かれらの乗るデイルバグとよばれるかいぶつが、その大きな口をいっぱい

にひらいて、ぎゃあぎゃあというきみの悪いさけび声を上げました。そのおそろしいことといったら！ どんなにきものすわった者であったとしても、腰をぬかしてしまいうななくらいです。ですが、ここにいるのは、ただの者たちではありません。ペーカーランドの白の騎兵師団の長をつとめる、ベルグエルム・メルサル。そして、そのもつともしんらいのおける友、フェリアル・ムーブランドの、両名なのですから。

「われら、アルマーク王あずかり、白の騎兵師団！ 祖国レドンホルの名にかけて、悪しきやみをうちはらわん！ メルサルの力、思い知るがよい！」

ベルグエルムが大声でさけびました。そして、むかつてくるかいぶつのしゅうげきをひらりとかわし、つづく黒騎士の剣を、その自身の剣で受けとめたのです。あらしの夜に、はげしいきんぞく音がひびき渡りました。そしてはんたいがわでは、同じくフェリアルが、みじかい剣ではありながらも、じつにみごとな戦いぶりをくり広げていたのです。

「いやしきワツトのしんりやく者どもめ！ おまえたちのよこしまなる剣などに、ムーブランドの血はけがされぬ！」

フェリアルもなんとなく、せまりくるかいぶつの前足をかわし、するどいきばをかわし、悪意にみちた黒騎士の剣をふりはらいました。

まことに、この兩名の勇士たちの戦いぶりは、すさまじいほどのものでした。そのあ

まりのいきおいには、さすがの黒騎士たちもおじけづき、ひるみを見せたのです。かれらの乗るデイルバグというかいぶつたちも、などとなく切りつけられました。このかいぶつはひじょうに生命力が高く、あまりこたえてはいないようでした。そしてじつさい、いちばんやつかいなのは、このデイルバグたちだったのです。

剣と剣の戦いだけであるのなら、ベルグエルムとフェリアルのもうでまえには、ワットの黒騎士たちも、とうていかなわなないことでしょう。それほどに、このふたりの勇士たちは、剣のたつじんたちであつたのです。ですが、かれらが黒騎士たちにうちかかろうとする、そのすんでのところで、このデイルバグというかいぶつがじやまをして、ちゆう高くまい逃げてしまいました。そして黒騎士たちも、まっこうからの勝負に出てはかなわないと知ると、これまたずるがしこく、きよりを取りつつ、相手をつかれさせるといふ作戦に出たのです。

これには、さすがのベルグエルムとフェリアルの両名も、くるしめられました。敵は空から、などとなく、すきをうかがつてうちかかつてきます。これに対するには頭上を見上げながら戦わねばならず、さらにはふりしきる雨が、そのしきいをさえぎつてじやまをしました。

「このワットのひきよう者どもめ！　せいせいどうどうとかかつてくるがよい！」
たえかねて、フェリアルがさげびました。しかし、黒騎士たちは大声であざ笑うばか

りです。

「これは心外。みずからの持つゆうりなじょうけんを、さいだいげんにいかして戦うことこそ、いくさのならわしではないのかね？ われらに急ぐりゆうはない。おまえたちをほうむり去れば、それでいいのだからな。」

かれらは、手出しのできない者たちをじわじわ痛めつけるのが、好きでした。なんてひれつな！ しかし今は、まさに、れんちゆうの思うつぼだったのです。手出しもできず、逃げられもせず。旅の者たちはまるで、かごとじこめられて出られない、小鳥のようでした。

そのとき！ ライアンがこんしんの力をこめて、しぜんの力のエネルギーを黒騎士たちにむかってぶつけました！ そのエネルギーは、ぐいんぐいんとうずをまいてのぼっていつて……、ぼしゅーん！ 黒騎士たちの乗るデイルバグのかいぶつのからだにあたって、くだけちります！ ですが……。

デイルバグはまったくこたえていません。からだがすこしよろけたばかりで、ほとんでききめがなかったようでした（黒騎士は「ふん！」と鼻をならして相手にしません）。ですがそれは、ライアンが弱いからというわけではありませんでした。ライアンのわざは、あやつろうとしてしているしぜんの力が、その場所の力の大部分をしめている場合に、そのいちばんの力をはつきするというものだったのです。さらにいえば、あやつろうと

する力ではない、べつのしぜんの力が、その場所の力の大部分をしめている場合、あやつった力はその大部分のほかのエネルギーに消されてしまつて、ものすごく弱い力になつてしまうというものでした（ちよつと、ややこしいんですけど……）。

そして、この場所にあるあつとつう的なまでに「大部分」の力。それは雨、つまり、水の力だったのです。

ライアンは、バリアーを張るなどの水の力による「ぼうぎよの力」なら使うことができましたが、それをこうげきのためにあやつるということはできませんでした（いくらライアンでも、なんでもできるスーパーマンというわけではありませんでしたから）。風ならば、あやつつてこうげきに使うことができましたが、さきほど説明いたしました通り、これほどたくさんの雨がふつているところでは、いくら風の力が強かつたとしても、あつというまに大部分の雨の力にその力がかき消されてしまつて、その半分もいりよくが出せなかつたのです。

ですから、ライアンの放つた風のうずのこうげきは、デイルバグのからだにとどく前に、すっかり弱まつてしまつて、かいぶつにダメージを与えることができませんでした（はじめから半分以下の力でしたが、デイルバグのもとへとどくまでに、その力はさらに弱いものとなつてしまいました。なんと、もとの力の百ぶんの一くらいにまで弱まつてしまつていたのです！ ライアンははじめから、そのことをよくわかつていました。

ですけど、なにもしないよりはましだと思つて、だめもとで、この力を使ったのです。ライアンのくやしきは大きかったことでしょう。

フェリアルは、剣をぎりぎりにとぎりしめてくやしがりしました。ベルグエルムも歯をくいしばつて、頭上の敵たちをにらみつけることしかできませんでした。

そして、そんなかれらに見切りをつけたかのように、黒騎士たちは、こんどは、ライアンとロビーの騎馬の方にねらいをつけてきたのです。

黒騎士のひとりが、ライアンとロビーの方に近よつてきました。その黒騎士は、この三人の黒騎士たちの中でも、いちばんいかめしいよろいを着ていて、いちばんおそろしげなかぶとをかぶっていました。その手には、黒いやいばを赤でふち取つた、なんともおそろしげな見た目の剣をにぎっております。どうやらこの男が、この黒騎士たちの隊長であるかのようにでした。そしてその男が、ライアンとロビーの頭上から、ふたりにいったのです。

「おかしなお客がいるとは思っていたが。なぜ黒ウルファが、こんなところにいる？ 黒のウルファはひとり残らず、わが軍のしはいを受けているはずだぞ。もちろん、おまえたちのあるじ、ムンドベルクもな。同めいなどといえばきこえはいいが、しよせん、かれらはすべて、ワットのしもべにすぎん。ムンドベルクなど、アルファズレドへいのかあやつり人形もどうぜんの、あわれな男よ。」

これをきいて、われらが仲間たちはげきどしました。

「へいかをぶじよくする者はゆるさぬ！ われらはかならずや、へいかを悪のじゆばくからとき放つ！ そうなれば、きさまたちなど、われらせいぎの敵ではないぞ！」

ベルグエルムがさげびましたが、黒騎士の隊長はひるむそぶりも見せず、ますますいきおいづいて、旅の者たちにあくたいをつくばかりだったので。

「せいぜいほえることだ。おまえたちがいくらあがこうとも、もうどうすることもできまい。おまえたちのむかうべき道はただひとつ。ほろびの道のみよ！」

そういうと、黒騎士はライアンの騎馬にむかつてつき進んできました！

「ベーカーランドにかたんするとはふとどきなやつめ！ まずはおまえから、ほうむり去ってくれよう！」

黒騎士は、黒のウルファであるロビーのことをねらってきたのです！ ロビーに、かつだんのとかがやってきました。ベルグエルムもフェアアルも、助けにくるのにはまにあわないきよりにおりました（ほかのふたりの黒騎士たちが、助けにいかせまいと、ずるがしこくそのじやまをしてきたからでした）。ライアンも、このじょうきようでは、そのほんらいの力をはつきできないままです（この雨さえふつていなければ！）。

しかし、いつまでもかれらにたよりつばなしでいるわけにはいきません。このままでは、前にいるライアンまでをも、まきぞえにしてしまうのです。

ライアンもメルも、これ以上きずつけさせるわけにはいかない！
ぼくが、守らなくては！

ロビーはけつだんしました。そして白馬の上から、セイレン大橋のそのかがやく石だたみの上へと飛びおけると、ロビーは、せまりくる黒騎士にむかって走ったのです。

「ぼくはここだ！ おまえなんかに負けるもんか！」

そして、黒騎士とかいぶつがせまりくる、まさにそのとき。ロビーは、腰におびたその剣をぬき放ちました。

すると、どうしたことでしょう！ 剣からなんともまばゆい光が飛び出して、いつしゆんのうちに、あたりいちめんを青白くてらし上げてしまったではありませんか！

黒い空も、橋も、河の流れも。木々も、岩も、はるかむこうのやみまでも。すべての色が、青と白のかがやきにつつまこまれていつてしまいました。そのまん中。ロビーのいる場所などは、もう、目をむけることもできないくらいのもぶしさです。そこにいるぜんいんが、なにが起こっているのか？ 見きわめようと努力しましたが、すべてはあつというまのできごとで、正しくりかいのできた者はだれもいませんでした。

ロビーが剣をさやからぬいた、そのしゆんかん。あふれる光とともに、もうひとつの

ものが、その剣のさきから飛び出したのです。それは、えものにむかっておそいかかる、もうじゆうのごとくのいきおいで飛び出した、青白い光のいかずちでした。そしてそれは、まさしくでんこうせつかのはやさで、せまりくるデイルバグのかいぶつのからだを、まっすぐにつらぬいたのです。

デイルバグは、あつというまに、青白いほのおにつつまれたかたまりとなつて、セイレン河へむかつて落ちていきました。そして、その背に乗っていた黒騎士の隊長も、全身を青白いほのおにやかれ、さいごのひめいをわめきながら、まっさかさまに、セイレン河のそのだくりゆうの中へと落ちこんでいったのです。

これを見て、残ったふたりの黒騎士たちは、大こんらんとりました。なにが起こつたのか？ それすらもわからないまま、あわてふためいて、ほうがくもさだめることもできず、ほうぼうのやみの中へと、いのちから逃げて出していったのです。

夜のあらしはいぜんとして、はげしくつづいていました。空にいなずまが走るたびに、逃げてゆくデイルバグのすがたがやみの中に浮かび上がりましたが、やがてそれも、見えなくなっていきました。

ロビーはわけもわからないまま、ただぼうぜんと、ふりしきる雨の中に立ちつくしていました。あたりはすっかり、もとのようすにもどっておりません。ロビーの手には、剣

がにぎられたままでした。そのやいばは、まだかすかに、青白い光をやどしていました。ベルグエルムとフェリアルが、ロビーのもとにかけよってきます。ライアンもやってきて、三人は急いで馬の上からおり立つと、ロビーのそばにかけよりました。

「ロビーどの！ ぐぶじか！」ベルグエルムがまつさきに声をかけました。しかしロビーは、なにがなんだか？ わからないといったふうはその場に立ちつくしているだけで、仲間たちがやってきたことにすら、まったく気がついていないようすだったのです。

「ロビーどの！」

ふたたびよばれるベルグエルムの声。ロビーはそこでようやく、はつとわれにかえり、仲間たちの方にむきなおりましたが、その顔はおそろしきでいっぱいになっていて、からだはがたがたとふるえていました。

ロビーはふりしほるように、おそろおそろ口をひらきました。

「なにが……、なにが起きたのか？ わかりません……。ぼくは、あの黒騎士とさしちがえるくらいのかくごで、この剣をぬきました。みんなを守るのなら、たとえいちげきでも、むくいてやろうと思った。だけど、まさか、こんなことになるなんて……」

ロビーは、自分の手ににぎられている剣のこを見つめました。剣の光は、もうほとんど消えかかっていました。

「この剣は、いったいどんなものなんでしょうか？ こんなものは、とてもぼくにはあ

つかえない。どこかへやってしまいたい。」

ロビーはそういうと、ふるえる手で、剣をゆつくりとしんちように、もとのさやの中へとおさめました。しかし、剣をもどしてしまっても、ロビーの気持ちまではもどりません。自分がひき起こしたことが、まだ信じられないといったようでした。

そんなロビーに、ベルグエルムがいました。

「その剣にどんな力がひめられているのか？ それはわたしにもわかりませんが、これだけはいえます。その剣は、あなたを助けるためにたくされたものだという事です。それは、あなたが持つていなくては。げんにこうして、その剣は、われらのことを助けてくれたではありませんか。その剣をおくつてくれたスネイルどこのことをお考えください。どうしてその剣が、じゃあくなものでありましょう。」

ロビーはスネイルのことを思い出しました。やさしくて、どこまでも人のいい、えんげい好きの、あのスネイル・ミンドマンです。この剣は、そのかれが、なん年もたいせつに守つてくれていたものでした。それが、自分や仲間たちに害を与えるようなものであるとは、ロビーにはやっぱり思えませんでした。この剣は、ぼくたちのことを守つてくれるものなんだ。ロビーはここで、あらためてそう思ったのです。

「ありがとうベルグエルムさん。あなたのいう通りです。」ロビーはそういって、ペコりと頭を下げました。しかしそうはいつでも、ロビーの気持ちは、まだかんぜんには晴

れたわけではなかったのです。こんなできごとのあとですもの、いきなりげんきを出せといつても、むりな話というものでした。

そんなロビーのことを、仲間たちはせいじっぱいの気持ちで、はげましてくれました。

「ロビーどの。ロビーどのの勇氣、このフェリアル、しかと見とだけさせていただきました。まこと、あなたのゆうかんさは、われら白の騎兵師団にも、まったくおとるものではありません。」フェリアルはそういつて、ウルファのあつき敬礼をロビーにおくりました。

「あんなすごいわざを持つてるなんて、ずるいよ！ ぼくの出番まで取つちやうなんて。ぼくにもあとで、やり方教えてよね。」ライアンがそういつて、ロビーのわきばらをつつつきました（これはライアンが、だれかをげんきづけようとするときによくやることでした。ライアンは、むじやきな子どものようにふるまいますが、おちこんでいる仲間に対しては、いつにもまして、心をくばってくれるのです。もつとも、わきばらをつつかれるのは、あまりかんげいできませんでしたが……）。

「隊長、かれらのことが気がかりです。」フェリアルが、こんどはベルグエルムの方にむきなおつていいました。「われらの旅のもくてきに、かれらは気づいていたのでしようか？」

もつかのところ、敵、つまりワットの黒の軍勢の者たちに、自分たちの旅のもくてきと、いい伝えのきゆうせいしゆたるロビーのそんざいが知られてしまうことは、もつともさけなければならぬことでした。フェリアルは、そのことを心配していたのです。ベルグエルムはしばらく、黒騎士たちが去っていったかなたの空の方をながめながら考えこんでいましたが、やがてゆつくりと口をひらきました。

「いや、かれらのようすを見たかぎり、それはないだろう。かれらはたんなる、ワットのでいさつ隊にすぎない。今やこのアークランドには、いたるところにかれらのようなていさつ隊がいて、人々の動きをさぐっているのだ。もつとも、こんな北のはずれの地にまで、かれらがいるとは思っていなかったが。

「しかし……」ベルグエルムは、そこでいったん言葉を切つて、ロビーの方を見つめました（ライアンがまだしつこく、ロビーのわきばらをつつついておりましたが）。

「逃げていったあのふたり。かれらを逃がしたのは、われらにとつて大きな痛手となつてしまった。ロビーどののことが、敵に知られてしまったのだ。ずるがしこいかれらのことだ、黒のウルファがこの地にいたことを、あやしむことだろう。もしかしたら、レドンホールのおかしい伝えにまで、たどりつくかもしれない。そうなれば、けつかとして同じことになる。もし、ロビーどのが正しい伝えのきゆうせいしゆであると、知られてしまったのなら、敵はひつしになつて、われらのことをさがしにかかることだろう。

そうなれば、われらはますます、ぐずぐずしてはいられなくなる。もつとも、そこまで考えるのは、いささか、考えすぎであるのかもしれないが。そうだと願うばかりだ。」

北の地にいた、黒のウルファであるロビー。そのロビーのことが、レドンホールに伝わる古きい伝えのきゆうせいしゆであるのだと、敵に知られてしまったのではないか？　これが、こんなひじょうじたいのときでなかつたとしたら、ベルグエルのその心配も、ただの考えすぎであるといえるのですが、いかんせん、相手はあの、ずるがしこくてひきようなワットの者たちなのです。とくに、「そうだいしよう」であるアルファズレドのおそろしさといったら、なみたいていのものではありません。そしてもちろん、その影にひそむ、魔法使いのそんざいも。ですから、ベルグエルムが心配しすぎるのも、むりもないことでした（それに、いい伝えのことはぬきにしても、自分たちにはむかつたふとどき者たちのことを、かれらがこのまま、放っておくはずもありません）。南の地をめざす旅の者たちにとって、ここでワットの者たちに出会ってしまったことは、それほどまでに、やっかいなことだったのです。

ベルグエルムは話しを終えると、ロビーの方をもういちど見やりました。ロビーはじつと、雨の中に立ちつくしているままでした（そして、つつつかれているままでした）。「ロビーどの、だいじょうぶですか？」ベルグエルムが心配になって、もういちど声をかけました。ロビーはうつむいたまま、腰の剣のことをにぎりしめております。剣は

まったく、重さも長さも、なにひとつ変わってはいませんでした。そしてロビーは、ベルグエルムにというよりも、まるで自分自身にいつているかのように、静かに口をひらいたのです。

「この剣は、これからはけっして、あんいにもちいることはしません。みんなを助けるために、ほんとうに必要なになったときにだけ、ぼくはこの剣を使うようにします。この剣は、ぼくのことを助けてくれる。でも、けっして、かるがるしくあつかってはいけないものなんだ。」

ひとだんらくがついてみると、旅の者たちは急に、げんじつの中にひきもどされてしまいました。あたりはいぜんとして、ざあざあぶりの雨。いなずまのなりひびく夜のあらしの、そのただ中であることに、変わりはありませんでしたから。

そのうえ、メルをふくめる三頭の騎馬たちは、さきほどの戦いのショックで、とてもおちつきを取りもどせるようなじょうたいではなくなってしまうていました（とくにメルは、とりわけこうふんしてしまっていて、ライアンがいくらなだめてもおとなしくありませんでした）。さきを急ぐ旅であるということとは、みんなじゆうぶんにしようちしていました。しかし、安全をあまりにおろそかにしてしまつては、旅をつづけるどころの話ではありません。そのことをよくわかつていたのは、旅のけいけんほうふな騎士、

ベルグエルムと、このあたりの土地のことにくわしい、シープロンドの王子、ライアンでした。

「ねえ、このあらしでは、このさきの道はとても危険だよ。このさきはがけの道だし、あらしがすぎるまで、どこかで雨やどりをしていた方がいいと思う。」ライアンがベルグエルムにいいました。

ベルグエルムは橋のむこうぎしをながめながら、しばらく考えこんでいましたが、やがて、みんなのこのを見渡していいました。

「ライアンのいう通りだ。やむを得ないが、今は進むべきときではないだろう。」
そしてベルグエルムは、それからまた、あたりのようすをうかがっていましたが、やがて考えがまとまったようで、みんなにつきぎのようないあんをしたのです。

「この橋の下には、広いかせんじきがある。そこへ身をかくして、休むのがいいだろう。あらしからも身を守るし、空からでも見つかることもない。さっきの黒騎士たちなら、だいじょうぶ。しばらくは、もどつてくることもないだろうから。どっちにせよ、今日はもう、さきに進むのはやめておいた方がいい。この雨でぬかるんだがけの道を夜にいくのは、危険が大きすぎる。橋の下で朝を待ち、日の出とともに、シープロンドへとむかうべきだろう。」

そしてみんなは、ベルグエルムのこのていあんにさんせいしました（このさい、この

ひどいにおいはがまんするしかありませんでした。それから、三頭の騎馬たちと四人の旅の者たちは、セイレン大橋のむこうぎしへと渡り、そこから、橋の下その広いかせんじきの中へと、ひそかにおり立ってゆくこととなったのです。

空がびかびか光って、いなくすが大きな音とともに、どこかに落ちたときのことでした。

4、あらしの夜の出会い

その夜、アークランドの北の地は、はげしい雷雨に見まわれていました。もう夜のやみも、すっかりこくなくなってしまったところのことです。さいしよしとすとふり出した雨が、しだいにそのいきおいをまして、そのころにはもう、いなずまをともなつたざあざあぶりの雨へと、変わってしまっていました。それはまさしく、あらしでした。そのときのあらしのことをおぼえている数すくない住人たちのうちのなんんか、わたしはいぜん、話をきくことができましたが、かれらはみな、いちように口をそろえて、同じようなことをいったものです。

「あんなあらしは見たことなかったね。おれはもう、なん十年とこの土地に住んでいるけど、あんなのははじめてだよ。どしやぶりの雨に、おそろしいかみなり。あのきせつにあんなあらしもめずらしいんだが、それだけじゃあない。あれは、ただのあらしじゃあなかった。うまく口では説明できないんだが、おれはこう思ったんだ。あれはだれかが、よからぬもくてきのためにひき起こした、よくないあらしなんだつて。」かれはそこで、ぶるつとからだをふるわせるしぐさをしてみせました。

「そして、おれは見たんだ。そのあらしのただ中を、おそろしいばけものが飛びまわつ

ていたのを。つばさを持った、ばかでかいやつらだ。なんびきいたのかまではわからなかったけど、いなくすまの光が空をてらすたび、そいつらのすがたがやみにうつった。もう、おそろしいと思ったらなかつたよ。そいつらは、しだいに空のあなたのかなたのやみの中へと消えていったんだが、ことはそれで、おしまいじゃあなかつた。

「光だ。あらしの夜のまつくらな空を、ふかしぎな光がつつみこんだんだ。いなくすまの光じゃあない。もつとしんぴ的で、ふしぎな光だ。青白くて、力にあふれてて……。それから、おそろしいかいぶつのさけび声。どこからひびいてくるとも知れない、おそろしいさけび声だった。たぶん、ほうこうからいって、セイレン河のあたりだったんじゃないかな？ それとももつと、さきの方だったかもしれない。今となっては、もうはつきりしないね。」

そこまで話すと、かれはわたしにほほ笑みかけて、さいごにこういったものです。

「もつとも、そんなことはおれにはかんけいないし、知りたいとも思わないけどね。悪いれんちゆうは、みんなどこかへいつちまつたんだから。今は、なにごともないおだやかなこの暮らしに、とてもまんぞくしているよ。」

かれはそういって、口にくわえたパイプを大きくふかすと、わたしにお茶のおかわりをそそいでくれました。

旅の者たちは、そのあらしのただ中にいました。そして今、一行は、セイレン河にゆいいつかかる石の橋であります、セイレン大橋のたとへと、ひそかにおりていくところだったので。そんなかれらを背中から見送るものは、おっかないいなびかりと、それにつづきいわずまの音ばかりでした（どちらもあるで、かんげいできない相手ですけど）。

橋の下につづく小道は雨がどんどん流れこんで、まるで川のようにでした。しかも、道はばはせまく、急で、馬をつれてる一行にとつて、おりるのはひとくろうだったので。そのうえようやくおり立ってみますと、橋の下ではセイレン河のそのひどいにおいが、輪をかいてひどく感じられました（これにはみんなうんざりしてしまつて、けつきよくライアンが、みんなの鼻と馬たちの鼻に、空気でこしらえたまくをかぶせてくれました。全身をおおうバリアーとちがつて、このくらいだったら、つかれているライアンにも新たに作り出すことができたのです。すでに、メル之首とベルグエルムの肩にも、このまくを作つておりましたので、ライアンのふたんはけっこう大きかつたんですけど。でも、こんなひどいにおいのところにそのままずつといふのは、もつとふたんが大きかつたですから）。

旅の者たちは、ぜんいんすでに、へとへとにつかれきつていました。それもそのはずです。とちゆうの岩場で、ガイラルロックたちとのたいへんな戦いを、やつとのことで

くぐりぬけてきたばかりだというのに、そこへ加えて、おそろしいかいぶつたちに乗ったワツトの黒騎士たちの、しゅうげきを受けたのですから。こんなことは、めつたに起り得ることではありません。いくらかれらが、つわものぞろいの勇士たちであったとしても、こんかいばかりはみんな、へとへとにつかれきってしまったのも、むりもないことだったのです（とくにロビーは、はじめての旅に出たばかりで、こんな目にあつたのです。みなさんが同じ目にあつたとしたら、やつぱりロビーと同じく、へとへとな気持ちになつてしまうと思えますよ）。もう旅の者たちはみんな、すぐにでもあたたかいもうふにくるまつて、眠りたい気分でした。

橋の下にはベルグエルムのいう通り、一行が休むのにじゅうぶんなだけの広さがありました。そこで四人はまず、たおれている石のはしらを見つけますと、それぞれの騎馬たちをそこにロープでつないで、急ぎ、野宿のじゅんびに取りかかったのです。大きな石のはしらが、うまいぐあいに、このあらしの風をかなり防いでくれました（けがをしているメルは、いちばん風のあたらないいちばんいい場所につながれておりますので、安心してください。ライオンがにんじんをいっぽん、自分のかばんから取り出して、メルにあげました。ほかの騎馬たちにもいっぽんずつ）。しかし、それでもなお、橋のあいだを吹きぬけていく風は、おそろしいうなり声を上げて、みんなの心をいたずらにおびやかしていくばかりだったのです。

そしてみんなが、たき火のじゅんびをし、ぬれた服をしぼり、にもつのかくにんやら、耳やしつぽの手いれやらに、いそしんでいたときのこと。ロビーがふいに、なにかを見つけたのです。それは、橋げたの影になって、こちらがわからずでは、さいしよは見えませんでした。ですが、あるものがそこに生まれたおかげで、はじめてみんなは、そのそんざいに気づくことができましたのです。

それは小さなあかりでした。ランプのあかりのようなのです。橋げたのその影によりそうようにして、いつけんいつけんの小さな木の小屋がたっていました。それは風でがたがたとゆれ、今にもくずれてしまいそうなくらいにぼろぼろの小屋でしたが、今の旅の者たちにとつては、願つてもないほどにありがたい、かいてきそうな寢床に見えました（おながすすきすぎているところに、チョコレートのはこを見つけたときみたいに）。そしてたしかに、その小屋の中から、あかりの光がもれていたのです。

かいぎをひらくまでもありませんでした。みんなはもう、「まんじょういっち」で、その小屋をたずねることにさんせいしたのです。もしかしたら、とつてもこわい人が中にいるのかもしれないという心配はありましたが、そんなことにかまっているよゆうもありません。それに、相手がどんな者であったとしたつて、あんなにおそろしいワツトの黒騎士たちよりかは、ましなはずです（たとえ、もつとこわいのがいたとしても、みんなはそこへいったでしょう。かれらの頭はもう、あたたかい寢床のことです）。

したから)。みんなはつかれ果てておりましたが、それでも用心だけは忘れないようにして、その小屋にゆっくりと近づいていきました。

小屋の前までやってきますと、かれらは入り口のとびらのわきに、木の板をぶつきらぼうに張りつけただけのひょうさつがかかっているのを、見つけました。どうやらここは、だれかの家のようです。そしてそのひょうさつには、ナイフでらんぼうにけずってきざんだ文字で、こう書いてありました。

「ただのカピバラの家」

みなさんは、カピバラという動物をごぞんじでしょうか？ 河のほとりのひらけた草原などにむれをなして住んでいる、草食動物のことです。ぼーっとした顔をしていて、どこを見ているのか？ わからないような切れ長の目を持っていて、とてもおよぎがじょうずですが、水の中で暮らしているわけではありません。そんな動物です。そしてもちろん、このおとぎのくにアークランド世界のカピバラ種族の者たちは、みなさんの知っているカピバラたちとは、ちがっていました（見た目はだいぶ、にているところが多いのですが）。

アークランド世界のカピバラたちは、手さきがとつてもきようなことで、知られてい

たのです。こまかいさいくものや、そうしよく品などを作るぎじゅつは、このアークランド世界の中でもぴかいちといわれるほどのものでした。それだけでもすごいのですが、じつはかれらは、それよりもっとすごいわざを持っていたのです。それは、家やたてものをつくる、けんちくのぎじゅつでした。じつさい、このアークランドにたっているたてもののはほとんどすべてに、かれらのぎじゅつが使われているほどだったのです。

ですが、そんなにすごいわざを持っているかれら自身のことは、あんまり、いえ、じつはほとんど、知られていませんでした。それはなぜか？ といいますと、かれらはあんまり、よその種族の者たちとつきあうのが、好きではなかったからなのです。かれらは仲間をとつてもだいいじにするのですが（なにしろ、よその家の赤ちゃんであっても、わけへだてなく子育てしてしまうくらいなのです。それほど、仲間いしきが強いのです）、そこからはいつてくる人やものを、好ましく思いませんでした。ですから、アークランドの住人たちはみな、カピバラ種族の者たちのことは、名まえだけはよく知っているものの、どこでどんなせいかつを送っているのか？ じつさいには、ほとんど知らなかったのです（そのため、カピバラというのは、とつてもがんで、へんくつのわからずやで、近づこうとすれば石を投げつけてくるなんていう、あらぬうわささえ流れているくらいだったのです）。

さて、旅の者たちが目にしたそのひょうさつには、そんなさまじまなことを思い起こさせる、カピバラという文字がぎざまれていました。どうやら、そのカピバラ種族の者たちのうちのだれかが、この小屋には住んでいるようなのです。

旅の者たちは、ここでいったん集まって、話しあいました。ただ今わたしがみなさんに説明いたしました、カピバラ種族の者たちのことを、かれらはいつたい、どのくらいまで知っているのでしょうか？　かれらの言葉に耳をかたむけてみましょう。

「カピバルたちのことについては、わたしも耳にしたことがある。」ベルグエルムがいました。カピバルというのは、カピバラ種族の者たちのことをあらわすよび名です。ロビーたちおおかみ種族の者たちのことをウルファ、ライアンたちひつじの種族の者たちのことをシープロンとよぶように。

「かれらは、たてものをつくるぎじゅつにひじょうにたけているときく。じっさい、いくつかのくにでは、かれらの手によつて城がぎざかれたともきいている。それがほんとうなのかどうかはわからないが。しかし、かれら自身のことについては、うわさできく以上のことはわたしも知らない。かれらが、はるか遠い東のくからこのアーケランドにうつり住んできたとか、ほかの種族の者たちのことを毛ぎらいしているとかいううわさもあるが、それもどこまで、ほんとうのことなのかどうか。」

どうやら、旅の仲間たちの中でもとくにもの知りである、ベルグエルムをもつてして

も、カピバルたちのことについてわかるのはこのくらいのものでした。では、ほかの仲間たちはどうでしょう？

「カピバルたちのことについては、わたしもほとんど知りません。たてものをつくるぎじゅつにすぐれているようですが、はたしてほんとうにそうなのでしょうか……？」これはフェリアルでした。フェリアルはそういつて、目の前の小屋のことを見たのです。なるほど、こんなにもみすばらしいぼろぼろの小屋を見れば、「たてものをつくるぎじゅつがすぐれている」というひょうかを、うたがいたくもなるはずです。

フェリアルがつづけます。

「でも今は、かれらのぎじゅつがどうかとか、カピバルというのがどんな者たちであるのかなどということよりも、この小屋に住んでいる者にかぎつての話をすべきです。つまり、この小屋に住んでいるだろうカピバラ種族の者が、われらに寝床をていきようしてくれるものかどうか？ そっちの方が問題です。」

これはまったく、げんざいの一行のじょうきようについて、じつにまとをいた言葉でした。ですから、仲間のひとりであり、かれのいちばんの友人でもあるベルグエルムも、フェリアルの肩に手をおいて、こういうばかりだったのです。

「まったくきみのいう通りだ。わたしも早く、だんろの火にあたりたくてしかたがないよ。」

あれこれ話しあってみてもむだなことでした。もうこのさい、かんげいをきたいするのはやめにしなければなりません。中にいるのがどんな者であれ、すなおにお願いして、とめてもらわないと。それでみんなは心をきめて、小屋のとびらをノックすることにしたのです。それは、さいごにロビーのいった言葉に、だいぶ勇気づけられてのことでもありました。

「ぼくは、このカピバラの人はいい人だと思う。カピバラ種族の人たちのことはぜんぜん知らないけれど、すくなくとも、この小屋に住んでいる人はいい人です。ぼくは、ずっとひとりですごしてきたから、気持ちがよくわかるんです。こんなさびしい場所に住んでいるのも、なにかのじじょうがあつてのことだと思う。それに、このひょうさつにはこう書いてあります。ただのカピバラつて。ただのだなんてひょうさつに書くくらいなんだから、悪い人だとは思えません。とてもけんきよで、さみしい気持ちがあるからこそ、こう書いたんだと思います。だれか、気持ちをわかつてくれる人がたずねてきてくれるのを、待っているのかもしれない。」

とびらをノックするのはだれがいいか？ 顔を見あわせたけっか、ライアンがいいだろうということになりました。それはつまり、中にいるだろうカピバラ種族の者の身長にあわせてのことだったので。とびらをあけて、いきなり目の前に大きなおおかみ種族の者が立っていたら、相手もびっくりして、たいどを強めてしまうかもしれません。

したから（カピバラの種族カピバルの身長は、みんなせいぜい、四フィートというところでした。そしてライオンたちシープロンの身長は、だいたいみんな、五フィートもな
いというところだったのです。とくにライオンは、まだ少年でしたので、それよりもつ
と小さいのです。ですから、とびらをノックするのには、相手をこわがらせてしま
うおそれのすくないライオンが、まさにうってつけだったというわけなのです。

ちなみに、ロビーたちウルファの身長は、へいきんでも六フィートほどもありました。
ロビーはまだ、それほど大きくはありませんでしたが、それでもライオンにくらべたら、
大人と子どもほどもちがいがあつたのです。ライオンは、小さいといわれて、「そんなに
小さくないよ！」とすこしむくれておりましたが。けっこう気にしていたみたいです
ね）。

そうして、ライオンは静かに、それでいてはつきりと、とびらを二回ノックしました。

とん！ とん！

みんなはしばらく、そのまま待っていたのですが、家の中からはなんの反応もあ
りません。雨つぶのまじった強い風が、みんなの顔に吹きつけてきます。ランプのあかりは
あいかかわらず、ちらちらとまどのむこうでゆれていました（まどはまつ黒けによごれて

いて、中のようすはぜんぜん見えませんでした。

ライアンはもういちどとびらをノックして、こんどは声をかけてみることにしました。

「あのーう、すいません。ごめんください。どなたかいませんか？」

ですが、まだへんじがありません。それでライアンは、こんどはもつと大きな声で、さけんでみることにしました（この場所なら、ごきんじよめいわくになることもありませんからね）。

「あのーう！ すいませーん！ だれかいませんかー！」
すると……。

小屋のおくの方で、なにか、がちやがちやという物音がきこえはじめたかと思うと、それは、しだいにすごく大きな音となって、入り口のとびらのそのすぐむこうにまで、せまってきたのです！

がらん！ がらん！ がちやん！ がちやん！

それは、このあらしのいなずまの音にも負けなくらいの、そうぞうしい「きんぞく音」でした。仲間たちはとつさに、腰の剣に手をかけて身がまえたほどです。ぼろぼろ

の木の小屋から、こんなに大きなきんぞく音がきこえてくるなんて、いったいだれがよ
そうできたことでしょうか？

そして、一行がおどろいているそのあいだに、ついに、小屋の中の住人からへんじが
かえつてきました。へんじがかえつてきたというよりも、とびらの方がいきおいよく、
ばーん！ とひらかれましたが（ライアンはびつくりして、そのまましりもちをついて
しまいそうになりました。うしろにいたフェリアルがとっさにかかえたので、ころばず
にすんだのです）。

小屋の中に立っていたのは、全身ぼろぼろの衣服に身をつつんだ、ひとりのカピバラ
種族の者でした（ぼろぼろのみどり色のチョッキを着ていて、同じくはい色のズボンを
はいていました）。せいべつは男せいです。顔はぼうぼうのはい色のひげにおおわれて
いて、そのひげは、顔の半分くらいをおおいかくしてしまっているほどでした。そのう
え、そのもじやもじやのまゆ毛のせいで、目もほとんど、かくれてしまっていたのです
（カピバラ種族の者たちは切れ長の目がとくちようでしたので、もとからあんまり、その
目をはつきりと見ることはできませんでしたが……）。

そして、これはいったいなんなのでしょう？ そのカピバラ種族の者とおんなじくら
いにいんしよ的な、あるものが、入り口のとびらのわきに立っていました。

それは、このうす暗い小屋の中でもぴかぴかとかがやいて見える、ふしぎなきんぞく

でできた、一頭の馬でした。その馬はとてもよくできていて、さまざまな部品がふくざつにくみあわさつてできているみたいだったので（さまざまなかざりがついているうえに、上にまたがるためのくらまでついていました）。大きさは子馬ほどでしたが、この小さな小屋の中で見ると、それはとても大きなもののように見えました（そのカピバラ種族の者がとても小がらでしたから、くらべられてよけいに大きく見えました）。

そのきんぞくの馬は、今は静かに立っているだけでしたが、どうやらさっきのがちやがちやという音は、この馬が立っていた音にまちがいないようです。けれど、はじめでそれを見た一行には、この馬がいったいどうやってあんな音を立てていたのか？ ぜんぜんわかりませんでした。なにか、ぜんまいでもまくと、がちやがちや動くのでしょうか？ しかし、そんなことを考えている時間は、みんなにはまったくありませんでした。だって、入り口のとびらがひらいてからみんながそのカピバラと馬のことを見て、そしてそのカピバラの男せいが口をひらくまでのあいだは、じつさいには、ほんのいつしゆんのあいだのできごとだったのですから（文章に書くといろんな説明が加わってしまいますので、あいだが長く感じられてしまいますが、それはごかんべん願います。では、説明はこのくらいにして、さきをつづけましょう）。

カピバラの男せいが、大きな声でいきました。

「なんと！ おまえさん方！ ひつじに、おおかみまでいっしょとは、なんて取りあわ

せなんじやい！ それも、ひい、ふう、みい、よ、全部で四人も！」

どうやら、こつちがおどろいている以上に、このカピバラの方がびつくりしているみたいでした。さしずめ、目をまるくしてといったところでしょうか？（でも、どんなに目をまるくしても、その切れ長の目はあいかわらずそのまんまでしたが。）

カピバラの男せいがつづけます。

「いつたいぜんたい、こんなあらしの夜に、おまえさん方はこんなところでなにをしろんじや？ 見たとこ、そつちのふたりは騎士のようなかつこうじやな？ じゃが、それにしてもひどいありさまじゃわい。それに、あんたはけがまでしているようじやな？」

カピバラ種族の男せいは、ベルグエルの肩をゆびさしていいました。肩のけがの手当てのようすを見て、そういったのです。

さて、みなさんにはもうおわかりになったかと思いますが、このカピバラの男せいは、若くはありませんでした。はつきりいつてしまえば、かれらの種族の者の中でも、かなりのおとしよりだったのです（おまけにちよつと、耳も遠いようでした。それでさいしよは、ライアンのよびかけにも、すぐには気がつかなかつたのです）。そして、ロビーの思つた通りでした。このカピバラの老人は、旅の者たちをむげに追いかえしたりするほど、気むずかし屋ではなかつたのです。

カピバラ老人の言葉に対して、ベルグエルムがせいじっぽい敬意をこめて、とてもれいぎ正しいのを取つていました（かれらのような騎士たちは、目上の人のほかにも、自分より年上の人をとてもうやまうのです。それがおとしよりなら、なおのことでした。みなさんも、おとしよりはたいせつにしますよね）。

「このような夜ふけに、まことにきょうしゆくです、ご老人。わたくしたちは、わけあつて、ここから南東にくだりました地、うつしみ谷のシープロンドまでの道のりを急ぐ、旅の者です。ですが、このあらしでは、どうにも、山道をゆくことはままなりません。それで、このセイレン大橋の下へと、なんをのがれて、やってまいったしだいなのです。」

ベルグエルムはそこまでいって、カピバラ老人のようすをうかがいました。老人はベルグエルムの顔をじろじろと見つめ、そしてそれから、ほかのぜんいんの顔をじゅんばんながめやつております。ひとりひとりをじっくりと、まるでその心の中を品さだめしているかのように、じろじろ見ているのです。そのため、しようじきなところ、みんなはあんまりいい気持ちにはなれません（とくにロビーは、こんなふう長いあいだ、まっしょうめんから人にじろじろ見つめられるなんてことは、はじめてでしたから、かなりはずかしかったです）。ですが、今はただ、このカピバラ老人のへんじを待つしかありませんでしたから、みんなはなにもいえず、じつとがまんをしていました。

そして、しばらくののち。カピバラの老人がとつぜん口をひらいたのです。

「うむっ！ ほんとうのようじゃなっ！」

それはとんでもないほどの大声で、じつとだまって立ちつくしていたみんなは、飛び上がってしまいそうなくらいびびくりしてしまいました（急にだれかにうしろから、「わっ！」と声をかけられたときみたいに）。

そんなみんなにはおかまいなしに、カピバラの老人がつづけます。

「おまえさんたちの顔からは、悪だくみのけはいは感じられん。ほんとうに、なんぎを
しているだけの旅の者たちに、ちがいないようじゃ。こんなところに住んでおれば、す
こしは人をうたがうこともせんと、自分の身があぶないでな。悪く思わんでくれ。じゃ
が、そうときまれば、さあさ！ 中へおはいり！ ぬれた服をかかわして、からだもあ
たためんと。ここへ死んでしまうぞい。」

これはほんとうに、旅の者たちにとつてありがたい言葉となりました。冬も近いこの
あらしの夜に、橋の下のおれた石のはしらの影で、ちぢこまってひとばんを明かそう
としていたのですから、みんながよろこんだのもむりはありません。

「ありがたい！ お申し出、われら一同、心よりかんしゃいたします！」ふたりの騎士
たちはよろこびのあまり、頭で考えるよりもさきに頭を下げ、心からのかんしゃの言葉
を老人におくっていました。ロビーとライアンも、あわてて深々と頭を下げて、それに

ならいます。

そして、ベルグエルムがもういちど口をひらいて、つぎの言葉を伝えたときのことでした。このカピバラの老人に、思いもかけないへんかが起こったのです。

「カピバルのあつきぎここうい。われら、ベーカーランド国にかわりまして、あつくおんれいを申し上げます。」

この言葉をきいたとたん、カピバラ老人はなにかにとりつかれたかのように、わなわなとふるえはじめました。そして、その切れ長のはつきりしない目を大きく見ひらいて、老人はベルグエルムのことを、くいいるように見つめてきたのです。

「ベーカーランドじゃと……い……おまえさん、今、ベーカーランドといったか？」

カピバラ老人はそういつて、ベルグエルムにつめよりました。そして、そのふるえる両手で、ベルグエルムのおなかのあたりをがっしりとつかんだのです（ほんとうは肩をつかみかかったのですが、背たけがたりなかつたのです）。

ベルグエルムはびっくりして、この老人の変わりようを心配しながらこたえました。

「は、はい。いかにも、わたくしとこの者の両名は、ベーカーランド王、アルマーク王につかえし者です。白の騎兵師団にぞくしております。」

これをきいて、カピバラ老人はとてもショックを受けたようでした。すつかり取りみだしてしまって、ベルグエルムをつかむうでに力をこめて、はげしくゆさぶったのです。

「おお……！ あなたたちが、白の騎兵師団なのですか！ それがほんとうならば、このわたしには、つらすぎるしんじつです。もう、今となつてはおそすぎました。もつと早く、あなたたちの助けがほしかった！」

そういうと、カピバラ老人は、声を張り上げて泣き出してしまいました。地面にべつたりとくずれ落ちて、両の手で顔をおおつて、わあわあと泣きさげんでしまったのです。これを見て、みんなはとてもびつくりして、カピバラ老人のそばに集まりました。そして、ベルグエルムがカピバラ老人のうでを取つて、その泣いているわけをたずねたのです。

「いかがなされました、ご老人！ わたくしたちに、いったいなにがあるというのですか？」

カピバラ老人は、ベルグエルムのうでにだき起こされると、ようやくおちつきを取りもどして立ち上がることができました。そして、それからまたようやくやくのことで、ふたたび口をひらくことができたのです。

「……なんとも、めんぼくのないことです。つい、取りみだしてしまつて……。さあ、とにかくまずは中へ。それからみんな、あなた方にもきかせてあげよう。わしのこと。わたしたちのくにに起こつたこと。なにもかもすべてじや。」

小屋の中はじつにそつけないもので、なんのかぎり気もありませんでした（ゆいいつ、きんぞくでできた馬のつくりものはべつです。なんでこんなものがあるのか？ あとで老人にきいてみましょう）。小屋のまん中には、むき出しの木のはしらがまがつたまま立っていて、かべにはところどころに、板のつきはぎがしてありました。家具らしい家具もほとんどなく、木をらんぼうによせ集めて作ったぼろぼろのテーブルと、がたのきたベッド（のようなもの）がひとつずつあるだけです。てんじょうはやねの板がそのままむき出しになっていて、今にも風で飛んでいってしまいそうに見えました。

ですが、ふしぎなことに、小屋の中はそとがあらしであるということも忘れてしまいそうなくらいに、静かだったのです。やねからも、雨もりのしずくのいつてきさえ、落ちてきません。かべにうちつけてある木の板も、見るからにらんぼうに張りつけてあるだけのように見えました、すきま風のひと吹きさえも感じられませんでした（これはじつは、カピバルたちのその名声の通り。一見ぼろぼろに見えるこの小屋にも、かれらのすぐれたわざが使われていたからなのです。いいかげんにくみあわせてあるだけのように見えるかべやてんじょうの木の板も、水や風を通さないように、たくみに計算されてくみあわさっていました。さすがはカピバル。そのわざは、やつぱりすごかったのです。フェリアルも、これならなつとくです。びつくり）。

そのため小屋の中は、そとのようなやなにおいがありませんでした。これはほんと

うに大助かりで、ライアンはみんなの鼻に作った空気のまくを、はずすことができたのです（さすがにせますぎでしたので、馬たちを中にいれることはできませんでしたが）。ですが、旅の者たちにとってそれらのことよりもなによりも、まずまつさきに心ひかれるものが、そこにはありました。それはだんろでした。もう火がほとんどもえておらず、わずかな残り火がくすぶっているだけでしたが、このひどい天気のとこからやってきた旅の者たちにとって、それはほんとうにすてきで、みりよく的なものに見えたのです。

「わしはちようど、このだんろの火を起こしなおそうとしていたところだな。そこで、あなた方の声に気がついたんじゃよ。」カピバラ老人はそういつて、みんなのために、たつぷりのまきをだんろにくべてくれました（ライアンが「お手伝いします。」といつて火の力をかりて、その力をまきに伝えてくれたおかげで、火のいきおいはたちまち大きくなりました。しぜんの力をかりるわざというのは、ほんとうにべんりです）。

「みんな、つかれきつているようすじゃからな。ミルクをあたたためてあげよう。そのあいだに、ぬれた服をぬいで、火にあてるといい。もうふならいくつかあるから、それを使つておくれ。」

そして老人は、テーブルの上のランプを手に取ると（このランプはロビーにこの小屋のそんざいを気づかせてくれた、きつかけとなつたものでした）、部屋のおくに張り出し

てつくられていたものおきから、もうふを四まい持つてきてくれたのです（おせじにもきれいなもうふではありませんでしたが、まさかもんくはいえませんよね。四まいあつただけでも、ありがたいことなのですから）。

さて、旅の者たちはぬれた服にもつを火にあてて、カピバラ老人が貸してくれたもうふにくるまると、やつとのことできゆうそくを取ることができました。もうみんな、話すこともおつくうなくらいにつかれておりましたので、かべを背にして、床にちよくせつすわりこんでいたのです（この小屋の中には、ほかにすわれるようなところもありませんでしたから）。そして、だんろにかけたミルクがあたたまると、カピバラ老人はそれをカップにそいで、（砂糖をたっぷりいれて）みんなにくぼつてくれました。それはもう、ほんとうにおいしくて、あつたかで、旅の者たちにこのうえないやすらぎを与えてくれるものとなりました（ちよつと本を置いて、あなたもあたたかいミルクを作つてみてはいかがでしょうか？ それを飲みながらつづきを読めば、みんなの気持ちが、さらくによくわかるんじゃないかと思えます。お砂糖多めを忘れずに）。

みんなはミルクを飲みながら、カピバラ老人の方を見やりました。すつかりおちつくことができ、老人の話に耳をかたむけるころあいになったからです。カピバラ老人はそれにうなずいてこたえると、自分のベッドのはしに、ゆつくりと腰を下ろしました。そして、「ふう。」と大きなため息をひとつついてから、静かに話しはじめたのです。

「わしはもともと、このセイレン河のはるかな上流、セイレンのみずべとよばれる土地にきずかれた、カピバラのくにの住人じゃ。」

老人は、まどのそとをぼんやりとながめながらいいました。遠いふるさとのことを、思い出していたのでしょうか。

「カピバラのくにには、名まえなどない。ただ、ゆたかなしぜんと作物のみり、そして、われらくにたみ。仲間たちがおれば、それだけでじゆうぶんじやつた。その点からいえば、わしたちのくにには、まさにりそうきようじやつた。みな日々を楽しみ、おだやかな時間の流れを楽しみ、それにまんぞくして、人生を送っておつた。」

「そんなわしらのくにには、このアーケランドでもいちばんといていいほどの、あるとくべつなわざがあつた。あなた方もぞんじておるかと思うが、そう、ものづくりのわざと、けんちくのぎじゆつじやよ。わしらカピバルの一族は、代々、その家に伝わるひでののわざを受けついできた。そのわざは、それぞれのカピバルの家によつてさまざまじゃ。ぜつたいにくずれることのないれんがかべをつくれる者や、たおれることのないはしらをたてられる者もおつた。しぜんのならわしにきからつた家をたてることのできる者もおつたし、光を自分で生み出せるまどやてんじようをつくれる者もおつた。それらはすべて、その一族の者たちがいには、そうそうまねのできるようなものではなかつた。わしの一族のわざはいえ、ほれ、そいつじや。」

老人はそういつて、入り口のわきにずっと立ちつくしていた、あのきんぞくせい馬をゆびさしてみせました。さあ、それではいいよ、このなぞの馬のしようたいがわかるるときがきたようです（みなさんも気になっていたことでしょうが、旅のみんなもみなさんに負けないくらい、この馬のことを知りましたがっていました。とくにライアンとロビーは、つかれも忘れて、思わず身を乗り出してしまったくらいだったのです）。

老人はそれから、四本のゆびをひよいひよいと動かして、「おいでおいで」のしぐさをしてみせました。すると……。

がらん！ がらん！ がちゃん！ がちゃん！

これはすごい！ きんぞくでできていたはずの作りものの馬が、老人のあいずにこたえて、まるでほんものの馬であるかのように、なめらかに、そしてゆうがに、四本の足をがちやがちやと動かして、老人のそばまでかけよっていったのです！（ちよつと音はうるさいのですが、それはきんぞくだからしかたありませんね。そしてやつぱり、あのがちやがちやという音は、この馬が出していたのです。）

旅の者たちはほんとうにびつくりして（あのれいせいなベルグエルムでさえ、思わず、口にしたミルクをぶっ！ と吹き出してしまいそうになったほどです）、そのあとにはた

ただだ、へえ！ と感心するばかりでした。こんなみごとなさいくものは、もちろんだれも、今まで見たこともありませんでしたから。

「こいつはな、ただの鉄ではない。生きている鉄なのじゃよ。」老人はそういつて、馬の首のあたりをなでました。すると馬は、頭を老人にすりよせて、あまえるのです。

さてさて、みんなはこれだけでもじゆうぶんすぎるほどにおどろきました。が、じつはこの馬のひみつは、これだけではありませんでした。いえ、むしろそっちの方が、旅の者たちにとっては（そしてみなさんにとつても、たぶん）、さらなるおどろきのひみつだったのです。

「おどろいとるな？ そうじゃろう。これは、わしらカピバルたちしか知らんことじゃからな。あなた方を心からしんようしとるから、わしはこのひみつを見せたんじやよ。ではもうひとつ、とつておきのひみつを見せてあげよう。じゃが、このわざは、ぜつたいのひみつじゃ。人にはもらさんで置いてほしいんじやが、やくそくできるかね？」
もちろん！ 旅の者たちは首をおもいつきり、なんどもたてにふりました。こんないい方をされたら、だれだつて、きかずにはいられませんもの。

「よろしい。では……」老人はそういうと、馬の顔の前に手をかざして、それから、ぱちん！ とゆびをならしてみせました。すると、とつぜん！

がらがらがら、がっちゃん！

なんとんと！ 馬はみんなの目の前で、とたんにばらばらになって、床にくずれ落ちてしまったではありませんか！

大きな部品に小さな部品。鉄のぼうがなん本も。はぐるまの大小がいっぱい。そして、小さなねじのいっぱい。馬はかんぜんに、ばらばらになってしまったのです。

今やこの小さな小屋の床は、すみずみまで鉄の部品がちらばって、いっぱいになってしまいました。これをもと通りにもどすことは、どうやってもむりでしょう。なにがどこにくっついていたのかも、もはやまったく、わからないのですから（そうじするだけでもたいへんなはずです）。ですが、老人はまったく、心配するそぶりも見せませんでした。自分のだいいな馬がこんなことになってしまったというのに、なぜなのでしょうか？ でも、そのこたえは、このあとすぐにわかりますよ。

「おどかして、すまなんだな。この馬は、わしのめいれいひとつで、すみずみまでばらにすることができんじや。じゃが、ばらばらにするだけだと思ucaかね？ そう、こいつのほんとうのひみつは、ここからなんじやよ。」

そしてカピバラの老人は、にこりと笑うと、床にちらばった鉄の部品たちにむかって

ひとこと、こういったのです。

「起きろー！」

みんなは、目の前で起こっていることをとても信じられませんでした。ですがこれは、かくじつに、自分の目でじつさいに見ている、げんじつのできごとなのです（ライアンはあんまりおどろいたので、これは夢じゃないか？　と思いましたが。ですからかれは、フェリアルルのほほをつねって、これが夢じゃないということをつたしかめたのです。もちろんフェリアルルは、「自分のほほをつねってくださいよ！」とぶんぶんいいました）。

そうです、みなさんもそうぞうされたことと思いますが、その通り。ばらばらにちらかっていた鉄の部品のひとつひとつが、老人の言葉に反応して、がらがらと音を立てて、もとの馬のかたちにもどっていったのです！

はぐるまが空中にまい飛び、鉄のぼうがかしんかしん！　とそれにくつついていきました。ねじがいっぱい集まって、空中を波のようにぎざぎざあつ！　と流れていきましました。そしてそれらのねじはどんどんと、もともとはまっていたねじあなに、くるくるまわってとじられていったのです。みんなはあんまりおどろいたので、口をあんぐりとあけたまま、なんにもいうことができませんでした（人って、あんまりおどろいたときって、ぎやくになんの反応も取れなくなってしまうものです。まさに今、みんなはそんなぐあ

いでした)。

それらは、ほんの十数びょうほどのあいだのできごとでした。さいごに、馬の頭をかざっていた部品がくるくるとちゆうをまいおどつてから、かしん！ くつつくと、これでもと通り。さつき見たあの鉄の馬が、ふたたびみんなの前にすがたをあらわして、がちやがちやいいながら、小屋の中をげんきよく歩きはじめたのです。

みんなの反応を見て、カピバラの老人はまんぞくげに、「ほっほ。」と笑いました。してやったりといった感じですよ。ですが、ちよつとくやしいですけど、みんなは老人の思い通りの反応を取ることしかできませんでした(みなさんもじつさいに見てみれば、かれらと同じ反応をすることと思います。お見せできないのが、わたしもひじょうにさんねんです)。

「こいつはな、作り手であるわしのめいれいひとつで、ばらばらにしたり、くみあわせたりすることができるといふよ。それもすべて、この生きている鉄と、一族のわざがあつてこそじゃ。この馬に使われている鉄はな、それをくみあわせて作ったものを、生きもののように動かすことができるばかりではなく、いちどくみあわせてそのくつつき方をおぼえさせると、あとはこんなふうに、好きなようにばらばらにしたり、もとにもどしたりすることができるようになるんじやよ。まさに、生きている鉄じやろう？ そのくつつき方までも、ずっとおぼえているんじやからな。」老人はそういって、こんどは

馬の背中をぼんとたたいてみせました。すると馬は、頭のいい犬がそうするみたいに、足をおりたたんで、床にぺたつとふせてみせるのです。

「わしらのくには、このわざをけんちくにもくみあわせて、毎回好きなようにかたちを変えられる部屋や、かいだんなんかをつくっておった。わしらのくにはこんなふうな、それぞれの一族がそれぞれのわざを、おたがいのためにおしみなく分けあつておつたのじゃ。だれやかれやとかまうことはない。必要とされれば、よろこんで、自分たちのわざをみなにていきようした。それが、わしたちのくのすばらしきところであつたし、同時にそれは、われら仲間うちの、けつそくのあかしでもあつたのじゃ。」

老人はそこまでいうと、とつぜん顔をくもらせました。なにか、とてもいやなことを思い出しているかのようでした。そしてその通り。かれの話はここから、とても暗くて、とてもおそろしい、いやなお話の中へと進んでいくことになるのです……。

「あるときからじゃ。」老人がふいにいいました。「わしたちのくの中で、動きが起こつた。それまでは、かたくなに、そのすばらしきわざの数々を自分たちのくからそとにもらさないように、つとめてきたのじゃが、だんだん、そうもいかないしだいになつてきた。それはつまり、わしたちのくにが、さかえすぎたということなんじゃ。くにが大きくなつて、それまであちこちにちらばつていた仲間たちが、どんどんと集まるようになってきた。もちろん、はじめのうちは大かんげいじやつた。仲間がふえるのは、う

れしいものじゃからな。じゃが、仲間がふえればふえるほど、しだいに自分たちの力だけでは、くにをささえきれなくなっていくものじゃ。じつさい、心配した通りそうなた。もはや、みなをやしなつていくだけの力を自分たちのくの中だけで生み出すことは、ふかのうになつておつた。

「わしたちは話しあつたけつか、いくつかのぎじゆつをほかのくにもたらすけつだんをした。それはけつして、のぞんだことではなかつた。じゃが、いたしかたなかつたのじゃ。わしたちはきびしいきまりごとを作つて、それにしたがつて、かぎられた中でのみ、ほかのくにと取りひきをおこなうことにした。じゃが、それでも、それはわしたちにとつて大きなまちがいであつたのじゃ。たしかに、取りひきによつて、わしたちのくには一時的にはとてもゆたかになつた。たくさん品物やお金が、どんどんとはいつてきた。くに中の人々がみんな金持ちになつて、せいかつはうるおいにうるおつた。じゃが、わしたちは、それにおぼれてしまった。目さきのよくにおぼれたのじゃ。そんなことになつたらどんなときだつて、ろくなことにはならないというのに。わしらはそのことを、すっかり忘れてしまつていたのじゃよ。そして、そんな中のことじゃ。あのいまわしきできごとが起こつたのは……。

「忘れもせん。その日、わしらセイレンのみずべのくにに、めずらしくあらしがおとずれた。ちようど、今夜のような、強くてふきつでおそろしげなあらしじやつた。こんな

日にこんな話をするのも、きつとなにかのいんがじゃろうな。ひるまじやというのに、空はまるで夜のように暗く、いくどもないはずだが、わしらのくの中をおびやかしておった。そして、そんな中じゃ。やつらが……、やつらがあらわれたんじやよ。」

カピバラ老人はそういつて、かたく目をつむりました。おそろしい思いですが、頭の中いっばいによみがえってきたのです。老人はそれにあらがおうとして頭をふりましたが、ききめはまったくありませんでした。

「それはな……、それは大地をうめつくさんばかりの、大部隊じゃった。まつ黒なよろいを着こんだ、おそろしげな兵士たちじや。頭にはみな、見た者をふるえ上がらせるのにじゆうぶんなほどのおそろしげなかぶとをかぶり、手には、長いやりをかまえておった。そしてそいつらは、わしらのほこる美しいくの中に、ぶさほうきわまりない方法ではいりこんできた。美しい庭えんも、小川のせせらぎも、花ばたけさえも、やつらはおかまいなしにふみ荒らしてきたのじや。それをとめようとしたひとりのカピバルの青年が、騎馬に乗った黒い騎士の手にかかって殺された。」

なんてことを……！ 旅の者たちは言葉もありませんでした。おどろきと、怒りと、かなしみと……、さまざまな思いがあふれかえってきて、胸が今にも張りさけそうなくらいでした。

そんな旅の者たちのことを、カピバラ老人は、手をかざしてせいしました。ほんとう

なら、このカピバラ老人の方がよっぽどつらかったでしょうに。老人のたいどは、とてもりっぱでした。

「……そしてついにそいつらは、わしらのくにの長である、しつせいどののいるたてものにまでやってきたのじゃ。そのときその場には、大勢のぎかんたちがおつた。その日はちようどそこで、くにのゆくすえをきめるための、だいな話しあいがおこなわれていたからじゃ。かくいうわしも、そこにおつた。わしは、しつせいどののそうだんやくとして、かれにおつかえしていたんじゃよ。」

しつせいという言葉は、あまりききなれないことかと思いますが、これはつまり、くにのせいじをとりおこなう、いちばんのせきにん者のことをいうのです（いってみれば、そうりだいじんみたいなものです）。カピバラのくにでは、いちばんえらいだいひよう者のことを、しつせい。そのほかのいっばんのせいじ家たちのことを、ぎかんとよんでいました。このカピバラの老人はその中でも、くにのいちばんのだいひよう者です。

あるしつせいさんのことを、助けるしごとをしていたのです（ですから、かなりえらい身分にあつたはずです）。それがなぜ今は、セイレン大橋の下、こんなそまつな小屋に住んでいるのか？ それはこれから語られることになります。

「やつらはあらしの中、わしらのいるたてものを取りかこむようにじんどつた。それはまさに、悪夢のような光景じゃった。じゃが、中にいるわしたちには、どうすること

もできん。ただもう、おそろしさにがくがくふるえるばかりじゃ。そしてしばらくすると、その兵士たちのあいだから、六人の黒ずくめの騎士たちが進み出て、わしらのもとへとやってきた。そいつらの、おそろしげだったことといつたら！ 思い出したくもないわい！ じゃが、むりなんじゃ。どうやって、この頭からはなれん。そして、その黒騎士たちの中でも、もつともおそろしげだった男が、しつせいどのをよばわって、こういう放ちよつたのじゃ。

「『ごきげんうるわしゆう、カピバラのしつせいどの。それにみなさん方も、おげんきそうでなにより。』そいつはそこで、きぞくがやるような、大げさな身ぶりのおじぎをしてみせよつた。もちろんそんなものは、たて前だけのことじゃ。そいつは、こうつづけた。『ほんじつはみなさんに、すてきなおくりものをさし上げたいとぞんじましてな。よろしいか？ おこたえしだいでは、みなさん方にとつて、とても得となるお話をさせていたごう。しかし、もしいうことをきかないのであれば……、そのときは、このくにの、こんごのほしよはできんがね。』」

「そういつて、その男は笑い声を上げたのじゃ。それは胸につかえるような、むなくその悪い笑いじゃつた。そいつの言葉は、おもてむきでは上品さをよそおつてはおつたが、その心のおく底たるや！ まさに悪そのものじゃ！ 悪がよりかたまつて、あいつを作り上げたのにちがいないわい。そしてそいつは、ますますちようしに乗つて、こう

つづけたのじゃ。

『われらはワットの者だ。アルファズレド王、ちよくぞくのしんえい隊である。王はもちろん、このアー克兰ドのじっけんをにぎるお方だ。それはわかつておろうな？』

それをきもにめいじて、おききあれ。』

「そいつは、その場をわがもの顔に歩きまわり、わしらひとりひとりの顔をじろじろながめやりながらいった。『わがくには、今やこのアー克兰ドでも、いちばんの強国である。だが、ざんねんながら、それでもまだかんぜんではない。わがくにの力をかんぜんなものとするために、われらはこうして、はたらいているわけだ。そして、きくところによると……』」

「そいつはそこで、しっせいどのの、のどもとに、手にした剣のつかをおしつけよった。そんなことに、なんの意味がある？ ただの悪意じゃ！　そしてそんなことをしでかしておきながら、そいつはいけしやあしやあと、こんなことをいい放ちよったのじゃ。」

『みなさん方は、ひじょうにすぐれたわざの数々をお持ちとか。ぜひわれらに、そのわざをお教えたきたたく、こうしてまいったしだいというわけだ。アルファズレド王も、みなさん方のわざのすばらしさには、たいへんなかんしんをよせていらつしやる。ワットの力となれるのだ。カピバルの名も、いちだんと上がるといふもの。めいよなことだぞ。どうだ？　アー克兰ドに、こうけんしたくはないかね？』

「もちろん、こんな悪のきそいに乗るほど、わしたちはばかではない。こんなやつらのいいなりになれば、どんなひどいけつかを生むか？ 火を見るよりあきらかじや。しつせいどのはもちろん、こんな悪のおどしなどにはくつしなかった。かれはだれよりもゆうかんで、そうめいなお方じやつた。しつせいどのは劍のつかをはらいのけて、おくすることなくいつたのじや。

『あきらめて帰ることだ。おまえたちなどには、われらのわざはなにひとつあつかえん。われらのわざは、われらのようなきよい心に対してのみはたらくものだ。おまえたちのような、どす黒いくさつた心を持つようなやからには、まったくやくには立たん。』とな。

「これをきいた黒騎士のたいどは、いがいなものじやつた。申し出をことわられて、ひるむなり怒るなりするかと思いきや、そうではなかった。しつせいどののそのこたえを待つていたかのように、そいつはおもしろがつて、高らかな笑い声を上げよつたのじや。そしてそいつは、こういいよつた。

『じつにゆかい！ それならば、話は手っ取り早い。もう、おまえたちなどに用はないというものだ。どこまでもおろかなれんちゆうよ。われらがせつかく、きかいを与えてやったというのに。おまえたちはみずから進んで、めつぼうの道をえらんだわけだ。じつをいえばな、しつせいどのよ。われらにとってこんな小国などは、どうでもいいそ

んざいなのだ。いくらかけんちくのわざがあるようだが、そんなものは、わがワットにとつては、あつてもなくても同じこと。おまえたちはさいきん、やたらといきがつて金をもうけているようだが、だれのきよかを得ているのかね？ われらのほんとうのもくときはそれなのだ。ようするに、おまえたちのそんなざいがじやまなのだよ！ ワットになんのあいさつもなしにいい気になっているようなれんちゆうを、われらが主君、アルファズレド王が、おゆるしになるとでも思っているのか？ 王はたいへんにごりつぶくだ！ それでわれらが、こうしてやってきたというわけなのだよ。だがまあ、安心したまえ。くにたみのうちのいくらかは、ワットのためにはたらかせてやる。この土地は水もほうふだから、あとの心配もしなくてよいぞ。黒の軍勢のために使つてやるよ。』

「わしらの怒りは、そこでちようてんにたつした。ぎかんたちのうちのなんんか、われを忘れて黒騎士にいどみかかった。じやが、それはむぼうじやつた。ぎかんたちはわしの目の前で、黒騎士に切りつけられて、むざんなさいごをとげた。そして黒騎士は、さいごにこういつた。それが、話しあいのさいごの言葉となつたのじや。

『おまえたちをワットのはんぎやく者としてしよばつする！ かくごしろ！』

夜のあらしはそのとき、セイレン大橋のそのまうえを通りすぎてゆくところでした。まどやとびらに、風で飛ばされてきた木のえだがうちあたって、ばしんばしん！ と大

きな音を立てていきます。ふりしきる雨のすごさは、橋の下のこのカピバルのわざによつてたてられた小屋の中においても、はつきりと感じられるようになっていました（ですから、よつぽど強くふっているのです）。たえまなく起こるいなすまの光と音が、それに力を貸して、みんなの心を深くしずみこませました。

カピバラ老人は、ほそい切れ長の目をもつとほそくして、まどのそとをぼんやりとながめていました。その目からは、いつからか、大つぶのなみだがあふれていました。

「……それからあとは、もう、目もあてられんようなありさまじゃ。黒騎士のごうれいいつか。配下の兵士たちがわつとなだれこんできて、わしらにおそいかかった。ていこうはむなしものじゃった。ぎかんたちはつぎつぎといのちを落とし、そしてさいごまでゆうかんに戦った、しつせいどのも、ついには、やつらのそのよこしまなるやいばの前にたおれたのじゃ。」

老人は、みどり色のチョッキのすそで、そのあふれるなみだをぬぐいました。気がつけば、旅の者たちもみな、目を赤くはらしていたのです。

「わしは、さいごにひとり残された。もう、ていこうするすべはなにもなかった。しきをとつていたあの黒騎士がみずからやつてきて、じゃあくな笑みをいっぱい浮かべながら、わしに劍の切つききをむけた。わしは部屋のいちばんはしまで追いつめられた。もう、あともない。黒騎士は、そうしたければいつでもわしを殺せた。だがやつは、わ

しをいたぶるのを楽しんでおったのじゃ。

「それからやつは、わしにこういったのじゃよ。あなたたちには、つらいことかもしれないが。」

「『おまえがさいごのひとりだ。おろか者め。おとなしくしたがっていれば、殺されずにすんだものを。せいぜい、いのちごいでもしてみるがいい。だが、われらはそれほどあまくはないぞ。黒の軍勢にかなう者など、このアーケランドにはいないのだ。今やわれらにたてつくものは、ベーカーランドの白の騎兵師団とやらのみ。腰ぬけのアルマク王などにつきしたがっている、むりよくなれんちゆうよ。どうだ？ 白の騎兵師団に、助けてくれと願ってみろ。その声やつらにとどくかどうか？ ためしてみるがいい。やつらなど、しよせんはそのていどだ。かわいそうに、おまえがこうして死に、このくにがほろびるのが、いいしようこではないか。』」

「ふざけるな！」フェリアルが立ち上がって、たまらずにさげびました。かれはまだ、若くけつきさかんなところがありましたので、もう、いてもたってもいられないくらいに、こうふんしてしまつたのです。ベルグエルムがとめなければ、フェリアルは今すぐにも、このあらしの中をワットにむかつて飛び出してしまつたことでしよう。しかし、そういうベルグエルムにしても、こんな話をきかされては、とてもれいせいであることなどはできませんでした。なんとか、かれのけいけんと、しりよの深さが、か

れ自身のことをおしとどめていたのです。

「あなたたちのせいではない！　どうか、おちついてください！」カピバラの老人はそういつて、ふたりの騎士たちのことをなだめました。「これも、運命というものじゃ。世の中には、どうにもならんこともあるのじゃよ。それがどんなに、りふじんなことでもな。」

騎士たちは老人の言葉にペこりと頭を下げて、そしてふたたび、床にすわりこみました。ロビーとライアンは、かれらの肩を手でさすってあげました。ふたりとも、こんなにかうふんしたフェリアルとベルグエルムのことを見るのは、はじめてのことでした。

騎士たちがようやくおちつきを取りもどしてきたころ。カピバラ老人がさいごの話をしてくれました。それは、そう、カピバラ老人のそのごのことです。どうしてカピバラ老人が助かったのか？　そしてどうしてこの場所にいるのか？　そのことについてでした。

「追いつめられたわしは、ただひとつきぼうが残されていたことを思い出した。そいつじやよ。」老人はそういつて、部屋のすみに立っているあの鉄の馬をゆびさしました。「そいつが文字通り、わしの助け馬となったのじゃ。そのとき、わしのいた部屋の近くに、わしの作ったこの鉄の馬がしまつてあつた。この馬はほんらい、まつりするときなどに使うもので、ふだんから出しておくようなものではない。それがたまたま、わしのい

た部屋のすぐそばにしまつてあつたわけじゃ。わしはそのことを思い出すと、すぐにこいつをよびよせた。もちろん、れんちゆうにはわからん方法でな。そしてわしは、やつらにいったのじゃ。

『すべておまえたちの思い通りにはならんということ、教えてやろう。せいぎはけつしてほろびたりはせん。悪がはびこる世界などには、けつしてさせん。けつしてな！』

「わしは、かけこんでくるこの馬に飛び乗つた。そして、わき目もふらずに走つた。むかつたさきは、たてもものの二かいじゃ。たてももの入り口はワツトの兵士どもによつて、すつかりふさがれてしまつておつたからな。そしてわしは、広間のかいだんをかけたのぼると、大声でさけんだ。『かいだんよ、とじろ！』

「そう、そのかいだんはカピバルのわざによつてつくられておつたのじゃ。あい言葉をいうことによつて、おりたたんでしまえるようにできていたんじゃよ。

『逃がすな！ とらえろ！』はいごから黒騎士のさけぶ声がきこえた。わしはふりかえることもせず、そのままむがむちゆうでひた走つた。そして二かいのバルコニーにまで出ると、そこから、みずうみの上につくられた空中どうろの上へとむかつて、かけ出していったのじゃ。」

カピバラのくには、セイレンのみずべとよばれる土地にきずかれていて、そこには、み

ずうみや川やいずみなどが、たくさんありました。そしてカピバルたちは、その水の上にもまでも、たくさんのもや、庭えんや、広場などといったものを、つくっていたのです（もちろんそれは、カピバルたちのすばらしきわざがあつてこそそのものでした。そうそうまねのできることはありません）。

その中でもとくにすばらしいものが、空をうめつくす「空中どうろ」でした。カピバラのくには、すくない土地をゆうこうに使うための空の道が、たくさん走っていたのです。それらの道は、とうめいなガラスでつくられていて、見た目にもとても美しいものでした。その空中どうろが、カピバラ老人のいたたてものの二かいから、みずうみの上へとむかつてのびていたのです（みずうみの上をじゆうおうむじんに走る、美しいガラスでできた空の道。そうぞうでできますでしょうか？ わたしもいちどでいいから、そこを歩いてみたかったものです）。

「わしは、そのままみずうみの上をかけぬけて、むこうぎしへと渡つていった。ワットのれんちゆうも、さすがにそこまでは追つてこれなかつたようじゃ。じゃが、そのとちゆうで見た光景を、わしはけつして忘れないじやろう。ワットのれんちゆうは、あろうことか、なんのつみもない人々の家にまでつきつきと火を放ちよつたのじゃ！ それはおそろしいほのおじやつた。ただの火ではない。血のような色の、ばけもののようにゆれ動く、まがまがしい火じゃ。その火は、あらしなどものともせずにもえさかり、カ

ピバルのすばらしきわざのけんちくぶつをどんどんともやしていった。じゃが、わしにはどうすることもできなかった。わしは、逃げなくてはならなかった。カピバルのわざを、これでたやすわけにはいかなかった。わしがやらなくてはならなかったのじゃ。わしはそのとき、なみだで前も見えないほどじやった。

「そしてわしは、みずうみから流れ出るいっぽんの川にそつて、逃げ落ちていった。その川こそが、そう、このセイレン河のみなもとなのじゃよ。わしは、なん日もなん日も走りつづけた。そうして身も心も果てたころ、わしは、この巨大な石の橋にまでたどりついたのじゃ。セイレン大橋という名まえを知ったのは、それからだいぶあとになってからのことじやった。

「わしは、動きまわった。なんとかわれらの助けとなつてくれる者たちがおらぬかと、力のかぎりさがしてまわった。じゃが、みなワツトの名まえをきいただけでふるえ上がり、手を貸してくれる者はだれもおらんかった。わしはしだいに、すいじやくしていった。やまいにたおれることもあった。気力はどんどん、失われていくばかりじゃ。わしももう、としじやでな。それ以上動きまわることは、むりじやった。」

「シープロンドにきてくれればよかつたんです！」

たまらずにそういったのは、ライアンでした。ライアンはセイレン河をだれよりもあいでしていました。ですから、セイレン河の上流、このカピバラ種族の者たちのくに、そ

んなできごとが起こつていたのでということを知つて、もう、いてもたつてもいられないくらいになつてしまつていたのです。

「ありがとうよ、ひつじの少年よ。」そんなライアンに、カピバラ老人は静かにこたえました。「じゃが、その気持ちだけでじゆうぶんじゃ。わしもはじめは、くにのことをすくおうと思つた。じゃが、それはかなわぬことじゃと、わしにはさいしよからわかつておつたんじゃよ。やつらのいうことは、ざんねんながらじじつじゃ。黒の軍勢には、とうてい手出しができん。かえりうちにあうのは目に見えておる。これ以上のぎせいを出すわけにはいかんよ。きみのくににまでそんなふこうをしよわせることが、どうしてわしにできようか？ きみも知つておるじゃろう？ このセイレン河の上流が、今どうなつてゐるのかを。」

ライアンは言葉につまつてしまいました。セイレン河の上流、そこで今、なにがおこなわれているのか？ ライアンは、よく知つていたからです（その地がまさか、かつて、このカピバラ種族の者たちのくににだつたなんて！）。

「そう、わしはあれからいちど、セイレンのみずべへと、ひそかにもどつてみたことがある。そこでわしが見たものは、なんともみにくいありさまじゃつた。かつてのくにの美しさは、見る影もなくなつておつた。やつらはあの地を、よこしまなもくてきのため、工場やじつけん場に変えてしまつたのじゃよ。」

「でも……！」

ライアンの気持ちはおさまりませんでした。なにもできない自分が、くやしくてならなかったのです。セイレン河の上流でおこなわれていること。それはもうずいぶん前から、ライアンは知っていました。ですが、くやしやかな、カピバラ老人のいう通りです。シープロンドのひつじの者たちが、たばになつてかかったとしても、黒の軍勢の者たちのやっていることをとめることはできないでしょう。いくら、しぜんの力をかりるわざがあるとはいえ、かれらはもともと、戦いにはむいていない種族だったのです（かれらのわざは、ほんらい、身を守ったり、だれかを助けたり、しごとのやくに立てたりすることなどに使われているものでした。ですからライアンのように、しぜんの力をこらうげきに使えるというような者は、シープロンドにも、数えるほどにしかいなかったのです）。それは、シープロンの王子であるライアンにも、よくわかつていたことでした。ですから、よけいにくやしかったのです（そしてカピバラ老人も、シープロンの者たちが戦いにむいていない種族なのだということとは、よくりかいしていました。ですからなおのこと、かれらのことを、あらそいごとにはまきこみたくなかったのです）。

「わたしのくにはほろんだ。それはもう、じじつじゃ。じゃが、安心してくだされ。カピバラのたましいまでは、ほろんではおらん。それだけは、やつらにもうぼうことはできなかつたのじゃ。」

老人はそこで、チョッキのえりの中からあるものを取り出して、みんなに見せました。それは、かわのひものさきにむすばれた、ほんのりと水色にかがやく、小さなひとつのすいしようのかげらでした（ネックレスになって、老人の首にかかっていたのです）。

「これが、わしらカピバルのたましいじゃ。」そういつて老人は、そのすいしようのかげらをつまんで、目の前にかざしてみせました。すると……！

すいしようの中からたくさんの光があふれ出て、その光が、空中にさまざまな絵がらやずけいをえがき出していったではありませんか！ それはなにかの、せつけいずのようでした。そしてそれは、つぎからつぎへと、あらわれては消えてをくりかえしていったのです。

「このすいしようの中にきろくされているもの。これこそが、わしらカピバルのたましいなのじゃよ。カピバラのくにの、わざのすべてが、ここにつまっておる。わしはいつも、はだ身はなさず、これを持っておった。それが、さいわいしたんじゃ。わしはどうしても、これを守らなければならなかった。じゃからこそ、やつらにつかまるわけには、ぜったいにいかなかったんじゃよ。」

そう、老人の持つているこのすいしようのかげらこそが、カピバラのくにの、そのいのちともよべる、いちばんの宝物でした。このすいしようの中には、カピバラのくにの、ぶんか、れきし、わざ、それらのすべてがきろくされていたのです（その中身はびつく

りするくらいたくさんで、小さなとしよかんだつたら、まるまるいつけんぶんくらいの本のじょうほうがまつてしまふほどだつたのです！。

カピバラのくにの人々は、自分たちのわざがいたずらにそとにもれてしまうことを防ぐために、そのわざのきろくを本に書くことはしませんでした。ですから、もしあなたが、カピバラのくにの中をすみずみまでしらべ上げていたとしても、かれらのことをきろくした、本や書きつけなどといったものは、ただのひとつも見つけられないことでしょう。それらはすべて、そのままでは見ることでできない、とくべつなすいしように中にかくされていたのですから。

老人の見せてくれたそのすいしうは、カピバラのくににいくつかあつたすいしうの中でも、とくに重要なものでした。その中にはいつているきろくは、カピバラのくにの中の人々から、長いねん月をかけて、すこしずつ集められたものだったのです。もし、お金を出して買おうとしたって、とてもねだんのつけられるようなものではありません。こんなないじで重要なひみつを教えてくれたのも、カピバラ老人が旅の者たちのことを、心からしんようしているからこそのことだったのです（読者のみなさんも、しーっ！　どうかみんなには、ないしよにしててくださいね。これは、かれらカピバルたちの、いちばんのひみつなのですから）。そして、このすいしうを守り、つぎの代へと受けついでゆかせること。それこそが、カピバラのしつせいにつかえていた、老人のやくわり

でした。

老人は、そのすいししようを静かににぎりしめました。すると、空中に広がっていたたぐさんのずけいや文字なども、ふっと静かに消えていったのです。

「さいごにわしができることは……」カピバラの老人は、手にしたすいししようをいつくしむように両の手でつつんで、いいました。

「このすいししようを守りぬき、このセイレン河を、静かに見守ることだけじゃ。」

老人はそういって、まどのそとに流れるセイレン河のことを見やりました。黒くすすけたまどからは、その流れをはつきりと見て取ることはできませんでした。しかし今は、それでよかったのかもしれない。きつと老人の目には、かつての美しい、きよらかな流れのセイレン河が、見えていたはずなのですから……。

そのとき、部屋のすみにいたあのきんぞくでできた馬が、老人のそばに歩みよりました。老人が、自分でよびよせたのでしょうか？　しかし、旅の者たちには、馬が心を持って、みずからの意志で老人のことをなぐさめにきたように、思えてなりませんでした。たとえそれが、きんぞくでできた作りものの馬であると、わかつていたとしても。

老人は、そんな馬の頭をだきよせて、たぐさんなでてやりました。老人の表じようは、今はとても、おだやかなものになっていました。

「わしは、このセイレン大橋の下に小屋をたてて、ここをついのすみかとすることをき

めた。かつての美しい、河の思いでともにな。この河はもう、セイレン河ではなくなつてしまったかもしれん。じゃが、わしにとつては、この河がセイレン河であることに、ちがいはないのじゃ。わしのふるさと、あの美しいくにのみずうみから流れ出る、きよらかなるセイレン河にな。わしは、この河とともに、このしょうがいをとじるつもりじゃよ。」

そうして、カピバラ老人の話は終わったのです。

あらはしほしに、セイレン大橋の上から通りすぎていくようでした。いくぶんか、雨の音も弱まっているように思えました。

旅の者たちは、しばらくは言葉を口にするのができませんでした。なんといいいのか？ どうにもすぐには、口をひらくことができなかったのです。

そして、さいしよに口をひらいたのは、旅の者たちのみちびき手であり、白の騎兵師団の長でもある、ベルグエルムでした。そんなかれでさえ、ようやくのことで、言葉をしほり出すことができたのです。

「なんといいいものか……、言葉ありません……。あなた方のくにに、そんなぼうきよがなされていたなどは……。わたしは、自分はずかしい。われらの力が、およばなかった。おわびのしょうもありません……」

ベルグエルムは、こぶしをかたくにぎりしめました。そのこぶしは、怒りと、かなしみと、くやしきで、ふるえていました。かれの心の中を、そのこぶしが、ゆうべんに語っていました。きつと、百の言葉で語るよりも、はつきりと。

そして、ベルグエルムは、いったのです。

「あなたのお気持ち。カピバルのほこりとたましいを、われら白の騎兵師団、しかと受けとめました。よこしまなる悪のおこないは、われらがかならずや、うち破つてみせませす。剣にちかう！」

ベルグエルムはみずからの剣をかたくにぎりしめ、それを胸の上にあわせました。これは、かれらのような騎士たちが、いのちをとしてもみずからのちかを守るといふ、そのけついをあらわすときに、おこなうことでした。そして、その気持ちはもちろん、その場にいる旅の者たちぜんいんも、同じだったのです。フェリアルもベルグエルムと同じく、剣を胸にあわせてちかいました。そして、ロビーもライアンも、こぶしを胸にあわせて、思いをかたくちかつたのです。

「そのお気持ち、わしにはなによりのすくいですじゃ。」カピバラ老人はそういうと、旅の者たちにむかつて深々と頭を下げました。「わしらのような運命をたどる者が、これ以上ふえることのないように、わしは心から願っております。」

老人の言葉に、みんなも深々とおじぎをして、せいっぱいの気持ちでこたえました。

そしてさいごに、ベルグエルムがいました。

「この世界は変わってしまいました。力いっぱい正しく生きている者たちが、ひどい目にあい、よこしまなる悪のやからどもが、大きな顔をしてのさばっているのです。わたしたちは、ともに協力しあつて、みんながびようどうで安心して暮らしてゆける世界を、取りもどさなければなりません。種族のちがいないなど、そんなものはかんけいがない。みんなが、このアーケランドの住人なのですから。アーケランドのぜんなるたみたちが、力をけつそくさせなければならぬときは、まさに今なのです。」

ベルグエルムはそういつて、みんなの方を見渡しました。ですが、みんなの気持ちはもはや、いうまでもないことだったので。かれらは大きくうなずいて、それからそれぞれが、おたがいの手を取りあつて、その心をかたくたしかめあいました。

「われらはかならずや、この世界をすくつてみせます。この剣と、そして、カピバラのくににちかつて！」

カピバラ老人の心は、今とてもおだやかでした。あとをたくすことのできる、すばらしき者たちに、出会うことができたのですから。そして、みずからの、くにを思うこの気持ち、けつしてむだではなかったということ、あらためて知ることができたのです。

「わたしは、今日あなたたちと出会うために、このいのちを長らえさせてきたといえる

じやろう。でなければ、あのときわし自身も、くにとともにほろんでおったはずじゃ。わしは、まんぞくじゃよ。あなたたちになら、安心して、この世界をたくすことができ。白の騎兵師団と、くにを思う者たち。この世界のきぼうじゃ。」

カピバラ老人は、そういつて静かに立ち上がると、だんろにまきをいくらかくべなし、ランプのあかりを消しました。あとには、だんろにもえるげんそう的なほのおの光だけが、小屋の中をゆらゆらと、てらし上げているばかりでした。

「さあ、夜もふけた。ゆっくり休んで、明日にそなえなされ。戦う者には、きゆうそくが必要じゃ。」カピバラ老人がそういつて、だんろのすみにおいてあつた鉄のなべのふたをあげました。

「なにか食べるのなら、わしの作ったシチューがありますぞ。よかつたら……」
「いただきます！」

じつは、みんなはすつごくはらぺこで、しかたがなかったのです。ミルクだけではちよつと、たりませんでしたから（ライアンだけは老人の話をききながら、こつそりバターキャンディーをなめていました）。

みんなはそのあと、がつがつ食べました（老人の作ったシチューなどは、あつというまにからつぽになつてしまつたくらいです）。パンのかたまりをまるごとに、バターをたつぷりつけて。ミルクのおかわりをたくさん。チーズをなんかけらも。こんなぐあ

いでした。ウルファの三人などは、持ってきていた食べものの八わりくらいを、いっきに食べてしまったのです（もしものときにそなえてとっておいた、ほし肉やコーンビーフのかんづめまでも、みんな食べてしまいました。もともとかれらウルファたちは、いっぱい食べるのでゆうめいでしたが、こんなに食べちゃったら、あとあとこまることにならない食べればいいんですけれど……）。ライアンは、「いくらなんでも食べすぎだよー」といいましたが、そんなかれでさえ、クツキーのふくろを三つもあけてしまいました。それほどみんな、今日の旅がこたえていたのです（ちなみに、ライアンはあまいものが大好きでしたので、かれのかばんの中には、お菓子ばかり、ぎっしりはいつていたのです。ほかのものがほとんどはいつていないくらいに……）。

みんなはすっかり食べ終わると、そのままどろのように横になりました（ちよつとおぎょうぎが悪いですけど、かんべんしてあげてくださいね）。だれもなにもいわず、もの思いにふけていたようでした。そしていつしか、いちにちのつかれがからだをしいしていつて、そのまま夢も見ないほどの深い眠りの中へと、かれらのことをひきこんでいったのです。

ロビーはさいごまで起きていました。かれがさいごに見たのは、ベッドで身を起こしたまま、まどのそとをながめている、カピバラ老人のすがたでした。ふるさとのくにごことを、老人はこうして、まいばん思っていたのでしよう。

ぼくは早く、前に進まなければ。こんなやさしい人が、これ以上、つらい目にあわなくてすむように。

ロビーは、うすれていくいききの中で思いました。そしてそのまま、かれもまた、深い眠りの中へと静かにさそわれていったのです。

もうぜんいんが眠りについてしまったころ。ロビーの持つ剣のさやのすきまから、すかに青い光がもれ出しました。そしてその光は、なにかをうったえかけるかのようにしばらくその場をてらしたあと、ゆっくりとふたたび、もとのやみの中へと消えていったのです。だれもそのことには、気がつきませんでした。

5、シープロンド

あざやかな朝やけが、静まりかえった空にはえていました。その中にふつと一羽二羽、小さな点のような鳥たちが、どこかをめぎして飛び立っていきましました。木々は雨のしずくをはらうのにいそがしく、大地はよろこびいさんで、ふりそそがれる光をからだいっぱいにあびようと、その身を大きく広げております。木、岩、土、すべてのものが、長いやみの果てにようやくおとずれたその光をかんげいして、新しいいちにちの新たなこきゆうを、はじめているところでした。

アーケランドに朝がやってきたのです。きのうのあらしが、まるでうそであるかのような、それはそれは美しい朝でした。風はそよ風ほどに吹いていました。ですがそれは、すこしもつめたくなく、ここちよく、この朝をむかえた者たちすべてに対してのおくりものであるかのように、吹いていたのです。空には、すじのようにほそい雲が流れていました。それは朝やけの光にてらされて、赤とこがね色のかげやきに美しくつまっていました。そしてその雲は、まるで遠いくにへとむかう旅人たちの一行であるかのように、ゆつくりと、南の方へと進んでゆくのです。

それは、まったくのへいわそのものでした。このまますべてが、ありのままに変わる

ことなくつづいてゆくのだと、うたがうよちもないくらいに。ですが今、このおとぎのくには、すこしずつ、そしてかくじつに、むしばまれていつています。悪意にみちたやみに、おおわれていこうとしているのです（まるで、虫歯のあなが気づかないうちに、すこしずつ大きくなっていくみたいに）。南の方から、ゆつくりと。

旅の者たちは今、すっかりじゅんぴをととのえて、みずからの騎馬たちをひいて、この美しきセイレン大橋のもとをあとにしようとしていたところでした。衣服もにもつも、すっかりかわかすことができました（それはもちろん、カピバラ老人の家のだんろのおかげでした）。そして、えいようときゆうそくも、まったくじゆうぶんとはいかないまでも、必要なぶんはとることができたのです（床にちよくせつもうふをしいて寝ましたので、しようじきなところ、あんまり寝ごこちはよくなかったです。でも、やねの下で眠れただけありがたいと思わなくっちゃ!）。

かれらの騎馬たちもまた、長旅で走り通しのからだを休めることができただけ、げんきを取りもどしたようでした（ぎんねんながら、橋の下にはかれらの食べものである草があんまり生えておりませんでしたので、そのぶんおなかはへっているようでしたが。ですから、またライオンが、かれらににんじんをいっぽんずつあげました。そしてにんじんは、それでおしまいです。ライオンもそんなにたくさんは、にんじんを持ってき

ていなかったのです。お菓子はどうも足りませんでした。でも、馬のよろこぶようなものはありませんでしたので。ライアンのたいせつな白馬メルも、いくぶんか、けがのぐあいがよくなったみたいです。しかしもちろん、このけがは長くは放つてはおけません。いつこくも早いちりようが必要なことには、いぜんとして、変わりはありませんでした（ライアンは朝起きてすぐに、メルのような見にいっくらいでした）。

旅の者たちは出発にあたり、さいごに、カピバラ老人におわかれのあいさつをおくろうとしているところでした。ベルグエルムとフェリアルが深々とおじぎをして、あらためて、そのけついを老人に伝えます（ちなみに、ライアンとロビーはゆうべ歯もみがないで寝てしまいましたので、今そのことを思い出して、大急ぎで歯をみがないところでした。ライアンが、「みがき終わるまで、ちょっと待ってて！」と騎士たちにはお願いしておいたのですが、どうやらかれらは、さきにあいさつをはじめてしまったようです。ベルグエルムとフェリアルは、ライアンとロビーが起き出してくる前に、すでに朝いちばんで歯をみがいていたのです）。

「ほこり高きカピバルのたまよ。われらは今ふたたび、ここにちかいます。あなたの思いを、けつしてむだにはさせません。かならずや、この世界のやみを晴らしてみせます。すべてのくにのたまがひとつとなつて暮らしていけるように。そのために、われらはさきへ進みます。」

カピバラ老人の表じようは、晴れやかなものでした。長年の思いが、ついにみたされたのですから。かれはもう、ひとりではありません。あとをたくすことのできる者たちを、きぼうそのものを、かれは得たのです。かれの思いはここから飛び立って、さまざま者たちの心にひびいていくことでありましよう。ですから、もうかれは、ひとりではないのです。

老人は静かに大きくうなずいて、このほこり高きふたりの騎士たちに、カピバルの敬礼をおくりました（ひたいに手をあて、それから胸に手をあてるというものでした）。

「このくにをたのみます。あなたたちに、のぞみはかかっておりますのじゃ。わしは信じておりませぬ。あなたたちのほまれ高き心が、きつと、悪をうち破ることじやろう。」

そして、旅の者たちはそれぞれの騎馬にまたがりました（おくれてやってきたライオンとロビーも、ここでいっしょになりました。「待つてっていったのにー！」とライオンはぶんぶんいって、ふたりの騎士たちのことをぼかぼかたいておりましたが）。

「ベーカーランドへついたならば、ことのしだいをすべて、アルマーク王にお伝えします。あとはわれらに、おまかせください。」ベルグエルムが騎馬の上からそういって、ペこりと頭を下げました。

「たのみましたぞ。それとひとつ。南の地にわれらカピバルの者を見かけることがも

しもあつたら、わしのことを話してやってくださらんか。くにのほこりは、守られてい
るといふことも。」(カピバラ老人の持つカピバルのほこりであるすいしよのかけらに
ついては、いづれときを見て、ふさわしい場所にうつすのがよいだろうといふことにな
りました。それまでは、やはりこのすいしよは、カピバラ老人の首にあるのがいちば
んふさわしいといふことになったのです。)

カピバラ老人がさいごにいうと、ベルグエルムは大ききうなずいてこたえました。

「しようちしました。かならず伝えます。どうぞご安心ください。」

そして三頭の騎馬たちは、いせいもよく、つづく新たな道のりへとむかつてかけ出し
ていったのです。

さあ、旅のさいかいです。きぼうへとつづく、新しい道のりへとむかつて。

セイレン大橋からシープロンドへ。つづく街道をかけながら、ロビーはさいごにうし
ろをふりかえりました。朝の美しい光の中に、すぎ去つてゆくセイレン大橋のすがたが
見て取れます。こがね色がかつた橋の石が、光をあびて、ぴかぴかとかがやいていまし
た(やつぱりこの橋を見るのは、明るいときにかぎります)。ですがそれも、あつといふ
まに小さくなって、ロビーのしかいからそのすがたを消していききました。ロビーはなん
ともいいよないさみしさをおぼえました。このセイレン河でのたいけんを、かれは

しょうがい、忘れることはないでしょう。セイレンのみずべのようなひげきは、あとにもさきにも、にどとあつてほしくはないと、ロビーは強く思いました。

ロビーはそれから、まっすぐ前を見すえました。ここからさきへ進んでいけば、ロビーの見たこともきいたこともないだろう土地が、広がっているのです。すべてがよき力に守られているとは、かぎりません。きつと、危険な場所も、悪しき力のしはいする土地も、たくさんあるのでしょうか。ですがロビーは、そんな場所でさえ、残らず自分の目で見てまわりたいと今は思うようになっていました。この世界をすくいたい。そのためには、目をそむけてはならないことがあるのだと。ロビーは、このはるか大むかしから受けつがれた、美しいセイレン大橋のかかるいにしえの地で、それを学んだのです。

広い街道が、ゆるやかにのぼりながらつづいていきました。まわりは、いちめんの森です。とちゆうたびたび、木々でさえずつていた鳥たちが、馬の足の音にびつくりして、ばさばさと大空へ飛び去っていきました。そのたびに、みんなは用心して空を見上げました。もしかしたら、きのう出会ったあのおそろしいデイルバグのかいぶつが、またやってくるんじゃないかと思ったのです。ですが、おだやかに晴れ渡ったこの朝の空は、あいかわらず、美しくかがやいているばかりでした。

しばらく進んだころ。森のずつとむこうに、そのいただきを雪におおわれた青くかが

やく山が、見えはじめてきました。その山はともこうごうしく、りんとしてそびえていたのです。そして、その山のふもとのあたり。その場所こそが、ほかならぬ、うつしみ谷とよばれる谷でした。

遠目に見るだけでも、すばらしいところだということがはつきりとわかりました。冬も近い今ごろのきせつであるにもかかわらず、その場所だけ、まるで春らんまんといった感じに、みどりがあふれているのです（ですから、よほどのへそまがりでもないかぎり、いいところだとだれもが思うはずです）。そして、ライアンのふるさとシープロンドも、そのうつしみ谷の中にありました（ですからこれまた、すばらしいくににきまつています）。

ロビーはそのみどりの谷を見て、すこし、気持ち晴れやかになりました。こんなにも美しい場所が、この世界にはまだまだあるのだと、自分の目でたしかめることができましたのですから。

「とつてもきれいいれひよ、うつしみ谷って。」

ライアンが、そんなロビーの心を読み取ったかのようにいいました。きのうもそうでしたが、ライアンって、人の心をさつするのがとくいみたいです（ちなみに、かれは今また、バターキャンデーをなめています）。さつき歯みがきしたばかりですのに！言葉が舌たらずなのは、そのためなんです）。

「もうじきだよ。早くロビーにも、見せてあげたいな。」ライアンが、にこにこしながらつづけます。

「楽しみです。はじめておとずれるくがライアンさんのくで、ぼくはうれしい。きつと、すばらしいところなんでしょうね。」ロビーはそういって、メルを背中をなでました。

「メルも、もうすぐ自分のくにつくんだってわかってるみたい。早くついて、けがをなおしてあげたいね。」

ロビーのその言葉をきいて、ライアンはちよつと、どきつとしてしまいました。ライアンは、じつはやつぱり、メルのけがのことが気がかりでならなかつたのです。ロビーによけいな心配をかけさせないようにと、かれはあえて、気楽な感じをよそおっていました。ロビーはもうとつくに、そのことに気づいていたというわけでした。

ライアンは、ロビーに対しては、もっとすなおになつた方がいいと思ひました。出会つてまだ、いちにちさえたつておりませんでした。なんだかもうロビーのことが、ずつと前からの友だちであるかのように、ライアンには思へたのです。ライアンは、そんなロビーのことをごまかそうとしていた自分が、ちよつとはずかしくなりました。

「ありがとう。」ライアンは前をむいたまま、それだけいいました。それは、多くを語るよりも、もつと気持ちのこもつたひとことでした。

「きつと、すぐげんきになるよ。」

ロビーの言葉に、ライアンはだまって、こくんとうなずきました。

それからすこしたって、あたりはまた、岩にかこまれた山道へと変わっていききました。ですがこの山道は、きのうまでの岩の道とはあきらかにちがっていました。このあたりの岩は、ガイラルロックたちがいた場所のような、からからのかわいた岩とはちがって、色あいもくつきりあざやかで、水もたくさんふくんでいたのです。それは、このあたりの土地が、うつしみ谷から流れ出るきよらかなわき水によって、大いにうるおっているからでした。このあたりの土地の感じを、もし言葉でいいあらわすとしたら、なんといったらいいのでしょうか？　いってみれば、「今を生きるエネルギーにみちているところ」といった感じだと思います（わたしのつたない表げんできようしゆくなのですが）。この場所に立っているだけで、足のさきから、そしてからだ全体から、力がはいりこんでくるかのような、そんな感じをおぼえるところでした。

そして今までの道のりとはちがう、いちばんはつきりとしているところがあります。それは、その岩場やあちこちの地面に、たくさんの花やみどりが生いしげっているとうところでした。なにしろ、ガイラルロックたちが集まっていたあのおそろしい岩場では、花などはおろか、かれ草のいっぽんでさえ、見つけるのがむずかしいほどだったの

です。ですからこのちがいは、だれの目にもあきらかでした。道のまわりをかこむ岩には、たくさんのすきまがあつて、そのひとつひとつから、たくさんの葉をつけたつたのよ様な植物がのびております。そしてそのつるには、とてもあざやかな、赤やむらさきやもも色の花々が、きそつてさきほこつていました。

「ルインビスの花だよ。とつてもいいにおいでしょ。」ライアンがいました。なるほどかれのいう通り、さきほどから、あたりはとてもいいにおいでみちていたのです。それは、この岩場に生えている、このルインビスとよばれているらしい植物の花のせいでした（ところでライアンは、今はキャンディーをなめるのをひとまずやめていました。著者のわたしにとつては助かります。ライアンの言葉がずつと舌たらずのまんまじや、書きづらくてしかたありませんから！ それに読者のみなさんだつて、きき取りづらいですよね）。

「シーブロンドでは、この花から、こう水や絵の具なんかを作るんだよ。一年中さいてるから、あちこちで手にはいるしね。それにね、食べてもとつてもおいしいんだよ。」ライアンの言葉に、ロビーはびつくりしてしまいました。花を食べるなんて、ちよつと變つておりましたから。

ライアンはそういうと、メルをかべぎわによせて走らせながら、手をのばして、さいている花をひとつかみ、ぱしつともぎ取りました（ちよつとかわいそうでしたけど）。花

のひとつをかるくはらって、口にはこびます。

「あまずっぱくておいしいよ。ロビーもどうぞ。」ライオンは花をみつっぱかり、ロビーに渡していました。

「ありがとう。」ロビーはおれいをいって、その花をひとつ、口にに入れてみたのですが……、そのときのロビーの表じょうといったら！ 思い出しただけでもおかしいです。つまり、ひつじの種族であるライオンにとつては、その花はとてもおいしいものでしたが、おおかみ種族であるロビーにとつては、まったくそうではないということでした（ようするに、まずいってことです）。

「おいしいでしょ。もつと食べる？」ライオンがたずねてきました。かれはまったく、ウルファの味の好みのことなんて、このときは知りませんでしたから、ただじゅんすいに、しんせつ心からそういつてくれたのです。ですけど、ロビーにとつてはもうたまりません。

「いやっ、もういいです！ これでじゅうぶん！」ロビーは「ははは……」と笑つてうまくごまかしましたが、ライオンに気づかれぬように、花をぺっぺつとはき出すのにくろうしたのです……。

「楽しみにしててね。シープロンドについたら、みんなのぶんも山ほどあるから。」ライオンの言葉に、ロビーはひきつって笑うばかりでした。

さて、そんな（楽しい）やりとりをしつつ、一行の騎馬たちはさらに進んでいきました。こんなふうにはほのぼのと進めるのも、この場所がへいわで安全な土地だからこそなのです（あんなにこわかったきのうの道のりのあとですもの、ちよつとくらいこんな道のりがあつてもいいですよね）。

道はそれから、切り立つがけにそつたゆるやかなのぼりの道へとつづき、谷のおくへおくへとどんどんはいつていきます（ここは第三章の終わりに、セイレン大橋の上でライアンがいつていた、そのがけの道でした。今は明るくおてんきもよかつたので、この道も安全に通ることができていましたが、やつぱりライアンのいう通り、あらしの夜にこのがけの道を通るのは、とても危険なことでしょう）。

しばらくいったところから、道のわきやまわりの岩のすきまから、たくさんの小さな水の流れがわき出しているのが目につくようになりました。それらはあちこちに小さな水いずみを作っていて、すみきつた水をたたえております。そしてその水を飲み、りすや、岩うさぎや、そのほか白くてふかふかした変わった生きものたち（これはユピユピとよばれている、まるっこくておくびょうな生きものたちでした）などが、やつてきていました。

「もう、シープロンドはすぐそこだよ。ここをのぼりきれば、シープロンドの北の入り

口につくからね。」

そしてライアンのいう通り、そこから半マイルもいかないくらいのところ。さいごの坂を越えたところで、一行の目の前に、白いれんがづくりのりっぱな門が、とつぜんにあらわれたのです。

旅の者たちは、ついにシープロンドへとやってきました（せいかくにいえば、シープロンドのくにはすではいっていましたが、ここでいうシープロンドとは、シープロンドのそのみやこのことをさしているのです。くにの名まえとみやこの名まえがおんなじでしたので、ちよつとややこしいんですけど）。みんなが今いるところは、北の土地からやってきた者たちにとっての、シープロンドのみやこの中へとはいる、ゆいいつの谷の門だったのです。

この場所は、シープロンドのくの中でも、いちばん高いところにあたりました。ずっとゆるやかにのぼってききましたので、あんまりよくわかりませんでした。ここはもう、うつしみ谷の、そのてっぺんだったのです（もつとも、シープロンたちがせいなる山とあがめているタドウーリ連山は、ここからでもさらにそのすがたを見上げなければならぬほど、はるかな高きをほこっていました）。

そのうつしみ谷のてっぺんに、街道のはしからはしまでをつなぐようなかたちで、シープロンドのみやこの北門がつくられていました。ですから、門のそのここからで

は、まだそのみやこの中を見ることのできなかつたのです。シープロンドのみやこは、この門のむこうにあるのですから。ですが、この門を見た者には、ただそれだけで、シープロンドというくにのみやこのすばらしさがわかってしまうことでしょう（じつさいロビーがそうだったのです）。それほどに、その門は美しいのです。

まずまつさきに目をひかれるもの。それは、この門をつくるのに使われていた、白いれんがでした。いや、れんがといえるのでしょうか？ それは、ガラスのような、こおりのちようこくのような、すいしようのような、なんともいえない美しさを持つ、半とうめいのふしぎなしろものだったのです（おどろいているロビーにむかつて、ライアンが「この門はね、こおり砂糖でできてるんだよ。」といったので、ロビーはすっかり信じて、「へええー」と感心してしまいました。もちろんそれは、ライアンのじょうだんでしたが、ロビーはしばらく、信じきってしまっていたのです。あとでうそだとわかつたので、ちゃんと怒りましたけど）。

そのふしぎな白いれんが（とりあえず白いれんがとよばせてもらいます）でできた、とりでのような門のまん中に、同じく白い、ふしぎな木でつくられた大きなとびらがひとつ、つけられていました（ペンキがぬつてあるわけではなく、この木はもともと白いのでした）。そしてそのとびらの上に、とんがりやねの小さな見張り台がふたつあって、そこにはなんんかかシープロンの者たちが、見張りに立っていたのです。

かれらは、ライアンと同じような白くて美しい衣服をまとっていて、そして同じく、ふしぎなかがやき方をする白いマントをはおっていました。手には、流れるようなデザインのもの、こまかいさいくのなされたやりのようなものを持つていましたが、これは戦いにもちいるというよりも、かれらの見た目を美しくさせるために持つているものだったのです（じつさいかれらは兵士ではありません。シープロンの王、メリアン王につかえる者たちなのであって、だれかや自分の身を守るためには、武器をふるおうとはしないのです）。そしてかれらは、もどってきた旅の者たちのすがたを見て取ると、大よろこびでさげびました。

「王子たちがもどられた！　ライアン王子がもどられた！　みな、ごぶじだ！」

かれらは、手にしたかざりやりを天高くかかげ、口々によろこびの声を上げました。そしてそれと同時に、旅の者たちをみやこの中へとむかえ入れるその白い門が、ゆつくりと内がわにひらかれていったのです。

大きくて重いとびらの、きしむ音が、こだまとなつてあたりの山々にひびき渡つていきます。そして旅の者たちが門に進んでいくと、シープロンたちのよろこびの声は、いつてん、おどろきの声へとかわっていききました。

今かれらが見ていたのは、ライアンの白馬メルに乗っている人物でした。ですが、ライアンではありません。かれらは、そのうしろに乗っている人物。いい伝えのきゆうせいいしゆであり、黒のおおかみ種族の者である、ロビーのを見ていたのです。かれらは口々に、となりの者たちと言葉をかわしあっていました。「ほんとうだった。」とか、「すくいのぬしだ。」とか。中には、シープロンのでんとう的な言葉で話す者もいて、その場にいる三人のウルファたちには、なんといつているのか？ わからないものまでありました。

ロビーはなんとも、いごこちの悪い気持ちになりました。まるで、めずらしい生きものでも見ているかのように、たくさんの目が自分のことを、じろじろかんさつしていたのですから（ちゆうもくをあびたいと思う人は多いでしょうが、こんなふうじろじろ見られるのは、ロビーでなくたっていやなものだと思います）。ロビーは思わず、うつむいてしまいました。

そんなロビーのことを気づかって助け船を出してくれたのは、やっぱり、シープロンの王子であるライアンでした。ライアンは、シープロンドでは衛士とよばれているその見張りのシープロンたちにむかって、大きく右手をふり上げると、びつくりするくらいの大声でどなったのです（こんな小さなからだの、どこから出るんだというくらいに）。

「気をつけーえ！ れいつ！」

どなられた衛士たちの、あわてふためいたことと云ったら！ かれらは大あわてでからだをぴーん！ とのぼすと、そのままちよくりつふどうのしせいになりました。それから、みんないつせいにぺこりと頭を下げて、れいをしたのです（さすがはシープロンドの王子さまです。ちよつとライアンのことを、見なおしてしまいましたね）。

「みんな！ ーここにいるのは、わがくにのだいじなお客さんなんだよ！ こまらせたりなんかしたら、あとでおしおきなんだからね！」

ライアンの言葉をきいて、衛士たちの顔はまっ青になりました。かれらは、ライアンのいう「おしおき」のことを、よく知っていたのです（どんなものなのかですつて？

それはとりあえず、読者のみなさんのごそうぞうにおまかせすることにしましょう。わがままな王子さまの考えつきそうなことだということだけ、お伝えしておきます）。

それから大急ぎで、あたりに高らかなラツパの音色がひびき渡りました。これは重要な人物がきたということをしらせるためのもので、とてもかくしきの高いものでした。そしてその音色にひきつづいて、シープロンドのみやこの中から、同じラツパの音色がかえってきたのです（これで旅の者たちが帰ってきたということが、いち早くみやこの中へと伝わりました）。

それから一行は、白い木の門をくぐりぬけ、ついにそのシーブロンドのみやこの中へとはいりました（といつても、ここはまだシーブロンドのみやこのそのはしつこで、たてもものなどもほとんどありませんでしたが。人々が暮らしているせいかつの場は、ここからもうすこしはいった、みやこのまん中にあつたのです）。門をぬけると、そこは石だたみの広場になっていました。しきつめられているのは門のかべに使われていたものと同じ、すき通るようなあの白いれんがです。そのうえ石だたみの下にも白い砂がしいてあるらしく、半とうめいのれんがを通して、その美しい地面を見通すことができるようになっていました（ですからはじめてここをおとずれたロビーは、はじめ、雲の上を歩いているんじゃないかと思つたほどののです。さすがはシーブロンド。「白きひつじたちのくに」といわれるだけのことはありますね）。

その広場からみやこのまん中へとつづく、いっぽんの道があつて（この道も広場と同じく、白い石のれんががしきつめられていました）、その両がわにはふたりの衛士たちが見張りに立っていました。そして今、その道から二頭の白馬たちに乗つた者たちが、こちらへとむかつてやってきたのです。

白馬たちに乗っていたのは、シーブロンドの衛士たちよりもつとின்しよ的な衣服（ごうかな衣服といった方がわかりやすいかもしれませんが）に身をつつんだ、ふたりのシーブロンたちでした。ひとめで、かれらがとても身分が高く、とても品のよい者た

ちであるということがわかりました。りっぱな身なりとゆうがで上品な立ちふるまいは、もちろんのこと。その高いちせいを感じさせる美しい顔立ちも、かれらのいんしゅうを大きく高めていたのです（ほんとうはライアンだって、だまっていればそんな感じなのです。なにせライアンは、このくにの王子さまなんですから。ただし、おとなしくしていることが、かれにできればの話なんですけど）。

かれらは旅の者たちの前にさつそうとやってくると、みごとな身のこなしで馬からおり立ちました。そして、とてもれいぎ正しくおじぎをしてから、まずはライアンにむかって、いったのです。

「王子、ごぶじでなによりです。みな、心配いたしておりました。さく夜のうちに、もどられるはずだということでしたから。」

それを受けて、ライアンがこたえました。

「ありがとう、ルース、ホロ。ちよつと、よそうがいのことばつかり起こつたものだから、おそくなつちやつた。でも、ぼくならだいじょうぶ。」

ライアンの言葉に、かれらはひとまずほつとして、胸をなでおろしました。かれらはメリアン王のそつきんとして、シープロンドの王宮につかえている者たちだったので（そつきんとは王さまのそばにひかえて、王さまの手助けをしたり、いろんなちえを出したりする者たちのことです）。かれらは王宮の中でも、とくに身分の高い者たちでした。

ちなみに、ルースとホロというのはかれらのニツクネームで、ほんとうの名まえはルーミアンにホロウノースといいました。ニツクネームでよんでいるのは、ライアンだけなんですけど。

「それより、メルがたいへんなんだ。けがしちやって。早く、ホーシアンのしんりようじよにつれてつてあげて。」ライアンはそういうと、メルの背から地面におり立ちました（あわててロビーもおりたのは、いうまでもありません。それを見て、ベルグエルムとフェリアルの方たりも、かれらにあわせて馬からおりました）。

ライアンの言葉に、ルースアンとホロウノースの方たりは、すぐにもつともてきせつな行動を取ってくれました（ふたりはライアン王子がほんとうにこまっているときの顔を、よく知っていたのです。そして今、ライアンの表じようはまさにそれでした）。ルーミアンは衛士のふたりをよぶと、かれらにメルのことをたくしていいました。ルー

「王子の馬をたのむ。ホーシアンにつれていって、すぐにもてもらうように。」

そして衛士たちは、きびきびと動いて、メルをつれて、つづくみやこのおくへと去っていったのです（ホーシアンというのは、動物せんもんのお医者さんがいるところなのです。このシーブロンドのお医者さんたちは、アークランドの中でも、いちばんのいりようじゆつをほこっていました。ですからライアンも、メルのことを安心して、送り出すことができたというわけだったのです。ほんとうならメルといっしょに、自分も

いきたかったのですが、今はなによりもまず、きゆうせいしゅであるロビーといっしょに、お城へともどらなければなりませんでしたから。

それはともかくとして……、よかった！ これでメルも、ひと安心というものです。わたしもメルがけがをしてからというもの、早くこの場面をお伝えしたくてならなかったんです。

メルが足早に去っていくのをすっかり見とどけると、ルースアンとホロウノースのふたりは、ふたたび旅の者たちにむかっていいました。

「らいひんの方々。ベルグエルムどの、フェリアルどの。たいへんな道中であつたとお見受けいたします。王子の身をお守りいただいて、どうもありがとうございます。」

かれらの言葉に、ベルグエルムとフェリアルのはふたりは、ぺこりと頭を下げてこたえます。

「そして……」

ルースアンとホロウノースのふたりは、そこでようやく、ライアンのとなりに立つている人物のことを見やりました。おおかみ種族の者たちのくに、レドンホール。そこで起こったふうなできごとのことや、みらいにのぞみをつなぐ、ひとつのいい伝えのこと。それらのことは、すでにかれらもよく知っていました。そして今まさに、目の前にいるこの人物こそが、そのいい伝えのきゆうせいしゅほんにんにほかならなかったのだ

す。

かれらはとてもおちついたもののいい方をする者たちでしたが、そんなかれらでさえ、すくなからずのこうふんをおさえることができませんでした。かれらが話しかけた人物。それはもちろん、この物語の主人公である、ロビーだったのです。

「「くらいほうを心よりかんげいいいたします。ようこそシーブロンドへ。われらは、できるかぎりの協力をおしみません。」

その言葉はひかえめなものでしたが、とても気持ちのこもったものでした。かれらはとても頭がよく、そして、場をわきまえることのできる者たちでした。かれらはロビーのようにを見て、この人物にはひかえめにせつするのがいちばんよいと、すぐにさとつたのです（それができなかつた見張りの衛士たちは、おかげでライアンに、どやされるはめになったわけですが）。そんなふたりの気づかいかんしゃして、ロビーはせいっぱいの心をこめていいました。

「お心づかい、ありがとうございます。ルースさんに、ホロさん。ぼくはロビーといいます。あなた方のくににこられて、ぼくはとてもうれいします。よろしくお願いします。」ロビーはそういって、まずはペこりとおじぎをしました（ちなみに、ロビーはかれらのほんとうの名まえを知りませんでしたので、ライアンがよんだニックネームのことを、かれらのほんとうの名まえだと思ってしまうました）。

「できれば、ずっといたいくらいなんですけど……」

ロビーはそこで言葉をにこしました。が、ルースアンとホロウノースのふたりには、その意味がよくわかっていました。かれらは、旅の者たちのじじようをよくりかいしていたのです。ロビーたちがあまり、ゆつくりしているわけにはいかないということ。

「心得ております。ですが、すこしばかりのきゆうそくは、今のあなた方にはふかけつでしょう。とくに、ベルグエルムどの。その肩のきずは、すぐに医者にみせなくては。どうぞご安心を。わがくには、うでのよい医者がおりますので。すぐによくなりましょう。」

ルースアンはそういうと、旅の者たちをひきつれて、みやこのおくへとつづく白い小道にかれらのことをあんないしていききました。

「ごあんないいたします。どうぞごちらへ。」

それから、かれらのことを乗せたたくさんの騎馬たちが、広場からつづくその白い小道の上を、シープロンドの王宮へとむかってこうしんしていったのです（この小道はとちゅうでふたつに分かれていて、ひとつはみやこのまん中へ、もうひとつはシープロンドの王宮へとつづいていました。そしてかれらが進んでいくのは、その王宮への道なのです）。れんがの道をふみならず馬のひづめの音が、かろやかに、そして高らかに、シー

プロンドのくにの中へとひびいていきました（ちなみに、メルがいつてしまったので、ライアンは今ルースアンの騎馬に乗っていました。どっちが前に乗るかで、ひともんちやくあつたのですが、けつきよくライアンの方がうしろにまたがりました。そしてロビーは、ホロウノースの騎馬に乗っていったのです）。

みどりにかこまれた小道をゆくと、やがてまたべつの広場に出ました。そこはさきほどの広場よりも小さい広場でしたが、すみには白い石でつくられたベンチとテーブルがいくつかならんでいて、ひと休みができるようになっていました。そしてここにきゆうけいじよをつくつた、いちばんのりゆうがありました。そのりゆうはだれの目にもあきらかだつたのです。

ここはこのシープロンドのくに中を見通すことのできる、てんぼう台でした。そして、その景色のすばらしいことといたら！　じっさいにその景色を見ることのできた人は、ほんとうにしあわせな人だといえることでしょう。そしてだれもが思うはずです。ここは、らくえんにちがいないと（この景色をいいあらわす言葉は、なかなか見つからないと思います。ですけど、それでは読者のみなさんに申しわけが立ちませんので、なんとか、わたしのつたない言葉できようしゆくなのですが、説明させていたきたいと思います。できるかぎり、きおくと頭をふりしぼりますので、どうぞごかんべんください）。

広がっている景色は、まさにしぜんの美しさそのものでした。木々は、目もくらまなばかりのあざやかなみどりの葉にみちていました。あちらにもこちらにも、まんかいの花々がきそってさきほこっていました。そのあいだを、さまざまな宝石の色をしたちようや小鳥が、楽しそうに飛びかっけております。美しい水の流れが、あみの目のようにせせらいでいるのが見えました。かがやく銀のしぶきを上げる、たくさんのたき。そしていずみ。みどりの草原では動物たちがのんびりと草をはみ、あそび、くつろいでいました。

それは、だれもが頭の中だけに思っているだろう、らくえんのすがたそのものでした。それが今、そのままのかたちとなって、目の前に広がっていたのです。そしてその中に、それらのものにまったくけこむようなかたちで、白いれんがづくりの家々がたちならんでいました。それらの家々は、木々の生えるのをさまたげず、水の流れるのをさえぎらず、ただしぜんのあるのままのすがたにあわせて、たてられていました。まるで、すべてがあるべきところにあるといったように、それらのものは、そこにあったのです。

みやこの中で大きくいんしよ的なのは、あちこちにたてられている、とんがりやねの大きな白い塔でした。これらの塔は、このシープロンドのみやこを（てっぺんからふもとまでじゅんばんに）おうぎじょうに大きく四つの部分に分けている、四つの白い

じようへきの上にとつていたのです。このじようへきはもともと、そこからの敵のこうげきを防ぐための、守りのかべとしてつくられたものでしたが、ただのいちどでさえ、そのほんらいのやくめを果たしたことはありませんでした。つまりそれは、この美しいひつじたちのくにシープロンドを、こうげきしようなんて考えた者が、今までだれひとりとしていなかったからなのです（これはじつによるこばしいことです）。

しかし今では、このへいわで美しいシープロンドの中でさえ、けつして安全だというわけではありません。黒の軍勢のおそろしき、ひれつき、ひきようさは、まこと、われわれのそうぞうからかけはなれていたのですから。

ですけど、今はただ、このシープロンドのくにの美しきに見とれることにしましょう。守りのためにつくられたはずの白いじようへきは、今ではこのシープロンドの美しさをいつそうひき立てるためのかざりものとして、その新たなやくめを果たしていました。白い塔にはすべて、銀色の地に水色のししゅうのなされた、きれいなはたがつけられていました。それらはたは、そよ風を受けてひらひらとたなびき、ふりそそぐ朝日を受けて、きらきらとかがやいております。じようへきの上にたちならんだ、それらはたのついた白い塔を、しんじゆにたとえるのなら、白いじようへきは、まるで、それらのしんじゆのついた首かざりのようでした。そしてシープロンドのみやこには、こんなにも美しい白い首かざりが、四つもかかっていたのです。

これらのものが、うつしみ谷のてっぺんであるこのてんぼう台の、はるか下にまでむかつて、ゆるやかなだんだんになってつづいていました。そして、いちばん下のじょうへきのむこうには（つまり四番目の首かぎりのむこうには）、見渡すかぎりのはたけやまきばが広がっていたのです。たくさんの風車がゆうゆうとまわり、へいわでのどかなシープロンドのいんしやうを、ことさらに強めていました。

この場にいる者たちの中ではじめてこの景色を見たのは、ロビーただひとりでした。ライアンはもちろん、ここの生まれなのですから、ほとんど毎日（たまのお出かけのときはべつとして）この景色を見て育ったのです。そしてベルグエルムとフェリアルも、すでにこのシープロンドにしばらくいたいざいしているあいだに（つまりロビーが見つかるまでのあいだです）、この美しい景色をじっくりとながめることができていました（うらやましいかぎりです）。

このシープロンドのすばらしい景色は、きつとなん時間見ていたって見たりないくらいに思うことでしょう。ですけど、このてんぼう台に夕方までゆつくりと、お茶とケーキをいただきながらとどまっているわけにもいきません（それができたらさいこうなんですけど）。ですからみんなは、なごりおしみながらも、このみりよく的な景色の広がる高台の小さな広場を、しぶしぶあとにしました（じつさいここにいたのは、時間にしてせいぜい一分くらいでした。なんてかわいそうなロビー！ かれには、あとでまたゆつ

くりと、この景色を楽しんでもらいたいものです。

てんぼう台のある広場をすぎると、白いれんがの小道は、生いしげる木々の中へとつづいていきました。道の両わきには、はじけるようなみどりの葉をつけた大きな木が、すきまなくならんでおります。それらの木々ののびたえだが、道の上にもまで大きくせり出していて、みんなはさながら、森の中に切りひらかれたみどりのトンネルの中を進んでいるかのようでした。えだには、たくさんの鳥たちがとまっているのが見て取れました。朝の美しい光が木もれ日となって、そのえだのすきまからふりそそいできます。それらはまるで、おうごんの光のシャワーのようでした。その光のシャワーをあびながら進む一行のことを今、鳥たちのさえざる美しい音楽が、やさしくかんげいしてくれていたのです。

「ずいぶんと、人になれているんですね。ぼくのいた森にも鳥はいたけど、ぼくのことをこわがって、ただの一羽だつて、こんなそばにまでよつてこなかったのに。」ロビーがそういって、にが笑いを浮かべました。ロビーのいう通り、このシープロンドの鳥たちは、こんなにたくさんの騎馬たちがすぐそばにまでこうしんしてくるといふのに、まったく飛び去ってしまうそぶりすら見せなかつたのです。馬の背から手をのばせば、すぐ手がとどいてしまいそうでした。

「シープロンドの鳥たちは、ほかの生きものをこわがらないんだよ。かれらをおそう

敵もないから。みんな、仲間だと思ってるみたいだね。」ライアンがそういって、右手の人さしゆびを、頭の上のあたりにすつとさし出しました。するとそのゆびに、ぱたぱたと一羽の小さな水色の鳥が飛んできて、とまったのです。小鳥はそこで、のんびりと毛づくろいをはじめましたが、ライアンがそつとゆびさきを上げると、ふたたびもとの木のえだの上へともどつていきましました（ためしにロビーも同じことをしてみたのですが、飛んできた鳥はロビーの頭の上にとまってしまいました。しかも、いちどに五羽も！ あわてて首をふつたロビーのことを見て、みんなは思わず笑ってしまいました）。

まこと、このシープロンドにいるかぎり、危険はまったくかやのそとといった感じでした。きのうのおそろしいけんも、セイレン河のあの変わり果てたすがたも、みんな夢だったんじゃないかと思えるくらい、ここはへいわそのものに見えたのです。

そしてみんなの心が、げんじつのおそろしさを忘れてしまいそうになっていたころのこと。不安やきょうふからかいほうされて、つかのまのへいわにひたりきっていた、そんなおりもおり。かれらのなごやかなこうしんを、とうとつにうち破るものが、道のゆく手からあらわれました。

それは二頭のはい色の騎馬たちでした。乗っているのはそれぞれにひとりずつ、われらが騎士たちと同じ服そうをした、おおかみ種族の者たちです（かみの毛もしつぽも、もちろんはい色です）。かれらはこの白いれんが道を大急ぎでかけてきたらしく、ロビー

たち一行にはちあわせしたときにも、すぐにはとまれず、いったん大きく通りすぎてしまつてから、あわててひきかえしてきたほどでした。そしてみんなの騎馬たちは、この二頭の騎馬たちがあんまりとつぜんにかけてきたものですから、すっかりおどろいてしまつて、そのためあたりはひととき、大きわぎとなつたのです。騎馬たちは大きくいなくて、じたばたとあばれました。乗馬のけいけんゆたかな者たちがたづなをひいていなかったのなら、みんなはたまらずに、ふり落とされてしまつていたことでしょう(じつさいロビーはあわやのところで、馬から落つこちずにすんだのです。そのぶん、しがみつかれたホロウノースは、馬をあやつるのにだいぶくろうしましたが)。そのくらしいいきおいで、この新たな二頭の騎馬たちはあらわれました。

それからようやく、ぜんいんの騎馬たちがおちつきを取りもどすことができたころ。新たにとうじょうしたその二名のウルファの騎士たち(これはもうどう見たつて、ベーカーランドの白の騎兵師団の騎士たちだったのです)にむかつて、口をひらく者がありました。それは、かれらのみちびき手である白の騎兵師団の長、ベルグエルムだったのです。

「ハミール！ キエリフ！ これはなにごとだ！ この美しい友人たちのくにを、かくも荒々しく馬でかけまわるとは！」

ベルグエルムの(おしかりの)言葉に、ハミールとキエリフとよばれたふたりの若き

騎士たちは、うやうやしく頭を下げ、失礼のだんをおわびしました。

「申しわけありません！ よんどころなきじじよのゆえ、どうかごぶれいをおゆるしてください！」

いつもとてもれいぎ正しいはずのかれらのような騎士たちが、ここまであわてて、荒つぽくやつてくるなんて、なにかよほどのじじよがあつてのことのようです。いたいどうしたというのでしょうか？ かれらの言葉に耳をかたむけてみましょう。

「よくぞごぶじでもごられました。ライアン王子も、よくぞごぶじで。それと……、お！ そちらのお方が、われらがきゆうせいしゆであられますか！」

ふたりの騎士たちはまずあいさつをかわし、それから、ロビーのことを見ておどろきました。かれらのよく知っているあのいい伝えの黒き同ぼうが、今こうして、目の前にいるのですから、それもとうぜんのことだったのです。ですがかれらには今、そんなロビーのことでさえ、じつくりかんさつしているよゆうすらありませんでした。それは、ここへきたほんらいのもくてき。この美しいシープロンドのくの中を、ひじょうしきにも全力で馬を走らせるはめになった、そのわけが、今のかれらの心を、すっかりみだしてしまっていたためだったのです。

「ベルグエルム隊長、フェリアル副長。わたくしどもにとっての、いちだいじたるできごとが起りました。北門にあなた方がとうちやくされたとのほうこくを受け、われら

はいっくも早くそのことを伝えるべく、はせさんじたしだいなのです。」

かれらはベルグエルムとフェリアルの旅のともとして、ベーカーランドからいっしょにやってきた、騎士たちでした（つまり、かれらは四人でベーカーランドを出発したのです。ちなみに、フェリアルは隊長のつぎにえらい、副長だったんですね。どうりで、剣のうでも立つはずです）。

この若き騎士たちのことをかんとんにごしようかいますと、ハミールはナシユガー家の長男で、なかなかの好青年です。そしてキエリフは、同じくアートハーグ家の長男で、これも負けないくらい好青年でした。剣のうでも、隊長と副長にまではおよばないとしてもなかなかでしたし、頭もよかったです。つまりひとこといえば、ふたりとも、「りっぱな騎士」たちでした。ですから、こんかいのこの重要なにんむの旅に、かれらがえらばれたのも、しごくとうぜんのことだったのです。そしてそんなふたりの騎士たちが今、みんなが思いもよらない、たいへんなできごとのことを語りはじめました。

「ついさきほどのこと。せいかくには、今から一時間ほど前のことです。メリアン王の王宮に、一羽のたかが飛んできたのです。それはまさしく、われらベーカーランドの者たちのもちいる、でんれい用のたかでした。そしてその足には、おそれていたことに、まっ赤なはたぬのしるしがくりつけられていたのです。」

若き騎士たちの言葉に、ベルグエルムとフェリアルのふたりは大きく表じようをくも

らせました。それはあきらかに、なにか悪いことが起こったということをあらわしているものでした。じつは、騎士たちの言葉にあつたまっ赤なはたぬのというのは、かれらベーカールンドの者たちもちいている、れんらく用のあいずのひとつだったのです。そしてそのあいずは、ごそうぞうの通り、とてもよくないことが起こったという悪いしらせをあらわすためのものでした（もしこれが青いはたぬのであつたのなら、ほんたいによいことが起こったということをあらわします。そのほか白やきいろなど、さまざまなものがありました。こんかいはその中でも最も悪い、もつとも見たくない、赤いはたぬののしるしが、そのたかの足にくくりつけられていたというわけでした）。

ベルグエルクの表じようはこわばり、こわいくらいでした。ロビーは不安げに、そんなかれらの顔を見まわすばかりです。いったいなにが起きたのか？ それは、騎士たちのつぎの言葉によつてあきらかとなりました。

「そのはたぬには、手紙がついておりました。さし出してもとは、ベゼロインのとりです。それによれば、われらのふたつのとりでのうちのひとつ、リュインのとりですが、敵のこうげきによつて落ち、うばわれたというのです。」

「そんなばかな！」フェリアルが思わずさげびました。「われらはついこのあいだ、そのとりでを通過つてここへきたんだぞ！ とても信じられない。それはほんとうなのか？」

フェリアルという通り、かれらはベーカーランドを出発してから、ティーンティーンの大河にそってつくられた、それらふたつの通りでを通って、この北の地へとやってきたのです。それらの通りとは、ひとつはベゼロインの通りで、そしてもうひとつが、リュインの通りでした。これらの通りでは、ワットの黒の軍勢のしんりやくをおしとどめるためにベーカーランドがきぎずいた、大いなる通りでした。ふたつとも、このアーランドでもほかにいるを見ないほど、大きくてりっぱな通りでだったのです。もしこれらの通りでがなかったのなら、ベーカーランドの人たちはいちにちだつて、安心して眠ることなどはできないでしょう。それほどに、これらの通りではかれらにとつてだいじなものでした。

そして、それらの通りでのうちのひとつであるリュインの通りでが、敵の手によって落ち、うばわれたというのです。ですからこれは、ベーカーランドだけでなく、このアーランド世界に住むすべてのぜんなるたみたちにとつての、いちだいでした。フェリアルがうたがってかかったのも、むりもないことだったのです。とても、そんなことは信じられませんでしたし、信じたくありませんでしたから。

ですがこれは、まぎれもないじじつでした。それは、つづく若きウルファの騎士、ハミール・ナシユガーの言葉によって、たしかなものとされたのです。

「わたしも、信じたくはありませんでした。フェリアル副長のいう通り、まちがいであ

ると信じたかった。しかしこれは、まちがいのないじじつなのです。それは、しらせを受けてリュインにかけつけたベゼロインの者たちによつて、たしかなものだとかくにんされました。そして、そのベゼロインとりでへと、リュインのひほうをしらせるべく、手紙を送つたのは……」ハミールはそこで、言葉をつまらせました。となりにいるキエリフが、かれの肩に手をおいてはげまします。

「でんれいのたかによつてベゼロインへと手紙を送つた者は、わたしのよく知つていゝ人物であつたのです。それは、レイミール・ナシユガー。わたしの、じつのおとうとです。」

ハミールの言葉に、その場にいるぜんいんがおどろきの声を上げました。レイミールはハミールの若きおとうとで、ねんれいはまだ十二さいほどでした。レイミールは兄のハミールによくなつていて、くにの力になりたいとむりをいつて、リュインとりでの見ならい兵士としてはたらいいたのです（ほんとうならまだ兵士になれるねんれいではありませんでしたが、ハミールがお願いして、とくべつに見ならいとしてきよかしてもらつていました）。

レイミールのことはベルグエルムやフェリアルもよく知つていて、ずいぶんとかわいがつていました。じつさいここにくる前（せいにかくには三日と半日前のことでしたが）、かれらはリュインとりで、レイミールに会つたばかりだったのです。ですからかれら

は、ことさらに心を痛め、心配しました。

「レイミール！ かれは、かれの身は？ ぶじでいるのか？」ベルグエルムがまっさきにたずねました。そしてその思いは、ベルグエルムのみならず、その場にいるみんなが同じだったのです。

そんなみんなの心配に、キエリフ・アートハーグがこたえました。ハミールはもう、おとうとのレイミールのことで胸がいっぱいで、とてもまともには、ものを話せるじょうたいではなくなくなってしまっていたのです。

「それは……、なんとも申し上げることができません。かれが手紙を書いたときには、もうあたりはすつかり、敵にかこまれてしまっていたそうです。かれをふくむわずかな兵士たちのみが、さいごのふんとうをつづけるべく追いつめられ、そしてそのきぼうを、一羽のでんれいたかにたくしたとありました。ベゼロインに送られたその手紙には、リユインがもしこのまま落ちるようなことがあつたなら、そのことと、そして南への危機をただちに知らせるべく、兄のハミールのいるこのシープロンドへと、でんれいのかを送るようにとのしじがなされていたのです。」

ベルグエルムもフェリアルも、深くうなだれて思いをめぐらせていました。そして、自分たちのためにいちはやく大きな危険をさらせてくれたレイミールに、ふたりは深くかんしゃしたのです。

キエリフがつづけけます。

「レイミールたち、残された兵士たちがどうなったのか？ この手紙からだけではわかりません。ですがわたしには、かれらの身にまちがいが起こったなどは、どうしても思えない！ レイミールは兄ににて、とてもゆうかんで頭もいいのだから、きつとぶじでいてくれるにちがひありません。わたしは信じます。」

（のちに語られることになりましたが、このような戦いには、さまざまなきまりごとがきめられていたのです。追いつめたすくない数の者たちを必要以上におびやかすということは、そんなたくさんのきまりごとのうちのひとつとして、はつきりときんじられていたことでした。ですが、ひれつなワットが、それをきちんと守るかどうか？ 仲間たちにはかくしようが持てなかつたのです。あのカピバラのくにでのぼうきよを思い起こしてみてください。あれほどひどいことは、いくらワットといえども、そうそう起こし得ないことだと信じたいたのですが、ワットのことです。それに近いことでも、へいきでやりかねません。相手がたとえ、おさない者であつたとしても……。ですから仲間たちは、残された兵士たちのことをあんじ、レイミールの身のぶじをあんじました。）

キエリフの言葉に、その場にいる者たちぜんいんも、大ききうなずいてこたえました。それでハミールも、ようやく顔を上げて、みんなの方をむくことができたのです。レイミールのぶじをいちばん信じたかつたのは、かれでしたから。そう、レイミールはぶじ

にちがひありません！ 自分が信じてあげなくて、どうするのでしょうか？ ハミールは気持ち強く持ちました。みんなのおかげで、もういちど、きぼうを取りもどすことができましたのです。ハミールは頭を下げて、みんなに心からかんしゃしました。

「ありがとうございます、みなさん。おとうとは、ぶじでいる。わたしも信じます。なにより、ぶじでいると感じることができると。」ハミールはそこで、はじめて笑顔を見せました。

「もちろん、ぶじにきまつてるよー」これはライアンでした。

「近いうちに、しようかいしてよ。ハミーのおとうとさんなら、ぼくもきつと、いい友達になれると思うから。なんてよぼうかな？ レイミールくんだから……、うん！

レミってよぼう！」

ライアンはそういって、にっこり笑ってみせました。かれはひつじの種族でしたが、ロビーをふくめ、このみじかいあいだにはじめて出会ったおおかみ種族のかれらのことを、すっかり好きになっていたのです。ですからライアンは、かれらのために、自分のできるかぎりのことをしてあげたいと考えようになっていました。この場でかれが、持ち前の明るさと心くばりでごんなふうにおどけてみせたのも、友であるおおかみ種族のみんなのことを、すこしでも、げんきづけてあげようと思つてのことからだったのです（ライアンはほんとうにいい子です）。

「ありがとうございます、ライアンどの。」

ハミールは、そんなライアンの心づかいにかんしゃして、深々と頭を下げました。ですがライアンは、さもいごこちが悪いといったふうに、手をふっていったのです。

「やめてよハミール。そんなのいいからさ。ぼくのは、ライアンでいいよ。キーフも、気をつかわなくていいからね。」

ライアンはハミールとキエリフのふたりにいいましたが、そんなライアンの言葉に、れいぎさほうやけいしきを教えられてきた騎士であるふたりは、にが笑いしながら、おたがいの顔を見あわせました（ベルグエルムとフェリアルのみならず、さいしよはライアンの立ちふるまいと自由ほんぼうさにとまどって、なれるまでには時間がかかったのです。騎士である自分が、はじめて出会ったちびっこ王子さまに、まさかいきなりニツクネームでよばれるなんて、思ってもいませんでしたから。

ちなみに、ハミールとキーフというのは、もちろん、ライアンがハミールとキエリフにつけたニツクネームです）。

こんなふうには、ハミールのことを思うたくさんの友人たちのおかげで、しずんでいたその場もふたたび、明るさを取りもどすことができました。ですが、リュインとりでが敵の手に落ちたということは、しんこくなじじつとして、いぜん残されたままであったのです。ですから、みんながつぎにやるべきことは、おのずとときまってきました。

「われらは急いで、これから取るべきおこないを話しあわなくてはならないな。」ベルグエルムがいました。「もとより、そのつもりであったのだが、じたいはさらにしんこくさをましてしまった。これではふたたび、もとのようには、南の地におもむくことはできないだろう。リュインとりで落ちたとなれば、敵はわがもの顔で、あたりの土地を歩きまわることができてしまう。」

「それに、きのう出会った黒騎士たちのことも、やはり気がかりでなりません。」ベルグエルムの言葉に、フェリアルも心配げにこたえました。

「わたしも、かれらのことが心配だ。」ベルグエルムがうなずいてつづけけます。「われらのすがたをおおやけにさらすことは、どうしてもさけなければならぬだろう。もしかしたらにとらえられでもしたら、われらのにんむもおしまいだ。」

ベルグエルムの言葉は、なんとも正しいものでした。敵につかまること。それはすなわち、われらがきゆうせいしゆであるロビーの身が、敵の手に渡ってしまうということの意味していたのです。ベルグエルムのいう通り、それだけは、なんとしてもさけなければなりません。ロビーのそんざいは、かれらにとって、さいごのきぼうだったのですから。

「じゃあ、早くみんな、お城にいかなきゃいけないね。」ライアンがいました。「父にそうだんして、みんなで話しあおう。みんなで話しあえば、いいこたえが出るはずだ

よ。」

「かんしゃします、ライアンの、いや……、ライアン。」ハミールが、深々と頭を下げようとしたのをとちゅうでやめて、かるいおじぎにとどめながらこたえました（さつきライアンにいわれたばかりですものね。えらい身分の相手のことを名まえだけでよぶのには、まだちよつと、ていこうがありました）。

「くにのゆくすえにかかわる、だいじな話しあいです。」さいごに、ベルグエルムがいました。

「われらの進むべき道を、みんなで考えよう。」

そして、シープロンドにつどったこのせいぎの者たちは、いちろ、メリアン王の待つシープロンドの王宮へとつづく、白い小道を、足早にたどっていったのです。朝日はもう、すつかりのぼりきって、このおだやかな白きひつじたちのくの中を、やさしくてらし上げていました。その美しさはいぜんと同じく、なにひとつ変わってはいませんでした。

6、進むべき道

ある朝のこと。十羽ほどの渡り鳥のむれが、青くかがやく山のいただきのむこうから飛んできました。新しくのぼったばかりのおひさまの光が、すべてのものを、きらきらとかがやかせていました。そして鳥たちは、その光の中、みずからの身を美しいこがね色にかがやかせながら、山のすそのに広がるその谷の上を、いちろ、はるかな南へとむかつて進んでいったのです。

その谷は、見るもあざやかなものでした。谷中がみどりにあふれかえり、花々にみちあふれていたのです。それはおよそ、この世のらくえんとよぶのにふさわしいところでした。なんともいんしよ的な、白いふしぎなれんがでつくられたじょうへきが、その谷を美しくかざり立てていました。そして、そこにそびえたつたくさんの白い塔が、その谷の美しさをかんべきなものにしていたのです。それらは人がつくつたものであるはずでした。ですがそれらはまるで、はるかなしぜんのいとなみの中に、もともとそんざいしているものであるかのように、ありのままに、なんのふしぎもなく、この景色の中にとけこんでいたのです。

谷は今、たくさん水のしずくによつて、きよらかにあらわれていました。夜明けま

でに、かなりの量の雨がふったようです。木々の葉にかがやく宝石のような水の玉と、あちこちにできた水たまりの数が、そのことをよくあらわしていました。しかし、この谷に流れる水は、いぜんとしてやわらかく、やさしく、ここに住む人々の暮らしをうるおすばかりでした。これだけの量の雨がふったのにもかかわらず、せせらぎの水はあふれることもなく、にごることもなく、ただ変わらずに、きよらかな流れのままだったのです。

そのひみつは、この谷のてっぺんにそびえる青くかがやく山にありました。つまりその山は、この地に住む人たちがせいなる山とたたえる、タドウーリ連山だったのです。

なぜ谷に流れる水のせせらぎが、いつでもおだやかなままなのか？ この山の名まえをきけば、このおとぎのくにアーケランドに住んでいる者であれば、すぐにそのこたえがわかることでしょう。つまりそれは、この谷が、そのタドウーリ連山に住むたくさん
の精霊たちの力によって、強く守られているからでした。

タドウーリ連山に住む精霊たちは、このアーケランドの中でもとくべつな、とても大きな力を持っていました。水の精霊、風の精霊、土の精霊に、火の精霊まで。この山にはじつにたくさんさんのしゅるいの精霊たちが、大勢住んでいたのです（ちよつとおそろしげなやみの精霊という者たちまで、そこには住んでいるほどだったのです）。ですが、じつさいにそのすがたを見ることのできるきかいは、山のふもとのこの谷に住んでいる

者たちであつても、めつたにあることではありませんでした（読者のみなさんは、そのりゆうをすでにござんじですよ。かれらのような精霊たちは、ひっそりとかくれ住んでいる者たちなのであつて、われわれの目の前にはほとんどそのすがたを見せないのですから）。しかし目で見ることはできなくとも、この谷に住んでいる者たちは、精霊たちのその大いなる力を、しっかりと感ずることができたのです。

そのため、谷の者たちは精霊たちのことをさらにうやまい、かれらの住む山をせいなる山とたたえて、たいせつに守つてきました。そして谷の者たちのその心は、精霊たちの方にも、しっかりとどいていたのです。この谷のせせらぎが大雨でもあふれることなくおだやかなままなのは、この谷を守つてくれている、そんな精霊たちのおかげでした（ぐたい的にいいいますと、水の精霊たちが谷に水のひがいを出さないように、あふれた水をひとしずくずつ、遠くのみずうみにまではこんでくれているからでした。そのほか、風の精霊は強すぎる風で木々がいたまなないようにと風を弱めてくれましたし、火の精霊はかじで森がやけないようにと、気をくばつてくれているのです。精霊たちがこの谷をどんなにだいじにしてくれているのか？ よくわかりでしょう。この谷の住人たちは、ほんとうにしあわせ者です）。

暮らしの中に、まったくあたりまえのように、しぜんの美しさと精霊たちの力がとけこんでいる。それがこの谷のすばらしさであり、ほこりでありました。そして、この谷

にあるなんともすばらしいそのくにの名まえを、みなさんはもうよく知っていますよね。そう、そこは美しき、白きひつじたちのくに。名まえは、シープロンド。

渡り鳥の一羽が、シープロンドのくの上空で、大きくばさつ！ とつばさをはばたかせました。なんまいかの羽がふわりとまい上がって、それらはゆつくりと、地上へとむかつて落ちていきます。やがていちまいの羽が、白くかがやく美しいれんがのしきつめられたその小道の上に、ふわつとおり立ちました。そして今、その道を全部で六頭の騎馬たちに乗ったおおかみとひつじの種族の者たちが、足早に、こちらへとむかつてやってくるころだったのです。

一行は、小道のつづくさきにある、ひとつのたてもものをめざして進んでいるところでした。それは、このひつじのくににシープロンドの中でも、もつとも重要なたてもものでした。それもそのはず。なにしろそのたてもものあるじは、このくにの中でいちばんえらい人。王さまなのですから。つまりそのたてもものは、このシープロンドの王宮でした。王さまとその家族が住んでいるところであり、くにのせいじをとりおこなうところであり、そこからのたいせつなお客さまが、たいぎいするところであつたのです（ベルグエールムたちウルファの騎士たちは、今そのたいせつなお客さまとして、王宮にとどまっていたのです）。そしてみんなは今、その王宮でとてもだいいじな話しあいをおこなうべく、

急ぎ、その小道を進んでいるところでした。

白い小道はゆるやかな下り坂となって、くねくねとまがりながらのびていました。とちゆういくつかの小さなたてものがあつて、そこにはかざりやりを持ったシープロンの衛士たちが、それぞれなんん人かずつ、見張りに立っていました。これらのたてもものは、北門から王宮までの道を守るためのその見張りをおこなう、衛士たちがいるところでした。この白い小道は文字通りの小さな道でしたが、じつはおまつりのときなどに王さまが通つたりするための、とてもたいせつな道であつたのです（もとよりこの道を通らないことには王宮へといけませんので、はじめからたいせつな道であることに、変わりはなかつたんですけれど）。そのため、見張りの衛士たちがいつもいて、たえず道の安全を守っていました（ですけどこの道はいつも安全で、危険なことなんて今までいちどもなかつたんですけれど。かれらがいるのは、まあ、かたちだけみたいなものだったのです。

ところで、ルースアンとホロウノースのふたりは、ここのせきにん者として、北門にいちばん近いたてもものにきのうからとまりこんでいました。それは旅の一行を、いちはやく出むかえるためでもありました。かれらがまつさきに北門に出むかえにあらわれたのは、そのためだったのです。

ちなみに、ハミールとキエリフのふたりも、一時間ほど前、でんれいのたかのしらせ

を受けてからというもの、「衛士たちといっしょに北門のそばでみんなのことを待って
いたい」といいましたが、かれらはたいせつなお客さま。「どうか王宮にてお待ちくださ
い。」とシープロンたちにお願ひされ、しぶしぶ、お城で待っていました。ですがやつぱ
り、旅の者たちが北門にとうちやくしたとのしらせを受けて、かれらはいてもたつても
いられず、騎馬たちに乗って飛び出してしまったというわけなのです。

六頭の騎馬たちは、さらにいくつかの広場と門を越え、木々のトンネルをぬけていき
ました。そして白い小道はついに、メリアン王のいるシープロンドの王宮の、その入り
口へとつながったのです。

入り口のりっぱな門をぬけると、そこは王宮の中庭になっていました。あざやかなし
ばふがしきつめられていて、ところどころに、みずみずしい実をつけた木が立っており
ます。そしてなんとも色とりどりの花々。それに集まるたくさんのちようたち。まん
中にはかがやく水をふき出す、みごとなふんすいもありました。

それはため息をついてしまいそうなくらいの、美しい庭でした（ガーデニングの好き
な人なら、あんまりすばらしい庭なので、ちよつとくやしいくらいに思うことでしょう。
ロビーはこの庭のことで見て、すぐに、えんげい好きのスネイルのことを思い出してし
まいました）。そしてその庭のむこうに。シープロンドの王宮がたっていたのです。王
宮もシープロンドのほかのたてもと同じく、あの白くかがやくれんがでつくられてい

ました。あちこちに白い塔がつき出ていて（これはだんろのえんとつなのです）、たくさんのバルコニーがつくられております。ですが、たてももの大きさ自体は、けっして大きなものではありませんでした。これは、かれらのひかえめなせいかくをよくあらわしていました。たとえ王さまの住む王宮であっても、必要以上にりっぱにするのは好ましくないというのが、かれらの考え方だったのです（これはほかのすべてのことにもいえることでしたが、ものごとには「ちょうどよいところ」というものがあるのです。シープロンドの人たちは、そのことをよく心得ていました）。

一行はそのまま、美しい中庭を通って、王宮のたてももの入り口の前へと騎馬たちを進ませました（しばふをよごさないように、中庭にはちゃんど、馬や人の通る小道もつくられていました）。入り口の前には王宮つきの衛士たちが、きちんとれつをなして、一行のこゝを出むかえております。そしてそのいちばん前には、ルースアンとホロウノースのふたりと同じ服そうをした、王のそっきんの者たちがふたり、立っていました。

このふたりの者たちの名まえは、ルーベルアンにフォルテールといいました（ちなみに、ルーベルアンはルースアンのおとうとです）。ふたりはまずライアンにあいさつをしてから、旅の者たち、とくにロビーにむかつていいました。

「ようこそ、シープロンドの王宮へ。どうぞ、よきごたいざいを。」

そしてかれらは、ていねいに心のこもったおじぎをしてから、つづけたのです。

「じょうきようは、よく心得ております。さあ、どうぞ中へ。メリアン王がお待ちです。」

王宮の中は、これまた白の世界でした。かべや床はもちろん、テーブルやいすや、かかっている絵のがくぶちまで、みんな白いのです。もしどこかに、どろのはねたのがいつてきでも落ちていたのなら、ものすごく目立って見えるにちがいありません。それほど王宮の中は、どこもかしこもぴかぴかにみがき立てられていました（ですからロビーは、自分のかみやしっぽが黒いのが、なんだかとてもくすぐったく思えました。そんなロビーのことを見て、ライアンは、「ここにいたら、ロビーのかみもしっぽも、今よりもつときれいに見えるじゃない。いいことだよ。」と行ってあげました）。

中にはいつてすぐのところ、王宮の二かいへとつづく大かいだんがひとつあって、そのおどり場のかべに、ひときわ目をひく大きな絵がいちまいかかつていました。えがかれていたのは、ひとりのシープロンの女の人です。ねんれいはまだ若く、二十だいの前半くらいのようなでした。その女の人はすき通るような美しいはだと、銀色にかがやくかみをしていて、さらさらと流れるような白いドレスをまといました。青い宝石のようなひとみをしていて、そしてそのひとみは、絵を見る者におだやかにむけられてい

たのです。

ロビーはひとめで、この絵にみいられてしまいました。心がすうつと、すいこまれていくような感じがします。そのうえはじめて見た人なのに、ロビーはこの人のことを、すでにどこかで見たことがあるように思いました。

「きれいな人でしょ？」

ライアンの声に、ロビーははつとわれにかえりました。そしてライアンの顔を見たとき、ロビーのきもんは晴れたのです。そう、この女の人は、ライアンにそっくりだったのです！

「そう、ぼくのお母さんだよ。ぼくが小さいときに、なくなつたんだ。」

ライアンの表じようは、ちよつとかなしげでした。そんなライアンの気持ちをもって、ロビーも同じく、心がしくしくと痛んできます（ちなみに、絵にえがかれていたのは、ライアンのお母さんが二十三さいのときのすがたでした。そしてこの絵がえがかれてから二年この二十五さいのときに、ライアンが生まれたのです）。

それからロビーは、自分のことも考えました。自分にも、お父さんやお母さんがいるはずなのです。生きているのだろうか？ そうだとしたら、今どこで、なにをしているんだらう？ もうなんとも思えがいてきたことでしたが、ロビーは今また、そのことに思いをめぐらせていました。

そのとき、かいだんのわきのろうかから、ひとりのシープロンの少女がやってきました。ねんれいはまだ十二ほどです。ロビーにはすぐに、その少女がライアンの身内の者であるとわかりました。だって、今見ていた絵の中の女の人が、そのまま小さくなったみたいに、そっくりだったのですから。

「シープロンドへようこそ。新しいウルファのお客さま。」少女はとてもれいぎ正しくおちついた言葉使いでロビーにあいさつをすると、すつと静かにおじぎをしました（ライアンとは、だいぶせいかくがちがうみたいですな）。

「みなさん、たいへんな道のりであつたとおさつしいたします。まずはごゆつくり、旅のつかれをおいやしくください。」

「ありがとうございます。」少女の言葉に、ロビーはぺこりと頭を下げてこたえました。ベルグエルムたち、ウルファの騎士たちもそれにつづきます。

騎士たちはこの少女のことを、すでにライアンにしようかいされて知っていました。ですからロビーと読者のみなさんのために、ここでもういちど、ライアンにかのじよのことをしようかいしてもらうことにしましょう。

「この子はエレナ。みんな、エルつてよんでるけどね。ぼくのいもうとだよ。」ライアンがロビーにいいました。なるほど、ライアンのいもうとだつたんですね。見た目がそっくりなもの、うなずけます（せいかくは、だいぶちがうようでしたが）。

「エル、かれはロビー。いい伝えのきゆうせいしゆなんだよ。でも、あんまりはしやぎたてないようにね。かれは、そういうのいやがるから。」

ライアンの言葉に、エレナはくすりと笑っていました。

「兄さまじゃないんですから、はしやいだりなんかしませんわ。」

思わず「う……」とたじろぐライアンに、その場にいる者たちは、みんな思わず、くすくすと笑ってしまいます（すかさずライアンは、「なにがおかしいの！」とそっきんたちをぎろりとにらみつけました。そっきんたちは、「いえ、なにも！」といつてごまかしましたが）。

それからライアンは、エレナに今までのことのしだいを手早く伝えました。これからみんなは、ライアン（とエレナ）のお父さんでもあるメリアン王に急いでじじょうを話して、できるだけ早く、これからの道のりのことをきめるための話しあい場を、作ってもらわなければならないかったです。ですが、エレナの言葉は、よそうがいのものでした。

「父さまはもう、みんな知ってますわよ。兄さまにけががないということはもちろん。リュインとりでのことも、そのたいさくのことも。今ごろはもう、話しあいのための場が作られているはずです。」

リュインとりでのことは、でんれいのたかがシープロンドについたことによつて、も

ちろんメリアン王のもとにも伝わっていたのです。そしてみんながもどってくれば、これからの旅のことを話しあう必要があるというところまで、王さまはすでによきしていました（さすがはメリアン王です）。

もうひとつの、「ライアンにけががない」ということは、ふたつのりゆうがあつて、王さまはもうすでに知っていました。ひとつは、ラツパの音色です。旅の者たちがシープロンドにもどつてきたときに吹きならされた、あのラツパの音色は、旅の者たちのようす（とくにライアンのぶじ）をあらわす音色で吹きならされていました（ベルグエルムにかんしては、「肩をけがしている」ということまで、あのラツパの音色はあらわしていました。ちよつとすごいですね）。

ふたつ目のりゆうについては、ちよつと今ここで、すぐに説明することはむずかしかいのですが……、それはこのあと、数ページのうちにあきらかになります。そのためにライアンが怒ることになりましたが、それはなぜなのでしょう？　そうぞうしておいてみてください。

「それならば、話は早い。さすがはメリアン王です。さつそく、王にお会いして……」
ベルグエルムが素晴らしいかけた、そのとき。

ばだーん！　だんたん、たんたん！　だんたん、たんたん！　たたーん！

かいだんの上から、なにかとんでもなくそうぞうしい物音がきこえてきました。そしてよくきけば、それはだれかがかけ足でこちらへとやってくる、足音のようだったので。底のあつくてひらべったいくつをはいているために、白い石の床にそれがひびいて、すごく大きな音を立てていたようです（ちなみに、さいしよの、ばだーん！ というのは、とびらがいきおいよくひらかれた音のようでした）。それにしても、こんなにおごそかでりっぱな王宮の中を、そんなぶさほうに、ばたばた走りまわるなんて！ いただきたいのでしょうか？ もしメリアン王に知れたら、大目玉をくうにちがいありません！

そして、その音を立てていたぬしが、みんなの見守るその大かいだんの上までやってきました。その人物は、そのまま大急ぎでかいだんをかけおりてきます。シープロンの男の人で、ねんれいは四十だいのなかばくらいでしょうか？ りっぱな口ひげを生やしておりましたが、かみの毛はぼさぼさで、寝起きのまんまといった感じ。くしもいれておりません。かつこうは、王さまのそっきんたちに負けないくらい、りっぱな服そうをしておりましたので、身分の高い人であることにはまちがいないようでした。ですが、いかんせん、なんだか大あわてで着がえをしたみたいに、その服はくちやくちやにみだれていて、ボタンの位置までずれているありさまだったのです。

その人はかいだんをおりきると、そのままいちもくさんにこちらにとっしんしてきました（まるで赤いぬのにむかつていく、とうぎゆうの牛みたいに）。そしてかれは、その場にいる者たちの中からただひとりをえらんで、その人物をがぼつ！ と両手で大きくだきしめたのです（その人物のとなりにいるエレナなど、目にははいらなれないといったようすで。ですからエレナは、いきおいあまつて、はじき飛ばされそうになつてしまつたくらいだったのです）。

そして……、その人物は、こうさげびました。

「ライちゃん！ お父さん、心配したよー！」

ええーっ！ その場にいる者たちは、みんな、口をぼかーんとあけてかたまつてしまいました。とくに、ウルファの騎士たちの顔といつたら！ ロビーがルインビスの花を食べたときの表じょうの、十ばいくらいおかしかつたものです。

なんとなんと！ その人物は、メリアン王ほんにんでした！ そして、メリアン王がだきしめていたのは……、そう、ライアンだったのです！

この（よそうがいの）出むかえに、いちばんあわてふためいたのは、もちろん、ほかならぬライアン自身でした。ですからライアンは、じたばたとあばれて、思わずさけん

だのです。

「わわーっ！ ちょっと！ やめてよ父さん！ お客さんの前で、なにやってんのさ！」

ライオンがいやがるのもむりはありません。力づくで王さまのことをひきはがすと、そのまま、両手でどんっ！ とつき飛ばしてしまいました。はずみで、メリアン王は、どつてん！ 床にしりもちをついてしまいました。それからメリアン王は、「いたたたた……」とおしりをさすつて、なんともなさけない声でいきました。

「だって、きのう帰ってくるっていつてたじゃないか。父さん、寝ないで待つてたのに。とちゆうで二回も危険な目にあつてたし、すつごく心配だったんだよ。」

メリアン王はそういつて（ほとんどいじけてしまつて）、自分の両手の人さしゆびをおたがいにつつんとつつつきあわせました。なるほど、わが子を思う、親の心というものでしょうか？ たとえ一国の王さまであるとしても、その気持ちはやはり、同じのようです。それはよくわかるのですが……、ちよつと、王さまの場合は、やりすぎといった感じですね……（ちなみに、メリアン王は自身のその言葉の通り、寝ないですつとライオンのことを待つていましたが、ついに力つきて、明け方に眠つてしまいました。そうしてついさきほど、エレナとルーベルアンのふたりに起こされたのです。これはメリアン王があんまりぐつすりと眠つていたために、エレナたちが、王さまを起こすのをぎ

りぎりまで待つてあげていたからなのですが。そしてメリアン王はそれから、リュインのことや、ライアンたちがぶじにとうちやくしたということなどを、もろもろしらされて、寝起きの頭をふりしぼって、あれこれのしじをみんなに与えたというわけでした。

そのあと、「もうじき王宮にもどられますので、わたくしは出むかえにいつてまいります。」というルーベルアンの言葉に、メリアン王は「わー、待つてー！ わたしもいくー！」といいましたが、エレナに、「そんな寝起きのかっこうで出られますか！ ちゃんとしたくをしてからですよ！」とさとされて、大急ぎで、身じたくをはじめたというわけだったのです。でもやっぱりメリアン王は、したくもそこそこに、大あわてで飛び出していつてしまったというわけでした。そのけつまつは……、今みなさんに見ていただいた通りです）。

そんなメリアン王の言葉をきいて、ライアンは、はつとなにかに気づいたようでした（するどい読者のみなさんでしたら、きつと同じように気がついたことと思います）。

「ちよつと待つて！ 二回も危険な目にあつたつて、なんで父さんがそこまで知つてのさ？ 旅の中でできごとのことは、まだ、だれにも話していないのに。もしかして……、父さん、またぼくに、なにかしかけをしたんでしょ！」

ライアンがそういうと、メリアン王はぎくつ！ とした顔になりました。そう、じつはこれこそが、ライアンがぶじであるということを王さまが知ることのできた、ふたつ

目のりゆうだったのです。

メリアン王はライアンの身を心配して、ライアンの衣服のうらがわに、こっそりとあるものをぬいつけておきました。それは、とてもとても小さな、星がたのブローチでした（ちよつと上からさわったくらいでは、ぜんぜんわからないほど小さいのです）。このブローチにはふしぎな力があつて、それを身につけている人物が危険な目にあうと、もうひとつの対になるブローチがピーピー音を立てて赤く光るのです。もうひとつのブローチはもちろんメリアン王が持つていて、王さまはこれで、ライアンがとちゆうで二回危険な目にあつていたということを知ることができたというわけでした（その二回とは、ガイラルロックたちと戦つたときと、黒騎士たちにおそわれたときの、二回のことです）。

そしてもうひとつ。このブローチの持ちぬしがけがをした場合、対になるブローチはそのけがのていどにあわせて、ずっと赤く光りつづけるのです。つまりこのためにメリアン王は、「ライアンにけががない」ということまでをも、あわせて知ることができていたというわけでした（ずいぶん、べんりでふしぎな品物があるものですね。王さまはどこから、こんなものを手にいれたんでしょうか？ なぞです）。

さて、王さまがライアンを心配する気持ちはよくわかるのですが、その方法がいけませんでした。せめてひとこと、ちゃんとライアンにことわつていればよかつたのですが

……。どうもライアンは、メリアン王のその（ゆきすぎるまでの）心配しようには、ちよつとうんざりきみだったようです（そして王さまも、そのことをわかつておりましたので、ライアンに気づかれないうちに、こつそりと魔法のブローチをぬいつけておいたというわけでした。うっかり口がすべつて、けつきよくばれてしまいましたけど）。

「まあた、ぼくにだまつてそんなことしてたの！ やめてよつて、いつもいつてるじゃない！ こないだだつて、ちよつとピクニックに出かけただけなのに、こつそりあとから、見張りにつけさせてたでしょ。ぼく、知ってるんだからね。ぼくの部屋にもだまつてはいるし。こんどかつてにそんなことしたら、もう、口きいてあげないから！」

さあたはいへん。王子さまはすつかり、ごきげんななめのごようすです。王さまはなんどもあやまつて、なんとかきげんをなおしてもらおうとがんばりましたが、ライアンはなかなかゆるしてくれません。

そんなとき。ライアンにそつと近づいて、その手をぎゅつとにぎる者がひとりいました。それはいったいだれでしょう？ それは、ほかでもありません。われらがロビーだったのです。

「ライアン。」

ロビーをはじめて、ライアンを名まえだけでよびました（これはとてもいいなことでしたので、かれのことをよく知っているベルグエルムとフェリアルのは、とて

もびつくりしたものでしたのです。

「もう、ゆるしてあげて。お父さんは、きみのことを思ってしまったから。きみがだいじでなければ、こんなことはしないんだから。」

ロビーのいう通りでした。親やたいせつな人たちに心配されるといふこと。それはとても、めぐまれていることなのです。こんなにしあわせなことはないのです。ライアンはロビーにいわれて、はつとそのことを思いかえました。それと同時に、ライアンはロビーがほんとうにじゅんすいな心を持っているのだということを、あらためて知らされたのです。ほんとうはライアンだつて、王さまのことをほんきで怒っているというわけではありませんでした。ですから、じゅんすいなロビーにこういわれてしまつては、もう、王さまのことをゆるしてあげるしかなかつたのです。

「ロビーには、かなわないや。」ライアンが「ふう。」と大きな息をついていました。「父さん、じゃあ、こんかいだけだからね。ロビーにめんじて、ゆるしてあげる。でも、これからは、ちゃんとほくにいつてよね。」

これをきいたメリアン王の、うれしそうな顔といつたら！

「おお！ ほんとかい？」メリアン王は大よろこびで立ち上がると、ふたたびライアンにだきついてさげんだのです。「ありがとう、ライちゃん！」

「こらつ！ ちようしに乗らないの！」ライアンがもういつぱん、王さまをひきはがし

ながらいいました。「これもみんな、ロビーのおかげなんだからね。ロビーがいなかったら、まだ、ゆるしてあげなかったんだから。父さん、ロビーにちゃんと、おれいをいいなよ。」

そこで、メリアン王ははじめて、ロビーの方を見ました（今までは、ライアンのことしか見えていないといった感じでしたから）。シープロンドをたずねてきた、ペーカーランドの四人のウルファの騎士たちが、血まなこになってさがしもとめていた人物。それこそが、今ここにいる、ロビーという名の黒のウルファの少年だったのです。

メリアン王は急にまじめな顔つきになって、ロビーのことをまっすぐに見つめました。そして王さまは、背すじをしやきつとのぼしてしせいを正すと、ロビーにかるいえしやくをおくつてから、いったのです。

「よくぞまいられた、きゆうせいしゆどのよ。」

その声は、いげんにみちていました。きつきまでのメリアン王とはまるでべつじんでしたので、ロビーはちよつと、びっくりしてしまったものだったのです（ほんとうなら王さまというのは、ほんらい、これでふつうのはずなのですが……。かみの毛はぼさぼさでしたし、服のボタンもずれておりましたので、ちよつと、さまにはなっていないでしただけだ）。

「ライアン王子と親しくしていただいて、れいをいうぞ。」王さまはそういって、深々

と頭を下げました。ロビーは、えらい王さまにこんなに頭を下げてもらって、すっかりきょうしゆくしてしまいます。ですからロビーは、王さまよりもつとひくく頭を下げるのに、とてもくろうしました（なにしろ相手はひつじの種族の者でしたので、おおかみ種族の自分よりも、はるかに背がひくかったのです）。

メリアン王がつづけます。

「そうぞうよりも、はるかにお若いな。だが、ねんれいはかんけない。たいせつなのは、そなたがなにを考え、なにをおこなうかなのだ。」

王さまの言葉に、ロビーはちよつと考えこんでしまいました。自分はなにをするべきなのか？ ちゃんと正しいことをおこなえるのだろうか？ それはまだ、ロビーにもはつきりとは、わかりませんでしたから。

「心配することはない。」そんなロビーの気持ちをさつしたかのように、メリアン王が心をこめていいました。

「そなたは、自分の信じたことをすればよい。きゆうせいしゆとは、そういうものなのだからな。」

メリアン王の言葉は、ロビーの心の中に深くはいりこんできました。さすがは王さまだと、ロビーは思ったものです。その言葉には、くにおさめる者としてのひんかくと、ちせいが、そなわっていました（さつきまでの王さまは、そんな感じじゃありませんで

したけど……)。ひとことひとことが、深く重く、きく者の心に伝わってくるのです。

「そなたたちの気持ちは、よくわかっている。」そしてメリアン王は、こんどは、その場にいる四人のウルファの騎士たちにむかつて、同じく心をこめていいました。

「リュインとりでのかんらくは、とてもふううなできごとであった。世界は大きく、変わつていくことになろうな。だが、それも、よきしていたうちのこと。みなが力をあわせ、乗り越えるのだ。」

王さまの言葉に、ウルファの騎士たちもシープロンの者たちも、大きくうなずいてこたえました。

「午後早くにみなで話しあいの場を持てるよう、てはいしておいた。そなたたちも、つかれておろう。それまでしばし、休まれよ。」

「父さま、わたくしがみなさんをごあんないします。」メリアン王の言葉に、エレナが前に出ていいました。そしてそのエレナを見たメリアン王は、あれっ？ といった顔をしてみ、こういっただのです。

「ん？ なんだエル。おまえ、いつからいたんだ？」

王さま、それはひどい！ せつかく、いい感じでいげんを出しておりましたのに……。エレナはすっかりかんかんになって、メリアン王のことをぎろりとにらみつけて、いいました。

「はじめからいます！　ほんとうに、兄さまのことしか見えていないんだから！　かほごにもほどがありますよ！　みつともないからやめなさいって、いつもいつているでしょう！　どうやらまだ、しつけがたりないみたいですよわね！」

エレナのそのはくりよくには、さすがのメリアン王もたじたじです。王さまは思わず逃げ出して、ひっしでエレナにべんかいました。

「わー！　ごめん！　うそ！　うそだよエル！　じょうだんだってばー！」

それから王さまは、大かいだんをかけたぼつて二かいのはしらの影にかくれると、下にいるライアンにむかってさげんだのです。

「ライちゃん！　エルにいつてよー！　じょうだんなだからさー！　助けてくれー！」

「あの……、さっきのりっぱな感じの王さまと、今の王さまと、どっちがほんとうのメリアン王なんでしょうか……？」ロビーが思わず、となりにいるベルグエルムとフェリアルふたりに、たずねてしまいました。

「いえ、あの……、わたしが知っているメリアン王は、こんな方ではなかったはずなのですが……」ベルグエルムがとまどいながら、こたえます。

「わたしの知っているメリアン王も、とてもりっぱな方だったはずですけど……」フェリアルも、すっかりこんわくしてしまっていました。

そのころ。かいだんの上ではエレナに見つかつた王さまが、「ひえええ！」はしらの影から飛び出して、ふたたび、ろうかのおくの方へと逃げていくところでした。

「ごめんなさい！　もうしませんから！　ゆるしてくれー！」

ライアンははずかしさのあまり、顔をまっ赤にそめて、そのままにもいうことができませんでした。

それから旅の者たちは、午後いちばんの話しあいにもむけて、ひとまずのきゆうそくを取る事ができたのです。まずはライアンのていあんで、みんなはつかれたからだをいやすため、おふろにはいることにしました。

「シープロンドには、しぜんのおんせんがあるんだよ！　みんなではいろうよ！」

そういわれて、みんなはお城からちよつとはなれたたてものの中につくられた、りっぱなおふる場へとむかいました。みなでおふるにはいるなんて、もちろんロビーは、はじめてのことでした。ですからロビーは、そのときのことを、このさきずっと、なつかしく思い出すこととなったのです（ほんとうはちよつと、人前ではだかになるのははづかしかったのですが。そんなロビーのことをしり目に、ライアンはぜんぜん気にしな

いで、はだかでびゅんびゅん、おふる場を走りまわっていました。

お湯はとつてもここちよく、旅でつかれたからだをぎゅんぎゅんいやしてくれました（このお湯にはけがをなおすべくべつな力がありましたので、とくにベルグエルムの肩のきずには、ききめまんてんだったのです）。そしてそのあとはごはんです。旅の者たちはきのうの夜、カピバラ老人の小屋でしこたまごはんを食べていましたが、まだ今日は朝ごはんをいただいでいませんでした（ライアンだけは、道のとちゅうでバターキャンディーをなめていましたが。それとルインピスの花も）。ですからみんな、もうすっかり、はらぺこになってしまつていたのです（とくに、前にもいいましたが、ロビーたちとおかみ種族の者たちはとつてもよく食べますので、輪をかいとおながへつていました）。

エレナのあんないで、みんなは食堂に集まりました。出された食べものは、ごうかけらんらん！ ひつじの種族であるシープロンたちは、肉を食べることがありませんでしたので、それらはすべて、植物の根や、実や、くき、葉、たね、そういつたもので作られていました。とてもそうは思えないくらい、じつにぜいたくな料理ばかりでした（もちろんかれらシープロンの者たちは、ふだんからこんなにぜいたくな食事をしていくわけはありません。かれらのひかえめなせいにかくは、食たくにもよくあらわれていたのです。こんなにごうかな食事を用意したのは、つまり、たいせつなお客さまである口

ビーとウルファの騎士たち、みんなのためでした。

「うわあ、すごい！」ロビーは思わず、そういつてしまいました。目の前にならなでいたのは、自分が今までに見たこともきいたこともない料理ばかりだったのです。こなをこねて作った、スパゲッティやラビオリにいた料理があり、色とりどりのやさいのうつわにとろりとしたスープをつめこんだ料理があり。中にはおおかみ種族のかれらのために、やさいをねりあわせてステーキみたいなかたちに作った料理までありました（そしてこれはじっさい、ほんとうのステーキみたいな味がするのです。ロビーはとてもびつくりしたものでした）。

「どうぞみなさん、めし上がってください。おかわりもたくさんありますので。」

「はいっ！ いただきます！」

エレナの言葉に、ウルファのみんなはがつがつ食べました（ほんとうにかれらおおかみ種族の者たちは、よく食べるものです。こんかいはとくべつですからしかたないとしても、これではしばらく、ダイエットの必要がありそうですね）。

「あつ、そうだ。」とここでライアンがいました（かれはごはんもそこそこにすませると、さつさとデザートのカキを食べていました。しかもホールケーキをまるごと！ライアンにとってはこっちの方が、メインの食事のようですね）。

「ねえ、ロビーにあれを出してあげてよ。さつきいつてたやつ。」

ライアンが、そばにいろはいぜんがかりのシープロンの女の人に、いいました。いったいなんだろう？ そう思っていたロビーの前に出された、そのお皿に乗っていたものは……（読者のみなさんには、もうおわかりですよね）、そう、山もりにもりつけられた、ルインビスの花だったのです！

「まだまだいっぱいあるからね。たっぷり食べてよ。」ライアンはそういって、ケーキの大きなかたまりをばくり！ 口にはこびました。

「は、はは……。ありがと、ライアンさん。」ロビーはもう、かくごをきめて、にが笑いするしかありませんでした。

さてさて、みんなはこんなふうな時間に時間をすごし、そしてあつというまに、午後の話しいの時間となったのです（せいかくには午後一時。子ぎつねのこくげんのころでした）。

みんなが集まったのは王宮の二かいのおくにある、こぢんまりとした部屋でした。ここはもつぱら、かいぎなどの話しあいをおこなうために使われている部屋で、とびらをしめてしまえば、そこには中の話し声などは、ぜんぜんもれなかつたのです（もつとも今までおこなわれたかいぎで、そこにもれてはこまるような話しあいなどは、ほとんどありませんでしたけど。ライアンのたんじょう日になにをプレゼントするか？ 毎年

ひみつのかいぎがおこなわれるくらいでした。もちろん、そのかいぎのしゅさい者はメリアン王です）。

部屋には大きなテーブルがひとつとたくさんのいすがおかれていて、部屋の中はそれでほとんどいっぱいでした。ロビーのためにとくべついい席が用意されていましたが、ロビーはそれをことわって、旅のみんなと同じならびの席にしてみました。

やがて席はどんどんとうまっていききました（ロビーたちはとくべつに早くきていたのです）。シープロンの四人のそっきんたち。そしてそれにつづいて、なんんかの新しいシープロンの人たちもやってきました。その中でとくにいんしょう的な人がいました。きれいなはちみつ色の服を着た、ひとりの美しいシープロンの女の人です。ねんれいは、二十だいの前半くらいでしょうか？ すらりとしたからだに、ととのった顔立ち。ふちのないすてきなデザインのめがねをかけていて、とても知的な感じのする人でした。

「わっ！」その女の人が部屋にはいつてくるなり、ライアンの表じようが変わりました。いったいどうしたというのでしょうか？ そうしているあいだに、その女の人がライアンのもとへとやってきました。そしてかいこういちばん。その人はきついものいいで、ライアンにいったのです。

「王子、またお菓子を食はずぎていますね！ いつもいつているでしょう！ ケーキ

を食べすぎなものもわかってますからね。また虫歯になつても、知りませんよ！」

ロビーはその人のあつとう的なままでのほくりよくに、思わずちぢこまつてしまいました。見た目はとつてもきれいでしたのに、どうやらかなり、きびしい人のようです。

「わかつてゐるつてば！ ちゃんと菌みがきしてるから、へいきだよ！」ライアンがあわてて、いいかえしました。そしてそのあと、ライアンは顔をそむけて、小声でそつとつぶやいたのです。

「……あいかわらず、口うるさいなあ。」

「今、なにかいいましたか！」すかさずつきゆうするかのじよに対して、ライアンは背すじをびん！ とのぼして、いいました。

「いえっ！ なにも！」

そして（話をそらせるために）ライアンは、ロビーのことを、その人にしようかいたのです。

「リア先生、この人がさがしてた人なんだ。名まえはロビー。」

とつぜん話をふられたロビーは、あわてていすから立ち上がつて、ペこりと頭を下げました（そそうをしたら、怒られそうでしたから）。

「ロビー、この人はリア先生。ぼくのかていきようしなんだよ。」ライアンがつづいて、ロビーに説明します（なるほど、この人は先生だったんですね。どうりで、知的な感じ

がすると思っただんです)。

「まあ、あなたがきゆうせいしゆなのですね？　こうえいですわ。わたしは、レシリア・クレツシエンドと申します。どうぞよろしく。」

リア先生というのは、もちろん、ライアンがかのじよのことをよんでいるニツクネームでした。レシリアはライアンのせんぞくのかていきようしとして、ライアンがまだ小さかったころから、ずっとかれのべんきようを見てきたのです。もつとも、べんきようだけならまだよかったです。かのじよはいわば、ライアンの「しつけやく」としてのやくわりが大きいのでした。そのしごとぶりはみなさんに見ていただいた通り、とてもきびしいものでしたので、ライアンはすっかり、レシリアのことがにがてになつていたのです(メリアン王ですら、かのじよには頭が上がりませんほどでした。ほんとうは王さまは、今よりもっと、ライアンのことをあまやかしたかったです。レシリアとエレナの、ふたりのとつてもこわい「かんしやく」に見張られていては、なかなかさうもいきませんでした。それでもじゆうぶん、あまやかしていたんですけど。そのため今日もエレナに、こつぴどくしかられてしまいましたよね)。

「リア先生も、話しあいにさんかするの？　めずらしいね。今日は先生、お休みの日じゃなかったの？」

ライアンがいました。ライアンのいう通り、レシリアはふだんは、お城からほど近

い自分の家に住んでいて、ライアンのペンキよう（そのほか）を見るために、お城まで出かけてくるのです。わざわざお休みの日にまでかのじよがやってきたのは、それほどのりゆうがあつてのことでした。

「メリアン王によばれたのです。たいせつな話しあいがあるから、ぜひきてほしいと。もうあらかじめ、話の内ようはききましたけど。」レシリアはそういうと、急にとでもしんけんな顔になつて、こうつづけました。

「王子、今日の話しあいは、王子が思つている以上に重要なものになりますよ。わたしは、わたしのするべきことをするつもりです。」

レシリアの言葉には、なにか深い意味がこもつているようでした。そしてかのじよのいう通り、この話しあいがすつかりかたづくころには、かのじよにはとても重大なやくりが、まかされることとなるのです。

さあ、それでは話しあいのはじまりです。読者のみなさんも、じゅんびはよろしいですか？（トイレにいくのなら今のうちですよ。）席について、話しあいの場に加わりましょう。

小さめの部屋の中は、人でいっぱいになりました（せいかくにはウルファの騎士たちが四人、ロビーとライアン、シープロンのそつきんたちが四人、レシリア先生、ほかに

シープロンの人たちがあわせて三人の、ごうけい十四人の人たちでした。そしてほとんどなくして、さいごのひとり。この話しあいのしゅさい者である、メリアン王ほんにんがやってきたのです（王さまは、こんどはきちんとしたかつこうをしていて、かみもきれいにとのえられていました。ですからロビーはさいしょ、だれかほかの人がはいつてきたのかと思つたほどもです）。

メリアン王の表じようは、とてもけわしいものでした。それはこの話しあいが、けつして楽しいものになるはずがないと、わかつていたからでした。そして王さまは、テーブルの正面の、みんなからいちばんよく見えるいちばんいい席につくと、ついにその重い口をひらいたのです。

「じたいはきわめてしんこくなものである。」

メリアン王はよいいな前おきもなしに、そう切り出しました。このようないじな話しあいのときには、かえつて、かくしんの部分から話しはじめる方がよかつたのです。

「まずは、ベーカールランドからの客人であるベルグエルムどのに、これまでの旅のことについて、くわしくきかせてもらうことにする。」

ベルグエルムが立ち上がり、みなにいちれいしました。そしてベルグエルムは、これまでにみなさんにお伝えしてまいりました旅のできごとのこともふくめ、今までの道のりのことを、みんなにすっかり話してきかせたのです。シープロンドを出発してから口

ビーのほらあなにいたるまでの道のりにはじまって、かなしみの森の精霊の川のこと。ガイラルロックたちとの戦いのこと。セイレン大橋の上での黒騎士たちによるしゅうげきの場面では、みんなはともおどろき、部屋の中はどよめきにつつまれました。そしてカピバラ老人のこと。セイレンのみずべでのひげきの場面では、たくさんの者たちの目になみだがあふれました。そしてさいごに、リュインとりでのできごとのことです。ここではベルグエルムのかわりに、ハミールが、そのあつき胸のうちを語ってきかせました。

ふたたびベルグエルムがつづけます。

「みなさんもごしやうちの通り、リュインとりでがうばわれたということには、とても重大な意味があるのです。たんに、とりでがひとつ落ちたというだけの話ではありません。リュインのとりでは、南の地のそのあたりいったいを見張るための、大きな目のやくわりを果たしていたのです。そのとりでがうばわれた今となっては、かの地はもう、ワットの黒の軍勢の者たちによって、すっかりしはいされてしまったと考えるべきでしょう。それほどに、このとりではたいせつなものであったのです。」

ベルグエルムの言葉に、みんなはそろってとなりの者と言葉をかわしました。話しあいのさいしょにメリアン王がいった通りでした。じたいはみんなが思っている以上に、しんこくなものとなっていたのです。

メリアン王が、そんなみんなのざわめきをせいするように手をかぎして、ふたたび、か
いぎのしきをとつていいました。

「ベルグエルムどののいう通りである。今や黒の軍勢は、数の力で、このアークランド
の多くの地をすつかりしいしてしまった。リュインとりでの力は、南の地だけにとど
まるものではない。南の地から、ここ北の地にいたるまでの道のり。その安全をも、か
のとりでは守っていたのだ。」

四人のウルファの騎士たちは、みな、いちように顔をくもらせました。かれらが通つ
てきたのは、リュインのとりでからこのシープロンドへとつながる、南の街道でした。
その街道を安全に通つてこられたのも、リュインとりでをきよてんとするベーカーラン
ドの者たちが、黒の軍勢に対して、にらみをきかせつづけてくれているおかげだったの
です（げんかんにとつてもこわそうな番犬がいて、こちらをにらみつけていたら、だれ
だつてその家に近づこうとはしませんよ。それと同じことなのです）。

メリアン王がつづけます。

「こうなればこのあたりの土地とて、けつして安心していられるというものではない。
げんに、ベルグエルムどのの話にもあつた黒騎士たちのしゅうげきは、われらシープロ
ンドの者たちにとつても、大きな意味を持つべきこととなつた。」

メリアン王の言葉の意味を、ベルグエルムはすぐにかいしました。かれはきのうか

らずっと、あの黒騎士たちのしゅうげきのことについて、考えをめぐらせていたのです。そしてメリアン王もまた、そのことを深く受けとめていました。黒騎士たちと戦ったのはだれでしょう？ ベーカーランドの白の騎兵師団であるベルグエルムとフェリアル。黒のウルファであるロビー。そして……、そう、白きシープロンであるライアンでした。とにかく、黒の軍勢のおそろしき、いやらしきときたら、それこそ、なみたいいのものではないのです。かれらにすこしでもはむかうようなことをすれば、かれらは大勢で、そのしかえしにやってくるのでした（ひきようきわまりありません）。

メリアン王の思いは、そこにありました。つまり、ワットの者たちが白きシープロンの者たちのことを、「自分たちにはむかつた敵」と見なして、シープロンのみやこであるこの地を、こうげきしにやってくるかもしれないということなのです（このあたりにいる白きシープロンであれば、シープロンドの住人であることは、いわれるまでもなくわかることでしたから）。

ベルグエルムはライアンの方をむいて、ぐっとくちびるをかみしめました。とんでもないことをしてしまった……。今はとにかく、ライアンとすべてのシープロンのみなさんに対しての、おわびの気持ちで、心がいっぱいになってしまっていました。

「わたくしの考えがいたりませんでした……」ベルグエルムはそういつていすから立ち上がり、その場にいるみんなに深く頭を下げて、あやまりました。かれは、騎士の中

でもとりわけまじめなせいかくでしたので、そのせきにんを重く感じて、心は今にも、おしつぶされそうなくらいだったのです。

「なにいつてるの。ベルグのせいじゃないよ！」ライオンが、そんなベルグエルムのことをかばっていいました。

「運が悪かったんです。だれのせいでもありません。ぼくたちはみんな、さいぜんをつくして戦ったんです。ぶじでいられたのが、ふしぎなくらいでした。」

ライオンも立ち上がって、それから、その場にいるみんなにせいっぱいの気持ちをこめて、そうつぶげました。そしてみんなも、そんなライオンの気持ちをよくわかっていたのです。もちろん、ベルグエルムの気持ちも。ライオンのいう通りです。これは、だれのせきにんでもありません。ワットの者たちに見つかってしまったことが、ただただ、不運だったのですから。

「気になされるな、ベルグエルムどの。」メリアン王が、ベルグエルムの気持ちをくんでいいました。

「ライオン王子のいう通りだ。これは、だれのせいでもない。それに、そのことにかんしてなら、もとより、心配にはおよばぬ。」

メリアン王はそういつて、(ふたつとなりの席の)ひとりのシープロンの男せいに目をむけました。その人はもう、かなりのねんばいで、八十さいくらいでしょうか？ とて

もかくしきの高い、それでいてそぼくに見える、ゆったりとしたガウンをまとうていて、肩からは、大きなうすい水色のたすきをかけていました。そして頭には、ほそい金色の糸をいくつもたばねた、きれいなかんむりをまいていたのです。

このような服そうをした人たちのことを、みなさんもよく知っていることだと思います。それぞれのくによつてそのかっこうはさまざまですが、かれらにきょうつうしていること。それは、神さまにつかえる人であるということでした。つまりこの人は、教会のしきようさまだったのです（しんぶさま、ぼくしさま、おぼうさま。いろいろな人たちがおりますが、しきようさまというのは、その中でもとくにえらい人たちなのです）。その教会はシープロンドの北門からさらに高くのぼった場所、タドウーリ連山の入り口のところにあつて、そこはシープロンドの人たちにとつて、とてもたいせつなところでした。その教会のしきようさまが、このだいじな話しあいのために、とくべつにやつてきてくれたというわけだったので（もつともロビーにはいわれるまで、そんなにえらい人だったなんて、ぜんぜんわかりませんでしたけど。あ、おじいちゃんもいるんだ、くらいにしか思つていなかったのです。ちよつと、ばちあたり?）。

「その通りです、王さま。」しきようさまが、王さまの目くばせにこたえていました。「わがくには、神さまによつて守られております。手出しなどしようものなら、たちまち、かえりうちにあうだけでございます。」

そしてじっさい、そのしきようさまの言葉がまことに正しいものであるということ、のちにワツトの者たちは、身をもつて知ることとなったのです。かれらはみな、いちように口をそろえて、こういったものでした。

「シープロンド？ やめてくれ！ もう、あそこだけはこりこりだ！ かりに、どんな宝の山があつたとしても、おれはもうあのくにはいれないぞ！ いくらアルファズレドへいかのごめいれいだとしたって、できないことだつてあるんだ！」

かれらがシープロンドに齒が立たなかつたわけ。それはこの物語のおしまいに近い方で、語られることになります。さきにひとつだけ、読者のみなさんを安心させておきたいので、あらかじめしゃべってしまいますが……、シープロンドはまったくのむきずのまま、その美しさをとわにたもちつづけることになりました。そのわけはいずれわかりますのであせらずに。今はゆつくりと、物語のつづきを楽しんでください（まだ、話しあいのとちゆうですから）。

「ルエルしきようのいう通り。われらのことは心配せずともよい。」メリアン王がいました。ルエルというのが、しきようさまの名まえのようです（ちなみに、ルエル・フェルマートというのがしきようさまの正しい名まえでした。かれはこのあたりいつたいの土地の中でももつとも名高い、フェルマート家の出身で、このシープロンドではかれのことを知らない者は、ひとりとしていなかったのです。そしてかれは、若いころさま

さまざまな冒険の旅に出たことでも知られていました。きかいがあつたら、そのうちのひとつかふたつの物語のことを、いつかみなさんにもごしようかいできればと思います。

「そなたたちは、まこと、ゆうかんであつた。このアークランドの、ほこりだ。あらためて、れいをいうぞ。」王さまはそういって、旅の者たちに頭を下げてくれました。

ふさぎこんでいたベルグエルムは、この王さまのたいどをとでもりつぱだと思ひました。そしてそれと同時に、かれはメリアン王に、心からかんしゃしたのです。

「とくに、ライちゃ……、ごほんっ！ ライアン王子。」おつとあぶない！ うつかり地のままのメリアン王の方が、顔を出してしまうところでしたね（せつかく、ベルグエルムが感動しているところでしたのに）。

「そなたもじつに、よくやってくれた。こうしてぶじに、ウルフアのきゆうせいしゆどのをつれ帰ってきてくれたのだからな。ほんとうにすばらしいはたらきであつた。まこと、言葉でいいあらわすことができないくらい、りつぱであつた。みなも、そう思うであらう？」

王さまはそういって、シープロンのそつきんたちを「ん？ ん？」と見まわしました（王さまはもう、ライアンのことをほめてあげたくてしかたなかつたのです）。ですけどそつきんたちは、半分あきれ顔のまま、「王さま、それはよろしいですから、早くお話のつづきを……。」といつて受け流すばかりでした（かれらもこんなときの王さまのあつか

いには、もう、なれっこになっておりましたので。

王さまは「ごほん。」とせきばらいをしてごまかしてから、ふたたび話をつづけました。「さきの話の通り、南への道はワットの者たちにしはいされてしまった。きゆうせいしゆどのをぶじにペーカーランドへと送りとどけるのに、もはやこの道は使えぬ。」王さまはそういつて、レシリアの方を見ました。レシリアはそれにこたえて、静かにうなずきます（どういう意味があるのでしょうか?）。

「すなわち、旅の者たちはべつの道をゆかねばならない。それは、西への道だ。」

「西の道―」

王さまの言葉に、ウルファの騎士たちはみんなそろってさけびました。かれらはその言葉の意味を、よくりかいしていたのです。西への道。それは、とぎされた道、または魔女の道などとよばれている、とてもおそろしい道でした（そのほか、死者の道だとか、帰らずの道だとか、とにかくふきつな名まえばかりがついていたのです）。

しかし、ここ北の地で西の道のことをよく知っている者は、ほとんどといつていいくらいいませんでした。それはつまり、北の地に住んでいる者たちは、よほどのようじがないかぎり、南の地へと出かけていくようなことはありませんでしたし、南へゆくにしても、かならず、同じ安全な道を通つていくからなのです。それがすなわち、南の街道でした。その安全な南の街道が、今やワットの手に落ち、とても危険な道へと変わつて

しまったのです。

敵の手に落ちたその街道をそのまま進んでいくということは、ひみつの旅の中にあるロビーたちにとって、まずいこときわまりありませんでした。かくじつに自分たちに害をなさんとしてゐる者たちが大勢でじろじろ見張つてゐるだろ道を通つて、なん十マイルも進んでいくということを、考えてみてください。とても危険なことであるということが、わかつていただけるかと思ひます（ガイラルロックたちの岩場をこつそり通りぬけようとするのは、こんどはわけがちがうのです）。

ですがそれと同じくらい、西の道も危険であると思われしました。なにしろこの道は、もうなん十年と、だれにも使われていないような道だったのですから。そのりゆうは今となつては、なにが正しくてなにがまちがつてゐるのか？ よくわからなくなつてしました。いちばんたしからしいと思われうわさのひとつが、その地に住むという、おそろしい魔女のうわさです。もうなん千年と西の土地に住んでゐるということでしたが、そのすがたを見たという者は、北の地にも南の地にも、だれもいませんでした。ですから、「ぬまの中の巨大な塔に住んでゐる」だとか、「ぬまに住むおそろしいかえるの種族の者たちのことをしたがえて、さまざま悪さはたらいてゐる」だとかいううわさも、どこまでがほんとうのことなのか？ だれにもわからなかつたのです。

とにかくひとつだけいえることは、その道をゆくことは、まったくのかけだということ

とでした。もしかしたらすんなり通りぬけられて、ベーカールランドまでたどりつけるかもしれません。それとも南の街道をゆくよりも、もつと危険な目にあつてしまふかもしれません。それはだれにも、わからないことでした。

このようなことを、ウルファの騎士たちは知つていたのです。そしてもちろん、西の道のことを口にしたメリアン王も、そのことはよくわかつていました。

「そなたたちの心配はむりもない。西への道は、まさに大きなかけといえよう。」メリアン王がウルファの騎士たちにいきました。「だが、きゆうせいしゆどのの身が黒の軍勢の手に落ちれば、そのときこそ、このアーケランドのきぼうの光は、かんぜんについてしまうことであろう。それこそ、われらをもつともさけなければならぬことだ。」メリアン王のいう通り、西への道は、たしかに大きなかけでした。しかし、南への道がひじょうにあやういものとなつてしまつた今、ロビーの身を守るためには、それにかけるよりほかはなかつたのです。そしてメリアン王の考えは、それだけではありませんでした。

「旅の者たちよ、そなたたちは、ここに四人でやつてきた。」メリアン王がつづけけます。ここでの四人とは、ウルファの四人の騎士たちのことをさしていたのです(つまり、ベーカールランドを出発したときの、ベルグエルム、フェリアル、ハミール、キエリフの四人です)。

「だが、帰りの道は、そなたたちは、四人ではともによけぬ。」

メリアン王の言葉は、いがいなものでした。四人いっしょでは帰れない？ それはどういうことなのでしょう？ ウルフアの騎士たちは、そろって顔を見あわせました。

「つまり、きゆうせいしゆどのを送りどける者たちと、きゆうせいしゆどのを敵の目から遠ざけるための者たち。ふたつに分かれて、そなたたちはベーカールランドへとむかわなければならぬ。」

なるほど！ つまり旅の者たちをふたつに分けて、そのうちのひとつのグループを、敵の目をひきつけるためのおとりにしようということなのです。これはよい考えだと、みんなは思いました。ですが、このけいかくには、大きな問題もあつたのです。それは、おとりとなる者たちの身を、とても大きな危険にさらしてしまうということでした。

「まこと、こんかいの旅の中でワットの者たちに出会ってしまったことは、不運なできごとであつた。」メリアン王がふたたびつづけます。「しかしわれらは、それをわれらにとつてよいほうこうに、りようすることができよう。きゆうせいしゆどののそんざいには、かれらもまだ気づいてはいないと思うが、北のこの地にベーカールランドの白の騎兵師団の者たちと黒のウルフアがいたということは、かれらに大きなきようみを与えたはずである。かれらはそなたたちのことを、さがしてまわることであろう。われらはそれを、さか手に取るのだ。」

「つまり、きゆうせいしゆたるロビーどのは、敵の目からのがれるために西の道へ。そして敵の目をひきつけるための者たちは、南への道をゆくということなのです。」

そうたずねたのは、ウルファの若き騎士、ハミールでした。ハミールのといかけに、メリアン王は静かにうなずいてこたえます。

「さよう。かれらに、旅の者たちは南へ進んだのだと思わせるのだ。ウルファの者たちと、ひとりのシープロンとでな。だが、南へ進む者たちには、そうおうの危険がついてまわることとなる。敵の目をあざむくためには、いちどそのすがたを、わざと、敵に見せつける必要すらあるのだ。」

メリアン王の言葉に、部屋の中にまたどよめきが起こりました。南への道は、みんなが思っている以上に危険なものであったのです。そんな中で、若きハミールとその友キエリフのふたりだけが、あたりのざわめきをよそに、とてもおちついていました。そしてふたりは、おたがいに顔を見あわせて、その大きなけついをともにたしかめあうと、力強く、メリアン王にいったのです。

「王さま。われらはもとより、かくごをきめております。南への道のりをゆくそのおやくめ、このハミールとキエリフにおまかせください。」

ハミールとキエリフは、自分たちのみちびき手であるベルグエルムとフェリアルのため、力をつくし、その手助けをするという、みずからのその騎士としてのやくわりのこ

とを、よく心得ていました。そしてもちろん、きゆうせいしゆのことをぶじにペーカールランドまで送りとどけるといふ、そのにんむの重要さも。ですからかれらは、南への道をゆくこの大いなるやくめは、まさに自分たちにこそふさわしいものであると、すぐにかいいたのです（さらに、南への道のりをゆけば、そのさきにあるリユインとりでのようすもわかるかもしれませんが。レイミールのこと、なにかわかるかもしれませんが）。危険をおそれぬ、その強いかくご。そして、友やくにのことを思う、その気高きせいしん。南への道をゆくそのにんむに、かれらほどてきした者たちもないことでしょう。

ハミールとキエリフは、そろってベルグエルムとフェリアルのことを見ました。そして同じく、かれらベルグエルムとフェリアルのみならず、この若き騎士たちのことをしんらいし、りかいしている者たちもいなかったのです。たのむぞ。ベルグエルムとフェリアルのみならず、ただだまって、ふたりの若き騎士たちにならずいてみせました。そんなウルファの騎士たちのかたいけつそくに、メリアン王はとても感心して、心からの敬意をこめていいました。

「そなたたちの思い、このメリアン、しかと受けとめた。そなたたちは、まことの勇者だ。」

メリアン王はそういって、ウルファの騎士たちにふたたび、深々と頭を下げました（そ

してそれにつづいて、その場にいるシープロンの者たちも、みんなそろって騎士たちに頭を下げました。

「だが、そなたたちだけを危険な目にあわすわけにはゆかぬ。」

そして王さまは、ここである人物に、席から立ち上がるようにと伝えました。それにこたえて立ち上がったのは……、あのレシリア・クレツシエンドだったのです。

「みなに、レシリア・クレツシエンドをしようかいする。よく知っている者もいるだろうが、レシリアはライアン王子のかていきようしであり、そしてなにより、しぜんの力をかりるそのわざでは、わがくにでもいちばんとっていいほどのうでを持っているのだ。」

しぜんの力をかりるわざのことについては、読者のみなさんもすでによくごぞんじですよね。これまでの旅の中でもライアンがたびたび使った、あのわざのことです。雨の力をかりてすがたを見えにくくしたり、空気の力をかりてきすぐちをおおったり（それから風のたつまきのこうげきも）。ライアンが使ったのは、そのほんの一部分にすぎませんでした（もつともライアンも、そんなに多くのわざを使えるわけではありませんでしたが）。そのわざをレシリアは、もつとじょうずに、しかもたくさん、あつかうことができるということです（そしてじつさい、あつかえました）。

「南へと進むその道のりには、かのじよのうでが大いにやくに立つことであろう。わ

がくにのだいひょうとして、このたいせつな旅をまかせるのに、レシリアほどふさわしい者もおるまい。」

話しあいの前にレシリアのいっていた、「わたしはわたしのすべきことをするつもり」という意味深い言葉は、こういうわけからでした。レシリアはこの話しあいのはじまる前に、王さまからあらかじめ、そのとくべつな旅の内よりのことをきかされていたのです。そしてレシリアもまた、このアークランドのみらいを思う、ぜんなる住人たちのうちのひとりでした。

「南のくにのみなさん。この旅にはまさに、このアークランドのみらいがかかっております。アークランドに住む者のひとりとして、そしてこのシープロンドのだいひょうとして、みなさんとともにゆけることを、わたしはひじょうにこうえいに思います。」

レシリアは力強く、はつきりとしたくちようでいいました。そしてもちろん、この思わぬ心強い仲間のとっじようを、われらがウルフアの騎士たちは、大いにかんげいしてむかえたのです。

「こんなにありがたい話ありません。」ともに南への道をゆくハミールが、こうふんぎみにいいました。

「こちらこそ、ぜひともよろしく願います。」キエリフもまた、ぺこりと頭を下げてこたえました。

「きゆうせいしゆどのとレシリアをいれて、これでそなたたちは六人。」メリアン王がいきました。「四人のウルファの騎士たちは、それぞれふたりずつに分かれて進むのであるから、西への道と南への道、今はそれぞれ、三人ずつとなるな。」

これはすなわち、西へのひみつの道をゆく、ベルグエルム、フェリアル、ロビーの三人と、南への道をゆく、ハミール、キエリフ、レシリアの三人、それぞれのことをさしていたのです（西への道にベルグエルムとフェリアルのみふたりがそろってむかうことにしたのは、たいせつなきゆうせいしゆであるロビーの身を守るためには、やはり、白の騎兵師団の隊長と副長であるベルグエルムとフェリアルのみふたりが、そろっていった方がよいだろうという考えからのことでもありました）。

「ひそかな旅をゆくの中には、これでちょうどよい人数かもしれぬが、安全のためには、それぞれもうひとりずつ、ともに加える方がよからう。」メリアン王がつづけます。

「もとより、敵の目をあぎむくためには、南へ進む者たちは、きたときと同じく、四人で進む必要がある。さいわいにして、わがくには、ゆうしゆうなる者たちが大勢いる。みな、このアークランドをあいする者たちばかりだ。進んで、協力してくれることだろう。」

それから王さまは、四人のシープロンのそつきんたちの顔を、じゅんばんに見まわしながらいきました。

「ともにゆく者として、ふたり。だれか、名のり出る者はないか？ そなたはどうだ？ ルースアン。」

「わたしでよろしければ、いつでも出発する用意はできております。」王さまにいわれて、ルースアンはほこらしげにこたえました。そしてその気持ちは、ほかのシープロンの者たちとても、みな同じであつたのです。この旅はとても危険なものでしたが、それと同時に、とてもめいよな旅でもありました。それにさんかできることは、めいよとほこりをとくにたいせつにするウルファでなくとも、だれにとつても、ほこらしいことであつたのです。

さて、そんな話をしていたおりもおり。王さまとそっきんたちとのそんなやりとりを、まったくとうとつに、しかもまつぶたつに、うち破るものがありました。王さまもそっきんたちも、そのあまりのいきおいに、そのまま部屋のかべにまで、吹き飛ばされそうになってしまったくらいだったのです。

「ちよーつと、待つてえーつ！」

部屋のかべをびりびりとゆらすほどの大声！ いったい、声のぬしはだれでしょう？（読者のみなさんには、だいたいおわかりかと思いますが……）

それは、この物語のはじめからこんな旅に加わっている人物。このシープロンドからウルファの騎士たちとともに、ロビーのことをむかえにいった、そのたつたひとりのおとくべつな人物。そう、それはつまり、このシープロンドの王子さま、ライアンだったのです。

「なにをかつてにきめてんのさ！　なんでぼくが、人数の中にはいつてないの！」

そうなのです、メリアン王をはじめ、旅の者たちは六人といいました。ロビーと四人のウルファの騎士たち、それにレシリアです。たしかに、全部たしたら六人でした。ということとはライアンのいう通り、ライアンのことが、はじめのその人数の中に数えられていないのです。しかも今またふたり、新たに加えようとしているのは、シープロンのそつきんたち。自分ではありません。ですからライアンは、こんなにも怒りました（それに王さまは、シープロンドのだいひょうとしてレシリアのことをしようかいしました。このこともライアンのごきげんをそこねた、りゆうのひとつだったのです。なんとなくライアンは、シープロンドの王子さまなのです。その自分がだいひょうにえらばれなかったことが、ライアンには、ふまんでなりません。うくん、なんてわがままな……）。

さて、わが子のごきげんを（またしても）すっかりそこねてしまったメリアン王。王さまはおたおたしながら、いっしょうけんめいべんかいしようとなつとめました。

「だ、だって！ ライちゃんはかなしみの森まで、きゆうせいしゆどのをむかえに行くだけ、つてやくそくだったじゃないか！ それならそんなにあぶくないと思っただけ、父さんもおれてあげたのに。こんどの旅は、それよりもっと危険なんだよ？ これ以上、ライちゃんを危険な目にあわせることなんて、父さんにはできないよー！」

ああ、せつかくりっぱな王さまとして、話しあいのしきをとっていたメリアン王でしたのに……。とうとうみんなの前で、なさない方のすがたをあらわしてしまいましたね。しかし、話がライアンのこととなつてはしかたありません。だいじな人を危険な目にあわせたくないと心配する気持ちは、わたしたちにも、よくわかりますから。ですけど、こんかいばかりは、王さまにもライアンのことをとめることなどは、できそうにありませんでした。

「危険なのは、みんなだって同じでしょ！ ぼくだって、みんなの力になりたいんだ。ウルファの騎士さんたちのことも、考えてあげてよ！」

ライアンはそういって、ウルファの騎士たちのことをゆびさしました。さて、われらが騎士たちは、いったいどうしたらいいのでしょうか？ ベルグエルムがこまり顔で、みんなにいいました。

「あの……、わたくしどもにとっては、心強き仲間がともとなつてくれることは、まことにありがたいのですが……、しかし、シープロンのみなさんのうち、だれを仲間とし

て加えるのか？ それは、わたくしどもがきめられることではありませんので……」

ウルファの騎士たちはみな、とてもまじめでしたから、こんなときにどう受けこたえしたらよいものか？ わからずに、すっかりとまどってしまったのです。こうなつては、もうだれが、この場をまとめたらよいのでしょうか？（メリアン王もたじたじでしたし、シープロンのそつきんたちも、頭をかかえているばかりでしたから。レシリアでもルエルしきようさまでも、ほかのシープロンのみなさんでも、このせんさいな問題をかいけつすることは、むずかしいみたいです。うぐん。）

たよりとなるのは、やつぱりかれでした。きつとかれの言葉なら、だれもがなつとくするはずです。なにせかれは、この物語の主人公で、このアー克蘭ドのきゆうせいしゆなのですから。そう、それはもちろん、ロビーでした。

「あの……、ぼくがこういつては、なんなんですけど……」ロビーがおそるおそる、口をひらきました。「ライアンさんには、人の心をまとめ上げる、ふしぎな力があると思います。ぼくたちは、ここにくるまでの道のりの中でも、なんども、ライアンさんに助けられました。それは、ベルグエルムさんも、フェリアルさんも、同じに感じていらつしやると思います。だから、その、うまくいえないんですけど、ぼくたちには、ライアンさんが必要なんです。これからの道のりの中で、かれの力は、きつと、ぼくたちの大きな力になってくれると思う。」

ロビーの言葉をきいて、みんなはただただ、だまってしまいました。ロビーはだんだん、不安な気持ちになっていきます。よけいなことをいつてしまったのだろうか？ ロビーはみんなの顔をおそるおそる見渡しながら、いすの上で小さくちぢこまってしまいました。そしてそんなとき。この部屋のちんもくを破つたのは、この部屋の中でいちばん年上の、あの人だったのです。

「ほっほっほ！ どうやら、王さまの負けのようですね。」

声のぬしは、このくにも王さまとならぶくらいにえらい、ルエルしきようさまでした。そしてしきようさまは、その場の空気を大きな笑い声で吹き飛ばすと、みんなにむかっていったのです。

「ただ今のお言葉は、きゆうせいしゅどのお言葉です。だれに、はんたいすることができましよう？ じつにすなおで、まごころのこもったお言葉ではありませんか。」

「しきようさまの言葉に、ライアンも大きな声でさんせいしました。いつて、みんなの顔をぎろぎろにらみつけます。だれか、もんくのある人いる？」ライアンはそう

こうなつてはもう、口をはさめる者などは、だれもいませんでした。みんなはただだ

まって、首をぶんぶん、横にふるばかりだったのです（レシリアだけは頭をかかえておりましたが）。

そんなみんなのようすを見て、しきようさまがふたたび、メリアン王にいました。

「王さま、ライアンさまのご意志はかたいようすな。もはや運命は、だれにもとめられないのです。それにむかしから、『かわい子には旅をさせよ』と申します。ライアンさまも、鳥かごの中の暮らしから飛び出して、ご自分の足で、歩きたくなってきたということでございますな。」

しきようさまにこういわれては、メリアン王ももう、なにもいいかえすことなどはできませんでした。王さまはただただ、「ぐむむむっ……！」と言葉を飲みこんで、その両のこぶしを、ぎりぎりとにぎりしめるばかりだったのです。

「だいじょうぶだよ、父さん！」ライアンが、そんな王さまにむかっていいました。

「危険なことはいないから。それに、みんながいっしょだよ。白の騎兵師団って、とっても強いんだから！　ねっ？」

ライアンはそういって、ベルグエルムとフェリアルをあいだにわってはいって、三人でなかよく肩をくんでみせました（騎士たちはちよつと、反応にこまっておりますが）。

ライアンは、みんなといっしょにまた旅に出られることが、うれしくてならなかった

のです（思わずそのあと、ロビーに「やったね！」と喋ってぎゅつとだきついてしまったほどです）。いっぼう。ぴよんぴよんとびはねてよろこぶそんなライアンのことをしり目に、メリアン王はがつくりして、さいごにただひとつ、こうつぶやくばかりでした。

「なんてこった……」

それからふたたび（もういちどしきりなおして）、さまざまなが話しあわれました。まずさいしょにきまった大きなけつていごとは、南への道をゆく四人目のともとして、ルースアンがえらばれたということでした（ライアンはもちろん、ロビーたちとともに西への道をめざすことになりました。もつとも、ライアンが自分でかつてにきめちやつたんですけど）。ルースアンもまた、レシリアやライアンと同じように、しぜんの力をかりるそのわざを使うことができたのです（そして精霊のあつかいにもなれていました）。

それに、ひつじの種族の者にしてはなかなか背だけが高かったということも、かれがえらばれたりゆうのひとつでした（それでもせいぜい、五フィートとすこしでしたけど）。それはつまり、ルースアンにロビーの身がわりをしてもらうためだったのです。セレン大橋の上で出会った黒騎士たちには、旅の者たちが四人で、しかもその中に、な

ぞの黒ウルファがひとりいるということが知られてしまっていました。ですから、遠まきに見たのではわからないように、ルースアンに、黒のウルファのへんそうをしてみらおうというわけだったのです。そのためには、背かつこうがあんまり小さすぎても、あまりました（レシリアは小がらなじよせいでしたから、ウルファのへんそうはぜんぜんむりです。ハミールかキエリフがへんそうすると、こんどは白の騎兵師団の数がちがつてきてしまいます。けつきよく、ルースアンにたのむのがいちばんよいということにきまったわけでした）。

そして、西への道をゆく者たちのその道すじのことです。ひみつの道をゆく者たちは、まずシープロンドの西の山がく地をぬけ、そのさきに広がるはぐくみの森という森を通つて、西の地をめざすということになりました。そしてそのはぐくみの森の終わりに。そこには、ひとつの大きなまちがあつたのです。ですがそのまちは、ただのまちではありませんでした。そのまちがさかえたのは、もうずっとむかしのこと。今ではそのまちは、まったくのはいきよのまちへと変わり果ててしまつていたのです。

そのまちは遠いむかし、ロザムンディアという名まえでよばれていました。ばら色の石できずかれた、花々のさきみだれる、それはそれは美しいみやこであつたのです。ですがそれもはや、今から二千年ほどむかしのこと（ちようど、あのセイレン大橋のことが人々に知られるようになったところと、同じころでした）。そのころとほとんど

きを同じくして、このまちはとつぜんに、なんの前ぶれもなくうちすてられ、人々はいずこともなくすがたを消していったのです。人々が去り、せわをする者のいなくなつた花々は、はかなくかれていききました。

なぜこのまちから人々がいなくなつてしまつたのか？ 今となつては、それを正しく知る者はだれもいません。ですが、このはいきよのまちのひようばんは、今でもむかしと変わらないうらい、高いものでした。

ただひとつむかしとちがう点は、そのひようばんが、今ではまつたくぎやくのものになつていてるところでした。このまちのげんざいのよび名は、モーグ。「暗き墓場」という意味の、とてもおそろしげなものだったので。

「ぎやあー！」

小さな部屋の中に、とつぜんだれかのさけび声かひびきました！ それはちようど、話しあいの中で、モーグの名まえが出たときのことだったので。いったいだれでしょう？ みんなは「だれだだれだ？」とさわぎ出して、まわりを見渡しました。そしてその声のぬしがわかつたとき。みんなはともびつくりしたのです。それは、いがいやいがい。白の騎兵師団の副長、フェリアルでした！

「ちよつとフェリー、どうしたの？」ライアンが思わず声をかけました。ですが、ライアンはすぐに、ぴんとひらめいたのです。

「……さてはフェリー。ひよつとして……、おぼけがこわいんでしょ？」

ライアンの言葉に、フェリアルはあわてていいかえしました。

「なつ、なにをばかな！ ウルフアの騎士に、こわいものなどありませんっ！」

ですが、フェリアルはなかばむきになっていて、その言葉にはぜんぜん、せつとく力がなかったのです。

「なにも、はじめることはない。人にはだれだって、にがてなものがあるのだからな。」ベルグエルムがフェリアルの肩にそつと手をおいて、いいました。

「なにをいうんです、隊長まで！ ちがいますったらー！」

とまあこんなことがあったのですが、それはつまり、「モーグにはおぼけが出る」という、もつぱらのうわさがあったからでした。じつはフェリアルは小さいころ、お城でゆうれいを見たということで、それくらい、おぼけのたぐいが大のにがてになってしまっていたのです。今でもそのときのことを思い出してしまって、夜ひとりでトイレにいけなくなってしまうくらいなのだそうでした（りっぱな騎士さんにも、いがないちめんがあるものですね）。

ちなみに、セイレン大橋の上でさいしよに黒騎士たちのことを見たとき、その悪霊の

よくなすがたにフェリアルはいっしゅん、おぼけかと思つてどきつとしてしまいました
が、すぐに人間だということがわかつて気を取りなおしていました。

そんな（とつてもこわい）モーグを、これから通つていかなくはならないわけでは
したが、そこを通らなければならぬそのわけは、とてもたんじゅんなものでした。つま
りこのまちは、西の道の「北の終わり」にあたる場所です。西の道にはいる
ためには、どうしたって、その入り口であるこのまちを通つていくがいりませんで
した（ほかにまわり道ができるようなところも、ありませんでしたから）。

そして、モーグをぬけてからの道のりのことについては、メリアン王にもルエルシ
きようさまにも、だれにもわからないことでした。お伝えしました通り、この西の道は、
もうなん十年とだれにも使われていないような道だったので。魔女がいるというう
わさも、どこまでがほんとうのことなのか？ わかりません。こればかりは、じっさ
いにいってみるまでは、わかりませんでした。

南へ進む者たちのことも、長い時間をかけて、ねんいりに話しあわれました。どんな
道を通つて、どんな行動を取るべきなのか？ 旅のこまかなところまで、さまざまな意
見が出て、ぎろんがかわされたのです。そしてさいしゅう的には、四人でそろつて、そ
のままベーカールランドのアルマーク王のもとまで、むかうのがよいだろうということに
なりました（さいごの戦いにむけてはひとりでも多くの力が必要となりますから、やは

りハミールとキエリフのふたりの騎士たちは、さいしよのよてい通り、ベーカーランドへともどらなくてはなりません。それにともなつて、レシリアとルースアンのふたりも、騎士たちのともとして、いつしよにベーカーランドへむかうのがよいだろうということになりました。もとより、敵の手に落ちたりユインの地をぬけてベーカーランドの地へむかうことは、シープロンたちのしぜんの力をかりるわざがなくては、とてもむりなことでしたから、シープロンであるかれらがベーカーランドにむかうことは、しごくとうぜんのことだったのです。

そしてそのあと、危険な地をふたたびふたりだけでもどるよりは、ベーカーランドの王城まで、そのままかれらも、ともにむかつた方がよいだろうということになったわけでした。

話しあひは、午後おそくまでつづきました。そして、おひさまがすっかり西の地にかたむいていってしまったころ。このアーランドの運命にかかわる、なんとも重要な話しあひは、ついにその終わりをむかえることとなつたのです。時間にして四時間近くにも渡る、長い長い話しあひでした。

「眠れないの?」

はいごから、声がしました。床にすわりこんでいたロビーがふりむくと、そこには、

(パジャマすがたの) ライアンが立っていました。

時こくは午後の十一時。黒やぎのこくげんのころでした。空にはうすい雲がかかっ
ていて、その雲の切れまからは、きれいな月が顔をのぞかせております。ロビーはシー
プロンドの王宮のバルコニーで、その空をながめていました(旅の者たちが出発するの
は、やはり朝を待った方がよいだろうということになりました。シープロンドから西に
広がる山がく地は、切り立ったがけの道で、夜に進んでいくにはあまりにも危険が大き
すぎると思われたためでした。日のあるうちにそこをぬけて、はぐくみの森まで、たど
りつくのがよいだろうということになったというわけなのです。そして、南への道のり
についても。敵の目をあざむくためには、やはり日のあるうちに動いた方が、つごうが
よいのでした)。

あたりはしんと静まりかえっております。そよそよとした風が吹いておりましたが、
ここはそんなに、寒くはありませんでした。

「ごめんなさい。かっぺにお城の中を歩いちゃって。」

ロビーが、ぺこりと頭を下げていました。ライアンはただだまって、ロビーの方へ
歩みよると、ロビーとならんで、床にちよこんとすわりこみます。

「きれいだね。」ライアンが、空にかかったお月さまを見ていました。それからライ
アンは、ロビーの方を見て、いったのです。

「けつきよく、わかんなかったね。その剣のこと。」

ロビーは、スネイルからもらったあのおくりものの剣のことを、かかえていました。ロビーは自分でもよくわかりませんが、今はなんだか、この剣を手に行っていたいと思っただけです。

「いいんです。すくなくとも、悪いものじゃないってことがわかったし。ぼくにとつては、だいじなものであることに、変わりはないから。」

話しあいのあと。ロビーはメリアン王にお願いして、スネイルにもらったこのふしぎな剣のを見てもらいました。メリアン王はとてももの知りで、とくに、ふしぎな力を持った武器や、防具や、道具のことなどについて、くわしかつたのです（思えばライアンに服にこっそりつけていたブローチも、そんなふしぎな道具のうちのひとつでしたね）。しかしそんなメリアン王でさえ、ロビーのこの剣のことについては、ほとんどとわかっていないくらい、たしかなことばかりませんでした。

「魔法の剣については、わたしもさまざまなものを見てきたが、」メリアン王が言いました。「この剣は、わたしが今まで見てきたものの、どれともちがう。なんともふしぎな剣だ。」

「ふつう、魔法のかかった剣というものは、なにかしらのしるしを持っているものだ。火をあらわすしるしであったり、風をあらわすしるしであったり。だが、この剣にはそ

れない。それでいて、この剣が、自身のその内がわに、おそろしいほどの力をひめているのだということがわかる。もしこれが悪用されでもしたら、とんでもないわざわいをひき起こすかもしれぬ。」

メリアン王はそういつて、剣をロビーにかえました。

「だが、これだけはいえよう。この剣は、悪しきものなどでは、けつしてないとな。正しき者が、正しきもくてきのためにこの剣を使えば、かならずや、この世界をすくう力となるであろう。きゆうせいしゆどのよ、これはまさしく、そなたのためにある剣だ。手放さず、だいじにするとうい。」

それから数時間がたって、ロビーは寢床につきましたが、なんだか目がさえてしまつて、ぜんぜん眠れませんでした。それでロビーは、ひとり、このバルコニーへとやってきたのです。

ロビーとライアンは、しばらくだまつたまま、空をながめていました。

それからだいがたつて。ロビーがライアンにいったのです。

「ライアンさんは、げんきでいいね。」

ロビーにいわれて、ライアンはにっこり笑つてみせました。

「笑つても、かなしんでても、今日は今日だもん。だったら、げんきな方がいいじゃ

ない。」

ライアンの言葉に、ロビーも静かにほほ笑んでかえします。

「ライアンさんは、すごいな。ぼくと同じくらいのとしなのに、ぼくなんかより、ずっと強くて。」

「そんなことないよ。」ライアンがつづけていいました。「ぼくだって、ロビーと同じさ。とくべつなことなんてなにもないよ。みんながいるからげんきになれるし、みんながいるから、げんきになりたいと思うんだ。ぼくは、ぼくにできることを考えて、いっしょうけんめい、それをしただけなんだから。」

ロビーははっとしました。そうだ、ライアンさんだってがんばってるんだ。とくべつなことでもなくてもいい。自分のできることでいいから、みんなのために、できるだけのことをすること。それが人にとって、いちばん、たいせつなことであるはずなんだから（ロビーは、セイレン河にむかうとちゅうの道の中でベルグエルムにいわれた、その言葉のことを思いかえしていました。自分の力を知り、自分を信じ、それぞれが助けあうことで、はじめてみんなは仲間となり得る。ですがロビーは、これまでそのことを、深くいしきしすぎてしまっていたのです。

自分の力を知り得たけれど、ぼくの力はまだまだ小さい。だからぼくは、すこしでも多くみんなの力になれるように、もっとしっかりしなくっちゃ。

ロビーはそんな気持ちばかりを、自分の中でからまわりさせてしまっていました。自分の力を大きくさせようという気持ちは、もちろんたいせつなことです。人はそうやって、すこしずつ、成長していくのですから。ですがロビーは、自分が背のびばかりしようとしていたということに気がつきました。むりをして自分の力以上のことをしようとしたとしても、うまくいきつこありません。ぎやくに、みんなによけいなめいわくをかけてしまうかもしれないのです。

ライアンの言葉をきいて、ロビーは今、心の中のもやもやとしたものが、急に晴れていったかのような感じがしました。

自分をかざらず、自分にできることをせいっぱいやること。そのうえで、みんなのことを心からしんらいして、助けあうこと。それこそが、ぼくのやるべきことであり、進むべき道なんだ。

ロビーはライアンにむきなおって、もういちどいいました。

「やつぱり、ライアンさんはすごい。強くて、やさしくて。ぼくも、ライアンさんみたいに、強くなりたい。守りたいもののためにも。みんなのためにも。」

そんなロビーに、ライアンはおどけていました。

「やめてよ、はずかしいからさ。それに、ぼくの話は、ライアンでいいってば。ベルグにも、フェリーにも、そうたのんでるんだ。」

ロビーはもうすっかり、ライアンのことが好きになっていました。種族も背かっこうも、かみやしっぽの色まで、ぜんぜんちがいましたが、友だちになるのに、そんなことはなんの問題でもないので。ロビーはこの夜のバルコニーで、ライアンにすっかり、心をひらいていました。そしてかれはこれくらい、ライアンのことを、名まえだけでよぶようになったのです。

「ありがとうライアン。ほくも、げんきになれそうだよ。」

そのとき、ふたりのうしろから、小さな声でよぶだれかの声がかこえました。ふたりがふりむくと、うしろのはしらの影から、だれかがライアンのことをよんでいたのです。そしてよく見ると、それはフェリアルでした。ライアンが立ち上がって、フェリアルの方に歩みよります。そしてふたりはしばらく、はしらの影でなにやらぼそぼそと話しあっていました。やがてライアンが、バルコニーに残っていたロビーにむかっていたいました。

「ロビー、フェリーがトイレについてきてほしいんだって。」
いわれて、フェリアルは大あわてです。

「わわっ！ ちよつと！ ロビーどのにはいわないでつて、いったのに！」

そう、フェリアルはモーグの話が出てきてからというもの、すっかり、むかし見たおぼけのことを思い出してしまっていました。

そんなフェリアルに、ロビーは「あはは。」と笑ってこたえます。

「なんだか、ぼくもいきたくなくてきちやいました。みんなでいきましょう。」

つれ立って歩いていくとちゆう、フェリアルがふたりに、ねんをおしていいました。

「ベルグエルム隊長には、ぜったいにいわないでくださいよ！」

フェリアルのそのしんけんなたいどに、ロビーとライアンのふたりは、顔を見あわせ
て、声を上げて笑いました。

月あかりが、シープロンドのみやこを銀色にそめた夜でした。

7、オーリンたちのむかしのなごり

そのろうかは、まっくらでした。そしてしゅーしゅーという、湯気のような、生きもののこきゆうのような、なにやらおそろしげな音がそこにはひびいていました。空気はとてもべたついていて、あつく、じつとりとしています。それはとても、まともな生きものたちのすうような空気ではありませんでした。

いったいここはどこなのでしょう？ しかし、この場所がどこであったにせよ、ここにくるだれもがこう思うはずです。こんなところには、一分だつていたくはない！と。

今そのろうかをひとり、だれかがむこうから歩いてきました。ふしぎなことに、その人物が歩いていくその場所にあわせて、まっ黒なかべにうめこまれていたつるつるとした石が、ぼんやりとした赤いかがやきを放って、道をてらし上げていくのです。

やがてその人物は、ひとつの広間にやってきました。この広間のかべにも、さきほどのろうかにあったのと同じ、赤く光る石がたくさんうめこまれていて、広間全体をぼんやりてらし上げていたのです。ですが、この場所でまっさきに目をひくものは、そんなものはありませんでした。まずさいしよに目に飛びこんでくるもの。それは広間の

まん中におかれた、赤い光を放つ、大きな四かく形の石だったのです。

その石はなんともふしぎなことに、空中に浮かんでいて、ゆつくりとかいてんしていました。そしてにぶく光ったその赤いかやきは、それを見る者に、血や、ぼうりよくや、はかいなどといった、おそろしげなものを思い起こさせるのです。

その石のそばにひとり、こちらに背をむけるかっこうで、だれかが立っていました。その人は、全身をおおう黒いガウンのようなものを、頭からすっぽりかぶっております。ですから、どんな人なのか？ 顔はおろか、手足のさきすらも、見て取ることはできませんでした。

「ついにあらわれたの?」

とつぜん、そのなぞの人物が口をひらきました。それは、さつきろうかを歩いてきた人がこの広間にはいつてきたのと、ほとんど同じときでした。ですけど、口をひらいたそのなぞの人物は、あいかわらず赤い石の方をむいたまま、広間にはいつてきた人の方には、まったく目をむけていなかったのです（まるでうしろに目がついていて、はいつてきた人のことが、すっかり見えていたかのように）。

この言葉に、広間にはいつてきた人の方が、かしこまってこたえました。

「……あなたさまのよきなされていた通りでした。かの者です。まちがいありません

……」

それをきいて、なぞの人物は「くつくつく。」といううすきみの悪い笑い方をしてみせます。

「あなたも、かれを待ちのぞんでいたんでしょ？　じつに、よろこばしいかぎりだね。むこうの方から、わざわざ、すがたをあらわしてくれたんだから。」

広間にはいつてきた方の人が、ふたたびそれにこたえました。

「……わたしは、自分のつとめを果たすまで。もはやかれは、わたしには、なんのかんけいもありません……」

「だっだらいいんだけどね。」なぞの人物がまた、「くつくつく。」ときみ悪く笑います。「しばらくは、およがせておけばいい。近いうちにならず、むこうの方からやってくるから。それまでじっくりと、けんぶつさせてもらおうよ。」

それから赤い石の前のそのなぞの人物は、なにやらごによごによと、口の中でつぶやきました。すると、それにこたえるかのように、ちゆうに浮かんでいた石が、みずからのそのぶきみながやきを、なおいつそのこと強くさせたのです。そしてその石のかがやきを見て、なぞの人物は、なんともまんぞくげに、うれしそうに、いいました。

「さて、どう出るのかな？　おもしろくなってきたぞ。」

「朝のたいそう、はじめ！」

みどりのしばふの上に、みんなが集まっていました。みんなは今、そのかけ声にあわせて、いち、に！ さん、し！ 手足をまげて、たいそうをはじめたところだったのです。

かがやく朝の光が、あたりいちめんをつつみこんでいました。ここは、シープロンドの王宮の中庭です。のぼったばかりのおひさまの光をからだいっぱいにあびながら、旅の者たちは今、お城のほかの人たちといっしょに、朝のたいそうをおこなっているところでした（シープロンドではみんな、けんこうのために、朝のたいそうをよくおこなうのです。ちなみに、みんなのお手本となつてかけ声をかけているのは、シープロンドの王子さま、ライアンでした）。

今日はとてもだいいじな日でした。みんなそれぞれに、心にひめた思いをかかえています。そのきんちようをすこしでもやわらげようと、みんなはこの、朝のたいそうにさなかしていたのです（いい出しつぺはやつぱりライアンです。ライアンはみんながまだねぼけまなこのところにいきなりおしかけていって、なかば強せいのくに、このたいそうにひつぱつてきました。ですけどそれも、みんなの気持ちをほぐしてあげようという、かれの思いやりからのことだったのです。もつとも、みんながそれをかんげいしたかどうかは、わかりませんが……。とにかく、眠かったので）。

つまり今日は、新たな旅立ちの日でした。ほんとうなら、もつともつと、このシー

プロンドにとどまっていたかかったんですけど、ざんねんながら、もうかれらには、そんな時間はなかったのです。西への道を進む者たちが敵の目からのがれるということもふくめて、旅の者たちはいつこくも早く、この地をはなれる必要があります。

旅立ちの時間は、あつというまにやってきました。じこくは午前六時。羽うさぎのこくげんのころです。王宮の入り口の前には、旅立つ者たちのことを見送るための、たくさんの人だかりができていました（ほんとうはもつと静かに出発したかったですけど、そうもいきませんでしたので）。そして、メリアン王の乗るりっぱな白馬を先頭に、旅の者たちの騎馬たちと、見送りの者たちの乗るたくさん騎馬たちが、王宮の入り口の門から、ついに出発したのです。かれらがめざすのは、シープロンドのいちばん下にあたる場所、南門でした。この南門から、旅の者たちは西への道と南への道、それぞれ道を進んでいくのです（とここで、ライアンの白馬メルは、もうすっかりげんきになっていました。こんなにみじかい時間でけががなおったのも、シープロンドのお医者さんたちがみな、すばらしくゆうしゆうだったからなのです。げんきになってほんとうによかった！ それと、ベルグエルムの肩もすっかりよくなりましたので、ご安心を。べつに、ついでのほうこくというわけではありませんよ、もちろん）。

一行は、白いれんがの道をゆつくりと進んでいきました。道の両がわには、たくさんシープロンの人たちが、旅立つ者たちのことを見送りに出てきております。出発のこ

とはひみつになつてゐるはずでしたのに、どこでうわさが広まったものか？ かれらにかくしごことをしておくことは、むりなようですね。

「こんなにはでに見送られたんじや、こまつちやうよね。黒騎士たちがまた、空から見張つてなければいいんだけど。」そんなかれらに手をふりながら、ライアンがじょうだんまじりにいました。

そして一行は、ほどなく、シープロンドのみやこのその南門へとうちやくしたのです（南門はほかのくにくにからシープロンドへ、さまざまな人や品物がいつてくるところで、そのため門も、ほかの門よりもだいぶ大きなものとなつていました）。

門の前は大きな広場になつていて、そこはまさに、人であふれかえつていました。それらの人たちも、またみんな、だいじなだいじな旅へとむかうわれらが仲間たちの出発を、ぜひとも見送つてあげたいと集まつた、心やさしき住人たちであつたのです。

一行が広場にはいると、人々のこうふんはいつきに高まりました。みな口ぐちに、「きゆうせいしゆばんぎーい！」だとか、「ライアン王子ばんぎーい！」だとか、さげんでいたのです。しかし、みんなが心より見送つてくれるのはうれしかぎりでしたが、これはやつぱり、ひみつの旅なのであつて、あんまりさわがれてしまつてはこまるのです（よけいなうわさまで、広がつてしまいかねませんから）。そんなみんなのことを静めたのは、またしてもライアン……、ではなくて、こんかいはメリアン王でした。せつか

く、いちばんえらい王さまがいるんですから、この場はやつぱり、王さまにおまかせすることにししましょう。

「みなの方！ 見送りを心よりかんしゃいたす！」メリアン王が大声でいいました。とたんにあちこちから、「メリアン王ばんざーいー」という声が、われんばかりにわき起ります（これではみんなを静めるどころか、ぎやくこうかでしたね）。

メリアン王は、「う……」と気まずい顔をしたあとで「こんどは大きく手をかかげて、いいました。」

「せいしゆくに！ これは、王の言葉である！」

こんどは、こうかはぼつちりでした。人々はとたんに静まりかえって、王さまのつぎの言葉を待ったのです。さすがは王さま。みんなからそんなけいさされているんですね（もうひとつの方の王さまのすがたをみんなが知ったら、どう思うかはわかりませんけど……）。

メリアン王は「こほん。」とせきばらいをしてから、つづけました。

「みなのおいが、旅の者たちのはげみとなろう。これはひじょうにたいせつな、ひみつの旅である。このアーランドのみらいがかかっているのだ。この旅のせいこうには、そなたたち、みなが必要だ。この旅のことは、このくにのそとには、けつしてもらしてはならぬ。みなでひみつを分かちあい、守りぬくのだ。」

わたしは、そなたたちのことを信じておるぞ。そなたたちは、わがあいすべき、シープロンドのくにたみ。わたしのほこりだ。」

王さまの言葉に、人々からおしみないはくしゆがおくられました（さすがはメリアン王。すばらしいえんぜつでしたね。これなら、ひみつがもれたり、よけいなうわさが広がったりするようなこともないでしょう）。そしてそのはくしゆに送られながら、旅の者たちと見送りの騎馬の者たちは、大きくひらかれたその南門から、このシープロンドのみやこのその土地へとむかつて、歩を進ませていったのです（といつてもまだそこは、シープロンドのくにの中。そこから、はたけやまきばが、ずっと広がっていたのですが）。

門のそと。はたけやまきばの広がる土地の、そのむこうは、見渡すかぎりの大平原でした。ここをはるか進めば、南のくにやリユインとりでのある土地へと、たどりつくことができるのです。ロビーたちの進む西の方を見ると、はるかに、赤茶けたはだを持つ、ごつごつとした山々がつらなっているのが、見て取れました。あの山を越えたさきには、はぐくみの森という大きな森が広がっています。そしてひみつの道は、さらにそのおくにありました。

門をぬけると、メリアン王は門をいったん、とじるようにいました（人々のあついでせんがあつては、ちよつといいづらいことがありましたから。それはやつぱり、ライ

アンへの見送りの言葉でしたけど。そして門がとじられると。みんなは騎馬からおりて、それぞれに、さいごの見送りの言葉をかわしあつたのです（ちなみに、旅の者たちの騎馬たちは、西をゆく者たちと南をゆく者たち、それぞれ同じく三頭ずつでした。一頭が白馬で、ほかの二頭がはい色というところも同じです。これはもちろん、敵の目をあざむくために、同じ馬の数と色にしてありました。ウルファの騎士たちは、ひとりにはい色の騎馬が一頭ずつ。ライアンとロビーが、けがのなおつたメル。そしてレシリアとルースアンが、同じ一頭の白馬に乗っていくのです）。

「ぜつたいに！ ぜつたいにあぶないことはしないでね！ やくそくだよー」

なんどもなんども、ライアンの手をにぎつてくりかえしそういつているのは（読者のみなさんには、もういわなくてもおわかりですよね）、メリアン王でした。王さまはさいごまで、ライアンのことが心配でならなかつたのです。

「わかつてるつて。あぶなくなつたら、すぐ逃げるから。」

ライアンの言葉は、メリアン王がライアンにしつこくいつたことでした。あぶなくなつたらすぐに逃げる。これはなにも、おくびよなことだというわけではありませぬ。むしろそのぎやくです。ひみつの旅にある者たちがその旅をなしとげるためには、まずは自分の身を守ることが、なによりもだいじなことでしたから（そのためには、危険なことからはできるかぎり、遠ざかつていなければならなかつたのです。メリアン王

はそのことにもじゆうぶん、考えをめぐらせていたというわけでした。もつとも王さまの場合は、ライアンの身の安全の方を、いちばんに考えていたようでしたけど……。

「それにさ、」ライアンがつづけて、メリアン王にいいました。「こんなにお守りがついてるんだもん。これじゃ、危険な目にあう方がむずかしいよ。」

ライアンはそういって、ま新しいマントのすそを広げてみせました。そこを見てびっくり！ マントのうらから、服のポケットから、ズボンにベルトに、ブーツにいたるまで。あらゆるところにじやらじやらと、ライアンの身を守るためのお守りがついていたのです！ もちろんこれは、メリアン王がライアンのためにつけさせたものでした。メリアン王はライアンが旅に出ることをゆるすかわりに、自分の持つているありとあらゆる安全のお守りを、持たせたのです（もう、前みたいにくっすりつける必要もありませんでしたから。メリアン王の、ほんりようはつきといたところですね）。

そしてこれらのお守りは、やっぱり、ただのお守りではありませんでした。さいしょの旅で王さまがこっそりつけた、星がたのブローチはもちろん（これは今は、ほそいくさりにつけられて、ライアンの首にかかっています）。危険から身を守るお守りや（これだけで二十こくらいもありました）、早く走ることのできるお守り。ピンチになったらほのおを吹き出して、敵をやっつけるもの。水の中でも息ができるもの。さらに、ライアンが今だいたいどのあたりにいて、どんな景色を見ているのか？ など、そんなこ

とまでわかってしまう、すごいものまであったのです（そのほか、たいおんやみやくはくがわかるものとか、おなかがへつていないかどうか？ わかるものとか、そんなものまでありました。ちよつとそこまでいったら、やつぱり、やりすぎですね。ですから王さまは、ライアンにはそこまでの説明はしないで、「ただのお守りだよ。」とごまかしていました。いったらたぶん、また怒られそうでしたから……。

もつともライアンの方も、王さまのすがたが見えなくなったら、首のブローチはともかくとして、ほかのは全部、かばんにしまってしまうつもりでしたけど。だってこれじゃ、旅をゆくのに、じやまでしかたありませんでしたから！）。

そんなライアンのもとに、ひとりの少女が近づいてきました。それはライアンのいもうとの、エレナでした（もちろんエレナもまた、メリアン王とともに、ライアンのことを見送りにきていました）。エレナはだまってそつと、その手に持っていたものをライアンにさし出すと、とつても小さな声でいきました。

「兄さま、これ……」

ライアンが受け取ったもの。それは、小さなビーズをあんでひつじのかたちで作った、手作りの小さなお守りでした（このお守りはライアンにらせて作られていました）。それは旅立つ兄のために、エレナが心をこめて作ったものでした。このお守りには、王さまが持たせたもののようなとくべつにふしぎな力などは、なにもありませんでした。

ですがときとして、そういうふつうの品物の方が、それを持つ者に、とても大きな力を与えてくれるものなのです。

ライアンは、なにもいえませんでした。いつものライアンでしたら、笑ったりおどけたり、してみせたものでしたが、こんかいばかりは、すなおに、いもうとのその気持ちを受け取ったのです。ライアンはそのお守りをにぎりしめて、ただ小さく、エレナにいました。

「ありがとう。だいにじにする。」

ライアンはそして、エレナのことをだきしめました。ふたりの目には、うつすらと、なみだが光っていました（それを見て王さまは、「ああっ！ エル、ずるい！」とあって、ふたりのあいだにわりこんで、ライアンにまだきついてしまいました。ですがライアンも、こんかいばかりは「しょうがないなあ。」とあって、王さまのことをつき飛ばしたりはしなかったのです。やっぱりライアンも、家族とはなれるのは、さみしかったんです）。

そんなライアンのむこうでは、ウルファの四人の騎士たちが集まって、言葉をかわしあっていました（ちなみに、ロビーもいっしょにその場にいました）。

「けっして、むちやをするなよ。おまえたちはまだ、若すぎるところがあるからな。たいていせつな力は、ここぞというときまで取っておくことだ。」

ベルグエルムがこうはいの若き騎士たち、ハミールとキエリフのふたりの肩をたたいて、じょうだんまじりにいました。若き騎士たちに力がいりすぎているのを見て、ベルグエルムは、そのきんちようをときほぐしてやろうとしたのです。

「はい。隊長の教えをきもにめいじます。どうぞお気をつけて。」ハミールとキエリフはそういつて、ウルファの敬礼のしぐさを取つてみせました。

それからハミールとキエリフのふたりは、こんどは、フェリアルにむかつていったのです。

「フェリアル副長も、どうかごぶじで。こんどの旅では、わたしたちの方がらくな道でよかった。わたしはこわがりですから、とてもモーグなんかにはいけません。」

「うぐつ……い！」

そういつて顔をしかめるフェリアルに、ベルグエルムも声を上げて笑いました。

「じつはわたしも、おぼけが大きらいなんだ。たのもしいフェリアルがいつしよで、ほんとうによかったよ。」

このような旅の前に、こんなふうに笑つてじょうだんをいいあえるのも、かれらがまことに、おたがいのことをうやまい、したい、しんらいしあっているからこそなのです。ふつうだったら、待ち受ける大きな危険や、そのせきにんに、心がおしつぶされてしまつたとしても、おかしくはないくらいでしょう。もしかれらが、ひとりきりだったのなら。

こんかいの旅は、まこと、おぼつかないものになってしまったにちがいありません。ですが、かれらはひとりではないのです。仲間が、家族が、たくさんの人々の思いが、かれらの心をささえていたのですから。

「王子、しばらくは、べんきようは自習にしておきますよ。」ライアンにその声をかけたのは、レシリアでした。「ほんとうなら、わたしがいつしよについていって、べんきようを見てあげたいところなのですが……」

「うわっ！ それだけはんべんしてよ！」きびしい先生の言葉に、ライアンは思わず両手をふって、そうこたえます。

「もどつたらすぐ、算数とれきしのテストがありますからね。おくれはしつかり、取りもどしてもらいますよ。」

そういうとレシリアは、急に、顔をくもらせました。そしてレシリアは、ライアンから顔をそむけると、ひとり、自分の騎馬の方にゆっくりと歩いていったのです。

「どうしたの？ リア先生。」ライアンがそういって、レシリアのことを追いかけてました。レシリアに追いついたライアンが見たもの。それはかのじよの、泣いている顔でした。ひとみをまっ赤にはらして、レシリアは、ひつくひつくと、しゃくり上げて泣いていたのです。

「リア先生……」

ライアンはそんなレシリアのを見て、言葉をなくしてしまいました。それははじめて見る、リア先生の泣き顔でした。気が強くて、とつてもこわくて、おせっかいやきのリア先生。そんな先生が、ライアンとのわかれのつらさに、なみだを流して泣いていたのです。

ライアンはなにもいえず、ただレシリアに、ぎゅつとだきついていました。うでに力をこめて、それからただひとこと、こうつぶやいたのです。

「大好きだよ……」

しぜんと、ライアンのひとみにも大つぶのなみだがあふれてきました。そしてレシリアは、そんなライアンのことをしっかりとだきしめかえして、こたえたのです。

「ライアン……、ぜったい、ぶじに帰ってきて……」

ライアンはレシリアのうでの中で、こつくりとうなずいてみせました。もう、顔はなみだで、ぐしゃぐしゃになっていました。ライアンは、それを先生に見られるのがいやだったのです。ふたりは長いあいだずっと、そのまま動きませんでした。

そしてしばらくたったころ。レシリアはひとみをぬぐって、なんとかもとの顔をとりつくろうと、ふたたび、げんきな声でいったのです。

「ほらっ、王子。もうみんな、待っていますよ。そろそろ、いかないと。」

レシリアの言葉に、ライアンもひとみをごしごしとこすって、いいました。

「うん。」

それからライアンは、レシリアに手をふって、ロビーたちの方にばたばたとかけていったのです。

「どつちがさきにベーカールランドにつくか、きょうそうだよー！」

ライアンがふりむきざまに、レシリアにむかってさげびます。そしてレシリアは、またいつも通りのレシリア先生にもどって、げんきにそれにこたえました。

「わたしがさきについたら、たくさんしゆくだいを用意しておきますよ。それがいやなら、おくれないうこと！ おそくなったら、どんどん、しゆくだいがふえていきますからねー！」

「ええーっ！ かんべんしてよー！」

こうして、旅の者たちはふたたび、それぞれのむかうべき運命の道の中へと、ふみ出していくこととなったのです。それはもうすぐ冬をむかえようという、秋深いある日のこと。おだやかに晴れた、ある朝のことでした。

シープロンドを出発して、西へ。みどりの平原は、やがて、なだらかなのぼりのつづく岩の道となりました。この道はガイラルロックたちのいた場所ほどごつごつしてはいませんが、かといつて、ぜんぜんうるわしいというわけでもありませんでした。

それはつまりこの場所が、もううつしみ谷からは、ずいぶんとはなれてしまっていたからなのです。ちらほらと、しげみや、ひくい木や、つるくさの葉っぱなどが、岩のすきまから顔をのぞかせておりましたが、うつしみ谷のあのみどりあふれるすばらしい場所にくらべたら、この場所はまるつきり、からからにひからびた、さびしいところでした（それでも今のきせつを考えたら、これがふつうでした。うつしみ谷とくらべるのが、それもいけないのです）。

ロビーたち、西への道をゆく旅の者たちは今、馬の背にゆられながら、その岩の道をばかほこと進んでいるところでした。もうなん時間も、景色はまったく変わらないうちに思えます。あいかわらず、なだらかなのぼりの道が、あつちやこつちにまがりながら、どこまでもつづいていました。そして、もうすっかりおひさまものぼりきってしまった、旅の者たちがそろそろおひるごはんにしようかと思いはじめたころ。一行はとつぜん、景色のひらけたがけの上につくられた、石づくりの見張り台のあるその場所へと、たどりついたのです。

この見張り台は大むかし、このあたりの山に住んでいたオーリンとよばれるふくろうの種族の者たちが、つくったものでした。ですがかれらは今や、どこか遠くの地にうつり住んでしまって、今ではこのあたりの土地には、だれも住む者はなかつたのです。ですから、オーリンたちのつくったこの石づくりの見張り台だけが、おとずれる者もなく、

さびしそうに、このがけの上の広場にぼつんとたつていているばかりでした（そしてその半分くらいは、すでにむざんにも、くずれ落ちてしまっていました）。

「オーリンの見張り台か。わたしも、見るのははじめてだ。」ベルグエルムが、くずれた見張り台をしらべながらいいました。「かれらはもう、百年もむかしに、この地をはなれたときく。そのわけも、かれらがどこにいったのかも、南の地ではさだかではない。」

「このあたりはがけばつかりであぶないし、シープロンドの人たちも、みんなこつちへは、ほとんどきたことがないんだ。」ライアンも、がけのふちに立つておつかなびつくり下をのぞきこみながら、いいました（ねんのため、ロビーの服のすそをがちりつかんでいましたけど）。「だから、オーリンたちのことは、シープロンドの中にもほとんど伝わってないんだよ。それにかれらは、人づきあいが好きじゃなかったんだって。だから、よけいにみんな、知らないんだ。」

「そしてどうやら、オーリンたちのかわりに、この地に住みはじめた者たちがいるようだな。」ベルグエルムが、くずれた石のひとつを持ち上げて、つづけます。「この石は、しぜんにくずれたものではない。なにか、とてつもなく大きな力で、こわされている。それも、ハンマーのような道具を使って。」

ベルグエルムの言葉に、みんなはとてもおどろきました。

「こんながんじょうな石のたてものを、こわしちゃう生きものなんて、いったいどんな

やつなんですか？」ロビーがたずねます。

そしてロビーのその言葉に、ベルグエルムはれいせいに、地面をゆびさしていいました。

「これを見てください。」

ベルグエルムのゆびさしたところには、なにかたくさんのあなのようなものできていました。そしてよく見ると、それはどうやら、なにかの生きものの足あとのようなのです。ですが、それが足あとであるのだとしたら、ひとつどうにも、信じがたいことがあります。大きすぎるのです。ひかく的たいかくのよいウルファの者たちでさえ、足の大きさは十一インチほどでした。ですがその足あとは、どう見ても、十五インチほどはあったのです！（ぞうの足あとをちよつと思ひ浮かべてみてください。この足あとの大きさは、たぶんそれに近いと思います。）

「この足あとには、もうひとつ、大きなとくちようがある。」ベルグエルムがさらにつづけました。「それは、くつをはいていないということ。これは、はだしの足あとだ。たぶんこれは、岩山に好んで住むという、岩の巨人たちのものだろう。」

「巨人がいるの！」思わずさげんだのは、ライアンでした。「ここはシープロンドから、そんなにはなれていないのに。いやだなあ。」

かれらはいぜん、ガイラルロックたちにおそわれておりましたから、ライアンのその

気持ちには、みんなにもよくわかりました。だつて岩の巨人っていうのは、あのガイラルロックたちに、からだど手足がそろっているんですから！ しかもその手には、石のハンマーやら、こんぼうやらといったものまで、にぎられています。おまけにせいかくもきょうぼうで、あばれるのが大好きとあつては、とてもかんげいできないのも、むりもないことでした。

「もちろん、かれらに出会わないことを願っている。まともにやりあつて、かなう相手でもないからな。」ベルグエルムがいました。

「会つたつて、うれしくないしね。」ライアンも、じょうだんまじりにつづけました。「ぜつたい、かわいくないと思うよ。」

「わたしはもう、剣をおられるのだけはこりごりですよ。」さいごにフェリアルが、頭を横にふりながらいいました。かれはついせんじつ、ガイラルロックたちとの戦いの中で、じまんの剣をおつてしまつておりましたから（ちなみに、その剣のかわりはシープロンドで見つけることができました。シープロンの人たちには大きすぎて、フェリアルにはちょうどよい剣が、いっぽんだけお城のそうこにあつたのです）。

それと、せつかくい景色でしたので、出発の前にみんなはここで、おひるごはんをすませることにしました。時間がないので、急いででしたけど。それともちろん、あたりへのけいかいも忘れずに。

それから三頭の騎馬たちは、がけにそつてのびている、そのいっぽんの道を、そろそろとしんちように進んでいきました。なぜかという、この道ははばもせまく、しかもそのすぐわきは、ならくの底にまで落ちこんでいるという、まさにだんがいぜつべきの道だったからなのです！ ですからどうしたって、ゆつくりゆつくり進んでいくほかありませんでした（そのため一行は、この山道でずいぶんと、時間を取られてしまいました）。

しばらく進んでいったころ、雲ゆきが急にあやしくなってきました。そしてそれにもなつて、あたりもだんだんと暗くなつていったのです。

「あのシープロンドでの時間が、うそみたいだ。」いちばんうしろを進んでいるフェリアルが、思わずそうもりました。そしてみんなも、口には出しませんが、思いはまつたくフェリアルと同じだったのです。

まず、この寒さがこたえました。もうだいぶ山道をのぼつてきておりましたので、きおんはよけいに、ひくくなつていたのです。ことに、シープロンドからやつてきたばかりのかれらにとっては、その思いがなおのこと、強く感じられました（シープロンドでは一年中おだやかなきおんがたもたれていて、たとえ冬のまつさかりでも、寒すぎるといふことはないのです。それはもちろん、シープロンドのことを守っている、精霊たちのおかげでした）。

「雨がふってないだけ、まだまだよ、フェリー。」ライアンが、うしろをふりかえっていいました。たしかにライアンのいう通りでした。これでまた雨でもふられたら、それこそみんな、ここへ死んでしまいかねませんでしたから。

道はずっと、くねくねとうねりながらつづいていました。あたりはどんどんと、暗くなつていくばかりです。空にはいつのまにか、いちめんに、あつい雲がたれこめていました。そして雨ほどではありませんでしたが、それと同じくらい旅の者たちの心をくじかせる、あるやつかいなもの、このころからあたりにはあらわれるようになっていたのです。

それは風でした。それも、ただのそよ風ではありません。びゅうびゅうと耳もとで泣きさけぶ、強い強い、山の風だったのです。

かどをまがるたびに、旅の者たちはとつぷうにおそわれました。風は道のむこうから、うしろから、上から、下から、まるでめちやくちやに吹いてくるのです。ですからみんなはなんどとなく、がけの道のかべに張りついて、風がおさまるのを待つはめになりました。

「もうっ！ かみの毛ぐしゃぐしゃになっちゃうよ！」ライアンが頭をおさえて、吹き荒れる風にむかつてもんくをいいました。みんなはマントのフードを深くかぶって、ひもでむすんでいましたが、それでもこの強風は、どんどん、すきまからはいりこんでく

るのです（おかげで、ライアンのじまんのきれいな銀色のかみも、くしゃくしゃになってしまっていました）。

「これでは弱ったな。」ベルグエルムもそういつて、空を見上げました（もちろん、かみの毛がぐしゃぐしゃになってしまうことを心配していたのではありませんよ）。

「もう、じきにすつかり暗くなってしまふ。山の夜は、よけいに早い。なんとか、はぐくみの森まではたどりつけるかと思つていたのだが、こんなちようしでは、今日中に、たどりつけるかどうか……」

「ひとばん明かすにしても、どこか、よいところがあればいいんですが。」フェリアルが心配げに、つづけます。

「とにかく、まだ明るいうちに、なんとかかきなきやね。」これはライアンでした。

「こんながけの道で野宿なんて、まっぴらだから。」

とにかく。今はなんとか、前に進まなければなりません。それでも歩みはあいかわらず、いつこうにはかどりませんでした。風の弱まるのを待ち、進んで、そしてまた待つ。そののくりかえしだったのです。

それからまただいぶ進みましたが、がけの道はまったく変わらず、果てしなく、どこまでもつづいているかのようでした（このままベーカールランドまでつづいてくれているのなら、だれももんくはありませんでしたけど）。そしてこのころになると、一行はたび

たび、がけの下へとむかう分かれ道に出くわすようになりました。ためしにいちど、みんなはがけの下へとつづくその道を進んでみましたが、道はなんとも暗くて、いんきな感じのものでしたのです。そしてがけの下は、それよりもっとおそろしげな感じでした（はいきよのまちモーグじやありませんでしたが、いかにもおぼけが出そうなふんいきでした。ですからフェリアルはすぐさま、「早くもどりましょう！」といって、みんなをせかしました）。

そのうえ、がけの底ではたくさんのほらあなが口をひらいていて、それはまるで、そのほらあなが悪意を持って、えもののおこをそこにおびきよせようとしているかのようでした。ひとりぼっちだったぼくのほらあなだつて、あそこまではひどくないぞ。口ビーがそう思ったのも、とうぜんのことだったのです。

みんなはのぼったりおいたり、かべに張りついたりしながら、それでもすこしずつかくじつに、前へと進んでいきました。そしてこのいやながけの道も、そろそろ終わりへと近づいてきたころ。がけの上から、とりあえずのもくてき地であるはぐくみの森の木々が、ちらちらと見えはじめてきたころのことでした。

「あそこが、はぐくみの森です。やれやれ。もう今日はむりかと思っていたが、これなら日が落ちきつてしまう前に、なんとかたどりつけそうだ。」ベルグエルムががけの上から、遠くに広がる森をゆびさしながらいいました。

「よかった！ ほくもう、こんなところは早くぬけたいよ。」ライアンもそういつて、（かみの毛をなおしながら）ほつと胸をなでおろしました。

しかし……、これが旅の道の、そのいじわるなところ。うまくいきそうだと思つていても、ふたたび、こんなな問題の前にひきもどされてしまうことだつて、しばしばあるのです。

みんなの心が、もう半分くらい、このがけの道からぬけ出してしまつていたころ。まがりかどをまがつた一行の前に、それはとつぜん、あらわれました。いよいよ、岩の巨人のとうじょうでしようか？ いえ、かれらの前にあらわれたのは……、それよりもつと大きくて、しかももつとやっかいな、なんともんでもないしろものだったのです。

ぎし……、ぎし……、ひゅうう……、ぎし……。

がけの道は、このでたらめな強風にあおられて、ぶきみな音を立てながら、ぐらぐら、ぐらぐら、波のようにゆれ動く、いつぽんのつり橋へとむかつてつづいていたのです！ 「じょうだんじゃないぞ……」ふだんはれいせいなベルグエルムでさえ、思わずそうもらしてしまつたほど、それはまつたくひどい光景でした。もしこれが、あの石づくりのセイレン大橋みたいに、がんじょうでしつかりしている橋ならよかつたのですが、そん

なうまいぐあいには、どうしたっていきつこありません。このつり橋は、もうひとめで、とつても古くてがたのきた、危険きわまりない橋だとわかったのです。

ベルグエルムをはじめ、旅の者たちはみんな、とほうにくれてしまいました。ほかにべつの道がないものかと、あたりの山はだをくまなく見渡してみました。そんな道は、どこにも見つかるはずありませんでした。つまり、はぐくみの森へとつづくがけの上の道は、このつり橋がいには、ひとつもなかつたのです。

「もう、道はひとつしかないみたいだね。」ライアンがいました。

さて、旅の者たちは、いったいどうするのでしょうか？ もちろんかれらは、前に進まなければなりません。こんなところで足どめされている場合では、ぜんぜんないのですから。

そう、われらがゆうかんなる旅の者たちは、意をけつして、この危険きわまりないつり橋の上へと、ふみ出していったのです……。なんてことは、かんぜんにあり得ません！

そんなの、むりにきまっていたのです！

このつり橋は、とてもとても、騎馬たちをひきつれた旅の一行が通れるような、そんなしろものではありませんでした。ふみ板はどこどころぬけ落ちていましたし、手すりも長い長い時間雨風にさらされていたおかげで、もうぼろぼろです。それもみじかい

橋ならまだしも、そんなじょうたいのその橋が、えんえん百ヤードはあろうかというくらいに、つづいていました。

つまり、ぎろんのよちなし！ このつり橋をゆけば、旅の者たちはもう、旅をつづけることはできません。ならくの底にまっさかさま！ フェリアルの大きらいな、おぼけの仲間いりです（ヒーローたちが橋から落つこちてそれでおしまいなんて、そんなの、物語としてゆるされるわけありませんよね）。

では、さきほどライアンがいった「道はひとつしかない」という言葉は、どういふことなのでしょう？ これはもちろん、つり橋をゆくということをしているのではありません。わたしはさきほど、「はぐくみの森へとつづくがけの上の道は、このつり橋がいいには、ひとつもなかったのです」といいました。この中の、「がけの上の道」という部分にちゆうもくしてください。そう、はぐくみの森へとつづく道は、がけの上だけではなかったのです。つまり、がけの下。ちよつと前に、かれらがためしにしらべにおいてみた、あのおそろしげながけの下の場所がありましたよね。じつは、あの場所のさきにも、つづく道はありました（だつたら、さいしよからそういつてよ！ と怒られてしまひそうですが……、まあこれも、物語をもり上げるための、えんしゆつということで。ごかんべんください）。

もちろんみんなは、そんな道をいきたいわけでは、けつしてありませんでした（だつ

て、見るからにこわそうでしたもの)。ですけど、道はもうそこしかないのです。ライアンはそのことをよくりかいしたうえで、道はひとつしかないといいました(かれだって、好きでそういったわけじゃないんです)。

「さっきのところまでもどつて、下においていくしかないよ。」ライアンがつづけます。そしてライアンのその言葉に、ベルグエルムもうなずいてこたえました。

「それしかないな。気のりはしないが、しかたない。今日中にはぐくみの森までたどりつくのは、もうあきらめるしかないだろう。」

(これはつまり、いくら強い風が吹き荒れていたとしても、がけの上からもくてき地へ、まっすぐむかうことができるのと、がけの下までもどつて、そのあとさきのわからない暗く危険と思われる道を、さぐりさぐり進んでいくのとは、かかる時間も大がいがいだと思われるためなのです。まっくらな夜になってから進むのはあまりにも危険でしたし、それまでにはぐくみの森までたどりつくのは、とてもむりだと思われるための言葉でした。)

「つまり、それって……」フェリアルがたずねます。「あのがけの下で、ひとばんを明かすつてことですか?」

そんなフェリアルのことを見て、ベルグエルムが大まじめな顔をしていいました。

「強風の吹き荒れるこんながけの上で、寝るわけにもいかないからな。がけの下には、

見たとこ、かいてきそうなほらあなも、たくさんあつたじやないか。」

これは半分、じょうだんもはいつていましたが、ベルグエルムのいったことは、まったく正しいことでした。がけの上の道は、みんな道はばもせまく、とても三頭の騎馬たちをつれた旅の者たちが野宿できるような場所などは、なかつたのです（それに、へたをしたら、寝ているあいだに風に飛ばされて、がけから落つこちてしまいかねませんもの！）。

「なに、モーグにくらべたら、なんてことはない。いいよこうれんしゆうになるじやないか、フェリーくん。」ベルグエルムがライアンのよび方をまねして、にこにこしながらいいました。

「ああ、それと。すまないがフェリアル。がけの下では、きみが先頭をつとめてくれ。たまには、前後の守りをいれかえないとな。」

もちろんこれは、ベルグエルムのじょうだんでした。こわがりのフェリアルをいちばん先頭で歩かせて、からかってみたいという、かれの（ささやかな）いじわるだったのです（もつとも、ほんとうにそんなことをさせるつもりは、たぶんなかつたんでしょうけど……。あんがい、ほんきかも？）。

「だつてさ。フェリー。」ライアンが、フェリアルの腰をほんとたたいて素晴らしいです。

「よろしくね。」

「そ、そんなー！」なんともなさけない声でさげぶそんなフェリアルのことをしり目に、みんなはさつきと、馬を進ませはじめてしまいました。

「ほら、早くしないと、夜になっちやうよ！」

いい放つライアンの言葉に、フェリアルは泣く泣く、そのあとを追いかけました。

ベルグエルムさんって、けっこう、じょうだんきつい……。そんなみんなのやりとりをずっと見守っていたロビーが、心の中でそつとつぶやきました。

風がびゅうびゅうと、岩のあいだからおそいかかってくるきました。それはまるで、目には見えない大きなへびのむれが、つきつきとこちらへ飛びかかってくるかのようでした。ここは、がけの下。みんながくるのをいやがっていた、あのおそろしいがけの下の道だったのです。

がけの下ならいくらか風が弱まるかもと、きたいしていたみんなでしたが、それは大きくうらぎられました。がけの上みたいにあちこちからめちやくちやに吹いてくるということはありませんでしたが、そのぶん風は、前とうしろにそのゆくさきをしばらく、ますますその力をまして、一行のことをはさみうちにしたのです（ライアンだけは、これ以上かみの毛がくちやくちやになるのをいやがって、みんなにはないしよで、空気のパリアーで風を防いでいましたが……）。

ですけどこのさい、そんな風なんかにかまつている場合ではありませんでした。みんなはどんどん、さきに進まなくてはなりません。すこしでも多くさきに進んでしまわないことには、あたりはじきに、ほんとうにまつくらになつてしまうのですから（このがけの下には、光もほとんどどきませんでしたから）。

「これじゃまるつきり、墓場と同じだ。」フェリアルがたまらずにいいました。フェリアルという通り、がけの下のこの道は、ぶきみに暗く、なんともうすきみ悪い感じの場所だったのです。

ところでフェリアルは、ベルグエルクの言葉のように、ほんとうに先頭を進まされてはいなくて、いつもみたいにいちばんうしろについていましたが、いちばんうしろというのも、これはこれでこわいということに、気づいてしまいました（いきなりうしろからなにかがやってきたとしたら、それはたしかに、こわいですがものね）。フェリアルはなんどもなんども、ちらちらと、うしろをふりかえっていましたが、そのたびに、くらやみの中になにかがいるんじゃないか？ と胸をどきどきさせていたのです。

はたしてそれは、そんなかれの心が作り出した、まぼろしだったのでしょうか？ フェリアルがふたたび、うしろをふりかえったとき、かれは岩の影のくらやみの中になにかを見たような気がしました。そして三回目、そんな感じをおぼえたときのこと。かれはたしかに、そのくらやみの中に浮かび上がる、青白いふたつの目を見てし

まったのです！

「た、た、た、た、たいちよ……！」

もうフェリアルは、しんぞうが口から飛び出してしまわんばかりでした。ひめいを上げることすらできなかつたのです。こんなじょうたいでまともに言葉をしゃべれといたつて、とてもむりというものでした。ですから、フェリアルの前にいるロビーとライアンのふたりには、フェリアルがなにをいつているのか？ さっぱりわからなかつたのです。

「ど、どうかしましたか？ フェリアルさん。」ロビーがメルの上から、フェリアルにたずねました。

「ちようちよがどうかしたの？」ライアンもわけがわからず、つづけてたずねました。そしてフェリアルは、まっ青な顔をして、ようやくのことで、言葉をふりしぼっていったのです。

「ち、ちがう。隊長……、隊長をよんで。おぼけ……、おぼけがいた！」

「ええっ？」

ライアンとロビーはびっくりして、あたりを見まわしました。そしてそんなかれらのことに気づいて、ベルグエルムも騎馬をもどして、みんなのもとへとやってきたのです（ベルグエルムはつづく道のようすをたしかめるため、ちよつとさきの方までしらべに出していました）。

「どうした？ なにかあったのか？」

ベルグエルムがフェリアルにいました。そしてフェリアルは、なんとか気持ちをおちつけようとひっそりながら、それにこたえたのです。

「み、見たんです！ あそこ……、あそここの暗がりにはつきりとおぼけの目をー」

ベルグエルムもさすがに、これにはびっくりしました。ですが、フェリアルはこんなときにうそやじょうだんをいうようなやつではないということ、ベルグエルムはよくりかいていたのです。ですからベルグエルムは、馬からおりて、じゆうぶんに用心しながら、フェリアルのゆびさしたその暗がりの方へと、すぐさましらべにむかいました。「待つてベルグ、ぼくもいくよ。」ライアンがメルからおりて、いいました。とうぜん、ロビーもいっしょにメルからおりたので、ついていくことにします。

それからみんなは、フェリアルがおぼけを見たという、その暗がりの中の岩場を、くまなくしらべてまわりました。そしてフェリアルは、ぶるぶるふるえながら、すこしは

なれたところで、そんなみんなのようすのを見守っていたのです。

しばらくしてみんながもどつてくると、フェリアルはくいつくようにたずねました。

「ど、どうでした？」

しかしみんなは、浮かない顔をしたままで、フェリアルのそのしつもんにとたえたのです。

「ぎんねんだが、おかしなところはなにもなかった。」

ベルグエルの言葉に、フェリアルはおどろいた顔をしていました。

「そんな！ たしかに、見たんですよ！ まちがいありません！」

もちろんみんな、フェリアルのことをうたがっているわけではありません。信じているからこそ、みんなは今自分たちがおかれているじょうきょうのことを、正しく見きわめる必要があったのです（ふだんだったら、じょうだんまじりにフェリアルのことをかかったりもするんですけど、こういうまじめなところではべつだったのです）。

「きみが見たものがなんだったのか？ わたしにもわからないが、」ベルグエルがつづけました。「じつさい、あの場所にはなにもなかったし、足あとなども見つけれなかった。それに、もしなにかがいたのだとしても、わたしたちに気づかれずにあの場所から立ち去ることができるとは、考えにくい。それこそ、ゆうれいみたいに、消えてしまったのでなければ。」

「じゃあ、やつぱり、おぼけだったってこと？」ライアンが両手を下にたらし、おぼけのまねをしてみせながらいきました。「うらめしやー!」

「ちよ、ちよっと! やめてくださいよライアン!」けらけら笑うライアンに、フェリアルがやつきになっていいました。

さて、こうなったら、けつろんを出すのはこの人しかいません。それはもちろん、ロビーでした。前にも同じようなことがありましたが、こういうときのロビーの意見って、じつにたよりになるんです。

「ロビーどの。」ベルグエルムがロビーにむかっていいました。「ガイラルロックの岩場でも、セイレン大橋の上でも、われらはロビーどのに助けられました。フェリアルが見たもの。ロビーどの、どう思われますでしょうか?」(これはつまり、「ロビーのふしぎな力で、なにか感じる場所がないか?」という意味あいもふくめて、たずねていたのです。)

「そうだよ、ロビーならわかるよね。」ライアンもつづけて、いいました。

ですけど、そういわれてもやつぱりまだ、ロビーもこまってしまいました。たしかに、ガイラルロックの岩場やセイレン大橋の上では、なにか、せまりくるもやもやとした危険を感じ取ることができましたが、ここではロビーはなにも、感じることはできなかつたのです(それは、やろうと思つてできることではありませんでしたから)。

「はい、ええと、すみませんけど……」ロビーがこたえます。「たしかにここは、いやな場所だとは思いますが、ぼくにはなにも、感じる事ができません。でも、フェリアルさんがなにかを見たのは、たしかなんです。それはそのまま、受けとめるべきだと思います。ここには、なにかがいてるってことです。」

今のロビーにいえることは、それでせいっぱいでした。でも、むりに背のびをしてみたって、よくありませんよね。それはロビーももう、学んでいたことなのです。ですからロビーは、自分なりに、自分のできることをよく考えて、そういつたのです（です）。すけどロビーの言葉って、あまり多くは語らないことはたしかなんです。いつもよく、まとをいっているんですね。これはやつぱり、きゆうせいしゆとしての、かれのさいのうなんだと思います）。

「まったく、その通りだ。」そんなロビーの言葉にこたえて、ベルグエルムがいいました（ロビーの言葉はまたしても、みんなのことをみちびく助けとなったのです）。

「目の前のことこそしんじつ。わたしは、それを見あやまつてしまふところでした。」ベルグエルムはそういって、ロビーにぺこりと頭を下げました。

「ロビーどののいう通り、しんじつを正しく受けとめれば、フェリアルを見たそいつは、なにかしらのりゆうで、われらの目をあざむいているということになる。ここには、そんなれんちゆうがいるということだ。」

ベルグエルムの言葉に、みんなはぐくりとつばを飲みこみました。信じたくはありませんでしたが、ベルグエルムの言葉、ロビーの言葉は、まことに正しいことをいいあてているようだったのです。つまりここには、すがたの見えない、なにかがいるってことでした（なんとも、おそろしい話ですが）。

みんなは、あたりをきよろきよろと見まわしてみました。ですが今は、なんのけはいも感じられません。しかしかえってその方が、よけいにぶきみな感じがしました。出てくるんだったらいつそひと思いに、いつきに出てきてくれた方が、まだ気持ちが悪くないことでしょうか。いつ出てくるか？ わからないというのは、ほんとうに胸にこたえるものだったのです。

「とにかく今は、さきに進むしかない。進めるうちに、もうすこし進んでおこう。見えない敵からも、うまくのがられるかもしれない。できればこのさきも、会いたくはないからな。」

「わたしももう、にどと会いたくありません！」ベルグエルムの言葉に、フェリアルも、ぶるる！ とからだをふるわせながらいました。

「見えない敵か。それじゃほんとうに、おぼけだね。」さいごにライオンがいました。「早く、このきもだめしの道が終わるといいんだけど。」

それからみんなは、ふたたび、このおそろしいがけの下の道を進んでいったのです（フェリアルはもうずっと、あつちやこつちをきよろきよろしつばなしです。こんなことのとあとは、むりもありませんでしたけど）。そしてあるとき。先頭を進んでいたベルグエルムがいったこの言葉で、みんなはついに、今日いちにちのつらい旅の道のりを、終えることにしました。

「ここまでにしよう。これ以上進むのは危険だ。もう、じきにまつくらになる。さきほど、いくつかの安全そうなほらあなを見つけたから、今日はそこで休むとしよう。もちろん、用心はおこたらないようにしなければな。」

みんながほらあなに身をよせたのは、もう、ほとんど夜になってしまったころのことでした。ほんとうは、そんなにはおそい時間ではありませんでしたが、ここは、ひるまでもなおうす暗い、がけの下。まさに、まつくらというひょうげんが、びつたりだったのです（せいにかくには午後六時。野うさぎのこくげんのころでした。ちようど、スネイルのぎつか屋および食りよう品店が、へい店する時間です。旅の者たちは朝の六時に出發しましたから、思えばこの山道だけで、十一時間以上の時間をついやしてしまったことになるわけでした。このがけの道が、どんなにやつかいな道のりであったのか？ よくおわかりでしょう）。

そんな場所でしたから、ほらあなの中はそれよりもっと、まつくらだったのです（こ

れじゃ、フェリアルでなくたってこわいと思うはずですよ！)。ですからどうしたって、あかりは必要でした（ほんとうなら、危険なものをよびよせてしまうかのうせいがありましたので、あんまりあかりをつけるのはよくなかったのです。ですけど、こんなに暗いんじゃないかたありませんし、それにこの寒さです！ 火を起ささないわけにもいきませんでした）。

みんなはまず、小さなランプに火をつけて、ほらあなの中をしらべてまわりました。ベルグエルムが見つけたこのほらあなは、大きすぎず、かといって小さすぎることもありません。四人の旅の者たちがひとぼんを明かすのには、まさにうってつけといった感じでした（さすがはベルグエルム。お目が高い。これでもうすこしきみの悪い感じでなければ、なおよかったです）。まあ、それは、ぜいたくすぎというものでしょう。

ちなみに、かれらの騎馬たちは、ほらあなのそのの岩かべのあいだに、かくすようなかたちでつないであるのです。さすがに騎馬たちをみんな中にいれられるほどには、このほらあなも、大きくはありませんでしたから。そして、騎馬たちをみんな中にいれてもなおあまるほどの大きさを持ったほらあなは、ここにはひとつもありませんでした）。ほらあなはおくの方にまで、ほそくまつすぐつづいていましたが、そこはまもなく、いきどまりになっていました。ですけどみんなは、そこでちよつと、おかしなものを見つけたのです。このほらあなはしぜんにできたふつうのほらあなでしたが、そのおくの部

分の地面に、人がつくったような、れんがやはしらのなごりのようなものが、ちらばっていました。みんなはそれらをひろってしらべてみました。とても古いものであるというこゝろが、たしかなことはよくわからなかったのです。

「これらの石は、」ベルグエルムがいました。「あのオーリンの見張り台、あれに使われていた石に、よくにている。ひよつとしたら、むかしオーリンたちが、このほらあなを使っていたのかも知れないな。」

「オーリンたちなら、まだいいけどさ、」ライアンがつづけていいました。「まさか、岩の巨人たちが、ここをめぐらしてることはないよね？」

「いや、それはない。」ベルグエルムがこたえます。「わたしは、ほらあなのまわりや、ここの地面もよくしらべたが、なんの生きものの足あともなかった。それに、巨人だったら、こんなせまいほらあなには、きゆうくつではいれないよ。」

「それならよかった。」ライアンがほっとしていいました。「ガイラルロックの親玉みたいなのが出てきたら、どうしようかと思つてたんだ。」

そういつてライアンは、手足をがおーっ！ とのぼして、おそろしい巨人のまねをしてみせました（ですけどどう見ても、巨人というよりは、いたずら好きの子ぐまといった感じでしたけど……）。

それからみんなは、ようやくといった感じで、野宿のじゅんびに取りかかったのです。

ベルグエルムがうまく火を起こしてくれたので、みんなはとつてもありがたい、たき火の火にあたることができました（ライアンがすぐに、その火を大きくしてくれたいのは、いふまでもありません）。そしてみんなは、持つてきていた食べものをその火であぶりつつ、まことにかんたんではありましたが、ささやかな夕食を楽しむことにしたのです（このときばかりはみんな、こわいのを忘れてしまいました。ウルファたちは、肉のはいったパンや塩づけのベーコンなどをあたためて食べ、ライアンは、やさいとこなをねりあわせて作った、ドーナツのようなほぞん食をあたためて食べたのです。ライアンの場合は、それでもやつぱり、メインはお菓子でしたけど……）。

そのあとみんなは、歯みがきをして、これからの旅のことをすこし話しあいました。そして、それからほどなくして。旅の者たちぜんいんに、びょうどうに、今日いちにちのつかれがおとずれたのです（つまり、眠くなつたつてことです）。

「みなの方！ よは、シープロンの王子なるぞ！ 早く、あたたかいベッドを用意せいで！」ライアンがふざけていいましたが、みんなはさつさと自分のもうふを取り出して、すこしでもかいてきに寝られるようにと、寝床をととのえているばかりでした（「ちよつとー！ ほつたらかしのしないでよー！」相手にしてもらえなかつたライアンが、ひとりでぶんぶんいってしまいましたけど）。

そして旅の者たちは、そのまま朝までぐつつり、眠ることができました……、といえ

たらよかったですけど。やっぱり、そううまいぐあいにはいかなかったのです（読者のみなさんもそう思いました？ たぶんこれから、みなさんのごそうぞうに近いできごとが起こると思います。それはつまり、おばけ……、おほん！ さてさて、いったいなにが起こるのか！ では、つづきをどうぞ）。

それから、どのくらいの時間がたったのでしょうか？ たき火のほのおはもうすっかり小さくなって、わずかにちらちらと、ほらあなの中ををたらしているばかりでした。ほのおの立てる、ごく小さなばちばちという音と、みんなの立てる、かすかな寝息。それと、風の泣く、ひゆうひゆうという音。ほらあなの中できこえるのは、そんな音たちでした。そして今、そんな音たちのひとつひとつにびんかんになって注意をこらしながら、耳をすませている人物がひとり、いたのです。それはだれかといいますと、おばけぎらいのあの人。そう、フェリアルでした。かれの頭からは、さつきそとの岩場の暗がりの中で見た、あのおそろしいふたつの目のことが、ぜんぜんはなれなかったのです。フェリアルはなんども、眠ろうとして目をきつ！ とむすびましたが、どうしてもあたりのことが気になってしまつて、眠ることができませんでした（すぐ近くで、ぐーすかいつて、だらしな寝ぞうで寝ているライアンのことを、ひっぱたいてやろうかと思つたくらいでした）。すっかり寝ておかないと、明日の旅がつかなくなるというこは、

よくわかっていましたが、どうにも目がさえてしまつて、しかたがなかつたのです。

フェリアルは横になつたまま、ほらあなの中を見まわしました。(寝ぞうのどつても悪い)となりのライアンのむこうでは、ロビーがもうふをきちんとかけて、すやすやとした寝息を立てております。そしてほらあなの入り口では、その見張りやくを買つて出たベルグエルムが、岩に背をもたれかけさせたまま、こつくりこつくりやつていました。

それらのようすを見るかぎり、問題はなにもないかのように思えました。しかしフェリアルはそこで、みょうな胸さわぎをおぼえたのです。なんだかだれかに、見られていゝるような……、そんな気がしました。まさかまさか、また、さっきのおぼけなんじやないだろうか……！ フェリアルのしんぞうは、ばくばくなりひびきました(しんぞうの音で、みんなが起きてしまふんじゃないか？ というくらいに)。

そしてフェリアルは、なんとなく、ほらあなのおくの方に目をむけたのです。そこはこのほらあなにはいつたとき、さいしよにみんなが、むかしのれんがやはしらのなごりを見つけたところでした。そこは、ただのいきどまりでした。そんなところに、なにかがあるはずありませんでした。

しかしそのとき。そこでかれが見たものは……。

くらやみの中で光る、たくさんの、目、目、目！ さつきそとの岩場で見た、あの目とおんなじやつが、こんどはもう、いちダースくらいも集まって、こつちをじーつと見つめていたのです！

「ぎ、ぎ、ぎ……」もうフェリアルは、おどろいたなんてものじゃありません。のどのおくから声をふりしぼって、こんどこそ、やつとの思いで、ひめいを上げることができたのです。

「ぎやあああー！」

とたんにみんなは、なにごとかと飛び起きました！（ベルグエルムは、とつさに剣をつかみ、ライアンはねぼけて、とつさに、寝る前に食べていたパウンドケーキのはいったふくろをひつつかみました。）そしてそして、みんなもすぐに、フェリアルの上げたそのひめいのわけを、知ることとなったのです。

ひめいを上げるフェリアルのむこう。ほらあなのいちばんおくのくらやみに光る、それらのたくさんさんの青白い目のことを、みんなもここで、はつきりと見ました。こうなったら、もうこれは、おぼけなんかではありません。それらの目は、たしかに、なにかの

生きものたちの目でした。それもあきらかに、話しあいの通じる相手ではないみたいで
す。そいつらはのどをぐるぐるならして、今にも飛びかかると、旅の者たちのことを
しきりにいかくしていました。

「みんな！ 気をつけろ！」

入り口の方からベルグエルムが、こちらに走ってきていいました。その手にはしつか
りと、剣がにぎられております。

「ほのおよ！ はじけろ！」ライアンがとっさに、たき火に残っていたほのおにむかっ
て手をかざしながら、さげびました。とたんにほのおは、ごおーっ！ といきおいよく
もえ上がり、ほらあなの中をたちまち、オレンジ色の光でてらし上げてしまします。そ
してその明かりのおかげで、みんなは、このあやしげなたくさんの目のしようたいを、知
ることができました。

ほのおのあかりにてらし出されたのは、身長が四フィートほどの、小がらなからだを
した生きものたちでした。からだに毛は生えていなくて、木のかわみたいな、ごわごわ
したはだをしております（衣服は身につけていませんでしたので、動物のような生きもの
のなんだと思います）。手足がやたらに長くて、そのためひどく、ぶかつこうに見えまし
た。ですがもつともいんしよう的なのは、なんといいつても、その大きな青白い目だった
のです。まぶたがなくて、半分くらいつき出ているその目は、なんともうすきみが悪く、

なるほど、おぼけに見まちがえてしまうのも、むりもないことでした。こんな生きものたちが、ほらあなのおくに五、六びきかたまつて、旅の者たちのことを、ぐるぐるとおどかしていたのです。

「グブリハッグだ！」

さけんだのはベルグエルムでした。どうやらこの生きものたちの名まえは、グブリハッグというらしいです。

「そいつの目には気をつけろ！ 光の矢を飛ばしてくるぞ！」

目から光の矢！ ひええ、おそろしい！ そして、ベルグエルムがみんなにそう注意した、つぎのしゅんかん。そのグブリハッグという生きものたちが、まさに、そのおそるべきこうげきのための力を、旅の者たちにむかつて放ちました。

びゅんっ！ びゅんっ！ 青白い目から、それと同じ色をした青白い光の矢が飛び出して、みんなにおそいかかります！

「うわっ！」そしてその矢は、ほのおのそばにいるライアンのすぐわきをかすめて、ほらあなのかべにあたつてはじけました！（ライアンにあたらなくて、ほんとうによかった！）

これですっかり怒つたのは、ライアンです（まあ、とうぜんです）。

「このやろー！」ライアンは（ちよつと品が悪かったですが）そうさけんで、ふたたび、

たき火のほのおにむかつて手をかぎしました。

「ほのおよ！ かかれ！」

ライアンがそういうやいなや。ほのおがふたたび、ごおーっ！ と音を立てて、まっすぐ矢のようなかたちとなって、グブリハッグたちにむかつて飛んでいきました！（矢には矢を、といったところでしょうか？）そしてライアンが放った、そのほのおの矢は……、おみごと！ 先頭にいるグブリハッグのからだにめいちゆうして、かいぶつをほのおのうずに、つつみこんでしまったのです！（それにしても、ほのおの矢だなんて、いぜんに使った風のたつまきのほかにも、ライアンもかなり、おそろしいわざを持っていて、出せるみたいです。やっぱりライアンって、いろいろすごい。）

「やった！ どんなもんだい！」

とくいになってはしゃぐライアンでしたが、これで相手は、なおいつそう、怒りをばくはつさせてしまいました。こうなってはもう、たまりません。グブリハッグたちはその長い手足で、ぴよんぴよん、ほらあなのかべをとびはねながら、つぎつぎに光の矢を飛ばしてきたのです。

びゅんっ！ びゅんっ！ びゅんっ！

「だめだ！ みんな早く、このほらあなから逃げろ！」ベルグエルムが、せまりくる光の矢を剣でふりはらいながら、みんなにさげびました。

「ひええーっ！ やっぱり、こうなっちゃうのー！」ライアンが、こんどはほのおのかべを作って、それで矢をはじきかえしながら、いいました。

「フェリアルさん！ 早くー！」ロビーが、半分腰をぬかしたままのフェリアルの手を取って、さげびます（フェリアルは、あまりのショックに、まだぜんぜん戦えるようなじょうたいではなかったのです）。

「ひええー！ みんな、待ってくれー！」フェリアルは地面にはいつくばったまま（なかばロビーにひきずられながら）、ほうほうのていで、ほらあなの入り口へとむかいました。

そしてみんなは、（にもつともうふは、逃げる前にあらかじめひつつかんできていたうえで）そのまま大あわてで、ほらあなのそとへとむかってかけ出していったのです。

さいごにほらあなをふりかえったみんなが見たものは、追いかけてくるグブリハッグたちと、ほらあなのおくの、地面の中につづいているかいだんの下からのぼってくる、新たなグブリハッグたちのすがたでした。これでみんなは、この生きものたちが、なぜと

つぜん、ほらあなの中にあらわれたのか？ そのわけを知ることができたのです。つまりこのほらあなは、かれらの住むかくされた地下都市への、入り口だったのです！ その地下都市へとつづいていくかいだんが、ほらあなのおくの地面に、（じつにたくみに）かくされていたというわけでした（この地下都市は大むかし、ふくろうの種族であるオーリンたちがつくったもので、今ではすでに、はいきよとなつてしまっているものでした。ですが、こんなにすてきな地下都市を、このままほつたらかしにしてしまつてもつたいない。そう考えたのが、今旅の者たちが出会つた、このグブリハッグという生きものたちだったのです。もつともかれらにとつては、そこは都市というよりも、たんなる大きなほらあなにすぎませんでしたけど。かれらはほとんど、けものなみのちのうしか、持ちあわせておりませんでしたから）。

ほらあなのそとに出たみんなを待つていたのは、これまた、グブリハッグたちでした！ かれらは岩の影のやみから、つぎつぎとはい出てきたのです。そしてよく見れば、かいぶつたちは、岩影にかくされていた地下都市へとつづくとびらから、出てきていました。こんなところに、とびらがかくされていたんですね！ これではおぼけのように、あらわれたり消えたり、できるはずです！（そしてこのとびらは、ほんとうにみごとくに岩にかくされていて、近くで見てもまったくわからないほどでした。ですからさすがのベルグエルムでも、このとびらのそんざいには、気がつくことができなかったのだ

す。しかもかれらは、その長い手足を使つて、岩から岩へ、ぴよんぴよんとびはねていどうするのです。そのため、地面に足あとも残らないのでした。まさに、ベルグエルム泣かせ！ なんともやつかない相手だったのです。」

しかし、今さらなぞのこたえがわかつたとしても、どうにもなりません。とにかく、ここから早く逃げなくては！ みんなは、岩かべのあいだにかくしてつないでおいたそれぞれ、その騎馬たちに、あわてて飛び乗ると（騎馬たちがぶじで、ほんとうによかつた！）じつはグブリハッグたちには、動物よりもちせいのある生きものたちのことを、好んでおそうというしゆうせいがあつたのです。なんとおそろしい！、そのまま、まっくらなやみの中へと、矢のようにかけ出していきましました。

グブリハッグたちが待て待てと、旅の者たちのことを追いかけて、なんととなく光の矢をあびせかけてきます。ですがかれらの足も、旅の者たちのゆうしゆうなる騎馬たちの足のはやさには、とうていかないませんでした。いつしか、騎馬たちのあとを追うものは、あいかわらずにびゅうびゅう吹きつづける、谷間の風だけとなつたのです。

8、はぐくみの森の子ぎつね

むかし、どこまでも広がっているのかと思うほどの大ききさを持ったその森は、大いさかえていました。その森をおとずれる者たちは、みな、森のもたらすおしみないめぐみにかんしやしなながら、大いにくつろぎ、食べて、飲んで、楽しんだのです。そのため、ここをおとずれる人たちは、みな、旅のよていがすつかりくるってしまいました。いちにちすすだけのつもりが、三日になり、四日になり。ついには、ふた月をまるまる、この森ですすすことになってしまったほどだったのです。

それには、この森に住んでいる住人たちのせいかくも、深くかかわっていました。とにかくこの森に住む人たちといったら、明るくようきで、はじめて会った人であっても自分の家にいっしゅうかんくらい、わけなくとめてしまうのです。ですがそんなことは、この森の人たちにとつては、ごくあたりまえのことでした。それはつまり、この森が住人たちに対して、じゅうぶんすぎるほどのめぐみを、与えてくれていたからなのです。住人たちはあくせくはたらかなくても、いつでも食べものや飲みものを手にいれることができましたし、そのほか、お金にかえることのできるたくさんのきちょうな品物たち（ぐたい的にいえば、めずらしい花のみつであつたり、宝石のつまつた木の実であつ

たり。ここにしか住んでいないという、ふわふわ森ペンギンの羽毛であったり、すばらしいかおりを放つ、森サンゴのえだであったり。そういう品物たちでした。も、この森の中では、かんたんに手にいれることができました。

ですから、この森に住んでいる人たちはとても心が広く、毎日をすてきに、とっても楽しくすごしていたのです（じつにうらやましいかぎりです）。そしてこの森の住人たちのすばらしいところは、それらのめぐみをだれかれかまわず、みんなで分けあおうとするところでした。とかくせちがらい世の中では、お金でもなんでも、きちょうな品物を手にいれればいれるほど、それらを自分ひとりのところばかりにためこもうとするものです。しかし、この森の人たちにかぎっては、そんなこととはむえんでした。お金とか宝物とか、そういったものはひとしく、みんなのものであるのだと、かれらは考えていたのです（じつにすばらしいかぎりです）。

みんなをだいにするそんなかれらが、とくにたいせつにもてなしたのが、ほかのくからやってくる旅人たちでした。この森がもつともさかえていたころ、西のくにぐにからはたくさん旅人たちが、この地をめざしてやってきていたのです。そういった旅人たちのことを、この森の人たちは、まるで家族どうぜんのようにあつかいました。旅人たちに、かれらの見たこともきいたこともないような食べものや飲みものをふるまい、そして旅のきねんとして、自分たちのたくわえたきちょうな品物たちを、おしみな

く分け与えたのです（ある旅人などは、全部あわせてたら家いつけんをまるごと買えてしまいうくらいのねだんになる、山のようにたくさんのおみやげをもらったほどでした。おかげでその旅人は、旅をつづけるのをやめて、この森に住んでしまうことにきめてしまったくらいなのです）。

これで、この森をおとずれる人たちが旅のよていをくるわせてまで、ここにどまっってしまったりゆうが、よくおわかりいただけたかと思えます。そしていつしか、だれもがこの森のことを、こうよぶようになりました。人々の暮らしをはぐくみ、心をはぐくむ。まさしくここは、はぐくみの森だと。しかし、今ではそれもむかしのこと。この森のはんえいは、思わぬところから、終わりをむかえることとなるのです。

今、三頭の騎馬たちをつれた四人の旅の者たちが、その森のいちばん東の果てで眠りこけているところでした。かれらはもう、なかばなげやりといった感じで、地面の上にてんでんばらばらにちらばったまま、もうふをかぶってぐーぐー寝ていたのです。

じこくはずでに、海つばめのこくげん。午前十時に近いころになってしまいました。かれらはいつたい、なぜこんなところで、しかもこんな時間に眠っているのでしょうか？ そのりゆうを説明するためには、ちよつと話の時間を、きのうの夜にまでもどさなければなりません。

きのうの夜。すでにべつの場所で寝床についていたかれらは、夜ふけに、あるおそろしいかいぶつたちのしゅうげきを受けました。そのかいぶつたちの名まえを、みなさんはもうごぞんじですよ。そう、グブリハッグです。かれらは、このおぼけみtainな見た目のおそろしいかいぶつたちに、へいわな寝床を追い出され、夜のやみの中をやむなく、逃げのびるはめになりました。

あれから。旅の者たちは、夜のやみの中を走りに走りました（危険なのはもちろん、しようちのうえでした）。ですがなにしろ、がけの下はまつくらなうえにも輪をかいてまつくらでしたから、そうかんたんには、正しい道をえらんで進むことは、できなかつたのです。一行はなんとなく、いきどまりの道や、べつのほらあなの中へとつづいていく道に、出くわしてしまいました。しかしそのたびに、みんなは力をあわせて、そのおそろしいがけの下の道からだっしゅつするべく、がんばったのです（いつまたそのへの岩影から、新たなグブリハッグたちがあらわれなるともかぎりませんでしたから！）。

やがて、おそろしいがけの下の道もついに終わりをむかえ、一行が岩かべのあいだのほそいさけ目のようなすきまから、その森のはずれの中へと飛びこんだのは、もう空が明るくなつてしまったころのことでした。かれらが、立ちのびるたくさんの木々を、どんなにかんげいしてむかえたか？ ごそぞうにたやすいことかと思えます。それが

らかれらが取った行動は、ひじょうにたんじゆんめいかいなものでした。かれらは今、かれらがいちばんやりたかつたことを、頭で考えるよりもさきに、すぐさまおこなったのです。それはつまり……、さまたげられたすいみんのつづきを、もういちどこで取るということでした！ かれらは頭のさきから、つまさきまで、もうぼろぼろにつかれ果ててしまつておりましたので、森の中にはいったとたん、騎馬たちをつなぐのもそこそこに、もうふにくるまつて、そのままどろのように眠つてしまつたのです（だれだつて、へいわに寝ているところをむりやり起こされて、そのまま夜のやみの中をかいぶつたちにおびえながら、なん時間も走らされるはめにあわされたのなら、心身ともにまいつてしまはずです）。

つまりそういうったわけで、旅の者たちは（もちろんこれは、ロビーたち、われらが旅の者たちのことをいっているのです。いうまでもないことです）こんなところで、こんな時間に、眠りこけているというわけでした。でも、もうそろそろ、かれらに旅のつづきを、おこなつてもらわなくてはなりませんね。なにしろかれらは、この物語のだいじなだいじなしゆやくたち。かれらがこのまま、ぐーぐー寝ているままでは、物語がさきに進みませんもの！ さあ、旅のさいかいです！

「クルッポー！ クルッポー！ 起キロー！ 起キロー！」

とつぜん、あたりにかん高い、なんともおかしなさけび声かひびき渡りました。いたいこれは、なんの声なのでしょう？（どうやら、人の声ではなさそうな感じですが。）その声は、旅の者たちのどまん中。かれらの中でもいちばんからだの小さな、ひつじの種族の者である、ライアンのいるあたりからきこえてくるようでした。

「クルッポー！　クルッポー！　起キロツタラ、起キロ！　イイカゲン、起キロツ！　コノヤロー！」

だんだんと大きく（そして言葉使いもきたなく）なっていくその声が出ているのは、ライアンのそばの地面におかれた、あるひとつの小さなはこからのようでした。そしてよく見てみると、その声を出しているのは、時計のはりのついているそのはこの中から飛び出して、羽をばたつかせながらわめく、小さな小さな、白いはとのおもちやだったのです。

「うーん……、あと五分……」ライアンはねぼけてそういいながら、はと時計のかたちをした小さな目ざまし時計にむけて、手をのばしました（なるほど、これはライアンがシープロンドから持ってきていた、目ざまし時計だったんですね。それにしても、ずい

ぶんおかしなものを持つてきたものです。ですがこの時計は、どんなおねぼうさんでもぜったいに目がさめるように、ひじょうにきびしく作られていたのです。

「起キナイヤツニハ、オシオキ！ オシオキ！ クルツポー！」

時計のとはそうさけぶと、羽をばたつかせて、ライアンのほほにむかつて、（まるでラグビーのせんしゆみたいに）全身で体あたりをくらわせました！　そしてそのあとは、するどいくちばしこうげきです！　さんざんつつつかれて、こうなつてはもう、起きないでいられる者などはいませんでした。

「わわ、わかつたよ！　もう起きてるだろー！　ライアンがそうさけぶと、時計のとはつつつくのをやめて、さいごにひとこと、こういつて、すばこのかたちをした時計の中にひっこみました。

「オハヨー！」（うん、にくたらしい！）

こうして旅の者たちはここに、（さわやかな目ざめとはいえませんでした）新しい旅のいちにちのはじまりを、ふたたびむかえることとなつたのです。みんなは、まずは三頭の騎馬たちがちゃんというところをかくにんして、ほつとしました（きのうは見張りも立てず、あたりを気にかけることもなく、眠つてしまいましたので、騎馬たちがちゃんとぶじでいるかどうかと、かれらはまっさきに心配したのです。

もつとも、かれらの騎馬たちはメルをはじめ、みんな強くてかしこい馬たちばかりで

したので、すこしくらいの相手であれば、わけなくやつつけてしまうほどの力は持っていましたが。それからみんなは、あわただしくにもつをまとめると、地図を広げて今いる場所のことをかくにんしあい、今日いちばんの話しあいを、ここにおこなうことにしたのです。

「よていより、ずいぶんとおそくなつてしまったが、ようやくついたな。まさか、こんなところで野宿することになるとは、夢にも思つていながつたが。」ベルグエルムが、やれやれといった感じでした。

「どんなところだつて、あんなおそろしいところで寝るよりはましですよ。」フェリアルが、ぼーつとしてひきつった顔をしたままで、こたえました（フェリアルはずつと、おぼけの夢にうなされて、しつかり眠ることもできずにいました。おかげで目の下にはぼつちり、くまができていたのです）。

「まだまだ、これからがほんばんなんらから、しつかりしてよ、フェリー。ほら、あん。キャンリーあげるから。」ライアンがそういつて、フェリアルの中の口に、ぼうつきのいちごキャンディーをいっぽん、つつこみます（もちろん自分も、同じものをなめていました。それは、かれの話し方でもわかりますよね）。

「めぎすモーグつていうまちは、ここからのくらいあるんでしょうか？」ロビーがベルグエルムにたずねました（ロビーの口にもまた、ライアンからもらったキャンディー

がはいっていましたが、かれはなるべく舌たらずにならないように、気をつけてしゃべっていました)。

「このはぐくみの森は、とほうもなく大きな森なのです。」ベルグエルムがロビーに地図をしめしながら、こたえます。「そして、今わたしたちがいるのは、その東のはずれ。モーグはこの森をつつきった、西のはずれに位置しています。きよりにして、およそ十五マイルはあるでしょう。しかし、じゅんちように進めたとしても、この森の中では、やはり、なにが起きるか？ わかりません。そのこともじゅうぶん、考えにいれておかなければ。」

ベルグエルムはそれから、このはぐくみの森のむかしと今のようすのことについて、みんなに説明してきかせました。さいしよにお話ししました通り、このはぐくみの森というところは、かつて大いにさかえ、文字通り、あらゆる人たちの暮らしをはぐくんでいたのです。しかし今では、西の街道を使う者もいなくなり、モーグのおそろしいうわさも広まって、このはぐくみの森まで足をはこぶ者たちは、ほとんどいなくなってしまうていました。ここからいちばん近いみやこであるシープロンドに住む、シープロンたちでさえ、この森の今のことについては、ほとんどなにも知らなかったのです。

「この森の中が、今どうなっているのか？ どんな人たちが、今住んでいるのか？ それはだれにも知られていない。むかしのように、この森が今でも、人々の暮らしをはぐ

くんでいればよいのだが。そう考え……、うぷっ！」そこまで話したところで、ベルグエルムの口になにかがつっこまれました。それは、そう、やっぱり、ライアンのぼうつきのいちごキャンディーだったのです（これで、四人ぜんいんの口にキャンディーがはいったわけです）。

「あんまり深く考えたつて、しょうがらいよ。いつてみれば、わかることなんらから。どのみちぼくらは、この森を通つていかなくちや、もくてき地までいけないんらからさ。そうれしょ？」

みんなはライアンにはかなわなないなと思いつつ、かれの意見もまた、もつともだと思えました。たしかに、あれこれここで話しあつていたとしたつて、旅がさきに進むというわけでもありません。

「う、うむ。では、みんな、じゅんびをととのえて、さつそく出発することにしよう。」ベルグエルムがいました。

そしてみんなは、（口にはいったキャンディーをなめながら）手早く出発のじゅんびをととのえると、この果ての見えないほどの大きな森、はぐくみの森の中へとむかつて、ふみこんでいったのです。

「いら、ひゅっぱっつー！」ライアンがひとこと、大きくかけ声をかけました（ちなみに、「いぎ、しゅっぱっつ」といいました）。天気はうすぐもり。ひゅうひゅうと風の吹く、

ある朝のことでした。

「ねえ、ここってほんとに、はぐくみの森なの？」

森の中のものさみしい道の中を、馬でばかぼこ進みながら、ライオンがつぶやきました。かれのいう通り、森の中にすこしはいつていつただけで、あたりのようすはまるつきり、変わっていつてしまったのです。

まず、いくらもいかないうちに、道はばが急にせまくなりました。それも、ただせまいだけならどうってことはありませんでしたが、その道を横切るかたちで、たくさんの木の根っこが、うねうねとからまりながら張り出していたのです。ですから、馬に乗っている者たちは、かけ足でびゅんびゅん！ というわけにはいきませんでした。しんちように進んでいかなければ、根っこに馬の足を取られて、馬といっしょにすってんころりん！ 地面に投げ出されてしまうのです。

変わったのは道だけではありません（そしてそっちの方が、この森をゆく旅の者たちにとつては、かんげいのできないものでした）。まだ午前十時。海つばめのこくげんをせいぜいまわったころだというのに、森の中にはろくに光もとどかず、あたりはぶきみにうす暗かったのです（せつかく、あのうすきみの悪いがけの下の道からのがれられて、よろこんでいたところでしたのに）。しかも、木々のみきはふしくれ立っていて、

まるでいぼがえるのはだみたにごわごわしていました。そしてそこからのびるえだといったら、てんでんばらばらに、あちらこちらへと、のびほうだいにのびていたのです。

そんな場所でしたから、とてもまともな植物が育っているわけがありません。みどりあざやかな葉っぱのかわりに、かれかけたつる草のたばが、えだにぐるぐるからみついでおります。かわいらしいきれいな色のお花のかわりに、なんともどくどくしい色をしたきのこのむれが、地面にびっしり生えていました（ぜつたいに食べてはいけません！どくきのこにきまつていますから！）。

これでは、ほんとうにここがはぐくみの森なのか？ とライアンがぼやくのも、むりもありませんでした。だってどう見ても、この森が人々の暮らしをはぐくんでくれるようには、見えませんでしたから。

「西の街道がとぎされてからひさしいが、そのえいきようは、この森にまですつかり、およんでしまったようだな。かつてのはんえいのおもかげは、もうここにはないようだ。」先頭をゆくベルグエルムが、道をふさぐようにせり出している木のえだを、手ではらいのけながら、いいました。

「はぐくみの森のことは、名まえくらいしか知らなかったんだけど、これじゃもう、名まえを変えた方がいいみたいだね。『おぼけ大集合の森』、なんてのはどう？」ライアン

が、フェリアルの方をふりかえりながら、けらけら笑ってつぶやきました。

「やめてくださいよ！ えんぎでもない！」フェリアルがむきになって、ライアンに手をふりかざしながら、いいかえしました（仲のいいこと）。

「ぼくのいたかなしみの森も、そんなに明るく森じゃなかったけど、」そうつぶやいたのは、ロビーでした。「この森は、ひどいです。こんな森だったら、ぼくはたぶん、いつしゅうかんでひっこしますよ。」

ロビーはそういって、顔のまわりによつてくる小さな羽虫のむれを、手でぱたぱたとはらいのけました（みんなさつきから、この虫が顔のまわりをぶんぶん飛びまわるのが、気になってしかたなかったのです！）。

「ぼくは、二日でギブアップだね。」ライアンが、ロビーにむかってそういいます。「だって、こんなさびしい森においしいお菓子屋さんがあるとは、とても思えないもの。」（ライアンのかいてきさのきじゆんって、おいしいお菓子があるかないかによるところが、大きいみたいですね……）

「あ、そういえば。」ライアンの言葉に、ロビーが急にあることを思い出していいました。

「スネイルさんのお店には、きんじよのおばあさんがやいた、おいしいホワイトケーキと、チョコクッキーがあるんです。そんなにお菓子が好きなら、あのととき、買っておけ

ばよかったかな？」

これをきいて、ライアンの目つきが変わります。

「ええーっ！ それをさいしよにいつてよー！ ホワイトケーキに、チョコクッキー

！ 食べたーい！」

ライアンはよだれをたらしながら、ロビーのことをぼかぼかたたいていました（な
んとか、今からもどつて買いにいこうとするのだけは、やめさせましたが……）。

こんな感じで（ライアンの場合はあまいお菓子へのげんそうをいだきつづけたまま）、
旅の者たちはしばらくのあいだ、このささくれ立った森の中の道を進んでいったので
す。道はあいかわらずせまく、木の根はあいかわらずうねうねと、地面をはっていまし
た。そのうえしばらくいくと、道はあつくつもった落ち葉の中に、しばしばうもれてし
まっているようになっていました。そのたびにみんなは、正しい道のほうがくをさ
がしあてるのに、くろうしたのです。

さらにこのあたりになると、見上げる空のほとんどいちめんを、まがりくねつ
たえだのたばや、黒っぽい葉っぱのかたまりが、おおいつくしてしまっているようにな
っていました。ですから一行は、森のおく深くにはいつてからというもの、ひさしく、
おひさまのすがたを見ていかなかったのです。たまにちらちらと、黒い葉のあいだから、
そのの光を見ることができましたが、そのほかの大部分の時間は、みんなは暗くぶきみ

なこの森の中の道を、とぼとぼと、進んでいかなければなりませんでした。

それでもなんとか、一行はめぎすモーグのある西のほうがくへとむかつて、すこしずつですが、きよりをちぢめていくことができました。しかし、やっぱりこれが、旅の道のいじわるなところ。そのさきの道は、今よりもっと、ひどいありさまとなつてしまつたのです。

地面はどこもかしこも落ち葉にあつくおおわれ、どこに道があるのか？ いやいやまつたくわからなくなつてしまいました。なんとかほうがくだけで見さだめようと、ベルグエルムがほそい木を切つて、そのねんりんをしらべてみました、なにせここは、日もろくにあたらない、うす暗い森の中。ほうがくはぜんぜん、わからなかつたのです（これはボーイスカウトなどがおこなう、ほうがくをしらべるためのわざなのですが、みなさんはごぞんじでしょうか？ 木にはねんりんというものがあつて、それは日のよくあたるほうこうだけ、よく育っているものなのです。ベルグエルムはそのねんりんを見て、ほうがくを知ろうとしたのです）。

「まいつたな。この森は、よそう以上にやつかいだ。」ベルグエルムが、とほうに暮れながらいいました。「せめて光のむきだけでもわかれば、ほうがくがわかるかもしれないのだが、このあたりでは、どこにも、ひとすじの光さえさしてない。」

「もうすぐ、おひるなんだけど、」ライアンが、にもつの中からあのはとの時計をひつ

ぱり出して、つづけました。「これじゃまるつきり、夕ごはんの時間だね。どっちにせよ、ちよつとひと休みして、なにか食べようよ。今日はまだ、いちごキャンディーしか食べてないんだもん。」

そうして、旅の者たちはしかたなしに、手ごろな岩の上にすわりこんで、とりあえずのおひるごはんをとることにしたのです（張り出している木の根の上の方がすわりやすかったのですが、木の根の上ですわったら根っこをいためてしまうことになりそうです、あえてみんなは、岩の上をえらんですわっていたのです）。みんなは食べながら、このさきの道のことについて話しあいましたが、正しい道を見つけるためのうまい方法は、ざんねんながら、なにも思い浮かびませんでした（ライアンのしぜんの力をかりるわざも、道さがしにかんしては、あまりやくには立ちませんでした。風の力をかりても、てんじょうにあつくしげったえだや葉っぱをまとめて吹き飛ばすまでのいりよくは、ありませんでしたし、ほのおの力では、なおさらだったのです）。

同じところになんどもくりかえしてわざをぶちこめば、あなをあげられないこともありませんでしたが、そんなことをそのつどしていたら、ライアンもつかれてしまって、旅をつづけるどころではなくなってしまうでしょう。そのうえ、そもそもそんなことをしたら森をはかいすることになってしまいますから、しぜんをあいするライアンにとつても、できればそんなまねは、したくはありませんでした。せめて木にのぼって、

黒くおおわれたてんじょうの葉っぱの上に、顔を出すことができればよかったです
が、木の高さはみな三十フィートほどでもあつたうえ、しかもねじまがったそのみきは、上
の方にいくほどほそくなって、そとにむかつてそりかえつていたのです（いわゆる、ね
ずみがえしというやつです）。これではどんなに木のぼりのじょうずな名人だつて、て
んじょうの上に顔をのぞかせるなんてまねは、とてもできそうにありませんでした
（じつさい、みんなの中でいちばん身のかるいライオンが、とちゆうまでのぼつてみまし
たが、かれはそこで、こうけつろんを出したのです。「むりー」）。

さて、旅の者たちはどうするのでしょうか？　かれらのむかうべき道のさき。それは
ロビーのこの言葉によつて、きまつたのです（いつも通り、またみんなから、意見をもち
とめられてのことでした）。

「道がわからない以上は、ぼくたちの力ではどうしようもないと思います。だれか、こ
の森に住んでいる人をさがして、力を貸してもらうのがいいと思う。」

ロビーの言葉は、正しいものでした。自分たちの力をこえる問題には、人の助けをす
なおにもとめることも、またたいせつだったのです。

「たしかに、それがいちばんいいようです。」フェリアルが、ロビーの言葉にこたえて
いました。「むかしのなごりがまだ残っているのなら、森のまん中までいけば、まちが
あるはず。今でも人が住んでいるのかどうかは、わかりませんが。」

そのフェリアルルの言葉に、ベルグエルムもうなずいてつづけれます。

「はんえいはかこのこととはいえ、これだけの大きさの森だ。だれも住んでいないとは思えない。とにかく、そのまちなまでいってみよう。住人がいることを、願うばかりだ。」

「でもさ、そのまちなまではどうやっていくの？」さいごにライアンが、もつともなしつもんをしました。そしてそのしつもんに対して、ベルグエルムはいたってまじめな顔をして、こうこたえるばかりだったのです。

「かんをたよりにいくしかないな。運がよければ、道あんないのかんばんのひとつも、立っているかもしれない。」

うくん、さいごは、かんがたよりですか……。しかし、ほかに手立てがない以上、ベルグエルムのそのかんを、たよりにしてみるほかはありません。やはりベルグエルムは、みんなのいちばんの、みちびき手でしたから。

ふたたび出発というところで、ロビーがフェリアルルに、そつとたずねました。

「ベルグエルムさんって、しんちようなのか？ だいたんなのか？ どつちなんでしょう……？」

するとフェリアルルは、にが笑いを浮かべながら、小さな声で、そつと、ロビーに耳うちしたのです。

「ときと場合によるんです。わたしにも、いまだに全部はわからないんですよ。」

それからしばらくして。道がとつぜんひらけて、騎馬たちがその広場に飛び出したとき。みんなはともおどろいたものでした。まさに、どんぴしゃり！ 一行は、はぐくみの森のどまん中。むかしのはんえいのなごりの残る、そのまちの広場へとやってきたのです！（思わずライアンとロビーは、おたがいの手のひらをぱちん！ ともにあわせてよろこびあいました。ベルグエルムのかんが、みごとてきちゆうです！）

広場にはたくさんのお家々がたちならんでいました。しっくいのおぬられた白いかべに、茶色い木のはしらがとてもきれいとけこんでおります。それらの家はみんな二かいだてで、二かいのまどのそとには、色とりどりのペンキでぬられた、かわいらしいバルコニーもついていました。

お店もたくさんありました。森のめずらしい食べものをあつかったレストランや、おしやれなカフェテラス。パン屋さんに、本屋さんに、洋服屋さんに、おみやげ屋さん。そしてライアンの大好きな、お菓子を取りそろえたお店まで。じつにさまざまなしゅるいのお店が、ところせましと、この広場のまわりにはならんでいたのです。

よかつた。旅の者たちはさぞかし、よろこんでいるにちがいない。読者のみなさんの中には、そう思った方も多いことかと思えます。ですが、こう思った方も、同じく多

いのではないでしょうか？ なにか変だな？ と（こんなに暗くてさびしいところに、急にこんなにはなやかな場所があらわれるなんて、よく考えたら、やっぱりおかしいですもの）。

そうなのです、わたしもできれば、旅のみんなのことをよろこばせてあげたかったのですが、ざんねんながら、やっぱりまた、そううまくあいにはいきませんでした。

この広場で旅の者たちが見たもの。家々に、お店に、さまざまなかざりものに、広場ちゆうおうの大きなふんすいにいたるまで。それらはすべて、とうのむかしにうちすてられ、荒れほうだいになったままの、むぎんないきよだったのです！（せつかく、ライアンとロビーが、ハイタツチしてまでよろこんでいたというのに……）

旅の者たちはがくぜんとしました。やっぱりこの森には、もうだれも住んでいないのか……。みんなの気持ちは、重くふさいでしまいました。

しかし、いつまでもおちこんでいるわけにもいきません。みんなは気持ちを強く持ちなおすと、まずはそれらの家々やお店を、しらべてまわることにしたのです。

かれらはまず、いちばん大きくて、いちばんしつかりしたままのたてものの中に、はいつてみることにしました。それでも入り口のとびらはなかばくずれてしまっていて、さびついたちようつがい、かろうじてくつついているだけです（とびらがくつついているだけでも、まだましな方です。ほかのたてものでは、とびらはみんなく

ずれきってしまっていて、地面に落っこちてしまっていましたから。

たてものの中は、もうなん年も（あるいは、なん十年？）吹きさらしになっているままでのよう、床にはたくさん植物やきのこまで、生えているありさまでした（旅の者たちにびつくりして、小さいたちのような野生の生きものが、あわてて逃げていったくらいでした）。そしてはいつてすぐのところ、大きな木のカウンターがひとつあって、そこにはいつさつの本が、おきっぱなしになっていたのです。

「どうやら、やどちようのようだな。」ベルグエルムがその本を手にとって、いいました。「ここはかつての、やど屋のようだ。たくさん旅人たちが、ここにとまっていったのだろう。」

ベルグエルムはそういって、そのやどちようをばらばらとめくってみました（そうしたら本のページがばらばらになってこぼれ落ちてしまったので、ベルグエルムはあわててそれらのページを集め、こんどはしんちように、そつと取りあつかうことにしました）。

そこにはたくさんのお客さんたちの名まえや、そのかれらからのおれの言葉などが、びつしりと書いてありました。どうやらかつてこのやど屋は、森でいちばんはんじようしていた、ゆうめいなやど屋であったようです（もつとも、このやどの主人は、お客さんからほとんど、やどだいをもらうことはありませんでした。前にもいいま

した通り、この森ではどこの家だつて、みんなをわけなくとめてしまうのです。ですからこのやどの主人は、もっぱら自分のしゆみで、このやど屋をけいえいしていました。

ここの主人のお目あては、やどだいのかわりに、旅人たちがもたらしてくれるものでした。それはつまり、旅人たちの話してくれる、胸おどるような冒険のお話だったのです。さぞかし、たくさんの冒険の話をきくことができたんでしょね。冒険好きならわたしにとつては、うらやましいかぎりです。

ですが、そんな大きなやど屋の中でさえ、旅の者たちにとつてやくに立ちそうなじょうほうは、なにも見つけることはできませんでした。それからみんなは、さらになんげんかの家やお店をしらべてまわってみましたが、やはり新しい住人につながるような手がかりなどは、なにも見つけることができなかったのです。

「見て見て、ロビーー！ はちみついいり、ルインビスの花のアイスクリームだつて！ すごーい！」ライアンが、今はからっぽになっているアイスクリーム屋さんの店さきで、残ったメニユーの絵をながめながら、いいました。「こつちの、モンブランナッツいりのココア・アイスクリームも、おいしそー！ なんてみんな、いなくなつちやつたのさ！ 食べたかつたのにー！」

（じだんだをふんでくやしがるライアンをロビーがなだめていた）そんなときのことです。ロビーはふいに、だれかの声をきいたような気がしました。ベルグエルムとフェ

リアルは、ずっとむこうの本屋さんの中をしらべているところでしたし、話し声がここまで聞こえるはずありません。それにその声は、あきらかに、かれらの声とはちがっていました（もちろん、ライアンの声でもありません）。

ロビーはあたりを見まわしてみましたが、自分たちがいい、この広場にはだれもいるはずもなさそうでした。家々のまどや、てんじょうの木々のえだや、葉っぱにいたるまで、すみずみまで目をこらしてみましたが、やつぱりだれもおりません。ですが、そこでロビーはまたしても、その声をきいたのです。それはだれかが、二、三人で話しあっているような声でした。

「騎士みたいだぞ、ほんとうにいいのか？」男の人の声がきこえました。

「だれだろうがかんけいない。おきてを忘れたか。」もうひとりの男の人がつぶやきました。

「むりだよ、やめようよ。」こんどは、それよりおさない感じの聲がしました。どうやら、子どもの声。小さな男の子のようです。

「だめだ。いいか、さっきいった通りだ。おまえがいけ。うまくやるんだぞ。」

声はロビーの頭の中に、ちよくせつひびいてくるかのようでした。その声はとぎれと

ぎれな感じで、話している内ようもくわしくはきき取れませんでした。ロビーはなんだか、いやな感じをおぼえたのです。どうもなにかの悪いそうだんをしているように、きこえたからでした。そして話し声は、それっきり、ぱったりときこえなくなってしまうのです。

ロビーはこのことをライアンに伝えようとしたのですが、ライアンはあいかわらず、こんどはべつのお菓子屋さんのかんばんメニューである、「クリームいりの、森ペンギンのかたちをしたやき菓子」にむちゆうになつていて、とても話を切り出せるような感じではありませんでした。ですからロビーは、ベルグエルムたちにそうだんしてみようと、ひとり、かれらのいるむこうの本屋さんまで、てくてく歩いていくことにしたので（とりあえず、ライアンのことはそつとしておくしかありませんでした）。

「どうしました？　ロビーどの。」ベルグエルムとフェリアルが、本屋さんで地図をしらべながら、はいってきいたロビーにむかっていいました。

「だれかの声を、きいたような気がしたんです。どこで話していたのか？　それはわからないんですけど……。三人くらいで、ぼくたちのことについて、話しあっていたみたいなんです。この近くに、いるのかも。」

ロビーは半分、自信なさげにいいましたが、ベルグエルムたちの反応は大きなものでした。

「それはありがたい！ この森にはまだ、住人がいるんですね！」フェリアルが思わずさげびました。

「うむ、これは思いがけないことだ。さつそく、かれらをさがしにいこう。」ベルグエラムも、うれしそうにつづけました。

しかし、ロビーの気持ちは、まだもやもやとしたままでした。いやな感じはあいかわらずつづいておりましたし、声のぬしであるかれらが、はたしてほんとうに自分たちを助けてくれるものなのかどうか？ ロビーにはなんとも、はんだんがつかなくったのです。

そんな、おりもおりのこと。その声はそのたてももの入り口の方から、とつぜんきこえてきました。

「あなたたち、旅の人？」

騎士たちはとつさに、腰の剣に手をかけてけいはいしました！ ですがすぐに、その手をひっこめることとなったのです。それはつまり、入り口のそとに立っていたのは、いがいにも、小さな十さいくらいの子の、ひとりのかわいらしい男の子だったからでした。

その子はきいろいろいセーターに茶色のズボンすがたの、きつねの種族の男の子でした。肩くらいまでのびた長めのかみを、頭のうしろでむすんでおります（かみの色はきいろがかった茶色。まさにきつね色です）。頭の上にはきつねの耳。おしりからは大きなきつねのしっぽ。小さな茶色いかばんを肩からたすきがけにかけていて、そのかばんには白くてふわふわしたまるいかざりがひとつ、つけられていました（これは森ペンギンの羽毛から作られていました）。

「きみは、どこからきたんだ？ この森の住人かい？」ベルグエルムが男の子にたずねました。

それに対して、きつねの男の子はずつとにこにこした顔のまま、こうこたえたのです。「そうだよ。ここからすこしいったところに、ぼくたちフォクシモンたちの村があるんだ。あなたたちはだれ？ なにかこまってるの？」

こんどはこの男の子の方が、旅の者たちにしつもんをしました。ちなみに、フォクシモンというのは、かれらきつねの種族の者たちのことをさす、よび名です（ウルファ、シープロン、カピバル、オーリン、そしてフォクシモン。種族のよび名も、けっこう出ましたね）。

「わたしたちは、東の地から、わけあって、旅をしている者だよ。モーグまでいきたいんだが、道がわからないんだ。だれか、力になってくれる人はいないかな？」ベルグエ

ルムがこたえました。もちろん、旅のもくてきのこととは、かんたんにはしゃべるわけにはいきません。ただの旅人のふりをするのが、ここではいちばんいいのでした。

「それなら、ぼくの村においでよ。みんな、いい人ばかりだよ。村長さんにたのめば、ロザムンディアのいせきまで、あんないしてくれると思うから。」きつねの男の子が、あいかわらずにこにこした顔のまま、そういいます（ところで、きつねの種族のかれらは、モーグのことをロザムンディアのいせきとよんでいようですね。モーグというよび名は、もともと南のくにで作られたよび名でしたから、かれらはそのよび名のことを、知りませんでした。ですから、「モーグってなに？」という男の子に、ベルグエルムが「かつてロザムンディアとよばれていた、まちのことだよ。」と説明したことで、「なあんだ、ロザムンディアのいせきのことかあ。」ということになったというわけなのです）。

もちろん、旅の者たちは、その申し出をよろこんで受けることにしました。ですがロビーだけは、やつぱりいまだに、しっくりこなかったのです。それにこの子の声は、きつね頭の中にきこえてきた、あの男の子の声にておりましたから。それでロビーは、ためしに、こうきいてみたのです。

「ねえ、きみはきつき、だれかといっしょにいた？　ぼくたちのことを、話していかなかったかな？」

これをきいて、きつねの男の子はいっしゅん、どきつとしたように見えました。しか

しあいかわらず、にこにこした顔に変わりはありません。男の子はロビーにむかって、こうこたえるばかりでした。

「やだなあ、ぼくはひとりだよ。この広場は、ぼくのかっこうのあそび場だからね。大人たちはあぶないからきちゃだめだっていうけど、そんなことないよ。そんなことよ、さつ、あんないするから、早くぼくについてきて。」

こうして、旅の者たちはこの新しく出会ったきつねの男の子といっしょに、かれらフォクシモンたちの住む村へと、むかうことになったのです。

「ぼくは、チップリンク・エストルっていうの。チップでいいよ。よろしくね！」

ところで、だれかをひとり忘れているような……、あつ！ そういえば、ライアン！ みんながライアンのことをさがしに、お店のならんでいる場所までもどると……、これは今、さまざまなフルーツキャンデーをあつかったせんもん店の前で、ショーウィンドーの中の見本をうつとりししながら、ながめているところでした。

フォクシモンたちの村は、広場からいくらかもいかなないところに、ひっそりとかくれるようにしてありました。村のまわりは木でつくられたかべにぐるりとかこわれていて、そのさまはまるで、とりでのようでした（なにかりゆうがあるのでしょうか？）。入り口の門のまわりには、たくさんきつねの種族の者たちの見張りが立っていて、その手に

はみな、大きな弓矢がかまえられております。そのようすをひとめ見たみんなには、なんだかこの村が、とてもぶつそうな感じに思えました。ですが近くによつてみると、その見張りの人たちはみな、きつねの男の子チップと同じようににこにこ笑つていて、とてもあいそよく、旅の者たちのことを出むかえてくれたのです。

「ようこそ、フォクシモンたちの村へ！ さあ、どうぞゆつくりしていつてください！ 食べもの、飲みもの、なんでもありますよ！」

そのあまりのかんげいぶりに、旅の者たちはちよつと、びつくりしてしまいました。ですが、そんなみんなのことをうしろからぐいぐいおしながら、チップはこういつて、みんなのことを、村の中へとまねきいれるばかりだったのです。

「みんな、お客さんがめずらしいんだ。ちかごろじゃ、だれもこの森にはやつてきてくれないからね。さあ、はいつてはいつて。ゆつくりしていつてよ。みんな、いい人ばかりだよ。」

こうしてみんなは村の中へとあんないさされましたが、人々の明るさとはうらはらに、村の中はなんだかさびれていて、暗い感じがしました（てんじようはやつぱり、木々のえだど黒い葉であつくおおわれておりましたので、ふつうに暗かったのですが）。木とわらで作られた家々は、みんなもうずいぶんとくたびれている感じで、中にはだれも住まなくなつたまま、ぼろぼろにうちすてられている家まであつたのです。

そんな中でたくさんのフオクシモンの人たちが、みんな笑顔で、旅の者たちのことを出むかえてくれましたが、その笑顔はなんだかきこちなくて、心から笑っているようには見えませんでした。そしてなによりふしぎに思ったことは、みんな旅の者たちが今日ここにやってくるのだということ、はじめから知っていたかのように、じゅんびぼんたん、かんげいの用意がととのえられているということだったのです（小さなはたをばたばたとふって、出むかえに出ている人たちの、頭の上には、「ようこそフオクシモンの村へ!」と書かれた、大きなまくが張りめぐらされておりましたし、そのまわりには色とりどりの、きれいなはたやかざりものまで、たくさんかざりつけられていました）。

その場ちがいな、はなやかさからいっても、それらはどう見ても、ふだんからこの村にいつもかざってあるものなのだとは、とうてい思えません。チップにきいてみても、「たまたま旅人かんげいまつりのおまつりのときに、みんながやってきた」というわけでもないそうですし、「ほかにべつのお客さんがきていた」というわけでも、なかったのです。これはやっぱり、旅の者たちみんなのためだけに、じゅんびされたものなのだといいことでした。いったいいつのまに、じゅんびしたのでしようか?。

そんな大かんげいのまつただ中を、旅の者たちは（ちよつといごこちが悪そうに）歩いてきました（ライオンだけは大手をふって、にこやかに、出むかえの人たちのかんげいにこたえておりましたが）。そしてみんなは、村のまん中にあるいつけんの大きな

家の前に、あんないされたのです。その家はほかの家とはちがつて、すべてまるたでつくられていて、つくりもがっちりとしていました（いわゆるログハウスを思い浮かべてもらえれば、それに近いと思います）。そしてその家の入り口の前に、旅の者たちのことを出むかえるかたちで、三人のきつねの種族の者たちが立っていたのです。

「みんな、こちらがこの村の村長さんだよ。」チップがみんなに、村長さんのことをしようかいました。村長さんは、もうかなりのおとしよりで、手にはよくみがかれた、きれいな木のつえを持っております。うつすらときいろを残した白い毛の色をしていて（これはとしを取って、毛の色が白くなってしまったのです）、さまざまなししゅうのなされた、りっぱなチョッキを着ていました。

「村長さん、この人たちは、旅の人たちなんですから。道にまよっていたみたいだから、つれてきました。力を貸してあげてくれますか？」

チップの言葉に、旅の者たちはみんなぺこりと頭を下げて、それぞれがまず、じこしようかいをおこないました（これはお客さんとしての、れいぎでした）。そして村長さんは、そんなみんなのあいさつをにこにこしながらきいたあと、自分もまた、あいさつをしてかえたのです。

「うむうむ。よく、きなさつたな。わしは、この村の村長をつとめております、ランドン・ホップという者ですじゃ。こつちは、そうだんやくの、ティッドとロラじゃ。」村

長さんはそういつて、そばについているふたりのことをしようかいしました。ふたりともかなりたくましい感じの男の人で、きつねの種族ではあるものの、背だけはウルファの騎士たちに、ひけを取らないくらいだったのです。

「ここにきたからには、どうぞご安心ください。なんでも、あなたたちのぞみ通りにいたしましょう。」そうだんやくのふたりがいていいいにおじぎをして、旅の者たちにもいいました。

そしてさいごに、村長さんがみんなの手を取りつつ、こういつて、旅の者たちをその家の中へとまねきいれたのです。

「ささ、どうぞ中へ。かんげいのうたげの席ならば、もうすつかり、ととのえられておりますでな。もちろん、あなた方だけのために、とくべつに用意させましたのじや。お酒などはいかがです？ わが村じまんの宝石の実から作ったくだもの酒が、たつぷり用意してありますでな。おなががおすすきなら、でき立ての肉の料理も、きのこの料理も、たくさん用意してありますぞ。」

こうしてみんなは、家の中へとあんないされましたが、ロビーも騎士たちも、なんだかしつくりこない感じでした。今ここについたばかりだというのに、自分たちのためのかんげいのうたげの席が、すでにととのえられているとは、いくらなんでも話ができす

ぎています（だって、みんながこの村の近くにやってきてからここまで、時間にしたら、ものの五分もたつていませんでしたから。村のはなやかなかぎりつけのこともふくめて、そのあいだにうたげの席をととのえて、でき立ての料理まで用意してしまうなんて、やつぱりおかしいですもの。えんかいの場だけなら、ふだんからいつもじゅんびしてあつたとも、いえなくもないのですが、お料理はむりですよ。だれかのたんじょうパーティーが、きゆうきよとりやめになったので、その席や料理をさいりようしているというわけでもなさそうでしたし）。

「なんだか、変だと思いませんか？」

ロビーが村長さんたちにきこえないように、そつと、前をゆくベルグエルムとフェリアルふたりにいいました。さきほどの広場でのあのふしぎな声をきいてからというもの、ロビーの頭の中には、もやもやとしたいやな感じが、ずつと消えずに残っていたのです。

「わたしもそう思います。なにか、おかしい感じがです。」ベルグエルムが同じく、ロビーにそつといいました。「ですが、今はかれらにたよるしかないのも、また、じじつです。しばらくは、ようすをうかがってみるほかはないでしょう。」

「かれらはどうも、しんようできませぬ。」フェリアルもまた、ふたりと同じ気持ちのようでした。「みんななにかを、かくしているみたいだ。」

「用心しておくに、越したことはないな。」フェリアルという言葉に、ベルグエルムもうなずいてこたえます。「かれらの行動には、気をくばっていかなくては。」

そんな中、みんなのあいだにわつてはいったのは、ライアンでした。

「とりあえず、用心はしておくことでき、」ライアンは、みんなの顔をのぞきこむと、にこつと笑っていました。「かんげいしてくるっていうんだから、ここは、ありがたく受けようよ。」

それからライアンは、前を歩いていく村長さんたちの方に向けよると、そうだんやくのふたりにむかつて、にこやかに話しかけたのです。

「ね、あれはあるのかな？ 広場で見た、森ペンギンのクリームいりやき菓子。ぜひ食べてみたいなあ。」（なにか考えがあるのかと思いきや、けつきよくライアンのもくてきは、これだったみたいですね……）

そのあとみんなは、お客さんをまねくための大広間にあんないされました。テーブルはなくて、床にちよくせつ、まるいクッションがならべられていたのです（これはかれらフオクシモンたちのしゅうかんで、かれらは食事をするときにも、テーブルを使わないのです）。そして旅の者たちは、その中でももつともえらい人たちがすわる、いちばんいい席に通されました（まん中がランドン・ホップ村長で、その両がわにふたりずつ、か

れらはすわっていました。

かれらがすわってまもなく、たくさんの人たちがやってきて、まるいクッションはすぐにいっぱいになりました。みんな、フォクシモンのでんとう的な衣服に、着がえております。赤、青、きいろ、さまざまな色のおりこまれたチョツキが、なんともはなやかでした。

席がいっぱいになったところで、こんどはごちそうのとうじょうです。みんなの席の前に、あたたかいごちそうがもりつけられた大きなお皿が、つぎからつぎへとはこぼれてきて、もう床の上は、お皿とカップと飲みもののびんなどで、いっぱいになってしまいました。ごうか、ルンルン鳥のまるやきにはじまって、とく大のたまごやきに、ゆでたまご。うずらの肉のからあげに、ぱりぱりジュシーなとくせいフライドチキンがどっさり。ぴりりとからいソースをかけた、チキンステーキのフォクシモン風まで（鳥のお料理ばかりですが、きつねの種族であるかれらフォクシモンたちは、鳥とたまごが大好物だったのです）。

さらに、肉を食べないライアンのためにも、たつぷりのマカロンきのこのいためものや、森キャベツのにこみ料理。ポテトパイのジュエリーソースがけ、などなど。とてもしようかいしきれないくらいのみごとな料理たちが、目の前にならべられていました（ライアンのきぼうの、森ペンギンのかたちをしたお菓子も、山もりになって出されました）。

た。もつとも、まさかこんなリクエストがあるなどは、村の人たちもよそうしておりませんでしたから、これらのお菓子は、きゆうきよ、大あわてで作られたのです。そのため、中のクリームがはみ出しているものも、けつこうあつたんですけど……)。

「旅のみなさん方のけんこうと、旅の安全を願って。」ランドン村長が、手にしたカップをかかかかかかかか、かんぱいのおんどをとりました。そのカップには、さつき村長さんがいつていつて、宝石の実のくだもの酒がはいつていつていたのです(まだ旅のとちゆうでしたし、旅の者たちはできればお酒はえんりよしたかったのですが、まずはいつぱい、お酒でかんぱいするのが、旅人をもてなすフォクシモンたちのならわしなのだといわれて、ことわることでできませんでした。さすがにライアンとロビーは、まだお酒を飲めるねんれいではありませんでしたから、同じ宝石の実から作ったジュースで、かんべんしてもらいました)。

かんぱいがすむと、それからもう、飲めや歌えの大ききわぎです。さまざまながつきを持つたきつねの音楽隊がやってきて、部屋の中を楽しい音楽でいつぱいにしました。それにあわせて、はなやかな衣しように身をつつんだおどり手たちが、フォクシモンのでんとう的なダンスをおどりはじめたのです。

えんかいの席はほんとうに明るく楽しく、人々もみんな、笑ってしゃべって、じつに楽しそうでした。しかし、ロビーをはじめとする旅の者たちは、それでもなお、いぜん、

しつくりこない気持ちのままだったのです（ライアンだけは、まんめんの笑顔で、両手に持ったお菓子においしそうにかぶりついておりましたけど）。こんなにくさんの料理が、みんなが席についたのとほとんど同時に出てきたのも、やっぱりどうにもおかしなことでした。だってそれらのお料理は、どれもたいへんなてまがかかっているようなものばかりで、えんかいがはじまるのを前もって知ってでもないかぎり、すぐに用意できるようなものでもありませんでしたから（たまたま料理コンテストがひらかれていて、その料理を使っているというわけでもなさそうでしたし。もつとも、森ペンギンのお菓子だけは、前もって用意してなかったわけですけど）。

それに旅の者たちは、ランドン村長をはじめ、みんなからまったく、身の上のことなどについてきかれませんでした。ふつうだったら、「どこからきて、どこへいくのか?」とか、「旅のもくてきは?」とか、いろいろきかれてもおかしくありません。ですがフォクシモンたちは、旅の者たちのことについてはまったくかんしんがないといったふうには、みんなにはいつさい、しつもんをしてこなかったのです（これも、かれらフォクシモンたちのしゅうかんなのでしょうか?）。ぎやくに旅の者たちの方から、自分たちのことについてかれらに説明しようとしたくらいでしたが、かれらは「まあ、そんなことはいじやありませんか。さあさあ、とにかく、ゆつくりしていつてくだいな。」といて、とりあつてくれませんでした。

しかし、手あつくもてなしてくれるのはありがたいのですが、旅の者たちも、そんなにゆつくりしているわけにもいかないのです。なにしろ、さきを急がなければならぬ旅です。早くモーグまであんないしてもらおうようにたのまなければ、いつまでたつても、この村に足どめされてしまうことにもなりかねません。

「あの、ランドン村長。」うたげのもり上がりがいつこうにおさまらないのを見て、ベルグエルムがたまらずに、ランドン村長に話を切り出しました。

「かんげいを心よりかんしゃいたしますが、われらはわけあつて、さきを急がなければならぬ身。まことにきょうしゅくではありますが、われらはもう、出かけなくては。モーグ、ロザムンディアのいせきまで、どなたかにあんないをお願いしたいのです。」

これをきいて、ランドン村長はにこにこした顔をひっこめて、急にまじめな顔になりました。それからランドン村長は、そうだんやくのティッドとロラの方をむいて、小さくうなずいたのです。

「申しわけないが、」ランドン村長が前をむいたまま、ベルグエルムにいいました。「これは、われら、はぐくみの森に住むフォクシモンたちの、おきてなのですじや。このおきてを破れば、この村も、われらフォクシモンたちでんとうも、みな、風の中に消えてしまうことになるじやろう。われらははるかなむかしから、この森に住みつづけてきた。あのかいぶつがあらわれる、そのずつと前から、われらはこの森に住んでいたの

じゃよ。森はすたれ、人々はみな、あのかいぶつのことをおそれ逃げていった。残ったのは、われら、フオクシモンたちだけじゃ。じゃが、われらには、この土地を見ずることなどはできん。この森には、われらのせんぞの、たましいが眠っておるのじゃ。」

ランドン村長がなんのことを話しているのか？ ベルグエルムにはよくわかりませんでした。あのかいぶつとは、なんのことなのでしょう？ そしてベルグエルムがそう思っていたときのことです。ベルグエルムはあたりのようすが、だんだんおかしくなってきたということに気がつきました。景色がぼんやりとしてきて、人々のすがたも、ゆがんで見えはじめてきたのです。いったいこれはどうしたことでしょう？ しかしベルグエルムには、すぐにそのわけがわかりました。これは、まわりのもののせいではありません。自分自身の目が、かすんできていたのです！ ベルグエルムは目をごしごしとこすつて、なんとか景色をもとにもどそうとしましたが、むだな努力でした。しだいしだいに、目の前がぐるぐるとまわりはじめました。音楽の音色が、頭の中にちよくせつ、がanganなりひびいてくるかのようでした。おどっている人たちのすがたが、まるで夢の中できごとであるかのように、ゆらゆらと、かげろうのようにうつつていました。

「この運命にしたがわなければ、わしらは生きてはゆけないのじゃ。あなた方には申しわけないが、これも運が悪かったと、あきらめてください。」

しまった……！ ベルグエルムはなにもかもに気がついて、なんとか立ち上がろうとしましたが、すでに手おくれでした。手足にまったく、力はいりませんでした。そして、うすれていくいしきの中で、かれがさいごに見たものは、同じように床にたおれこんでいく、ロビー、フェリアル、ライアン、三人の仲間たちのすがただったのです。

どこからか、ひゅうひゅうとすきま風がはいりこんできていました。そのつめたい風がほほにあたって、ロビーは思わず、「くしゃんー」とくしゃみを飛ばしました。

ロビーが目をさますと、あたりはまっくらでした。なにも見えません。からだを起すすと、ロビーには自分が、つめたい石の床の上にちよくせつ横たわっているのだということがわかりました。いったいここは、どこなのでしょう？ ロビーは目をこらして、なんとかあたりのようすをうかがおうとしましたが、だめでした。ここはほんとうのくらやみで、まったくなんにも、見えなかったのです。

「だれか、いませんかー。みんなー。ライアーン、ベルグエルムさーん、フェリアルさーん。」ロビーはくらのやみにむかってよびかけましたが、なんのへんじもありませんでした。

ロビーは急に、心ぼそくなってきました。目がさめたら、とつぜんこんなまっくらな場所で、しかも、石の床の上に寝ていたんですから、まったくむりもありません。どう

してこんなことになっているのでしようか？

ロビーはすこし前のことを思い出そうとしました。たしか……、きつねさんたちの村で、かんげいのえんかいの席にまねかれていたはず……。たくさんのごちそうが出て、ジュースを飲んで……。ロビーはそこで、あることを思い出しました。そうだ、村長さんとベルグエルムさんが、なにかを話していたんだった。そこで……。ロビーはそのとき、ついに、自分が今こんなじょうきようにおちいつているそのわけのことを、思い出したのです。

そうだ！　ぼくはあのととき、なんだか気分が悪くなって、目の前がぐらぐらゆれて、そのまま気を失ってしまっただんだ！　そしてベルグエルムさんも、同じようにふらふらしていた。思い出したぞ。

そこから考えられるこたえは、(ふつうに考えれば)ひとつだけでした。食べすぎて気分が悪くなったので、きつねの種族の人たちが、この場所に寝かせてくれた……。わけではありません。つまり、だまされたんです！　どんなねらいがあつて、自分のことをこんなくらやみに放り出していったのか？　それは今のだんかいではぜんぜんわかりませんが、よいもくてきのためであるはずもありません(それにおそらく、ほかのみなも同じような目にあわされているはずだと、ロビーは思いました。この近くにいるのでしようか?)。そして、そのよからぬもくてきのために、かれらははじめから、ロビー

たち旅の者たちのことをだますつもりで、自分たちの村にさそいこんだというわけだったのです。

ロビーははじめから、なんだかいやな感じを持っていました。そしてそのいやな感じが、このようなかたちで、げんじつのもものとなってしまったのです。例えば、ロビーが広場できいたあの頭の中にひびいてきた会話は、かれらの悪だくみのそうだった。あのきつねの男の子、チップリンク・エストルも、そんなかれらの仲間のうちのひとりだったのです（そしてやっぱり、あのときの男の子の声はチップだったのです）。

ですが、それがわかったとしても、今のこのじょうきようが変わるといってもありませんでした。あいかわらず自分のからだは、まっくらなこの夜の底のような場所に、投げ出されているままなのですから。

ロビーは泣きたくなくなってきました。ですが、べそをかいていてもしかたありません。とにかく今は、（どこにいてもかもしれないみんなのためにも）このじょうきようをまず、なんとかしなければならなかったのです。

ロビーは自分のからだを、ぱたぱたと手でさぐってみました。今までと変わらないように思えます。けがもしていません。こんどは、あたりの床を手さぐりでしらべてみました。つめたい石の床のかんしよくが、ゆびさきに伝わってきます。するとすぐに、ロビーは自分の寝ていた場所のなにかがあるのを見つけました。それはどうや

ら、ぬのでできたかたまりと、ひとふりの剣のようであったのです。それらをさぐっているうち、ロビーにはそれらのものが、自分の持ちものであるのだということがわかりました。ぬののかたまりは、ロビーのかばんと、スネイルにおくられたあのたいせつなリュックでしたし、剣はもちろん、同じくスネイルからおくられた、あのだいたいな剣だったのです（にもつの中身もちろんとあるようですし、剣もしつかりと、さやにおさまっていました。これはたいした発見です！）。

ロビーはとりあえずほつとして、剣を腰につけ、かばんとリュックを身につけました。そしてそれから、あたりのようすをしらべるために、ゆつくりと手さぐりをしながら歩きはじめたのです。なにしろ自分がどんな場所にいるのか？　ここが部屋の中なのか、ろうかなのかさえも、まったくわかりませんでしたから、そうするほかはありませんでした。

そのとき、ロビーはふと、自分のリュックの中にあかりがあつたのだということを思い出したのです（それはもちろん、スネイルにおくられたたくさんの品物のうちのひとつだったのです）。もつと早く気づけばよかった！　ロビーはほつと息をついて、くらやみの中でリュックの中に両手をいれました。手さぐりで、はいつているものの品さだめをおこないます。ロープに……、せんめん用具のセット……。これは……。きゆうきゆう用具のはこです。ですが、いくらさぐっても、かんじんのあかりであるランプと

油と火を起こすための小ばこだけが、どうしても見つかりませんでした。ロビーはあせって、リュックの底まで手をいれて、すみからすみまでかきまわしてみましたが、けっかは同じことでした。あかりをとすために必要な道具が、すべてなくなっていたのです！

これはつまり、ロビーのことをここに放り出していった、フォクシモンたちのしわざにちがいありませんでした。かれらはくらやみを消すために必要な道具を、すべてロビーのものの中から、持ち去っていったのです（それにしても、なぜあかりだけを持つていったのでしょうか？ ロビーのことをこまらせるためならば、ほかのものも全部、持って行ってしまえばいいことですの。武器である剣やほかの品物は、みんな残したままなのには、なにか意味があるのでしょうか？）。

「ひどい、どうしよう……！」

ロビーはこまり果てました。もうこうなったら、このなにも見えないくらやみの中を、手さぐりのままで進んでいくほかはないのです。

ロビーはかくごをきめて、リュックを背おいなおしました。そしてそれからロビーは、一フイートさきも見えないこのくらやみの中へとむかって、ゆつくりと歩き出しているのです。

そのとき……！ ロビーは自分の腰のあたりがぼんやりと光ついているということに、

気がつきました。見ると、剣のねもとのあたりが、青白く光っていたのです！ ロビーはびつくりして、剣のつかに手をかけて、そのやいばをすこしだけぬいてみました。それと同時に、ロビーの目に飛びこんできたものは……。

青白くかがやく、明るい光！ なんと、剣のやいば全体が、なんともしんぴ的な、青白いかがやきを放っていたのです！

「この光は、黒騎士たちと戦ったときの、あの光と同じだ！」

ロビーはその光を見て、セイレン大橋の上でのあのおそろしいたいけんのことを、思いかえしていました。そしてロビーは、そのときに仲間たちがいつてくれた言葉のことを、ここでふたたび、思いかえしていたのです。

その剣は、われらのことを助けてくれたではありませんか……。

ロビーの中に、急に大きな力がわいてきました。それはまさしく、くらやみの中に光るきぼうの光、そのものだったのです。

「この剣は、ぼくたちのことを守ってくれる！」

そしてロビーはついに、その剣のやいばをすべてぬき放ちました。

剣は、ぼおーっとした青白いかがやきを放っております。それはセイレン大橋の上で黒騎士をやっつけたときのような、目もくらむような明るさではありませんが、それでも、このくらやみをてらし上げるのには、じゅうぶんだけの光でした（あかり

を持ち去ったフォクシモンたちも、まさか剣が光るなんて、思っていなかったことでしょう。剣のいいない方、発見です！。

ですが、それにしてもいったいなぜ、この剣は光っているのでしょうか？ ロビーがかりをのぞんだからでしょうか？ それともつとべつの、なにかのりゆうがあるのでしょうか？ なんにせよ、今はこの光はロビーにとつて、このくらやみををらすためのあかりとして、このうえなくありがたいものとなってくれたのです。

ロビーは剣を頭の上に高くかざして、あたりををらしてみました。そしてその剣の光にてらし出されて、ロビーはようやく、自分が今、どんな場所にいるのか？ かくにんすることができたのです。

そこはただっ広い、石づくりの大広間でした。てんじようはずつと上にあつて、その高さは四十フィートほどもあるように見えました。まわりはぐるりと、石のかべにかこまれております。広間のかたちは長方形で、ロビーはそのちょうどまん中の場所に立っていました。

その大広間のひとつのかべに、大きなさいだんが作られていました（さいだんとは教会などにある、おいのりをするための場所のことです）。しかしロビーは剣をかざして、そのさいだんをしらべてみましたが、それはなんともいやな感じのものでした。そのわけはさいだんのちゆうおうにかざられている、ひとつの大きな木ぼりのちゆうこくのせ

いだったのです。それはロビーが今までに見たこともない、黒くてぶきみな生きものちようこくでした。黒いぶかつこうなかたまりから四本のみじかい手足がのびて、大きな口と小さなしっぽがついております。目はありません。おたまじゃくしを思い浮かべてもらえれば、それに近いと思います。ですが、おたまじゃくしのようなかわいらしさなどは、そのちようこくからは（つまりこの生きものからは）、ぜんぜん感じられませんでした。

ロビーは背すじがぶるつとしました。こんなものは、長くは見たくはありません。ロビーはいやな気持ちでそのさいだんをはなれると、こんどはまわりのかべを、ぐるりとしらべて歩いていきました。そしてほどなくして。ロビーはついに、ねんがんの出口、ここから出る石のアーチがひとつだけ、むこうのかべにぽっかりとあいているのを、見つけたのです！

「出口だ！」ロビーは思わず走り出して、そのアーチにむかいました。ロビーはとにかく、この場所からそとに出たくてしかたなかつたのです。

アーチをくぐるとすぐ、石のろうかが右にまがっていました。どうかそとへ出られませうように！ ロビーはそう願って、そのろうかを右にまがりました。しかし、そこでロビーのことを待っていたものは……、まっくらなやみの中へとどこまでもつづく、果てしないほどに思われる、つめたい石のトンネルだったので。

「こんなに広いなんて……」

ロビーは自分が今おかれているじょうきようが、思った以上にしんこくであるということを知りました。いったいどこまで進めばそとへ出られるのか？ それもぜんぜんわからなかったのです。終わりが見えないというのは、せいしん的にもつらいものです。まして出口だと思っていたものが、果てしないトンネルの入り口だったとわかったときなどは、なおさらでした。

ロビーは仲間たちのことを思いました。今どこにいるんだろう？ みんなもまた、このトンネルの中のどこかにいるんだろうか？ ロビーは胸がきゅんとしめつけられました。ベルグエルムさん、フェリアルさん、ライアン。みんな、ぶじでいるんだろうか？ ロビーはかれらのぶじを早くたしかめたくて、たまりませんでした（今のロビーの気持ちは、ここまでいっしょに旅をつづけてきてくれたみなさんなら、痛いほどよくわかってもらえることと思います）。

かれらのためにも、ロビーはくじけるわけにはいきません。ぜつたいに出口を見つけるんだ。

こうしてロビーは気持ちを強く持ちなおすと、剣のあかりをかざしながら、自分の目の前に待ちかまえているそのまっくらでつめたいぶきみな石のトンネルの中へと、ひとりふみこんでいったのです。

すこしいったところで、ロビーはおかしなものを見つけました。右がわの石のかべに白いペンキで、ふち取りだけの四かくいかたがちがえがかれていて、その中にこんな、なんともおかしな言葉が書いてあったのです。

「肉料理の部屋」

いったいこれは、なんのことなのでしょう？　ロビーは首をかしげてしまいました。そしてさらにその言葉のあとには、同じく白いペンキでえがかれた矢じるしがひっばってあって、その矢じるしのむきは、さつき自分がやってきたあの大広間の方をさしていたのです。

ひよつとして、ぼくのいたあの広間が、肉料理の部屋なのかな？　ロビーはそう思つて、ちよつといやでしたが、ろうかをひきかえして、さつきの広間の入り口までしばらくにもどつてみることにしました。そしてさつきはすぐにトンネルにむかつたので気がつきませんでした。広間の入り口のアーチの上に、（ろうかの方から見たがわだけに）やつぱり白ペンキで、小さく「肉料理の部屋」と書いてあるのを、ロビーは見つけたのです。

ですけど、ここが肉料理の部屋だといわれても、ロビーにはさつぱりでした。それら

しいものはまったくありませんでしたし、ごはんを食べるためのテーブルやいす（フォクシモンのりゆうぎならば床におかれたクッション）なども、ぜんぜんありませんでしたから（まさか、あのきみの悪いさいだんでごはんを食べるわけありませんよね）。

けつきよくロビーは、ぎもんには思いながらも、さきに進むことにしました。とにかく今は、こんなものにかまっている場合ではありません。早くそとに出なければ。ロビーはやる気持ちをおさえながら、ひとり、トンネルの中を進んでいきました。

やがてロビーは、道がふたつに分かれています。どちらの道もくらやみに通じていて、さきのようにすはせんせん見通せません。そしてここにもまた、さきほど見たのと同じ、なぞの白いペンキの文字が書いてあるのを、ロビーは見つけました。

まずロビーが今歩いてきたつうろの右がわのかべに、うしろのトンネルの方をさして、「肉料理の部屋」という文字が書いてありました。これはさっきの部屋のことですから、今までと変わりありません。そしてそれとはちがう新しい文字が、こんどは、分かれ道のつきあたりのかべに書いてあったのです。

「デザートの部屋」

肉料理のつぎは、デザート？ これじやまるで、レストランかなにかです。そして文字のあとにはやっぱり、白い矢じるしがひっばつてあつて、それは右のほうこうをさしていました。ロビーは右のトンネルに剣のあかりをかざして、さきのようすを見ようとしましたが、くらやみはどこまでもつづいてるばかりで、やっぱりなんにも見えませんでした。ですがロビーはなんんだかそこに、とてもだいなものがあるような気がしたのです。なぜだかはわかりませんが、ロビーの心の中で、なにかがさわぎました（こんなどきには、なにかがあるにきまつています！）。

ロビーはその気持ちにしたがつて、右のトンネルを進んでいくことにしました。このさきにだいなものがあるという気持ちは、どんどん大きくなっていくばかりです。やっぱりこのさきに、なにかがあるにちがいない。ロビーはそうかくしんして、この暗いトンネルの中を足早に進んでいきましました。

それからあまりいかないうちに、つうろは右にまがつていました。ロビーがおそるおそる、まがりかどのさきにちよこんと顔だけを出してのぞいてみますと、そこからすぐのところにはひとつの石のアーチがあつて、どこかの部屋の中へと通じているようでした。そしてロビーはそのアーチの上に、思った通り、白いペンキの文字で「デザートの部屋」と書いてあるのを、見たのです。

この部屋からだ。中に、だれかがいる！ ロビーはとつさにそう思いました。さきほ

どから感じている、だいじななにか。それは物ではなくて、自分にとつての「だいじなだけか」にちがいないと、このときロビーは、はつきりと感じ取っていたのです。

ロビーは剣をかざして、部屋の中をのぞきこみました。ロビーがたおれていたあの肉料理の部屋ほどは、大きくはないようです（やつぱり肉料理はいちばんのごちそうでしたから、部屋も大きいのでしょうか?）。そして部屋のすみには、さっきの部屋にあったのと同じようなさいだんが、作られていました。

そしてそして、そんなものはどうでもいいのです! そんなものに、かまっている場合ではありません!

部屋をのぞきこんだロビーがまつさきに見たもの。それは部屋のまん中の床にあおむけにたおれている、ひとりのある人物。白くてきれいな服を着て、お菓子のたつぷりつまったかぼんを、いつも肩からかけている人物。そう、それはまさしく、ライアンだったのです!

「ライアン!」

ロビーはもう、むがむちゆうで、ライアンにかけやりました（思わず、あかりのともった剣をそこらへんに放り出してしまつたくらいです。この剣もとつてもだいじでしたが、やつぱりライアンにくらべたら、かれの方がだいじですもの）。

「ライアン、しつかりして! だいじようぶ?」ロビーはライアンのからだをつかん

で、ゆさゆさとゆさぶりました。はたしてライアンは、ぶじなのでしょうか？ まさか、死んで……、はいませんか、ご安心を！ じっさいかれはただ寝ているだけで、けがひとつしていませんでした。

「うーん……、あと五分……」

ロビーのひっしのよびかけにかえってきたのは、なんともまのぬけたへんじでした（ついさいきん、どこかできいたようなせりふですけど……）。ですが、そんなライアンの言葉に、ロビーは心の底からほっとしたのです。はじめ、ライアンが床にたおれているのを見たときには、ロビーは、しんぞうがこわれてしまわんばかりでしたから。

「よかった！ ほんとうによかった！」ロビーはライアンがぶじであるということを知って、これ以上はないというくらいによるこびました。ほんとうにロビーは、ライアンの身のことを、いちばんに心配していたのです（ベルグエルムとフェリアルのこと、もちろん心配していましたが）。ロビーは思わず、ライアンのことをぎゅつとだきしめてしまいました（それでも、からだの大きさがちがいましたから、あんまり力をいれすぎないようにがんばりましたけど）。

「ライアン、起きて。早く、ここから出よう。」

ロビーがそういって、ライアンのことをもういちどゆさぶります。するとライアンは、ようやく目をさまして、あたりをきよろきよろと見渡してからいいました。

「あれ……、ロビー、おはよー。まだ、朝じゃないみたいだけど、どうしたの？　……」
「どい？」

どうやらライアンは、まだ自分のおかれているじょうきようが、ぜんぜんわかっていないみたいです（まあ、寝起きですぐじゃ、むりもありませんけど）。眠そうな目をぐりぐりとこすつて、「ふああ。」と小さなあくびをしました。

それから。ロビーは今自分たちのいる場所のことや、これまでのことなどを、ライアンにみんな話してきかせたのです。もちろんロビー自身も、今のじょうきようのことに ついては、わからないことばかりでした。ですがそれでも、自分たちがきつねの種族であるフオクシモンたちにだまされて、今こんな目にあっているのだということだけは、まぎれもないじじつだったのです。

ロビーの話をきいているうちに、だんだんライアンも、目がさめてきたようでした。そしてしだいに、今のじょうきようのことをりかいすることができていって、いちばん おしまいのころには、かれはもう、すっかり頭にきてしまっていたのです。

「あいつらー！　よくもだましたなー！」ライアンはフオクシモンたちにだまされた ということを知って、ぶんぶん怒りました（もしも今、そばにたき火のほのおがあつたのなら、あたりいちめんにほのおのうずがまき起こっていたかもしれません。こういう ときのライアンって、とつてもこわいんです！）。

「ライアン、おちついて。とにかく今は、そんなこといつてる場合じゃないよ。」そんなライアンのことをなだめて、ロビーがおちついていました（さすがはきゆうせいしゆです）。「早く、出口をさがさないと。それにたぶん、ベルグエルムさんとフェリアルさんも、このトンネルの中のどこかにいるんだと思う。みんなでいっしょに、ここをぬけ出すんだ。」

「……うん、そうだね。」ロビーの言葉に、ライアンもおちつきを取りもどしてこたえます。

「ふたりを、助けなきや。それができるのは、ぼくとロビーだけだもの。」

そしてライアンは、自分のにもつ（ほとんどお菓子でしたが）をしっかりとかかえなおすと（そしてやつぱり、あかりはすべて持ち去られていました）、ロビーのうでにぎゅつとしがみつきました（これは暗いトンネルの中でまいごにならないようにするためです。べつに、デートにいくわけじゃありませんよ）。

「けつきよく、ベルグもフェリーも、ぼくたちがいなくちゃだめなんだから。まったく、せわがやけるよね。」ライアンがそういつて、「ふう。」と深いため息をつきました（さつきまではライアンも、かれらふたりと同じ立場でしたけど……）。

「ライアン・スタツカート部隊、いぎ、しゅっぱーつ！ 今からぼくたちは、白の騎兵師団の騎士たちのことを助ける、ゆうかんなるきゆうしゅつ隊だ！ ふたりには、あと

でたくさん、おれいをしてもらわなきや。お馬さんになってもらって、背中に乗せても
らおつかな。それとも、肩ぐるまで、お城を三回まわって……」

うくん、なんだかさいごに、ぶっそうなことをいつているようですが……、まあ、と
にかくこうして、ロビーとライアンのふたりによるこの小さなきゆうしゅつ隊は、さき
の見えない、このまっくらなトンネルの中へとむかって、気持ちも新たにふみ出して
いくこととなったのです。

「あつ、それから。」ライアンが急に、ロビーにむかっていいました。「ぼくが隊長で、
ロビーが隊員ってことでいいよね？」

むじやきに笑ってしがついてくる、そんなライアンのことを見ながら、ロビーは
ちよつぱり（というより、たくさん）、不安な気持ちになりました。

だいじょうぶかなあ……。

さてさて、このあとといったい、旅の者たちはどうなってしまうのでしょうか？

そして物語は、この夜の底のような暗い暗いトンネルの中での冒険の、もつともかく
しんの部分へとむかって、つづいてゆくことになるのです。

9、夜の底

いったいいつのころから、このいせきはこの場所にあるのでしょうか？ はぐくみの森のおく深く。そのからみあう木々の根と、深い深い葉っぱのむれのおくに、ひとつのいせきがひっそりとかくれるようにしてたたずんでいました。もう見るからに、ひとめで、とても古いものだということがわかりました。石づくりのはしらやかべは、あちこちがくずれ落ちてしまっていて、たおれたはしらにびっしりとこけが生えて、たくさんのおきのこまで生えているようなありさまだったので（ですからもしここに住みたいと思うのなら、かなりのリフォームが必要になることでしょう）。

じつさいこのいせきは、はるかむかし、まだモーグがロザムンディアとよばれるかっきのあるみなとまちであつたころから、この場所にありました。ですからもう、二千年ほどもむかしのことです。この森の中にあるいちばん古いおじいさんの木だつて、このいせきよりも若いのでした（なるほど、古くてぼろぼろなもの、うなずけますね）。

このいせきがどんな人々によつてつくられたのか？ それがわかる人は、もうこのアーケランドには、ぜんぜんいないことでしょう。モーグをふくめ、このあたりの土地のれきしや物語などをきろくした本などは、もうまったく、残されてはいなかったのだ

す（これはむかし、ロザムンディアから人々が去っていつてしまったときに、かれらが自分たちのことを書いた本やしよるいなどを、すべていつしよに持つていつてしまったからなのです）。ですからこのいせきは、そのきちょうなれきしの、おきみやげでした。れきしのせんもん家がこのいせきのことをいろいろとしらべれば、このあたりの土地のことについて、なにか新しい発見があるかもしれないかもしれません。しかし……。

ここでみなさんに、はつきり申し上げてしまいます。

ほんとうのところ、このいせきはこのアークランドにおいて、べつにまつたく、人々のきょうみをひくようなものでもなかったし、だいにされてるものでもなかったのです（もしそうだとしたら、こんなにきたないままで、ほつたらかしにされてるはずもありませんよね）。とくに目をひく美しいちようこくがあるわけでも、金銀宝石がちりばめられてるわけでもありません。

ではなぜ、このとくにたいせつにもされてないような古びたいせきのことについて、わたしが今、こんなにも長々と説明をしているのかという……、読者のみなさんには、もうおわかりですよね。

問題は、このいせきそのものではありません。重要なのは、今このいせきの中にいる人たちだったのです。

それは、読者のみなさんのよく知っている人物たち。そう、われらが旅の仲間たち。

ロビーにライアン。ベルグエルムにフェリアル。この四人の仲間たちが、今まさに、このいせきのおく深く、やみの世界のおく深くに、とじこめられていたのです！（おっと、ベルグエルムとフェリアルについては、まだこのいせきの中には、とうじようしていませんでしたね。でもまあ、みなさんもすでによそうされていることでしょうから、もうさきについてしましましょう。やはりかれらもまた、ロビーやライアンと同じく、このいせきの中のどこかに放り出されていたのです。さあ、早くみんなで、助け出さなくっちゃ！）

劍のあかりが、暗いろうかをぼおーっとてらし上げました。ここは、はぐくみの森のおく深く。木々にうもれた古びたいせきのそのまたおく深くの、とある石だたみのろうかの上。そのろうかの上を今、ふたりの者たちが歩いてるところでした。それはもちろん、われらがロビーとライアンの、ふたりだったのです。

劍をかざしてトンネルをてらしているのは、ロビーでした。そして、おおかみ種族の大きなロビーの服のすそをにぎって、そのわきをちよこちよこついでいているのは、白いひつじの種族の少年の、小がらなライアンです（はじめはロビーのうでにしがみついていたが、やっぱり動きづらいということ、今は服のすそをにぎっていたのです）。じじょうを知らずにそのようすを見た人であれば、「まるでおばけやしきの中の親

子みたい」って笑ってしまいかもしれません。ですが、わけを知ったら、とてもかれらのことを笑うことなどはできなくなることでしよう。かれらがいるのは、こわいこわい、ほんとうにこわい、まっくらな夜の底。出口もわからない、どこにいるのかもわからない、悪夢のような、夜のやみの世界なのですから！

「ねえロビー、みんなでそとに出たら、まず、どうしよつか？」

その声をかけたのは、ライアンでした。ライアンはロビーにぴったりとよりそって、トンネルのさきにつづく深くくらやみのことを見すえながら、ロビーに話しかけていたのです。

「ぼくねえ、いいこと考えちゃった。おぼけのかっこうをして、フォクシモンたちの村に、ぼけて出るってのはどうかな？ ふふふ、みんな、びつくりするよー。まさかかれらも、ぼくらがまた、ここからぬけ出して、しかえしにやってくるだなんて、思っていないだろうから。」ライアンはそういって、にこにこ笑いました。

「そうだ、火の力をかりて、火の玉も作ってやろう。それで、あいつらのしつぽを、ちりちりにこがしてやるんだ。それから……」

なにかまたもやライアンは、すごくこわいことを考えているようですが……。しかし、こんなに暗くてこわいところにいるんですもの、ライアンの気持ちも、わかつていただけるかと思えます。ちよつと前までは、ライアンもとっても強気でいましたが（そ

これは前の章の終わりを見ていただければよくわかると思います、れいせいになつて今のげんじつをまのあたりにしてみると、やつぱりライアンだつて、ちよつぱりこわいのでした（ですからこんないたずらのことを考えて、気持ちをおちつかせようとしていました。もつともライアンの場合は、ふだんからいつも、そんなことを考えているようでしたが……）。

いつぽうロビーの方は、もとよりあんまりおしやべりなせいかくではありませんでしたので、それで気持ちをまぎらわすというようなことも、できませんでした。小さなライアンによりそわれて、なんとかたよりのあるところを見せたかったです、やつぱりなかなか、そううまくあいにもいきません。ロビーだつて、やつぱりライアンと同じに、こわかつたのです。

ですがふたりは、こわがつているばかりでもいられませんでした。とにかく今は、ベルグエルムとフェリアルふたりを見つけることが、なによりもだいじなことでしたから。

「ぼくたちがいたのは、肉料理の部屋とデザート部屋だった。だから、まだ同じような名まえの部屋があつて、ふたりもきつと、そこにいるんだと思うんだ。」ろうかを進んでいきながら、ロビーがライアンにいました。

「たぶん、魚料理の部屋とか、サラダの部屋とかじゃない？」ライアンが、じょうだん

まじりにそうこたえました。

「きつと、このへんてこな部屋の名まえは、レストランのメニューになぞらえてつけられてるんだと思うよ。もしそうだとしたら、ぼくたちが、そのごちそうってことになる。」ライアンがそういつて、ロビーの顔を見上げます。

「じゃ、じゃあ、そのごちそうを、食べにくるやつがいるってこと？」ロビーがあわてて、つづけました。「たいへんだ！ 早くみんなを見つけないと！ 食べられちゃったらどうしよう！」

さあ、ここにきて、この暗いトンネルの中にまた、新しいきょうふが生まれてしまいました！ そのためロビーとライアンは、このさき、自分たちが考えついてしまったその未知なるかいぶつにおびえながら、トンネルを進んでいくことになってしまったのです。ですが、それがかえつて、ふたりの気持ちを強くさせました。もうここまできたら、こわがっている場合ではありません。もとより、逃げることも、ひきかえすことだって、できませんでしたから。

もしかれらがふたりではなくて、ひとりきりだったのなら。もう心はとづくに、おれまがつてしまっていたことでしょう。かれらは今、仲間がそばにいてくれることを、心からかんじやしました。そしてふたりは、仲間を助けるそのけついを胸に、ロビーは剣をにぎる手に力をこめて、ライアンはロビーの服をつかむ手に力をこめて、このさきの

見えない暗い暗いやみのトンネルの中を、ふたたびつき進んでいったのです。

しばらくいくと、暗いろうかはようやく、右におれまがついていました（ライアンのいたデザートの部屋には、ほかの出口はありませんでした。ですからふたりは、そこからまっすぐひきかえして、肉料理の部屋へとつづく左への分かれ道をそのまま通りすぎて、つづくトンネルをまっすぐ進んでいったのです。そこからここまでやってくるのに、ずいぶんとまっすぐに歩きつづけましたが、ようやくここで、その道が右におれまがついたというところだったので）。はやる気持ちをおさえながら、ふたりはろうかのかどからそれぞれの顔だけをちよこんと出して、さきのようなすのぞきこみます。ろうかはそこからまた、まっすぐにのびていました。ですがそのすこしさきで、このろうかは、いくつかの分かれ道へとえだ分かれしていたのです。

「分かれ道だ。」

剣を手にしたロビーが、つぶやきました。

「どつちにいったらいいんだろう？」

ふたりは分かれ道のまん中までやってきました。道は星のようなかたちに分かれています、自分たちがやってきた道をいれると、全部で五つに分かれています。しかもその全部が、さきを見通すこともできない、まっくらなやみの中へとぶきみにつづいて

いました。

さて、こまりました。ふたりはいつたい、どうするのでしょうか？（剣をたおして、たおれた方に進む……、というのでは、いくらなんでもあてずっぽうすぎますし。）さあ、ここはロビーとライアン、ふたりのちえと力をあわせるときでしょう。

「ロビーのふしぎな力を使えば、正しい道がわかると思うよ。」ライアンが、ロビーの服をちよいちよいとひっぱりながら、いいました。「ぼくを見つけたときも、そうだったんでしょ？ ベルグとフェリーがどっちにいるか？ なにか感じない？」

ロビーはちよつとこまりましたが、なんとかがんばつてみようと思いましたが、ほんとうは、自分からやろうと思つてできるようなことでもありませんでしたが、そんなこともいつていられません。ロビーはベルグエルムとフェリアルのことを思いながら、じつと、ふたりのいる場所のこゝろを感じ取ろうとがんばりました。

「はつきりしないんだけど、」しばらくして、ロビーがいいました。「こつちみたいな気がする。」

ロビーはそういつて、道のひとつをゆびさします。

「ほかの道は、なんだかみんな、さきにおぼけが待つているみたいだもの。こつちの道からは、ふたりのいるような感じがする。こつちも、こわい道であることに、ちがいはないんだけど……」

「さすがロビーだね。ぼくもまったたく、同じ意見だよ。」ロビーの言葉に、ライアンはにつこり笑って、ロビーの腰をぼんとたたいていいました。っていうか、ライアンも同じ意見？ なぜかライアンははじめから、ロビーのしめしたその道が、正しい道だと思っていたみたいです。いったいなぜ？

「ぼくも、その道がいいと思うよ。風の流れにきいてみても、上からの風が、そつちから吹いてきているし、ぼくの持つてる親クルツポーも、そつちの方をさしているしね。」さて、この夜のやみにつつまれたくらやみの中の世界は、どうやら地面の下の世界であると思われました。こんなに広くてまっくらな、夜の底のような場所ですもの、ふつうに考えれば、地面の下だと思えますよね。そしてじつさい、地面の下だったのです。

ですから、そこに出る出口は上にあるはずです。そしてこれで、ライアンの言葉にもなつとくがいくわけでした。出口のことをさがしているのであれば、地面の上から吹いてくる風のことを読んで、追っかけていけば、しぜんとそこに近づいていけるといっわけだったのです。さすがはライアン（ちなみに、ここが地面の下だということは、ロビーとライアンのふたりにも、もうわかっていました。ロビーはちよつかんのにわかつたみたいですけど、ライアンの場合は風の精霊の助けをかりて、風の流れを読んで、ここが地面の下だとわかつたみたいです。さすがはロビーとライアン）。

っていうか、親クルツポー？ それってなに？

「親クルツポー？ それってなに？」

ロビーもまったたく、みなさんと同じ言葉をかえました。それに対してライアンは、にこにこしながら、いつものいたずらっぽいしゃべり方でこたえたのです。

「いつ、発表しようかと思ってただけど、じゃあ、いよいよおひろめだね。」ライアンはそういって、胸のポケットにはいつている小さななにかをロビーに見せました。

「じゃーん！ これだよ。」

ロビーがのぞきこむと、ライアンの胸ポケットから、ちよこんとなにかが顔を出していました。そしてよく見てみると、それは小さな、白いはとのおもちやの頭だったのです。

「これは、親クルツポー。ぼくの目ざまし時計についてたやつだよ。」

あのやかましい、はとの目ざまし時計！ そう、これははぐくみの森の入り口で野宿をしたときに、ライアンのことを起こしていた、あの目ざましはと時計についていた、（口も悪くてにくたらしい）はとのおもちやだったのです。

「これはねえ、目ざましのほかにも、べつの使い道があるんだ。こいつは、これについてる子どものはと、子クルツポーのいるほうこうを、頭のむきで教えてくれるんだよ。ちよつと、やってみせようか？ たとえばね、」ライアンはそういって、はとのからだの横についている小さなねじを、ちよつとだけ動かしてみせます。

「このねじを、さがしたい子クルツポールの番号にあわせると、親クルツポールの頭が、その子クルツポールのいる方をむくってわけ。ほんとはこれ、子どもがかくれんぼあそびのときなんかを使う、おもちゃなんだけど。」

ライアンがはとのおもちや（親クルツポールです）を手に取ってかざすと、はとの首の部分ぐるりとまわって、ロビーの方をむきました。

「今は、一番の番号にあわせただ。全部で五番まであるんだけどね。」ライアンはそういうと、ロビーの服のポケットの中に手をつつこんで、その中からなにかを取り出してみせます。そしてポケットの中から出てきたのは……、そう、ライアンの言葉にあった、その子クルツポールでした！

なんとライアンは、みんながばらばらになつてしまふ前、あのフォクシモンたちの村で、あらかじめ、みんなの服のポケットの中に、この子クルツポールのことをこっそり入れておいたのです！ ロビーの服のポケットにも、そしてベルグエルムとフェリアルルの服のポケットにも。ですから今ライアンは、ベルグエルムとフェリアルルのいるほうのことを、自分の胸ポケットにしのばせていた親クルツポールのことを使つて、知ることができていました。なんて、ねまわしのいいこと！

「こんなのが、ポケットにはいつてたんだ！ ぜんぜんわからなかった！」ロビーはすごくびつくりして、その子クルツポールのことをながめ渡しました。それはピーナツツの

つぶひとつほどの大きさで、なるほど、こんなのがポケットにはいつていたとしても、ちよつとさわつたくらいではぜんぜん気がつかないのも、むりはありません。そしてその子クルツポーのおなかには、ライアンのいう通り、一番という番号がついていました（ところで、ポケットにこつそりこんなものをいれておくなんて、まるでだれかみたいじゃありませんか？ そう、ライアンのお父さんのメリアン王に、そっくりです！ やっぱり、親子なんですね）。

「じゃあライアンははじめから、フォクシモンの人たちがぼくたちのことをだまして、ぼくたちをこんな目にあわせるつもりだったんじゃないか？ って思ってたの？」

ロビーがたずねました。このロビーの言葉は、半分だけあたりでした。ライアンはフォクシモンたちが自分たちのことをだまして、なにかの悪だくみをしようとしているんじゃないか？ というよそうはしていましたが、まさかこんなところにはらばらにして放り出していくだなんて、考えてもいないことだったのです（もつとも、そんなことはだれにだつて、わかるはずありませんでした）。ライアンはあくまでも、なにかのやくに立つんじゃないかと思つて、この子クルツポーのことをみんなのポケットに置いておいたのです。それが今、自分でもびっくりするくらい、やくに立っていました。

「そ、そうだね、うん。そう思っていたよ。」ライアンはロビーのといかけに對して、そうこたえてみせました。もちろんこれは、ライアンの強がりです。だつて、そういつた

方が、かつこよく思われますもんね。ほんとうはライアンは、あのときは森ペンギンのかたちをしたクリームイリやき菓子のもので、頭がいつぱいでしたけど……。まあ、このじじつのことについては、ふせておきましょう。

「ライアン、すごいー！」ロビーはとても感心して、思わずそういいました。「こんなにさきのことまで考えてるなんて！ ぼくはてつきり、あのときはお菓子のことばかり考えていたのかと思ってたんだけど、やっぱりライアンは、頭がいいなー！」

ライアンは思わず、ぎくつ！ としましたが、ここはもう、さいごまでおし通すしかありません。

「そ、そうかな。はは、は。」ライアンはそういつて、ひきつった笑みを浮かべながら、なんとかごまかしました。

さて、それはさておき。みんなを見つげるための心強い隊員（はどのクルッポー）が、これで正式に、このきゆうしゅつ隊の仲間に加わったわけです（隊員といえるかどうかはわかりませんが）。ライアンはベルグエルムのポケットには二番の子クルッポー、フェリアルルのポケットには三番の子クルッポーのことをいれておきました（残りのふたつは「よび」としてライアンが持っていました）。そのためロビーとライアンのふたりは、親クルッポーのねじを二番と三番にこうたいにあわせることをくりかえしながら、

つづくトンネルの中を、さらに進んでいったのです。

「ここが、どれだけ深いところなのか？ わかんないけど、」トンネルを歩きながら、ライアンがいました。「ベルグとフェリーがいるのは、上でも下でもないよ。このトンネルのさきの、どこかにいるみたいだね。」

ライアンのいう通り、はどの頭はたしかに、上でも下でもなく、すいへいをむいていきます（このはどの首は、上下左右、どのほうこうにもぐるぐる動くのです）。これは二番と三番、両方とも同じでした。そして首のむきも、これまた同じほうこうをむいていたのです。つまりベルグエルムとフェリアルのは、同じ高さのトンネルの、同じほうこうにいるってことでした。

「よかった。それなら思ったより早く、ふた리를見つけれられるかもしれないね。」ロビーはひとまずほっとして、ライアンにそういいます。

「ふたりでなかよく、手をつないで寝ていてくれたなら、さがすてまがはぶけるんだけど。まったく、せわがやけるよね、あのふたりは。」ライアンはクルツポアのむきをたしかめながら、ぶつぶつといました（ちなみに、ロビーはベルグエルムとフェリアルのはふたりが手をつないで寝ているところをそうぞうして、なんともふくぎつな気持ちになりましたが……）。

しばらくいっただとこで、つづく道がまた、三つに分かれていました（自分たちがやつ

てきた道をいれれば、全部で四つでした。それにしても、なんてふくぎつなめいろなんでしょう！)。そしてふたりはここでも、おたがいの力(とクルツポールの力)をあわせて、進むべき道をえらび出したのです。それから、どれほど進んだでしょうか？

道をゆくにつれて、ロビーの心がまたしてもさわぎはじめました。そしてこの気持ちは、さきほどライアンを見つけたときに感じたのと、同じ気持ちであったのです。このさきに、とてもだいいじななにかがあるという感じでした。さあ、こうなったらばんばんざいです。ベルグエルムかフェリアルのどちらかが、近くにいるにちがいありません！(さて、どっちでしょう？ ひよつとしたら、ふたりいつしよかも。)

「このさきだ！ ふたりのうちのどちらかか？ それともふたりともか？ わからないけど、きつとこのさきにいる！」ロビーがさげびました。

「ほんと？ やった！」ライアンもうれしそうにいいました。

「ほんとうに、魚料理の部屋だったりしてね。」

ライアンがじょうだんっぽくいった、そのおりもおり。ろうかのかべのまん中に目をやったふたりは、そこに、こんな文字が書いてあるのを見つけたのです。

「魚料理の部屋」

ついにきました、魚料理の部屋！ さいしよはじようだんでそういつただけでしたのに、まさかほんとうに、出てきてしまうとは！（そしてその言葉のあとには、やつぱり白いペンキの矢じるしがひっばってあって、つづくろうかのさきをしめしていました。）

「ロビー！ ほんとうに魚料理だよ！」ライアンがびつくりして、さげびました。

「やつぱりこのさきに、ベルグかフェリーがいるんだ！」

ふたりはもう、走り出していました。そしてそこからすぐのところまで。石のろうかはひとつの石のアーチへと、つながっていたのです。そしてそのアーチの上には、やつぱり白いペンキで、お待ちかねの言葉、「魚料理の部屋」と書いてありました。

「ここだ！」ロビーは剣のあたりをかざして、その部屋の中をのぞきこみました。そしてロビーはまっさきに、その部屋のまん中におおむけにたおれているひとりのその人物のことを、見たのです。

「ベルグエルムさんだ！」ロビーがさげんで、かけよりました。

「ベルグ！」ロビーに負けないくらいはやく、ライアンもかけよりました。

「しつかりしてください！ だいじょうぶですか！」

ロビーはベルグエルムの肩をつかんで、けんめいにゆさぶりました（もし起きている人にこれをやったら、目まいを起こしてしまいそうなくらいに）。

「う……、うむ……」ベルグエルムが、寝ながらうめきます。よかった！ どうやら自

分たちと同じに、ぶじであるみたいです。

ですが、ベルグエルムはなかなか、目をさましてくれません。これはじつは、フォクシモンたちの村で飲んだ、あの宝石の実のくだもの酒のせいでした。みんながいしきを失ってしまったのは、あのお酒にはいつていた、眠りぐすりのせいだったのです！

このくすりはお酒といっしょに飲むと、とてもよくきくのでした（ですからフォクシモンたちは、旅の者たちにむりにお酒をすすめました）。いっぽうロビーとライアンは、お酒ではなくてジュースでしたので、ベルグエルムとフェリアルほどには、くすりはきいていなかったというわけなのです（もつともライアンの場合は、くすりいりのジュースをがぶがぶ飲んでおりましたので、やっぱりそうとうに、くすりがきいていたのです）。

いっぽうロビーの方は、さいしょからずっとおかしな感じを受けつづけておりましたので、とても飲み食いをするような気分ではなかったのです。そのためロビーは、ジュースもあんまり、飲んでいませんでした。つまりこういったわけで、ロビーがだれよりもいちばん早くに、目がさめたというわけだったのです。ほんとうはくすりがしつかりきいていれば、いちにちたつても、とても目がさめるようなものではありませんでしたが、ロビーが目をさますことができたのは、ほんとうに運のいいことでした。まさかフォクシモンたちも、ロビーが目をさまして歩きまわり、ほかの者たちのことを起こ

してまわるなんてことになるなどは、思っていなかったことでしょう。

ちなみに、このくすりは飲んだ量にかかわらず、いしきを失うまでに、ひとしく十数分くらいかかるものでした。そのためフォクシモンたちは、かんぱいのあと、しばらくえんかいかいをつづけてごまかす必要があったのです。

「う、む……、すみません、父上……。もう、おねしよはしませんから……」

なんだかベルグエルムは、むかしの夢を見ているようですが……。とにかく早く、起こしてやらないと。

「しようがないな。よし、ここはすこし、荒っぽくいくしかないね。」そういったのはライアンでした。いったい、どうするつもりなのでしょう？（なんだかともつても、いやなよかんがするのですが……）

それからライアンが取り出したのは、あのはとの目ざまし時計だったのです。なるほど、人を起こすのには、目ざまし時計がぴったりですものね。もつとも、それがふつうの起こし方であるのなら、問題はないんですけど……（ライアンのせいにかくからといって、ふつうに起こすとは思えませんが）。

そしてやつぱり、みなさん（とわたし）のよそう通り。このあとベルグエルムは、とつてもたいへんな目にあうことになってしまうのです。

ライアンは目ざまし時計のはとのおうちに、親クルツポーのことを取りつけました。

ここまでは、前に使ったときと同じです。しかしライアンはそれから、親クルツポークちばしを、きんぞくでできた、なんともおそろしくちばしと取りかえました！（いったいどこから、こんなものが出てきたのでしょうか？）そしてぜんまいをまけるだけめいっぱいまいて、さらに時計のうらについているダイヤルを、「さい強」にあわせたのです（これが動いたら、いったいどうなってしまうのか？ うくん、考えただけでもおそろしい）。

「これで、ためしてみよう。前に一回、おしおきでためたことがあるんだけど、また、うまくいくかなあ。うふふ、楽しみ。」

そういつて、ライアンは一分ごとに目ざましの時間をあわせて、それをベルグエルムの顔の横におきました。そして、一分ごと……。ああ、さいなんなベルグエルム！ あとは、みなさんのごそうぞうの通りです。

「ぎゃあああー！」

こめかみをものすごいいきおいでつつつきまわされたベルグエルムは、もう、てんじょうまでとどくかというくらいに飛び上がってしまいました。いくらりっぱなウルファの騎士であるベルグエルムだとしても、これではたまりません。

「なんだなんだ！ なにごとだ！」

ベルグエルムはわけもわからず、手をふりまわして、じたばたとあたりを走りまわつ

てしまいました。そしてそれからようやくのこと、かれはロビーとライオンのふたりが自分のそばに立っているということに、気がついたのです。

「おはよう、ベルグ。いい朝だね。」ライオンがベルグエルムに手をふって、まんめんの笑顔でいいました。

「ライオン！ それに、ロビーどのも！ よかった！ ふたりとも、ぶじで。」ベルグエルムがロビーとライオンのふたりの方に近よって、素晴らしいです（その足はもう、ふらふらになっていましたけど）。

「ベルグエルムさんこそ、ぶじでよかった！ 今は、ぶじじゃないみたいですけど……、とにかくよかった！」ロビーがちよつとごまかしつつも、ベルグエルムの手を取ってよろこびました。

「なんだかとおつぜん、かみなりにうたれたような感じがしたのですが……」ベルグエルムがずきずきと痛む頭をおさえながら、つづけます（どうやらかれはまだ、自分がなにをされたのか？ 気づいていないみたいです。とりあえずここは、いわないでだまっておいた方がよさそうですね。読者のみなさんも、どうかだまっついてください。あとで怒られそうですから）。

「ここはどこです？ なぜわたしたちは、こんなところにいるのでしょうか？」ベルグエルムがあたりのようすをきよるきよるとながめ渡しながら、たずねました。

「ぼくたちは、フォクシモンの人たちにだまされたんです。ここがどこなのかは、ぼくたちにもわかりません。でも、ひとつだけいえるのは、ここがよくない、危険な場所だつてことです。とにかく早く、そこに逃げ出さないと。でも、まだフェリアルさんが、見つかっていないんです。」

「フェリアルが！」ロビーの言葉に、ベルグエルムはびつくりしていました。「まだ、ここはどこかにいるのですか？」

「たぶん、もう近くまできていると思うんですけど……、どこにいるのかまでは、まだわからないんです。早く、見つけてあげないと。」

それからロビーとライアンのふたりは、今のじょうきょうのことをできるだけくわしく、そして手早く、ベルグエルムに説明してきかせたのです。剣のあかりのこと。ライアンの、みんなのいるほうこうのことを教えるクルツポールの力のこと。へんてこな名まえのそれぞれの部屋のこと。それにこれはまだ、そうぞうのはんいでしかありませんでしたが、ここにはおそろしい、かいぶつがいるかもしれないということも。

「このベルグエルム、一生のふかく！ ロビーどののくことをお守りすると、かたくちかつたというのに！」

ベルグエルムはそういつて、床にひざまずいて、深々と頭を下げてしまいました。かれらのような騎士というものは、めいよをたいせつにするのと同じくらい、みずからの

しつぱいを心からくやむのです。とくにベルグエルムは、騎士の中でもことさらにほこり高く、まじめなせいかくでしたので、なおさらでした。自分がぶざまにも、フオクシモンたちにあざむかれてしまったということが、ゆるせなかつたのです。

「このベルグエルム、どんなばつでも受けるかくごであります。さあ、ロビーどの。なんなりとお申しつけを！」

「そんなことはいいですから。ぼくは、だいじょうぶです。」ロビーはそんなベルグエルムのことをなだめながら、あたふたとこたえました。「こうしてぶじにいられたことだけで、もう、じゅうぶんじゃないですか。ベルグエルムさんのせいじゃありませんよ。」

ベルグエルムはロビーの言葉と心づかいに、深くかんじやしました。

「しつぱいは、だれだつてするからね。しつぱいをこわがってたら、なんにもできないよ、ベルグ。たいせつなのは、そこらなにを学ぶか？ ってことだぞ。」ライアンも、ベルグエルムの肩をぼんとたたいて、そういいます（まるで、せいとのことをさとす先生みみたいに）。

「それはそうと……」さいごにライアンが、にこにこした顔でいいました。「ぼくでよかつたら、いろんなばつを考えてあげられるけど、どう？」

ライアンの言葉に、ベルグエルムはあわてて手をふつてこたえました。

「いや、けつこう！ もうじゆうぶん、はんせいしたよ！」

とにもかくにも、これで三人の仲間たちのことが集まったわけです。残るはフェリアルただひとり。いったいどこにいたのでしょうか？

ロビーの感かくでは、もうそんなに遠くではないと思われました。ライアンの親クルツポーがむいているのは、この部屋のさらにむこうがわの、やみの中です。そこには今までのふたつの部屋（肉料理の部屋とデザートの部屋のことです）には、なかったものがありました。それはそのさきにつづく、もうひとつのろうかへとつながっている、べつの入り口だったのです。

「あの入り口の、むこうだ。」ライアンが親クルツポーのむきをたしかめながら、いいました。「ロビーのよそうだと、フェリーのいるところまでは、もう、すぐみただね。早く、助けにいつてあげよう。」

ライアンはそういういながら、親クルツポーに取りつけるきんぞくせいのかちばしを、服のすそで、きゅつきゅつとみがき上げました（どうやらそろそろ、ふたり目のぎせい者があらわれそうな感じですよ……）。

「あの道のむこうに、フェリアルさんがいる。そう思う。」ロビーが、まっくらならうかへとつづくその石のアーチの入り口のことをながめながら、つづけました。「でも、あ

そこはすごく、いやな感じもする。さっきの分かれ道でも感じたけど、ほんとうに、さきにおぼけが待ってるみたいな感じなんだ。でも、いかなきや。」

そういつてロビーは、劍のあかりをかざして、そのまっくらなろうかのさきのことをてらし出そうとしましたが、このろうかはことさらに暗く、この劍のあかりくらいでは、さきはまったく、見通すことができなかつたのです。

「まさかほんとうに、ぼくらの考えたかいぶつがいるのかな？」ライアンがさらにつづけます。「でも、まあ、フェリーを放つてはおけないし、いざとなったら、今はベルグがいるからね。なんとかしてくれるんじゃない？」

いわれてベルグエルムは、ちよつとたじろぎましたが、すぐに気を取りなおして、劍のつかをにぎりしめていいました。

「どんなかいぶつがあらわれようと、わたしにおまかせを。もうにどと、しくじりません。」(ちなみに、かれの劍をふくめて、ベルグエルムのにもつもみんな、かれのすぐそばにおいてありました。やっぱりあかりをとすための道具だけは、持ち去られておりました。)

そしてベルグエルムがそういった、そのときのこと。

「ぐおおお……」

ひくく、くぐもつた、なんともおそろしげなうなり声！ その声がまさに、その石のアーチのむこうがわから、きこえてきたのです！

「な、なんだ？」みんなはびつくりして、思わず身がまえました。そしてそうするうちに。またしても、そのおそろしいうなり声はひびき渡ったのです。

「ぐおおお……、がああ、ぐおお……」

その声は、なにかとんでもなく大きな生きものの口から、出されているかのようにでした。いったい、どんなやつなのでしょう？ ですがみんなの心は、そんなことなどにはむけられなかったのです。どんなかいぶつがこのさきにいるのか？ そんなことは今のかれらには、このさいたいした問題ではありませんでした。つまり、そのかいぶつにおそわれているかもしれない人物。そう、フェリアルルのごとで、かれらの頭はもう、いっぱいになってしまっていたのです！

「フェリアルルさん！」「フェリアルル！」「フェリー！」

みんなはいっせいにさげぶと、いちもくさんに、そのろうかにむかつて走り出しました！ フェリアルが食べられちゃったら、たいへんです！ 急がないと！

あかりを持つロビーがいちばんになって、みんなはその暗いろうかの中を、あらんかぎりのはやさでかけぬけていきました。心配とあせりで、しんぞうはばくばくとなりひびいております。逃げ逃げ！ みんなはただひとつの思いだけで、このくらやみの中をかけていきました。ろうかはしばらくまっすぐいって、そこから左にまがっております。

「ぐおおお……」

かいぶつの声が、だんだん近くからきこえはじめてきました。もうすぐそばにまできているみたいです。ベルグエルムが腰の剣をぬき放ちます。ベルグエルムはかいぶつがその目にうつったしゅんかんに、ひとたちあびせてやろうと、心にきめていたのです。そしてついに、そのろうかはひとつの石のアーチにつながりました。そしてそのアーチの上には、こんどはこんな言葉が、書いてあったのです。

「オードブルの部屋」

オードブルとはレストランなどでメインの料理がはじまる前に出される、さいしょの

お料理のことです。つまり（そのルールにしたがうのなら）ここが、いちばんさいしょの部屋ということになるようでした。どうやらロビーたちは、この部屋からじゅんばんんに、ひとりずつおいていかれたみたいなのです（オードブル、魚料理、肉料理、そしてさいごは、デザートというわけです）。

「ここだ！ フェリアルさんは、ここにいるー」ロビーがさげんで、まつさきに部屋の中にふみこみました。そこでロビーが見たものは……。

で、出たー！

部屋の中にいたのは、てんじょうに頭をこすりつけんばかりに巨大な、まつ黒でまんなるの、いつびきのおたまじやくしのようなかないぶつだったのです！ そしてそのかないぶつが、今まさに！ 部屋のまん中の床の上にあおむけにたおれているフェリアルにむかって、おそいかかろうとしているところでした！

「この、ばけものめ！」ベルグエルムがでんこうせつか！ まさにいなずまのごとくいきおいで走りこみ、かいぶつに剣をふりおろしました。しかし！

「うわっ！」ベルグエルムの中からだは、すってんころりん！ かいぶつの中からだをすりぬけて、そのままバランスをくずして、むこうがわの床にころげてしまったのです！

かいぶつはなにをされたかも気づいていないようすで、その頭をロビーたちのいる方にむけました。

「なんだあー？　ぐおおお……、ひかりー、光だあー！」かいぶつが、ロビーの持っている剣の光のを見て、うめきます。

「目が、目がいたーい！　おまえらあー、ささげものだなー？　な、なんでささげものが、光を持つているー？　さてはー、き、きつねたちめー、うらぎつたなー！」

かいぶつはごによごによとした声でそういうと、水かきのある小さな手で、しきりに目のあたりをこすりました（もつとも、小さな手といっても、それはかいぶつのその巨大なからだとくらべたららの話です。じっさいは手だけでも、ロビーのからだよりもずつと大きいのです。このかいぶつがどんなに大きいか？　よくおわかりでしょう）。

どうやらこのかいぶつは、光がにがてのようです（ですからこんな、まっくらな地下の世界にいるのでしょうか）。それとやっぱり、このかいぶつはきつねの種族であるフオクシモンたちのことを、よく知っているようでした。そしてフオクシモンたちが、ロビーたちのもつからあかりをとすための道具をみんな持ち去っていったわけが、これでわかりました。かれらはこのかいぶつと手をくんでいて、それで、このかいぶつのできる光を出すための道具を、持っていったというわけなのです。

さらに、かいぶつのいったささげものとは、ほかならぬロビーたちのことでした。そ

う、ロビーたちはこのかいぶつに「さきげられる」ために、この場所に放り出されていったのです！

「せ、せつかくこれから、ひさしぶりのフルコース、た、食べようつとときにー、じゃー、まーを、するなあー！」

かいぶつはそういつて、ぶんぶん怒りました。そしてかいぶつは、そのからだのうしろに生えているちよこんとした小さなしっぽをふりふり動かしながら、ロビーとライアンのふたりの方にむかって、まっすぐつき進んできたのです。どうやらロビーの持っている剣のあかりが、かいぶつには、目ざわりでしかたがないようでした。

「そんなものー、このおれさまがー、びったんばったんにしてやるぞー！」

かいぶつの口が、がばつ！ と大きくひらかれました！ なんて大きな口！ ほとんど、顔の大きさといっしょです。その口の中はまっ黒で、なんにも見えませんでした。歯もなければ、舌もないのです。いったい中は、どうなっているんでしょうか？

でも、そんなことにきょうみを持つている場合ではありません！ このかいぶつはとても足がおそかったのですが、それでもロビーたちからかいぶつまでのきよりは、わずかでしかありませんでしたから。早く、なんとかしなければ！

「なにがフルコースだ、こいつめ！ そっちこそ、おたまじゃくしのまるやきにしてやるー！」

ライアンが怒ってそういって、その両手をかいぶつにむかってかざしました。すると……。

ごおおお！ ライアンのまわりの空気がうずをまきながら動き出し、そしてそのうずは、ライアンの手のひらから、いっきに、かいぶつへとむかって放たれたのです！

しゅごごごごおー！

もうライアンは怒りまんたんでしたから、そのすさまじいこと！ いぜんセイレン大橋の上で黒騎士たちにむかって、同じわざを使ったことがありましたが、あのときは雨にじやまされて、ほんらいの力の十ぶんの一ほどの力も出ていなかったのです（せいかくには、百分の一くらいのみ力しか出ていなかったわけです）。それはこのおそろしいほどのいりよくの風のうずまきのことを見れば、いちもくりようぜんでした（ほんとうにライアンは、見た目とちがっておっかない……。ほんとうは、いい子なんですけどね。とりあえず、ライアンが敵でなくて、ほんとうによかった！）。

空気のうずはたつまきとなり、ごおごおというおそろしいうなり声とともに、まつすぐかいぶつにむかっておそいかかりました！ これではいくら、このかいぶつが巨大であるとしても、ただですむはずがありません。しかし……。

かいぶつは、まったくもってどこ吹く風！ たつまきはかいぶつのからだをすりぬけて、そのむこうがわのてんじょうにあたって、どごおくん！ はじけてしまいました！（おかげで、かいぶつのはんたいがわにいるベルグエルムが、ちよつととばつちりを受けましたが。）

「うそー！ なんでー！」ライアンはもう、びつくりぎようてんです。それもそのはず。このわぎはかれのとおきのおきのわぎのうちの、ひとつでしたから。今までどんな手にだつて、きかないためしなどはなかつたのです。それがぜんぜんきかないのですから、ライアンがおどろいたのも、むりはありません（ちなみに、かこにこのわぎを受けた相手は、それつきりにどと、ライアンの前にすがたをあらわそうとはしませんでした。そのくらい、こわかつたのです）。

「こんなー、そよ風ー、おれさまには、きかないぞー！」

かいぶつはそういつて、ライアンにむかつて手をふりかざしました！

「うわっ！」

かいぶつの手が、ライアンの腰にあたります！ ライアンはそのはずみで、部屋のすみっこにまではじき飛ばされてしまいました！ こつちのこうげきはすりぬけてしまふのに、相手のこうげきはあたるなんて！ そんなのずるい！

ですけど、そんなもんくをいつている場合ではありません。かいぶつはそのまま、こ

んどはロビーの方にむかっておそいかかっていたのです！

「ライアン！ だいじょうぶ？」 ロビーがさげびました。

ライアンは腰をさすりながらなんとか起き上がると、ロビーにむかってさげんでかえします。

「ロビー！ かいぶつがむかってくるよ！ ぼくのことはいいから、逃げて！」

ロビーはあわてて、かいぶつの方にむきなおりました。もう目の前にまで、かいぶつの巨大な、まっ黒いあなのような口がせまってきております！

「こいつめ！ よくもライアンに、ひどいことを！」

ロビーはそういつて、その手に持ったあかりのともった剣のことを、かいぶつの顔にむけてつきつけました。しかし、いったいどうやったら、このかいぶつをやっつけることができるのか？ それはロビーにも、ぜんぜんわからないことだったので。ひとつだけたしかなことは、このかいぶつが、光をとてもきらつているということでした。ですから、考えられるしゅだんはただひとつ。このかいぶつに剣の強い光をあびせて、そのすきに、みんなといっしょに逃げるのです。でも、そんなにうまくいくのでしょうか？

剣をかいぶつにむけながら、ロビーはセイレン大橋の上のことを思いかえしていました。あのときのような強い光が、なんとか出てくれれば。ロビーは強く、そう願いま

した。お願いだ！ 光ってくれ！ しかし、いつもいつも、そううまいぐあいにいくというわけではなかったのです。

剣はあいかわらずぼおーつとかがやいているばかりで、強く光ってくれません。もうかいぶつの方も、このていどの光などにはなれてきてしまったようです。かいぶつはひるまずに、ロビーの方にむかってきて……、そのみじかい手で、ロビーの剣にいちげき！

剣は、ぼしーん！ とはじき飛ばされて、部屋のむこうの床に、かららーん！ 大きな音を立てて落っこちてしまいました！

「ロビーどのー！」「ロビーー！」

さあたいへん！ 剣がなくなってしまうっては、もうロビーに身を守るすべはありません。もうかいぶつの口は、すぐそなのです！ ロビーはぎゅつと目をつぶってしまいました。このまま食べられちゃう！ ロビーはそう思いました。

しかしつぎのしゅんかん。ロビーは思わぬ声をきいたのです。それはかいぶつの口から出た、いがいな言葉でした。

「ぎゃああー！ い、いたーい！ いたーい！」

なんと！ かいぶつがその手をおさえて、その大きなからだのことをよじらせて、わあわあくるしがっているではありませんか！ これはいったい！ どういうことなの

でしょう？

ロビーはふしぎに思いました。ですがこれは、大きなチャンスです！今のうちに、みんなといっしょに逃げなくちゃ！ロビーはすばやくけつだんしました。

「ライアン！ベルグエルムさん！」ロビーはせいっぱいの声でさげびました。

「今のうちに、逃げるんです！フェリアルさんをつれて！」

ロビーはそういつて、ライアンのもとにかけよりました。ロビーはなによりもまず、ライアンがけがをしていないかどうか？たしかめたかったです。

「ライアン、けがは？」ロビーが心配して、ライアンのからだをささえながらいいました。

ライアンはかいぶつの手にうたれ、床に腰をうちつけていましたが、さいわいいたしたことはなかったようです。

「だいじょうぶ、歩けるよ。」

「よかった！」ライアンの言葉に、ロビーはとりあえずほっとしました。

「ありがと、ロビー。でも、今はそれより、早く逃げないと！あのかいぶつが、またむかつてこないうちに！ベルグ！フェリーをたのんだよ！」

さあこれ以上、こんなかいぶつのことを相手にしているわけにはいきません。とにかく、かいぶつがひるんでいる今のうちに、ここから早くはなれなければ！みんなは部

屋のむこうにもうひとつの出口があるのを見つけると、床に飛ばされた剣をひろって、そこからいちもくさんにかけ出ていきました（眠ったままのフェリアルはどうにも起きませんでしたので、ベルグエルムが急いでおんぶしていきました）。

みんながろうかに走り出たところで、うしろの部屋からかいぶつのおそろしいうなり声がかきこえてきました。

「ぐるるー！ おーのーれー！ よーくーも、やったなー！」

そして、なんてことでしょう！ かいぶつはその巨大なからだをへびのようにほそくのぼして、せまい石のアーチのむこうから、ロビーたちのことを追いかけてきたのです！

「うわっ！ 追っかけてくるよ！」ライアンがうしろをふりかえりながら、さげびました。

「まずい！ どこか、かくれられるようなところはないか！」ベルグエルムがあたりをすばやく見渡しながら、つづけました。

かいぶつはそのからだをよじらせながら、どんどん追いかけてきます（さっきのおたまじやくしみたいたいときとはちがって、こんどはとつても動きがはやいのです）。みん

なはとちゆうでいくつかの分かれ道をまがって、かいぶつのことをまこうとしましたが、かいぶつはそのたびに、みんなのいる方の道をたしかめながら、追いかけてきました。どうやらこのかいぶつは、目ではなくにおいで、みんなのことをたしかめているようです（このかいぶつに鼻があるのかどうかは、わかりませんでした）。

みんながまがりかどをまがるたびに、かいぶつはくんとくんとにおいをかいで道をたしかめながら、あとをついてきました。そしてとうとう。みんなはまつすぐなるうかのうちゆうで、かいぶつに追いつかれてしまったのです！

ばんじきゆうす！ もうどこにも逃げ場はありません！ まさかここまで、しつこいなんて！

ベルグエルムがフェリアルのことをかかえながら、かいぶつの前に立ちふさがりました。剣がすりぬけてしまうことはわかっていましたが、それでも、仲間のことを守ろうという気持ちと、騎士としての気高い心が、そうさせたのです。

「もとの暗がりへ帰るがいい！ わたしは白の騎兵師団の長、ベルグエルム・メルサルだ！ 仲間たちには、もう、ゆびいっぽんとて、ふれさせはせんぞー！」

ベルグエルムはかた手で剣をつきつけ、かいぶつにさげびました。しかしかいぶつは、まったく耳を貸しません。かいぶつはぶきみな笑い声を上げると、あざけるようにいいました。

「そんなー、ちやちな道具で、おれさまがたおせるとでも、思ってるのかー、笑わせるーなー！」

ベルグエルムはかいぶつの顔にむかつて、剣をつきさしました！　ですがやつぱり、剣はすりぬけてしまつて、かいぶつをさすことができません。もはや、どうすることもできませんでした。みんなはここで、このかいぶつに食べられちゃうんでしようか……？

もちろん、そんなわけがありません！　だつてまだまだ、この物語はつづくんですからー！（ここでみんなが食べられちゃつたら、あとに書くことがなくなっちゃいますから。）

そして、このさいだいのピンチのときからみんなのことをすくつたのは……、やはり、ロビーだったのです。

仲間の危険を前にして、ロビーの心はめらめらと、まるでほのおのようにさわぎ立ちました。なんとかしなければ、みんながやられてしまう！　ロビーの思いが今ふたたび、手にしたそのふしぎな力を持つ剣へと、ひびき渡つたのです。

剣はロビーの心をうつしたかのように、さらに明るく光りかがやき出しました。その光はまるで、ほのおがもえているかのように、ゆらゆらとゆらめいていました。ロビーは剣を強くにぎりしめました。そして自分でもむがむちゅうのままその剣をかまえる

と、ロビーは、このおそろしいやみのかいぶつのもとへとむかつて、走り出していったのです。

かいぶつが、ロビーに手をのばします！ ロビーのことをつかまえて、びったんばったんにしてしまつつもりです！ あぶない！ ロビーはかいぶつのその手にむかつて、力のかぎり剣をふりおろしました。ですがやっぱり、その剣はすりぬけてしまい……、いえ、ちがいます！ ロビーのふりおろした剣は、かいぶつのからだをすりぬけなかつたのです！

かいぶつの手は、剣に切られてまつぶたつ！ 床に落ちて、しゅうしゅうとまつ黒いきりになって、とけてしまいました！ そして切られたところからも、黒いけむりがしゅうしゅうと、吹き出していたのです。

「ぎ、ぎ、ぎやあああー！」

手を切られて、かいぶつはあらんかぎりの声でさけびました。そう、ロビーのこの剣は、このかいぶつのことを切ることできる、ゆいいつの剣だったのです！ そしてさきほど、このかいぶつがわあわあいつて痛がったわけも、このためでした。ロビーの持つこの剣を手ではじき飛ばしたときに、かいぶつは剣のやいばで手を切つて、けがをしたのです。

かいぶつはへびのようなからだをくねらせて、あばれまわりました。そのからだは、

ロビーの方にむかってきます！ ロビーははんしゃ的に、身を守るかたちで剣をふるいました。そしてこんどは、かいぶつのそのからだに、剣がめいちゆうです！ ぶしゆうー！ かいぶつのからだだからまっ黒いけむりがもくもくとあふれ出し、あたりはいちめん、けむりだらけになりました。

「早く、ここからはなれましょう！」ロビーがみんなにさげびました。もう、これではじゆうぶんでした。

かいぶつはまっ黒なけむりをもうもうと上げながら、その場にへたりこんでしまいました。みんなのあとを追いかけることも、もうできないでしょう。そのからだからはどんどんけむりが吹き出して、それにあわせて、かいぶつはどんどん小さくなっていききました。そしてみんなは、力のぬけたそのかいぶつのことをあとにして、そのまままっくらなろうかの中を、まっしぐらにかけていったのです。さいごにふりかえったみんなが見たものは、ちりぢりになって消えてゆく、かいぶつのそのさいごのすがた、そればかりでした（ここで読者のみなさんにだけ、お伝えしておきましょう。この「夜のかいぶつ」は、じつはまだ、死んではいかなかったのです。ですがかれはもう、もとのかいぶつとしては、にどと悪さのできないからだになってしまいました。

かれのからだは、やみとたましいのエネルギーによって作られています。それらのものがみんな、かれのからだからぬけ出したのです。そのけっか、かれはまっ黒な小さ

ないっぴきのかえるになって、どこかの暗がりの中へと、ぴよんぴよん、はねていくこととなりました。

今でも、このかつての巨大なかいぶつは、このいせきの地下のどこかにいるのです。ですが、もうにどと、かれのすがたを見る者もないことでしょう。

「ここまでくれば、もうだいじょうぶだ。」ベルグエルムが、みんなにむかつていいました。

さきほどの戦いのあと。みんなは暗いろうかの中をまつしぐらにかけつづけ、そしてようやくこの場にたどりつくことができると、両方のひぎに手をつけて、はあはあと息をととのえることができていたのです。

「なんだか、つきからつきへと、いろんなできごとがめじろおしだったね。」ライアンも「ふう。」と大きなため息をついて、つづけます。

「ベルグにフェリー。ふたりが見つかってよかったと思うひまなく、あのかいぶつだもん。これじゃ、キャンディーをなめてるひまもない。」

ライアンはそういつて、かばんの中からキャンディーのはいつたふくろを取り出しました。ですが……。

「あああーっ！」

ライアンがとんでもなく大きなさけび声を上げました！　いったいどうしたというのでしょうか？　まさかまた、べつのかいぶつがいた？　それともなにか、しんこくな問題でも起きたのでしょうか？

「ど、どうしたの？　ライアン。」

「なにかあつたのか？」

ロビーもベルグエルムも、びつくりしてライアンにたずねます。そして、ライアンの口から出た言葉は……。

「キャンディーが、われちやつてるー！」

そ、そんなことですか……。

じつはさつきかいぶつにはじき飛ばされたときに、かばんが床にうちつけられて、中のお菓子がみんなこわれてしまっていたのです（さすがにライアンも、さきほどはひじょうにピンチのときでしたので、お菓子のことを気にかけているよゆうすらありませんでした。それにライアンもあのいどのいちげきくらいでは、ぜんぜんかばんもだいじょうぶだと思っていました。が、どうやらライアンの見こみとはちがつて、かばんのうちどころは、かなり悪かったようです）。

「クツキーまで、こなごなだー！」

お菓子がなによりも好きなライアンですから、そのかなしみはたいへんなものよう

でした（自分の腰のけがのことなんか、どうでもいいようでした）。みなさんも、自分がたいせつにしているものがこわれちゃったとしたら、かなしいですね。フットボールの大会でもらったトロフィーだったり、たんじょうびのプレゼントでもらったしやしん立てだったり。ライアンの場合は、それがお菓子なのです。

ライアンは半分ベソをかきながら、こなごなになったキャンデーのかけらを集めると、それらをやけになって、全部まとめて、口の中に放りこみました。そしてライアンは、それらのキャンデーのかけらをばりばりとかじりながら、ぶんぶん怒って、こうさげんだのです。

「こうなったのも、みんな、フォクヒモンたちのせい啦！ このかたひは、ひっと、取ってやる！」

（ライアンの問題についてはべつのこととして）とにかくみんなは、これで大きなこんなんのときを乗り越えることができたわけでした。ほんとうに、あやういところでした。ライアンが腰をうったただけですんだのは、まこと、運がよかったというほかありません（それと、ベルグエルムがころげたうえ、ライアンのわざのとばつちりをちよつと受けたということも、いちおういれておきます）。そしてこのけつかをもたらししたのは、まったくもって、ロビーと、ロビーの持つ剣のおかげでした（もちろんベルグエルムや

ライアンもゆうかんでしたけど、こんかいばかりは相手が悪すぎでしたね。こうげきが通じないんじや、どうすることもできませんもの。

ですがじつさいのところ、どうやったら剣の力をのぞみ通りにひき出すことができるのか？ それはロビーにもわからないことでした（いつまたセイレン大橋の上でのときみたいに、ロビーののぞむ以上の強力な力を、生み出してしまわないともかぎりません）。みんなはロビーのこの剣のことについて、もういちどそれぞれの考えを話しあいましたが、けつきよくこんかいのように、ほんとうに剣の力が必要なときにかぎって、その力をためしてみるほかはないという、けつろんしか出なかったのです（ですが今は、これ以上のけつろんはないものと思われました）。

「じゃあこれからは、おぼけのたぐいはロビーのたんとうでお願いね。」さいごにライアンが、ロビーのからだをつつつきながらちやかしました。「それがいの相手は、ベルグとフェリーが、きれいにやっつけてくれるから。」

さて、このふしぎな剣のことについては、これでひとまずおしまいしておきましょう。となればもつかのところ、みんながまずやらなければならぬことは、ひとつでした。出口をさがす……、のはもちろんなのですが、その前に。

フェリアルくんを起こさなくっちゃ！

フェリアルはあのかいぶつとのたいへんな戦いのさなかにも、ぐーぐーいって、眠っ

たままだったのです（よっぽどお酒がきいていたんですね。飲みすぎたんでしようか？）。ここにどうしようしたのが……、そう、（みなさんお待ちかねの）ライアンのあの、はどの目ざまし時計でした！

ライアンはクツキーのかけらをばりばりかじりながら、かばんからその目ざまし時計をそつと取り出すと（この時計はとてもがんじょうでしたので、こわれていなかったのです）、そこに、よくみがかれたきんぞくせいのかちばしをつけた、親クルツポーのものを取りつけました（おそろしい……）。そしてそれからライアンは、またべつのあるものを取り出しましたが、それがいったいなんなのか？ 著者のわたしにもわかりません。ですがロビーだけは、それがなんなのか？ もくげきしたようでした。

「ちよつとベルグは、むこうむいててくれる？」ライアンが、にこにこしながらいきました。ですけどほんとうはお菓子のごとで、まだライアンはとつても、きげんが悪かったです（ロビーにはすぐに、それがわかりましたが）。ですからライアンは、このチャンスにちよつと、フェリアルにやつあたりしてやろうと考えていました（フェリアル、かわいそうに……）。さて、こんどはどんなに、おそろしいことになるのでしょうか？ フェリアルがただではすまないということだけは、はつきりしていましたが……。

「ぎゃあああああ——！」

ああ、かわいそうに……。このトンネルのすみずみにまでとどくかというくらいのはみさんのごそうぞうにおまかせします（わたしはこのときのことを、のちにロビーほんにんにたずねることができましたが、ロビーは「そ、そんなこと、いえません！」と喋りだす）。教えてもらうことはできなかつたのです。たぶんライアンに強く、口どめされてい

たんだと思います。フェリアルのはみさんに、うしろをむかされていたベルグエルムが、びっくりしてふりかえりました。

「なっ、なんだ？」

見ると、フェリアルがばんばんにはれ上がったおしりをかかえて、あたりを飛びまわっているところだつたのです。

「なにをしたんだ？」ベルグエルムがライアンにたずねました。ですがライアンは、これ以上ないほど気分さつぱり！ といった顔をして、こうこたえるばかりだつたのです。

「ひ、み、つ。」

ロビーはなにもいえず、ただその場に立ちつくして、見ていることしかできませんでした。

とにかく。これでもういちど、四人の間仲間たちがせいぞろいしたのです！ やったー！

え？ ばらばらになってから四人がそろうまで、やけに早いじゃないかって？ それはずまり、レストランの料理になぞらえられた部屋が、それぞれじゅんぼんにならんでいたからなんです（もつともいせきの部屋も、そんなにつごうよくは四つならんではない）。そんなのでしたから、部屋と部屋のあいだには、それなりにきよりはありました。そしてこれは、「それぞれの部屋に用意したごちそうをレストランのフルコースみたいに、一品ずつじゅんぼんに食べてまわりたい」という、かいぶつのきぼうからのことでした（あのおかしな部屋の名まえは、このかいぶつのきぼうにそって、つけられていたというわけでした）。

ちなみに、あとでフォクシモンたちにきいたところによりますと、「ただふつうに食べるより、レストランのフルコースみたいに、すこしずつじゅんぼんに食べた方が楽しいだろーがー！」とかいぶつにいわれたことが、こんなことをおこなった、そのそもそのきつかけだったそうです。あのかいぶつは、食べることがなにより、楽しみだったみ

たいですね。もつとも、食べられる方は、たまったものではありませんが)。

これはほんとうに、運がよかったといえることでしょう。だって、もし、「宝さがし気分を味わいたいから、さがして楽しめるように、ぼらぼらにあつちこつちに放り出していけ」だとか、「じっくり食事したいから、いっしゅうかんにひとりずつ食べさせる」なんてことを、かいぶつがいつてきていたとしたら、ふたたびみんながめぐり会えるまでには、たいへんな時間がかかったにちがいないでしょうから(もつとも、かいぶつが「ごはんをみんなまとめていちどに食べたいから、みんなまとめてひとつの場所においていけ」といつてくれていたのなら、すぐに四人そろうわけですから、みんなはもつと助かりましたが。まあそれは、ぜいたくすぎというものでしょう)。

こういったわけで、みんなはこの、かいぶつのがままなきぼうのおかげもあって、みんなにも早く、ふたたびせいぞろいすることができたというわけだったのです(けつして、「みんなを早くそろえた方が、物語を早くさきに進めることができるから」だとか、わたしが話をつごうよく、まげて作っているのではありませんよ。ごかいしないでくださいね)。

さて、四人がそろいましたから、みんなはもう、あとはわき目もふらずに、地上をめざすばかりでした。もたもたしていたら、また新たなるかいぶつが、あらわれないとも

かぎりません（ほんとうはもう、ここにはほかにかいぶつはいませんでした、みんながそれを知っているはずありませんでしたから）。ここでいちばんのたよりとなったのは……、ライアンの風の力をかりる、そのわざだったのです。

「上からの風は……」ライアンが目をとじて、いしきを集中させました。

「こつちだ。こつちの道から吹いてるよ。」

みんなはライアンのしめしたその道を、ひとかたまりになつて進んでいきます。道はあいかわらずのまつくらで、もしライアンの助けがなかったとしたら、このさきに出口があるなんてことは、ぜんぜんそうぞうもできないくらいでした（ちなみに、ロビーのふしぎな感かくは、仲間を見つけようとしているときにはたらくものだったようです。ですから出口については、ロビーはなにも感じることはできませんでした。さんねん）。道はそこから、くねくねとまがりくねつてつづいていました。こんな道は、今までになかったものです。やつぱり出口が近いから、道も変わってきたのでしょうか？ やがてあるときから、ろうかの石だたみの上に砂がちらばっているようになりました。ベルグエルムがしゃがみこんで、その砂をしらべます。そしてかれは立ち上がつて、仲間たちにこうつげました。

「この砂は、この地下世界のものではない。われらがめざす、地上の世界から飛んできたものだ。となれば、出口は近いぞ。」

ベルグエルムの言葉に、みんなは声を上げてよろこびました。出口が近い！ それはこの地下世界にとじこめられているみんなにとって、これ以上はないというほどのきぼうの言葉となりました。

しばらくすると、それにさらなるよろこびが加わりました。風です。みんなのほほに、はつきりとわかるくらいの風が感じられるようになったのです。その風は冬も近いこのきせつでは、こおりのようにつめたい風でしたが、仲間たちにとっては、春のいきのそのよ風そのものに感じられました。

「上からの風だよ！ もうすぐだよ！ ライアンがうれしそうにいいました。

そしてそこから、いくらでもないところでのこと。道のとちゅうの左のかべに、また石のアーチがひとつ、つくられていました。ロビーが剣をかざして、みんなが中をのぞきこんでみます。すると……、そこには、思いもかけなかった、なんともおかしな光景が広がっていたのです。

「な、なんだ、これは？」

みんなはびつくりぎょうてんして、いつせいにおどろきの声を上げました。

みんなの見た、アーチのむこうのその部屋の床の上。そこにたくさんの人たちが、あ

おむけにされて寝かされていたのです！

みんなはすぐさま、部屋にはいつてそれらの人たちのことをしらべてみました。全部で、十、二十、三十、四十……。五十七人もいます（すごい数です）。かれらはみな、手を胸の上にくまされていて、石の床の上にきれいにならべて、寝かされていました（どう見ても、自分たちから進んでそのようなじやうたいになつて寝ているようには、見えませんでしたから。これはやつぱり、だれかによつて、この場所にこのように寝かされていたのです）。ほとんどの人たちは人間で（五十一人が人間でした）、あとは人間にしている種族の人たちでした。

「みんな、死んじやつてるの？」ライオンが心配げに、そういいます。たしかにかれらは、みな目をとじていて、ぴくりとも動いていませんでした。そのうえ、そのはだも血の気がなくて、まっ青だったのです。見た感じ、息をしているようにも見えません。これではライオンのいう通り、かれらがみな、死んでしまっているのだと思つたとしても、どうせんのことだといえることでしょう。ですが、それらのことにもかかわらず、これらの人たちはただのひとりも、死んではいませんでした。さあ、それつていつたい、どういうこと？

「ここにゐるのは、ほとんどが、西のハーレイ国の人たちのようだ。」ベルグエルムが、人々のその服そののを見ていいました。「おそらく、かこにこの地にやつてきた、旅

人たちだろう。それに、こっちは、ルルムたちもいる。」

ルルムというのは人間にに었습니다が、人間よりも耳が長くて、はんしゃしんけいにもすぐれている、ふしぎな種族の人たちのことでした。大むかしには南の地に大きな王国をきざいでいたそうですが、今ではすっかり数もへって、人間たちの社会の中で、ひっそりとわずかな人数が暮らしているばかりだったのです。

「はるかなくにの旅人たちが、こんなところに、こんなにたくさんいるなんて。これも、フオクシモンたちのしわざなのでしょうか？」フエリアルが、ベルグエルムにたずねました（フエリアルめちゃんとしたせりふも、ひさしぶりな感じですね。ちよつと前に「ぎやああ！」というさけび声なら、ききましたか……）。

「おそらく、そうだろう。」ベルグエルムが深く考えをめぐらせながら、こたえました。「これは、じつに深いじじつだ。はぐくみの森がすたれたわけが、これで見えてきたぞ。」

ベルグエルムが、人々の口をしらべてみます。見た目と同じく、やつぱりこの人たちは、こきゆうをしていませんでした。ですが、人々の胸に手をあててみたベルグエルムは、そこでとても、びっくりしたのです。しんぞうが動いていました！

この人たちのからだには、まだ血がめぐっていたのです。かれらのからだも、やわらかいままでした。ですがそれにもかかわらず、かれらのからだはまつ青で、死人のよう

につめたかったです。これでは生きているのか死んでいるのかも、わかりません。いったいこの人たちの身に、なにが起こったというのでしょうか？

「この人たちが、なぜこんな目にあわされているのか？ それもフォクシモンたちが、すべて知っていることだ。今は、どうすることもできない。ここからだっしゅつして、フォクシモンたちに会うことの方が、さきだろう。」ベルグエルムがいました。

「それなら、すぐに会いにいこう。」ライアンがそういつて、さきほどはいつてきた（この部屋にひとつだけの出入り口である）石のアーチへとむかいました。「早く、お菓子のかたきも取らなくっちゃ！」

そしてみんなもそろって、その部屋の入り口にむかおうとしたときのこと……。

「うわっ！」

どすんっ！

いちばんはじめに、いさんで部屋をかけ出たライアンが、アーチをくぐったそのところでふいになにかとぶつかりました！ ライアンははずみで、床にころがつて、べっちーん！ しりもちをついてしまいます（今日はよく腰をうちますね）。そしておどろいたことに、しりもちをついたのはライアンひとりではありませんでした。

「いたたた……！」

そういつておしりをさすりながら、ライアンのはんたいがわにたおれていたのは……、なんとなんと！ あのきつねの種族の男の子、チップリンク・エストルくんじゃありませんか！

「ああーっ！ おまえ！」

みんなはもう、大きすぎでした。それもそうでしょう。自分たちがこんな目にあわされてる、そのおおもを作ったいちばんのちようほんにんが、今日の前にいましたから。

みんなはかけよって、あつというまにチップのことを取りかこんでしまいました。どうしたって、逃がすわけにはいきません。いろいろききたいことが、山ほどあるのです！

「こいつ！ よくもだましたな！」ライアンが、チップの胸ぐらをぐいっとなつかんでいました（背だけがいっしょくくらいでしたので、まるで子どもどうしのけんかみたいでした）。ベルグエルムもフェリアルも、さすがにこのときばかりは、チップにぐいぐいとせまりよったのです。

「ご、ごめんよ！ めいれいされて、しかたなかつたんだ！」

こうなってしまったのなら、もうなすすべもありませんでした。チップはその場に

ぺったりとすわりこむと、大ベそをかいで、わんわん泣き出してしまったのです。

これには仲間たちも、さすがに気持ちをやわらげるほかありませんでした（いつだって、子どものなみだにはかなわないのです）。それにチツプはもう、じゆうぶんすぎるほどはんせいしているみたいです。これ以上強くせまったところで、なんにもならないでしょう。

「この人たちは、かこにきみたちが、あのかいぶつにさし出した人たちだな？」チツプがおちつくのを待つてから、ベルグエルムがチツプにいいました。

チツプはベそをかきながら、小さくうなずきます。

「そうです……」

ベルグエルムは、すべてになつとくがいったかのようでした。自分たちがここに放り出されていったりゆう。はぐくみの森になにが起こったのか？ ということ。それらもすべて、あのまつ黒なおたまじやくしのようないぶつ、夜のかいぶつのせいだったということなのです。

「さあ、全部話すんだ。きみたちの森、はぐくみの森に起こったことの、すべてを。」

それからチツプは、自分たちの森に起こったこと、村のおきてのこと、それらのすべてをみんなに話してきかせました。それは、かいつまんでいえば、こんなような話だっ

たのです。

今から三十年くらいむかしのこと。はぐくみの森にとつぜんおそろしいかいぶつがあらわれて、森の人々のことをおそうようになりました。人々は森からどんどん逃げていつて、三年もすると、はぐくみの森はすっかり荒れ果て、人のよりつかないなんともさびしい森へと変わり果ててしまいました。

それでもかいぶつは、この森からはなれようとはしませんでした。かいぶつは森のまんな中にある大むかしのいせきをすっかり気にいつて、そこに住みついてしまったのです（そのいせきが、みんなが今いるこのいせきです）。

いせきに住みついたかいぶつは、フォクシモンたちの村にやってきて、自分の食べものであるたましいのエネルギー、つまり生きている人を、さし出せといつてくるようになりました。はじめは村の人たちが、みずからその身をぎせいにささげました。しかしそれではすぐに、村はほろんでしまいます。フォクシモンたちに、せんぞからの土地であるこの森をすてることなどは、できませんでした。かれらが生き残るために取つた道は、ただひとつ。そこからやってくる旅人たちを、かいぶつのもとにささげるといふことだったのです。

それいらい、かいぶつは森のいせきに住みつづけ、フォクシモンたちもかいぶつにし

たがいつづけてきました。どうしたって、あの夜のかいぶつをやつつけるなんてことは、かないませんでしたから。旅人たちがこの森にやってきたら、その者たちをうまくだまして、かいぶつにささげること。このことは村のおきてとなり、きびしく守られるようになったのです。このおきては自分たちの土地とでんとうを守るための、くるしいけつだんです。これが、はぐくみの森に起こったそのひげきのできごとの、すべてです。

「でも、ぼくにはもう、こんなことはたえられないんです！ なんのつみもない人たちのことをぎせいにして守るものに、いったいなんのちががあるんですか！ そんなの、まちがってます！」

チップは床にへたりこんだまま、なみだながらにうったえかけました。かわいそうに。まだ十さいばかりのこななに小さな子が、こななにもつらい目にあい、くるしんできたのです。仲間たちはチップのことが、とてもかわいそうに思えてきました。かれらのおこなったことは、けっしてゆるされるようなことではありません。ですがもし、自分と同じ立場になったとしたら、どうでしょう？ だれにもチップのことを、これ以上悪くいうことなどはできませんでした。

「だからぼくは、村のみんなにないしよで、あなたたちを助けようと思って、ここへき

たんです。」チップはそういつて、みんなにランプや油などの道具を渡します（これはもともと、みんなの持ちものだったものです）。

「夜のかいぶつは、光をとでもきらうんです。だから、みなさんのあかりも、ぼくたちが取りました。あいつには、剣も矢もききませんから、それがいのにもつは、そのまみなさんといっしょにおいていききました。でも、まさか、その剣からあかりが出るなんて。」チップはロビーの持つ、そのふしぎな剣のことをしめしながらいいました。

「でも、光があつても、せいぜいすこしの足どめくらいにしかありません。みなさんは、いったいどうやって、ここまでやってきたんですか？　ぼくは、夜のかいぶつが起きてくる前に、みなさんのことを助けようと思つてたんですけど、村のみんなのすきについて、ここまでやってくるのが、すっかりおそくなってしまいました。だからもう、だめかと思つていたんです。夜のかいぶつからのがれて、レストランの部屋をぬけて、ここまでやってくるなんて、そうとう運がよかつたと思えません。あのかいぶつから、いったいどうやって、逃げてきたんです？」

これに対して、ライアンがとくいげにこうこたえました。

「ああ、あのおたまじやくしなら、ぼくたちがかるーくやつつけちやつたよ。」（ほんとうはかなりあぶなかつたのですが。まあこれは、ライアンのいつもの強がりですから。）ですけどチップは、とても信じられないといったふうに、こうこたえるばかりだった

のです。

「まさかそんな。うそでしょう？ あいつをたおしたなんて。」

チツプが信じられないのもむりはありません。チツプのいう通り、あの夜のかいぶつは、ほんとうに、剣でも矢でも、ほのおでもたつまきでも、たおせませんでしたから（なにせあのかいぶつのからだは、全部、夜のやみそのものでできていましたから、それもそのはずだったのです。やみになにしたつて、かなうはずありませんよね。それこそ、とくべつにふしぎな剣でも使わないかぎりは）。そのかいぶつをたおしたといわれなくても、とてもわかには信じられるはずありませんでした（それに「たおした」というているのが、自分と同じくらいに小さなからだのライアンでしたから、信じろという方がむりというものでしたのです）。

「ほーんとだつてばー！ ロビーがこの剣で、やつつけたんだよ！ あいつはけむりになつて、ちぢんで、みんな消えちやつたんだから。」

さて、このあたりになつてくると、チツプもだんだん、ライアンの言葉がうそではないようだと思ふようになってきました。ベルグエルムとフェリアルがまじめな顔をして、「信じられないかもしれないが、ほんとうだよ。」といったので、ようやくチツプは、かいぶつがたおされたということ、信じることとなつたのです（やつぱり大きくてりつぱな騎士にいわれた方が、しんじつ味があるというものですよね。ライアンは「だ

から、ほんとうだつていったじやないか！」と、怒つてましたけど。

「すごい、やったやった！ これで、みんながすぐわれる！」

チップは大きなしっぽをふりふりふつて、ぴよんぴよんはねて、よろこびました。ですが、仲間たちの心は、いまだ晴れやかなものではなかったのです。それはつまり、この場所に寝かされている人たち。このかいぶつのかこのぎせいとなつた人たちが、まだ、助かつてはいないからでした。

「よろこぶのは早いぞ。」ベルグエルムがきびしい顔をして、チップにいいました。「村を守るためとはいえ、きみたちは、とてもゆるされないことをしてきたんだ。そのつくはないは、けつしてかんたんなものではない。」

「そうだよ！ ぼくのお菓子のこと、うんとつくなくてもらわないと！ さあさあ、どうしてくれるんだ！」ライアンもそういつて、チップにぐいぐいとつめよります。

チップはまた、しゅんとした顔にもどつて、しおらしくなつてしまいました（お菓子のことつてなに？ つて、ちよつと思ひましたけど）。

「わかつています……。これから村のみんなと話しあつて、ぼくたちのするべきことを、しっかりと果たしていくつもりです。で、でも、この人たちなら、もうじき助かるはずなんです！ かいぶつが、たおされたんだから！」

そういつてチップは、部屋の中の方をむきました。そしてちようどそのとき。みんな

がうしろの部屋の方をふりかえろうとした、まさにそのときのこと。旅の者たちはそこで、思いもかけない、たくさんのいがいな声たちのことをきくこととなったのです。

「はーつくしよん！ うう、寒い！」

「うくん、やけにかたいベッドだな……」

「ええつと、顔をあらう、お湯はどこだ……う？」

なんてことでしよう！ みんながふりかえると、部屋の中に寝かされていたあのたくさんの人たちが、みんな手足をぐいんとのぼして、それぞれ思い思いのかっこうで、起き出しているじゃありませんか！ かれらはねぼけまなこのままで、あくびをしたり、目をこすったり、あたりをきよろきよろ、見渡したりしていたのです。そしてかれらは、それからこぞって、ひとつの同じ言葉を口にしました。

「()は、どこだ？」

今や五十七人の人たち、そのすべてが、もとの通りに起き出していました！（顔色はまだだいたい、悪いようでしたが。）これはいつたい、どういふことなのか？ さあチップ、

説明して！

「この人たちは、夜のかいぶつにたましいを食べられてしまつてたんです。でも、たましいを食べられても、かんぜんに死ぬわけじゃありません。からだはまだ、生きたままなんです。」

チツプのいうことには、夜のかいぶつ（これはフォクシモンたちが、あのかいぶつのことをよぶよび名だったのです）が食べるのは、人のたましいのエネルギーなのであつて、人のからだそのものではないということでした。そしてたましいを食べられた人は、半分死んだようになって、ずっととしも取らずに生きつづけるということです。

さらに、かれらのたましいは夜のかいぶつのおなかの中に、ずっとたくわえられるということでしたが、たましいがからだからあんまりはなれてしまうと、もうもとにもどることができなくなつて、からだはほんとうに死んでしまうのださうでした（このことはいちばんはじめのころに、フォクシモンたちがかいぶつにたましいを食べられたときのそのけいけんによつて、考えられるようになったことでした。はじめたましいを食べられた人たちは、同じように半分死んだようになりたいになつたままでしたが、かれらのもとからかいぶつが遠くはなれて去つていったときに、かわいそうに、かれらのいのちはそのからだから、ほんとうに消えていつてしまつたのです。

つぎにたましいを食べられた人たちは、かいぶつがその場にしばらくとどまつている

あいだは、生きていました。ですがやつぱり、かいぶつが遠くはなれていってしまつたと、同じくそのいのちは、からだから失われていってしまつたのです。

ひよつとしたらこれは、かいぶつのからだの中に取りこまれてしまつたたましいのせいなのではないかと、フォクシモンたちは考えるようになりました。つまり、食べられてしまつたみんなのたましいは、かいぶつのおなかの中にずっと残つていて、そのたましいからからだがあんまりはなれてしまつと、そのからだはほんとうに死んでしまつたのではないかと思つたのです。

そしてこのことは、三回目になましいを食べられた人たちのからだによつて、正しいものだとしようめいされることになりました。つまり、かいぶつの住みついているこのいせきの中にそのからだをおいたままにしておけば、かれらのからだはたましいからはなれすぎることもなく、そのいのちもずっと、たもたれるのだということがわかつたのです。

ちなみに、この三回目のささげものをおこなつたときに、はじめて村のおきてがじつこうされました。つまり、三回目からささげられたのは、フォクシモンたちではなくて、旅の人たちだつたということです。一回目と二回目のささげものにより、フォクシモンたちはすでに、八人の仲間たちのことを失つていました。もうこれ以上、仲間たちのことを失うわけには、かれらもいかなかつたのです。

つまりこういったわけで、フォクシモンたちは夜のかいぶつが住みついてはなれることのない（つまりたましいが遠くに去ってしまおうことのない）この地下いせきの中に、旅人たちのからだを、ずっと寝かせたままにしておいたというわけでした（それと同時に、かいぶつがこのいせきからはなれることのないように、このいせきの中で年にふたりずつほど、ささげものを与えつづけるということをやくそくしてまいりました）。いつの日か、夜のかいぶつがやつつけられて、かれらのたましいがもとのからだへともどる、そのときまで……。

そしてついに今日、ロビーの手によつて、そのかいぶつがたおされたのです！　ロビーがかいぶつのからだに切りつけたとき、かいぶつのからだからは、やみと、けむりと、そして今までに食べたたくさんの人たちのたましいが、いっしょにぬけ出していました。そしてそれらのたましいは、自分のからだのもへと、今こうして、もどつてきたというわけだったのです！（心から「お帰りなさい！」といたいのですよね！）

ところで、かいぶつがたおされても、はたしてほんとうにそのたましいがもとのからだにもどるのかどうか？　それはフォクシモンたちにも、はつきりとはわからないことでした。たましいがずつと残っているのだから、そのたましいがかいほうされればもとのからだにもどつてくれるだろうという、よそうでしかなかったのです。もつとも、そんなことはだれにだつて、わかるはずもないのですが。ですから今、たましいがほんと

うにもとの人たちのからだにもどったことは、かれらフォクシモンたちにとつても、とてもよろこばしいことでした。やっぱり、たましいと人のからだのあいだには、目には見えない、ふしぎなつながりがあるみたいですね。

ちなみに。フォクシモンたちが旅の者たちの中にもつをみんなのからだのすぐそばにおいていったのは、どのにもつがだれのものなのか？ わからなくなってしまうことを防ぐためでした。寝かされていた五十七人の者たちのそばにも、やっぱりかれらのにもつが、しつかりとおいてあつたのです。フォクシモンたちはみんなのからだかふたたびもとの通りにもどることを信じて、そのときに、にもつもしつかりと、みんなにかえすことができるようにしていたというわけでした。どこかにひとつにまとめておいたら、思わぬことで、にもつがごつちやになってしまわないともかぎりませんでしたから。もつとも、あかりをつけるための道具だけには、その心配がありましたけど。それらの道具はフォクシモンたちの村のそうこに、まとめておいてありましたから。)

もう、あたりはまさに、おまつりさわぎといった感じでした。なにしろさいしよにかいぶつにたましいを食べられた人などは、もう二十年以上も、ずっと眠つたままであつたのです。それがとつぜん、こうして目がさめたわけですから、みんなわけがわからな

いのもの、とうぜんのことでした。

かれらをまとめてじじょうを説明するのは、たいへんなしごとになりました。自分たちがフオクシモンたちにだまされたのだということを知ったときには、みんなものすごく怒って、口々にもんくをいったものだったのです（なにしろ五十七人もいましたから、かれらをなだめるのはひとくろうだったのです）。ですけどどうにか、かれらをおちつかせることができますと、旅の仲間たちはいよいよ、つぎにやるべきことをおこなうことができました。それはつまり、このいまわしい地下世界に、今すぐわかれを上げるということだったのです。

さあ、ついに！ そとに出るそのときがやってきました！

「出口だー！」

チップのあんないで、仲間たちは出口へとつづくそのかいだんのもとへと、急いでかけ出していきました。もうロビーもライアンも、ベルグエルムもフェリアルも、大よろこびでした。地面の上に出ることが、こんなにもうれしいと思ったことはありません。そしてかいだんをのぼりきると、そこには待ちに待ったおひさまの光が……！ というわけにはいかず、じつさいには今の時間は、黒りすのこくげん。午後の七時ころでしたが、それでも仲間たちには、ふみしめる土の感じよくだけでも、じゅうぶんによろしいのでした（もうあんな地下の世界なんか、みんなまつびらごめんでしたから！）。

「さあ、みなさん！」ランプをかかげたライアンが、大声を上げてみんなによびかけました。

「これからいっしょに、きつねたちの村まで、かたきをうちにまいりましょう！」
とまあ、これはしようだんでしたが、それでもフォクシモンたちには、それなりのつぐないをしてもらわなければなりません（それにライアンは、お菓子のこともしつちりべんしようしてもらおうつもりでした）。こうしてみんなは、それぞれの思いを胸に、今ふたたび、もとのフォクシモンたちの村へともどつていくことになったのです。

ある者たちは、さきへの旅を急ぐため。

ある者たちは、失われたそのときを、取りもどすために。

そのぼん、はぐくみの森にはめずらしく、月のあかりがてんじょうにあつくしげった木々の葉のすきまから、静かにもれ出しました。その光が、地面にひっそりとさいいた小さな白いエリニエルの花の花びらを、人知れずてらし、かがやかせていました。

10、ゆうれい都市モーグ

今から二千年ほどもむかしのこと。西の大陸からひとりの船乗りが、この地にたどりつきました。かれの乗ってきた小さな船は、見まわれたおそろしいあらしによって、もうぼろぼろになってしまっていました。かれははじめからこの地に、やってきたくてきたものではありません。ただ、かじのとれなくなつた船のゆくまま、あらしの風の吹くままに、この地へとはこぼれてきたのです。かれいがいのほかの人たちは、みんなあらしの海に飲みこまれてしまいました。かれだけが助かつて、ぼろぼろになつたその船に、ひつしにしがみついてきたのです。そう、かれはこの海のあらしのそうなん者として、ぐうぜんに、この地にたどりつきました。

かれの名まえはロザムンド・シンクレアといたしました。もう船は、使いものになりません。自分のくにに帰りたくとも、船がなくてはどうにもなりません。とほうにくれたロザムンドは、船の木ぎいを使って小さな小屋をたて、その土地に住みはじめました。ここから、西の大陸に帰るための方法を見つけ出そうとしたのです。そしてそんなかれのもとに、やがてすこしずつ、土地の人々がおとずれるようになってきました。

ロザムンドの船乗りとしてのほうふなちしきと、まだ知れぬ西の大陸の話に、人々はむちゆうになつて耳をかたむけました。それからだんだんと、かれの住む小屋のまわりにも、新しい住人たちが住みつくようになったのです。ロザムンドのことを助け、かれが西の大陸に帰るその手助けをしようと、集まってくれた人たちでした。

ロザムンドは人々の助けをかりて、まずはうみべに、船をとめるためのりつばなさんばしをつくりました。そしてかれのぎじゆつと人々の力があわさつたことによつて、そこについて、いつそのすばらしい船ができ上がったのです。

しかしロザムンドは、それで西の大陸に帰ることはしませんでした。かれはすでに、この地ですばらしい仲間たちのことを得ていたのです。かれらのために、自分はもつと力をつくしたい。こうしてロザムンドとその仲間たちは、ともに力をあわせて、この地をさらにはつてんさせていこうとがんばりました。

そうしてついには、まわりをりつばなじようへきでかこんだ巨大な都市ができ上がるまでに、この地はさかえていったのです。それから人々は長きに渡つて、この新しい都市でへいわに暮らしていききました。ロザムンド・シンクレアはこの都市のしよだいの長として長く人々にあいされ、そして人々はかれの名まえをとつて、この都市を「いだいなるロザムンド」という意味である、「ロザムンディア」と名づけたのです。

この名まえをきけば、この都市がどこのことをいつているのか？ みなさんにはもう

おわかりですよ。そう、このロザムンディアとは、まさに、げんぎいのモーグのことなのです。このなんともりっぱな都市が、なぜ、かつてとつぜんに、うちすてられたのか？ シープロンドのかいぎの場でも、それはすこしだけ説明されましたが、はつきりとしたことは、だれにもわかりませんでした。けつきよくのところ、この都市がなぜうちすてられたのか？ とうじの人々がいつたどこにいつたのか？ それらのことについては、いぜん変わらぬなぞとして、残されたままであつたのです（ここで著者のわたしから、新しいじょうほうをちよつとだけみなさんにお伝えしますと、かつてのロザムンディアのまちがうちすてられたのは、しぜんのさいがかかわっているらしいということでした。これはあくまでも、そうぞうでしかないのですが、おそらく、あらしや、つなみといったことが、あつたのではないのでしょうか？

もつとも、わたしの得たこの新たなじょうほうも、どこまでがほんとうのことなのか？ ぜんぜんわかりません。わたしはこのじょうほうのことを、はぐくみの森からかなり北西にいった地に住んでいる、うさぎの種族のおじいさんの学者からきいたのです。しかも、とつてもうさんくさい感じの。

「ああ、あれは、しぜんのわざわいのせいじゃよ！ うむ、まちがない！ あれは、ひどかったわい！ わっはっは！」

かれはまるで見てきたみたいに、大げさに話していましたが、わたしがおみやげに

持つていったうずまきにんじんのことをかじるのにむちゆうで、なんだかてきとうに、話を作っていたみたいでした。ですからぜんぜん、しんようできなかったのです。

そしてじだいは流れ、ときは今。はいきよとなったその都市から、東にすこしいったところ。はぐくみの森に住むきつねの種族、フォクシモンたちの村に、われらが仲間たちは集まっているところでした。たましいを取りもどし、ようやく今の時間を生きることとなった、たくさんの人たちのことをしたがつえて。

かれらの旅が、ふたたびはじまるのです。

「それではこれより、さいばんをとりおこなう！　さいばん長、どうぞ前へ。」

高らかに（そして声の高さも高く）そうせんげんした声のぬしは、われらがライアンでした。そしてその声につづいて、みんなの中からちよつときようしくそうに前に進み出たのは、ベルグエルムだったのです。そう、旅の者たちは今、フォクシモンたちの村で、きつねたちのおかしたこれまでのつみに対してのつぐないのための話しあい（さいばん）を、おこなおうとしているところでした（そしてこういった話しあいの場では、いつもれいせいなベルグエルムが、だいひようであるさいばん長をつとめるのがよいだろうということになりました。もつとも、さいばん長だなんてかつてに名づけてよんでいるのは、ライアンだけでしたけど）。

ここは旅の者たちがえんかいの席にまねかれた、あのログハウスみたいなたてももの前でした。たてももの前の広場には、村のフォクシモンたちぜんいんが、地面にせいぎしてすわっていたのです（これはライアンが、「みんな、せいぎ！」といって怒ったので、それにしたがっていたのです。さすがにライアンも、足の悪いランドン村長だけは、クツシヨンの上にすわることだけでゆるしてあげましたが）。そしてたてももの入り口のデッキのところ、旅の者たちと五十七人のむかしの旅人たちみんなが、集まっています（人数が多すぎですので、ぎゅうぎゅうでしたけど）。

前に出たベルグエルムは、「おほん。」と小さくせきばらいをしてから、村のフォクシモンたちみんなにむかって話しはじめました。

「みなさん。みなさんはもう、自由です。夜のかいぶつは、たおされました。」

これをきいて、フォクシモンたちはかんせいを上げて、手をたたいてよろこびあいました。かいぶつがたおされたということは、もうすでに、みんなのもとにもあつというまに伝わりましたが、それでもなんとよろこんでも、すぎるということはありませんでしたから。

「ですが！」ベルグエルムが、よろこぶフォクシモンたちに手をかざしていました。

「みなさんももう、よくわかつていることと思います。あなたたちは、つみをつぐなわなければなりません。われら旅の者たち四名は、運よく助かることができましたが、こ

ここにいる五十七名の者たちに、あなたたちは、失われた時間をかえさなければなりません。それはけつして、かんたんに考えてはならないことです。」

「ぼくの失われたお菓子も、かえしてもらおうからね！」ライアンがつけました。

フォクシモンたちはみな、うなだれて、深くはんせいをしていました。ランドン・ホツプ村長をはじめ、チップもティッドもロラも、村の人たちみんなが口々につぐないの言葉をのべて、頭を下げたのです。

ベルグエルムがつづけます。

「あなたたちのつぐないが終わったとき。そのときこそ、このはぐくみの森は生まれ変わるときなのです。ぜひとも、この森に、かつての美しいかがやきを取りもとしていただきたい。それは、このアーケランドに住む者みんなの願いであり、あなたたちのしめいでもあるのです。フォクシモンの新たなるでんとうを作っていくときが、今こそやってきたのです。」

「おいしいお菓子のでんとうもね！」

ふたたび、人々の口からかんせいが上がりました（さいごのライアンの言葉は、そのせいで、ほとんどみんなにきこえていませんでした）。みんな手を高くつき上げて、はぐくみの森の新しいみらいへとむかって進んでいくことを、ここにちかいあつたのです。

しいはさかれていた時間はあまりにも長く、暗いものでした。ですがいつだって、それ

がえいえんにつづくということなどは、あり得ないのです。人々の心から、気高いほこりが失われなにかぎり、みらいはそのさきに待つているのです。フォクシモンたちのみらい、はぐくみの森のみらいも、これでだいじょうぶでしょう。

さて、それではここで、五十七人のむかしの旅人たちのそれからのことについても、お話しておかなければなりませんね。かれらはこのあと、フォクシモンたちからじゅうぶんなだけのつぐないを受けました。フォクシモンたちの村には、かつてのはんえいのころに集められて、たくわえられていた、さまざまなきちょうな品々が、まだ残つていたのです。かつての森のめぐみは、今ではすっかり失われてしまつていましたが、これらの品物をたくわえていたおかげで、村人たちは、ほそぼそとでしたが、なんとかこの森で暮らしていくことができました。

これらの品物が、五十七人の旅人たちにじゅうぶんだけくばられました（そのけつか、村のたくわえはすっかりなくなつてしまいました）が、それはいたしかたのないことでしょう。とくに、眠つていた年数の多い人々には、それだけ多い品物が渡されたのです。旅人たちはこのおくりものを、大いによろこびました。それでフォクシモンたちに、「にとど人をあざむかないこと」、「この森をむかし以上にすばらしい森に変えていくこと」、「このふたつを守るとかたくちかわせること」で、かれらのおこないをすっかり、ゆるしてあげたのです（ところで、旅人たちは眠つていゝるあいだ、ぜんぜんとしを取つて

おりませんでしたので、かれらの中にはかえって新しい世界が見られてよかつたと、よろこぶ者さえたのです。人それぞれで、いろんな考え方があるものですね。

そしてかれらは、おくりものとたつぷりの食べものをつめこんだ、みずからのリュックをしょって、まだ見ぬ未知なる世界へとむかつて、新しい旅のいっぽをふみ出してきました。かれらがめざしたのは、ヴィモール。このアーランドよりもずっと大きくて、もつとごちゃごちゃとした、北の果てのくにでした（かれらはもともと、西のハーレイ国からこのヴィモール国をめざして、旅をつづけていたのです。そしてそのとちゅうで立ちよつたはぐくみの森で、思わぬ足どめを受けてしまったというわけでした。

ちなみに、かれらの中には、「はぐくみの森でなにが起きているのか？」それをしらべにやつてきた者たちも、わずかにいました。これでようやく、かれらははぐくみの森でのちようさを終えて、こきようであるハーレイ国へと帰ることになったのです。

ところで、これはつけたしになるのですが、じつはかれらの中には、のちに大冒険家としてその名をはせることになった人物がひとりいました。それはルルム種族の冒険家、シェイディー・リルリアンという人物でした。かれのことは今では、「ほうろうのルルム」とか、「赤毛のシェイディー」などといった名まえで人々に語りつがれていて、このあとかれは、たくさんのくにに渡って、たくさんのたいした冒険をおこなうこととなるのです。ですがそれは、このロビーの冒険の物語とは、またちがう時間、ちがうぶた

いでのお話。いつかきかいがあつたら、このシエイディー・リルリアンの物語のことも、みなさんにお伝えすることができればと思います（雲の上までのびる木の上の王国での冒険とか、七ひきのりゆうがはいするくにの物語とか、いろいろありましたけど）。

ちよつと話がそれてしまいました。さあ、われらが仲間たちの冒険にもどりましょう！

あくる日の朝。

われらが仲間たちは今、旅のしたくをすつかりととのえて、これからいよいよはぐくみの森の西の果て、めざすモーグへとむかつて出発しようとしているところでした（朝を待ったのは、モーグに夜に行くのはやつぱり危険だとはんだんしたためです。それに夜のかいぶつとの戦いなどで、みんなつかれきつてしまつておりましたから、ひとばんくらいしっかりと休んでおく必要もありました。フェリアルがほつと胸をなでおろしたのは、いうまでもありません。夜のモーグにはいりこむなんてことは、かれはぜったいに、したくはありませんでしたから！）。

かれらの前には、なつかしや！ かれらのよき友である三頭の騎馬たちが、せいぞろいしております（かれらの騎馬たちはみんながいせきにとじこめられているあいだ、フォクシモンたちの村でかわれていました。まあ、メルのあばれたこと！ メルはと

てもかしこい馬でしたから、自分の主人をひどい目にあわせた者たちのことをするどく感じ取って、フォクシモンたちのいうことなんか、ぜんぜんきかなかったのです。さすがは、ライアンゆずりの馬といったところでしょうか？ もっともほかの二頭の馬たちも、だいふあばれましたけどね。そしてその騎馬たちのくらには、フォクシモンたちからおくられた、たくさんの旅の品物のはいったふくろがくりつけられていました。

おくられた品物の中でもとくに旅の者たちにとつてありがたいのは、ふわふわ森ペンギンの羽毛から作られた、とつてもあたたかいマフラーとマントでした。これらはおどろくほどかまく、しかも水を通さないので。この寒いきせつに旅をゆく者たちにとつて、これ以上はないというほどのおくりものでした。

ほかにかれらがもらったものは、おもに食べものと飲みものでした。パンやチーズをはじめ、日持ちがするように作られたルン鳥のくんせいや、お湯につければ食べられる、きのこのこのひもの。それと宝石の実際のジュースなどです。旅人たちにおくられたような値うちのある宝物は、かれらは受け取りませんでした。そんなものはかれらには必要ありませんでしたし、だいじな旅をゆくのにじやまになるだけではありませんでしたから。ですからかれらは、かれらのぶんとして分けられた宝物も、全部旅人たちに分けてあげるようにといったのです（さすが、りっぱですね。でもちよつと、ライアンとフェリアルふたりだけは、宝物にもきょうみがあつたようでしたが。ベルグエルムに

「だめ！」といわれて、しぶしぶあきらめたのです。

「さあ、みんなつみこんだら、いよいよ出発だ！」ライアンが右手を大きくつき上げていいました（ところで、出発のときにさいしよにこうれいをかけるのって、いつもライアンですよ。やっぱりこれは、リーダーになりたがりの、かれのせいからみたいです）。みんなにかけ声をかけて、ふりかえったライアンでしたが、まあ、そのにもつのも多いこと！ かれの肩からは、ばんばんにふくれ上がった大きなかばんが、三つもかけられていたのです。そのうえメルの中からだにも、（新しくもらった旅の品物のはいったふくろとはべつに）たくさんのふくろが、ところせましとくくりつけられていました（おかげでロビーの乗るところがすぐくせまくなつてしまつて、ロビーはかわいそうに、その大きなからだをきゆうくつそうにちぢめて、なんとかメルの背中にまたがっていました）。

さらにそれは、メルだけではおさまりきりませんでした。ベルグエルムとフェリアルの二頭のはい色の騎馬たちにも、おさまりきらなかつたライアンのふくろが、たくさんくくりつけられていたのです。

いったいこんなにもたくさんのにもつて、なんなのでしよう？ それは読者のみなさんには、もうおわかりですよ。そう、これらのかばんやふくろの中身。それはぜんぶ、お菓子でした！ ライアンお氣にいらの森ペンギンのクリームいりやき菓子には

じまって、ミルクの实のパウンドケーキに、クッキーにビスケット。宝石の实のぼうつきキャンディーが山ほど。そのほか、チョコにマシユマロに……、およそ考えつくことのできるありとあらゆるお菓子たちが、ぎゅうぎゅうにつめこまれていたのです。そう、ライアンはねんがんの「お菓子のかたき」を、じゅうぶんすぎるほどに取ったというわけでした（そしてもちろん、こんなにくさくさんのお菓子がフォクシモンたちの村に用意されていたわけではありませんでしたから、これらのお菓子はライアンが村人みんなに、てつやさせて作らせました。さぞかし、たいへんだったでしょうね……。かれらもライアンを怒らせたらしいへんな目にあうと、これで身をもつて知ることができたことでしょう）。

おかげでライアンは、もうにっこにこでした（こんなにうれしそうな笑顔は見たことがありません！）。かれがはじめに持ってきていたお菓子もそうとうな量のものでしたが、今はその五ばいほどの量もあつたのです。もう旅の者たちにもつのその半分以上が、お菓子だといつてもいいくらいでした（ベルグエルムとフェリアルも、もうあきらめておりましたので、口を出すことすらできなかったのです。もつとも、ことがお菓子のことだけに、かれらが口をはさんだとしても、ライアンはいうことをきかないでしょうけど）。

「みんなー！　せわになったねー！　じゃあ、げんきでねー！」

さいごにライアンはまんめんの笑顔でそうさげぶと、見送りのフォクシモンたちにむかつて、大きく手をふってみせました。そしてランドン村長をはじめ、それにこたえる村人たちは、みんなげつそりとやつれかえりながら、ひきつった笑顔で、力なく手をふってかえすばかりだったのです（かれらがこのあと、みんなそれぞれの寝床にもぐって夕方まで寝てしまったことは、いうまでもありません……）。

「ロザムンディアのいせきまでは、そんなに遠くはないんですけど……」

そう声をかけたのは、きつねの種族フォクシモンの男の子、チップでした。かれはせめてものつみほろぼしにと、旅の者たちのモーグまでの道のりの、そのあんないやくのことを買って出てくれたのです（かれもてつやお菓子作りにつきあわされていました）が、とちゆうで力つきて、寝てしまいました。ですからほかの村人たちほどには、つかれきつてはいなかったのです。それでもだいぶ、眠かったんですけど。それはかれが、村の人たちにはないしよで、今までになんどもロザムンディアのいせき、つまりモーグの近くにまで、たんけんに出かけたことがあったからでした。ほんとうはロザムンディアのいせきに近づくことは、村ではかたくきんじされていることでしたが、こうきしんおうせいな十さいの男の子には、それもむりというものです。ですからモーグまでの道のりのことなら、チップがだれよりもよく、知っているというわけでした。

「あそこには、じつはぼくでも、はいつたことはないんです。村の人たちは、あそこにはいった者にはにと出られないぞ、つていうんですけど、じつさいぼくたちの村の人で、あそこにはいつた人は、ひとりもいません。だって、ほんとうのことをいうと、入り口がしまっていてはいれないんです。」

チツプがフェリアルルの上から、いいました。からだの小さなチツプはフェリアルルの上、フェリアルルの前に乗っていたのです(ロビーと同じく、チツプは馬に乗ったことがありませんでしたので、フェリアルルにささえてもらおうことで、なんとか乗っていたのです)。

「えっ? 入り口がしまってるの?」前の騎馬から、ライオンがふりむいてたずねました。

チツプがそれにこたえます。

「は、はい。いせきの入り口には、大きな木の門があつて、その門はかたく、とぎされていゝるんです。そこまでなら、ぼくにもあんなにできるけど、ほかに入り口らしいものもないし、いせきの中には、どうやってはいつたらいいのか? ぼくにもわからないんです。」

さて、それはこまつたじようほうです。ここまできてモーグにはいれないんじや、どうしようもなくなつてしまいますから(フェリアルルにとってはいいいことかもしれませ

が。どこかほかに、べつの道があればの話ですけど。

「うーむ、とりあえずは、モーグにたどりついて、そのようすを見てから考えるしかないだろう。どこか、かべをのぼれるようなところがあるかもしれない。」先頭をゆくベルグエルムも、チップの話にふりかえっていいました。

「ふーん、木の門か……」ライアンが、なにやら考えをめぐらせながらそういいました。「なにか、いい方法があるの？」うしろに乗っているロビーが、ライアンにたずねました。

「いや、わかんないけどさ。木の門だったら、なんとかなるんじゃないかな、って思ってます。」

ライアンはそういって、まただまってしまいました。ロビーはライアンが、またなにかよからぬことを考えているのではないかと、心配したのです……。

それからしばらく、暗い森の道がつつきました。もはやこの森をしいしていたおそろしいかいづつがたおされたとはいえ、森のひねくれきった木々やでこぼこ道が、とたんにきれいに変わるといいうわけではなかったのです（いずれこの森も、もとの美しさを取りもどすでしょうけど、今はまだそのままでした）。

チップのあんないは、じつに助かりました。じもとのことならじもとの者にきけとは、よくいったものです。とくにチップは、その小さなからだでこの森のすみずみまで、

あっちこっち飛びまわっていたものですから、はぐくみの森のことならほとんどなんでもというくらい、よく知っていました。「あつ、ここを右にいつてください！ このまままっすぐいくと、どくのちようちよの巣につつこんじやいますよ！」とか、「その木のつるに、さわつてはいけません！ そのつるはまるで、おぼけとかげの舌みたいに、生きもののかをからめ取つてしまふんです！」とか。さまざま危険な場所に出会うたびに、チップがそのつど、旅の者たちのことをさきへとみちびいていつてくれたのです（もしチップがいなかったのなら、わたしはもうすこし多くのページを使つて、旅の者たちがくろうする場面のことをえがかなければならなかったことでしょう。それはそれで、冒険のお話としてはもり上がるかもしれないませんが、じつさいに旅をする者たちにとつては、やっぱりたまったものではありませんよね）。

こうしてチップのあんないのおかげで、旅の者たちはこの進みづらく危険でこんな森の道のりを、じゅんちように進んでいくことができました。それでも、めざすモーグにたどりつくまでには、かなりの時間がかかったのです。もうモーグまではそんなにきよりはありませんでした。このあたりははぐくみの森の中でももつとも危険がいっぱいのところで、道もごちゃごちゃしていました。それに一行は馬に乗つておりましたから、この馬が通れるくらいの道をゆくには、かなり遠まわりをしていかなければならなかったのです（この森にかぎつては、からだひとつで木々のあいだを通りぬけて

いった方が、早く進むことができるようでした。もしチップひとりだけだったなら、フオクシモンたちの村からモーグまで、ものの三十分もしないうちにたどりつくことができるでしょう。

それからまたしばらくたつたころ。一行はついに、モーグへとつづくそのさいごのいつぽん道の上へと出ることができました（ここまでくるのに、時間にして二時間ほどかかりました）。

「あそこが、はぐくみの森のさかい目です。ちょうど、あの大きな木のところです。ほら、木の上の葉っぱの中に、見張り台がかくれてるでしょう？」チップが、さきに見えてきた大きな木の上をゆびさしながらいいました。

「見張り台？ なにを見張るんだ？」うしろに乗っているフェリアルが、たずねてそういいいます。いわれてチップは、あつ、しまった、というような顔になりましたが、もう手おくれでした。

じつははぐくみの森のあちらこちらには、フオクシモンたちが張りめぐらせたひみつの見張り台が、木の上などの目立たないところにひっそりと作られていたのです。これらの見張り台にはいつも、当番のフオクシモンたちが見張りについていて、かれらは森にはいつてくる旅人たちのことを、そこからまつさきにかくにんしていました。ロビーたち旅の一行がはぐくみの森の中にはいりこんできたときにも、かれらはこうして、み

んなのこを見張っていたというわけだったので。村についたとき、すでにかんげいのじゅんびがばつちりととのつていたのは、見張りのフォクシモンたちがロビーたちがやってきたということ、いち早く村へと伝えていたためでした（ようやく、なぞがとけましたね）。

ちなみに、フォクシモンたちがいち早く旅の者たちのかんげいのじゅんびを進めておこうとしたのは、わけがありました。それは旅の者たちが村にとうちやくしたときに、すでにかんげいのじゅんびをばつちりととのえておいて、旅の者たちにえんかいへのさんかをごとわらせないようにするためだったので。そのためフォクシモンたちは、旅の者たちのすがたをかくにんしたあと、かんげいのじゅんびがすっかりととのうまでのあいだ、旅の者たちのことをつかすはなれず、見張りつづけていました。

もうひとつ説明をつけたいとすると、フォクシモンたちがロビーたちのことをかくにんしたのは、ロビーたちがはいつていった森のはしっこから、しばらく中にはいったところにある見張り台からでした。ですからロビーたちが森にはいつてすぐのところまでしまったときには、まだフォクシモンたちも、ロビーたちのことに気がついていなかったのです。ロビーたちがやってきたのは、グブリハッグたちから逃げた、ほそい岩のさけめから。そこはふつうだったら、人がやってくるようなところでは、ぜんぜんありませんでした。そのためそのあたりには、フォクシモンたちの見張り台も、ぜん

んぜん作られていなかったのです。まさかフォクシモンたちも、そんなところから人がやってくるだなんて、思っていなかったことでしょう。ライアンのクルツポアのさけび声だつて、かれらのもとにはとどいていなかったのです。こまかい説明、終わり)。

このひみつの見張り台のことは、人にいうことはもちろん、きんしされてきました。ですからうつかり口にしてしまったチツプは、しまったと思つたのです(でもよく考えてみれば、もうそんなことをひみつにしておく必要ありませんし、こんな見張り台そのものも必要ありませんよね。すくなくとも、今までのもくてきのためには使うことはないはず。もしこんごも使うのであれば、これからは旅人たちのことをいち早く、ほんとうの意味でかんげいするために使つてもらいたいものです)。

「あつ、それよりほら！ もう、いせきのかべが見えてきましたよ！」チツプはなんとかごまかしつつ、道のさきをゆびさしました。そしてチツプのいう通り、木々のあいだからちらちらと、ロザムンディアのいせき、モーグのそのまわりのことを取りかこむ、巨大なじょうへきのすがたが見えはじめてきたのです。

それはあつとうされるほどの、なんともりっぱなじょうへきでした。そのかべは、もも色にきいろがいりまじつた、いんしよ的なばら色の石をつみ重ねてつくられていました。高さは七十フィートほどもあつて、しかもその上には、しんにゆう者のことを防ぐための、とげのついたかぎづめのかたちをしたかざりものまでもが、そなえつけられ

ていたのです（これではとても、のぼっていくことなんてできそうもありません）。ところどころに見張りの塔がつくられていて、そのまどからは今にも、見張りの兵士たちの矢が飛んできそうな感じでした。

巨大さはもちろん、そのがんじょうさにみんなはびつくりしました。もう二千年ほどもたっているのにもかかわらず、じょうへきの石はびつちりとあわさっていて、かかっているところもぜんぜんなかったのです。これならなん百人といった兵士たちがせめてこようとも、びくともしないことでしょう（じつさいこのかべは、あつさが十フィートもあつたのです！ これだけのじょうへきをかまえていたなんて、モーグがいかになりっぱな都市であつたのか？ そうぞうできますよね）。

ですけどここはもう、ずいぶんとほつたらかしのままにされてきましたので、じょうへきのがんじょうさはともかく、まちそのものはやつぱりずいぶんと荒れ果てているようでした。それはこのじょうへきにからみついた、なんともぶきみな感じの植物のことも見れば、わかりました。いえ、植物というよりも、それはかびといった方がいいかもしれません（チーズに生やすかびならチーズをおいしくするのにやくに立ってくれますが、これはもう見るからに、どくの強そうなこわーいかびだったのです）。うすみどり色の糸のようなものがいちめんにとわりついていて、それにはとところどころに、つぼみのようなまるいものがあります。そしてそのまるいものが、ときどきぶ

しゅー！ というにぶい音を立ててつぶれて、中からもやのようなみどり色のこなを、吹き出していました。

「このさきに、入り口の門があります。いせきの北がわには、それいがいに入り口はありません。あとの門は、ほんたいがわの南がわの出口だけだという話です。」じょうへきを前に、チップがみんなに説明しました。

「まちの東と西は、どうなっているんだ？」ベルグエルムがチップにたずねます。しかしチップは首を横にふって、ざんねんそうにこういふばかりでした。

「だめです。いせきの両がわは、切り立ったがけと岩場になっていて、とても通りぬけられません。そういったしぜんの地形をりようして、このいせきのまちはつくられたんですって。まさに、かんぺきな守りなんです。」

みんながやってきたこの場所からは、じょうへきが西とはるかな南へとむかつてのびていました。そしてチップのいう通り、南へのかべはしばらくいったさきで、おそろしいほどのだんがいぜつべきの中へとつづいていたのです。これではからだひとつだけでも、とてもさきへと進むことなどはできないでしょう（ましてやみんなは、騎馬たちをつれていましたもの、進めるわけありませんでした）。そしてこれは、西がわのじょうへきでも同じことでした（しかも西がわのじょうへきのさきは、そこからさらに、海へとつづいておりましたので、なおのことむりだったのです）。

「南へいきたいのなら、モーグをぬけよということか……」ベルグエルムが、じょうへきからみついたかびのような植物を、ゆびでつんつん、つつついてみながらいいました（そうしたらゆびにどくどくしいこながついてしまったので、あわててズボンでふき取りましたが）。モーグを通らなければさきへは進めない。それはさいしょからわかっ
ておりましたが、やはりなんとか、ほかに道がないものかと、みんなはわずかなきたい
もいだいていたのです。しかしそんなわずかなきたいでさえも、こうしてかんぜんに、
うちくだかれてしまいました。

「こうときまれば、門を越えていくいいが、道はないようだ。門までいってみよう。」ベルグエルムがそういって、騎馬のむきを変えました。

「それしかないね。フェリー、心のじゅんびはいい？」ライオンがフェリアルの方をむいて、いたずらっぽくつづけます。

「わ、わたしは、もとより、へいきですつてば！」フェリアルが、やつきになっていいました。

こうして一行は、ついにモーグの入り口までやってきたのです。そしてこのあと、フェリアルのかつてないほどのたいへんなできごとが起こってしまったのですが、それはもうすこしあとで。今は、モーグにはいるその方法を、考えなければなりませんから。

入り口の門は、チップの説明の通りでした。がんじようそうな木でできた大きくて重そうなどびらが、かたくとぎされていて、もう見るからにひらきそうになかったのです（ホテルのドアマンみたいに、両がわから「いらつしやいませ！」とあけてくれる人たちがいたのなら、なんとも助かるんですけど）。じつは長いねん月がたっているのにもかかわらず、この門がいまだにがんじようだったのは、この門にあるとくべつなペンキがぬられていたためでした。このペンキには雨風から木を守る強い力があって、そのため門は、いつまでたつてもがんじようなままで残ったのです。そしてこのペンキは、カピバルのわざによって作られたものでした（ですが、「さすがはカピバル。」って感心している場合ではありませんでした。今は、「こんなの、ぬつてくれなくなつていいのに！」とみんな思つてることでしょうから）。

「うわっ！　が、がいこつ！」門のそばにきたとたん、フェリアルがさげびました。なるほど、見ると門の両わきのかべに、よろいを着て剣とやりのことを持つたがいこつたちが、それぞれ一はずつ、もたれかかっていたのです。かつてのまちを守っていた、兵士たちなのでしょうか？

「だいじょうぶだよフェリー。ただの、ほねほねじゃない。ひよつとしたら、動き出すかもしれないけどね……、うふふ。」ライアンがからかつて、フェリアルにいいました

(まったく、いじが悪いんだから)。

「これはずいぶん、やっかいになりそうだ。」ベルグエルムが、とびらの表めんをなでながらそういいいます(カピバルのペンキのおかげで、門にはあのかびのような植物がぜんぜん生えていなかったのです)。

「これはおそらく、モーグのうら口の門だろう。それでも、これだけ大きいとは。」

ベルグエルムのいう通り、この門はモーグのうら門にあたるものでした。いちばん大きなおもて門は、モーグのはんたいがわ、南がわの方につくられていたのです。うら門はそのおもて門にくらべれば、ずいぶん小さくできておりましたが、それでもとびらのはばは、およそ十五フィートほど。高さはおよそ二十フィートほどもありました。

「それに、これはどういうことだ？」とびらをしらべていたベルグエルムでしたが、ふとなにかに気づいたようでした。

「このとびらは、内がわから木がうちつけられている。渡し木ではない。中にはいれないように、だれかが中から、この門をとぎしたのだ。」

ベルグエルムのいう通り、たしかによく見ると、とびらのわずかなあわせ目のすきまから、たくさんの木の板が横にうちつけられているのが見えました。ふつうとびらをしめきるときには、渡し木といって、かんぬきがわりのじょうぶな木の板をまん中に取りつけるものでしたが、このとびらはそれだけではなかったのです。いったいだれがど

うして、これほどまでにねっしんに、この門をとぎしたのでしょうか？

「そこからはいるのを防ぐためか、あるいは……」ベルグエルムがいました。

「中からなにかがそとに出るのを、防ぐためかもね。」ライアンがベルグエルムの言葉をつづけて、いました。

「いったい、中になーにがいるんだろうね？ 楽しみだなあ。ねえ、フェリー？」ライアンがフェリアルの方を見て、またいたずらっぽくそういいます。

「わたしは、なにかきたってへっちやらですってば！」フェリアルがまた、むきになってこたえました（そんなライアンとフェリアルのやりとりのことを見て、チップが「なんのこと？」とたずねましたが、ライアンが「うふふ。じつは、このフェリーさんはね、」といいかけたところで、フェリアルが「な、なんでもないから！ 気にしなくていいよ！」とわつてはいました。もういいかげんにフェリアルのことをからかうのは、このへんにしておいた方がいいですね。ずっと見守っていたロビーも、「もう。からかつちやだめだよ、ライアン。」といって、ライアンのことをしかりました）。

「それより、どうやってはいるのか？ 早く考えないと。」

みんなをまとめる、まさにごもつものひとこと。それはロビーの言葉でした。みんなのこと（とくにライアンのこと）をまとめるときには、いつも、ロビーのするどいひとことが助けてくれるのです（ふだんあんまりおしゃべりでないぶん、それはよけいに

感じられますよね。

「ロビーどののいう通りです！」フェリアルがライアンのことをはねかえさんばかりに、いいました。「早くはいつて、早く出ないと！ とちゆうで夜になつちやいますよ！」

やっぱりフェリアルがのぞんでいることは、ただひとつ。モーグをさつさと通りぬけるといふことのようなですね。たしかにもたもたしていたら、モーグの中で夜になつてしまいかねませんから、それはやっぱり、みんなだつていやなはずですよ。

「フェリアル、手を貸してくれ。ちよつと、ふたりでためしてみよう。」ベルグエルムがそういつて、門に手をかけました。フェリアルも加わつて、ふたりでいっしょに、えいはい！ とおしてみます。ですけど門は、びくともしません。それからかれらは、ふたりでそろつて、力まかせに体あたりをしてみることになりました。

どしーん！ どしーん！ もうひとつ、「せえの！」どしーん！

「ぼくもやります。」ロビーが加わつて、こんどは三人でためしてみます。

「いくぞ、せえの！」どしーん！ どしーん！

全身の力をこめて、もういちど、どしーん！

「だ、だめだ……！」

もうロビーもフェリアルも、ベルグエルムまでへとへとになって、門の前の地面にたおれこんでしまいました。これだけりっぱなたいかくのおおかみ種族の者たちが、三人がかりでかかって、この門をうち破ることはできなかつたのです（ちよつとひびがはいったくらいでした）。

「こんなになんじょうな門は、はじめてです。ペーカーランドのお城の門だって、こんなにかたくはないですよ。」フェリアルが、ぜいぜい息を切らしながらいきました（かれがじつさいにそのかたさをためすために、ペーカーランドのお城の門に体あたりしたことがあつたかどうかはわかりませんが、でもそんなことをしたら、かくじつに怒られますけどね）。

「体あたりでは、らちがあかない。フェリアル、手おのを持っていただろう？ あれですこしずつ、こわしていくしかなさそうだ。かなりの時間がかかるが、やむを得ない。」ベルグエルムが、今のこのじょうきようにとつていちばんと思われる方法のことをいきました。ですがそれは、あくまでもふつうの旅人たちにとつての話。われらが旅の仲間たちの中には、こんなときにすばらしい（おそろしい？）までの力をはつきしてくれる、たよれる人物がひとりいたのです。

大きな三人のウルファたちの前に、進み出たのはだれでしょう？ チップじゃありません。となれば……、それはもう、ひとりしかいませんよね。そう、それはからだの小

さな、でもとっても大きな力をその内にひめている、ひつじの少年ライアンでした。

「しようがないなあ。まったくみんな、だらしがないんだから。」ライアンは「ふう。」とため息をついてからそういうと、かばんの中からなにかの品物をひとつ、取り出しました（お菓子じゃありませんよ）。こんどはいつたい、なにを出したのでしょうか？

「こんかいは、とくべつだよ。ほんとはこれ、やったら怒られちゃうんだからね。」

ライアンが取り出したのは、火を起こすために使う、ほくちばことよばれる小さなはこでした。こんなもの、いつたいどうするのでしょうか？ いくら木でできているとはいえ、こんな大きな門をもやしてしまうなんてことは、むりだと思いますけど……（時間をかければもやせるでしょうが、それだったらベルグエルムのいう通り、手おのてこわしていった方が、まだ早くあけられそうです）。でもライアンのことです。みんなが考えつきもしないようなことを、考えているのかもしれないですね。そしてじつさい、考えていたのです！

ライアンは森からかれ木のえだを集めてくると、門の前にそれらをおいて、ちよつと油をたらして、火を起こしました。ですけどこの大きな門にくらべたら、それは文字通りの、ほんの小さなたき火にすぎません。どうやらライアンは、この火の力をかりて、おとくいのにぜんの力をかりるあのわざをひろうするつもりなのようです。でも火の力を使ってこの門をあけるなんてことが、ほんとうにできるのでしょうか？（火の力を

かりるわざは、あのオーリンたちのむかしの谷で、グブリハツグのかいぶつたちを相手に使ったことがありましたが、こんどは相手がちがいました。グブリハツグたちよりもなん十倍も大きな、がんじょうな門なのですから。まあ、あのほのおの矢のこうげきをなん百回もぶちこめば、この門を弱らせることもできるでしょうけど……。

ちなみに、ライアンのとっておきの風のうずのこうげきも、やつぱりこの門にがたをきかせるのには、ふじゅうぶんでしよう。それほどこの門は大きく、がんじょうだったのです。

「ちよつと、あぶないから、そこどいて。まきこまれても知らないよ。」

そういつてライアンは、たき火をはさんで門からすこしはなれたところに立つと、小さな言葉を口にしはじめました。

「風の精霊よ、ほのおのたみよ。」ライアンの静かで美しい声が、その場にひびき渡ります。

「われのとしかけに、こたえたまえ。ともに力をなして、今こそわれに、その力の貸し与えられんことを……」

ロビーたちウルファの三人は、すなおにしたがつて、門からはなれました（ライアンの言葉には、すなおにしたがつておいた方がいいですものね）。いったいなにがはじまるんだろう？ 三人はライアンのうしろの方に下がって、じつとそのようなすを見守るこ

とにします(そこにチップが加わって、四人になりました)。みんなはこんなに静かな表じょうのライアンのことを、ひさしぶりに見た感じがしました。それはかなしみの森の小川で水の精霊たちに出会った、あのときいらいのことだったのです。

ライアンはおだやかな顔をして、ほのおにむきあっております。きれいな顔立ちとあいまって、ライアンのすがたはとてもしんぴ的で、美しく見えました(いつもこうだったら、もつとりっぱに見えるんですけどね……)。

そうするうちに、ほのおがぱちぱちと音を立てはじめ、やがてそれは、ごうごうという、大きなうなり声へと変わっていったのです。

「ほのおよ、風よ、ひとつとなりて、さらなる力を！」

とたんにほのおがはげしくもえさかり、大きなはしらに変わりました！ あたりの空気がぐるぐるとうずをまいて、そのほのおのことを取りかこんでいきます。なんて力強い、風とほのおのたつまきなんでしょう！ それは今までにみんなが見た、風やほのおの力とは、まったくべつものといっていいほどの力強さでした。

「いつけえー！」

ライアンが大きくさげました！　するとどうでしょう！　その強力なほのおのたつまきが、いつしゅんバスケットボールくらいの大さのまるいかたちになったかと思うと、そこからおそろしいけものすがたをしたほのおと風のエネルギーが、ごう音とともに、門にむかつて飛び出していったのです！

そして！

ががががあーん！

なんてすさまじい、はかい力！　なんとなんと、目の前の巨大な木のとびらが、モグのまちはるかむこうの通りにまで、どんがらがながつしやーん！　ばらばらになつて吹き飛んでいってしまいました！

まあ、みんなのびつくりぎょうてんしたこと！　もうロビーもベルグエルムも、フェリアルもチップも、口をあめぐりとあげつばなしにして、なんにもいうことができませんでした。

ずずーん……。

門のざんがいが、遠くでさいごの地ひびきを立てていきます。その門がもともとあつ

たところなどには、もう、けむりと、ぱらぱらとちらばる火のついた木のはへんだけが、残っているばかりでした。

「みんな、門、あいたけど?」

ライアンが木のはへのちらばる中に立って、みんなのことをふりかえっていいました。その顔にはいつものライアンの、いたずらっぽい笑みが浮かんでおります。いつぱうみんなは、あいかかわらず口をあけたまま、動くことすらできませんでした。ようやくベルグエルムがわれにかえって、ライアンにむかって声をかけたのは、それからだいぶたつてからのことだったのです。

「お、おどろいた……。いったいどこから、そんな力が……!」

まったくベルグエルムのいう通りです。いくらしぜんの力をかりることができろわざとはいえ、まさかこんなに大きな門を吹き飛ばすまでの力があるなんて、きいていませんでしたもの。

これに対して、ライアンはつとめてれいせいなふうをよそおいながら、「ききたいの? しょうがないなあ」といった感じで、みんなにいいました(ほんとうは早く話したくて、うずうずしていましたけど)。

「これはねえ、リア先生に教わったんだけど、ほんとうは使っちゃいけない、きんしきられているわぎなんだ。」ライアンはそういって、木のえだをひろって、地面になにやら絵

のようなしるしをいくつか書きつらねていきます。

「これが、ぼくたちの世界を作っている、精霊たちの力ね。」そういつてライアンは、地面に書いた、火、水、風、土、やみ、そのほかのしるしのことを、みんなに見せていきました（といっても、みんなにはそのしるしがなにをあらわしたもののなか？ よくわかりませんでしたが。ライアンの絵はまるつきり、子どものらくがきみたいにへただったのです……）。

「この精霊の力っていうのは、それぞれがひとつひとつに分かれて、そんざいしているんだよ。そうじゃないと、力のバランスがおかしくなっちゃうんだって。だから、風の力は風の力。火の力は火の力だけで、かりなくちやいけななんだ。」

ライアンはそれから、リア先生に教わった話をみんなに説明してきかせましたが、みんなにはライアンのいつていることが、よくわかりませんでした。せんもんようごぼつかりなうえに、ライアンはちしきを知っていることをじまんしたくて、わざとわかりづらいいまわしぼつかりしておりましたから（これはねえ、つまりはレビレンタスのさいせいのりろんにしたがつて、精霊と人とが、ともにユールロントしちやつてるってことなんだよね。だから力のバランスをリロールするためには、ホワールウインドの中心なくちやだめつてことなんだ。」意味がわかりません……）。ですがようするに、「しぜんの力をかりるときには、ひとつのしゆるいの力だけをかりて使わなくてはいけない」

という、きまりがあるということらしいのです。そうしないとせんの力のバランスが、くるってしてしまうのだということでした（ですからもしこのわざを使ったということが知れると、ライアンはものすごく怒られてしまうことになるのだそうでした。リア先生に）。

そして今ライアンが使ったこのわざは、（そのかたいきまりごこのことをむしした）風の力と火の力、このふたつをまとめて、いつきにばくはつさせるといふものだったのです（風と火。ふたつの力のあわせわざなのですから、たんじゆんに考えても、ふつうにひとつの力だけをかりるときよりも、ばいの力が出るわけなのです。そしてじつさいは、ばいどころか、きつと百ばいくらいは強い力が出ていました！ ふたつの力がともにあわさったときに出る力というものは、たんじゆんな算数だけでは、とてもはかりきれないものであったのです。このわざがきんしされているというのも、うなずける気がしますよね。こんなに強力な力をかんたんに使ってしまったとしたら、それこそ、たいへんなことになってしまいかねませんもの）。ですからあれほどまでに強力な力が、はつきされたというわけでした（そのかわり、しぜんの力のバランスを、だいぶこわしてしまふことになりましたけど……）。

「さつきもいったけど、こんかいは、ほんとうにとくべつだよ。リア先生には、ないしよだからね。怒られちゃうから。もし、しゃべったら……」ライアンはそこで、みん

なの顔をじーつと見渡しました。みんなは、ぜったいにしやべりません！ といった顔で、（いっしょうけんめい）首をぶるぶる、横にふりつづけまます（みんなまだ、いのちはおしかったですから……）。

「よかった。じゃ、やくそくは守ってね。」にこつと笑うライアンに、みんなは、守ります！ といった顔で、（いっしょうけんめい）首をぶんぶん、たてにふりつづけまます（みんなまだ、いのちはおしかったですから……）。

ちなみに、あの夜のかいぶつにライアンはほんとうは、このわざを使ってやりたいところでしたが、あのとときは火がありませんでしたので、むりだったのです。ですからライアンは、ふつうに使うことのできる風のたつまきのわざを、使ったというわけでした。それでもじゆうぶん、おそろしいまでのいりよくだったのは、みなさんもごしやうちの通りです）。

「ふう。これやると、つかれちゃうんだよね。ケーキ食べようつと。うんつ、おいしー！」

ライアンはかばんから、フォクシモンたちにもらったできたてのパウンドケーキを三つ取り出して、ぱくぱく、おいしそうにかぶりつきまます。モーグへのとびらは、ここにこうして、ひらかれることとなったのです（まさかライアンの力わざでひらかれるなんてことを、だれがそうぞうしたでしょうか？）。

こうしてみんなはいよいよ、モーグのそのまちの中へとふみこんでいくことになりました。ベルグエルムがみんなにもういちど、モーグでの行動の説明をします。とにかくここはもうなん十年と、だれもはいつたことがないわけでしたから、なにが起こつてもふしぎではなかったのです（なにも起こらないことを願うばかりではありませんが）。ですが説明といつても、それはただひとつのたんじゆんなことを、あらためてかくにんするだけのことでした。それはつまり、「中にはいつたら、まっすぐ南の出口をめざす」という、ただひとつのことだけだったのです。

モーグを通ることはいたしかたがないというだけのことなのであつて、ほんとうならばみんな、こんなところは通りたくはなかったのです（べつに、友だちの家があるわけでもありませんでしたし）。けつきよくのところ、「いつこくも早くモーグを通りぬけて、南の地へ出ること」。それだけがこのモーグでの、かれらのもくてきでした（フェリアルにとつては、こんなにすてきなもくてきもなかったことでしょう。モーグでより道をするなんてことは、かれはぜつたいにしたくはありませんでしたから！）。

「おまえには、せわになつたな。」モーグにはいる前に、ベルグエルムがいました。その相手は、そう、きつねの少年、チップリンク・エストルだったのです。チップはとちゆうまでついてきたがりましたが、なにが起きるかもわからないこんな危険な場所に、か

れをいっぽでもふみこませるわけにはいきませんでした（これはほんとうに、ねんをおして、チップにやくそくさせました。ですからチップもしつかりと、このやくそくを守ったのです）。

「村にもどつたら、伝えてくれ。われらはふたたび、もとの美しさを取りもどしたはぐくみの森を、見にもどると。そのときにはまた、きみたちの村によらせてもらうよ。こんどは正式に、かんげいの席にまねいてくれよ。」

ベルグエルムはそういって、チップの頭の手をおいて、そのかみをくしゃつとなでました。チップは目を赤くはらして、だまつてうつむいていました。チップはもう、みんなのことをとても好きになっておりましたから、みんなとわかれることが、とてもつらかったのです。

「また、すぐに会えるさ。」フェリアルも、チップの肩に手をおいていいました。

「そのときは、また、お菓ひをどつきり、用意ひておいてね。」ライアンが、寶石の実のぼうつきキャンディーをなめながらそういって、チップの口にも新しいキャンディーをいっぽん、いれてあげました。

そしてロビーは、ただなにもいえずに、チップの手を取って、その手をぎゅつとにぎりしめるばかりだったのです。

「ありがとう……、みなさん……」チップが鼻をぐずぐずいわせながら、い

いました。「みなさんのごとは、忘れません。ぎつと、また、会いにきてくださいね。」それからみんなはひとりずつ、チップのことをやさしくだきしめてあげたのです。チップはもう、なみだをぼろぼろ流して、「うわーん！」と声を上げて泣いてしまいました。

こうしてみんなは、チップとわかれたのです。それから月日が流れて、このアークランドのすべてのものが、もとの美しさを取りもどすこととなったころ。チップリンク・エストルはすっかりつばな青年となつて、はぐくみの森のさらなるはんえいのために、かつやくしていくことになりました。かれははぐくみの森の安全を守る、森のしゅご隊を作り、そのしよだいの隊長になりました。わたしはいつかまた、みなさんにも、そのチップくんのかつやくの物語のことをごしよかいでできればと思つています。それまでみなさんかどうか、チップのことをおうえんしてあげてくださいね。また会う日まで、げんきでね、チップ！

「なんか、きつたないところだねー。」

門の中をのぞきこんでそうつぶやいたのは、ライアンでした。ライアンのいう通り、モーグの中はじょうへきにからみついていたのと同じ、あのぶきみなかびのような植物に、すっかりおおわれてしまつていたのです。地面にはまるで雪がつもっているみたい

に、わたのようなその植物の根がつみ重なっていました。その中のあちらこちらに、きのこのような植物がより集まって、まるい大きなかたまりを作っております。そしてそのかたまりからは、小さくくらげみたいなのわた毛が吹き出して、それがふわふわと、空にむかつてただよっていききました。

「ぼく、きれい好きだから、あんまりきたないのはやなんだけどなあ……。虫とか出るのだけは、かんべんしてもらいたいんですけど。」ライアンがぶつぶつとつぶやきます。

「まあ、なん十年もそうじしてないんじゃないや、しかたないな。」そんなライアンに、ベルグエルムがいました。「いずれこころも、すっかりきれいになってくれるように、願いたいものだ。」

「おぼけのうわさも、すっかりきれいに消えてもらいたいものです。」フェリアルも、モーグの中のをぞきこみながらそういいます（さいしよは強がっていたフェリアルですが、いぎモーグの中を見てみますと、やっぱりその足はすくんでしまっていたのです）。「なんにも出なければいいんですけど……」さいごにロビーが、不安そうな顔をしていました。「ぼくはもう、この剣でなにかを切るなんてことは、したくはありませんから。」

こうしてみんなは、ついにその門をくぐって、ゆうれい都市とおそれられるモーグのまちの中へと、ふみこんでいったのです。

いちばんさいごに、フェリアルルの騎馬が通りすぎたあとのことでした。門のわきにもたれかかっていた、あの兵士のがいこつたち。そのがいこつたちの目が、ぼうつと、赤くにぶい光を放ったのです。だれもそのことに、気づく者はありませんでした。

モーグのまちの中に、ひさしぶりに生きものの歩く足音がひびき渡りました。それは旅の者たちの乗る、三頭の騎馬たちの足音でした。しかし、ふつう馬の足音といえ、ばからんばからんという、気持ちのよいはずむような足音を思い浮かべるものですが、ここではまったく、そうはいかなかったのです。なにしろこのモーグの地面は、さきほど申しました通り、いちめんにかびのような植物の根が張りめぐらされていたのです。そのため馬のひづめがその上をふみしめていくたびに、ぎゅぽつぎゅぽつという、およそここちよいとはとてもいえない、いやな音を立てていきました（しかもその根をふむたびに、それがねちやねちやと、騎馬たちの足にからみついてきました。これには馬たちもすつかりいやがって、上に乗っているみんなは、馬がいやがってあばれるのを、なんとかだめながら進んでいくこととなったのです）。

道の両がわにはじょうへきと同じ、ばら色の石でつくられたりつぱなたてものが、いくつものままでいました。それらはすべて四かいだてで、やねの高さもみんな、きれいにそろえられております。そしてつぺんのひさし部分には、うみべのまちらしく、

船ではこびこまれるさまざまなものもつを持ち上げるための、クレーンが取りつけられていました（これはみなさんの世界でも、うみべのまちなどではよく見られるものです）。どこの世界でも、同じようなことが考えられていたんですね）。

それらのたてもののかいはといいますと、これはみな、たくさんのしゆるいのお店になつていました。レストランに、きつさ店に、お酒の店。ハムとソーセージのお店に、チーズのせんもん店。服屋さん、かばん屋さん、おもちゃ屋さん、おみやげ屋さん、などなど。ライアンの大好きなお菓子を売るお店も、たくさんありました（そしてここでもいちばんの人気メニューは、はぐくみの森から伝わった、森ペンギンのクリームいりやき菓子だったみたいです。ペンギンのイラストのはいったかんばんが、でかでかとのきさきにかかっておりましたから）。

ところで、これらのお店はもちろん、このまちができたころの大むかしからあったというものではありません。これらはすべて、このまちを通つてはぐくみの森やほかのくにへとむかう旅人たちのために、このあたりの人たちがいせきをリフォームしてつくつたものなのです。そのころには、このまちにもたくさんの旅人たちが足をはこんでいて、ここもなかなか、にぎわっておりましたから）。

え？ りっぱなたてものがならんでいるうえに、こんなにたくさんのお店まであるなんて、ちつともこわくなんかないじゃないかって？ だいじょうぶ、安心してください。

これらのたてものはもうとつくのむかしにうちすてられて、今ではだれも手をつけることのない、文字通りのゴーストタウンになっていたのですから！ かんぼんはぼろぼろ。店の中も荒れほうだい。のぼりばたはぐずぐずにくさりきっていて、それがひらひらと、風にゆれていたのです。そしてそれに追いうちをかけるかのように、あのかびのような植物が店の中までをもすつかり、おおいつくしてしまっていました。ただ古いたてものがあるというより、こんなふうには、かつての人のいとなみが感じられる場所が荒れ果てている方が、よりこわく感じるというものです（はいきよの病院なんて、まさにそんな感じですよね！）。まるで今にも、店のおくからおばけの店主が「いらつしやーい……」と出てきそうなふんいきじやありませんか……。

さらにこのモーグにはもうひとつ、こわいふんいきをもり上げているものがあります。それはまちの空いちめんやあたりの道のことをおおいつくしている、白いきりだったのです。まだおひる前だというのに、おひさまの光はそのきりにみんなさえぎられて、まちの中はぶきみに暗いのです。しかもそのきりは、まるで生きているかのようにゆらーりゆらりと動いていて、それがなんども、人の手やおばけの顔のようなかたちに見えたのです。きばをむいてせまりくるおばけや、こつちへおいでーと手まねきするおばけ……。もうフェリアルがなんど、ひめいを上げたことでしょうか？ そのおばけのようなきりが、ひゅううーというすすり泣きのような声を立てて、みんなのまわりを

すると飛びまわっていました。おや？　あなたのうしろにも……。ふふふ……。すいません。ちよっと、ライアンのいじの悪さがうつってしまったようです……。じゃあこれからは、おどかしつこなしということで。

みんなはこんなふうに、モーグのまちなみをおそろおそろ見てまわりながら進んでいきました。しかし、おそろしいまちであることにちがいはありませんでしたが、それでも今は、そんなことに気を取られている場合ではありません。いつくも早くこのまちはぬけていくことを、みんなはいちばんに考えなければなりませんでしたから（さすがのライアンでも、むかしのお菓子屋さんのぞいてまわるようなことはしませんでした）。みんなはとりあえず、モーグのまちなみの方に見えているいっぽんの大きな塔をめざして、進むことにしました。モーグのまちなみを見るためには、まずまちなみの中にあるはずの広場をめざしていった方が、手っ取り早いからです（へたにうら道を進んでいくより、その方が安全ですし、道にまようようなこともないからでした）。

「あの塔はおそらく、大聖堂のものだろう。」先頭をゆくベルグエルムが、みんなにいました。「このまちをおこしたのは、西の大陸から渡った、ひとりの船乗りだときく。それからまちは、急そくにはってんしていったらしいが、あの大聖堂も、そのなごりのひとつだろうな。」

「でも、大聖堂なら、なんで塔がいつぽんしかないのかな？　ふつう、二本じゃない？」

ライアンもふしぎそうに、つづけました。

「このあたりは、海に近いからな。」ベルグエルムがこたえます。「きつと、地ぼんが弱いのだろう。二本の塔をたてられるほどには、しっかりした土地ではなかったのだ。」

ベルグエルムのいう通り、このモーグの下の地面は水を多くふくんでいるため、高い塔を二本たててしまうと、たおれてしまう危険がありました。ですからかつての人々はしかたなく、塔をいっぽんだけたてたというわけだったのです。ですけどそれがかえてまちの名物となり、この大聖堂には毎日たくさんの人々が、おいのりにおとずれていました（ちなみに、この大聖堂の名まえはロザムンディア大聖堂といいました。ロザムンディアにある大聖堂だから、ロザムンディア大聖堂。うくん、わかりやすい）。

「このさきをまがれば、大聖堂のある広場にいけるようだ。急ごう。フェリアル、ちやんと、ついてきているか？」

ベルグエルムがふりかえると、いちばんうしろからついてきていたフェリアルが、馬のたづなをとるのもそこそこに、手にしたお守りをにぎりしめて、ぶつぶつと、おいのり言葉を口にしてしているとこゝろでした。

「神さま、女神さま、精霊さま。どうか、おばけからお守りください……！」

そしてみんなが、大聖堂へとむかうそのまがりかどを、まさにまがったときのこと

……。

その道のさきで、みんなは思わぬものに出くわしたのです。

「うわっ！」

先頭をゆくベルグエルムが、あわててたづなをひきました！　かれの乗るはい色の騎馬が、ひひーん！　と大きな声を上げて、前足立ってとまります。そしておどろいたのは、ベルグエルムだけではありませんでした。

「うわっ！　びつくりした！」

「な、なんだ？」

「馬が、こんなところに！」

なんとなんと！　それらの声のぬしは、旅の者たちの前にとつぜんあらわれることとなった、三人の人間の男の人たちだったのです！

みんなはそろって、おどろきの声を上げました。ロビーたち旅の者たちにとっては、まさかまさか、モーグに人がいるなんてことは、思ってもいないことでしたから。ですがそれは、この人間の男の人たちにとつても、同じことのようにでした。

「あ、あなたたち、いったいこんなところで、なにをしているんです！ どうやって、このまちにはいったんですか！」

みんなが声をかけるまもなく、ひとりの男の人がしつもんしてきました。ねんれいは、三十さいくらいでしょうか？ 肩くらいまで黒のまつすぐなかみをのぼして、クリーム色のシャツを着ております。かれのまわりにはことさらにこいきりがまわりついていて、足もととはよく見えませんでした。かれの衣服はこのきせつにしては、うすすぎるように思えました。シャツの下にはなんにも着ていないようですし、ズボンのきじも、ずいぶんとうすいものだったのです。いったいこんなかつこうで、寒くないのでしょうか？ ですがそれがいいのところは、かれはいたってふつうの人のように見えました。人のよさそうな顔をしておりますし、いかにもおっとりとした、あらそいを見えない人といった感じだったのです。それはおおむねのところ、ほかのふたりとも同じようでした。

「おどろいた……！ まさかモーグで、人に会おうとは！」ベルグエルムがおどろきをかくせないままに、いいました。

そしてつづけてベルグエルムは、あたりさわりのない言葉をえらんで、かれらに自分たちのことを説明したのです。

「わたしたちは、わけあって、南への道を急ぐ者です。東の街道がよこしまなる者たち

の手に落ちてしまったがために、やむなく、このモーグ、ロザムディアのまちを通つて、南へとむかおうとしていたところなのです。」

そのとき。うしろからフェリアルがやってきて、かれらに話しかけました。

「よかつた！ やつぱり、モーグはおぼけのまちなんていううわきは、うそだつたんですね！ 今でもちやんと、人が住んでいたんだ！」

かれらのすがたを見て、フェリアルは心の底からほつとしたのです。フェリアルは、今にもあたりの道からおぼけのむれがやってくるんじゃないか？ とひやひやしておりましたので、こんなふう生きている人たちに出会えたことが、うれしくてなりませんでした。

「わたしは、フェリアル・ムーブランドと申します。どうぞ、こんごともよろしく！」
フェリアルはうれしきのあまり、思わずじこしようかいまでして、手をのばして、かれらにあくしゆをもとめました。

これを見て、三人の男の人たちはちよつとびつくりしたようでしたが、こんなふうにあくしゆをもとめられては、ことわるわけにもいきません。さきほど話しかけてきた黒かみの男の人が、だいひょうして、同じようにフェリアルに手をのばして、自分もじこしようかいをしてかえました。

「これは、じこいいないにどうも。わたしは、ミリエム・オーストと申します。このまち

で、ゆうれいをやっております。こんごともよろしく。」

フェリアルは、ミリエムと名のつたその人の手を、にぎろうとしました。って……、え？ 今、なんていいました？ ゆ、ゆうれい？

フェリアルが、あれ？ と思ったそのときのことでした。かれはたしかに、ミリエムさんの手をつかんだはずでした。ですがその手には、まったく手ごたえがなかったのです。

「え……？ う、うそ……！」

フェリアルはなんども、ミリエムの手をつかもうとしました。しかししかし、フェリアルの手はミリエムの手のあるその場所で、ひらひらと空を切るばかりだったのです。ま、まさか……！

「あ、わたし、ゆうれいなんで、生きている人にはさわれませんでした。すいません。」
ミリエムがぺこりと頭を下げて、あやまりました。これをきいた、フェリアルはとうとう……。

「う……、うくん……！」

もう言葉にもなりません。かわいそうにフェリアルは、そのままきぜつして、騎馬の上から地面の上に、ぱったりとたおれ落ちてしまったのです！（さいわい、かびのような植物がクッションになってくれたおかげで、けがをすることはありませんでした。）

「フェリアルル！」ベルグエルムが騎馬からおりて、かけつけました。ロビーもライアンも、フェリアルルのもとに走りよります。よかった、どうやら気を失っているだけで、たいたことはないみたいです。

「あの……、だいじょうぶですか？ その人。」ミリエムが心配そうに、フェリアルルのことを見つめました。

さあ、とんでもないことになってきました！ みんなが出会ったこの人たちは、ふつうの人たちのように見えました。じつはじつは、ほんもののゆうれいたちだったのです！ それにしても、ゆうれいのくせに、なんてふつうに出てくるんでしよう！ 出てくるんだったら、もっとそれらしく……、って、そんなもんくをいつている場合ではありませんでしたね。

いわれてみれば、たしかにそれらしいところがひとつ、ありました。それはかれらのからだか、ぼんやりとすけているところでした。はじめ出会ったときには、この深いきりがじやまをして、かれらのからだがよく見えませんでしたので、それがわからなかつたのです（ちなみに、かれらがこの寒いきせつにうす着のままだったのは、かれらがゆうれいになったとき、きせつが夏だったからでした。ゆうれいでしたから着がえる必要ありませんでしたし、もとより、あつさ寒さも、かれらは感じなかつたのです。

これはゆうれいの、べんり(?)などころでした。

「ゆ、ゆうれいって……! ほんとうにあなたたちは、ゆうれいなのか……?」

ベルグエルムが信じられないといったようすで、おばけの人たちにいました。ベルグエルムの気持ちもわかりますよね。だれだって、こんなにも「ふつう」のゆうれいなんて、信じられるとも思えませんもの。ですがそんなみんなの前で、ミリエムたちゆうれいの人たちは、自分たちがほんもののゆうれいであるのだということ、はつきりしようめいしてみせたのです。

「まあ、信じられないのも、わりはないでしょうね。でも、ほら、ほんものですよ。」
そういうと、三人のゆうれいの人たちは、すうつと消えてしまいました! そして……。

みんなの見ている前で、なんともふしぎなことが起こりました。騎馬にくくりつけられているにもつのふくろの中から、お皿にフォーク、スプーンなどが、するするとぬけ出して、それがひとりでに、空中をすいすいと飛びまわりはじめたのです! (それらの品々は地面に近いところだけでなく、頭のはるか上の方にまで、ふわーつと飛んでいたりもしました。)もうみんなはとてもびつくりして、口をあんぐりとあけたまま、目の前の光景に見いつてしまいました。そして、しばらくたつたころ……。

とつぜん、みんなの目の前に、ミリエムたち三人のゆうれいの人たちが、ふたたびす

がたをあらわしたのです！ しかもその足は地面からはなれていて、かれらは空中を、ゆらゆらとただよっていました（まさにゆうれいのように！）。そしてかれらの手には、お皿やフォーク、スプーンなど、さきほど空中を飛びまわっていたそれらの品々が、にぎられていたのです。そう、かれらはすがたを自由に消したり、空中をまるでゆうれいのように（ゆうれいですから）、ただよったりすることができました！ ひとりでに飛びまわっているように見えた品々は、かれらがすがたを消して、空を飛んであやつっていたというわけだったので。

「これで、信じてもらえました？」ミリエムが、にこにこした顔でみんなにいいました（ゆうれいの笑顔というのもおかしなものです……）。

「えーつと、それで、なんの話をしていたんでしたっけ？」

ひとだんらくがついたころ、ミリエムがゆびを口にあてながら、ほかのふたりと顔を見あわせて考えこみました。そしてとつぜん、かれは大きな声でさけんなのです。

「そうですよ！ こんなこと、やつてる場合じゃないんです！ わたしたちがゆうれいになつてしまったわけが、ここにはあるんですから！ あなたたち、まさか、北門をこわしてきたんじゃないでしょうね？」

いわれてみんなは、ぎくっ！ となりました。とくにライアンは、北門をこわしたちようほんにんでしたから、よけいだったので。

「だ、だって、しかたなかったんだもん！ そうしなきや、中に、はいれなかったからさ。ねえ、ロビー？ しょうがなかったもんね？」ライアンがあたふたとこたえました。そして話をふられたロビーも、もつとあたふたになって、なんとかこの場をとりつくるおうと、がんばったのです。

「あ、う、うん。そ、そう、しかたなかったんです。それで、その、ちよつとだけ、門をこわしてきちやつたんですけど……、ごめんさい。」

ほんとうは、こつぱみじんに吹き飛ばしてしまいましたが……、まあでも、どうしても中にはいらなければなりませんでしたから、なんとかゆるしてもらうしかありませんね。

「やつぱり！ わたしたちは北門の方から、なにかものすごい音がしたから、こうしてしらべにやってきたところだったんです。」ミリエムがいました（ものすごい音のしゅうたいについては、いうまでもありませんよね）。

「あなたたちは、自分たちのしたことがわかっていないんだ！ 問題は、門をこわしたなんてことじゃあないんです！ 門を通って、ここにはいつてきたことが、問題なんですよ！」

ミリエムもふたりのゆうれいさんたちも、そういつて、みんなそろってしんけんな顔をして、ロビーたちにくい下がりました。いったいどうしたというのでしょうか？ どう

やら、門をこわしたからそれで怒っているというわけでは、ないみたいです。

「らんぼうな方法でここにはいったことは、おわびいたします。ですが、いったい、なにがあるというのです？ 門をぬけたことが、それほどまでに重大なことなのですか？」ベルグエルムがゆうれいさんたちにたずねました。

「ぼくたちは、すぐに、ここをぬけていくつもりなんです。みなさんに、これ以上のごめいわくは、かけませんから。」ロビーがかれらに説明します。

「そうだよ。こんなかびっぽいところはずっといたら、ぼくたちみんな、チーズになっちゃうもん。」ライアンも、フェリアルのかんびようをしながらいいました（ちなみに、フェリアルは地面の上でライアンにひざまくらをされながら、ずっときぜつしていません）。

「むりですよ！ あなたたちはもう、ここから出られなくなってしまうんです！」ミリエムが、なんともおそろしい言葉を口にしました。ここから出られないって？ それはほんとうの、いちだいいじやありませんか！

「ああっ！ だめだ！ もう、やつらがやってきた！ ほら、あの空のむこう。すごいはやさで、こつちにむかつてきている！」

ミリエムが、空のむこうをゆびさしながらいいました。みんなはいっせいに、空の方を見やります。いったいあれは、なんなのでしょう？ 見ると、まちのじょうへきのそ

の上の方に、小さな黒い鳥のむれのようなものが、こっちへむかつて飛んできていました。それも、すごいはやさで！

「あれはなんだ？ 鳥にしては、はやすぎる。それに、つばさがないぞ！」ベルグエルムがいました。

みんなが見ている間に、それはどんどんこちらへと近づいてきます。やがてそのすがたがもつとはつきり見えるようになって、みんなにはそれが、黒いぼろぼろのマントに身をつつんだ、なにかの黒いかたまりたちであるということが、わかりました。

「どこへ逃げて、だめなんです！ あいつらは、生きている者からたましいをぬき取って、空のかなたに持って行ってしまおうんですよ！」

な、なんですって！ たましいを持っていつてしまおう？

「たましいを持っていくだって！ それはまずい！」ベルグエルムがすぐに考えをめぐらせて、さげびました。「たましいがからだから遠くはなれれば、からだは、かんぜんに死んでしまうときいたぞ！」

そう、かれら旅の者たちは、はぐくみの森の地下いせきにおいて、たましいをうばわれてしまった人たちのことを、見てきたばかりだったのです。そこで知り得たこと。それは「たましいがからだから遠くはなれてしまうと、もうたましいはもとのからだにもどることができなくなつて、からだはほんとうに死んでしまう」ということでした。あ

の地下いせきにいた旅人たちは、たましいをうばわれてはしまったものの、そのたましいがかいぶつの中から残つてすぐそばにとどまっていたがために、ふたたび助かることができたのです（せいぜい四ぶんの一マイル以内の中に、たましいがありました）。ですがゆうれいさんたちの言葉をきいたかぎりでは、こんかいはとも、そんなふうまいぐあいにはいかないうでした。たましいが遠くかなたの空に持ち去られてしまつては、残つたからだは、ほんとうのほんとうに死んでしまふのです！

これはいよいよたいへんなことになつてきました！（ゆうれいに出会つたことよりも、こつちの方がたいへんです！）みんなはあわてふためいて、きたるべく戦いにそなえて身がまえました。これは文字通り、いのちがけの戦いでした。しかし、こうなつてはもう、戦うほかに道はないのです。こんなところでこの旅がつづけられなくなつてしまつては、いつたいこのアーケランドは、どうなつてしまふのでしょうか？ それだけは、なんとしてもさげなければ！

ベルグエルムとロビーはそれぞれの剣をかまえて、そしてライアンはいつでも（しげんの力をかりて）相手をむかえうてるようにとじゆんびをして、せまりくる敵にむきあいました。そしてとうとう、黒いマントに身をつつんだそのおかしな相手たちが、みんなの目の前へとやつてきたのです！

これはいつたい、なんという相手なのでしょう！ 黒いマントの中には、ただまっ黒

な影のようなものはいっているだけでした！ 顔は見えませんが、足もありません。かわりにマントの下から、小さなしっぽのようなものが、ちょこんとたれ下がっているだけだったのです。

みんなは思わず身ぶるいました。こんな相手に出会ったのは、ひやくせんれんまの騎士ベルグエルムでさえも、はじめてのことだったのです。

「おまえたちは、なに者だ！ ここは、おまえたちのくるようなところではない！ 立ち去れ！」ベルグエルムが剣をかまえて、さげびました。しかし相手には、それがきいていないみたいです。全部で四つのそれらの影は、「けらけらけら！」といううすきみの悪いかん高い笑い声を上げると、まるでみんなのことを値づみしているかのように、するとそのまわりを飛びはじめました。

「おのれ！ 白の騎兵師団、一のたちを受けてみよ！」ベルグエルムがせんじんを切つて、影のひとつに切りかかります！ しかし……！

「うわっ！」

黒いマントをまつたつにたち切ったものの、ベルグエルムの剣はその中の影そのものにはまつたくききめがなく、そのやいばは影のからだをするりと通りぬけてしまいました！ 思わぬことに、ベルグエルムはそのままバランスをくずして、すつてんころりん！ はんたいがわの地面にころけてしまいます（なんだかちよつと前に、これとす

ごうくにている場面を見たような気がしますが……。まあ、同じようなことは、よく起こるものですから。

たおれたベルグエルムのことを見て、ミリエムたちがさげびました。

「だから、だめなんですよ！ そいつらに、剣はききません！ そいつらから身を守る方法なんて、ないんです！」

そうなのです、この影たちはあのはぐくみの森のいせきで出会った夜のかいぶつみに、剣で切ることができませんでした！

「こいつめ！ これならどうだ！」ライアンがいしきを集中させて、影にむかつて空気のかたまりを飛ばします！ しかしやっぱり、それはマントを吹き飛ばすばかりで、影にはぜんぜんききめがありませんでした。「えーん、やっぱりだめー！」

こうなったら、たよりにできるのはただひとつの方法だけでした。ロビーのあのふしぎな剣なら、この影のおぼけたちをたおすことができるはずです！

「みんなから、はなれろ！」

みんなが思うまもなく、ロビーが剣をにぎりしめて影に切りかかりました！ モーグにはいる前に、この剣でなにかを切るなんてことはもうしたくないと思っただばかりでしたのに、やっぱりこのモーグでは、そもいかないうでした（それにしても、こんなに早く、またこの剣を使うことになろうとは。このさきどれほどの危険が待っているの

か？ 心配です。

ロビーの戦いぶりは、なんともいさましいものでした。その剣さばきは、けっしてじょうずなものとはいえませんでした。せまりくる影をばったばったと切りたおし、そしてとうとう、あとひとつの影を残すまでとなったのです！（切られた影はしゅーっ！ という音を立てて、黒いけむりとなって消えてしまいました。ミリエムたちゆうれいのみなさんがびつくりぎょうてんしたのは、いうまでもありません。きかないと思っていた剣のこうげきが、こうしてきいていましたから！）

「すごい、すごい！ やっちゃえロビー！」ライアンはもう両手をふりかざして、むちゆうでロビーをおうえんしました。

「ロビーどの！ お気をつけて！」ベルグエルムも手にあせにぎって、戦いのようすを見守っております（ところで、みなさんの中にはこう思った方もいるのではないでしようか？ ロビーのこの剣をかりて、ベルグエルムが剣のうでまえをふるったらいいやなにかつて。それはごもつともなのですが、じつはこの剣は、ロビーがいの者には、そのとくべつな力をはつきすることができなかつたのです。ですからベルグエルムがこの剣で戦っても、それはふつうの剣としての力しか出せず、この影のおばけたちを切ることができませんでした。

このことは、あの夜のかいぶつのいた地下いせきの中で、わかったことでした。ベル

グエルムがこの剣を持ったとたん、あかりとなつてくれていた剣の光が消えて、あたりがすっかり、まっくらになつてしまつたのです。あわててロビーが剣を持ちなおしたら、ふたたび光がもどつたというわけでした。そこでみんなは、この剣の力はロビーいがいの者には使うことができないというけつろんに、たつしたのです。もとよりこの剣は、ロビーにたくされたものでしたし、みんなもまつたく、それでなつとくしました。

それと……、こんなにだいじなことを今ごろお伝えしたのは、このことを、このモーグの戦いの場面で説明したかつたからなんです。説明するのを忘れていて、あわてて今、いったわけではありませんよ……、うん。

さあ、ロビーの戦いはどうなつたでしょう！ ロビーは息を「はあはあ。」とついで、残るひとつの影にむかつていました（その手に持った剣はあの地下いせきの中でのように、ぼんやりと青白い光を放つようになつていました。これは剣の力がはつきされていくという、しょうこでもあつたのです）。ところが、このあとひとつの影がやつかいでした。この影はすでにたおしたほかの三つの影たちとはちがつて、とてもすばしっこかつたのです（さしずめ、この影たちのリーダーといつたところでしょうか？）。ロビーはなんども剣をふるいましたが、なかなかこの影のことをとらえることができません。影の方も、切られてはかなわぬと思つているのでしょうか？ ロビーの方になかなか、近よつてこようとしませんでした（いがいに頭のいい影みたいです。影にちえがあるのか

どうかはわかりませんが)。

そしてついに、この影が大きな行動に出ました。影は空に大きくまい上がると、そのままいつきに、ロビーの方にむかってとっしんしてきたのです！

「あぶない！ 気をつけて！」 ミリエムが大声でさげびました。

「ロビー！」 「ロビーどの！」 ライアンもベルグエルムも、思わずさげんでしまいました。

さあ、いよいよ大いちばんです！ ロビーは剣をがちりとにぎりしめて、影にむかいました。むかつてくる影をこの剣でくしぎしのバーベキューにしてやろうと、ロビーは心にきめていたのです。

影がロビーのすぐそばまで飛んできました！ ロビーは剣のさきを影にむけて、かけ出します。そして……、剣が影をまさにくしぎしにしようかという、そのとき。その影はロビーの目の前でするりとむきを変えて、そのままあるひとりの人物のもとへとむかって、とっしんしていききました！

「ええっ？」

ロビーはびっくりして、影のことを目で追いました。もうとつぜんのことでしたから、ロビーもみんなも、わけがわかりませんでした。しかしみんなはつぎのしゅんかん、心の底からこう思うこととなったのです。しまった！

影のむかつたさき。そこには、ひとりの人物が横たわっていました。ああ、なんてことでしよう！ それはおぼけにおどろいて、きぜつしてしまっていた人物。そう、ここに横たわっていたのは、白の騎兵師団のウルファの騎士である、フェリアル・ムーブランドだったのです！

「ああ、なんてことだ！ もう、まにあわない！」ミリエムたちが頭をかかえてさげばしました。そしてかれらのその言葉は、ついに、ほんとうのこととなつてしまつたのです。影はきぜつしているフェリアルの中からだに、するりとはいりこんでしまいました！

そしてみんながかけつけるよりもさきに、影はフェリアルの中からだから、かがやくきいろい光のようなものをうばい取つたのです。それはまさしく、フェリアルのたましいにほかなりませんでした。

もうみんなには、なすすべもありませんでした。影はフェリアルからぬき取つたそのたましいを両手でがっちりとかかえこむと、そのままけらけらと笑いながら、空高くまが上がっていつてしまつたのです。そして影は、もときたまちのそとのほうがくへとむかつて、飛び去つていつてしまいました。これはかれらが今までに出会つたどんな敵やこんなんよりも、おそろしいできごとでした。フェリアルのたましいが、うばわれてしまつたのです！

みんなはたましいをぬかれたフェリアルのもとに、かけよりました。フェリアルのか

らだをだき起こして、ゆさゆさとゆさぶります。ですがフェリアルの中からだには、もうまったたく、力がなくなってしまうていました。

みんなはがくぜんとしました。フェリアルたましいは、もうはるか空のむこうへと、飛び去っていつてしまったのです……。こうなつてしまったのなら、フェリアルの中からだにふたたびそのたましいがもどるなどということは、とてもぞめないことでした……。

「うわーん！ フェアリーが死んじやつた！」ライアンが、なみだをこぼしていいました。

「ぼくがずっとそばについていれば、こんなことにはならなかつたのに！」

ライアンはくやしそうにそういつて、フェリアルの手をぎゅつとにぎりしめました（ライアンは影が飛んできたときに、ひざまくらをしていたフェリアルのことを、地面に放り出してしまったのです。戦いがはじまろうとしていましたから、しかたありませんでしたが）。

「なんてことだ……。まさか、こんなことになろうとは……。」「ベルグエルムもすつかり力を落として、なげきます。

「ぼくのせいです……。」「ロビーが、手にした剣を力なく地面に落として、いいました。「ぼくが、ちゃんとやつつけてさえいれば、フェリアルさんは助かつたんだ！」

ロビーはすっかり力がぬけてしまって、両のひざを、地面にぺったりとつけてしまいました。

「なにをおっしゃいますか！ ロビーどののせいであるはずありません！」ベルグエルムがロビーにそういつて、ロビーの手を取つて、そのからだを起こしてあげました。「これは、じつにふこうなできごとです。だれにも防ぐことはできなかつた。フェリアルはわが身をぎせいにしつて、ロビーどののをお守りしたのです。われらはそのことにかんしやして、旅をつづけなくてはなりません。フェリアルのぎせいを、むだにしてはならないのです。」

ベルグエルムの言葉に、みんなは声も出せず、ただただその場に立ちつくしているばかりでした。みんなフェリアルのそのなきがらにむかつて、深く頭を下げて、せいっぱいの敬意の気持ちをあらわしていました。ロビーもライアンも、なみだをぼろぼろこぼしてかなしみました。ベルグエルムはくちびるをきつ、とかみしめて、そのつらい気持ちを抱くつとこらえていました。

「あの……、みんな、なにをやっているんですか？」

そのとき、うしろから急に、だれかの声がきこえました。ミリエムたちでしょうか？

それにしても、みょうになじみのある声のような……？

みんながうしろをふりむくと、そこにはひとり的人物が立っていました。そしてその人物の顔を見たしゅんかん。みんなはたましいが飛び出るほどに、おどろいたのです。

そこに立っていたのは、なんとということでしょう！ フェリアルほんにんでした！

「え、ええーっ！」

みんながおどろいたことといったらー！（たぶん今まででいちばんおどろいたことでしょう。）たましいを持っていかれて死んでしまったとばかり思っていたフェリアルが、こうして目の前にあらわれましたから、むりもありません。しかしおどろいたのは、みんなだけではありませんでした。

「ど、どうかしましたか？ そんなにおどろいて。それにしても……、いったい、なにを見ているんです？」フェリアルがひよいとのおきこんだ、そのさき……、そこには、ほかでもありません。かれほんにんのからだか、横たわっていたのです！

「え……？ ええーっ！ わたしがいるー！」フェリアルは口をあぐりとあけて、もうたましいが飛び出るほどに、おどろくばかりでした。

さあ、これはいつたいたいということなのでしょう？ どうやらこのさき、まだまだ、とんでもないことになってしまいうような感じですよ（それにしても、ああやっぱり！ モーグをすんなりと通りぬけることなどはできませんでしたね。はじめから、いやなよかんはしていましたか……）。

これからの旅がどうなっていくてしまうのか？ そしてフェリアルの運命は……？
物語はこれから、思わぬほうこうへとむかって、進んでいくこととなるのです。

11、おばけのまちでおるすばん

今からなん十年と前のこと。このアークランドよりもずっと西の、海のむこうの大陸でのお話です。その大陸にはじつにさまざまなくがあつて、じつにさまざまなぶんかがごつたがえしていました。住んでいる人たちもじつにさまざまでした。人間はもちろん、ありとあらゆる動物の種族の者たち。海の種族、山の種族、小人たち。動く木の種族。果ては、はつきりとしたからだを持たない、けむりのようなすがたの種族の者たちまで、じつにさまざまな種族の者たちがこの大陸には住んでいたのです（アークランドのウルファたちとはしゆるいがちがいましたが、おおかみ種族の者たちもすくなくならず住んでいました）。ですから人々はこの大陸のことを、しぜんとこうよぶようになりました。いろんなものがまじりあつた大陸。こんごう大陸ガランタと。

そのガランタ大陸の東の果て、みなとの大都市ポート・ベルメルからほど近いヴァナントという小さなまちに、ひとつの魔法学校がありました。このヴァナントというまちは、魔法をあやつるために必要な力がほかの土地よりもたくさんあつたということ、数多くの魔法をこころぎず者たちがしゆぎようにやつてくるところだつたのです（でもわたしは魔法を使えませんので、力がたくさんあつたといわれても、よくわかりません

でした。そしてこのまちの魔法学校は、ガランタ大陸の中でもいちばんいいほどの、けんいをほこっていました。

あるとし、その魔法学校に長くてきれいな黒かみを持った、すらりとほそい、ひとりの若く美しい女の人が入学してきました。かのじよの名まえはアルミラ・ロングワートといいました。かのじよのさいのうは、はじめからずばぬけていました。そして一年ほどもたつと、かのじよはこの魔法学校のどんなゆうしゅうなせいとよりも、そして魔法を教える先生さえもかなわないほどの、すぐれた力を身につけたのです（この魔法学校のべんきょうきかんは五年でしたから、かのじよがどんなにゆうしゅうか？ おわかりいただけるかと思えます）。

しだいにみんなは、かのじよのそのさいのうをおそれるようになりました。魔法の先生たちはかのじよをこのまま、この魔法学校にいさせておいていいのだろうか？ とひそかにささやきはじめるようになりました。かのじよの力がこれ以上大きくなれば、もう自分たちの手にはおえなくなるということが、わかっていたからです。もしその力を悪いことにも使われたら、たいへんなことになる。

そしてみんながそんな心配をはじめたころのことでした。アルミラ・ロングワートはとつぜん、この魔法学校をやめてしまったのです！ いったいどういうことだろうか？ 学校はかのじよのうわさでもちきりとなりました。そしてそれからしばらく

たつたころ、じけんは起こったのです。

この魔法学校でもっともげんじゆうで、もっともひみつにされている魔法のほかん部屋に、ひとりのどろぼうがはいりました。そのどろぼうとは、ほかでもありません。あのアルミラ・ロングワートだったのです！ アルミラはそこから、使うことをかたくきんじされているある魔法のわざをぬすみ出しました。それはなんともおそろしく、なんともぞつとするわざでした。そのわざとは人のたましいをぬき取って、そのたましいの力で、おそろしい軍隊を作るといふものだったのです！

このおそろしいわざをうばい去ったアルミラのゆくえは、だれにもわかりませんでした。うわざではほかの大陸へ渡って、この魔法のわざのじつけんをおこなっているということでした。そしてそれからどれほどの時間がたつたのでしょうか？ 人々はふたたび、このアルミラの名まえをきくこととなつたのです。おそろしい、魔女の名まえとして。

そう、アルミラとは、このアークランドの西の地に住みついていてという、そのおそろしい魔女のことでした！ アルミラは魔法学校から持ち出したその魔法のわざをたずさえて、ひとり、人目のつくことのないこのアークランドの西の地へと、そのときはじめてうつり住んできたのです。

あれ？ でも待つてください。たしか西の魔女というのは、もうなん千年もむかしか

ら、その土地に住んでいるっていううわさじゃなかったでしたっけ？　じつはそれはまったくのたためで、ほんとうはこの魔女が西の地にやってきたのは、お伝えしました通り、まだほんの数十年前のことだったのです（うわさっていうものはどんなところでも、話が大きくなって広がるものですよね。ベルグエルムやフェリアルをはじめとする南のくにの人たちは、そのうわさをほんとうのことだと思いこんでしまっていたのです）。その数十年のあいだに、魔女アルミラのうわさはどんどん広がっていききました。そしてその魔女が西の土地にやってきてはじめて目をつけたのが、ほかでもない、ロザムンディアのいせきに住む人たちだったのです。

それから三十年あまり。ロザムンディアのいせきはすっかりもとのはいきよのまちなり、モーグというふきつな名まえで人々におそれられるようになりました。このいせきがモーグとなつてしまったわけ。それはどうやら、この魔女がかんけいしているみたいです。いったいこのまちに、なにが起こつたのか？　それはこのあとの物語の中で、語られることになるのです。

「ここが、ロザムンディア大聖堂ですよ。」旅の者たちにそうつげたのは、おぼけのミリエムでした。

「わたしたちは、ちょうど、この大聖堂でミサをひらいていたところだったんです。み

んな、中で待っていますよ。しさいさまもいらつしやいます。」

それはあつとうされるほどの、りっぱな大聖堂でした。モーグのほかのたてものと同じ、ばら色の石を重ねてつくられていて、そのいたるところに、こまかなちようこくがほどこされていたのです。植物のつるや、葉っぱや、お花がたくさん。たくさん動物たち。天使のむれや、ころもをまとつたそうりよたち。そのほか、よげん者、しどう者などといった者たちのちようこくが、ところせましとほどこされていました。

ちようこくの美しさもさることながら、みんなはまず、その大きさにおどろかされました。ここにくる前ベルグエルムとライアンが話しておりましたように、大聖堂にはひとつの塔がつき出ていましたが、その高いこと！ 高さはおよそ、四百フィート以上はあるでしょう！ みんなはただただ、「ふえーっ。」と息をついて、空を見上げるばかりでした（おかげでみんな、しばらく首が痛くなつてしまいました）。

大聖堂のりっぱさとはべつに、みんなが気づいたことがありました。それは大聖堂もふくめてそのまわりの地面だけには、あのかびのような植物が生えていないということでした。地面にはばら色の石だたみが見えていて、それではじめて、みんなはモーグのまちの地面の石だたみに、美しいモザイクもようがほどこされているということがわかったのです（このもようは船とロープをあしらったもので、船乗りのまちだったロザムンディアのまちのマークでした）。

「できたらみんな、そうじしたいんですがね。」ミリエムがいました。「広いまちですから、かびの生える早さに、そうじがとて追いつかなくて……。せめて大聖堂のまわりだけでもと、いつもきれいにそうじしているんですよ。」

ミリエムはそういうと、ふわふわと空に飛び立っていきます（ゆうれいですから）。

「ほら、これなら、大聖堂の上の方までそうじができるでしょ？　はしごがいらなから、けっこうべりなんですよ。」ミリエムが、（空中で）にこにこ笑っていいました。

ですけどそんなミリエムのおしやべりなどに、みんなはほとんどかまっていられませんでした。なにしろフェリアルの方が、いちだいじなんですから！（そうじのことなか、はつきりいって、どうでもよかったです！）

あれから……。フェリアルがみんなの前にひよっこりあらわれて、自分のからだを見て、「わたしがいるー！」とおどろいてからのことです。みんなはミリエムたちに、これはいったいどういうことなのか？　とつめよりました（フェリアルはとくにつめよりました）。そしてみんなはあの影のおぼけのしようたい、そしてフェリアルの身になんが起こったのか？　ということなどを、とりあえずかいつまんでですが、知ることとなつたのです。

あの影のおぼけは、むかしモーグのまちにやってきた魔女の手下であり、魔女はあの影を使って、人々のからだからたましいをうばい去っていったということでした。そし

て重要なのは、影はたましいを半分だけしか持つていけないということでした。つまり残りの半分は、からだに残していくのです（そのりゆうはあとで説明されます）。

しかしたましいが半分だけでは、もう人としては生きていくことができなくなってしまうのだそうでした。からだに残された半分のみは、からだにとどまっていることができずにからだからぬけ出してしまって、あとはもう、ゆうれいとしてしか、かつどうすることができなくなってしまうのだということです（これが、かんぜんにたましいをぬかれたときとの大きなちがいです。たましいが半分あれば、ゆうれいになって、動きまわることができらるんですね。そしてたましいをぬかれたからだの方も、自分のたましいが半分、自分のそばにまだ残っているんですから、死んでしまうということはありませんでした。見た目はぜんぜん、死んだようになっってしまうんですけれど）。ミリエムたちゆうれいのみなさんも、かつてあの影にたましいをうばい去られ、そのけっか、今のゆうれいのすがたになっってしまったというわけでした。

つまりこういつたわけで、フェリアルは半分のたましいをうばわれて、残りの半分のたましいだけを持ったゆうれいとして、みんなの前にあらわれたというわけでした（ちよつとややこしいんですけど）。

ところで、こんなにだいいじなことは、早く教えておいてほしかったですよ！ おかげでみんなはすつかり、フェリアルが死んでしまったものとはすつかり思っしまいました

たから！ でもまだ、フェリアルがすっかりもと通りになるというほしようなは、どこにもありませんでしたから、よろこんでばかりもいられないわけです。それはこんごのてんかいに、きたいするしかありません。

あの影が今、どうしてここにやってきたのか？ それはみんなが通ってきた北の門と、そこにいたあのがいこつたちが、かんけいしているそうでした（やつぱり、あのがいこつたちでした。ずいぶんあやしかったですもの）。さらに魔女がこのまちに目をつけたわけや、このまちでなにが起こったのか？ ということ。そして魔女そのものについてのことなども、みんなはもっとくわしく知る必要があります（フェリアルのいのがかかっているんですから）。それでみんなはミリエムたちにあんないされて、それらのことをくわしく話してくれるというしさいさまのいる大聖堂へと、むかうことになったのです（そして今、みんなはその大聖堂についたところでした）。

大聖堂の中は、ことさらにりっぱなものでした。てんじょうははるかな上にあつて、そのまん中には大きなまるいドームがつくられております。かべにはたくさんのとうめいな石がはめこまれていて、その石があわく美しい、とうめいな光を放っていました。そしてあちこちにつくられた大きなまどには、これまたりっぱな、きれいなステンドグラスがはめこまれていたのです。

そとのおてんきが晴れ渡っていたのなら。この大聖堂の中は光にあふれ、それはそれ

は美しいものとなっていたことでしょう。ですがここは、ひるなお暗い、モーグの中。おばけのきりがまい、ぶきみなかびが生いしげる、ゆうれいのまちであったのです。ですからこんなにもすばらしい大聖堂も、(とってもぎんねんながら)まるでおばけのぬしの住むゆうれいの城であるかのように、なんともうすきみ悪く思えてしまいました(いちどそういうふうに見えてしまうと、なんだかすべてこわく思えてしまうものです。かべのステンドグラスのかがやきも、とうめいな石の光も、まるでおばけの目が光っているみたいに見えてしまいました)。

「な、なんだか、おばけでも出そうな感じですよ……!」そういつてミリエムのうでにしがみついているのは、フェリアルでした(ちなみに、おばけどうしになってしまえば、ミリエムのからだにもふれることができたのです)。

「なにいつてるんですか。あなたも、おばけでしょ。」そんなフェリアルに、ミリエムがこたえました。

「そ、それをいわないでください! いっしょうけんめい、忘れようと努力しているんですから! わたしはおばけなんかじゃやない、おばけなんかじゃやない……」

かわいそうなフェリアルは、さつきからなんども、自分にそういきかせていたので。ですが、ときどきちらつと目にはいつてしまうたましいのぬけた方の自分のからだ、自分がゆうれいであるのだということを、はつきりとかれに思い知らせてしまいま

した（フェリアルの中からだはベルグエルムがおんぶして、よいしょよいしょとはこんでいたのです）。

「ところで、そのしきいさまは、どちらに？」大聖堂のまん中ほどまで来たところで、ベルグエルムがいました。ベルグエルムのいう通り、大聖堂の中はぶきみなほどに静まりかえっていて、人のいるけはいなど、まったくなかったのです（といつても、ここはゆうれいのまちでしたから、人のけはいなんでもとからどこにもありませんでしたけど。すくなくとも、生きている人のけはいは）。

「やだなあベルグ、なにいつてるの。ここは、おぼけしかいないんでしょ？ そのしきいさまも、おぼけにきまつてるじゃない。」そういつて正面にあるさいだんの方をゆびさしたのは、ライアンでした。「しきいさまなら、さつきからそこに、いるみたいだよ。」

え？ ほんとに？ みんなはそろって、ライアンのゆびさしたさいだんの方に目をむきました。そしてライアンのいう通り。みんなはそこに、あるひとりの人物（のようなもの）を見たのです。

はじめはまったく、気がつきませんでした。しかしようやく見ると、そこになにか白いひらひらとしたものが、うつすらと見えはじめてきたのです。そしてそれは、やがて、はつきりとした人のかたちへと変わっていきましました！（いわゆる、ゆうれいとうじょうの場面という感じです。うん、これなら、ゆうれいっぽくていいですね！ って、そう

いう場合でもありませんか……)」

「あの方が、この大聖堂のしさいさまです。しさいさま、お客さまですよ。」ミリエムがそういつて、しさいさまにおじぎをしました。そしてそれにこたえて、しさいさまがゆつくりと音も立てずに、みんなのところにもふわーつと歩いてきたのです（ゆうれいですから）。

「よくいらつしやいました、みなさん。たいへんな目にあわれたようですね。」

しさいさまの声は、すき通るような、美しくもかほそい声でした。まるで女の人のような……、というより、女の人だったのです。大聖堂のしさいさまが女の人というのは、このアーケランドではめずらしいことでした。ですからみんなは、このいがない出会いに、ちよつとびつくりしたのです。

「これは、しさいさま。わたくしは、ベルグエルム・メルサルと申します。こちらは、ロビーどの。そしてシープロンの、ライアン・スタツカート。それから、わたくしの肩におぶさっているのが、フェリアル・ムーブランドであります。」ベルグエルムがうやうやしく、（フェリアルを落つことさなないように気をつけながら）頭を下げていいました。「わたしは、ティエリー・エルムリール。この大聖堂のしさいです。」

しさいさまは若く小がらで、とてもからだかほそくて、そしてとても美しい女の人でした。こがね色のがやくような長いかみの毛をしていて、それを頭の上であんでおり

ます。それはまるで、こがね色のかんむりをかぶっているかのようで、白くて美しいきぬの衣服とあわさって、しさいさまのおごそかなふんいきをより強く感じさせていました（ミリエムはみんなに小声で、「きれいな人でしょう？　人気者なんですよ。」とじまんにいっていました）。

「そちらの方。もう影はきませんから、どうぞこちらへおいでなさい。」

しさいさまがそういつてまねいたのは、木の長いすの影にかくれているフェリアル（のゆうれい）でした。フェリアルはしさいさま（のゆうれい）があらわれたとたんに、「ひいつ、おぼけ！」といつていすの下にかくれて、がたがたふるえていたのです（やっぱりまだ、ゆうれいさんたちになれるのには、時間がかかりそうですね）。

「あなた方は、たいへんなしれんにあわれてしまったのです。これは、よいいなことではありません。ですが、きぼうはまだ、残されております。あなたたちは、われらの大きなきぼうです。」しさいさまは両手を胸の前でくみながら、静かにいいました。

「あなたたちが、ゆうれいにならずに、ここにこうしてたどりついたこと。それはまさに、神のおぼしめし。きせきというほかありません。」

「神さまのおかげでもあるし、ここにいて、ロビーのおかげでもあるんです。」しさいさまの言葉に、ライオンがそういつて、ロビーのうでを取ってみせました。

「この人のおかげで、あの影をやつつけることができたんです。ロビーがいなかった

ら、ぼくたちみんな、おぼけになっちゃったもの。」

ライアンの言葉に、ティエリーしさいさまは静かな表じようのままこたえます。

「すでに、ぞんじております。あなたたちの戦いのようすなら、ここにいるみなさんから、もうきかされておりますから。」

ここにいるみなさん？ それはいつたい、だれのことなのでしょう？ ミリエムたち三人のゆうれいさんたちは、まだしさいさまのところには、いつていなかっただはずですが……。

「あれ？ みなさん、気がついていなかっただんですか？ この大聖堂にやつてくる前から、もうわたしたちは、三人だけじゃなかつたんですよ。」

ミリエムがそういったとたんでした。あたりが急に、ざわざわとどよめきはじめたのです！

「それにしても、りっぱな戦いぶりだった。」

「ほんとうに、あんなふしぎな剣が、この世にあるなんてねえ。」

「あのゆうれいになっちゃった人、ついてない人だなあ。」

あたりから、たくさんの人の話し声がひびいてきました！ いったいこれは……？

「みんな、もう、出てきたらどうです？ 悪い人たちじゃなさそうだ。」

ミリエムがそういうのと同時に、ロビーたち旅の者たちは、とてもおどろくことになりました。あたりにつきつきと人のすがたがあらわれはじめ、そしてそれは、あつというまに、この場をうめつくしてしまつたのです！

「いったいなんくらいいるのでしょうか？ あつちでざわざわ、こつちでどよどよ。男の人も女の人も、おとしよりも若い人も小さな子どもまで。さいだんの前はもうとこそせましと、人々の波であふれかえつてしまつていました！（そしてとうぜん、それらの人々はみんなうれしいでした。）

おどろいているそんなロビーたちのことを見て、ミリエムが説明しました。

「みんな、このまちのうれしいさんたちです。ちようど、ミサのとちゆうだつたつていったでしょう？ あのおそろしい影がふたたびやってきたものだから、みんな、あなたたちのそばまで、ようすを見にやってきていたんですよ。とうめいなままでしたから、みなさんには、見えていなかつたみたいですけど。」

そうなのです、じつはあのロビーのいさましい戦いの場面のあたりから、みんなのまわりにはたくさんのおいしいさんたちが、すでに集まつていました！ そこでかれらうれしいさんたちは、ロビーの戦いぶりを見守りながら、「がんばれー！」とか、「そこだー！」とか、あつせいせいえんを送つていたのです。ですけどうれしいさんたちは、すがた

と声を消しておりましたので、ロビーたちにはぜんぜん、わかりませんでした（どんな世界でもゆうれいというものは、まずはすがたと声を消しているものなのです。ロビーたちがミリエムたちにぼったり出会ったのは、ミリエムたちがすがたを消していなかったからでした。ミリエムたちもまさか生きている人に出会うなんて、思っていませんでしたから）。そのかくれていたゆうれいさんたちが、さきに大聖堂へともどって、しさいさまにことのいちぶしじゆうをつけていたというわけだったのです。

「ぎゃあー！ おぼけー！」フェリアルにとっては、なんともたまりません！ すでに四人ものゆうれいさんたちに出会ってしまったというのに、今や目の前は、おぼけの海なのですから！ フェリアルは「うーん……！」とうなつて、そのまままた、きぜつしてしまいました（ゆうれいがきぜつするというのも、おかしなものです……）。

「こまった人ですねえ、その人。」ミリエムがうでをくんで、あきれたようにいいました。

それからみんなは、この大聖堂の中でたくさんの話しあいをおこなうこととなったのです。いったいこれからどうすればよいものか？ しさいさまをはじめとするこのモーグのゆうれいさんたちに話をきかないことには、はじまりません。こんなところでいつまでも、足どめをくってしまおうわけには、どうしたっていかないのです。

「しさいさま。さきほど、われらのことがきぼうであるとおっしゃいましたが、それはいつたい、どういうことなのですか？」

ベルグエルムがしさいさまにたずねました。そしてしさいさまはしばらく考えこんだあと、ゆつくりとした静かない方で、こうこたえたのです。

「あなた方が、生きたからだのままここへやつてきたということが、きぼうなのです。ほんらいここは、たましいをうばわれた、ゆうれいの者たちのまち。ゆうれいになってしまったら、もう、まちをはなれることすらかないません。ですが、あなたたちは生きている。生きているのなら、このまちをはなれることができるのです。」

旅の者たちは、おたがいに顔を見あわせました。ゆうれいになってしまったら、このまちから出られない？（はじめてミリエムたちに会ったときにも、ミリエムがそんなことをいつていました。）ですけど、よかった。どうやらゆうれいではない自分たちになら、ここを出ることはかのうなようです。でもフェリアルは？ フェリアルはどうしたらよいのでしょうか？

「ぼくたちは出られても、フェリアルさんがいつしよじやなきや。なんとか、フェリアルさんもいつしよに、まちを出ることはできないんですか？」ロビーがフェリアルのことを心配して、いいました。

「このままフェリーもゆうれいのままつれていけるんなら、おぼけといつしよに旅を

つづけるってことになって、おもしろいかもね。でも……、からだもいつしよにはこんでいかなきやならないから、やつぱ、めんどうかな。」ライアンが、長いすに寝かされているフェリアルの中からだと、そのとなりで気を失っているフェリアルのゆうれいのことを見くらべながら、口をはさみます。

（ライアンの言葉には反応せずに）ロビーのといかけに、しさいさまがこたえました。「ざんねんですが、その方はここから出ることはできません。ゆうれいになった者は、このまちからそとへ出たとたん、たましいがからだだからかんぜんにはなれていつてしまつて、ほんとうに死んでしまうのです。これは、かの魔女によるのろいなのです。」

「ですからわたしたちは、みんな、このまちから出られないんですよ。」ミリエムがつづけて、口をはさみます。「ゆうれいですから、飲み食いの必要がないんで、その点では心配ないんですけどね。なにせここじや、食べもの飲みもの、なんにもありませんから。かびやどくきのこじやあ、食べる気にもなりませんしねえ。」

（ミリエムのよけいなおしゃべりには反応せずに）ベルグエルムがしさいさまにたずねました。

「その、魔女ののろいというのは、なんなのですか？　いったいこのまちに、なにが起こつたというのです？」

ベルグエルムの言葉に、しさいさまをはじめ、ゆうれいの人たちはみんな静まりか

えってしまいました。みんなうつむいて、ふさぎこんでしまっていたのです。たましいをうばわれてしまったうれしいの人たちが、とじこめられてしまったまち、モーグ。このまちにいったい、なにが起こったというのでしょうか？

「それではそろそろ、はじめましょう。みなさん、したくをしてください。」

しさいさまがとつぜん、うれしいの人たちにむかつていいました。そしてしさいさまのその言葉を受けて、うれしいの人たちの中から二十人ほどが、ふわふわと、さいだんのわきにあるひとつのアーチからそとに出ていったのです。いったいなにがはじまるというのでしょうか？ したくって？

旅の者たちがしばらくようすをうかがっておりますと、やがてさきほど出ていった人たちがふたたび、さいだんのあるこの場所にはいつてきました。おかしいのはかれらがみな、さまざまな衣しようにころもがえをしているところでした。剣を持った兵士のかっこうをしている人や、しさいさまと同じような白くて美しいころもをまとっている人。そしてなんんかの人たちにいたっては、頭からすつぽりと黒いぬのきれをかぶっていて、それで全身をおおっていたのです（ちようど目のところにあながあけてあつて、前が見えるようにしてありました）。

いったいぜんたい、このへんてこなかつこうはなんなのでしょう？ まるでこれから、学びい会のえんげきでもはじめるみたいなようすです。そして旅の者たちがあつけ

に取られてかれらのことを見つめてみると、ミリエムがすつとさいだんの前のぶたいの場に出てきて、「こほん。」と小さくせきばらいをしてから、こんなことをいいました。

「えー、それではこれから、わがロザムンディアうれいげきだん名物。ロザムンディア物語をかいえんいたしまーす。みんなー、はくしゅー！」

え？ みんながそう思ったとたん、まわりからたくさんのはくしゅがわき起こりました。

「いいぞー！」「待つてましたー！」「早くやれー！」

見ると、ゆうれいさんたちがみんな、木の長いすにきれいにならんで腰かけて、ぱちぱちぱちぱち！ せいだいなはくしゅを送っていたのです（気がつくときエイリーしさいさままで、いちばん前のとくとう席にすわって、笑顔ではくしゅを送っていました。いつのまに？）。

「ときは、三十年あまり前……、これは、ロザムンディアとよばれるみなとまちに起こった、とあるひげきの物語である……」

どこからか、だれかのナレーションの声が上がりました（これはとうめいになったゆうれいさんが、ぶたいのすみで、台本を読み上げていたのです）。

「あーれー、お助けー！」せりふとともに、ぶたいのすみからひとりの女の人走ってきました。

「ふっふっふ。逃げてもむだだよ。この影から逃げられる者なんて、いないんだから。かくごおし！」こんどはべつのやくしやが、すみから出てきました。黒く長いドレスを着て、なんだかおつかない感じです。そしてそのあと。さきほど見た黒いぬのをかぶった人たちが三人。ぶたいのすみからばたばたと走ってきて、いいました。「待ーてー、たましーを、よこーせー！」

「ちよーつと、待ったー！」

とつぜんひびき渡った、耳もわれんばかりの大声！（おそらく今まで、このおごそかな大聖堂の中で、こんなに大きな声を出した者もないことでしょう。おかげでゆうれいさんたちはみんなびっくりしてしまって、なんんかのゆうれいさんたちは思わず、てんじようまで飛び上がっていつてしまったくらいでした。）

「いったい、その声のぬしは？」

それは、われらが仲間、ライアン・スタツカートくんだったのです！（やつぱり。）

「さつきから、なにをかってなことやってんのさ！ぼくたちには、時間がないんだつてば！早く、フェリーを助ける方法を教えてよ！」

まあ、こんかいばかりは、ライアンのいうこともつともですな……。たしかにみんな

なは、このまちに起こったことを教えてもらおうようにお願いしましたが、まさかこんな、えんげきのかたちで説明されるなんて、思ってもいませんでしたもの。

「で、ですからこうして、げきを通して、みなさまにご説明しよう……」ミリエムがおたおたしながら、ライアンにいいました。

「そんなのいいから！　こんなの、ゆつくり見てる場合じゃないよ！　ぼくたちは今すぐに、行動しなくちやいけないんだから！」ライアンがつっぱねます。

「う、うむ。まことに申しわけないが、その通り。お気持ちはうれしいが、われらには、あなた方のげきを見ている時間はないのです。」ライアンの言葉に、ベルグエルムもさすがにあとおしをしていいました。

「えー。でも、すぐに終わるんですよ。せつかくれんしゅうしたのにー。」ミリエムがぶーぶーもんくをいいます。

「どのくらいで終わるんですか？」ロビーがミリエムたちにたずねました。

「このげきは、みじかい方のげきですから、第四まくのおしまいまで、二時間半くらいかなあ。」

「長すぎだよ！」ミリエムののんきな言葉に、ライアンがすっかりおかんむりになつていいました。

「えー。でも、長い方のげきは、四時間はかかるんですよ。わたしたちみんな、残らず

しゅつえんするから。」

「じょうだんじやないよ！」ミリエムののきな言葉に、ライアンがすっかりおかんむりになっていました（二回目ですが）。

そして見かねたロビーが、（ライアンを「まあまあ。」と喋ってなだめてから）ミリエムにいったのです。

「ほんとうにぼくたちには、時間がないんです。すいませんけど。早くフェリアルさんを助けて、南のくににまでいかないと、たいへんなことになってしまふんです。」

ロビーはできるだけかんげつに、それでいて気持ちのこもったいい方でさういうと、ゆうれいさんたちのことを見渡しました。すると、はじめはげきをちゆうだんされてぶーぶーいつていたゆうれいさんたちでしたが、ロビーにさういわれて、だんだんと、ロビーたちの気持ちもかれらに伝わっていったようでした。おたがいに顔を見あわせて、それぞれがとなりのゆうれいさんたちと、話しあっていたのです。

「わかりました。せっかちな人たちだなあ。でも、そんなにだいじな用があるのなら、しかたありませんね。じゃあ、かんげつにお話ししましょう。」しばらくして、ミリエムがロビーたちの気持ちにこたえていました。

「では、われらをだいひようして、テイエリーしさいさまに、お話をうかがいたいと思います。みんなー、はくしゅー！」

わーわー！ ばちばちばちばち！ ふたたび大聖堂の中に、われんばかりのせいえんとはくしゆがわき起こります。

「それでは、このロザムンディアに起こった、そのひげきの物語のことをお話ししましょう。」

テイエリーしさいさまはみんなのあついせいえんにこたえてさういうと、さいだんの前のまん中に立つて、静かなくちようで話しはじめました。

「ときは、三十年あまり前……、これは、ロザムンディアとよばれるみなとまちに起こった、とあるひげきの物語です……。その日、まちの通りに、ひとりの女の人が、助けをもとめて走ってまいりました。あーれー、お助けー。」

え……？ しさいさまのえんぎに、旅の者たちは口をあんぐりとあけてかたまつてしまいました。

「ふっふっふ。逃げてもむだだよ。この影から逃げられる者なんて、いないんだから。かくごおし。」

「いぎあり！ いぎあり！」

またしてもちゆうだんです！（とめたのはやつぱり、ライアンでした。）

「それ、さつききいたよ！ おんなじじゃない！」

ライアンの言葉に、ベルグエルムもロビーもただだまって、うんうんと、首をたてに

ふるばかりでした……。

まあ、なんとというか……、ゆうれいさんたちには時間がたっぷりありましたから、かれらはみんな、気がとろっても長いようなのです……。ですから数時間の時間でも、かれらにとつては、ものの数分みたいに感じられるようでした。それにしても、ちよつとまのぬけている感じのミリエムはともかくとして、しつかりした感じのしさいさままで……。人は見かけによらないものです（ゆうれいですけど）。

それはさておき。もういいかげんに、話を進めてもらわなくっちゃ！ 旅の者たちは心の底から、そう思いました！（さつきから、話がなんにも進んでいませんもの。）それでしさいさまにもようやくそれがわかってもらえたようでした、やつとのことです。「かいつまんで説明してもらおうだけ」というじょうけんのもとで、話をきくことができたのです。

ゆうれいさんたちにきいた、このまちに起こったできごと。それはつぎのようなものでした（いくつつかの部分についてはすでにみなさんにお話したかと思いますが、もういちどおさらいとして、さいしよから説明しておきたいと思えます。ライアンみたいに、「それ、きいたよー」とはいわないでくださいね）。

今から三十年あまり前、このまちにアルミラと名のる魔女が、たくさんの手下の影たちをひきつれてやってきました。影たちはつぎつぎと、人々からたましいをうばい取つ

ていきました。そのころ、このいせきのまちは西の街道の北の出入り口としてさかえ、まちには旅人たちやお店の人たち、べっそうをかまえてここに住んでいた人たちなどが、たくさんいたのです（およそ二百人はいました）。とつぜんの魔女のしゅうげきに、人々はおそれ逃げまどいました。しかし魔女の手下の影たちは、それらの逃げまどう人たちからようしやなく、たましいをうばい取っていったのです。

たましいをうばわれた人たちは、おどろきました。自分のからだは地面にたおれていて、そしてみずからは半分とうめいなおばけみたいになって、ふわふわとただよいながら、その自分のからだをながめていたのですから！（ちようどフェリアルがそうなたみたいいに。もつともフェリアルの場合は自分のからだの前にロビーたちみんなが集まっておりましたので、さいしよはそのからだが見えなかつたのです。それでうしろから、かれらに声をかけました。）そしてそのあくじのちようほんにんである魔女は、まちのまん中の大聖堂の前に空からふわりとおり立つと（アルミラは魔女のわざを使つて、ちゆうをすいすい飛びまわることができたのです！）、大こんらんの人々の前で、いかにも魔女といった口ぶりで、こんなことをいいました。

「こんなにたくさんたましいが取れるなんて、ありがたいねえ。この半分でも、よかつただけど。」

魔女アルミラはそれから、「ほほほ。」と上品ぶつた笑い方をしてみせました（もちろ

んこれは、見せかけだけの上品さです。

「いいまちが近くにあつて、ほんとうによかつたよ。おかげで、いい兵隊が作れそう
だ。かんしやしなきやね。」

その言葉に、人々は心の底からアルミラのことをのしりました。

「ふざけるな！」「なにがかんしやだ！」「半分でいいなら、いらぬ半分をかえせ！

いや、全部かえせ！」

しかしアルミラは、あざけるように笑つていいいました。

「だめだめ。もうたましいは、飛んでつちまつたからね。今ごろはもう、あたしのけん
きゆうしつまで、ついちまつたころだよ。」

それから人々は、アルミラからさまざまなことをきき出しました。このアルミラとい
う魔女は、人のたましいをうばい取り、そのたましいを使って、おそろしい軍隊を作ろ
うとしているのです（それはこの章のはじまりでも、みなさんにご説明しました
ね。アルミラは魔法学校からぬすんだきんじられたわざのけんきゆうを、ちやくちやく
と進めていたのです）。そのけんきゆうのために目をつけたのが、このロザムンディア
のいせきのまちだったというわけでした。

ではなぜアルミラが、ほかの場所ではなく、このまちに目をつけたのか？ といいま
すと……、じつはこれは、たんに魔女が住んでいるという場所からこのロザムンディア

のまちが、いちばん近かったからという、ただそれだけのりゆうだったのです！ これ
でなぞのひとはとけたわけですが、それにしてもまちの人たちにとつて、なんてめい
わくなりゆうなのでしょう！（てつきりなにかとくべつなりゆうがあつて、このまちが
ねらわれたのだとばかり思つていました）

（まちがおそれたりゆうはともかくとして）人々のいちばんのかんしんごとは、ゆう
れいになつたらそのあとどうなるのか？ ということでした（自分の身のことですか
ら、とうぜんでした）。そして人々はアルミラから、そのおそろしいじじつをきかされて
しまったのです。

「たましいを半分残してやっただけ、ありがたいと思いなよ。おかげでゆうれいとし
てなら、これからも問題なく、生きていくことができるんだから。これは、あたしのお
なさけだよ。全部もらっちゃ、かわいそうだからね。」

アルミラはそういつて、またしても上品ぶつて笑いました。そうです、たましいを半
分だけ持つていくというのは、たんにアルミラの気まぐれからのことでした！ けつか
としてはその気まぐれによつて、みんなはかんぜんには死なずにすんだわけですが、で
も、そういうものでもありませんよね！ こんなに身がつてで、はらの立つりゆうもな
いのですから。なにがおなさけなものですか！

「それと、ひとついっておくよ。このまちからは、そとへ出ない方がいい。ひみつをそ

ともらされちやあ、かなわなからね。このまちには、のろいのけっかいを張らせてもらったよ。ゆうれいのおまえたちがこのけっかいを越えたら、残りのたましいもみんな、飛んでつちまうからね。なに、このまちから出ないかぎり、そのまま楽しく暮らしていけるんだ。ほんとうの死人には、なりたくないだろう？」

これが、テイエリーしさいさまのいつていた魔女ののろいでした（けっかいというのは、その場所全体のことをおおうバリアーのようなものです）。これはまちの人たちにとつて、とてもおそろしいのろいでした。もう自分たちには、このまちでゆうれいとして生きていくのがいい、すべはないのです。これをきいて、なんんかの人たちが「じようだんじやない！」といつてじようへきのそとへと飛び出していつてしまいました。かれらは魔女の言葉の正しさを、身をもってみんなに伝えることになってしまいました。かれらは声も立てずに地面にたおれこみ、そのまま、かわいそうなきいごとをとげたのです。

この魔女のけっかいについて、ひとつ重要なことがありました。それはこのけっかいは、ゆうれいになった者にしかききめがないということでした。ですから生きている口ビーたちになら、このけっかいを越えて、まちのそとへと出ていくことができたのです（これはどうせそとには出られないからと、アルミラがべらべらしゃべつて教えてくれたことのひとつです）。

そしてそれが正しいということは、ある日このまちにはいりこんでしまったひとりの旅人によって、しようめいされました。かれはせまりくる影から逃げて、モーグのそとまで、そのまま飛び出していくことができました。ですから生きている人であれば、のろいのけっかいのえいきょうを受けることなく、まちのそとへと出ることができるということがたしかめられたのです。

ですがそとに出られても、せまりくる影からのがれることはかないませんでした。かれはまちのそとで影におそわれて、たましいを全部、うばわれてしまったのです。そうです、モーグのそとでおそわれた者は、たましいを全部取られてしまいました！ これはひみつをそとにもらさなかったための、アルミラによるかんぜんな口ふうじでした（そとに出た者は逃がさない。そしてまちの中にいる者はゆうれいとしてとじこめ、そとに出られないようにする。ほんとうにこのアルミラという魔女は、なんてひれつで、いやらしいやつなのでしょう！ ワットの黒騎士たちにもひけをとらない、悪者ぶりです！）。こうしてモーグの人々は、それから三十年あまりの長きに渡り、このまちでゆうれいとして暮らしつづけてきました。かれらは魔女のことを怒り、にくみ、うらみつづけてきました。あのかわいそうな旅人のかたきを、そしてもどることのない仲間のかたきを、かならずや取つてやらなければ！ かれらはいつも、そう思いつづけてきたのです。これがこのまちに起こった、そのひげきのできごとでした。そして今日、かれらにまた、

新しい仲間が加わってしまったのです。そう、フェリアルでした。

「じょうへきのそとにいたがいこつこの兵士たちのことを、お話したでしょう？」ミリエムが、旅の者たちにいいました。それはフェリアルがこわがっていた、あのがいこつたちのことでした（さあ、ようやくあのがいこつたちのなぞがわかるときが、やってきたようです）。

「あのがいこつたちは、魔女の残していった、おきみやげなんです。あのがいこつたちは、門をくぐってまちにはいっていく者たちのことを感じ取って、魔女の手下の、影をよびよせるんですよ。新しくやってきた者たちのことを、このまちにとじこめてしまうために。ですからわたしたちは、門をくぐってはいってきたあなたたちのことを、注意したんです。」

これで、さいごのなぞもとけました。そしてモーグの門がげんじゆうにとぎされていたわけも。あの門をとぎしたのは、ほかでもありません。このモーグのゆうれいさんたちだったのです。かれらは、ふたたび門をくぐってここに新たなぎせい者がはいつてきてしまうのを、防いでいたというわけでした（でもけつきよく、ロビーたちははいつてきてしまいました……）。

ちなみに、あのがいこつたちは、むかしは門のまわりを、ずっとうろうろ歩きまわっ

ていたそうです。そしてじつは、「モーグはおばけのまち」といううわさが広まったのは、ほかでもありません。このがいこつたちのせいでした。モーグにやってきた旅人たちが、門の前でうろつくが、がいこつたちのことを見て「ひやあ！ おばけー！」といって逃げ帰ったのが、そもそものはじまりだったのです。それから三十年。さすがにがいこつたちもつかれたのでしょうか？ 今ではまちのじょうへきにもたれかかつて動くこともありませんでしたが、影をよびよせるそののろいの力が今でもけんぎいなのは、みなさんもごしようちの通りです。それにしても、三十年もたっているのに、まだのろいの力がつづいてるなんて！ アルミラの力の大きさが、よくわかりますよね。

ところで……、モーグにはいる者のことをただ感じ取るだけなら、こんなあからさまながいこつなんかじゃなくても、なにかほかに、のろいの魔法かなにかを、門にしかけておけばいいじゃないかと思うかもしれませんが、これはやつぱり、アルミラの気まぐれからのことでした。魔法のわざをしかけておくよりも、見た目におつかないがいこつたちをうろつかせておく方が、のろわれたまちつぼくていいじゃないかという、ただそれだけの考えからのことだったのです。なんてたんじゅんな！。

「みなさんに、見せたいものがあります。こちらへきてください。」

とつぜん、テイエリーしさいさまがそういつて、みんなのことをまねきました。みんながついていくと、そこは地下へとくだるかいだんになっております。そのかいだんを

おりていくと、ほそいろうかにつながっていて、しばらくいくとそのろうかは、大きなとびらの前で終わっていました。

「この中です。どうぞ。」

しさいさまがとびらをあけると、そこはだだっ広い石づくりの部屋でした。そしてその中を見たみんなは、そろって目をまるくして、おどろいたのです。

その部屋の床いちめん、たくさんの人たちのからだだがきれいにならないで横たわっていました。その数はおよそ、二百人あまりはいるでしょうか？ それはちようど、このモーグのまちでたましいをうばわれてしまったゆうれいさんたちの人数と、同じでした。そう、ここに寝かされているのは、まさに、このモーグのゆうれいさんたちの、そのもとのからだにほかならなかったのです。

「これが、わたしたちのからだです。」ティエリーしさいさまは、それらのまちの人たちのからだのことをしめしながらそういって、それからみんなを、あるひとりの人物のからだの前へとまねきました。そこに横たわっていたのは……、ほかでもありません。ティエリーしさいさま、ほんにんのからだだったのです。

「みなさんのこのからだは、みんなまだ生きています。このからだには、まだたましいが、わずかに残っているからです。たましいが残っているかぎり、人は死にません。わたしたちは、いつか、このもとのからだにもどれる日がくることを、ずっと待ちつづ

けているのです。」

テイエリーしさいさまは、かなしそうな目でそういいました（ところで、みなさんはこれとよく似た光景を、ついでにきん見たばかりですよ。そう、はぐくみの森の地下いせきの中に寝かされていた人たち。あの人たちのすがたにそっくりです！ 旅の者たちはすぐに、そのことを思い起こしました。思えばあの人たちもまた、たましいをうばわれてしまっていました。そしてこのモーグの人たちも、同じだったのです。これはなんだか、同じなぞがかくされているみたいですよ？ ちよつとずるいのですが、著者のわたしはもう、そのなぞのこたえを知っています。今ここで、それをお伝えしてもよいのですが……、やっぱりそれは、これからのお話の中でお伝えしていくことにしましょう。ごめんね）。

「しさいさま。」ベルグエルムが、しさいさまにいいました。はぐくみの森の地下で自分たちがいけんしたあのできごとのことを、ここでしさいさまに伝えておくべきだと思つたのです。

「われらはここにくる前、あなた方とよく似た者たちのことを見ました。かれらもまた、あるかいぶつによって、たましいをうばわれてしまっていたのです。ですがかれらは、助かりました。かいぶつがたおされ、かれらのたましいが、かれらのからだにもどつたからです。」

これをきいて、ティエリーしさいさまはすこしだけ声を大きくして、いいました（どうやら、びつくりしているみたいです。でも、表じようはそのままでした）。

「やはり、そうでしたか。そうであると思っていました。」

しさいさまはうばわれたたましいを取りもどせば、みんなはきつともとのからだにもどれるのだと、信じつづけていたのです。そしてその思いは、まちの人たちもみな、同じでした。しさいさまがいつも、みんなにそのことを話して、げんきづけてあげていたからです（いつもみんなのことを考えてくれている。ティエリーしさいさまがみんなにしたわれているわけも、わかりますよね。ただ美人だからというりゆうだけでしたわれているというわけでは、なかったのです）。

「たましいを取りかえせば、みんなはかならず助かるはず。わたしたちはそののぞみを忘れずに、このまちで暮らしてまいりました。ですが、のぞみは果たされなのまま、もう三十年です。みんなすくなからず、あきらめかけておりました。」しさいさまは、うつむきながらいいました。

「ですが今日、ここにこうして、あなた方があらわれた。あなた方は、まさに神の使い。すくいぬしです。」しさいさまはねっしんに心をこめて、旅の者たちにいいました（それでもまだ、表じようはそのままでしたが）。

「あなた方なら、ここをぬけ出すことができる。魔女をしりぞけ、魔女のもとから、み

なさんのたましいを取りもどすことができるかもしれません。お願いです。ぜひともみなさんのことを、すくつてあげてください。どうか、お願いです。」

さて、旅の者たちはどうするのでしょうか？

もちろん、こうまでいわれてはことわるわけにもいきませんし、もとより、フェリアルを助けてやらないわけにもいきません。しかしかれらは、かれらの旅の重要性を、じゆうぶんすぎるほどにわかっています。ほんらいならば、そとに出られるとわかった以上、今すぐにもこのまちを出て、南への道を急がなければならなかったのです。たとえフェリアルがぬけてしまっても。ベルグエルムやライアンが、ぬけてしまっても。

そんな中、ベルグエルムが深く考えをめぐらせながら、ゆうれいさんたちにいいました。

「われらは南の地、ベーカーランドへの道のりを急いでおります。これは、このアークランドのみらいをかけた、ひじょうに重要な旅なのです。あなた方の中で、ベーカーランドまでの道のりに、くわしい者はおられるか？」

これに対し、名のりを上げたのはほかでもありません。ミリエムでした。

「ベーカーランドですか？ それなら、街道にそって、まっすぐいけばいいんです。わたしもむかしは、よく、その道を通っていったもんですよ。今の街道がどうなっている

のか？ それはわたしにも、わかりませんが、まあ、むかしのけいけんは、今でもいきると思いますよ。」

どうやらミリエムはむかし、西の街道を通つて、ペーカーランドまでいったことがよくあつたようでした。ベルグエルムの頭の中には今、まよいの気持ちがありました。ほんらいならばこんなところで、危険な冒険をおかすわけにはいかない。われらはロビーどのの身の安全を、いちばんに考えなければならぬのだから。

しかし、西の土地をしいしているという魔女のうわさのこともある。その地を通つていくには、もとよりその魔女と今、けつちやくをつける必要があるのではないか？

さらには、どんなこんなが待ち受けているとも知れない西の街道をゆくのに、われらだけでは、力がおよばないかもしれない。このまま進めば、ぎやくにロビーどののことを、もつと危険な目にあわせてしまうかもしれない。よけいな時間を、もつとついやしてしまうことになるかもしれない。それにはやはり、土地のことにくわしい者を、つれていくべきではないか？

そしてベルグエルムはさいごに、こう思いました。

フェリアル。かれの助けが、これからも必要になることだろう。とくにさいごの戦いにおいて、しきかんであるかれがかけてしまつては、ワットの力にたいこうするのはむずかしい。フェリアルをここにおいていくことは、このさきどれほどの力を、失うこと

になるのか？ それに……、わたしとしても、かれとはなれてしまうのは、なんともさみしい思いだ。

ベルグエルムはこのみじかい時間の中で、これだけ多くのことを考えていたのです（ライアンが、「つぎはなんのお菓子を食べようかな？」とちよつと思つたくらいのないだにです）。まことに、このベルグエルムという騎士は、たぐいまれなる力とずのうをあいわせ持った、ゆうしゆうなるしきかんだした（人の上に立つ者というのは、こうありたいものです。こんな人がしきかんだしたら、部下たちはみんな、「ベルグエルムさまー！」と心からほれこんで、ついていつてしまいますよね。さすがはベルグエルムさま！ときおりちよつびり、おちやめなところも見せてくれるのですが、それはまあ、ごあいきょうということだ）。

そしてついに、ベルグエルムがロビーにむかつて、その口をひらいたのです。

「ロビーどの、われらは、あなたを今すぐ、ぶじに、ベーカーランドまで送りとどけなければなりません。危険な冒険をおかすようなよゆうは、われらにはないのです。」ベルグエルムは重い表じょうを浮かべながら、いいました。これはまったく、正しい言葉でした。

「ですが……」

そしてベルグエルムは、こうつづけたのです。

「旅の道すじは、ときと場合によって、つねに変わっていくものです。この西の地は、われらの力のおよばぬ、未知の土地。どのせんたくが、さいりょうのものであるのか？ それはわたしにも、だんげんのできないことです。ですからこれは、われらがあるじたるロビーどのお考えによって、きめていただかなくてはなりません。ロビーどの、われらに道を、おしめしてください。」

ロビーはちよつととまどつてしまいました、すでにロビーの心は、ひとつだけでした。

ロビーはライアンの顔を見ました。ライアンはほほ笑んで、だまつてうなずいてくれました。ロビーのことをよくわかつてくれている、ライアン。そしてロビーにだまつて道をもとめてくれる、ベルグエルム。ロビーは気持ちをかためました。

「フェリアルさんを、まちのみなさんを、助けたいです。でも……、ぼくたちには、時間がない。とてもだいじな、旅のとちゆうなのだから。」

ロビーはそういつて、しさいさまのことを見ました。やっぱり今ここで、みんなのことを助けるわけには、いかないのでしょうか……？ でも、ロビーの言葉には、つづきがあったのです。ロビーは仲間たちの方をふりかえると、静かに笑つて、こういいました。

「だから……、すぐにもどつてきましょう。このさき、魔女が見張つてる道をゆくこと

を考えれば、けつきよくは、同じことだと思いません。道を切りひらくのなら、早い方がいいもの。」

やっぱりロビーは、ロビーでしたね！

「そうこなくつちや！ それでこそロビーだよ！」

「このベルグエルム、しかと、ロビーどのお守りいたします！」

ライアンもベルグエルムも、そんなロビーにつこり笑つてこたえました。そして、そのつぎのしゅんかん……。

わあああー！ ぱちぱちぱちぱち！

まわりからわき起こる、われんばかりの大かんせい！ みんながびっくりしてまわりを見渡すと、いつのまにかかれらのまわりには、たくさんのゆうれいさんたちが集まっても、はくしゆかつさいしていたのです（またすがたを消していたようですね。それにしても、とつぜん出てきておどろかすのが好きな人たちです。やっぱりこういうところは、ゆうれいならではののでしょうか？）。

「やっぱり、さいしよ見たときから、ただの人たちじゃないと思つてたんだ！」

うれしいさんたちが口々に声を上げました。

「あの、につきき魔女のやつめに、ひとあわ吹かせてやってください！」

「やった！ 人間にもどれたら、これで、大好きなお酒が飲めるぞ！」（ちよつと、もくてきはずれている人もいました……）

「ありがとう、みなさん。ありがとう。」しさいさまも小さい声ながらも、せいっぱいのかんしゃの気持ちであらわしていました。

「でも、しさいさま。みんなを助けるためには、ぼくたちは、どうしたらいいんでしょう？ 魔女をやつつけて、たましいを取りもどすといっても、ぼくたちには、どうしたらいいのか？ わかりません。」

ロビーがもつともなしつもんをしました。そうです、もくてきがきまったのはいいのですが、まずはどうすればいいのか？ それがわからないことには、どうにもできないのですから。ですからそれからすぐ、旅の者たちのこれからのぐたいな行動をきめるための、作戦かいきがひらかれることになりました。作戦の名まえは……、その名もずばり、「魔女をやつつけてたましいを取りもどせ」大作戦！（なんてわかりやすい！）

さあ、これがさいごの話しあいです。みなさん、お集まりください。だいじょうぶ、すぐにすみますから、安心していいですよ。とつてもとつても手みじかにしてもらおうよ

に、われらが仲間たちが、ゆうれいさんたちに、がつちりとくぎをさしておきましたから！（とつても気の長いゆうれいさんたちですから、うっかりしていたら、このかいぎだけで、いちにち終わってしまいそうですものね。）

「このまちを南にぬけると、そこは、だだっ広いしつちたいになってるんです。」テールに広げられた地図の前で、ゆうれいさんたちが旅の者たちに道をしめました（しつちたいとはぬまや池の広がる、しめつぽくてじめじめした土地のことをいいます）。

「このしつちたいには、魔女の手下だといわれている、かえるの種族の者たち、フログルたちが住んでいるんです。かれらは、このしつちたいのぬしであり、ここではかれらに、かなう者はいません。かれらに見つからないように、くれぐれもお気をつけて……」

シープロンドのかいぎの場でもちよつとだけ名まえの出てきた、かえるの種族。それがいいよ、ごとうじょうのようです（もし出会えばの話ですが）。いったいフログルとは、どんな者たちなのでしょう？

南の地に住んでいる者たちは、かつてこの西の街道から、北の地へとむかつて旅したわけですが、そのころでもこのかえるの種族の者たちのことについては、だれにもくわしくは知られていませんでした。それは旅をゆく者たちが、みな、安全な街道からはな

れて歩くことをしなかったからなのです。

つまり、このかえるの種族の者たちが住んでいるしつちたいは、街道からすこし、はなれた土地に広がっていました。そのため旅をゆく者たちは、危険なしつちたいには近づこうとはせず、かえるの種族のかれらとも、ぜんぜん会うことはなかったというわけだったのです（だれも会うことがありませんでしたから、みんながフログルたちのことについて、ほとんどなんにも知らなかったのも、とうぜんのことでした。また、そのころからすでによくないうわさを持たれていたかえるの種族の者たちとは、できれば出会いたくないと、みんなが思っていたのも、かれらのことがきちんと人々に伝わっていかなかった、大きなりゆうのひとつとなっていたのです。魔女の手下だとうわさされているのも、じつはこういったところが、大きくかかわっているようでした。つまりまだじつさいに、かれらが魔女の手下だと、かくにんできなかったというわけではなかったのです。もつとも、「魔女の手下ですか？」なんてかれらにきくようなまねをする者は、だれもいませんでしたから、かくにんのしようもありませんでしたが……）。

そのしつちたいが、この三十年あまりのあいだに、まちのすぐ南がわにまで広がってきていたというわけでした。

魔女が住んでいるという場所は、そのしつちたいの中だということでした（これは「魔女はぬまの中の巨大な塔に住んでいる」という南のくにのうわさとも、同じでした）。く

わしい場所まではわからないようですが、とても大きな塔だというので、いけばたぶんわかるんじゃないか？ ということでした（うくん、なんだか大作戦というわりには、とつてもおおまかできてきとうな作戦のような気もしますが……。まあ、じつさいに魔女の塔を見たことのある者が、このゆうれいさんたちの中にはだれもいませんでしたので、しかたありませんけど。これらはほとんど、かれらが旅人たちからきいた話だったのです。

かといつて、旅人たちがこの魔女の塔のことを、じつさいに見たというわけでもありませんでしたけど。かれらはふつうの旅人たちであり、冒険者ではありませんでしたので、自分から進んで魔女の塔に近づこうとする者などは、ひとりもいませんでした。ですからかれらもまた、魔女の塔のことについては、塔のある場所のこともふくめて、うわさできく以上のことはなにも知らなかったのです。なんだよー、きたいはずれだなー、と思われる方もいるかもしれませんが、それはどうかごかんべん願います。かれらだって、魔女はこわかったのですから……。

「あなたたちやわたしたちのことをおそった、あの影は、みんな、このしつちたいの中からやってきているようです。」ティエリーしさいさまがいました。「ですから、魔女のすみかだという塔も、そこにあると思います。」

「じゃあ、話は早いね。」ライアンがこたえていいました（ちなみに、ライアンは今、宝

石の實のぼうつきキャンデーを三本、口にいれていました。モーグのかびだらけのまちの中では、とてもキャンデーをなめる気にはなれませんでしたので、ここでまとめてなめていたのです。

「そこへ乗りこんでいって、『こらー！ 魔女めー！ このライアンさまが、じきじきに、たまひいをかえひてもらいにきたぞー、かくごしろー！』つて、大声でさけばばいいんれしょ？」

ライアンはそういって、にこにこした顔で、しきいさまのことを見ました（これはもちろん、ライアンのじょうだんでした）。ですがしきいさまは、そんなライアンのじょうだんにぜんぜん表じょうも変えずに、ライアンのことをちらりと見て、こうこたえるばかりだったのです。

「いえ、魔女の塔には、いきなり近づくべきではありません。そんなふうにさけばば、たちまち魔女に先手をうたれて、つかまってしまうことでしょう。」

「あ、えと……、じゃ、なにか、いい方法があるんでしょうか？」れいせいにへんじをかえされてしまいましたので、ライアンはちよつとひようしぬけしてしまつて、こんどはいていねいの方でたずねました（あんまりじょうだんが通じない人みたい……。ライアンがそつと心の中でつぶやいたのは、いうまでもありません）。

「はい。魔女のことをよく知る人物がひとり、南の土地に住んでいるはずです。あな

た方は、まず、その人のところをたずねるべきでしょう。」しきいさまがこたえていいました。

「その人物とは、いったい、どういった者なのですか?」ベルグエルムがたずねます。「名まえは、はっきりしてないんですよ。」しきいさまのかわりに、ミリエムがこたえました。「ほんとうは、カルデー……、なんとか、って、いうらしいんですがね。ほんとうの名まえは、だれもおぼえていません。みんな、その人のことは、カルモトつてよんでるんです。」

「カルモト? へんてこな名まえらね。どこのくにの人なの?」ライアンがたずねます。

「それも、はっきりしてないんですよ。」また、ミリエムがこたえました。「うわさじや、西の大陸からやってきたっていうんですがね。とにかく、すごい人なんです。」

なんだかこのカルモトという人物。ただ者ではないみたいです。なんでもこの人は学者だということでしたが、その力は魔法のアルミラをも、しのぐのだということでした。しつちたいからさらに南東にくだった山のすそのにずっと住んでいて、なにかのけんきゆうにうちこんでいるということですよ。ですから人前にはめつたに、すがたをあらわさないそうでした(ちなみに、カルモトというよび名はかれの本名をみじかくしようりやくしたもののらしいのですが、ほんとうはどんな名まえなんでしょうか? それは、

もうすこしあとのお楽しみ)。

とにかくまずは、このカルモトという人のことをたずねて、力を貸してもらおうこと。それがいちばんはじめのこのようでした。このカルモトという人といっしょなら、魔女のアルミラをやっつけて、魔女のもとからたましいを取りもどすことができるかもしれません。

「しつちたいをさけて、山すそを進みなさい。そうすれば、いずれ、カルモトさんの住む家にたどりつくことができるでしょう。魔女にたいこうするすべや、魔女からたましいを取りもどす、そのぐたい的な方法については、カルモトさんが知っているはずです。」しさいさまがいました(うくん、なんだかやっぱり、大作戦というわりには、ずいぶんとあいまいな部分が多いような気がします……。かんじんな部分については、まるつきり、カルモトさんしだいつてことのように……。まあでも、どうすればよいのかは、カルモトさんに会えばわかることでしょう。とりあえず、よてい通りに話しあいぐすんなり終わってくれて、よかつた!。

「うまく、ことがはこびますように、心よりおいのりいたしております。あなた方に、神のごかごがありますように。」さいごにしさいさまが、もういちど旅の者たちにいいました。

「それではみなさん。じゅんびができましたら、どうぞいっしょに、ついてきてください。」

ミリエムがそういつて、旅の者たちのことをみちびきました。みんなはこれから、いよいよこのまちを出て、そのカルモトというなぞの人物の住む家をめざすわけでしたが、まずはこのまちからそとに出るといふ、ただそれだけのことから、はじめなければなりません。それはつまり、まちの南門は北門と同じく、ゆうれいさんたちがかたく手をほどこしてとぎしておりましたので、そこをあけるのはたいへんなことだったからなのです（またライアンが、吹っ飛ばすわけにもいきませんでしたし）。

それではみなさん、ゆうれいさんたちが教えてくれたひみつのぬけ道から、そとに出ることになりました。そのぬけ道までのあなないを、みんなは今、ミリエムたちにお願ひしたというわけだったのです（そのぬけ道はそとからのこうげきにそなえてつくられたもので、馬が通れるほどの広さがあるということでした。これは馬に乗った兵士たちが、そのままそとの敵を、ふいうちすることができるようにするためだったのです。じつさいにこのぬけ道が戦いのために使われたということはないようですが、高くがんにようなじょうへきといふ、このまちがいかに守りのかたいまちであつたのか？ よくわかりますよね）。

そのさなか。みんながゆうれいさんたちに送られて、大聖堂のことをあとにししようと

しているときのことでした。ライアンがメルのからだにつけられたにもつをさいごにたしかめっていると、むこうのはしらの影で、だれかがひとり、自分のことを手まねきしているのが見えたのです。なんだろう？ と見てみると、それはティエリーしさいさまでした。なんであんなところにいるんだろ？ ライアンはふしぎに思いましたが、ここはとにかく、いつてみた方がいいようです。

「ちよつと待つてて。」ライアンはロビーにことわつて、ひとり、そのはしらの影までいつてみました。するとそこにティエリーしさいさまがひとりで立っていて、そしてしさいさまは、ライアンのことを前にすると、なんだかもじもじとしながら、ライアンにこんなことをいったのです。

「あの……、ライアンさんといいましたね。ひとつ、お願いがあるのですが……」

「なんででしょうか？」ライアンはていねいな方で、そういいました(さつきいちど、しつぱいしてしまいましたから)。

それに対してしさいさまは、自分の両手の人さしゆびをおたがいにつんつんとつつきあわせながら、なんともいいにくそうに、こういったのです。

「もし、もとのからだにもどれたら、頭をなでさせてください。」

え？ なんですか、それ？ しさいさまのいがない言葉に、ライアンはきよとーんとしてしまいました。

「あ、あの、それは、どういうことですか？」ライアンはわけがわからずに、たずねました。そしてつぎにしさいさまの口から出た言葉は、まったくもって、いがいなものだったのです。

「ライアンさん、とってもかわいいので。じつはわたし、かわいいものが大好きなんです。さっきのかいぎのときのじょうだんも、かわいかったです。」

ええーっ！　じつはしさいさまはかのじよの言葉の通り、かわいいものが大好きな、とってもメルヘンチックな女の子でした。ですけどロザムディア大聖堂のことをとりしきるしさいさまとして、それをおもてに出すことを、ずっとがまんしていたのです。それがかわいい見た目のライアンのことを前にして、とうとう、がまんができなくなりましたというわけでした。

まあ、気持ちはわかりますので、もとのからだにもどれたおいわいとしてなら、そのくらいはいんじゃないでしょうか？　それでライアンも、はじめはちよつととまどっていました。そこは持ち前の明るさで気持ちを取りなおすと、しさいさまとやくそくをかわしてあげたのです。

「そーだったんだ。しょうがないよね。ぼく、かわいいもん。」ライアンはそういって、その場でくるん！　とかわいくまわってみせました（うくん、ライアンは自分で自分がかわいいと、みとめてしまっているみたいですね……。まあ、かれらしいといえば、か

れらしいですけど)。

「じゃあ、とくべつですよ。からだがもどったら、頭、なでさせてあげる。」

これをきいたしさいさまの、うれしそうな顔といたら！ もうかんぜんにしさいさまということは忘れてしまつて、ただのひとりの、かわいいものの好きの女の子になつてしまつていました(ちなみに、ゆうれいになつたとき、しさいさまはまだ十七さいでした。ゆうれいはとしを取りませんでしたので、しさいさまはずつと、十七さいのままだったのです。なるほど、これなら女の子らしくふるまいたいのも、わかりますね)。

「きつと、もどつてきてくださいね。楽しみに待つてます。」しさいさまがいました。それからライアンとテイエリーしさいさまは、あくしゆをするしぐさをして、ひとまずのおわかれをしたのです。ライアンがしさいさまに手をふつてもどつてきたときには、もうすつかり、出発のじゆんびができていました。

「なにを話してたの？」ロビーが、もどつてきたライアンにたずねました。

「うん、気をつけていつてきてね、つて。うまくいくといいね。」ライアンはそういつて、(背のびをしながら)ロビーの頭をなでてあげました。

ロビーはなんだかくすぐつたいといったようすで、ふしぎそうな顔をするばかりでした。

それから一行は、馬に乗って、モーグのまちの通りをばかぼこと（いや、かびが生えていましたので、ぎゅぼぎゅぼと）、めざすひみつのぬけ道へとむかつて進んでいきました。かれらのまわりには大勢のゆうれいさんたちが、足あともつけずに歩いたり、ふわふわ飛んだりしながら、ついてきていたのです（たぶん、すがたを消している人もいっぱいいたんだと思います）。

その中にひとり、みんなのよく知っている人物もまじっていました。それは、そう、ゆうれいになつてしまった、かわいそうなフェリアルくんでした。フェリアルは作戦かiggのあいだ中、ずっとあわを吹いてきぜつしたままでしたが、出発するにあたり、ゆうれいさんたちに顔をびしやびしやとたたかれて、ようやく目をさましたのです（ゆうれいが目をさますというのも、おかしいものですけど）。

ちなみに、フェリアルがなかなか目をさましませんでしたので、ゆうれいさんたちはライアンに、「ほら、もつと強くなりたい！ 顔がくずれてもいいから！ 気持ちがいってないよ、気持ちがい！」とめいれいされながら、しかたなくたいていたのです。たぶんゆうれいでなかったのなら、またあのおそろしい、クルツポールのえじきになっていたことでしょう……）。

フェリアルはもう、自分がゆうれいになつてしまったということ、みとめざるを得ませんでした。ですからかれは、いよいよかんねんしたという感じで、「はあ……」と

深いため息をなんどもつきながら）みんなのあとをとぼとぼとついていっていったのです（そのまわりではなんん人かの気さくなゆうれいさんたちが、「まあ、楽しくやろうぜ、きょうでえ！」とやって、肩をくんできたりしていましたが）。

「あれが、まちの南門ですよ。」

やがて道のさきに、なんとも大きくて、なんともがんじようそうな門が見えてきました。そのりっぱなこと！ みんなは思わず、そろって「これはすごい！」とおどろきの声を上げてしまったものだったのです。この門にくらべたら、旅の者たちがぐづつてきたあの北門などは、ほんとうに小さく思えました。門の高さはおよそ六十フィートほどもあって、はばもだいたい、そのくらいはありました（そのうえゆうれいさんたちにきいたところによりますと、そのあつさも、すごいものなのだというものでした。だいたいい、八フィート以上はあるということです！）。

こんなに大きな門は、みんな今までに見たことがありませんでした。ペーカーランドのお城の門だって、ここまで大きくはなかったのです（北門でさえいくら体あたりしても破れなかったというのに、この門などは体あたりなどしようものなら、からだがばらばらになってしまいそうです！ ライアンのひつさつのいちげきのわざでも、おそらくむりでしょう。こんどばかりはぶあつすぎでしたし、がんじようすぎでしたから！

もつとも、十回くらいあのわざをたたきこめば、人がひとり通れるくらいいあなを、あ

けることもできるかもしれませんが。でもそんなことをしたら、かくじつにシープロン
ドで大問題となるでしょうし、なによりその前に、ライアンがつかれてたおれてしま
うことでしょうけど)。

南門のとびらには北門のとびらと同じく、カピバルのわざのペンキがぬられていて、
そのためかびのような植物がぜんぜん生えていませんでした。表めんは、よくみがかれ
たアンティークの家具のようにぴかぴかと光っていて、まったくみすばらしいところも
ありません。さらにとびらのふちには、ロザムンディアのまちのマークと同じ、船と
ロープをあしらった浮きぼりが、美しくほどこされていました。それはまったくもつ
て、みごとののひとことにつきる、げいじゆつ品のような門だったのです。

ですがその門も、今となつてはとびらがすっかりふさがれてしまつていて、人が通る
ことなどはとてもむりなじようたいになつてしまつていました。それはそこから人が
はいつてくるのを防ぐために、ゆうれいさんたちがみんなで力をあわせて、この門をげ
んじゆうにとざしたからなのです。門にはいくえにもおよぶ渡し木がかけられていて、
しかも門の前には、たくさんのたんすやらつくえやらといった家具などが高くつみ上げ
られていて、道をふさいでいました。

「ね?、これじゃあとでも、この門をすぐにあけるなんてこと、できないでしょう?」
ミリエムが旅の者たちにむかつて、とくいそうにいいました(この南門は大聖堂となら

んで、このまちの大きなほこりでした。「それに、この門のそとにも、がいこつの兵士たちがたくさんいるんです。ですから、ここから出るのは、やっぱりやめた方がいい。なにが起こるのかは、まだわたしたちにも、わかりませんからね。」

「それは、たしかにそうだ。」ミリエムの言葉に、ベルグエルムもこたえていいました。「あのがいこつたちが、また、影をよびよせないともかぎらない。そんな危険は、もうにどと、おかすわけにはいかないからな。」

「それはそうと、」ライアンがミリエムにいいました。「その、ひみつのぬけ道、つてのは、どこにあるの?」

「ああ、そのぬけ道なら、」いわれて、ミリエムが思い出したようにこたえました。「もう、だいぶすぎましたよ。さつき、小さな塔のある、たてものがあつたでしょう? あれは、兵士の家とよばれていて、そとへのぬけ道は、その地下につくられているんです。」

「なんだつてー!」

旅の者たちはみんなそろって、さげんでしまいました。またしても、気の長くいゆうれいさんたちに、してやられてしまったわけです。

「ちよつと! なんでそれを、早くいわないのさ! そこにあんないしてくれてたん

じゃ、なかったの！」

ライアンが、ぶんぶん怒っていいました。

「い、いや、その前に、このりっぱな門を、見せてあげたいな、と思つて……」ミリエムはたじたじになつていいましたが、もうすつかり、ライアンはおかんむりでした。

「そんなのいいつてば！ 早く、ぬけ道まで、あんないしてよ！」

うーん、やつぱりモーグのゆうれいさんたちは、みんなどこか、のんびりしているみたいです……。すばらしい門を見せてあげたいというその気持ちは、ありがたいんですけどね……。 (こんかいばかりは、ロビーにもライアンをなだめることはできませんでした)。

それからみんなは大急ぎで (というよりゆうれいさんたちを急がせて)、ぬけ道のあるというそのたてもの前まで、もどっていききました (なにしろ広いまちですから、これだけでもずいぶんと、時間をむだにしてしまいました)。やれやれ、これでようやく、このモーグからそとに出ることができるとはいいです。ロビーがおそろしい影のおばけたちと戦つてから、ここまで、一時間とすこしかたつていませんでしたが、なんだかみんなは、もうずいぶんと長いこと、このモーグに足どめされてしまったような気がしました (それはたぶん、気の長いゆうれいさんたちにつきあわされて、あれこれ時間をむ

だにしてしまったからでしょう……)。

ミリエムが教えてくれたその兵士の家というのは、まちの小さな通りのとちゆうに、なんのかざりけもなくたつていました(小さいいっぽんの塔が、ちよつとつき出ているくらいでした)。もしこの家のことを知らされていなければ、ここにひみつのぬけ道がかくされているなんてことは、だれにもわかるはずもないでしょう。そのくらいその家は、ほかのたてものにとけこむように、ごくふつうにたてられていたのです(これはひみつのぬけ道のことを、かんたんには見つけられないようにするためでした。ぬけ道はここですよ、なんて、ひと目でわかるようになってたんじゃ、ひみつにしている意味がありませんものね)。

「ほんとに、ここなのー?」ライオンがとつてもうたがわしそうに、じつとりとした目つきで、ミリエムにつめよりました。「また、中にきれいな絵でもあつて、それを見せただけ、なんてんじゃないだろーね?」

ぐいぐいつめよつてくるライオンに、ミリエムはまたしてもたじたじになって、こたえました。

「いやつ、こんどは、ほんとうですつてば! このまちには、こんなふうな兵士の家とよばれるたてものが、いくつかあつて、それぞれが地下のトンネルで、つながっているんです。ここはまちのそとに通じているトンネルから、いちばん近い、入り口なんです

よ。」

まあとにかく。中にはいつてみればわかることですから。それでみんなはそれぞれの騎馬たちをひいたまま、たてものの入り口のとびらから、中にはいつていったのです。家の中はがらんとしていて、いすひとつありません。床もかべも、あのかびのような植物にびっしりとおおわれていて、こんな場合じやなかつたら、とても中にはいりたいとはだれも思わないことでしょう。

「なんにもないじゃん。さては、また、いいかげんなこといつてんじやないだらうーね！」ライアンがまたもや、ゆうれいさんたちにつめよりました。その右手のさきには、いつでも飛ばせるように、風のうずがまき起こつております！（おそろしい！ もつともゆうれいさんたちには、風のうずのこうげきもきかないんですけど。でも、そのはくりよくだけは、じゆうぶんでした。）

「いえっ！ぬけ道ですから、かくしてあるんですよ！ほ、ほら、ここに。」ミリエムはそういつてみんなの前に進み出ると、床の石だたみを手でさぐつて、そこにかくされていた小さなわつかを手にしました。そのわつかを、えいとひっぱると……。

「きん、きん、きん……。」

にぶい石のずれる音とともに、みんなの目の前の床が、どんどんとなくなっていくまじした！　そしてしばらくすると、それはなんとも大きな、地下へと通じるひみつのぬけ道へと、変わったのです！

「ふええ、すごい！」みんなはびつくりして、目の前にあらわれたまっ黒なあなの中を、のぞきこみました。おくの方までゆるやかな坂がつづいていて、さきのようなすはまったく見通せません。ですけど道はばはとも広く、馬が二頭、らくにらんで進めるくらいはありました。これなら馬に乗ったまま、まちのそとまでいけるとい話も、ほんとうのようです。

「ね？　ほんとうだったでしょ？」ミリエムが、どうだといわんばかりに胸を張って、いいました。これにはライアンもさすがに、「ぐぬぬぬ……！」とうなつて、なにもいいかえすことができません。

そんなみんなのことをしり目に、ミリエムがなんともきんちよう感のないいい方で、いいました。

「じゃ、みなさん、気をつけていつてきてくださいねー。道なりに進めば、じょうへきを越えて、まちのそとまで出られますから。いつてらつしやーい。」

ミリエムの言葉に、ミリエムをふくむ見送りのゆうれいさんたちは、とつぜん、みんなそろつて手をひらひらとふつて、笑顔でみんなにおわかれをしました。

「え？ とちゆうまで、あんないしてくれるんじゃないのか？」ゆうれいさんたちのとつぜんのおわかれに、ベルグエルムがびっくりしてたずねます。

「いえいえ。ぼくたちは、ここはこわくて、はいれないので。この道は、もうずっと、使われていない道なんです。この中には、むかしから、おばけが出るって、もつぱらのおわさでして……」

「なんだって！」

ゆうれいさんたちの言葉に、みんなはいっせいにさげんでしまいました。そんな話
は、ぜんぜんきいていませんでしたもの！

「おばけって！ きみたちだって、おばけじゃんか！ にたようなもんでしょー」ライ
アンがいましたが、ゆうれいさんたちはぶるぶるとふるえながら、こうこたえるばか
りでした。

「いえいえ！ ぜんぜんちがいますよ！ ここのは、もともとのおばけなんですから。
わたしたちは、いわば、半分だけおばけなんです。かんぜんなおばけなんて、とてもこ
わくて……」

これはどうにも、なんといいものか……。とにかくここには（ほんもの）お

ばけが出るということ、このぬけ道はまちの人たちから、とつてもこわがられている道だったようなのです（それならそうと、早くいってよ!）。

ですけど、そんなことにかまっていられる場合でもありません。とにかくここを通っていかないことには、なんにもはじまらないのですから。みんなはもうかくごをきめて、このおそろしげなぬけ道の中に、はいりこんでいくしかありませんでした（なにか出たら、そのときはそのときです!）。

「だいじょうぶ。そんなに長くはないはずですから、安心してください。うまく進めたら、まちのそとの山すその出口から、出られますから。いってらっしゃーい!」ゆうれいさんたちが、もういちど手をひらひらとふって、みんなを笑顔で見送りました（自分がいくんじやないものだから、まったくもってのんきなものです!）。

こうして旅の者たちは、この暗くてこわいひみつのぬけ道の中へと、ふみこんでいったのです。おっと、その前に、この人のことを忘れてはいけませんでしたね。みんなは、「ぬけ道の入り口のふちにかじりつきながら、わんわん泣いて見送っている」その人にかつて、しばしのおわかれの言葉をかけました。

「じゃあ、いってくるからね。いい子でおるすばんしてるんだよ、フェリー。」ライアーンがいました。

「かならずもどる。心配するな。」これはベルグエルムです。

「フェリアルさん、ちよつとのあいだだけ、がまんしてくださいね。」さいごにロビーがいました。

さて、ゆうれいのフェリアルとは、ここでしばらくのあいだおわかれです（フェリアルのファンのみなさんには、申しわけありません。しばらくのあいだだけ、がまんしてくださいね）。フェリアルは去つていくみんなのうしろすがたにむかつて、なんどもなんども、さけんでかえました。

「ぜつたい、もどつてきてくださいよー！ やくそくですよー！ 早く、もどつてきて！ こんなところにひとりぼつちは、ぜつたい、いやー！ やだー！」

「ああ……、いっちゃった……」

みんなのすがたがかんぜんに見えなくなつて、かえつてくるへんじもなくなつてしまふと、フェリアルはがつくりと肩を落として、その場にへたりこんでしまいました。もうこれがかんぜんにおばけのまちでおるすばん、けつていです。まさか自分が、こんなことになつてしまふとは……。

「さあさあ、げんきを出して！」そんなフェリアルの肩を、ミリエムがぼん！ とたたいてはげました。「みんな、すぐにもどつてきますよ。」

ですがそんなミリエムのはげましも、フェリアルには遠く、べつの世界での言葉みた

いにきこえるばかりでした。

「それはそうと……」ミリエムが急に、表じようを変えていいました。「あなたにはそのあいだに、ぜひ、やってもらいたいことがあるんですよ。」

フェリアルが、え？　と思つたときには、かれはもうたくさんのゆうれいさんたちに、取りかこまれてしまつていたのです。

「な、なんですか？　やつてもらいたいことつて？」

フェリアルがおつかなびつくりさういうと、ゆうれいさんたちはみな、にっこり笑つていいました。

「あなたたちがこわした、北の門。あなたにぜひとも、なおしてもらわなくっちゃ！　さあ、みなさんが帰ってくる前に、終わらせてもらいますよ！　わたしたちも手伝いますから。さあ、さつそく取りかかりますよ！」

ぐいぐいつめよつてくるゆうれいさんたちに、フェリアルはもう、なすすべもありませんでした。

「そ、そんなー！」

はたしてみんなはぶじに、おそろしい魔女のことをしりぞけて、フェリアルとゆうれいさんたちのたましいを取りもどすことができるのでしょうか？　かわいそうなフェ

リアル、運命やいかに！（これ、前の章の終わりでもいいましたっけ？）モーグのま
ちではそんなみんなのことにはおかまいなしに、今日もあのかびのような植物が、げん
きに、みどり色のこなをぷしゅー！ と吹き出していました。

12、カルモトさがし

今からなん十年と前のこと。このアークランドよりもずっと西の、海のむこうの大陸でのお話です。その大陸にはじつにさまざまなくがあつて、じつにさまざまなぶんかがごつたがえしていました。住んでいる人たちもじつにさまざまでした。人間はもちろん、ありとあらゆる動物の種族の者たち。海の種族、山の種族、小人たち。動く木の種族。果ては、はつきりとしたからだを持たない、けむりのようなすがたの種族の者たちまで、じつにさまざまな種族の者たちがこの大陸には住んでいたので（アークランドのウルファたちとはしゆるいがちがいましたがおおかみ種族の者たちもすくなくならず住んでいました）。ですから人々はこの大陸のことを、しぜんとこうよぶようになりました。いろんなものがまじりあつた大陸。こんごう大陸ガラランタと。

そのガラランタ大陸の東の果て、みなとの大都市ポート・ベルメルからほど近いヴァナントという小さなまちに、ひとつの魔法学校がありました。その学校には大陸中から、数多くの魔法をこころざす人たちがやってきて……、つて、このへんくらいまでにしておきましょう。そう、みなさんの思つてらつしやる通り、これつて前の章のはじまりと、おんなじなんです！（ライアンみたいに、「おんなじじゃない！」つていわれた方もいる

かもしれませんね。)

でもご安心を。ちゃんとわかっていますから(まちがえて前の章と同じ文を書いてしまったわけではないのです)。ここでいぜんと同じことをみなさんにお伝えしたのは、ここでしょうかいするある人物が、魔女のアルミラと同じく、このヴァナントの魔法学校にいたからなんです。ですがその人はアルミラとはちがって、とつても正しいおこないの人でしたし、しかもその人には、アルミラとはけつて的にちがうところが、ひとつありました。それはアルミラがこの魔法学校のせいとであつたのに対して、その人物は、せいとではなかつたといふところでした。つまりこの人は、この魔法学校の先生だつたのです。

いったいこの人物とは、どういふ人物なのでしょう。じつさいこの人のことについては、この魔法学校の先生だつたところから、なぜだらけでした。まずこの人の正しい名まえを知っている人が、ぜんぜんいないといふところからして、もうふしぎな人でした(校長のアルフリード・ルーマツト先生でさえ、この先生の名まえをおぼえていないくらいでした)。学校のけんきゆうしつといつしつにとじこもつて、なん日もなにかのけんきゆうにのめりこんでいたかと思えば、とつぜん、「旅行にいつてきます！」といつて、ふた月近くもいなくなつてしまつたことさえありました(じつに自由きままな人です!)

こんなふうでしたから、この先生はせいとたちのかつこうのうわさのまとなりました。「じつはあの先生は、悪魔の世界からやってきた、魔人なんだ」とか、「大むかしの魔法のじっけんによって生まれた、魔法のエネルギーそのものなんだ」とか、あることないこと、さまざまなうわさが流れていったのです（「ピーマンが大きい」といううわさも流れていたようです。ほんとかどうかはわかりませんが）。

それらのうわさも（ピーマンの話はべつとして）すべて、この先生の魔法の力が、ほかのすべての先生たちの力よりも強かったから、出てきたものでした（校長のアルフリート先生よりも、魔法の力の強さでは上でした）。ですがわたしはここで、このふう変わりな先生のこの魔法学校でのお話のことを、やめにしなければなりません。それほどいうことか？　といいますと、じつにたんじゆんなことなんです。この先生がある日きつぱりと、この魔法学校をやめてしまったからでした！

さてさていったい、どうしてしまったのでしょうか？　せいとたちや先生たちも、こぞつてこの先生のことをふたたびうわさのまどとしましたが、ほんとうのところは、とうのほんにんにしかわからないことでした。「けんきゆうのために、ほかの大陸に渡つたんだ」とか、「いやいや。悪魔の世界へ帰つたんだ」とか、さまざまなうわさが、あてもないまま飛びかかっていくばかりだったのです。

ここでひとつ、だいじなことをみなさんにお伝えしておきますと、この先生がこの魔

法学校をやめたのは、魔女のアルミラがこの学校に入学する、ちよくぜんだったということなのです。じつはほとんどいれかわりのようなかたちで、アルミラはこの学校に入学してきました。ですからアルミラがこの魔法学校にはいつたときには、この先生はもう、この学校にはいなかったのです。

これはたんなる、ぐうぜんなのでしようか？ そうでないかもしれせん。そしてこのことがどんな意味を持つのか？ ということについては、このあとの物語の中において語られることになるのです。

さて、それはさておき。いつまでも「この先生」のまんまじや、みなさんもじれったいことでしょう。もうそろそろ、この人物の名まえをみなさんにお伝えしておかなければなりませんね。

その魔法学校ではみんな、この先生のことをこうよんでいました。カルモト先生と。そうです、この人物こそ、旅の者たちが助けをもとめてたずねゆこうとしている、そのとうのほんにん、カルモトでした！

どこからか、ひゅうう……、というすきま風のもれるような音がびびいていました。ここはゆうれいのまちモーグの、そのまた下。まちのそとへとつながっているという、ひみつの地下トンネルの中。今このトンネルの中を、身をよせあうように、三頭の騎馬

たちと三人の者たちが、おっかなびつくり進んでいるところでした。それらの者たちがだれであるのか？ とか、なんでこんなところにいるのか？ とか、そういったことはもう、説明する必要もありませんよね。

みんながこのトンネルにはいつてから、まだ三分もたつていませんでした。道はずつとまっすぐに、南へとつづいております。地面は土がむき出しになつていて、ところどころに、ほり出されたままの大きな石がまじつていました。ですがみんながまずここにきて思ったことは、このトンネルの中が思っていたよりも、ずっときれいにたもたれていてということでした。水たまりがいくつもありましたが、いやなおいもありませんでしたし、なによりモーグのまちの中をおおっていたあのかびのような植物も、ここにはほとんど生えていなかったのです（これはちよつといがいでした。みんなはモーグのそのまた地下なんだから、さぞかしかびだらけなんだろうなあ、と思つておりましたから。ライアンなどはもしそんなにかびだらけだったのなら、ほのおの力をかりて、残らずやきつくしてやろうかと、ひそかに考えていたくらいだったのです。あいかわらず、かげきなことを考えているようですね……）。

「よかつた。どんなにきつたないのかと、心配してたんだけど。これなら、虫とかも出ないよね。虫とかつて、あり得ないもん！」

トンネルのかべをしげしげとながめながら、ライアンが安心していいました（モーグ

にはいる前にもちよつといつていたことですが、ライアンは虫が大きらいでした。ですからそとで野宿するときなどにも、かれは虫よけに人いちばい、気を使っていたのです。みんなにはないしよで、空気の虫よけバリアーを、自分だけこつそり張っているくらいでした。ずるい！)。トンネルのかべはモーグのまちの石と同じ、ばら色の石をつんでつくられていましたが、まちの中とはちがつて、そのかべはつるつるとしたかがやきを放つていて、かびのような植物もぜんぜんからみついてはいなかつたのです。

「だが、これはすこし、みような気もするな。」先頭をゆくベルグエルムが、そのかべを手でふれてみながらいいました(ちなみに、ベルグエルムはフェリアル騎馬をいっしよにひきつれながら、進んでいました。馬はゆうれいではありませんでしたから、ごはんも食べるし水も飲みます。すぐにもどつてくるよていでしたが、やはりなが起きるのか? わからない以上は、この馬もモーグのまちなかにおいていくわけにはいきませんでした。そのためちよつとたいへんでしたが、このさきの道はベルグエルムが、二頭の騎馬たちをあやつつていくことになったのです。ほんとうはロビーがその馬に乗つていけたら、いちばんいいんですけど、ロビーもまだ、ひとりで馬をあやつることなんて、できませんでしたから)。

「なぜ、かべがこんなにも、きれいにかがやいているのか? それに、このトンネルには、水もしみ出しているし、空気にも、しめりけが多い。これなら、くらやみにも生え

る、かびや、こけなどが育っていても、おかしくはないのだが。」

ベルグエルムがそういつて、その手のさきをみんなに見せました。そのゆびのさきには、なにかぬるぬるとした、いやな感じのものがくつついておられます。じつはこれが、かべがかがやいて見えているりゆうでした。このトンネルのかべいちめんをおおっているこのぬるぬるとしたゼリーみたいなものが、ランプのあかりにはんしやして、かがやいて見えていたのです（ところで、ベルグエルムつてよく、いろんなものをさわつてみますよね。やつぱりこれも、しらべたがりでまじめな、かれのせいかくからのことなのでしょうか？）。

「ここにはほんとうに、なにかあるのかもしれない。とにかく、早く、まちのそとに出てしまおう。」

そういつて足早に進んでいくベルグエルムのことを、ライアンとロビーは騎上で身をよせあうようにしながら、あわてて追いかけました。

「ここはなんだか、いやな感じがする。」ベルグエルムの騎馬につづきながら、不安そうにロビーがライアンにいいました。

「やつぱり、ほんもののおぼけがいるのかな？」ライアンがあたりをきよろきよろと見渡しながら、それにこたえました。

「よくわからないけど……」ロビーがつづけます。「はぐくみの森の地下で出会った、

あのおたまじやくしのかいぶつみたいな、でつかくてこわいものがあるような気がするよ。」

「あんなの、にどとごめんだよ。」ライオンがふたたび、こたえていました。「でも、もし、なにか出てきたら、またロビーが、ぼくを守ってね。ぼく、かよい、ひつじの子なんだもん。」

ライオンはそういつてロビーの方をふりかえると、かわいくにこつと笑つてみせました（どちらかといえばライオンの方が、ロビーより強いような気がします……）。

しばらくみんなは、まっすぐに進むことができました。かべにはあいかわらず、ぬるぬるとしたものがついていてかはやいていましたが、それがいいにはべつに、おかしなところもあります。いくつか右や左へとつづくまっくらなわき道がありました。よけいなより道もせず、みんなはどんどんと、まちのそとへの出口をめざしてつき進んでいきました。

しばらくいくと、道のさきに今までとはちがうものがあらわれました。トンネルのてんじょうがすこしつき出ていて、その部分だけまわりのかべも、ずいぶんがっしりところがなような石で、かためられていたのです。先頭をゆくベルグエルムには、その場所がなんであるのか？　すぐにわかりました。ですからベルグエルムは、みんなのこと

をふりかえって、こう声をかけたのです。

「ここが、じょうへきの下だ。いよいよ、まちのそとに出るぞ。」

ベルグエルムのいう通り、そこはまさしく、まちのじょうへきのそのまじりでした。あれだけぶあつくて大きなじょうへきでしたから、それをささえるためには、これだけがつしりとした石ぐみが必要というわけだったのです（とりあえず、この石ぐみをしっかりとつくってくれた、むかしの人たちにかんしやです。もしいいかげんなつくりだったのなら、石がくずれて、このトンネルもみんな、ふさがってしまっていたことでしょうか！）。

「やった！ やつと、モーグから出られる！ こんなかびだらけのところ、早く出たかったんだ。」ベルグエルムの言葉に、ライアンがうでをのばして「うくん！」とのびをしなから、うれしそうにいました。

「そとに出たら、まずは、ケーキから食べるぞー！ それから、チョコと、クッキーと……」（どうやらライアンのお目あては、ずつとがまんをしていたお菓子を食することだったみたいですね。やつぱりきれいな空気のところじゃないと、お菓子もおいしく食べられませんから、その気持ちもわかりますけど……）。

ちなみに、大聖堂の中にはかびは生えていませんでしたが、やつぱりそこでお菓子を食べる気になるほどには、きれいな空気ではなかったのです。ですからライアンは、せ

めてキャンディーだけでもと、まとめてなめていました。」

ライアンがそういって、かばんの中のお菓子をかばんの上から、いとおしそうになでていたときのことでした。ロビーがなにげなくうしろをふりかえって、そこであるものを見たのです。

トンネルのうしろのくらがりの中に、ロビーはなにか、動くものを見たような気がしました。それは水めんを走る波のように、ふるふるとふるえるなにかでした。まさかいよいよ、ほんもののおばけのごとうじょうでしょうか？

しかしそれは、おばけという感じではなかったのです。（人のサイズのおばけではなく）それよりももっと大きくて、なにか生きもののように動くもの……。ですが生きものにしては、おかしな動きでした。

そして、ロビーはつぎのしゅんかん。そのなぞの動くものがなんであるのか？ そのようなたいを知ることになってしまったのです。

「ベルグエルムさん！ ライアン！ 馬を走らせて！ 早く逃げて！」

ロビーはありったけの声で、ふたりにさげびました！ いわれてベルグエルムとライアンの方をふりむきません。

「どうしました！ なにか……」「どうしたの？ ロビ……」

ふたりがロビーのことをふりかえってそう声をかけた、そのときのことでした。

「な、なんだ……？ あれは……！」

ふたりは、ロビーの言葉はいつもてきかくで正しいということ、ここであらためて知ることとなったのです。

「だめだ！ 逃げるしかない！ 逃げ！」

ベルグエルムのごうれいっか！ みんなを乗せた騎馬たちは、トンネルの中をいちもくさん！ そとへの出口へとむかって、大あわてでかけ出していききました。

ロビーが見たもの。ふりかえったふたりが見たもの。それはトンネルの道はぼいっばいをうめつくしながら、ぶよぶよとこちらへむかってくる、いっぴき(?)のとんでもない生きものだったのです！ からだはゼリーみたいにぶよぶよで、その表めんはまるで波のように、さざめいております。色はとうめいで、これでは遠くから見たのではわかりません。こんなおそろしい生きものが、えさであるみんなと三頭の騎馬たちの方にくがけて、まっしぐらにむかってきました！

これではいくらベルグエルムでもロビーの剣でも、かないませんでしたし、ライアンがこうげきしているひまありません！ できることはただひとつ、逃げること！ みんなはもうなすすべもなく、トンネルの中を逃げ急げと、逃げていくばかりでした(な

んだか、こんな場面が多すぎるような気がします……。)

「こんなものずるいよー！ おぼけ、かんけないじゃーん！」ライアンがメルを大急ぎで走らせながら、泣く泣くさげびました。

そこからすこし、前のこと……。

ここはこのアー克蘭ドのどこかの、ぬま地のほと。背の高いみずべの草が生い上げる、ぬかるみの土地……。その草の葉の影から今、ふたりの人物たちがびよこん！と飛び出してきました。その人たちはよくみのった小麦のようなはだの色をしていて、くりくりとした目と、大きな口を持っていました。ひとりは茶色のかみの毛を長くのばして、もうひとりは同じ茶色のかみを、みじかくたばねております。そしてふたりとも、頭にはこがね色にかがやくつるつるとしたかぶとをかぶつていて、それらのかぶとの上にはまるい目のようなかざりがふたつ、ならべてちよこんと取りつけられていました（ですからちよつとこわそうに見えたこのふたりも、そのかざりのせいで、なんだかとってもかわいらしく見えてしまいました）。

このふたりはたぶん、兵士たちなのだと思われました。それはかぶとだけでなく、ふたりのかっこうを見ればわかりました。動物のかわから作られた身動きのしやすそうなよろいを着こんでいて、手には、みじかいやりをにぎりしめていたのです（ですから、

「かぶとがかわいい！」といっていきなり走りよっていくのは、あまりおすすめできませぬ。いったいこの人たちは、どこのかの兵士たちなのでしょう。そう思っているところで、このふたりがこんなことを話しはじめました。

「まちがいないな。むかしと同じだ。あの塔は、まだ生きている。」長いかみの兵士がいました。

「まさか、ほんとうだったなんて。てつきり、あの人がみんな、かたづけられてきたんだとばかり、思ってたんだけど。」みじかいかみの兵士が、それにこたえていいました。

「おそらく、生き残りがいたんだ。これは、やっかいだぞ。ここもじきに、ねらわれるかもしれない。のろいはまだ、つづいてるんだ。」長いかみの兵士が、そうつぶやきます。

その言葉に、みじかいかみの兵士がぶるるっ！ とからだをふるわせてから、いいました。

「おつかないなあ。おれはもう、まきぞいはごめんだよ。」

「あの塔に、まだ、どれだけの力が残っているのか？ それはわからない。」長いかみの兵士が、手をひたいにかざしてあなたの空をながめやりながら、つぶやきました。「いざとなったら、また、あの人がなんとかしてくれるかもしれない。でも、それまでは、おれたちの力で、この土地を守るんだ。ここは、おれたちの土地なんだからな。」

「あの人ってさあ……」みじかいかみの兵士が、思わずもらします。「強いんだけど、な

んか、いいかげんな感じだからなあ。かんしゃはしてるけど、たぶん、あの人がもつと
しつかり、あとしまつしてくれてたのなら、こんなことにはならなかったんだと思う
よ。」

「そんなことをいつても、はじまらないよ。」長いかみの兵士が、こたえていいました。
「この土地のことは、おれたちのせきにんだ。これ以上、ほかの種族の人たちに、めいわ
くはかけられない。さあ、いくぞ。早くみんなに、このことをしらせないと。」

「めんどうなことにならなければいいんだけどな……」
不安げにそういうみじかいかみの兵士に、長いかみの兵士はさいごにこういって、友
のことをうなりました。

「もう、めんどうなことになってるよー。さあ、急げー」
それはほんのつかのまのできごとでした。それからふたりは、ふたたびびよこん！
と、もとの草むらの中へと消えていったのです。

「やったー！ そとだ！」
ライアンがいさんでメルをかけらせながら、トンネルのそとへとむかつて飛び出して
いきました。

あれから……。

みんなはやつとの思いで、この危険なトンネルをぬけて、まちのそとへと出るその出口へとたどりつくことができたのです。もうみんな、全そくりよくでした。ゼリーみたいなあのぶよぶよとしたかいぶつは、その大きなからだからはそうぞうもつかないほどに、動きがはやかったのです！ ですからそとへの出口を見つけたときには、みんなはもうむちゆうになつて、その出口へとむかつてとっしんしていつてしまいました（そとに飛び出してからライアンがふりむきざまに、大あわてで空気の力をかりてあやつつて、出口の木のとびらをしめました）。

とにもかくにも、ついにみんなはモーグのまちをぬけて、明るいおひさまの光のふりそそぐ空の下へと、たどりつくことができたのです！（とりあえず、ばんざーい！）みんなはたぶん、今まででいちばん、おひさまのありがたさを感じたことでしょう（はぐくみの森の地下いせきからそとに出られたときには、夜でしたから、みんなはおひさまのありがたさをはだで感じる事ができなかったのです。ですからよけいに、みんなはここで、そのありがたさを感じていました）。じこくは、みつばちのこくげん。おひるちようどになる前のころでした（ですからおひさまもいちばん、げんきな時間でした）。「どうやら、あのぶよぶよは、そとには出てこないみたい。」ライアンが出口からすこしはなれたところまでひなんしてから、トンネルのとびらをしげしげとながめていいました。

「うん。それにしても、おっかなかったね。」ロビーも胸をどきどきさせながら、ライアンの言葉にこたえました。

「ところで、ベルグエルムさんは？」

ロビーがたずねると、ライアンがすこしはなれた木のところをゆびさして、こたえます。

「ベルグなら、ぼくたちのすぐ前に、出口を飛び出していったでしょ？ ほら、あそこにいるよ……、つて、あれー？ いない？」

ええっ？ ベルグエルムがいないですつて？ ライアンとロビーはびつくりして、あわててあたりをきよろきよろと見渡しました。

「うそー！ さつきまで、そこにいたんだよ！ いなくなるはずなんて、ないのに！
なんでー？」

ライアンがそういったときのことでした。トンネルの出口の木のとびらが、いきおいよく、ばーん！ とあけ放たれると、そこからフェリアル騎馬をつれた、馬に乗ったベルグエルムが、大急ぎで飛び出てきたのです！ ええっ？ これはいったい！

ベルグエルムは息もたえだえといった感じで、ぜいぜいしながら、ライアンとロビーの方にやってきました。もう、からだを馬の首にもたれかけさせて、ぐったりといった感じだったのです。

「し、死ぬかと思った……」やっとひとこと。ベルグエルムはふりしぼるようにそういいました。

「ちよつと、ベルグ！ いったい、どうしたの！ さきにいったんじやなかったの？」そしてそのライアンのといかけに、ベルグエルムはあはあ息を切らしながら、こんなことをいったのです。

「ひ、ひどいぞライアン。きみが、出口は左だっていうから、わたしも左の道へいったんだ。おかげで、たいへんな目にあつた！」

「ええっ？」ライアンもロビーもとてもびっくりして、おたがいの顔を見あわせました。

「そんなこと、ぼく、いつてないよ！ ぼくたちはずっと、ベルグの騎馬のあとを追っかけて、そのままそとへ出たんだよ！ ベルグがそとに出るとこだって、ちゃんと見たもん！」

「なんだって！」ライアンの言葉に、こんどはベルグエルムの方がびっくりぎょうてんです。どうやらおたがいに、話がずいぶんとくいちがつています。これはいい、どういうことなのでしょう？

「わたしはロビーどのお守りするために、かいぶつときみの馬の、あいだにいたんだぞ。そうしたら、きみが出口は左だといって、そつちにまがったので、わたしもあとを

追いかけたんだ。」

どうやらふたりの話をまとめてみますと、それぞれがおたがいに、そばをゆく騎馬のことを見たようでした。そしてそれらの騎馬たちの背には、たしかにライアンやロビーやベルグエルムと思われる者たちが、乗っていたようだったのです（そしてベルグエルムは、その者の声までききました）。

「ねえ、ライアン。ぼくはずっと、きみにひっしでしがみついていたから、よくわかんないんだけど……、前を走ってたのって、ほんとうに、ベルグエルムさんだった？」

ロビーのといかけに、ライアンは「え？」といつて、ちよつと考えこみました。

「ちやんと、フェリアルさんの騎馬も、つれていたのかな？」

ロビーの言葉に、ライアンはぎくつとなつて顔をくもらせます。

「そ、そういえば……、馬は、一頭しかいなかった……」

そしてライアンは顔を青くさせながら、ベルグエルムの方を見ました。

「わたしはずっと、二頭の騎馬とともに走っていた。」ベルグエルムがこたえます。

「まさか……、わたしたちとはべつの、騎馬に乗った者たちが、あの場にいたということか……？」

「そんなばかな！」ベルグエルムの言葉に、ライアンが大きな声でいきました。「あのトンネルには、ぼくたちしかいなかったじゃない！もしそんな、馬に乗った人たちが

いたんなら、すぐにわかるよ。」

「たしかにそうだが……」ベルグエルムはそういうと、そこでなにかを思い出したかのようになり、顔色を変えてつづけました。「そ、そういうえば、左にまがれといったきみの声も、なんだかいつもより、ひくかったような……」

「左にまがってー」ライアンがさげびます。「どう？　ぼくの声は、こんな感じだよ。ほんとうにこんなに、かわいい声だった？」

「ち、ちがうような気がする……。じゃあ、まさか……。ほんもののゆうれいがいたのか！」

ここまで話しあって、かれらはこれ以上このことを話すのは、やめにしてしまいました。だって、ほんとうのところなんてだれにもわかりませんでしたし、またあのトンネルの中にしらべにもどって、「ほんもののゆうれいさん、いますかー？」なんて、さがしてまわりたくもありませんでしたから！（それに、もしほんもののおぼけだったのだとしたら、かなりせいかくの悪いおぼけにちがいありません。ベルグエルムのことをだまして、ぶよぶよゼリーのかいぶつに食べさせようと思いましたから！）

というわけですから、この問題はここでおしまい！　今はそれどころではありませぬ。旅の者たちはこれから、ついにやってきたまちのそとのこの土地を、カルモトのことをさがして、急ぎ進んでいかなければならないのですから（ここで、著者のわたしか

らひとこと。読者のみなさんにはほんとうに申しわけないのですが、このなぞはほんとうに、なぞのまま終わってしまうのです。あの馬に乗ったおぼけたたちのことについて、知っている者などはどこにもいませんでしたし、わたし自身あのトンネルにふみこんでいて、しらべてまわるなんてことは、したくはありませんから！　そういったわけで……、ごめんなさい！）。

みんなはまず、今自分たちがいるところのかくにんから、はじめることになりました。トンネルの出口は山の中の木々にかこまれた小さな原っぱの、はしっこにつくられています。ベルグエルムがおひさまの位置をかくにんしてから、みんなはとりあえず、モーグの南の土地を見渡すことのできるようなどころまで、いつてみることにしました。

道はしばらくいって、なだらかな丘につづいていました。その丘のてっぺんまでのぼったところで、みんなは馬をとめてみます。そしてみんなのきたい通り。丘の上からはモーグの南に広がる土地のようすが、とつてもよく見えました（たぶんむかしの人たちも、敵のようすをよく見ることができるから、この丘の近くにぬけ道の出口をつくったのでしょう）。

「うわあ、すごいね。ここが、西の街道の土地なんだ。はじめて見た。」

ライアンが目をまるくして、しげしげとその景色をながめ渡しました。ライアンのいう通り、シープロンドをはじめとする北の地に住む人たちは、みんな、このすて去られた西の街道の地を、じっさいに見たことなどはなかったのです（もちろんロビーもです）。

まずみんなの目に飛びこんできたのは、たくさん岩山と、その右手につづくモーグのまちのじょうへきのすがたでした。高くりつばなじょうへきが、右の方にずうつとさきにまで、つづいていたのです。目をまっすぐにむけると、そのずっとさきは、海へとつづいていました。はるかなむこうに、海の中の岩が突き出ているのが見て取れます（ちなみに、ライアンは四年ぶり、ロビーにとってはこれをはじめての、海を見たいけんでした。ですからふたりとも、「海だ海だ！」といって、はしゃいでしまったのです。ベルグエルムが「海水よくきたんじゃないんだから。」といって、ようやくなだめました。ライアンをなだめるのは、ほんらい、ロビーのやくわりなんですけどね……。まあ、はじめの海でしたから、はしゃぐ気持ちもわかりますけど）。そして左の方を見ると、たくさん岩山につつまれるようなかたちで、ゆうれいさんたちが教えてくれたただっ広いしつちたいが広がっていました。

「あそこが、魔女のいるというしつちたいだな。」ベルグエルムがそのしつちたいをながめ渡しながら、いいました。「思っていたよりも、ずっと広いようだ。魔女の塔がどこ

にあるのか？ さがすのは、ひとくろうしそうだが……、ん？ おや？」

ベルグエルムが急に、言葉をつまらせました。なにか、あったのでしょうか？

「ねえ、あれって……、まさか……」ライアンもそれに気づいたようすで、素晴らしいます。

それからベルグエルムもライアンもロビーも、みんな声をそろえて、同じ言葉をさげました。

「魔女の塔だ！」

ええーっ！ いきなり、魔女の塔ですかー！

みんなのいう通り、しつちたいの中のその岩山の影に、もう見るからにそれとわかる、おどろおどろしい塔がたっていました！（でこぼこで、てかてか光っていて、あちこちつぎはぎで……、こんなにしゅみの悪い塔は、どう見たって魔女の塔にきまつています！）みんなはこのいきなりのお出むかえに、しばらく言葉を失ってしまいました。ですから、「塔のまわりに水のはいった大きなおほりがつくられている」だとか、「塔にたくさんのおおきなでつぱりみえないものがついていて」だとかいうそれらのことに気がついたのは、それからだいぶ、あとになってからのことだったので（ところで、その塔は

高い岩山の影にかくれるようにして、たつていました。ですからモーグのまちの方からは、塔のすがたを見て取ることはできなかつたのです。そして丘の下の街道を通る者からも、木々や岩がじやまをして、塔を見ることができませんでした。まさにあの魔女の塔は、街道の東がわの山の中の、見通しのよいこの丘の上の場所だったからこそ、見ることができたのです。それにしても……、まさかモーグの人たちも、魔女の塔がこんなにも近くにあるだなんて、思っていなかつたことでしょうね。

「おどろいたな……。まさか、こんなにもすぐに、もくてきの場所が見つかるとは……」ようやくのことで、ベルグエルムがまず口をひらきました。

「よかつた。これで、さがすてまがはぶけたね。」ライアンも、ロビーの手のひらに自分の手をばちん！ とあわせて、いいました。

「あの塔についているでっばりのようなものは、おそらく出入口だろうな。」ベルグエルムがひたいに手をかざして、目をほそめてながめながら、そういいました。「モーグの人たちの話では、魔女のアルミラは空を飛ぶことができるらしいから、塔には空から、出入りしているのだろう。しかし、そうなつてくると、こまつたな。」

そしてベルグエルムは、こんどは塔の下の方に目をやって、いいました。

「あの塔は、まるで、みずうみに浮かぶ島のようなだ。どうやって、あの塔までいけばいいのか？」

「船かなにかがあるかもよ。」ライオンが、いつものあつけらかなとしたいい方でこたえます。

「もし、なかったら、そうだなあ……、まるたかなにかに、ベルグとロビーをしばりつけて、ぼくが風の力で、塔の下まで吹き飛ばす！　つてのはどう？　ぼくは、おるすばんしてるから。」

にこにこ笑うライオンに、もちろんふたりとも、「じょうだんじゃない！」といつてこたえました。

「とにかく、」ベルグエルムがつづけけます。「今はまだ、あの塔には近づかない方がいい。われらのすべきことは、まず、カルモトどのもとをたずねることだ。」

「ええーっ。」ベルグエルムの言葉に、ライオンがぶーぶーいいました。「目の前にあるんだから、もう、いっっちゃおうよ。その方が、手っ取り早くていいじゃない。」

「だめだよ、ライオン。」こんどはロビーが、ライオンをなだめて素晴らしいですよ（やっぱりライオンのことをなだめるやくめは、ロビーがぴったりですね）。「ベルグエルムさんのいう通りだ。いくら目の前にあっても、まずは、じゅんびが必要だよ。カルモトさんに会って、助けをかりてからじゃなきゃ、どんな目にあうか？　わからないもの。」

ベルグエルムとロビーのふたりにいわれては、さすがにライオンも意見をひっこめるしかありませんでした（二対一ではライオンの負けです）。ですからそれからみんなは、

モーグのうれしいさんたちの言葉にしたがって、カルモトさがしへの道を、ふたたび進んでいくことにしたのです（まだちよつとライアンは、しぶしぶしていました）。

「ごめんね。でも、きみをこれ以上、危険な目にあわせたくないよ。」ぐずつくライアンの気持ちをさっして、ロビーがそう声をかけました。そしてちよつとしたことのようにでしたが、ロビーのこの言葉は、ライアンの心に大きくひびいたのです。

「うん。」ライアンはそれしかいみませんでした。ロビーの気持ちは、ライアンにはよく伝わっていました。

「さあ、いこう。」ベルグエルムがそんなふたりのことを見守りつつ、声をかけました。

道はなだらかにのびていました。ここは切り分け山脈とよばれる、アークランドを大きくふたつに分けているゆうだいなる山の、すその。今みんなは、その山のすその西がわのふもとの地を、急ぎカルモトの住むという家をめざして、馬を進ませているのです。この場所はほんらいならば、人が通るようなところではありませんでした。それでも道の広さは馬を進ませるのにじゅうぶんすぎるほどでしたし、地面もまるで、だれかがきれいととのえたかのように、馬を進ませやすく、たいらにならされていたのです。

木々はまるで、旅の者たちのことを「こちらへどうぞ！」といって、出むかえてくれるかのような様子でした。ですからいくつかあった分かれ道でも、みんなはまったくまよ

うことなく、正しいと思われる方の道をえらんで進むことができました。これはなんともふしぎなことでした。いつもなら用心深く道をさがして進むベルグエルムでさえ、「こつちだ。」とあつさり、道をえらぶことができたのです。でもやつぱり、こんなにとんだ道がはかどるといいうのも、おかしい話です。なにか、りゆうがあるのでしようか？

一行はそんなおかしい感じをいだけつつも、この山すその道をぐんぐん進んでいきました。道はあいかわらずなだらかに、変わりばえなくつづいております。右手にはずうつと、だだっ広いしつちたいがつづいていました（もう魔女の塔からは、けつこうきています）。左手にはたくさんの木々。そしてその上には、そのはるかかないただきを雲の中にいだいた切り分け山脈のゆうしが、りとそびえていました（ちなみに、このあたりは街道のほんすじからはだいぶはなれてるより道の道で、ベーカーランドへむかうための道からも、魔女のしはいしているはずの土地からも、はなれているところでした。ですからみんなは、今はとりあえずですが、魔女のしはいの危険からはのがれて、それいがいの危険にのみ注意して道を進んでいたのです）。

「これが、切り分け山脈……！ おっきいなあ。」

ロビーが山のいただきを見上げながら、思わずそうもらしました。ロビーは切り分け山脈のことを本で読んだことがありましたので、ものすごく大きくて高い山だというこ

とを知っていました。ですけど本のさし絵で見ただけでは、そのほんとうのすごさはわかりません。やっぱりこういうものは、じつさいに自分の目で見てみなくちゃ！ ロビーはそれを今、心の底から感じていました（ちなみに、切り分け山脈の名まえはロビーのほらあなでベルグエルムが語った話の中に、ひとことだけ出てきましたが、みなさんおぼえてますでしょうか？ ほんとうに、ほんのひとことだけでしたけど）。

「まあ、タドゥーリ連山にくらべたら、上品さにかけるけどね。でも、なかなかの山だと思うよ。」

負けすぎらしいのライオンが強がっていいましたが、やっぱりこの山のすごさはたいしたものでした。このアーランドを南北にずっとつらぬいていて、そのいただけは、ええんとつづく切り立ったがけです（そのさまはまるで、りゅうの背びれのようにも見えました。ですから山脈の東のふもとのに、リムルのあたりでは、この山のことは「りゅうの背」山とよばれていたのです）。ですからこの山を越えてはんたいがわにいくなんてことは、まったくもって、ふかのうなことでした（みなさんの住む世界みたいに、ひこうきや気きゆうがあるわけじゃないですから。それに魔女のアルミラやあのディルバグのかいぶつだって、ここを飛び越えてゆくのはむりでしょう。さすがに、高すぎですから！）。この山脈は文字通り、このアーランドをばっさりど、ふたつに切り分けていたのです（ですから、ついた名まえが切り分け山脈。わかりやすいですね）。

「この山にはむかしから、さまざまないい伝えがある。」ベルグエルムが騎馬をあやつりながら、いいました。「この山のいただきには、三人のけんじやたちが住んでいて、それぞれがことなる世界の力をしはいしているといわれている。その三つの力が、この山の力のバランスをたもっているのだということだ。」

けんじやというのとはかしい人のことをさす言葉で、どんなところでもけんじやというものは、人々からあいされ、そんなけいさされているものなのです（ちなみに、ちよつとわかりにくいのですが、けんじやとまじゆつしとはちがいます。たいていのけんじやは魔法も使えるので、どうちがうのか？　といわれると、説明にこまるのですが……。まあ、ちしきをたくさん身につけることをいちばんに考えるのがけんじや。魔法のわざをみがくことをいちばんに考えるのがまじゆつし。と思ってもらえたらいいんじゃないかと思えます。たぶん）。

「シープロンドの方じゃ、この切り分け山脈のてっぺんには、なん千年もむかしからおそろしい黒いりゆうが眠ってる、つていわれてるよ。」ライアンがつづけていいました。「だから、この山のいただきには、だれも近づいちゃいけないんだって。でも、だいじようぶみたい。こんなに、けわしい山なんだもん。のぼりたくたって、のぼれないよね。」

「りゆう、か……」ロビーが思わずつぶやきます。「ほんものを見てみたい気もするけ

ど、やっぱりりゆうは、本の中だけでいいや。おおかみのまるやきには、なりたくないもの。」

みなさんは、りゆうというものをよくごぞんじかと思えます。おとぎの世界の物語には、たいていとうじようしますものね(さきほどもちよつと、山の名まえのことで、りゆうの名まえが出てきたばかりでした)。とつてもでつかくて、長い首と大きな羽、大きな口を持っている、おそろしいとかげみたいなあのかいぶつです(りゆうにくらべたら、デイルバグのかいぶつだって、まるつきりかわいいものなのです)。そのりゆうのおそろしいイメージは、このアーケラントでもやっぱり、おんなじでした。そしてりゆうのそのいちばんのとくちようは？ といえ、やはりその口から吹き出される、ほのおの息なのです。ロビーはそのりゆうのことを本で読んで、よく知っていたというわけでした(その本のだいいいは、そのものずばり、「りゆう」というものでした。そしてこの本をはじめ、ロビーが今までに読んだ本は、すべて、かなしみの森のはずれにある、森のとしよかんでかりたものだったのです。このとしよかんは森に住んでいる者であれば、だれでもただで、本をかりることができました。ですからロビーは、そこでかりたたくさんの本を読んで、いろいろなことを学んだのです。

ちなみに、このとしよかんをかんりしているのは、りすの種族のししよさんで、リンクル・ルードピースといいました。この人はあなぐまのスネイル・ミンドマンと同じく、

おおかみであるロビーにせっしたことのある、数すくない森の住人だったのです。やっぱりリンクルさんの方は、だいぶこわがっていたようでしたが……。

「ひつじのまるやきだつて、いやだよ。」ロビーの言葉に、ライアンもじょうだんをいつてかえました。「ぼくも、りゆうよりは、けんじやの方がいいや。けんじやだったら、まだ、話しを通じるからね。りゆうに『こんにちは！』ってあいさつしても、火の息のへんじがかえってくるだけだもん。」

ライアンとロビーのふたりは、そういつて笑いあいました。

「ところでさあ、」さいごに、ライアンがいました。「その、カルモトつて人だけど、ひよつとしたら、この山に住んでるつていう、いい伝えのけんじやだったりしてね。」

ライアンのじょうだんに、ロビーも「まさかあ。」といつて笑いましたが、著者であるわたしは笑うどころか、心の中でぎくつ！ としてしまったのです。ということは、やつぱり？ 読者のみなさんのそのしつもんには、ここではまだおこたえしないことにしておいて……、と、とにかく！ お話のつづきをどうぞ！（ライアンめ、よけいなことを！）

切り分け山脈のふもとに、いちじんの風が吹き渡りました。空はとつてもおだやかでした。旅の者たちはいっしか、山のすその道からすこし中にはいった、おく深い山の

中を進むようになっていました。木々の数がだいぶふえてきております。このあたりの木々は表めんがつつるつるして、えだの数もまばら。葉っぱもほとんどついていません（みなさんの世界の、しらかばの木によくにています）。大きな鳥がぎやーぎやーという大きなき声を上げて、飛んでいききました。ですからみんなは、いつしゅんデイルバグかと思つて、きもをひやしたのです。

あたりはどんどんと、さみしい感じの場所が変わつていきました。ですけど道はあいかわらず、なだらかにずうつとつづいていて、なんの問題もないように思えます。そしてあたりに立ちならんだつるつるとした木々も、ここにくるまでのほかの木々と同じように、「どうぞこちらの道へ！」と、一行のことを、そのえだをのぼしてみちびいているかのようでした。

「ここはどうも、気にいらぬ。」先頭をゆくベルグエルムが、とつぜんそう口をひらきました。

「まるで、たくさんの者たちに、見張られているような気がしてならない。しかし……」

ベルグエルムはそういつて、あたりのすみずみまでを注意深くさぐつてみました。木々のえだのあいだから、しげみの中。地面の上から、空の雲の中まで、くまなくです。ですがやつぱり、なんにもおかしなところはありませんでした。

「やはり、思いすごしだろうか……?」

みなさんもすでにごぞんじの通り、ベルグエルムは野山をゆくことにかんして、だれにも負けないほどのすぐれたさいのうを持っていました（その力に、みんなは今までになんども助けられていますよね）。そのベルグエルムが目を皿のようにしてすみずみまで注意をはらつても、なにも見つけられなかったのです。ですからふつうに考えれば、やつぱりなにもないのでしょう。ただの思いすごしのはずです。

ですけどこんかいのこの旅は、そんなふつうのことが通らない、とてもやつかいな旅でした。とくにこのアークランドは、みなさんの世界とはちがう、おとぎのくに。ただでさえふつうが通らない、とくべつな場所なのですから。

ベルグエルムがふたたび、馬を急がせはじめたときのことでした。急にあたりが、ざわざわとざわめきはじめたのです。はじめは風が吹いて、木々のえだがゆれているのだろうとみんなは思いました。しかしそのとき、風は吹いていなかったのです！

「なにかくる！ 気をつけろ！」

ベルグエルムがそのことにまっさきに気がついて、うしろのライアンにむかつてさげびました！ しかしベルグエルムがそうさげんだときには、すでもうおそかったのです。

「だめだね。もう、おそいみたい。」

ライアンがそういって、手を上げて、こうさんのしぐさを取ってみせました。ロビーにも、その意味がすぐにわかりました。つまり、とてもたちうちできないほどの相手が、自分たちのその前にあらわれたということだったのです！

今やみんなは、どれだけいるのか？ 数えきれないほどたくさんさんの馬に乗った兵士たちに、かこまれてしまっていました！ いったいどこからこんなに！ どうやって！ しかしそんなことをいっているようも、みんなにはありませんでした。その兵士たちはあきらかに、旅の者たちのことを敵だと思っているらしく、なん十という弓矢をみんなにむけていたのです！（これでライアンがすぐにこうさんしたりゆうが、おわかりでしょう。いくらライアンでも、これだけの弓矢をむけられていたのでは、とてもたちうちできませんでしたもの。

ちなみに、ここは魔女の土地からはなれたより道の道でしたので、この兵士たちが魔女アルミラの手下たちなのではないということは、旅の者たちにもわかっていました。そのたしかなしようこそ、ベルグエルムはまっさきに見つけましたが、それはこのあと二ページほどあとでおしらせします。）

ベルグエルムもロビーもライアンも、より集まって、兵士たちにかこまれたその小さな土地のまん中にちぢこまりました。手出しはどうしたって、するべきではありませんせん。こんなときにするべきことは、ただひとつ。話しあうこと！ それがいいに、この

じようきようから助かるすべはないのです（ただし、話しあいを通じればの話ですが……）。

「待たれよ！ 待たれよ！」ベルグエルムが大声で、かれらによびかけました。

「あなたたちは、ごかいをしておられる！ われらは、あなたたちの敵ではない！ ただの旅の者だ！ 弓をおろされよ！」

「そうだよ！」ライアンも負けじといいました。「ただの、まいごのおおかみとひつじだよ！ こんなにかわいいぼくに、弓矢をむけるなんて、ひどいじゃない！ もつとよく見てよ！」

（ライアンの言葉はともかくとして……）ベルグエルムのいいぶんはもつともでした。かれらにはとつぜん、こんなふうに弓矢をむけられるりゆうは、ないはずです（たぶん）。ベルグエルムとライアンが話しかけてから、しばらくたって。ようやくのことで、兵士たちのうちのひとりが口をひらきました。

「あのお方に、おしらせねば。われらはあのお方に、おしらせする。おまえたちは、あのお方のところに、つれていかねば。われらはおまえたちを、あのお方のところに、つれていく。」

するとほかの兵士たちも、みんなそろっておんなじことをいいました。

「そうだ。あのお方のところに、つれていかねば。われらはあのお方のところに、おま

えたちをつれていく。そうだ。」

兵士たちはざわざわとゆれ動きながら、ずっと同じ言葉をくりかえしております。これはいったい、どういうことなのでしょううか？

「なんなのいったい？　なんかおかしいよ、この人たち。」

ライアンが、首をかしげていました。ライアンのいう通り、この兵士たちはなんだかどつても、おかしな感じだったのです。みんな木で作られた全身をおおうよろいを着こんでいて、首まですっぽり、同じ木でできたかぶとをかぶっております（このかぶとは目のところにわずかなすきまがあいているばかりで、中はぜんぜん見えなかつたのです）。草をあんで作った服を着ていて、草のくつをはき、木のたてや、剣や、やりを持っている者もいました（剣や、やりのさきっぽにかんしては、木ではなくて、ちゃんと鉄でできたふつうのものでした）。そしてかれらの乗っている馬が、いちばんふしぎでした。その馬たちはどう見ても、木をけずって作った、木の馬たちだったのです！（いぜんセイレン大橋の下のカピバラ老人の小屋で見たのは、鉄の馬でしたよね。あんなふうにならしたりしていたのです！　いったいこんどは、どんなしくみになっているのでしょうか？）

「しっ！　だめだよ。怒らせちゃまずいよ。」ロビーがライアンにいいました。ロビー

のいう通り、兵士たちはあいかわらず旅の者たちに弓矢をむけたまま、おろそうとしないのです。

「ロビーどののいう通り、どうやらここは、だまってしたがうほかなさそうです。」ベルグエルムが、ロビーとライアンのふたりにいいました。「わたしのけいけんから見るに、かれらはだれかに、やとわれている者たちのようだ。魔法であやつられているのかもしれない。しかし、じゃあくな者たちではない。」

「悪者じゃないって、なんでいえるのさ。」ライアンが、目の前につきつけられた弓矢を「ひええ……！」とよけながら、そういいます。「もうちよつとで、ぼくの顔にきずができちやうところだったよ！ あとが残ったら、どうしてくれるの！ かわいい顔が、だいなし！」

「かれらのかぶとのもんしようだ。」ベルグエルムが兵士たちのかぶっているかぶとを見るようにうながしながら、つづけました。ベルグエルムのいう通り、そこには白い木をあしらった、なんともしんぴ的なもんしようがえがかれていたのです。

「あのもんしようは、植物をつかさどる、白の魔法のもんしようだ。西の大陸では、広く伝わっているが、あのしるしは、悪い者が使うしではない。」（これが、さきほどお伝えしました、この兵士たちが万がいちにも魔女アルミラの手下たちなのではないのだという、しようこでした。ベルグエルムはこのもんしようのを見て、すぐにそれ

に気がついたというわけだったのです。もっとも、魔女の手下ではないとはいえ、危険な相手であることにはちがいないでしょうけど。」

「西の大陸のもんしよう、って、それじゃ、まさか……！」ベルグエルムの言葉に、ライアンがおぼけのミリエムのいつていた言葉を思い出しながら、いいました。たしか、めざすカルモトという人は、西の大陸からやってきたということでした。

「そのかのうせいが、大いにあるな。」ベルグエルムが、それにこたえてつづけました。「とにかくこれは、ただのごかいなのだ。それほどにけいけいする必要が、この地にはあるのかもしれない。ここは、かれらにしたがおう。カルモトどののところに、つれていってくれるかも。」

「どつちみち、それがいに道はないでしょ。」

さいごにライアンが、せまりくる弓矢をぐいぐいとおしかえしながら、なかばやけになつていいました。

そこから旅の者たちは、その前後左右を木の馬に乗った木のよろいを着こんだ兵士たちにかこまれながら、つづくきゆうくつな道のりの中を進んでいくこととなつたのです。これはまったく、思いもかけないことでしたが、どうにもしかたがありませんでした。兵士たちは旅の者たちのことをなわでしばったりするようなことはしませんでし

たが、そのかわり、弓矢からこんどは剣をぬいて、旅の者たちにつねにつきつけながら進んでいたのです（ですから、「すきをつけて火の力でみんな黒こげにしてやろうか?」というライアンの考えも、かれらには通じませんでした。かれらにはぜんぜん、すきが無かったです。すこしでもおかしな動きを見せたら、こんどこそくしぎしにされてしまいかねませんでした）。

「ぬけ目のないれんちゆうだ。」

ベルグエルムが、敵ながらあつぱれといった感じで、かれらのことをいいました。

「ほりよをつれていくことに、なれている者の動きだな。かれらのしぐさや、剣の持ち方を見れば、かれらがかなりのくんれんをつんだ、ゆうしゆうな兵士たちであるということがわかる。」

ベルグエルムのいう通り、兵士たちにはじつにまとまりがあつて、かれらはれつをみだすことなく、ずんずんと道を進んでいくのです。ですがかれらの顔はいぜんとして、かぶとのおくにかくれたままで、かれらがいつたいたいなに者なのか? ということについては、まったくもつてなぞのまま変わりませんでした。

それにかれらは旅の者たちのことをつれて出発してからというもの、ただのひとことも、口をひらきませんでした。なかライアンが、「ねえ」とか、「あのさ」とか、かれらに声をかけましたが、兵士たちはまったくだまつたままで、あいかわらず剣のさき

だけを、旅の者たちにむけているばかりだったのです。

「強いのかなんのか？ 知らないけどき！」とうとうライオンが、しびれをきらしいいました。ライオンはこんなふうにもりやりつれていかれることよりも、自分が話しかけているのに相手にしてもらえないことの方が、はるかに気にくわなかつたのです（だつてこんなことつて、今までいちどだつてなかつたことでしたから。なにしろかれは、シープロンの王子さまなんですから。王子さまに口をきかないなんて、そんな人、ひとりもいませんでしたもの）。「口くらい、きいてよね！ へんじもしないなんて、そんなのあり？ うでは立つけど、頭はさつぱり！ だつたりして！」

「ライオン、口がすぎるぞ。よけいなことをいうんじゃない。」

ベルグエルムに怒られて、ライオンはほほをぶくーつとふくらませて、むくれてしまいました。もちろんライオンだつて、こんなことをいったら相手に失礼だということくらしいは、じゆうぶんしようちしてました。ですけど、ライオンの気持ちもわかりますよね。いくら悪者ではないとはいえ、こんなふうにも剣をむけられたままきゆうくつにつれていかれたうえ、相手にもしてもらえないなんて、やつぱりいい気持ちはしませんの。

「しばらくは、がまんしよう。みんなを助けるためだよ。」ロビーがそういつて、（また）ライオンのことをなだめました。

「わかったよ。」ライアンはしぶしぶといった感じで、それにこたえます。

「でも、もし、ほんとうにカルモトって人の兵士だったのなら、このつぐないは、きつとしてもらうからね！」

ライアンはそれから、おとなしくだまっていますでしたが、ロビーにはライアンが今、頭の中でいろんなつぐないのさせ方を考えているところなのだということが、わかりました。

きつと、こわいことを考えているんだろうな……。

やがて、道がゆるやかなくなりになりました。あたりには前よりもいつそう、あのとつるつるとした木々がしげっっております（というより、ほとんどその木しか生えていませんでした）。そして一行が、なだらかなそのまがりかどを、左にまがったときのこと。急にあたりのしかいがひらけて、旅の者たちはそこで、なんともおどろきの光景をまのあたりにしました。

「うっわー！ なにこれー！」ライアンが思わずさげびました。ベルグエルムもロビーも、同じく目を見ひらいて、目の前の光景に見いつてしまします。

そこには、なんとも信じられないほどに巨大ないつぽんの木が、でーん！ とそび

え立っていました！

いったい、どのくらいの高さがあるのでしょうか？ 天をつくとは、まさにこのことです！ 旅の者たちはみんなこぞつて、首を空にむけました（モーグの大聖堂でもみんなは空を見上げましたが、この木はそれよりもさらに、上までのびていました！）。はるか上にえだがたくさんつき出っていて、そこにはまるできのこのかさみたいに、みどり色の葉っぱがあつくしげっていました。ほんたいに木の下の方には、えだがぜんぜんありません。木の表めんはあちこちふしくれ立っていて、この木がとんでもないほどのとしを取っているのだということが、わかりました。

その木をまん中にして、まわりには深いおほりがつくられていました。そのおほりには水がはいっていませんでしたが、まわりはしっかりとした木のさくでかこわれていました。かこいはひとつの場所だけがとぎれていて、そこには大きな木のはね橋がいつぼん、用意されております。そしてそのはね橋のところには、旅の者たちをつれてくるこの木の兵士たちと同じかつこうをしたほかの兵士たちが、なんんか見張りに立っていました。

旅の者たちがとうちやくすると、まわりをかこんでいる兵士たちのうちからひとりの兵士が、そのはね橋の方へとむかつていきました。それがいの兵士たちは、きりつ正

しくびしっ！ とれつをそろえたまま、旅の者たちのまわりにじん取っていたのです。そして進んでいったそのひとりの兵士が、はね橋のところにいるほかの兵士たちに敬礼をする、はね橋のそばにたてられていたいつけんの小さな小屋のところから、ちりりん！ というベルの音がなりひびきました。

しばらくのあいだ、ベルの音がなっていました。ベルの音がやんでからは、さつぱりなにごとも起こりませんでした。まわりをかこんでいる兵士たちは、あいかわらず旅の者たちに剣をつきつけたまま、ぴくりとも動きませんでしたし、はね橋のところにいる兵士たちも、気をつけのしせいを取ったまま、それからぱつたりと動かなくなっていました。まったくおきものの馬のように、まったく動かなくなっていました。

それから、五分くらいがたつたでしょうか？ 旅の者たちはわけもわからずにこんなふう待たされて、だんだんがまんがでなくなってきました（とくにライオンは、さつきからずっと、いらいらしっぱなしでした）。

十分がたつと、さすがにみんな、どうしたことかと思いはじめました。気の長いモーグのゆうれいさんたちじゃあるまいし、こんなに意味もなく待たされつづけてしまつては、たまつたものではありません。それで二十分がたつたころ。とうとうライオンがたまらなくなつて、そのいらいらをばくはつさせてしまいました！（やっぱりかれには、だ

まって待つていることなんてできませんでしたね。」

「いいかげんにしろー！　いつまで、こうやってるのさー！」

ライアンは両手いっぱいいたつまきのうずを作り出しながら、その手を兵士たちにむけてしまいました！　すると今までまったく旅の者たちにむかんしんといった感じだった兵士たちが、いつせいに、手にしたその剣をかまえてみんなの方へとむかつてきたのです！　これはまずい！　なにしろ相手は、なん十人という、騎乗の兵士たちなのですから！

やっぱりここは、おとなしく待つべきでした……！　ですが、もうおそい！　兵士たちは今にも、旅の者たちのことをその剣でくしぎしにしてしまいそうなふんいきです！　ベルグエルムは、やってしまった……！　といった感じで、自分も剣をぬき放ちました。こうなつたらもう、話しあうことなどはできません。戦って、なんとかこの場をきりぬけないと！

ライアンは自分のかるはずみなおこないのことを、心からこうかいしました。みんなのことを、危険にさらしてしまったのです。ですけど、かれをせめることはだれにもできませんでした（ロビーだってベルグエルムだって、がまんができなくなっていたことにちがいはありませんでしたから）。ロビーも剣をぬいて、小さなからだのライアンのことをかばいました。いよいよ戦いがはじまるのです。しかしライアンがそのしぜん

の力のわざをくり出そうとする前に、敵はもう、かれらのもとへとつつこんできていました。ここから助かる見こみは、まったくもって、うすいものでした。

そのとき！

「うるさいぞ！ なにをやっている！」

おほりのむこうのその巨大な木の方から、男の人の声がきこえてきたのです！

まさに、天の助け！ みんなはいっせいに、声のした方にむきなおりました。すると、そびえ立つ木のねもとのところ。そこに小さなかいだんがあつて、今そのかいだんを、ひとりの男の人がおりてくるところだったのです！

「だれでもいいから、助けてー！」ライアンが、空気のバリアーでせまりくる剣をひつしでおしかえしながら、もう、すがる気持ちでさげびました（こんなにいっぱいばいばいのように強くないからでは、とてもよゆうがありませんでしたので、ライアンもさすがに、とくいの強力なこうげきのわざをくり出すことなんてできませんでした。敵のこうげきをなんとかおしかえすことだけで、せいっぱいだったのです。そしてふだんは強がつておりましたが、こんなときにはライアンもやっぱり、まだまだほんらいのねんれいにふさわしい、男の子でした）。

「お願いです！ この人たちを、とめて！」ロビーも、手にした剣で相手の剣をせい
いっばいにはらいのけながら、ライアンにつづけてさげびました。

しかし、そんなみんなのひっしのさげびにも、その人はまるでなんでもないことだ
いうように、顔色ひとつ変えないのです。ゆつくりとした足取りで、木でできたかいだ
んを、こつんこつんとおりてきました。

「おまえたち、ずいぶん多いな。こんなに、いたっけか？」

その人は旅の者たちのことを取りかこんでいる兵士たちのことを見て、そんな変なこ
とをいいました。どうやらこの兵士たちは、この男の人につかえているようですが、ず
いぶん多いとは、どういうことなのでしょう？

「われらは、あなたたちとあらそう気などない！ どうか、兵を下げてほしい！」ベル
グエルムが、兵士たちのあるじと思われるその男の人にたのみこみました。すると男の
人は、あいかわらずなんでもないことだというような顔をしたままで、ゆびをかるく、ぱ
ちんとならしたのです。

するとどうでしょう！ みんなのことを取りかこんでいる兵士たちが、くるり！ む
きを変えて、もときた道の方へ、ぎっぎっ！ きそく正しくこうしんしていききました！

「た、助かった……」

ライアンはもう全身の力がぬけてしまつて、ロビーのからだにぐったりとへたりこん

でしまいました。ベルグエルムもロビーも心の底からほつとして、剣を持つ手をそのままぶらりと、下にたらしてしまいます。なにがなんだか？　まだわけがわからないことばかりでしたが、とにかくみんなは、助かったのです！

旅の者たちはしばらくのあいだ、もう動くこともできませんでした。しんぞうはただ、ばくばくになったままです。いやなあせがぼろぼろ吹き出してきて、地面にぼたぼた、たれました（もうだめかと思ったときには、だれでもこんなふうになってしまうものなのです）。

しばらくして、かいだんをおりてきた男の人が、旅の者たちとおほりをはさんでむかいあうところまでやってきました。それでは、さあ、説明してもらわないと！　いったいどうして、みんなのことを、こんな目にあわせたのか！

その人はむっつりとした顔のまま、立ちつくしていました。こちらの方をじつとながめたまま、動きません。旅の者たちはかたずを飲んで、その人が口をひらくのを待ちました。そしてついに。その人が口をひらいてこういったのです。

「うむ。やはり、今夜のディナーは、きのこのスパゲッティーにきめた！」
そ、そんなことはどうでもいいですから……。

「あなたは、カルモトどのか？」ベルグエルムがさきに、その人に声をかけました（こ

ちらから話をふらないと、さきに進めそうな感じではありませんでしたから。

「カル……、なんだって？」その人がききかえます。この人が、さがしていたそのカルモトなのではないのでしょうか？

「カルモトのです。われらはモーグのまちより、あなたをたずねるようにつかわされた者です。あなたの助けが、ぜひともほしいのです。」

ベルグエルムが、この人がカルモトなのにちがいないと思つて素晴らしいました。しかしその人は、またしても、とんちんかんなことをいうばかりだったのです。

「モーガー？ モーグ？ なんだそれは？ ハンバーグみたいなものか？」

はたしてほんとうに、この人がカルモトなのでしょうか……？ 旅の者たちはなんだかとおつても、不安になってきました。ここまできてぜんぜんかんけいのない人だったのなら、がっかりもいところでもあります。

「モーグ。ロザムンディアのまちの、べつの名まえです。今では魔女ののろいを受けて、すっかり、はいきよのまちになってしまったのです。」

ベルグエルムの言葉に、その人はこんどは手をぼん！ とたたいて、思い出したようにいいました。

「おお、そうか。ロザムンディアなら知っている。むかし、わたしがこの手で、すくつてやったまちだ。今ではすっかり、もとの通りにさかえていることだろうな。みんな、

げんきでやつとるか？」

「どうやらこの人って、あんまり人の話をきいていないみたいです……。今、魔女にのろわれて、はいきよのまちになってしまったと、いったばかりなのに！ ですからそれからもうちど、ベルグエルムがていねいに（そしてこんきよく）説明して、ようやくロザムディアのまちの今のようすのことなどについて、りかいしてもらうことができました（モーグのゆうれいさんたちもそうですけど、話がすなりとさきに進まないことが多いですね……）」

「なんだと！」

話が終わると、その人ははじめて感じようをあらわにしていいました。

「まさか、そんな！ かれらのたましいは、すつかりもとの通りにもどったものとはかり、思っていた。このわたしとしたことが、うっかりだった！」

「なんだかこの人の場合なら、うっかりというのもうなずけるような気もしますが……。とにかくその口ぶりからさつするに、モーグのまちのできごとにこの人がかかわっているということは、どうやらまちがないようです。いったいこの人はほんとうに、なに者なんでしょうか？」

「もうすつかり、かたがついたとばかり思っていたのだが。うーむ……。」その人はそういつて手をあごにあてて、考えこみました。

ところで……。ちよつと説明がおそくなってしまいました。ここで読者のみなさんに、この人（たぶんカルモトさんですけど）の見た目のことを、きちんとお伝えしておかなければなりませんね。これまでは戦いの場面や話の流れなどで手がいつぱいで、著者のわたしもこの人の見た目のことを、お伝えしているよゆうがなかったのです。

まずぱつと見ただけで、なんともおかしな人でした。赤や青やきいろにみどり、それらの水玉やいろんなものはいった、とつてもうるさくてごちゃごちゃとした服を着ていて、おそろいのズボンをはいていたのです（ですからまるで、サーカスのピエロみたいですよ）。腰にはひらひらとした、バレエのスカートみたいな白いぬのかざりをまいていて、首のまわりにもそれと同じような、ぬのかざりをまいていました（しかもそれらのかざりには、よく見るとたくさんの小さな星や、お花、ちようちよ、くま、くだもの、などといった、かわいらしいブローチがちりばめられています）。

顔がまた、とつてもいんしよう的でした。感じようのわからないむつつりとした顔をしています。するどくつり上がった目といい、大きくとがったわし鼻といい、きつ、とむすばれた口といい、いかにもへんくつの学者とか、がんこな先生だとか、そんな感じの顔をしていました。からだはとつてもやせていて、背も高く、まるでひよろつとしたにんじんみたいです。ひげはありませんでしたが、かみは長くてぼうぼうで、しかもそのかみを、赤やもも色やきいろに、はでにそめていました！

ですからたいていの人は、この人のことをひとめ見ただけで、こう思うんじゃないでしょうか？

しゅみが悪い！

旅の者たちもれいせいになってみると、あらためて今、そう思っていたのです（ですからベルグエルムもはじめは、「こ、この人、だいじょうぶなんだろうか？ うーむ……」と、かれに話しかけるのをためらってしまっただけです）。でもとりあえずのところは、かれのおしゃれのセンスのことについては、ふれないでおいた方がよさそうですね。いろんなしゅみの方がいますから。それよりも今は、もつとだいな話があるはずです。

「あなたが、カルモトどのでありましょう？」ベルグエルムがもういちど、たずねました（早くはつきりしてもらわないと、話がさきに進みませんもの！）。そしてそのベルグエルムの言葉に、ようやくその人はあることを思い出したようで、こういったのです。

「そういえば、いぜん、そんな名まえでよばれていたことがあったような気がするな。だが、そのカルモトというのは、だれかがかかってにつけた名まえだろう。ふだんはわたしは、わたしのほんとうの名まえをみじかくしようりやくした名を、使っているからな。」

そしてその人は、自分のみじかくしようりやくした名まえをいいましたが、それでも

ぜんぜん、だれもおぼえられないほどに、長いのでした！

「す、すみません。もういちどお願いできますか？」ベルグエルムが思わず、ききかえしてしまいました。するとその人は、しぶしぶといった感じで、もういちどだけくりかえしていつてくれたのです。

「しかたのないやつだな。これでさいごだぞ。わたしの名まえは、カルティンナンモントアウルクリストフフォン・デルハルゼントグンナンフィアセルトス・ハウゼンという。もういわんぞ。ほんとうの名まえをいちいちいつていたらめんどうだから、こんなにみじかいよび名をつけたのだ。これでおぼえられないというのなら、もう知らん。」

なるほど、魔法学校のアルフリート校長先生でさえ、この人の名まえをおぼえていなかったのもむりはありません。長すぎですもの！　こんなわけでしたから、もつとかんたんに、だれかがカルモトというよび名をつけたのでしょう。ですからカルモトさんほんにんが（だれかがかかってにつけた）そのカルモトというよび名をよくおぼえていなかったのも、むりもないことでした（もつともかれの場合は、もつからおぼえる気がなかったようですが……）。

ちなみに。モーグのゆうれいさんたちは名まえのこともふくめて、このカルモトについてのおわさをすべて旅人たちからききましたが、いちばんはじめにカルモトのおわさをみんなに広めたのは、ほかでもない、ヴァナントの魔法学校からやってきた、とある

ひとりのみならいのまじゆつし学生だったのです。この学生のかれは植物学がせんもんで、アーケランドの植物のひょうほんをとることがもくてきでこのアーケランドをおとずれましたが、その旅の中で、山の中に住むカルモトにぐうぜんに出会ったのでした。

「あなたは、カルモト先生じゃありませんか！」

こういったわけで、まちの人たちは「西の大陸からやってきた山の中に住んでいる学者で、まじゆつしで、とつても強くて、だれもほんとうの名まえを知らなくて、そして魔女のこともくわしい」という、カルモトのうわさを知ることになったのです。なんだかずいぶん、ややこしいうわさでしたが……。

ところで、このうわさはベーカーランドには伝わらなかつたのでしようか？　じつは伝わったことは伝わりましたが、そのあと西の街道がとぎされたがために、西の街道の地のまじゆつしのうわさも、そのままとだえてしまいました。それがもう三十年以上も前のことでしたから、ベルグエルムたちがカルモトのことを知らなかつたのも、とうぜんのことだったのです。カルモトのうわさをまだ知っていたのは、そのころから時間のとまったままの、モーグのゆうれいさんたちばかりでした。

さてさて、名まえ（とうわさ）のことはともかくとして。やつぱりこの人がモーグのゆうれいさんたちのいつていた、カルモトさんほんんにまちがいありませんでした。とりあえずは、よかつたよかつた！　みんなこの人のことをたずねて、ここまでやって

きましたから（カルモトさんが三十年以上もずっとここに住みつづけてくれていて、ほんとうによかった！）。すんなりとはいきませんでした。それでもずいぶん早く、カルモトさんのことが見つかったわけです（まだモーグのまちを出発してから、一時間くらいしかたつていませんでしたから！）。これなら魔女アルミラとのけつちやくについで、けつこう早くかたがつきそうですね。

でもまだ、かたがついていないことがありますよね。そう、いくら助けをたのみにきた相手とはいえ、こつちはもうすこしで、殺されるところでしたから！

「ちよつと待つて！ 名まえのことなんか、どうでもいいよー」

さあ、いよいよライアンが、カルモトにせめよる番がやってきました。兵士たちを下げて助けてくれたのはカルモトでしたが、そもそもその兵士たちは、このカルモトの手下たちなのです！ とてもこのまま、だまつたままにいることなどはできませんでした（ライアンが）。

「こつちは、殺されるとこだったんだ！ どう、つぐなつてくれるのさ！ さあさあ！」

「どういうことなのか？ 説明してください。」さすがにロビーも、ライアンにつづけていいました。

さて、カルモトはなんとこたえるのでしょうか？

カルモトはしばらく、むつつりとした顔のままだまっていますでしたが、やがて、あつ！
といったように目を見ひらいて、いいました。

「そういうえば、むかし、おかしなやつらがこのあたりをうろついていたんで、わたしが木の兵士たちを、見張りに立たせておいたんだつた！ うろついている者がいたら、わたしのもとまでつれてくるように、めいれいしておいたような気がする。まだ、ずっとそのままだったのか。わたしとしたことが、うっかりだった！」

やつぱり！ こんなことだと思つたんです！

カルモトは木から魔法で作り出したというこの木の兵士たちに、土地にはいりこんだ者を自分のもとまでつれてくるようにと、めいれいしていました。そしてもし相手はむかつた場合は、力づくでおとなしくさせるようにとも、カルモトはめいれいしていたのです。兵士たちはそのめいれいの通りにみんなのことをここへつれてきて、そしてはむかつたみんなのことを、おとなしくさせようとしたというわけでした（じつにちゆうじつな兵士たちです！）。そしてこの兵士たちは、木から作られた木の兵士たちだったんですね。どうりでふつうの兵士たちにくらべて、おかしな感じがすると思つたんです。

ちなみに。この兵士たちのかぶとの中には、ただ草をまるめたものがはいつているだけで、顔はありませんでした。この兵士たちは魔法のエネルギーそのものを使って、かんとたんおしやべりをしていたというわけだったのです。もつともこの兵士たちは戦

いの方がせんもんで、おしゃべりをするのはにがてのようでしたけど。そのおかげで、へんじをかえしてもらえなかったライアンが、すっかり怒ってしまいましたよね。

カルモトの話では、この兵士たちとかれらの乗る木の馬たちは、ふだんはずつと、木のすがたをしているとのことでした。土地にはいつてきた者を見つけると、ただの木から、兵士や馬のすがたにばけるといのです。どうりでさすがのベルグエルムでも、かれらに気がつかなかったはずです！ だって、ただの木ですもの、わかるはずもありませんよね！ たくさんの兵士たちにとつぜんまわりをかこまれてしまったのは、こういうわけがあったからでした（そしてカルモトのいつていた「ずいぶん多いな」という言葉も、このためでした。カルモトは目の前にいる兵士たちが、「忘れてしまっていた、自分のところにもどってきた兵士たち」なのだということに、気がついておりませんでしたので、もともと手もとにおいていた兵士たちとくらべて、「ずいぶん多いな」といったのです。忘れられてたなんて、なんかかわいそうな兵士たちですな……）。

さらにもっとくわしく話をきいたところ、旅の者たちが通ってきたあの道には、もうひとつ魔法がかかっていたそうでした。カルモトは知りあいがたずねてくるというので、自分の家までの道がわかるようにと、つづく道の木々に道あんの魔法をかけていたのです。みんなが道をゆくときに感じたおかしな感じは、そのためでした。木々が旅の者たちの心に、ちよくせつ「道はこつちですよ」と語りかけていたのです。それに

しても……、かんげいの道あんないの魔法がかかっているところに、うむをいわさず相手をつかまえる兵士たちをおいておくなんて！ なんていいかげんな人なんでしょう！ 旅の者たちにとってはなんともいいように、ふりまわされてしまったわけでした。

「そうだったのか。それは、ほんとうにすまないことをした。この通りだ。」話をきいて、カルモトは心からすまなそうに、頭を地面すれすれといったところまで深々と下げました（からだのやわらかい人ですね！ でもちよつと、ぽきぽきつ！ というひびのはいるような音がしたのが心配でしたが……）。

さて、どうしたものでしょうか？ このカルモトのたいどはけつこういがいなことでしたので、みんなは思わず、おたがいに顔を見あわせてしまいました。どうやらこのカルモトという人は、そそっかしくていいかげんなだけで、ぜんぜん悪気はないようなのです。もちろん旅の者たちのことをきずつけるつもりも、ぜんぜんなかつたのでしよう。

ですからこれ以上、かれをせめてもしかたありませんまい！ 旅の者たちにはそれよりもつと、たいせつなしごとがあるのですから（やつぱりライアンだけは、「なつとくいいかないな。」とぶーぶーいつていました）。

「カルモトどの。」ひとだんらくがつかいたところで、ベルグエルムが話を切り出しました（やつぱりこの人のことをよぶのには、手つ取り早い名まえである、カルモトという

よび名でかんべんしてもらいました。カルモトさんの方は、だいぶふまんそうでした（が）。「さきほども申し上げました通り、われらには、あなたの助けが必要なのです。われらは、しつちたいの中にそびえる魔女の塔へとはいりこみ、そこに住むという魔女アルミラのことをしりぞけ、魔女のもとから、みなのだましいを取りもどさなければなりません。あなたは魔女のアルミラにたいこうする、とくべつな力をお持ちのはず。どうかわれらに、その力をお貸し願いたいのです。」

こんどはみんなの方が、カルモトに頭を下げる番でした（やっぱりライアンだけは、まだしぶしぶしていました）。

さて、カルモトはどうこたえてくれるのでしょうか？

「なにやら、話がおかしなほうにかたむいているようだが……」カルモトは手をおごにあてて、なんだかふしぎそうな顔をしてそういいました（ちなみに、手をあごにあてて考えるのは、この人のくせみたいでした）。そしてそのあと。カルモトの口から出た言葉に、旅の者たちはなんともまったく、びつくりぎょうてんしてしまったのです。「アルミラなら、もうとづくに、このくから出ていったぞ。わたしがこの手で、ついでほうしてやったんだからな。これは、まちがいのないことだ。あのブリキの塔には、もうだれも住んどらん。」

ええーっ！

これはいったい、どういうことなのでしょう！ 魔女のアルミラが、モーグのみんなのたましいを持っていくんじゃないのでしょうか？

そしてさらにさらに！ つづくカルモトの言葉は、旅の者たちをそれよりもつと、びつくりぎょうてんさせてしまいました。

「今ごろアルミラは、ガランタのわたしの家にでも、もどってるんじゃないか？ なにしろあいつは、わたしのいもうとだからな。」

な、なんですってー！

なにやらほんとうに、話がずいぶんとおかしなほうにかたむいてしまいました！ さあさあ、旅の者たちの「魔女をやっつけてたましいを取りもどせ」大作戦は、いったいこのさき、どう進んでいってしまうのでしょうか？ みんなのたましいのゆくえは？ そして、フェリアルルの運命やいかに！（三回目ともなると、さすがにしつこかったですね。すいません。）

旅の者たちのそのはるかな上から、金のロープをたらしたような木もれ日がふりそそいで、地面にたくさんの光の水たまりを作り出していました。この大むかしからの木にとつて、その日もいつもとまったく変わらない、ただのふつうのいちにちでした。

13、木の塔とブリキの塔

空が、急にわき起こった暗い雲におおいつくされようとしていました。まだ午後も早い時間だというのに、地上をてらしていた光はあつというまにやみに飲みこまれ、やみはその地を、ふきつな夜のような場所へと変えてしまいました。

今、そのやみを待ちのぞんでいたかのように、上空から四ひきのまつ黒な鳥のような生きものたちが、ぎやあぎやあというおそろしげななき声を上げながら、その地に飛んできました。それらの生きものたちは、みなさんがすでに知っている生きものたちでした。そう、それらの生きものたちは、あのセイレン大橋の上でロビーたちが戦った黒騎士たちが、乗っていた生きもの。デイルバグという、かいぶつたちだったのです。

かいぶつたちはそのくにの空高くを、まっすぐに飛んでいきました。いったいここはどこなのでしょう？ 大地は荒れくれ立っていて、そのあちこちにはまつ黒にかがやくぶきみなたてものが、いくつもならんでおります。たくさんの塔がたっていて、それらの塔にはきみの悪いはたやのぼりものが、いくつもかかげられています。そしてそれらの塔のつぺんには、黒いよろいかぶとに身をつつんだ見るもおそろしげな兵士たちが、やりをかまえて見張りに立っていたのです。

よく見れば、兵士たちは塔のてっぺんだけにいるのではありませんでした。はるか下の道をこうしんしていく、豆つぶのようなもの。それらがすべて、同じかつこうをした、黒の兵士たちだったのです！ そしてもっとよく見てみれば、そこには今までにだれも見たこともないような種族の者たちまで、まぎっていました。とかげみたいなすがたの種族の者たちとか、ぜんぜんかわいくない、くまみたいなすがたの種族の者たちとか。大きな目玉にたくさんの手足が生えているという、ぶきみなかいぶつたちのすがたさえも、そこにはまぎっていたのです（わたしは今でも、この目玉のかいぶつのことを思い出すとぞつとしてしまいます！）。

このなんともおそろしげな土地を、デイルバグのかいぶつたちはあるひとつの場所をめざして、飛んでいきました。その場所には、このおそろしげな土地の中でもひとときわおそろしげなたてものが、そびえていたのです。そのたてものは、やみを切り取ったかのような、光をはねかえさないまっ黒な石をつみ重ねて、つくられていました。そのあちこちからは、するどくどがった塔が突き出ております。そしてその塔につくられたたくさんのまどからは、なんともおそろしげな大きな弓矢が、そのの相手へとむかつてにらみをきかせていました。

なによりそのたてものの大きさに、あつとうされました。てっぺんまではいったい、どれほどの高さがあるのでしょうか？ まさにそびえる山のごとく、あるいは巨大な黒

いりゆうのごとく、そのたてものはそこにあったのです。

「きたぞー！」

だれかのさけぶ声が、その場にひびき渡りました。ここはそのたてものの、てつぺんに近い場所。今そこに、ひとりの人物を乗せたあのデイルバグのかいぶつが一ぴき、おり立つたのです。

乗っていたのは、ひとりの黒ずくめの衣服に身をつつんだ男の人でした。その人はほかの兵士たちとはちがって、よろいやかぶとも身につけておりませんし、剣すらも持っておりません。かわりにそのうでに、エメラルド色の花のマークのはいった白いリボンをまいていました。

この人物がなに者なのか？ それはまだわかりませんが、ひとつだけいえることがあります。デイルバグのかいぶつに乗っている者が、せいぎの人物だとは思えません！

黒騎士のひとりでしょうか？ それにしては武器も持っておりませんでしたし、なんともにつかわしくない、お花のリボンが気にかかります。

「急げ！ へいかがお待ちかねだぞー！」

同じような黒ずくめのかつこうをした者たちが出むかえて、やってきたその人物にいました。リボンをつけたその人物は、なにもいわず、出むかえの者たちのあいだをこつこつと足早に歩き去っていきます。

それからすぐに、残る三びきのデイルバグたちもその場にとうちやくしました。こちらに乗っていたのは黒のよろいかぶとに身をつつんだ、いわゆる黒の兵士たちです。兵士たちはデイルバグからおり立って重いかぶとをぬぐと、やれやれといった感じで「ふう。」と重い息をつきました。

「わざわざ、われらが出むくこともなかった。へいかもさぞや、およろこびになろう。」その中のひとり。こがね色のかみをした兵士がいました。

「では、いよいよでございませうか？」

かぶとをかかえた、身の高いと思われるそのこがね色のかみの兵士の言葉に、出むかえの者たちがといかけます。

「いくさだ。われらが、このアーランドの、しはい者となるときがきた。」

こがね色のかみの兵士はそういつて、その口もとに笑みを浮かべてみせました。

その谷はまわりをぐるりと、高い岩かべにかこまれていました。ですからそこから見たのでは、ここにこんな谷があるなんてことは、わからないでしょう。谷の入り口はひとつだけしかありませんでしたし、しかもその入り口は、人のよりつかない山の中のもの、とつてもさみしい場所のただ中に、ひっそりとそんざいしているだけであつたのです。ですからふつうだつたら、だれもこんなところにはくることはないでしょう。まよえる

旅人か？ はたまたよつぼどの変わり者か？ それとも、この場所にくる、なにかのりゆうのある者たち、そんなとくべつな者たちがいはいは……。

今われらが旅の者たちがいるのは、まさにその谷の中でした。まん中にとほうもないほどの大きさのいっぼんの木が立っている、ひみつのかくれ谷。そして今みんなは、その谷の中のとあるひとつの場所に、まねかれていますところだったのです。

「だいぶちらかっているが、気にせんでくれ。今、お茶をいれてあげよう。」

声のぬしは、カルモトでした。さて、旅の者たちはいったい今、この谷のどこにいますのでしょう？ それはともかくとして……、まずはみんなが今いるこの場所のようすのことを、さきにみなさんにお伝えしておかなければなりませんね。それはなぜか？ といいいますと、この場所はカルモトの言葉の通り、じょうだんではすまされなくらいに、ちらかつていたからなのです！

まずここは木のかべにかこまれた、ひとつの部屋の中でした。しかし部屋といって、そこはただの部屋ではなかったのです。まずこの場所のあちこちに、たんすや戸だな、ソファーやつくえ、いすなどといった家具が、とつてもいいかげんな場所に、てきとうにおかれてありました。てんじょうには木で作られた船や、鳥や、ひこうきのような乗りものなどのもけいが、たくさんつるされております。そしてなによりも、この部屋の中をうめつくしている、物、物、物！ もうなにがなんだか？ わからなくらい

に、ありとあらゆる品物たちが、この部屋の床や、家具の上や、そのほかのすきまとい
うすきまに、ちらばっていました！（おもちゃばこをひっくりかえしたようとは、まさ
にこのことです！ たぶん、いたずらざかりのしんせきの子どもたちが二十人くらいで
あそびにきたら、こんなふうになるんじゃないでしょうか？ それくらい、ちらかつて
いました。）

それらの物たちのすきまを、カルモトが歩いていきました。びつくりすることに、カ
ルモトがゆびをかざすと、床をうめつくしていた品物たちが、がらがらーっ！ という
大きな音を立てて、ほかの場所へとどいていくのです！ ですからカルモトは、たくさ
んの品物たちなどはじめからそこになかったかのように、すたすたと床の上を歩いてい
くことができました（そのかわり品物がどいた方の場所では、もつとめちやくちやなこ
とになってしまっていました）。
とくに……。

よくもまあ、ここまでちらかしたもんだ……。旅の者たちはもはやなにもいえずに、
その物にあふれた部屋の中でちごまっています（むやみに動きまわったら、物のな
だれにまきこまれてしまいかねませんでしたから）。もしこの部屋にまどがなかったの
なら、たぶんみんな、息がつかってしまっていたことでしょう。大きなガラスのはまっ
たまどからさしこむ光が、なんとかこの部屋を、部屋らしくたもっていたのです。

「まるで、ひみつきちみたい。よくこんなところに、家をつくったもんだね。」ライア

ンが（しんちように物をがらがらとかき分けてまどまでたどりついてから）、そのまどの前に立ってその景色をのぞきこみながらいました。まどのそこには、高い岩のかべがそびえております。まどの下の方には、ふとい木の根と、そのまわりをかこむ水のないおほりが見て取れました。そして上をのぞけば、はるかな上に、たくさんの葉をつけた大きな木のえだが、いくつものびていたのです。そう、ここはあの巨大な木の、その内がわ。木のみきの中につくられた、カルモトの家の中でした！

あれから……。

「魔女のアルミラはわたしのいもうとだ」、など、カルモトがしようげきのじじつを語った、そのあとのこと。旅の者たちはカルモトに、もつとくわしい説明をもとめたのです（まあ、とうぜんですね）。そのうえ（カルモトはブリキの塔とよんでいる）魔女の塔のことや、みんなのたましいのことなどについても、みんなはカルモトにくわしく話をきく必要がありました。それにともなつてカルモトが、「わたしの家にきなさい。そこで話しをしよう。」といてみんなのことを、この木の中につくられた、カルモトは木の塔とよんでいる自分の家の中へと、まねいてくれたというわけだったので（カルモトがさいしょにあらわれたとき、かいだんをおりてきましたよね。じつはあのかいだんは、この家のげんかんにつながっていたのです。そしてはね橋のところからきこえてきたベルの音。あれはこのカルモトの家の、よびりんでした。木の兵士たちはとらえた者

たちのことをつれてきたということカルモトにしらせるため、よびりんをならして、カルモトが出てくるのをじっと待つていたというわけだったのです。カルモトがなかなか出てこないの、けつきよく旅の者たちは二十分以上も待たされ、そのあげくに、兵士たちと戦うはめになってしまいました(……)。

「そこ」にかけなさい。お茶がはいったぞ。」

カルモトがそういつて、ひとつのソファアのその上の物たちをがらとどかしました。旅の者たちはようやくのことそのソファアまでたどりつく、やれやれといった感じで、そこに三人でならんですわります(すわったしゆんかん、ベルグエルムが「いたっ!」)といつて立ち上がりました。見ると、かれのすわったところにかたいからを持つたくるみのような木の実がひとつ、まだ残つていたのです。ベルグエルムはおしりをさすりながら木の実をひろつて、もういちどすわりなおしました。ベルグエルム、ちよつと、ゆだんしちやいましたね。

ちなみに、魔女のアルミラがカルモトによつてすでにといほうされているということ、ベーカールランドへとつづく西の地の道のりに魔女のきよういはなくなつたはずでしたが、それでもこのさきの道のりは、なにが起きるか? わからない道のり。ベルグエルムをはじめ、みんなはやはり、このさきの道のことをよく知つているミリエムを、つれていくべきだとはんだんしたのです。カルモトにきいたところでも、このあたりに

ベーカールランドまでの道のりにくわしい者などは、ひとりもないということでしたし、カルモトさんほんにんも、この道を通ってベーカールランドまでいったことなどは、いちどもないということでしたから。それに、ねんのためきいてみましたが、かえるの種族のフログルたちでも、西の道のりについては知るよしもないだろうということでした。そしてじつさい、しるよしもなかったのです。かれらはこのあたりの土地にずっと住みついていて、まったく、はなれようとはしませんでしたから。

そんなわけでしたから、みんなはやはりこれまでのけいかく通り、魔女の塔へとむかうことにしました。もつとも、ここでけいかくをへんこうして、まちのみんなとフェリアルルのことをほったらかしにしたままさきへ進んじやうなんて、そんなの物語のヒーローたちとしても、ゆるされませんしね……)。

「さて、アルミラのことだが。」みんながすわると、カルモトは自分もはんたいがわのソファーに腰をおろして、お茶をすすりながらいいました。

「あいつはむかしから、わたしによくちよつかいを出してきてな。わたしの持つ力やちしきを、自分のものにしたいたいと思っていたようだ。だが、わたしはあいつには、なにひとつ教えてやらなかった。あいつがもとめていたのは、たんなる、強さとしての力だ。わたしの持つ力は、そんなことに使うためのものではない。わたしの力は、この世界にバランスをもたらすための、力なのだ。」

そのカルモトの言葉に、ベルグエルムがもしやと思つてたずねました。

「カルモトどの。あなたはもしや、この山に住むという三人のけんじやたちのうちの、ひとりではありませんか？」

「えっ！」ベルグエルムの言葉に、ロビーとライアンは顔を見あわせておどろきました。ここへくる前に山道でじょうだんでいつて笑つていたことが、ほんとうのことになるうとしていましたから、おどろくはずです。そして……、読者のみなさんの、「カルモトつて、いい伝えのけんじやなの？」というそのしつもんについても、ついにここで、こたえなければなりませんね。

はい、そうなんです。けんじやです。その通りです（ライアンにあつさり見ぬかれてしまいましたので、「ひみつにしておいて、あとで読者のみなさんのことをおどろかせてやろう」というわたしのけいかくも、あつさりだめになつてしまいました。ですからもう、なげやりです。すいません。ライアンめー！）。

もつともカルモトほんにんにとつては、自分が伝説的なけんじたちやのうちのひとりといわれていることについて、ぜんぜんきようみがありませんでした。かれは生まれつき、すぐれた魔法の力と、この世界の力のバランスをたもつという、そのふしぎな力のことを持ちあわせていたのです（かれが持つているふしぎな力とは、「木々や植物の力をあやつる」というものでした。カルモトはこの力をじょうずに使うことで、この世界の

力のバランスをたもっていたのです。ですがそういわれても……、じつさいになにをしているのか？　今ひとつぴんときませんよね。これもまた、けんじやとまじゆつしのがいを説明するくらいむずかしいのですが……、まあ、しぜんの世界と人の世界とがなかよくやっついていけるように、影のささえとしてがんばっている、といったくらいに思ってもらえたらいいんじゃないかと思います。たぶん。

ですからカルモトは、自分のさずかったその力を人々のやくに立つように使うということは、あたりまえのことなのであつて、自分にとつてはそれがしごとのようなものなのだ、といつも思っていました（変な見た目とはうらはらに、りっぱな人なんですよ、ほんとは）。

ところで……、カルモトがいい伝えの三人のけんじやたちのうちのひとりだというのなら、ほかのふたりは？　と思うのはとうぜんですよ。だいじょうぶ。残りのふたりのけんじやたちも、このアークランドのどこかにちゃんとそんざいしているのです。え？　この切り分け山脈のてっぺんにいるんじゃないの？　つて？　たしかにベルグエルムは、そういつていましたよね。ですがそれは、だれかの広めたただのお話にすぎなかったのです。ほんとうはかれらけんじやたちは、このアークランドのどこかの、知っている者すらほとんどいない、人里はなれたひみつの場所にひっそりとかくれ住んでいました。そして……、それらの残るふたりのけんじやたちも、あの方になつて、この

物語の中にしっかりと出てきますよ。ですからそれまで、お楽しみに！」。

「けんじやだかなんじやだか、知らんが、」ベルグエルムのしつもんにも、カルモトがこたえていました。「わたしのことをそうよぶ者たちが、わたしのことを、世に知らしめたようだな。どうでもいいことだ。」

「やはり、そうでありましたか。」ベルグエルムがうやうやしく頭を下げて、つづけました。「はじめてお会いしたときから、そうではないかと思っていたのです。」（いや、それはうそでしょ？ たしか、「この人、だいじょうぶなんだろうか？ うーむ……」とか思っていたような……。まあここは、だまつておきましょう。

ちなみに、モーグのゆうれいさんたちですが、かれらは切り分け山脈に住むといういい伝えのけんじやの伝説については知っていました。それがカルモトのことをいっているのだということまではわかりませんでした。カルモトはもともと、切り分け山脈の南のはしに住んでいましたが、その地でけんじやのうわさが広がったのち、あるときとつぜん、このルイーズの木のところにはひっこしてしまったのです。そして南のくの人に人々も、いい伝えのけんじやが切り分け山脈の地に住んでいるといううわさのみを知っていただけで、カルモトのその名まえやすがたかたちのことなどについては、ぜんぜん知りませんでした。このようなわけで、カルモトがそのいい伝えのけんじやなのだということ、旅人たちをはじめ、だれにも知られていなかったのです。ベルグエルムがカ

ルモトのことを、そのいい伝えのけんじやだと見破ったのは、かれの持ち前のするどさからのことでした。）

「そんなことよりも、さきを急いでいるのではなかったのか？ 仲間が待っているの
だろう？」

カルモトの言葉に、みんなははつとしてしまいました。そうでした、伝説的なまでのけんじやにじっさいに会えたことで、すっかりそちらに気がいつてしまっていました。が、今はとにかく、みんなを助けることの方がさきなのです。

「は、はい。それでは、まず……」

「えーっ！」

ベルグエルムが話しはじめたそのとき。急にライアンがさげびました。いったいどうしたのでしょうか？

「なにこれー！ ロビー、このお茶、飲んでみて！」

ライアンの言葉に、ロビーもカルモトに渡されたそのお茶を、ここでようやく口にしてみます。すると……。

「えーっ！」ロビーもライアンとまったく同じく、さげんでしまいました。それからロビーとライアンが、そろって口にした言葉は……。

「おーいしー！」

思わずベルグエルムも、「し、失礼。」といってお茶をすすりましたが、ロビーとライアンのいう通り、そのお茶はなんともすがすがしくさわやかで、ひとくち飲んだだけであたりにしあわせの花がばあつ！と広がってしまいそうなほどに、おいしかったのです！

みんなはこんなにもおいしいお茶を、今まで飲んだことがありませんでした。ですから思わず、カルモトにくいいるようにたずねてしまったのです。

「う、これ、なんですか？」ロビーがいました。

「こんなお茶は、はじめてです。なにかとくべつな……」ベルグエルムがいかけたとき……。

「おかわりー！」ライアンがあつというまにカップをからにして、カルモトにおかわりをもとめました。

そしてカルモトは、そんなみんなの反応にちよつとびつくりしたような顔をして、こたえたのです。

「この木にみのる実から作ったお茶だ。このルイーズの木は、わたしのしごとを助け、わたしに大いなる力を与えてくれる。そのためわたしは、ここに住んでいるのだ。」

そう、このお茶はみんなが今いるこの巨大な木、ルイーズの木にみのつた実をせんじていれた、お茶でした（ちなみに、そのルイーズの実はみなさんの世界の洋なしにした

色とかたちをしています。そのままでも食べられますが、このようにせんじてお茶にしても、とってもおいしいのでした。

カルモトはそれから、みんなにお茶のおかわりをそいでくれて、そのうえルイーズの実そのものまでごちそうしてくれましたが、その実の方もまた、おいしかったこと！言葉でうまくいいあらわすのはむずかしいのですが、食べたあとまるで、からだ中の悪いところがみんなまとめてすつきりさわやか！といった感じで消えていくような……、そんな味だったのです（わかりづらくてすいません……）。

ちなみに、ライアンの言葉をかりると、「実ひとつとホールケーキひとつを取りかえっこしてもいいくらいのおいしさ」だそうです。わかるような、わからないような……。そのあとライアンに、「じゃあ、ルイーズの実ひとつと、ホールケーキひとつ半なら、どちらをえらぶ？」とわたしがしつもんしたところ、だいぶたつてから、とっても小さな声で、「ケーキ……」というへんじがかえってきました。

みんながむちゆうでルイーズの実をかじって、お茶をがぶがぶ飲んでいたとき。カルモトがいました。

「いくらでもごちそうしてかまわんが、だいじな用があるんじゃないのか？」
そうでした！ さつきからなにをやっているんですか、もう！

そしてそのあと（お茶と木の実はきりがないのでここまでにしておいて）、みんなは大

急ぎで「魔女をやっつけてたましいを取りもどせ」大作戦のほんとうの作戦かいぎをここにひらいたのです（モーグのゆうれいさんたちの立てた作戦は、とつてもてきとうでしたから……）。

みんなはカルモトからたくさんのことをききました。まずは魔女のアルミラのことです。アルミラは兄のカルモトから力を得ることをあきらめました、そのかわりにとんでもないことを考えました。それはカルモトのいた魔法学校からきんじられた魔法のわざをぬすみ出して、そのわざを使って、カルモトのことを力でねじふせてやろうというものだったのです！（その魔法のわざのことについては、みなさんはもうすでにござんじですよ。人のたましいから軍隊を作るといふ、あのわざです。）

そう、アルミラはそのわざで、力を教えてくれなかった兄に対して、しかえしをしやうとしていたというわけでした！ アルミラがヴァナントの魔法学校にはいったわけ。それはつまり、兄であるカルモトにしかえしをするための魔法の力を学び、そしてさいごに、このきんじられた魔法のわざをぬすみ出すためであつたのです。そのためアルミラは、カルモトが学校をやめてカルモトの目がとどかなくなつたときをねらつて、この魔法学校に入学したというわけでした（なんとも魔女らしい、ひきようで子どもっぽい考え方です！）。

そしてアルミラはそのわざを使って、モーグの人たちのたましいから、おそろしいブ

リキの兵士たちの軍隊を作ることにはせいこうしました。ひとりのたましいの力は、十体の兵士たちのことを動かす力となりました。アルミラはこうして、じつに二千体近くもの、ブリキの兵士たちによる軍隊を作り出していたのです！

そしてついに、その軍隊をカルモトのもとへとさしむけようとしたときのこと。アルミラにとつて、まったく思いもかけないことが起こりました。ブリキの兵士たちの前に、木の馬に乗ったなん百という数の木の兵士たちが、立ちふさがったのです！ しかもそればかりではありません。こがね色のかぶとをかぶった、かえるの種族の者たち、フログルの兵士の者たちまでもが、アルミラのそのブリキの軍勢の前に立ちほだかりました！（ええっ？ フログルですって？ ここでかれらがとうじょうしてくるなんて、かれらが魔女アルミラの手下だなんていうふたしかなうわさは、やっぱりでたらめだったということになるのでしょうか？ うーん、やっぱりうわさとげんじつとでは、ずいぶんと話にくいちがいがあるみたいです。）

いくら二千体ものブリキの軍勢とはいえ、かれらはすべて、歩きの兵士たちでした。木の馬に乗った木の兵士たちは、ブリキの兵士たちよりずっと数はすくなくったのですが、馬に乗った兵士と歩きの兵士とでは、戦う力がぜんぜんちがうのです。そのうえ木の兵士たちは、ブリキの兵士たちよりも、ずっとずっと強いのでした（そのうでまえにかんしては、ベルグエルムもちゃんとみとめてましたよね）。そこにフログルの兵士た

ちが加わりましたから、もう勝負はつきました。

ブリキの兵士たちはつきつきとばらばらにこわされて、ただの鉄くずになってしまいました。もうアルミラはくやしいやら頭にくるやらで、なにが起こったのかもよくわからないありさまでした。ですけどこれはぜったいに、兄のカルモトのしわざなのだということは、アルミラにはよくわかっていたのです。

こうしてアルミラは、兵士たちも塔もすべてをすてて残して、このくにを去っていきましました。

「くやしー！ つかぜつたいに、しかえししてやるー！」アルミラはそれだけさげふと、いのちからがら、西の空のかなたへと逃げていったのです。

アルミラのよそう通り、もちろんこれはカルモトのやったことでした。ですがそのもともとのきつかけは、フログルたちにあつたのです。フログルたちは自分たちの土地にかつてにはいりこんできたならしい塔をたてて住みついた魔女のことを、ひどくきらつていました。ですからかれらはなんとかして、魔女を追い出すことができないものか？ といつも思っていたのです（やっぱりフログルは魔女の手下だなんていううわさは、ぜんぜんうそっぱちでしたね！ かれらもまた、魔女のことをきらっていたのです。まったく、うわさなんていうものは、かんたんに信じてしまうべきではありません！）。ですけどかれらの力だけでは、おそろしいのろいの力をあやつる魔女にはかないませ

ん。そこでかれらは、あるひとりの人物のことを思い出しました。

その人は切り分け山脈のふもとにかくれるようにして住んでいる、強力な力を持った、学者およびまじゆつしなのだということでした（ほんとうは伝説的なまでのけんじやとよばれている人でしたが、ずっと人とかかわらずにこの土地に住みつづけているフログルたちでしたから、そのこともやつぱり知りませんでした）。この人の力をかりることができれば、魔女を追いはらうことができるかもしれませぬ。

そんなあるとき。フログルたちは魔女がひそかにおそろしい軍隊を作っているのだということに、気がついてしまいました。フログルたちにとって、それはきょうふそのものでした。早くなんとかしなければ、これはこの土地だけの問題ではなくなってしまう！ そしてフログルたちはようやくのことで、山のまじゆつしを見つけることができました。それはもちろん、カルモトのことでした。

フログルたちの話をきいて、カルモトはここでようやく、「アルミラが自分にしかえしをするためにこのアーランドにやってきている」ということや、かのじよが「人のたましいをうばっておそろしい軍隊を作っている」ということなどを、知りました（フログルたちはブリキの塔から飛び出していく黒くっておそろしい影たちのことを、もくげきしていたのです。その影たちはロザムンディアのまちの中へと、飛び去っていきました。その影たちが人々からたましいをうばっていくおそろしい影たちなのだということ

とを、かれらはのちに、カルモトから知らされることになるのです。カルモトはこうして、アルミラの軍勢に使われたたましいが、ロザムンディアのまちの人たちのたましいであるらしいということを知りました。ですがカルモトは、ちつともあわてませんでした。自分の力はアルミラの力よりもはるかに上なのだということを、知っていたからです（これはべつに、うぬぼれているというわけではありません。カルモトは、じじつはじじつということをし、れいせいにはんだんできる人だったのです）。

カルモトはそれから、たくさんの木の兵士たちのことを作り出しました（さすがのカルモトでも、数百の兵士たちのことを作り出すにはなん日もかかりました）。そして、いさつに出たフログルたちのほうこくを待つて、その日ついに、兵士たちをアルミラのもとへと送りこんだのです。これが、アルミラがこの地を去っていったそのわけの、いちぶしじゅうでした。

このあとすべて、あとしまつしてくれていたらよかつたんですけれど！　そこはやつぱり、いいかげんできてきとうなせいにかくの、カルモトだったのです！

カルモトはアルミラが西の空に逃げていくところをかくにんすると、「うむ、これでよし。このブリキの兵士たちは、ロザムンディアの人たちのたましいから作られたようだ

が、これでたましいも、もとのからだにもどることだろう。よいことをした。」といって、それですべてかたがついたと思つてしまいました（そしてフログルたちも今の今まで、カルモトのその言葉をずっと信じていました）。しかしじつさいは魔女が逃げ去ったというだけで、まちのみんなのたましいもどつていませんでしたし、まちに張られたのろいのけっつかいも、ぜんぜんそのままだったのです！（アルミラが全部、ほつたらかしにしていきましたから。アルミラのこういいういかげんなところは、やっぱりカルモトにいていますね。血すじなのでしょうか？）

それから三十年あまりがたちました。そして今日。旅の者たちがカルモトのもとをおとずれたことによつて、ようやくのことで、カルモトはそれらのことに気がついたというわけだったのです（気づくまで、長すぎですつてば！）。

話を終えると、カルモトはもういちど旅の者たちに頭を下げていいました。

「まことに、すまなかつた。わたしがうっかりしていたばかりに、ロザムディアのまちが、今、そんなことになつていようとは……、この通りだ。」カルモトはそういつてソファーから立ち上がると、（足もとの物たちをがらからーつ！ とどかしてから）また頭を地面すれすれまで下げてあやまりました（こんどはぼきんつ！ というあきらかになにかがおれた音がしたので、みんなは「だ、だいじょうぶですか？ 今の。」と心配しましたが、カルモトは「へいきへいき。」というばかりで、気にもしませんでした。ほんと

うにだいじょうぶなんでしょうか……?。」

「まちの人たちのたましいは、どこにいったのでしょう? アルミラの兵士たちをおしたときに、兵士たちの中から、たましいも、かいほうされたのではないのでしょうか?」ベルグエルムがカルモトに、もつとも重要なしつもんをしました。そうです、今いちばんの問題は? といえ、みんなのたましいがいつたい今、どこにあるのか? ということでした(魔女そのものをやっつけるというもくてきについては、もう果たされておりましたから、あとはみんなのたましいを取りもどすことを、いちばんに考えればよかったです)。

「まさか……、お空にのぼっていつちやったんじゃ……!」ライアンが両手でほほをおさえながら、心配そうにつづけました。ライアンの言葉に、ロビーもベルグエルムも顔を青くさせて、カルモトのへんじを待ちます。まさかほんとうに、たましいは天にめされてしまったのでしょうか……!」

「心配するな。だいじょうぶだ。」

よかった! これでとりあえずは、ほっとしました。ですがほんとうに、どこにいったのでしょう?

「まちの人たちがゆうれいとしてまだ生きているのなら、たましいもまだ、かならず生きています。」カルモトはそういうと、あごに手をあてて考えこみました。

「人のたましいから兵を作るといふ、そのいまわしきわざのことなら、わたしもよく知っている。ふつう、兵をたおせば、もとのあるじのもとへとたましいは帰つてゆくもののだが、まだもどっていないとなると……。ふむ、アルミラは、うばつたたましいに、なんらかののろいをかけているようだな。」

あのおそろしい、魔女ののろい！ それはたいへんなことです！（いつたいどうすればいいんですか？ カルモトさん！）

「アルミラは、たましいの自由をうばうのろいを、かけているのだろう。みなのだましいは、まさに、とらわれの身ということだ。そうなると、兵からぬけたたましいは、もとのろうごくにもどつていったことになる。ブリキの塔の中にもどつたと考えて、まず、まちがいないな。」

やっぱりあのブリキの塔！ あるじがいなくなったというのに、ずっとそのままぶきみにたちつづけているあのつきはぎだらけのおそろしい塔に、みんなのたましいが今も、とじこめられていたのです！

「やはり、あの塔か。」ベルグエルムがそういつて、みんなと顔を見あわせて、うなずきました。

「カルモトどの。では、われらは今すぐ、あの塔へゆかねばなりません。みなのだましいを取りもどすために、ぜひ、あなたのお力をお貸しください。」（魔女がいなくなつた

とはいえ、まだどうすればみんなのたましいを取りもどすことができるのか？ やっぱりぜんぜん、わかりませんでしたから。」

みんなはカルモトに、心からお願ひしました（こんどばかりはライアンも、しつかり頭を下げてお願ひしました）。

さて、カルモトはどうこたえてくれるのでしょうか？

カルモトはソフアーから急に立ち上がると、そばのぼうしかけにつるしてあつた（しゅみの悪い）コートと（しゅみの悪い）ぼうしと（しゅみの悪い）ステッキをわしづかみにして、いいました。

「なにをのんびりすわっている！ さあ、出発だ！ このわたしがちよくせつ、あの塔をばらばらにうちこわしてくれよう！」

ちーたかたつた！ ちーたかたつた！ どん、どん、どんたかたつた！

ちーたかたつた！ ちーたかたつた！ どん、どん、どんたかたつた！

つるつるとした木々の生えるさびれた山道の中に、なんともそうぞうしいたいこの音がひびき渡りました！ いったいぜんたい、これはなんのさわぎなのでしょうか？

今そのさわがしいマーチングに乗って、たくさん馬たちが、道のむこうからやって

きました。ですが、たくさん馬たちといいましたが、じつさいその中で生きたほんものの馬は三頭だけで、そのほかの馬はといえますと、これは生きた馬によくさせて作られた、木の馬たちだったのです。そしてそのたくさん木の馬たちには、これもまた木や草ばっかりのかっこうをした、なんともおかしなれんちゆうが乗っていました。

「ねえ！ やっぱりそれ、やめてもらえない？ これじゃ、アーケランド中の黒騎士たちに見つかっちゃうよ！」

メルの背からライアンが、さきをゆくカルモトにむかつて大声でさげびました（うるさくて、大声を出さないと声がとどかないからでした）。

「だいたいな出発には、いきおいがたいせつだー」前をゆくカルモトが、たいこのマーチの中から、こたえてかえします。「安心しろ！ わたしがっている！」

ふたりの会話は、もちろん、このやかましいたいこの音についてのことでした。カルモトは自分の住んでいる木の塔を出発するにあたって、たくさん木の音楽隊を、いっしょにつれてきたのです。その音楽隊が、カルモトと旅の者たちの方にむかつて、やかましくたいこのマーチをうちならしていたというわけでした（この音楽隊もまた、木の兵士たちと同じ魔法で作られた、木でできた者たちでした。兵士たちとちがうのは、よろいやかぶとを身につけていないということです。そのからだはすべて、木のつると草をあんで作られていて、そのためまるで、かかしのようでした。この音楽隊が、木の兵

士たちの乗る木の馬のうしろに乗りこんで、兵士たちからだを木のつるで背中あわせにしぼりつけて、両手でたいこをうちならしていたのです。

カルモトのいうことには、「ぜったいに必要なのだ。」ということでしたが、そこまでして、かれらをつれてくる必要があったのでしょうか……？（ちなみに、カルモトはベルグエルムのつれてきたフェリアル騎馬に乗って、旅の者たちの前をあんないやくとして走っていました。馬に乗るのはお手のものということでしたから、フェリアルの騎馬が思わぬところで、やくに立ったわけです。そしていつもは先頭をゆくベルグエルムが、今はうしろの守りにしていました。）

「カルモトさんだから心配なんだよー。もう、どうなっても知らないから！」ライアンがそういって、なかばやけになってカルモトのあとを追いかけました。ロビーもベルグエルムも、「うーん。」とうなって、それにつづくしかありませんでした。

やがてさびれた山道をぬけ、もとのみどりにかこまれた野の道を越えて、ついに一行は、あのおそろしげな魔女のブリキの塔の見えるところまでやってきました。はじめはじゅんぴがたりなくて近づくことのできなかつた、魔女の塔。その塔にこれからいよいよ、ふみこんでいくのです。旅の者たちは思わず、肩をぶるつとふるわせました（あるじがいなくなったとはいえ、まだまだ塔の中には、どんな危険が待ちかまえているもの

か？ わかりませんでしたから。ですが、あんないやくであるカルモトは塔を前にしても、あいかわらず顔色ひとつ変えません。馬の足をろくに弱めることもなく、さつさと塔の方へと進んでいってしまいました。

「あの塔に近づいたためには、きまつた道を通っていかねばならん。さもなければ、馬ごともみんな、ぬまの底だぞ。わたしのあとに、しっかりとついてこい。」

カルモトはそういつて、ふたたび馬の足をはやめました……、今けつこう、重要なことをいいましたよね？ 道をあやまつたら、ぬまの底？ ひええ！

「そんなこと、今ごろいわないですよー！」ライアンがぶんぶん怒つて、カルモトにもんくをいいいました。ですけどもう、あとはカルモトを信じて、ついていくしかないのです（いつぼうライアンのうしろに乗っているロビーは、こちらはライアンをたよるしかありませんでしたから、「し、しっかりとね！」といつてライアンのその小さなからだにしがみつくばかりでした）。

丘をくだつて下に広がる土地においてから、すぐに。一行はほとんど消えかかったむかしの街道の上を横切ることになりました。それはまさに、人々からすて去られ、忘れ去られた、西の街道そのものにほかなりませんでした。ですが旅の者たちが「これが西の……」といいかけたときには、カルモトがもう、さつさとさきへいつてしまいましたので、みんなはその街道を、じっくりながめているひまもなかったのです（まあ、あと

でゆっくり見ればいいですけど。

そこから四ふんの一マイルもいかないうちに、あたりの景色は急に変わってしまいました。あちこちぬまだらだけで、背の高いこがね色の草があたりいちめんに生えていたのです。そう、一行はついに、魔女の塔のあるしつちたいの中へとふみこみました。

ここではカルモトもさすがに、馬の足をゆるめました。道はどろどろのぬかるみ道ばかりで、かわいているところはごくわずかしかありません。カルモトはそのわずかなかわいた道をさぐりあてながら、馬を進めていきました（ちなみに、ここからベーカーランドにむかう西の街道の方にも、魔女のしはいの土地であると思われていたしつちたいが、ずっと広がっていました。ですけどそちらのしつちたいは、この目の前に広がる深いしつちたいにくらべたら、たとえ騎馬たちをつれていたとしても、まだまだ進みやすい、ふつう(?)のしつちたいだったのです。魔女の塔へとつづくこの深いしつちたいは、ふつうだったらぜんぜん、人が通るようなところではありませんでした)。

この道ははばもせまく、馬が一頭通りぬけるので、やっとでした。しかもあたりには、馬の背たけよりもなお背の高い草が、いちめんに生えていたのです。ですからあたりのようすも、まったくわかりません。ここでやくに立ったのが……、なんと、あのやかましい、木の音楽隊だったのです！ この音楽隊のたいこの音で、みんなはさきをゆく仲間たちが今どこににいるのか？ 道がどこにのびていくのか？ それらのことを知るこ

とができました（カルモトはこのために、この音楽隊をつれてきたのでしょうか？ もしそうだとしたら、さすがです。でもカルモトのことでしたから、そこまで考えていたかどうか？ ぎもんですが……）。

ばつちやーん！

そのとき。道のさきの方から、なにかが水に落ちる音がしました。見ると、さきを進んでいる木の兵士たちのうちのひとり、馬の足をすべらせて、馬ごとぬまの中に、落っこちてしまっていたのです！ みんなは、たいへん、助けなきや！ と身を乗り出しましたが、カルモトはれいせいな顔のまま、みんなのことを手でせいして、こういうばかりでした。

「だめだ。もう、助けられん。へたをすれば、きみたちまで、ぬまの底だぞ。」

見るまに、木の馬と木の者たち（これは木の兵士とその背中の中の木の音楽隊のことです）は、ずぶずぶしずんでいってしまいました。そしてそのまま、かれらはもとのただの木へと、もどっていつてしまったのです。そしてさいごのえだのいつぽんがしずみきつてしまうと、ぬまはまた、なにごとともなかつたかのように、静かな水めんへともどりました。

「みんな！ おたがいのからだを、ロープでつなぐんだ！」ベルグエルムが思わず、さげびました。どうやら旅の者たちは、あんないやくのカルモトがいるからと、すこしゆだんしすぎていたみたいです。カルモトがいてもだめなときはだめなんだということが、これではつきりしました！ これからは、もつとしつかり、用心していかないと！（というより、用心しようにもカルモトがさつきとさきに進んでいってしまうので、旅の者たちもあわてて、ついていくしかなかつたのです。ここでようやく、なかばごういんに、「カルモトどの！ カルモトどの！ ちょっとお待ちを！」といってベルグエルムがカルモトの足をとめたので、かれらはおたがいのからだを、ロープでつなぐことができなくなりました。これからはなにかあつたら、カルモトにえんりよしている場合ではありませんね。自分たちでできることは、自分たちでやらないと！ 旅の者たちはここで大いにはんせいをしました。）

そこからみんなは、前よりもなおいつそう、ゆつくりと、しんちように、道を進んでいきました。ですがしばらくくいてからは、あんないやくのカルモトでさえも、安全な道を見つけるのがこんなんになってしまったのです。いぜんカルモトがこのしつちたにきたのは、もう三十年近くも前のことでした。そのころにくらべて、このしつちたははずいぶんと大きくなり、道もはずいぶんと変わってしまったのです。そして……。

「だめだ。」

カルモトが急にいいました。いったい、どうしたのでしょうか？

「ここからさきへは、進めない。道がなくなりました。」

なんですって！ みんなはびっくりして、カルモトにつめよります。

「道がないって、それじゃどうやって、あの塔までいくのさ！」ライアンがいました。ですがカルモトは、またしてもなんでもないと口をきいて、顔をこぼして、こうこたえるばかりだったのです。

「心配するな。だいじょうぶだ。」

しかしどう考えても、だいじょうぶとは思えませんけど……。みんなはさきのようすをたしかめてみましたが、カルモトのいう通り、どこをさがしてもしつかりとした道らしきものは見つからず、どろどろのぬかるみと、底なしのおそろしいぬまたちが、待ちかまえているばかりでした（ところで、読者のみなさんの中にはこう思った方もいるかもしれませんね。カルモトさんの魔法でアルミラみたいに、空をふわーっ！ と飛んでいったらいいじゃないかって。ですがざんねんながら、魔法とは、つねにばんのうだというわけではないのです。白魔法、黒魔法。魔法にはたくさん力のしゅるいがあります。カルモトの使う魔法は、木と植物にかんけいの深いものでした。その魔法ではアルミラのように、空を飛んだり浮かんだりするということは、できなかつたのです。です

がそれはけっして、カルモトの持つ魔法の力が弱いからというわけではありません。カルモトはたぐいまれなる力を持った、すばらしいまじゆつしです。ですがその魔法の力は、空を飛ぶのに使うようなものではなかったというだけのことでした。

「ついでついで。もどるぞ。」

そういうやいなや。カルモトは馬の首をうしろにかえして、もときた道をひきかえしはじめてしまいました。いったいどこへゆくつもりなのでしょう？ もどったとしても、どこにも塔へとつづくような道は、なかったはずです（ライアンが、「ちよつと！ いたい、どこいくのさ？」と声をかけましたが、カルモトは「ついてくればわかる。」と言って、さっさとさきへいってしまいました）。

しばらく道をもどったころ。カルモトが急にとまりました。

「うむ、ここだ。」

カルモトはそういって、そこに生えている背の高い、あのこがね色の草の葉をかきわけます。すると……、そこにそこから見たのではけっしてわからないような、ほそい、木で作られた道が、ぬまのむこうへとむかつてつづいていました！

「カルモトどの、この道はいつたい……？」ベルグエルムが声をかけましたが、カルモトはいつもの通りに、さっさとその木の道を進んでいってしまいます。

「ここは、フログルたちの道だ。かれらに、協力をたのんでみよう。」馬を進ませなが

ら、カルモトがいました。なるほど、（前にもいましたが）じもとのことならじもとの者にきくのが、いちばんですものね。このぬまに住むというかえるの種族、フログルたちなら、塔へとつづくべつの道を知っているかもしれないません。

「でもさ、」ライアンが、カルモトの背中にむかつていいました。「フログルの人たちって、もうなん十年も、人とかかわろうとしないで、ぬま地のおくにかくれ住んでることなんですよ？ それって、ほかの種族の人たちのことが、きらいってことだよね？ いくらカルモトさんのたのみでも、今でもちゃんと、力を貸してくれるのかな？ むかしは、魔女と戦ってくれたそうだけど。」

そんなライアンの言葉に、カルモトは、ぼっ！ と急にふりかえって、それからにこっ！ とまんめんの笑顔を浮かべて、いいました（みんなははじめてカルモトの笑顔をみました。ですからみんな、ものすごくびっくりしてしまったのです）。

「問題ない！ じつに、気のいいれんちゅうだぞ。きみたちもきつと、気にいるはずだ！」

木でできたそのひみつの道をしばらく進んでいくと、あたりはだんだん、ぬま地から岩だらけの場所へと変わっていききました。もう魔女の塔からは、だいぶはなれてしまっておりす。やがて木の道が終わると、一行は土の地面にたどりつきました（みんなは

かたい地面の上にたどりつくことができず、ちよつとほつとしてしまったものでした。この場所は岩ばかりで、まわりはぐるりと高い岩山にかこまれております。草木もほとんど生えておらず、地面には大小さまさまな岩が、ごろごろところがっているばかりでした（ぬまに落つこちる心配はもうありませんでしたが、ほんとうにこんなかわいた岩だらけのところに、みずべを好むかえるの種族であるフログルたちが、いるのでしょうか？）。

カルモトはあたりの岩場をくまなくしらべてまわりました。そしてやがて、なにかになつとくしたかのように「ふむ。」とつぶやくと、旅の者たちにむかつていったのです。「ここではしばらく、待つとしよう。たいこの音が、かれらをよんでくれる。」

カルモトはそういって、つれてきていた音楽隊にむかつて、ゆびをばちんとならしました。すると木の音楽隊は前よりもなおいっそう、はげしいマーチング曲をうちならしはじめたのです！

「うるさーい！」ライアンがあまりのうるささに、耳をふさいでさげびました。ロビーもベルグエルムも、たまらずに耳をふさいでしまいます。ほんとうにこんなことで、フログルたちがきてくれるのでしょうか？ しかしそれから、二分もたたないうちのこと……。

「カルデインどの！　カルデインどのだ！」

急にみんなの頭の上から、だれかの声が入ってきた！　見ると、高い岩山のとつぺんに、ふたつの小さな人影が見えたのです。フログルたちでしょうか？

「今、そちらにまいります！」

かれらはそういうと、つぎのしゅんかん！　なんとその高さからみんなのもとへとむかつて、びよーん！　飛びおりてきました！

あ、あぶないっ！　みんなは思わず、目をおおってしまいました。なにしろ岩山の上までは七十フィートほどもありましたから、とうぜんです！　しかし飛びおりてきたかれらは、つき出た岩をなんどか、びよーんびよーんと足でけりながらおりてきて、それからまるでなんでもないことのように、そのままびよこん！　と地面の上におり立ちました！（す、すごい！）

みんなの前に立っていたのは、ふたりの男の人たちでした（ねんれいはいよくわかりません）。動物のかわでできたよろいを着ていて、つるつると光るこがね色のかぶとをかぶっております。腰には剣もさしてあって、どうやらこの人たちは、どこかの兵士たち

のようでした。

「カルディンどの、おひさしぶりにございます。」

ふたりの兵士たちはそういつて地面にひぎをついて、カルモトにうやうやしく頭を下げました（カルディンというのは、かれらがカルモトのことをよぶよび名でした。かれらはカルモトに教えてもらった「みじかくしよりやくした名まえ」をおぼえることができませんでしたので、そのはじめのカルディンというところだけを取って、カルディンどのとよぶことにしたのです。やっぱりあれじゃ、だれにもおぼえてもらえませんがね……）。その人たちはとても大きな目と口をしていて、とてもあいきようのある顔立ちをしております（ねこの顔を思い浮かべてもらえれば、かれらの顔に近いと思います）。しかも頭にかぶっているかぶとには、まるい目のようなかざりがふたつ、ちよこんと取りつけられています（あれ？ これってどこかで見たような気が……）。そのかざりのせいで、かれらは兵士であるのにもかかわらず、とつてもかわいらしく見えてしまうのです。

「おお、きみか、カルル。それと、きみは、クプルだな。なんというみじかい名まえだ。忘れようにも忘れられんぞ。ひさしぶりだが、げんきそうだな。」

カルモトがかれらにこたえて、いいました。そう、かれらはまさしく、この地に住むというかえるの種族、フログルたちにほかならなかつたのです。なるほど、あの高い岩

山から飛びおりてぜんぜんへいきなのですから、やっぱりかれらは、かえるの種族でした。今でこそ見た目は人とあんまり変わりありませんでしたが、それでもまだ、これだけのうんどうのうりよくをかねそなえていたのです。

「おかげさまで！」カルルとクプルとよばれたそのフログルの兵士たちは、そういつて、にこつ！とまんめんの笑顔を見せました。「やっぱり、カルデインどのはすごい！あすにもわれらは、あなたのもとを、たずねようとしていたところでしたのに！それも全部、お見通しでいらつしやったのですね？ わざわざカルデインどの方からお越しくださるとは、きょうしゆくにございます！」

なんですつて？なにやらずいぶんと、話がくいちがつているみたいですが……。いったいこれは、どういうことなのでしょう？

ここでみなさん。物語のちよつと前のことを思い出してみてください。旅の者たちがモーグの地下のひみつのぬけ道の中で、ぶよぶよのとうめいおぼけ（ゼリーモンスターという名まえのかいぶつでしたが）に追われていたときのこと。ちようどそのころ、とある草むらで、ふたりの兵士たちがなにかの話しをしていましたよね？じつはあのふたりの兵士たちこそが、まさに今、みんなの目の前にいるふたり、カルルとクプルという名まえの兵士たちでした（かみの長い方がカルル。かみがみじかく、そしてちよつと気弱なせいかくの方がクプルでした）。

そしてあのときかれらが話していたのは、まさに、魔女のブリキの塔についてのことだったのです（どんな話しだったつけ？ という方は、ここでちよつと本のページをもどして、かれらの出てきた場面をもういちど読んでみるのもいいでしょう。前の章の、さいしょに近いあたりです。このページにしおりをはさんでおくのを、忘れずに）。その魔女の塔へのたいさくのために、かれらはあすにも、カルモトのもとをたずねようとしていたというわけでした。

「カルデインどの。」カルルがカルモトにいいました（「カル」のつく名まえばかりでちよつとややこしいのですが、かんべんしてくださいね。カルモトとカルデインは同じ人。カルルはフログルの兵士です）。「あの塔にまた、影があらわれました。あの塔はまだ、生きています。カルデインどのの力をのがれた者たちが、いまだ生き長らえているに、ちがいません。」

カルルのいう影というのは、もちろんモーグのまちをおそいフェリアルたましいまどうばつていった、あの影のおぼけたたちのことでした。やはりあの影たちは、魔女の塔からやってきていたのです。そして影たちは主人のアルミラがいなくなつてからも、「モーグにはいりこんだ者のたましいをうばう」というそのめいれいを、いまだに守りつづけていました（これはつまり、アルミラが手下の影たちのことを、与えためいれいもろとも、そのままほつたらかしのしていったからなのです。やつぱりこれも、木の兵士

たちをほつたらかしにしておいたカルモトに、よくにていますよね)。

さて、これをきいて、カルモトはどうこたえるのでしょうか？

カルモトはしばらく、いつものむつつりとした顔をしたまままだまりこくつていましたが、とつぜんまた、頭をぺこり！ と下げていいました(こんどはあまりのいきおいに、頭を地面にごっん！ とぶつけてしまったほどでした！ それに加えてからだの方から、なにかがぐしゃっ！ とつぶれるような音がしたので、旅の者たちはまた心配しましたが……)。

「すまん。わたしはてつきり、あの塔はどうのむかしに死んだものだとばかり思っていたのだが、今日、この者たちにいわれて、それではじめて、あの塔の今のようすのこなどを知ったのだ。君たちにも、すまないことをした。じつに、うっかりだった。」

さて、フログルたちの反応は？

カルルとクプルはおたがいの顔を見あわせて、しばらくなにやら小声で耳うちをしていましたが(クプルの「やっぱり知らなかったんじやないか!」という声のあと、カルルの「わかつてるよ!」という声が、ちよつときこえましたが……)、やがてふたりとも地面にひざまずいて、うやうやしくカルモトにいいました。

「なにをおっしゃいますか、カルデインどの。われらは、あなたにかんしゃこそすれ、あなたに頭を下げられることなど、なにひとつございませぬ。これはもとより、われら

の地に起こった、われらの問題なのです。あなたは、きらわれ者のわれら種族のことを、しんせつに助けてくださった。われらは、あなたの友。ともにささえ、助けあう、まことの友にございます。」

よかった、どうやら怒ってしまつたというわけではないようです。それにこのフログルたちの、なんとれいぎ正しく、友だち思いなこと！ 南のくにやモーグの人たちがかつてに思いこんでしまっている、「フログルたちはとつても危険でおそろしい者たちだ」なんていううわさは、かれらのことを見れば、ぜんぜんちがうということがわかるはずです。

お伝えしました通り、フログルたちもまた、魔女のことをきらい、にくんでいました。ですがかれらは、ただ魔女のすみかの近くに住んでいたということ、そしてほかの種族の者たちとかかわりあいを持たない、なぞめいた種族であるということ、そのふたつのみりゆうだけで、魔女の手下だなんていう、あらぬうたがいをかけられていたのです（まったくもって、ひどい話ですよね！）

ところで。かえるの種族のかれらが魔女の塔のすぐ近くに住んでいたのなら、なぜアルミラは、かれらのことをおそわなかつたのでしょうか？ ロザムンディアのまぢまでいなくても、すぐ近くに、必要なたまりがたくさんあつたはずなのに。こたえはかんたん。アルミラはこんなにも近くにフログルという者たちが住んでいるというこ

とを、知らなかったのです。フログルたちはしつちたいのおく深くの地に、かくれるようにして住んでいました。ですからアルミラはかれらのことに気がつかず、もつと目立つ、ひとめでわかるロザムンディアのまちに、たましいをうばいにいったというわけだったのです。

もともとフログルという種族は、ほかの種族の者たちとつきあいのうすい種族でした。これは大むかし、このあたりで大きなあらそいごとがあつて、かれらもそのあらそいにまきこまれ、さんざんな目にあつたことがげんいんだつたのです（このあらそいは「海と山の戦い」とよばれているもので、その名の通り、海のみと山のみがつまらないうちを起こしたものでした。このときいらいフログルたちは、ほかの種族の者たちとは、あまりかかわろうとはしなくなつたのです）。かれらがしつちたいからはなれた岩山の中にかくれるようにして住んでいるのも、ほかの種族の者たちとあらそいが起きることを、おそれてのことからでした。

ですがかれらは、けつしてたにんぎらいで、つきあいが悪いという者たちではありません。カルモトとの友じょうのように、しんせつにしてくれる者に対しては、かれらはずつともちゆうじつで、心をひらいてくれたのです（カルモトがみんなに、「きつと気にいるはずだ」といったのも、わかりますね）。

「まことにすまない。」カルモトはそういつて、また頭を下げました。「こんどこそ、あ

の塔にきつちりとどめをさしてくれよう。そのためには、きみたちの助けがいるのだ。ぬまが思ったよりも広がついて、塔に近づくことができない。きみたちのあの乗りものなら、ぬまを越えて、塔までゆけると思うのだが、あれはまだ使えるのだろうか？」

フログルの乗りもの？ カルモトの言葉に、旅の者たちはおたがいの顔を見あわせました。ですがそんなみんなのぎもんをよそに、カルルとクプルのふたりは、またまんめの笑顔を浮かべて、こうこたえるばかりだったのです。

「もちろん！ あれですね？ あれなら塔まで、すぐにいけますよ！ さあ、わが家までご案内します。みなさん、ごいっしょに！ うれしいな！ カルデインどのが、また助けてくれる！」

それから一行は、騎馬たちと木馬たちをぞろぞろとひきつれて、フログルたちが住んでいるというその場所まであんなにきれいでいきました（さいしよ、「さあ、こつちですよ！」）といってカルルとクプルのふたりが、さつき飛びおりてきた岩山をびよんびよんのぼっていつてしまいました。むりですから！ そんなことができるのは、かえるの種族であるフログルたちくらいです！ すぐにかからは、「あ、すいません。みなさんにはむりでしたね。」といってあやまりました。せまい岩のあいだをなんどもすりぬけて

いったので、もしフログルたちのあんないかなければ、一行はたちまち、道にまよってしまったことでしょう。そのうえこの場所はどこをむいても同じような岩山ばかりで、どちらのほうこうにむかっているのか？ それさえもよくわからなかったのです（さすがのベルグエルムでも、高い岩山の影にかくれたおひさまからほうがくをたしかめるのは、むりでした）。みんなはなんでもカルルとクプルのふたりのすがたを見失ってしまったのですが、そのたびにフログルたちは、岩の影からびよこんと顔だけを出して、「こっちですよ！」とにっこり笑っていました。

そしてそれから、しばらく進んでいったときのこと。つづく岩の道のそのさきから、カルルとクプルのふたりが、とてもうれしそうに一行のことをこんな言葉でむかえたのです。

「みなさん！ ようこそ、わが家へ！」

その岩山のすきまをぬけると……。

とつぜん、目の前にたくさんの木でできた家なみがあらわれました！ そこはなんとも気持ちのよいところでした。地面はいちめん、きれいな水をたたえたあさい池になっていて、その池の底には、青くかがやくふしぎな小石がしきつめられていたのです（こ

の池はもとからこの場所にあったものではありません。水をあいするかれらフログルたちが、なんとか水のそばで暮らしたいと思って、自分たちの手で作り上げたものなのです。池の水めんにはまるいかたちをした葉っぱがたくさん浮かんでいて、その葉からのびるくきのさきに、白い大きな花をさかせていました。

フログルたちの家は、その池の上になつていました。家と家のあいだには、木でできたらうかが張りめぐらされていて、自由にいききができるようになっております。それだけならふつうの人でも通れましたが、この場所にはかえるの種族であるかれらならではの道までつくられていました。

この場所はまわりをぐるりと高い岩山でかこまれていましたが、見上げてみると、たてものはその岩山の上の方まで、たくさんつくられていました。そしてそれらのたてものをつないでいるのは、いくつかの、木でできたふみ板だけだったのです！ かいだんもはしごもありません。つまりそれらのたてものにいくためには、それぞれの板のあいだを、ぴよーんぴよーん！ ととんでいくしかありませんでした！ さすが、フログルたちの家ですね！（ところで、かれらと出会った岩場からめいろのような道を進んでここまでやってくるのに、二十分ほどかかりましたが、フログルたちは岩の上をぴよんぴよん進めましたので、ここまでやってくるのに、一分もかからないそうです！ ですからカルルとクプルのふたりは、カルモトの木の音楽隊のマーチングをききつけて、す

ぐさま、みんなのところまでかけつけてきたというわけでした。それにしても、早いと
うちやくでしたよね！」

「ここは、トーディア。フログルたちの家だ。」カルモトが旅の者たちにいきました。
「じつにひさしぶりだが、変わりが無い。じつによいところだ。どれ、」

そういうとカルモトは、コートとぼうしをぬいで「すん！」としんこきゆうをしてか
ら、そのままなんと、池の水の中にじゃぼじゃぼとはいってしまつたのです（ま
さかおよぐとか？ この寒いきせつなのにな）。そしてカルモトはひざぐらいまで水に
つかると、ふしぎそうに見つめる旅の者たちのことをしり目に、両手を空にかかげて目
をつむりました。

すると……！

カルモトの足もとの水がゆらゆらとカルモトの方にむかつて動いていったかと思
うと、とつぜん、カルモトのその首のつけねのあたりから、たくさんの小さな水のはし
らが、ぴゅーぴゅーとそとに吹き出したのです！ そしてそれは、かかげた両手のその手
首のところからも、どんとどんと吹き出していききました！（よく見るとカルモトの衣服の
ところどころにも、まるくぬれたあとができていました。どうやら同じような水のはし
らが、カルモトの衣服の下、からだのいたるところから吹き出しているようです。これ
はいったい……？）

ひと通り水を吹き出し終わると、カルモトはじつに気持ちよさそうに、「ふう！」と息をつきました。その首のところからは、まだ水がすこし、吹き出ております。はでなデザインの衣服は吹き出た水でもうびっしりになっていて、カルモトはまるで犬みたい、からだをぶるぶるつ！ とふるわせて、その表面の水をはらいました。

「じつにいい水だ。きみたちもやったらどうだ？」カルモトはそういつて旅の者たちのことを見やりましたが、とつぜんのことに、旅の者たちはただただびっくりしてしまつて、それどころではありません（いきなりこんなものを見せられたら、それはおどろきますよね）。

「な、なにそれ？ なにが起こつたの？」ライアンが思わずたずねました。

そして旅の者たちはそれから、カルモトのそのおどろきのひみつを知ることとなつたのです。

カルモトは「そんなこともわからんのか。」といつてはでなズボンのすそをめぐつて、旅の者たちに自分の足を見せました。すると、なんとそこには、ほんらいの生身の足のかわりに木のみきがいっぽん、によきつと生えていたのです！ しかもカルモトのことには、それは切つた木のみきをあとからくつつけたというようなものではぜんぜんなくつて、まさに今そこに生きて育っている、ほんものの木なのだということでした！（小さなつぼみがついているし、花までさいていました。）足首からさきはカルモトの生

身のからだでしたが、その足首のあたりで、その木がカルモトの生身のからだどまざりあうように、とけこんでつながっていたのです！ な、なんか、すごい……！

おどろくみんなのを見て、カルモトは「しかたない。」といってこんどははでな服をめくつて、おなかの上まで見せてくれましたが、そこで旅の者たちが見たものは……。

「またもや木です！ なんとカルモトのからだは、首の下から手首足首のところまで、全部生きている木でできていました！ ええーっ！（つまり……、さきほどカルモトのからだから吹き出した水は、カルモトが足もとの水を、この木のからだを通して上げていたものでした！ カルモトはそうやって、まさに植物のように、からだ中に水をいき渡らせていたのです！」

「わたしは、木の学者だ。」おどろくみんなのことをよそに、カルモトがれいせいな顔をしていいました。「木には、たねから生まれて花をさかせるまで、なん百年とかかるものもある。木の前で、人などなんと、小さなものか。その木の心に近づいたためには、木とひとつになることがいちばんなのだ。」（なるほど……、わかつたような、わからないような……。とにかくすごい！）

カルモトがこの木のからだになつたのは、もう二百年以上も前のことだということでした。それいらいかれは、まさに木とひとつになつて、しぜんの力のけんきゆうのうちこんできたのです。でも、ちよつと待つて！ カルモトさん、いったい今、いくつなん

ですか？

「さあ、ゆくぞ。かれらが待っている。」カルモトはそういつてまたさつきといつてしまいました。のちにかくにんしてみましたところ、かれはこのとき、四百二十一さいだったそうです！ それでも木のねんれいでいつたら、まだまだ若いそうです。うぐん、木つてすごい！（ところで、カルモトが頭をべこりと下げたとき、ぼきつ！ とか、ぐしやつ！ とか、いやな音がなっていましたよね？ そのこたえはじつは、この木のからだにあつたのです。頭を下げたとき木のからだにむりな力がかかつて、おれたりつぶれたりして、あんないやな音がなつていたというわけでした。カルモトのいうことには、放つておけばそのうちもともにもどるといふことでしたが……。うぐん。）

それからみんなはあらためて、フログルたちの家であるトーディアの中へとあんないされていききました（みんなの騎馬たちと木の馬たち、そして木の兵士たちと音楽隊は、ここでしばらくフログルたちのもとにあずけることになりました。塔までゆくための乗りものには、かぎられた人数しか乗っていけないということでしたから。それならしかたありませんけど……。いったいその乗りものつて、どんなものなのでしょう？ それはもうすこしあとのお楽しみ……。このトーディアというところは大きさからいうと、小さな村ほどの大きさがありません。ですがフログルたちはこの場所を村とはいわず、わが家とよんでいたのです。フログルたちにとっては種族の者たちはすべて、ひと

つの家族のようなものであって、かれらは自分たちの住んでいるところを村やまちなどといったように分けて考えたりはしませんでした（わたしたちもみんな、こんなふうに暮らせたらいいですけど）。

フログルたちの話では、このあたりの岩山には、このトーディアのようなところがいくつかあるそうでした。ですがそれらはすべて、かれらにしかわからない岩山のおくのひみつの場所に、ただひっそりとそんざいしているものだったのです。このトーディアをふくめて、かれらの住む地はほんとうに、ふつうの旅人たちがけっして立ちいることのできない、かくされた場所でした。旅の者たちは今、そんなとくべつな場所にきていたのです。

「では、みなさん。」カルルがにっこり笑っていいました。「ボートのところまで、ご案内します。ニヨキニヨキばたけのむこうですよ。さあ、ついてきてください。」

ボート？ ニヨキニヨキ？

みんなはカルルがなにをいつているのか？ よくわかりませんでしたので、ただぼかんとしてしまえばかりでした。ですがカルモトがやっぱりさつきといってしまうしたので、あわててあとを追いかけたのです。

池の上に渡された木のろうかを歩いていって、しばらくすると。みんなの前にいちめんの葉っぱの生いしげる、広いはたけがあらわれました。しかしはたけといっても、よ

く見ると葉っぱの下の方は水につかっていたのです（ですからたんぼといった方がぴったりにくるかもしれません）。

「ニヨキニヨキですよ。」めずらしそうにそのはたけをながめている旅の者たちに、クプルがいました。「水の中に、いもが育つんです。おいしいですよ。」

どうやらこのニヨキニヨキという名のおいもが、かれらの主食のようでした。によきによきとよく育つから、その名がついたそうです。うくん、そのまんまですね。ほかにこのあたりに、フワフワという名のちようちよがいっぱい飛んでいて、かれらはそのちようちよも食べてしまうのだということでした！ うくん、おいしいんでしょうか……？（じつさいはたけのそばに飛んでいるフワフワを見つけたクプルが、大きな口をあけてそのままばくん！ と食べてしまいました！ なんでもカステラみたいな味です。そんなのですが、「みなさんもどうぞー！」というクプルの申し出には、さすがにみんな、「おかまいなく！」とこたえるばかりでした……）。

ところで、やっぱりのフワフワは、ふわふわ飛んでいるからその名がついたそうです。ほんとうにそのまんまですね。）

さて、ニヨキニヨキというのはわかりましたが、それではボートとは？

「ボートって、いったってき、」カルルたちのあとをついて歩きながら、ライアンが口ビーにいました。「まさかほんとうに、水に浮かべるあのボートじゃないよね？」

「乗りものつて、そのことかな？」ロビーがこたえていました。「たしかに、水の上をゆくのなら、ボートがいちばんだけど……」

ライアンがつづけます。

「だって、ボートがあつたつて、それで魔女の塔までいけるの？　ぬまとぬまのあいだには、なんでも飲みこんじやうつていう、危険などろどろ道だつていつぱいあるんだよ？　そんなとこにでつかいボートなんか持ちこんだら、それこそみんな、いつぱつでどろの底じゃない。」

「うーん、そうだね。どうするのかな……う？」

ライアンのいう通り、たとえあのぬま地にボートを持ちこんだとしても、さきに進むのはむりでしょう。底なしのぬまはひとつだけではなく、たくさんのぬまがどろどろのぬかるみ道によつてあみの目のようにつながつていましたが、カルモトのいうことにはそのぬかるみ道は、人だろがボートだろうが、あつというまにずぶずぶと飲みこんでいつてしまうという、じつにおそろしい道なのだということでした！（ですからカルモトは、「道がなくなつてしまった」といったのです。そんなの、道とよべるはずもありませんから！）

そんなところにはいりこんだら、ボートなどあつてもなくても同じです。ぬまの上ならまだボートも浮かぶでしょうが、ぬまからぬまへ、ボートをはこぼうとしているあい

だに、ボートもろともけつきよくみんな、どろの底ですもの！（ライアンのわざを使つて、風の力で自分たちの乗ったボートを吹き飛ばして進める！ というのもむりがありました。たとえひとりずつボートに乗るとしても、人の乗ったボートを吹き飛ばして進めようというのなら、かなりのいりよくの力が必要ですから、そんな力を加えれば、かくじつにボートがこわれてしまうことでしょう。それにもしボートを吹き飛ばせたとしても、ちゃんとまつすぐに飛ぶというほしようもありませんし、なによりもまず、自分たちの身があやういのです。安全のほしようもないままに、ライアンのおそろしいまでの風の力を、自分の乗っているボートにちよくせつぶつつけられるんですから！）

ではいったいどうやってカルモトは、そんなボートを使って、魔法の塔までいこうとしようのでしょうか？（そのボートに、なにかとくべつな魔法でもかけるとか？）ですが旅の者たちのそのぎもんは、それからすぐに晴れることになりました。なんとも思ひもかけなかった、いがいなてんかいによつて。

「みんな！ カルディンどのがきたよ！ おつれの方もいっしょだー！」

カルルが大きな声で、仲間たちによびかけます。そのよびかけのさきにはなんんかかの方グルたちがいて、なにかみどり色をした大きなものを、手いれしているかのようでした。

「おお！」「カルデインどのだ！」「おげんきそうぞぞ！」「あ、フワフワだ！　ばくん！」

フログルたちはカルルとクプルのふたりと同じく、カルモトのを見て大よろこびでした（ひとりだけ、べつの方に気がいつてしまった者がいましたが……）。そしてカルモトはそんなみんなにむかっていいねいにあいさつをすると、こんどはその中のひとりに対して、うやうやしく頭を下げたのです。

「モラニス、ひさしぶりだ。」

モラニスとよばれたその人は、うれしそうに、しかしひかえめな笑顔で、カルモトにこたえていました。

「やはり、あらわれたな。そんな気がしておったのだ。」

モラニス・レンブランド。かれは地面までたれるくらいの白くて長いひげを生やしている、フログルの長老でした。ねんれいはもう、二百さい近いそうです！（じっさいはカルモトの方がとしは上でしたが、見た目にはモラニスさんの方が、ぜんぜんおとしよりでした。）カルモトとは古くからのつきあいがあつて、なにかこまりごとがあるたびに、おたがいちえや力をかりあっている仲なのだそうでした。カルモトがフログルたちのことをよく知っているのも、じっはこのモラニス長老とのつきあいによるところが大

きかったのです（モラニスにはカルモトのふるさとガランタ大陸にいたこともあって、カルモトとはそこでなんどか、旅をともしたこともあるそうでした。どんな旅だったのでしょうか？ ちよつと、きょうみがありますね）。

そしてフログルたちがカルモトのことをよく知っているのも、またこのモラニスのおかげでした。魔女のアルミラがあらわれたときにカルモトのことをさがし出して力をもとめるようにしていあんしたのは、ほかでもない、このモラニスだったのです（ちなみに、カルモトはルイーズの木のところにひっこしてきたときに、「近くに越してきましたぞ。」といってフログルたちのところにも顔を出していたのです。そのときちやんと、新たな住所をかれらに伝えていたのなら、フログルたちはもつとかんたんにカルモトのことを見つけることができましたが、そこはやつぱり、いかげんでせつかちなせいかくのカルモトでしたから、フログルたちが住所をたずねるひまもないうちに、「急用があった！」といってすこしのでんごんを書いたメモ書きだけを残して、追いかけるフログルたちの声もとどかぬままに、さつさとかれらのもとを去ってしまいました。たいざい時間、わずか三十びょう！ それからずっと、カルモトはフログルたちのもとをおとずれることはなかったのです。そのためフログルたちは、カルモトのことを見つけるのに、だいぶくろうしました。

「だいたい、東の山の方にいるから。」

カルモトはフログルたちに、それしか書き残していなかったのです……。これじゃ見つけるのに、くろうするはずですね……」。

「ボートのじゅんびは、すっかりできておる。すぐに出発できるぞ。」モラニスはうしろの池の上に浮かんでいるあるものをしめしながら、そういいました。それは……。

「なにこれー！　かつわいいー！」ライアンが思わず、さげびました。そこにあつたのは、みどり色のペンキできれいに色がぬられた、二そうのボートだったのです（やつぱりそのまま、ボートでしたね！）。そしてそのボートのさきつぽには、木で作られた、なんとかわいらしいかえるの頭をかた取ったでつかい船かざりが、取りつけられていました（ライアンが思わず、かわいい！　とさげんでしまったのも、わかります。これではまるで、ゆうえんちにある子どもむけの乗りものみたいですね）。

「ありがたい。」カルモトがモラニスにかんしゃして、いいました。「さすがだ、モラニス。きみはいつでも、わたしのぞむ通りのことをしてくれる。」

「おまえさんのことは、よくわかっておるからな。」モラニスが、それにこたえていいました。「うっかりなところも、あいかわらずなおっておらんようだ。こんどこそ、たのむぞ。あの塔のわざわいに、しっかりとけつちやくをつけてきてくれ。」

そしてみんなはカルモトを先頭に、そのみどり色のボートの中にもりこんだのです。ひとつ目のボートには、カルモト、ベルグエルム、ロビー、ライアンが乗り、ふたつ目

に、カルル、クプル、そしていつしよに塔にむかつてくれることになった、イルクーとレングという名のふたりのフログルの兵士たちが、乗っていました（そのようすを見たから、みなさんは思わず吹き出してしまいかもしれません。だって、子どもむけみたいなかわいらしいかえるのボートに、からだの大きな騎士やよろいかぶとの兵士たちが、なかよくちよこんと、ならんですわって乗っているんですもの！ ゆいいつひとりだけ、ライアンだけは、とつてもよくにあつていましたか……）。

さて、いわれるままに乗りこんだのはいいのですが、このあといつたい、どうするのでしょうか？ この池が魔女の塔までつづいているわけもありませんでしたし、それによく見ると、ボートをこぐためのオールもペダルも、この船にはついていなかったのです。ただひとつ、あのかえるの頭のかわいい船かざりに馬のたづなのようなひもがひとつついていましたが、まさかこの船が、馬みたいに走り出すというわけじゃありませんよね？（カピバルのわざじゃあるまいし。）

みんながそう思っていると、ふたりのへんてこなかつこうをしたフログルたちがやってきて、それぞれのボートにひとりずつ乗りこみました。かれらはまるで、じどう車レースのうんでんしゆみたいな、からだにぴったりな服を着こんでいて、つるつるのかぶと（やつぱりまるい目のようなかざりがふたつついていました）をあごでしぼり、目には大きなゴーグルまでつけていたのです。いつたい、かれらはなに者？

「わたしは、このボートのうんてんしゅ、ネリルです。魔法の塔までは、七分をよいてしております。」

旅の者たちのボートに乗ってきたフログルがいきなりそういうと、旅の者たちにペコりと頭を下げて、かえるの頭の船かざりの上にまたがって、そのたづなをとりました。

「では、出発しまーす！ みなさん、ベルトをよく、おしめくださーい！」

え？ ちょ、ちよつと！ なに？

みんながそう思うやいなや。ネリルという名のそのフログルが、たづなをばしんとたたきました。すると……！

みんなを乗せたボートが、びよっころん！ 浮かんでいたその池から、むこうのニョキニョキばたけのその中まで、大ジャンプしたのです！

「うわわっ！」「ひゃあ！」「ひええー！」

みんなのびつくりしたことといったら！ どぎもをぬかれるとは、まさにこのことです！

なんとなんと！ このボートは水の上を進むんじゃなくて、まさしくかえるみたい
に、大ジャンプをくりかえして進むという、とんでもない乗りものでした！ その名も

ずばり、ケロケロボート！（すごいですけど、名まえはやつぱりそのまんまでした！）

「つぎは、岩山までまいりまーす！ みなさん、ふんばってくださいいよー！」

うんてんしゆのネリルの言葉に、みんなはただただ、ボートのふちにしがみついて、ひつしに泣きさけぶばかりでした。

「た、助けてくれ〜！」

そのみんなのひめいから、ときをさかのぼること六日ほど前のこと……。

つめたいだいら石の床に、おそろしいなずまの光がうつりこみました。ここはたくさんのはしらが立ちならぶ、だだっ広い石づくりの部屋の中。部屋の西がわはすべて、見晴らしのいいバルコニーになっております。ですがどんなに見晴らしがよくても、そこから見える景色をじつくりながめたいと思う者は、あんまりいないことでしょう。そこには美しいみどりも、山々も、みずうみもありませんでした。見えるものといえば、おそろしげなまっ黒な塔やたてもの。そしてそれらのたてもののあいだをねり歩いてゆく、黒いよろいの兵士やきみの悪いかいぶつたち。そんなものたちばかりだったのです。

今その部屋のバルコニーから、それらの景色をひとりの人間の男の人がながめていました。手には赤いお酒のはいった、銀色のカップを持っております。その男の人は、と

てもごうかな衣しようを身にまもっていました。こつたししゅうのはいった黒いシルクのガウンをおつていて、肩からは金色にかがやく、ふしぎな生きものの毛がわを掛けております。そして首からは、おそろしいりゅうのもんしようのはいった、まつ黒なメダルをひとつ、下げていました。

　　いつたいこの人物は、なに者なのでしょう？　黒いかみを肩までのぼして、ひげはありません。ねんれいは、四十だいのなかばくらいでしょうか？　からだはとてものがつしりとしていて、背たけも六フィート以上はありました（これは人間にしてはかなりの長身です）。そしてなにより、はなれたところからでもわかるほどの、そのひめたる力のおそろしさ……！　それはまるで、おそろしいもうじゅうがそこにいるかのような、そんな感じでした。近づく者の心をみんなぼろぼろに、くじかせてしまうかのような……、かれのまわりには、そんなおそろしい力がみちあふれていたのです。

　　かれがなに者なのか？　それはこの部屋がなんのための部屋なのか？　それをお伝えすればおのずとあきらかになることでしょう。この部屋のいちばん北がわには、いすがひとつおかれてありました。そのいすにはごうかけらんなそうしよくがなされていて、金銀宝石があしらわれております。それはただのいすではありませんでした。そのいすにすわることができるのは、ただひとり、この城のあるじだけだったのです。そう、そのいすは王さまだけがすわることのできる、ぎよくぎとよばれるいすでした。こ

の部屋は、王さまのための部屋。王さまがらいきやくをむかえたりほうこくを受けたりするときなどに使う、えっけんの間とよばれる部屋だったのです。ということとは……。

この背の高い黒いかみの男の人。かれはまさしく、この部屋のあるじである王さままでした。しかしこんなおそろしげなところにあるお城に住んでいる、王さまって……？

読者のみなさんにはもうこの場所がどこで、この王さまがだれだか？ おわかりになられたことでしょう。このおそろしげなくにの名まえは、ワット。そしてこの男の人は、ほかでもありません。あの悪名高き黒の王、ワットのアルファズレド王、その人だったのです！

「きたか……」

アルファズレドはバルコニーのそばに立って、暗い空をながめながらいいました。そこにはかなたの雲の切れまからこちらへとむかって飛んでくる、黒い生きものたちのすがたが見えました。それは、あのデイルバグのかいぶつたちでした。そのかいぶつたちはまさに今、アルファズレド王の待つこのワットの黒き王城へと、むかつてきていたのです。

「いわれずとも、けっかはわかっておるわ。」アルファズレドはそういって、赤いお酒のはいったカップを口にはこびました。

やがて部屋の入り口に、ひとりの男の人が通されました。その人のうでは、エメラルド色の花のマークのはいつた、白いリボンがまかれております。そう、この男の人はこの章のはじめにデイルバグのかいぶつからおり立ってきた、あのリボンをつけた男の人でした。

リボンをつけた男の人は、やりを持った兵士たちと石のはしらが立ちならぶその長い部屋の中を、アルファズレド王のもとへとむかつて足早に歩いていきました。そしてかれはあるじの前までやってくると、うやうやしくひぎをついて、ただひとこと、ほうこくを伝えたのです。

「戦いにございます、へいか。」

「はっ！」その言葉をきくやいなや、アルファズレドが大きな声を上げていいました。「とうぜんのかよ！ アルマークのことならば、このおれが、いちばんよくわかっている！」

アルマーク……。それはまさしく、ベーカークランドの白き王、アルマーク王のことでした。

「やつが、こうふくになど応じるものか！ 使者など出しても、むだなこと！ やつには、このおれの力をちよくせつ見せつけてやるのが、いちばんなのだ！」

こうふく……。使者……。それはかなしみの森を出るときにベルグエルムがロビー

に伝えた、そのさいこの話の中に出てきた言葉でした。ベーカーランドにワットからの使者がやってきたということ。そしてこうふくに応じなければ、ワットは全軍をもつて、ベーカーランドにせめいるとも。

そう、みなさんのごそうごうの通り。アルファズレド王のもとに今ほうこくを伝えにきた、このリボンをつけた男の人。この人物こそが、まさにアルファズレドのめいれいにより、ベーカーランドにこうふくするように申し伝えにいった、その使者だったのです！ そしてその使者が、今ついに、アルファズレドのもとへと戦いのほうこくを伝えました！（この白いリボンは使者であるということであらわすためのものでした。もしこのリボンをつけた者に危害を加えた場合、そのくりにいくさを申しこんだのと同じことになるのです。）

いよいよ、戦いがはじまるのです。このアー克兰ドの運命をかけた、さいこの戦いが……。

「全軍に伝えよ！」

アルファズレドの口から、おそろしいさいこのめいれいがくだされようとしていました。

「兵をしゅうけつさせるのだ！ ただちに、ベーカーランドへとむけて、進軍をかいしせよ！」

ああ、いよいよです！ いよいよ、黒の軍勢がせまりくるのです！

敵の兵士たちがみんな集まってベーカーランドまでたどりつくのに、あとのくらの時間がかかるのでしょうか？（このアルファズレドのめいれいから、もうすでに六日ほどがたっていたのです。）今からいつしゅうかんごでしょうか？ それとも四日ご？ 三日ごかもしれません。それまでにわれらが白き勢力の者たちは、なんとしても、それにはたいこうするしゅだんを取らなくてはなりませんでした。それがどんな方法なのかはわかりませんが、アルマーク王が、それを知っているはずですよ。

そして……。

黒の軍勢にうちかつたためのきぼうをつなげる、そのもつとも重要なやくめを果たすことが出来るのは、いい伝えのきゆうせいしゅである、ロビーだけなのです。ああ、早く！ 急いでロビー！

「アルマークめ……」アルファズレドが胸に下げた黒いメダルをにぎりしめながら、はきすてるようにつぶやきました。

「これで、ついに、きさまも終わりだ。長かったいんねんに、けつちやくをつけようではないか……」

アルファズレドはそういつて、部屋のそとへと歩き去っていきました。

バルコニーのそとでは、ごろごろといなずまのうなる音がひびき渡っていました。それはまるで、ついに出版をむかえたおそろしいりゆうの、うなる声のようにもきこえませんでした。

14、たましいかいほうボタン

「いたかー！」

なまり色の空の中に、大きな声がひびき渡りました。ここはこのアーケランドをふたつに分ける切り分け山脈の、その東がわ。リムルという小さな王国のみやこ、リムリアから、ほど遠くない場所でした。

今その土地のはるかな上空を、三びきのまつ黒なからだを持ったかいぶつたち、ぐるぐるとえんをえがきながら飛びまわっていました。それは（みなさんももうすっかりごぞんじの）あのワットの黒騎士たちの乗る、デイルバグのかいぶつたちでした。ということは……？ その背に乗っているのは、やはりあのおそろしい、黒騎士たちだったのです。

「だめだ！ 見つからない！」仲間の黒騎士のといかけに、山のむこうからもどつてきたひとりの黒騎士がこたえました。

「ええい！ くそ！」その言葉をきいた黒騎士が、自分の足をたたいて、きたない言葉でののしります。「いったい、どういうことだ！ やつらを目の前におきながら、見失うとは！」

いったいかれらは、なにをしているのでしょうか？　どうやらだれかを、さがしているような感じですよ。ですがそのこたえは、読者のみなさんにならすぐにわかることではない。ここは切り分け山脈の東の地。リュインのとりでが敵の手によってうばわれていない、ワットの者たちによつてはいさされてしまった、南の街道の土地でした。そう、この黒騎士たちは今、自分たちの仲間のことをひどい目にあわせた「とんでもないやつら」のことを、けんめいになってさがしているところだったのです！　それはもちろん、セイレン大橋の上でこの黒騎士たちの仲間たちと戦った、ロビーたち一行にほかなりませんでした。そのロビーたちは敵の目からのがれるために、今、切り分け山脈の西がわ、だれもそんなところにいるなどは夢にも思わないであろう、うちすてられた西の街道の地にいるのです。ではこの南の街道の地で、ワットの黒騎士たちが目の前にまでせまってきたという、その者たちとは……？

そう、それはわれらが白の騎兵師団の騎士たち、ハミール・ナシユガーとキエリフ・アートハーグ。そしてゆうかんなるシープロンの者たち、レシリア・クレツシエンドとルースアン・トーンヘオン。かれら四名の勇者たちでした！（ルースアンのみようじは、トーンヘオンというんですね。）

黒騎士たちは首から下げた遠めがねをなんでものぞきこみながら、くやしそうにあたりいつたいをぐるぐると飛びまわっていました。かれらはこのあたりの土地の空をま

かされている、ていさつのたつじんたちでした。そのかれらが目を皿のようになにもさがしまわっているというのに、われらが仲間たちを見つけることができなかつたのです。さすがはわれらが仲間たち！ でもいったい、どういうわけがあるのでしようか？

「敵は、なにかのじゆつを使っているのに、ちがいない！」

なるほど！ われらが仲間たちはそのなにかのじゆつを使って、うまくかくれることができているようでした。ではそのじゆつとは？ みなさんにはもうおわかりですね。そう、白きシーブロンたちが使う、あのわざのことです。

黒騎士たちはしばらくあたりにとどまっていました。やがてあきらめたように、デイルバグのむきを変えていました。

「しかたない。出なおしだ。ガランドーさまに、このことをほうこくせねば。はんぎやく者どもめ、つきこそは、かならず、その首根つこしめ上げてくれる！」

黒騎士たちはそのまま、はるか東の山の方へと消えていきました。

それからしばらくたつてからのこと。

ここは切り分け山脈のふもとの、岩の道……。

「いったようだ……」

声のぬしは、われらがハミールでした。そしてその言葉のつぎのしゅんかん。かれらの上にかかっていたまぼろしのバリアーが、音もなくふうつと消えていったのです！

これはもちろん、シープロンの使うしぜんの力をかりるわざによって作られたものでした。黒騎士たちの目をあざむくために、レシリアとルースアンのふたりが力をあわせて、このひじょうにすぐれた身をかくすためのバリアーを作り出してくれたのです。これは空気をゆがませて、まわりとまったく同じ風景をその場に作り出すというものでした。なるほど、これならいくらていさつのたつじんである黒騎士たちとはいえ、見つけることはむりでしょう。さすがはシープロンのベテランたちです！（ところで、たぶんライアンにこの話をしたら、「ぼくにだってそのくらいできるよ。」っていうかと思いましたが、やっぱりかれには、これだけすぐれたバリアーを作るのはむりだと思います。なにしろライアンの先生であるレシリアと、王さまのそつきんであるルースアンが、力をあわせて作りましたから、むりもないですよ。あ、でもみなさん！ わたしが「ライアンにはむりだ」なんていったこと、かれにはだまっついてくださいね！ あとがこわいですから……）」

「助かった。レシリアどの、ルースアンのどの。おふたりのおかげです。」ハミールとキエリフのふたりが、「ふうー！」ときんちょうのとけたため息をはいて、シープロンのふたりにおれいをいいました。そう、かれらは黒騎士たちに自分たちのすがたを見せつけ

て、ひみつの道をゆくロビーたちのもとから敵の目を遠ざけるといふ、そのやくめを、まさに今なしとげたところだったのです！（かれらが敵の目をあざむくためのおとりだとばれてしまったのなら、ロビーたちのひみつの旅も、すべてだいなしになつてしまいかねません。かれらの旅はほんとうに、重要かつたいへんなものだったのです。）

「これで敵は、旅の者たちが南の街道に進んだのだと思うことでしよう。あとはこのまま、敵の目をひきつけつつ、ペーカーランドまでの道のりを急げばいいのです。われらのにんむも、これでおおむねのところは、果たし終えることができた。ひと安心です。」

キエリフがほつとした顔をして、シープロンのふたりにいいました。しかしレシリアとルースアンのふたりは、いぜんとして、重い表じようを浮かべたままだったのです。

「まだ、安心のできるようなどころではありません。」レシリアが、ウルファの騎士たちにはいいました。「これはまだ、はじまりの dankai にすぎません。わたしたちのしごととは、ここからさきが、ほんとうなのです。」

レシリアの言葉に、ウルファの騎士たちは思わず、顔を見あわせてしまいました。どうやらレシリアはまだまだ、このあとのずっとさきのことについてまでも、重く深く、考えをめぐらせているようなのです。

「かれらは、これからもしつように、わたしたちのことを追いかけてくることでしよ

う。」レシリアが若きふたりの騎士たちにむかって、つづけました。「おそらく、このまぼろしのバリアーも、つぎは見破られてしまうにちがいません。かれらを、あまく見てはなりませんよ。かれらのうしろには、あのおそろしい、魔法使いがいるのですから。」

「アーザス！」ハミールとキエリフのふたりの騎士たちが、思わずさげびます（ルースアンに「しーっ、静かに！ 敵にきこえる。」としかられてしまいました）。

「あの魔法使いめ！ こんどはなにを、たくらんでいるんだ！」

ウルファの騎士たちはこぶしをにぎりしめて、怒りました。かれらの祖国レドンホルは、よこしまなる魔法使いアーザスによって、ほろぼされたのです。そしてかれらの主君ムンドベルク王も、今やアーザスのとりこでした。ですからかれらのアーザスに對するにくしみは、そうとうなものだったのです。

レシリアがつづけけます。

「かれらのもくてきは、たんなる仲間のかたきうちだけではないように思えます。わたしにはどうしても、その影にあの魔法使いのすがたが見えて、なりません。」レシリアの言葉はとて深く、そして重たいものでした。「ひよつとしたら、アーザスはもう、ロビーさんがいい伝えのきゆうせいしゅであるということに、気がついているのかもしれない。そうだとすれば、わたしたちの旅は、いぜんにもまして、重要なものとなりま

す。今はロビーさんたちの身を守るために、できるだけ時間をかせぐこと。それがわたしたちの、いちばんのしごとでしょう。」

「南の地に近づくにつれて、敵の目も多くなります。」ルースアンがつづけてそういいます。「つぎに黒騎士たちからのがれるためには、わたしたちは、もつとべつの方法も、考えなければ。」

ルースアンの言葉に、レシリアもうなずいていました。

「とにかく、また黒騎士たちがやってくる前に、できるだけ道のりを進んでおくことです。わたしたちには、まだまだ、やるべきことがたくさんあるのですから。さあ、さきを急ぎましょう。ティーンデインの大河まで、いつきに進むのです。」

みんなはふたたび、馬にまたがりました。そしてかれらは、このおそろしい、見張りだらけの敵の地の中を、さらなる南へとむかって歩み出していったのです。

「まいど、ごりよう、ありがとうございます。しゅうてん、魔女の塔、魔女の塔です。みなさん、おつかれさまでございました。」

なんともまのぬけたあいさつがすむと、ボートの底からのびている二本のかえるの足のようなものが、しゅううっ！ という空気のぬけるような音を出しておりたまれていきました（これはちやく地のとときにクッションのやくわりを果たしてくれるものでし

た。このためこのボートは水いがいのところでも、自由にちやく地することができたのです。そうでなかったら、あんなに大きなジャンプですもの、こんなボートなど地面にたたきつけられて、ばらばらにこわれてしまうはずです！

さらにこのボートは、空気の力をいっきに吹き出すことでジャンプすることができるといふものでした。ですからそのジャンプは、水の上からでもおこなうことができたのです。カルモトがこのボートにたよったのも、わかりますね。まさに、自由じぎいといった感じでした。

「お忘れ物のなきよう、お願いいたしまーす。」

うんてんしゆのネリルがびよこん！ とボートからおり立つて、乗っている旅の者たちにむかつて、つづけていいました。ですけど……、旅の者たちはみんな、それぞれろじやなかったのです！ かれらはもう、ボートのふちにうつぶせになったまま、動くことさえできませんでした。それもそのはずです。みんなはあんなジャンプを四十回以上もくりかえして、ようやくのことで、ここまでたどりついたんですから！（船よいというか、ジャンプよいというか……、とにかくひどいありさまでした！）

そんなみんなのことをしり目に、カルモトはまったくくなんでもないといつたようすで、ゆうゆうとボートのいちばん前からおり立つと、うんてんしゆのネリルとあくしゆをかわし、旅の者たちにむかつていいました。

「こら、なにをしている。そんなところで寝るとは、失礼だぞ。ゆうべ、きちんと寝ておかなかったのか？ さっさと起きんか。」（そ、そういうことじゃありませんつたら……）

みんなはカルモトにせかさされて、ようやくのことで立ち上がって、ふらふらとボートからおり立ちましたが、すぐに地面に両手をつけて、動けなくなってしまうたのです。

「お、おええ……」「し……、死ぬ……」「もう……、だめ……」

さて、（旅の者たちのけんこうじょうたいのことについてはともかくとして）これでようやく、もくてきの魔女の塔までたどりつくことができたわけです！（こんな方法でくることになるとは、みんな夢にも思っていなかったことでしょうけど……）みんなが今いるところは、魔女の塔のあるおほりにかこまれて島のようになっている場所の、その中。よんだ水のはいった、おほりのふちでした。そこから上を見上げると……、そこには遠くから見えているばかりだった、あのなんともおどろおどろしいブリキの塔が、目の前にどーん！ とそびえたっていたのです！（高さはおよそ、四百フィートほどもありそうでした！ カルモトの木の塔にも負けないくらいの大きさです！）

遠くから見ただけでもあんなにもきみが悪くしゆみが悪いと思つた塔ですのに、それを目の前で見るのですから、なおのことでした。ありとあらゆるきたない色をしたきん

ぞくの板が文字通りつきはぎされていて、その上をさまざまパイプやらでつぱりやらが、おおつていたのです。しかもかべのざいりようになっていのは、そればかりではありませんでした。よく見ると、お酒のあきびんや、せんめんき。スプーンにフォークにお皿。やかんになべに、果てはくまのぬいぐるみから、だれかのズボンまで！ とにかくなんでもかんでも、かべのざいりようとしてくつつけられていたのです！（はじめこの塔をながめたときになにかおかしい感じを受けましたが、それはこのためでした。だつて塔のかべにぬいぐるみやズボンがくつついているだなんて、だれも思いませんよね！ いったいアルミラは、なにを考えていたんでしょうか……？）

その塔を前にして、カルモトがあごに手をおいてうなりました。

「うゝむ……、なんてしゆみの悪いやつだ。わがいもうとながら、あきれかえるな。」（しゆみの悪さについては、カルモトさんもたようなものだと思いますけど……。まあそこはやつぱり、ふれないでおきましょう……）

「それに、この塔のまわりの、なんというきたないこと。よくもまあ、こんなちらかしたものだ。あとで、そうじをしておかなければなるまい。」（その前にカルモトさんの家も、そうじした方がいいと思いますけど……。まあそこもやつぱり、ふれないでおきましょう。）

カルモトのいう通り、塔のまわりにはなんだかよくわからないものが、ごちゃごちゃ

とちらかっていました。なにかのそうちのようなものとか、作りかけの鉄のかざりのようなものとか、いろいろです。ですがその中でひとつ、はつきりとわかるものがありました。それはむかしカルモトとフログルたちが戦った、ブリキの兵士たちのざんがいです！ それらの兵士たちはもうすでに動くこともなく、さびついて、なかば地面にうもれてしまっていました。かつてこの兵士たちの中にモーグの人たちのたましいがはいって、そのブリキのからだのことを動かしていたのです。

ですけど今ではそれも、むかしの話。この兵士たちのことを動かしていたたましいは、今はこのぶきみな塔の中にとじこめられていて、みんなの助けをまさに待っているところでした（ちなみに、カルモトはこの塔のそばにこんなに近よったことは、今までいちどもありませんでした。ここでこのブリキの兵士たちとちよくせつ戦ったのは、カルモトの木の兵士たちとフログルたちであって、カルモトはすこしはなれたところからそのしきをとったり、進んでくるブリキの兵士たちをみずから魔法でやつついたりしていたのです。その戦いのあと、ちゃんとこの塔のことを中までしらべてくれていたのなら、今になって、こんなくろうをしなくてもすみましたけどね……）。

「さて、この塔は、どこが入り口だ？ ふむ、あそこか。」

カルモトが見上げたさきには、たしかに入り口らしいでつぱりがありました（このでつぱりは遠くから塔をながめたときにも見えていたものです。アルミラは空を飛ん

で、このでつぱりのさきから塔に出はいりしていたようでした。岩をするどくけずつたようなかたちのつき出たでつぱりのさきに、とびらのないまるいアーチの入り口がひとつ、あいていたのです。ですけど問題もひとつありました。どう考えても高すぎです！ みんなが今いる地面からその場所までは、ゆうに五十フィートはありました。いたいどうやって、中にはいったらいいのでしょうか？

ですがカルモトはいつもとまったく変わらずに、こまったそぶりさえ見せません。すたすたと塔の下まで歩いていくと、こちらをふりかえっていいました。

「フログルしょくん。あそこまで、とんでいけるか？」

なるほど！ かれらのことを忘れていましたね！ かえるの種族であるかれらフログルたちなら、五十フィートの高さくらい、わけなくのぼっていけそうです。ですがフログルたちはこまったような顔をして、カルモトにいいました。

「もちろん、いけることは、いけるんですが……、だめなんです。あの入り口には問題があつて、中にはいることができません。あの入り口には、魔法ののろいがかけられているんです。」

また魔法ののろいが！ いったいどれだけのろつたら気がすむんでしょうか！

「入り口に、のろいのけつかがいが張られていて、中にはいろいろとする者をかえるに変えてしまうんですよ！ いぜん、わたしたちの仲間が中にはいろいろとして、かえるに変え

られてしまったんです。さいわい、いちにちたつたらのろいがとけて、もとのからだにもどりましたけど。ですからあそこからは、中にはいれないんです。おお、こわい！」

フログルたちはそういって、ぶるぶるとからだをふるわせました。でも……、かれらつて、もとからかえるなんじや……、おつと、じょうだんをいつている場合ではありませんでしたね。とにかくそんなのろいがかかっているんじや、ほかの入り口を見つめるしかなさそうです。しかししかし、そんなフログルたちの言葉をきいても、やつぱりこの人はまったくもつて、おちつきはらつたままでした。それはもちろん、カルモトのことだったのです。

「のろいだと？ アルミラのかけた、のろいか。あいつののろいなど、ほんの子どもだましにすぎん。」

カルモトはそういって、頭の上にあるその入り口にむかつて手をかざしました。そしてふたことみこと、なにかをつぶやいたかと思うと……。

「えいやー！」

どつぱーん！

どつぜん！ その入り口のところからものすごく大きな音がなりびびきました！

いつたい、なにごとが起こったというのでしょうか？

見ると、そのでつぱりのさきつぽの部分か、まるいアーチの入り口もろとも、吹き飛んでなくなっていました！　そしてもうもうとけむりを上げるその場所には、ぼつかりと、塔の中へとつづく大きなあながあいていたのです。

「これならわけなく、中へはいれるぞ。アルミラののろいなぞ、きれいさつぱり、消し飛ばしてやったわ。」

これを見て、フログルたちはもう大よろこびでした。カルモトはやつぱり、すごうでのまじゆつしなのです。アルミラののろいを消すことなど、かれにとつてはまさに、朝めし前のことでした（今はもう、おひるすぎですが……）。

「さすがは、カルデインどのだ！　やつぱりすごいやー！」フログルたちはそういって、びよんびよんとびはねてよろこびました（かえるの種族ですから）。むかしブリキの兵士たちと戦ったときにも、かれらはカルモトのわざをじつさいにその目にするのができましましたが、今またこうして、そのわざを見ることができて、それがうれしくてならなかったのです（ところで……、カルモトがアルミラの軍勢と戦ったのつて、今から三十年ほどむかしのことですよ？　カルルやクプルたち、この場にいるフログルの者たちは、そのときからカルモトに協力していたようですが、ではいつたいこのフログルの人たちつて、なんさいなのでしょう？　見た目はだいぶ、若く見えるのですが……）。

じつはカルルもクプルもそのほかのフログルさんたちも、みんなもう、八十さいはかるくこえていました！ フログルたちというのとはとっても長生きの種族で、みんな百五十年くらいはふつうにすごすことができるのです。そういえば長老のモラニスさんも、二百さい近くのねんれいでしたよね。うくん、フログルって、やっぱりいろいろと、すご（い）。

「今すぐに、はしごをかけてまいります！」

フログルたちはそういうと、ブリキのかべをびよんびよんのぼって行って、あつというまにカルモトのあけた入り口のアナの前にまでたどりついてしまいました。そしてそこに、持ってきていたなわばしごをかけて、これでついに、魔女の塔の中へとつづく道がかんせいしたのです！（このなわばしごは長老のモラニスがかじめ、ボートの中につんでおいてくれたものでした。入り口までの長さもぴったりで。まあ、用意のいいこと！ さすがはモラニスさんです。カルモトのやることは、すべてお見通しなんですすね。

ちなみに、カルモトの魔法なら塔の入り口でなくても、塔のかべにちよくせつあなをあけて、そこから中にはいることもできるでしょうが、やっぱりカルモトは、きちんと塔の入り口からにはいることにしました。塔のかべにあなをあけたら、古くなっている塔が思わぬことでくずれてしまうかもしれませんし、あなをあけてぶっこわしたその場所

に、なにかだいじなものがかくされていなくてもかぎりません。それがみんなのたましいだったら、おおごとです！ ですからカルモトはよいな問題をふやすおそれをさけて、入り口の中をきちんとたしかめてそこにだいじなものがないということをおかくにんしたうえで、入り口のアーチをぶっこわしてそこからはいることにしました。カルモトさんもいいかげんなようできて、こういうところはけっこうきちんと、考えているんですね。）

「ありがとう、しよくん。」カルモトが入り口のあなの前にいるフログルたち、カルル、クプル、イルクー、レングの四人によびかけました（はしごをかけるくらいならひとりかふたりでじゆうぶんでしたが、かれらはもう、じつとしていることができずしてたから、ぜんいんでのぼってしまいました）。

ちなみに、ロビーたちの乗ったボートのうんてんしゆであるネリルと、もういつそうのボートのうんてんしゆであるグロツクという名のフログルのふたりは、ここに残ってボートの番をすることになりました。かれらもだいぶ、塔の中にいきたかったようです（けど）。

「それでは、中にふみこむとしよう。ん？ ところで、かれらはどうした？」

かれらとはもちろん、われらが旅の者たちのことでした。あれ？ そういえばさつきから、カルモトとフログルたちのやりとりばかりで、旅の者たちのことがぜんぜん出

てきませんか？　　いったい、どうしたのでしょうか？

「あのー、かれらなら、さつきからそこに寝ていますけど……」ボートのうんてんしゅ（ネリルとグロックです）のふたりが、おほりのふちの方をゆびさしていいました。見ると、そこにわれらが旅の者たち、ロビー、ベルグエルム、ライアンの三人が、ひたいの上にくらしたタオルを乗せて、うんうんうなつて寝ていたのです……。かれらが船よい（ジャンプよい？）からふつかつするのには、まだまだページ数がたりないみたいですね……。でも早く話を進めないと、このままこの章が終わってしまいかねません！　わたしも心をおににして、かれらを起こさないと！　さあ、早く起きて！」

「こら、いいかげんにしないか。」カルモトがようしやなく、かれらをせつつきました。「いくら寝ぶそくでも、今は、やらねばならんことがある。さつきと起きて、さつきといくぞ。仲間を助けたいのだろう？」（やっぱりカルモトは、ちよつとごかいしたままのようですが……）」

さて、もうわれらが旅の者たちも、起きないわけにはいきません。みんなはようやくのことのでふらふらと起き上がると、そのままよろよろと、カルモトのあとにつづいていききました。

もうぜつたい、あのボートには乗らないぞ……！！

みんなはそろって、心の中でさげびました。

そこはなんとも、うすきみの悪いところでした。そこから見たしゆみの悪さが、そのままにまで（全力で）つづいている感じです。かべや床はそれと同じ、きたない色のきんぞくの板でつきはぎされていて、しかもそれらの板はまったくでたらめに、おおざっぱに、てきとうに取りつけられていました（このあたりはほんとうに、カルモトにそっくりです）。しかもかべや床のぎいりようには、やつぱり、まな板やけいりようカッブや、ポップコーンのはこにチョコレートをつつみ紙。スリッパにくつしたに、果てはだれかのパジャマまで！ でたらめきわまりないものたちが、ごちゃごちゃに使われていたのです（いったい、だれのパジャマ？）。

ここはもちろん、魔女のブリキの塔の、その中でした（せいかくには入り口から塔のまん中へとつづいていく、でつぱりの中のつうろでした）。今さいこのベルグエルムがなわばしごをのぼって、塔の入り口からつづくこのつうろの中にまで、ようやくたどりついたところだったのです（ふらふらのからだでなわばしごをのぼるのは、みんな、かなりしんどかったのですが……）。

いったいこの塔の中はどうなっているんだろう？ みんなのたましいはいつたいたいどこに？（できれば早くかたをつけてベッドに横になりたい……）旅の者たちはそれらの思いを胸に、塔のまん中へとつづくそのきんぞくせいのおつうろの上を、かつんかつんと

音を立てて歩いていきました（ときどき、べりっ！とか、ばりっ！とかいって、床の板がくずれてしまうこともありました。このきんぞくの床はさびついていて、だいたいたんでいたのです。そのため旅の者たちは床をふみぬけてしまわないように、おそるおそる気をつけながら歩いていきました。そうでなくても今、みんなの足取りは、ふらふらでしたから……。）。そしてまもなく、つうろは塔のまん中の部分へと通じる、ひとつのアーチへとつながったのです。そのアーチをくぐって、みんなが見たものは……。

「な、なんだこれは……？」

さきをゆくベルグエルムが、思わずそういいました（ついたのはいちばんさいごですが、旅の者たちの中でいちばん先頭をつとめたのは、やっぱりベルグエルムでしたから）。「なにになに？」とつづくライアンとロビーも、ベルグエルムのわきから顔をちよこんとつき出して、のぞきこみます（このつうろはとつてもせまかったからです）。そしてライアンとロビーのふたりも、その光景を見て思わず、「なんだこれー！」とさげんでしまいました。

塔の中は、「はるか上のでんじょうから底までつづく長くさいり」がなん十本もたれ下がっているだけの、がらんどろだつたのです！ まわりをぐるりと、せまいつうろが取

りかこんでおりましたが、塔のまん中の部分はそれらのくさりいい、ほんとうになんにもありませんでした。上から下まで、全部吹きぬけの、まさにからっぽの塔だったのです！

旅の者たちは思いもよらない光景に、ただぽかーんとしてしまいました。いったいアルミラはなんのために、こんなからっぽの塔をたてたのでしょうか？ どうやらこのてんじようから下がっているくさりに、なにかひみつがあるようですが……？

「なんにもないじゃん。りっぱなのは、大きさだけ？」ライアンが、塔の上と下をじゅんばんにのぞきこみながら、いいました。「これって、手ぬきだよね？ いいかげんな魔法だなあ。」

ですがさきに立つカルモトは、いつものおちつきはらったようすで、みんなにいいました。

「この塔は、ブリキの兵士たちのことをたくわえておく、かくのうこだったようだな。それを見てみなさい。」

カルモトのゆびさしたところには、たくさんのまるいボタンがついた、おかしな鉄のはこのようなものがひとつ、作りつけられていました。

「これは、兵士たちを上げ下げするための、そうちのようだな。だいぶ古いが、まだ、動かせそうだな。どれ、ためしてみよう。」

カルモトはそういうと、そのはこに「えい。」とねんりきを送りこみます。すると……！ そのはこから、ぶいん！ というにぶい音がなり出して、まるいボタンのすべてが明るく光り出しました！ そしてカルモトが、その中のひとつをおしてみると……。

ぎゆるるるるるんっ！

とつぜんものすごい音がして、てんじようから下がっているくさりがすごいきおいで、動きはじめたのです！（思わずベルグエルムは、腰の剣に手をかけてしまったほのです。）

「このくさは、兵士たちのことをひっかけて、しまっておくためのものだ。これなら、この広さをすべて使って、こうりつよく、たくさん兵をしまっておくことができます。なるほど、考えたものだな。」

そう、カルモトのいう通り、てんじようから下がっているこれらのくさは、アルミラのブリキの兵士たちのことをひっかけて、しまっておくためのものでした！ これらのくさははたれ下がったそのいっぽんいっぽんが、それぞれ大きなわつかになついで、それが塔のつべんにつけられたかつしやのところできさえられて、ぐるぐるまわるしくみになっていたのです。そしてくさにはたくさんフックがついていて、この

フックにでき上がったブリキの兵士たちのことをひっかけて、つるしておけるようになっていました（つまりくさがりまわると、それにあわせて兵士たちも上がったり下がったりするというわけでした）。このようにしてかつてアルミラは、これらのくさがりいっぱいにはちきれんばかりのブリキの兵士たちのことをつるして、ひそかに力をたくわえていたというわけだったのです（このくさがりひとつには、百体の兵士たちをつるしておくことができました。これが二十本ありましたから、全部で二千になります。つまりこれは、アルミラの作り上げた兵士たちの数と、ぴったりあいました）。

ちなみに、この塔のいちばん底には、このブリキの兵士たちのことをそとに出勤させるための、ひみつつ出入り口がつくられていました。その出入り口は地下を通っておほりのそとへと通じていましたが、今ではすっかり、ふさがれてしまっていたのです。これはむかし、兵士たちとの戦いのさいに、「ブリキの兵士たちが出てくる、塔へとつながるひみつつ出入り口がある」というほうこくを受けたカルモトが、戦いがすっかり終わったあとで、木の兵士たちにめいじてふさがせました。ですからカルモトはこの塔にはいるとき、べつつ入り口をさがすことにしたのです）。

「ちよつと待つて！」カルモトの言葉をきいて、ふいにライアンがいました。

「じゃ、じゃあさー！ このくさがりいっぱいにくつつけたブリキの兵士たちを、いつせいに、ぎゅいゝん！ ギョギョー！ って、しゅつけきさせることができちゃうってことっ！」

ライアンは両手を使って、兵士たちがしゅつげきしていくようすのことを、小さなからだでけんめいにあらわしながらいいました。どうやらかなり、こうふんしているみたいです。いったいどうしたの？

「うむ。むかし、わたしが戦ったときも、あれだけの数の兵士たちのことを、どのようにしてしまいこんでいたのか？ 気にはなっていたのだが、そういうしくみになっていたよだな。」カルモトがれいせいにくたえます。

それをきいたライアンは、両手をにぎりしめて、なんだか頭の中でいろいろそうぞうしているみたいでしたが、やがて目をきらきらとかがやかせながら、ひとこといいました。

「か、かつこいいい〜！」

そ、そんなこと考えてたんですか……。たしかに、ロボット軍団出動！ といった感じでしたから、かつこいいいかもしれませんが……。まあ、ライアンも男の子ですから、そういうたものが好きなんです（ちなみに、ライアンの頭の中ではそれらのロボット軍団には羽が生えていて、空を飛びまわってビームまで出していました……。でも今はそれどころじゃないんですから、おさえておさえて。

「こら、そういうことをいっている場合じゃないぞ、ライアン。まったく、ロビーどのからも、なにかいってやってください。」あきれたベルグエルムがそういってロビーの方

を見ましたが、そういうロビーもまた、たくさんロボット軍団がぎゅいぐん！としゅつげきして巨大な剣で戦っているところをそうぞうして、かっこいい！と思っ
ているところでした……。

「ロ、ロビーどの〜！」

さて、ロボット軍団に思いをはせるのは、そのくらいにしてみらつて……（そもそもこのアークランドはじゅんすいなファンタジーの世界なんですから、せいみつかがくのロボットなんて、はじめからいないんです！ アルミラが作ったのは、あくまでもブリキでできた人形をたましいの力であやつるといふものですので、みなさんはライアンやロビーみたいに、かんちがいしないでくださいね）、この塔の中にあるといふみんなのたましいを、早く見つけにいかないと！ でもこんなにすかさずかな塔の中の、いったいどこにあるのでしょうか？ どこかに、かくされた部屋でもあるのかも？

そんな思いをいだきながら、「たましいそうさく隊」のメンバーであるわれらが旅の者たちは、塔のかべにそつてのびているそのつうろの上を、ゆつくりとしんちように歩いてきました（ちなみに、たましいそうさく隊というのはフログルたちがつけた、みんなのチーム名でした。ほんとうにかねらの名まえのつけ方は、そのまんまです……）。それというのも、このつうろは目のあらい金あみできていて、塔の底まで見えて

るといふ、とつてもこわいつうろだったからなのです！ 高いところがにがてな人なら、足がすくんでしまつて、とてもこんなところは歩いてなどはいられないでしょう。ですから旅の者たち、ベルグエルム、ロビー、ライアンの三人は、みんな、「ひええ……」とおっかながりながら、そろそろと、このちゆうに浮いているかのような、危険なつり橋のようなつうろの上を、進んでいるというわけでした（ですけどやつぱり、カルモトと四人のフログルたちは、そんなことはまったく気にもとめていないようでした。とくにフログルたちにとっては、こんなところを歩くのはわけもないことでしたから、笑顔とじょうだんをまじえながら、じつに楽しそうに、わいわいと歩いたり、とびはねたりしていたのです。かれらがふざけてとびはねるたびに、金あみのつうろがぐらぐらとゆるるので、旅の者たちはみんな手すりやかべにしがみつきなながら、「や、やめてくれ〜！」とさげびました……）。

つうろは同じ金あみでつくられた、ほそ長いかいだんに通じていました。かいだんはおよそ五十フィート上の、同じ金あみでできたつうろにつながっております。どうやらこの塔は、まわりをぐるりとかこむつうろとこのかいだんとをくりかえして進むことによつて、てつペンへとこのぼつていくことができるつくりになつているようでした。

「てつペンに、なにかあるようだな。なにかのそうちのようだが。」ふいに、カルモトがいいました。なにかのそうち？ ひよつとしたら、みんなのたましいもそこにあるの

かもしれません。旅の者たちは思わず、（こわいのも忘れて）手すりから身を乗り出して、くいいるように塔のてっぺんを見上げてしまいました。しかし上の階の金あみのつうろがじやまをして、目をこらしてみても、よくわからなかったのです。なにかごちやごちやとしたくたのようなものがあるのが、わずかに見えるくらいでした。

「わたしたちが、ちよつと、ていさつにいつてきましようー！」

みんなが上を見てみると、イルクーとレングのふたりがとつぜんそういつて、つうろの手すりの上にびよこん！ とどび乗りました。この手すりはとてもほそいもので、ふとさはせいぜい二インチほどしかありません。ですからそこにとび乗るだけでも、たいしたものです！（しかもそのすぐわきは、塔の底までつづく、だんがいぜつべきなのですから！）しかしかれらのすぐいところは、そこからでした。手すりをまるで鉄ぼうみたいに使つて、からだをぐるん！ とかいてんさせると、そのままかべをびよんぴよん！ とけつて、いっきに上のつうろまでのぼつていつてしまったのです！ そしてそれを二回三回とくりかえして、かれらはあつというまに、塔のてっぺんまでいつてしまいました！（それにしても、なんといううんどうしんけいなのでしょう！ この塔のおともにかれらがいつてきてくれたのは、旅の者たちにとつて、とてもこううんなことでした。）

それから一分もしないうちに、かれらはふたたびかべをびよんぴよん！ とけつ

て、みんなのところまでもどってきました。いったい、てっぺんになにがあったの？

旅の者たちはわくわくとはやる気持ちをおさえながら、かれらの言葉を待ちます。しかし……。

「すいません。はつきりいって、よくわかりませんでした。」

ええ……。旅の者たちは、がくつと肩を落としてしまいました……。

「なにか、くだとか、はことか、へんてこなものがごちゃごちゃとふくぎつにからみあつていて、それがかべの中へと、つづいているみたいでした。あと、とびらがひとつありましたよ。でも、かぎがかかつていて、あきませんでした。」

とびらが！ それはたいしたじょうほうです。ひよつとしたらその中に、みんなのたましいがとじこめられているのかもしれない。

「そのほかには、なにもなかったの？ 音とかはしなかった？」ライアンがたずねました。ライアンが心配しているのは、モーグのまちに飛んできた、あのおそろしい影のおばけたちのことでした。魔女の手下のあの影は、この塔の中のどこかに、今もひそんでいるはずなのです（それに影のおばけがいにも、なにかがひそんでいるかもしれない）。

「なんにも。とびらの中も、静かなものでした。」フログルたちが、それにこたえています。

どうやらこの塔の中には、だれもいないみたいです(すくなくとも、生きている人は)。でも音もなくしのびよるなにかとか、そんなものが出てきてもふしぎではありません。なにせここは、魔女の塔。どんなしかけやのろいのわざが、張りめぐらされているのかもわかりませんでしたから(それらのものに、カルモトがみんな気づいてくれたらいいんですけど……、てきとうでうっかりなカルモトのことです。あんまり、きたいしすぎないようにしなければいけませんね。すごいときには、すごいんですけど……)。

それから金あみのつうろとかいだんを、それぞれ三回ずつ、くりかえしてのぼっていったころのこと……。一行はそこで、思いもかけないものに出会いました。

「ひゃあつー！ で、出たー！」

カルモトにつづいてさきを進んでいたカルルとクブルのふたりが、さげびました！

みんなはびつくりして、「どうした！」「どうしたの！」とあわててかれらのもとへかけよります。見るとそこには、(アイロンや虫とりあみやだれかのサンダルのみじったかべの前に)アルミラの作り上げたあのブリキの兵士たちが、ずらくつとならんで立っていました！

「生き残りか！」ベルグエルムがそういって、腰の剣に手をかけます！ しかしよく見

ると、それらの兵士たちはまったく動いておらず、ただ石ぞうのようにそこに立っているだけでした。もうだいたくたびれていて、ぼろぼろとくずれてしまっているところさえあつたのです。

「どうやら、アルミラが残していった、おもちゃのようだな。」カルモトがいました。「安心しろ。もう、動くことはない。ただの鉄くずにすぎん。」

カルモトのいう通り、それらの兵士たちからはたましいのエネルギーはまったく感じられませんでした。カルモトのいうことには、たましいのエネルギーのはいった兵士たちは、かぶとの中がきいろく光っているそうなのです。しかしこの兵士たちのかぶとの中は、文字通りのからっぽでした。

「なんだよー！ おどろかせてー！」ライアンがぶんぶんいって、兵士のおしりをげんこつでごちん！ とたたきました（そうしたらさびついたおしりにぼっかりあながあいてしまったので、あわてて知らん顔をしてごまかしましたが）。こんな兵士たちがつきのかいだんのところまで、なん十体もならんで立っていたのです（ちなみに、さきほどのていさつのときにはイルクーとレングのふたりは、これらの兵士たちに気がつきませんでした。かれらはいつきにてっぺんまでいって、そしてもどつてきましたので、そのあいだのところには目をむけていなかったので。もっともかれらははじめから、てっぺんのことしか頭になかったようですが……）。

カルモトは「もう動くことはない」といいましたが、それでもやつぱり、こんなところを歩いていくのはいいい気持ちがありません。みんなは早くこのつうろをぬけてしまおうと、足をはやめました。

それからかつんかつんと、しばらく歩いていったときのこと……。

「ねえ、なにか、変じやない？」ふいに、ライアンがとなりのロビーに声をかけました。「じ、じつは、ぼくも、そう思ってたところなんだ。」ロビーもこたえて、同じことをいいました。

さつきから、かつんかつんという金あみをふみしめるその足音が、みんなの人数よりも、なんだか多いような気がしたので……。ま、まさか……！

ロビーとライアンのふたりはおたがいの顔を見あわせてから、「せーの、せー！」でうしろをふりかえりました。すると……！

「ひええ〜！ やつぱり〜！」

みなさんのごそごそでの通り！ みんなのうしろから、ならんでいたブリキの兵士たちが、かつんかつんという足音をならしながら、くっついてきていたのです！

「カルモトさ〜ん！ どういうこと〜！ 動かないって、いったじゃ〜ん！」ライアン

が、先頭のカルモトにさげびました（みんなの足音にまざる兵士たちの小さな足音に気がつくことができたのは、れつのいちばんさいごを進んでいたロビーとライアンだけでしたから。カルモトにつづいてつづく道のようすに気をくばっていたベルグエルムも、さすがにそこまでは気づけませんでした。ぴよこぴよこ歩いていたフログルたちも同じです。そしてカルモトも、この兵士たちが動き出すとはまったく思っていないませんでしたので、まったく気がついていませんでした……）。

もう兵士たちは見るまに数をふやして、今ではつうろに立っていた兵士たちが、みなすつかり動きはじめていたのです！ しかもその手には、さびついてしまっただけのもの、剣がしつかりとにぎりしめられていました。やつぱり戦う気、まんまんみたいです！（いっしょにたましいをさがしてくれるというわけではありませんでした！）

「こいつはうつかり！」カルモトがそういって、兵士たちに手をかざしました。すると……、その手から目には見えない魔法のエネルギーが吹き出して、それが兵士たちにあたって、どっかくん！ 四、五体の兵士たちがあつというまに、ばらばらにこわれてしまったのです！（さすがカルモトさん！ 強い！）

「す、すごい！」みんなは思わずそういってしまいました。しかしそれでも、兵士たちはつきからつきへとこちらへむかって進んできていたのです！

「よーし！ ぼくだって！」ライアンも負けじと、兵士たちにむかっておとくいのたつ

まきこうげきです！ぐるんぐるんとうずをまいた風が、兵士たちをなぎはらつて、どつごくん！兵士たちはそのまま吹き飛ばされて、塔の底へとまつさかさま！なすすべもなく落ちていってしまいました（さすがライアン！強い！）。

「やるではないか！おみごとだ！」カルモトがそういつて、ライアンのことをほめました。

「え？　そ、そう？　そういつてもらえると、うれしいな。」思わずライアンは、ほほをそめててれてしまいます。

「ライアン！　ゆだんしちやだめ！」ロビーのさげぶ声！

「え？　うわっ！」

そのとき、兵士のひとりがライアンの目の前にまでせまつてきていました！

「こいつめ！　ライアンからはなれる！」ロビーがとっさにかけて、自分の剣で切りかかります！　ぼつきゃん！　おみごと！　ブリキの兵士はロビーに切られてまっふたつ！　床にばつたりとたおれてしまいました（ロビーもなかなか、やるものですね！）。

「びつくりした。ありがとう、ロビー。」ライアンがほつと胸をなでおろして、ロビーにおれいをいしました。

「ふたりとも、気をつけて！　敵はどんどんくるぞ！」ベルグエルムがさげびます。ベ

ルグエルムはもうすでに三体の兵士たちのことをたおして、今は五体の兵士たちを相手に戦っているところでした（さすがベルグエルム！とかいうまでもないですね。強い！）。

もうまわり中が敵だらけでした。兵士の数は、全部で八十体ほどいたのです！（ひええ〜！）

フログルたちも持ち前のうんどうのうりよくで、兵士たちを相手によく戦っています。 「こつちだよ〜！ べろべろ〜！」とからかって、左右からふたりの兵士たちがつっこんでくるしゆんかんに、びよこん！ ジャンプしてかわして、兵士たちはいきおいあまって、おたがいの頭をごつちくん！ というぐあいです。ですがそれでも、これだけの数の兵士たちのことを前にしては、まったくもってこちらに分がありませんでした。すでにこのつうろは前もうしろも、このブリキの兵士たちによつてかんぜんにふさがれてしまっていたのです！

さあ、大ピンチ！ みんなはこのぜったいぜつめいの場を、いったいどう切りぬけるのでしょうか！

「しかたない。たしように、荒っぽいが。」みんなをすくつたのはやっぱりこの人、カル

モトでした（もともとカルモトが「兵士たちは動かない」といったから、みんな安心してこのつうろを渡っていったのです。ですからここはやつぱり、カルモトになんとかしてもらわなくっちゃ!）。

「ライアンくん! 協力してくれ!」

「え? ぼく?」

急にカルモトによばれて、ライアンはちよつとびつくりしてしまいました。どうやらカルモトには、なにかの作戦があるようなのです。

「あのかいだんのわきに、大きなねじがあるだろう? 見えるか?」

カルモトのいう通り、上へとつづくそのかいだんのわきには、大きなねじがいつぽん、しめられていました。あのねじを、いったいどうするのでしようか?

「ありつたけの力で、あのねじを吹き飛ばすんだ! わたしもいつしよにやる!」

とにかく今は、深く考えているよゆうはありません。ここは、カルモトのいう通りにやるしかないようです。

「わかった! まかせてよ!」

それから「いち、にの、さん!」で、カルモトとライアンのあわせわざがさくれつ!

どつどつおおおくん!

ねじはそのまわりの部分もろとも吹き飛んで、ばらばらと、塔の底へと落ちていってしまいました！ それにしても、なんとというはかい力！ モーグの門を吹き飛ばしたあのきんしされてあるひつさつのわざにも、負けないくらいいいりよくです。

さあ、カルモトのいう通りねじを吹き飛ばしましたが、いったいこれで、どうなるのでしょうか？ しかし……、みんなはそのこたえを、すぐに知ることとなりました。身をもって。

「みんな、これにしつかり、つかまっておけ！」

カルモトはそういって、服の下から長いロープのようなものを投げました（これはじつは、カルモトのその木のからだをほそくのぼしたものでした）。旅の者たちはいわれるままに、そのロープをにぎりしめました。すぐにそのわけを知って、顔を青ざめさせたのです。

「ま、まさか……、うそでしょ？」

そのまさか！ さきほどカルモトとライアンが吹き飛ばしたねじは、みんなが今まで歩いてきたつうろとかいだんをかべにとめてさきえておくための、とつてもだいじなねじでした！

ばきつ、ばきばき、ばき！

みんなの足もとのつうろが、かべからはがれてどんどんとたれ下がっていききました！
ブリキの兵士たちはがらがらと音を立てて、塔の底までつきつきに落っこちていきます
！

「ぎゃああ〜！」

もうみんな、ひっしの思いでカルモトのロープにしがみつきました！ もうかんぜん
に、金あみのつうろはつうろとしてのやくわりを果たせなくなってしまうていました。
かべからぶらんとたれ下がっているだけの、ただの金あみになってしまっていたのです
！ しかもそればかりではありません。あのねじは塔のそこから下の部分のつうろと
かいだんを、すべてまとめてささえていたものでした。そ、それってつまり……？

ばりばりばりばり！ たれ下がるつうろのさいごの部分にひっぱられて、そのつうろ
につながっている下につづくかいだんが、はがれてたれ下がっていききました！ そのか
いだんのさいごの部分にひっぱられて、そのかいだんにつながっている下のつうろがま
た、ばりばりばりばり！ どんどんたれ下がっていきます！ そしてまた、そのつうろ
のさいごの部分にひっぱられて、そのつうろにつながっているそのまた下につづくかい
だんが、ばりばりばりばり！ さらにさらに、その下のつうろがそのかいだんにひっぱ

られて……。

早い話が、みんなが今いる場所から下の部分の足場が、まるでドミノたおしてみたいに、つぎつぎとひとつにつながらながら、はがれ落ちていってしまったというわけでした！（みなさんは、りんごのかわをいちどもとぎれずに、さいごまできれいにむいてみたことがありませんでしょうか？ たれ下がったつうろとかいだんは、まさに今、そんな感じにひとつにつながらって、落っこちていってしまったのです！ こ、これって、かなりまずいんじゃない……）

もはやブリキの兵士たちは、一体も残っていませんでした。みんな落っこちてしまいましたから！ ですがわれらがたましいそうさく隊の一行（フログルたちはべつとして）も、このままではすぐに、その仲間になつてしまいかねないのです。カルモトさん！ 早く、なんとかしてよ！

ここで四人のフログルたちが、またもや大かつやくです！ かれらは塔のかべをひよいひよいとのぼって上の階のつうろまでたどりつくと、そこから、ちゅうづりになっているカルモトと旅の者たちのことを、上までひっぱり上げてくれました（カルモトは自分のロープのさきを、ずっと上にある、塔のかべからつき出ている風を通すためのふとパイプに、ひっかけていました。まずはそこまでよじのぼって行って、そこからまたロープを上まで投げて、フログルたちにひっぱり上げてもらったというわけだったので

す)。もう旅の者たちはみんな、むがむちゆうでした。そしてようやくのことの上のつうろまでたどりつくことができる、そのまま金あみの床の上に、ごろん！ あおむけにたおれこんでしまったのです。旅の者たちはそのあと、ぜいぜい荒い息をつきながら、口をそろえていいました。

「し、死ぬかと思つた……」

それから。みんなは塔のてっぺんへとむかつてふたたび進み出したわけですが、旅の者たちはもちろんその前に、カルモトにたつぷりもんくをいったのです。「あんなことするなら、さきにいつてよ！」とか、「兵士たちは動かないから、安心しろつていったじゃん！」とか、いろいろです（旅の者たちというより、ほとんどライアンがもんくをいつていましたけど……）。そのたびにカルモトは、また頭を地面すれすれまで下げて、「すまない。じつに、うっかりだった。」としきりにあやまりました（ちなみに、カルモトのからだをのぼしたロープは、またするすると、かれのからだにもどつていきました。じつにべんりなからだです！）。

ですがカルモトのことについては、もういいとしても……（かれも心からあやまつていますしね。それにみんなも、かれのいいかげんなせいかくのことについては、もうわかつておりましたので）、あのおんぼろ兵士たちがなぜとつぜん動き出したのか？ そ

れは読者のみなさんにも、きちんと説明しておく必要がありますよね。

カルモトのいうことには、あの兵士たちはアルミラの作ったブリキの兵士たちのしきく品なのだということ、たましいの力ではなく、ぜんまいじかけで動いていたのだということでした（ですからかぶとの中身も、からっぽでした）。そしてあの兵士たちは、あのつうろを通る者を見さかしくうげきするようにと、めいれいされていたということです。これはカルモトが自分の作った木の兵士たちにかけていためいれいの魔法と、同じものでした。アルミラもまた、カルモトと同じわざを使えたようです（めいれいの内ようは、アルミラの方がずっとひどかったですけど）。

「アルミラの力を、あまく見すぎていたようだ。」説明を終えると、カルモトは歩きながら、とつぜんみんなにむかっていいました。

「兵士になん十年もめいれいを守らせつづけるわざを、使いこなすのには、いつわりの力ではない、それなりのさいのうがいる。あいつには、そんなわざはむりだと思つていたのだが……、じつにうっかりだった。あいつも、わたしの知らないあいだに、ずいぶんと力をつけていたようだ。これからは、わたしもほんきで、アルミラにむきあうでしょう。」

カルモトはそういうと、ふいに立ちどまり、どこを見るときもなく上を見上げました。いつもすたすと、どんどんさききにいつてしまふカルモトでしたのに、どうしたので

しよう？

「どうしたの？」いつもとちがうカルモトのようすに、ライアンが心配になって声をかけました。ベルグエルムもロビーもフログルたちも、ふしぎそうにカルモトのことを見つめます。

「思えば、あいつが悪の道にそまってしまったのも、わたしにせきになんがあるのかもしれない。わたしは兄として、あいつの心をくみ取ってやれなかった。」

みんなはこんなふうに話すカルモトのことを、はじめて見ました。

「カルモトさん……」

カルモトはいつもなんともないようにふるまってはおりますが、かれはかれなりに、いもうとのアルミラのことをずっと気にかけていたのです。カルモトはもうなん十年と、アルミラに会ってはいませんでした。カルモトとアルミラ。このきょうだいのあいだには、今となっては、とても深いみぞと、あつかいが、できてしまっていたのです。カルモトはみんなにはなにもいいませんが、心の底ではいつも、そのことを考えていました。

「わたしには、あいつにつぐないをさせるぎむがある。もう、おそいかもしれない。あいつはあまりにも多くの者たちのことをきずつけ、かれらから、たくさんのものをうばってしまったのだから。だが、あいつのためにぎせいとなった者たちのためにも、わ

たしは、できるかぎりのことをしていくつもりだ。」

おたがいに同じかんきように生まれ育ちながら、まるでせいはいはんたいの道に進んでしまつたふたり。それはけつして、かんたんには語ることできないものでした。ライアンにも、いもうとのエレナがいます。お父さんのメリアン王、たくさんのお城の仲間たち、友だちがいます。ベルグエルムにもフェリアルにもフログルたちにも、みんな家族や仲間たちや友だちがいます。

そしてロビーにも。まだ知れぬ家族がいるはず。すぐとなりに、仲間たちがいるのです。

カルモトにとってアルミラは、たとえどんなに悪いやつであつたとしても、かけがえない、じつのもうとでした。それがカルモトの心を、たまらなくしめつけていたのです。

でも……。ねじれてしまつたものは、いつの日かかならず、もとにもどすことができずです。すこしずつでいいのですから。すこしずつ、すこしずつ、いつかまた、はじまりのスタート地点へともどれる、その日まで……。

「くだらないことをいつてしまつた。さあ、いくぞ。てつぺんはすぐそこだ。」

カルモトはそういつて、またさつきと歩きはじめました。ですがみんなは、そのときカルモトの目にあふれていたそのなみだを、このさきもずっと忘れることはなかつたの

です。

「ついたぞ！ てっぺんだ！」

旅の者たちは思わず、声を張り上げました。ついにみんなは、塔のそのてっぺんにまでたどりついたのです！（とちゆうでとんでもない大冒険にまきこまれてしまいましたので、そのうれしさはひとしおでした。）ですが塔のてっぺんといっても、そのつくりはほかの金あみのつうろの階とまったく同じでした。しかしここには、ほかの場所とはあきらかにちがう、なんともおかしなものがあつたのです。

そう、それは下からもちよつとだけ見えていて、イルクーとレングが「よくわかりませんでした」といつていた、あれでした。旅の者たちもここでようやく、それらのものをまざまざとながめることができたわけですが、みんなにもイルクーとレングのいったことが、よくわかつたのです。目の前に広がっているそれらのものは、やつぱりなにがなんだか？ ぜんぜんわかりませんでしたから！

そこにあるのはたくさんきんぞくのくだ、えんとつ、はぐるまのついた鉄のはこ、それに鳥や動物のはくせい、または骨、古いがつきがたくさん、ぶよぶよとした大きなねんどのかたまり、食べかけのパンケーキ、だれかのむぎわらぼうし、などなど、おかしな品物たちばかりでした。そしてフログルたちのいう通り、それらのものがまったくで

たために、かべやてんじようや床でうねうねとへびのようにからまりあつていて、それがかべのむこうにまでつづいていっているようなのです。

「うわあ……、なにこれ……。気持ち悪い。」ライアンが思わず、そうもらしました。ですがまったく、ライアンのいう通りです。どんなにひいき目に見ても、ここはまったく、気持ちの悪いところでしたから。まさに魔女アルミラのしゅみの悪さ、ぜんかい！といった感じだったのです（カルモトのしゅみの悪さとは、またべつのしゅみの悪さです）。

「これは、たましいのエネルギーを兵士たちに送りこむための、そうちだ。」カルモトがそれらのものをながめ渡しながら、いいました。なるほど、よく見てみると、てんじようから下がったくさりのひとつひとつにむかつて、きんぞくのくだがのびております。そしてくだのさきにはじようごのようなものがついていて、そこからたましいのエネルギーをブリキの兵士たちにむかつて、送りこめるようになっていた（どんなしかけでこのそうちが動くのかは、まったくわかりませんでした……）。

「ということ……、めぐすみんなのたましいは、やつぱりここにあるはずです！ みんなはやる気持ちをおさえきれずに、どこだどこだ？ とあたりをさがしまわりました。」

「おちつけ。みんなのたましいは、そのとびらのむこうだ。」

カルモトがそういつて、ひとつのさびついた鉄のとびらのことをゆびさしました。そうでした、フログルたちがいつていたこのとびらのことを、忘れていましたね！

「うむ。ここにも、なにかのろいがかかっているようだ。どれ……」

カルモトがとびらの前に手をかざして、なにかをつぶやきはじめます。そして……。

「えいやー！」

ばたん！

カルモトがさけぶのと同時に、そのとびらがいきおいよく内がわにひらきました！

さすがカルモトさん！（ちなみに、とびらのむこうになにかがあるか？ まだわかりませんでしたので、もちろんカルモトもこのわなをとびらごと吹き飛ばすようなまねはしませんでした。すぐそこに、みんなのたましいがしまつてあるかもしれないからね。）

「ふむ、こののろいは、しようしようやつかいだったぞ。これは、うろこ病ののろいだ。こののろいを受けると、その者はからだにへびのようならうろこができて、ひとつきもしないうちに、ほんとうのへびへと変わってしまうのだ。」

ひ、ひええ〜！ なんておそろしいんでしょう！ うかつにあけなくてよかったです！

みんなは心の底からそう思いました！（とくにフログルたちにとつてはなおさらでした。かえるの種族であるかれらは、みんなへびがいちばん大きらいだったのです。そのへびに自分になってしまっただなんて、考えただけでもおそろしい！ イルクーとレング

のふたりは、さきほどこのとびらをむりにあげようとしなくて、ほんとうによかったと思いました。」

「アルミラめ、味なまねをしてくれる。では、いくぞ。もくてきのものは、この中だ。」

さあ、それではいよいよわれらがたましいそうさく隊のメンバーたちは、そのさいごのもくてきの場所の中へと、ふみこんでいくときをむかえたのです。みんなは意をけつしてごくりとつばを飲みこむと、じゅうぶんに用心しながら、その部屋の中へとゆつくりと歩みを進めていきました。

「ひええっ！　へびー！」

とつぜん、前をゆくカルルとクプルがさげびました！　見ると、とびらのわきに大きなへびのはくせいが出るとつ、でーん！　とかざられていたのです。これがカルモトのいつていた、うろこ病ののろいを出すわなでした。しかしもうすでにカルモトがのろいをといてしまいましたので、このへびも、ただのはくせいにもどつていたのです（でも見た目のこわさはそのままでしたので、カルルとクプルは思わずさげんでしまったのです。

ちなみに、そのへびの下の方には小さな名ふだがついていて、「バイパーちゃん」と書いてありました……。)

とびらのむこうは小さな部屋になっていました。ここは塔のてっぺんにつき出た、そのでっばりの中です。アルミラはこのでっばりを、自分の部屋として使っていたようでした。

部屋の中はござっぱりとかたづいていました（これはいいでした。いいかげんなアルミラのことですから、もつとごちやごちやとちらかっているものとはかり思っておりましたから）。暮らしに必要なさいていげんの家具と品物があるだけで、そのほかにはめぼしいものはなんにもありません（ゆいいつ魔女っぽさを感じさせるのは、とびらのわきのへびのはくせい（パイパーちゃん）だけでした。魔女の部屋なんですから、もつときみの悪い品物のつまったたなだとか、なにかをにこむための大きなかまだとか、いろいろあると思っていました、これもまったくいいでした）。ですが、部屋のおくにあつたもうひとつのとびらのむこうに、みんなはめざすもくてきのものを見つけたのです。

そこはとても小さな部屋で、正面のかべのまん中には塔のそとが見えるように、大きな四かくいガラスまどがいちまいはめこまれていました（このまどはガラスがはまつているだけで、ひらくことはできませんでした）。そしてそのまどの前に、なにやらたくさんのボタンがならんだ大きな鉄でできたつくえがひとつ、作りつけられていたのです。そのつくえからのびる、ふといくだのさきにあつたのは……。

「あつたぞ！　これが、みんなのたましいだ！」

旅の者たちは思わずさげんでしまいました。そこにはまるいガラスのいれものがあつて、その中にきいろにかがやく光のようなものが、たくさんとじこめられていたのです！　そう、これこそみんながさがしもとめていた、そのたましいたちにほかなりませんでした！（フェリアルルのたましいも、この中にとじこめられているはずです！）

やった！　これでみんなを助けることができます！　みんなはよろこびいさんと、そのガラスのいれもの前に集まりました。でもみんなはそこで、あるひとつのぎもんをいただいたのです。

「これ、どうやってそとに出すのかな？」

ロビーとライアンが、そのガラスのいれものをぺたぺたいじりながらいました。そう、ふたりのいう通り、そのいれものには中のものを取り出す、ふたとかあなみたいなものが、なんにもなかったのです（まあ、いざとなったら剣かなにかでたたいたらこわすことができるかもしれません、できればそんならんぼうなまねは、したくはありませぬから。それに中のたましいたちに、なにかまちがいでも起こつたらたいへんです。ガラスがささってけがをするとか）。ただひとつだけ、まどの前にあるつくえからのび

ているいっぼんのくだけだが、このガラスのいれものにつながっているゆいいつの道でした。このくだから、たましいをそとに出すことができるのでしょうか？

「うわっ！ み、見て！ こっちの、これ！」ふいに、ライアンがさげびました。ライアンがそういつてゆびさしたさきには、同じようにのびるくだのさきにガラスのいれものがあつて、その中にはもやもやとしたまつ黒いけむりのようなものが、ぎっしりとつまっていたのです。こ、これってまさか……？

「ひよつとして、これ、まちに飛んできた、あの影おぼけじゃない？」

そうなのです！ ライアンのいう通り、これこそがモーグのまちに飛んできて人々からたましいをうばい取り、この場所にはこんできた、その影のおぼけたちでした！

「つ、ついに立たな！」ベルグエルムとロビーは思わず腰の剣に手をかけて、身がまえてしまいました。しかし影たちは、ガラスのいれものの中でただゆらゆらとゆれているだけで、なんの反応も見せません。

じつはこの影たちは、このガラスのいれものの中にはいつているかぎり、まったく安全なものでした。この影たちはモーグにだれかがはいりこんだというれんらくを受けるときに、はじめてこのガラスのいれものの中から飛び出して、あの影のおぼけのすがたになって、まちへと飛び立っていくようにとめいれいされていたのです。ですからあんなにおそろしかつたこの影のおぼけたちも、今はただの、ゆらゆらゆれているだけの、

黒いけむりにすぎませんでした（とりあえずは、ほっとしました。みんなはいつまた、あの影のおぼけたちがおそいかかってくるものかと、ひやひやしておりましたから。

ちなみに、ひとつ説明をつけ加えますと、アルミラのめいれいはモーグにはいりこんだ「人」のたましいだけをうぼうというものでした。ですから馬などの生きものの場合には、モーグにはいりこんでもだいじょうぶだったのです。これは旅の者たちにとって、とてもこううんなことでした）。

これでこの影のおぼけたちのひみつは、みんなあきらかになつたわけです。けつきよくこの影たちもただ、アルミラにいいように使われていただけでしたね。そう考えると、ちよつとかわいそうな気もしてきます。あとでカルモトにたのんで、この影たちもみんな、もとのふつうの影にもどしてあげましょう（もとから悪い影なんて、どこにもないのです）。

「え……？　ねえ、ちよつと、これ！　これ見て！」ふいにライアンが、ロビーの服をひっぱりながらいいました（めざとく、よくいろんなものを見つけますね）。そしてそれを見たロビーも、ライアンと同じくさげんでしまったのです。

「ええーっ！　これって、まさか！」

「どうされました？」つくえをしらべていたベルグエルムも、あわててロビーとライアンのそばに近よりました。そしてベルグエルムもまた、かれらと同じ反応をかえしてし

まったのです。

「な、なんと！　これは……！」

その影のおばけたちのはいったガラスのいれものの横に、いつさつのノートがおかれてありました。それはアルミラの残した、けんきゆうノートでした。そしてそのひらかれていたページの上に、みんなはおどろきのものを見たのです。

「はぐくみの森の、あのかいぶつだ！」

ええっ！　なんですって！

そこにはたしかに、はぐくみの森の地下いせきの中でみんなにおそいかかった、あの夜のかいぶつのすがたがえがかれていました！　これはいったい？

しかしみんながおどろいたのは、その絵を見たからだけではありませんでした。その絵の下に書いてあった言葉。その言葉を読んで、みんなはこれほどまでにおどろいたのです。そこには、こう書いてありました。

「シャドーリッチ教本その二、『シャドーリッチをかいならそう』、二百二十三ページよ
りばっすい。」

「たましいを食べたシャドーリッチは放っておくとちえをつけて、この絵のようにどんどん大きくなってしまいます。うばったたましいはすぐにガラスのいれものの中にしまうようにして、リッチに食べられないようにしましょう。それから、リッチはぜつたいに逃がさないこと。自分の意志を持つてあばれまわる、こわいかいぶつになつてしまいます。」

「今までに逃げたリッチ ↓ 一ぴき。ゆくえ知れず。」

そう、これはまさしく、はぐくみの森の地下にすみついていた、あのおたまじやくしのようなかいぶつのことをさしていました！ あのかいぶつは、ほかでもありません。アルミラが作り出したこのシャドーリッチという名まえの影のおぼけが逃げ出して、森の人たちのたましいを食べて、大きく育つてしまったものだったのです！（まさかこんなところで、あのかいぶつのようなのを知ることになろうとは！ みんな夢にも思つていませんでした。それにしても、アルミラのやつめ！ かいぬしだったら、ペットはちゃんと、しつけてくれないと！ おかげでこつちは、えらい目にあつたんですから！）
こんなおそろしいかいぶつがこれ以上生まれてしまうことがないようにするために、この部屋にあるまがましいそうちは、残らずきのうていしにしてしまわなくては

なりません！ でもその前に、みんなのたましいを早くこのガラスのおりの中から、助け出してやらなくてはならないのです。ですがそのためには、いったいどうすればいいのでしょうか？

そのために、この人がここへやってきました。

それはもちろん、カルモトのことなのです。

「アルミラの、おきみやげか。」カルモトが、影のはいつたガラスのいれものと、まどの前に作りつけられたボタンだらけのつくえのことを、じゅんばんに見渡しながらいいました。「これが、こんなに時間がすぎて、人々をこまらせつづけていたとは……、じつに、うっかりなことだったな。」

カルモトはそういって、フログルたち、そして旅の者たちにむかって、すまなそうにまた頭を下げました。

「今こそふたたび、カルディンどのの力の見せどころじゃありませんか。」そんなカルモトに、カルルがびよこんとしせいをまっすぐに正して、いいました。クプルもイルクーもリングもそれにつづいて、それからかれらはそろって、カルモトに頭を下げたのです。

「さあ、お願いします！ カルディンどのの、ここいちばんのとっておきのわざで、このみなさんのたましいたちのことを、すくってさし上げてください！」

フログルたちの言葉に、ロビーたち旅の者たちもかれらのとなりで手をにぎりしめて、カルモトのとおっておきのわざを待ちました。なにせこれだけのふくぎつなボタンやらそうちやらが、つまっている部屋です。こんなものはけんじやであるカルモトでなかつたのなら、とてもあつかえそうにありません。これらのものをあやつって、みんなのたましいをぶじに助け出すためには、かなりたいへんなわざが必要になるだろうと思われました。

みんなは胸をどきどきさせて、カルモトがこれからなにをするのかをじつと見守っていました。しかしカルモトがつぎにいった言葉は、なんともいがないものだったのです。

「そこにある、きいろいボタン。それをおせばいいようだな。」

え？ ボタンをおすだけ？

みんながきよとーんとしてカルモトのゆびさしたところを見てみると……、まどの前に作られたそのつくえの上に、とうめいなカバーのついたひときわ大きなきいろいボタンがひとつあって、そのボタンの下には、はつきりとこんな言葉が書いてありました。

「たましいにかけたのろいをして、もとのからだの中にもどしてあげるときにおすボタン。」

ええーっ！ な、なんてわかりやすい！

どうやらこのボタンをおせば、ただそれだけで、みんなのたましいにかけられているのろいがとけて、たましいはもとのからだのもとへともどつていくようだったのです！
なんてかんたんな方法なのでしょう！ しかもそれをこんなにもわかりやすく、わざわざ書いておいてくれるなんて、アルミラはなんていいやつ……、じゃなかった、なんて、まがぬけているんでしょう！（やっぱりカルモトのいもうとだからでしょうか……？）
「すでにねんりきをこめて、このつくえをえるようにしておいたぞ。あとは、このボタンをおすだけだ。では、おすとするか……」

「ちよーっと、待ってー！」

カルモトがボタンに手をのばしたしゅんかん。ライアンが大きな声でそれをとめました！ な、なに？ どうしたの？ みんながびっくりしていると……。

「ぼくがおすー！」

やっぱりそんなことですか……。どうやらライアンにとっては、このまどの前に作られたつくえは、巨大ロボットのそうじゅう席みたいに見えたようですね。かれの頭の中ではまだずっと、ロボット軍団の大かつやくの場面がつづいていたみたいですね……。まあ、だれがおしても同じことらしいので、ここはライアンにゆずってあげましょう（じ

つはロビーもちよつと、おしたかったそうですが……。

つくえの前のいすにすわつたライアンは、もうわくわくしつぱなしでした。足をぱたぱた、うでをぐるぐる。それからようやくライアンは、「ふうつ。」と大きくこきゆうをととのえると、右手を大きく上にかかげて、きあいをこめてさげんだのです。

「いくぞつ！　こうそくされし、たましいたちよ！　今こそふたたび、みんなのもとへ！　たましいかいほうボタン、発動！」

ばちーん！

さあ、ついにたましいかいほうボタンがおされたのです！（こんなに長いきめぜりふをいいながらはでにおす必要は、ぜんぜんありませんでしたけど……）いったいこのあと、なにが起きるといふのでしょうか！（まあ、たましいがかいほうされるんですけどね。）

みんなが見守っていると、たましいのはいったそのガラスのいれものの中から、ぶしゅーという空気のぬけていくような音がなり出しました。そして……。

わいわいがやがや！　二百人ぶんほどのたましいたちが、いつせいに、思い思いの

言葉でおしやべりをはじめたのです！（たましいって、しゃべるんですね！ はじめて知りました！）「なんだなんだ？ なんだか明るいぞ。」とか、「うくん、ずいぶんと、よく寝たなあ。」とか、「せまいせまい。なんだここは？」とかいったぐあいです。でもそれからすぐに、それらのたましいたちはみんなおしやべりするのをやめて、つくえにのびるくだへとむかって、しゆるしゆるとすべりこんでいきました。そしてそのくだは、そのまま塔のそとへとびていたのです。

「やったー！」「わーい！」「やつほー！」

たましいたちはみんな口々によるこびの声を上げながら、空のむこうへと飛び去っていきました。かれらがむかったさきは、ただひとつ。モーグの、いえ、ロザムンディアのまちの、大聖堂の地下。自分のからだのある場所でした。ティエリーしさいさまのたましいも、ミリエムのたましいも、そしてフェリアルのだましいも、みんな自分のからだのもとへと帰っていったのです！（「やったー！」「わーい！」「やつほー！」思わずたましいそうさく隊のみんなも、たましいたちと同じ言葉でよろこんでしまいました。さしいよのせりふは旅の者たちで、あとのふたつはフログルたちの言葉でしたが。）

「これでみんな、もとにもどる。」カルモトが、まどのそとを飛んでいくたましいたち

のを見ながら、いいました。ですが、カルモトの顔は浮かないままです。

「しかし、そうでないものもある。」

カルモトのゆびさしたところには、ほかのたましいたちとはちがつて、ゆらゆらゆつくりと、その場からはなれようとしないたましいたちがいました。それらのたましいたちは、この場をなごりおしむかのようにしばらくうろうろとただよつたあと、やがて空の上の方へとむかつて、のぼっていったのです。

「かれらは、たましいを全部うばい取られてしまつた者たちだ。」カルモトは、のぼつていくそれらのたましいたちのことを、なんともふくぎつな思いで見つめていました。「かれらの帰る場所は、もうすでにない。かれらのからだは、この世界から消えてしまつたからだ。」

「そ、そんな……」

みんなはなんともやりきれない気持ちになつて、のぼつていくそれらのたましいたちのことを見つめていました。そしてやがてそれらのたましいたちは、雲の中へと消えていき、そのきいろいかがやきも、ひとつまたひとつと、消えていったのです。

「かれらのたましいは、これからまた、べつのいのちとして生まれ変わる。」カルモトが、しゅんと肩を落とす旅の者たちにむかつて、いいました。「たとえからだがほろびても、たましいはいえんに生きるのだ。かれらのたましいが、つぎのいのちとしてさら

にかがやくように、わたしはいのらずにはいられない。」

「きつと、そうなるよ！」ライアンが、空の上へと消えてゆくそれらのたましいたちにむかって、さげびました。「またいつか、会えるといいね！ それまで、げんきでねー！」

みんなは去ってゆくたましいたちのそのさいごのひとつが見えなくなるまで、ずっとその空を見つめつづけていました（ここで著者のわたしからひとつ、みなさんにお伝えしておきたいことがあります。これらの空にのぼっていったたましいの持ちぬしたちは、このあとしばらくの月日ののちに、ふたたび、もとの自分のままのいのちを取りもどすことができました。つまり、べつのいのちに生まれ変わったというわけではなく、もとの自分のままとして、ふたたび生きかえることができたということなのです！ ですがかれらのからだは、すでにこの世界から失われてしまっているわけでしたから、まったくもとの通りというわけにはいきませんでした。つまりかれらのたましいは、ブリキでできた魔法の人形のからだの中へと、うつされることになったのです！

さてさて、ことのしだいはどういうことか？ といいますと、こういうことなんです。ヴァナントの魔法学校の魔法のせんもんかたちは、アルミラのぬすみ出したそのきんだんのわざのことを、よく知っていました。このわざの一部として作り出されたのが、あの影のおぼけのシャドーリッチと、まちをおおっていたのろいのけつかいでしたが、これらのものによってたましいをみんなうばわれてしまった者は、ほんとうに死んでしま

うというわけではなかったそうなのです。このようにしてたましいを取られてしまった者は、たとえその肉体が失われたとしても、たましいはもとのきおくを持ちつづけていて、それを新しいからだにいれれば、ふたたびもとのいのちのつづきを送ることができそうでした！

ですがもはや、そのたましいを生きた肉体にいれることはできないそうでした。そのかわりに用意されたのが、このブリキでできた、魔法の人形だったのです。この人形にたましいをもどすのにはかなりたいへんなわざが必要になるとのことでしたが、それでもかれらのたましいたちは、ぶじに帰ってくることができました。かれらは変わってしまつた自分のからだのことは見て、とうぜんのことながらだいぶおどろきました。しだいにそのからだにもなれ、ヴァナントの魔法学校の人たちに心からかんしやすることになったのです。かれらはそのご、このアーケランドの地を旅立って、ヴァナントのあるガランタ大陸へとむかいました。そこでかれらは今、その新しい人生を、しあわせに送っているということです。

そしてもうひとつ。はぐくみの森のフォクシモンたちのことです。ヴァナントの人はフォクシモンたちもまた、アルミラのぎせいとなった者たちであるということをつきとめました。そしてたましいをすべてうばわれてしまったその八人のフォクシモンたちのことも、かれらはぶじにすくい出してくれたのです。

たましいを取りもどしたその八人のフォクシモンたちは、今でもはぐくみの森に住んでいます。旅人たちや子どもたちから大人気の、ブリキのきつねたちとして。

ちなみに、カルモトは影やのろいのけっかいによってかんぜんにうばわれてしまったたましいのことを、このようにブリキのからだにうつしてすくい出すことができるということを、知りませんでした。これはほんとうに、ヴァナントの魔法学校の中でもごく一部の者たちのみを知っている、ごくひのじょうほうでしたから。ですからカルモトは、空にのぼっていったたましいたちのことを見て、せめてつぎの人生でかがやいてくれるようにと、願ったのです。

「さて、これでもくてもくは、果たされたわけだ。」カルモトが、やれやれといった感じで見んなにいました。

「あとはこの部屋を、にどと使えないようにしてしまわなくてはな。みんな、ちよつと、下がっておれ。」

カルモトはそういつて、またなにか、ぶつぶつとつぶやきはじめます。そして……。

「えいやつ！」

ぼぼんっ！

ふたたび、カルモトのねんりきがさくれつ！ つくえにならんだたくさんのボタン

や、部屋の中にあつたガラスのいれもの。そしててんじように張りめぐらされていたく
だや鉄のはこといったものの、すべてが、大きなばくはつの音を上げてこわれてしま
いました！（同時に、ガラスのいれものの中にはいつていた影のおぼけたちも、みんなち
りぢりになつて消えてしまいました。これでもうやく、影たちののろいもとけて、とら
われの身から晴れて自由の身になれたわけです。もう魔女にかまるなよ！）

今やそれらのものはすべて、カルモトのいう通り、にどと使えることのないただのが
らくたになつてしまいました。四人のフログルたちは、もう手をたたいて大よろこびで
す！ これでもうやく、このブリキの塔も（こんどこそほんとうに）おしまいなのです
から！ でもモーグのまちに張られたのろいのけっかいはどうなるの？ と思われる
方もいるでしょうが、ご安心を。そのけっかいを生み出していたそうちも、カルモトが
いっしょにこわしてくれましたから！ これでもちのみんなも自由に、まちのそとに出
ることができるようです。そしてまちに影をよびよせていた、あのがいこつたち。のろい
のけっかいがなくなつたことで、かれらもまた、よこしまなる力を失つて、ただのふつ
うのがいこつたちにもどりました（あとで、ちゃんとしたお墓を作つてあげましょう）。

これでほんとうに、ばんばんざいでした。

モーグのまちはふたたび、もとのロザムンディアのまちにもどつたのです！

「さあ、帰るとしよう。帰りは、きたときよりもずいぶんと、らくになることだろう。」
カルモトが腰をぼんぼんとたたきながら、いいました。「フログルしよくん。塔の下まで、よろしくたのむ。」

「おまかせを！ さあ、みなさん、いきましよう！」

「え？ あ、は、はい。」

旅の者たち三人は、そういうフログルたちに背中をおされて、そのままぐいぐいと部屋のそとまでおし出されていきました。カルモトとフログルたちは、これからいい、なにをする気なのでしょう？

さて、ふたたびつうろのところまでもどつてきましたが、ここでみんなは、ひとつの重要なことを思い出したのです。

「あれ？ ちょっと待って。そういえばさ、下へおりる道は、とちゆうでみんな、こわしちやつたじゃない。どうやって、下までいくの？」

そうでした！ ライアンのいう通り、塔のまわりをぐるりとかこんでいた金あみのつうろは、ここへくるとちゆうのあのたいへんな戦いの中で、みんな落つこととしてしまつてましたっけ！ それではカルモトとフログルたちは、いったいどうやって、下までおりるつもりなのでしょう？

「まさか……、塔のそとからおりるつもりなんじゃ……」ロビーが顔をまっ青にして、ぶるぶるとふるえながらいいました。それもむりはありません。塔の下までは、金あみのつうろが残っているとちゅうの階からでも、まだ二百フィート以上はありましたから！（もちろんふつうだったら、ちゅうぶらりんの塔のそとがわをそんな高さから下においていこうだなんて、だれも思わないことでしょう。ですがロビーたちといっしょにいるのは、ぜんぜんふつうじゃない、かえるの種族のフログルたち。そしてなにをするのか？ わからない、カルモトなのです！）

「やだなあ、わたしたちフログルたちならともかく、みなさんにはむりでしょう？ そのくらい、わたしたちにも、よくわかっていますよ。安心してください。」カルルがそういって、けろけろと、いや、けらけらと笑いました。

「よ、よかった。ほっとしました。」ロビーが「ほうっ。」と息をついて、胸をなでおろしながらそっくりいいます。

「しかし……、では、いったい、どうやっておりるのですか？」ベルグエルムがまじめな顔で、カルモトにいいました。じつにもっともなしつもんです。しかしカルモトはまたしてもなんでもないといった顔をして、いたってれいせいには、こうこたえるばかりでした。

「道なら、きみたちの目の前にあるではないか。フログルしょくん、かれらをたのむ

ぞ。わたしは、ひとりでだいじょうぶだ。」

え？ 目の前の道って？

「さあ、早くおぶさって！」旅の者たちが考えるひまもなく、フログルたちがみんなのことをせかしました。

「え？ は、はい。」

どういうことだか？ わかりませんでした、ここはいわれた通りにするほかなさそうです。みんなはひとりずつ、フログルのさし出したその背中につかまりました（ベルグエルムはカルルに、ロビーはクプルに、ライアンはレングにつかまりました）。

「うわっ！」

フログルたちにつかまったとたん。かれらが急に、ぴよっこくん！ と大ジャンプしました！ みんなはもう、ひっしでその背中にしがみつきます！ そしてかれらがとびうつつたさきは……、塔のてんじょうから下がっている、あの兵士たちのことをつるしておくためのくさりでした！

「うわわ！」「ひええ！」「ひゃあ！」

め、目の前の道って、このことなの〜！ 旅の者たちは下までなん百フィートもある

この空中に、またしてもちゅうぶりじょうたいです！ みんなはフログルたちにしたがったことを、心の底からこうかいしました！ やっぱりかれらは、ぜんぜんわかっついていなかったのです！ もういや〜！（ちなみに、いきの道でもみんなはこのくさりにつかまって、それをぎゆるるん！ と動かして塔のてっぺんまでいくこともできましたが、カルモトとフログルたちはやつぱり、それをするのはやめておきました。まだこの塔の中にどんなしかけがあるのかもわかりませんでしたし、まずはじゅんばんに、塔の中をしらべていった方がいいと思っただけです（べつに、旅の者たちのことをちゅうぶりにしたらかわいそうだから、というわけではなかったのです……）。そして今やこの塔にすっぴかたをつけ終えてしまいましたので、かれらは心おきなく、このくさりを使つて下までおりていくことにしたというわけでした。

それと、ブリキの兵士たちとのたいへんな戦いのさなかでは、みんなはそれぞれたくさん兵士たちによって道をふさがれてしまっていましたので、とてもフログルたちの背中につかまって、それでくさりまでとびうつつて逃げる！ というようなよゆうもありませんでした。カルモトの投げた木のロープにつかまることだけで、せいっぱいだったのです）。

「いきますよー、そーれ！」

旅の者たちのひめいをよそに。フログルたちはかれらをおぶさったまま、そのくさり

をずぎずぎずぎー！ とすごいいきおいでいつきにおりていききました！（くさりをぎゆるん！ と動かすよりも、こっちの方がはやいからでした……）そのはやいこと、はやいこと！ カルモトが「帰り道はらくだ」といったのは、このことだったのです！（たしかに早くおりられますけど、そういう問題じゃありませんったらー！）

「ぎやあああ〜！」

旅の者たちはもう、なにがなんだか？ わからないまま、フログルたちの背中にむちゆうでしがみつきながら、泣きさけぶばかりでした。

「このしつそう感が、なんともいえませんよね！ ひやっほ〜！」旅の者たちのことをおんぶしていないイルクーが、じつに楽しそうに、はしやぎながらそういいました。

「楽しいな〜！ よし、ここは、これから、みんなのあそび場にしようー」（ライアンをおんぶしている）レングがそういつて、けるける、いや、けらけら笑いました。

「それはいいな！」（ベルグエルムをおんぶしている）カルと（ロビーをおんぶしている）クプルも、じつに楽しそうにそういいます。「よくし！ だれがいちばん早くおりられるか？ きようそうだ！」

「負けないぞ〜！」「それ！」

「ぎや〜！ やめてやめて〜！」

旅の者たちのさけびもむなしく、フログルたちはさらにいきおいをまして、くさり

すべりおりていきました（おんぶしているみんなのことなんて、すっかり忘れていたいでした……）。そしてものすごいいきおいで落ちていく、その中。旅の者たちは遠のきそうないしきの中で、みんなそろって、かたく、こうちかつたのです。

もうぜつたい、フログルの背中には乗らないぞ……！

ちようどそのころ……。

ここははるかな、東の地……。

どこまでも広がる草の海を見下ろす小高い丘の上に、今ひとりのうさぎの種族の少年が立っていました（このうさぎの種族はラビニンとよばれていました。足がはやく、頭の上ののびる二本の長い耳がとくちようです。いぜんわたしの話の中にも、うさぎの種族のおじいさんの学者が出てきたことがありましたよね。あのおじいさんも、ラビニンでした。

でもラビニンはみんなしんせつで、しんらいのできる人たちばかりですので、かんちがいしないてくださいね。あんなにうさんくさいラビニンは、たぶんあのおじいさんくらしいものだと思います……。空はおだやかに晴れております。少年は近くのはたけを手伝っていて、今あいた時間をりようして、この丘の上におそめのおひるごはんを食べにやってきましたところでした（はたけのさくもつは、やつぱりにんじんです。そしてか

れのごはんも、にんじんのポターージュに、にんじんのスコーン。それから、まるごとのにんじんスティックでした。ほんとうにラビニンは、にんじんには目がないのです。ここはながめもよくて、かれのお気にいりの場所でした。しかし今日、そこにはいつもとまったくちがう景色が広がっていたのです。

見下ろすその草の海の中に、ぶきみな黒い川のようなものが、いくすじもあらわれていました。しかしそれらは、川ではありませんでした。水の流れのようにうねうねと動いておりましたが、よく見ればそれらはすべて、武器やよろいに身をかためた兵士たちだったのです！

その兵士たちは、人ではありませんでした。黒や、はい色や、青に、みどり。さまざまなのはだの色をした、ありとあらゆるすがたをした、おそろしいかいぶつたちだったのです！ 小さな背たけの者から、巨人のような大きさの者まで、かれらはじつにさまざまでした。手には、長く三日月のようなかたちにまがった剣や、おそろしい見た目のやりなどを持ってあります。頭にはみんな、おそろいのまつ黒くすみかぬられたぶきみなかぶとをかぶっています。そしてそのかぶとのまん中には、おそろしい黒いりゅうのもんしょうがひとつ、えがかれていたのです。

そのもんしょうは、このアークランドに住む者ならば、だれでも知っているものでした。たとえ知りたくなかったとしても、どうしても知ってしまうことになるのです。な

ぜならそれは、あのおそろしい黒のくに、ワットのくにのものしうだったからでした！ これらのおそろしい兵士たちは、ワットのよびかけによつて集められた、その兵士たちだったのです。それはもちろん、アルファズレドのめいれいによるものでした。ということは、このおそろしい兵士たちがむかうさきは……？

そう、かれらがめざすのは、ただひとつの場所、ペーカーランドでした！ かれらは今、これからはじまるおそろしいそのさいごの戦いへとむかつて、まっすぐに、その歩みを急いでいるところだったのです！

うさぎの少年ユーリ・リアンルーは、おべんとうのつつみを落として、ぼうぜんと目の前の光景をながめていました。それからかれは、がくがくとふるえる足をおさえながら、はたけにいるみんなのところへとむかつてぴよんぴよん走つていったのです。

しばらくして、かいぶつの兵士たちがみんな通りすぎてしまうと。そこには美しかった草の海のかわりに、ふみ荒らされ、けがされた、むき出しの赤茶けた地面が広がっているばかりでした。

15、ベーカールンドへいっちょよくせん

その森は、げんそう的なきりにつまれていました。ここはこのアークランドからほど近い、深い深い森の中。ですがこの森がいつたどこにあるのか？ それは著者であるわたしにも、じつははつきりとはわからないのです。ですからここをおとずれることができた人は、ほんとうに運のいい人なのだといえることでしょう。この森は、まったくもって、いきたいと思っけていけるようなところではありませんでした。

でもこの森にいけなくてこまっけている、という人は、このアークランドには、たぶんひとりもないことかと思ひます。なにしろこの森のそんざいそのものを知っている者が、このアークランドにはほとんどいませんでしたから。しかしこの森は、たとえ知っている者がほとんどいかなかったとしても、このアークランドにとつて、ひじょうに重要な森でした。それもそのはず。なにしろここは、精霊王の住む森でしたから！

精霊王。そのよび名を知らない者は、このアークランドにはひとりもないことでしょう。どんなに小さな子だつて、精霊王のお話は知っていたのです。このアークランドで子どもがいちばんはじめにきかされるお話。それはきまつて、この精霊王のお話でした。

とつてもかしこく、どんなことでも知っていて、だれよりも強い。精霊王はそんな、伝説的なまでのそんざいでした。でもそれは、あくまでもお話の中でのこと。いくらこのアーケランドがふしぎのあふれるファンタジーな世界であつたとしても、じつさいに精霊王のすがたを見たことのある者などは、ただのひとりもいなかったのです（これは、とうぜんといえぱとうぜんのことでした。みなさんにもお伝えしておりますように、精霊というものは、ふだん目にするることなどはめつたにないのです。精霊でさえもそうだというのに、こんかいは精霊王なのですから、会うことなんてまずむり！ ということがよくわかりますでしょう？）。ですからその精霊王が住んでいる森なんて、だれも知らなくてとうぜんです。というよりも、じつさいに精霊王がいるなんてことをほんきで信じている者が、だれもないといった方がいいかもしれない（小さな子はべつですけれど）。精霊王というのは、このおとぎのくにアーケランドにおいてさえも、じつさいにいるのかどうかさえもわからない、お話の中だけにとうじようする、とてもしんぴ的なそんざいでした。

ここがどんな森なのか？ これがよくわかつていただけたかと思ひます。そう、ここはほんとうにとくべつな、ひみつのひみつの森。そんな森の中に、今みなさんは足をふみいれているのです。

今、いっぽんの大きな木のその影から、ひとりの男の人がふつとあらわれしました。いえ、男の人といいましたが、せいべつははつきりしません（女の人のようにも見えませんでしたから）。その人は美しくととのった顔立ちをしていて、からだはほそく、すらりとしていました。背だけは五フィート六くらいでしょうか？ みどりのきぬでおられた服を着ていて、かがやく銀色のベルトをしめております。その人が歩きたびに、長く美しいこがね色のかみが、風に乗ってさらさらと、ちゆうになびきました。

その人はなんとも、ふしぎな感じの人でした。うまく言葉でいうのはむずかしいのですが、そこにいるのに、そこにいないような、そんな、あわくはかない感じがするので。からだはぼんやりとした光につつまれ、今にもふつと消えてしまいそうでした。その人は地面につもった落ち葉の上を、音もなく、ふわふわとした足取りで歩いていきました。おどろいたことに、その人が乗っているのに落ち葉はまったく、しずみこんでいないのです！ かわりにその人が歩いたところには、まるで宝石のこなをちらしたかのような、さまざまな色をしたかがやく光のつぶが、ほわんふわりとまいちりました。

ふいにその人が、あるところどまりました。そこはこの森の中の、小さな小さなあき地でした。このあき地は、はしからはしまでが、せいぜい二十フィートほどしかありません。地面はふわふわとしたかがやくみどりのしばふにおおわれていて、そこには小さな白い花が、たくさんさいていました。そしてそのあき地をかこむように、まわりの

木々にはうすいみどりのきぬでおられたカーテンがかかっていて、森の木々のあいだをさわやかな風が通りぬけるたびに、さらさらと、ここちのよい音楽をかなでていたのです。

「とのぎみ。」そのあき地のはしに立ったその人が、口をひらきました（とのぎみというのは、自分がかえている相手のことをうやまつてよぶいい方です）。

「やみの者たちが、動き出しております。」

「いったい、だれにむかって話しかけているのでしょうか？　しかしそのこたえは、すぐにわかりました。そのあき地のすみに人の腰ほどまでの岩がひとつあって、その岩の影から、へんじがかえってきたのです。」

「人間のしわざだ。」

その声は高くもあり、ひくくもあり、男でも女でもあるかのような、ふしぎな声でした。まるでさまざまな人の言葉をいくつもあわせたような、なんともとらえどころのない声だったのです。

「アルファズレドです。」こがね色のかみの人が、それにこたえました。「あの者の、しいへのあこがれは大きい。それが、悪の力をよんでしまいました。まじゆつしアーザスが、かれに力を貸しています。」

「力のバランスが、くずれているな。」岩の影から、ふたたび声がしました。「これはほ

んらい、人間たちの問題。だがもはや、これはかれらだけの問題ではない。われらにできることは、ごく、かぎられている。あとは、かの者に、のぞみをつないでもらうほかあるまい。」

しばらくのちんもくのあと。こがね色のかみの人がいました。

「ロビーベルクですぬ？」

ロビーベルク？ いったいだれのことなのでしょう？ なんだかロビーに、名まえがにっています。

「西の地に、使いを出すとよい。かの者に力を貸すよう、精霊たちに伝えるのだ。」岩の影から、声がひびきました。「かの者は、わたしのおくったネットワークスを持っている。それを見れば、かの谷の者たちとて、力を貸すだろう。」

「しようちいたしました、とのぎみ。すぐに。」

こがね色のかみの人はそういつて、ふっと消えてしまいました（こんどはほんとうに消えてしまいました！）。そして岩の影からきこえていた声も、それつきり、ぱったりととだえてしまったのです。

「たっだいま〜！ みんな〜！ もどつたよ〜！」

ライアンの大声が、あたりいちめんにひびき渡りました。ここはどこかつて？ それほもちろん、かれらの帰りを心待ちにしている、みんながいるところ。そう、ここはモー

グでした！ いえ、もうモーグなんていうふきつな名まえは、なくしてしまいましたよ。
ロザムンディア。今こそこのまちは、むかしのその名まえでよぶのにふさわしいのです
！

あのあと（旅の者たちが「ぎゃあああく！」というひめいを上げながら、魔女の塔の
中をいつきにすべりおりていったあとのことです。

ちなみに……、そのときフログルたちはいきおいあまつて、塔の底につき重なつてい
たブリキの兵士たちのさんがいの中に、どっしやーん！ と落っこちてしまいました。
さいわい、さんがいがクツションになつてくれたおかげで、旅の者たちはけがをしない
ですみました……。フログルたちはそれを見て、舌をぺろつと出して、「あ、すいませ
ん。」とかるーくいっただけで……。一行はすぐさま、ロザムンディアに帰ること
にしましたが、その前にもうひとつ、たいへんな問題があつたということを忘れていま
した。それは……、そう、ケロケロポート！ かれらのいたブリキの塔は、おそろしい
底なしのぬまに、すっかりまわりをかこまれていたのです。帰るためにはどうしたつ
て、あのポートにもういちど、乗っていかないわけにはいきませんでした。

もうぜったいあのポートには乗らないぞ！ と心の中で強くさげんだみんなでした
が、こればかりはしかたがありませんでした。ですからかれらは、「ぬま地をぬけるそ
れまでのあいだけ」というぜったいのじょうけんのもとで、しぶしぶ、いやいや、泣

く泣く、ケロケロボートに乗りこんだのです。それでもぬま地をぬけてボートがとまるまでに、旅の者たちはごうけい十二回もジャンプするはめになってしまいました……（ほんとうは七回くらいでぬま地のそとまでたどりついていましたが、みんなが「とめてとめて！」ときげんでいるのに、ボートのうんでんしゆのネリルが、「え？ もう、とめるんですか？ まだ早いでしょ？」といって、それから五回くらいもジャンプさせてしまったのです……。やっぱりフログルたちって、どこかぬけているというか、人の話をきいていないというか……。そんなところがあるみたいですね。いいかげんなせいかくのカルモトと気がびったりあうのも、わかるような気がします……）。

ボートをおりてから、旅の者たちはよろよとした足取りで、フログルたちの家であるトーディアへとむかって歩いていきました（ちなみに、カルモトは「さきについて待ってるぞ。」といって、道あんないのカルルとクブルのふたりだけを残して、そのままボートでとんでいってしまいました。それにしてもなんでカルモトは、あのボートに乗っていてへいきなのでしょう？ ふしぎです。木だから？）。そしてようやくのこと、トーディアへとたどりつくと、みんなはそろって顔を見あわせて、かたいあくしゆをかわし、おたがいの気持ち強くたしかめあったのです。

「生きて帰れてよかった！ あのボートに乗るのは、ほんとうにこれつきりにしよう！」

それからみんなは急いで騎馬たちのじゅんびをととのえると、見送りのフログルたちにあつくおれいをいって、ここロザムンディアのまちへとむかつて出発したというわけでした。まちについてまずすぐに気がついたことは、まちをおおっていた、あのふきつな白いぶきみなきりが、すっかり晴れているということでした。じつはあのきりは、アルミラがまちにかけたのろいのけっかいのせいで、まちの中に生まれていたものだったのです（ですからやっばり、ただのきりではなかったのです。なんだかおぼけの顔のように見えたのも、やっばり見まちがいではありませんでしたね）。

そしてけっかいが消えた今、まちの中によどんでいたよごれた空気や、かびのような植物のほうしなども、きれいさっぱり、ほかのところへと飛んでいってしまっています（それでも、まちの中に生えているかびとか、あつくつもったほこりなどは、これからいっしょうけんめいそうじする必要があるかもしれませんけど）。今ではまちの中にも、おひさまの光が明るくふりそいでいました。じこくは親ぎつねのこくげん。午後の三時くらいです（ちようど、ライアンのおやつの間です。もつともライアンはどんな時間だつてかんけいなく、おやつを食べていました……。）。まちを出発してカルモトのことを見つけ、魔女の塔からたましいを取りかえしてここへ帰ってくるまで、わずか三時間半ほどしかたっていないません。出発の前にロビーがいった言葉の通り、みんなは「すぐ

に「帰ってきたのです！（ほんとうに、とつきゆうびんの早さでしたね！　すごい！）」それからもうひとつ、まちが大きく変わっているところがありました。そしてそれが、旅の者たちにとっても、まちの人たちにとっても、とても大きな意味を持つ、すばらしいへんかだったのです。それはかたくとぎされていたあの巨大なまちの南門、その門が今や大きく、ひらかれているというところでした！

それが意味していることは、ひとつでした。つまり、ついに自分のからだを取りもどすにいたったまちのみんなが、帰ってくる者たちのために、門をひらいて待っていてくれていたというわけなのです！（まちのみんなはあれから、この南門をとぎしていた皆さんの渡し木や、門の前の家具などを、いっしょようけんめい取りのぞいてくれました。そしてすぐに門をあけられるじょうたいにしておいて、旅の者たちのことをすぐたでしようね。おつかれさまでした！）」

「たっだいま〜！　みんな〜！　もどったよ〜！」ライアンがよびかけたのは、まさに、その門の前にいるまちの人たちにでした（みんなもう、まちのそとまで出てきていました。アルミラののろいのけっかいは、もう消えましたから！）。そう、かれらはみんなで二百人ほどの、「もと」ゆうれいさんたちだったのです！

「おかえりなさい！」

「われらが勇者たち！」

「待ってましたー！」

われんばかりの大かんせい！ 人々は両手を頭の上でぶんぶんふって、帰ってきた勇者たちのことをむかえました（さつそく、お酒のびんをかかっている人もいました）が……。ねんだいもののお酒が、まちのそうこに眠っていたみたいですね。その中からひとり、すごいはやさで飛び出してきたのは……。

「わあああ〜ん！ みんな〜！」

そう、それはわれらがたいせつな仲間のひとり、フェリアル・ムーブランドだったのです！（フェリアルくん、ひさしぶり！）もうフェリアルはなみだで顔をぐっしよりとぬらして、両手を広げて、みんなのところへとつつこんできてしまいました（おるすばん、たいへんだったね！ 北門のしゅうりもおつかれさま！）。

「隊長〜！ ロビーどの〜！ ライアン〜！ さみじがったよ〜！」フェリアルはそういつて、そのまま先頭のライアンの騎馬、メルにつっこんでいつて……、メルにひよいとかわされて、地面にべっちゃん！ ころがってしまいました。

「フェリーー！ ぶじにもどれたんだね！ よかった。」ライアンがメルからおりなが

ら、地面にころがっているフェリアルの上から声をかけます。

「ライアーン！ 会いたかったよー！」ふたたび両手を広げてつつこんでくるフェリアルのことを、ライアンが「わわっ！」とかわして、フェリアルはまたしても地面にべっちーん！ころがってしまいました（うーん、かわいそうなフェリアル……）。うつぶせにたおれたまま身動きひとつしないフェリアルの背中を、つんつんとつつつきながら、ライアンが申しわけなさそうにあやまりました。

「ごめんね、フェリー。だって、なみだと鼻水で、顔、べしやべしやだったんだもん……」

さあ、これでまた、四人の仲間たちがそろったのです！ ばんざーい！（フェリアルはハンカチで顔をふいて、ちり紙で鼻をちーん！とかんでから、ようやくみんなに受けいれてもらえましたが……）まちを出発してからまだ数時間ほどしかたっていないんですけど、なんだかずいぶん、時間がたつたように感じますよね！（ぶよぶよおぼけに追っかけられたり、木の兵士たちにつかまったり。ちゆうをとぶボートで船よいしたり、ブリキの兵士たちにかこまれたり。ちゆうづりになつたり、落つこちたり……。このみじかい時間の中でこれだけひどい目にあつたのですから、それもそのはずですよ！）まだペーカードへの道のりもなかばだというのに、われらが旅の者たちは、ほんと

うにいろんな目にあつてしまうものです。

それでも、みんなはそのつど力をあわせて、それらのこんなを乗りきることができました。それもみんな、力をあわせる仲間がいたからこそなのです。かれらの力のどれかひとつがかけても、みんなはここまで、ぶじでいられることはできなかったでしょう（もつともこんかいの冒険では、フェリアルはおるすばんすることになつてしまいました……）。

こんかいの、魔女の塔での大冒険。それは思いもよらない、いわばより道の冒険でした。ですがわれらが仲間たちのその冒険は、けつかとして、すばらしいけつまつを生むこととなつたのです。旅の者たちはフェリアルのことをすくい、まちの人たちのこともすくうことができました。そしてそれは同時に、もうひとつのあるすばらしいものを、生み出すことになつたのです。それはなんといいても、新しい、たくさんの、たのもしき仲間たちとの友じようでした！

まずは、かえるの種族であるフログルたち。今やみんなは、かれらと大きな友じようでむすばれることになりました。かれらはロザムンディアの人たちにとつて、ずつとこわいそんざいでした。ほかの種族の者たちとかかわりあいを持たないフログルたちのことを、まちの人たちは、魔女アルミラの手下なんじやないか？ とずつとごかいしていましたから。ですがこんかいのできごとで、そのごかいもすつかりとけたのです。フ

ログルたちは人づきあいこそなかったものの、明るくようきな種族で（それはみなさんもよくわかったことと思います）、ぜんぜん悪いれんちゆうなんかじやありませんでした（いくつかの点では、しょうしよう問題のある種族でしたが……）。

このときらしい、ロザムンディアの人たちとフログルたちは、おたがいに手を取りあつて、なんでも助けあうようになりました（まずはロザムンディアのまちの大そうじを、フログルたちみんなで手伝いました）。そしてロザムンディアのまちにも、トーディアをはじめとするフログルたちの家にも、おたがいの種族の者たちが自由にいききするようになったのです。

そして、ロザムンディアのまちの人々。やはりこれが、このさきの道のりをゆく旅の者たちにとって、ちよくせつ的にいちばんの助けとなりました。それはつまり……、ここからさきの道あんないをつとめてくれることになった、ミリエムのそんざいです！

ミリエムはみんなが出發する前にもいっておりました通り、この西の地を通つてペーカードまでなんどもいったことのある、ゆいいつのこの地での住人でした。なにが起きるかわからないここからの危険な道のりをゆく者たちにとって、これほど心強い助けとなるものも、なかつたことでしょう（ミリエムのなんだかたよりないせいかくのことについては、べつとして）。やっぱり道を知っている者がいるのといないのでは、旅をゆくはやさもだんちがいです。いっこくをあらそう旅の者たちにとって、この道あん

ないのミリエムのそんざいは、多大な危険と冒険のだいしよをはらつてさえも、なおあまるほどのものでした（わたしもミリエムが、こんなにも大きなそんざいになろうとは、さいしよはぜんぜん思つていませんでしたが……）。

そして、なんといても。

それらすべてのことがうまくはこぶように手助けをしてくれた、もうひとりのすばらしき仲間、カルモトのそんざいだつたのです（ここで……、ひとつみなさんにお伝えしておくことがあります。まちにもどる前、旅の者たちはカルモトにみずからの旅のもくてきのことや、このアーケランドにせまるやみのこと、ロビーがいい伝えのきゆうせいしゆであるということなどを、すっかり話すべきだと思ひました。伝説的なまでのけんじや。このアーケランドにとって、こんなにも、たのもしき力となつてくれるものもないことでしょう。それでみんなはトーディアを出るときに、ようやくのことで、それらのことをカルモトに話しましたが……、カルモトはとつぜん、目を大きく見ひらいて、こういつたのです。

「なんだと！　なぜ、それを早くいわない！」

いえ、話そうにも、いつもカルモトはさつきとさきにいつてしまうので、話すきかいてもなかつたんですけど……。とにかくカルモトはしばらく考えてから、旅の者たちのことを見て、こうつづけました。

「うゝむ……、これは、ゆゆしき問題だな。よし、心得た。わたしにできることは、かならずするとやくそくしよう。だが今は、わたしは、みずからのつとめを果たさねばならん。すまないが、わたしに、しばしの時間をくれたまえ。なに、悪いようにはせん。」

やはり、みずからの運命にしたがい、そのせきにんを果たそうとしている今のカルモトのことをひきとめることなどは、旅の者たちにも、だれにも、できることではありませんでした。ですがそれはなにも、カルモトがこのアークランドのいちだいじのことを、かるく見ているというわけでは、けつしてありませんでした。カルモトはカルモトにしかできない方法をもって、このアークランドのために、力をつくしてくるようなのです。どうやらかれには、なにか考えがあるみたいですが、それはいつたい……？

それはいつれ、あきらかになることでしよう。

カルモトはみんながまちへもどるときに、いつしよについてきてくれました。それは（旅の者たちの見送りのほかに）かれがロザムディアのまちの人たちに、いもうとのアルミラのかけためいわくのすべてに対して、きちんとおわびをしておかなければならないと思つたからでした（のちにカルモトは、アルミラの残したかいぶつによつて長いあいだくるしめられてきた、はぐくみの森のフォクシモンたちにも、きちんとおわびをしいつたのです。ですが今は、さきにアルミラほんにんとのかつちやくをつけてしまわ

なければなりませんので、カルモトはまずは急ぎ、ロザムンディアのまちの人たちに、おわびをしておきたいと思いました。そしてカルモトは、まちの人たちに、フログルたちのことやアルミラのことなどのすべてを、すっかり話してきかせたのです（アルミラがカルモトの、じつのいもうとだということもふくめて、すべてです。まちの人たちははじめはびつくりしてとまどっていました。カルモトのそのすなおな心にうたれて、それですっかり受けいれてくれました）。

「わたしには、これからすぐに、やらねばならないことがある。」カルモトが、まちの人たちにいいました。「アルミラは、みなに多くのくるしみを与えてきた。そのくるしみは、はかりしれない。わたしには、アルミラに対して、みずからのそのせきにんを果たすむがある。そのためにわたしは、しばし、ふるさとのガランタにもどる。そこでアルミラとの、さいごのけつちやくをつけるつもりだ。」

カルモトは、遠く空のむこうを見つめてつづけました。

「わたしはアルミラの、魔女としてのすべての力をうばう。そして、今までのつみの、そのすべてのつぐないをさせる。それでもたらないとは思いますが、どうか、それでゆるしてはもらえまいか。」

カルモトは頭を地面すれすれまで下げて、まちの人たちに心からおわびをしました。ですがまちの人たちは、そんなカルモトに対して、ちつとも怒ってなんかいなかったの

です。

「もう、いいんです。わたしたちのことなら。」まちの人たちはそういつて、おたがいの顔を見あわせて、気持ちをたしかめあいました。「こうしてふたたび、もとのからだに、生きてもどれたんですもの。それもみんな、旅のみなさんと、そして、あなたのおかげなんです。あなたのその心が、わたしたちのことをすくってくれたんです。あなたが頭を下げることで、ぜんぜんありませんよ。」

そのとき、みんなの中からひとりの女の人が進み出ました。それはロザムンディア大聖堂の、ティエリーしさいさまだつたのです。

「けんじやさま。」しさいさまがいました（けんじやさまとは、もちろんカルモトのことです。カルモトがいい伝えのけんじやうちのひとりであるということは、すでに旅の者たちが、まちの人たちにも伝えておりましたので）。

「われらは、もう、だれもうらんでもありません。ふこうにしていのちをたれた者たちも、同じ気持ちでありますよ。」

ティエリーしさいさまは静かに目をとじて、いのりをささげてからつづけました。

「たしかに、アルミラのしたことは、ゆるされるようなことではありません。ですが、それでも、つみをつぐない、正しい道にもどることは、だれにでも与えられている、けり。神のもので、人はすべて、びょうどうなのです。」

カルモトは、しさいさまの言葉に深く心をうたれました。あふれるなみだをおさえることも、もはやできませんでした。カルモトは深く深く頭を下げ、ただただティエリーしさいさまにかんじやし、そして、まちの人たちにかんじやしたのです。

「かのじよをすくえるのは、あなたしかいません。それは、あなたのしめいなのです。」
ティエリーしさいさまがカルモトに手をかざして、おだやかにいいました。「おいきなさい、けんじやさま。そしてまた、この土地のふつこうに、力を貸してくださいませぬ？」

カルモトは頭を上げて、しさいさまにちかいました。

「おれいのしようもありません。わたしは、わたしの力の持てるかぎりをもって、あなたたちにそのごおんをおかえしする。わたしはかならず、もどつてきます。」

こうしてカルモトはひとり、かれのふるさととのガランタへとむかって、旅立つたのです。西の海に、みずからの魔法で作りに出した、小さな木の船を浮かべて……（ちなみに、この木の船にはたくさん木のスクリユーがついていて、そのためこの船は、とんでもなくはやく進むことができましたのです。それはまるで、みなさんの世界のモーターボートなみのスピードでした！「は、はやく……」旅の者たちは思わず、そうもらしてしまつたものです。のんびりできないせいかくのカルモトには、まさにぴつたりの船ですよ

!

ところで。このスクリューのついたボートをアルミラの塔のあるあのしつちたいで使っていたとしても、やはりすいへいに進む乗りものである以上、どろどろのぬかるみにつつこんで、はまってしまつて、さきへ進むことはできなかつたでしょう。あのぬかるみを越えていくことができる乗りものは、まうえにびよこん！ とジャンプすることのできる、フログルのケロボトくらのものだったのです。まあ、空を飛んでいける乗りものでもあれば、べつですけど。

旅立つ前。カルモトはさいごに、旅の者たちとあついあくしゆをかわしあい、さいかいをちかいあつてくれました。

「きみたちには、じつに世話になった。わたしはけつして、きみたちのことを忘れないだろう。ベルグエルムくん、ライアンくん、ロビーくん。なんというみじかい名まえだ。忘れようにも忘れられんぞ。そしてきみは、フェリアルくんだったな。いい仲間を持つて、しあわせだぞ、きみは。わたしはかならず、もどつてくる。」

「いっっちゃつたね、カルモトさん。」ライアンが、両手を頭のうしろにくみながら、となり立っているロビーにいました。ロビーはカルモトの去つていつた西の海のことを見つめながら、小さく「うん。」とうなずきます。

「それ、そんなにすごいものなのかな？」ライアンが、ロビーのにぎっているそのネックレスのこゝを見ながら、つづけました。その青い石のついたネックレスは、ロビーの首に、ずつとかかっていたものだつたのです（これはかなしみの森を出発するとき、ロビーが自分のにもつといっしょに持ってきたものでした。そんなの持ってたつけ？という方は、第二章のはじまり、ロビーが自分のほらあなから去るときの場面をかくにんしてみてください。ロビーが自分で、このネックレスのことをしゃべっています。ほんのちよつとだけですけど。

ちなみに、ロビーはペンダントとよんでいましたが、まあ、ペンダントとネックレスは、にたようなものですから。

じつはカルモトが去っていくとき、カルモトはとつぜん、ロビーのそのネックレス（ペンダント）のこゝを見て、こんなことをいいました。

「そのネックレスからは、とくべつな力を感じるな。ここにきて、その力が急にまじりました。ロビーくん、そのネックレスは、だいじにしないさい。手放してはならん。きつと、きみを助けてくれるはずだ。」

ロビーは首から下げたネックレスの石を手のひらに乗せて、その重さをたしかめました。きらきらとかがやく青い石が、かたむきはじめたおひさまの光をあびて、深い色あいをかなでておりました。

「これはずっと、ぼくの首にかかっていたんだ。」ロビーがその色を見つめながら、いきました。「かなしみの森にきたときから、もうぼくは、これを持つていた。だれがくれたものなのか？ わからないけど、ぼくの生い立ちにかんけいがあるものだと思う。いつか、このネットワークのことを知っている人に、出会うかもしれない。ぼくの家族に会える、きつかけになるかも。だからぼくは、これはずっと、はだみはなさず持つていたんだ。」

「そうだったんだ。」ライアンが、しんけんな表じようをして素晴らしいです。「じゃあ、とつてもだいいじなものなんだね。」

ロビーは「うん。」とうなずいて、そのネットワークのことをにぎりしめました。

「このネットワークにどんな力があるのかなんて、ぼくにはわからない。でも、そんな力にかんけいなく、これは、ぼくにとつて、すごくだいいじなものなんだ。」

ロビーはそういつて、またその青いネットワークのことを、首からきちんと下げました。「いいなあ、ロビーは。」ライアンが、またもとのあつけらかんとした表じようにもどつて、いきました。

「ぼくのなんて、これ、見てよ。」そういつてライアンは、自分のかばんのポケットの口をあけて、その中をロビーに見せます。そこに、はいつていたのは……、そう、メリアン王がライアンに（むりやりに）持たせた、たくさんのお守りたちでした！（そうい

えば、そんなのありましたね！ すっかり忘れてました。」

「ぜんぜん、やくに立たないものばかり。ロビーがうらやましいな。」

ロビーはしばらく、きよとーんとして、ライアンのかばんの中を見つめていました。それからロビーは思わず、「ふふっ。」と笑ってしまったのです。

ロビーは顔を上げて、ライアンの顔を見ました。ライアンはにこにこ、笑っていました。

そしてふたりは、「ぶーっ！」と吹き出して、「あははは！」と大きな声で笑いあいしました。

こうして、ロザムンディアのまちにへいわがおとずれました。めでたしめでたし……、つて、これでこの物語はおしまじやありません！ ロビーたちの旅は、まだまだこれからなのですから！

なにが待ちかまえているのか？ ぜんぜんわからなかった、このひみつの西の道。その西の道のいちばんの心配ごとだった西の魔女のうわさは、これですっかり、かたづいたわけです（あとは西の大陸の地で、カルモトにさいごのけつちやくをつけてもらえばかりでした）。ですけどベーカーランドまでの道のりは、まだまだこれから。ここからの道のりは、やっぱりなにが起きるか？ わからない、危険な道のことに変わ

りはないのです。

「ペーカードへいくのには、この、よろこび平原を通っていくのがいいと思いますよ。ここなら街道も通っているし、危険もすくないと思いますけど。」

そうていあんしたのは、もとゆうれいであり、そして新たな旅の道あんないやくとして加わってくれることになった、ミリエム・オーストでした（ミリエムさんも、おひさしぶり！）。ここはまちの南門の、その内がわ。旅の者たちは出発にあたり、これからの道のりのことについて、ミリエムをふくむまちの人たちと、そのさいこの作戦かいぎをひらいているところだったのです。

「いや、それではずいぶんと、遠まわりになる。山にそって進み、この谷を越えていった方がいいのではないか？」

地面においたつくえの上に広げられた地図を見ながら、ベルグエルムがミリエムにいました。ベルグエルムのいう通り、ペーカードへゆくのには、そっちの道の方がずっと近かったのです。ミリエムのいったよろこび平原というのは、山にそって、とちゆうで大きく海の方にまがっていました。ですからそこを通っていくのは、（ベルグエルムのしめした谷のさきにある）ペーカードにいくためには、ずいぶんと遠まわりになってしまうのです。しかしミリエムがその道をすすめたのには、大きなりゆうがありました。

ベルグエルムの言葉に、まちの人たちはそろっておたがいの顔を見あわせました。ミリエムもやっぱり、重い表じょうを浮かべたままです。

「たしかに、そこを通つていけるのなら、ペーカーランドまでいつちよくせんにいけるんですが、でも……」ミリエムがいました。

「でも？」ライアンが口をはさんでたずねます。

「はい。その谷には、おそろしい精霊たちが住んでいるというわさなんですよ。谷に、はいったがさいご。ふたたびもどつてきた者は、ひとりもないということですよ。」
そういつてぶるる！ とぶるえるミリエムに、ライアンがいつものあつけらかなとした顔をして、いいました。

「なーんだ、精霊の谷なんだ。それなら、そんなこわがることなんてないじゃない。みんな、精霊たちのことをよく知らないから、おっかながつてるだけなんだよ。」

ライアンのいう通り、知らないから、こわがったり、ごかいしたり。そういうことはよくあることなんです。じつさいフログルたちのことについても、まちの人たちはかれらのことについてぜんぜん知りませんでしたから、あんなにこわがっていましたよね。でも……、こんかいばかりは、そういうわけでもないようでした。それはいつたい？

「ただの精霊なら、わたしたちも、こんなにこわがったりはしませんよ。その谷は、やみの精霊たちの住む谷なんです！」

「やみの精霊だつてー」ミリエムの言葉に、ウルファの騎士たち、ベルグエルムとフェリアルの方たりも、そろつてさげびました。そう、その谷には、ひやくせんれんまの騎士たちであるかれらでさえ、おそれさせてしまうような、やみの精霊という者たちが住んでいるというのです。

「やみの精霊つて、なんですか？ そんなにおそろしいの？」やみの精霊たちのことをぜんぜん知らなかつたロビーが、きよとんとした顔をして、みんなにたずねました。ですが、ロビーがやみの精霊たちのことを知らなかつたのも、まったくむりはなかつたのです。

みなさんもすでにごぞんじのように、精霊たちにはいくつかのしゅるいがあります。かなしみの森の小川では、水の精霊たちに出会いましたよね。そしてすがたは見えませんでした。ライアンの使うしぜんの力をかりるわざ。あのわざを使うときにも、かならず、水や、風や、ほのおといった力にかんけいする精霊たちが、その場にいたのです（そのすがたはわざを使うライアンにさえ見えませんでした。たしかにいます）。

精霊のしゅるいについては、シープロンドのタドウーリ連山のことをしようかいしたときに、わたしがすこしだけ説明したことがあります。その中でひとことだけふれたのが、やみの精霊です（ちなみに、第六章の頭のところですが）。このやみの精霊のことについては、このアーランドでは、話しをすることだけでもよくないことだといわ

れていました。ですからそのそんざいはみんな知っているものの、やみの精霊のことをくわしくしらべたり、本に書いたりするような者は、このアークランドにはぜんぜんいなかったのです。もちろんかなしみの森のとしよかんにも、やみの精霊について書かれた本などは、いっさつもありませんでした。ですからロビーも、やみの精霊たちのことを、ぜんぜん知らなかったというわけなのです（ライアンもやみの精霊のことについては、ロビーにべらべら、しゃべったりはしていませんでしたから）。

「やみの精霊は、ただの精霊とはちがうのです。」ベルグエルムが、ロビーにいいました。「かれらがしいするのは、文字通り、やみの力。やみの精霊とは、この世界に悪の力をもたらず、おそろしい精霊たちなのです。」

「そ、そうなんですか……」ベルグエルムにこわい顔でいわれて、ロビーは思わずぶるっ！ と背中をふるわせてしまいました。

「しかし、かれらがいなければ、この世界もなり立たないといわれております。ぜんなるものに力を与えるためには、悪の力もまた、必要なのだと。」ベルグエルムがつづけます。

「でも、われらが、たちうちできる相手ではありません。」フェアリアルもロビーと同じく、ぶるる！ とからだをふるわせて、いいました。「剣も魔法も、やみの精霊たちには通じない。かといって、話してわかる相手でもないでしょうし……」（かなしみの森の精

霊たちのような、きよらかなる精霊たちとは、こんどはわけがちがうのです。」

「うーん……」

さて、どうしたものか？ ベルグエルムとフェリアルふたりは、そろって首をひねって考えこんでしまいました。ですがそんなふたりの騎士たちに対して、われらがきゆうせいしゆであるロビーは、自信を持って、こうこたえるばかりだったのです。

「だいじょうぶ。ぼくたちには、心強い仲間がいます。精霊のことなら、ライアンにたのむのがいちばんですよね！」ロビーはにこつと笑って、ライアンの方をむきました。「ねっ？ ライアンなら、やみの精霊だって、だいじょうぶだよね？」

「えっ？」ライアンは思わず、言葉をつまらせてしまいます。「そ、そうね。まかせてよ。はは、は。」

ライアンはいつものように強がっていいましたが、じつは心の中では、ええーっ！とさけんできてしまいました。やみの精霊というのは、そんな「精霊のことならなんでもまかせて！」といいそうなライアンでさえ、しりごみしてしまうほどの、おそろしいそんざいであつたのです（じっさいライアンほんにんも、やみの精霊には会つたことがあります）ありませんでした。シープロンドのルエル・フェルマートしきようさまにも、「やみの精霊とは、ぜったいにかかわつてはいけませんぞ。」とかたくいわれていたのです。そのやみの精霊が、このさきの地にいるといいました。さあ、ライアン、ピンチ！。

「ここから、よろこび平原を通って、ペーカーランドまでいくのに、どのくらいの時間がかかる？」ベルグエルムがミリエムにたずねました。これがいちばん、だいじなこともんでした。

「そうですねえ……、馬でいくなら、五日もあれば、ペーカーランドまでいけるんじゃないですか？ もちろん、なににごともなければですが。」

「五日だって！」ベルグエルムもフェリアルも、思わずさげんでしまいました。「われらは、南の地からこの北の地まで、二日と半分でやってきた。帰り道に、とても、そんな時間をかけてなどはいられない。」

ミリエムのいうことには、よろこび平原をぬけたあと、ペーカーランドへとむかう道のりには、いりくんだ山道やまわり道が、とても多いのだということでした。ですから、すいすい進むことのできた南の街道にくらべて、ペーカーランドまでたどりつくのには、ばいの時間がかかってしまうとのことだったのです。もともとそれは、ミリエムのいった通り、安全だというよろこび平原を通ってまわり道をしていった場合でのこと。今すぐにもペーカーランドへ、きゆうせいしゆであるロビーを送りとどけなければならぬ旅の者たちにとって、その道をゆくことは、とてもむりなことでした。このおくれはこのアーケランドにとって、かくじつにいのち取りとなってしまうことでしょう。

ベルグエルム、フェリアル、ロビーの三人は、ここでそろって、あるひとりの人物の

ことを見やりました。その人物とは……？　そう、ライアンです！

「こうなれば、道はひとつだ。やみの精霊の地をぬけることに、かけよう。」ベルグエ
ルムとフェリアルが、しんけんな顔をして、ライアンの顔を見ながらいいました。

「ライアンがいれば、こわいものなしですよね！」まだじょうきようがよくわかってい
ないロビーが、ライアンの肩に手をおいて、にこつと笑っていました（うくん、知ら
ないというのは、ときにおそろしいものです……）。

ライアンは心の中でまた、ええーっ！　というひめいを上げていましたが、もうこう
なったら、やるしかありません。ライアンはひきつった笑顔でロビーの笑顔にこたえる
と、それからなかばやけになって、両手を空につき上げて、さげびました。

「もう、なんでもこゝい！　大精霊使い、ライアン・スタツカートさまの力を、見せ
てやる〜！」

こうして、みんなの旅はふたたびはじまったのです（ちなみに、ロビーもやみの精霊
のこわさをあとであらためてよくきかされて、「ど、どうしょ……、ぼく、ライアンに、
むりなこといっちょやったかな……」とはんせいしましたが、でももう、道はきまつちゃ
いましたから）。ここからの旅は、ペーカードランドへとむかう、そのさいこの道のりです
た。ここから切り分け山脈の西がわにそって、いちにちずつと南までくだり、そして話

に出たやみの精霊の谷を越えれば、そのさきにすぐ、めざすベーカールンドの地があるのです。うまくいけばそこまで、二日とかからずにいける道のりでした。ですがほんとうに、そんなふうにうまくいくのでしょうか……？（ここまでの道のりでも、ずいぶんと、よそうがいのことばかり起きちゃいましたからね。）

みんなはきたいと不安を胸に、出発しました。馬に乗って、切り分け山脈のふもとの道を、いちろ、南へ。

と、その前に……、ひとつ、忘れていたことがありましたね。ヒントは、ティエリーしさいさま。それに、ライアンです。そのこたえは……？ そう、たましいがもどつたら頭をなでさせてあげるといふ、ひみつのやくそく。あのやくそくは、どうなつたのでしょうか？ じつはライアンはのちのちまで、ずっと教えてくれませんでした。かれはこの出発の前に、ティエリーしさいさまとのそのやくそくを、しっかりと守つたのだそうでした。ですけどそれは、さいしよのやくそくよりも、ずいぶんとちがったものになつてしまったようで……、ロビーにもあまりくわしくは、話していませんでした。そのロビーにきいた話が、こうでした。

「あの……、みんなが出發する前に、ライアンが『トイレにいつてくるから待ってて』っていつて、まちの方へむかつたんです。それから十分くらいしてもどつてきたんですけれど、もう、ふらふらになつて、かみの毛はぐしやぐしやだし、服もぼろぼろだったし

……。どうしたの？ ってきいたんですけど、かれは『トイレにおぼけが出て……。』としかいいませんでした。」

ライアンの身になにが起こったのか？ わたしはこの物語のげんこうをすつかりまじめとめ上げたあとで、ようやくそのときのことを、ライアンほんにんからきくことができただのです（そのためにわたしが、どれほどたくさんのお菓子を用意したことか！）。ですけどライアンのめいよのためにも、ここでできた話は、ほかのみんなにはだまつていてくださいね。あんまりみんなに話が広まつてしまうと、わたしがライアンに、どんな目にあわされるか？ わかりませんから……。ほんとうはライアンからも、「しゃべったらどうなるか？ わかつてるよね？」とねんをおされていたのです。わたしは今ほんとうに、自分のいのちをかけてこの文章を書いていきます）。

じつはティエリーしさいさまは、ライアンがかわいかったのと、もとのからだにもどれたそのうれしきで、ずいぶんとはしゃいでしまったようで……。ライアンの頭をなでたあと、がまんができなくなつて、「きゃー！ かわいいー！」と力いっぱい、ライアンのことをだきしめてしまったそうでした。それだけならまだよかつたのですが、よそうがいだったのは、ティエリーしさいさまの、だきしめるその力の強かつたこと！ ライアンはたまらず、「ぎゃああくー！」とひめいを上げましたが、しさいさまはもうかんぜんにかわいいもの（ライアン）にむちゆうになつてしまつていて、声もとどきませんでし

た。それでライアンは、なすすべもなく、ほおずりされたり、ほつぺにちゅーまでされて、ぼろぼろになって帰ってきたというわけだったのです……。うくん、さいんななライアン。ふだんおしとやかな女の人ほど、変わればこわいものですね……。

女の人（しかも小さいさま）に力でまったくかなわなかったライアンは、男として、かなりシヨックだったようで……。それでみんなには、このときの話を、あまりしがりませんでした。そしてこのときくらいライアンは、「かわいすぎるのも、考えものかも……。」と、ちよつと思うようになったということです。

さて、話がずいぶんと、それてしまいました……。とにかく出発なわけです！

ベーカールランドへとむかうここからの旅は、思いもかけず大人数となりました。まずはお伝えしておりますように、ロザムンディアをだいひょうして、道あんないのミリエムが加わっていたのです。そしてフログルをだいひょうして、カルルとクプルがもういちど、みんなのおともをしてくれることになりました（ほかのフログルたちもみんな、「わたしもわたしも！」といきたがりましたが、さすがにそれでは、ひみつの旅というわけにはいかなくなってしまいますので……）。

ところで。ここでもちよつと、まじめな話をつけ加えておきます。フログルたちもまた、カルモトと同じように、このアーケランドにせまるやみのことについては、なにも

知ってはいませんでした。かれらはロザムンディアのまちの人たちと同じように、ずっと、そととのつながりを持ってはいなかったからです。旅の者たちはカルモトに伝えたとように、フログルたちにも、それらのことを伝えました。そのけっかとして、かれらはこのアーケランドのためになにかできることがないかと考えて、こんかいの旅の、そのおともをしてくれることになったのです。

さらに、フログルたちははじめ、かれらの持つおよそ四十人の兵士たちをみんな集めて、「わたしたちも、いくさの場におもむきます！」といっけてくれましたが、はげしいくさの場にかれらをつれていくようなことは、とてもできるようなことではありませんでした。かれらはたしかに、うんどうのうりよくにすぐれた、ゆうしゆうなる兵士たちです。しかしいくさの場で戦うためには、それに対しての、きちんとしたくんれんが必要とされました。ただ強いというだけでは、いくさの場では、じゆうぶんな力をはつきできなかつたのです。いくさの場でたいせつなのは、とうそつ力と、そして、ほんだん力。しきかんのめいれいをきちんと受けとめ、それにふさわしい隊れつをくみ、てきかな行動が取れるか？ という力が、もつともとめられるのです。そのためのくんれんを受けていないかれらをつれていけば、かれらをいたずらに、きずつけてしまうことにもなりかねません。そんなことは旅の者たちにとつても、とてもさせるわけにはいきませんでした。

そのかわり。フログルたちにはこれから、この西の地と北のはぐくみの森にいたるまでの土地のけいごを、受け持つてもらうことになったのです。これはひじょうにたいせつなしごとでした。この西の地をふたたび、旅人たちのいきかうもとの安全な土地にもどすことができるかどうかは、ひとえに、かれらフログルたちの、これからのかつやくにかかっていたのです。でもきつと、かれらならやりぬくことでしよう。

これで、旅をゆく者は七人です。ですがひみの旅にはそれだけでも多いくらいでしたのに、このうえさらに、かれらとともにゆく者たちがいきました。それは……、カルモトの木の兵士たちと、木の音楽隊の者たち！　じつはカルモトはかれらのことをすっかり忘れて、まちのそとにかれらをおきっぱなしにしたまま、旅立っていつてしまったのです！（それにしてもカルモトは、かれらのことをよく忘れますね……）

「ちよつとー！　これ、どうすんのさー！」思わぬことで木の者たちのことをおしつけられたライアンが、遠く海のむこうにさげびましたが、もちろんその声がカルモトにとどくはずありません……。みんなはしばらく話しあつたうえ、この木の者たちはカルモトの家の近くまで送っていつてやるのが、いちばんよいというけつろんを出しました（ちよつど道のとちゆうでしたし、そこからなら、自分で家までもどれるでしょうから）。木の兵士たちについては、剣のうでも立つ強い者たちです。ようじんぼうとしても、心強い味方になってくれることでしよう。

でも問題がひとつ。かれらは全部で、十二人もいたのです！（そのうち木の音楽隊が、半分の六人でした。もつとも、かれらのことを人と数えていいものかどうかは、きもんでしたけど。でももう、かれらは仲間なのですから、人数に数えてもいいですよね。）

こんなわけで、もう「これのどこがひみつの旅なんだ？」といたいたいくらいの人数で、旅の者たちは出発しました。その数、全部で十九人！（これじやまるで、山のぼりの遠足にむかう、小学校の子どもたちみたいですね……。さしずめベルグエルムが、みんなをひきいる先生といったところでしようか？）

ところで、ロビーたち旅の者たちは、みんなそれぞれの騎馬たちに乗っているわけですし、木の兵士たちと音楽隊も、それぞれの木の馬たちに乗っていたのです。ですからもう、馬の背中はいっぱいでした。ではカルルとクプル、それにミリエム、の三人は、歩いていくのでしょうか？

いえいえ、その心配はありません。フログルたちはそれぞれ、トーディアからロザムンディアにくるときに、ビポナというへんてこな生きものに乗ってきたのです。ビポナはきいろいろからだにみどり色の羽を持った、かぶと虫にそっくりな生きもので、フログルたちはこの生きものをかいならして、馬のかわりに、その背に乗っているというわけでした（木のみつをバケツいっぱいのためにためて、それをがけの上においておくと、すぐに一ダース近いビポナたちが集まってくるということですよ。ビポナはたいへんにおとな

しいせいかくでしたので、敵意さえ見せなければ、ものすごくかんたんにつかまえられるのだということでした。つき出た大きなつのに、たづなをつけて乗るわけですが、おどろいたのは、その足のはやいこと！ 六本の足で馬よりもはやく、大地をかけぬけていくのです！ ですからピポナに乗れるのは、乗りなれている（そしてうんどうしんけいのすぐれている）、フログルたちだけでした。つまりこういったわけで、ミリエムはクブルの背中に「ひええ〜！」としがみつきながら、この旅を進んでいくはめになったのです……（う〜ん、気のどくなミリエム。せつかく、もとのからだにもどれたばかりだというのに……）。

そんなおかしな一行の旅は、大人数にもかかわらず、思いのほかじゅんちように、なにごともなく進みました（それとも大人数のおかげでしょうか？）。しつちたいの広がる土地をぬけ、切り分け山脈のふもとの道を、山にそって南へ。みんなはあたりや空の上はまだ、じゅうぶんに気をくばりながら進んでいきましたが、ワットの黒騎士たちのすがたはおろか、けものいっぴき、かれらの道をはばむものはあらわれませんでした（もつとも、野生のけものいっぴきくらいでは、この大人数のかれの道をはばむことなんて、むりでしょうけど。山のようにでつかいけものがいっぴき、とかいうのであれば、話はべつですが）。

でも、とちゅうひとつだけ。クブルが「あつ！ フワフワだ！」といって、ピポナの

背からびよこん！ ととびおりて、そのまま原っぱの中にとびこんでいってしまったのです（残されたミリエムが「ぎゃあー！」とさげんだのはいうまでもありません）。「しようがないな。」といってつれもどしにいったカルルも、もどつてきません。しばらくしてふたりが（けろつとした顔をして）もどつてきましたが、ふたりとも口いっばいにフワフワをほおぼつていて、肩から下げたかばんの中にも、フワフワがぎつしりはいっていません。

「フワフワの、たいぐんでしたよ！ むしゃむしゃ。みなさんのぶんも、いっばいつかまえてきましたから、どうぞ！」

ど、どうぞといわれても……。みんなは手をかざして、「ご、ごめん。今、おなかいっばいだから……。」といてごまかしました（やっぱりこのふたりは、つれてこない方がよかつたかも……）。

それからみんなは、ぶじにカルモトの家へとつづくその道の前までたどりついて、ここで木の兵士たちと音楽隊に、おわかれをしたのです。木の者たちはきりつ正しくこうしんしていって、道のとちゆうにこちらをむいて、きれいに、びしっ！ とせいれつしました。それからかれらはくるとむきを変えて、ふたたびカルモトの家のある木の塔へとむかつて、その山道の中をこうしんしていったのです。

かれら木の者たちは、カルモトの家の前で、カルモトがもどつてくるのをずっと待ち

つづけるのでしょうか。旅の者たちが手をふつても、木の者たちがそれにこたえることはありませんでしたが、旅の者たちにはかれらがさきほど、こちらをむいてきれいにせられつをしたのは、みんなにむかって、さいごのおわかれをしていたのだと思えてなりませんでした。

さて、これでしょうか、ひみつの旅らしい人数にもどったわけです（といつても、まだ七人もいるわけですが）。ここからさきは、このうちすてられた土地の中でも、さらにおく深い、だれひとりとしてよりつかない土地。旅の者たちはこれから、その土地の中へとふみこんでゆくのです。ここでいちばん、たよりになつたのは……、やはり、この旅のいちばんのみちびき手である、あの人（ベルグエルムではありません。さんねんながら）。この土地のことをもつともよく知っている、ミリエム・オーストでした。

じつはミリエムはもともと、ベーカールランドよりもさらに南のくに、ブリスタットというくにの出身で、そのくからロザムンディアのまちの大聖堂のオルガンそうしやとしてやってきたのが、かれだったので（オルガンがひけるなんて、いがいなさいのうですぬ！）

ちなみに、ミリエムの生まれたブリスタットですが、このくにはグラン河という美しくゆたかな大河に守られていて、その河のほとりに育つたくさんのくだものは、この

アーランドの中でもとくに高いひょうばんを受けていました。とくにプリスタットベリーというくだものがゆうめいで、このくだものは見た目はプラムにっていました。が、とつてもあまくて、みずみずしくて、かおりがさわやかで……、とにかく、やみつきになつちやうおいしきなんだそうです。そう、じつはわたしも、まだプリスタットベリーを食べたことがないんです！ うくん、くやしい。こんどぜつたい、食べてみたい！）。

そんなわけですから、ミリエムはこの西の街道を通つてプリスタットからペーカードまでのあいだ、そしてペーカードからロザムンディアまでのあいだを、なんどもいききしたことがあります。この土地の道あんなには、ミリエムはまさに、うつつけだったというわけなのです（もつともミリエムはロザムンディアのまちですつとゆうれいになつておりましたから、かれがこの道を通つていたのは、もうなん十年もむかしのことでした。ですからちよつと、心配ではありませんが……）。

ちなみに、ミリエムの中からだはゆうれいになつたそのころのままでしたので、見た目はとつても若く見えました。が、じつさいには、ベルグエルムよりもずつと年上だったのです。うくん、なんだかちよつと、ふくぎつです（ね）。

そのミリエムのあんないで、一行はこの古びたむかしの道のりを、どんどんと進んで

いくことができました（やっぱり道を知っている者がいるというのは、ちがいますね）。古い街道はもう、ほとんど消えてしまっていて、道を見つけるのがとくいなベルグエルムでさえも、街道をたどっていくのはこんなになつていました。ですから正しい道を進んでいくのには、むかしのけいけんを持つているミリエムの、そのきおくだけが、たよりとなつたのです（大きな木が立っていたりとか、大きな岩があつたりだとか、そんなものが道の手がかりとなつたのです。でもときおりミリエムは、「あれ？ おかしいな、ここは、どっちだつたつけ？ うくん……」となやんで、みんなをはらはらさせました……。まあ、だいぶ時間がたつて、景色もずいぶんと変わつてしまつておりましたから、もんくはいえませんでしたけど。もつともミリエムの場合は、たんに、きおく力の問題であることが多いようでしたが……）。

やがて日が落ちてしまつてからも、一行は夜のやみの中をずいぶんと進みました。ですが、さすがにもう、これ以上は進めません。こうして、長かつた今日いちにちの旅が終つたのです。

みんなはもう、くたくたでした。今日はずいぶんと、いろんなことがありましたから。いえ、ありすぎましたから。はぐくみの森を出発してからモーグにはいり、フェリアルがおおげになつて、カルモトに会つて……。それから、魔女の塔での大冒険です。これ

だけのことをいちにちのうちに終えましたから、むりもありません（魔女の塔での冒険についてはフェリアルはさんかしていませんでしたが、かれはそれと同じくらい、たいへんな目にあつてしまつていましたから、やつぱりみんなと同じくらい、へとへとだつたのです）。みんなは街道のわきの原っぱに野宿のじゅんびをさつさとすませて、つめたいままのごはんをがつがつ食べると、すぐに、深い眠りに落ちていつてしまいました。ありがたいことに、つかれたからだの旅の者たちのために、カルルとクプルがこうたいで、見張りに立つてくれるということでした。ですからみんなはフログルたちにかんしゃして、心おきなく、ぐっすりと眠ることができたのです（ちなみに、ミリエムは旅の者たちよりもさきに、すぐにぐーぐーいびきをかいて寝てしまいました。まあ、ビポナに乗っているのも、たいへんなのでしよう）。

よく朝。みんなは生きかえたかのようにげんきになりました。こんなにぐっすり寝てしまったのも、ひさしぶりな感じです。みんなは「うーん……！」と両手をのぼし、朝のすがすがしい空気を、おなかいっぱいにすいこみました（でもひとつだけ問題が。みんなが朝起きたら、起きて番をしてくれているはずのカルルとクプルが、そろつてぐーすか、気持ちよさそうに寝ていたのです……。なにこともなかつたからよかつたもの……、やつぱりフログルたちにまかせるのは考えものだと、みんなは心から思いました……）。

それからみんなはふたたび、街道をいっちょよくせんに進んでいきました（ライアンはまだ朝のおやつがすんでいないといつて、はちみつをたつぷり乗せたマフィンを三こも、口にほおばりながら出発しましたが）。空はうすぐもり。風はそよ風。寒すぎることもなく、おだやかな朝でした。

「今日のうちに、なんとしても、ペーカーランドへとたどりつかねばならない。」ベルグエルムが、たづなをにぎる手に力をこめて、みんなにいいました。「進めるうちに、どんどん進んでおかなくては。われらに、休んでいるひまなどない。ライアン、今日は、おやつの時間はなしだぞ。」

「えーっ！ そんなー！」いわれて、ライアンがさげびました。

「しょうがないよ。」ロビーも、ベルグエルムの言葉にこたえてそういいます。「今日は、キャンディーだけがまんしてね。」

ですが、ライアンがキャンディーだけがまんできるはずもないということは、ロビーにもよく、わかっていました。

「いいもん！ メルに乗りながらおやつにするから！ ロビー、ぼくのお菓子、しっかりと持っててよね！」

やつぱり……。ロビーはライアンにおしつけられたお菓子のはいったかばんをかかえこみながら、「はあ……」と深いため息をつきました。

それからみんなの騎馬たち（とビポナたち）は、大地を走りに走りました。とちゆう、おひるごはんのきゆうけいをわずかにはさんだほかには、みんなはほんとうに、馬（もしくはビポナ）からおりることもせず、南へ南へ、いっちょよくせんに進んでいったのです（ところでライアンはほんとうに、走りながらおやつを食べました。ひとつお菓子を食べるたびに、「ロビー、チョコクッキー取って！」とか、「つぎは、ふにやふにやグミのキーズベリー味！」とか、うしろのロビーにいうのです。かわいそうなロビーは、さからうこともできず、ライアンのわがままに、だまっていたがうほかありませんでした……）。

そしてもう日もかたむきはじめ、あたりがだんだんと、夜のしはいにつつまれてゆくうかという、ちようどそのころ。

「あそこです。あそこが、分かれ道ですよ。」

つづく道のそのさきをゆびさして、とつぜんミリエムがいました。道はその場所で、大きく右へまがっています。ですがよく見ると、道はそれだけではありませんでした。小さなほそい道が、そのままつすぐ、南へとつづいていたのです。

その小道は、なんともおそろしげな道でした。草木がぼうぼうにのびていて、張り出したえだが、その道をふさぐようにいくつもたれ下がっていたのです。そのえだや葉

が、山からの風にこたえて、さわさわ……、ひゆるひゆる……、となんともものさびしい声を上げていました。

「道にそつて右へいけば、そのさきは、よろこび平原へとつながっています。このまままっすぐ、あの小道をいけば、道は、山のおく深くへとつながっていて、そのさきには……」

「やみの精霊の谷があるというわけか。」ベルグエルムが、ミリエムのかわりにいいました。

「そ、そうです。」ミリエムが、おびえたようにこたえます。

「ねえ、ほんとうにいくんですか？　今からでも、おそくありませんから、考えなおした方が……」

ミリエムはそういって、不安そうに旅の者たちのことを見渡しました。ですがミリエムになんといわれようと、みんなはここで、道をそれるわけにはいかなかったのです。

「われらは、なんとしても、この道をゆかねばならない。ここでのおくれは、このアーランドの運命を変えてしまうことになるだろう。」ベルグエルムが、かたいけついを持っていました。

「ここからさきは、われらだけで進みます。ここをぬければ、ペーカーランドまでは、もう、目と鼻のさきだ。ミリエムどの、ごあんない、心よりかんしゃいたします。」ベル

グエルムはそういって、ミリエムにウルファの敬礼をおくりました。

「なーんか、おぼけでも出そうなどころだね。」ライアンが、ロビーといっしょにその小道をながめながら、いいました。「こんどこそ、ほんとうのおぼけが、うじゃうじゃいるかも。しつかりたのむよ、フェリー……、あれ？ フェリー？」

ライアンとロビーはまわりをきよろきよろ見渡しましたが、そこにはフェリアルルの騎馬だけがぼつんというばかりで、主人であるフェリアルルのすがたが、どこにも見あたりません（ま、まさか、おぼけにさらわれちゃったんじゃない……！）。

「あの一、フェリアルさんなら、さつきから、わたしの背中にくっついてるんですが……」

そういったのはカルルでした。見ると、フェリアルがカルルの背中にしがみついて、そこからびくびくと、つづく小道のようすのことをのぞきこんでいたのです（まったく人さわがせな）。なんだかフェリアルは、自分がおぼけになってしまったからです（まったく、前よりももっと、おぼけぎらいになってしまったようですね。この小道の「おぼけムードまんてん」なようすを見て、フェリアルはすっかり、おじけづいてしまったというわけでした（でもフェリアルルのめいよのためにもいっておきますが、かれは相手が「おぼけかんけい」じゃなければ、とつてもゆうかんで、りっぱな強い騎士なのです。それはガイラルロックたちや黒騎士たちとの戦いの場面を見れば、よくわかりますよね。こ

んかいのこの西の地での冒険は、相手や場所が、あんまりよくない場合が多いみたいで
す。オーリンたちの谷では、おぼけの出そうな谷の底で、おぼけみたくに出たり消えた
りするかいぶつに出会ってしまいました。それからこんどは、おぼけのまちそのものに
ふみこんでいって、そこで二百人ほどのゆうれいさんたちに出会ってしまつたので
す。そしておつきは、やみの精霊たちの住むという、おぼけの出そうなこわーい道……。
フェリアルにとっては、だいが、かわいそうな旅になつてしまいました。ですからみな
さん、かれのことを見て、「なさけないなあ……」とか、あんまり思わないであげてくだ
さいね。これからきつと、たくさん、かつやくしてくれるはずですから。相手が「おぼ
けかんけい」じゃなければ。

「まったく……、なにやつてんだか、もう。」ライアンが「はあ……」と深いため息を
ついて、あきれたようにいいました。「こら！ それでも騎士なの！ しゃきつとしな
さい、しゃきつと！」

「は、はいっ！」ライアンに怒られて、フェリアルは思わず、しゃん！ と背すじをの
ばしてしまいます。

「騎士は、みんなを助けるのがしごとでしょ！ まったく、だらしない。」ライアンが、
ぶんぶん怒っていました。

「い、いや、わたしは、みんなの安全のために、道をようくしらべておこうと……」

くるしい、いいわけをするそんなフェリアル顔を、「ふくん。」とのぞきこみながら、ライアンがさらにこういって、フェリアルのことをつつつきました。

「そっか。じゃあ、みんなの安全のために、さきに、フリーひとりで、谷をしらべてきてもらおっかなー。」

「ええーっ！ そ、そんなー！」フェリアルが泣きそうな顔をしていました。

「た、隊長〜！」

フェリアルはそういって、ベルグエルムに助けをもとめました、そんなベルグエルムもまた、いたってまじめな顔をして、こうこたえるばかりだったのです。

「うむ。それもいいな。もし、おぼけが出てきたら、すぐに、わたしたちにしらせてくれたまえ。」

「た、隊長まで、そんな〜！」

とまあ、これも全部じょうだんでしたが……、ちよつと、やりすぎちゃいましたね（フェリアルのことをからかうのはやめにしましょうと、前にもいいましたのに、もう）。ほんとうに泣いてしまったフェリアルに、ライアンもベルグエルムも、「ご、ごめんね、フリー。」とあわててあやまりました。

「ロビーどの〜！」ロビーにしがみついてわんわん泣いているフェリアルでしたが、そんなロビーも、よしよしとフェリアルのことをなだめながら、心の中でちよつとだけ、こ

う思ったのです。

フェリアルさんって、けっこう、めんどくさい……。

こうして旅の者たちは、そのおそろしいやみの精霊の谷へと、ふみこんでいきました。はたしてみんなはぶじに、この谷をぬけて、そのさきにつづくめざすベーカールンドの地へと、たどりつくことができるのでしょうか？（たどりつけなきやこまりますけど。）みんなは見送るミリエムとフログルたちに、もういちど手をふって、その暗い小道をばかほこと馬で進んでいきました（ミリエムをひとりで帰すわけにはいきませんでしたので、カルルとクプルのふたりとも、ここでおわかれでした。ちよつとさみしいですけど、また、げんきなすがたを見せてもらいたいものですね！）

ところで……。ミリエムたちのその帰り道の中でのこと。かれらは道のとちゆう、思わぬできごとに出会ってしまったのです。かれらが野宿をしていると、そのむこう。西のほうかく、海のほうこの荒れ野の地に、今までだれも見たこともないような、かがやくまちなみがあらわれました！ ミリエムはなんともびっくりぎょうてんしてしまつて、「あんなものは、見たこともきいたこともない！ むやみに近づかない方がいいですよ！」といました。こうきしんおうせいなフログルたちが、じつとしていられるはずありませんよね……。

こうしてかれら三人は、ビボナを走らせて、そのかがやくなぞのまちへとむかったのです。そこでかれらが見たものは……？

ごめんなさい！ ミリエムたちのその冒険について、ここでくわしくお話ししているわけにはいきません。それをみんな書いていたら、この本がもつと、ぶあつくなってしまうから！ この物語は、あくまでも、「ロビーの冒険」なのです。ですからまことに申しわけないのですが、「ミリエムとフログルのふしぎな冒険」の物語については、またのきかいにお話しすることにしませう。かいつまんで説明しちやったら、もつたいないくらいのお話なので。ほんとにごめんね。小道を進むにつれて、あたりはどんどんと暗くなつていきます。まだ日も落ちきつていないというのに、この暗さはやつぱり、ふつうではありませんでした。ということとは……？

「やつぱりここは、やみの精霊たちがしはいてるんだ。」ライアンが、あたりのようすをきよろきよろと見渡しながら、いいました。「この暗さは、かれらの力によるものだよ。かれらの力には、どんな光だつて、かなわない。かれらにおそわれたらさいご。人はみんな、かれらの力に、そのからだをくいつくされて、おぼけの仲間いりになつちゃうんだつて。」

ライアンがそういうと、うしろからフェリアル「ひええ……！」という声がきこえてきます（おぼけモードまんてんの場所できいて、楽しいような話題でもありませんで

したから)。

「そ、そんなおそろしい精霊がおそつてきたら、どうやって戦うの？」ロビーがライオンに、おそろおそろたずねました。

「うーん、そうだね。だれかひとりがおとりになって、そのすきに……」ライオンはそういつて、うしろのフェリアルの方をふりむきます。

「じよ、じようだんはやめてくださいよー」フェリアルがライオンに、さげびました。「うそだよ、フェリー。」ライオンはそういつて、けらけら楽しそうに笑いました(ほんとにいじわるなんだから、もう)。

「かれらと戦おうとしたつて、むだだよ、ロビー。前にもいったけど、精霊たちの力には、ぼくたち生身のからだの者たちには、とうてい、かないっこないんだ。だつて相手は、この世界、そのものなんだから。」

そんなライオンの言葉に、ベルグエルムもつづけてロビーにいいました。

「ライオンのいう通りです。われらはけつして、かれらと戦つてはならない。かれらのきげんをそこねないように、なんとか、かれらの谷を通らせてもらうのです。それがい、道はありません。」

「そ、そうなんですか……」ロビーが不安げにこたえます。「で、でも、きつと、ライオンがいれば、だいじょうぶですよ。ライオンなら、かれらと話しができる。話しあえ

ば、きつと、わかってもらえるとと思うから。」

「だと、いいんですけど……」フェリアルが、ロビーよりもっと不安げにいいました。「わたしはもう、おぼけなんかになるのは、ごめんですよ。」

「いちどなつたんだから、二どや三ど、なつたつて、おんなじじゃない？」ライアンがまた、いたずらっぽく笑つてフェリアルにそういいます。

「じよ、じようだんじやない！　もう、にどとごめんです！」フェリアルがむきになつて、かえしました。

やがて道はどんどんせまくなり、ついに一行は、馬が一頭ようやく、くぐれるか？　というくらい、そのなんともおそろしげな門の前までたどりつきました。いえ、門とていいましたが、両がわにこけが生えた石のはしらが二本立っているだけで、とびらもやねもありません。ですがそのさきはあきらかに、この世界のものではありませんでした。くらやみの中にゆらゆらと動く葉のない木々が立ちならんでいて、地面にはまつ黒いねずみのような生きものたちが、ちよろちよろとはいまわっておりまます。そしてときおり、影そのものがまるで生きているかのように、ぐによくによとそのかたちを変えて、動きまわっているのが見て取れました。

まさしくこの門のさきは、やみの精霊の谷。この世界の者たちが、むやみに立ちいつ

ていいような場所ではなかったのです。

「きよ、今日は、精霊さんたちは、いそがしいみたいです。また、日をあらためて……」

「あらー！ 逃げるなー！」

いかにもおぼけが住んでいそうなそのおそろしいふんいきのを見て、フェリアルがいそいそとひきかえそうとしましたが、そんなフェリアルのえり首をライアンがぐいっとなかまえて、ひきもどしました（やつぱりほんめいの場所は、これまでの小道よりももっと、おぼけムードまんだったのです……。門の中はおぼけのまちだったこのロザムンディア、つまりモーグよりももっと、おぼけが出そうなふんいきでした。かわいそうなフェリアルくん……）。

「みんな。なにがむかってこようと、ぜったいに手出しをしてはならないぞ。」ベルグエルムがみんなにむかって、きつく注意をしました（とくにフェリアルには、ねんをおしていいました）。

「中にはいつたら、いつちよくせんに前に進むんだ。よけいなことは考えてはいけな。うまいければ、なにごともなく、この谷を通りぬけられるかもしれない。」

そういつてベルグエルムは、とうとう、その門をくぐって中にはいつていつたのです。「なにごともなく、なんて、ありそうにないけどね。」ライアンが、やれやれといった

感じで、そのあとにつづきました（とうぜん、うしろに乗っているロビーもいっしょに中にはいりました）。

「フェリーー！ 早くこないと、おいてつちやうよ！」ライアンがうしろをふりかえって、まだぐずぐずとためらっているフェリアルにむかって、さげびます。

「ま、待ってくださいよー！」そしてフェリアルも泣く泣く、ライアンのことを追いかけて、そのあとにつづいていきました。

ここはいつたい、どんな場所なのでしょう？ 旅の者たちはその谷にはいつたどたん、なんともぶきみな感かくにつつまれました。まるであたりからたくさんの見えないやみの手が、自分のもとへとのびてきていて、その手が自分のからだ中のエネルギーを、つかみ取ろうとしているかのような……、そんな感じにおそわれたのです（なんともいやーな感かくです）。空気はしっとり、ぴりぴり、ひんやりとしていて、黒いきりのようなものが、あたりをゆらゆらとただよっております。地面には黒いマシユマロのようなものがいくつも集まっていて（ぜつたい、やいて食べてみようととは思いませんけど）、その上や木々のみきなどには、黒いねずみや、りすや、そのほかのふわふわとした生きものたちが、たくさん動きまわっていました。

中でもみんなをいちばんびつくりさせたのは、まつ黒な人のかたちをした、影たちで

した。その影たちは身長が七フィートほどあつて、目のあるところに小さな白いあな
がぼつかりとあいているばかりで、鼻も、口も、ゆびもありませんでした。その影たち
が、あつちやこつちを、のそのそと歩きまわっていたのです。

はじめは、かれらがやみの精霊なのかと思ひました。ですからみんなは馬をとめて、
かれらにこの地を通してもらおうと、話しかけたのです（話しかけたのは、もちろんラ
イアンです）。ですけどかれらはまったく耳を貸さず（というより、きこえていないみた
いです）、あいかわらず、ただのそのそと、あてもなくあたりを歩きまわっているばかり
でした。

「だめ。話を通じないみたい。」ライアンが手を上げて、ベルグエルムにいいました。
「かれらは、やみの精霊じゃないみたいだね。でも、しぜんのエネルギーが、ものすごく
強いよ。」

ライアンのいう通り、じつはこの人のかたちをした影たちは、この土地に集まつてい
るやみのエネルギーそのものが、人のすがたになつて、動きまわっているものだったの
です！かれらは言葉もわかりませんし、感じようもありませんでした。ですからかれ
らに話しかけても、むだだったのです。

ですが、それからしばらく進んだところで、旅の者たちはとうとう、この土地のほん
とうの住人たちに出くわすことになつてしまいました。

それは……、そう、やみの精霊です！

「ぎゃあ！ で、出たー！」とつぜん、フェリアルが大声を上げてさげびました！

「どうした！」ベルグエルムが馬をとめて、あたりを見まわします。

「だめだね、かこまれてるよ。なんか、こんなのばかりな気がするけど……」

まことにライアンのいう通り。旅の者たちは、すでにかれらに、すっかり取りかこまれてしまっていました！（ほんとうに、こんなのばかりですけど……）

フェリアルがひめいを上げたのも、むりはありません。かれらやみの精霊たちのすがたは、まるでじごくの底からはい上がってきた、ゆうれいたちの親玉、といった感じの、それはそれはおそろしいものだったのです！（これにはさすがのベルグエルムでさえ、おじけづいてしまったほどです。）

かれらのからだは人のかたちをした、もえさかるまつ黒なほのおでした。そのからだからはぴりぴりと、いなずまのようなエネルギーが吹き出しています。つり上がった、まつ赤なふたつの目！ その目はまるで、こおりのようなつめたさで、こちらをぎろりとにらみつけていました。そして大きく、さけた口！

それは精霊というよりも、ほんとうに、じごくのおぼけそのものといった感じでした。旅の者たちは今、そんなおそろしい者たちに、まわりをすっかりかこまれてしまっていたのです！（これなら木の兵士たちにかこまれたときの方が、ぜんぜんましです！）

「いったいかれらは、なんんくらいいるのでしょうか？（精霊を人と数えるかどうかは、べつとして。）見渡してみれば、あつちもこつちも、赤い目、さけた口、赤い目、さけた口！ 旅の者たちはすつかりふるえ上がって、それぞれの騎馬たちをよせあい、肩をよせあいました。」

「ラ、ライアーン！ は、早く、なんとかしてくださいよー！」フエリアルがたまらずに、ライアーンにいいました。

「かれらにいつて！ ぼくたちは、敵じゃないって！」ロビーもライアーンにしがみつきのながら、おびえた声でいいました。

さあ、それではいいよ、大ほんめい！ ライアーンくんの出番です！ このときばかりは、みんなライアーンにたよりきるほかありませんでした（ベルグエルムでさえ、しつかり！ ライアーン！ と心の中であついせいえんを送っていたほどでした）。大精霊使いライアーンさまの力を、今こそぞんぶんに、はつきしてもらわなくっちゃ！（つていうか、ほんとにお願い！ なんとかして〜！）

ですが、みんなに思いつききたいされちやつているライアーンでしたが、そんなライアーンだつて、やみの精霊にむかいあうのは、これがはじめてのことなのです。なんでもこゝい！ などと、いきおいでいつてしまったライアーンでしたが、小さいころから精霊になれ親しんできていたかれでさえ、やみの精霊たちと、はたしてほんとうに話しあう

ことができるのかどうか？ それはぜんぜん、わからないことでした。でも、やらなければなりません！

ライアンは、ごくりとつばを飲みこんで、「よ、よーし！」ときあいをこめました。そして手をまうえにかざして、「自分たちは敵ではない」ということをしめしながら、かれらにいいよ、話しかけようとしたのです（ほんとうなら精霊に話しかけるとときには、その精霊の力にあわせた道具を使った方がいいのですが、やみの精霊にあわせた道具なんて、ライアンは持っていませんでしたから）。

ですが……。

そのつぎのしゅんかん。旅の者たちにとつて、まったく思いもかけないできごとが起こりました。そしてそれは、もう今まででいちばん！ といつていいくらいの、信じられないほどの、おどろきのできごとだったのです。

ライアンがやみの精霊たちに話しかけようとしていた、まさにそのとき。そのやみの精霊の中のひとりが、大きくさけた口をひらいて、こんなことをいいました。

「おまえたちを待つていた……。われらは、おまえたちに協力する……」

え……？ ええーっ！

これはいったい！ どういうことなのでしょう！

さあ、旅の者たちの冒険は、またしても、このさきよそくのできないほうこうに進んでいってしまふみたいです。それは、よい道なのか？ 悪い道なのか？ 物語はさらにつづきます。

16、エリル・シャンディーン

「花はいいね。気持ちをおちつかせてくれる。」

いすにすわって本を読んでいたその人物が、ふつとつぶやきました。

ここはこのアークランドのどこかの、テラスでした。てんじようやかべはガラスでおわれていて、部屋の中にはところせましと、赤や、きいろや、もも色に、白。色とりどりの美しい花々がさきみだれております。とこれだけなら、ふつうのきれいなテラスでしたが……、どうやらここは、とてもそんな、おだやかでへいわな場所ではなさそうでした。

このテラスの中は、とてもへいわでした。ですが問題は、このテラスのそと。かいほう的なガラスのかべのむこうから、明るいおひさまの光がさんさん！ というのであれば、とつてもよかつたのですが、テラスのそとにはおひさまどころか、くもりの空さえきたいできないような、じつにふきつで、ぶきみな世界が広がっていたのです。そこは赤茶けたごつごつとした岩があたりいちめんにころがっている、荒れ果てた土地でした。生きもののすがたはおろか、草のいつぼんさえ生えていません。ですからここは、このくにの中の、とつても悪い場所にきまつています！ そしてそれをけつていづけ

る、あるものが、そこにはありません。その人物がいるガラスづくりのテラス。そのテラスは、その人物がいるそのたてものの、ほんの一部にすぎなかったのです。

なんとというおそろしいたてものなのでしょう！ あちこちに黒い塔がつき出っていて、その塔のさきつぽには、するどいようなかざりが取りつけられていました。たくさんの目をかたどったもようが、たてもののいたるところにえがかれていました。そしてこのたてものが、ほかとけつてい的にちがう、おそろしいところがあつたのです。それは……、このたてものの全体を、ぐにぐにと動く、ぶきみなゼリーのような生きている赤いかたまりが、つつみこんでいるところでした！ そのおそろしいげなことといったら！ しかもそればかりではありません。よく見れば、そこからつき出ているたくさんの黒い塔も、そしてこのたてものかべそのものも、まるで生きているかのよう、ぐにやぐにやと、まがつたりのびたりして、そのかたちを変えていたのです！

こんなものは、ぜつたいに人の手で作り出せるようなものではありません！ かいぶつか、悪魔か、それよりもつとおそろしいものか……。そんな、はかりもしれないまがまがしいもので、このたてものはおおいつくされていました（いぜんアルファズレド王のいるワットのくにのようすを、みなさんは見たことと思います。ですがこの場所は、あれよりはるかに、おそろしいのです。ですがワットよりもつと、おそろしい場所……？）。

「……じゅんびは、ととのつております……」

とつぜん。いすにすわっているその人物のうしろで、静かな声がひびきました。

「……もはやこれ以上、ドルーヴのやつめを、おさえつけておくことはできません……」

この声に、みなさんはききおぼえがあるはずですが、それはいぜん、赤い石の浮かぶきみの悪い広間で、石の前に立っていた黒いガウンをかぶったなその人物に話しかけていた、あの声でした。

「あ、そう。」いすにすわっている人物が、なんともそっけなく、きようみもなさそうにいいました。

「……どうぞ、ごめいれいを……」

つづく声に、いすにすわっているその人物が、ぱつとうしろをふりかえりました。そしてその人物が見た、そのさき。部屋の入り口の前に立っていたのは……。

おおかみです！ まっ黒なかみとまっ黒なしっぽを持った、りっぱなからだのおおかみ種族の男の人がひとり、いすにすわっているその人物に話しかけていました！（黒いかみと、黒いしっぽですって？ ということはロビーと同じ、黒のウルファじやありませんか！）いったいこの静かな声のウルファの男の人は、なに者なのでしょうか？

「いいよ。じゃ、そろそろ、でかけてもらおうか。」いすにすわっている人物がそういつ

て、「くつくつく。」といううすきみの悪い笑い方をしました。

この笑い方！ この笑い方にも、みなさんはききおぼえがあるはずです。そうです、いすにすわっているこの人物。かれはやつぱり、あの赤い石の広間にいた黒ずくめのなぞの人物。あの人物にまちがいありませんでした。ですがあのとき、かれはまつ黒のガウンで全身をつつんでいました。それが今は、赤いうす手のセーターを着ているだけで、ガウンはまどつていなくなつたのです。それが意味することは……？

そう、今はかれの顔もふくめて、そのなぞのすがたをみんな見て取ることができるといふことでした！（ですからわたしも「なぞの人物」ではなく、「かれ」とよぶことができるようになったのです。いすにすわっているその人物は、男でした。）

かれは人間の種族の者でした（すくなくともそう見えました）。そしていがいなことに、ずっと若かつたのです（まだ十五さいか十六さい、そのくらいのものでした）。やせていて、きやしやなからだつき。きみの悪い笑い方とはうらはらに、その顔立ちはきれいにとのつていて、長くのばした赤いかみを、背中までたらしっていました。でも美しい顔立ちとはいえ、やつぱりそのむらさき色のひとみのおくには、なにか、じゃあくなものを感じさせずにはいられなかつたのです。

「好きだけあばれちゃって、かまわないよ。ああ、でも、あの石だけは、こわさないでね。ぼくがもらうんだから。」そういつて、かれはまた「くつくつく。」と笑いしました。

そしてかれは、またむこうをむいて、手にしているその本を読みはじめたのです（ちなみに、本のだいいいは「かわいいこねこ」というものでした）。

「楽しみだなー。早く、かれがきてくれないかなー。」そういつてかれは、まるで小さな子どものように足をばたばたさせて、「ふんふん。」ときげんよく鼻をならしました。「そのために、あなたにきてもらったんですから。ね？ ムンドベルクさん。」

ええっ！ ム、ムンドベルクですって？ ということは……。

このふたりの人物がだれだか？ 読者のみなさんにはもうおわかりでしょう。おおかみ種族の人物は、ほかでもありません。レドンホルルの、すべてのウルファたちの王。ムンドベルク・アルエンス・ラインハット、その人だったのです！ そしてもうひとり……？

そう、いすにすわって本を読んでいる、この子どものようにむじやきな人物こそ、ほかでもありません。すべての悪だくみのうらに立つ、悪の魔法使い、アーザスほんにんでした！

「……はい……」ムンドベルクが、アーザスの言葉にこたえました。王さまはすつかり、アーザスに心をうばわれてしまっていたのです。

「……かれは、かならずや、ここへやってくることでしょう……。わたしには、わかります……」

ムンドベルクのその言葉に、アーザスは「くつくつく。」と笑うだけでした。

「じゃ、ドルーヴのことは、よろしくたのむよ。」アーザスはそういつて、うしろむきのまま手をひらひらとふって、ムンドベルクのことを送ります。

「……失礼いたします……」

「ああ、それと。」おじぎをして立ち去ろうとするムンドベルクのことを、アーザスが急によびとめました。「ぼんごはんは、ハンバーグがいいな。ケチャップたっぷりのやつ。よろしくねー。」

ムンドベルクはふたたびおじぎをして、テラスから出ていきました。

ひとりになったアーザスは、ガラスのかべのむこうを見つめながら、その口もとを、にやりとぶきみにゆがませました。

「かれがここにくるまで、あと二、三日かな？　楽しみ。」アーザスはそういつて、いすの手すりの上においてあった、いっぽんの白い花を手に取りました。

「きみのかつやくに、きたいしているよ……」

アーザスがそういうと、その手に持っていた花が、まるでドライフラワーをつぶしたかのように、ぱりぱりと音を立ててくずれちってしまいました。

かあー！ かあー！

一羽のからすが大きな声でないで、夜のとぼりにつつまれつつあるその空の中の高くを、飛んでいきました。その足には、ひとつの大きな木の実がにぎられていました。

ここはこのアークランドの、西の土地。岩がころがり、人々に忘れ去られた木々たちがさみしそうに立ちつくす、うちすてられた場所……。

とつぜん、びゅう！ という強い風が、その土地の空高くに吹きつけました。その風にびつくりしたからすは、つかんでいた木の実を放り出し、かあかあないで、かなたの空へと飛び去って行ってしまいます。木の実も風に乗って、その谷の中へとゆつくりと落ちこんでいきました。その谷は、星のあかりも受けいれないほどの、まさにやみの谷……。そう、この谷こそが、今まさに、旅の者たちがふみこんでいる、そのやみの精霊の谷にほかならなかったのです！

さあ、ここから物語は、どう進んでいってしまうのか？ いったいみんなは、これからどうなつちやうの？（お待たせしました。）それでは、つづきをどうぞ！

旅の者たちは、すっかりびつくりぎょうてんしてしまいました。なにが起こっているのか？ 正しくりかいすることなんて、まったくむりな話というものでした。

それもそのはずです。このアークランド中の人々におそれられ、近づく者をようしや

なくやみにひきずりこんで、そのたましいをけもののようにむさぼり食うとまでいわれているほどの（それはいいすぎですけど……）こわいこわいやみの精霊たちに取りかこまれたかと思つたら、いきなり自分たちに、協力するといつてきましたから！ しかもやみの精霊たちは、自分たちのことを待っていたというのです。これでおどろくなという方が、むりというものでした。

「そ、それっていったい、どういうこと？」

ライアンがわけもわからず、すっかりこんらんしたじょうたいのまま、やみの精霊たちにたずねました（思わず、いつもの話し方で話しかけてしまいました。ほんとうなら精霊たちには、敬意をこめた、おごそかな話し方をしないとイケませんでしたが、そんなよゆうもありませんでしたから）。これに対して、やみの精霊たちはいたつておつききはらつたようすで、顔色ひとつ変えずに、こうこたえたのです。

「精霊王からの、たのみだ……」

「精霊王！」思わずライアンが、さげんでしまいました。ベルグエルムもフェリアルも、もちろんその名をきいて、びつくりしないはずありません（ただひとりロビーだけは、精霊王の名まえをきいても、ぽかーんとしたままでした。おさなかつたころのロビーのきおくの中には、精霊王についてのきおくはなく、ロビーは精霊王のことについても、森のとしよかんで読んだ本の内よういがい、なんにも知らなかつたのです。その

森のとしよかんにあつた本は、小さな子むけの「精霊王のふしぎのくに」という絵本だけでしたので、ロビーは精霊王ときいても、絵本の王さまがどうかしたのかな？ と
思つたばかりだつたのです。

「まさか……！　ほんとうに精霊王さまがいるんですか！」

ライアンもベルグエルムもフェリアルも、やみの精霊たちにくいいるようにたずねて
しまいました（もうやみの精霊のこわざなんて、どこかに吹き飛んでしまつたみたいで
した）。まさか、伝説の中だけにそんざいすると思われていたあの精霊王が、ほんとうに
いるなんて、とても信じられないことでしたから。

そんなみんなのようすを見て、やみの精霊たちはしばらく、ただざわざわとゆれてい
るだけでした。そしてしばらくたつて。その中のとびきり大きくて、とびきりこわい顔
をしたやみの精霊のひとりが、旅の者たちに話してきかせたのです（どうやらこの精霊
が、この谷のやみの精霊たちのリーダーのようでした）。

「ほんらい……、この谷に、人のはいることゆるさぬ……」そういつて、その精霊がみ
んなのことをぎろつ！ とにらんだので、みんなは思わず、「ひっ！」とふるえ上がつて
しまいました。

「王のたのみであるので、とくべつに、おまえたちをここへまねいた……」

「なぜ、王さまがぼくたちのことを？」ライアンが思わず、口をはさみます。するとそ

の精霊がライアンにむけて、口を「しゃああつ！」とならしたので、ライアンは思わず、「すいませんっ！」とちぢこまってしまいました（さすがのライアンでも、相手が悪すぎですのぞ）。

精霊がつづけます。

「アーケランドのためだ……。王は、おろかな人間たちによつて、このくにがほろびることを、あんじておる……。それを防ぐため、おまえたちにこの谷を通らせるよう、われらにたのんできたのだ……。――」

「精霊王さまが、ぼくたちのことを……。――」ライアンが、ロビーの顔を見ていました。「精霊王は、すべてを知っているということか……。――」ベルグエルムとフェリアルも、おたがいの顔を見あわせて、ごくりとつばを飲みこみました。

そしてその精霊は、ロビーのことをぎろりとにらみつけて、こんどはロビーひとりにだけ対して、こういったのです。

「おまえが、ロビーベルクだな……。？　王はおまえに、このくにの運命をたくした……。王のききたいに、こたえるがいい……。――」

「えっ？」思わずロビーが、びっくりしていいました。そしてあたりをきよるきよると見まわして、まわりにほかにだれもいないということをつづけたので、つづけたので。「ぼ、ぼく？」

ロビーベルク！ この名まえは！ いぜんみなさんがおとずれた精霊王の森で、なぜの者たちが話していたその会話の中に、出てきた名まえじやありませんか！

そう、あの森でかみの長い男の人が話しかけていた、岩のむこうにいた人物。じつは、そのなぞの声だけだったあの人物こそが、ほかならぬ、精霊王ほんにんだったのです！
そしてその話しの中に出てきた、ロビーにた名まえの人物、ロビーベルク。その名まえを今、目の前のやみの精霊が、ここでふたたび口にしたというわけでした！

「ロビーベルクって、だれですか？ ぼくは、ロビー……」そこまでいって、ロビーは、はつと気がつきました。

「まさか……、ぼくの、ほんとうの名まえ……！」

ベルグエルムもフェリアルもライアンも、びつくりして、思わずロビーのことを見やつてしまいました。まさかこんなところで、ロビーのほんとうの名まえを知ることになるなんて、みんな、夢にも思っていないことでしたから。

でもいちばんびつくりしたのは、やつぱりロビーです。小さかったころからの、長年の夢。そのために旅に出ることをけついし、あこがれでさえあった、ひとつの思い……。自分のことを知り、ほんとうの名まえ、「姓」を受けつぐこと。その夢に今、こんなにも近づいていましたから！

ロビーはすっかりこうふんして、メルの背中から飛びおけると、そのまま、そのやみ

の精霊につめよってしまいました。

「お願いです！ ぼくのことを教えてください！ ぼくは、なに者なんですか！ ぼくの……、ぼくの家族は、今、どこにいるんですか！」

やみの精霊はロビーのたいどに、すこしびっくりしたようでした。ですが精霊は、あいかわらずおちつきはらったようすで、ただ、こうこたえるばかりだったのです。

「われらはおまえたちを通すよう、たのまれたまで……。それ以上のことは、われらは、おまえたちに、なにも与えない……」

「そ、そんな……」ロビーはがっくりと、力を落としてしまいました。あわててライアングメルからおりて、ロビーにかけより、ロビーのうでを取って心配そうにかかえます（そのあとほんとうならやみの精霊にむかって、「けちーっ！ 教えてくれたっていいじゃーん！」っていつてやりたいところでしたが、こわいからやめておきました）。

「さあ、いけ……。出口は、このさきにある……」

やみの精霊がそういつて、道をすうつとあげました。そのさきには、まっ黒いやみで作られたトンネルがひとつ、その口をあけていたのです。

「精霊よ。」とつぜん、ベルグエルムが意をけつしたように、やみの精霊にいました（このときにはベルグエルムもフェリアルも、馬からおりて、ロビーのそばに集まっています）。「われらはこれから、さいごのしれんのときをむかえます。ロビーどのは、こ

のアー克蘭ドのきゆうせいしゆ。われらのきぼうです。」

ベルグエルムはロビーの方を見てから、ふたたびやみの精霊にいいました。

「精霊王の名のもとに、お願いします。ロビーどのに、あなた方の力を！ かれについて知っていることがあるのなら、ぜひとも、それを教えていただきたい。どうかかれに、道をおしめしてください！」

ベルグエルムは頭を下げて、やみの精霊にお願いしました。これはもう、かけでしかありませんでした。やみの精霊にこんなことをたのむなんて、ふつうなら考えられないことでした。へたをしたら、いのちまで、うばわれてしまいかねないのです。ですがベルグエルムは、ロビーのその痛いほどの思いを、よくわかっています。ですからこんな危険をおかしてまでも、ロビーのために、力になってやりたいと思つたのです。これはまったく、いつもれいせいちんちやくなベルグエルム、らしからぬことでした。ですがそれは、ほかの仲間たちだって、同じだったのです。

「そ、そうです！」フェリアルがつづけていいました。「これは、このアー克蘭ドのみにいかかわる、だいじなことです！ 精霊王だって、このくにのことを、心配しているんでしょう？」

「そうだ！ フェリーのいう通り！」ライアンももう、やけくそになつてつづけました。「知っているんなら、教えてください！ ロビーのことについて！」

「みんな……」

ロビーは、おどろきとかんげきで、胸がいつぱいになってしまいました。みんながこんなにも、自分のことを気にかけてくれていたなんて……。ロビーにはもう、それだけでじゅうぶんすぎるほどでした。

さあ、やみの精霊たちは、どうこたえるのでしょうか？

やみの精霊たちはしばらく、なにもいいませんでした。めらめらと、黒いほのおのようなそのからだをゆらして、旅の者たちのことをじつと見つめているばかりでした。

旅の者たちには、とてつもなく長い時間がすぎたかのように思えました。自分のしんぞうのぼくぼくという音だけが、ずつとなりひびいていました。そしてそれから、ようやくのことで。やみの精霊たちが、みんなのそのうったえにこたえたのです。

「人というのは、おかしなものだ……。なぜ、助けあったり、いがみあったりするのかわれらには、とうてい、りかいができません……」

やみの精霊は、ぴりぴりと、いなすまのような火花をちらしていいました。

「だが、おまえたちのその思いは、買ってやろう……。ロビーベルク、おまえはすぐに、おまえ自身のことを知ることになるだろう……。あとは、おまえしだいだ……」

そういうとやみの精霊たちは、ひとりまたひとり、そのすがたを消していききました。「待つてよ！ それだけ？」ライアンが思わずさげびましたが、精霊たちにまた、口を「じゃああつ！」とならされて、「すいませんっ！」とちぢこまってしまいました。

こうして、あとには谷の出口へとつづく、まっ黒なトンネルだけが残されたのです。

旅の者たちはしばらく、その場にぼーっと立ちつくしているばかりでした。谷の中は、しんと静まりかえり、なんの音も、生きもののけはいすらも感じられませんでした（地面をはつていた小さな生きものたちや、のそのそと動きまわっていた人のかたちをした影たちも、どこかへいってしまったようでした）。

とつぜん、やみの精霊たちとの出会い。よそうもしなかったできごと。そして今では、目の前にベーカールランドへとつづくトンネルがあらわれて、自分たちのことをむかえていたのです。これでは、いくらなんでも頭がこんらんして、ぼーっとなつてしまうのもむりはありません。ですがここでこのまま、ぼーっとしているわけにもいきませんよね。とにかく、なにがなんだか？ わけがわかりませんでした。目の前にこうして、谷の出口が口をひらいているのですから。

さあ、馬に乗つて！ 考えるのは、あとにしましょう！

「ロビーどの、今はとにかく、この谷をぬけてしましましょう。」ベルグエルムが、かれのはい色の騎馬に乗りこみながら、ロビーに声をかけました。「この出口がいつまでひらいているのかも、わかりません。」

「そ、そうだ！ とじちやつたら、たいへんですよ！」フェリアルもそういつて、「ひええ……！」とあわてて、自分の騎馬に乗りこみました。

「ロビー。」ライアンが、まだぼーっと立ったままのロビーに、よびかけます。「今は、前に進むしかないよ。さんねんだけど……」

ロビーはそんなライアンの顔を見て、小さく「うん、ありがとう。」とこたえました。「さあ、いくぞ。ここをぬければ、ペーカーランドだ！」

ベルグエルムが大きな声で、みんなにむかっていいました。そしてみんなを乗せた騎馬たちは、そのまっくらなやみで作られたトンネルの中へとむかつて、いちろ、飛びこんでいったのです。その出口のさきにつづく、旅のもくてき地。めぎす、ペーカーランドへとむかつて（ちなみに、フェリアルだけはまた、「こんなに暗くて、だいじょうぶなんですか……？」 ひよつとして、中に、おぼけかなにかが……）といつてぐずりました。が、すぐにライアンに、「いいからさっさといきなよ！」と足でおしりをけっこう強くけられて、あわてて中にはいりました。

「うわわわーっ！ なんなの、いったいー！」

トンネルの中に、ライアンのひめいがこだましました！ いったいなにごとでしょう！ ですがひめいを上げたのは、ライアンだけではなかったのです。みんなでした！

「ぎゃああー！」「なんだなんだ！」「うわあーっ！」

そのトンネルをしばらく進んでいくと、やがてかなたのさきに、明るい光が見えました。ですが、「やったー！ 出口だ！」とみんながよろこんで馬の足をはやめようとした、そのとき……。とつぜん、足もとの地面が、ぐにやーり！ うねうね！ 動きはじめたのです！ これではいくらなんでも、たまったものではありません。みんなはひめいを上げながら、なんとか馬から落っこちないようにふんばるので、せいっぱいになってしまったというわけでした。

まずはじめから、このトンネルはおかしなトンネルでした。トンネルの中はまっくらでしたが、中にはいると、ふしぎと、つづく道のようすがみんなにはわかったのです。そしてなによりおかしかったのは、その道の感じよく。トンネルの地面はまるでかためのスポンジケーキみたいで、ぐにゅぐにゅ、ぱほぱほ、していたのです（ロザムンディア

のまちのかびだらけの道も、こんな感じでしたが、このトンネルの道は、あれよりもつとぐにゆぐにゆでした。ですからみんなは、はじめから、いやーなよかんがしていました。そしてやつぱり、そのいやなよかんがてきちゆうしてしまったのです。

「みんな、ふんばれ！　なんとか持ちこたえるんだ！」ベルグエルムがひっしになって、さげびました。

「そ、そんなこといったってー！　ひええー！」ライアンもそういつて、あわてふためいてメルをあやつりつづけけます（うしろのロビーも、もうライアンにしがみつくのにひっしでした！）。

「うわわ！　た、助けてー！」フェリアルはすでに馬から落っこちて、地面にあおむけにころがって、手足をじたばたと動かしていました（地面がやわらかかったので、けがはしなくてすみましたけど）。

そのとき。うねうね動いていた地面が、また静かになりました！　これはチャンス！　さあ、今のうちです！

「急げ、出口まで、かけるんだ！」

ベルグエルムがさげびましたが、みんなはもう、いわれるまでもありませんでした。急げ急げ！　旅の者たちは、今まででいちばんかもうというくらいひっしになって、さきに見えているその出口の光へとむかって、いちもくさんにかけていったのです（フェリ

アルも、あわてて馬にもどつて、「おいてかないでー！」とひっしでみんなのあとを追いかけてました。

「やった！ ぬけたぞー！」

そしてみんなはついに、その光の出口をくぐってトンネルのそとへと飛び出しました。

そこは両がわを岩かべにはさまれた、山道でした。岩のまじったほそい道が、さきの方までつづいております。あたりは夕方ももう、おそかったころ。夜のとばりにつつまれつつあるころでした。空にはすでにきらきらと、いくつかの星がかがやいております。ですが今、旅の者たちには、ゆつくり星をながめているよゆうなどはありませんでした。トンネルを飛び出したみんなは、まずまつさきに、とんでもないものを見てしまったのです。

トンネルを出て、みんなはすぐに、今出てきたトンネルの出口の方をふりむきました。そこでかれらが見たものは……！

まつ黒い、巨大ないつぴきのへびでした！ ですがへびといっても、頭も目も、なんにもありません。あるのはただ、たくさんのきばのなんだ、大きなまるい口だけ！

そのへびが今、その大きなからだをぐいん！ とよじらせながら、自分のすあなへともどろろとしてるところだったのです！

みんなはすぐにかいしました。たった今、自分たちが飛び出してきたトンネル。それはトンネルなんかじゃなかったのです。そう、みんなはこのへびの「口の中」から、そとに飛び出してきました！（どうりで道がぐにぐにやっていたはずです！ なにせ、へびのからだの中でしたから！）

「うわわわーっ！」みんなはいちもくさんに、つづく小道を走っていききました。そしてようやく、ぜいぜいと息を切らしながら、もういちど、へびのトンネルの方をふりかえったのです。

へびはさいごに、からだをぐるん！ とひるがえして、まつ黒なあなの中へと消えていくところでした。おどろいたのは、へびにはしつぽがなかったということでした。しつぽのかわりに、なんとそこにも、きばのなんだ大きな口があいていたのです！ つまりこのへびは、そのからだの両がわに口があるということでした。そのからだの中を通っていけば、これはまさしく、トンネルです！ やみの精霊の谷には、なんておつかない生きものがあるのでしょうか！ みんなはぶじにそこからそとに出ることができて、今心の底からほっとしていました。とにかく、さいごのさいごまで、はらはらどきどきしつぽなしでしたが、かれらはこうして、このおそろしいやみの精霊の谷をぬけることができたのです。

あたりはしんと静まりかえっていました。空気はぴんと張りつめていました。

ここはベーカールランドの北に広がる、くにぎかいの山の中。旅の者たちは今、その山の中の、どこかの山道にいるはずなのです。

「とにかく、道のひらけたところをさがそう。」ベルグエルムがいました。「ここがどこなのか？　まずは、それをたしかめなくては。」

みんなはしばらく、岩かべにかこまれたそのせまい山道の中を進んでいきました。もうすぐおひさまも、かんぜんにしみきってしまいます。あたりがすっかり暗くなってしまう前に、みんなはなんとか、ベーカールランドのくにのみやこまでたどりつきたいと思っていました。

「これは、どういうことだ？」ふいに、ベルグエルムが空をながめながら、ふしぎそうにいいました。

「やみの精霊の谷にはいったときも、星は同じ高さにあつた。そのときから、星がまったく動いていない。」

ベルグエルムのいう通り、空にかがやく星の高さは、みんながやみの精霊の谷にはいったときとまったく同じでした。ベルグエルムは谷にはいるとき、その星の高さを見て、時間をきつちりとかくにんしていました。そのときも今も、同じ星の高さ、黒ユピユピのこくげん。夕方の五時ぴつたりのころの時間だったので（黒ユピユピとは

シープロンドにむかうとちゆうにいた白いユピユピの仲間で、夕方の五時ころになると、ぴーぴーないて自分のすあなにもどつていくので、この時間の名まえとなりました。

じつはこれは、なんともふしぎなことでしたが、やみの精霊の谷では時間がすぎませんでした！ つまり旅の者たちは、谷にはいったそのしゅんかんには、へびの口から、ほんたいがわのこの山道の中へと飛び出してきたというわけなのです！（ですから星もまったく動いていませんでした。）ですけどそんなこと、みんなにはわかるはずもありませんよね。まさか自分たちが、時間をすつ飛ばして、ここへやってきただなんて！（もつともそれは、ほんのすこしの時間だけでしたけど。せいぜい十分とか十五分とか、そのくらいです。ベルグエルムはそのわずかな時間のあいだに動く星のへんかにも、ゆだんなく注意をくばりつづけていました。さすがはベルグエルムです。)

やみの精霊の谷というところは、ほんとうにおかしなところでした。そこにはいつて出てきましたから、旅の者たちはじつに、きちょうなたいけんをしたのだといえることでしょう。ですけど……、やつぱりそれは、谷にはいったことのない、ほかの人たちから見たときの話。じつさいに谷にはいつて出てきたかれらにとつては、とても「自分たちはきちょうなたいけんをしたのだ！」なんて、ほこらしげに思うことなどはできなかったのです。このやみの精霊の谷をぶじにぬけることができた今。みんなはそろつ

て、こう、その思いをのべるばかりでした。

「こんなけいけんは、もう、これつきりでじゅうぶんだ！」

やがてまわりをかこんでいる岩かべが、前の方でとぎれているのがわかりました。そのさきは見晴らしのいい、高台になっているようです。旅の者たちは、よろこびいさんで、馬の足をはやめました。そこから見渡せば、自分たちが今どこにいるのか？ わかるはずです。

そしてその場所に立ったみんなは……。

「おお……！」 「すごい！」 「あれが……！」

「やったあー！」 ライアンがさけびました。

そこは切り立ったがけの上でした。がけの下には、大きな森が広がっております。そして山道は、がけの上のこの場所から、西の海の方へとむかっておりていました。

ですが、そんなものよりもなによりも。みんなをよろこばせたそのいちばんのものが、森のむこうのかなたに、そびえていたのです。

「エリル・シャンディーン！」

ロビーをのぞく三人が、いつせいにさげびました。それは、ベーカーランドのみやこの名まえ。そしてその名まえのもととなった、美しいお城がそびえていたところ。

そう、みんなの目に飛びこんできた、そのみやここそ、この旅のもくてき地。アルマーク王のいるお城のある、ベーカーランドのみやこ、エリル・シャンディーンだったのです！（そして、よかった！ ワットの黒の軍勢は、まだこのエリル・シャンディーンにまでは、せめこむことができていないみたいです。エリル・シャンディーンのまちなみも、お城も、ベルグエルムたちがここを出発したときのままでした。これも旅の者たちが、すばらしく早く、ここにたどりつくことができたからこそでしょう。）

「すごい！ ショートカット作戦、大せいこうー！」ライアンが思わず、さげびました。

もうみんなは、びっくりするのとよろこぶので、大いそがしでした。ベルグエルムとフェリアルはおたがいのうでをがっしりとくみあつて、それぞれのけんとうをたたえあいます。ライアンとロビーは、もうだきあつて、わーわーよろこびあっていました。

海の方からまわっていけば、五日はかかるといわれていた、この西の地の道のり。時間がなく、やむを得ないけつだんだんだったとはいえ、やみの精霊の谷をぬけることは、旅

の者たちにとって、ほんとうに危険なかけでした。その危険なかけに、旅の者たちは、みごと勝ってみせたのです。それも、大しゅうり！ここにやってくるまでに、ロザムンディアのまちから、二日とたっていませんでしたから！（ライアンのいう通り、まさにシヨートカットです！）

「ついにやりましたね！ ついにここまで、やってこられた！」

ロビーがうれしそうに、ベルグエルムとフェリアルふたりにいいました。ですがふたりは、ロビーのその言葉にすぐにはこたえず、ただしんけんまなざしをして、ロビーのこのことを見つめるばかりだったのです（今までうれしいムードまんてんでしたのに、どうしたのでしょうか？）。

「ロビーどの。」ベルグエルムがまじめな顔をして、ロビーにいいました。「わたくしのかかるはずみなおこないを、どうかおゆるしくください。へたをすれば、あなたのいのちまです、うばわれかねなかった。このベルグエルム、一生のふかくです。」

ベルグエルムはそういつて、ロビーに深く頭を下げました。

ベルグエルムのかかるはずみなおこないというのは、さきほどのやみの精霊たちに対する、かれの思いきった行動のことでした。ほんらいなら、やみの精霊たちにあんなお願いなんで、ぜったいにするべきではありませんでした。もしかれらを怒らせたなりなどすれば、それこそほんとうに、いのちまでうばわれてしまいかねないのです。そんなこと

はベルグエルムは、だれよりもよくわかっていました。ですけど……。

ベルグエルムはあるとき、どうしても、自分の気持ちをおさえることができなかつたのです。

ロビーのことを思いやるあまり、ロビーやみんなを危険な目にさらしてしまった、みずからのかかるはずみなおこない。そのおこないのことを、ベルグエルムは今、しっかりと、ここでロビーにあやまらなくてはならないと思いました(すぐにいわなかつたのは、自分たちが今どこにいるのか？　まずはそれをたしかめなくてはならなかつたからでした)。

「隊長だけじゃありません！　わたしもです！」フェリアルがそういって、ベルグエルムとならんで、ロビーに頭を下げました。

「ぼくだって。ごめんね、ロビー。」ライアンもまた、ロビーにぺこりと頭を下げます。

ですけどそんなの、ロビーが気にするはずがありません！　そのぎやくです！

「や、やめてください！　とんでもないです！」ロビーは「あわわわ……」と手をまごまごさせて、みんなに頭を上げてくれるようにたのみました。

「ぼくのためにいってくれたこと、ぼくは、すごく、うれしかったです。ぼくなんかの

ために……。ぼくのことを、みんながそんなに、気にかけてくれていたなんて……。ぼくは……。ぼくは……」

ロビーは言葉につまってしまいました。もう、なにをいつたらいいのか？ わかりませんでしたし、なにより、もう、なにも、言葉がいえなくなってしまったのです。

「うわああん！」

ロビーは声を張り上げて、泣いてしまいました。えつく、えつく。のどがもう、いっぱいにつまってしまつて、言葉が出ませんでした。

ロビーはいっぱい泣きました。息もできないくらいでした。ずっとひとりですごしてきた、これまでの長い長い日々……。それらのことが、みんなわき上がってきて、それがいつきに、かれの胸の中でぼくはつしてしまつたかのようにした。

みんなの前で、げんきにふるまつてきたロビー。ですがかれの心のおく底には、いぜんとして、いいようのないさみしさが残つていたのです。これまでの旅の中で、ロビーには、たくさんの友だちができました。大好きな仲間たちもいっしょです。ですけどロビーの心の中には、まだひとつだけ、自分の手のとどかない、あこがれのような思いが、いつまでもみたされることなくそんざいしつづけていました。

ひとりぼつちで、なん年もなん年もすごしてきたロビー。そんなロビーのことを心からだいに思い、助けてくれる、みんな。りっぱでたよりになるベルグエルム。ちよつ

と不安なところもあるけれど、親しみの持てるフェリアル。そしておおかみ種族とひつじの種族、すがたや背かっこうもぜんぜんちがうのに、心から思いあえる、だいいじないじな友だち、ライアン……。

ずっとしんらいしてきた仲間たちでしたが、ロビーはこのとき、きつと、心からのほんとうの意味で、かれらとかたいききずなでむすばれたのです。それこそが、ロビーの心の中に長年に渡ってそんざいしつづけてきていた、そのあこがれの思いにほかなりませんでした。

それはかれの、まだ知れぬ自分の家族に対する、思いだったのです。

家族とのつながり。家族と同様のつながり。ベルグエルム、フェリアル、ライアン、かれらはロビーの、ほんとうの家族ではありません。でもロビーにとつて、かれらはロビーのほんとうの家族と同じくらしいの、とくべつなそんざいでしたから……。

「ごべんなざい……、うれしくて……、ぼくは、ずっと、ひとりだったから……、うれしくて……。ありがとうございませ……」

ロビーは息をつまらせながら、みんなに心からのかんしやの気持ちをあらわしました。ロビーはだれかに自分の気持ちを伝えることなんて、うまくありませんでした。今まで、そんなことのできる相手もいませんでしたから。ですけどロビーは今、せいっぱいの気持ちをもって、今までのことや、みんなの思いに対して、そのすなおな自分の

心を伝えたのです。

「ロビーどの……」

ベルグエルムはただひとこと、そういいました。かれにはロビーの気持ちは、もうみんなわかっていました。ベルグエルムはロビーのそばによりそって、そして親しい友にするかのように、ロビーの肩に手をおいて、静かに自分の気持ちを伝えました。ロビーはいい伝えのきゆうせいしゅ。みずからのつかえるべき相手です。ですがかれらの心のあいだには、もうそんなかべなどは、なにもありませんでした。

「なに泣いてんの、しょうがないなあ。よしよし。」ライアンはロビーの頭に手をのばして、いいいいいことなでてあげました。

とそのとき……。

「うええくん！ ロビーどの〜！」

「え？ なに？」ライアンがびつくりしてふりかえると、すっかり感きわまつてもらい泣きしてしまつたフェリアルが、ロビー以上に声を張り上げて泣きながら、両手を上げて、こつちにつつこんでくるところだつたのです。

「わわっ！ ちよつと！」ライアンがあわててメルをひっぱつて、ひよいとかわして、フェリアルは馬ごと、岩かべにどつちくん！ ぶつかつて、地面に落つこちてしまいました（なんだか前にも、こんなことがあつたような気がします……）。

「だ、だいじょうぶ？ フェリー。」ライアンが心配してたずねると、フェリアルは地面にうつぶせにたおれたまま、「だ、だめ……」とこたえました（よかった。どうやら、だいじょうぶみたいです）。

そのすがたに、ロビーは思わずのどをつまらせながら、「えつく、あはは、えつく、あはは。」と泣いて笑ってしまいました。そしてライアンもベルグエルムも、やれやれといった感じで手を上げながら、ロビーといっしょになつて笑つたのです。

こうして、かたいきずなでむすばれあつた仲間たちは、ここに、旅の大いなるもくてき地であるベーカーランドのみやこ、エリル・シャンディーンへとむかつて、ふみ出していったのです。エリル・シャンディーンまでは、馬でいけば、もう一時間とかからないほどのきよりでした。

と、その前に……。旅の者たちはこの場所で、とある相手に出会つたのです。といっても、それは人ではありませんでした。鳥です。空高く、一羽の白いかもめがゆうゆうと飛んでいたのです。そしてそれは、ただのかもめではありませんでした。そのかもめはベーカーランドのみやこではたらいている、ゆうびん屋さんのかもめだったのです。

「あれは、エリル・シャンディーンのゆうびんかもめだ。」ベルグエルムが空を飛ぶそのかもめに気づいて、びいーつと口ぶえを吹きました。「わたしたちがもどつてきたと

いうことを、急ぎ、城へと伝えてもらおう。」

その口ぶえにこたえて、かもめがふわーっとこちらへやってきて、そしてみんなの足もとに、ばささつとおり立ちました。首からは手紙をいれる、黒いかわのかぼんを付けております。そして足には、ゆうびん屋さんのマークがはいった、こがね色のわっかが取りつけられていました。

「マイド、ゴリヨウ、アリガトゴザマース！」

「うわっ！ 鳥がしゃべった！」

とつぜんの声に、ロビーがびつくりしていいました。ですけどみんなは、ぜんぜんおどろいていません。ライアンが「あはは。」と笑って、ロビーにいいました。

「鳥じゃなくて、これ。これがしゃべってるの。」ライアンがそういつてゆびさしたさきには、かぼんの前にはめこまれていた、ひとつの青い宝石がありました。その宝石がぴかぴか光って、しゃべっていたのです。

「これは、魔法の石なんだ。かんたんな会話なら、この石としゃべることができるんだよ。」

ライアンの言葉に、ロビーは思わず「へええ！」と感心してしまいました。やつぱり自分の知らないくというところには、ふしぎなものがあるものです（ちなみに、ライアンは「おとぎのくにじやあるまいし、鳥や動物がしゃべるわけないじゃない。やだな

あ、ロビーは。」といって「あははは。」と笑っていましたが、みなさんの世界の人たちからいったら、なんだかいろいろ、うくん……、といった感じですね……。」

ベルグエルムが紙とペンを取り出して、城への手紙を書き、かもめのかばんにしまいました。

「フツ、デスカ？ ソクタツ、デスカ？」青い宝石がしゃべります（そくたつというのは、早く手紙をとどけてほしいときに使うものです）。

「そくたつでたのむ。」ベルグエルムがそういうと、宝石がすかさず、こっぴどいきました。

「ソクタツハ、五デニルデース！」

「た、高い……」

これはどういうことか？ といいますと……。デニルというのは、アークランドで使われているお金のたんいで、その下にリル、上にシリルというたんいがあります。リルは銅貨（銅でできたコインのことです）で、銀貨であるデニルの百ぶんの一のかちです。シリルは金貨で、デニルの十ばいのかちがあります（わかりやすくまとめると……、一シリル＝十デニル＝千リル、となります。思わぬところで、わたしのきらいな算数のベんきょうになってしまいました……）。

そくたつのりょうきん五デニルというのは、銀貨が五まいのこと。銀貨一まいでおいしいパンが十こ買えるくらいのかちがありますので、そくたつのりょうきんで、パンが

五十こ買えてしまうわけなのです。ですからみんな、こう思ったというわけでした。「た、高い……」。

ですけどここは、しかたありませんね。ベルグエルムが（しぶしぶ）お金をかもめのかばんのポケットにいれると……、かもめは、ばささつとはばたいて、エリル・シャンディーンの方へとむかって飛んでいきました。思わぬしゅっぴでしたが、とにかくこれで、旅の者たちがお城のすぐそばにまできているということ、みんなに知らせることができたわけです。

道をおりていくにつれて、たくさんの木々があたりにあらわれるようになりました。それらはみんな、南のくにベーカーランドのあたりによく見られる、ドリアード・パインとよばれる木でした。この木には、やしの木のような大きな葉っぱが育ち、そして夏になると、大きなパイナップルのような実がみるので（それは、みずみずしくてとてもおいしく、このあたりの人たちの大好きなものでした）。

ちなみに、ごかいのないようにいっておきますが、ベーカーランドは南のくにといっても、それはアークランドの南に位置しているというだけのことなのであって、なにもほんとうに、トロピカルなイメージの南のくにというわけではありません。やしの木みたいなのドリアード・パインの木が、たくさん生えていましたので、そう見えないこ

ともないのですが……)。大むかしには、山のむこうのよろこび平原のあたりには王国があつて、そこにはなんと、パイナップルのようなすがたをした森のたみが暮らしていたさうでした。今ではかれらは、もつと南のあたたかい地へうつつてしまつたさうですが、かれらが育てていたこのドリアード・パインという木々だけは、今でもこうして、この地に残っているというわけなのです。

「なつかしい。もうずっと、この地をはなれていたような気がする。」

海からのしお風をほほに受けながら、ベルグエルムが思わずさういいました。かれらがこの地を出発したのは、ほんとうに、ついこのあいだのことのはずでした。でも、ふたたびここへもどつてきた今日のこのときまでに、ほんとうに、いろんなことがありましたから！

「ぼくは、もつとなつかしいよ。前にここへきたのは、四年も前のことだもん。」ライアンがつづけていました。ライアンのいう通り、かれがはじめてこのベーカールランドの地をおとずれたのは、四年前、かれがまだ、十さいばかりのころのことだったのです。ベーカールランドとシープロンドはとも仲のよくにどうしで、なん年かにいちど、それぞれのにの王さまを自分のくににまねき、大きなかんげいのもよおしをひらいていましたが、そのもよおしに、ライアンもそのときはじめて、ついていったというわけでした（ですがそのときのライアンは、かんげいの式てんなどそつちのけで、ベーカール

ンドのめずらしいお菓子にむちゆうでした……。しかもつぎの日からは、朝からばんまで、はじめて見る海であそびたおしておりましたので、くの中にのようすのことについては、あんまりおぼえていなかったのです。うくん、やっぱりライアンは、むかしから変わっていないみたいですね……。

そしてもちろん、ロビーにとつては、ここはまったくもってはじめての土地でした。ペーカールランドのみやこだというエリル・シャンディーンのことでも知りませんでしたし、このくににどんな人たちが暮らしているのか？ ということについても知りません（かなしみの森のとしよかんで古い本を読んだり、みんなからもすこしだけ、このペーカールランドのことをきいたりしてはいましたが、やっぱり読んだりきいたりするのと、じっさいにその場所にいったりしてみるのでは、ぜんぜんちがいますから）。ですけどロビーは、このくにのすばらしさをすでにじゆうぶん、りかいできていました。それはかれの心からの仲間、ベルグエルムとフェリアルルの、ふたりのおかげにほかならなかったのです。こんなにすばらしい人たちがいるんですもの、かれらの今住んでいるところも、いいところにきまっています！（ライアンのくにシープロンドが、すばらしいところであったように。）

ロビーは心をはやらせました。いったいこれから、なにが待ち受けているんだろう？ それはこのあと、王さまに会ってみないことにはわかりません。ですがロビーにはも

う、まよいなどはありませんでした。自分の運命に、全力で立ちむかっていく。それがどんなにくるしく、つらい運命であろうとも。ロビーはだれよりも強いかくごを、その胸にいだいていたのです。

「さ……この丘だ。ここを越えれば、エリル・シャンディーンだぞ。」

先頭をゆくベルグエルムが、みんなにいいました。そしてみんなはどうとう、その地へとたどりついたのです。

「うわあ……！ す、すごい！」

ロビーは思わず、言葉をつまらせてしまいました。ライアンも、ひさしぶりに見るその光景にため息をもらして、あらためて感心してしまっただけでした。

そこに広がっていたのは、まさしく、おとぎの世界そのものでした。白いつばなじょうへきによつてかこまれた、エリル・シャンディーンのまち。そしてそのおくにそびえる、宝石のように美しいお城……。それはまるで、いだいな魔法によつて生み出された、ひとつのかがやく島のようなでした。まちそのものが、目に見えないしんぴ的な力によつて守られ、かがやいているかのようなのです。まさしくここは、せいなる場所。このアーランドの中でも、もっともとくべつな場所のひとつ。このみやこを見た者は、だれでもそう思うはずです（たとえそれが、ワットの黒の者たちであつてもです）。まずなによりもはじめに目に飛びこんでくるものは、やはり、その美しいお城でした。

海の色のまじったかがやく白い石でつくられていて、それらがまるで、水のように、ぴかぴかにみがき上げられていたのです（シープロンドのたてものに使われている白いれんがもこんな感じでしたが、このエリル・シャンディーンの白い石は、まるで石そのもののにのちがやどっているかのような、そんなふしぎな感じがするのです）。

お城はいくつもの階に分かれていて、それぞれの階のさかい目には、お城のまわりをぐるりとかこむようなかたちで、青いすいしようにつくられたたくさんのかくのかざりものが、取りつけられていました。それらのかざりものの、その輪のようにつながつたすがたは、まるで王さまのかぶるかんむりのようでした。エリル・シャンディーンのお城は、上から下まで、大小全部で七つもある、このような青いすいしよのかんむりよつて、美しくかざられていたのです（ですからライアンは、はじめてこのお城を見たとき、「まるで七だん重ねのデコレーションケーキみたい！」といつて大はしやぎしたそうです）。

そのあちこちには、青いやねをいだいた塔がつき出ていました（ですからライアンは、はじめてそれらの塔を見たとき、「まるでケーキにさしたろうそくみたい！」といつて大はしやぎしたそうです）。そしてそれらの塔のてっぺんには、青いはたがつけられ、そこにはベーカークラントのくにもんしようである「青い宝玉をいだいた白い女神のすがた」がえがかれていたのです（このもんしようは、白の騎兵師団であるベルグエルムと

フェリアルルの着ている服にも、ぬいつけられていました。それとはべつに、かれらの服には、かれらの祖国であるレドンホールの「おおかみと剣をあしらったもんしよう」もぬいつけられていたのです。

このお城の美しさもそうですが、おどろくのはそればかりではありませんでした。ここにはそれと同じくらいに心をうばわれる、なんともおどろきのものがあったのです。

お城の東がわには、エリル・シャンデーンのみやこまちがずっと広がっていました。そのまちの中には、たくさんのきよらかな水の流れが、あみの目のようにかよっていました。それだけなら、なにもふしぎではありませんでしたが……、よく見ると、その水の流れのうちのいくつかが、とちゆうでとまっています、なんと、水がそこから、空へとむかって流れているではありませんか！　そしてその水が流れついている、そのさきには……。

島です！　エリル・シャンデーンのみやこまちの上には、たくさんの小さな島が、ぷかぷかと浮かんでいました！

いったいこれは、どういうしくみになっているのでしょうか！　水はその島へとむかって流れ、その島のさらに上に、白い雲を作り出していました。そしてべつの島では、その雲から雨がふって、その雨はたきとなって、下の川へとふりそそいでいたのです。うん、ファンタジー！　まさにこれは、魔法でした！

「エリル・シャンディーン。われらのまちです。」ベルグエルムが、おどろいているロビーにいいました。そしてベルグエルムは、つづけて、ロビーがふしぎに思っているだろうことについても、かんたんに説明してくれたのです（それは同時に、読者のみなさんに対しても説明になりますね）。

「このまちは、かの大けんじや、ノランドのの力をさずかっているのです。あの島が浮いているのも、ノランドのの魔法の力によるもの。その力が、たくさんの水の流れをあやつり、この地を水のひがいから守っているのです。」

へええ……！　そういうことなんですか！　って、わたしがロビーといっしょに感心している場合ではありませんでしたね。すいません、ちゃんと説明します。

大けんじやノランド。その名は精霊王と同じくらいゆうめいで、このアーケランドに住んでいる者ならば、だれでも知っている名まえでした。はい色のおひげのおじいさんですが、そのほんとうのねんれいはだれにもわかりません。見た目は人間ですが、ほんとうに人間であるのかどうかさえもはつきりしません。いつもどこかへ出かけていて、じつさいこのエリル・シャンディーンのまちにも、年になん回かもどってくるだけで、ほとんどいないのです（うわさでは西の大陸ガランタの、そのまたずつとむこうのくににまでいって、たくさんのたいへんなしごとをこなしているというものでしたが、だれもそれを、たしかめることもできませんでした。そんなに遠くちや、だれもついていけま

せんでしたから)。

ベルグエルクムやフェリアルでさえ、ノランに会ったことは数えるほどしかありませんでした。きたとしても、王さまにあいさつだけしてすぐに帰ってしまうことがほとんどでしたので、会えないことの方が多のです。ですからノランというのは、すごい力を持つたいたいなけんじやでしたが、こんなふうには、とてもなぞの多い、くわしいことはだれも知らない、なんともふしぎで、しんぴ的な人物でした(なにしろ大のつくけんじやなんですから、なぞが多いのもとうぜんですよ。ふつうのけんじやたちでさえ、とてもなぞが多く、わかりづらい人たちなんです。カルモトみたいに……。)。そのノランのかけた守りの魔法の力が、このエリル・シャンデーインのまちを、すっかりおおっていたというわけだったのです。

「また、ノランどのが、力を貸してくださいといのですが……」

フェリアルが、ひとりごとのようにいいました。それはベーカールランドの人たちみんなが、思っていたことでした。ですけどノランには、いつもたくさんいたいへんなしごとがあつて、つねに力を貸してくれるとはかぎらないのです。

「われらにできることは、できるだけわれらでおこなう。ノランどのが、いつもおつしやつてのことだ。」ベルグエルクムがエリル・シャンデーインのまちなみをながめたまま、フェリアルにいいました。フェリアルは心配そうな表じようをしたまま、ベルグエ

ルムとならんで、まちのようすをながめております。

「だが、」ベルグエルムがこんどは、フェリアルの方をむいてつづけました。「われらの力をこえるとき、ノランドのは、いつも助けてくださる。心配するな。」

その言葉に、フェリアルは顔を上げて、げんきを出してこたえました。

「そ、そうですよね！」

そしてベルグエルムは、フェリアルに静かにほほ笑んでみせると、馬のたづなをしつかりとにぎりしめ、みんなにむかっていったのです。

「さあ、ゆうびんかもめの手紙も、もう、とどいているはず。急ごう。」

しずみゆくおひさまの今日のさいごの光をあびて、白いまちは、まるでおうごんのようにかがやいています。そして今、そのまちの門のそとに、同じようにこがね色の光をあびてきらきらとかがやく、三頭の騎馬たちに乗った四人の旅の者たちが、たどりついたところだったのです。そう、ついにみんなは、ベーカーランドのそのかがやけるみやこ、エリル・シャンディーンへとやってきました！（今は、まちがほんとうにかがやいていました。）

みんながたどりついていたのは、まちの北がわの門でした。めざすお城はそこからさらにさき、まちのいちばんおくの、小高い丘の上にあるのです（それならまちの門じゃなく

て、はじめからお城の門までいけばいいじゃないか、って思われるかもしれませんが、これにはわけがありました。お城のあるその丘は、まちの広がる東がわの部分がいはい、すべて切り立ったがけになっていたのです。ですからお城までいくためには、まずまちの門をぬけて、まちの中を通っていく必要があります。もしみんなが空を飛べる生きものに乗っていたのなら、がけを飛び越えて、ちよくせつお城のバルコニーにまでいけるんですけど。

北門は、まちのいちばん大きな門である東門にくらべると、それほど大きくもありませんでした（それでもロザムンディアのまちでライアンがぶっこわした門よりも、大きかったです）。白い石のきれいなアーチがかけられていて、美しい木目の木のとびらには、ベーカーランドのくにもんしようが大きく浮きぼりになっております。とそんなことをロビーとライアンが、しげしげとながめておりますと……。

ぐ、ぐ、ぐ、ぐ……。

そのとびらがとつぜん、重くてにぶい静かな音を立てながら、こちらがわへとむかつてひらきました。それはちょうど、ベルグエルムとフェリアルふたりが、その門に近づいたときのことだったので（まさか自動ドア？ いえいえ、そうじゃありません。もつともこの魔法のまちなら、そんな門もありそうですけど）。

ひらいた門のむこうから、白いよろいに身をかためた、ふたりの人間の兵士たちがあ

らわれました（そしてもちろん、今しがたとびらをあげたのは、このかれらでした）。手にはかれらの背だけほどの長さの、白いやりを持っております。そしてその兵士たちは門の前にきちつとせいれつすると、ベルグエルムとフェリアルフェリアルのふたりにむかつて、ベーカールベーカールの敬礼をおくりました（ウルファのくにレドンホールレドンホールの敬礼は、こぶしを胸の上にあわせるというものでしたが、ベーカールベーカールの敬礼は、手のひらを胸のちよつと上にあわせるというものでした。あまり変わらないような気もしますが、やっぱりそれぞれ、ちがいがあのです）。

「よぐで、いぶじで……。われら一同、お帰りを心待ちにしておりました。」

兵士たちが、ベルグエルムとフェリアルフェリアルのふたりにいいました。その声はおだやかでしたが、とても気持ちのこもった、あつい言葉でした。そう、かれらは旅の者たちももうすぐ帰ってくるとのしらせを受けて、門の上の見張り台で、今か今かと、みんなのことを待ちわびていたのです（みんなが帰ってくるというしらせは、あのゆうびんかもめによって、しつかりとお城まで伝えられていたのです。さすが、五デニル五デニルもはらつただけのことはありますね）。

「お出むかえ、かたじけない。」ベルグエルムがそういつて、兵士たちにベーカールベーカールの敬礼をかえしました（ベルグエルムたちウルファの騎士たちは、相手にあわせて、ふたつの敬礼を使い分けていたのです）。

兵士たちが深くおじぎをしてから、その言葉にこたえます。

「われらすべて、心得ております。どうぞ城へ。みな、待ちわびておりますぞ。」

兵士たちはそういって、みんなを門の中へとまねきいれました。そしてみんなが通つてしまうと、門はふたたび、ぐ、ぐ、ぐ……、と静かにしめられたのです。

「馬は、ここにをおあずかりします。城のうまやまで、おとどけしましょう。」

兵士たちはそういって、みんなにさよならをつけて、騎馬をひいて去っていきましました……。

え？ きゆうせいしゆであるロビーがはるばる北の地からこうしてやってきたというのに、ずいぶんあっさりした出むかえなんじゃないかって？ たしかに、出むかえの兵士たちもふたりしかいませんでしたし、かれらの反応も、ずいぶんとあっさりしています(シープロンドでは出むかえの衛士たちに、「きゆうせいしゆだ、きゆうせいしゆだ」とロビーのいごこちが悪くなってしまったくらい、さわがれてしまいましたよね。そのせいですつかり、ライアンのごきげんをそこねて、おしかりを受けてしまったくらいです)。ふつうだったら、こんなに重要なにんむをこなして帰ってきたみんなですもの、きゆうせいしゆであるロビーといっしょに、もつとはでに出むかえて、パレードで城まで送つていったとしても、おかしくないくらいでした。ですけどこれには、ちゃんとりゆうがあつたのです。

じつは、ベルグエルムたち四人の騎士たちが北の地まできゆうせいしゆのことをむかえにいくという、こんかいの旅のにんむのことは、お城の人たちがいいには、まったくのひみつになっていました。つまりきゆうせいしゆがここにやってくるだなんていうことは、このエリル・シャンディーンのまちの人たちは、ぜんぜん知らなかったのです。

なぜ、ほかのくにの人たちにならまだしも、自分のくにのまちの人たちにまで、ロビーのことをひみつにしておかなければならなかったのか？ それはこのエリル・シャン

ディーンのまちが、とても大きなまちだったからでした。大きなまちですから、このまちにはさまざまなくから、たくさんの人たちがやってくるのです。その人たちがみんな、口のかたい、「ひみつはぜつたいに守る！」という人たちならいいのですが……、じつさいそうもいきませんよね（それにワットのていさつの者たちが、すがたをいつわって、このまちにもぐりこんでいないともきりません）。きゆうせいしゆがあらわれた！

北の地にいるらしい！ 白の騎兵師団の騎士たちがむかえにいつて、このエリル・シャンディーンの地にまでつれてくるそうだ！ なんて、かれらがいろんなところにふれてまわったりなどしてしまつたら、それこそ、たいへんなことになってしまいますもの。

ロビーのそんざいが、敵であるワットや、そのほかのあまり好ましくない者たちにとって、知られてしまつたらどうなるか？ かれらはあらゆる悪だくみを考えて、自分たちにとつてじやまなそんざいである（または自分たちのつごうのいいようにりするこ

とのできる)ロビーのことを、あの手この手でうばい取ろうとしてくることでしょう。そうなっていたとしたら、こんかいのこの旅も、まことに、おぼつかないものになってしまっていたはずです。ですからきゆうせいしゆであるロビーや、こんかいのこのひみつの旅のことについては、(きぼうを待ちのぞんでいる人々には、ほんとうに申しわけないので)ぜったいのひみつにしておかなければなりませんでした。

つまりそんなわけで、出むかえの兵士たちもぜんぜんさわぎ立てることもせず、みんなを残して、静かに去っていったとしましたというわけなのです(ほんとうはかれらだつて、もつとさわぎたかつたし、いろんなこともききたかつたのです。ですがかれらはみな、お城のえらい人たちから、「くれぐれも、さわいだり、よけいなことをきいたり、しないように。」ときつく、とがめられていました。そのうえ兵士たちといっしょにいると目立ってしまうということで、みんなにつきそつていくことさえ、できなかつたのです。兵士さんたちも、たいへんなんです)。

と、その前に……。

みんなはエリル・シャンデーンのまちについたら、兵士たちにすぐに、きいておきたいことがあります。それはきつと読者のみなさんも、みんなと同じくらい、気がかりに思っていたことだと思えます。

ベルグエルムが歩き去つてゆく兵士たちのことをよびとめて、そのだいじなしつもん

をしようといくをひらきました。

「われらの前に……」

「リア先生たちは、お城にいるの？」ライアンがすかさず、ベルグエルムの腰をぐいっとおしのけて、兵士たちにたずねました（おかげでベルグエルムは「うわわ！」とよろめいて、あやうくころげそうになってしまいました。そして兵士たちも、ライアンが四年前にきたシープロンドのちびっこ王子さまだとは気づきませんでしたので、そろつてあつけに取られた顔をして、こう思えばかりだったのです。

このひつじの子は、だれなんだろう……？）。

リア先生たち。そうです、ロビーたちといっしょにシープロンドを出発した、もうひとつの旅の仲間たち。かれらはロビーたちをこのベーカーランドの地にまでぶじに送りどけるために、敵の目をひきつけることのできる、危険な南への道のりを進んできました。じゅんちように進めれば、かれらの方がロビーたちよりもさきに、このエリル・シャンディーンのみやこまでたどりつけるはずでしたから（ロビーたちがシープロンドを出発してからこのエリル・シャンディーンにつくまで、三日と半分以上かかったわけですが、南の街道をじゅんちように進めれば、シープロンドからここまで、二日と半分でたどりつけるわけなのです。ですからふつうに考えれば、レシリアたちの方が、まるいちにち以上、さきにここへたどりついているはずでした。馬の足でまるいちにち

以上というのは、けっこうな時間です。

「白の騎兵師団の、ハミールさんと、キエリフさん。それと、ふたりのシープロンの人たちです。ぼくたちといっしょに、シープロンドを出発したんですけど……」ロビーがつけたして、説明しました（リア先生ついていったって、ペーカーランドの人たちには、いったいだれのことだか？ わかりませんもの）。

さあ、兵士たちのへんじは？ 南の街道を進んでいった仲間たちは、もう、お城についているのでしょうか？

ですが、兵士たちからかえってきたへんじは、とてもざんねんなものだったのです。

「いえ、もどってきたのは、あなた方だけです。れんらくも受けておりません。」
兵士たちはそういつて、ペこりと頭を下げて、騎馬とともに去っていきました。

残されたみんなの表じようは、なんともいいがたいものでした。仲間たちはまだ、きていない。みんなはだまって、おたがいの顔を見あわせました。

「やはり、敵の目がきびしいのでしょうか？」フェリアルが、ベルグエルムにいいました。その言葉を受けて、ベルグエルムはしばらく考えこんでいましたが、やがてその場のみんなにむかって、いいました。

「かれらには、シープロンのわざと、騎士のほこりがある。そうやすやすと、敵にやぶ

れたりなどはしない。なにかのりゆうで、おくられているのだろう。」

ベルグエルムがそういうと、みんなの気持ちはすこしらくになりました。でもひとりだけ、まだぜんぜん、気持ちのせいりがついていない者がいたのです。それはライアンでした。ライアンはリア先生ならぜったいに、自分たちよりもさきに、このエリル・シャンディーンにまでたどりついていると思っていたのです。それで「おそいですよ！」としかられるものとばかり、思っていました（それに、しゆくだいの山もかくごしていたのです）。

「きつと、思った以上に見張りが多かったんだと思う。だからまだ、こつちまでこられないんだ。」ロビーが心配になって、ライアンにいいました。ライアンはしばらくだまっていたましたが、やがて「うん。」とうなずいて、ロビーの方を見ていいました。

「そっか。リア先生たちも、たいへんだらうからね。しょうがないかな。」

ライアンはそういって、両手を頭のうしろにくんで、なんでもないといいたようにぶらぶらと歩き出しました。ですがライアンは、こんなふうにはいきなようすをよそおってはいましたが、ほんとうはリア先生たちのことを、すごく心配していたのです。ロビーにはそのことが、すぐにわかりました。そしてこんなときのライアンのことをいばんげんきづけてあげられるのは、自分なのだということも、わかっていたのです。

ロビーはそつとライアンによりそって、げんきな言葉でいいました。

「へいきだよ。だって、リア先生って、こわそうだったもの。敵がいっぱいいたって、みんな、やつつけちやうでしょ？」

ライアンは思わず、えっ？ といった顔をして、ロビーのことを見やりました。そしてそれからすぐに、「ふふっ。」と笑って、いったのです。

「よく、わかっているじゃない。先生のこわさっていったら、それはもう、シープロンドいちだからね。」

「こわいものなし？」ロビーがいました。

「こわいものなしだよ。」ライアンがこたえます。

ロビーとライアンはそういって、「あはは。」と笑いあいました（そんなロビーとライアンのことを見て、ベルグエルムとフェリアルも、おたがいの顔を見あって、静かにほほ笑みあいました）。

「かれらのことを、信じよう。」ベルグエルムが、みんなにいました。

「仲間を信じて、今は、さきに進むべきとき。いこう。みなが、われらを待っている。」そのベルグエルムの言葉に、みんなはしつかりとうなずいてみせました。

こうしてかれらは、そのさきにつづくベーカーランドのお城の門をめざして、気持ちもたしかに、このエリル・シャンデーインのみやこまちの中へと歩み出していったのです。

なんとという美しいみやこなのでしよう！ このみやこをはじめておとずれた者は、みなロビーと同じように、ただただ「ふええ……！」と感心してしまうばかりのはずです。みやこの中は、ほかのまちとはあきらかにちがう、ふしぎな美しさにあふれています（やつぱりできるかぎり、その美しさをみなさんにお伝えできるようにがんばりますが、わたしの表げん力のたりなさを考えていただいて……、そのあたりは、ごかんべん願いたいと思います……。うまく言葉でいいあらわせないのが、わたしもくやしいのです！）。

まずたてものはすべて、お城と同じ、海の色そのままの白い石できていて、やねもお城のやねと同じ、青い石をくんでつくられていました（つまりまちのたてものはすべて、お城と同じざいりようからつくられた、同じ色のたてものでした）。それらのたてものが高さも同じくきれいにそろっていて、それだけでも美しいのですが、おひさまがしずみ、あたりがだんだんと暗くなっていくにしたがって、その石たちがみな、ほんわりとした、やさしい光を放ちはじめていったのです。

それはお城も同じでした。お城全体が、ろうそくの光のようなあわくほんのりとした光を放ち、まるで夢の中の世界であるかのような、げんそう的な光景を生み出していたのです（じつさいロビーは、その美しさに見とれるあまり、思わずぼーっとしてしまっ

て、ライアンに「起きてる？」といわれて腰をたたかれて、ようやくはつとわれにかえつたくらいでした）。

石から生まれるその光は、まちを流れる水にも、美しくうつりこみました。そしてまちのそこから見た、あの空にむかつて流れていく水です。ロビーはまぢかでそれを見ましたが、もう言葉もありませんでした。空にむかつてすいこまれるようにさらさらとのぼっていく、すいしょうのつぶのような水の流れ。たてものの石から生まれる光が、それにすいこまれて、あわさつて、ひとつとなつて……。光、影、水、すべてのものが、まるで紅茶にまぎっていくミルクのように、ひとつとなつて、このまちに美しくとけこんでいたのです。これはしぜんのままの美しさをほこるシープロンドとは、またべつの美しさでした。エリル・シャンディーンの美しさは、人の手によるわざによつて、作り出された美しさといえることでしょう。そしてその通り。このみやこの名まえ、エリル・シャンディーンというのは、このくにの古い言葉で、「人の手によつてみがかれた、かがやけるすいしょう」という意味の言葉だったのです。まさに、このみやこの名まえに、ぴつたりですよね（ライアンはやつぱり、「まあ、シープロンドの方がすてきだけどね。」とロビーにいつていました）。

そのほかにも、まちの中はたくさんのふしぎでめずらしいもので、あふれていました。なにしろここは、このアーケランドの中でもいちばんというくらい、大きなまちです。

さまざまなくからたくさんの人や品物たちが、やってくる場所でもありました（お城の西がわには大きなみなともあって、西の大陸ガランタからの船も、ここにはやってきました）。ですが今は、それらのふしぎなものたちのことを、ひとつずつ見学しているわけにはいきません。ロビーたち旅の者たちは、いつこくも早く、お城へとむかわなければなりませんでしたから。

そういうわけですから、まちの中のようなことについては、全部しよりやくして……、というわけにも、やっぱりいかないですよね。せつかく、こんなにしてきなまちにきたんですもの、いろいろ見てまわってみたいのも、とうぜんでしょう。ですからここでちよつとだけ、読者のみなさんのために、このまちのふしぎなものたちのようすのことをごしよかいしておきたいと思えます。でもとても全部はしよかいしきれませんから、ほんとうにちよつとだけですよ（ごめんね！）。

まずまちのまん中の通りには大きな川が流れていましたが、その川の上、十五フィートほどの高さのところに、大きさが三フィートほどしかない小島がいくつも浮かんでいました（まちの空に浮かぶ島の、まさにミニチュアといった感じでした）。それらの小島はふわふわぷかぷかと、あつちやこつちにただよつていて、そしてそれらの島から島へ、にじ色の水がびゅんびゅん、いつたりきたりをくりかえしていたのです。ですがふしぎなのは、それだけじゃありません。そのにじ色の水が島から島へとうつるとき。空中の

キャンバスに、星や、花や、いちごや、わんちゃんなどのすがたを、つぎつぎにえがき出していきました！（ほんとうにふしぎです！　まるで魔法みたい！　魔法ですけれど！）

川の両がわには、たくさんのお店がならんでいました。それらのお店には、さまざまなくにのめずらしい品物が、ずらりとならんでおります。見たこともないような食べものや飲みもの。きれいな石のお守りに、アクセサリ。小さな魔法のくすりびん。魔法の本やまきもの。ふたりで戦ってあそぶカードゲームのカード（ちびっ子に大人気！）。モンスターどうしを戦わせてあそぶ、小さなモンスターが飛び出してくるコイン（ちびっ子に大人気！）。それに、しゃべって動く、三インチほどの小さな人形や、ぬいぐるみ、などなど。じつにさまざまなお品物がならんでいました（どんなところにも、こういうお店を見てまわるのは楽しいものです。ですけどこれらのお店をみんな見てまわっていたら、時間がいくらあってもたりないことでしょう。わたしもそのうちまた、時間を作って、これらのお店をじっくりと見てまわりたいものです。わたしの好きな、古い物語をもとにしたゲームをあつかった店なんかも、ありましたけど……）。

ちなみに、ライアンは、「時間がないからだめ。」といってみんながとめるのもきかずに、「これだけはゆずれない！」といって、ひとつのお店の中にはいついていてしましました。そのお店とは……、そう、お菓子屋さん！　そこはエリル・シャンディーン名物

の、白いやき菓子売っているお店だったのです。じつはライアンはこのまちへついたら、まずぜったいにこのお菓子をかう！と心にきめていました。そのお菓子はエリル・シャンディーンのお城のかたちをかたどった、白いもちもちの生地のお菓子で、中にクリームがたっぷりはいっている、とつてもおいしいお菓子だったのです。その名もずばり、「エリル・シャンディーンやき」！（そのまんまですな。）ライアンはこのときのために持つてきていたお金をみんな使つて、そのお菓子をかばんにどつさり、買いこみました（いくら使つたのか？ということについては、みなさんのごそうぞうにおまかせします……。きつと、そくたつの手紙が、なん通も出せることでしょうか……）。

また、まちの中には、いろいろな（へんてこな）ものが飛びまわっていました。ブリキでできたふくろうが、「明日ノ、オ天気ヲ、オシラセシマス！」と浮かんでいるかと思えば、「タツキュウビン！」とさけぶにもつが、どこかの家をめぐらして急いで飛んでいくのです。がつきを持った三人ぐみのくまさんのぬいぐるみたちが、ゆうめいな音楽家の作った新しい曲を、じゃかじゃかならして、飛びまわっていました（かれらはミュージックベアーといって、どんなえんそうでもかれらにいちどきかせれば、そつくりそのまま、まねをしてえんそうすることができました（もつともかれらは、えんそうのまねをしているだけなのであって、じつさいは、そのからだの中にくみこまれた魔法のスピーカーから、音がなっていましたけど）。エリル・シャン

ディーンの人たちは、こうして、遠くはなれたところにいる音楽家の新しい曲を、自分たちのまちで大きくできたのです。やっぱりエリル・シャンディーンって、すごいまちですね！。

そしてさきほど山道で出会った、あのゆうびんかもめたちも、まちの空をいそがしく飛びまわっていました。今日いちにちのさいごのびんの手紙を、だれかのところへとどけてまわっているのでしょうか（かもめさんたち、今日もいちにち、おつかれさま！）。

このほかにも、いろいろめずらしいものはつきませんでした……、きりがありませんね。まことにさんねんではありませんが、まちのしょうかいは、このくらいにしておきましょう。さあ、物語のつづきです！

みんなはまちをぬけ、お城までの道のりを急ぎ進んでいきました（ライアンはさつそく、エリル・シャンディーンやきにしあわせそうにかぶりついておりましたが）。まちのいちばんはしつこを越えると、そこはいちめん、みどりのしばふになっていました。まちとお城のあいだには、このような、きれいなみどりのしばふがつくられていたのです。そのしばふにつくられた、こがね色のれんがの道が、アルマーク王のいるお城までつながっていました（ちなみに、エリル・シャンディーンというのは、ほんらいこのお城のよび名でした。それがいつしか、このみやこ全体の名まえとして広く知られるように

なつたのです)。

こがね色のれんが道のわきには、いくつものあかりがともされてきました。白い石でつくられたとうろうの上に、とうめいなすいしようがおかれていて、そのすいしようが白くかがやく光を放って、道をてらしていたのです。みんなはその光にみちびかれて、そのれんが道をお城の入り口へとむかつて進んでいきました。そして、お城の入り口が見えてきたころ……。

ばばばばー！　　ばばらっぱー！

とつぜん、お城の入り口の方から高らかならっぱの音がひびいてきました。それは……、そう、旅の者たちのことを出むかえるための、かんげいのらっぱだったのです(あれ？　でも、さわがないようにするってはずじゃ……)。

入り口の前には、すでにたくさん兵士たち(この中には白の騎兵師団の騎士たちもふくまれています)がならんでいて、旅の者たちのことを今か今かと待ちかまえていました(その数は、ざっと百人以上もおりました)。みんな、旅からもどつた白の騎兵師団の者たち、そしてかれらのつれてきたきゆうせいしゆどののとうちやくを、ほんとうに心待ちにしていたのです(ライアンがいつしよだということはみんな知りませんでした

ので、かれらはライアンのことは待つてはいませんでした。その点では、ライアンにはごめんなさいです。

ところで、出むかえの者たちはほんとうなら、まちの入り口の門までいつて、帰つてくる者たちのことを出むかえたかつたのですが、旅の者たちのことはひみつにしておかなければなりませんでしたので、このお城の入り口の門で、静かに待つていました。でもやつぱり、これだけの人数です。だまつて静かに出むかえるなんてことは、むりでしたね。みんなすつかりこうふんして、大よろこびでしたから、思わずらつぱまで吹いて、出むかえてしまったというわけでした。

ちなみに、らつぱを吹いた者は、あとでしつかり怒られたそうですけど。

「おおおー!」「ばんぎーい!」「きゆうせいしゆどのだー!」

「ベルグエルム隊長ー! フェリアル副長ー!」

もうみんな、わーわーきやーきやー、大はしやぎでした。きりつのとれたりつぱな兵士たちとはいえ、こんなときにはむりもありません。かれらはまるで子どものようによろこび、もどつてきた者たち、そしてついにやつてきたきゆうせいしゆのことを、心からかんげいしたのです（同時にみんなは、「あのひつじの子はだれなんだろう?」とも

思っていました。やっぱりみんな、ライアンが四年前にきたシープロンドの王子さまだとは、気がつかなかったのです。だって四年前は、ライアンはほんとうに、ちびっ子でしたから。

その中でもとくに大はしやぎだったのは、ウルファの騎士たちでした。白の騎兵師団には人間の隊とウルファの隊、ふたつの隊があるわけですが、こんかいのこの重要な旅をまかされたのは、ウルファであるベルグエルムたちでしたので、ウルファの隊の仲間たちにとって、この旅のせいこのうれしさは、ひとしおだったのです。

ですけど。いくらうれしいとはいえ、これではやっぱり、さわぎすぎてしまったよう
で……。

「全隊！ せいれーっ！」

とつぜん！ まるでかみなりが落ちたかのような、とんでもない大声がひびき渡りました！ いったい、なにごとでしょう！

その声をきいた兵士たちは、人間もウルファも、みんな「あわわわ……」とあわてふためいて、その場にきれいに、れっになって、びしっ！ とならびます。

「おまえたち！ へらへらするんじゃない！」

「はっ！」

声のぬしにむかって、兵士たちはみんないつせいに、敬礼をしてこたえました。そしてかれらがどいた、その道のまん中を通つて、こちらへゆうゆうと歩いてきたのは……。

なんと、女の人ではありませんか！ それもまだ十六、七さいほどにしか見えない、かわいい女の子だったのです！

かのじよは、こがね色の美しいかみを、エメラルド色の大きなかみどめで、両方の耳の上でとめていました。エメラルド色のもようのはいった白く美しいよろいを着いて、腰にはかのじよにはふつりあいなほどの、大きな剣がさしてありました。背中には、大きな白いマントをはおつております。そのマントでからだを大きく見せていましたが、それでもやつぱり、かのじよの小ささは、かくしておけるものではありませんでした。背の高さはライアンよりもひとまわり高いです。五フィートちよつとといったところでしょうか？ かのじよは見た目には、ほんとうにかわいらしい女の子そのものでした。ですけど、さきほどのびつくりするくらいの大声と、きついおしかりの言葉。あれはまぎれもなく、この女の子によるものだったのです（ほんとうにびつくりです！）。

りつばでたくましいこれだけたくさんの兵士たちのことを、ぐうの音もいわせないほどにしたがわせるこの女の子は、いったいなに者なのでしょう？ でもそれはこのあ

と、すぐにあきらかになるのです。

「よくもどられた、ベルグエルムどの。そして、フェリアル。」かのじよはそういつて、ふたりの騎士たちにえしやくをしました。

「そして、そなたが……」つづけてかのじよは、ロビーの方を見ていきました。

「われらがきゆうせいしゆどのに、ほかなりません。」ベルグエルムがかのじよにこたえて、そういいます（ちなみに、ライアンは「ねえ、ぼくは？ ぼくは？」といつて、ベルグエルムに自分をしようかいするようにせつついていましたが）。

「よく、まいられた。王はそなたのことを、心待ちにしているぞ。わたしは、ライラ。ライラ・アシユロイだ。よろしく。」

ライラと名のつたかのじよは、そのあんず色の美しいひとみでロビーのことを見すえながらそういつて、ロビーにあくしゆをもとめました。ロビーはあわてて（手を服のわきでごしごしとこすってきれいにしてから）かのじよの手を取って、あくしゆをします。

「よ、よろしくお願いします。ぼくは、ロビーと申します。よ、よろしくお願いします。」

ロビーは思わずきようしゆくして、同じことを二回もいつてしまいました（さつきのかのじよのこわさを見ておりましたので、怒らせないようにしなくちゃ……、と思つたのです）。

「ロビーどの。かのじよは、わたしと同じ、白の騎兵師団の隊長です。」ベルグエルムがいました。って……、ええっ！ た、隊長？

「ライラどのは、人間の隊長なのです。」

これはびつくり！ なんと、このライラという女の子は、ほかでもありません。白の騎兵師団の、人間隊の方の隊長だったのです！（さきほどもちよつとふれましたが、ここでもういちど、白の騎兵師団のことについて説明しておきますね。白の騎兵師団は、もともとの人間の隊と、レドンホールからのがれてきたはい色ウルファたちによるウルファの隊、ふたつの隊があわさってできていたのです。そしてそれぞれの隊には隊長と副長がひとりずついて、ライラ・アシユロイは、その人間隊の方の隊長でした。そしてもちろん、ウルファ隊の方の隊長は、ベルグエルム・メルサルです。）

ライラが隊長であるということを書いて、ロビーは前よりもつと、きんちようしてしまいました。それにしても……、ベルグエルムなら見た目からしてもすぐに、りっぱでゆうかんな騎士であるということがわかりますので、なつとくなのですが、こんな小がらでかわいい女の子が、これだけ大きなくのに、これだけりっぱな騎兵師団の隊長だなんて、いったいどういゆうりゆうがあるのでしようか？

ですがロビーのそのぎもんは、すぐにあきらかになりました（フェリアルがうしろからそつと、耳うちしてくれましたから）。つまり見た目はまったく、かんけいがないとい

うことだったのです。これはいぜん、シープロンドのメリアン王の言葉の中にもありましたが、人の中身は見た目やねんれいなどは、まったくかんけいがないのです。ライラ・アシュロイが白の騎兵師団の隊長になった、そのいちばんのわけ。それは、たんじゅんめいかい。かのじよがとんでもなく、強いからでした！

剣を持たせたら、だれもライラにかなう者などいませんでした。剣のたつじんのベルグエルムでさえ、じつはかのじよに勝つたことは、いちどもなかつたのです！（ベルグエルムはそのことについて、じつはけっこう、気にしていました……）

もちろんライラは、ただ強いというだけではありません。かのじよは強さのほかに、人なみはずれたはんだん力と、隊をまとめ上げる、すぐれたとうそつ力をもかねそなえていました。そのうえ、このきびしいせいかくと、負けん気の強さ！ かのじよにさからおうものなら……、ぶるる！ 考えただけでもおそろしい！ ですから兵士たちがかのじよにしたがいっぱなしなものも、わかりますでしょう？（もつとわかりやすい例をあげましょう。たとえばフェリアルがライアンにさからつたとしたら、どうでしょう？ たいへんなことになる、すぐにわかりますよね。）

そういつたわけでライラ・アシュロイは、まんじょういっちで、白の騎兵師団の隊長ににんめいされたというわけだったので（もつともそれは、かのじよがこわいからというだけのりゆうでみんなしたがっているというわけでは、けつしてありませんでした

（そのりゆうもかなり大きかったのですが……）。かのじよはたしかに、とつてもこわかったのですが、それと同時に、みんなにとつてもしたわれておりましたし、人気があったのです。のうりよくがすぐれているということもありましたが、それ以上にやつぱり美人でしたから、それもむりはありませんでした。影でひそかに、ファンクラブまで作られているくらいでしたから。ライラに知られたら、たぶん怒られるでしょうけど……）。

「それから、こちらは……」

ここではじめて、ライラはライアンの方をむいてたずねました（「ライ」がかぶつてしまつて、ちよつとまぎらわしいのですが、ごかんべん願います）。その言葉に、なかなかしようかいしてもらえていなかったライアンは、やっと出番だ！ といわんばかりに、ぐいっとロビーのことをおしのけて、ぴよこんと前に出ると、ライラにペこりとおじぎをします。

「こちらは、ライアン・スタツカート。めいゆう国、シープロンドの王子であります。われらとともに、この地まで、旅をつづけてもらいました。」

「シープロンドの……」ベルグエルムのしようかいをきいて、ライラはそうつぶやくと、ライアンにうやうやしとおじぎをしてからつづけました。

「よくぞまいられた。ご協力をかんしゃいたします。」

「いいえ、こちらこそ。ベーカーランドへふたたびこられて、かんげきです。」
はじめてよそのくにの王子さまとしてあつかってもらえたライアンが、うれしそうにその言葉にこたえます。

「かれの協力なくして、この旅は、せいこうなし得ませんでした。ほんとうに、かれには、かんしゃしてもしきれません。」ベルグエルムがライラにいうと、ライアンは「いやー、それほどでも。」とにこにこ笑っていました（あんまりほめすぎると、あとがめんどろそうですが……）。

「それと……」ライラがライアンからしせんをはずし、あたりを見まわしながらいいました（ライアンは、あれ……、も、もう終わり？ とめんくらってしまっておりました）。「二名の騎士たちが見あたらないうが、どうされたのだ？ たしか、ハミールと、キエリフだったな。」

ライラの言葉を受けて、みんなはおたがいの顔を見あわせました。ほんらいこの場に
いるはずだった二名の若き騎士たち、ハミール・ナシユガーとキエリフ・アートハーグ。
かれらがいないわけを、ライラにもすっかりと説明しておかなければなりません（ベル
グエルムがゆうびんかもめに持たせた手紙の内ようは、取り急ぎ、「きゆうせいしゆどの
をつれてあと一時間ほどで帰る」というだけのものだったので、みんなは二名の騎士た
ちがいないことについては、なにも知らなかったのです。ですから出むかえのみんな

は、ベルグエルムたちがやってきたとき、大はしやぎするのと同時に、「ハミールとキエリフはどこだろう?」とも思っていました。「あのひつじの子はだれ?」とも思っていました(けど)。

「かれらは、われらをこの地へとおもむかせるために、敵のおとりとなるやくめを買って出てくれたのです。ここまでの道のりは、ほんとうに、こんなんのれんぞくでした。思いもかけず、ワットの黒騎士たちにも出会ってしまったのです。」

「ワットの……」ベルグエルムの言葉に、ライラはきびしい顔をしていました。その表じようは、なにかそのおく底に、ふくぎつな思いをかかえているかのようにも見えました。

「まさか、ガランドーに……?」ライラがベルグエルムにたずねます。そのようすは今までのかのじよのようすとは、あきらかにちがっていました。いったい、どうしたというのでしょうか?(ガランドーって?)

「いえ、かれではありません。」ベルグエルムが、れいせいにこたえました。「ですが、おそらく、かれの配下の者たちでしょう。かれらは、デイルバグの黒騎士隊でした。」

ライラは、思いをめぐらせているようでした。いったいガランドーとは? それはみなさんにも、もうすこしあとでお話ししたいと思います。

「そうか……」ライラはそういって、深く息をつきました。「ふたりの騎士たちに、敬

「意をあらわす。ぶじであるとよいが。」

「ぶじにきまつてますよ！」ライアンが思わず、口をはさみました。「なんとって、ぼくの先生がいっしょなんですから。リア先生なら、どんな相手だって、こてんぱんにしてくれます！ それだけじゃない。ルースっていう、強い精霊使いもいっしょなんです。」

ライラはちよつとびつくりして、ライアンの方を見ます。

「それは、心強い。」

ライラはそこでちよつとだけ、笑みを浮かべました。

「そうだな。わが、白の騎兵師団の騎士たちに、シープロンドの者たちがいっしょなら、あんずることもあるまい。近々、かれらからも、旅の話を引きくことができよう。」

ライラの言葉に、ライアンはにっこり笑ってみせました。

「リュインとりでのことは、ほんとうに痛ましいことです。」ふたたびベルグエルムが、ライラにいいました。「これから、どう動くべきか？ われらはすぐに、こたえを出さなくてはなりません。」

ライラはベルグエルムにうなずいて、ふたたびきびしい顔にもどつてこたえます。

「王のおちえを、さずからなくてはなるまい。だが、それだけではない。きのうから、城には、心強い仲間がたいがいしている。ノランどのだ。」

「ノランどのが！ お越しなのですか！」

なんと！ さきほどエリル・シャンティーンにくる前に話していた、あの大けんじゃノランが、今ここにきているというのです！

「うむ。西の大しごとには、きりがついたということだな。こたびのいくさには、ノランどのも、力を貸してくださるといふことだ。」

ライラの言葉に、ベルグエルムとフェリアルはおたがいの顔を見あつて、こぶしをにぎりしめてよろこびあいました。

「ありがたい！ きゆうせいしゆロビーどのに、ノランどのまで！ われらは、百万の味方を得た！」（そういうベルグエルムたちに、ライアンがまた、「ぼくは？ ぼくは？」とからんでいましたが。）

ですがライラの顔つきは、きびしいままでした。

「きゆうせいしゆどのよ。」ライラがロビーの方を見て、いいました。「この戦いは、このアークランドのみらいをきめる戦い。そなたには、そのかくごがありますか？」

ロビーはいっしゆん、どきつとしてしまいました。ですがそんなしつもんは、もうロビーには、きくだけむだというものです。ロビーはだれよりも強いかくごと、しんねんを持つていましたから。

「はこ。」

ロビーは力強く、それでいて静かに、心をこめたへんじをかえました。そのひとこのへんじと、ロビーのかたいしんねんのこもった目。それだけでもう、じゅうぶんでした。

ライラは、静かな笑みを浮かべました。そしてお城の方をふりかえり、その歩みをふみ出しながら、さいごにいったのです。

「まいろう。王がお待ちだ。」

ついにこのときがやってきました。こんかいの旅の、たつたひとつのもくてき。アルマーク王に会うということ。そのもくてきのために、みんなはこのつらく危険な道のりを、乗り越えてきたのです。ロビーの心は今、さまざま思いでいっぱいでした。いよいよだ。その足取りは力強く、しっかりとしたものでした。

でもロビーのほんとうの旅は、ここからだつたのです。これから伝えられるしんじつは、ロビーにとって、とてもつらく、重いものとなることでしょう。

ベルグエルムがロビーの顔を見て、うなずきました。ロビーもしつかりと、それにくたえて、うなずきました。

フェリアルが胸に手をおいて、ロビーにウルファの敬礼をおくりました。ロビーも同

じく、ウルファの敬礼を、このすばらしき仲間へとおくりました。

ライアンがロビーの横へきて、ロビーの手を取りました。にこにこ笑うライアンに、ロビーはほっとした気持ちになって、ほほ笑みかえました。

そしてロビーはみんなにむかって、心のこもった声で、ひとこと、いったのです。

「いきましよう。」

さあ。

アルマーク王のもとへ。

17、明かされたしんじつ

今ではもう伝説とまでうたわれた、遠い遠いはるかむかしのお話です。ある日のこと、ひとりの若者がこのアークランドの地にやってきました。もうずいぶんと長いこと、旅をつづけてきたのでしよう。身なりはぼろぼろ。くたびれたかばんを背おい、腰には使い古されたひとふりの剣がさしてありました。かれははるか遠くの南の地から、ここまでなん日もなん日も、なんしゅうかんもかけてやってきたのです。それはかれの見た、ひとつの夢のおつげのためでした。

かれは南の地で、それこそ数えきれないほどの冒険をこなしてきた、冒険者でした。剣のうでは、かなりのものでした（ライラとくらべたらどうでしょうか？ むかしのことなので、今となつてはくらべようがありませんが）。そのかれがあるときとつぜん、夢の中でこんなおつげをきいたのです。

その夢は、青と白の光につつまれていました。そしてその光の中から、青い光をいだいた、とても美しい女神がひとり、あらわれたのです（そのあまりの美しさに、かれは思わず、「これは夢か？」と思つてしまつたほどです。夢でしたけど）。そしてその女神が、かれにこんなことをつげました。

「北に、そなたの運命の土地があります。そこは、アーケランドとよばれるところ。そこへゆきなさい。そなたはそこで、おくりものを受け取ることになるでしょう。そしてそなたは、王になるのです。」

女神はそれだけいうと、光のむこうへと去っていきました。「待って！」かれはさげばしましたが、女神はそのまま、青白い光となつて消えていってしまいました。

目がさめたとき。かれはもうふにつつまれて、小さなほらあなの中にいました。かれははじめ、自分がどこにいるのか？ わかりませんでした。そしてしばらくののち。きのうの夜、自分が冒険のとちゅうで、このほらあなにひとり、野宿をしたということをおい出したのです（ちなみに、その冒険とは牛やひつじをぬすんで悪さをするという、いたずらようかいのすみかにふみこんでいって、こらしめるといふものでした。ひがいにあつた村から、冒険のいらいを受けたというわけだったので）。

かれはほらあなから、そとへ出ました。朝でした。鳥がちゅんちゅんないています。まぶしい光が、かれの顔にさんさんとふりそいできました。

かれは丘の上に立って、かなたの景色をながめました。はるか北のほうかくに、切り立ったたくさんの山々が見えていました。あの山のむこうに。みずからの運命の場所、アーケランドという地があるということです。かれは思わず口もとをゆるませて、にやりと笑いました。

「アークランド……」

そしてかれはにもつをまとめ、北へとむかつて歩きはじめたのです（いたずらようか
いのことなんて、もうきれいさっぱり忘れてしまっているみたいでした。村人たちの、
「そりやないよー！」という声がきこえてきそうですが……）。

かれの名は、イエヒユリー・ペーカー。この名まえをきけば、読者のみなさんもぴん
ときたことかと思えます。そう、かれはのちに、ペーカーランドのしよだいの白きいだ
いなる王とよばれることになる、伝説のイエヒユリー・ペーカー王、まさにその人です
た！（このイエヒユリー王のことについては、ロビーのほらあなでベルグエルムの話の
中に、いちどだけ名まえがでてきました。レドンホールのいい伝えのことについて、説
明していたときのことです。）

イエヒユリーはアークランドのその地で、女神のおつげの通り、あるものを受け取り
ました。それがなんだか？ みなさんにはもうおわかりでしょう。それはベルグエル
ムの話の中に出てきた、このアークランドをまとめ上げることのできるという、力のみ
なもと。よこしまなる魔法使いアーザスが、ねっしんにほしがっている、とくべつな力。
そう、それこそが、ペーカーランドの王城に代々受けつがれ、かたく守られつづけてい
る、いちばんの宝物、青き宝玉だったのです。

イエヒユリーは宝玉を受け取った地に、自分のくにくをつくると心にきめていました。

そしてそれこそが、このアークランドでいちばんのみやこをかまえるまでにさかえることとなった、げんぎいのベーカーランドなのです（ベーカーさんがつくつたから、ベーカーランド。なんてわかりやすい！ これは自分のくには自分の名まえをつけて、みずからのそんぎいを世の中の人たちに広く伝えたいという、イエヒユリーの強い思いがあつたからでした。かれはなかなか、目立ちたがりなところがあつたみたいですね。

ちなみに、ほかにもくのに名まえを見てみますと……、シープロンたちのくにだから、シープロンド。これもとつてもわかりやすいですね。それからウルファたちのくに、レドンホール。この名まえには、「こがね色にかがやく思い」といった意味があるそうです。そしてワット。これは、「手を取りあつて力をあわせる者たち」という意味がありました。その通りに、みんなと力をあわせられたらよかつたんですけど。

こうして、夢のおつげはすべてほんとうのことになりました。イエヒユリーは王となり、そしてそのすぐれた力をぞんぶんにはつきして、このアークランドをへいわにまとめ上げてきたのです。それから数世だいのち。このアークランドがおそろしいやみにつつまれることになるなどは、だれもよそうすらしていませんでした。

「ふええ……い！」

ロビーは思わず、ため息をついてしまいました。ここは、エリル・シャンディーンのも

お城の中。仲間たちはアルマーク王に急ぎ会うために、お城の中を進んで、上の階へとつづく大かいだんのあるこの大広間まで、やってきたところだったのです。

そのかいだんの大きいこと！　そして美しいこと！

まずお城の門をぬけて中にはいったそのしゅんかんから、ロビーはずっと、ため息のれんぞくでした。地面やかべの白い石は、みんなオレンジ色のあわい光を放っていて、その石だたみの上を歩くと、足でふんだその部分から、ぱあつ！　とオレンジ色の光のこながまいちるのです（ロビーは思わず、オレンジ色の光の精霊がそこにいつぱい飛んでいるんじゃないかと思って、ライアンにそうきいてしまいました。これはあくまでも魔法の力なのであって、精霊とはやっぱりちがうそうでした。でもロビーにとつては、どっちもふしぎなことに、変わりはありませんでしたけど）。

そんな白くてオレンジ色の石だたみの道をあんないされて、さらに門をくぐり、かいだんをのぼり……、ようやくたどりついて中にはいったところが、この巨大な白い大広間。そしてそのおくにそびえる、あつとう的なまでのはくりよくをほこる、この大かいだんだったのです。

それはまるで、巨大な白いたきのようでした。そしてじつさい、この大広間は、水と海をイメージしてつくられていたのです。床はいちめん、白と海の色のタイルでおおわれていました。そしてはるかなてんじょうまでのびる、たくさんの白いはしら。それぞ

れのはしらからは、すんだ水が伝い落ちていて、はしらの下に美しいみを作っていました。そしてあちこちにつくられた、たくさんのふんすい。それも、ただのふんすいではありません。ふんすいの上には、よくみがかれた石でつくられた、魚のちようこくが乗っていました。その魚のちようこくが、ふんすいの上から空中へとむかつて、ゆらゆらとおよいでいって、その口からかがやく銀色の水を吹き出していたのです（そして水を全部吹き出してしまおうと、またもとのふんすいにもどって、新しい水をたくわえました）。

あちこちを流れる、やさしい水の音。それがこの広間全体に、美しくひびき渡っていました。もしこの広間のまん中に寝そべって、目をとじたとしたら、自分がまるで、海の中をただよっているかのように思えることでしょう（そしてきつと、二分もたたないうちに寝てしまうはずです）。ここはそんな、美しくやさしい場所でした。ですが、やっぱりそれでも。この目の前の大かいだんのことを見てしまったら、この広間の美しさも、かすんでしまうというものです。

その横はばだけでも、ゆうに七十フィート以上はあることでしょう。そしてその高さといったら……！（ここでみなさん、けんじやカルモトの住んでいた、あの巨大なルイズの木のことを思い出してみてください。このかいだんはまさに、それと同じほどの大きさだったのです！）

とうめいな石（石かどうかもわかりませんが）でつくられたかいだんが、らせんじょうになって、はるかな高みへとむかつてつづいていました。見上げると、ずうつと上の方に、かいだんのいちばん上がつづいてるのが見て取れます。そしてかいだんのとちゅうにも、全部で五つの、張り出しろうかがつながつていました。これはエリル・シャーンデーインのお城の階の数と、同じでした。今いる場所が、お城の一階部分。いちばん上が、王さまのいる（という）七階。そのあいだに、五つの階があるわけです。つまりこの大かいだんは、このエリル・シャーンデーインのそのまん中にあつて、お城のすべての階をひとつにむすんでいる、とつてもだいいじなかいだんだというわけでした。

「これで、七階のえっけんの間までいどうします。どうぞお乗りください。」

ベルグエルムとライラがさきにかいだんにのぼり、ベルグエルムがロビーをまねいていきました。いわれてロビーが、「あ、はい。」といて、あわててそのかいだんをのぼります（さつきからずっとロビーは、このかいだんのりつぱさに気を取られつばなしでしたので）。ライアンとフェリアル、そしておともの兵士たちがふたり、それにつづきました。

そしてロビーがさらに、かいだんをのぼつていこうとすると……、ベルグエルムが手でロビーのことをせいして、とめました。見ると、ベルグエルムもライラも、かいだんをすこしのぼつたところで立ちどまつていて、それ以上のぼつていこうとしないので

す。いったいなぜ？

「ロビーどの、このまま、ここでお待ちを。今、動かしますのです。」

「え？」

ベルグエルムの言葉に、ロビーはきよんとして、その場に立ちつくしてしまいました(動かすって?)。うしろを見ると、ライアンがにこにこして立っております。フェリアルも、「びつくりしないでくださいよ。」とうれしそうにいうだけでした。

「アローイン、フェルク。」

ベルグエルムがかいだんの手すりに手をおいて、いいました。すると……! !

「うわわわっ! !」

ロビーが乗っているその足もとのかいだんが、とつぜん、すごいはやさで動きはじめたのです! ! いったいこれは! ! どうなってるの?

なんと、このかいだんは、じつは、あい言葉をいうことによつて動く、魔法のかいだんでした! ! このかいだんを使う人は、自分のいきたい階のあい言葉をいうことによつて、その階まであつというまにいくことができます。さすがエリル・シャンデイン! ! すごいかいだんがあるものですね! ! (ちなみに、上にいくときには「アローイン」、下にいくときには「フローイン」といつてから、いきたい階の番号をいうと、このかいだんは動きましました。ロビーたちがむかうさきは七階でしたから、アーランドで七をあ

らわす「フェルク」という言葉を、ベルグエルムはいったというわけだったのです。「アローイン、フェルク」とは、つまり、「七階までのぼれ」という意味になりました。」

魔法のかいだんはぐいぐいと動き、ロビーたち一行は、らせんかいだんをどんどんとのぼっていききました（ロビーのことをびつくりさせようとして、このかいだんのしかけのことをだまっていたライアンが、「おどろいた？ おどろいた？」としきりにロビーにからんでいました。ですがそういうライアンも、四年前、はじめてこのかいだんに乗ったとき、すぐおどろいたのです。ライアンのことをおどろかせようとして、メリアン王もまた、このかいだんのひみつのことをライアンにだまっておりましたから）。そしてさつきまでいた広間が、あつというまに、はるか下に見えるようになって……。

ちーん！

すんだ高いベルの音をならして、かいだんはふわつとした感じにとまりました（乗っている人がころばないように、ふわつととまるのです）。

ところで……、ベルの音は、どこからなっているのでしょうか？ じつはベルグエルムも知りませんでした。ロビーたちはこうして、あつというまに、アルマーク王のいるお城の七階までやってきたのです。

かいだんをおりと、そこはまたしても大きな広間になっていました（このお城はどこへいっても大広間だらけでした）。その広間から、ぴかぴかにみがき上げられたはば

の広い石のろうかが、ずうつとむこうの方にまでまっすぐのびていたのです。そのろうかの両がわには、同じくぴかぴかにみがかれた白いはしらが、二十ヤードおきくらいに、左右にいっぽんずつきれいにならんで立っていました。そしてはしらとはしらのあいだには、左右ともに、白いやりを持った兵士たちがひとりずつ、背すじをぴーん！とのぼして、きちつとならんで立ちつくしていました。それらの光景が、ろうかのつづくかぎり、はるかむこうの方にまで、ずらーつとえんえんとつづいていたのです（いったい兵士たちは、なんんくらいいるのでしょうか？ はしらはさきが見えないほど、ずうつとむこうにまでのびていましたから、すくなくとも百人以上はいるはずですよ。うーん、ごくろうさまです）。

この場所が、なんなのか？ それははじめてここにきたロビーにも、すぐにわかりました。こんなふうになっすぐのびるろうかのまわりに、立ちならんだ兵士たち。そうです、ここはまさしく、王さまに会うための、えっけんの間とよばれるところでした。ですからここをまっすぐ進めば、そのさきに、王さまのすわるぎよくざといういすがあつて、王さまがいるはずなのです。ですけど……。

なんて長いろうかなのでしょうか！ お伝えしました通り、王さまがいるはずのろうかのはしは、さきが見えないほどの、はるかむこうでした。ですからここを歩いていくだけでも、じつにたいへんだったのです！（じつさいこのろうかは、長さが半マイルもあつ

たのです！　いくら大きくてりっぱなお城とはいえ、これではやっぱり、長すぎですよね！　じつはこれは、王さまのえっけんの間は、アーケランドいち大きくて、ごうかけんなんなものにしたという、しよだいイエヒユリー王の願いがあらわされていました。どうもイエヒユリー王という人物は、りっぱな人でしたけど、ちよつと、みえつぱりなところがあつたみたいですね……)

ですけどここは、歩いていくしかありません(この床は、魔法で動いてくれる床というわけではありませんでしたから)。一行はベルグエルムとライラを先頭に、ロビーとライアン、フェリアル、おともの人間の兵士がふたり(ルーリック・レスネルとアラングル・ローシーという名まえのふたりでした。まあ、おぼえてもらう必要はないんですけど……)というじゅんばんで、このぴかぴかの石の床の上を、かつんかつんとくつ音をならしながら歩いていきました(とここで……、みなさんも「そんなの変じやない？」と思われたかもしれませんが、ここにはおかしなところがあつたのです。いくら大きなお城とはいえ、たてものの中にこんなに長いらうかがあるなんて、やっぱりおかしいですよ？　ふつうに考えたら、半マイルもあるらうかなんて、お城のそとにまで飛び出してしまはずです。じつはこのらうかは、魔法のらうかで……、といたいたいところでしたけど、そうではありません。このらうかは長いというだけで、ほかはまったく、ふつうのらうかでした。つまり……、このらうかは、じつさいに、お城のそとにまで飛

び出していたのです！

それってどういうこと？ それは王さまのぎよくぎのある、その場所のせいでした。王さまのぎよくぎがあるのは、なんと、お城の中ではなくて、お城から半マイルもはなれた塔の上だったのです！ このろうかがこんなにも長いのは、そのためでした。このろうかはお城の七階からぎよくぎのある塔へといくための、長い長い、つり橋みたいな空中ろうかだったのです！ ひええ、こわい！ でもこのろうかには、まどはありませんが、やねもかべもついておりましたので、じつさいに渡っているロビーには、まさか自分が、空中をつないでいるろうかの上を歩いているだなんて、ぜんぜんわかっていませんでした。まあ、知らない方がいいでしょうけど……。

(そんなおつかない空中ろうかを)半分くらい進んでいったところで(そしてロビーが百人目の見張りの兵士さんにあいさつしたところあたりで)、ようやく道の終わりがかくにんできるようになりました。道の終わりとは、つまり王さまのぎよくぎのあるところです。ですがまだ、はるかむこうでしたので、ぎよくぎは豆つぶくらいにしか見えませんでした。そしてそれよりもなによりも、すぐにそれとわかるあるものが、そのぎよくぎのうしろに、ででーん！ とそびえているのを、ロビーは見たのです。

それはとてつもなく大きな、女神のぞうでした。すき通るようなミルク色の石をほつてつくられていて、胸の前にさし出された両の手のひらからは、たくさんの光がこぼれ

落ちていました。背中には、天使のような大きな羽がふたつ、つけられております。そしてなにより、その美しくおだやかな表じよう。それは見る者の心をしずめ、おちついた気持ちにさせてくれる、まさに女神のようなほほ笑みの表じようでした（女神ですけど）。

その女神のすがたに、ロビーはすっかり心をうばわれてしまいました。まだずいぶんとはなれているというのに、そのあつとう的なまでのそんざいの力が、ひしひしと胸に伝わってきたのです。

「女神リーナロッドのぞうです。」ベルグエルムが、ロビーの方をふりかえっていいました。「ベーカーランドけんこくの王、イエヒユリー・ベーカー王が、そのむかし、女神リーナロッドより青き宝玉をさずかり、このくにをつくったといわれています。」

「女神さまから……、すごい！」

ベルグエルムの言葉に、ロビーはあらためてそのすごさを感じ取っていました。それはまるで、ロビーの心の中にちよくせつ、女神が話しかけてくるかのようにでした。

「このくには、女神リーナロッドに守られている。」ライラも前をむいて歩いたまま、ロビーにいいました。

「そうやすやすと、敵の思い通りになどならぬ。」

そしてみんなは（それからまたずいぶん歩いてから）ついに、その女神リーナロッドのぞうの前、つまり王さまのぎよくぎの前にまで、やってきたのです！（ちなみに、ライアンはひまつぶしに、はしらのあいだに立っている兵士の数を数えてきました。全部で二百二十六人いたそうです！。そしてその兵士たちを数えながらここまでやってくるのに、食べたエリル・シャンデーオンやきの数は十七こでした。）

ぎよくぎは白い石とすき通つたすいしようにつくられていて、とてもこまかいちようこくがちりばめられていました（まさにごうかけんらんです）。ここはおうぎのかたちをした広間になっていて、はしらでささえられたやねはありましたが、かべはなく、まわりはすべて、そこを見おろせるバルコニーになっていました（七階ですから、その高いこと！。高いところがだめな人なら、このバルコニーに近よることすらできないでしょう！）

ちなみに、雨の日や風の強い日などには、このバルコニーは魔法のカーテンによってしめられるそうです。うくん、さすがです）。そしてまぢかで見える女神のぞうは、まさにすばらしいのひとこと。近くで見ると、じつにみごとなちようこくがなされていて、その衣服などは、まるでほんもののぬものようだったのです（衣服のあつさは、十ぶんの一インチほどありませんでした。でもやっぱりこれは、石でつくられたちようこくなのです。すごいわざです！）。

ですがここにきてまず、はじめに目がいったのは、それらのものではありませんでした。ぎよくぎよぎにはまだ、だれもすわっていませんでしたが、そのぎよくぎの前に、ひとりの男の人が立っていたのです。ロビーはライアンに「王さま？」とききました。が、「ちがうよ。」というへんじでした。ではいったいこの人物は、だれなのでしょうか？

その人は、とてもいげんのある人でした（ですからもしこの人が王さまだといわれたら、王さまのことを知らない人なら、みんなそのまま信じてることでしょう）。黒と金色のごうかな衣服に身をつつんでいて、剣はさしていませんでしたが、手にはさきにエメラルド色のすいしよのついた、みじかいつえを持っていました。つえ……、ひよつとして、魔法のつえ？ ということは……、この人が、大けんじやノランなのでしょうか？

いえ、それもちがいました。ノランとこの人物がけつて的にちがう、あるりゆうがひとつ、あつたのです。それはこの人物が、人間の種族の者ではなくて、おおかみ種族の者だということでした。この人物は、はい色ウルファの人だったので（ですからロビーもさいしよ、この人が王さまのはずがないと思いましたが、あんまりりつばな身なりでしたので、いちおうライアンにたずねてみたというわけだったので）。

「よくもどられた、ベルグエルムよ。」みんながやつてくると、その人物がまず、そう口をひらきました。

「はい、父上。」ベルグエルムがこたえます。

つて、ええっ！ 父上？

そう、この人物は、ほかでもありません。ベルグエルムのお父さんだったのです！ それにしても、王さまのぎよくぎの前にいるなんて、ベルグエルムのお父さんって、いったいどんな人なの？

「いい伝えは、まことでありました。われらは文字通り、きゆうせいしゆを得たのです。ロビーどのです。」

ベルグエルムはそういって、ロビーのことをうやうやしく、しようかいしました。ロビーはあわてて、「ロ、ロビーと申します。よろしく願ひいたします。」ときんちようしながら、じこしようかいをおこないます。

そんなロビーのことを見て、ベルグエルムのお父さんは、なんともふくざつな表じようを浮かべました。その胸の内に、なにかはかりもしれない、とくべつな思いをひめているかのようでした（いったいどうしたのでしょうか？）。ですがかれは、いたってれいせいなふうをよそおって、とても静かに、ただ、こういったのです。

「はるばるのこそくろう、かんしやいたします。わたしは、デルンエルム・メルサル。このくにのしっせいをつとめております。」

へえ！ ベルグエルムのお父さんって、しっせいなんですか！ ベルグエルムがりっぱなもの、うなずけますね！（しっせいという言葉を、みなさんおぼえていますでしょ

うか？ セイレン大橋の下で出会ったカピバラのおじいさんが、むかしカピバラのくにで、カピバラのしっせいさんにつかえていましたよね。しっせいとはそうりだいじんみたいなもので、くにのせいじをとりおこなう、とつてもえらい人なのです。そのとつてもえらい人が、ベルグエルムのお父さん、デルンエルムでした。

ちなみに、デルンエルムは祖国レドンドンホールでも、しっせいをつとめていたのです。ペーカーランドでは四年ごとにしっせいがかわりませんが、ちょうど前のしっせいがそのつとめを終えるところでしたので、そのひきつぎとして、アルマーク王からせひにとたのまれて、デルンエルムがしっせいになったというわけでした。）

「王は、まもなくまいられます。今しばらくお待ちください。」
デルンエルムがそういつてから、しばらくすると……。

ちん、ろん、らん、ろん。

ちん、ろん、らん、ろん。

とつぜん、どこからかハンドベルのえんそうのような、なんともかわいらしい音楽がきこえてきました。そしてそれは、どうやら王さまのぎよくぎのうしろ、女神ぞうの中からなっているみたいなのです。いったいなにごと？ すると……。

ちーん！

またここへくる前、大かいだんがとまるときにきいたのと同じ、ベルの音です。ロビーが、なんだろう？　と思つていると、女神ぞうの足もとのあたりから、ぷしゅーという空気のもれるような音がして……。

女神ぞうの右足の横の部分が、とつぜん、とびらのように、横にしゅいん！　とひらきました！　ロビーが、ええっ？　と思つていると、なんとそこから、数人の兵士たちが、つかつかと歩き出てきたのです！（そこ、入り口だったの？）

なんと、この女神ぞうはこのぎよくぎの間をやつてくるための、出入口のやくめも果たしていました！　その出入口のとびらが、女神の足もとのところにあつたというわけなのです（うーん、なんだか、ばちあたりなような気もしますが……）。そして兵士たちにはきつづいて、女神の足もとからあらわれたのは……。

美しい白いビロードの服を着て、同じく白いマントをはおった、ひとりのりっぱな、人間の男の人でした。ねんれいは、四十だいのなかばといったところです。背は高く、身長は六フィート近くもあるでしょうか？　ひげはなく、なんともたくましいからだつき。しんじゅ色の美しいかみを、肩までのばしていました（ライアンのかみの色にて

おりましたが、ライアンのかみは銀色で、この人物のかみは白に近いしんじゆ色でした。美しくととのった顔立ちは、きりつとひきしまっていて、じつにどうどうたるふんいきです。

りっぱなのはとうぜんでした。そう、この人物こそ、ロビーがはるばる会いにやってきた、このベーカールランドのあるじ、アルマーク・クリステイア・ベーカール王、その人だったのです！（ロビーはライアンに、「お、王さまだよね？」とたずねました。そしてこんどこそ、「そうだよ。」というへんじだったのです。）

「ベルグエルム、フェリアル。ふたりとも、よくやってくれた。そなたたちは、わがくにのほこりだ。」

アルマーク王がまずそういつて頭を下げ、騎士たちのくろうをねぎらいました。ベルグエルムもフェリアルも、「ははっ。」といつてぺこりと頭を下げて、王さまの言葉にこたえます（たいへんな旅を乗り越えてきたかれらにとって、この王さまの言葉はなによりもうれしく、心にひびきました。騎士たちはアルマーク王を心からそんけいしておりましたし、アルマーク王もまた、配下の者たちのことを、とてもだいに思ってくれたのです。旅からもどった騎士たちに敬意をあらわし、すぐに、心からのねぎらいとかんしやの言葉をかけてくれる。アルマーク王はまことに、すばらしい王さまでした）。

アルマーク王はそのまま、ロビーたちの方へとやってきました。ふつうなら王さまは

まず、ぎよくぎにすわってから、自分に会いにきた者たちへとあいさつをしますが、こんかいばかりは、とくべつの中でもとくべつなお客さまです。王さまは手をかざしながらかんげいの気持ちをあらわして、ロビーの前までくると、とても心のこもった言葉をただひとこと、おくりました。

「よく、まいられたな。」

アルマーク王はそういって、おだやかにほほ笑みました。

「は、はい。よく、まいられました。」

ロビーはすっかりきんちようしてしまつて、おかしなあいさつをかえしてしまっています。やはり、あれほどかたいけついとしんねんを持つて王さまに会いにいらしていらしたロビーでしたが、これだけりっぱな王さまの前に出ては、きんちようしてこちこちになつてしまうのも、わりはないというものです（こういってはなんです……、メリアン王よりもぎつと三ばいくらい、りっぱな感じでしたから。おっと、シープロンドの人たちにはないしですよ！）。

「ライアン王子も、ずいぶんと大きくなられたな。メリアン王は、げんきであられるか？」アルマーク王はこんどは、ライアンに声をかけました。ペーカーランドとシープロンドはとても親しいあいだがらでしたから、その王子さまはやはり、とくべつなお客さまだったのです（ちなみに、さすがは王さまですね。四年ぶりでライアンもずいぶんと

大きくなっていましたが、王さまにはすぐに、目の前のひつじの少年がライオンだとかつたみたいです。

もつとも……、じつは王さまは、ライオンがここにくるといふことを、もうすでに知っていました。それはなぜか？ ということについては、のちほど、つぎの章でお話しします。

「げんきすぎて、こまっていますよ。すこしはおちつくように、王さまから、よくいつてやってください。」

ライオンがじょうだんまじりにそういうと、アルマーク王は「ははは。」と笑っていました。

「むかしから、メリアンは変わっていないな。ライオン、きみを見ていると、まるで、むかしにまた、もどったように感じてしまうよ。きみは、メリアンの若いころに、そっくりだ。」

「そんなにてるの？　なんか、やだなー。」ライオンもそういつて、笑つてかえしました。

どうやらライオンのお父さんのメリアン王とアルマーク王とは、若いときからの知りあいのようなでした。それも、ただの知りあいというわけでもなさそうだったので。それはメリアン王のことを話しているアルマーク王のことを見ていれば、わかりました。

ぜんぜん王さまのようじゃなくて、ごくふつうの人。それもまるで青年みたいで、じつにくだけた話し方をしていたのです。ですからロビーはちよつと、びつくりしてしまつたものでした（なにせあのライアンと対とうに話していましたから、どんなにくだけた感じなのか？ よくおわかりでしょう？）。

ライアンとの話しがすむと、アルマーク王は急にまじめな顔にもどりました。そして王さまはとつぜん、ロビーにむかつて、こういったのです。

「きみのお父さんのことも、わたしは、よく知つているよ、ロビーベルク。」

えつ……………？

ロビーベルクつて、あのやみの精霊が口にした、ぼくのほんとうの名まえ……………。くわしく教えてくださいつてたのんだけど、教えてくれなかった。それはすぐに、知ることになるからつて。

え……………？ お父さん……………？ ぼくの、お父さん……………？

あまりにもとつぜんのことに、ロビーはなにがなんだか？ わからずに、すつかりころらんしてしまいました。頭の中がぐるぐるまわつて、今までのたくさんのきおくが、

そこにかげめぐっているかのようでした。子どもころの、影のようなきおく……。馬に乗って、山道をかけていった……。大きな河が流れていた……。ぼくをだきかかえていた、大きな人……。ロビーという言葉……。。

お父さん！

ロビーは、はつとわれにかえりました。それは、いつしゆんのあいだのことでした。でもロビーにはこのしゆんかんに、もうなん年もなん年も、旅をつづけてきたかのように思えたのです。そしてその旅の果てに、ロビーはようやく、この場所へたどりつくことができたかのように感じました。

「知っているんですか！ ぼくのお父さん……。家族のことを！ ぼくは、ロビーベルクっていう名まえなんですか！ お願いです！ 教えてください！ ぼくは、なに者なんですか！」

ロビーはひっしになって、うったえかけました。やみの精霊の地で、いちどはわかりかけた、自分自身のこと。家族のこと。そのひみつが今、ここでまた、わかろうとしていたのです。ロビーは相手が王さまであるということなど、すっかり忘れてしまっていました。アルマーク王にすぎり、なみだをぼろぼろこぼしながら、むがむちゆうでさけ

んだのです。

アルマーク王は、とてもれいせいでした。そしてロビーのうでを取り、その手をにぎって、静かに、こう伝えたのです。

「きみは、ロビーベルクだ。ロビーベルク・アルエンス・ラインハット。きみのお父さんは、レドンホールの王、ムンドベルクなんだよ。」

「ロビーどのが……！」

ベルグエルムもフェリアルも、飛び上がるほどびびりしてしまいました。それもそのはずです。自分たちがきゆうせいしゅとしてつれてきた、北の地にただひとりの黒のウルファの少年。それがなんと、われらがあるじ、ムンドベルクへいかのむすこ、つまりレドンホールの王子でしたから！

「ロビーが！…王子さま！」

ライアンもまた、（じつさいに）飛び上がってびびりしてしまいました。ここまですつといっしょだった、いちばんの友だちのロビーが、まさか、自分と同じ王子さまだったなんて！（これはやっぱり、運命の出会いなのでしょうか？　王子さまと王子さまは、ひかれあうとか？）

ですがいちばんびびりしたのは、やっぱりロビーほんにんです。ロビーはもうびびりしすぎて、声も出ませんでした。その場に立ちつくし、王さまの顔を見ることさえ

できなかつたのです。

そんな中。さいしよに口をひらいたのは、デルンエルムでした。

「すまぬ……。おまえたちには、ひみつにしておつたのだ……。きゆうせいしゆどのが、ムンドベルクへいかのむすこ、ロビーベルクどのであるということは、わかつておつた。」

デルンエルムは、わがむすこベルグエルムと、そしてその友のフェリアルにむけて、そうつげたのです。

「いったい、どうして……。？」

ベルグエルムもフェリアルも、そういつて、デルンエルムにわけをたずねました（そしてもちろん、読者のみなさんも、そのわけを知りたいことでしょう。どうしてロビーのことを、王さまやデルンエルムが、すでに知っていたのか？ そのわけを）。

「それは、わたしから話してきかせよう。」アルマーク王が、ベルグエルムたちにいいました。

「これは、そなたたちはい色のウルファたちが、くにを追われて、このベーカールランドの地へとやってきた、それよりずっと前からの話になる。」

アルマーク王はそういつて、ゆつくりと歩き出し、ぎよくぎへと腰をおろしました。そして「ふう。」と深く息をついて、長い長い、とてもだいじなひみつの話を、みんなに

話してきかせたのです。

それは今から、十数年もむかしのこと……。

「どうしたのだー！」

ろうかのむこうからやってきたひとりの人物が、たおれているふたりの兵士たちにか
けより、その身を起こして声をかけました。兵士たちは、その部屋の見張りに立って
いた兵士たちでした。その兵士たちが、部屋の前のろうかにたおれていたのです。でも、
安心してください。兵士たちには、きずひとつありませんでした。ただ、眠っているだ
けだったのです。前のぼんに夜ふかしして、ランプをしていたから？ もちろんそう
じゃありません。兵士たちはなに者かによって、眠らされていたのです。それがなにを
意味するのか？ かけつけてきた人物には、すぐにわかりました。つまり見張りの兵士
たちのことを眠らせた、そのふとどきななに者かが、この部屋の中にはいりこんだとい
うことなのです。

たおれていた兵士たちを見つけたその人物は、まっ青な顔をして、部屋の中にかけこ
みました。そしてそこで、かれが見たものは……。

その部屋のまん中には、ふしぎなものがひとつおかれてありました。それは台に乗っ
た、ひとつのまるい、しんじゆのような色をした大きな石で、そのまわりをぐるぐると、

銀色の光のうずが取りまいていました。石の大きさは十フィートほどもありました。そしてその石のまん中からは、青くぼんやりとした光が、もれ出していたのです。まるでその石の中に、なにか、とてもとくべつなものがはいつているかのように。ですがその石はしんじゅ色にくもつていて、その中を見通すことはできませんでした。

これらのものは、その部屋にはいったその人物にとつては、めずらしいものではありませんでした。なぜならかれは、もうなん回も、この部屋にきたことがあったからでした。それよりもなによりも。かれはこの部屋にはいつてまずまっさきに、この部屋にふさわしくない、あるものを見たのです。

かれが見た、この部屋にふさわしくない、あるもの。それは物ではなく、ひとりの人でした。つまり見張りの兵士たちのことを眠らせ、この部屋にかけてにはいりこんだ、そのふとどきなしんにゆう者そのものすがたを、かれはそこで目にしたのです！

「なに者だ！」かれは声を荒げてどなりました。手にした、エメラルド色のすいしやうのついたつえをふりかざして、身がまえです（あれ？ このつえって、どこかで見たような……）。ですが相手は、部屋のまん中にある石の方をむいていて、こちらにはまったくききようみがないといった感じでした。

「きさま、ふざけるな！ こつちをむけ！」さらにどなりますが、相手はあいかわらず、つつ立つたままです。怒ったかれは、手にしたつえをふりかざし、そのしんにゆう者に

うちかかろうとしました。ですが、そのときとつぜん……。

「ああー、さんねんだなあ。まさか、こんなのができてるなんて。」

「な、なんだと?」

急にひょうしぬけするような言葉をきいて、つえをふりかざしたかれは、思わずその場に立ちつくしてしまいました。

「なんの話だ?」

そこではじめて、しんにゆう者がこちらをふりかえったのです。背中までのびた、ルビーのような赤いかみ。うす手の赤いセーター。その上から、いんしよう的な黒のガウンを身につけていました。切れ長の、するどい目。そのむらさき色のひとみにまっ正面から見つめられた者は、思わず背すじが、ぞくつとしてしまうはずです。

この人物……。みなさんなら、もうだれだか? おわかりでしょう。しんにゆう者はまさしく、このアークランドのへいわをおびやかす、悪の魔法使い、アーザスでした! 「あなた……、ムンドベルクさんじゃないみたいだね。」アーザスが、自分にむかっている相手(つまり、つえを持って自分にうちかかってきた人物のことです)のことを見すえながら、いいました。

そのといかけに、相手がこたえます。

「王はおられぬ。東のレスネルにまねかかっているとこころだ。わたしは、しつせいので

ルンエルム。るすをまかされておる。」

そう、このつえを持った人物は、デルンエルムでした！（どうりでこのつえに、見おぼえがあるはずですね！ ちなみに、レスネルとは、アークランドの東のはずれにある、小さなくにのことでした。）ここは、レドンホール。まだアーザスの手によつてほろぼされる前の、レドンホールだったのです。

アーザスはそれをきいて、「ふう。」とため息をつきました。

「剣をもらいにきたんだけど……、あなたにたのんでも、わりみたいだね。ええつと……、デルルーンさんだっけ？ まあいいや。」

アーザスはそういって、ふたたび石の方をむきました。そしてその石を、人さしゆびのさきつぽで、つんとつつつくと……。

ばちちん！

石の表めんから、いなずまのような光がはじけちりました！ アーザスのゆびさきからも、ぷすぷすと白いけむりが上がっています（ふつうの人ならゆびがやけてしまうはずです！ でもアーザスは、なんともないようでした）。

「これじゃ、剣は出せないね。まったく、よけいなことをしてくれるよ。ぼくはまだ、

起きたばつかで、力が出ないんだ。もう一回、やみの世界にもどるのも、ぜったいやだしね。」

アーザスはそういうと、ゆびさきを空中にむけて、なにかをえがきはじめました。

「しようがない。また、出なおすよ。ムンドベルクさんには、よろしくいってね。この剣は、もともと、ぼくのものなんだから。ぼくがぜったい、もらうってね。ばいばい。」

「ま、待て！」デルンエルムがかけよりましたが、アーザスは空中にひらかれたとびらの中へ、すっと消えていってしまいました。そしてあとには、かすかな白いけむりのにおいばかりが、残されているだけとなったのです。

デルンエルムからそのことをきかされたムンドベルクは、深く目をつむりました。そして長いちんもくのあと、ムンドベルクはデルンエルムにむかって、つげたのです。

「その者は、かの魔法使い、アーザスにちがいなかろう。」

「アーザス！ あの者が……！」デルンエルムがびくりしていいました。

魔法使いアーザス。それはほとんど、伝説の中だけのそんざいでした。はるかなむかし、ここレドンホールからさらに南東にくだったウエステインというくにに、ひとりの若いまじゅつしがいました。かれはしだいにおそるべき力を身につけるようになり、そ

のために、力あるけんじやたちの手によつて、やみの世界の中へとついほうされたとい
います。それがアーザスでした。

「アーザスは、この剣をほつしている。これがふたたび、かれの手に渡れば、かれの力
は、かんぜんなものとなろう。そうなれば、こんどこそ、いかなるけんじやとて、かれ
をとめることはかなわぬ。このアー克蘭ドは、ほろびることとなるだろう。」ムンドベ
ルクが、デルンエルムにいました。

アーザスがおそるべき力を身につけることとなつた、きつかけ。それは、いつぽんの
剣でした。その剣は伝説のむかし、このアー克蘭ドのふたりの女神のうちのひとり、
ライブラが、ウエステインの地におくつたものだったのです。ふとしたりゆうから、
アーザスはその剣を手にいれ、そしてしだいに、その力の中におぼれていったのだとい
うことでした。そしてその剣が、まさに今、このレドンホルのしんじゆ色の石の中に、
ふういんされていたのです！（ですからアーザスは、みずからに力を与えてくれるこの
剣を、ふたたびその手の中におさめるために、ここへやってきました。このアー克蘭
ドをほろぼすほどの力を、こんどこそ、その手の中におさめるために……）

なぜアーザスの持っていた女神の剣が、ここにふういんされているのか？ それは
アーザスとウルファアの、深いかんけいにありました。ですがそれは、とてもとても長く
て、ふくぎつなお話になるのです。ですから今はただ、アーザスが持っていた剣をウル

ファの者が受けついでということだけ、知っておいてください（わたしはいずれ、このロビーの物語とはべつの本の中で、その物語のことをみなさんにお話ししたいと思っています）。こういったわけで、この剣の運命は、ウルファのくにあるこのレドンホールのもとへと、たくされることになりました（そしてこのレドンホールでその運命のときをむかえるまでのあいだ、剣は代々、守られつづけることになったのです）。

レドンホールの王であるムンドベルクは、アーザスと剣のかんけいをよく知っていました（この剣をアーザスがふたたび手にしたとき。そのときこそ、このアークランドはほろんでしまうのだということも）。アーザスがやみの世界からふたたび、このアークランドの世界へともどつてきたのなら、かれはかならずや、この剣を取りにやってくることだろう。おそろしいことですが、今まさに、それがほんとうのこととして起こっているのです。魔法使いアーザスのふっかつ。それは長年に渡り、レドンホールの王たちが、つねにおそれていたことでした。

「このふういんをといて、剣をどこかへ、かくしてしまえないでしょうか？」デルンエラムが、ムンドベルクにいいました。しかしムンドベルクは、重い表じょうを浮かべたまま、いったのです。

「このふういんは、破ることはできぬ。たとえば、げんぎいのさいこうのけんじや、ノラソンのでもな。しかし、そなたの心配の通り、アーザスはかならずや、このふういんを

破るであろう。かの者の、この剣への思い入れは、はかり知れない。」

「では、どうすれば……う？」
「デルンエルムはおどろいたようにそういつて、王さまの方を見ます。」

「この剣を手にするための方法は、ひとつだけだ。」
ムンドベルクがいました。「剣は、影の世界にふういんされている。そのために、われら、この世界の者には、このふういんを破ることができない。だが、わたしが、影の世界の者となれば……」

「まさかそのような！　むちやにございます！」
「デルンエルムがすべてをさっしたかのように、ムンドベルクにいました。」

影の世界の者となる。それはもはや、人ではなくなるということでした。生きてはいましたが、半分死んだようになって、きおくも力もすべて失われてしまうのです。からだは肉体と影とのふたつに分かれ、その影の方は、しばらくはいしきをたもって行動することができましたが、そのそんざいはひじょうにか弱いものとなり、もはや剣を持つて戦うことすらできなくなっていました。そしてやがては、かんぜんにやみの中へと消えていつてしまつて、さいごにはただ、自分がなに者かもわからないようなじようたいとなつた、ぬけがらのようなかからだの方ばかりが残されるのみとなるのです（まさに、たましいがぬけたようなじようたいになるということです）。

影の世界の者となれば、同じ影の世界の中にあるこの剣を、ふういんの中から取つて

くることができました。ですがお伝えしました通り、そのさいごには、おそろしいけつかが待っていたのです（ムンドベルクはそれでもかまわないという強いかくごを持って、デルンエルムに、影の世界の者になるといいました）。

「それしか、方法はないのだ。」ムンドベルクはそういつて、剣がふういんされているしんじゆ色の石の前へと歩みよりました。そしてムンドベルクは、デルンエルムの方をふりかえり、こうつげたのです。

「わたしはこれから、ノランドののところへゆく。ノランドのなら、影の世界の者となる、そのわざをさずけてくれることだろう。あんずるな。それは、さいごのしゆだんだ。わたしは、さいごのさいごのときまで、このくにを守る。だが、わたしがさいごのつとめを果たしたあとは、デルンエルムよ、そなたに、ばんじをまかせるぞ。」

「それならば、わたくしが影になります！」デルンエルムがいました。「へいかには、いつまでも、くにたみの上にお立ちただかねばなりません！」

デルンエルムはそういつて、ムンドベルクにつめよりました。しかしムンドベルクは、静かな言葉で、「デルンエルムにいうばかりだったのです。しかしムンドベルク

「デルンエルム、そなたの気持ちはわかる。だが、これは、このレドンホールの王のつとめ。レドンホールの王は、代々、この剣と運命をともにしてきたのだ。王か、そのちよくせつの子でなければ、この剣をこのふういんの中から持ち出すことは、かなわぬ。そ

れは、そなたもわかっておろう。」

「へいか……」

デルンエルムはなみだをぼろぼろこぼして、その場にくずれこみました。そう、ムンドベルクのいう通り、剣はレドンホルの王か、その子いがい、この運命の石の中（つまり影の世界の中）からそとに出すことができないようになっていたのです（これはこの剣がふういんされたとき、そのようにけつていづけられたことでした。そのりゆうはさきほどわたしがふれた、このロビーの物語とはべつの、アーザスとウルファの遠いむかしの物語の中で語られることになるはずです）。ですから、たとえ影の者になったとしても、自分に剣を持ち出すことは、かないませんでした。デルンエルムもほんとうは、そんなことはわかっていたのです（いつの日か、アーザスがふたたびこの世界にあらわれたとき、影の世界の者となって、アーザスよりさきにこの剣を手にいれ、しかるべき運命のときまでこの剣を守る。これがレドンホルの王に代々受けつがれてきた、しめいだったのです。ムンドベルクは、みずからにかせられたその重いしめいのことを、よくわかっていました。ふっかつしたばかりのアーザスに剣を取り出せないようにするために、これほどまでに強力なふういんが必要でしたが、それもすべて、レドンホルの王の、その重いしめいがあったからこそだったのです。まさにこれは、とうとき、ぎせいでした。

そしてデルンエルムは、剣を取り出せるのはレドンホール王か、その子のみであるということを知っていましたが、王のその重いしめいのことについては、ムンドベルクからも、あえてデルンエルムには知らされていなかったのです。それはデルンエルムによくない心配をかけさせまいとする、ムンドベルクのはいりよからでした。

ムンドベルクはおだやかにほほ笑みながら、自分もその場にしゃがみこみました。そしてデルンエルムの手をしっかりとぎって、こういったのです。

「わたしはまだ、ここにいないではないか。わたしを、そうかんたんに死なせるでない。さあ、したくだ。わたしには、まだまだ、しごとがあるのだからな。」

デルンエルムはこぶしをかたくにぎりしめ、胸の前におきました。そして頭を深々と下げて、このすばらしき主君に、心からの思いをおくったのです。

「へいか……。わたくしは、へいかにおつかえできたことを、ほこりに思います。まこと、わたくしは、しあわせ者にございます……」

「それが今より、十五年ほどむかしのことだ。」

ぎよくぎに腰をおろしたアルマーク王が、静かにいいました。みんなはくいいるようにな、アルマーク王の話にききいていました。ベルグエルムもフェリアルも、はじめて耳にするレドンホールのできごとでした。このできごとのことは、ムンドベルク王か

らデルンエルムに、かたく口どめされていたのです。剣とアーザスのこと。自分の運命のこと。それをみんなに伝えたところで、いたずらに、不安をつのらせてしまっただけからと。ムンドベルクはいつも、くにの者たちのことを考えていました（ですからデルンエルムは、ムンドベルクのその意志をかたく守り、むすこのベルグエルムにさえもこのことは話さなかったのです。ベルグエルムはそのとき、まだまだ剣のうでもみじゆくな、若者でした。もし、アーザスがムンドベルクの身をおびやかしているという、このじじつのことを話していれば、ベルグエルムは「アーザスのところへ乗りこむ！」などともいいかねなかったことでしょう。むかしはベルグエルムも、むちやをするところがあつたのです。

そして同じく、きゆうせいしゆであるロビーがムンドベルクのむすこであるということも、こんかいのこのきわめてたいせつな旅のにんむをぶじに終えるまでは、ベルグエルムたちにも話しませんでした。今からむかえにいくきゆうせいしゆが、自分たちのあるじであるムンドベルク王のむすこ、ロビーベルク王子だと、かれらがさきに知ってしまえば。かれらはわれも忘れて、主君のことを守るために、むちやなことをしてしまってもかぎらなかつたでしょう。このだいな旅をゆく者には、あらゆるじたいに考えをめぐらせることのできる、れいせいちんちやくな心がつねにもとめられていたのです。よけいなことを考えさせて、はんだん力をにぶらせてしまうわけにはいきませんでし

た。ですからデルンエルムも、アルマーク王も、ベルグエルムたち四人の騎士たちには、ただ「いい伝えのきゆうせいしゆどのをつれて帰ってきてほしい」とだけ伝えたのです。

「それから、レドンホールにはさまさまのひげきがおそった。さいしよのひげきは、ロビーベルクよ、そなたの身に起こったのだ。」

アルマーク王の言葉に、ロビーはどきんとしました。ついに王さまの口から、自分のことが語られようとしていたのです。ベルグエルムもフェリアルも、ふくぎつな表じょうを浮かべたまま、ロビーの方を見やっていました。ライアンも、ここにきてから数えて二十こめのエリル・シャンディーンやきに、ぱくつとかぶりついて、しんけんなまなざしで、ロビーのことを見つめていました（あんまりそうは見えないかもしれませんが、このときのライアンは、いたってまじめでした）。

「アーザスがレドンホールにあらわれた、そのとき。ムンドベルクのさいくん、マイアは、身ごもっていた。ムンドベルクは、そのわが子が、アーザスの手にかかることをおそれたのだ。生まれてくるわが子は、このレドンホールのあとつぎとなる。剣の運命をも、また、背おわなければならぬ身。アーザスは力をたくわえ、かならずや、レドンホールにもどってくる。そのとき、自分が影となり、剣を遠くへかくすことができたとしても、アーザスはその剣をさがすために、わが子をりようしようとするこゝだろ。

レドンホールの王の子ならば、剣の力とも、深くつながっている。そのつながりの力をもつてすれば、剣のある場所も、アーザスにはわかかってしまうからだ。そのためにもムンドベルクは、わが子のそんぎいをかくしておかなければならなかった。いずれおとずれる、運命のときまでな。おうひマイアは、こうして、山里の人知れぬ場所にうつった。そしてそこで、わが子をうんだのだ。それが、ロビーベルク、きみなんだよ。」

「マイア……。ぼくの、お母さん……」

ロビーは思わず、そう口にしました。自分のお母さん。それはレドンホールのおうひ、マイアという人だったのです。

「ぼくのお母さんは……。それから、どうなったんですか？　今、どこにいるんです？」
ロビーは王さまに、くいいるようにたずねました。ロビーがいちばん知りたかったこと。それは自分の家族が今、どこでどうしているのか？　ということでした。

ですがアルマーク王は、けわしい顔をしたまま、ロビーのひとみを見すえて、こうつげたのです。

「ロビーベルク。そなたには、つらいことだ。マイアは、きみをうんでから、ほどなくして、この世を去った。びょうきのためにな。さいごまで、そなたの名をよび、気にかけておられたそうだ。」

「そんな……」

ロビーは、がくぜんとしました。ひぎの力がぬげ、がくりと、地面にくずれてしまいそうになりました。フェリアルとライアンに両がわからささえられて、ようやく、立っていることができていたのです。

「ロビーベルクさま……。マイアさまは、あなたさまのことを、とてもほこりに思われておりました。みずからのぶんまで、強く、生きてほしいと……。どうか、しあわせになつてほしいと……」

デルンエルムがロビーにいいました。ですがデルンエルムは、さいごまで、いうこともできなかつたのです。かれは顔をおおって、声を上げて泣いてしまいました。ベルグエルムが歩みより、その肩にそつと手をおいて、なぐさめました。

「マイアおうひについては、びょうきのちりようのため、くにをはなれるときいておりました。」ベルグエルムがだれにいうともなく、つぶやきました。「そのような、深いりゆうがあたりだったとは……」

アルマーク王が、ベルグエルムにうなずいてから、つぶやきます。

「それからレドンホールにて、マイアおうひは手あつくほうむられた。だが、そのときも、うまれた子どものことについては、くにたみにもふせられたのだ。アーザスに子どものもんざいが知られてしまうことを、おそれてな。」

アルマーク王のいう通り、ムンドベルク王の子ども（男の子でしたので、王子です）が

うまれたということは、レドンホールのくにたみ、そしてベルグエルムとフェリアル
ふたりでさえ、知らないことでした。ただひとりそのことを知っていたのが、デルンエ
ルムだったのです。デルンエルムはたびたび、マイアおうひのもとをおとずれ、そのお
せわをしていました。男の子がうまれたときも、ロビーベルクと名づけられたときも。
そしてマイアおうひがなくなったときにも、デルンエルムは、そのそばについていたの
です。おうひがなくなったとき……、デルンエルムがどんなにづらい思いでいたことか
……。かれのなみだけは、そのことをよく、みんなの心に伝えていました。

「それからときがたち、力をつけたアーザスの悪いうわさが、このアークランドのいた
るところでささやかれるようになった。そしてそのころから、わがベーカーランドの
宝、青き宝玉のかがやきも、じよじよにうすれていくようになったのだ。」

「よこしまなる、赤いキューブ……」ベルグエルムがこぶしをにぎりしめて、そうつぶ
やきました。ロビーの横にいるフェリアルも、歯をぎりぎりとかみしめて、怒りをあら
わにしていました。いったい赤いキューブとは？ なんてことなのでしょう？

「さよう。」アルマーク王がこたえて、いいました。「アーザスはついに、このアークラ
ンドの女神さえもぼうとくする、きんだんのおこないに出た。それが、赤いキューブだ。
わがくにの宝、青き宝玉と同じ、もうひとつの宝玉を、アーザスは作り出そうとしてい
る。それがかんぜんなものとなれば、そのときこそ、このアークランドは、しんのやみ

につつまれてしまうことだろう。アーザスのねらいは、まさにそれなのだ。」

赤いキューブ……。キューブとは、さいころのようなかたちをした、四かくい石のことです。ペーカーランドの青き宝玉も、じつはそれと同じかたちをした、石でした（ちなみに、宝玉というのはほんらいまるい石のことをさしますが、ここでいう宝玉とは、たんじゆんに、宝物の石という意味で使われていたのです。ですから、四かくくても宝玉でした）。宝玉の大きさは、一フィートくらい。そんなに大きいというものでもありません。その石はみずからのエネルギーで、空中に浮かんでいて……。そう、それと同じものを、みなさんは見たはずです。アーザスが、やみにとらわれるムンドベルクと話していた、あのぶきみな暗い広間。その広間のまん中に浮かんでいたあの赤い石こそ、アーザスが青き宝玉のことをまねして作り出した、きんだんの赤いキューブでした！（アーザスは、ことあるごとに、その赤いキューブのことを持ち出し、そのおそろしい力をアークランドのいたるところで見せつけていました。アーザスのほんとうのねらいはわかりませんが、これはどうやら、勝手に自分の作ったキューブの力を、みんなにじまんしたかったからのようです。みなさんもごぞんじの通り、アーザスはほんとうに、子どもみたいなのです。ですからアーザスとその赤いキューブのことは、このアークランドの多くの者たちが、知っていることでした。

ちなみに、この赤いキューブはよこしまなるエネルギーをどんどんとたくわえて、大

きくなっていたのです。みなさんが見たのは、もうずいぶんと大きくなったあとのものでしたよね。ほんとうに、おそろしいかぎりです。」

「キューブの力をかんぜんなものとするために、必要なもの。それこそが、レドンホールに伝わる、いっぽんの剣なのだ。アーザスは、それがために、剣をほつした。剣がアーザスの手に落ちれば、このアー克蘭ドは、ほろびる。ムンドベルクはそのために、わが身をぎせいに、剣を守ったのだ。」

アルマーク王の言葉に、デルンエルムはまた、大つぶのなみだをこぼしました。アルマーク王のいう通り、ふたたびあらわれたアーザスから剣を守るために、ムンドベルクは、そのさいごのつとめを果たすこととなったのです……。

「アーザスがワットと手をくみ、レドンホールへせめいつたのが、今から四年前のことだ。ムンドベルクは、ノランからさずかつたきんだんのじゅつをもちいて、わが身を影の世界の者とした。そして影となったムンドベルクは、剣のふういんの中へとはいりこみ、取り出したその剣を持って、北の地へとむかったのだ。その地に、その剣をかくすためにな。」

ロビーは、はっとしました。まさか……、その剣って……？

「そうだ、ロビーベルク。そなたのおびている、その剣。それこそが、ムンドベルクが北の地へとかくした、レドンホールのせいなる剣、アストラル・ブレードなんだよ。」

なんてことでしよう！　かなしみの森でスネイルからもらった、この剣。それがそんなにも重大なやくわりを持つ、宝物の剣だったなんて！

スネイルの話……、それが今、ロビーと仲間たちの心の中に、よぎっていました。

まつ黒な馬と、まつ黒な騎士だったよ……。

まるで、だんろにかかったやかんの湯気みたいに、ゆれてるんだ……。

そう、あのスネイルの見たなぞの騎士。それこそが、影の世界の者となり、かなしみの森まで剣をはこびにやってきた、ムンドベルクほんにんだったのです！（そのとき乗っていた馬は、ノランがムンドベルクにさずけていた、影の馬でした。ムンドベルクは「もし影の者になったのなら、この馬に乗って、剣をはこぶといい。」とノランにいわれていたのです。影になってしまったのなら、もうふつうの馬に乗ることは、できませんでしたから。この影の馬は、ふだんは黒いすいしようのかたちをしていて、ムンドベルクはそのすいしようを、ずっとだいじに持っていました。）

「その剣は、アーザスに力を与えるだけのものではない。それを持つ者に、悪を破る、大いなる力をさずけるのだ。」アルマーク王がつづけます。「その剣の力は、女神の力。

そしてその剣をあつかえるのは、レドンホールの、王の血すじの者のみ。そう、ロビーベルク、そなたには、その剣をあつかうことのできる、力があるのだ。」

これまでの旅のさまざまところで、ロビーと仲間たちのことを助けてくれた、剣の力。それらのなぞが、これでようやく、とけるのです。

この剣はアストラル・ブレードといって、そのむかし、アークランドのふたりの女神のうちのひとり、ライブラが、アークランドの人々に与えたものでした。この剣を持つ者は、剣からさまざまな力をさずかるのです。そしてこの剣の力をひき出すことができるのは、この剣と運命をともししてきた、レドンホールの王の血すじの者のみだといいました（これで今まで、この剣の力をロビーだけしか使えなかったそのりゆうも、あきらかになりました。そしてこの、「剣の力を使えるのはレドンホールの王の血すじの者のみ」という運命についても、はるかなむかしに、この剣がふういんされたときに、そのようにけつていづけられたことだったのです。

ちなみに、シープロンドのメリアン王も、もちろん女神のつるぎアストラル・ブレードのことは知っていましたが、その剣がどんな見た目であるのか？ ということなどについては、メリアン王もふくめ、だれにも伝わっていないことでした。なにしろこの剣はもうずっと、レドンホールの石の中にふういんされつづけておりましたし、しかもこのひみつの剣のそんざいのうわさを、世の中に広めないようにするためにも、せいかく

なスケッチなども、なにひとつ残されてはいませんでしたので、それもむりもないことだったのです。つまりこういったわけで、メリアン王はロビーの持つこの剣のしようたいのことに、気づくことができなかつたというわけでした。剣そのものにも、この剣が女神の宝物の剣なのだということをあらわすしるしなどは、どこにもありませんでしたから）。

この剣の持つさまざまな力。まず悪い心を持った生きものが近づくと、それを感じ取って、剣は青く光ってその危険を知らせます（ただし生きものにかぎりますので、相手がブリキの兵士やおぼけなどの場合は、光りません。さらに、ただ危険な相手だというだけでは、やっぱり剣は光りません。この剣は、ちのうを持った相手が悪だくみを考えている場合にだけ、光りました。ですから、いくら危険な相手であったとしても、野生の動物などに対してはこうかがなかつたのです）。ふつうの剣では切れない、おぼけやけむりのようなかいぶつであつても、切ることができました（はぐくみの森の地下いせきで夜のかいぶつたことを切つたり、モーグだつたころのロザムンディアでは、アルミラの手下の影おぼけたちを切つたりしましたよね）。

さらにこの剣は、その持ちぬしの心にも、とくべつな力をはたらかせるのです。これまでの旅の中で、ロビーがあらかじめ、待ち受ける危険を感じ取ることができた場面がありました。岩のかいぶつガイラルロックたちが、わなを張って待ちかまえていたとき

や、セイレン大橋での黒騎士たちのしゅうげき。さらに、はぐくみの森で、チップとその仲間たちがロビーたちのことをわなにかけるべく、そうだんをしていたときなどです。これらの危険を感じ取ることでできたのも、じつはみんな、この剣のおかげでした。この剣を持つ者は、自分に対して悪いことをしようとしている者の考えを感じ取り、あらかじめ、その危険を知ることができるようになるのです（ただしこれも、相手が生きものの場合にかぎりしました。ですからアルミラのブリキの塔で、立ちならんだブリキの兵士たちがおそってくるということは、ロビーにも知ることができなかつたのです）。

そして剣は、持ちぬしの願いを感じて、あかりのかわりに光ったり、おそろしい敵に對しては、とんでもなく強力なはずを放つて、こうげきしたりもしました。セイレン大橋の上でワットの黒騎士をつらぬいた、あのおそろしいまでの剣の力。それは危険にさらされた仲間たちを心から助けたいという、ロビーのその強い強い気持ちにこたえたものだったのです（その力はとても強力なものでしたが、あのとときベルグエルムがロビーにいった言葉の通り、けっしてよこしまな力などではありませんでした）。

ですがこの剣の持つ、もつともたいせつな力。それはこの剣が、悪をうち破る、女神の光の守りの力を持っているということ。これはベーカールランドの青き宝玉の力と、同じ力でした。この剣の力を持つ者は、悪しきやみの力から守られ、アーザスのやみの力に對しても、たいこうすることができたのです。ですからアーザスほどの者であつて

も、この剣を持つ者には、かんたんには手出しをすることができません。おそろしいやみの力を持つアーズに立ちむかうためには、この力はぜったいに、必要ふかけつなものでした。

そしてさいごに、もうひとつの重要な力。この剣は、青き宝玉、そして、赤いキューブ、そのどちらの石に対しても、力を与えることができるということ。それは悪い力などではありません。もともとこの力は、アークランドのふたりの女神たち、リーナロッドとライブラが、「宝玉と剣、ふたつの力をあわせて、くにをへいわにおさめてもらいたい」という願いを持って、人々に与えたものでした。ですがへいわのために使ってもらいたいと願われていたその剣の力が、今のアーズにとっては、じつにみりよくなものとなってしまっていたのです。

「剣の持つ力を使えば、アーズは、みずからの作ったキューブに力を与え、かんぜんなものとするができる。そしてアーズは、その力をもって、わがベーカールンドの青き宝玉の力を、なきものにせんとしているのだ。」アルマーク王が、しんこくな顔をしていました。

「これが、アーズの手に渡ったら……」ロビーが剣をにぎりしめて、つぶやきました。おそろしいそうぞうが頭の中をよぎり、ロビーは思わず、ぞくつと背中をふるわせてしまいました。

「これが、レドンホールに起こった、ひげきのできごとだ。わたしはこのことを、ムンドベルクほんにんからきいた。レドンホールがアーザスの手に落ちた、その日。影となったムンドベルクが、このわたしのところへとやってきたのだ。剣を持ってな。」

そう、ムンドベルクは、「影となり、剣をはこぶ」そのつとめの前に、ここエリル・シャンディーンの地をおとずれていたのです。ムンドベルクは自分のいしきがかんぜんにやみに飲みこまれてしまう前に、友であるアルマーク王に、すべてを話しておきたいと思いました。剣のこと、くにのこと。そしてむすこであるロビーのことを、くれぐれもよろしくたのみたいと。アルマークはムンドベルクにさいごのわかれをつけ、その身をだきしめようとしました。ですがアルマークのその両手は、影となったムンドベルクのからだを、ただすりぬけるばかりだったのです（そしてムンドベルクはそのあと、シープロンドのメリアン王のところにも立ちよっていました。ムンドベルクとメリアンは、やはり、深い友じょうでむすばれておりましたから。ですけどムンドベルクは、メリアンにちよくせつ会って話すことは、しませんでした。このじじつを、ようきで明るいせいかくのメリアンにいうのは、とてもしのびないと思つたからです。ですからムンドベルクは、さいごに、遠くから友であるメリアンのげんきなすがたを見とどけると、そのまま、北の地へとむかいました）。

「城が落ちる、そのまぎわ。へいかは、影となるその前に、わたくしにさいごのごめい

れいをくだされました。「デルンエルムがいました。『もはや、これまで。レドンホールは、やみに落ちることとなる。だが、すべてのきぼうが、ついたわけではない。デルンエルムよ、そなたはひとりのがれて、すぐにレスネルへゆけ。えんせいしているベルグエルムたちとともに、そのまま、ベーカーランドまで、すくいをもとめにゆくのだ。そこで、ときを待て。わがむすこロビーベルクが、いい伝えのきゆうせいしゅとして、ベーカーランドへとやってくる、その日までな』と。」

レドンホールに伝わる、ひとつのいい伝え。「世界がやみにつつまれるとき。きゆうせいしゅがあらわれる」。それがわがむすこ、ロビーベルクであるということ、ムンドベルクはそのとき、すでに知っていました（なぜ知っていたのか？ ということについては、つぎの章で、ある人物の口から語られることになります）。ですから剣は、ロビーがそのときかくれ住んでいた、かなしみの森の中へと、ひっそりとかくされたのです（それが、スネイルのところでした。そして、ロビーがなぜかなしみの森に住むようになったのか？ ということについても、つぎの章であきらかになるのです）。

ちなみに、ロビーの住んでいる森が、かなしみの森という名まえの森なのだということ、そのときのムンドベルクは知りませんでした。ロビーはあるりゆうがあつて、北の地にかくれ住むことになりましたが、それがぐたい的にどこなのか？ ということについてまでは、ムンドベルクも知らなかったのです。ですがだいたいこの場所はわかつて

おりましたし、なにより自身の持つそのせいなる剣の力が、同じ剣の力を持つロビーのところまで、みちびいてくれました。ですからロビーのいどころを、ムンドベルクは北の地の住人のだれにきくまでもなく、すぐにつきとめることができましたのです。

ですがアルマーク王の方は、だいたいの場所しか知ることができていないままでしたので、ベルグエルムたちにロビーのいばしよをくわしく伝えることができず、ベルグエルムたちはシープロンドの人たちの協力のもとに、ロビーのことをさがしたというわけでした。ロビーのいどころを知っておくために、影の世界の者となったムンドベルクに同行してロビーのところまでいっておく、というようなことも、できませんでしたから。影の世界の者となったムンドベルクからだは、この世界と影の世界のあいだとをゆらゆらゆらめくようなそんなぎいとなり、そのためこの世界の者たちには、そのすがたを追っていくようなこともできなかつたのです。たとえいつしよについていこうとしても、すぐに、そのすがたを見失ってしまうことでしょう。ムンドベルクの声すらも、こちらの世界には、まんどくにはとどきませんでしたから。

じゃあ、そのあとでロビーのいどころを、みんなであらかじめ、はつきりとしらべておけばよかつたんじゃないの？ って思われる方もいるかもしれませんが、それにはりゆうがありました。

まず人をさがすようなときには、人さがしのための魔法の力が使われることが多いの

ですが、その魔法でロビーのことをさがすことは、むりでした（それについては、これまた、つぎの章で語られることになりますので、もうちよつとだけお待ちください！）。となれば、あとは人の手によってロビーのことをちよくせつさがすしかないわけですが、それもやつぱり、ベーカーランドの人たちは、あらかじめさがしておくようなことはしなかったのです。

それはつまり、北の地にただひとりだけのおおかみであるロビーに、人々の必要以上のよけいな目がむいてしまうことを、防ぐためでした。ただでさえ、からだが大きくて目立つおおかみです。よけいなことをして、ロビーにさらに人々の目が集まってしまうようなことは、なんとしてもさげなければなりませんでした。

ベーカーランドの人たちが、いくらただの旅人のふりをしてロビーのいどころをつきとめようとしたとしても、土地の住人たちのじょうほうなくしては、ロビーのことを見つけることは、とてもふかのうです。北の地の住人たちに、それとなくでもおおかみのいどころのことをきいてまわったりなどすれば、住人たちの目は、どうしても、その目立つおおかみの方へとむいてしまうことになるでしょう。どこでよけいなうわさが広がってしまうとも、わかりません。それをさけるためにも、アルマーク王たちはさいごのときがくるまでは、ロビーのことはかのうなかぎり、そつとしておこうときめました。さいごのときがくれば、あるていど大げさにさがしたとしても、うわさが広まる前に、口

ビーのことをベーカーランドまでつれてくることができましたから。もちろん、ワットの者たちにはぜったいに見つからないように、注意してさがすことがだいじでしたけど。

もうひとつ。もしロビーが北の地からはなれて、どこかよその場所にうつってしまったとしたら？ それもないとは、いいきれません。しかし、もしそうなたとしても、わかるようにはなっていました。

じつはロビーが北の地にいるかぎり、たとえエリル・シャンティーンの青き宝玉の力をもつてもそのくわしいどころを知ることにはできませんでしたが、剣の力、すなわち宝玉の力を持つロビーがその地をはなれるようなことがあった場合においては、その力を感じ取って、青き宝玉がそのことをしらせるようになっていたのです（じつにベリンな宝玉です）。ですからアルマーク王たちも、ロビーがずっと北の地に住みつづけているということを知ることができていたというわけでした（もしどこかへいつてしまふようなことがあれば、魔法も人手も、そうどういんして、全力でつれもどす必要がありましたけど……）。

近いしうらい。わがむすこロビーベルクが、いい伝えのきゆうせいしゆとして、この剣を持って、ベーカーランドへとあらわれる……。そしてその通りに、今日ここに、ロビーがやってきたのです（ここでもうひとつ、説明を加えておきますと……、ロビーが

きゆうせいしゅとしてベーカールランドへとやってくる、その「とき」というのは、ふたつのりゆうが重なってけつていづけられていたことでした。まずはロビーが、きゆうせいしゅとしての、そのたしかかな力を持つようになったということです。それはきゆうせいしゅとして、劍の持つその大いなる力を使いこなせるねんれいにまで、成長したということでした。劍の力を使うことは小さなころからできましたが、きゆうせいしゅとして劍の力をじゆうぶんに使いこなせるようになるためには、それにふさわしいねんれいになるまで、待つ必要があつたのです。

そしてもうひとつのりゆう。それこそが、ロビーがきゆうせいしゅとしてのたしかかな力を得たという、そのちよくせつのしらせを、世にしらしめるものでした。それは、青き宝玉によるものでした。宝玉と劍は、ふたつでひとつ。ロビーがきゆうせいしゅとして劍の力を使いこなせるようになったとき、宝玉もまた、それにこたえたのです。青き宝玉は、今がまさにきゆうせいしゅのことを世に送り出すときなのだという、あいずをしめました。それは宝玉の中に、たしかなるしとしてうつし出されたのです（じつにべんりな宝玉です）。ノランからそのしるしのことを伝えられていたアルマーク王は、こうして、運命のときを知ることができました。そしてアルマーク王は、ベルグエルムたちに、ロビーのことをむかえにいくようにと伝えたのです。

ところでこれはだいじなことです、デルンエルムの言葉にもありました通り、四年

前、レドンホールがアーザスにせめほろぼされたとき、ベルグエルムとフェリアルはほかのはい色ウルファの仲間たちとともに、レドンホールより東のくに、レスネルまで出かけていました。そのころレスネルのくにには、東のやばんなくにぐにからこうげきを受けていました。そのためレドンホールから、ベルグエルムたちははい色ウルファの兵士たちが、手助けしにいつていたのです。そしてこれが、はい色ウルファの者たちと黒ウルファの者たちとの運命を、大きく変えてしまうことになりました。

黒のウルファの者たちはレドンホールの守りのために、く々に残っていました。そしてそんなかれらのことを、思いもかけない、おそろしいひげきがおそったのです。悪の魔法使いアーザスのひきいる、黒の軍勢のしゅうげきでした。そのなさけようしやのないうげきに、レドンホールはかじめつ的なまでのひがいを受けました。黒のウルファの兵士たちは、まことけんめいに戦いましたが、アーザスとワットの連合軍は、その数で、レドンホールの兵力をはるかに上まわっていたのです（せいにかくにいうと、レドンホールの軍勢は、その三ばいの数の敵の兵士たちを相手に戦わなければならなかったのです）。

こうして、レドンホールの王城、フレイムロンドは落ちました。ムンドベルクはアーザスの配下となり、黒のウルファの兵士たちはひとり残らず心をうばわれ、まるであやつり人形のようなじょうたいとなって、敵の手の中に落ちることとなったのです。ベル

グエルムたち、はい色のウルファたちが助かったのは、ほんとうにぐうぜんのできごとでした。今ベルグエルムやフェリアルたちは、こうして、ベーカークランドの白の騎兵師団に加わってかつやくしてはおりますが、ひとつまちがえれば、ほかの黒ウルファの仲間たちとともに、やみにとらわれ、黒の軍勢のいちいんとして、取りこまれていたかもしれないのです……。なんておそろしいことなのでしょう！ ベルグエルムたちが今、どれほどの思いでいるのか……？ 読者のみなさんの心には、かれらのその痛いほどの思いが、とどいているはずですよ。

「教えてください、王さま。ぼくの、なすべきことを。」

ロビーは、しゃんと背すじをのびして、王さまにたずねました。そのすがたには、いつさいのまよいも感じられませんでした。数々のしんじつ。自分のこと。自分の両親のこと。そして、おそろしいほどの運命……。それらのことを知ってなお、ロビーのかたいけついは、みじんもゆらぐことはなかったのです（いえ、むしろそのぎやくです。ロビーは自分にかせられた重すぎるほどの運命のことを知って、なおのこと、そのけついをたしかなものとなりました）。

アルマーク王はロビーのそのすがたを見て、たしかに思いました。まちがいようもない。わたしの目の前にいるこの少年こそが、まさしく、このアーケランドのきゆうせいしゆなのだ。

「ロビーベルク。わたしは、そなたをほこりに思う。わたしだけではない。このアーランドの、ぜんなる者たち、みなが、同じ思いを持つことだろう。」アルマーク王はそういつて、ぎよくざから立ち上がりました。そしてもういちどロビーのもとへ歩みより、これからのさいごの旅のことについて、ロビーにつげたのです。

「そなたはこれより、そなたの運命の中へとはいりこまなければならぬ。そしてそれは、同時に、このアーランドの運命の中へと、はいることでもある。」

ロビーは王さまに、しつかりとうなずいてみせました。そんなロビーのことを、ライアンがちらりと見やります。

アルマーク王がつづけました。

「さいごの戦いにおいて、アーザスは、そのまがまがしき、さいごのやみの力をふるってくるといふ。かねてあんじていたおそれが、今、げんじつのものとなろうとしているのだ。その力が、どんなものであるのか？ まださだかではないが、われらのきぼうをうちくたく、おそるべき力となるのは、いうまでもないことであろう。今のわれらに、アーザスのその力にうちかつよゆうなどは、残されてはいない。ざんねんなことだが。もはや、このアーランドをすくうためには、今のアーザスにそのすべての力を与えているとされる、赤いキューブを、はかいするいがいに道はないのだ。」

「そのために、そなたはアーザスの住まう怒りの山脈へとゆき、そこで、アーザスの持

つ赤いキューブを、はかいしなければならぬ。キューブの力は、アーザスのからだそのものに、深くつながっている。キューブをはかいすれば、そのとき、アーザス自身の身も、ついでることとなるだろう。」（このアーザスとキューブの力のかんけいのことについて、アーザスはすべて、みずからの口でみなにふれまわっていました。アーザスはほんとうに、子どものようにみずからの力のことをじまんし、そしてみずからのその力のひみつのことまでも、みんなにべらべらとしやべっていたのです。これは、たとえばそのことが知られたとしても、自分はだれにも負けない力を持っているのだという、自信のあらわれからのことでした。

「ぼくの力のひみつを知ったとしたって、きみたちには、ぼくのことをとめられないでしよ？ どうぞ好きなきに、ぼくをやっつけに、ぼくのところまできてよ。ぼくはいつでも、自分の家にいるから。」

アーザスはそういつて、いつも、みんなのことをあおり立てていたのです。

そして大けんじやノランほどの者であれば、アーザスのその力のひみつのことなどについては、アーザスの口から説明されなくとも、みずからつきとめることができました。アルマーク王たち、ペーカーランドの者たちは、こうして、アーザスと赤いキューブの力のかんけいのことなどについて、知ることができていたのです。）

怒りの山脈……。それはシープロンドのくにのふもとを流れるセイレン河の、そのは

るかな上流につらなる、けわしい山々のことでした。

「怒りの山脈……」ロビーが思わず、つぶやきました。

「怒りの山脈！」ライアンも思わず、いいました。

ライアンにとって怒りの山脈というのは、とくべつな名まえでした。かれのあいするセイレン河。その河をめちやめちなものにした、そのげんいんを作ったのが、怒りの山脈。そこに住む、アーザスだったのです。怒りの山脈でおこなわれている、よこしまなるじつけんや、数々の悪いおこない。それをかれらシープロンたちは、どうすることもできないでいました。そしてそれ以上に心を痛める、ひげきのできごと……。怒りの山脈のふもとの地、セイレン河の上流の地で、どんなひげきが起こったのか？ それは読者のみなさんも、よくごんじでしょう。カピバルたちのくにに起こった、あのおそろしいひげきのことを……。

王さまがさらにつづけます。

「その剣、アストラル・ブレードは、宝玉に力を与えることができる。だが、それと同じに、その剣には、もうひとつの、きんだんの力がある。それは……、宝玉をはかいる力だ。」

宝玉をこわす力！ この剣に、そんなおそろしい力が……！

「アーザスの持つ赤いキューブ。それをはかいてできるのは、剣の持つ、その力のみ。そ

してその力をひき出せるのは、ロビーベルク、きみしかいない。アーザスのやみの力にあらがい、キューブをはかいできるのは、きみだけなのだ。」

これこそが、きゆうせいしゆロビーに与えられた、大いなる力でした。剣の力をひき出すことのできる力。それはロビーのお父さん、ムンドベルクも持つていました。この力は代々、レドンホルの王（あるいは女王）の血をひく者のみに、ひきつがれてゆく力だったのです。ムンドベルクが影となり、アーザスの手に落ちてしまった今、その力を持つ者は、もはやロビーだけでした（いえ、もうひとり、剣の力をひき出すことのできる人物がいます。アーザスです。この剣はむかし、アーザスの手にありました。アーザスはそのとき、剣のこつを使いこなす、その力を得ていたのです）。

ロビーは、剣のつかをぎゅつとにぎりしめました。ぼくに与えられた力……。ロビーにとつて、自分にどうしてそんな力があるのか？ ということなどは、もはやどうでもいいことでした。今はつきりしていることは、自分がやりとげなければならぬ、だいいじなことがあるということなのです。

「わかりました。」

ロビーはアルマーク王の顔を見て、しっかりとこたえました。そしてアルマーク王もまた、しっかりとロビーにうなずくと、ロビーのその手を取つていったのです。

「とらわれの身になっているムンドベルクを、助けてやれるかもしれん。かれは、いつ

も、アーザスのそばについている。怒りの山脈にいろはずだ。」

「お父さん……」ロビーは口びるをかみしめて、いいました。

「影となつた者は、もう、もともにもどすことはできない。だが、ロビーベルク、きみの声ならば、たしかに、かれの心にとどくはずだ。たとえ、もとのすがたにはもどれなくともな。かれのことをすくえるのは、きみしかない。これは、きみの、もうひとつの、だいいじなつとめなのだ。」

ロビーは王さまのその言葉に、深くかんじやしました。ロビーの持つ、もうひとつの、だいいじなつとめ。それはとらわれの身となっている自分のお父さん、ムンドベルクを、助けるということだったのです。アルマーク王のいう通り、影となつた者は、もう、もともにもどすことはできませんでした。ですがたとえからだをもともにもどせなくても、その心ならば、もともにもどすことができるかもしれない。お父さんのことを、助けてあげられるかもしれない。

いや、ぜつたいに、ぼくがすくってみせなくては！

「ありがとうございます、王さま。」ロビーはアルマーク王に深々と頭を下げました。

「ぼくは……、お父さんの心を、助きたい。いえ、ぼくがやらなくちゃ、だめなんだ。」

ぼくは、自分の運命にしたがいます。このくにを守るために、お父さんを助けるために、ぼくは、いきます。」

アルマーク王はなにもいわず、ただただ、ロビーのその手を強くにぎりしめました。デルンエルムは目をまつ赤にはらして、ロビーに深くかんしゃしていました。ベルグエルムもフェリアルも、胸にこみ上げてくるあついものを、おさえることができませんでした。ライラも兵士たちも、みな、心からの気持ちをこめた敬礼を、しげんとロビーにおくっていました。

そんな中、ライアンがロビーのとなりにやってきて、なにかをロビーにさし出しました。

「食べる?」

それは、あのエリル・シャンディーンやきだったのです。

ロビーは「ふふっ。」と笑って、ライアンにおれいをいいました。

「ありがとう。」

王さまも、デルンエルムも、みんな思わず、笑みを浮かべてしまいました。

これからはじまる、ロビーのさいごの旅……。そこではどんなできごとが、ロビーのことを待ち受けているのでしょうか……?」

バルコニーのむこうの大きな空には、星がまたたいていました。そのかがやきの下には、はるかなガランタ大陸へとつづく、大いなるブラックフォーンの海が、静かなさざなみを立てていました。

18、ノランベつどう隊まいる

「全兵、しゅつじんじゆんび、とどのいましてございますー！」

黒いよろいを着て、黒いかぶとをかぶつたふたりの兵士たちが、ひざまずいていいました。

こがね色のかみの男の人が、ひとり、そのさきでかなたの平原をながめていました。かれは、ほうこくにやってきた兵士たちと同じく、黒いよろいを着ております。ですが腰には、その黒いよろいとはなんともふつりあいな、こがね色のさやにおさまった、大きなおうごんのつるぎをさしていました。

どうやらこの人が、この兵士たちのしきかんのようでした。そしてその人は、ゆつくりと兵士たちの方をふりかえると、するどいまなぎしでこたえたのです。

「じきに、本軍がとうちやくする。それまで、たいきせよ。本軍がとうちやくしだい、ベゼロインへの進軍をかいしする。」

「はっー！」

しきかんのめいれいを受けて、ほうこくにきた兵士たちは深々と頭を下げ、下がっていきましました。

あたりはいちめん、赤茶けた荒れ野が広がっていました。そのさびしい土地にあわせたかのように、空には同じく、さびしげな雲がどんよりと広がり、今にもひと雨きそうなふんいきでした。風が吹いていました。ひゅうひゅうと石かべのあいだを吹きぬけていくその風の音は、なんともせつなく、かなしげでした。もし、風に心があるのだとしたら……、なにをかなしみ、こんなにもせつない泣き声を上げているのでしょうか？

去つてゆく者への思いか、あるいは手をのばしてももうとどかない、失つてしまった者へのかなしみか……。そんな風の心を受けとめたかのように。しかいの下に広がるおだやかな流れの大河のみなもには、小さな波が、つぎつぎと生まれては、消えていきましました。

ここは大河ティーンティーンその大いなる流れが、ベーカーランドのくの中へとはいりこんでいくところ。そのたいせつな場所を守るために、ここには、りつぽなとりでがぎずかれています。ほんの数日前までは、この場所はベーカーランドのゆうかななる兵士たちによって、かたく守られていました。ですが今は、かれらのすがたはありません。かわりにやってきた者たち。それが今、このとりでの上の見晴らし台で言葉をかわしていた、かれらだったのです。そう、ここはワットによってせめ落とされた、リュインのとりで。そしてここにいるかれらは……、もうおわりの通り。そのワットの兵士たちでした。

こがね色のかみのしきかんは、重い表じようを浮かべながら、かなたの空を見つめていました。そのさきには、もうひとつのペーカーランドのとりで、ベゼロイン。そしてさらにそのさきには、エリル・シャンディーンのみやこがあるのです。

よこしまなるワットの、黒の軍勢。その兵士たち。それをたばねるしきかんなので、このこがね色のかみの男も、さぞかし悪いやつなのでしよう。ですが……、この人は、どこかほかのワットの兵士たちとは、ちがうような感じがしたのです。「なにがちがうの？」ときかれたら、はつきりとはこたえられないのですが、どこかその心のおく底に、深いなやみをかかえているかのような……、そんな感じがしました。

でもワットの黒騎士たちと同じようなおそろしい黒いよろいを着て、そばには同じく、こわいデザインをしたまっ黒なかぶともおいてあります。この人物が、おそろしいワットの軍勢のしきかんであるということに、ちがいはありませんでした。

こがね色のかみのしきかんは、ふたたびきびしい顔をして、見晴らし台からとりでの中へとはいっていききました。入り口の兵士が敬礼をして、かれのことをむかえます。

「本隊への、ほうこくじゆんびはできていますか？」しきかんが兵士にいいました。

「はっ、うさぎの用意、ととのいましてございます。」兵士がこたえます。うさぎ？

「よし。だれも部屋にいれるな。重要なほうこくだ。」

こがね色のかみのしきかんは、そういつて石のろうかをひとり進み、そのおくのひつつの部屋の中へとはいっていきましました。そこは石づくりの小さな部屋で、まども家具も、なんにもありませんでした。ほんとうに、からっぽの部屋だったのです。いえ、ひとつだけ、この部屋のまん中の床の上に、おかしなものがありました。それは木のつるをあんで作った、ひとつの鳥かごだったのです。ですが、その中にはいつていたのは……。

うさぎです！ さつき兵士がいつていたのは、このうさぎのことだったようです。見たところ、なんのへんてつもない、ふつうのいつびきの、はい色のうさぎのように見えましたが……、いつたいこのうさぎで、なにをしようというのでしょうか？

こがね色のかみのしきかんは、部屋のとびらに大きなかんぬきをかけて、だれもはいつてこられないようにしました。わきにかかえたかぶとを床の上におき、そしてかれは、なんと、鳥かごの中のうさぎにむかつて話しかけたのです！（え？ このうさぎつて、しゃべるうさぎなの？ いえ、このうさぎは、ほんとうに、ただのうさぎでした。じつのところ、さきほどそのしげみの中で、兵士たちが見つけてきたばかりだったのです。それじゃ、いつたい？）

「アーザス、わたした。」

アーザス！ ここで、あの魔法使いの名まえが出るなんて！

しかもそれ以上におどろいたのは、あのアーザスのことを、よびすてにしたということでした。ワットの軍の中でも、もともえらいところにいるはずのアーザスのことを、よびすてにするなんて！ いったいこの人物は、なに者なのでしょうか？（アーザスは黒の軍勢のさんぼうとして、ワットのアルファズレド王の仲間に加わっていました。このさんぼうというのは、軍の中でいちばんえらい王さまにちえや力を貸す者のことで、さんぼうはアルファズレド王とならぶくらい、えらかったのです。ですからそのアーザスのことをよびすてにできる人物なんて、ワットの者の中では、ほかには、王であるアルファズレドくらいのものでした。ですからおどろいたのです。）

しきかんが話しかけると、それまで鼻をひくひくさせて、鳥かごのおいをくんくんかいでいるだけだったうさぎのようすが、変わりました。くりくりとかわいらしい大きな目が、急に、切れ長のおそろしい目つきに変わったのです！ そしてその口もとにぶきみな笑みを浮かべると、うしろの二本の足で、すつくと立ち上がりました！（こんなふうには、うさぎがふうとうに立っているところなんて、めつたに見られるものではありません！ うさぎの種族、ラビニンだったら立ちますけど！）

「ああ、ガランドーだね。げんき？」うさぎがしゃべりました！ そしてその声はまさしく、あのアーザスのものだったのです！

これは、アーザスの魔法でした。遠くはなれたところにいる者と、動物のからだを通

して話しをすることができるといふ、おどろくべきわざだったのです！（げんざいこのアーランドでこの魔法のわざを使えるのは、アーザスト、大けんじやノランくらいのものでした。それほど、この魔法はあやつるのがむずかしかったのです。

ちなみに、使う動物は小さな動物だったら、なんでもよかつたのです。たまたま兵士がうさぎを見つけたので、こんかいはうさぎでした。）

それはそうとして……、アーザスのいつた、ガランドーという名まえ。この名まえを、みなさんはきいたことがあるはずです。それは第十六章の終わり、エリル・シヤンデインのお城の前で、ライラとベルグエルムが話していた、その話しの中に出てきた名まえ。ワットのあのおそろしいデイルバグの黒騎士隊の、しきかんと思われる人物の名まえでした。そしてこのうさぎ（アーザス）と話していた、こがね色のかみのしきかんとこそが、まさしく、そのガランドーだったのです！（じつはこのガランドーは、ここよりもっと前に、すでにみなさんの前にそのすがたをあらわしていたのです。え？　ほんと？　と思われるでしょうが、第十三章のはじめ。うでにリボンをまいたワットの使者が、デイルバグに乗ってワットの王城にもどってきた場面のことを、思いかえしてみてください（ちよつともどつて、読んでみるのもいいでしょう）。その使者につづいてやってきた、身分の高そうだった、こがね色のかみの兵士がいましたよ。そう、じつはあの兵士こそが、このガランドーだったのです。）

「なにもかも、おまえの思い通りだ。まんぞくだろう。」

ガランドーが、怒りのこもった声でアーザスにいました。それをきいたアーザス（うさぎ）は、「くつくつく。」という、いつもの笑い方をしてこたえます。

「きみの力には、いつも助けられるよ、ガランドー。ほんとうにきみは、よくやってくれる。でも、ここからが、ほんばんだからね。さいごの戦いでも、ぼくのきたいに、こたえてくれるかな？」

アーザスの言葉に、ガランドーは「くつ……い」という声を上げて、アーザス（うさぎ）のことをにらみつけました。そしてふりしぼるように、強い思いをこめて、いったのです。

「つとめは果たす。だが、いいか。おまえがやくそくを破ったら、わたしはおまえを、ぜつたいにゆるさんぞ。」

「えー、こわいなあ。」アーザスはそういつて、また「くつくつく。」と笑いました。「あんまり、おどかさないでよ。ぼくは、気が弱いんだから。」

よくいます！　今までたくさんの、ひどいことをしておきながら！

「でもねえ、やくそくのことをいったら、それは、ぼくだつて同じだよ？　きみがやくそくをしつかり守つてくれれば、だーれもきずつかずに、すむんだから。あの子だつて、ね。」

「きやま……！」

ガランドーは怒りにふるえ、こぶしをにぎりしめました。どうやらこのガランドーとアーザスとのあいだには、人知れない、ひみつのやくそくがあるみたいなのです。そしてそれこそが、ガランドーがアーザスにつきしたがって、このワットの軍のしきかんになっている、ほんとうのりゆうのようでした。

「わたしは、やくそくを守る。いもうとは……、ライラには、ぜつたいに手を出すな！」

いもうと……！ ライラ……！

そうなのです……、このワットのこがね色のかみのしきかん。おそろしいデイルバグに乗った、黒騎士隊のしきかん、ガランドー・アシユロイは、あのベーカーランドの白の騎兵師団の隊長である、ライラ・アシユロイの、お兄さんでした……！

いっぽうは、ベーカーランドの白の騎兵師団の隊長……。いっぽうは、ワットの黒の軍勢のしきかん……。まるでせいはんたいの立場にあるこのふたりの人物が、血のつながった、兄といもうと。なんて、つらくて、ざんこくで、重いじじつなのでしょう！

「ぼくだって、そんなことしたくないよ。だから、きみには、もつとがんばってもらわなきゃね。」アーザスが、あつけらかなとしたいい方でいいました。

ガランドーは、自分の手を見つめました。どうしてもやらねばならない、みずからの

つとめ……。それをかれは、痛いほどにわかっていたのです。

「もうすぐ、本隊がつく。まずは、ベゼロインだ。」ガランドーがいました。

「ああ、そうだっけね。ベゾルインか。」アーザスがきょうみもなさそうに、いいました（アーザスはきょうみのない物や人物は、名まえをしつかりおぼえていないのです）。「じゃ、よろしくたのむよ。ああ、そろそろおやつの間だから、切るね。いいほうこくがきけることを、楽しみにしてるから。ばいばーい。」

アーザスがそういうと、鳥かごの中のうさぎは、とたんにもとのうさぎにもどって、きよとんとした顔つきで、また鼻をひくひくさせはじめました。

ひとり残ったガランドーは、そのまま動かず、にぎったその自分の手を、じつと見つめていました。アーザスとのやくそく。それは、いもうとのライラの身の安全のほしいうとひきかえに、みずからのその身を、アーザスのもとにささげるといったものだったのです……。

ガランドー・アシユロイ。かれはもともと、白の騎兵師団の人間隊の副長でした（兄のガランドーでも、いもうとのライラには、剣のうででかありませんでしたから）。白の騎兵師団の、副長。それが黒の軍勢のがわにつけば……。ワットにとつて、ひじょうにやくに立つそんざいとなります。ペーカーランドのさまざまなじょうほう。白の騎兵師団のじょうほう。兵士の数。戦い方。とりでの中がどうなっているのか？ それら

のことが、すべて、ワットの知るところとなるのですから。ワットにとつて、そのりえきは、はかりしれないものでした。

アーザスはそれをねらつて、ガランドーに目をつけたのです。アーザスは、ガランドーのじつのいもうとが、同じ白の騎兵師団の隊長であるライラであるということを知つて、それをりようしました。それも、なんともじやあくきわまりない、方法でもつて。

アーザスはガランドーにいうことをきかせるために、ガランドーのいもうとであるライラに、じやあくな魔法をかけました。アーザスはその魔法ののろいをとき放てば……、ライラは、やみの世界に取りこまれてしまうのです。自分にそんなのろいがかけられたなんてことは、ライラはまったく、気がついていません（この魔法はじつさいにそののろいがとき放たれるまでは、かけられた者のからだには、なんのへんかもありませんでしたから。じつにおそろしい魔法です）。ただひとりガランドーだけが、とつぜんに自分の前にあらわれたアーザスほんにんから、そのことをきかされました（アーザスはその気になれば、ガランドーほんにんにたぶらかしのじゆつをかけて、かれを思いのままにあやつつて、味方にひきこむこともできました。ですがアーザスは、わざと、かれのいもうとをねらつたのです。あやつり人形みたいにいうことをきかせるより、その方がおもしろそうだから。アーザスはそう思いました。ひどすぎます！　そしてアー

ザスがライラではなく、ガランドーに目をつけたわけも、そこにありました。兄であるガランドーの方が、年下のいもうとのことをかばう気持ちが強いはずだと、アーザスは思ったのです。その方がよりいうことをきかせやすいし、楽しいだろうと、アーザスは考えました。ほんとうにひどい！。

やみの世界にとらわれていく、ライラのすがた……。アーザスはガランドーに、そのみらいのえいぞうを見せつけました。こんなものを見せられて、兄であるガランドーに、どうしてさからうことができただしょう……。？ かれはアーザスに、ただただ、したがうほかはなかったのです……。

こうしてガランドーはただひとり、ライラへの手紙だけを残して、ベーカーランドを去りました。手紙の中でガランドーは、アーザスのことも、ライラにかけられたのろいものことも、なにもいいませんでした。ただライラに、自分のしんねんにしたがって、強くしあわせに生きてほしいと、それだけをいい残したのです。ライラにこれ以上、よいな心配をかけさせまいとして……。ガランドーはそれからすぐ、アーザスのめいれいにより、デイルバグの黒騎士隊のしきかんとりました。

ガランドーはワットの者たちの前では、兵をひきいるしきかんとして、れいこくなすがたをよそおっています（第十三章のはじめに、はじめてガランドーがとうじょうしたとき、かれはベーカーランドといくさになることをよろこんでいるかのようにふるま

い、笑みさえ浮かべていました。じつはあれもすべて、ガランドーは、わざと、そのようにふるまっていたのです。ワットの者たちの前では、ベーカーランドのうらぎり者としての自分を、えんじつづけていなければなりませんでしたから。ですが心の中では、いもうとのライラのことをかたときも忘れることなく、いつも心配し、くるしんでいました。かわいそうに……。

「アーザスめ……」

ガランドーは、はきすてるようにつぶやきました。そして床においたかぶとをわきにかかえると、とびらのかんぬきをはずして、ふたたびきびしい顔をして、ひとり、とりでの中へと消えていったのです。

そのひとみのおくに、ライラのすがたをうつして……。

「さいごの旅のことについては、ノランから話されるであろう。ついてまいれ。」

アルマーク王がそういって、みんなのことをみちびきました。

ここはベーカーランドのお城、エリル・シャンディーンの、てつぺん。そこからさらに半マイルほど空中ろうかを歩いて、ようやくたどりついた、王さまのぎよくぎのあたる塔の上。そして今、みんながむかっただのは、そのぎよくぎのうしろ。女神リーナロツドのぞうの、その足もとだったのです（さきほど、ひみつの出入り口がひらいたところ

です。といっても、そこにはつきりと、出入り口が見えているというわけではありません。せいかくには、「出入り口がかくさされているところ」といった方がいいでしょう。この出入り口はほんとうに、近くでじっくりながめても、どこがとびらなのか？ ぜんぜんわかりませんでした。ですから、ひみつの出入り口なのです。

ひとりの兵士が進み出て、女神の足もとのかべを手でさぐり、そこに、手に持っているなにかをさがしました（ちなみに、そこはさつきひらいた方とはべつの、左足の方でした。どうやらさつきとはちがうべつの出入り口が、そこにあるみたいです）。すると……。

ぷしゅー。

さきほどと同じ、空気のもれるような音がして、それまでまったくかべにしか見えなかった場所に、ふたたび、ひみつのとびらがひらいたのです！（ちなみに、兵士が手に持っていたのは、まん中に白い石がついた、きいろいろいりボンでした。このりボンはこのひみつのとびらをひらくための、とくべつな品物で、このりボンをとびらのある場所にかざすと、かくされているとびらがひらくというしくみになっていたのです。このりボンはしつかりとかなりされていて、お城の戸じまりをまかされているとくべつな兵士たちにはしか、持つことはゆるされていませんでした。その兵士たちはりボンと同じく、きいろいろいろうのはいったかっこいいよろいを着ていて、うでは同じく、きいろいろいわん

しようをまいていました。かれらはその名も、「イエローリボンけいび隊」！名まえはともかくとして……、お城の中でも、もつとも重要な人たちだったのです。」

入り口をくぐって中にはいると、そこはなんともふしぎなところでした。そこは、はしからはしまでが二十フィートほどのまるい部屋で、かべも床も、まっ白にかがやいていたのです（ロビーはさいしょ、そとのおひさまの光がさしこんでいるのかと思いましたが、すぐに、これはまわりのかべそのものが白い光を放っているのだということに気がつきました。だってそとは今、すつかり、おひさまがしずんでしまっている時間でしたから）。まどはなくって、つるつるとした白いかべが、ずうつと上の方にまでのびていました。

「いったいここは、なんの部屋なのでしょう？　ですがロビーはすぐに、そのこたえを知るようになったのです。」

「この上だ。」

アルマーク王がそういつて、かべぎわの床の上においてあった、まるい板のようなものの上に乗りました。それはちよつけいが三フィートほどで、あつさが二インチほどの、よくみがかれた、白いまんまるな石の板でした（見た目はまるで、ホワイトチョコみたいでした）。そしてよく見ると、その石の板は、このまるい部屋のかべにそつて、同じかんかくをあけて、全部で六つ、きれいにならべておかれていたのです。

「いつこ、たんないから、ロビーは、ぼくといつしよに乗ろうね。」ライアンがそういつて、ひとつの板の上に乗し、ロビーのことを手まねきします。あわててロビーも、わけもわからないまま、その板の上に乗しこみました（小さな板でしたから、いくらライアンが小さくても、ふたり乗つたらいつぱいでした）。

つづいて、デルンエルム、ベルグエルム、ライラ、フェリアルも、それぞれの板の上に乗しこみます（おともの兵士たちは部屋の入り口の見張りに残りました）。アルマーク王と、ロビーとライアンをあわせて、これで六つの板が全部うまつたわけでした。

「落っこちないように、しっかりと立つてね。」不安げにしているロビーに、ライアンがいました。え？ ま、まさか……、また？

「アローイン！」

ロビーの思った通り！ ライアンのその言葉をあいずに、ふたりの乗つたその石の板が、床からふわーん！ ちゆうに浮かび上がったのです！

「や、やっぱりー！」ロビーは思わずしゃがみこんで、「ひええ！」とライアンの足にしがみついてしまいました（おかげでライアンは、「わわ！」とよろけそうになってしまいました）。

つまり……、この部屋はみなさんの世界でいうところの、エレベーターだったのです！石の板に乗ってあい言葉をいうと、石の板が上がったり下がったりして、乗っている人をほかの階にまではこんでくれるというわけでした！（お城の七階にくるまでには、魔法のらせんかいだんに乗ってきたわけですが、いつてみれば、あれはエスカレーターですよ。そしてこんどは、エレベーターというわけなのです。うくん、エリル・シャインディーンつて、ファンタジーなのにげんじつ的！

ところで、王さまもさいしょ、下の階から、このエレベーターに乗ってぎよくぎの間までやってきました。それならなにも、わざわざあんなに長い空中ろうかを歩いていなくても、みんなもはじめから、このエレベーターに乗ってぎよくぎまでいったらよかったですよ……。でもまあ、正式に王さまに会うためには、長い空中ろうかを歩いてぎよくぎまでいくというのが、きまりになっているようでしたので、ここは、そのでんどうの顔を立てることにしましょうか……。

ちなみに、王さまがきたときになつていた、ちん、ろん、らん、という音楽は、「もうすぐエレベーターがきますよ」ということをしらせるためのもので、「ちーん！」というベルの音は、「つきましたよ」ということをしらせるためのものだったのです。）

ちーん！

ほどなくして、ライアンと（そのライアンの足にしがみついている）ロビーを乗せた石の板が、てっぺんまでたどりつきました（でも……、王さまのぎよくぎのある場所が、お城のてっぺんなんじゃないのでしょうか？　そこよりさらに上にある、この場所って……？）。

ちーん！　ちちちーん！　ちーん！

ほかのみんなを乗せた板も、じゅんばんにてっぺんにとうちやくです（この石の板は、その上に乗った人のあい言葉だけに反応して動くというものだったのです。そのため、上につくのも、それぞれひとりずつでした。ひとりとうちやくするたびにベルの音がなるので、ちよつとうるさいのですが……）。

そこはぎよくぎのある広間から（そして女神ぞうのその頭の上よりも）さらに上につき出た、いつぼんの塔の中でした（なるほど、ぎよくぎの間のそのやねの上にも、小さな塔が突き出ていたんですね。これならお城のてっぺんであるはずのぎよくぎの間より、さらに上があつても、おかしくないわけです。そこにいくためのエレベーターが女神ぞうの中にあるというのは、やっぱり、ばちあたりのような気もしますが……）。そし

てここは、お城の人たちでもふだんははいることのできない、とてもとても、とくべつなところだったのです。それはこの場所に、とてもだいじなあるものが、おかれていたからでした。

ベーカールランドのお城の、そのいちばんてっぺんにおかれている、だいじなもの。それがなんだか？ みなさんにはもう、おわかりでしょう。そう、この場所には、ベーカールランドのくにのいちばんの宝物、青き宝玉がおかれていたのです！

風がびゅうびゅうと吹きつけていました。エレベーターの終わり、石の板がたどりついたその塔は、青いタイルのトンがりやねをなん本かの石のはしらがささえているだけの、かべのない、あずまやの塔だったのです（ちなみに、石の板がたどりついたこの場所は、まん中が下まで吹きぬけになっていて、石の板はその吹きぬけをぐるっとかこんだつうろのふちに、ぴたっとまりました。ですが、もしこの吹きぬけに落っこちてしまったら？ だいじょうぶ。なんと、落ちた人には空中で魔法の力がはたらいて、そのままその人は、ふわふわと、下までおりにいくことができましたのです！

ほかに、人と人がぶつからないように、板と板のあいだにはきよりが取ってあったり、危険を感じたら、板が自分でとまったり。安全たいさくもばっちりされています。でもさすがに、ふわふわおりののが楽しいからというりゆうで、わざと吹きぬけに

飛びこむ人はいないみたいです。そんなことをしたら、ぜったい怒られますから。ロビーはライアンに手をひつぱられながら、なんとか、石の板からその塔のつうろの上へと、おり立つことができました（しつかりとした足場にかんしゃですな！）

ちなみに、ライアンはいぜんエリル・シャンティンにきたときに、この場所にもあんないされていました。ですからこのエレベーターのことも知っておりまし、乗るのもぜんぜんへいきだったのです。おもしろかったので、そのときライアンは、十回以上ものぼりおりしてしまっただくらいでした。そしてなん回か乗っているはずのフェリアルでしたが、じつはかれは、どうにもこのエレベーターがにがてで、ロビーと同じくらいおっかながっていました。かれのめいよのためにも、文章にしては、わたしもあえてお伝えしていませんでしたが……。そしてこの塔からのびるいっぽんの石の橋が、そのさきにあるもうひとつの青いとんがりやねの塔のもとへと、みんなのことをまねいていたのです。

この「もうひとつの塔」というのが、じつにおそろしいものでした。それはなぜか？ といいますと、じつはその塔は、やねの上につき出た今いる塔から、西の海の方に空を十ヤードほど進んでいった、そのさき。つまり、まったくの空中に、ぽつんと浮かんでいたからなのです！（つまり、今いる塔からのびているいっぽんの石の橋だけが、空中のその塔へとむかう、ゆいいつの道だったというわけなのです。なんておそろしいと

ここに塔をつくるんでしようか！

でも、ご安心を。この塔は魔法のわざによって、しっかりとささえられているということでしたから。でなければとても、こんなおそろしいところにある塔になんて、渡れるはずありません！

みんなは（ロビーだけはおそろおそろ）その空中に浮かぶ塔へとむかつて、石の橋を渡っていきました（そこがもくてき地だということでしたから）。そしてロビーは、その空中の塔の床のまん中に、りっぱなかざりのついた白い石の台がひとつあるのを、見て取ったのです（その塔も、さいしょの塔と同じ、かべのないあずまやの塔でしたから）。そしてそのかざり台の上、五フィートほどの空中に、それはありました。

さいころのようなかたちをした、ひとつのすき通った青い石。それが空中で、光をきらきらとはんしやさせながら、ゆつくりとまわっていました。そう、これこそ、ベーカーランドのしよだいの王、イエヒユリー・ベーカー王が、このアーケランドの地で女神リーナロッドよりさずかったとされる、青き宝玉、そのものだったのです！

ひとめ見るなり、ロビーはその美しさに心をうばわれてしまいました。アーザスのたくらみによって、そのかがやきを失いつつあるという、青き宝玉。ですがそれでもなお、この宝玉はほかのどんなすばらしい宝石よりも美しく、どうどうと光りかがやいていたのです（ちなみに、この宝玉の光は、遠く西の地からやってくる船たちの、目じるしに

もなっていました。つまりこの塔は、うみべのとう台のやくわりをも果たしていたのです。ですからこんな、お城のてっぺんにあるんですね。

「おお、やってきたな。」

とつぜん、どこからか声がしました。その声に、ロビーは、はつとして、われにかえます。ロビーはすっかり、宝玉の美しさに見とれてしまっていて、そのわきの、石のはしらの影にいたそのひとりの人物のことに、ぜんぜん気がつきませんでした。

声とともに、その人物がペカペカとくつ音を石の床にひびかせながら、歩き出てきました。茶色のぼろぼろのマントをはおっていて、くたびれた衣服に、ペタンこのくつとつかかっています（ペタンこのくつですから、そのくつ音も、こつこつではなく、ペカペカだったのです）。肩からは大きなかわのかばんをかけていて、そして手には、さき白いすいしうのはまった、長い木のつえを持っていました。

肩までのびた茶色のかみが、風になびいてぱたぱたとゆれております。おかしなことに、かみの毛の色は茶色なのに、長くのばしたそのおひげは、はい色でした（ですから、茶色とはい色、どっちがほんとうの毛の色なのか？ わかりません）。見た目はもう、ずいぶんおとしよりでした。ですが、その力強い目。五フィート八ほどもある、しゃんと

した背かっこう。そして、しつかりとした足取り。どれを取っても、とてもおとしよりとは思えなかつたのです。

「待たせてすまぬな、ノラン。」アルマーク王がいいました。

ノラン！　そうです、この人物こそ、この世界でいちばんといわれる大けんじや、ノラン・エルセルファス・クーシー、その人でした！（けんじやにしてはずいぶんぼろぼろのかっこうをしておりますが、これはかれが一年中、あつちやこつちを飛びまわっているからでした。きれいな服を着ていても、あつというまにほこりにまみれ、ぼろぼろになってしまうのです。ですからノランは、いつも、ねだんの安い旅用の衣服とマントを身につけていました。同じけんじやのカルモトの、どはでなかつこつとは、えらいちがいですね。）

ノランは「はっはっはー！」と大きな声で笑つて、アルマーク王にこたえました。

「おかげで、また、でしに、こてんばんにやられてしまつたわ。」

でし？　するとそのとき。同じくはしらの影から、もうひとりの人物があらわれたのです。

その人物は、はしらの影の石のベンチ（ベンチがあつたんですね）からびよこんと飛びおると、ノランの横まですたと歩いてきました。背だけはライアンと同じくらい。りつぱなししゅうのはいつたきれいな服を着ていて、金色のふち取りのされた白い

ケープをはおっております。そのケープについたフードをすっぽりかぶっていて、フードには金色の大きなリボンがふたつ、左右にかわいらしくかざられています。ひぎの上までの半ズボンをはいていて、このズボンもまた、小さなたくさん金色のリボンで、かわいくかざられています。

ひとめで子どもだとわかりました。人間の種族の子で、ねんれいは十二さいか十三さい、そのくらいでしょうか？ フードからのぞいているのは、とてもかわいらしい顔をした、女の子のようでした。かがやくように美しい、こがね色がかつた茶色のかみの毛で、まるっこい、かわいいかみがたをしております（フードをかぶっているの、全部は見えませんでした）。ひとみの色は、ここちよい海のお風のような、やわらかなサファイア色。手には、さきにも色のすいしよのはまった、きんぞくでできたつえを持つていました。

「おししようさまが、弱すぎるんです。まあ、でも、カードだったら、だれだって、ぼくにはかなわないでしょうけど。」

その子にはかわいらしい声でそういって、その場にいるみんなにペこりと頭を下げて、あいさつしました。やつぱり、女の子のようです。でもかわいい声のわりには、ちよつとなまいきな感じで、りくつつぽいしやべり方をする子のようですね。それに自分のことも「ぼく」ってよんでるみたいですし、やつぱりけんじやのしだけあって、すこし

変わっているところがあるみたいです（ところで、かれらの話しのことですが、ノランとそのでしの子のふたりは、ロビーたちがやってくるまでのあいだ、この場所でカードゲームをしてあそんでいました。それはベーカードで子どもたちに人気の「デイルグレイド」というカードゲームでしたが、エリル・シャンドーのまちなにもお店がありましたよね。このゲームにおいては、ししよであるノランも、でしにまったくかなわなかったというわけなのです。

なにしろ、でしの持っている「エクセレンス・エンペラードラゴン」の強さといったら！ ししよノランの「魔法使い騎士団」は、でしの「さい強ドラゴン軍団」に、げんざい二百五十四れんぱい中！ この日もこてんぱんにやられてしまつて、れんぱいきろくをさらに、のぼしてしまつたというわけでした。もつとも、こんなに強いカードがなくても、でしの子のこの子のいう通り、だれもこのゲームでは、この子にかないませんでしたけど。それほどこの子は頭がよく、カードだけではなくて、あらゆるゲームにかつたのです。

「おぬしが、ロビーベルクだな。うむ、ムンドベルクに、よくにておる。それから、きみは、シープロンドのライアン王子。ひさしぶりだのう。」ノランがいました。

「あ、はい、おひさしぶりです。」ライアンがあわててこたえました。ライアンはさつぱり、ノランのことをおぼえていませんでした。じつは四年前、メリアン王たちのこと

をまねいたそのかんげいのしきてんの席に、たまたまノランもやってきていて、メリア
ン王とライアンにあいさつをしていたのです。でもライアンは、テーブルの上のお菓子
のことばかり見ておりましたから、ノランのことをぜんぜんおぼえていませんでした
(世界さいこうのけんじやよりも、やつぱりライアンはお菓子でしたね)。

「わたしは、ノランだ。こっちは、でしのマリエル。」

ノランにしようかいされて、マリエルとよばれたその子が、またペこりと頭を下げ、
ロビーとライアンのふたりにあいさつしました。

「はじめまして。マリエル・フィアンリーと申します。ノランおししようさまのでし
で、このお城の、きゆうていまじゆつしをしております。」

きゆうていまじゆつしというのはお城につかえているゆうしゆうなまじゆつしのこ
とで、さまざまなちえを出したり、いろいろな魔法を使ったりして、王さまやくにの人々
のお手伝いをするのが、そのだいじなやくめだったのです。そしてエリル・シヤン
ディーンのお城には、四人のきゆうていまじゆつしたちがいましたが、ほかの三人はみ
んな、はたち以上のねんれいでした(いちばん若くても二十一さいでした)。きゆうてい
まじゆつしになるためには、人なみはずれた魔法のさいのうと、ゆうしゆうなるずのう
が必要だったのです。いってみればエリート中のエリートといったところであって、
きゆうていまじゆつしというのは、ほんのひとにぎりの、ばつぐんにすぐれたまじゆつ

しだけかなることをゆるされる、魔法をこころざす者であればだれもがあこがれる、せまき門でした。

ですからマリエルくらいのものできゆうていまじゆつしにえらばれるということは、とてもすごいことなのです。しかもあの大けんじやノランのしなのですから、このマリエルという子は、そうとうな魔法のさいのうの持ちぬしであると考えていいでしょう。なにしろノランといえば、でしを取らないのでゆうめいでもありましたから（あちこち飛びまわっているのです、でしを育てているひまがないというりゆうが大きかったのですが……）。

そして、ノランがマリエルのことをでしにしたわけは、じつさいのところ、ノランがいい、だれも知りませんでした。ただあるとき、はるか西の地からもどってきたノランが、マリエルのことをつれてきたのです。そのときマリエルは、まだ五さいでした。みすぼらしい服を着ていて、かみの毛もぐしゃぐしゃ。手には小さなお守りだけをひとつ、にぎりしめていたそうです。そしてその胸には、見たこともない、おそろしげなりゆうのもんしようがきざまれていました。

マリエルの胸にりゆうのもんしようがあるとこのことを知っているのは、ノランのほかは、アルマーク王と、ごく一部のお城の者たちだけです。そして、このおそろしいりゆうのもんしようのひみつについては、さんねんながら、このロビーの物語の中で

は語られません。マリエルの、そのひめられたひみつ……、遠く西の大陸の、エクセレンス・ドラゴニア帝国のめつぼうにまつわるその物語は、またいつか、べつのところでお話ししたいと思います。きっとそれだけで、本がいつさつ、できてしまうことでしょうから。

それからノランは、マリエルをアルマーク王にあずけ、こういいました。

「王よ、今からこの子は、わたしのでしだ。城で育ててやってくれ。いずれこの子は、わたしをこえる、けんじやとなることだろう。」

そしてマリエルは、わずか十一さいのときに、このエリル・シャンディーンの子ゆうていまじゆつしにえらばれたのです。手にしたつえは、そのおいわいに、ノランからおくられたものでした。

マリエルは、むかしのことをぜんぜんおぼえていません。ですがマリエルにとつて、かこはどうでもいいことでした。マリエルには、わかつていたのです。たいせつなものは、今、そしてみらいにこそ、あるのだということ。

マリエルは、こうして、ノランのものであるということ、エリル・シャンディーンの子ゆうていまじゆつしであるということ、魔法のしゆぎように日々、はげんでいました。

ところで……。ここでひとつ、けつこう重要な説明を加えておきます。それは、なぜ、

かれらきゆうていまじゆつしたちが、ロビーのことをむかえにいくこんかいの旅に、加わらなかつたのかということ。たしかに、まじゆつしであるかれらがいれば、これまでの冒険の中でも、かなり助けられたところがありましたよ。ですがかれらのようなまじゆつしたちは、いつもたいへんなしごとをこなしていて、なん日もお城をあげるような旅には、出ることができなかったのです。ましてや今は、ワットとの大いくさのじゆんびに追われておりましたので、ことさらたいへんなときでした。かれらきゆうていまじゆつしたちが、ひとりでもかければ、いくさへの対応は、大きくおくれてしまうことでしょう。そのためアルマーク王は、それらのことをすべて考えにいれたうえでも、きゆうていまじゆつしたるかれらにひつてきするほどの力を持った、ベルグエルムたち四人の騎士たちを、この重要な旅に送り出したのです。

ワットとの大いくさがはじまるまでには、まだしばらくの時間があります。アルマーク王は、そのあいだにきゆうせいしゆであるロビーのことをお城までつれて帰ることのできる、ゆうしゆうなるベルグエルムたちに、そのにんむをたくしました。まだいくさまでには時間がありましたので、かれらのすのあいだは、もうひとりのゆうしゆうなるしきかんであるライラに、そのかわりをつとめてもうことができましたから。アルマーク王は、すべての人の力がすべてうまくまわるようにと、ぎりぎりのせんたくをしていたのです。

「きゆうていまじゆつし！　すごいなあ、そんなに若いのに。」ライオンがそういつて、マリエルのことをほめました。

「いえ、それほどでも。」マリエルはひかえめにいいましたが、ほめられてすごうれしそうです。

「それに、女の子できゆうていまじゆつしつていうのも、めずらしいよね。男の人ばかりなのに。マリエルちゃんつて、やっぱり、すごいなあ。」ライオンが、そういつたんだん……。

「ごらー！　女の子とはなんだー！」

とつぜん、マリエルが両手をふりかざしてどなりました！　ええっ？　ど、どうしたの？

「ぼくは、男の子だ！　よく見ろ！」

ええっ！　お、男の子？　マリエルはそういつて、フードをがばつ！　とうしろへ下げました。こがね色がかつたきれいな茶色いかみが、ふわりとなびきます。フードをぬいだので、これでその顔を、はつきりと全部見ることができるようになったというわけでした。どこが女の子だ！　よく見ろ！　というわけでしたが……。

やっぱり、女の子みたいにかわいらしい顔なんですけど……。いわれなかつたらまがえてしまうのも、むりありません（かみがたも女の子みたいですし、そのうえ声ま

で、かわいらしい高い声でしたから。

すっかり怒られてしまったライアンは、「ええっ！」とおどろいて、あわててとりつくるおうとします（ちなみに、ロビーもマリエルのことを女の子だと思っておりましたので、さきに女の子だといわなくてよかった……、と心の中でひそかに思っていました）。

「だ、だって、マリエルって、女の子の名まえじゃん！ ぼくのいとも、マリエルって名まえだよ。まちがえちゃうよ！」

じつはこれが、ライアン（とロビー）がマリエルのことを女の子だと思った、いちばんのりゆうでした。ライアンのいう通り、マリエルというのは、このアーランドでは女の子にしかつけない名まえだったのです。ですからライアン（とロビー）は、マリエルのことを女の子だと、はじめからすっかりきめつけてうたがいませんでした。ですが……。

さあ、これがマリエルのきげんを、ますますそこねてしまったのです。

「ぼくのいちばん気にしてること、いったな——！」

マリエルはもう、かんかんです！ 持つているつえのさきから、ばちばち！ ときいろい火花が！（ちよ、ちよつと、おししようさま——！ なんとかしてよ——！）

そんなかれらのやりとりを見て、ノランは「はっはっは。」とのんきに笑って、ロビー

とライアンのふたりにいいました。

「マリエルは、小さいときにこの城にきたのだが、むかしの名まえをおぼえてなくてな。それでアルマークが、女の子だと思つて、マリエルと名づけたのだよ。わたしもすつかり、男だと伝えるのを、忘れておつてのう。アルマークはしばらく、マリエルを女だと思つておつたから、今さらほかの名まえに変えることも、できなくなつてしまつたのだ。」

いわれて、こんどはアルマーク王が、どきつ！　としてしまいました。どうにも気まづい表じようです。

「ま、まあ、よいではないか。ようは、ほんにんの、気持ちの持ち方しだいだから……」アルマーク王はそういつて、「はは、は。」とひきつつて笑いました（ちなみに、マリエルのみようじのフィアンリーというのは、お城のbenきようの先生の家ののみようじでした。マリエルはその先生のようしとして育てられましたので、今はフィアンリーのみようじを名のつていたのです。benきようの先生の家で育つたマリエルは、そのためちよつと、りくつっぽいところがありました。でも、まだまだ子どもっぽいところもあつたのは、みなさんも見ていただいた通りです）。

「しょうがないですね。まあ、いいです。それほどぼくつて、かわいいんだから。」マリエルが、鼻を「ふん！」とならしていいました。

これに対して、こんどはライアンが頭にかちーン！　ときてしまったから、さあたいへんです！（お子さまどうしの戦いが、ぼっぼっ！）

「な、なにおう！　かわいいなら、ぼくだって！」ライアンはそういって、ロビーの方をむいて、両のこぶしをふたつ、ほっぺにつけて、かわいらしいしぐさをしてみせました。

「ね？　ぼくの方が、かわいいよね！　そうでしょ？　ロビー。」

「なにいつてるんです！　ぼくの方がかわいいに、きまつてるよ！」

「な、なにやら、たいへんなさわぎになってしまいました……。もうマリエルとライアンは、わーわーきゃーきゃー。おたがいの「かわいいさ」について、いっぽもゆずらない、ぎろんのかわしあいです！　どうやらライアンもマリエルも、「これだけはゆずれない！」という部分に、おたがいふみこんでしまったようですね。それにしても……。どっちも男の子なのに、どうせなら「かつこよさ」で、もめてほしいものです……。ロビーはふたりのお子さまのあいだにはさまれて、もみくちやにされながら、うくん……。とにが笑いするしかありませんでした。

さて、話がだいぶ、でし（マリエル）の方にかたむいてしまいました……。、「かわいさ」についての戦いは、もうこのへんにしてもらって……。それではそろそろ、ここ

へきたほんらいのもくてき、大けんじやノランの話をきくことにしましょう（横ではマリエルとライアンが、おたがいにくらみをきかせあつて、まだばちばちと火花を飛ばしあっているみたいですけど……）。

みんなは、宝玉の前に集まっていました。近くによると、宝玉からは、ふいーんという、小さな音がなっているのがわかりました。ゆつくりとまわりながらかがやく、美しい宝玉。これが今、よこしまなる魔法使いアーザスの手によつてねらわれ、そしてそのために、その力を失いつつあるというのです。はじめて見るロビーには、どこが悪くなっているのか？ ぜんぜんわかりませんでした。しかし、いぜんの力強い宝玉のかがやきを見たことがある者にとつては、今の宝玉のかがやきは、ほんとうに弱々しいものを感じるはずですよ（なにしろいぜんの宝玉のかがやきは、じつと見ていたら、まぶしくて目が痛くなつてしまうほどでしたから）。それほどこの宝玉の力の弱まりは、はつきりと、痛いほどに感じられるようになっていました。

「これが、このアークランドの、大いなる力のみなもとだ。」宝玉に見いつているロビーに、ノランがいました。「どうだ。その力を、おぬしも感じるか？」

ロビーはだまつてうなずくと、しばらくたつてからこたえました。

「はい。この石の中には、ものすごい力があるのだとわかります。でも、変です。はじめて見るものなのに、とても、なつかしい感じがする。」

ロビーの言葉に、ノランもうなずいてこたえます。

「それは、おぬしのその剣のせいだろう。その剣のやいばと、この石は、同じものだ。そして、そのひめたる力もな。」

ロビーは腰の剣に手をあてました。心なしか、剣は宝玉の力にこたえているかのよう
に、ロビーのその手に、ふしぎなぬくもりの力を感じさせました。

「おぬしは、この石を守らなければならん。それが、このくにを守ることになる。」ノ
ランが宝玉の方をむいて、ロビーにいいました。「さいごの旅は、とてもかんたんなもの
だ。おぬしはまず、精霊王のもとへゆき、そしてそこから、アーザスのいる怒りの山脈
までゆく。それだけのことだ。」

え？ ノランさん、今、なんて？

ロビーは思わず、自分の耳をうたがってしまいました。「アーザスのところに行く。
それはわかっておりましたから、そこではありません。その前です。ですがロビーがノ
ランにたずねる前に、かれがノランにくいつきました。

「精霊王のところ！ 精霊王に会えるの！ ほんとー！」

それはもちろん、ライアンでした。ごぞんじの通り、ライアンは精霊とともなじみ
の深い、シープロンドの者でしたから、精霊王なんていったら、それはもう、ぜひとも
お会いしたい相手だったのです（たとえば大人気スターの大ファンの子が、そのあこが

れの人に、ちよくせつ会えるといわれたらどうでしょう？　まさに今のライアンが、それだったのです。

しかしノランの言葉にびっくりしたのは、ライアンだけではありませんでした。というより、アルマーク王と、デルンエルム、マリエルの三人をのぞく、ぜんいんがびっくりしたのです（いつもれいせいなライラまでが、ベルグエルムやフェリアルといっしょになって、すぐくおどろいていました）。やみの精霊の谷で、そのそんざいがあきらかとなった、伝説の精霊王。そしてこんどは、じっさいにその精霊王のもとに、会いに行くというのですから、みんながおどろいたのもむりはありません。

「精霊王のところへいくつて……、ほんとうに、そんなすごいところにいけるんですか！　」こんどはロビーが、ノランにくだいようになぞねました（さきにくいついていたライアンのことは、マリエルが「こら！　おししようさまからはなれる！」といつてひきはがしました。もちろんそのあと、わーわーもめてましたが……）。

ノランはそんなロビーの言葉をきいて、また「はっはっは。」と笑つていいました。「いけるもなにも。ロビーベルク、おぬしは十さいになるまで、その精霊王のもとで暮らしてたのだ。」

えええーっ！

もう、びっくり！　ロビーが、精霊王のところまで暮らしてた？　これはいつたい！

みんなももう、びっくりきょうてんです！（いつもれいせいなライラまでが、ベルグエ
ルムやフェリアルといつしよになって、すぐおどろいていました。）

「ちよつと！ ロビー！ それってどういうこと！ ぼくに、ないしよにしてたの！」
ライアンがもう、すっかりこうふんしてしまって、ロビーのことをゆさゆさゆさぶつて
いいました。ロビーは「あわわわ……」とぐらぐらゆれながら、もう、わけもわからな
くなつてしまっているありさまです。

「これこれ。かれにいつても、むだなことだ。ロビーベルクは精霊王のもとを去ると
き、精霊王のことや、そこにいたことのすべてのきおくを、なくしておるからのう。」ノ
ランがつづけけます。

「え？」ライアンがロビーのからだから手をはなして、いいました（ロビーはかわいそ
うに、すっかり頭がふらふらになって、ペしゃんとたおれてしまいました）。

「ロビーベルクのことを、守るためだ。」アルマーク王がこたえます。「精霊王のもとに
いたということをおぼえているままでは、ロビーベルクに、思わぬさいなんがふりかか
らないともかぎらない。精霊王がほんとうにいるのだというひみつは、守られたままに
しておくのが、ほんらい、だれにとつてもいちはんよいことなのだ。だから精霊王は、ロ
ビーベルクのきおくを消したのだよ。」

「そんなー！ せっかく、精霊王のところに行ったのにー！」ライアンがアルマーク王の

前に進み出て、ぶーぶーもんくをいいました（すぐにマリエルに、「こら！ 失礼だぞ！ もどれ！」といわれて、うしろにもどされました。もちろんそのあと、わーわーもめてましたが）。

「精霊王のひみつは、守られつづけなくてはならん。」ノランがさらにつづけます。「だが、ロビーベルクがどうして精霊王のところに行ったのか？ そのわけくらいは、話してもかまわんだろう。」

そういつてノランは、ロビーのそのひみつのかこのことを明かしました。

それはロビーが、まだ五さいのとき……。

それまで山里でかくれるようにすごしてきたロビーの身に、大きな危険のときがおとずれました。それは、ロビーがそのときにはじめて手にいれることとなった、ある力のために生まれた危険でした。その力とは……、そう、レドンホールに代々伝わる、アストラル・ブレードとよばれる、せいなる剣。その剣の力をひき出すことができるという、そのとくべつな力のことにはかならなかつたのです（この力はほんらい、おさないときにはまだ生まれません。少年少女くらいに成長したときに、はじめて、レドンホールの王の子は、剣の力をひき出すその力を持つようになるのです。ですからロビーの五さいというのは、だいぶ早いねんれいでした。ムンドベルクの場合は十さいのときに、この

力を持つようになったのです。

この力を、ロビーベルクが持つようになる。それはムンドベルクには、はじめからわかっていたことでした。ですからムンドベルクは、それより前に、ロビーを山里にかくしたのです。ロビーのその力を、あのよこしまなる魔法使い、アーザスに悪用されないために。わが子、ロビーベルク。この子は、このアーランドのきゆうせいしゅ。けつして悪の手になど、渡してはならぬと。

ロビーを山里にかくしたことで。危険はさけられたかのように思われていました。

ですがそれは、大きなまちがいであったのです。

アーザスの持つ、赤いキューブ。そしてなによりも、アーザスのそのおそろしすぎるほどの、じゃあくなる魔法の力……。それらをあわせたまがましい力は、このアーランドのどんなに山深い場所にかくれようとも、さけられるというものではありませんでした。

ロビーが剣の力を持つようになった、そのとき。アーザスの持つ赤いキューブが、大きく、その力のバランスをくずしたのです。はかり知れないほどに強大な魔法のさいのうを持つアーザスにとって、それが意味することを知らずには、たやすいことでした。

キューブの力のバランスがくずれたのは、キューブに力を与えることのできる剣、アストラル・ブレードをあやつることのできる者が、新たにあらわれたということ。つまりそれは、レドンホールの王の子が、どこかにいるということ、はつきりとあらわすものであったのです……（しかもアーザスには、それが男の子、王子であるということさえわかりました。男と女では、その力のせいがかくが、ちがったのです）。

ロビーが剣の力を持った、そのしゅんかん。ロビーのそんざいのことを知ってしまった……。アーザスのおそろしきさというのは、ほんとうに、みんなのそうぞうをはるかにこえるほどのものでした。

アーザスはすぐに、レドンホールに使者を送りました。頭がかぼちやで、手足がへちま、からだはたまねぎのよせ集めという、ふざけたやさしい人形を送りつけたのです。その使者はムンドベルクに対して、こんなことをいいました。

「ゴしそく、オタンじよう、オメでとうごぎイマス！ ツキましてハ、ゼひ、ワたくしどモの家デ、おいしいノぱーていーヲヒラキタイ。親子デ、ふるツテ、ゴさんかクダさいマセ！」

ムンドベルクはそれをきいて、全身がふるえました。ロビーベルクのこと、アーザスに知られてしまっていたのです！

なぜアーザスに、それがわかったのか？ ムンドベルクにはけんとうもつきませんでした。しかしアーザスに知られてしまった以上、ロビーのことを、もつとほかの、どこか安全な場所にかくさなければなりません。でも、いったいどこへ……？

「お料理ハ、才肉と才魚、ドツチガお好みでシヨウ？ やっパリ、うるふあサンでしたら、才肉の方が……、アっ！」

ムンドベルクはぺちやくちやうるさいそのやさしい人形の使者を、腰の剣でまつぶたつにしてしまいました。使者のからだはとたんにはらばらになつて、たまねぎがあたりいちめんに、ころころところがつていきます（これらのおやさいは、お城の料理人が、あとでおいしいシチューにしてしまいました）。そしてムンドベルクはそのとき、あることを思い出しました。それはひとつの、とある、青いネックレスのことだったのです。

「ロビーベルク、おぬしが今首にかけている、そのネックレス。それはむかし、ムンドベルクが、精霊王ほんにんからもらったものなのだ。」

ええっ！ またしてもノランの言葉に、ロビーもライアンも、みんながびつくりぎょうてんです！

ロビーがいつも身につけていた、ひとつのネックレス（またはペンダント）。ロビーと、どこにいても知れない自分の家族とをつなぐ、たったひとつの手がかりとして、た

いせつにしてきたこのネットワークス。それがなんと、自分の父であるムンドベルクが、むかし、精霊王ほんにんからもらったという、すごいネットワークスなのだといいました！（カールモトも「そのネットワークスからは、とくべつな力を感じる」といつていましたよね。たしかに、その通りでした。なにせ、精霊の力を持った品物は、まだあるとしても、精霊王からもらったネットワークスなんて、だれも持っていないのはあたりまえでしたから！ それほどこれは、すごい品物だったのです。

ちなみに、ライアーンがすぐに、「ちよつと！ 見せて見せて！」とくいついてきました。）

「そのむかし、おぬしの父、ムンドベルクと、その友のアルファズレドは、怒りの山脈からの帰り道で、ぐうぜん、精霊王のトンネルに出くわした。そこでふたりは、精霊王から、りゆうたいじのほうびとして、そのネットワークスをもらったのだ。あとからおくれてきたアルマークとメリアーンは、ネットワークスをもらえなくて、ひどく、ざんねんがったそうだがのう。」

なるほど、そういうわけで、このネットワークスをもらったんですか……、つて、ぜんぜんわかりません！ しかも、なんかすごく気になることを、いろいろさらつといつていましたけど！ 友のアルファズレド？ いったい、どういうことなんですか？ ノランさん！

「おや？ お前たち、なにも知らないようだの。三十年前の、赤りゆうたいじの旅のこ
とだよ。ここにいるアルマーク、レドンホールのムンドベルク、シープロンドのメリア
ン、ワットのアルファズレド、この四人と、わたしとで、怒りの山脈にすむりゆうを、た
いじしにいったというわけだ。なかなか、骨のおれるしごとだったわい。なあ？」ノラ
ンはそういつて、アルマーク王の肩をばしつ！ とたたいて、「はっはっは！」と大声で
笑いました（いわれてアルマーク王は、「そ、そうですね……」とにが笑いしておりまし
たが。なんだかいろいろ、あつたみたいですね）。

今からおよそ三十年前……。このアークランドに、とんでもないわざわいの力を持
つ、赤りゆうがやってきました。そのりゆうは、アークランド北東部の切り立った山
の中にすみつき、そこからアークランド中を、荒らしてまわったのです。そのたいじに
むかつたのが、ノランひきいる、四人の若き王子たちでした。

四人はたいへんな冒険のすえ、りゆうをやつつけました。りゆうが火を吹き、怒りく
るつたその場所は、今でも、そのりゆうの「怒りのわざわい」とよばれる、あつい風が
吹き荒れているそうです。そしていつしかその場所は、人々から、こうよばれるよう
になりました。怒りの山脈と。そう、まさに三十年前のその冒険のぶたいこそが、今ア
ースのいるという、怒りの山脈、その場所だったのです！（このノランと四人の王子た
ちの冒険の物語については、わたしはぜひ、みなさんにも語りたいと思っています。こ

の本とはまたべつの本の中で、おきかせしたいと思っておりますので、それまでどうぞ、お楽しみに！」

と、その旅の中身のことにについては、またべつのこととして……、やはりひとつ、すぐく気になることがありますよね？ そう、アルファズレドのことです。ワットの黒き王。アークランドいち、れいこくで、なさけようしやのない悪者といわれている、あのアルファズレドが、かつてアルマーク王たちとともに、仲間として、友として、いっしょに戦ったといいました！ それがなぜ、今はこんなことに……？

その思いを感じてか、アルマーク王がロビーとライアンにいいました（ベルグエルムとフェリアルは、とうぜん、むかしのその旅のことをすでにきいて知っていました。ですがロビーはまだ、その旅のことを知りませんでしたし、そしてライアンも、まだ父のメリアンから、そのことをきかされていなかったのです（きいてたら、もつと、メリアン王のことをだいにじにしたかもしれません……）。

メリアン王は、自分がかつて、このアークランドをすくうたいへんな冒険の旅に出たのだということ、ライアンにはあえてだまっていました。たぶん、いったらライアンは、「ぼくもいくー！」といい出すにきまっていました……。そのためメリアン王は、お城の者たちにも、シープロンドのまちの人たちにも、「ライアン王子の身の安全のために、かれにはこのことを、だまっているように」とねんをおして守らせていたので

す。

つまりこういったわけで、この場にいる者たちの中で、りゆうたいじの旅のことと、アルファズレドのむかしのことを知らなかったのは、ロビーとライアンのみで、それと、すいません。読者のみなさんもでしたね。

ちなみに、ライアンは、自分にそんなだいな旅のことをずっとないしよにしていたメリアン王に、今めらめらと、怒りのほのおをもやしていました。そして、「シープロンドに帰ったら、いちばんにひっぱたいてやる！」ときめたのです。メリアン王、ピンチ！）。

「アルファズレドは、しはいの道をえらんだのだ。」

アルマーク王はそういつてかなしみ、うなだれました。

「わたしたちがたいじしたりゆうは、ある品物を持っていた。それは、じゃあくなりゆうの、しはいの力をひめた、黒いおそろしいメダルだった。それを見つけたわたしとアルファズレドは、そこで、おたがいの道をたがえることとなったのだ。わたしは、『そんなものはすてろ。』といった。だが、アルファズレドは、それを取った。そしてわたしに、こういったのだ。『おまえがのぞむのは、このアークランドの、とういつ。だが、それは、夢物語だ。この世界では、そんなあまい考えなどは通じない。おれは、この力で、しはいの力で、このアークランドのことをまとも上げてみせる。』とな。」

それから、アルファズレドは、りゆうのそのおそろしい力で、このアークランドのことをしはいしようとしてきました。それこそが、このアークランドのことをまとめ上げ、あらしいのない世界を作つて、人々のことをすくうための、ただひとつの方法だと信じたのです。

へいわにまとめ上げるのも、力でいうことをきかせるのも、同じ、とういつ。アルファズレドは、こうして、ほかの三人の仲間たちとはちがう道を進んでいきました。仲間たちにとつて、それは、とてもかなしいことでした。

「アルファズレド。あの若者が今、さまざま悪さはたらいとるのは、さんねんなことだ。だが、やつにはやつ、道があるでう。」ノランが、アルマーク王の方をむいていいました（いったいいくつなのか？ わからないほどのねんれいのノランにとつては、アルファズレドもまた、ただの「若者」にすぎなかつたのです）。ノランの言葉に、アルマーク王はふくぎつな思いで、小さくうなずきました。

「さて、ロビーベルク。かんじんなことは、そのネックレスが今、おぬしの首にあるということだ。」ノランが、ロビーの方をむいていいました（そうでした。ちよつと、むかし話に話がそれてしまいましたが、今問題なのは、ロビーのこのネックレスのことでしたね）。

「精霊王は、それを渡すときに、こういったそうだ。『このネックレスは、おまえたち

の世界と、われらの世界とを、つなぐもの。おまえか、おまえのしそんか？　こんながおとずれたとき、このネックレスをもちいて、われらの助けをこうがよい。』とな。そしてムンドベルクは、おぬしを守るため、そのネックレスを使い、精霊王のもとにおぬしをあずけたのだ。」

精霊王のネックレス。このネックレスのおかげで、ロビーは精霊王のもとへゆき、そしてそこで、守られることとなったのです。このネックレスは、いわば精霊王のいるひみつの世界へのとびらをあけるための、かぎのようなものでした。

精霊王の住む世界。そこは絵本の中だけにそんざいするはずの、おとぎの世界でした（今いるこの場所、アークランドも、みなさんにとつてはかんぜんにおとぎの世界ですが……）。精霊王の世界は、その中でも、さらにおとぎの世界でした。ややこしいですけど）。ロビーがかなしみの森のとしよかんで読んだ「精霊王のふしぎのくに」という絵本では、主人公の女の子が精霊王のトンネルを通って、ふしぎの世界へとまよいこむのです。そこはイーフリープとよばれる世界で、そこでは、きせつも、重さも、時間さえも、すべてが精霊王の思うがままに動きまわりました。

ノランのいうことには、このネックレスはあるとくべつな場所です。その力を使うと、精霊王の住むイーフリープ世界への入り口がひらくそうでした。そのとくべつな場所というのが、精霊王のトンネルだったのです。

そのむかし、ムンドベルクとアルファズレドがぐうぜん見つけたという、精霊王のトンネル。それはふつうの人にはまったく見えませんし、どこにあるのかもまったくわかりません。ですがノランは、そのトンネルがどこにあるのか？ 知っておりましたし、そしてその場所を、ネックレスを受け取ったムンドベルクとアルファズレドにも、教えていたのです。いつかこのネックレスを使いたいときがやってきたのなら、そこへいけと（ところで、精霊王のトンネルはこのアークランドの中にも、いくつかそんざいしていたのです。ムンドベルクが教えてもらったのは、レドンホールからほど近い、山の上の中でした。アルファズレドも、ワットの北東部、岩だらけの土地の中にあるトンネルを教えてもらいましたが、かれはこのネックレスを使う気などは、ぜんぜんありませんでした。アルファズレドは、精霊の力などにたよりません。かれの信じるものは、りゅうのメダルのしはいの力、そして、みずからの力のみだったのです。かれがもらったネックレスは、今でも、ワットの王城のどこかのひき出しの中に放つてあるはずですよ。なんてもつたらない！ それを知ったらメリアン王は、きつとこういうことでしょう。「いらぬなら、ちようだい！」）。

こうしてムンドベルクは、ロビーを精霊王のもとへとたくしました。アークランドを守るため。そのきゆうせいしゅを守るため。そしてなにより、わがあいするむすこ、ロビーベルクを、悪のその手から守るために……。

「それからぼくは、どうなったんですか？　なぜ、かなしみの森に……？」ロビーがノランにたずねました。ここがもつとも、大きなきもんでした。

「ぼくには……、ぜんぜんきおくがない。」

ロビーのといかけに、ノランは「ふむ。」とひげをなでおろしてから、こたえます。

「精霊王は、すべてを知っておるといふことだ。おぬしの、その運命のこともな。」

ノランはロビーの目を見すえながら、つづけました。

「このくにのゆくすえは、これからきまることだ。精霊王も、ゆれ動くみらいのことまでは、いいあてることができません。それを知っていたからこそ、精霊王は、おぬしを、おぬしの運命の中へと送り出したのだ。」

「だからぼくは、かなしみの森に……」ロビーがいいました。

「そうだ。」ノランがこたえます。「おぬしが十さいのとき、精霊王は、このアークランドのみらいを見た。それは、光とやみ。ふたつの世界だ。光が勝つか？　やみが勝つか？　それはまだ、だれにもわからん。光とやみは、つねに、ふたつでひとつだからのう。それにけつちやくをつけるために、精霊王は、ロビーベルク、おぬしをきゆうせいしゆとして、もとのアークランド世界の中へともどしたのだ。おぬしがレドンホールのいい伝えにあるきゆうせいしゆであるということは、もちろん、精霊王も知っておったからな。そしてそのことは、精霊王の口から、ムンドベルクにも伝えられていた。だからこ

そムンドベルクは、なおのこと、おぬしのことを、ひっしに守ろうとしたのだ。」

そうです、ムンドベルクが「わがむすこロビーベルクこそが、いい伝えのきゆうせいしゆなのだ」と知っていたのは、ほかでもない、精霊王ほんにんから、そうつげられたからでした。なんでも知っていると、伝説の精霊王。その精霊王から、ちよくせついわれましたから、こんなにしんらいのできることはありません。親が、子を守ろうとする気持ち。そしていい伝えのきゆうせいしゆのことを、守らなければならないという気持ち。その両方をたくされたムンドベルクの思いは、どれほどのものだったのでしょうか……？

「おぬしは、イーフリープから、かなしみの森のあるアークランドの北の地へと、はこばれた。あの地には、いにしえのじだいから、守りの魔法の力がはたらいとったからだ。精霊王は、その魔法をさらに強いものとし、あの地をイーフリープ世界と同じほどの、守りの場とした。このアークランドでも、それができるのは、あの地をにおいてほかにない。あの地の中にいるかぎり、いかに強力なまじゆつしとて、おぬしのいばしよを見破ることは、かなわんだらう。いくら、アーザスとてもな。おぬしとその腰の剣は、こうして、悪の目からのがれつづけながら、運命のときを待つことができたのだ。そして、おぬしは今、ここにいるのだよ。」

これで、すべてのなぞがつながったのです。

ロビーのかこ、そして、今……。

ロビーはここから、みらいへと歩み出すのです。

このさきに待ち受ける、自分の運命の中へと……！

「出かけるじゅんびは、できています。」

ロビーが、しゃんと胸を張って、ノランにいいました。ノランはそんなロビーのことをすっかりと見すえて、静かにほほ笑んでおりました。

「おぬしには、もう、わたしの助けは、なにもいらんようだの。」ノランがこたえていました。

「おぬしはこれから、精霊王のところへゆかねばならない。剣の、そのさいごの力をわがものとする、しれんを受けるためだ。それは、アーザスをうち破るために、必要となるものだ。」

「精霊王の、しれん……」ロビーが思わずつぶやきます。

ノランがつづけました。

「ロビーベルク。剣の力をわがものとするためには、その剣の力の意味を、よくりかいしていなければならぬ。いうなれば、その剣をあつかうためには、それなりのしかくが

必要なのだということだ。それをりかいするためには、やみくもに動いてもだめだ。もはや、時間もないでな。イーフリープで、精霊王のしれんを受けるのが、いちばんよいだろう。」

これまで、たくさんの場面でロビーと仲間たちのことを助けてくれた、剣の力。その剣の力をしつかりと使いこなすためには、精霊王のいるイーフリープでのしれんを受けるのが、いちばんだといいました。そのしれんを乗り越えたときにこそ、はじめてロビーは、剣をあつかうためのしんのしかくを得て、この剣の、そのさいごの力をひき出すことができるというのです（それがどんな力なのか？ ということについては、のちにあきらかとなるでしょう）。

そしてその力こそが、アーザスのことをうち破り、この世界にしんのすくいをもたらすために、必要な力なのだと思います（今までの剣の力は、まだまだ、剣の力のさいしょの部分にすぎないというのです。うくん、やっぱり、このアストラル・ブレードという剣。ただものではありません。そしてこの剣の、そのさいごの力を使いこなすためのしかくを、ロビーはこれから、身につけようとしていました。それも、精霊王の待つおとぎのくにに、イーフリープでのしれんによつて。なんだかとおつても、かつこいいじやありませんか！ まさに、きゆうせいしゆ。主人公つて感じですよね！

そして……。このしれんを受けるためにも、ロビーははるばる、このベーカーランド

の地にまでやってきたのです。イーフリープへいくためには、精霊王のトンネルを通っていかなくてはならないわけですが、そのトンネルにいくためには、ロビーの住んでいたかなしみの森からは、このベーカールンドの南東部に位置するトンネルが、いちばんできしていました。ちよくせんきよりからいえば、ワットの北東部にあるトンネルがいちばん近かったのですが、いくらなんでも敵地のどまん中をつつきつていくというのは、リスクが大きすぎます。もしロビーがつかまつてしまったのなら、元も子もありません（精霊王のトンネルがあるのは、フェアリー・ベルトとよばれる、とくべつなちいきの中にかぎられていました。そのちいきはベーカールンドの南の地から東に進み、そしてそのままレドンホールとワットの東を通って、はるか怒りの山脈のほうがくにまでのびていたのです。ですからロビーの住んでいたかなしみの森をふくむ北の地には、ざんねんながら、この精霊王のトンネルはひとつもありませんでした）。

このようなわけで、ロビーはベルグエルムたちにひきいられて、（長い冒険のすえに）まずはこのエリル・シャーンディーンへとやってきたのです。精霊王のトンネルにいくためには、まずはいちど、通ることもふかのうな山がく地をうかいして、このエリル・シャーンディーンの地を通っていくのが、いちばんの近道でしたから。それにこれはもうすこしあとで語られますが、エリル・シャーンディーンで、必要な人員のちようせいをおこなう必要もありましたし）。

「わかりました。」ロビーがいました。

ノランはそのロビーの言葉にまんぞくしたように、ゆっくりとうなずいてみせました。

「そのあとのことは、精霊王が、おぬしをみちびいてくれることだろう。怒りの山脈への、いき方もな。さて、まずは、イーフリープへのいき方だが……」

ノランはそういって、ちよつとむずかしい顔をしながら、ひげをととのえていました。なにか、問題でもあるのでしょうか？

「このエリル・シャンディーンから、さらに南東へくだった地に、精霊王のトンネルがある。まずは、そこへむかうのだ。だが今、そのトンネルも、力のバランスがくずれてしまっている。あけるには、ちと、とくべつな力が必要でな。」

とくべつな力？ それはいつたい、どんな力なのでしょう？（まさかまた、ライアンみたいな、どつかくん！ って吹き飛ばすんじゃないですよね……？）

「精霊王のトンネルは、精霊の力に守られておる。宝玉の力が弱まった今、その入り口は、精霊たちの力によって、かたくとぎされてしまったのだ。かれらの世界が、よこしまなる力に、そまってしまわぬようにと。もはや、そのネットワークの力だけでは、精霊王のトンネルをひらくことは、できん。精霊がとぎしたトンネルをあけるためには、また、ほかの精霊の力が必要なのだよ。」

「なーんだ、そんなことか。」ノランの言葉に、ライアンが飛び出していいました。「だったら、ぼくにまかせてよ！ シープロンドいちの精霊使い、ライアンさまの手にかかれば、そんな入り口の、ひとつやふたつ！」

そうです、精霊のことなら、ライアンにまかせるのがいちばんですよ！（ライアンの言葉には、だいぶ大げさなところがあるようですが……）ロビーも、「そうだ、ライアンならだいじょうぶ」と思っていました……。

「いや、精霊使いではだめなのだ。あの入り口は、精霊そのものの手によってしか、あけることはできないのう。中の世界とこちらの世界とは、かんぜんに切りはなされてしまっておるから、入り口をあげるためには、そこから、精霊の力によってあけるしかないのだよ。」

ノランの言葉に、ライアンは「え？」と行って、ロビーと顔を見あわせてしまいました。ふたりとも、ノランのいつていることが、よくわからなかったのです（精霊使いがだめで、精霊ならよくて……。はつきりいつて、わたしにもわかりません！）。

「ぼくが精霊にたのんであけてもらえば、おんなじことじゃない。」ライアンがいいましたが、ノランは首を横にふって、いいました。

「精霊王のトンネルをあけることができるのは、それだけの力を持った、精霊だけなのだ。水や、風や、火の精霊たちでは、たばになってかかっても、だめだ。せめて、やみ

の精霊ほどの力がなくてはな。おぬしは、やみの精霊に、入り口をあけてくれとたのめるか？」

「う、うぐぐ……、それは……」

ノランの言葉に、ライオンはかえす言葉ありませんでした。なるほど、精霊使いではだめだといったノランの言葉には、こういうわけがあつたんですね。あのおつかないやみの精霊たちに、そんなことをたのむなんてこと、それこそ、むりなそうだんというものですよ！（前にやみの精霊の谷をすんなり通してもらえたのは、精霊王がかれらに「通してやってくれ」とたのんでいたからなのであつて、それはほんとうに、とくべつなことでした。精霊王ならまだしも、やみの精霊たちに「トンネルをあけてくれ」なんてたのんだとしても、いうことをきいてくれるはずありません。いくら精霊王に会いにいくためだといつても、アークランドをすくうためだといつても、むりでしょう。人の住む世界のできごとは、かれらには、かわりのないことなのです。でも、けつしてかれらは、悪者なのだというわけではありません。光に力を与えるためには、また、やみの力も必要。かれらは人の世界にかかわることをせず、ただじゅんすいに、やみの世界を守りつづけているだけなのです。

ところで……、読者のみなさんの中には、こう思った方もいるかもしれませんね。そんなめんどくさいことしなくても、精霊王ほんにんに、「トンネルをあけてくれ」つてた

のめないの？ って。もちろん、それができたら、いちばんかんたんなんですけど……、じつは精霊王は、みずからその力をおよぼせて、その世界の者をイーフリープ世界の中にまねきいれるようなことをすることは、できませんでした。

これはイーフリープ世界とアークランド世界とのあいだで、「取りきめ」として、はじめからさだめられていたことでした。イーフリープ世界の者は、その世界の者をみずからイーフリープ世界の中にまねきいれたり、その世界の者のおこなうことに、ちよくせつ手を出してあやつるようなことを、してはならないときめられていたのです。

いぜんムンドベルクとアルファズレドが精霊王のトンネルに出くわしたのは、ほんとうにぐうぜん、その場所にトンネルがひらいたからのことなのであって、精霊王がかれらを、まねいたというわけではありませんでした。精霊王というのは、ほんとうに、人の世界のことには、かんたんに力をおよぼせていいそんざいではなかったのです。精霊王が、むやみにその力をおよぼせてしまえば、この世界のバランスは、大きく変わってしまふことでしょう。そのため、こちらから力をつくして精霊王に会いに行くのであれば、問題はありませんでしたが、精霊王の方から、こちらのおこないに手を出してむかえいれるようなことをすることは、いくら世界のいちだいじのこのときであっても、できませんでした。トンネルの入り口をずっとあけたままにしておいてあげる、というのも、精霊王が自分でみんなをイーフリープにまねきいれているのと、おんなじことに

なつちやいますしね。なんだかずいぶん、ややこしいんですけど……。

ちなみに、たとえ精霊王でも、みずから自分のところへやってきた人物に対しては、ネックレスなどの小さなおくりものや、じよげんを与えるくらいのは、できたのです。それはその者のおこないにちよくせつ手を出すわけではありませんし、それを受け取った者が、それでなにをするのか？ ということについては、すべて相手に、ゆだねられているからでした。そして同じく、やみの精霊たちに「ロビーたちのことを通してやってくれ」とたのんだのも、ロビーたちはべつに、精霊王のおかげでやみの精霊の谷にはいっていくことができたというわけではなく、自分たちでみずから、谷にはいっていったのです。ですから精霊王がロビーたちのおこないに手を出して、かれらの動きをあやつったというわけではありませんし、谷を通ることができるようにしたけれど、そのあとそれを、どういのかは、すべてロビーたちにゆだねられていました。うくん……、やつぱりかなり、ややこしいですね……。

そしてライアンはまたマリエルに、「わかったら、ひっこみなよ！」といわれて、ひきもどされてしまいました。ですがこんかいばかりは、ライアンも、しゅんとして、おとなしくしていたのです。ですからマリエルも、「あれ？ ちよつと、いいすぎちゃったかな……。」と心配しました。()

「それじゃ、どうすれば……。」ロビーがノランにたずねました。

「心配せずともよい。ちゃんと、入り口をあけられる男を、知っておるからの。」

ノランの言葉に、ロビーもライアンも、え？ という顔になりました。精霊じやなくちやあけられないといったのに、あけられる男って、どういうこと？

「かんだんなことだ。」そんなふたりにむかつて、ノランがさらつといいました。「その男が、精霊なのだよ。」

ええっ？ 精霊の男？ なんだかますます、わけがわかりませんけど……。

「名を、リズ・クリスメイデインという。リズは、失われたシルフィア種族の、まつえいなのだ。シルフィアは、精霊の一族。すがたかたちは人間だが、中身は精霊、そのものなのだよ。」

なんと！ そんな種族の人がいるんですか！ このアークランドには、まだまだ、おどろきの種族の者たちがいるものです。つまりその人は精霊だから、その人にたのめば、イーフリープへの入り口をあけることができますということらしいのでした（しかも精霊王のトンネルをあけられるというのですから、かなり力のある精霊のようです。やみの精霊たちみたいに、おっかなくなければいいんですけど……）。

「リズ・クリスメイデイン。かれは、もともと、このエリル・シャンデーインの剣じゆつしなんやくでした。」ベルグエルムがロビーにいいました。

しなんやくというのは、人にそのわざを教える、先生のことです。リズは、剣じゆつ、

つまり、劍のわざを教える先生だったのです。ということは、かなりのうでまえのようですね。でも、精霊と劍。あんまりむすびつかないような気がしますが……（ちなみに、リズはライラとごかくに戦うことのできる、ただひとりの相手でした。ということは、やっぱりただ者ではありません。なにせライラは、このベーカールランドでさい強でしたから！）。

「じゃあ、リズさんに入り口をあけてくれるように、たのめばいいんですね。そのリズさんは、今どこに？ 近くに住んでるんですか？」ロビーがたずねました。

「いや、それが……」ベルグエルムが、言葉をにぎります。フェリアルとふたり、顔を見あわせて、なんだか変なようすでした。

「リズは、二年前、『おれは音楽にすべてをささげる！』といって、この城を出ていってしまっていて……、それくらい、ベーカールランド南東部の、けわしい山の中に、こもってしまっているんです。なんでも、静かなところじゃないと、作曲ができないそうでは……」

な、なんと！ 劍じゆつしなんやくから、音楽家！ ずいぶんと、思いきりのいい人のようですね！ って、それはいいとして……、今は、リズさんの住んでいるところが問題です。けわしい山の中ですって？

「たいしたことではない。」ノランがいました。「ここからでも、歩いて二時間もすれ

ぼつく。ほんとうなら、さいごまで馬でいきたいところだが、なにせ、やつに住んでいるところは、だんがいぜつべきの上でな。馬では、のぼれんだ。それに、馬がいると、はらをすかせたガウバウどもに、すぐにくわれてしまうからのう。」

ノランはそういつて、ゆかいゆかいといったふうに、「はっはっは！」と大声で笑いました。つて、かなりたいしたことあるじやないですか！ ぜんぜんゆかいじやないです！（ガウバウというのは、おおかみにたきようぼうなけものことで、このけものは十数ひきものむれをなして、えものにおそいかかるのです。こんなおつかないけものが、リズの住んでいる山には、たーくさん、いるらしいのです。やつぱり、ゆかいじやないです！）

「あ、あの……、けつこう、たいへんなどころみたいなんですけど……。どうすれば、リズさんのところまでいけるんでしょうか？」ロビーが（とつても）不安げにたずねました（とうぜんですね）。

「ん？」ノランがきよんとした顔をして、こたえます。旅なれた大けんじやであるノランにとつては、だんがいぜつべきも、危険なガウバウというけものも、ぜんぜんふつうの、にちじょうの相手にすぎませんでしたから。

「おお、そうか。」ノランがすまんすまんといったふうに、手を上げていいました。「おぬしは、魔法が使えんのだったのう。」

そのとき。

「ぼくに、おまかせください。」

そういつて前に進み出たのは、マリエルでした。ケープの両方のはしっこを、両手のゆびさきでちよこんとつまみ上げて、かわいらしいかつこうをしてみせます（うしろではライアンが、「うわー！ あざとい！ あざとい！」とぶーぶーいつてましたが……）。

「そうだ。そのためにも、マリエルにたのんでおいた。」ノランがつづけました。「こんかいの道のりについて、おぬしをあんないするようにと、たのんでおいたのだ。マリエルなら、まったたく、安心してほしいでしょうぶだぞ。なにしろ、わたしのでしだからのう。強いなのんの。」

ノランはそういつて、また「はっはっは！」と大声で笑いました（よく笑う人ですね……）。そしてこのマリエルのそんざいこそが、さきほどわたしが申し上げました、このエリル・シャンディーンでの必要な人員ちようせいでした。リズのところ、そして精霊王のトンネルのところへとロビーのことをみちびく、こんかいのこのとくべつなにんむについて、アルマーク王とノランは、ゆうしゆうなまじゆつしであるマリエルに、たくすべきだとはんだんしていました。もはや、ベルグエルムたち白の騎兵師団の者たちも、ワットとの戦いにおもむかなければならないときでしたし、きゆうていまじゆつしがひとり、この場からしばらくはなれることにはなつてしましますが、この重要かつ危

険なにんむをまかせるのには、まさにマリエルが、てきにんであるとはんだんしたのです（やはりりこんかいもアルマーク王は、ぎりぎりのせんたくをしていたわけでした）。

それはそうとして……。こんかいの、リズのところへといくという、このにんむ。読者のみなさんの中には、こう思った方もいるのではないでしようか？ わざわざこちらからリズのところまでいなくても、あらかじめリズのことを、お城までよんでおけばよかつたじゃないかって。それもたしかに、ひとつの手でした。ですがそこには、ノラんとそのでのマリエルによる、ひじょうにたくみにねられた計算があつたのです。

それはどういう計算か？ といいますと……。説明するのがいやになるくらいの、ひじょうに長くて、めんどうくさいものでしたが、やつぱり説明しておかないわけにはいきませんね。ここでわたしは、マリエルからきいたその計算の内ようについて、ノートにきろくしたことを、そのまま、ここに書きとめておきたいと思います。長いうえにややくしいですから、あらかじめ、そのつもりでかくごをお願いしておきます。

まず精霊王のトンネルにむかうまでの道のりは、ふたつあつたということ。これはエリル・シヤンデインの南にあるトンネルと、リズの家の南東にあるトンネルの、ふたつでしたが、じつはこれらのトンネルに行くまでのきよりと時間は、ほとんど同じでしたので、その点からいえば、どちらのトンネルをえらんでもいいわけでした（お城の南のトンネルに行くためには、時間をせつやくするために、あらかじめリズをお城までよ

びよせておく必要がありました。それは問題のうちにははいりませんでしたので、取りのぞきます。よべばいいだけのことですから。

また、リズの家を南東のトンネルまでまっすぐいくルートと、リズの家に立ちよつてからそのトンネルまでいくルートでも、地形的にはほとんど同じ時間でいけました。ですからやつぱり、その点からいっても、お城の南のトンネルとリズの家の南東にあるトンネルは、どちらをえらんでもよかつたわけです。

しかし、お城の南への道のりには、それがいいの点で、わずかばかりの問題が。

この道のりは、けわしい山道でしたが、そこには「じきあらし」、つまりじしやくの力と同じ力を持ったしぜんのあらしが、吹き荒れるかのうせいがあるが、わずかにあるということでした。そのかくりつは、マリエルの計算によれば、八パーセント。このあらしにそうぐうしてしまつと、山道に足どめをくつて、マリエルほどの者が魔法をたくみに使いこなしたとしても、よけいな時間をついやしてしまつておそれがあるということだったので。

そして、リズの家の南東にあるトンネルにいくための道のりにも、わずかばかりの問題が（ガウバウたちの問題は、ゆうしゆうなまじゆつしであるマリエルなら、なんの問題でもなかつたので、取りのぞきます。なにしろマリエルは、ノランの道でしたから）。

じつはガウバウたちのいるがけの道にたどりついてから、そのあとの道のりには、なんの問題もありませんでしたが、問題があったのは、そこにたどりつく前の道。その道にはあるエネルギーがそんざいしていて、そこをシルフィアであるリズほどの強力な精霊エネルギーを持った者が通ると、その精霊エネルギーに道のエネルギーが反応して、精霊エネルギーのひずみが生まれてしまうかのうせいがあるのだということでした。そのかくりつは、マリエルの計算によれば、十二パーセント。このひずみが生まれると、どうなるのか？ というと、そのエネルギーによって、あたりいちめんに空飛ぶくらげのような生きものがあらわれて、道をすつかり、うめつくしてしまうのだそうです！

そうなると、マリエルほどの者が魔法をたくみに使いこなしたとしても、まるで水の中を進んでいるかのように、動きがぶくなくなってしまうって、たいへんな時間のロスになってしまうのだそうでした（この道をさけて通れば、それも時間のロスになりますね）。ですが、精霊エネルギーのひずみについてのこの問題は、あくまでも、シルフィアほどの精霊エネルギーを持っている者にかんしての話。ふつうの者であれば、この道は、なんの問題もなく通ることができたのです。

つまり、こういったわけで……、「八パーセントぶんリスクをすくなくすることのできる、リズの家の南東のトンネルをめざすルートを進み、そのためにリズには、自分の家で自分たちがいくまで待っているようにと、手紙でしじを出しておく」という、こんな

いの、このけいかくにいたったというわけでした。まったく、なんとという計算のねりよ
うなのでしょうか！（どんな計算によってパーセントの数字を出したのかは、さっぱり
わかりませんが……）さすがはまじゆつし。頭がよろしい。

それともうひとつ、だいじなこと……。精霊王のトンネルをあけるためにリズの力が
必要だという、こんかいのこのことについては、きゆうきよ、エリル・シャンディーン
にノランがやってきた、そのあとになつてからわかつたことでした。ロビーがイーフ
リープで精霊王のしれんを受ける必要があるのだということは、いぜんからしいうちし
ていたことでしたが、今まではただ、ロビーの持つネツクレスの力さえあれば、イーフ
リープまで、問題なくいけるはずだったのです。

ですが、ここにきて急に、そうていがいの問題が起こつてしまいました。それは、そ
う、ノランもいつておりました通り、精霊王のトンネルが精霊の力によつて、かたくと
ぎされてしまったということだったのです。

これはじつは、アークランドにやってきたノランが、ねんのためにしらべてみたこと
によつて、はじめてわかつたことでした（はなれたところからでもそれがわかるほどの
魔法を使うためには、やはりノランほどの力が必要でした。ペーカーランドのきゆうて
いまじゆつしたちにも、マリエルにも、まだ、それほどのわざは使えなかつたのです）。
それによれば、トンネルがとぎされたのは、ごくさいきん、つい数日ほど前のことだつ

たというのです。これでは、さすがのノランでも、マリエルでも、だれにだって、よそくのできないことでした（まったくもって、きんきゆうじたいでした）。

ですからリズのところへいくこんかいのこの道のりのことは、とつぜんにきまったことなのであって、そのためマリエルは、ノランに急ぎたのまれて、魔法の手紙をノランのやってきたきの夜のうちに、リズのところへと送ったというわけなのです。以上、説明コーナーでした）。

「ノランさんは？ ノランさんがつれてつてあげたらいいじゃん。こんな、ちびっ子じゃなくてさ。」

うしろの方から、ライアンがいじの悪ーいい方でいいました。マリエルがロビーのあんないをするときいて、ライアンはぜんぜん、おもしろくなかったのです（とうぜんマリエルがすかさず、「きみだって、ちびっ子じゃんか！」といいかえました。まったく、これではふたりとも、まさにどんぐりのせいくらべですわ……。ロビーがあわててふたりのあいだにはいつて、とめました。やれやれ……）。

「わたしはすぐに、出かかなくてはならん。」（ちびっ子たちのさわぎをよそに）ノランが急にいきました（あんまり急でしたので、みんな、とてもびつくりしてしまつたものでした）。

「もうだいが、時間がすぎてしまつたからの。すまんが、ここからさきの道は、おぬし

とマリエルの、ふたりでいってもらいたい。」

ノランはロビーにそういって、肩から下げたかばんをひよいとしよいなおします。どうやらほんとうに、今すぐ出かけてしまみたいでした。

「ノランどの、これからどちらへ？」ベルグエルムが、あわててたずねました。やつぱりこんども、ノランとゆっくり話しをすることは、できないみたいでしたから。

「うむ。」ノランがこたえます。「リユインとりでのことは、きいておるよ。痛ましいことだ。リストール・グラントは知っておるな？」

「そんなけいすべきしきかんです。」ベルグエルムがこたえました。

リストール・グラントというのは、リユインとりでのことをまかされていた、ベーカーランドのしきかんでした。もちろんベルグエルムもフェリアルも、かれのことはよく知っていたのです。アークランドの北の地へ、ロビーのことをむかえにいく、そのときにも、かれらはリユインとりででかれに会っていました。そして、とりでが落とされた今。リストール・グラントしきか人は、ほかの兵士たちやレイミールと同じく、ぶじでいるのかどうかさえも、わからなくなってしまうていたのです。

「さういこの戦いでは、かれのそんざいが、大きな意味を持つこととなろう。わたしも、できるかぎりのはさせせてもらう。とにかく今は、時間がなによりもたいせつだ。」

ノランはそういって、ベルグエルム、フェリアルと、かたくあくしゆをしました。

「おぬしたちは、すばらしいはたらきをしてくれた。これほど早く、きゆうせいしゆをこの地に、みちびいてくれたのだからな。おぬしたちのはたらきは、このアーケランドの運命を、大きく変えることになるだろう。」

ノランの言葉に、ベルグエルムとフェリアルは、すっかりきようしゆくしてしまいました。大けんじやノランにこんなほめられるなんて、たいへんなめいよでしたから（それをかぎつけたライアンが、うしろで「ちよつと！ ぼくは？ ぼくは？」とノランにもんくをいっていました）。

「これからの道のり、おぬしたちには、おぬしたちの、大きなやくめがある。だれにもかわりはつとまらん。ペーカーランドを、たのむぞ。」

そしてノランは、さいごにロビーにいきました。

「ロビーベルク。わたしができることは、ここまでだ。あとは、おぬしが、道を切りひらいていかねばならん。つらい旅になるやもしれん。だが、おぬしなら、きつと、そのもくてきを果たすことだろう。」

こうしてノランは、その場にいる者たちにえしやくをして、でしのマリエルの肩を手でほんとたたいてから、去っていったのです（去っていくノランを見ながら、フェリアルが「ああー、いっちゃった……」とベそをかいて、ライラにおしりをたたかれ、「しつかりせんか！」としかられていました）。

大けんじやノランが旅立ちました。

残された者たちは、これから、どう動くのでしょうか？

風の吹きぬける小さな青いとんがりやねの下に、みんなは立っていました。ノランが去った今、これからのことを、みんなは急ぎ、かくにんしなければならなかったのです。「ベゼロインからのほうこくでは、黒の軍勢の本隊は、すでに、リュインの東までやってきているそうだ。」ライラが、ベルグエルムにいました。「われらはすぐに、ベゼロインへはいらねばならぬ。」

「でも、ロビーどのは……」となりのフェリアルが、心配そうにたずねて、ロビーの方を見ます。

ライラのいう通り、ベゼロインとりでに黒の軍勢がせめこんでくるのも、もう時間の問題でした。ベルグエルムや、フェリアル、ライラは、白の騎兵師団のしきかんです。ベゼロインとりでを守るため、どうしても、みんなのしきをとって戦わなければなりません。ひじょうにさんねんなことですが、ロビーのさいごの旅に、かれらがいつしよにいくことはできないのです……。それは北の地にロビーのことをむかえにいくという、そのにんむをはじめめる前から、わかっていたことでした。でも、ベルグエルムとフェリア

ル。このふたりにとって、今ロビーだけをこのさいこの危険な旅に送り出すということは、とてもつらいことになっていたのです。読者のみなさんには、もうそのりゆうをいうまでもないでしょう。かれらにとって、ロビーはもはや、きゆうせいしゆ、それ以上に、たいせつな仲間でしたから（とくにフェリアルは、とっても心配しようでしたので、ロビーのことが気がかりでなりませんでした）。

「ぼくは、だいじょうぶです。」ロビーが、にっこり笑っていました。「マリエルくんもいるし、ちゃんとリズさんのところまで、いけますよ。」

フェリアルが、そのロビーの言葉にこたえる前に……。

「ぼくもいるよ！ ぼくも、いっしょにいく！ ロビーは、ぼくがいないとだめなんだから。」ライアンがロビーのとなりにやってきて、そのうでを取っていいました（すぐにマリエルが、「ぼくひとりでへいきだよ」とつつばねたので、またふたりでなかよく、わーわーのはじまりです）。

「いや、待ちなさい。」そういったのは、アルマーク王でした。アルマーク王は、ロビーといっしょにいくといったライアンに対して、そういったのです（ライアンはマリエルの服をひっぱりながら、「え？」と行って王さまの方を見ました）。

「ライアン王子、そなたは、わがベーカールランドの、ひん客だ。」アルマーク王がいてねいないいい方で、いいました（ひん客とは、たいせつなお客さまという意味です）。

「ベーカーランドとしても、めいゆう国シープロンドの王子を、これ以上、危険な目にあわせるわけにはいかぬ。そなたは、このエリル・シャンディーンに、とどまってほしい。」アルマーク王はきわめておちつきはらって、そういうました（アルマーク王はなんどとなく、友のメリアン王から、ライアン王子のことをきかされていたのです。かわいけれど、わがままで、あつかいづらいということ。そして、かわいけれど、きげんをそこねさせないように、じゅうぶんな注意が必要、などということでした……。ですからアルマーク王は、ライアンになっとくしてもらえるりゆうをよく考えて、しんちように言葉をえらんで、そういうたのです）。

アルマーク王のいったことは、まったくベーカーランドの王さまとして、正しい言葉でした。ほかのくにの王子さまを、わがくにが危険な目にあわせるわけにはいかない。とどまってほしいとたのんだそのりゆうも、じつにたんじゆんめいかい。だれでもなっとくのいく、わかりやすいりゆうです。ですが……。

ライアンに、それが通じるでしょうか？ ライアンが、「わかりました。ひっこみます。」とすなおにいうでしょうか？ みなさんなら、すぐにこたえは出ますよね。

王さまの言葉をきいて、ライアンは（マリエルから手をはなして）につこり、笑いま

した。
ぞぞぞぞー！ そのとたん、その場にいるロビー、フェリアル、ベルグエルムの三人

は、心の底からきようふしたのです！ ライアンがこの笑顔を見せたときは……、そう、きげんをそこねて、とんでもなくおそろしいことを考えているときでした！（相手が王さまだろうがなんだろうが、ライアンならやりかねません！）

「王さま。」ライアンはアルマーク王に歩みよつて、にこにこしながら、その顔を下からいたずらつぽくのぞきこみました（マリエルに負けじと、かわいらしいしぐさをつけ加えます）。

「王さまは、シープロンじゃないですよねー？ わがシープロンドでは、シープロンのことは、シープロンできめるつていう、すてきなでんとうがあるんです。知つてましたー？ ところでこれ、父からきいた話なんですけど……、うふふ、王さまつて……」

そのときアルマーク王は、ライアンになにをいわれたのでしょうか？ はなれたところにいるロビーたち三人には、うしろすがたのライアンが、どんな表じようで、どんなことをいったのか？ わかりませんでした。この三人にはだいたい、そうぞうがついたのです……。アルマーク王の顔が、みるみる、まっ青になつていききましたから……。

ようするにライアンは、アルマーク王の弱みにつけこんで、王さまをおどしたのです！ なんてめちやくちやな子なんでしょう！ ベーカーランドの王さまをおどす王子なんて、ライアンがいい、ほかにいるはずありません！ うくん、さすがというか、なんとというか……（このときライアンが、アルマーク王になにをいったのか？ それはこ

のふたりにしかわからないことでした。著者のわたしもさいごまで、このふたりの口からしんじつをきくことはできなかつたのです。ライアンは「うふふ、ないしょ。」というばかりでしたし、アルマーク王は、ぶるる！ と肩をふるわせて、だめだめ！ といったふうに、手をふるばかりでしたから……。

ところで、じつはアルマーク王はロビーたちがエリル・シャンディーンにやつてくる前、シープロンドのメリアン王から、でんれいの鳥の手紙を受け取っていました。それにはハミールとキエリフのべつ行動のことなどに加え、こんなこともいっしょに書いてあつたのです。

「むすこのライアンがそちらにいくらしいので、よろしく。手あつい、ほごをたのむ。けつして、危険なところへとむかわせないこと。やくそくを守れなかつたら、どうなるか？ わかつてるよね？ ね？」

この手紙を読み終えたとき、アルマーク王はしばらく、頭をかかえて動けなかつたそうです……。メリアン王の言葉。いいつけを守れなかつたらどうなるのか？ それは読者のみなさんのごそうぞうにおまかせします……。どうやら、アルマーク王とメリアン王のあいだにも、なにかいろいろ、あるみたいですね。メリアン王、そしてそのむすこのライアンにまで、いいようにあつかわれてしまつて、うん、かわいそうなアルマーク王……。

ちなみに、この手紙の内ようのことは、ごくひでしたので、アルマーク王はこのことを、デルンエルムいがい、兵士たちにも伝えていませんでした。ですから、ハミールやキエリフがべつ行動を取っているということ、そしてシープロンドのライアン王子がきゆうせいしゆといっしよにやってくるということなども、みんなはまだ、知らなかったというわけだったのです。やはり、たとえしんらいのおける兵士たちであるとはいえ、よけいなうわさが広まってしまいかねないようなことは、王さまとしても、さげなければなりませんでしたから。

「よかつた。ありがとう、王さま。」

ライアンがそういつて、るるん！ とこちらに歩いてきました。まんめんの笑顔です（こんどはほんとうの笑顔でした。フェリアルはまだ、おっかながつて、ベルグエルの背中にぶるぶると張りついていました）。……。

「な、なにを話してたの……？」ロビーがおそろおそろ、たずねます。ライアンは「うん。」といつて、にこにこしながら、こたえました。

「ロビーのことを、よろしくつて。ぜひ、助けてあげてほしいそうだよ。しようがないなあ。まあ、そんなわけだから、ロビー、よろしくね。」

ライアンはそして、ロビーの腰をぼんとたたきます。

「ちよ、ちよつと！ なにをかつてなことを！」とうぜんマリエルが、あわててあいだ

にはいつて、いいました。

「王さま、ほんとうなんですか!」

マリエルがアルマーク王をといつめました、王さまはただ、だまつて、こくこくとうなずくばかりでした……。

「そんなあー!」(マリエルは、がつくりと肩を落としてしまいました。せつかくノラオンおししようさまからも、「さいごの旅のことは、おまえにまかせるぞ」ときたいされておりましたのに……。このときのために、ねんいりにきれいな服も用意して、つえもびかびかに手いれしていたのです。まさかこんな、よけいなおにもつ(ライアン)がふえちやうなんて!)

「ノランどのの思いを、つなぐ者たち。さしずめ、ノランべつどう隊といったところか。」

小さなまじゆつしに、小さな精霊使い。ともに力のあるそんなふたりのちびつ子たちのことを見ながら、ライラがいました(べつどう隊というのは、にんむのために、本隊からはなれてべつに行動する者たちのことをいいます。この場合では、ノランが本隊、マリエルたちがべつどう隊ということになるわけでした)。

「うむ、いいではないか。ノランどののきたいに、こたえてくるがいい。」ライラはそういつて、楽しそうにほほ笑みました。

「ノランベつどう隊！」ライオンが思わず、さげびます。「それ、もらった！ けつていね！ いくぞ、われら、ノランベつどう隊！ うくん、かつこいくい！」

「きみがかつてにきめないですよ！ おししようさまのでは、ぼくなんだからね！」マリエルが、ぶんぶん怒っていました。

「どつちがロビーの助けになれるかだよ。まあ、ぼくにくらべたら、きみじや、まるでお話にならないのは、わかっているけど。なんたつて、ぼくは、ロビーの親友なんだから。ねっ？ ロビー。」ライオンがそういつてロビーのうでにだきついて、マリエルをさらに怒らせませす。

「なにおーうー！」

わーわーきやーきやー。もう、これじゃ出発前から、さきが思いやられますね……。ロビーはふたりのちびっ子たちに両方からひっぱられて、不安いっばいに思いました。だいじょうぶかなあ……。

かつん、こつん、かつん、こつん……。

うす暗い石のろうかをひとり、だれかが歩いてきました。やがてその人物は、ろうかのつきあたりまでやってくると、そこにある、ひとつの部屋の前に立ちどまりました。

その部屋には、ふつうのとびらはひとつもありませんでした。かわりにあったのは

……、がんばりようそんな、鉄ごうし。そう、この部屋は、ろうやだったのです。

ろうやの中には、なんんかの人たちがいるようでした。その人たちは、すぐに、やってきたその人物のことに気がつきました。そしてそのうちのひとりが、怒りにあふれた声で、こういう放つたのです。

「ガランドー！……この、うらぎり者め！」

ガランドー……。そう、黒いよろいを身にまとい、おうごんのつるぎをその腰におびた、こがね色のかみのしきかん。このろうやにやってきたその人物とは、その言葉の通り、ワットの黒の軍勢のしきかん、ガランドー・アシユロイだったのです。では、かれのことを知っていた、ろうやの中の人物とは……？

ガランドーは、だまっただままでした。きびしい顔をして、ろうやの中の人たちのことを、じっと見つめているだけだったのです。

「なんとかいったらどうだ！」

ろうやの中の人物が、さらにこうふんしてどなります。ですが、かれのとなりにいる人物が、かれの肩に手をおいていました。

「おちついて。……ここでいいあらそつたとしても、なにもはじまりませんよ。」

その人は、若い女の人でした。このものごとをれいせいにとらえた、おちついたりしゃべり方。小さなからだに、白い服。ふちのない、すてきなデザインのめがねをかけてい

て、頭の上の両がわからは、ライアンと同じひつじの種族の者の耳が、びよこんと飛び出して……、ま、まさか、この人は……！

「レシリアどののいう通りだ。まずは、おちつけ、ハミール。」

レシリア！ ハミール！

そうです！ このつめたくうす暗いろうやの中にとらわれているのは、ほかでもありません。わたしたちのよく知っている、われらが旅の仲間たち。シープロンドのレシリア・クレツシエンド先生と、ルースアン・トーンヘオン。そしてウルファの騎士ハミール・ナシユガート、キエリフ・アートハーグ。そのかれらだったのです！（ハミールをなだめたのは、友のキエリフでした。）

「しきかん！」そのとき、ろうかのむこうからふたりのワツトの兵士たちがやってきました。

「ただ今本隊が、丘のむこうへ、とうちやくしたとのことにございます！ しきゆう、ごじゅんびを！」

「よし。」ガランドーがれいせいな言葉で、こたえました。「ただちに、兵をむかえいれよ。リュインの二百名のほりよたちは、東のちゆうとん地へ送れ。」

「しようちいたしました！」兵士たちはガランドーのそのめいれいを受け、急ぎ、去っていききました。

「かならず、痛い目にあうぞ。」ハミールがこんどは、ややれいせいになつて、ガランドーにいいました。「ベーカーランドをうらぎつたことを、心からこうかいすることになる。」

ガランドーはだまつたまま、ハミールのことを見ました。なにかいおうとして、その口をいっしゅんひらきかけましたが、ガランドーはそのまま、また、もときた暗いろうかの中へと、かつんこつんと歩き去つていきました。

風雲、急を上げる。今にもたいへんなできごとが起こりそうだという意味です。その言葉の通り、風も、雲も、このとらわれの者たちのいるうばわれたリユインとりでの空の上を、まるでからみあう二ひきのりゆうたちのように、うねり、さわいでいました。ふきつなことが起ころうとしていました。

19、リズのおうちへいっちょよくせん

失われゆく者たち……。このおとぎのくにアーケランドでも、その運命は、すこしずつ、すこしずつ、広がっていったのです。

アーケランドに住む、さまざまな種族の者たち。ぜんなる者も悪しき者も、かわいい者も力強い者も、みんなそれぞれに、種族というものを持ちます。いちばんわかりやすいのが、みなさんと同じ、人間。このアーケランドでも、人間はいちばんとっていいほどに、たくさんいる種族でした。そしてたくさん、動物の種族の者たち。この物語にもこれまで、じつにさまざまな動物の種族の者たちがとうじょうしてきました。物語の主人公ロビーは、おおかみ種族であるウルファの少年です。そしてかれのいちばんの友、ライアンは、ひつじの種族シープロンですよ。カピバラの老人。きつねの少年、チップ。かえるの種族フログル。あのおそろしいガイラルロックだって、このアーケランドの、りっぱな種族のうちのひとつだったのです。

みなさんにはもう、今さらって感じですよ。ですが、このアーケランドから失われつつある種族の者たちがいるといたら、どうでしょうか？

かんきょうのへんか。住む場所がなくなつて。ほかの種族の者たちがふえたから。

りゆうはさまざまなものでした。そしてそれらのりゆうは、どれを取っても、かんたんにはかいつつすることのできない、しんこくなものばかりだったのです。

もちろん、だれが悪いというわけでもありません。どこかがさかえれば、どこかがおとろえていくものなのです。それは、しぜんの運命ともいえるものでした。だれもさからえないし、だれもうらめないので。かなしいことです。

失われし種族、シルフィア。リズ・クリスメイデインは、その大むかしに失われたはずのシルフィアという種族の、まつえいでした（まつえいとは、しそのことです）。シルフィアは精霊から生まれた種族で、すがたかたちは人間そのものです（ちよつと耳がとんがっています）。すらりとほそく、美しいすがたをしていて、光かがやくそのきぬのようになめらかなかみの毛は、内なる精霊の力にあわせて、青や、みどりや、こがね色に変わりました。

シルフィアの、そのいちばんのとくちよう（とくぎといった方がいいかもしれませぬ）。それはそのすばらしい、精霊の力でした。シルフィアはそのむかし、まちがいなく、このアーケランドでいちばんの精霊使いだったのです（精霊でしたから、精霊の力をかりるわざもいちばん強かったのです）。

今のアーケランドでいちばんの精霊使いは、やっぱりシープロンたちでしょう。ですがそのシープロンたちが、たばになってかかったとしても、むかしのシルフィア種族の

者たったひとりに、かなうかどうか……（おつと、ライアンにはないしよですよー）。それほどにシルフィアというのは、精霊の力の強い、ほんとうにとくべつな種族だったのです（これはシルフィアが精霊から分かれて生まれたときに、もとの精霊の力をたくさん受け取ったためでした。もつとぐたい的にいうと、シルフィアひとりにつき、水や、風や、火の精霊たち、百万人ぶんくらいのが、まとめてそのからだの中にそそぎこまれたのです！ ですからシルフィアが強いのも、とうぜんでした。なにせ百万人の精霊たちを、いちどに相手にしているようなものでしたから！）。

そのシルフィアが、かんぜんにこのアーケランドからすがたを消したとされるのが、もうなん百年も前のことです。りゆうはやはり、さまざまなものでした。いちばんのりゆうは、このくにの精霊の力が弱まったということ。このアーケランドでも精霊はあまり、見かけられなくなりましたのです。

大むかしには、精霊はあたりまえのように、そこかしこで見ることができました。精霊とふつうに、おしやべりすることさえできていたのです。ですが今では、読者のみなさんも知つての通り、精霊はかれらの世界にかくれ住むようになり、そのすがたを見ることは、ひじょうにまれなことになってしまいました（かなしみの森の小川で、フェリアルも、たくさんの精霊たちのすがたにおどろき、感動していましたよね。ざんねんながら今のアーケランドでは、精霊を見たことのない人の方が多いのです）。

そんな中で、リズは失われたはずのシルフィア種族の、そのきちような生き残りでした。リズの一部はひっそりと、このアークランドの世界の中に、その血を残しつつ生きてきたのです。かれらは自分たちがシルフィアであるとは、いいませんでした。ふつうの人間として暮らしつづけてきたのです（よけいなさわぎが起こることを防ぐためでした）。ですからみんなも、かれらがシルフィアであるということに、気がつきませんでした。ちよつと耳の音がった、きれいな人だな、くらいにしか思っていなかったのです。

リズはそんなかんきょうの中で生まれ育ち、やがて、エリル・シャンディーンの剣じゆつしなんやくになりました。生まれついでての剣のさいのうが、リズを剣の道に進ませたのです（両親からは、かなりののはんたいがあつたそうですが）。そしてエリル・シャンディーンでのせいかつの中で、ふとリズがもらした、しようげきのひとこと。

「おれ、じつは、シルフィアなんだよね。どうでもいいことだけど。」

みんなさいしよは、ただのじようだんだと思つていました。ですが大けんじやノランによつて、リズがたしかにシルフィアであるということがかくにんされると、お城はすつかり、大きわぎになつたのです（まあ、とうぜんですよね）。

でも、シルフィアだろうがなんだろうが、リズはリズ。エリル・シャンディーンの人たちは、アルマーク王をはじめ、リズをそのまま、今まで通りのあつかいで、剣じゆつしなんやくとしてむかえいれていました（それにしても、そんなだいなことを、とつ

ぜんさらつというなんて！ みんながじょうだんだと思っただのも、むりもありません。リズという人は、なんだかずいぶんと、大ざっぱというか、なんとというか……、ものごとをあまり大きく考えない人のようですね。それがみりよくといえ、みりよくなのでしようが……）。

リズ・クリスメイティン。この失われしシルフィア種族の者が、これから、ロビーのこの物語の中にと同じようするのです。精霊王のトンネルをあけるといいう、そのだいなやくめを持った、大いなる力の持ちぬしとして。

ふたりの（強い）ちびっ子たちとゆく、これからのロビーの旅。このアークランドの運命をきめる、だいじなだいじな旅のはずでしたが、やっぱりなんだか、ひとすじなわけではいきそうもありません。うくん、いったい、どうなることやら……。

あたりはすつかり、夜でした。ロビーたちがエリル・シャンティンのまちの門をくぐってから、二時間あまり。空のしゅやくは、おひさまから夜の星たちへと、もうすつかりいれかわっていました。塔の上に吹きつけていた風は、今ではすつかりやんでいました。雲の切れまから、夜のしゅやくの星たちが、きらきらとその顔をのぞかせておられます。だいぶひえこんできました。秋のなごりの虫たちが、りんりんといそがしそうに、その歌声をひびかせていました。

ロビーと旅の仲間たち、そしてお城の人たちが、エリル・シャンディーンのじょうへきのそのの、南へとつづく小道のはじまるその場所に、集まっていました。かれらはすぐに、出発しなくてはなりませんでした。まだこの地についたばかりでしたが、旅の者たちには、お城でひとばん、ゆっくり休む時間さえなかつたのです。今は、旅ゆく者たち、そして見送る者たちが集まって、それぞれの言葉をかわしあっているところでした。まさに今、ここから、新しい旅が生まれようとしているところだったのです。

「じゅうぶんに気をつけるんだぞ。きゅうせいしゆどのを、しっかりと守ってくれ。」

そういったのは、エリル・シャンディーンのきゅうていまじゆつしたちのうちのひとり、ロクヒュー・テオストライクでした。ノランに送り出され、ロビーとともにさいごの旅をゆくことになった仲間のマリエルに、かれらは見送りの言葉をおくっているところだったのです。

「まあ、おまえなら、わたしたちが心配することもないだろうけどね。」

ロクヒューのとなりの、赤いめがねをかけたもつとしの若いひとりのまじゆつしが、そういつて笑い、マリエルの頭をぐしゃぐしゃとなでました。かれは、マレイン・クレイネルといました。ねんれいはまだ、二十一さいです。マリエルにくらべたら年上ですが、それでもこのねんれいできゅうていまじゆつしにえらばれるのはすごいことで、かれもまた、すばらしい魔法のさいのうの持ちぬでした（いかにも知的なエリー

トといった感じで、いつも自信たっぷりなところは、マリエルにそっくりです。でもそこはやっぱり年上ですから、かれはマリエルの、いいお兄さんやくでした。

そしてロクヒューもまた、マリエルのお兄さんやくであるのと同時に、たいした力のあるまじゆつしでした。ねんれいは、二十五さい。かれのとくちようは……、まじゆつし、らしからぬこと！ スリムなからだでしたが、そのきんにくはびつちりとひきしまつていて、魔法を使うまでもない相手だったら、みんなこぶしで、ぼかぼかやつつけてしまうのです！ うーん、いろんな意味で、すごい。

「ふふん、いわれるまでもないですよ。」マリエルが、おとくいの自信たっぷりのいい方で、せんぱいまじゆつしたちの言葉にこたえました。

「あいかかわらず、なまいきなやつだ、こいつめー。」マレインがそういつて、マリエルの頭をげんこつでぐりぐりします。口ではあくたいをつけていましたが、みんなちびつ子のマリエルのことが、かわいくてしかたないといった感じでした（じつさい、かわいいのですが）。マリエルにもまた、すてきな仲間たちがいたようですね。

「これは、おまえのはじめての大しごとだぞ、マリエル。」さいごのひとり、ルクエル・フォートがまじめな顔をして、いいました（エリル・シャンドーのきゆうていまじゆつしたちは、マリエルをいれて四人です）。ルクエルは、エリル・シャンドーのきゆうていまじゆつしたちの長。魔法の力も、かれらの中でいちばんだったのです

（ねんれいはアルマーク王と同じくらい。背が高くやせていて、いかにもすごうでのまじゆつしといった感じでした。そしてルクエールは、王さまとも、とても深いつながりのある人物だったのです）。

「はい。」マリエルが、急にまじめな顔になってこたえました。マリエルにとつてルクエールは、ししよのノランと同じくらい、そんけいしている人物だったのです（マリインも、ふざけてマリエルの頭をぐりぐりするのをやめました）。

「きにもめいじます。ぼくのはたらきが、このアーケランドの運命をきめることになるんですから。この旅の重要さは、わかっているつもりです。」

マリエルの言葉に、ルクエールも「うむ。」とまんぞくげにうなずきました。

「このしごとは、おまえがだれよりもてきにんだ。わたしや、マレインに、ロクヒュー。われら三人のうち、だれにもかわりはつとまらん。ノランどのの目は、じつにたしかだな。がんばってくるんだぞ。」

マリエルはすつかり、顔を赤らめてしまいました。そんけいするりつばなまじゆつしせんぱいに、ここまでほめられることは、ふだん、あんまりないことでしたから（かわいかわいといわれることは、またちがう意味で、うれしかったのです）。マリエルは、かえす言葉もなかなか見つからず、ただただぺこりと頭を下げ、せんぱいたちにかんしゃの気持ちをあらわすばかりでした。

そしてもうひとつの、見送りの者たち。それは、これからそれぞれの地へと旅立とうとしている、われらが旅の者たちだったのです（ロビーとライアンは精霊王のもとへ。そしてベルグエルムとフェリアルは、エリル・シャンデーインの守りにそなえ、ベゼロインとリでへとむかうのです）。

ベルグエルムとフェリアルが、ロビーとかたいあくしゆをかわしました。これまでの旅の中で、かたいきずなどでむすばれた、かれら。かれらが出会って、まだほんのすこしの日数しかたつていません。ですけど読者のみなさんには、もう説明の必要もないはず。かれらのそのきずなは、強く強く、血のつながった家族のきずな、そのものでした。

かわしたその手をそのままに、かれらはしばらく、なにもいいませんでした。なにもいう必要もないくらいでした。目と目で、心と心で、かれらは多くのことを語りあっていたのです。

「きつと、もどつてきます。」

長いちんもくを破つて、ロビーが口をひらきました。ベルグエルムが強いまなざしを、ロビーにおくつてかえました。フェリアルはなみだをぼろぼろこぼし、顔をぐしゃぐしゃにして、ロビーのその手をかたくにぎりしめていました。

「しばらくは、おわかれです。」ベルグエルムがロビーにいました。「すべてすんだ

ら、ふたたび、この地でお会いしましょう。」

ベルグエルの、その気持ちのこもったあつい言葉……。そして三人は、それぞれに、かたくだきあつたのです。たとえばはなれたところにいようと、かれらの心は、つねにいつしよでした。多くは語りませんでした。でもかれらは、おたがいに、そのことを強くたしかめあつていたのです。

ところで……。

読者のみなさんも、あれ？　と思われたことでしょう。三人？　そう、ライアンは、どこにいったのでしょうか？

と思つていと……。

「お待たせー！」

とつぜん、お城のじょうへきのそのむこうから、そのライアンが（手をふりながら）走つてきました。あれ？　でもなんだか、いつもとふんいきがちがうような……？

「えへへー、見て見て！　じゃじゃーん！　ニュー・ライアンだよー！」

ライアンはそういって、その場でくるとまわつてみせました。なるほど、いつもとちがう感じがすると思つたら、いぜんと服そうがちがつていたんですね（ライアンはこの着がえのために、みんなの見送りの場におくれてやつてきました。だいじな見送りだというのに、まったくもう）。

これまでのライアンは、白のシープロンの名にふさわしい、まっ白なきぬの衣服を身につけていました。それがライアンの白いはだと、きれいな銀色のかみに、よくはえて、とても気高いいんしょうを与えていたのです（いわゆる王子さまの着るような、りっぱな服でした。王子さまなんですから、とうぜんでしたが……）。ですが今、ライアンが着ているのは、今までとは大きくいんしょうのことなる服でした。その服は、ひとことという……、かわいい服！ そうです、ライアンはマリエルにたいこうして、今までのりっぱな服から、とびきりかわいい服に着がえました！（なんて負けすぎらいなんでしょう！）

きいろいふち取りのされた、えんじ色のシャツに、たけのみじかい、こいめの色をしたはい色のジャケツト（たけがおなかの上までしかないので、下のシャツをかわいく見せることができたのです）。ジャケツトの前は、大きなきいろいリボンでとめられていました。きいろと茶色のもようのベルトを腰にななめにまいていて、そしてジャケツトとおそろいの、ひぎの上までしかない、はい色の半ズボンをはいていたのです（この半ズボンは、あきらかにマリエルをいしきしてのことでした。ほんとうなら、旅をゆくのに半ズボンなんて、ふさわしいものではありません。はだが出ていては、けがをしてしまいかもれませんし、また、このきせつに半ズボンなんて、はつきりいって寒いです！ でもライアンは、それらのすべてのことよりも、見た目のかわいさをゆうせんさせ

ました。

ちなみに、マリエルはさきほどと同じ服を着ていましたが、ズボンだけは、ふつうの長さのズボンにはきかえていました。旅をゆくのに半ズボンでは、いろいろとこまることが多いということを、マリエルはよく知っておりましたから。やれやれ、ライアンもこのさき、こまつたことにならなければいいんですけど……)。

「かわいいでしょ！ お城のいしようながかりの人に、えらんでもらったんだよ！ こいめの色のジャケツトにしてもらったんだけど、それがかえって、ぼくの新しいみりよくを生んでるよね。このシャツも、リボンも、みんなかわいいし、なにしろ中身がかわいいからねー。いやー、まいったまいった。」

そういつてライアンは、マリエルの方をちらりと見て、「ふふん！」と鼻をならしてみせました。さあ、もちろんマリエルも、だまっていられません。

「なにが、ニューだよ！ 着がえただけじゃんか！」マリエルがはんげきしましたが、ライアンはあいかわらず、からだをふりふり動かして、とくいげにいうばかりでした。

「わかってないね。こういうのは、気持ちがいせつなんだ。人はみな、気持ちの持ち方ひとつで、強くなれる！ これは、ぼくの、人生ろんだよ。さあー、しんきいつてん！ かわいい服で、がんばるぞー！」

まったく、ライアンにはかないませぬね。こんなに重大な旅の出発のときでも、おそ

ろしい戦いがせまりこようとしているときでも、ライアンはいつでもライアンでした。でも、そんなライアンの前むきさ（のうてんきさ？）が、かえってこの場にいる者たちの気持ちを大いにほぐし、強めてくれたのです。それはライアンの、大きなさいのうでした。ロビーはこのエリル・シャンディーンで、さまざまなじじつをきかされました。しようげき的なこと。心を痛めること。たくさんのじじつです。それはロビーにとつて、とてもつらいものにちがいありませんでした。ですが今、目の前にいるライアンのことを見て、ロビーの心は一時的にでも、とてもおだやかなものとなったのです。ロビーは思わず、「ふふ。」と笑ってしまいました。そしてこの出発の前に。ロビーはあらためて、心からこう思ったのです。

ライアンと出会えて、よかった。

こうして、ロビーのさいごの旅がはじまったのです（ちゃんとライアンは、みんなの見送りもすませましたので、ご安心を。フェリアルはまた、ライアンとのわかれがさみしくて、なみだを流しながらライアンにだきついてしまいました。でもこのときばかりはライアンも、「しょうがないなあ。」といって、フェリアルの頭をなでてあげました）。じこくはおりしも、おおかみのこくげん。午後の八時ころでした（このだいじな出発の

時間がロビーの種族と同じ、おおかみのこくげんというのも、なにかの運命を感じます。

空気はひんやりと、はだにまとわりついてきました。風は、やんでいきます。ですからいくらかはへいきでしたが、やはり冬も近いこのきせつ。上にはおるものがなければ、寒くてたまりません。この新しい旅の仲間たちは、ひとりのをのぞいて、寒さへのたいさくはばっちりしていました。はぐくみの森でフォクシモンたちにもらった、ふわふわ森ペンギンの羽毛から作られたマフラーとマントは、もちろんのこと。さらに、エリル・シャンデーオンのお城で用意してくれた、あたたかいコートを、ばっちり着こんでいたのです（このコートの中には、西の海から渡ってくる「渡りがも」の羽毛が、ぎっしり詰められていました。そのあたたかさといったら、思わずにんまりと、笑顔がこぼれてしまうくらいだったのです。

ちなみに、この渡りがもの羽毛はほんのちよつとの量でも、すぐくねだんが張りまりました。ですからこのコートは、びつくりするくらいねだんが高いのですが、まあそこは、かれらにはだまつておきましょう。そしてその「ひとりのをのぞいて」とは、だれのことですか？ みなさんにはすぐにわかりますよね。そう、ライアンでした。

ライアンは、せっかく着がえたかわいい服がコートでかくれてしまうのをいやがつて、コートを着るのをこぼんだのです。ロビーが「かぜひいちゃうから、これ着なよ。」

といつても、ライアンはききいれませんが、いきようようと、上きげんでうでをふりながら、こういうばかりでした。

「だーいじようぶ、だいじようぶ！ このくらい寒さ、へっちゃらだよ。ぼくのかわいさが、寒さも吹き飛ばしちゃうんだから！」

でもライアンは、だいじなことをひとつ、忘れていたのです……。

お城の兵士たちがふたり、馬たちをつれてやってきました。そのうちの二頭は、白い馬でした。それはライアンの友だち、メルでした。メルはライアンのそばにすりよつて、あまえます。そう、かれらはリズのいる山のもともまでは、馬でゆくのです。時間がなによりもたいせつ。ノランの言葉です。すこしの時間でも、むだにできません。そのためかれらは、危険なガウバウというけものたちがいるその場所の前までは、馬でいくということになりました。

メルにはこれまでと同じくライアンとロビーが乗り、マリエルは茶色の馬に乗っています。そしてお城の兵士たちがふたり、それぞれの騎馬たちに乗って、おともをしていきました（山のもともまでいったら、馬をひいて帰ってこなくてはなりませんでしたから）。

「さあみんな、いくぞ！ ノランベつどう隊、しゅっぱーつ！」

（やつぱり）ライアンが出発のあいずを出して、いよいよ出発です（出発のかけ声は、

すっかりライアンのしごとでしたから。マリエルは「ちよつと！ きみがえらそうにいわないですよ！ ベつどう隊のしきをとるのは、おししようさまにたのまれた、ぼくなんだからね！」といていましたが、ライアンは「そんなの、きまつてないよー。」といて「んべー！」と舌を出して、さっさといてしまいました。もちろんそのあと、しばらく馬の上で、おたがいわーわーやっておりましたが……。

そしてもくてきの山へとむかつて走りはじめて、十分もしないころのこと……。

「だからいったのに、もう。」

そういったのは、ロビーでした。ロビーはライアンのうしろに乗っておりましたから、ライアンのようすに、すぐに気がついたのです。つまり……。

この冬も近い夜の寒空に、うす着で馬を走らせたなら、どうなるか？ それはだれでもわかることですよね。もうライアンは寒さでがたがたふるえて、メルのとつなをにぎる手も、おぼつかなくなつてしまつていました。馬に乗る前は「へいきへいき！」と強がつていましたが、スピードを上げて、風を切つて進んでいくわけですから、そのことをライアンは、まったく忘れていたというわけだったので。

「ほら、これ着て。」ロビーがそういつて、馬につけたかばんから一着のコートを取り出しました。それはライアンがもらうのをごつた、そのコートでした。ロビーは、ぜつたいこうなるんだから、と見こんで、ライアンのぶんのコートを、こつそり、馬の

かばんにしまっておいたのです。さすがロビー。ライアンのことなら、いちばんよくわかっていますね。

ライアンは鼻をずずつとすすつて、とつても小さな声で、こうつぶやくばかりでした。「ありがと……」

それからしばらく、一行は夜の空の下を走りつづけました。小道はやがてなだらかな丘につながり、そして道はそこから、赤茶けた色の地面の広がる山の道へと変わっていききました。

エリル・シヤンデーンを出発してから、まだ二十分もたっていないません。ですがあたりの景色は、すっかりさま変わりしてしまっていました。赤茶けた岩のかべがまわりをかこんでいて、それがえんえん、つづいていたのです。ときおり、その岩かべの上からにぎりこぶしくらいの石がころころところがり落ちてきて、小石や土をまきこんですべり、ばらばらというかわいた音を立てていききました。はじめはロビーもびくつとして、石の落ちてきたところをふりかえり、見上げましたが、そこにはなにもいなくて、赤茶けた色の岩のむれが、土のかべにぼこぼこつき出ているのが見えるばかりでした。

「このあたりのかべは、とても、もろいんです。」マリエルが、心配そうにしている口ビーにむかっています。「でも、近づきすぎなければだいじょうぶ。ここからは、い

ちれつになつて進みましょう。」

そういつてマリエルが、自分の馬をかつて、みんなのいちばん前に飛び出しました。それを見たライアンが、「ああっ！」といつて、すかさずそのあとを追いかけます。

「隊長をさしおいて、かつてに前を走らないですよ！」

うしろからどなるライアンのその言葉に、マリエルは、はあ？　といった顔をして、ふりかえつていいました。

「きみが隊長つて、だれがきめたの！　この隊のせきにん者は、ぼくだっていったでしよー！」

いわれてこんどは、ライアンがいいかえします。

「せきにん者はきみかもしれないけど、隊長じゃないもんね。だから、隊長はぼくなの！」

な、なんてめちやくちやなりろんなのでしよう……。ふつうは隊のせきにん者が、隊長のはずなのですが……。とにかくライアンは、隊と名のつくものだったなら、なんでも隊長にならなくては気がすまなかつたのです。ライアンのせいにかくは、みなさんもよくわかつていますよね。ライアンのそのむちやくちやなりろんに、マリエルもぶんぶん怒つていいました。

「わけのわからないことを！　いいからきみは、おとなしく、ぼくについてくればい

んです！ はじめから、おまけでついできたくせに！」

「な、なにおうー！」

あーもう、またはじまった……。まだ旅ははじまったばかりだというのに、これではぜんぜん、話になりません。せっかく、ゆうしゆうな力を持ったふたりが、そろつているといふのに……。うーん、ほんとになんとか、ならないものでしょうか？（著者のわたしも、このふたりのわーわーきやーきやーをそのつど書いていくのも、しんどいですがら……）

こんなときは、このふたりの橋渡しをするやくわりの、ロビーをたよるしかありませんね。じつはロビーも、出発前からうすうす、自分がそのやくわりをするんだろーなあ、と思っていたのです（すいませんがロビーさん。わたしからもぜひ、お願いします！）。

さて、ロビーはどうするのでしょうか？

ふたりのいいあらそいは、先頭をめぐるはげしい馬のきようそうになつてしまいました。ふたりとも「ぼくが前！ ぼくが前！」といい張つて、ゆずりません。ライアンのうしろに乗っているロビーは、そのつど前へうしろへと、ぐいぐいゆさぶられてしまいましたし、うしろからついてきているふたりの兵士さんたちも、もうついていくだけで、せいっぱいだったのです。なんだか、まわりのかべに馬のからだがつつかつて、そのしょうげきで、大きな岩がごろごろと落ちてくることさえありました。危険きわまりあ

りません！

さあ、とうとうロビーも、大きな声を張り上げてさげんだのです。

「ハラー！ ふたりとも、やめてやめて！」

思いがけず、ロビーが大きな声を出したので、あらそっていたふたりもびつくりして、ロビーの方をふりかえりました。そして、つづくロビーの言葉。

「ぼくたちは、仲間なんだよ！ あらそってちゃだめでしょ！ みんなが協力しあつて、ひとりひとりのときよりもっと大きな力を生み出すために、ぼくたちはいっしょにいるんだから！ それが、仲間の力でしょ！ ライアンも、マリエルくんも、ちゃんと考えて！」

ロビーの言葉（おせっきょう）は、ふたりのちびっ子たちの心にてきめんに伝わりました。ライアンは「ロ、ロビー……」と言葉につまり、マリエルは怒られて、「す、すみません。」とあやまったあと、歯をぐぐぐとかみしめて、うつむいて、すっかりへこんでしまったのです（マリエルは、りくつつぽい子でしたから、自分があまりにも子どもっぽい行動を取ってしまったことが、はずかしく、ゆるせなかつたのです）。

ふたりのちびっ子たちは、しばらくにもいえないまま、馬を走らせていました。どうやらロビーに怒られたことが、だいぶこたえたようですね（めつたにあることでもないですから）。そしてそんなふたりのことを見て。ロビーはこんどは、おちついた声で、

こういいました。

「ノランベつどう隊をひっぱっていくのは、ノランさんでのしの、マリエルくん。きみだよ。」

ロビーの言葉に、おちこんでいたマリエルは「え……？」といて、ロビーの方を見ました。

「そして、みんなのことをまとめ上げるのは、ライアン。きみのしごと。」

こんどはライアンが、「えっ？」とロビーの方をふりかえります。

「みんなの気持ちをライアンがひとつにまとめ、マリエルくんが、けつだんをくだす。それが、ノランベつどう隊。ふたりとも、りっぱなやくわりだよ。だれが隊長か？

なんて、そんなことはいいよ。みんなが隊長なんだ。」

すばらしい、ロビーの言葉でした（たぶんフェリアルがこの場にいたら、感動して、また「ロビーどの〜！」といて泣きついてくることでしょう）。もうライアンもマリエルも、ぐうのねも出ませんでした。それぞれに、おたがいに、やるべきやくわりがある。いくらライバル心からのこととはいえ、自分のことばかり見てしまっていたふたりは、そのことをここで、しっかりと考えさせられたのです。

ライアンとマリエルのふたりは、ようやくおたがいのことを、ちらりと見やりました。そこには新しくここから生まれた、仲間のすがたがありました。まだちよつと、ぎく

しやくしたところはもちろんありましたが、これから、この新しい仲間と、新しい旅がはじまるのです。

しばらくたって。ライアンがさきに、マリエルに口をひらきました。

「ま、まあ、ロビーがそこまでいうなら、しかたないね。それで、がまんしてあげるよ。」
あいかわらずのへらさ口でしたが、そこにはさつきまでの、とげとげしたふんいきはありませんでした（ライアンもすつかり、はんせいしたようです）。

「ま、まあ、ぼくは、おししようさまのきたいにこたえなければなりませんから。きみが、よけいなことをしなければ、それでいいんです。」

こつち（マリエル）も負けなくらいの、へらさ口です。まったくふたりとも、すなおじゃないんだから……。

旅をはじめたばつかりの今このときに。みんなの気持ちが始まりとまったということとは、すばらしくたいせつなことでした。もしあのまま、ふたりのちびつ子たちの気持ちがいればならぬまま旅をつづけていたとしたら、どんな危険な目にあつてしまうことか？ わかりません。ロビーはこのふたりの心を、そしてこの新しいノランベつどう隊というひとつのチームを、みごとにつなぎあわせてみせたのです。それはロビーの人から、やさしき、思いやり、それらのものによる、すばらしい力のあらわれでした。著者のわたしも、ここであらためて、こう思ったものです。やはりロビーは、主人公なんだと。

「このさきの道は、もつとけわしくなります。だから、道をよく知っているぼくが、先頭をつとめるのがいちばんいいでしょう。」マリエルがいました。みんなはここであらためて、このさきの旅の道のりについて、話しあっていたのです。そしてマリエルのいったことは、じつに理にかなっていました。マリエルはさつそく、隊のたいせつなけつだんをおこなったのです。

「きみも、それでいいね？」マリエルがライアンにたずねます。これも今までには、なかつたことでした。

「まあ、それがいいだろうね。」ライアンも、すなおではありませんでしたが、よく考えてマリエルの言葉にさんせいしました。

「よし、では、いきましよう。」マリエルがそういつて、先頭に立つて馬を走らせていききました。ライアンが、それにつづいていきます。そしてうしろの守りは、おとものふたりの兵士さんたちで、しっかりとかためられていました。

やれやれ。旅をはじめたばかりでいきなり起こってしまった、このひとさうどう。一時はどうなることかと思いましたが、ロビーがすばらしい力で、まとめてくれましたね。この新しい、ノランベつどう隊という旅の仲間たち。この仲間たちなら、きつと、すばらしいかつやくをしてくれることでしょう。

ところで……。

すこし走ってから、ライアンが急にいい出しました。

「あのさ、ぼくのこと、いつまでも、きみってよぶの、やめてくんない?」

そのとつぜんの言葉に、マリエルが「え?」といってふりかえります。

「ま、まあ、いちおう、仲間になったことなんだし、名まえでよばせてあげても、いいかな、なんて。」

なるほど、そういうわけでしたか。はじめて会った相手でもニックネームでよんでしまうほど、ほんらいならば、人なつつこいライアンです。いつまでも「きみ」のままでは、ちよつと、さびしかつたんですね（ほんとうに、すなおじやないんだから）。

「わかつたよ。」マリエルがライアンの気持ちを讀み取つて、こたえました。「名まえ、フルネームでなんていうの?」

「ライアン・スタツカート。」ライアンがこたえます。

「ふーん、スタツカートか。」マリエルがあごをなでながら、しばらく考えこみました（あごをなでながら考えるのは、ひげをなでながら考えるノランのまねをしていたのです）。そしてしばらく考えたあと。

「じゃあ、ライスタだな。これからは、ライスタつてよぶからね。いくぞ、ライスタ。」マリエルはそういつて、さつきといつてしまいました。

「ええーっ! ちよ、ちよつと!」よそうがいのへんじに、ライアンはすっかりどうて

んして、あわててマリエルのあとを追いかけます。

「なんだよ、ライスタって！ なに、そのセンス！ もうすこし、かわいいニックネームにしてよー！ ちよ、ちよつと待てつたら！ マリーー！」

どうやらマリエルにとつては、名まえとみようじをすこしずつ取りあわせたニックネームでよぶのが、親しい相手に対する気持ちのあらわし方のようでした。でも……、やつぱり、うくん、つて感じですよ。ラ、ライスタですか……（ちなみに、マリエルはお城のせんばいまじゆつしたちのことも、名まえとみようじをもじつたニックネームでよんでいたのです。マレイン・クレイネルのことはマレック兄さん、ロクヒュー・テオストライクのこと、ロックス兄さんとよんでいました。でもさすがに、そんなけいする大せんばいのルクエール・フォートのことだけは、ルクエールさんとよんでいました）。

そしてこのとき。ライアンは自分でもむいしきのまま、マリエルのことをマリーというニックネームでよんでいましたが、そのことにライアンが気づいたのは、もうすこしあとになってからのことだったのです。

そんなふたりのことを見て、ロビーは「ふふふ。」と笑ってしまいました。もう、心配はないみたいだ。ロビーはそう、心の中で思いました。

ライスタか……。

それと同時に、ロビーは心の中で、こっそり、このようにも思ったのです。マリエルくんって、やっぱり、ちよつと変わった子……。

道はいよいよ、ほんとうの山道になりました。ここがリズの住んでいる山の、そのふもとにあたる場所だったのです。エリル・シャンティンから馬で走ることに、およそ三十分ほど。きよりにして、十二、三マイルは走ったでしょうか？（とここで……、リズの住むこの山まで、ノランは歩いて二時間ほどでつくといいましたが、このきよりを二時間で歩くのは、とてもむりでしょう。しかも道は、ただのたいらな道というわけでもなく、まがったりのぼったり、でこぼこだったりしていましたから、よけいに時間もかかるのです。急いで走りつづけていかなければ、とても二時間ではたどりつけないことでしょう。

じつはノランは、ここでもやっぱり、自分が力のあるまじゆつしだということを、ぜんぜん考えにいれていませんでした。旅ばかりしているノランは、自分の足にいつも、とくべつな魔法をかけていたのです。それは、うさぎあしのじゆつというもので、この魔法を使うと、まるでうさぎみたいに、ぴゅんぴゅんはやく歩くことができました。歩いて二時間というのは、この魔法を使うことを計算にいれてのことでした。うくん、やっぱりけんじやという人たちは、計算ずくめで動いているわりには、どこかうっかり

しているところがあるみたいですね。うっかりばかりしていた、カルモトみたいに……)

あたりはぶきみに静まりかえっていました。木の上にも、しげみの中にも、生きもののけはいはまったく感じられません。えだで羽を休めるからすや、起き出したふくろうが、一羽くらいいてもおかしくありませんでしたが、ほんとうになんにもいなかったのです。まつ黒な立ち木が大きなおぼけみたいにあらわれては通りすぎるたびに、メルの上にいるロビーは、とてもいやな気持ちになりました。それらの木々が、まるであのワットの黒騎士たちの乗っていた、デイルバグというまつ黒なかいぶつたちのように見えてきたのです。ひびわれた木のかわのもようが、かいぶつの大きな口のように見えました。張り出したえだは、かいぶつの大きなかぎづめのようにも見えました。腰の剣は、ロビーになにも危険をさらせてはおりません。ですが、なんだかロビーは、この場所がとてもしげな場所のように思えました。この場所のことをよく知っているとマリエルも、きよろきよろと、しきりにあたりのようすをうかがっております。ライアンはさつきからずっと、木々やしげみに対して、「かわいくない！かわいくない！」ともんくをいっていました（しげみにそんなことをいっても、しょうがない気がします……）。

そしてそこから、しばらくいったところ……。

「……までです。」

先頭のマリエルが、馬をせいしていいました。ライアンも兵士たちも、馬をとめて、あたりのようすをうかがいます。

「……からさきは、ガウバウたちのすみかです。これ以上、馬で進むことはできません。」

お城できいた、あのおそろしいガウバウというけものたち。ついに、そのけものたちのすみかというその場所まで、みんなはやってきたのです（わかつていましたが、やつぱりきんちようしますね）。

マリエルは目をして、あたりに耳をすましました。両手をうさぎの耳のように、頭の上にちよこんとつけて、なにかをささやいております。これはうさぎ耳のじゅつというもので、この魔法を使うと、遠くの物音でもよく聞こえるようになるのです。さすがはまじゆつし。さつそく、魔法パワーのとうじようですね（ところで、この魔法はかんたんな言葉をとなえれば、それだけで使うことができましたのです。じつは手をうさぎの耳のようにして頭につける必要は、ぜんぜんありませんでした。それはマリエルが自分で考えたもので、そのりゆうはもちろん、その方が自分がかわいく見えるからだっただけです。うゝん……）。

しばらくしてから、マリエルが手をもどしていいました。

「どうやら、あたりにガウバウたちは、いないみたいです。でも、かれらはもう、ぼくたちがここへやってきたということは、知っています。かれらは、とても耳がいいですから。」

「えっ？ それじゃ、そのガウバウっていう生きものたちに見つからずに、進むのは……」

ロビーの言葉に、マリエルがれいせいにとたえました。

「すいませんが、それはむりです。でも、ご安心を。ガウバウなんて、ぼくの魔法にかかったら、ちよちよいのちよいですから。それよりも……」

マリエルはそういつて、急にしんけんな顔をして考えはじめます。

「まつすぐいくか？ 上の道からいくか？ なやみどころだな。時間的には、まつすぐいった方が早いけど、ガウバウはこっちの方が多。上の道からいくと、ガウバウはすくないけど、よけいな時間がかかる。時間ときより、ガウバウの数に、ぼくの魔法の使用数を、すべてあわせて計算すると……、今のじょうけんからいつて、どのルートでいくのが、いちばんわりにあつていいのか……？ ええつと、アルキアのほうそくによつて、二をかけて、けつかに風と気おんのデータを加え……」

さすが、ペンキよの先生の家の子。なにごともしろんな計算づくめで行動をきめるのが、しゅうかんになつてゐるみたいですね。どうやらマリエルにとつては、ガウバウ

のこわさなんてものはまったく問題ではなくて、どうすればいちばんこうりつのいい行動が取れるか？ ということの方が重要みたいでした。じつにマリエルらしいですね（でも、すいません。後半はなんの計算なんだか？ わたしにはぜんぜんわからないんですけど……。アルキアのほうそくって、なに？）。

「とにかく、さきに進もうよ。ほくもう、おなかすいちやった。」

ライアンが、しんぼうできずにいいました。勉強ぎらいのライアンにとつては、マリエルのいっていることは、ちんぶんかんぶん！ はつきりいって、さつさとさきに進んで、リズのおうちで早くごはんが食べたかったです。みんなはばんごはんも食べるひまもないまま、出発しなくてはなりませんでしたから（ごはんというより、ライアンの場合はお菓子が食べたかったです）。でもライアンはもうすでに、お城からここへくるまでのメルの上で、エリル・シャンディーンやきを八こも食べていましたけど……。そしてたづなを取るライアンにそれを食べさせてあげていたのは、もちろんロビーでした）。

「もう、計算が終わるよ。よし、まずは、まつすぐいきましよう。それからがけをのぼっていけば、いちばん、時間とめんどろがすくなくてすむ。それでいいですか？」マリエルがロビーにたずねました。

「オツケーオツケー！ それでいいよ、もー。いいよね？ ロビー。」すかさずライア

ンが、ロビーの前にぐいとからだを乗り出して、かわりにこたえます。そしてロビーも、「う、うん。」と小さくこたえました（とりあえず、ライアンがみんなのことをまとめて、マリエルがけつだんをくだすという、ノランベつどう隊のやくわりぶんたんは守られて
いるみたいですね。ちよつと、ごういんな感じですが……）。

「よし。では、われわれは、ここから歩いていきます。ルーリックさん、アランギルさん、ありがとうございました。」

マリエルがそういって、頭をぺこりと下げました。え？　ルーリックさんにアランギルさんって、だれ？　と思われた方もいるでしょうが、これは、おともをしてくれたふたりの兵士さんたちの名まえだったのです（じつはこのふたり、前にもとうじょうとして、ロビーたちがアルマーク王のぎよくぎにむかうときに、長い空中小ろをかをいっしょにつきそって歩いてくれました。わたしがふたりの名まえを、ちよつとしょうかいしていましたよね。またまたのごとうじょうだったというわけなのです。こんないは名まえを出していませんでしたので、今までわからなかったわけですが……）。

「くれぐれも、お気をつけて。旅のせいこうをおいのりしております。」

ルーリックとアランギルのふたりの兵士たちは、そういってロビーたちに敬礼をし、それぞれが馬を一頭ずつひきつれて、お城へともどっていききました。ライアンの友だち、メルとも、これでしばらくはおわかれです。今までほんとうに、おつかれさまでし

た！　いろんなことがあつたよね！

さて、おともの兵士さんたちが馬たちをつれて帰ってしまつて。今このさみしい山道に居るのは、ロビーとライアン、マリエルの、たつた三人ぼつちになりました。ここからは、歩きの旅になるのです。マリエルのいうことには、道はこのまままっすぐ、山のとつぺんまでつづいているといふことでしたが、その道は、だんがいぜつべきの道。そしてガウバウだらけ。とちゆうでがけをのぼつていった方が、リズのところまでは早くいけるのだといふことでした。でも、がけをのぼつていくつて、口でいうのはかんたんでしたが、じつさいには、かなりたいへんなような気がしますが。がけに道はありません。文字通り、すでに岩かべを伝いながら、よじのぼつていくしかないので（まさにロッククライミングです）。マリエルはいつたい、どう考えているのでしょうか？

でもそこは、ゆうしゆうなる小さなまじゆつし、マリエルくんのことです。なにか、うまい手があるのでしょうか。かれがどんな手を使うのか？　みなさんもそれまで、お楽しみに！（まさかほんとうに、すでにのぼつていくわけじゃないでしょうか）

ちなみに、時間のせつやくのためには、ノランも使つていてマリエルも使うことのできた、うさぎあしのじゆつを使った方が、もちろんはやく歩けましたが、この魔法は、おくがいの、さきを見通すことのできるよくひらかれた場所であれば、使うのはやめて

おいた方がいい魔法でした。それはなぜか？　といいますと、この魔法は、はやく歩けることは歩けましたが、そのはんめん、急にとまったり、こまわりをきかせた動きを取ることができなくなってしまおうという、魔法だったのです。そしてこのさきは、危険なガウバウたちもいる、だんがいぜつべきの道。そんなところを早足でびゅんびゅん進んでいったりすれば、どんなけつまつを生むか？　おわかりですよ。ガウバウが出てきたとしても、思うように動くこともできないでしょうし、その前に、がけから落つこちでもしまいかねません！　ですからマリエルは、あらゆるこうりつを考えた上でも、ふつうに歩いていくことにしました。

道は、あつというまにけわしくなりました。今までは、たいらなただの山道にすぎませんでしたが、すこし歩いていくと、急に目の前に、おそろしいだんがいぜつべきがあらわれたのです。のぞきこんで見ると、顔に下からの風が吹きあたります。はるか下は、いちめんの森でした。

道はがけのふちによりそうようにして、ほそぼそと、たよりなくつづいております。シープロンドを出発してからすぐに通った、あのオーリンたちが住んでいたというむかしの山道。この場所は、あの山道にそっくりでした（ちなみに、このあたりいったいは大むかしに銀をほり出した、こう山のあとでした。そのためむかしの道のなごりが、今も残っていたのです。今ではもう銀もとれなくなり、かわりにおそろしいガウバウたち

がすみついてだれも近よらなくなってしまっていました。そういうところも、おつかない巨人やグブリハツグなんていう生きものたちがすみつくようになってしまった、あのオーリンの山道と、よくにっていますよね。

でも、あのときの山道とちがっているとありますが。いいことと悪いこと、それぞれがひとつずつありました。

いいことは、あのときのような強い風が吹いていないということ。あのときはほんとうに、がけから落っこちてしまうんじゃないか？ というくらい強い風が吹いていて、みんなを弱らせたものでした（ライアンの場合は、じまんのかみがくしゃくしゃになってしまふことの方が、いやみたいでしたけど）。そして悪いことは……、この場所がほんとうに、ガウバウたちの巣になっていたということ！ まだすがたをあらわしてはいませんでしたが、ロビーとライアンには、それがいやというほど知れたのです。だってさつきから、あつちやこつちで、ガウバウたちのおそろしいほえ声が、ずっとなりひびいていましたもの！

「がうるるる……。がうるるる……」

「ぐがああああ……。！」

ひ、ひええ！ とにかくさつきからずっと、こんなちようしなのです。ふつうの人だったなら、とてもこんなところを歩いてなんかいられません！

「ね、ねえ、マリエルくん。ほんとうにだいじょうぶ？　なんか、すごいなき声がきこえるよ。」おつかかなびつくり進むロビーが、たまらずにマリエルにたずねました（さつきからもう、ロビーの腰の剣は、まっ青に光りつばなしでしたから！　ガウバウというのはとてもかしい生きもので、ただの野生の動物とはちがつて、さまざま悪だくみまで考えることができるのです。なんておそろしい！）。

「へいきですよ。そんなに、心配しないでください。このなき声は、ちよつと、うつとうしいですけど、やつらがロビーさんに飛びかかる前に、ぼくの魔法が、黒こげにしちやいますから。」そういうマリエルはさつきから顔色ひとつ変えず、ふんふんと上きげんのまま、先頭を歩いていたのです。

「こわがりだなあ、ロビーは。ほら、きゆうせいしゆなんですよ？　しつかりしなよ。それに、ガウバウだって、おおかみなんだし、おんなじ仲間じゃない。」ライアンもいちばんうしろを歩きながら、よゆうの顔をしてロビーのことをせつつきました（たしかにガウバウは、おおかみににいましたけど……）。

「べ、べつに、仲間なんかじゃないよー！」ロビーがライアンにいましたが、ライアンは「ほら、早く早く。」とロビーのおしりをべちべちたたいて、さきをうながすばかり

でした（うくん、マリエルといいライアンといい、こんなときちびっ子というものは、ほんとうに強いですね……）。

とそんなとき、急に……。

「ああ、すいません。ちよつと、走ってください。」マリエルがいました。

「え？　え？」ロビーがあたりを睨みまわすと……。

「がうががああー！」

で、出たー！　ガウバウです！

頭の上からおそろしいほえ声がふつてきて、見上げてみれば、体長七フィートはあろうかという大きなおおかみのようなものが、今まさに、がけの上からみんなのもとへとむかって、かけてくるところでした！（この生きものは、切り立ったがけでもなんのその！　びゅんびゅん走ってやってくるのです！）

「うわわわー！」ロビーがひめいを上げて走り出しました。たかがおおかみの一ぴきや二ひき。物語の主人公がそんなにかんたんに逃げてちやだめじゃんか、つて思われた方は、考えをあらためることに思いますよ。一ぴきや二ひきじやありません。そんなきょうぼうなものをたちが、ぱつと見ただけでも、二十ぴき近くも！　いつせいがけ

の上からこっちへとむかって、目を血走らせながら走ってきたのです！　ほんとに、ひええー！

「マリエルくん！　これ、どうするの〜！」ロビーが走りながら、マリエルにさげびました。ですがマリエルはあいかわらず、すずしい顔をしたままです。マリエルはロビーをさきにかけると、立ちどまって戦おうとしているライアンの方をちらりと見てから、ロビーにいいました。

「ああ、すいません。ぼくのでんげきが、ロビーさんにまであたつちやうかもしれませんでしたので、ひなんしてもらいました。もういいですよ。」

でんげき？　マリエルはそういうと、手にしたつえをふりかざしました。

「ライスタ、そこにいると、あぶないよ。」

「え？！」

そしてライアンがこたえるのより早く、マリエルはダンスのようなかるやかなステッブをきざみながら、さげんだのです。

「マリエルの、まじかるプラスト！」（ステップー。）

「りんがる、れんがる、ふろー！」（ステップニ〜きめポーズ。）

ぼりぼりぼりぼり、ぼりーん！

いっしゅん、あたりがまっ白に光りかがやきました！　マリエルのその魔法の言葉と同時に、持っているつえのさきから、まばゆいばかりのいなずまが飛び出したのです！
そして……。

「きやいん！　きやいん！　きやいん！」

そのいなずまが、ガウバウたちのむれをちよくげき！　もうガウバウたちは、たまったものではありません！　三びきのガウバウたちが黒こげになって、がけの下へとまっさかさま！　残りのガウバウたちも、いなずまをじゆうぶんにあびせられて、びりびりびり！　よろける足で、あっちやこっちへ、やつとのもので逃げていききました。

これにはロビーも、さすがにライアンまでもが、ぽかーん！　口をあけたまま、かたまって動けなくなっていました。

「まったく、口ほどにもありませんね。ロビーさん、おけがはありませんか？　ライス
タ、ころんでないだろうね？」

マリエルがといかけましたが、ふたりともまだ、へんじができるようなじょうたいではありません。しばらくして、さいごのガウバウの一びきのがけの上へと逃げていく

と、ようやく口をひらくことができました。

「す、すごい……。すごいすごい！　すごいよ、マリエルくん！」ロビーがこうふんして、マリエルの手を取っていました。

「や、やるね……、マリー。」ライアンも、ちよつとくやしそうでしたけど、すなおにマリエルの力のすごさをみとめました（ちなみに、ライアンは自分もかつこよく、風の精霊のたつまきを作ってガウバウたちをやっつけてやろうと思っていたのです。でもたつまきを作り出すその前に、マリエルが全部かたづけしてしまいました）。

「いえ、それほどでも。」マリエルはひかえめにいましたが、こういうときマリエルは、すなおにうれしがっていたのです。

「だいぶ、手かげんしてやりましたが、ガウバウていどの相手なら、これでじゆうぶんでしょう。それより、早くさきに進まないと。ガウバウはいちどやっつけても、また、もつとたくさんの数でおそってきますからね。」

そういうとマリエルは、またすずしい顔をして、すたすたと歩きはじめました（あれでまだ、手かげんしていたですって？　ほんとうにちびっ子というのは、すごい力をひめているものです。まあ、マリエルの場合は、とくべつなちびっ子なのですが……）。

ところで、ちよつと説明をつけ加えますと、このいなずまのじゅつは、つえを相手にふりかざして魔法の言葉をとなえれば、使うことができる魔法でした。ですからマリエ

ルがやっていた、魔法をかけるときのダンスのようなかるやかなステップ、これはまったく、必要なかつたのです。ではなぜ、そんなふりつけをつけ加えたのかというところ……、もう、いうまでもないですよ。それはもちろん、その方が自分がかわいく見えるからでした！）。

みんなはそれからしばらく、くねくねとつづくがけの道を進んでいきました。星空は、いつのまにかあらわれはじめた雲に、すっかりおおいかくされてしまっていました。そのため道は暗く、しかもこんながけの道です。足をふみはずしたら、下の森までまっさかさま！ とても危険になりました。そしてこんなときにもまた、マリエルの魔法が、そのいりよくをはつきしたのです。

あかり花のじゅつ。この魔法を使うと、みんなの進む道の前とうしろ、それぞれ十ヤードくらいいきままでに、白くかがやくきれいなお花がいちれつにさいて、そのお花がその光で、進む者たちの足もとを明るくてらしてくるのです（この魔法のお花はみんながいどうすると、それにあわせて、しゅん！ と消えたり、また、ぽん！ とさいたりするので）。まさに今の仲間たちにはうってつけの、すてきな魔法でした（ランプをとすよりもずっと明るく、しかもこれなら両手が使えました）。

でもあかりをとすことには、不安なところもありました。それはやつぱり、ガウバ

ウです。さきほどの戦いのあとから、しばらくはガウバウのほえ声がびたりとやんでいました。今また、そのほえ声がきこえはじめていました。しかもさいしよのときよりも、ずっと大きく、たくさん。マリエルと言葉の通り、ガウバウというけものは、いちどやられても、またふたたび、もつとたくさんの数でおそいかかってくるのです（ほんとうにやつかない相手です。でも……、ガウバウよりもつとおつかないちびつ子たちがふたりもいる、このノランベつどう隊には、あんまりおそいからないう方がいような気がします……）。ここからの道のりは、なおいつそうの注意が必要となってくることでしよう（ロビーにとっては）。

道は白いお花のあかりのおかげで、ずいぶんはかどりました。ですがここにきて、ようやく変わってきたことがあります。道が前よりもはつきりと、せまくなってきました。かべに背中を張りつけなければ進めないようなところさえ、出てきたのです。

「そろそろ、上にのぼった方がいいですね。ここからなら、リズのところまでは、すぐそこですから。」先頭をゆくマリエルがみんなにいいました。馬をおりてからさいしよにマリエルがいった通り、「がけの上へのぼる」というそのことは、もちろんみんなもしようちしていました。でも……。

ロビーとライアンのふたりは、そのがけを見上げました。がけはまっすぐに切り立っていて、ほんとうに、かべそのものといった感じでした。がけの上までは、ゆうに百五

十フィート以上はあるでしょう。いくらなんでも、ここをのぼっていくというのは、そうとうに骨がおれます。そのうえもし落ちたとしたら、まず助かりそうもありません（身がるなライアンならすいすいのぼっていけそうな気もしますが、からだの大きなロビーには、危険が大きすぎるでしょう）。ここからのぼっていくことなんて、やつぱりむりなんじゃないでしょうか？

「のぼるっていつても、ここはむりだよ。むこうの方がゆるやかだし、あっちにした方がいいんじゃない？」

そういつてライアンがゆびさしたさきには、ごつごつとした岩はだのがけがありましたが、そこまではけっこうききよりもありましたし、がけの道もいちだんとせまくなっていました。あちらの方が見るからのぼりやすそうだったのです。この場所からのぼっていくよりは、よっぽどましでしょう（安全にはかえられませんがね）。

ですがライアンもロビーも（わたしも）、ひとつだけなことを忘れていました。マリエルは、まじゆつしなんです。そのかれが「ここからのぼりましょう」というのですから……、そう、またもやここで、魔法がとうじょうするとうわけでした。さあ、こんどはいつたい、どんな魔法なのでしょう？ わくわく。

「へいきだよ、ライスタ。のぼりやすさなんて、まったくかんけいがないから。」

「え？」マリエルの言葉にきよんとするロビーとライアンのことをしりめに、マリエ

ルは両手のひらをおへその前にかざして、ふたたび魔法の言葉をとなえはじめました。

「ふろーと、ふろーた、るー!」

マリエルのその言葉と同時に……、ふいーん! みんなの前に、かすかな音を立ててふわふわと浮かぶ、とうめいな魔法のえんばんがみつ、あらわれたのです!

「さあ、乗ってください。だいじょうぶ、落っこちませんから。」

こ、これは! エリル・シャンディーンで乗った、あのエレベーターのえんばん、あれにそっくりです!

これは、ふわふわえんばんのじゅつ(そのまんまですが)。この魔法を使うと、上に乗つてのぼりおろすことのできる、べんりな魔法のえんばんを作り出すことができるのです。またしても、今の仲間たちには、うってつけですね! 魔法って、ほんとうにべんり!

「さあ、いいですか?」

マリエルが、(こわごわえんばんに乗っている)ロビーと(ほんとうに落ちないのか?)その上でぴよんぴよんとびはねてたしかめている)ライアのふたりにいいました。

「では、手すりにつかまってください。」

手すり? ロビーがそう思ったとき……、ふいーん! えんばんのふちから、えんばんを半分かこむようなかたちで、とうめいな魔法の手すりがあらわれたのです! へ

え、これはいいですね！ これなら、えんばんに乗るのになれていないロビーでも、安心です！（エリル・シャンディーンのエんばんエレベーターにも、手すりをつけてほしかった！）

「らゝ。」

マリエルの言葉と同時に、えんばんが、ふいーん！ 音を立ててのぼっていきましました！（「らい」というのは魔法の言葉で、「上にのぼれ」というような意味です。魔法を使うときにはふつうの言葉とはちがう、とくべつな言葉を使わなければなりませんでした。マリエルが魔法を使うときにも、そのへんてこな言葉を使っていますよね。ちなみに、おるときには「リー」といいました。）これは、気分そうかいです。ふつうだったら、えつちらおつちら。くろうしてのぼっていかなければならないようながけでも、これならすすいすい！ あつというまに百五十フィート以上もあるがけをのぼりきり、その上の道まで、みんなはたどりついてしまいました！（ほんとうにべんりなえんばんですよね。でもこのえんばんにも、けつてんはありました。まずこのえんばんは、上下だつたら三百フィートくらいまでのきよりをいどうすることができましたが、横へのいどうは、せいぜい五フィートくらいまでしか動かせなかつたのです。ですからなめのぼっているがけでは、このえんばんは使えません。こんかいのように、まつすぐに切り立つたがけだからこそ、このえんばんエレベーターが使えたというわけでした。

そのほかにも、「いちどえんばんからおりてしまうと、そのえんばんは消えてしまう」とか、「時間が五分たったら消えてしまう」とか、いろいろなけつてんがありますが、マリエルはそれらのけつてんもすべてりかいした上で、この魔法を使いこなしています。たぶんほかのじょうけんの場合だったら、そのじょうけんにぴったりあう魔法を、マリエルは使ったことでしょう。マリエルはやつぱり、すばらしくゆうしゆうなまじゆつしだったのです。ちよつと、こなまいきなところはありましたけど。」

がけの上は、広い道になっていました。大きな岩がごろごろところがっております。たくさん岩山がここからまだ上へとつづいていましたが、マリエルのいうことには、リズの住んでいるところは岩山の中にひとつだけぼつんとつき出た、小さな岩の広場の上なのだということでした。

ガウバウのほえ声は、していませんでした。がけの下ではずいぶんときこえていましたが、どうやらガウバウたちのいないところに、みんなはのぼってくるのができたようです。

「リズの家は、こつちです。もう、すぐそこですよ。」

マリエルの言葉に、ロビーはほつと胸をなでおろしました。やつと、リズのところにいけるのです。どうやらぶじに、たどりつくことができそうだ。ロビーはそう思いました。

ロビーはやる気持ちをおさえながら、急ぎ足でマリエルのあとにつづきました。横にいるライアンが手を頭のうしろにくみながら、「それにしてもさ、なにも、こんなところに住まなくなつていいじゃんねえ。」とぶーぶーもんくをいいはじめます。

リズのところへは、もうすぐです。

でも……、みんなはこのまま、すんなりとゴールまでいくことはできませんでした（やつぱり……）。

「どうやら、れんちゆうもほんきみたいですよ。」

「え？」とつぜんのマリエルのその言葉に、安心していたロビーも、のんきになっていたライアンも、きよとんとしていいました。

「やつぱりあれだけじゃ、ものたりなかつたみたいですな。」

ま、まさか……！

そのまさか！ マリエルの言葉に、おそろおそろ道のさきをながめたロビーとライアンが、見たものは……！

「え、ええーっ！」

「ごごがががああー！　ぐるがががああー！　ぐががががああー！」

で、出たー！　ガウバウガウバウ、またガウバウ！　それはまわり中をうめつくす、おそろしいガウバウたちの大集団だったのです！（がけの上ではガウバウのほえ声がきこえませんでしたので、もうだいじょうぶかと思っていました）が、それは相手をゆだんさせておびきよせようという、ガウバウたちの作戦だったのです！　なんと頭のいいけものたちなのでしよう！　しかもガウバウたちはみずからのそんざいを相手にさとられないために、わざと心の中をまっ白にして、かんぜんにはいをたつことまでできません！　ガウバウたちがロビーのとくべつな力を知っていたわけではないでしょうが、このためロビーも、かれらのその悪だくみに気がつくことができなかつたのです。ほんとうにおそろしいけものたちです！

がけの上を見ればガウバウ、ふりかえってみればガウバウ、あーもう、書いててうっとうしいくらいにガウバウです！　ノランベつどう隊は、今やすっかり、このガウバウたちにかこまれてしまっていました！　さあ、どうする、ノランベつどう隊！

「ごごは、ぼくにもかつやくさせてもらおうよ、マリーー！」

ライアンが飛び出しました！　さつきは出番がくる前にマリエルに全部いいところを持っていかれてしまいましたので、そのおかえしをしようというのです。

「待つて、ライスタ。相手が多すぎる。ふたりに協力していいこう。」
いわれて、ライアンがふみとどまりました。

「ぼくが前をやる。ライスタはうしろだ。背中あわせでいくぞ。」マリエルがそういつて、ライアンの前に進み出ます。

「のぞむところじゃない！」ライアンが「ふふつ。」と笑つて、マリエルのうしろにつきました。背中と背中をびったりあわせて、前とうしろ、両方からこうげきしようというのです（ふたりばらばらにこうげきするより、この方がすきもなく、敵をいつぺんにこうげきできるというわけでした。さすがマリエルです）。

「ああ、ロビーさん。申しわけないですが、こんかいもロビーさんの出番はありませんよ。」マリエルがつえをかまえていいました。

「ロビー。ちよつとそこで、おとなしく待つててよね！」ライアンが両手を前にかざして、精霊の力を集めながらつづけました（その前にライアンは、すばやくかばんの中から火を起こすための小ばこを取り出して、油のびんの口に火をつけ、それを地面に投げつけていました。ライアンの前には今、小さなほのおのはしらが立ちのぼっていたのです。こ、これつてつまり……？）。

「う、うん！」ロビーは腰の剣をぬいて、すこしはなれたところに立つて、身がまえます（もうかくす必要がありませんでしたので、ガウバウたちのかぎりない悪意に反応し

て、剣はまっ青に光っていました。ロビーはいざとなったらこの剣で戦うつもりでしたが、はたして、この剣の出番はあるのでしょうか？（主人公なのに出番がないというのはちよつときみしい気もしますが、ロビーは、戦いがせんもんの主人公というわけではないのです。読者のみなさんも、ロビーの力はほんらい戦いにむけられるようなものではないということは、もうわかってますよね。ここはいつしよに、ふたりのちびっ子たちの戦いを見守ることにしましょう。まあ、ライアンもほんとうは、戦いがせんもんというわけではないはずですが……）

「うしろは、まかせてだいいじょうぶなんだろうね？　ライスタ。」マリエルが、つえをふりかざしていいました。

「いうまでもないことだよ。ぼくのほんき、見せてあげるよー」ライアンが、「ふふん！」と鼻をならしてこたえました。

どっちも自信まんまん。そしてへらず口。おそらくこのアークランドでも、こんなにも強いちびっ子たちというのも、ほかにいないことでしょう。そのちびっ子たちが、ふたりで協力！　ともにほんきを出して、戦おうとしていたのです。なんてごうかなシチュエーション！　こんな場面は、めつたに見られるようなものではありません。読者のみなさん。みなさんは今まさに、そんなきちようなたいけんをしようとしているのです！

それは、いっしゅんのあいだのできごとでした！

「マリエルの、アドバンスト・まじかるブレイク！　ぴんがる、ぺんがる……」（ステツプー〜二。）

「精霊たちよ！　われのといかけにこたえたまえ！　ラ、イ、アーン……」

ぱりぱりぱりぱり……！　す、すごいエネルギー！

「くろー！」（きめポーズ。）

「ハリケーン！」

ぴかっ！　ごろごろごろごろ！　がっしやあーん！
びゅびゅびゅうううー！　どどどどおーん！

……………。

……………。

……。

それから、しばらくして……。

「(っ)ほっ、(っ)ほっ！」

あたりに立ちこめるまっ白なけむりに、ロビーはたまらず、せきこんでしまいました。岩のくずれるぱらぱらという音が、そこら中にひびいております。いったいなにが起こったのでしょうか？ それすらもロビーには、よくわかりませんでした。

やがてそのけむりの中に、ふたりの人影があらわれました。ふたりとも手を前にかざして、しゃんと立ちつくしていたのです。それはもちろん、われらがライアンとマリエルの、そのふたりのちびっ子たちでした！

「ライアン！ マリエルくん！」

ロビーが思わず、さげびました。

「だいじょうぶ…？」

そのロビーのといかけに、ライアンとマリエルのふたりは「ふう。」と息をついて、そしてしばらくたってからようやくこたえました。

「だいじょうぶって、なんのこと？ やだなあ、ロビー。ぼくを、だれだと思ってるの？」ライアンがあいかわらぬいい方で、自信たっぷりにそういいます。

「すみません、ロビーさん。ちょっとぼくも、ほんきを出してしまいました。はんせいしなくては。」マリエルがペこりと頭を下げて、れいぎ正しくいいました。

そしてロビーは、しだいに晴れてゆくその白いけむりのむこうに、おどろきの光景を見たのです。

さつきまで、まわりにたくさんあったはずの岩たち。それらがすべて、こなごなにくだけて、あたりにばらばらにちらばっていました。がけの岩かべもがらがらとくずれ、あちこちにやけこげたあとがついております。そしてさつきといちばん変わったこと。それはあれほどたくさんいたガウバウたちが、もはや一ぴき残らず、いなくなっているということでした！

ガウバウたちがどうなったのか？ それはもう、おわかりですよ。かれらはこのふたりのちびつ子たちのほんきのパワーの前に、白はたこうさん！ 文字通りしつぽをまいて、「きやいんきやいん！」と一ぴき残らず逃げ出していったのです！（全部で百ぴき以上はいたはずですが、それらが全部逃げ出したのです！ すごい！

このときマリエルが使った魔法は、上位いなずまのじゅつ。その名もサンダー・ドラグーン！ いなずまでできたりゆうが、敵をなぎはらうのです。これはいなずまのじゅ

つをあやつるマリエルの、とっておきの大魔法でした。

そしてライアンが使ったのは風の精霊のたつまきでしたが、その大きさもいりよくも、今までわたしたちが見てきたものよりも、だんちがいのしろものでした。ロザムンディアのまちの門を吹き飛ばした、あのあつとう的なパワー。あのときのパワーよりも、さらにその上をいっていたのです。つまりライアンは、ふたつの精霊の力をあわせるといふ、シープロンドでかたくきんじされているそのわざを、ここでも使ってしまったというわけでした。風と火、そしておまけに土の精霊の力まで、みんなまとめてたつきつけたのです。しかもこんかいは、手かげんする必要ありませんでしたので、全力で！ まさに、ほんきの力！ ライアンはまだまだ、こんなおそろしい力をひめていたんですね。うくん、なんておそろしい……。

ちなみに、ライアンはマリエルに負けじと、このひっさつわざに名まえをつけました。その名もライアン・ハリケーン！ まさしくその名まえの通り。おそろしいわざです。すべてをりかいたしたロビーは、もうぼかーん！ あいた口もふさがりません。もう、すごいとかなんとか、なにもいうことすらできませんでした。

「あ、ああ、そうなんだ。」ロビーはそういつて、「は、は。」とひきつって笑いました。「け、けががなくて、なによりだね。」ロビーはもう、それしかいうことができま

「それにしても、ライスタ、きみも、けっこうやるね。見なおしたよ。」マリエルがライアンに、その声をかけました。

「マリーこそ、やるじゃない。ぼくと同じくらい強いって、みとめるよ。まあ、でも、リア先生にくらべたら、まだまだかな。」ライアンもマリエルにそういつて、かえしてみせました（いい方はすなおじやありませんでしたが、ライアンがこれほどほかの人の強さをみとめるというのは、めったにないことです。それほど、マリエルの力をみとめていました）。

そして、まだその手に（光の消えた）剣をにぎりしめたままで立ちつくすロビーのことをよそに、ふたりのちびっ子たちは、おたがいの右手を頭上にかかげて、ばちん！ハイタッチをしてけんとうをたたえあいました。

「よっしー！」

そよりと吹くつめたい風が、ほほをくすぐっていきました。じこくは、シルフのこくげん。午後の九時をまわったくらいでした。

すこしばかり、雲がふえてきました。その雲の切れまに、星がきらきらとかがやいております。その星の光は、きぼうの光のように思えました。これからはじまる、おそろしい戦い。このアー克兰ドの運命をきめる、さけることのできない戦いが、この星の

光のもとではじまろうとしていたのです。

「すこしくらい、休まれてはどうだ？ からだが持たんぞ。」

うしろから、声がしました。見ると、うす茶色の衣服を着た若い女の人がひとり、こちらへとむかってやってくるどころでした。長く美しい、こがね色のかみ。あんず色の、いんしよ的なひとみ。それはベーカーランドの白の騎兵師団の隊長、ライラ・アシュロイでした（かみをほどこき、よろいも着ていませんでしたので、だいぶいんしようがちがつて見えました。今のかっこうのかのじよを見たかぎりでは、ほんとうに、ふつうの女の子にしか見えません。ちよつと、目つきはするどいですが）。

「お心づかい、かたじけない。もう、もどります。」

そういつてペこりと頭を下げたのは、白の騎兵師団のもうひとりの隊長、ベルグエルクムでした。そう、ここはベーカーランドのふたつのとりでのうちのひとつ、ベゼロインのとりで。その見晴らし台の上だったのです。

ライラはそのまま、ベルグエルクムの横に立って、かなたの地を見つめました。いだいなる、ティーンデインの流れ。その流れのとちゅうとちゅうに、ベーカーランドのくのにの塔やたてものが、見て取れます。大河はやがて、かなたのやみの中へと消えていま

した。そのさきには、もうひとつのとりで、リュインのとりでがあるのです。

「リュインの者たちが、どうしているのか？　気がかりではあるな。」

ライラがいました。

「はい。」

ベルグエルムがこたえます。

ライラには、ベルグエルムの心の中はすべてお見通しのようにでした。リュインの大勢の者たち。ハミールのおとうと、レイミール。リストール・グラントしきかん。かれらが今、どうしているのか？　ここにいる者たちには、なにも知るすべはなかったのです（このベゼロインのとりでからも、ひそかにリュインとりでにていさつ隊をむかわせましたが、リュインとりでの守りはかたく、とりでの中のようすや、とりでの者たちがどうなったのか？　ということまでは、なにも知ることができなかつたのです）。

自分たちのことを敵の目から遠ざけるため、南への道を進んでいった、ハミールとキエリフ、レシリアにルースアン。かれらのことも気がかりでした。

そしてなにより。さいこの旅へと出かけた、ロビーのこと。ベルグエルムの心の中は、今さまざまな思いで、いっぱいだったのです。

「ベルグエルムどの。」ライラがつづけました。「そなたの歩んできた道は、つらく、重いものだったな。だが、そなたがすべて、かかえこまなくてもよいのだぞ。」

「え……」

思いがけないライラの言葉。ベルグエルムはすこしおどろいて、ライラの方を見ました。

ライラはそんなベルグエルムのひとみを見て、おだやかにほほ笑みながらいました。

「しきかんとて、人だ。ひとりですべて、かいけつできるといふものではない。そなたは、がんばりすぎる。ときには、弱音をはいてもいいではないか。」

「ライラどの……」

ベルグエルムが、ふるえる声でいきました。

祖国レドンホールへのめつぼう……。やみにとらわれたムンドベルク王……。かれらレドンホールのはい色ウルファたちは、このベーカーランドにのがれてからも、そのおそろしすぎるじじつにずっと立ちむかってきたのです。とくにベルグエルムは、そのいちばん先頭に立って、ほかのウルファの仲間たちのことをはげましていかなければなりませんでした。そして、白の騎兵師団の隊長という、重いせきにん。しきかんが、兵士の前で弱音をはくことなどできません。でもほんとうは、ベルグエルムの心は、今にも張りさけそうなほどにつらかったのです。

それでも。ベルグエルムはおしつぶされてしまいそうなおそろしい運命の中で、

弱音をかくことなく、りと立ちつづけてきました。そうもとめられてきました。

心のおく底にあふれた、つらい思い。重なりつづけた思い。それらの思いを、ベルグエルムはずっと、胸の中にとじこめつづけてきました。わたしが弱音をはいてなどいられない。かれらをみちびいてゆかなくては。かれらをささえ、はげましてゆかなくては。ベルグエルムはつねに、自分にいきかせてきたのです。それらの思いがあつたからこそ、友のフェリアルにも、ロビーにも、ライアンにも、胸のおく底にしまいこんだ、その心の弱い部分を、見せるわけにはいきませんでした。

「そなたには、たくさん仲間がいる。」ふたたび、ライラがつづけます。「仲間とは、ともにささえあい、はげましあうものだ。自分の弱さをさらけ出し、仲間に助けをもとめることも、また、たいせつなことなのではないか？」

「ライラどの……」ベルグエルムはライラのひとみを見すえながら、こたえました。

「かたじけない……」

ベルグエルムはそういつて、ライラに深々と頭を下げました。ずっと胸のおくにしまいこんでいた思いが、どんどんとこみあげてくるかのようでした。

ほんとうの強さとは、みずからの弱さを知り、それをみとめることなのです。すなおな心で、仲間と助けあうことなのです。

おそろしい、黒の軍勢とのさいごの戦い。

その戦いのはじまる、その前に。ベルグエルムの心は晴れ渡りました。

「仲間のために、われらのできることをやろう。それが、われらのつとめ。もどつてきた者たちのことを、胸を張つて出むかえられるようにな。」ライラが、ベルグエルムの手で手をおいて、いました。

「はい。」ベルグエルムはライラのその手を取つて、力強くそれにこたえました。その胸に、もうなにも、まよいなどはありませんでした。

ロビーどの、わたしは、わたしのつとめを、せいっぱい果たします。どうか、ごぶじで……。

ライアン、マリエル。ロビーどののことを、よろしくたのむぞ。

ベルグエルムは空をあおぎ、はなれた地にいる仲間たちに、そう思いを飛ばしました。「さあ、今は、休まれよ。敵は、いつやってくるとも、知れぬぞ。」

そしてベルグエルムとライラのふたりは、ふたたび、とりでの中へともどつていきま

した。

20、黒の軍勢きたる

魔法……。なんて心のわくわくするひびきなのでしょう。おとぎのくにの人たちではないふつうの人たちの住む世界では、いつの世も、魔法は遠いあこがれのそんざいでした。魔法のつえをばばつとふりかざせば、目の前にあらわれる、たくさんのすばらしいものたち。ゆげを立てるごちそう。大きな大きな、クリームたつぷりのケーキ。キャンデーにチョコレート。ぬいぐるみだって、おもちゃだって、魔法で出せないものはありません(たぶん)。さらに、むかつてくる敵に、「えい!」。魔法の言葉をとなえると、つえのさきから、ごごお! ほのおやいなずまが飛び出して、みんなやつつけてしまう。そんな、まさに夢のような力、それが魔法の力だったのです。

ですが魔法とは、すばらしい力を持っているのと同時に、じつはなんともおそろしい力をも、その内がわにひめているものでした……。

はるかなむかし、この世界に人々が暮らしはじめるその前から、魔法はすでにそんざいしていました。そのじだい、それらの魔法を使っていたのは、生きものの力をこえた、しんぴ的なそんざい。今のアーランドの人たちから、神さまとか、女神さまなどとよばれている、いだいなる者たちでした。そして、やがてこの世界に人々が暮らしはじめ

るようになると、かれらいだいなる者たち（神さまたち）は、このすばらしき力、「魔法」を、人々にさずけたのです。魔法の力をもつて、世界がへいわになることを願いました。しかし人々には、魔法の力を正しく使いこなすことは、できなかつたのです……。

魔法はたしかに、すばらしい力です。正しく使えば、こんなにべんりですてきな力はありません。ですが、魔法の持つもうひとつの力。その力をおさえこむことは、魔法をおぼえたばかりのとうじのアークランドの人々には、まだむりなことでした。そしてそれこそが、魔法の持つ、その内がわにひめられた、おそろしい力にほかならなかつたのです。

光があれば、やみがある……。それらは、ふたつでひとつ。魔法の持つおそろしい力とは、まさに、そのやみの力でした！魔法の持つやみの部分。人々はその力のおそろしさに、気がつきませんでした。魔法のやみをかるくあつかい、そしてそのけっか、人々はその魔法のやみの中から、たいへんなわざわいを生み出してしまったのです。それは、魔物とよばれる、おそろしい力を持ったかいぶつたちでした。

魔法のやみから生まれた、魔物たち……。かれらはどんどんと力をたくわえ、そのおそろしいやみの力で、世界を乗っ取ろうとしました。しかし人々はけっして、かれらにくつすることはなかつたのです。

光の魔法。人々は魔法のやみをおさえられなかったそのきょうくんをもとに、魔法のもうひとつの力、光の力を高めていきましました。それこそが、魔法のやみ、魔物たちにかいたこうする、ただひとつのしゅだんだつたのです。そしていよいよ、人々の光の魔法と、魔物たちのやみの魔法、そのふたつの力が、大げきとつすることになりました（この戦いは「光とやみの魔法大戦」という名で語りつがれ、もはや伝説のものとなっています）。もしこのとき、人々がやぶれていたのなら。今のアーケランドは、今とはまったく違う世界になっていたことでしょう。やみにおおわれた、おそろしい世界になっていたはずです。

ですが、そんなことは、だんじてゆるしません！ 人々は、この大げきとつの戦いに、勝ったのです！

魔物たち、そしてやみの魔法は、人々をみちびいたけんじやたちの力によって、残らずふうじこめられました。こうして、世界はすくわれたのです。すくわれたはずでした。ですが……。

それから、ずっとずっとのちの世……（それでも今から千年近くもむかしのことですが）。おそろしいわざわいは、ふたたび、この世界に放たれてしまったのです。

じやあくな力を持ったひとりの男が、かつてけんじやたちが魔物たちをふうじこめた黒いすいしよの中から、そのわざわざいの力をとき放つてしまいました！ 男の名は、ルドナ・ラクタル。ルドナは、かいほうした魔物たちをしたがえて、たくさんのくにぐにをうばいました。ですがどんなときにも、悪が長つづきするためしなどはなかったのです。それはなぜか？ そんなときには、かならず、悪をほろぼすせいぎの味方があらわれるからでした！（だってあらわれなかつたら、世界はずっと悪の世界のままですものね。）

ひとりのほうろうのルルム種族の冒険家。その冒険家の若者が、黒いすいしよの力のなぞをつきとめ、その力を持って、ルドナをたおしました。そして魔物たちや、やみの魔法、それらもすべて、黒いすいしよとともに、こなごなにうちくだかれることになったのです！ やった！ ようやくこれで、いつけんらくちやくですね！（ところで、ほうろうのルルムときいて、みなさんはぴんときたことかと思えます。そう、はぐくみの森の地下いせきの中で夜のかいぶつにとらわれていた、赤毛のルルムの冒険家、シェイデー・リルリアン。かれもまた、ほうろうのルルムとよばれておりました。じつはじつは、大むかしにルドナをたおし、黒いすいしよをうちくだいたそのせいぎの味方こそ、ほかでもない、かれだったのです……。といたいところでしたけど、どう考えてもねんれいがいしませんよね。シェイデーがじつは、千年も生きている、スーパー

おじいちゃんとかいうのであれば話はべつですけど……。ほんとうはかれは、ルドナをたおしたせいぎの味方、ロランド・リルリアンのしそんでした。へえ！　すごい！　そしてシェイディーもまた、冒険家。ロランドのその血を、しっかりと受けついでいたのです。）

ところがところが。これでもまだ、すべてが終わったというわけではありませんでした（うーん、しつこい）。

うちくだかれた黒いすいしよう。それとともにふうじられたはずの、やみの魔法。その力がかんぜんに消え去ってしまう前に、ほんのわずかだけ、その力を手にしてしまつたものがありました。こんどはだれ？　また、じゃあくな男？　それとも、魔女かなにかでしょうか？　いいえ、ちがいました。それはなんとも、いがないものだったので。

夕方五時、黒ユピユピのこくげん。黒ユピユピというふわふわした生きものが自分のすあなにもどるのが、夕方の五時ころだったので、この名まえがついたわけですが、なぜ今、そんな話をしたのかという……、じつはこの黒ユピユピという生きものこそが、そのおそろしいやみの魔法の力を手にいれてしまった、ちようほんにんだつたからでした！

黒いすいしようがうちくだかれた、そのとき。その場所にたまたま、一ぴきの黒ユピユピがいたのです。そして黒いすいしようからわずかにこぼれ出たやみの魔法のエネルギーを、その黒ユピユピが食べてしまいました！（この生きものはしぜんの中のさまざまなエネルギーを食べて、えいようにしてしまうのです。）

ほんらいならば、空気の中にすぐに消えてしまうはずだった、やみの魔法のエネルギー。それがこうして、黒ユピユピのからだの中にとどまってしまいました。そして悪いことに、それはいつまでも消えることなく、ユピユピのその子どもやしそんにいたるまで、えんえんと受けつがれていつてしまったのです（やみのエネルギーそのものは、ユピユピのからだに危害を加えるようなものではありません。ちよつと、ほかのユピユピより目つきが悪くなって、かわいくなくなってしまうすけど）。

そしてあるとき。

ついにそのやみの魔法の力のそんざいを、見つけてしまった者があらわれました。

その者の名は、アーザス・レンルー。

そう、そのかれこそが。今このアーランド世界のへいわをおびやかすつづけてい
る、おそるべきやみの魔法使い、アーザスだったのです……！

やみの魔法の力を手にいれた、アーザス。そのおそろしきは、みなさんもすでにごぞんじの通りです。ほんらいならば、はるかなむかしにとづくに失われていたはずの、おそろしい力。その力を手にしたおそろしい魔法使いに、人々は、ロビーは、どう立ちむかうのでしょうか？

すべての運命は、こくいつこくと、人々のもとに近づいてきています。

そして、ロビーの運命は……？

おそろしいやみの力が、ロビーにせまろうとしています。

ふいいん！ ふおん！

みんなが地面におり立つと、魔法のえんばんエレベーターが小さな音を立てて、消え去りました。

「やーつとついたよ、まったく。」地面に立つなり、ライアンがさつそくもんくをいいます。そう、みんなはついに、リズの住んでいるそのおうちがある小高い岩山の上まで、やってきたところでした（この岩山もまつすぐながけの上にありますので、ここでもやつぱり、マリエルのえんばんエレベーターがやくに立ったというわけでした。

ところで、こんながけの上へ、いったいリズはどうやってのぼっているのでしょうか？

こたえはたんじゆん。リズはこんながけのひとつやふたつ、なんのその。しゆたつしゆたつとジャンプをくりかえして、さきつとのぼっていつてしまうのです。うくん、さすがはシルフィア種族。精霊のパワーって、すごいですね。

そこはたいらな岩の地面で、はしからはしまでが二十ヤードほどしかない、まるい広場でした。植物はほとんど生えていなくて、わずかに、ぐるぐるヒースのしげみがいくつかと、岩のさけ目にかんばって生えている、いっぽんのよれよれの木があるだけです（きつとどこからか、たねが飛んできたのでしょうか。こんなところに生えているなんて、えらい木ですね）。そしてその広場のおくに、ほとんどくずれかかった石づくりの家がいつけん、たつていました。どうやらこれが、めざすリズの住んでいるという、おうちのようです（家というより、ほとんどものおきといった感じですが。それもセイレン大橋の下のカピバラ老人の小屋と同じくらい、ぼろぼろな感じでした。ちよつと、カピバラ老人には失礼ですが……）。

ちなみに、この家はむかし銀をほるためにここではたらいっていた人たちが、きゆうけいを取るために使っていたものでした。リズはうちすてられていたこの家を、自分の家としてさいりようしていたのです。しかもほとんど、リフォームしないままで！ だらこんなにぼろぼろなんです）。

みんなはその家にむかって歩いていきましたが、ひとつ、おかしなことに気がつきま

した。それは家にまったく、あかりや火の気がないということでした。こんなきせつの夜ですもの、だんろに火がはいっていなくては、寒くてたまらないはずです。な、なんだかとおつても、いやなよかんが……。

「ねえ、マリエルくん。かくにんなんだけど、ぼくたちがくるってこと、リズさんは、ちゃんと知ってるってことで、よかったんだよね？」ロビーがマリエルにたずねました（もちろんロビーも、リズにきちんとれんらくがつけてあるということについては、マリエルからちゃんと説明を受けていたのです）。

「はい。もちろん、ぼくたちがリズのところへいくということとは、きのうのうちにも、前もって魔法の手紙を送っておきましたし、リズほんにんがきちんとその手紙を受け取ったということも、魔法でかくにんしています。それに、さきほどロビーさんたちがやってくるすこし前にも、もういちど、かくにんの手紙を送っておきましたし、それもきちんとリズが受け取ったということも、かくにんしています。リズには、ちゃんと、自分の家でぼくたちのことを待っているようにと、手紙の中で、しっかりと、しじを出しておきましたから。」マリエルがこたえます（そのマリエルの計算されつくしたけいかくのことについては、すでにみなさんにもお伝えしましたよね。あの頭の痛くなるような、こまかいけいかくのことです。しかもマリエルは、ねんにはねんをいれて、ロビーたちのくるその前に、こんどはかくにんの手紙まで送っていました。まったくぬかりが

ありません。

ところで、マリエルの言葉にもあるように、リズのもとに送ったこの手紙は、マリエルの魔法による魔法の手紙でした。ちようちよおたよりのじゆつ。これが、マリエルの使ったその魔法です。この魔法を手紙のはいつたふうとうにかけると、そのふうとうがひらひらと、ちようのようなにまい上がって、あてさきの住所まで飛んでいきましました。この手紙は魔法で守られておりましたので、雨風や、たいていのしょうがい加わつても、なんなくあてさきまでとどけることができました。そのうえじつさいには、ちようとうよりも、でんれいの鳥のごとく、すばやくあてさきまで飛んでいくことができました。

そしてこの手紙を送りさきの相手ほんにんが受け取ると、ちやんとマリエルのところに、それが伝わるようになっていました。ですからマリエルは、リズほんにんが手紙をしつかりと受け取ったということを、知ることができていたのです。まったくぬかりがありませんね。

また、この魔法で送った手紙は、とどける相手がるすだった場合でも、そのことをマリエルのところにしらせるようになっていました。この手紙はゆうびん受けの中にはいつたあと、大きなメロデーをかなでて、「魔法の手紙がきましたよ」ということを相手にしらせるというものでしたが、しばらくたつてもほんにんの受け取りがない場合に

は、相手がるすなのだとはんだんして、そのことをマリエルにしらせるようになっていたのです。もしリズがるすだったなら、またべつの方法で、全力でリズのいばしよをさぐることになっていたでしょうけど……。

ちなみに、エリル・シャンデーアのゆうびんかもめでも、とどけさきにサインをもらって、きちんととどいたかどうか？　かくにんすることができましたが、ゆうびんかもめがとどけられるのは、安全な場所にかぎられました。リズの住んでいるこのあたりは、地上のガウバウだけでなく、空にもおそろしいかいぶつたちが住んでいて、かもめがゆうびんをとどけることができなかつたのです。そのかいぶつは大きなつばさを持った、とかげに似たギルデイというかいぶつで、ワットのデルバグよりはましでしたが、それでもおそろしいかいぶつであることにちがいはありませんでした。ゆうびんかもめなんかのがのんきに飛んでいたら、たちまちおそわれてしまうことでしょう。ですからマリエルは、もっともしんらいのおける自分の魔法を使って、リズに手紙をとどけたというわけだったのです。

ですが……。

口ではロビーに「心配ない」といったようすをよそおってはいましたが、あかりのもっていない、そのまっくらな家を見て、じつはマリエルも、ここにきて、とつてもいやなよかんがしてきていました……。自分の計算の、なにかがまちがってきているのか

?と(そのれいせいな顔にも、あせが!)。

「なんかこれ、まずいパターンじゃない?」ライアンも同じく、いやなよかんがしてきたようです。

「ね、寝てるんだよ、きつと。げんかんをノックすれば、起きてくれると思うよ。」ロビーがあわてて、マリエルとライアンにいました。でもやっぱり、ライアンのいう通り、なんだかまずい感じです。

そしてそのまずい感じは、げんかんの前にまつさきにたどりついたマリエルの反応によつて、はつきりとしたものに変わってしまいました……。

「ああつ! これ、ぼくの出した手紙!」

マリエルがさげびました。そしてマリエルのいう通り、げんかんのわきのゆうびん受けの上に、マリエルの送った手紙のふうとうがひとつ、「あけられもせずに」、そのままおいてあつたのです……。がーん!

「読んでないね。」ライアンがいました。

「よ、読もうとしてたけど、そのまますごく眠くなつて、手紙をおいたまま、中にはいつて寝ちやつたのかも……」ロビーが素晴らしいです。ですが……。

ふつうに考えたら、ほんにんがまだ家の中にいるのであれば、ちゃんと受け取った手紙をこんなふうにとにおきっぱなしにしておくことなんて、あるはずありません（いくら眠かったとしても）。あとで読むにしても、とにかく家の中には、しまっておくでしょう。ということとは……？

リズが今、この家の中にいるというかのうせいは、きわめてひどいということでした……。手紙をおいたまま、どこかへ出かけていったと考えて、まずまちがいないでしょう。ですからこれは、まずーいパターンなのです（マリエルもそのことに、すぐに気がついたというわけでした）。

ところで、ゆうびん受けの上にあつたこの手紙は、マリエルがさきほど、ロビーたちがエリル・シヤンデーンにくるすこし前に送った、そのかくにんのための手紙の方でした。ベルグエルクムの送ったゆうびんかもめの手紙によって、ロビーたちがあと一時間ほどでもどるということを知り、急ぎマリエルは、リズにこのかくにんの手紙を送ったというわけなのです。この手紙はたしかに、リズは受け取りました。それは魔法でも、かくにんできたことでしたから。ですがマリエルは、リズのそのいいかげんなせいかくに、ここですつかりやられてしまったのです。

リズは受け取ったこの手紙を、「受け取った」というだけで、「あけて読んで」はいませんでした！　じつは魔法でかくにんできるのは、手紙を受け取ったということだけな

のであって、それをあけて読んだかどうか？　ということまでは、知ることはできなかったのです（この魔法の手紙はとてもむずかしい魔法で、相手さきに手紙をとどけるだけでも、たいへんな魔法の力を使用したのです。そして相手がその手紙を手にすると、まじゆつしのところにそれをしらせたくえで、すべての魔法の力は消えてしまいました。ですから、相手がそのあとでその手紙を読んだかどうか？　というところまでは、さすがに知ることはできなかったのです。やはり魔法とは、すべてばんのうではありませんでしたから）。

ですが、ふつう人から手紙を受け取ったのなら、あけて読みますよね？（ダイレクトメールじゃあるまいし。）ましてやそれが、エリル・シャンティンから送られた、きんきゆうの魔法の手紙であるのなら、なおさらです。そんな、いたってふつうのことが、リズには通じなかったというわけでした……。これではさすがのマリエルでも、よそくができなくてとうぜんでしょう。な、なんていいかげんな人なんだ、リズって……）。

「リズのやつ！　ぼくの魔法の手紙は、いつもだいたいなじんだからって、いつもあるのに！　まったく、なんていいかげんなやつなんだ！」マリエルはもう、かんかんです（きちんとしてたりろんで計算されつくした行動を取るマリエルでしたから、その気持もたしかにわかりますね）。

「と、とにかくさ。家の中に、はいつてみようよ。ほんとに寝てるのかもしれないし。」

ロビーが、ぶんぶん怒っているマリエルをなだめて、いいました（そういうロビーでしたが、「ほんとに寝てるだけ、なんて、まずないだろうなあ」と心の中で思っていました）。「まあ、なんとかなるよ。」ライアンも、マリエルの肩をたたいていいました。

とん、とん、とん！

げんかんのとびらをノックしてみますが、やつぱりおうとうがありません。ためしにとびらをおしてみると……、あきます！ かぎもかけずに、なんて不用心なのでしょう！（といっても、こんなところにくるどろぼうもないでしょうけど。ガウバウやギルデイくらいのものでしょうか。っていうか、どろぼうよりもそっちの方が、ぜんぜんこわいんですけど……）

家の中は、まっくらでした。マリエルがつえをかざすと、そのつえのさきが、ぱあつと光って、家の中をてらします（これはそのまま、あかりのじゆつ。きほん的な魔法のひとつです）。

家の中は、さいていげんの家具がそろっているだけでした。おくにだんろがひとつあって、その横にだいどころがあります。テーブルにいます、そしてベッドがひとつ。ベッドには茶色いもうふが、しわくちやのまま乗っていました。そして……、ロビーの

はかないきたいもむなしく、そこにはやつぱり、リズはいなかったのです……（そしてかれらは、家にはいつてすぐに、げんかんのわきでしようげきのものをふたたび目にしてしまいました。そこには、マリエルがきのう送った「一通目の手紙」が、「あけられもせずに」、そのままおいてあったのです……。がーん！

これはつまり、リズが手紙を受け取ったけれど、げんかんのわきにそのままほつたらかしにしておいたということであらわすものでした。つまりリズには、「マリエルたちがここにやつてくるということ」、そして「マリエルたちにシルフィアである自分の力が必要なのだということ」、そのどちらも、伝わってはいなかったのです！ もういちど、がーん！

そして……、それを知ったマリエルは、ここにきて、ようやく、リズのことについてはつきりと学ぶことができました。

リズには、きんきゆうの手紙は出してはいけない！。

家の中にも、ひよつとしてトイレ？　と思つて家のまわりもさがしましたが、どこにもリズはいませんでした。せつかくはるる、おそろしいガウバウたちと戦つてまで、やつてきたのだというのに！　いったいリズは、どこにいつてしまったのでしょうか？（ほんとにもう！）

「申しわけありません、ロビーさん……。これは、かんぜんに、ぼくのミスです。リズ

のいいかげんさを、すべて計算にいれていませんでした……」マリエルはそういつて、頭をぺこぺこ下げて、ロビーにあやまりました。

「そんな。マリエルくん、きみのせいじゃないよ。」ロビーがあわててとりつくろいませす（わたしもほんとうに、マリエルにどうしようしてしまいます。せつかく、あんなにも計算されつくしたけいかくを用意して、それにもとづいた行動を取っておりましたのに……、こんなにもあつさりど、それをだいなしにされてしまいましたから……）。

「それよりさ、リズさんがどこにいったのか？ そつちをなんとかしないとね。」ライアンがいいました。いないものはしょうがない。ものごとを前むきに考える、ライアンらしい言葉でした。

「ぼくが、さつき二通目の手紙を送ったときには、リズはまだ、ここにいたわけです。ですから、それから計算しても、いくらシルフィアの足であるとしても、歩いて数時間くらいでは、そんなに遠くまでは出かけられないはず。となると、だいたい、けんとうがついてくる。」マリエルがあごをなでながら、そういいます。こちらはなんともマリエルらしい、りろんにもとづいた言葉でした（ちなみに、精霊の種族であるシルフィアなら、岩場も荒れ地もなんのその。しゆたつしゆたつとはねるようにすばやく進んでいくことができました。マリエルはそのことも、ちゃんと計算にいれていたというわけなのです）。

「心あたりがあるの？」ロビーがたずねます。

「はい。」マリエルがこたえました。

「リズがよく出かける場所が、ひとつあります。ぼくもいったことがあります。曲を作るのに、気持ちがおちつくとか。たぶん、そこだと思えますが、もつとはつきりと、ぼくの魔法で、リズのいる場所をせいかくにしらべてみましょう。」

へえ、魔法でそんなことまでできるんですか！ さすがマリエル。たよりになるなあ（こんかいのこんなトラブルなんて、マリエルならすぐに取りもどしてしまおうでしょうね）。

「みるみるこんぱすのじゆつを使います。この魔法には、さがす人物のにおいのする、小さめの品物が必要なんです。なにか、いいものはないかな？ すいませんが、ロビーさんとライスタも、ちよつと、さがしてもらえますか？ タオルとか、ハンカチとか、シャツとかがあれば……」

思いもかけず、さがしものはじまってしまいました。このみるみるこんぱすのじゆつという魔法は、魔法のわんちゃん飛び出して、その鼻でさがす人物のにおいをかぎつけて、なんマイルもさきまでいばしよをさぐることできたのです。そのために、さがす人物のにおいのする品物が、必要だったというわけでした（品物をかた手に全部しつかりと乗せる必要がありましたので、小さめの品物でなければなりません）。

すぐに見つかるもうふでは、大きすぎて手に全部乗らないから、だめだったのです。

ところで……、こんなにべんりな魔法があるのなら、それではじめから、リズのいばしよをかくにんしておけばよかったんじゃない？　と思われる方もいるかと思いますが、じつはマリエルはその通り、この魔法でリズのいばしよを、はじめにきちんとかくにんしていました。そしてリズがたしかに自分の家にいるということをつたはかめると、それから魔法の手紙を、リズのところへと送ったというわけだったのです。この二段がまえなら、ふつうは、まちがいの起こりようもないでしょう。

そして数時間前、二通目の手紙を送ったときにも、マリエルはこの魔法でリズがちゃんと自分の家にいるということをつたはかかきんしてしまいました。ですからマリエルも安心して、リズのところへとむかうことにしたのです。ですが……。

まさかその数時間のあいだに、リズがかってに、どこかへ出かけていってしまおうとは！　（しかもそもそも、自分が送った魔法の手紙すら読んでいないとは！）さすがのマリエルでも、とてもよそくのできないことでした。

こんかいのこのできごとは、まったくもって、マリエルのよそうをはるかにこえてしまっていたできごとだったのです。まさかマリエルも、このみるみるこんぱすのじゆつをここでふたたび使って、リズのいばしよをもういちどかくにんすることになろうなどとは、思ってもいせんでした。かわいそうなマリエルくん……）。

「それにしても……」家の中をさがしはじめたマリエルでしたが……。

「なんてきたないんだ、まったく！ よく、こんなところに住んでいられるな。」

マリエルのいう通り、まだ説明していませんでしたが、家の中はかなりのちらかりようだったのです。テーブルにはチーズやハムの食べかけとか、お菓子のつつみとか、食器などがそのままでしたし、床にも、本やがくふや、がつきを手いれする道具などが、あちこちにちらばっていました（これじゃ、手いれをする道具に手いれが必要ですね。でも、いくらちらかっているとはいえ、カルモトの家ほどではありませんでしたが。あれは、ちらかりすぎですから）。

その中でも、マリエルがあきれてしまったものがひとつ、ありました。それは、剣です。剣じゆつしなんやくだったリズなわけですが、その自分の剣を、床の上にほつたらかしにしてあったのです！ それも、ほこりをかぶって！（しかもこの剣は、剣じゆつしなんやくになったそのおいわいにアルマーク王からおくられた、とてもきちょうでねだんでした。剣を作る名人、ロゼツティ・ガルブレイドの作った、とてもきちょうでねだんの張る剣だったのです。剣を学ぶ者ならば、だれでもよだれが出るほどにほしがる、名品でした。それをこんなところに、ほつたらかしにしておくなんて！ うくん、さすがリズ、といったら、ほめ言葉になっていないような気がします、やつぱりすごい人です。）
そんな中、ロビーはベッドのまわりをさがしていましたが、そこでとんでもないもの

を見つけてしまいました。それは……。

ベッドの下に、リズの服などがおしこめられていました（これはべつに、とんでもないものじゃありません）。これならリズさんのおいがするから、ちようどいいかな、と思つて、ロビーがそれをひっぱり出すと……、その服のあいだから、小さなまるまった、ぬののようなものがひとつ出てきたのです。なんだろう？　と思つて、ロビーがそれを広げてみると……。

「ええーっ！」

「ど、どうしたの？　ロビー。」「どうしたんですか？」

ロビーのさげび声に、ふたりのちびっ子たちもびっくりして、ロビーにたずねました。「い、いや、ごめん。なんでもないよ。ちよつと、とかげがいたものだから、びっくりしちやつて……」あわててロビーが、手に持っているものをうしろにかくしながら、いわけします。

「えつ、とかげがいるの？　やだなあ、ぼく、そういうの、きらいなんだから。」ライアンがそういつて、まただどころのあたりをさがしはじめました。マリエルも、テールブルのまわりのごみをさがさどどかしながら、さがしものにもどります。どうやら、

ごまかせたようです。

ロビーは「ふう。」と息をついて、うしろをむいて、もういちど手にしたものをこつそりとかくにんしてみました。やっぱり、まちがいありません。

それは……、若い女の人間の、下着だったのです！（ほんとに、ええーっ！）

リズはこの家に、ひとりで暮らしています。ベッドもひとつしかありませんし、ほかに女の人がいるようなけいもありません。ひろってあずかつてる？ たまたま女の人の友だちがお茶を飲みにきて、おいていった？ それらもくるしい説です。なによ、自分の男物の服やズボンなどといっしょに、まとめておいてありましたから。

ということとは……、これは、リズのこじんな持ちものなのだという……、つ、つまりそれ……、どういふこと？（しゅ、しゅみ？ いやっ、なんでもありません！）

「ま、まさか……、いや、でも……、ど、どうしよ……」

ロビーはすっかり、あたふたしてしまいました。それもそのはずです。伝説とまでいわれた、失われしシルフィア種族。精霊王のトンネルをあげられる、大いなる力を持っているという、そのりっぱな人物の家から、まさかこんなもの（女の人の下着）が飛び

出すとは……、夢にも思っていないませんでしたもの！

とりあえず、マリエルくんにはだまっておこう……。ロビーのけつろんでした。マリエルはリズと親しいあいだがらのようでしたから、こんな、リズの知られざるひみつをしらせるわけにはいきません（リズのめいよのためにも）。ロビーは思わず、その下着をベッドのマットの下におしこんで、かくしました。

「いいものがあつたよ。」ライアンがいました。

「ほら、これ、リズさんの使ってるバスタオルでしょ？ 使ってから、まだ、あらつてないみたいだし、これなら、においも残ってるんじゃない？」

「うん、それならいいね。」マリエルがタオルを受け取って、それを左手の手のひらの上に乗せました。そして右手を、それにかざして……。

「みるみるこんぱす。さーてく、さーてた、くー。」

魔法の言葉をとなえると、「きゃん！」タオルの上に、まっ白な毛なみの魔法の子犬が、なき声とともに、ぴよこんと飛び出したのです！ なんてかわいい！ そして、「くんくんくん！」その子犬がタオルのおいを、くんくんかぎはじめました。かわいい！

すると、その子犬がとげんすつくと立ち上がって、「あつちにいるよ。ここから八マイル。」東の方をゆびさしながら、なんともかわいらしい子どもの声で、しゃべってしらせただけです！

「ふええ……」と感心しているロビーとライアンのことをしりめに、マリエルはやつぱりといった顔をして、あごをなでながらいいました。

「思った通りです。リズは今、ラググリーンたちの里にいますね。」

「ラググリーン？」ロビーとライアンが、そろつてたずねます。

「ラググリーンは、ここからさらに東の山の上に住んでいる、ねこの種族の者たちです。アップルキントとよばれるかれらの里から、ほとんどそとに出ることもないので、知っている人もすくないのですが。リズはかれらと仲がよくて、ちよくちよく、かれらの里に、あそびにいつているんですよ。」

アップルキントのラググリーン。マリエルのいう通り、その名まえを知っている者は、このアークランドでもほとんどいないことでしょう（ロビーとライアンも知らなかったのです）。ラググリーンたちはすわりとほそいしなやかなからだを持つていて、とつてもはやく走ることができましたし、また、とくいのジャンプ力は、かえるの種族のフログルたちと同じくらいすごいものでした（さすが、ねこの種族です）。動くものと、おひさまと、おひるねが大好き。そして、どうがんばっても「な、ぬ、の」の発音ができずに、「にや、にゆ、によ」となってしまうのです（さすが、ねこの種族です）。

ですがラググリーンたちのことを説明するうえで、それらのことよりもなによりも、もつともだいいじなことがひとつありました。それは……、かれらのその背中に、大きな

羽がついているということだったのです！

「空飛ぶ」ねこの種族。それがラググリーンたちでした！

いったいどうして、かれらが羽を持つているのか？ それはだれにもわからないことでした。ラググリーンたちにさえわからなかったのです（もつとも、知ろうともしてはいようでしたが）。ラググリーンたちは、こまかいことは気にしません（けっして、こまかいことじゃないような氣もしますが……）。氣がついたときには、もう羽がついていたのです。

ただいえることは、かれらがこの羽を受けいれ、楽しんで使っているということでした。ふわふわ飛んだり、追いかけっこをしたり。かれらは日々のせいかつを、ただのんびりと、おだやかにすごしていたのです。そのおだやかなラググリーンたちの住んでいる、らくえんのような場所、それがアツプルキントとよばれる、かれらの里でした。そしてリズは今、そこにいるということです。

でも……、これからすぐにそこへいくというのは、やはりとてもむりなことでした。そのいちばんのりゆうは、みんなのからだのじょうたいのこと。マリエルはともかく、ロビーとライアンが今日いちにち、どんな旅をしてきたのか？ 思いかえしてみてください。ペーカーランドへむかうむかしの街道のとちゆうで野宿をといてからというもの、ずっと走り通し。やみの精霊の谷をぬけ、ショートカットにせいこうしましたが、そ

れからすぐに、ベーカールランドでアルマーク王に会って、重大なじじつをたくさんきいて、そしてそのあと、おふるにもはいれず、ごはんを食べるひまもなく、すぐにこのリズの家へとむかつて出発したのです（前の日もこれと同じくらい、たいへんないちにちでした。それが二日もつづいたわけです）。しかも、おそろしいガウバウたちとも戦いました。いくらふたりとも、げんきな若者であるとはいえ、これでくたくたにならないはずありません。時間がなによりもたいせつな旅でしたが、むりをしすぎてからだをこわしてしまつては、なんにもなりませんもの。

こうして、ここにふたたび、たいへんないちにちが終わったのです（ロビーがかなしみの森のほらあなを出発してからというもの、ほんとうに、いちにちいちにちが長く感じられますね）。みんなはこのまま、リズの家にとまらせてもらうことにしました（もともとマリエルは、今日すぐに精霊王のトンネルまでいくなんてことは、むりだとわかつておりましたので、さいしよからリズの家にとまらせてもらうよていでした。さいしよにむかうよていだったトンネルにいくためには、まずけわしい山道を歩いていかななくてはならなかつたため、これ以上進むのは体力的にもむりだと、マリエルははんだんしていたのです。

そして道のりがへんこうされ、アップルキントへとむかうことになったわけですが、その道のりもまた、今すぐむかうのには、体力的にも安全のうえからでも、むりがある

とマリエルははんだんしました。そのため、やはりさいしよのよてい通り、リズの家にこのままとまることにしたというわけなのです（もつとも、よていとちがうのは、家の主人がいないということでした……。）。

ちなみに、マリエルは、リズがアップルキントにいくときには、なんにちもそこにゆつくりたいざいするということを、知っておりましたし、そのしゆうかんを急に変えるようなことは、リズのいいかげんさをじっくりねんりに考えにいれたうえでも、ないだろうとはんだんしました（または、なにかとくべつなりゆうでもあつて、アップルキントをすぐに出発してしまうようなことも、かくりつ計算からいつてないだろうとはんだんしました）。そのため、リズがこのあとすぐに、またどこかほかのところへいつてしまふのではないかと、という心配は、考えにいれなくてよいとはんだんしたのです。それにマリエルは、あしたの朝になつたらもういちど、みるみるこんぱすのじゆつを使って、リズのいばしよをかくにんするつもりでした。そしてさきにいつてしまいますが、マリエルはじつさいによく朝、リズがきちんとアップルキントにいるということを、しつかかりたしかめたのです。ですからあとはそのまま、大急ぎで、アップルキントまでいけばいいわけでした。とりあえずは、よかつた）。

ごおお！

マリエルがほのおのじゅつを使って、だんろに火を起こします。そのあとライアンが、火の精霊の力をかりて、その火をあつというまに大きなものに変えてくれました。

部屋があたたまり、(ねんがんの) 食事がすむと、ロビーとライアンはたちまち眠くなつてしまいました。そしてリズのベッドはあつというまにライアンに取られてしまいましたので、ロビーとマリエルは、それぞれ床の上にもうふをしいて、寝ることにしました(マリエルだけは、その前にリズの家のおふろをかりてはいり、かみもばつちりシャンプーしていましたが。ロビーとライアンはとにかく眠くて、おふろにはいる気にもなれなかつたのです。カーテンの影から「のぞくなよ。」とマリエルが顔だけを出していつて、ライアンが「だれが!」とどなりました。

ちなみに、ライアンとロビーはそのままの服そうでしたが、マリエルはパジャマじゃないと寝られないらしく、自分のかばんから、ぴしっ! とのりのきいた新しいパジャマを取り出しましたが、そのかばんの中を見てびっくり! きれいにおりたたまれた、服やズボンや、くつした、下着などが、びっしりつめられていたのです(まるで、ひとつきまるまる、海外旅行にでもいくときみたいに!)。けっぺきなマリエルは、いちにち二回は服を取りかえないと気持ちが悪いらしく、旅のときにはいつも、かばんにいつもの着がえを持つていきました。「なにそれ! 服、多すぎだよ!」ライアンがい었지만、「ライスタのかばんこそ! お菓子しかはいってないじゃんか!」マリエルがいつ

てかえしました。

横になったロビーとライアンは、すぐに、すーすー（ロビー）、ぐーがー（ライアン）と寝息を立てて、眠りに落ちてしまいました。マリエルはしばらく、「ひみつにつき」とだめいめいについたにつきちようを取り出して、なにやらいっしょうけんめい書きこんでいましたが（ちよつと読んでみたいですね）、やがて横になり、今日のこと、あしたのこと、いろいろ考えごとをしているうちに、こちらも、くーくーと、眠りに落ちていったのです（そして家のまわりには、ふうせんふくろうのじゅつという魔法で出した見張りのふくろうたちが、寝ずの番をしていたのです。このふうせんのできたふくろうたちは、危険を感じると、ぱん！ 大きな音を立てて、われてしらせてくれました。これなら安心ですね。前の日のときには、寝ずの番をしていてははずだったフログルたちが、朝起きたら、そろってぐーぐー、寝ておりましたから……）。

あしたはまた、たいへんないちにちがはじまるのです。いろいろと不安なことは多いですが、仲間たちは、今はただ、あしたにそなえて眠りました。

そしてその夜……。おそれていたことが、とうとう起こったのです。

風が吹きはじめました。じこくは、夜きのこのこくげん。ま夜中の三時ごろです（こ

れは、夜きのことよばれる足のある大きなきのこが、森をうろうろと歩きまわるじこくでした。こ、こわい……。ほんらいならば、だれもがベッドにもぐって夢を見ている、そんなじこく。おそろしい悪夢のようなできごととは、今まさに、ほんとうのこととしてやつてきました。

遠く、ティーンデイーンの流れのむこう。その山のふもとのあたりに、ちらちらと光るものがあらわれはじめました。そしてそれと同時に、さつきまでまつ黒なやみしかなかったその場所が、ぼんやりゆらゆらとゆれ動きはじめたのです。そのゆらめきは、やがてはつきりしたものとなりました。やみが、動いていたのです！ それも、たくさん！

見張りの兵士たちにとって、そのしよたいを知ることはかんたんなことでした。できればこの目で見ることがしたくはなかった、その動くもののようにたい。できれば起こつてほしくはなかった、このおそろしいげんじつ……。

やみの中に動くもの。それはまさしく、ワツトの黒の軍勢、その悪の軍勢の者たちのすがたにほかならなかつたのです（そしてちらちらと光るもの、それは黒の軍勢の兵士たちの持つている、たいまつのはのおのあかりでした）。

ここは、ベゼロインのとりで。

ついにこのベゼロインとりでへとむかつて、黒の軍勢の本軍がせめこんできました！

(しかも、こんなにも早く！)

かん！　かん！　かん！　かん！

「敵がきたぞ！　敵がきたぞ！」

とりでの中に、見張りの兵士たちのさけぶ声と、敵のしゅうらいをしらせるかねの音がひびき渡りました。それらはすぐに、休んでいる仲間たちのもとへと伝わります。まっさきに飛び起きたのは、われらが白の騎兵師団のベルグエルムとフェリアル、そしてライラでした。ベルグエルムはすぐに剣をにぎりしめると、そのままとりでの見晴らし台へとつづくかいだんを、かけのぼっていききました。

黒の軍勢がおそるべき早さでこちらへとむかってくる、そのようすが見えました。その数は、ざっと見つもつても、数千！　まだだいぶ遠いですが、すぐにここまでやってくることでしょう。

「きたようだな。」

そういつてうしろからやってきたのは、ライラでした。となりに、エリル・シャンデーインのきゆうていまじゅつし長、ルクエル・フォートもいつしよです(マリエルいがいの三人のきゆうていまじゅつしたちも、この戦いのためにベゼロインにはいつて

いたのです)。ちよつとおくれて、すぐにフェリアルと、残るふたりのまじゆつしたち、マレイン・クレイネルとロクヒュー・テオストライクのふたりもやってきました。

「おうおう、これまたずいぶんと、集まりよつたわい。」せまりくる軍勢をながめながら、ルクエールがいました。

「あの三人の魔女たちも、いつしよでしょう。こんどこそ、かりをかえしてやらなければなりません。」ルクエールのとなりによつてきたマレインが、めがねをくいつとなおしながらつづけました(三人の魔女たちって?)。

「女だからと、ようしやはしない。このこぶしのいちげきを、がつんとくらわしてやる!」ロクヒューがこぶしをぐぐつとにぎりしめながら、怒りもあらわにいい放ちます(いや、こぶしじゃなくて、魔法の力をぶつけてほしいのですが……)。

「こちらも、じゅんぴはとのつている。かえりうちにしてくれよう。ルクエールどの、よろしくたのむ。」ライラがルクエールにいました。

「うむ、心得た。」

ライラの言葉を受けて、ルクエールがそういつて、ふたりの若いまじゆつしたちのこを見ます。ふたりのまじゆつしたちは、だまつてうなずいて、それにこたえました。

そしてルクエールをまん中に、すこしはなれた左にマレイン、右にロクヒューが立ちました。いったいなにがはじまるというのでしょうか?

ルクエールが魔法の言葉をとなえはじめ、右手を空にかざしました。マレインとロクヒューも、それにつづきます。そして……。

ぶおおおーん！

三人のまじゆつしたちの手のひらから、青白く光る魔法のエネルギーが飛び出しました！　そしてそれはどんと広がっていった、あつというまに、このベゼロインとりで全体をつつみこんでしまったのです！

つまりこれは、魔法のバリアーでした！　今やとりでは、青白く光るこのとうめいな魔法のバリアーで、すっかりおおわれていたのです！　す、すごい！（いぜんライアンも、すがたを見えにくくするために、ロビーたちみんなを水のバリアーでおおいかくしたことがありましたが、こんかいはそれとは、くらべものになりませんでした。レシリア先生とルースアンが協力して作った、あのまぼろしのバリアーでさえ、同じくたちうちできないことでしょう。なにしろ、なん百人もの者たちのいるとりでそのものを、つつみこんでしまいましたから！　力のあるまじゆつしが三人がかりでかかったら、こんなにもすごいことができるんですね！　いや、おどろきです！）

ですがこんなにもすごいバリアーであつても、ワツトの黒の軍勢が相手では、ほとんどやくには立たないということでした（ええっ？　そうなんですか？）。もちろんふつうの相手ならば、魔法のバリアーをそうかんたんにうち破るなんてことは、できません。

ですが黒の軍勢のその中には、ふつうの相手ではない、とてもとくべつな相手がまぎっていたのです。それこそが、さきほどマレインがいつていた、三人の魔女たちのことにはかなりませんでした。

きゆうていまじゆうつし。それはペーカーランドだけにそんざいするものなのでしゅうか？　いいえ、ちがいました。ペーカーランドにきゆうていまじゆうつしたちがいるように、またワットにも、きゆうていまじゆうつしたちがいたのです。ワットのきゆうていまじゆうつしたち、それが、ネルヴァ、アルーナ、エカリンという、若き三人の魔女たちでした。

この三人の魔女たちは、ほんとうの姉妹ではありませんでしたが、人々からは「魔女つこ三姉妹」という名でおそれられていました（名まえだけでは、あまりおそろしくありませんが）。十八さいの長女、ネルヴァ・ミスナディア。十六さいの次女、アルーナ・キツカバーク。そしてまだ十二さいばかりのちびっこ魔女、三女のエカリン・スフルフ。ともにじやあくなる魔法の力をひめた、おそるべき魔女たちだったのです。

大きないくさでは、まずまじゆうつしたちが、さいしよにその力をはつきするというのがならわしでした。そのさいしよの魔法の力、それが魔法のバリアーだったのです。

このバリアーが張られているときには、ふつうの兵士たちではぜんぜん歯が立ちません。大きな石をぶつけてもだめですし、剣やおので切りさこうとしても、むだなことで

す。ですから大きないくさのときには、それぞれの軍は、かならず、うでのいいまじゆつしをつれていきましました。そしてせめこむがわのまじゆつしが、さいしよにやらなければならぬしごと。それが、この魔法のバリアーをはかいするということだったのです。

ワットの黒の軍勢が相手では、この魔法のバリアーもほとんどやくには立たないといつたりゆうが、これでおわかりでしょう。だつてバリアーを張つても、力あるまじゆつしである三人の魔女たちに、すぐにこわされちゃうんですもの（とここで……。リュインのとりでが落とされたときには、ベーカールランドのきゆうていまじゆつしたちは、その戦いには加わっていませんでした。リュインのとりでは敵のしゆうらいにそなえるそのじゆんびをおこなっているさなかに、まったくとつぜんには、ふいうちのかたちで敵のこうげきを受けたのです。なにしろリュインがこうげきされたのは、ベーカールランドにワットの使者がやってきた、そのわずか数日ごのことでしたから（バリアーを張つて敵を追いかえすために、いくさのじゆんびに追われる三人のきゆうていまじゆつしたちを、つねにリュインのとりでひとつにつめさせておくわけにもいかなかったのです）。

ふつうこれだけ大きな軍勢の兵をととのえ、いくさのじゆんびをおこなうためには、すくなく見つもつても十日はかかるはず（しかもいくさのルールによれば、ワットは戦いのじゆんびがすっかりととのつてからリュインをこうげきした方が、のちの戦い

にむけてとてもゆうりとなりました。それらのルールについては、これからじゆんを追って説明されていきます。ですからベーカーランドの者たちも、まだリュインがこうげきされることは、ないとはんだんしていました。ですが……。

そこにはまたも、あのおそろしい悪の大魔法使い、アーザスの影がひそんでいたのです。

じつは、リュインをふいうちでこうげきして落とすようにしじしたのは、ほかでもありません、アーザスでした。それは、アーザスがさいごの大いくさの場においてもちいてくるという、そのまがまがしき力のためでした。じつはその力は、さいごのさいごの大いくさの場において、いちどかぎりのみ、使用かのようなものだったのです。そしてその力は、もはやアーザスほどの大魔法使いであっても、おさえつけておけるようなものではありませんでした。そのためにアーザスは、いちはやくりュインの地をうばい取り、その地の中をワットの軍勢がじんそくに進めるようにする必要があったのです。いくさを早くはじめて、そのまがまがしきやみの力をおさえつけておけるうちに、さいごの戦いをはじめることができるように……（その力がどんなものなのか？ ということについては、のちほどあきらかとなるでしょう）。

ところで、ワットの者たちがこんなにも早くリュインをこうげきすることができた、そのりゆうも、ここで説明してしましましょう。それはリュインこうげきのしきをとつ

た、しきかんガランドーの、すぐれた作戦によるものでした。ガランドーは夜のやみにまぎれて、空からデイルバグのせいえい部隊を送りこみ、そしてリュインに戦いを申しこむと、リュインの者たちに兵をととのえる時間も与えないうちに、わずかな時間のあいだにとりでを落としたのです。つまり黒の軍勢の本軍がいくさのじゆんびをととのえる、それよりはるか前に、ガランドーはふいうちでリュインをおそいました。ですからこんなにも早く、リュインをこうげきすることができたというわけだったので。

地上からやってくる敵の軍勢ならば、近づいてくることもかくにんできるでしょうが、敵が空からとつぜんにやってきましたから、もとよりリュインの者たちに、戦いにそなえる時間などはありませんでした。リュインの兵は、二百。それに対して、デイルバグの部隊は二百五十でした。これは数で相手をあつとうするワットにしては、まったくもつてすくない数です。ですがガランドーは、あくまでも早さをゆうせんさせました。リュインをふいうちで落とすためには、この数でじゆうぶんと考えたのです。そしてそのおもわくの通り。ふいをうたれたリュインのとりでは、取りかこまれたデイルバグ隊の者たちによつて、なすすべもなくやぶれ去りました。まさか敵がデイルバグの部隊だけをひきいて、こんなにも早くきしゆうこうげきをしてこようとは、思つてもいいことでしたから。しらせを受けたベゼロインの兵士たちが早馬でかけつけたときには、リュインはもう、敵の手に落ちてしまつていたあとだったので（じつは、ほとん

どまともに戦いがおこなわれることもなく、リュインの者たちはこうふくを強いられたのです。リュインの者たちは、そのすべてが敵にむかいあつていたというわけではなく、多くの者が、とりでの中やそとでのさぎように追われていました。そんなところをこうげきされましたから、かれらには、やはり、まともに敵にむかいあうこともできなかったのです。

(さて、話がずいぶんそれてしまいました。まじゆつしの話にもどります。)

この魔法のバリアーのほかにも、いくさにおいてまじゆつしたちというものは、とても重要な意味を持つそんざいでした。もちろん、たくさんの兵士たちのことを思いのままに動かして、さらなる大きな力を生み出すためには、ゆうしゆうなるしきかんたちがいなくてはお話になりません。ですがまじゆつしというのは、しきかんともまたちがう、重要なやくわりを持っていました。それは魔法の力だけではない、頭を使ったしごと。つまり、「戦いの作戦を考える」というやくわりだったのです。

いくさにおいて作戦は、戦いに加わる兵士たちの人数と同じくらい、だいじなものでした。いくさの勝ち負けは、まじゆつしたちのうでとずのうにかかっているとつても、大げさではなかつたのです（もちろんしきかんたちも戦いの作戦は考えますが、せんもんのまじゆつしたちがいるんですもの、かれらと協力した方が、よりよい作戦が生

まれるというものです)。

ベーカールランドのきゆうていまじゆうつしたち。それはもんくなく、うでもずのうも、さい強クラスのまじゆうつしたちでした(こんかいはるすにしていましたが、いつもだつたらこれに加えて、マリエルがいるんですもの、さい強です!)。ですがこんかいは、そのさい強クラスのまじゆうつしたちでさえ骨のおれる、おそるべき魔女たちが相手なので。けつして、ゆだんはできません。相手が、どんなしゆだんをもちいて、どんな悪だくみをはたらいてくるのか? わからないのですから(さきほどマレインが「魔女たちにかりをかえす」といっていましたが、これはいぜんの戦いの中で、魔女たちの思いもかけないひきような作戦に、すっかりやられてしまったことがあつたからでした。ですからマレインやロクヒューは、そのかりをかえすという思いが、強かつたのです。

ちなみに、いぜん魔女たちが使つたそのひきような作戦というのは、自分の軍の兵士たちのかぶとの上と、たての前に、とつてもかわいらしい、魔法でできたうさぎやねこちゃんたちをよび出すというものでした。なんてひきような! これではまともに、こうげきできるはずありません! もちろんこんかいは同じ手をくわれないように、「かわい動物たちをみんなまとめて、一時的に魔法の本の中にとじこめてしまふ」というわざをあみ出してきましたが、なにしろ相手は、ずるがしこい魔女たち。こんかいても、前よりももつとひきようなわざを、使つてくるにちがいありません)。

魔法のバリアーにつつまれた、ベゼロインのとりで。その見晴らし台の上は、はしからはしまで、ずらり！ よろいかぶとに身をつつみ、剣ややりを持った兵士たちで、いっぱいになっていました（全部で七百二十名おりました）。みな、となりの者たちとびつたり肩をよせあい、ひとこともしやべらず、立ちつくしていたのです。そしてそのまん中で、ベルグエルム、フェリアル、ライラの三人のしきかんたち、そして、ルクエール、マレイン、ロクヒューの三人のまじゆつしたちが、せまりくる者たちのことを静かに待ち受けていました。

となりの仲間の息をのむ音までも、伝わってくるかのようでした。ま夜中の張りつめた空気が、びしり！ ほほやゆびのさきをうちつけてきます。そしてそれから、どれほどの時間がたったのでしょうか……？

ざつ、ざつ、ざつ、ざつ……！ だん！

さきほどからずっととなりひびいていた、黒の軍勢の足音。それがとまりました。

とりでから六十ヤードほどはなれたところ。かれらはその場所に、ずらりといちれつになって、ならんでとまったのです。

ひゅううう……。

あたりは、しーんと、ぶきみなほどに静まりかえっています。風がとりでの石のあいだを通りぬけていく音が、おそろしいほど大きなものを感じられました。

やがてそのせいじやくを破ったのは、黒の軍勢の方でした。まっ黒なよろいかぶとに身をつつんだ、ワットの兵士たち。その兵士たちのあいだから、若く美しい、三人の少女たちが進み出たのです。少女たちはひらひらとした美しいドレスに身をつつんで、よろいもかぶとも身につけていませんでした。武器もなにも持っておりません。そうです、この少女たちこそが、ワットの三人のきゆうていまじゆうつしたち。ネルヴァ、アルーナ、エカリンの、魔女の三姉妹にほかなりませんでした！

三人の魔女たちはしばらくだまっただまま、こちらを見上げていました。そして、とつぜん！

ばしゅう！ ぼぼーん！

ひとりの少女がなにもいわず、ほのおのかたまりを飛ばしてきました！ おそろしいほどのいりよくです！ ですがそのおそろしいほのおも、ペーカーランドのまじゆうつし

たちの作り上げた魔法のバリアーにあたって、ちりぢりになってくだけてしまいました（もしこのバリアーを張っていなかったとしたら、かくじつに十人の仲間たちがまっ黒こげになっていたことでしょう！ 考えただけでもおそろしいことです）。

「ぶれいなあいさつだな、ネルヴァー！」

とりでの上から、ルクエールがさげびました。そう、ほのおのかたまりを飛ばしてきたのは、三姉妹の中でもいちばんおそろしい力を持った長女、ネルヴァ・ミスナディアだったのです。

「おひさしぶりね、ルクエールさん。このていどのおじや、あなたには、ぜんぜん、ききめがないみたい。やっぱり、このバリアーの方から、なんとかしなくちゃいけないよ。うね。」

ネルヴァの言葉に、三人の中でいちばん背の高い、となりにいる次女アルーナが、こくこくとうなずきながら、「……バリアー、やつつけるです……！」とつぶやきました（どうやら次女のアルーナは、ずいぶんとおとなしいというか……、おっとりしたせいのかのようです）。

「おまえたちの思い通りにはさせせん！ かえりうちにしてやる！」とりでの上から、ロクヒューがつづけてさげびました。ロクヒューはこの三姉妹にかりをかえす、そのきかいをずっと待ちのぞんでいたのです。

「こっわーい！ おじさんって、やあねー！」そういつてちゃかしたのは、三女のエカリンでした。エカリンは「くすくす。」と笑いながら、「やーいやーい！」とロクヒューのことをからかいます。相手をからかって怒らせるのが、楽しいといった感じですよ（うん、どうやらこのエカリンという子は、か・な・り、しようわるなせいかくのようですよ。ライアンよりも）。

「な……！ だれが、おじさんだ！」ロクヒューはもう、怒りばくはつです！（ロクヒューはまだ二十五さいでしたので、気持ちもわかりますが……）思わずエカリンにむかって……。

「魔しようだん、ストライカー！」（魔しようだんとはつまり、「手のひらから出る魔法のたま」といった意味なのです。）

ロクヒューのつき出した手のひらから、こぶしのかたちをした、きらめく魔法のエネルギーが飛び出しました！（魔法のバリアーの中にいる者からは、そこにいる相手にむかって魔法をうちこむことができたのです。よくできてますね！ ちよつとずるいですが……！）

ばしん！

次女のアルーナがエカリンの前に出て、ロクヒューの魔法をはじき飛ばしてしまいました！

ひゆううう、どどくん！

はじき飛ばされた魔法のこぶしは、ずつとむこうの地面に落ちて、ばくはつします（口クヒューの魔法も、これまたすごいパワーです！）。

「あつぶなくい。ありがとー、アルーナ。」エカリンがアルーナに、おれいをいしました。ですけどもちろん、アルーナに助けてもらわなくても、あのくらいの魔法なら、エカリンはなんなくかわしてしまうことができましたが。

「……どう、いたしましたです……いー」アルーナは手をびしっ！と顔の横に立てて、エカリンの言葉にこたえました（やっぱりずいぶん、変わった子ですね……）。

「ねえねえ、ところでー、今日は、あの子はいないのー？ あの子は、ちっちゃい子ー。」口クヒューの魔法などまるでなんでもなかったというように、エカリンが手をひたいにかざして、きよろきよろととりでの上をながめ渡しながら、素晴らしいです。どうやら「あの子」とは、マリエルのことをいっているようです。もちろんマリエルも、この三姉妹と戦ったことがあります。

「ぎんねんだなー。あの子、かわいかったし、また、会いたかったんだけどなー。それに、ちよつと、好みのタイプ、か・も。」マリエルがないということがわかったエカリ

ンが、ざんねんそうにいました。

「よけいなおしゃべりは、やめになさい、エカリン。そろそろいくわよ。」エカリンのおしゃべりを、ネルヴァがたしなめます。

「はい。」エカリンが、気のないへんじでこたえました。

「……りようかいです……」アルーナもまた、手をびしっ！ と顔の横に立てていいました。

これからなにがはじまるのか？ それはもう、とりでの上の仲間たちにはわかっていました。敵のまじゆつしがおこなう、さいしよのしごと。そう、魔女たちはこれから、このとりでに張られた魔法のバリアーを、こわしてくるのです（バリアーを張って、それがこわされる。それはもう、大きないくさでのきまりごとみたいになっていましたから。こわされるのを防ごうとしても、けつきよくじやまされてこわされてしまうのです。それじゃバリアーなんて、はじめから意味がないんじゃないや……、と思われるかもしれませんが、これもまた、いくさでのきまりごとになっていましたので……）。

ネルヴァ、アルーナ、エカリンが、そろって横になりました。そして右手をつき上げ、魔法の言葉をふたことみこと。すると……。

ばりん！ ばり、ばり、ばりりん！

とりでをつつんでいた魔法のバリアーが、まるでうすいこおりのまくをくだいたかのように、ぱりぱりと音を立ててくずれちつてしまいました！（ああ、やつぱりこわされちゃいました。）

魔女たちと仲間たちのあいだには、もうなにもさえぎるものはありません。このままいつきに、魔女たちがさきほどのようなおそろしい魔法をうちこんできたら……、とりでの上の仲間たちは、とてもぶじではいられないでしょう。ですが……。

「とりあえず、わたしたちの出番は、これでおしまいね。あとは兵士さんたちに、がんばってもらいましょう。」ネルヴァがそういって、くるりとむきをかえ、もときた方へとむかってもどりはじめました。えっ？

「……また、会いましょうです……！」アルーナが手をびしっ！と顔の横に立てて、とりでの上のまじゆつしたちにいました。

「じゃ、まったねー！ 楽しかったよー！」エカリンが手をひらひらとふって、にこにこしながらおわかれのあいさつをおくってきました。って、ちよ、ちよつと！

そして三人の魔女たちは、そのまま黒の軍勢の兵士たちのあいだを通って、やみのむこうに消えていってしまったのです（とちゆうエカリンは、兵士たちの腰をびしゃびしゃたたいては「がんばってね！」といっておりましたし、アルーナは右や左の兵士た

ちにむかって、ひつきりなしに手を顔の横にびしっ！ と立てながら、「……よろしくです……！」といっておりました。兵士たちはちよつと、とまどっていましたか……。

ひゅううう……。

風の音だけが、あたりになりひびいていました。

魔女たちは、帰ってしまったのです！ ほんとうに、これで終わりでした！ えええーっ！

わたしはてつきり、これからおそろしい魔法のぶつかりあいが起こるものだとばかり、思っていたんです（そう思われてた方も多いはずです）。ですがですが！ いがいやいがい！ あれほどやる気まんまんみたいにふるまっていた魔女たちが、魔法のバリアーをこわしただけで、あっさりひき下がってしまった！これはどういうことなのか？ ぜったいルクエールさんたちに、ちゃんと説明してもらわないと！

魔女たちがあっさりひき下がってしまったわけ。じつはここにもまた、いくさのならばというものがありません。そしてそれこそが、魔女たちが帰ってしまった、そのすべてのりゆうだったのです。

大きないくさには、さまざまならわし（つまり、きまりごと、ルールです）というものがありません。そのひとつが、「まじゅつしどうしでの戦いをきんずる」というものだったのです。

まじゅつしというものはどこのくにとつても、大きなざいさんです。くにをゆたかにさせるためには、なくてはならないそんざいでした（それはかれらの魔法によつてさえられたエリル・シャンディーンのすばらしいまちなみを見れば、わかると思います）。そしてそれほど力を持ったまじゅつしというものは、めつたなことでは得ることができません。ですからどこのくににだつて、自分のくにの宝物であるまじゅつしたちを、失いたくはないのです。それがまじゅつしどうしでの戦いのきんしという、ルールを生み出しました。

きゆうていまじゅつしたるかれらが、どれほどの力を持っているのか？ 読者のみなさんには、もうおわかりいただけただかと思えます。そのかれらが持てる力を戦いでぶつければ、どんなことになるのか？ いうまでもないですよ。ですからこのルールは、ぜつたいに必要なふかけつなものでした。おそろしいワットの黒の軍勢でさえ、自分たちのくにおびやかすようなまねはしたくはありませんでしたから、このルールをしつかり守るのです。

そしてそれともなう、二番目のルール。「まじゅつしはいくさにおいて、戦いのため

の魔法を使つてはならない」。

ちよつときいただけでは、え？ なにそれ？ といった感じですが……、これはつまり、まじゆつしはいくさにおいて、「戦う」魔法ではなくて、「助ける」魔法しか使つてはならないということをあらわしたものでした（魔法のバリアーの場合は中にいる者を助けるための魔法なので、使つてもいいのです。ネルヴァやロクヒューが、いかくのためのこうげき魔法を飛ばしあつたのは、ほんとうはルールいはんでした）。

これはざいさんであるまじゆつしを守るといふ部分を、さらに大きくしたものでした。じつはまじゆつしどうしだけでなく、兵士とまじゆつしどうしも、いくさにおいて、おたがいにまるつきり戦つてはならなかつたのです。そのため、まじゆつしが戦いのための魔法を使うことも、きんしされていきました（ようするに相手がだれであろうと、まじゆつしはいくさにおいては、戦うことができないということでした）。これは、「戦つて、もしまじゆつしがげがでもしたら、たいへんだから」というのが、そのいちばんのりゆうだったのです。それほどにまじゆつしというものは、だいにだいにあつかわれていました（なんだかちよつと、うらやましいくらいです。あ、でも、だからといって、ふつうの兵士さんたちがだいにされていけないというわけでは、もちろんありませんよ。兵士さんたちひとりひとりの力が、くにをささえているんですから）。

ひきような手を使うという魔女たちでしたが、それでもいくさでのだいなルールを

破ったうえ、自分たちの首を自分たちでしめるようなまねをするほど、ばかではありませんが。ですから魔女たちは、こうしてみずからは戦うことなく、あとの戦いを兵士たちにまかせてひき下がったというわけでした（これ以上、助ける魔法もとくに必要なさそうでしたので）。

そして、いくさにおいての、そのいちばんのルールがありました。このルールは、いくさにおけるまじゆつしのあつかい方をきめたそれらのルールよりも、もつともつと重いものでした。このアークランドの世界に生きる者ならば、ぜつたいに守るべきルールとして、すべての者に知らしめられているルールでした。

そのルール。「すばらしい」ルールとは……。

「殺してはならない」。

こんなにもすばらしいルールがあるでしょうか！ 大きないくさでは、なん百なん千という兵士たちがぶつかりあうのです。もちろん、手はぬきません。勝つために、ほんきで戦いあうのです。ですが、考えてほしいのです。いくさに「勝つ」というのは、どんなことなのでしょう？ 相手をたくさん、殺すことでしょうか？ いいえ、ちがうはずです。戦いに勝った者は、負けた者をしはいして、いうことをきかせることができ

る。そして負けた者から、土地だとか、人だとか、ほしいものを手にいれることができる。ふつうに考えられている、いくさに勝つというのは、そういうことです。でも考えてみてください。それらのものを得るために、人を殺すことがほんとうに必要でしょうか？

相手の兵士をたくさん殺せば、相手の力を弱めて、いうことをきかせることができま
す。それはわかります。ですが、力を力ではいしたところで、自分がもつと大きくな
れるでしょうか？

いくさに勝つて、相手からさまざまなものをうばう。うばうなんてことは、よくない
ことにきまっています。ですからうばうためのいくさなんてものは、そもそもがやって
はいけないことなのです。でもそのように考えない者たちによって、いくさはたびたび
ひき起こされてしまうのです。たとえば、ワットの黒の王、アルファズレドでした。ア
ルフアズレドの考え方は、「しよせん、人というものは力でおさえこまないかぎり、よく
ぼうのままに、好きかってなことをする生きもの。世界をへいわにまとめ上げるには、
力を持つしかない。力をもって、しはいし、おさえこむしかない」というものでした。そ
の考えがまちがっているのかどうか？ きつぱりいうことは、たぶんだれにもできない
と思います。人はみな、それぞれ考え方がちがうのですから。でもそのために、いくさ
はなくならないのです。

いくさをよくないことにきまっています。ですからいちばんいいのは、戦つてうばつたり、おさえこんだりなんてことはせずに、それぞれのくにが、おたがいのよいところを分けあつて、それぞれにたりないものをおぎないあつて、みんながゆたかになることなのではないでしょうか？ いえ、ほんとうなら、それがいちばんいいのです。でも、それができない。人というのは、そういうものなのです。かなしいことですが。

それでも、このアーランドのいくさのルール。それはすばらしいものだ、きつぱりいえることでしよう。いくさが、うばつたりしはいしたりするためのものであつたとしても、人を殺しあうものではないということ、みんながかりかいし、なつとくしていただくのです。ですから相手を殺す力の大きい、弓矢は使いません。大きな石も、かべをこわすことにしか使いません。ワットの黒の軍勢の者たちでさえ、それにしたがるのです（わたしたちの世界では、どうしてこのルールが作れないのでしょうか？ ワットの黒の軍勢でさえもが、このルールを守っているというのに（もつとも、ワットにとつては自分たちのりえきになるから、それにしたがっているところが大きかったようですが。自分のくにをささえるたいせつな兵士たちのことを戦いで失うということは、ワットにとつても、したくはありませんでしたから。もし殺しあいのためいくさをすれば、なん百なん千という兵士たちが、いのちを落としてしまうのです）。

ところで……、このいのちのルールのことには話がおよんだところで、みなさんにぜひ

お伝えしておきたいことがあります。それはカピバラのくにに起こった、あのひげきまつわること。あのときカピバラのくにをおそったのはワットの者たちでしたが、たくさん兵士たちとはともかくとして、その上でしきをとっていたあの六人の黒騎士たちは、いうまでもなく、とびつきりの悪とうたちです。しっせいさんや、ぎかんさんたちは、多くのカピバルたちがかれらの手によって殺されました。カピバルの若者のいのちをうばったのも、その中のひとりです。カピバラのくにをうばってしはいするのがもくてきでしたから、カピバルたちのいのちをいたずらにうばったということは、ゆるしがたいはんざいでした！　とうぜんかれらは、ばつを受けなくてはなりません。

あのとき、ほかの五人の黒騎士たちのことをひきいていたのは、黒騎士隊の隊長のルドグール・エニラという男でした。このルドグールという男は、しっせいさんやカピバラ老人にぶれないな口をきいていた、あのいちばんの悪とうです。カピバラのくにを手にいれたあと、ルドグールはその力を買われて、デイルバグの黒騎士隊のいくつかをまかされるまでになりました。ルドグールはますます力を持って、たくさんひどいことをくりかえしていったのです。

ですが、そんなものが長つづきするはずありません。していいはずありません。ルドグールはカピバラのくにをおそったさいに、多くのカピバルたちのいのちをうばったということを、アルファズレド王にかくしていました。のちのちになって、それ

がアルファズレド王の怒りにふれたのです。

ルドグールたちのゆるしがたい悪ぎようを知ったアルファズレドは、ルドグールの部下の五人の黒騎士たちのことを、すべてぎいにんとしてさばきました。かれらは今、ろうやの中にいます。おそろしいアルファズレドにも、心はあるのです（かれらのめいれいを守っていただけの兵士たちは、ばつを受けませんでした、これはいたしかたのないことです）。

では、とうのルドグールほんにんは、どうさばかれたのでしょうか？ ルドグールもまた、ろうやの中なのでしょう？

いえ、ルドグールがワツトのろうやにはいることは、とうとうありませんでした。なぜならアルファズレドがルドグールの部下たちのことをさばいたときには、ルドグールはすでに、この世界にはいなかったのですから。

セイレン大橋の上で、ロビーたち旅の仲間たちにおそいかかった、あのデイルバグの黒騎士たち。じつはあの黒騎士たちの隊長こそが、ルドグールだったのです！（なんというぐうぜん！）ですからルドグールのさいごを、みなさんはもう知っているのです。ルドグールはロビーのせいぎの剣の前にたおれ、セイレンの流れの中に消えていきました。ルドグールは、ここではないべつの世界の住人として、これからずっと、おのれのつみをくいあらためる日々を送りつづけていくのです）。

(では、いくさのルールにもどります。)

もちろんこのルールを守るためには、さまざまなかよくそくごとが必要でした。殺してはいけないとなると、いくさでは相手をせんとうふのうにすることがもくてきとなりません。けがをして戦えなくなったり、かんぜんのうち負かされたりした者は、戦いのその場からしりぞかなければなりません。ですがけががなおれば、かれらはまた、つぎのいくさの場にもどることができたのです。

これでは大人数の兵士たちを持つているくの方が、いくさにおいて、毎回あつとう的にゆうりになってしまうことでしょう。兵士たちがいくらうちたおされたとしても、けががなおれば、つぎのいくさでは、またもとの大人数にもどることができのですから(けがのなおるひまもないれんぞくしたいくさであれば、人数も変わってきませんが、そんなれんぞくしたいくさなどというものは、ほとんど起こり得なかつたのです。こんなか、このワットとベーカーランドの、さいごの大いくさのような戦いでないかぎり。また、のちにも説明されますが、戦いで負かした相手のくのにの兵士たちを、ほりよにとるといいうしゅだんもありました(レドンホルの黒ウルファたちも、これによつてほりよにされました)。ですがそれは、けんりとしてはみとめられていました。ほとんどのくには、人としてのりんり的な問題として、おこなつていなかつたのです。ゆい

つそれをおこなっていたのは、ワットの黒の軍勢だけでした。

ですからそれを防ぐために、「いちどのいくさには、相手の三ばいの人数までの兵士たちしか使つてはならない」というルールがきめられていました（それでも兵力のすくなくいくににとつては、とてもきびしいルールですが）。

そのほかにも、「兵力が二百五十人にみたない場合でも二百五十人としてあつかわれる」とか、「自国のとりででのいくさでは、使用できる人数は、てきせいかつとりでの中に配置できる人数までにかぎられる」とか、「いくさのじゅんびは、てきせいかつじんそくにおこなわなければならず、いはんした場合は兵力がてきせい数そろつているものとしてあつかわれる」とか、「十四日以内での同じ相手国とのれんぞくしたいいくさの場合、前回の戦いで負けたがわのくにの兵力には、そのくにが前回の戦いで使用した兵力の四十七・五パーセントぶんが加わっているものとしてあつかわれる」とか、このいくさのルールを成立させるために、いろいろと、むずかしくて、ふくぎつで、頭の痛くなるような重要なルールがきめられていましたが、まあそれはややこしくなりすぎてしまますので、わきにおきましよう（ほんとうに頭が痛くなりますから……）。今は、相手の三ばいまでの人数しか使うことができないう、そのルールに話をしぼります。

もしこの（相手の三ばいまでの人数しか使えないという）ルールを（めいはくに）破つた場合、たいへんに重いばつが与えられます。すべてのくにの取りきめとして、そうき

められていたのです。ルールを破ったくには、ぼつのあいだ、よそのくからさいていげんの食べものや水やくすりなどをのぞき、人や、ぶっしなど、いつさいのものをはこびいれることができなくなりました。いくらワットのような強国でも、これはたいへんな痛手となります。取りひきによるお金も、いつさいはいつてきません。ワットはみずからのりえきを追いもとめるくに。りえきをいつぺんに失ってしまうようなことを、進んでするはずありません。このぼつの取りきめがあるからこそ、ワットもいくさのルールを、そうかんたんに破ることはできませんでした（それこそ、すべてのくにをかんとんに力でおさえこまないかぎり、このルールを破ることなどはできなかつたのです。それでも、大人数の兵を持つワット（つまり、つねに相手の三ばいもの兵力を持つて戦うことのできるワット）がおそろしく強いということに、変わりはありませんでした）。

さて、いくさの取りきめのことについては、このくらいにしておきましょう（ちよつと説明が長くなりすぎてしまいました）。とにかくそのいくさの取りきめのために、三人の魔女たちはひき下がったのです。そしてここから、ほんとうの戦いがはじまろうとしていくわけですが……。

三人の魔女たち。ずるがしこく、ひきようで、おそろしい力の持ちぬしだというその三人の魔女たちが、このままバリアーをこわしただけで、このいくさになんの手みやげも残していかないなどというわけはありませんでした……。

「みなもの者！ ふるい立て！」ベルグエルムがさけびました。

「剣をかかげよ！ 敵をむかえうて！」ライラが剣を空に高くかかげて、さけびました。

「おおおおー！」

ふたりのしきかんたちの声にこたえて、仲間たちは人間の者もはい色ウルファの者も、みな、いきようようと声を上げ、ふるい立ちました。負けるわけにはいかない！ たとえどんなに兵力の差があろうとも、なんとしても、このベゼロインとりでだけは守りぬくのだ！ みなのはひとつでした。すべての者の心が、がちりとしたはがねのようなかたいけつそくで、かためられていたのです。しかし……。

おそろべき魔女たちの、おそろしいおきみやげ……。

いよいよよかつせんがはじまろうとしていた、まさにそのとき。黒の軍勢の兵士たちが、思いもよらない行動を取りました。そのいちばん前で、黒いよろいかぶとに身をつつんでいたワットの兵士たち。まっさきにとりでにむかつてとつげきしてくるものと思われていたその兵士たちが、とつぜん、ぎざあつ！ とわきにどいて、道をあけたのです。そしてそのかれらのうしろから、前に進み出てきたのは……。

背の高い、からだのがつちりとした、身長六フィートはあろうかという者たちでした。かれらはつぎつぎと前に進み出て、ワットの兵士たちとかんぜんにいれかわってしまいました。その数は、およそ八百。ですが数なんて、そんなことはまったくかんけいがありませんでした。手には劍だけをいっぼん、にぎりしめております。よろいは着ていません。たてもかぶとも身につけておりません。かわりにすつぼりと頭をつつむ、ぬののずきんをかぶっていました。それはこれからはげしい戦いをおこなおうといういくさの場には、あまりにもふつりあいなかつこうでした。ですがそのおかしなかつこうが、つぎのしゅんかん、心の底からおそろしいかつこうへとさま変わりすることになろうとは、ベルグエルムも、フェリアルも、ライラム、みんな、そうぞうだにしていなかつたのです。

その者たちが、するりと、かぶっていたずきんをぬぎました。それを見た者たちは、そ

のあまりのしよげきに、言葉を失ってしまいました。とくに、ベルグエルムとフェリアル、はい色ウルファの者たちへのしよげきは、はかりしれないものでした。心がぐしやぐしやにおしつぶされてしまいそうな、おそろしいしよげきでした。

「な……、なんてことを……」ライラが、ふりしぼるようになっています。

ベルグエルムは歯をぎりり！ とかみしめて、こぶしをにぎりしめるばかりでした。怒りでなにも、いうこともできなかつたのです。

「おのれーっ！ ワットめーっ！」フェリアルが両手をふり上げながら、さげびました。これ以上はないという怒りが、フェリアルの中から、にえたぎるようなうにしいしてしまつたのです。

ずきをぬいだその下にあつたのは、見なれた者たちの顔でした。なつかしい、いとおしき者たちのその顔でした。かつて、ともに戦い、ともに泣き、笑い、ともに暮らした、仲間たちのすがたでした。

そこに立っていたのは、アーザスの手によってムンドベルク王とともに黒のやみの中へとつれ去られていった、レドンホールの黒のウルファたちだったので……！

「う、うわあああーっ！」

つぎつぎに起こる、はい色ウルファの仲間たちの、くつうとくるしみにもがく、そのさげび声……。

こんなことが、あつてよいのでしょうか？　こんなことが、ゆるされていいのでしょうか？

かつての仲間たちが黒のやみにとらわれて、なにもいうこともできず、なにも考えることもできず、ただただいっぽんの剣だけを持って、今この戦いの場で、自分たちの目の前に立っていたのです。

「さて、ベーカーに逃げこんだおおかみさんたち。かつてのお仲間さんたちを相手に、どう戦うのかしら……？」

ずつとうしろの方からとりでの方を見つめていたネルヴァが、そういつて、静かにはほくそ笑みました。そう、このおそろしい悪魔のような作戦を考えたのは、まさしくこの、ネルヴァ・ミスナディアだったのです。

「ネルヴァつてば、ほーんと、えげつない。わたしより、せいかくわつるいよねー。」
エカリンがうでを頭のうしろにくみながら、にこにこしていました。

「……これが、作戦です……！　わたしたちの、つとめです……！」アルーナが、エカ

リンの頭にげんこつをごちん！ あてて素晴らしいです（「いっだつ！」と頭をおさえるエカリン）。

ネルヴァはそして、「ふふっ。」と楽しそうに笑いました。

「さあ、ベーカーさんのお手なみ、はいけんといきましょう。」

「黒鳥をはこべー！」

こんらんする、ベーカランドの勇士たち。そんなかれらのことをしりぬに、黒の軍勢の中から、隊ごとの分隊長たちがさげびました。そしてその言葉とともに、前に進み出てきたのは……。

その下に大きなしやりんがたくさんついた、木でつくられた、ものすごく大きなしろものでした。全体はまっ黒な「にかわ」があつくぬられ、黒光りしております。両わきには大きなたてが、まるで鳥のつばさのように、たくさんならべてつけられていました。ぱつと見ただけでは、これがいったいなんなのか？ わかりません。どうやらこれが、黒鳥とよばれているものようですが、いったいこれは？

「広げろー！」

めいれいの声とともに、その大きな物体がおどろくべきへんかを見せました。木でつくられたたくさんの部品たちが、めいれいの言葉に反応して、ぎゅががががん！ 大き

な木や、小さな木。長い木や、みじかい木。ねじにボルトに、ぬのに鉄。それらのものが、ぶわわつと空中でからまりあい、くみあわさつて、あつというまに、巨大なかいだんへと変わったのです！

この光景は……！ みなさんはいぜんに、どこかで見たおぼえがありませんか？ そう、これはセイレン大橋の下、カピバラ老人の小屋で見た、あの鉄の馬がくみあわさつていくその光景に、そっくりでした！ それもそのはず。この黒鳥とよばれる巨大なかいだんには、ワットがせめほろぼした、カピバラのくにのぎじゅつが使われていたのです！（とうぜん、協力して作り上げたというわけではありません。カピバラのくからつれ帰った者たちに、むりやりつくらせたのです！

ちなみに、黒鳥というのは、このかいだんの見た目が首の長い白鳥のように見えたから、そう名づけられました。色が黒いので、白鳥ではなく黒鳥というわけだったのです。）

なぞの物体は、今や高さが七十フィートはあろうかという、巨大なかいだんへとすがたを変えました。つまりこのかいだんを使ってとりでの上に乗るこみ、こうげきしようというわけなのです。これはとりでをせめるいくさでは、必要ふかけつな道具でした（しかもこのかいだんの高さは、せめこむさきの高さにあわせて、自由に変えることができました。それに使わないときにはばらばらにしておけますから、場所も取らず、はこ

ぶのもらくちん。カピバルのぎじゆつというのは、こんなところでも、すばらしくやくに立ってくれたのです。かなしいことは、それが敵の手に渡ってしまっているということでした。

黒い白鳥がせまつてきました。その上に、大勢の黒ウルファの兵士たちのことを乗せて……。

「やむを得まい。」ルクエールがベルグエルムの横に立って、いいました。「今は、感じようにはいされてはならぬ。われらには、戦ういがないのだ。」

ベルグエルムがこぶしをぎりぎりとにぎりしめて、それにこたえます。

「しようちしております。アークランドのため、われらは、戦わねばなりません。たとえ、それが、かつての友でも……」

「隊長……！ わたしは……！」フェリアルが、なみだをぼろぼろこぼしながらいいました。ですがベルグエルムは、フェリアルの手を取って、いったのです。

「わたしもつらい。だが、ルクエールどののいう通りだ。フェリアル、ともに、戦おう。強い心を持って。ロビーどののためにも。だいじょうぶだ、すべてが、うまくいく。ロビーどのと、そして仲間たちと、またふたたび、笑って会えるように、アークランドの

ために、祖国のために、戦おう。」

「隊長……」

フェリアルは、ごしごしと、そででなみだをふきました。そしてまつ赤にはらした目で、もういちど、せまりくるかつての友人たちのことを見たのです。くちびるをぐつとかみしめて、フェリアルは自分の剣をにぎりしめました。

「かれらのためにも、わたしは、この剣に力をこめて戦います。」

フェリアルの、かくこの言葉でした。ベルグエルムはフェリアルのうでに手をおいで、そしてただだまって、静かにうなずいてみせました。

「みなもの者！ まどわされてはならぬ！ かれらは、あやつられてるだけにすぎん！ 今は、戦うとき！ かれらをすくうために、かれらのために、戦うのだ！」

ベルグエルムが、とりでの上にいるはい色ウルファの仲間たちにむかって、さげびました。とまどい、おびえ、こんらんしていたはい色ウルファの勇士たち。かれらはベルグエルムのそのひとことで、はっとわれにかえったのです。

「かれらのために！」

ふたたび、仲間たちに力がもどりました。

「戦おう！」

ですが、かつての仲間たちが戦う相手。そのじじつに、いぜん変わりはありませんで

した。どうしたって、とまどいが生まれてしまうのはさげられません。それにひきかえ、相手はなにも考えることもできず、よこしまなる力にその身をまかせ、心も持たずにおそいかかってくるのです。これは、たいへんなハンディとなりました（黒ウルフアの兵士たちにかけていたのは、アーザスによるたぶらかしのじゅつでした。アーザスはレドンホールをほろぼしたあとで、ほりよとした黒ウルフアの者たちにこの魔法をかけ、自分のいうことをすなおにきくだけのあやつり兵士たちに変えてしまったのです。たぶらかしのじゅつはこうげきの魔法にほかなりませんが、この魔法はこんかいのいくさのはじまるずっと前に使われたのであって、こんかいのいくさの中で使われたというわけではありませんでした。ですからワットは、今このいくさのときにこうげきの魔法を使っていないので、いくさのルールいほんとはならないというのです。こうげきの魔法の力が使われたのは、黒ウルフアたちをあやつり兵士のじょうたいに変えるための、そのいっしゅんのあいだだけのことなのであって、もうその魔法の力は、終わっているのだと。

つまり、今相手をこうげきしているのは黒ウルフア自身なのであって、魔法そのものでこうげきしているというわけではない。だからルールいほんではない。というのがワットのいいぶんでした。

でもやつぱり、そんないいぶんはなつとくがいきませんよね！　魔法が使われていな

ければ、黒ウルファたちも、相手をこうげきすることもないわけなのですから。

でもワットは、この自分かつてないぶんを通してしまっていたのです。それがワットという相手でした。ルールのすきについて、自分たちにつごうのいいように、ねじまげる。じつにひきような相手です！）。

そしてもうひとつ、魔女たちの取ったひきようなしゆだん。それは黒ウルファの者たちに、なんの防具もつけさせていないということでした。これでは戦いにおいて不利なんじゃ？　って思われるかもしれませんが、そのぎやくでした。からだひとつでむかってくる相手を、ほんきでこうげきできるでしょうか？　しかも相手は、かつての仲間防具をつけていたのなら、まだ手の出しようもあつたでしょうが、相手はただかどうぜんでは、思いもよらない大げさをさせてしまうかもしれないのです。それこそへたをすれば、いのちまでうばってしまいかねません。かつての仲間たちに、どうしてそんなことができるのでしょうか？　つまりそれこそが、魔女たちのねらいだったのです。これはほんとうに、悪魔のような作戦でした。

「ごごおん！　ごごおん！　ががーん！」

ついに黒鳥が、とりでの前までとうちやくしました。あちらでもこちらでも、黒い鳥

の首がとりでのかべにあたって、大きな音をひびかせます。そしてそれと同時に、その首の上からたくさんの黒ウルファの兵士たちが、とりでの上の仲間たちめがけて、いっせいにおどりこんできました！ かれらの目には、かつての仲間たちのすがたはうつつていません。ただ、目の前にいる相手をうち負かすこと。それだけのりゆうが、かれらのことを動かしていたのです。

「友のために！ 祖国のために！」

とりでの上のはい色ウルファの仲間たちは、みなそうさげんで、せまりくるかつての仲間たちのことをむかえうちました。

「家族のために！ めいゆう国、レドンホールのために！」

ベーカーランドの勇士たちも、みなそうさげんで、友であるレドンホールの黒のウルファの者たちと、つぎつぎに剣をまじえていききました。

とりでの上は、たちまち、はげしい戦いの場となりました。さげぶ声、剣と剣のぶつかりあう音、よろいやたてやからだ、ぶつかりあう音。うち負かされた者の、くるしそうなうめき声、たおれる音……。どれを取っても、願ってききたいと思うものは、ひとつもありませんでした。

「剣をねらって、たたき落とせ！」ライラが、ひとりで七人もの黒ウルファの兵士たちのことを相手に戦いながら、さげびました。「それがむりなら、足をねらえ！ 相手の動

きをとめるのだ！」

ライラの剣さばきは、まさに神わざでした。ひゅっ……、その足がいつしゅん、動いたかと思うと……、からららん！ かららん！ 相手の持っていた剣が、あつというまにちゆうにまい、地面に落ちるのです！ 目にもとまらぬとは、まさにこのこと！

ライラの強さのひみつは、むだのない動きからくり出される、むだのない力。これが相手に、いちぶのむだもなく伝わり、そのけっか……、相手は頭で考えるよりもさきに、負けていました。これではだれも、かなわないはずです！ つ、強い……！

ベルグエルム、そしてフェリアルもまた、先頭に立つて黒ウルファのかれらと戦いました。自分たちが進んで戦っているすがたを見せることによつて、はい色ウルファの者たちをはじめ、「仲間と戦わなくてはならない」という強いとまどいを持った仲間たちの心にも、力を与えることができるのです。そしてこのふたりの戦いぶりについては、みなさんにはいうまでもないでしょう。

ルクエール、マレイン、ロクヒュー、三人のまじゅつしたちもその場に加わり、仲間たちのサポートにてつしていました。味方を守る魔法なら、いくさでも使つていいのですから。魔法のかべで、相手をシャットアウト！ しんろをぼうがいたり、味方の持つているたてを、はがねのようにかたくしたり。およそ守るために考えつくような魔法をかたっぱしから使つて、仲間たちの身を守りました（もちろん相手の剣を落とした

り、動けなくさせたりするような魔法も使えましたが、それらは「こうげき」の魔法になつてしまいますので、使うことはできませんでした。しかも、たとえ味方を守る魔法であつても、こじんなバリアーを張つてしまふとか、すがたを見えなくするとか、敵のこうげきをちよくせつに防ぐような魔法も、使つてはならなかつたのです。うゝん、いろいろと、もどかしい！。

ですが、いくらベーカールンドの兵士たちがひやくせんれんまのつわものたちであるとはいへ、やはり防具をつけない黒ウルフアたちの、そのすて身ともいえるこうげきには、仲間たちも手をやきました。レドンホール黒ウルフアたちも、またすばらしき力を持った、強い兵士たち。そうかんたんにうち負かすことなどはできません。たくさんのベーカールンドの仲間たちが、剣で切られてけがをしました。

それでも、戦えないほどの大きなけがをした者は、ごくわずかでした。みな、友のため、たいせつな者たちのため、力をふりしぼつて、勇気をふりしぼつて、けんめいに戦つたのです。

そしてついに……。

けつちやくです！ 黒のウルフアの兵士たちは、剣を落とされ、足を切られて、いのちからがら、黒鳥の上へとむかつてたいきやくしていきました！ ばんざい！

黒鳥がずると、もどっていきます。多くの黒ウルフアの兵士たちが、手あてのたぬに、うしろに下げられていきました(戦いに負けた者は、そのいくさが終わるまで、もう戦いにさんかすることはできません。それが、いくさでのルールでした。でも、待って黒ウルフアの仲間たち！ いつか必ず、助けにいくからね！)。

さあ、魔女たちの作戦は、これでしつぱいです！ わがベーカーランドの勇士たち、ひやくせんれんまのかれらにかかれば、魔女たちのきたない作戦などに、くつすることなどはないのです！

「おおおおーっ！」

仲間たちのよろこびの声がかどましました。みな、剣をかかげ、ほこらしげに胸を張ります。ですが、戦いは、まだまだこれから。残りのおそろしいほどの数のワットの兵士たちが、これから、いつせいに、せめこんでくるのですから。戦いの、そのかくこの差を見せるべきときは、今でした。しかし……。

ひゅううう……。

風が、とりでのあいだを通りぬけていきます。さきほどの戦いのあとから、ずっと、い

くさの場は静まりかえっていました。

「なぜ、せめこんでこないのだ？」ライラがふしぎそうに、黒の軍勢の者たちのようすをながめていました。

「われらにおそれをなしたのでしよう。このいくさ、われらの勝ちです！」フェリアルが、ほこらしげにそうつぶやきました。

ですが、ほんとうにそうなのでしようか？

と、そのとき……！

「ち、ちがう……、ようすがおかしい！ みんなを見るー！」

ベルグエルの言葉に、フェリアルもライラも、あわてて仲間たちのことを見まわします。

「こ、これは……！」

そこで、かれらが見たもの……、それは、からだをねじまげ、くつうにもがきくるしむ、たくさん仲間たちのすがたでした！ こ、これは、いったい！

とりでの上の勇士たち。さつきまで黒ウルファの兵士たちとゆうかんに戦っていた、そのかれらが、とつぜん声を上げてくるしみ出していました。みな、胸をおさえ、その

場にたおれこんでしまいます。ですが中には、なんともない者もいました。しかしその数は、数えるほどしかおりません。

「ま、まさか……！」ベルグエルムがなにかをきとったかのように、いいました。ベルグエルムの頭の中に、おそろしい考えが、やみのようにわき起こっていきました。

「かれらの剣！」

かれらの剣……、それは、せめこんできた黒ウルフアたちの持っていた、その剣のことでした。それは、ただのふつうの剣にすぎませんでした。ですがその剣によるこうげきは、ふつうのこうげきではなかったのです。

アーザスの持つ、やみの魔法のエネルギー。アーザスにあやつられている黒ウルフアたちは、アーザスから、そのおそろしいやみのエネルギーさえをも吹きこまれていました！これは魔女たちよりも、さらにおそろしく、さらにひきょうで、さらに悪魔のよくな作戦でした。それは、アーザスの考えた作戦だったのです！そしてそれをこのいくさの場に持ちこみ、じつさいに手をくだしていたのが、あの三人の魔女たちでした。魔女たちはさいしょから、こうなることを見こしていたのです。

おそろしい魔女たちの、第二の作戦でした。

やみのエネルギーを吹きこまれた、黒ウルファの者たち。じつはかれらは、みずからのおそろしいやみのエネルギーを、手にした剣のやいばに吹きこんで戦っていました！　そしてやみのエネルギーをこめた剣に切られた者は、やみにとらわれてしまうのです！　すなわち、アーザスにあやつられている黒ウルファの者たち、かれらと同じようになつてしまいました！　アーザスは、魔女たちは、ワットは、なんてひどいことをするのでしよう！（なんともなかつた者たちは、黒ウルファたちから剣で切られていない者たちでした。ライラ、ベルグエルムはもちろん、フェリアルもすぐおうでの剣のうちよつと、かすつたくらいでも、このやみのエネルギーはからだの中にはいりこんでしまふのです。

そしてこのやみの魔法のエネルギーについても、ワットはいくさのルールいはんではないといい張るつもりでした。このエネルギーはこのいくさのはじまるずっと前から黒ウルファたちの中からだの中に吹きこまれていたものなのであって、それはもともと、黒ウルファたちの中にそなわっていた、のうりよくのようなものだ。つまり黒ウルファたちは、ただ自分自身のそののうりよくを使って戦っているだけなのだから、このいくさにおいて、まじゆつしが魔法を使っているわけではない。だから、ルールいはんではない。

こんないぶんは、やはりとてもなつとくのできるものではありません。しかしワツトは、こんなでたらめないいぶんを、ふたたび通してしまうつもりでした。それはベルグエルムたち三人のしきかたちにも、わかつていたことだったのです。」

「じょうきをかくにんせよ！ 戦える者は、どれだけだ！」ライラがさげました。ですが、かえつてきたこたえは、まさしくぜつぼう的なものであつたのです……。

「ぶ、ぶじな者は、三十名たらず……。せんとうふのう……。その数、ざつと、六百名はくだりません……」

兵士のこたえに、ライラはがくぜんとしました。ベルグエルムにも、フェリアルにも、とても信じられないげんじつでした。わずか三十人……。兵力がいつきに、これだけの数になってしまったのです……。そして、そのしゅんかん。いくさのルールがきまりました。「戦えない者が多数となつたとき、そのいくさは負けとなる」。いくさの勝ち負けをきめるためのルールです（せいにかくには、もとの兵力の二十ぶんの一にまで人数がへつたときに、負けとなります）。そしてかれらのその三十人という残りの人数は、いくさの負けとなるためのじょうけんを、みたしているものでした。ペーカーランドは、やぶれたのです……。

からーん！ 剣が落ちる音です。

「そんな……、こんなことが……」

フェリアルが、その手に持っている剣を落として、いいました。信じられないげんじつでした。ですがこれが、げんじつでした。

ベルグエルムはひとみをとじ、その場に立ちつくしたままでした。

なにも言葉が、ありませんでした。

「たいきやくだ……」

すべてをりかいたライラが、ふりしぼるようにいいました。その目はきつく、かくごのひとみでした。

「そういん、たいきやく。ふしようした者たちをはこべ。ワツトの軍に、とくしを送れ。このいくさ、われらの負けだ。」

ライラはそれだけいうと、ベルグエルム、フェリアルの方を見ることもできず、ひとり、とりでのおくへと歩き去っていききました。

「たいきやく！ たいきやく！」残った仲間たちのさけぶ声が、むなしくひびき渡りま
す。

「ベゼロインは、落ちた！」

ベルグエルムはいつまでもその場に立ちつくしたまま、動きませんでした。
フェリアルはいつまでもなみだがとまらず、声を上げて泣きつづけていました。

ワットの軍にこうふくのどくしが送られたのは、それからすぐのことでした。

21、アツプルキントのラグリーン

「いよいよ、動きよったか。」

はるか見下ろすさきにそびえる、ひとつのとりで。茶色の石をつみ上げてつくられたその大きなとりでのことを見つめながら、ひとりの老人がつぶやきました。

そのとりでのかべには、たくさんの大きなたいまつがかかげられていました。じこくは夜。空には雲の切れまに、星がきらめいております。たいまつのおが、とりでとそのまわりの地面を、ゆらゆらとてらしていました。そのあかりで、はじめてわかったこと。それはとりでのかべが、あちこちくずれているということです。さらに見れば、入り口の門も半分こわれていて、おうきゆうしよちとして、大きな板がなんまいもうちつけられてなおしてありました。かべには、やけどげたあとがいくつもついております。とりでのまわりの地面は、ふみ荒らされ、赤茶けた土がむざんにもむき出しになっています。

これらすべてのことが、物語っていること。それはひとつでした。このとりでで、ごくさいきん、戦いがおこなわれたということなのです。ということは、ここは……？

いえ、このとりでは、ベゼロインとりではありません。ベゼロインのとりでは、エ

リル・シャンディーンと同じ、海の色まじった白い石でつくられていたのです。このとりでのかべは、茶色。となると、このとりでがどこだか？ みなさんにはもうおわかりかと思えます。

ごくさいきん戦いがおこなわれたばかりの、もうひとつのとりで。そう、ここはベーカーランドのそのふたつのとりでのうちのひとつ、リュインのとりででした（このリュインとりではこの近くの山でとれた、とてもじょうぶな石が使われていました。そのためエリル・シャンディーンやベゼロインとりでは、ちがう色をしていたのです）。

じこくは、ベゼロインのとりでにワットの黒の軍勢がせめこむ、その数時間前（くわしい時間まではわかりません）。場所は、このもうひとつのとりでのことを見下ろす、高い山の上。今その場所に、ひとつりの老人がひとつの岩の上にあぐらをかいて、すわっていました。顔は、はい色のひげでもじやもじや。顔の大きさよりもひげの方が大きいくらいです（サンタさんのような顔、といったらわかりやすいかもしれません。でもサンタさんよりもっとそのおひげはぐわぐわしていて、まるでたわしみたいなひげでした）。くりくりとした大きな目。ひげにかくれた大きな口。ずんぐりまがつた大きな鼻。その顔をひとめ見ただけで、この老人がどんな人物か？ わかつてしまいそうなくらいでした。ごうかいで、だいたんで、がんこ。そして、こわいもの知らず。いかにもそんな感じの顔をしていたのです。

でも、すいません。読者のみなさんにとっては、「しかしこの老人は、それらのいんしょうとはぜんぜんべつの、いがいなせいかくをしていて……」とつづけた方が、おもしろみがありますというのですが、ぎんねんながら、わたしもそうつづけるわけにはいかないのです。だってこの老人は、まったくもって、顔そのもの！　ごうかいで、だいたんで、がんこ。そして、こわいもの知らず。そのまんまのせいかくでしたから！

「まったく、ノランのやつも、やつかいなしごとをおしつけてくれるわな。」老人がつぶやきました。

ノラン！　この老人はあの大けんじやノランの、知りあいのようなのです！　いったい、この（岩のようにがんこそうな）老人はなに者なんでしょうか？

「だーが、たまには、ええわい。ハウゼンくんにも、おんがえしせんとな。わしも、ひさしぶりに、うでがなるってもんだわ。のう、おまえたち。」老人はそういって、「がっはっは！」とごうかいに笑いました（まったくもって、顔そのままの笑い方です。すいません）。

おまえたち？　そして、ハウゼンくん？（この名まえ、どこまできいたような……）

老人がそういうと、老人のうしろのやみの中で、ご、ごいん……！　ぎゆ、ぎゆいん……！　なんともおかしな音がなりびきました。大きな歯ぐるまがからみあうような、岩と岩とがぶつかりあうような、今までにきいたことのないふしぎな音だったので

す。そしてそのやみの中で……、なにかが動いているようでした！ それも、ひとつやふたつではありません。あちらでも、こちらでも！

老人はまんぞくそうに「ふんっ！」と鼻をならすと、おもむろに、すつく！ と立ち上がりました（背はひくく、ずんぐりむつくり。まったくもって、この顔にはこのからだといった感じです。すいません）。そしてポケットからひとつのりんごを取り出して、それにがぶり！ とかぶりつくと、（ごわごわしたひげにしたたるりんごのしるを手でぬぐい、りんごをがしがし、かんでから）老人はとりでの方をながめたまま、うしろのやみにむかっていったのです。

「さあて、おまえたち！ そろそろ、あそびに出かけるとしようかの！」

「ご、ごいーん！ ギゅ、ぎゅいーん！」

老人の声にこたえて、やみの中でふたたび、ふしぎな音がひびき渡りました。

ベゼロインのとりでに、つきつきとワットの黒の軍勢の者たちがはいりこんでいきました。おそろしい魔女たちの（そしてアーザスの）考えた、ひれつきわまりないひきよくな作戦によって、今やこのとりでは、敵のものとなつたのです（ここでひとつ、説明を加えておきます。ベゼロインでおこなわれたいくさにおいて、ベーカーランドはやぶれました。ですがそれは、「とりででのいくさにやぶれてとりでがうばわれた」というこ

となのであって、ベーカールンドのくにそのものがやぶれたというわけではないのです。黒の軍勢は、これからこのベゼロインとりでからエリル・シャンディーンへとむかつて、さいごの進軍をしてくることでしょう。このアーケランドの運命をかけたさいごの戦いは、これからはじまるのです。われらが仲間たち、ベーカールンドの仲間たちは今、黒のやみにとらわれたたくさんの仲間たちのことを、なん台もの大きな馬車に乗せて、ベゼロインとりでからたいきやくしていくところでした。ふしようした者たちは、全部で六百五十八名。二十人ずつ乗せても、ぜんぜん馬車の数がたりません。かれらの手あてをおこなう仲間たちは、ベゼロインとりでからすこしはなれた丘のふもとまで、ふしようした者たちのことをなん回にも分けてすこしずつはこんでいきました（黒の軍勢の者たちは、ふしようした者たちであつても、ようしやなくとりでから追い出しました）。そこでエリル・シャンディーンからの助けを、待つことにしたのです。

黒のやみにとらわれた者たちは、みんないしきを失つて、眠つてしまつていました。ルクエールのいうことには、つぎに目がさめたとき、この者たちはあのレドンホルの黒ウルファの者たちのように、自分のこともなにもかも忘れた、影のような者になつてしまふだらうということでした……。六百五十八名もの、ゆうかんなる者たち、みんながそうなつてしまふのです。みんな友だちでした。仲間でした。ですが今は、なにも手のうちようもなかつたのです……。（かれらをもとにもどすためには、とくべつなちりよ

うが必要とのことでした。ですがそのちりょうの方法は、ベーカーランドのきゆうていまじゆつし長であるルクエール・フォートにさえ、今はわからなかつたのです。この力は、やみの力。光の魔法をあやつるまじゆつしたちには、手にあまる力でした。

手あてをおこなう仲間たちは、みな、つかれきつていて、口をひらく者もありませんでした。遠まきに見える、ベゼロインのとりで。さつきまで、自分たちがあそこで、いきようようとかつやくしていたのです。それがわずか数十分のあいだに、こんなにも、立場がぎやくてんしてしまふとは……。

うすいぬのをただしいただきの、寒空の地面の上に、そのまま横たえられているたぐさんの仲間たち……。なんてかなしい光景なのでしよう……。

ひとりはなれた場所に、ライラが立っていました。ベルグエルムとフェリアルは、ずつと、ふしようした仲間たちのそばにつきそつて、ひとりひとりのその手を静かににぎりしめていました。ライラは、きつ、と口をむすんで、なにもいわず、かなたに見えるそのベゼロインとりのことをただ見つめていました。そのひとみには、とりでの上にかかげられた、ワットのかくの黒いはたぬのの影がうつっていました。それだけではありません。そのはたぬののとなりには、あのおそろしいデイルバグのかいぶつがいつびき、いたのです。そして、そのデイルバグの背に乗っていたのは……。

まつ黒なよろいを着た、敵のしきかん。この戦いのしきをとつていた、そのしきかん

でした。遠くはなれた場所からでも、はつきりとわかる、そのあざやかながね色のみ……。そう、それはまさしく、デイルバグの黒騎士隊のしきかん、そしてライラのお兄さん、ガランドー・アシユロイだったのです。

たいまつの中のほのおの中に、ガランドーのすがたがうつし出されていました。ガランドーは、まっすぐ身動きもせず、こちらを見つめていました。そのひとみにうつっていたのは、横たわるたくさんの者たちでも、三人のきゆうていまじゆつしたちでも、ベルグエルムでもフェリアルでもありませんでした。ガランドーのそのひとみには、ただひとり、立ちつくすベーカーランドのこがね色のかみのしきかん、ライラ・アシユロイだけがうつっていたのです。

ライラも、ガランドーのしせんを感じ取っていました。目と目のあつた、兄といもうと。ですがライラは、ただこぶしをにぎりしめ、なにもいわずに立ちつくしているだけでした。

かのじよのその心の中には、今どんな思いがあふれているのでしょうか？ ガランドーのその心の中には、今どんな思いがあふれているのでしょうか？

ふたりのその思いは、まじわることなく、ただただ、この夜の寒空の中へと消えていくのみでした。

「クルツポー！ クルツポー！ 起キロー！ 起キロー！」

とつぜん、家の中にかん高いさけび声がひびき渡りました。こ、この声は……？

「クルツポー！ クルツポー！ 起キロツタラ、起キロ！ 起キロツテ、イツテンダロ

！ コノヤロー！」

こ、この口ぎたない言葉……、わたしもみなさんも、ひさしぶりにききましたね。そう、これははぐくみの森の入り口で野宿をしたときにライアンが使っていた、あのはとのクルツポーの目ざまし時計だったのです（夜のかいぶつのいせきでは、ベルグエルムとフェリアルのことをさがすのにも、大かつやくしてくれましたよね）。

「ライアン、起きて。もう、出かける時間だよ。」

そういつてライアンのからだをゆさゆさとゆさぶっているのは、ロビーでした。じこくは、羽うさぎのこくげん、朝の六時ころです（ちなみに、ロビーはライアンを起こす前に、クルツポーの目ざまし時計のスイッチをちゃんととめておきました。そうしない、このままクルツポーのこうげきが、ライアンによろしくやなくくり出されますので……）。

「うーん……、あと、ちよつとだけ待って……。ぼく、三十びようで、このケーキ、みんな食べちゃうから……」ライアンが、寝ぼけたままでこたえます（ライアンは今、夢の中でとく大のチョコレートケーキにまるごとかぶりつくところでした。これを三十

びようで食べきれるのは、ライオンだけでしよう……」。

「まだ起きないのか、まったく。」マリエルが、じまんのさらさらのかみにねんいりにブラシをいれながら、あきれていました。マリエルは、もうすっかり旅の身じたくをすませて、あとはもう出かけるのみとなっていたのです（ちなみに、マリエルの今日の衣しよは、白とこんのツートンカラーにきいろのふち取りがいんしよう的なの、かわいい服とかわいいズボンでした。それに胸もとには、同じきいろのかわいいスカーフをむすんでいたのです。コーデイナーもぼつちり！ でもたぶんこの服も、今日の午後には着がえているでしようが……）。

「しようがない。もう、すぐに出かけなければなりませんから、ぼくの魔法で起こしますよ。」

今日いちばんのマリエルの魔法、さつそくのごとうじようのようです！ さあ、どんな魔法なのでしょう。ねむけが吹っ飛ぶ、おめめぼつちりのじゆつでしようか？ それともちよつとらんぼうに、びりびりしよつくのじゆつとかで、ごういんに起こすのでしょうか？（あ、このふたつの魔法はわたしがかってに考えたもので、じつさいにはありませんよ、たぶん。

ちなみに、家のまわりに張りめぐらせていたふうせんのふくろうたちには、さいわいなことに、その出番はありませんでした。ガウバウたちにも、この小屋にいるのがとん

でもなくおそろしい人たちののだということが、よくわかったのです。」

マリエルは、小さな声でなにかをささやいたあと、ライアンのそばにそっと近よって
いって……。

「ふーっ！」

その耳に息を吹きかけました！ ええっ？

「うわわわっ！ な、なにになにつ？」ライアンがびっくりして、飛び起きます。どうやら、こうかてきめんだったようです。

「起きた？ ほら、もういくよ。早く、したくしなよ。」マリエルが、たしなめるようにいいました。

「はわわわわ……」ライアンは、全身の力がぬけてしまつて、なんだかかゆいような、くすぐつたいような、なんともいえない気持ちで、ベッドからようやく起き出しました（けいけんされた方もいるかもしれませんが、耳にふーっと息を吹きかけられると、ライアンみたいに、なんともいえない、へにやつとした、くすぐつたい気分になつてしまうのです。寝ぼけているときにやられたら、やつぱりびっくりして、飛び起きてしまうことでしょう。おみみふーふーのじゅつという名まえでしたが、じつはこのわざは、魔法の力がはいつていることにははいつていましたが、ちゃんとした魔法ではありません。マリエルが、かつてに作ったのです。寝ぼけている相手をびっくりさせて起こすといっ

たこうかがありましたので、今使ったというわけでしたが……、はつきりいって、これはただの悪ふざけにすぎませんでした。

ちなみに、マリエルは、これでもし起きないようなら、ライアンのほほをひっぱたいて起こすつもりでしたが。こんなことに、ちゃんとした魔法の力を使いたくありませんでしたので。

そとは、ぴーん！ とした、山のつめたい空気が張りつめていました。おひさまは、まだのぼっていません。おてんきは、うすぐもり。東の空がすこしずつ、明るくなっていくように感じているころでした。

またたいへんないちにちが、これからはじまろうとしていました。そして今日のこの日は……、ロビーたち、そしてアーランドの人たちにとって、ずっと忘れることのできない、大きな大きないちにちとなるのです。

「うわわっ、寒ーい！ やっぱ、山の上から、寒いよー。」

起きたばつかりで、ろくに身じたくもせずに出発することになったライアンが、さっそくぐちをこぼしはじめました（その口には、エリル・シャンディーンのお城で仕入れてきた、クリームネクタールフルーツというくだものの味のぼうつきキャンディーがいつぽん、くわえられていました）。

ちなみに、ライアンは着がえをぜんぜん持つてきていませんでしたので、マリエルにズボンだけをかりて、いぜんの半ズボンからそれにはきかえていたのです。やつぱりライアンも、半ズボンでは寒いということが、よくわかりましたから……。半ズボンすがたもかわいかったので、ちよつともつたいないような気もしますけどね。

「しばらくは、がまんして。えっと、じゃあ、まずは、この岩山からおらないといけな
いね。また、魔法のえんばんでおりののかな？」

ロビーが岩山のふちをのぞきこみながら、マリエルにいいました。ですがマリエルは、あごをなでながら、ただ「うくん……」とうなっているばかりだったのです。どうしたの？

「そのことなんですけど……、今日はもう、とにかく、のんびりしているわけにはいかな
いんです。すこしでも、時間をだいじにしないと。ですから、ちよつと、らんぼうな手
を使わないといけません。」

「ら、らんぼうな手？」ロビーがおっかなびつくり、たずねます。な、なんかわたしも、
いやーなよかんがするんですけど……。

「あそこに、岩山がありますよね？」

マリエルが、むこうにそびえているそのとがった岩山のことをゆびさしながら、いい
ました。

「まず、あそこのでっぺんまでいきます。それからまた、そのむこうの岩山のでっぺんまでいきます。見えますか？ それをくりかえしていけば、下から歩いていくより、ずつと早くいけますから。これは、さいごのしゅだんでしたが、時間がないのでしかたありません。」

えっ、と……？ 下の道を歩かずに、岩山のでっぺんから、岩山のでっぺんへ？ たしかに、そんなことができるのなら、地道に歩いていくよりもずつと早くいけるでしょうが、いくらマリエルがゆうしゅうなまじゅつしだといっても、ほんとうにそんなことができるのでしょうか？ まさか、しゅんかんいどうでワープしていく！ というわけでもないでしょうし……。

「あそこの岩山つつあって、ずいぶん遠いよ？ 空飛ぶ魔法のじゅつ、とか？ そんなの、きいたことらいけど。」ライアンがマリエルにいました。

「れも、それがれきたら、楽しいだろうね。」ライアンがつづけて、ロビーにそういいます。

「うん。空が飛べたらいいね。いぜん、フログルさんたちのボートでは、ひどい目にあったから。」ロビーがこたえました。

フログルたちの、ケロケロボート！ ぴよっころん！ と大ジャンプして、道なき道を一っぺんに進めたのはよかったです、そのけっか、ロビーたちがひどい目（ひど

い乗りものよい)にあったのは、みなさんもよくおぼえていますよね。でもまさか、あんなひどい目(ひどいジャンプよい)には、もうあわないでしょう。

「ぼくはもう、あんなのにどとごめんだよ! あれに乗るくらいなら、ぜったい歩いてく!」ライアンもひどいたいけんをよみがえらせて、ぶるる! とふるえながらいいました。

さて、いつたいマリエルは、どんな魔法を使うというのでしょうか? でもまあ、今までもマリエルの魔法はすぐやくに立つてくれたものばかりでしたから、みんなもそんなに深く考えずに、ここはマリエルにまかせたというわけだったのです。

「じゃあ、すいませんが、ロビーさん。これで、ぼくと、からだをむすんでおいてください。ねんのためです。ライスタも、しっかりとむすんでおいてよ。」

そういつてマリエルがふたりに手渡したのは、いっぽんのじょうぶなロープでした。こ、これで、からだをむすぶ? なんだかやつぱり、ものすごくいやなよかんが……。

でも、ここはほかに、しようがありません。ロビーとライアンのふたりは、いわれるままに、そのロープを自分の腰にむすび、そしてそのはしを、マリエルの腰にむすびました。

「できたけど、これで、どうするの?」ライアンがたずねます。

「じえつとこーく・すくりゆうーのじゅつ、つていう魔法だね。あつかうのは、かなりむ

ずかしいんだけど、まあ、そこは、ゆうしゆうなほくだから、問題はないんだけど。」マリエルがこたえました。

「じまんはいいから！ 早く教えてよ！」ライアンがせつつきます。

「あの岩山のとっぺんまで、魔法のレールをひきます。そこからあいだをあけずに、つぎの岩山のとっぺんまでレールをひきます。そのレールの上を、トロツコですべていくんです。まあ、いうのはかんたんなんですが、問題は、ちよつと、スピードがはやいってことかな。」

「は、はやいって、どのくらい？」マリエルの言葉に、ロビーが心配げにたずねました。「いえ、落っこちたりしませんから、安心してください。せいぜい、馬で走る、ぼいくらいのはやさですから。」

「ええっ！ そ、それって、すごいスピードなんじゃ……」ロビーがいましたが、マリエルはもう、岩山のふちに立って、魔法の言葉をとなえはじめております。

「こうなつたら、かくごをきめるしかないね。」ライアンが、ロビーの腰をぽんとたたきながら、いいました。

そして……。

「まじかる・すくりゅー！ るーばる、ろーばる、すろー！」

マリエルのその言葉とともに……、ふおおおん！ 青くかがやくとうめいな魔法のトロッコが、三人のからだのまわりを、しっかりと取りかこんだのです！ ちゃんといすもあつて、前の席にマリエルが、うしろの席にロビーとライアンが、すわれるようになっていました。へえ、これはすごい！ そう思ったのも、つかのま……。

「それじゃ、しっかりとつかまつててくださいいよ。あれごるー！ れでゅー！」

マリエルが魔法の言葉をさげぶと、目の前に、同じく青に光りかがやく、魔法のレールがのびてきました！ そしてみんなの乗ったトロッコは、きゅきゅきゅきゅきゅー！ うしろのしやりんを思いつきりスピンさせてから、そのレールの上を……、ひゃん！ はじめっから、全そくりよく！ ロビーの影をおいてけぼりにしていつてしまいうなくらいのもうスピードで、走り出したのです！（ど、どこが、馬で走るばいくらいのはやさなの！ ぜったい、もつとはやいよ、これ！）

「ぎゃあああ〜！」

ああ、やつぱり、思った通りでしたね……。こんなときに感じるいやなよかんというものは、いつでもできてきちゅうしてしまうものなのです……。ちなみに、さげび声はロビー

です。ライアンはひとこと、「ぎゃ。」といったきり、もう放心じようたい！ さげび声も出せませんでしたので。

その、はやいことはやいこと！ まわりの景色があつというまに、うしろへとすつ飛んでいきます！ そしてさいしよの岩山が、もうせまつてきてしまつて……。

「あれごるー！ れでゆーー！」マリエルがさげぶと、そのつぎの岩山にむかつて、また新しいレールがぎゅいーん！ のびていきました！ そして魔法のトロツコは、ぐいーん、ひゃんん！ スピードをまつたく落とすことなく、つぎの岩山へとむかつてむきを変えて、さらにつき進んでいったのです！

「ぎゃ……、あー……、あああー！ あー……、……」

もしあなたが、さいしよの岩山のそのてっぺんに立っていたとしたら、ロビーのひめいはこのようにきこえたことでしょう。まず遠くからひめいがきこえはじめ、あつというまに目の前をつうか、そしていつしゆんのうちに、ひめいも去つていくのです。うーん、かわいそうなロビー……（エリル・シャンティーンのエスカレーターやエレベーターに乗った場面からおわかりのように、ロビーはこういう乗りものが大のにがてだったのです。しかもつぎつぎと越えていく岩山の高さは、みんな同じじゃありません

でしたから、ぐいーん！ 急にのぼったり、こんどは、がくん！ 急こうかしたり……。まさにコークスクリュー！ またひとつ、ロビーのいやな思いでがふえてしまいましたね……）。

それからなん回、マリエルの「あれごる！ れでゆー！」がつづいたのでしようか？（つまりいくつの岩山を越えたのでしょうか？ ということです。）

「さあ、つきましたよ。ここからなら、アップルキントまでは、そんなにかかりませんから。」

マリエルがそういって、（ようやく）魔法のトロツコを消しました。ですけどロビーとライアンの耳には、そのマリエルの声も、ほとんどどいてはいなかったのです。ふたりはそのまま、ず……。ず……。いすにすわったしせいのまま、くずれていって、ペしゃん！ 地面にへたりこんでしまいました。

「ど、どうしたんですか？ ふたりとも。」マリエルがびつくりした顔をして、ロビーとライアンのことを見ました。どうやら、魔法を使うことがあたりまえになっているマリエルにとっては、このていどのはやさで空中をかけぬけていくなんてことは、ぜんぜんなんでもないことのようなのです。ですけどロビーとライアンにとっては、そうはいきませんよね。なにしろ、もし落っこちたなら、ならくの底へまつさかさま！ そんな空中を魔法のトロツコで、もうスピードで、のぼったりおりたり、かけぬけさせられ

ましたから！ これにはさすがのライアンでさえも、しんぞうばくばく！ ロビーにいたっては、さげびすぎてのどをからして、やっとたどりついた地面の上で、ばたんきゅー！ そのまま白目をむいて、ちがう世界へとはいりこんでいってしまいました……（いえ、まだ生きていますから、ご安心を。かろうじてですが……）。

「ちよつと、はやかったですか？ だいじょうぶだと思っただんですけど、すみません。ライスタ、だいじょうぶ？」マリエルがいましたが、ライアンが、やっとひとこと、こうこたえるのでせいっぱいでした。

「あのね、マリー……、つきからは、もつといろいろ、説明してからにしてね……」

とにかくこうして、マリエルのたのもしい（？）魔法のおかげで、ノランベつどう隊のみんなはラグリーンたちの里のあるそのすぐ近くの山道にまで、たどりつくことができたのです。マリエルのいうことには、ここから一マイルもいかない場所に、ラグリーンたちの里、アツプルキントがあるということでした。リズの家からアツプルキントまでは、八マイルだといっていましたから、つまりみんなはあのトロツコで、空中を七マイルも走ったのです！ すばらしいシヨートカットにはちがいありませんでしたが、かわいそうなロビーとライアン……（ところで、こんなにすごい、じえつとこーく・すくりゅーのじゅつでしたが、やはり魔法でしたから、よいところだけではなかったのです

(はやすぎてスピードのちようせつがきかないというのも、もちろん問題のひとつでしたが……)。この魔法は、四ぶんの一マイルまでの魔法のレールしか出せませんでした。ですからこんなかいのように長いきよりをいちどにかけぬけようと思つたら、四ぶんの一マイルごとに魔法をかけなおして、新しいレールをつぎたさなくてはならなかつたのです。そのためマリエルは、なんどもなんども魔法をかけなおして、ここまでたどりついたというわけでした。なんと、二十八回もレールをつぎたしたのです。

そしてこの魔法は、まさにコークスクリユーのように、「空中」をかけぬけていかなければならない魔法だつたということ。レールのはじまりと終わり、それぞれ十フィートまでは、かたい地面の上(こんかいは岩山のでつぺんでしたが)にふれてもよかつたのですが、レールの「とちゆう」は、まわり二十フィート内の空間になにか物体があつたりすると、そのレールは力を失つて消えてしまいました。ですから地面の上には、レールをひくことができなかつたのです。

そのほか、「レールのかたちはほとんどまつすぐでなければならず、五フィート以上はねじまげられない」とか、「さいていでも四回(一マイル)以上はレールをつなげつづけられるところでない」と、使うことができな」とか、「いちど使つてしまつたら、二十四時間たたないとふたたび使えるようにならない」とか、いろいろ。

この魔法はべんりな魔法であるのと同時に、とてもふべんな魔法でもありました。こ

の魔法をうまく使いこなすことができたのは、この場所が高く切り立った岩山がいくつもつき出た、けわしい山道だったからこそなので。マリエルは、まわりのじょうけん、魔法のじょうけん、そういうところをこんなかいもよくはあくして、この魔法を使いしました。こんな魔法をいつも使うことができたのなら、旅もぜんぜん、らくに進めましたけど、やっぱりそういうぐあいにはいかなかったのです。魔法を使うというのも、けっこうたいへんなんですね。

なにはともあれ。仲間たちはすぐに、ラグリーンの里まで進まなくてはなりません（その前に、ロビーを生きかえらせなくてはいいけませんね。いちおうマリエルもせきんを感じて、もりもりふあいとのじゅつという魔法を、ロビーに三回もかけてあげたのです。この魔法をかけると、げんきが出るとのことでしたが……、今のロビーには、あんまりききめがないようでした……。かけないよりは、ましですけど）。みんなは、マリエルは、すたすた、ライアンは、ふらふら、ロビーはそのライアンにささえられたうえで、とぼとぼ……、アップルキントへとつづくさいごの山道へとむかって、その歩みをふみしめていきました（残り一マイルは、こーくすくりゅーの魔法では進むことのできないところでした。このあたりは小さな岩山がたくさんならんでいたため、魔法のレールを出すとその岩山にレールのとちゅうのまわりの空間がふれてしまって、レールが消えてしまうのです。ですからマリエルは、こーくすくりゅーの魔法でいけるぎりぎりの

この場所で、魔法をといたというわけでした。

そしてここからの道のりは、岩ばかりの切り立ったがけの道がつづきました。そのためきよりは一マイルでも、みんなはこの道のりに、けっこう時間をくってしまったのです。時間にして、五十分くらいでしょうか？　そしてこの道のがあったからこそ、マリエルはきのうのうちにさきへ進むのをやめておいて、リズの家にとまることにしたというわけでした。いくらここにくるまでの道のりをこーくすくりゆーの魔法でかせげるとしても、そのあとのこの道のりを進むのは、ロビーたちには体力的にもむりがあるし、危険であるとはんだんしたのです（しかもこの場所には夜になると、ウィルオーウィスプとよばれる、魔法をまったく受けつけない、こわーいひとだまおぼけがあらわれるのです。ですからマリエルは、それをふまえた上でも、この場所を夜に進むのはやめておきました）。

そしてさきにここまでこーくすくりゆーの魔法できておいて、ここで野宿をするというのも、やはりやめておきました。それはこのあたりの岩山には、（さきほど説明したひとだまおぼけもふくめ）やはり空を飛ぶギルデイや、そのほかの危険な生きものたちなどが、たくさんいたからだったのです。こんなところで野宿するのは、いくら魔法の力の守りを使ったとしても危険であると、マリエルははんだんしたというわけでした。もつとも、こーくすくりゆーの魔法でここまでやってくるのかかる時間は、わずかに

十分ほどでしたけどね。それならばやっぱり、リスのおうちでゆっくり休んだ方がいいでしょう。

ちなみに、南東のトンネルにむかうための道のりは、こーくすくりゅーの魔法を使えるじょうけんの場所がほとんどなかったため、とちゅういちばんこうりつのいいところでの魔法を使ったとしても、トンネルまでいくためには、かなりの時間がかかってしまふという道のりだったのです。こんかいのアップルキントまでの道のりの中で、いきなりマリエルがこーくすくりゅーの魔法を使ったのは、そこがぐうぜん、いちばんこの魔法を使うのに、こうりつがよかつたからでした。この魔法で七マイルものきよりをかせげたのも、この道のりがこーくすくりゅーの魔法を使うのに、それだけてきしていたからこそだったのです。以上、こまかい説明、終わり。

そしてみんなは、その危険な岩の道をぬけ、つづくさいごの道にまでたどりついたのです。

東の空に、おひさまがのぼってくるころでした。あたりはだいぶ、明るくなってきました。そのやわらかな朝の光につつまれて、あたりの岩山は、ほわほわとしたやわらかなぬのがかけられているかのように、おだやかに、やさしく、かがやいていました。

この場所はガウバウたちのいたがけの道や、危険な生きものたちのすみかであったさ

きほどまでの岩の道とは、あきらかにちがっていました。岩の色は、あたたかなきいろ。そしてその岩に、たくさんの植物が生いしげっていたのです（ちようどシープロンドへとつづく山道にも、にた感じでした。これはアップルキントがとてすてきな場所であるということ、物語っていたのです。すてきな場所に近づいていくと、だんだんと、あたりのようすもすてきになっていく。わかりやすくいいですね）。岩かべのみどりの葉のあいだにさく、きいろや赤や白の、かわいらしい小さなお花たち。ですが、ふらふらのロビーとライアンには、まだまだそんなことを気にかけているよゆうもありません。さきほどの岩の道から、かれらはいっぱいっぽ、ふみしめるように、うつむきながら、マリエルのあとをくつついていくのでせいっぱいでした（さぞかし、長い道のりだったことでしょうね……）。

そしてついに……。

目の前が急に、ぱあっとひらけました。みんなはようやく、めざすラグリーンたちの里、アップルキントへとやってきたのです！（やーっとなつたよ、まったく。ライアンのかわりにいっておきますね。）

そこはまさに、らくえんのようなところでした。もうひと目で、それがわかるのです。冬も近いこのきせつだというのに、地面はいちめん、青々としたしほふにおおわれていました。同じく、あざやかな葉っぱをしげらせた、いきいきとした木々たち。その木々

にはオレンジのような木の実や、ほそ長いさやえんどう豆のような木の実が、あふれるほどのみつついたのです（じっさいあふれて、地面にたくさんこぼれ落ちていました）。地面にはたくさん「大きさがフィートほどの、白くてふわふわした、まるいわた毛のようなもの」が、あっちへこころこころ、こっちへふわふわと、動きまわっていました。これはその通り、毛玉草という草のわた毛で、このわた毛の中にこの草のたねがはいつていて、それをわた毛ごと風に乗せて、遠くまではこべるようになっていたのです（たんぽぽのわた毛ににいますね）。

このようなしぼふのらくえんが、それぞれちよつとした広場となつてあちこちにあつて、それらがまるで空中に浮かぶひとつひとつの島のように、上にも下にも、見渡すかぎりに広がっていました（じっさい、いくつかの島は地面からはなれて、ぷかぷかと空中をただよっていました！ エリル・シャンティーンのまちの空に浮かぶ島は、魔法で浮かんでいるわけでしたが、こんどはいつたい、どういうしくみになっているのでしょうか？）

あとでしらべたところによりますと、じつはこの島は、島全体が、ふわふわ草という草がからみあつてできているのだということ、この草が島そのものを、ちゆうに浮かべているのだということでした。ふしぎな草があるものですね。そしてこの里全体は、背のひくいたくさん岩山にすつかりかこまれていて、それらの岩山が、この場所

をまったくもってかくれ里とよぶのにふさわしい場所へと、変えていたのです（岩山にまわりをぐるりとかこまれた谷の中に、しばふのだんだんぼたけが広がっているところをそうぞうしてもらえれば、この里のイメージに近いと思います）。その光景には、ふらふらのロビーとライアンもすっかり感心して、そこでふたりは、ようやくきちんと目がさめたくらいでした。

と、そこにとつぜん……。

びゅうっ！

頭の上に、なにかがふってきたような、風を切る音がひびきました。ロビーとライアンが、なにかと思つて見上げると……。

「こらあーっ！ 逃げるにやあーっ！」

見上げた場所ではなく、地面の方から、子どものような声がきこえました（これはつまり、声のぬしが空からジャンプしておりきて、ロビーとライアンが上をむいたそのわずかなあいだに、もうすでに地面へとおり立っていたということなのです。それほ

ど、この声のぬしはすばやいのです。こ、この「にや」という言葉づかいは！

ロビーとライアンが、あわててこんどは、しせんを下におろすと……。しばふのさきに、大きさが二フィートほどのすばやく逃げるきいろいろボールがひとつと、そしてそれを追っかけている、つばさの生えたねこの種族の者がひとり、いるのが目に飛びこんできたのです。それはまさしく、このかくれ里に住む、知る人もすくない空飛ぶねこの種族、ラグリーンの者にほかなりませんでした。

そのラグリーンはきいろいろボールを追っかけて、あつというまに、むこうの島にまですっ飛んでいってしまいました（ちなみに、このボールはその通り、「毛玉草きいろバードジョン」とよばれている草で、ふつうの白い毛玉よりばいほども大きいのです。そしてこのきいろいろ毛玉は、まるで自分の意志を持つているかのように、どんどん逃げるのです。うくん、ふしぎです）。ロビーとライアンが、ぼかーんとして、そのラグリーンが消えていった方をながめっていると……。

びゅうっ！

また、さつきの風を切る音です！　そして、ふたりがその方をむくよりもさきに……。

「あれえー？ ひよつとしてー、お客さんかにやー？」

ふたりのうしろから、とつぜん声がありました！ びっくりしてふりむくと、今さっきむこうの島のかなたに消えていったはずのそのラグリーン種族の者が、かれらの目の前に立っていたのです！ な、なんてすばやいんでしょう！

そのラグリーンは、身長四フィートほど。ラググリーンの中では小さい方です。それもそのはず。このラグリーンはまだ、八さいくらいの子どもでした。ちなみに、男の子です。とつてもかわいらしい、あいきょうのある顔。くりくりとした、ぱっちりのおめめ。ふわふわくりん！ とくせのついた、茶色のかみの毛（いわゆる、ねこつ毛というやつです。ねこの種族ですから）。頭の上にびよこんと乗っている、大きなふたつのねこ耳。くねくねと動く、長いしっぽ。どれを取っても、ねこそのもの！（ねこの種族ですから。）そしてラグリーンのさいだいのとくちようである、その背中の大きな羽。ややこがね色のまじった白い羽がふたつ、きれいにおりたたまれて、その背中を美しくかざっていました。

「あれえー？ お兄ちゃん、リスレファンニャおねえちゃんによ、お友だちだねえー？」ラグリーンの男の子がいました（「によ」は「の」のことです）。どうやらマリエルのことを見て、そういつているようです。

「リスレフアンナおねえちゃん？」マリエルが思わず、たずねました（「ニヤ」は「ナ」となるわけです）。

「そんな人に、知りあいはいないよ？ だれかと、まちがえてない？」

マリエルがいましたが、ラグリーンの男の子はゆびを口にくわえて、首をかしげていました。

「あれえー？ ふしぎふしぎ。おかしいにやあー。まあ、いつかあー。」

男の子はそういうと、とつぜんぺこりと頭を下げて、三人のお客さんたちにいいました。

「ぼくは、リュキアっていうによ。お兄ちゃんたち、里長さんに、ごよう？」

さとちよう、つまりこの里をおさめている、いちばんえらい人のことです。村でいえば、村長さんといったところですね。

「うん、ぼくは、マリエル。こちらは、ロビーさん。そして、こつちがライスタ。」マリエルがみんなのことをしようかいします。

「ライスタって、しようかいしないでよ！ ぼくは、ライアンだってば！」ライアンがぶんぶん怒っていました。

「あれえー？ マリエルさんって、やつぱり、前にきた人だねえー。じゃあ、やつぱり、おねえちゃんによお友だちじゃにやーい。」リュキアという男の子が、マリエルにそうい

いました。でもやつぱり、マリエルにはぜんぜん、心あたりがありません。

「そのおねえちゃんつてのが、だれだか？ ぼくにはわからないな。あとで、しようかいしてくれる？ 前に会った人なのかもしれない。名まえをおぼえていなかったのかな？ ぼくの頭なら、忘れるはずがないんだけど。」マリエルがさりげなく、じまんをいれます（うしろでライアンが、「んべっ！」と舌を出していました）。

「まあいいや。とにかく今は、里長さんに会いたいんだけど。あんないしてくれるかな？」

マリエルのその言葉に、リュキアはにっこり笑っていいました。

「いいよ！ っっちー！」

それからみんなはリュキアにあんないされて、里長さんの家がある、その大きな木のある広場までやってきました（ところで、この里はラグリーンむけに作られておりまして、みんなはひとつの広場からつぎの広場までいくのに、けっこうくろうしました。なにしろそれぞれの広場は、みんなひとつづつが島のようになっていましたから、つぎの広場に行くためには、よいしょよいしょ！ わきにつくられたお客さん用のかいだんを、のぼったりおりたりしていかなければならなかったのです。ラグリーンたちならば、ぴょーん！ とジャンプしたり、羽でふわふわ飛んだりして、かんとんにいどうできま

したが、ロビーたちは、そうはいきませんでしたから。

ですからみんなは、さいしよはちゃんど、かいだんを使っていどうしていましたが、そのうち、めんどうになって……、いえ、時間のせつやくのため、ふたたびマリエルの魔法をたよることにしました。ふわふわえんぼんのじゅつ、それと「ふわふわえんぼんのじゅつ・ななめバージョン」などを使って、みんなは島から島へ。里長さんの家のあるこの広場まで、たどりついたというわけだったのです。うくん、やつぱりまじゅつしがあると、らくだなあ。っていうか、ふわふわえんぼんのじゅつって、ななめバージョンがあったんですね……。そして里長さんの家は、その大きな木の上につくられていたのです（いわゆるツリーハウスというやつです。その大きいものでした）。カルモトの家のある、あのとんでもないほどの大きさのルイズの木とくらべたら小さいですが、それはあの木と、くらべたら話。この里長さんの家がある木も、ふええ……。と見上げてしまうくらい、大きくてりっっぱな木でした。

その木が生えているところは、この広場のまん中でした（この里のまん中でもありません）。そして広場のそれがいいのところは、いちめんのはたけになっていたのです。うえられていたのは、なんともふしぎな作物でした。まるで、巨大なねこじやらし！ 地面から生えたくきの上に、人の背たけほどもある、みどり色のふさふさしたねこじやらしみたいなかたまりが、のびていたのです。その名も、おつきいじやらし！ これは

食べるのではなく、その実をほしてかんそうさせたものをください、おふとんやクツシヨンの中にいれたり、そのまま火をもやすねんりようにしたりして、使うのです（にぎりこぶしくらいの大きさの実ひとつで、だいたい四時間くらいもえているのだそうです）。また、ラグリーンたちは食べませんでした、この実をこなにしたものをねってパンのようにしたものは、かれらのかつている鳥ややぎたちの、大好物でした（そしてその鳥のお肉や、やぎのミルクやチーズが、ラグリーンたちの大好物だったのです）。いろいろと、やくに立つ植物なんですね。

ですがこの場所にきたロビーとライアンは、それらのことよりもなによりも、まずまつさきにおどろきの光景をまのあたりにしました。大きな木が立っているということや、巨大なねこじやらしみみたいな作物がうえられているなんてことは、それにくらべたら、ぜんぜんたいした問題ではなかったのです。では、そのおどろきの光景とは……？（びつくりするものをいちばんさいごに説明するという、わたしがよくやるパターンですね。すいません。）

里長さんの家がある、その大きな木。その木のまわり。葉っぱやえだのまわり。その空中に、たくさんの生きたお魚さんたちが、むれをなしておよいでいました！ ええっ！ いったい、どうなってるの？

空中を、生きた魚がおよいでいる。こんなの見たことありません！（エリル・シャン

ディーンのお城のホールで、魚のかたちをしたちようこくが空中を魔法でただよっているのは、見たことがありませんが、こっちは生きた、ほんものの魚だったのです！）じつはこれこそ、アツプルキント名物、空中お魚ばたけ！　なんとこの木のまわりでは、まるで水の中にいるかのように、魚たちが自由におよぎまわることができました。魚たちは、ふつうの魚たちでした。そしてこの木も、大きいということをのぞけば、いたってふつうの木だったのです。では、なぜ？

ひみつは、この木の根もとの地面にあり。この木の根もとは、まわりをぐるりとさくでかこわれていましたが、そのさくの中の地面にしきつめられている土は、水の女神のせいなるみずうみの底から取った、魔法の土でした。この土の上では、たとえそこが地面の上であつたとしても、魚たちは女神の力によつて、水の中と同じように、空中で暮らすことができたのです！　なんとも、しんぴ的な力ですね！

そして魚たちが、こんなにたくさんここにいるわけ。それはすぐにわかりますよね。ラグリンたちは、ねこの種族。そしてねこの大好物はといえは？　そう、お魚です！　ここは里長さんの家でもあり、そして同時に、ラグリンたちの好物の食べもの、お魚を育てている、いわば「ようしよく場」だったというわけでした。

これでこの里が、ラグリンたちのらくえんとよばれているりゆうが、おわかりいただけたかと思えます。おひさまさんさんの光の下に、逃げまわるわた毛ボール。ねこ

じやらし。そしてお魚さんたちがいっぱい。みんな、ねこの大好物ばかりじゃありませんか！　ねこの種族のラグリーンたちにとつて、まさにここは、らくえんそのものだったのです（大好きなものにかこまれたせいかつ。いや、うらやましいかぎりです）。さて、おどろくのはこのくらいにしておいて……、そろそろ里長さんのおうちにおじやますることにしましょう（ちなみに、おどろいているのはロビーとライアンの、ふたりだけでした。マリエルはいぜんにここへきて、この空飛ぶ魚たちのことも見たことがありましたので、「あいかわらず、すてきな景色だね。」とリュキアと話していただけだったのです）。

ふいふいん！

ふたたび、マリエルのえんぼんエレベーターです（さすがにこれだけ使ってしまうと、もう、しんせん味がうすれちゃいましたね）。みんなはエレベーターに乗って、里長さんの家のそのげんかんの前まで、のぼってきました（ちなみに、里長さんの家はエレベーターを三回のぼったところがありました、一回のぼったところと二回のぼったところにも、同じような木のおうちがたっていました。ですからロビーとライアンは、それらのおうちが里長さんの家なのだと思って、二回ともそこにはいるうとしましたが、一けん目のきれいな家は、魚たちのせわをしているかんり人さんふうのおうちで、二けん目のかざりけのない家は、里長さんの家のそこでした。まぎらわしい！）。

「くんくん。里長さんち、今日によ朝ごはんは、お魚フライだあ。おいしそーだにやー。」リュキアが鼻をくんくんかいで、思わずよだれをたらしながら、いいました（それはいいから、早くあんないしてね）。

と、そのとき……。

「おや？ リュキアくんじゃありませんか。なにか用ですか？ おや？ その人たちは？」

里長さんの家の入り口から、かわでできたチョッキを着た、三人の人たちが出てきたのです。その人たちのことを見て、ロビーもライアンも、またびっくり！ とうぜん、ラグリーンの里長さんの家でしたから、そこにいる人たちもみんな、ラグリーンなんだとばかり思っていました。なんとその人たちは、ねこではなくて、ねずみ！ ねずみの種族の人たちでした！ どういうこと？

あとでマリエルからきいた話なのですが、このねずみの種族の人たちはラットニアという種族の人たちで、ラットニアはここからさらに山のおくに分けいった、かくれ里に、ひっそりと住んでいる種族なのだということでした。ですからラグリーンたちと同じく、アークランドの人たちでこのラットニアたちのことを知っている者は、ごくわずかだったのです。そのねずみの種族の人たちが、なぜ、ねこの種族のラグリーンの、里長さんの家にいるのかというと……、それは、むかしむかしのあるできごとが、きっかけ

なのだといいことでした。

むかしラグリーンとラットニアは、けんかばつかりしていた、仲の悪い種族たちだったのです。そのりゆうは、今でははつきりしていないということでした。なんでも、ラットニアの王さまがかつていたペットのねずみを、ラグリーンの王さまがかつていたペットのねこが、食べてしまったとかなんとか……。これがしんじつかどうかはわかりませんが、とにかくそういつたわけで、このふたつの種族たちは、いつもあらずつばかりいたのです。

そこにとうじょうしたのが、とあるひとりの、シルフィア種族の者！ どんな方法を使ったかはわかりませんが、とにかくラグリーンたちとラットニアたちは、そのおかげで、もとの通りの仲のよい種族たちにもどることができました。

それからおたがいの種族の者たちは、それぞれの仲をこのさきもずっと、深めていこうと考えるようになりました（すばらしいことです）。そのひとつとして、おたがいの里から相手の里へ、友好のための大使を送ることにしたのです。それぞれの里のよいところを、おたがいにべんきようしあい、分けあつていこうというのがそのもくてきでした。そして今、里長さんの家から出てきたこのねずみの種族のラットニアの者たちこそが、そのラットニアの里ロムルンガルドからの、大使たちだったというわけなのです（以上、説明終わり。では、つづきを）。

「あによねえー、お客さんだよ。マリエルさんに、ロビーイさんに、ライスターさん。」
ラットニアたちの言葉に、リユキアがこたえました（「ほら、ライスタつておぼえちやつたじゃんか！ マリーのせいだよ！」ライアンがマリエルに、ぶんぶん怒っていました）。
「おお、これはこれは。」ラットニアのひとり、うやうやしくおじぎをしてそれにと

たえます。どうやらこの人たちは、とてもしんじつな、れいぎ正しいりっぱな人たちのようです。ちょうどベーカールランドの白の騎兵師団の、騎士たちのような感じでした（はじめてロビーのほらあなにやってきたときのベルグエルムとフェリアルも、こんな感じでしたよね）。

ラットニアたちが、じこしようかいをおこないます。

「われわれは、ラットニアの里、ロムルンガルドからの大使であります。わたしは、だ
いひようをつとめます、リーリングル・リマシリングルスターと申す者。いご、お見
知りおきを。」

「わたしは、ランクランドール・ラルールツトール。よろしく。」

「同じく、プリンクポント・パルピンプルラツクルです。よくおいでくださいました。」
え、つと……、リーリン、グルさんと、ランランドーさん。パルピンプル……、あ
あ！ ぜんぜんおぼえられません！ なんでこんな、舌をかみそうな名まえばかりな

の？

（名まえのことは、とりあえずおいておいて……）かれらのあいさつに、マリエルが同じくれいき正しくおじぎをして、こたえてかえしました（ちなみに、マリエルもかれらに会うのはこれがはじめてでした。いぜんここへきたときには、いずれもラットニアの大使たちは、くにへ帰っていたときだったのです。大使たちはいちねんの半分ずつを、おたがいの里でそれぞれすごしました。それに大使たちも十数人はおりましたので、いつも同じ人がいるとはかぎらなかつたのです。よりによって、こんなにくぎつな名まえの人たちばかりがきてしまうとは！）。

「ぼくは、マリエル・ファイアンリー。エリル・シャンデインからの使いです。こちらにいらつしやるロビーさんに、道をしめすことが、ぼくのつとめなのです。ここに、リズ・クリスメイデインという男がきているでしょう？ そのことで、ぜひ、里長さんのお力をおかりしたいのですが。」

その言葉をきくと、ラットニアたちは急におたがいの顔を見あわせて、なにやらもごもごと話しはじめました。「知らないみたいだぞ。」とか、「われらから伝えていいものか。」とか。いったい、なんのことなのでしょう？

しばらくして、ラットニアたちはマリエルの方をむいてこたえました。

「そうでしたか。リズ……、さんでしたら、今、たきのみずうみに出かけているはずで

す。どなたか、ラググリーンの方に、あんないをお願いしましょう。」
と、そのとき……。

家の中から、ひとりのラググリーンの男の人が出てきました。ねんれいは、四十だいのなかばくらいでしょうか？（ちよūdアルマーク王と同じくらいでした。）身長は、ロビーよりもちよつとひくいくらい。からだはとてもほそく、すらつとしていましたが、がつちりとひきしまつていて、力強い感じがします。長いねこつ毛をうしろでひとつにたばねていて、それを前に持つてきて、胸の上にとらしていました。すべてを見通すかのような、するどい目。まるでけんじやのようなたたずまい。ひとめでこのラググリーンの男の人が、すばらしい力を持ったゆうしゆうなるしどうしやであるということが、知れました。そしてこの人物こそが、ロビーのさいごの旅において、なにもものにもかえがたい、とても重要なやくわりを果たす人物となるのです。

「おお……！　ほんとうに……、ほんとうに、こよときがやつてきた……！」その人はロビーのことを見るなり、ふるえる声でそういいました（こんなになりつばな感じの人でも、やつぱりラググリーンのしやべり方です。かれらのしやべり方は、読者のみなさんには、ちよつときき取りづらいかもしれないかもしれませんが、わたしもありのままに伝えていきたいと思いますので、どうぞごかんべんを）。

「こよアーケランドによ、しれんによとき……。精霊王さまによ、よきにやさつた通

りだ。」

精霊王さまですつて？ これはなんだか、ただごとじゃない気がします！

「ラフェルドロード里長、おひさしぶりです。」マリエルがぺこりとおじぎをして、あいさつしました。なるほど、この人が里長さんだったんですね。思っていたよりもずっと若いので、ちよつといがいでした（もつとおとしよりなのかと、かつてにそうぞうしていました）。はぐくみの森のランドン・ホップ村長や、フログルのわが家トーディアの、モラニス・レンブランド長老。どちらもだいぶ、おとしよりでしたから。

「精霊王さまの、よきとは？ いったい、なんのことなのですか？」マリエルが、ラフェルドロード里長にたずねます。まあ、とうぜんのしつもんです。

「うむ。」ラフェルドロード里長が、しつぽをからだの前にまわして、そのさきを手でなでながらこたえました（これが里長さんのくせのようでした）。

「今から五年ほど前によことだ。こによアップルキントに、ふしぎにや客人がおとずれた。そによ者は、精霊王さまによ、使いだという。そして、そによ者がいつしよにつれてきた、十さいによウルファによ少年。それこそが、きみなによだ、ロビーベルク。わたしはきみを、はるかにや北によ地へとほこぶように、たによまれたによだよ。」

な、なんと！ このアップルキントの里長、ラフェルドロードこそが、アークランドの北の地の森へとロビーのことをほこんだ、そのちようほんにんだったのです！ なん

という、運命のめぐりあわせなのでしよう！（そのときのことを、ここですこし説明しておきます。ロビーはそのとき、イーフリープでのきおくを消され、北の地の森の入り口にはこぼれるまでのあいだ、ずっと眠ったままでした。ですからロビーは、自分がどうやってその地までやってきたのか？ わからなかったのです。ロビーはこのラグリーンの里長ラフェルドロードの背中に乗せられ、そのつばさの力をもって、空から北の地の森まではこぼれていきました。

目がさめたとき。ロビーはひとりぼっちでした。ロビーはそのまま、さそわれるように、目の前の森の中へと進んでいったのです。そしてさいごに、ロビーがたどりついたのは……、そう、かなしみの森とよばれる、さびしげな森の中の、うちすてられたほらあなでした。）

ラフェルドロードがつづけます。

「そして、精霊王さまによ使いは、わたしにこういった。『こによウルファによ少年は、よちに、たいへんにや運命によ中へとふみこんでいくことにやる。ラフェルドロードよ。わが、とによぎみ、精霊王さまは、よきにやされた。こによ少年は、こによさき、ふたたび、そにやたによ前にあらわれることとにやるだろう。そして、そによときこそ、こによアークランドによ、しれんによとき。さいごによ運命によときを、むかえるときによによだ』と。」

ラフェルドロードの言葉に、マリエルは静かにうなずいてみせました。

「そによ……、いえ、その通りです、里長さん。このアークランドは今、運命のときをむかえています。まさに、いつこくをあらそうのです。」

ロビーもライアンも、しんこくな顔をして、マリエルの言葉にこたえます。

「そにやたたちによ、旅によもくてきは、よくわかった。」ラフェルドロードはすべてをりかいたかのように、そのひとみをとじていました。

「わたしは、精霊王さまより、すべてをたくされていいる。わたしは、わたしによ運命に、したがうによみだ。」

そしてラフェルドロード里長は、ゆつくりとそのひとみをひらいて、ロビーにいったのです。

「ロビーベルク。わたしは、もういちど、こによつばさをもつて、きみによ手とにやり、足とにやろう。きみは精霊王さまによところへいき、さいごによ運命によ力を手にする。そによあときみは、さいごによしれんによ中へと、旅立たねばにやらにやい。それはもう、わかつていいるにや?」

ロビーは静かに、ラフェルドロードの言葉にこたえました。

「ラグリーンをだいひようして、ロビーベルクよ。きみに、敬意によ心をあらわす。わたしはきみを、ほこりに思う。ラグリーンは、持てるかぎりによ力をもつて、そにやた

たちに協力するだろう。」ラフェルドロードが静かにいいました。

「あなた方の旅に、心からの敬意をひようします。われらラットニアも、すべての力をもつて、アー克蘭ドのためにつくしましょう。」三人のラットニアたちも、ラフェルドロードにつづいて、ロビーたちにあつい敬礼をおくりました(かれらラットニアたちは、こののち、南からのやばんな勢力が黒の軍勢に加勢するのを防ぐために、その南の守りのかなめとして、かつやくすることになるのです。そのかつやくの場面は、ざんねんながらこの物語の中では語られません、かれらのはたらきは、ほんとうに大きなものでした)。

「まずは、リズ・クリスメイデンだったにや。」ラフェルドロードがいました。「かによ……、いや、かれは今、たきによみずうみにいる。朝によ日光よくに、出かけているところだ。使いによ者に、あんにやいをさせよう。」

「それにやら、ぼくがいくよー。」リュキアが、あいだにわつてはいました。「ぼくにやら、よく、みずうみまで、あそびにいくもんー。」

リュキアがそういうと、急にラフェルドロードがリュキアのことを手まねきして、それからふたりで、なにやら話しはじめました。「あによことは、しゃべつてはにやらんぞ。」とか、「われらによ、おんじんによ意志だ。」とか。いったいさつきから、なんのことだというのでしょうか。それに対してリュキアの方も、「ええー、にやんでー。」とは

じめはしぶっていましたが、やがて「わかった、へいきだつてばー。」としようちしたみたいでした。

「ここによりュキア・リストネルが、そこにやたたちをあんにやいする。たきによりュキアは、ここによ岩山によ、おくだ。」

ラフェルドロードがそういつて、うしろにそびえる岩山のことをゆびさしました。たきのみずうみというのは、その通り、たきのあるみずうみのことでした（すでになん回か名まえが出ていましたので、みなさんもちよつと、気になつていたことでしょうが）。なんでもみずうみのまん中にひとつの島があつて、その島にある山から、いつまでもかれることのないたきが流れ落ちているといふのです。ここからそう遠くないといふことでしたので、仲間たちはさつそく、ラグリーンの男の子リュキアのあんで、リズのいるといふそのみずうみへとむかうことにしました。

「あ、そによ前に！」急にリュキアがいました。「里長さん、ごほうびに、今、魚によフライちよーだい！」

やれやれ……。ラフェルドロードはあきれたように、おくのだいどころからあげたての魚のフライを三びき持つてきて（自分の口にも、一びきくわえてきたようですが……）、リュキアにあげました。

「さいごによ旅によ、道によりによことについては、おによすとあきらかとにやろう。」さいごにラフェルドロードが、旅立つてゆくロビーたちにいきました。「すべては、精霊王さまがみちびいてくださるはずだ。心配せずに、イーフリープへとむかわれるがよい。」(ノランもいつておりました通り、怒りの山脈へとむかうさいごの道のりのことについては、旅の者たちにとつては、すべて精霊王のみちびきにたくされていたわけでした。マリエルでさえも、ノランからその道のりのことについては、きかされてはいなかったのです。精霊王のもとへゆけば、それはおのずと、あきらかになるだろうと。)その言葉に、ロビーは深くかんしゃして、ただ心のこもったみじかい言葉を、おくつてかえすばかりだったのです。

「ありがとうございます。ほんとうに、ありがとうございます。」

みずうみまでは、たいしたきよりではありませんでした。岩山のあいだにつづくほそい道を、いちれつになって進んでいくと……、目の前に、なんとも気持ちのよい、すんだ水をたたえた大きなみずうみがあらわれたのです。

「ここだよー」リュキアが、うれしそうにいきました。

そこはまさに、らくえんとよぶのにふさわしいところでした。アップルキントはねこの種族のラググリーンたちにとって、まさにらくえんでしたが、ここはラググリーンたちで

なくたって、だれもが、らくえんだとみとめるはずです。みずうみから渡る、ここちのよい風。ささあー、とたなびく、美しく静かな水の音。そしてみずうみのほとりにさきみだれる、たくさんのお花々。鳥の声……。ほんとうに、こんな場所はさがそうとしたって、なかなか見つかるというものではありません。まさに、しぜんの宝物。この場所はそんな言葉がぴつたりとあう、しぜんからのすばらしいおくりものでした。

ロビーとライアンはもちろんでしたが、マリエルも、この場所にきたことはありませんでした。マリエルがアップルキントにきたのは、じつは二回だけでしたので、このみずうみにくるきかいがまだなかったのです。

そんなマリエルが、あたりをきよろきよろと見渡して、リズのことをさがしていると……。

「あつ、あそこー。およいでたみたいだねえ。今、みずうみから、上がってきたよ。」リユキアがみずうみの右の方をゆびさしながら、いきました（こんなきせつにおよいでのの！ とびつくりされるかもしれないませんが、このみずうみの水は、じつはとつてもあたたかいです。さらにそもそも、この場所自体があたたかかったです。このみずうみのまわりは、精霊の力がとても強いのです。風の精霊はこのあたりの空気を、植物や動物にやさしいあたたかなものにたもってくれておりましたし、水の精霊は同じく、このみずうみの水を、魚や水の生きものたちにやさしいあたたかなものに変えてくれていま

した。ですから、ふつうならまったくもって寒中水えい！ というようなこのきせつでも、ここちよくおよぐことができたのです。そしてリズもまた、精霊の種族。リズはもともと、およぐのが好きでしたので、精霊の力のあふれるこのみずうみでおよぐのは、とつても気分がいいのでした。

ですがそれがこのあと、みんなにとつてなんとも思いもかけないじたいをまねくことになろうとは、このときだれもが、よそうすらしていなかったのです。

「あれえー？ ああーっ！ まいったにやあー。」

リュキアがとつぜんそういつて、両手で目をおおいました。どうやら、みずうみから上がってきたリズのことを見たから、そういつて目をおおったようです。いったいどうしたの？ みんながそのリズの方を見てみると……。

「ああーっ！」

ロビーもライアンも、びっくりしてきけんできました。ですがですが、だれよりもびっくりしてしまったのは、リズのことをよく知っている、マリエルだったのです。

「え……う？ ええええーっ！」

なんともマリエルらしからぬ、びっくりぎょうてんの声！ それもそのはずでした。マリエルが見たもの、それは今までマリエルがいただいていた、リズに対する見かたを、まったくもってくつがえすものでしたから。

みずうみから上がってきた、青いかみの若者。すらりと美しいそのからだには、まったくなんにも身につけられていませんでした。つまり、まっばだかだつたのです。でもそれだけでは、みんながこんなにおどろくことはありません。水着に着がえるのがめんどうで、はだかでおよぐ。いいかげんなリズならやりかねません。みんながおどろいたのは、そんなことではありませんでした。

「ああーっ！ マ、マリエルじゃんか！ なんでここにー！」

リズがマリエルのさげび声に気がついて、こちらをむきました。あわてて、地面からひろい上げたタオルで、からだをかくします。ですがもう、おそいのでした。マリエルもロビーもライアンも、みんなが、リズのかくされたひみつに気がついてしまいましたから。

リズ・クリスメイデイン。シルフィア種族の青年で、エリル・シャンティーンのもと、剣じゆつしなんやく。精霊王のトンネルをあけることのできる、ゆいいつの男……。ですがノランのその説明は、まちがっていました。ゆいいつの男……。ちがったのです！

なんとなんと、リズは男ではありませんでした。女だったのです！（つまり男の人と女の人のひとめでわかるちがいを、みんなは見てしまいました。胸……。もありました。が、それよりもっと、はつきりとわかる方を……。あんまりはつきりいうとまずいので、このへんにおきましよう。いわなくても、おわかりですよね？）

「なんで、じゃないよ！ ぼくの手紙も読みもしないで！ それに、これってどういこと！ お、女だったの？ ぼくを、だましてたのか！」

マリエルが、怒りとおどろきと、もうなんともいえないふくぎつな気持ちを、全部まとめてリズにぶつけました。その気持ちもわかりますよね。ずっと男だと思っていた友だちが、じつは女だったなんて、こんなにおどろくこともありませんもの。そしてさきほどからラフェルドロード里長やラットニアの大使たちがひそひそと話していたことも、これでわかったのです。リズは自分が女であるということ、ラグリーンたちには伝えていきました。ですがノランやマリエルや、お城の人たちには、まだ話していません。女だということがばれると、いろいろとめんどろなことが起きそうだし、というのがそのりゆうでした（すでに自分がシルフィアだともらしてしまったことで、けっこうめんどろなことになっちゃってましたからね。それに男だと思われていた方が気らくだから、だまっておこう、というりゆうも大きかったです）。

ですからリズは、マリエルといっしょにアップルキントにきたとき、ラグリーンたちには「マリエルには自分が女だということをお願いしよにしていてくれ」とお願いしていました（そのお願いは、ラグリーンたちからラットニアたちにも伝えられました）。そしてリズは、シルフィア種族の者。シルフィアに大きなおんがあるラグリーンたち（とラットニアたち）は、リズのそのお願いを、かたく守ってきたというわけなのです（で

すけどリュキアはまだ小さくて、そのことにあまり頭がまわっていませんでした。ですからはじめ、やってきたマリエルのことを見て、思わず「おねえちゃんのお友だち」といつてしまったのです。

そしてもうひとつ。リズというのは男の人の名まえで、じつはこれは、リズが自分で考えてつけた名まえでした。リズのほんとうの名まえは、リスレファンナといいました。リスレファンナは、女の人の名まえ。ですからリズは、男の名まえであるリズという名まえを、ふだんは名のついていたというわけなのです（でもリュキアはリスレファンナという名まえの方しか知りませんでしたから、「リスレファンニャおねえちゃん」とよんでいたというわけでした。以上、説明終わり！）。

さて、なぜがとけたところで、リズのいいわけをどうぞ。

「い、いやさ、いつかは、いおうと思ってたんだよ。ついつい、それがのびちゃって、いづらくなっちゃってさ。ほんと、だますつもりはなかったんだよ、うん。」
ですがマリエルは、ぜんぜんなつとくしません。

「そんないいわけが、通ると思ってるの！ ぼくだけじゃなく、おししようさままでだまして！ いいかげんにも、ほどこつてもものがあるんだから！」

「いや、べつに、ノランのじいさんにまでいわなくてもいいじゃん。それにほら、べつに、女か？　なんてきかれなかつたし、問題ないだろ？」

リズのあきれたいいわけに、マリエルはもうかんかんです！

「問題あるよ！　それに、おししようさまにむかつて、じいさんとはなんだ！　もう、怒ったぞー！」

マリエルの持つているつえのさきから、ばちばち！　ときいろい火花が！（ライアンもいぜん、同じ目にあいましたよね。）さあたいへん！　いったいリズは、どうなっちゃうんでしようか？

「ちよ、ちよつと待って！　マリエルくん！」

やっぱりここで、ロビーのとうじょうですね。こまったときの、ロビーだのみ！

「べ、べつに、今のぼくたちにとつては、リズさんが、男か女か？　なんてことは、そんなに重要なことじゃないんだし……、リズさんも、悪気があつてのことじゃなかつたみたいなんだから、もう、ゆるしてあげて。」ロビーがリズとマリエルのあいだにはいつて、マリエルのことをせつとくしました。

「そ、それに……」ロビーはそこまでいって、急に顔をまっ赤にそめてしまいます。

「あ、あの、はじめまして、リズさん。ぼくは、ロビーです。それで、あの、できれば……、服を着てほしいんですけど……」

そうでした！ さつきからずっと、リズははだかんぼうのままなのです！ しかもいいわけをしているあいだに、タオルがめくられて、ちらちら……。ロビーはすっかり、はずかしくなってしまうたというわけでした。

これにはマリエルも「むむむ……！」とうなって、ロビーの言葉にしたがうしかありません。よかった、とりあえずロビーのおかげで、この場はなんとかおちつきそうですね。ふう、やれやれ。

さて、リズもすっかり服を着て、これでいっけんらくちやく！ とはまだいきそうにありませんが、とにかくひとだんらくです（ところで、リズが着がえているあいだ、みんなはもちろんうしろをむいていました）。

服を着たリズは、ほんとうに男の人みたいでした。その美しい青いかみは、男の人みたいにみじかく切ってありましたし、服もズボンもブーツも、みんな男の人のものだったのです（これではみんな、リズのことを男だと思つてうたがわないのも、むりはありません。でも顔だけを見れば、とつても美しい顔立ちをしておりますし、女の人だといわれれば、みんなそうだと思うことでしょう）。

でもあらためていわれなければわからないというのも、またじじつでした。リズの顔は、男とも女ともどちらともつかない、そのあいだのような顔立ちをしていたのです。

美人であることに、まちがいはありませんでした。ですがひとつだけ、男の人の衣服ではつごうの悪いものがありました。それが、下着だったのです。いくら男のかつこうをしているリズでも、下着ばかりは女の人のものを身につけざるを得ませんでした。そう、リズの家にあつた、ロビーの見つけたあの下着。そのしよたいは、じつはそういうことだったのです（ロビーもわたしも、思わずとんでもないまちがったそうぞうをしてしまいました……、じじつがわかつて、よかつたよかつた！）。

「だいたい、なんでそんなかつこうしてるんだよ。ほんとうは、女のくせして！」マリエルがまだ、ふに落ちないといった顔をして、むくれていました。「女だったら女らしく、ちゃんとしたかつこうができないの！」

みなさんもごぞんじの通り、マリエルは自分が女の子だとまちがわれるのが、いちばんきらいです。ですからマリエルは、「女は女らしく」「男は男らしく」という、強いポリシーを持っていました（そのわりには、自分も女の子みたいにかわいい服を着ているような気が……）。

「これは、おれのスタイルなの！ だって、ひらひらのドレスなんか着てたら、動きづらいじゃんか。こつちの方が、らくでいいだろ。」リズが、はんろんします。リズにはリズの、ポリシーがあるようですね。

「その、おれっていうのも、やめるべきだよ。その言葉使いに、そんなかつこうじゃ、

だれだってだまされちゃうじゃんか。む、胸だって、ぺったんこなんだから。」マリエルがさらにいいかえました。なるほど、まことに失礼ながら、マリエルのいう通り。リズの胸は、あんまりないというか……、その……、たしかに、ぺったんこだったので（ご、ごめんなさい！）。

「ぺったんこっていうな！ これでも、すこしは、あるんだから！ 見ろ！」そういつてリズは、服をべろつ！ とめくって、胸を見せようとしたが……。

「わわわーっ！ ちよつと！ 見せなくていいよ！」マリエルもロビーもライアンも、顔をまっ赤にそめて、大あわてでとめました（ふう、よかった。まったく、なんておそろしい）。

さあ、「リズは女の子」問題については、そろそろけつちやくをつけてもらって……、ほんらいの旅のもくてき、精霊王のトンネルをあけるといふ、その問題の方に取っかかりてもらわなくてはいいけませんね（あいかわらず、話がすんなりと進まないことが多いです）。

みんなはここで、おたがいのことや旅のもくてきのことなどをぜんぜんリズに伝えていないということに、ようやく気がつきました。だってはじめから、とんでもないことばっかりつづいてしまいましたもの、頭の中がパニックになっちゃったとしても、む

りはありません（はじめての出会いがまるはだかで、しかも男かと思ったら女で……、なんて、もうめちやくちやでしたから）。とにかくみんなは、こうしてここに、（さんざんくろうしつつも）めざすリズ・クリスメイディンという人物のもとにたどりつき、そしてその重大な旅の内よりのことを、リズに伝えることができたのです（ちなみに、リズの名まえはほんとうはリスレファンナ・クリスメイディンなわけですが、ほんにんもリズとよんでもらいたがっておりましたので、これからも今まで通り、リズとよぶことにします。読者のみなさんも、その方がまぎらわしくなくていいですものね）。

「なーるほどね。」

旅のことについての話をきかされたリズが、うでをくみながらこたえました。

「よくわかったよ。じゃあおれは、あの精霊王のトンネルを、あければいいってことだろ。かんたんじゃんか。」じつにリズらしい、あつけらかんとしたこたえです。

「かんたんなことじゃないよ！」マリエルが怒っていました。「ぼくたちには、もう、ぜんぜん時間がないんだから！ さいごの戦いは、もう、すぐそこなんだぞ！ 今日、はじまるかもしれないんだ！」

これには、今までのんきにしていたリズも、さすがにたいどをあらためます。

「だいたい、ぼくの手紙を読まないで、ほつたらかしておくのが悪いんだよ！ はじめから家に来てくれれば、こんなに遠まわりしないですんだんだから。」マリエルがつづ

けました。マリエルのいう通り、リズがきちんとマリエルの手紙を読んでさえいれば、今ごろは、いたってじゅんちょうに、精霊王のトンネルにむかつてその歩を進めていられたはずなのです。

「あ、あとで読もうと思ってたんだよ。忘れちゃってさ。で、でもさ、いくら、黒の軍勢つていったつて、ペーカーランドには、ふたつのとりでがあるじゃないか。そんなにかんたんに、せめこんでこられないよ。」リズがいました。ですがこのリズの言葉が、ますますマリエルのことを怒らせてしまったのです。

「ふたつのとりでだつて！ そんなことまで知らないのか！ リュインのとりでは、もう、黒の軍勢の手に落ちてしまったんだぞ！ エリル・シャンデーインの守りは、今や、ベゼロインのとりで、ひとつだけなんだから！」

そう、リズはまだ、リュインのとりでが落ちたということを知りませんでした。そのことはもうとつくに、エリル・シャンデーインからのていきびんで、リズにはしらされているはずでしたのに。

つまりリズのいいかげんさが、ここでも出てしまったというわけなのです。リズはエリル・シャンデーインからのその手紙を、まだ読んでいませんでした！ あとで読もうと思つて部屋のすみに放つておいたのを、すっかり忘れて、いまだにそのままというわけだったのです（ロビーたちがリズの家でさがしものをしているときにも、この手紙は

発見されませんでした。なにしろ、たくさんの本や物の下に、すっかりうもれてしまっていましたから)。

そして、読者のみなさんはもう知っていることですが、残るひとつのベゼロインのとりで。そのとりでも今やもう、黒の軍勢の手に落ちてしまっていました……。とりでが落ちたのは、今日の夜明け前。旅の中にあるマリエルたちがまだそのことを知らなかったのは、とうぜんのことだったのです(魔法のわざをくしすればマリエルたちにそのことを伝えることもできるでしょうが、マリエルもこの旅は、そうおうのかくごを持つてのぞんでいる旅でしたから、そんなにひんばんにお城とれんらくを取りあうなどということとは、考えにいられてはいなかったのです。このさいごのときにあたっては、たとえどんなことが起ころうとも、自分は自分の力のおよぶかぎり、さいぜんをつくすだけでしたから)。

ちなみに、マリエルの使っていたちようちよたよりのじゆつですが、この魔法はあらかじめさだめておいた、動かないとくていの地点にしか、手紙をとどけることができますませんでした(リズの家の場合は、ポストの中が、その地点にされていました)。しかもそのきよりも、エリル・シャンデインからリズの家までなどの、ひかく的近くのちいさまでだけにかぎられていたのです。ですからこのアークランド世界では、くにとくになどの遠くはなれたところとれんらくを取るためには、みなさんもごぞんじの、でんれ

いの鳥が使われることがいっぱいでした。

もつとも、アーザスが使っていてノランも使うことのできた、あの動物のからだを通して話しをするというわざなら、遠くの場所ともれんらくを取りあうことがかとうでしたが、これはほんとうに、このアーランドではアーザスのほかには大けんじやノランくらいにしか使うことのできない、むずかしい魔法でした。それにノランも、つねにどこかの地をいそがしく動きまわっておりましたから、この魔法を使ってアルマーク王やマリエルをふくめ、ほかの者たちとれんらくを取りあうなどということも、していなかったのです。ノランはほんとうに、もつとも必要なときにもつとも必要なことだけをおこなうという、とてもとくべつな人物でした。

マリエルの言葉をきいて、リズの顔つきが急に変わりました。今までに見たことのないような、おどろきと怒りと不安がいりみだれているかのような、そんな表じようになつたのです。リュインとりでが落ちた。それをきけば、だれだつておどろくはずです。ですがリズの表じようは、とてもそれだけはいいあらわせないような、ふくぎつなものでした。なにがリズの中に、起こつたというのでしょうか？

「リュインが、落ちただつて……！」リズがゆびさきをふるわせながら、いいました。「まさか、そんな。うそだろ？」

リズはそういつてマリエルのことを見ましたが、マリエルはきびしい顔をして、だ

まつて首を横にふるばかりでした。リズはロビーとライアンの方も見ましたが、かれらもまた、さんねんそんな顔をして、それにこたえるばかりだったのです。

「そんな……。それじゃ、リストールは？　リストールはどうなった？　ぶじなのか？」

リストール、それはノランが口にしていた、リュインのしきかんのことでした。リストール・グラント。ノランの言葉によれば、かれのそんざいはこのさいこの戦いのときにおいて、とても大きな意味を持つことになるだろうとのことでした。そのリストール・グラントの名まえが、今ここで、リズの口から飛び出したのです。リズとリストール。なにかとくべつなものでもあるのでしょうか？

「わからない。リュインの兵士たちも、みんなだ。」マリエルが、しんこくな顔をしてこたえます。

「助け出そうにも、かんたんなことじゃない。敵の手に落ちたリュインの地から、ほりよたちを助け出すことは、とてもむずかしいことだからな。ノランおししようさまも、そのことをあんじていたよ。」(マリエルの言葉の通り、敵の目に見張られたリュインの地からほりよたちのことを助け出すということは、かんたんなことではありませんでした。まずは、いくさでのルールです。いくさにやぶれて自国のとりでをうばわれたくには、そこから十四日以内のあいだは、ふたたびそのとりでを取りもどすためのいく

さを相手国にしかけることはできない、というルールがきめられていました（このルールは、とりでを勝ち取ったくくに、そのとりでをさいていげんりようすることのできるけんりを与えるためのものでした）。このルールがあつたため、リュインが落とされたとき、すぐさま兵をあげてとりでを取りもどしにむかうというようなことも、ベーカーランドにはできなかつたのです（ちなみに、とりでをうばわれてから十四日以内でも、そのきかんの内にほかの場所での相手国とのいくさに勝つことができれば、もういちどそのとりでを取りもどすためのいくさを相手国にしかけることができるというルールもありました。ですがワットとのつづくいくさは、もはやベゼロインでの戦いのみでしたから、やはりベーカーランドの者たちには、すぐさまリュインを取りもどしにむかうようなことは、できなかつたのです）。

すくない人数で敵の目をくぐりぬけて、リュインとりでにひそかにふみこんでいくなどということも、とてもむりでした。シープロンのわざをくしすれば、敵に見つからないように、リュインの地を通りぬけるくらいのはできるかもしれませんが、こんどはそれとは、わけがちがうのです。敵のしゅうけつする、そのただ中に、ふみこんでいくとういうのですから。

とらわれの者たちのことを助け出すことは、ベーカーランドの者たちにとつては、今はとてもむりなことでした。リュインからベゼロインの地へと、敵の軍勢がすつかり進

軍してしまったあとでなら、リュインとりでのけいびも多少うすくはなりません。そのとき、敵の目のうすくなつたとりでのほんたいがわにまわることができれば、ほりよたちを助け出すこともできるかもしれません。ですがそれでも、それはとてもむずかしいことでした。けいびがうすくなるだろうとはいえ、やはり、多くの敵の目の光るそのただ中に、ふみこんでいこうというのですから（しかも敵の目は、とりでだけではなく、その地のすべてにいき渡っているのです）。そんな、大それたことのできる者たちが、いるでしょうか？

マリエルの言葉に、リズはしばらくだまつたままでした。両のこぶしをぎゅつとにぎつたまま、身動きひとつしませんでした。

そしてようやく。リズはとつぜん、こんなことをいったのです。

「リストール・グラント……、リステロント・グラント……、かれは、おれの兄さんだ。」

ええっ！　なんと、またしてもいがないなじつが出てきました！　リストール・グラントしきかんは、じつはリズのお兄さんで、ほんとうの名まえはリステロント・グラントというそうなのです。グラントは、リズのお父さんのみようじ。そしてリズの名のついているクリスマスエイデンというのは、お母さんのみようじでした。リズとリストールは、自分たちがきょうだいであるということを守りにかくしておくために、べ

つべつの名まえを名のつていたのです（ではなぜ、わざわざかくしておかなければならなかったのか？ それはもちろん、ひとつのりゆうのためでした。かれらがシルフィアだからです。シルフィアだということが知れると、いろいろとめんどうなことになるということを、かれらの種族の者たちは、よく知っておりましたから。

でも兄のリストロントのその思いは、リズが口をすべらせたことによつて、はかなくも消えてしまったというわけでした。それでもリズときようだいであるということがわかれば、リストロールもまた、シルフィアだということが知られてしまいますから、ふたりがきようだいであるということは、みんなにはそのまま、ひみつのままにしておいたというわけなのです。

失われし精霊の種族、シルフィア。ふだんはシルフィアであるということも、きようだいであるということもかくしながら、暮らしつづけてきた、リズとリストロール。その兄のリストロールの身が、敵の手に落ち、ぶじであるのかどうかすらもわかりませんでした……。リズにとつて、こんなにもつらいことはないでしょう（同じく、おとうとのレイミールが敵の手に渡ってしまったハミール・ナシユガーも、どんなにつらい思いでいるのでしょうか……。）。いくらリズがいいかげんなせいかくだとはいっても、こんなじつつきかされては、れいせいでいられるはずありませんでした。

「そ、そうだったのか……。」「マリエルが、うつむいていました。これではさすがにマ

リエルも、リズのことをこれ以上、悪くいうこともできません。ふたりはすっかり、気を落としてしまいました。

ですが……。

こんなときのために、この子がいるのです。いつだって、どんなときだって、明るく前むきに考える。その気持ちがいみんなのことを助け、大きな力と、勇気と、きぼうを与えてくれる。

それは、そう、われらのライアン・スタツカートくんでした。

「ノランさんが、いつてたよね。リストールさんのことは、まかせておけって。」

ライアンが、ふいにそういいました。リエルもリズも、「えっ?」と行って、ライアンの方を見ます。

「ノランさんって、たよりにならない人なの?」

ライアンがリエルに、わざとそうしつもんしました。

「ばかなことをいわないでよ! おししようさまは、この世界でいちばんたよりになる、いだいなるけんじやなんだから!」

リエルがむきになってこたえます。でもそれは、ライアンの思うつぼでした。

「ねえ、リズさん。リストールさんって、たいしたことないしきかんなの？」
ライアンの言葉に、こんどはリズの方が、むっとしてこたえました。

「あいつは、ゆうしゆうだよ！ おれがいうのもなんだけど、どんなことだって、あいつなら乗り越えられるんだ。」

そして、ふたりのその思い通りのこたえに、ライアンは「ふふっ。」と笑っていったのです。

「なら、だいじょうぶじゃない？ 世界いちのけんじやが、力をつくしてくれてるんでしょ？ その前に、どんなことでも乗り越えられるゆうしゆうなしきかんなら、自分でもなんとかしちやうかもね。心配いらないんじゃないかな？」

リズもマリエルも、すっかりあきれてしまいました。ですけど今のふたりにとって、こんなにも助けられる、気持ちのらくになれる言葉もなかったのです。リズの心に重くのしかかっていた、なまりのような思い。リズはその思いが、ライアンの言葉によって、どんどん晴れ渡っていくのを感じました。

同じく、考えに考えぬいて、いつでもさいこうのけつろんをもとめようとするマリエル。ですけどいくら考えたところで、どうにもならないことだって、世の中にはそんざいするのです。ときには、気らくすぎるように考えたっていいということもあります。それもまた、ものごとにはさいこうのけつろんを与えてくれる、ひとつのしゅだんとなり

得るのですから。マリエルはライオンに、教えられてしまいました。

「ふふっ。おまえ、なかなかいうじやんか。」リズが、ライオンの方にぐいっとにぎりこぶしをつき出して、いいました（これはリズが気にいった相手に対しておこなう、敬意のポーズでした）。

「ライスタには、かなわないや。」マリエルもリズにつづけて、あきれ顔でそういいました（ですけど心の中では、マリエルはライオンに深くかんしゃしていました）。

「おーっしー！ ノランのじいさん、よろしくたのむぜ！ あにきの運命、じいさんにあずけたからな！」リズがそういって、こぶしを空高くつき上げました（どこにいるのか？ わかりませんが、これはノランに対しての敬意のポーズなのです）。

「じいさんっていうな！ まあ、でも、これで、ぼくたちの道はかたまつたな。」マリエルがそういって、みんなのことを見渡しました。

そしてマリエル、リズ、ライオンの三人は、おたがいの顔を見あつて、それぞれにこぶしを空につき上げながら、声高くさけんだのです。

「今すぐ出発するぞ！ 精霊王のトンネルに！」

こうして、このノランベつどう隊に新しい仲間が加わりました。失われしシルファイア

種族の青年、リズ・クリスメイデイン。かれ……、じゃなかった、かのじよは、いったいどんな力をひめているのでしょうか？（精霊王のトンネルをあけられる、というのは、もうわかっていましたか。）

さすが、ライアンだな。

そんなかれらのやりとりのことを見て。ひとりロビーは、心の中でそう思いました。

でも……、ぼくは、さいごまでライアンといっしょにいくわけには、いかないんだ……。

マリエルと肩をくんでにこにこ笑っているライアンのことを見ながら、ロビーはふくざつな思いになりました。きたるべく、さいごの戦い……。それは自分ひとりではまなげなければならないのだということに、ロビーはもう、気がついていたので。お父さんを助けること。そして、アーザスとのたいけつ……。それらはただ、ロビーひとりだけにゆるされた、さいごの運命の道でしたから。

物語は、これからいよいよ、そのさいごのクライマックスの中へと流れこんでいくのです。

22、それぞれのむかうさき

ここはこのアークランドのどこかの、とある岩だらけの、ものさびしい荒れ野の中。今その荒れ野の中を、たくさんの方たちが、まっすぐにれつをなしてぞろぞろと進んでいるところでした。その数は、すくなくとも二百人以上。じこくはもうすぐ、ま夜中にさしかかろうかというころでしょうか？ こんな時間に、こんなところをこんなに大人数で進んでいるなんて、まったくもってふつうじゃありません。かれらはいったい、なに者なのでしょう？

れつのまわりには、黒いたいまつを持った者たちがいて、進む者たちのことを見張っていました。たいまつを持ったその者たちは、兵士たちでした。みな黒いよろいかぶとに身をつつんでいて、腰にはきみの悪い黒いさやにおさまった剣が、さしてあります。長いやりを持った者もいました。このやりもまた、黒いすみでまつ黒にぬられた、うすきみの悪いやりでした。

この兵士たちが、どこの兵士たちなのか？ 読者のみなさんなら、これ以上説明しなくてもおわかりだと思えます。れつの先頭には、同じく黒いよろいを着た兵士たちが、そのさきに黒いはたぬのをつけた長いぼうを、かかげていました。そのはたぬのに

そめられたしるしは、まさしくワツトのはたじるし。いうまでもなく、この兵士たちは、ワツトの者たちだったのです。

ですが、待つてください。れつのまわりで、たいまつや、やりや、はたぬのを持って
いる者たちは、たしかにワツトの者たちでした。しかしこの場所には今、そんなワツト
の兵士たちなんかよりも、はるかにたくさん、べつの者たちがいたのです。その者た
ちは、ざっと見つもつても、二百人ほど。つまりこの場にいる者たちの大半の部分でし
た。

そのかれらがいたのは、このれつのまん中の部分でした（つまり、このれつの大半の
部分ということでした）。そしてよくよく見てみれば……、なんてこと！ その人たち
は、みなそれぞれの手足に「かせ」をつけられ、ロープでつながれた、とらわれの人た
ちだったのです！ つまり、かれらのまわりをいっしょになつて歩いてるワツトの兵
士たちは、かれらとらわれの者たちの、見張り番だったというわけでした。ワツトの兵
士たちは、これからこのとらわれの者たちのことを、どこか東の地へとつれていこうと
していたのです。では、このとらわれの者たちとは、いったいどういう人たちなので
しょうか？

全部で二百人ほどにもおよぶ、とらわれの者たち。たいへんな人数です。かれらはみ
な、おそろいのわたのはいったりつばな衣服を着ていて、みんな、おそろいの白いマン

トをはおっていました（これは寒さをしのぐためのとくべつなマントで、あたたかい動物の毛が使われていました）。そしてそのマントにぬいつけられた、ひとつのもんしう。それが、この人たちがなに者なのか？　という、そのなぞのこたえを、はつきりとゆうべんに物語っていたのです。

そのもんしうは、ペーカーランドのもんしう。そう、この大勢のとらわれの者たちは、ペーカーランドの人たちでした！　つまりこの者たちは、ワットにうばわれたリュインとりでのことを守っていた、その兵士たちだったのです！（第十八章のさいご）。レシリアたち、とらわれの仲間たちと同じこめられていたリュインとりでのろうやの前で、しきかんのガランドーがいつていた言葉をおぼえていますでしょうか？　部下の兵士たちから、黒の軍勢の本軍がとうちやくしたとの、しらせを受けたときのことです。リュインのほりよたちを、東のちゆうとん地へはこべ。そう、ここにいるワットの兵士たちは、そのガランドーのめいれいを受けて、今リュインの二百名のほりよたちのことを、東のワットのちゆうとん地まで送りとどけているところでした！（このちゆうとん地というのは、軍隊がしばらくのあいだ、かりにとどまっている場所のことをいいます。とらわれの兵士たちは、とりあえずそこにはこぼれて、それからあらためて、ワットのくにまで送られるというわけでした。

ちなみに、かれらがむかっていた東のちゆうとん地というのは、レクタイトルという名

まえでよばれていて、ひとつの小さなまちのようになっていたのです。食べもの屋さんや、おしばい小屋や、しやてき場までありました。なんだか、楽しそうな気もしないでもないですけど。)

この者たちが、リュインとりでの兵士たち。ということとは……？

リズの知られざるじつのお兄さん、リュインとりでのしきかんのリストール・グラント。そして白の騎兵師団のウルファの騎士、ハミール・ナシユガーのおとうと、小さなレイミールも、このれつの中にいるのでしょうか！

どこだ？ どこだ？ れつを、はしからじゅんに見渡してみると……。

いました！ レイミールです！

ああ、かわいそうなレイミール！ かれはれつのうしろの方で、となりの兵士とロップでつながれたじょうたいで、足をひきひき、うなだれて歩いていました。だいぶつかれているようすでしたが、どうやら、けがはしていないようです。

よかった！ とりあえず、レイミールはぶじでした！ このことをいつこくも早く、兄のハミールに伝えてあげたいものです！

でも、そのハミールもまた、リュインとりでにとらわれの身……。きょうだいそろつ

てとらわれの身だなんて、なんてひどい話なのでしょう！

でも今は、仲間たちにかれらをすくうしゅだんはないのです……。かれらのために、自分たちの今、できることをやるしかありませんでした。かなしいことですが、今はさきに、進まなくては。

さて、レイミールはからだが小さかったので、大きな人たちばかりの中から、わりあいかんたんに見つけることができました。ですが、リストールは？　リストールはどこにいますのでしょうか？

リズのお兄さん、リストール（ほんとうの名まえはリステロントですが）。かれはリュインのしきかんでしたから、この中にいるとしたら、れつのいちばん前か、いちばんうしろにいるのだと思います。ですがリストールのことをさがすのに、もつと手っ取り早い方法がありました。それは、そのかみの色。リストールのかみは、きれいな青がみだったのです。これはもうとのリズと、おそろいでした。つまりこれは、シルフィア種族とくゆうのかみの色だったのです（この青いかみの色について、リストールはみんなには、「大むかしの風のたみの血がはいっているからだ」と説明していました（リズの場合は説明なんてせずに、「なんで青いのか？　よくわからん。」といていただけでしたが……）。ほんらいふつうの人間の者であれば、このおとぎのくにアーケランドにも、

青いかみの者はほとんどいなかったので。まれに精霊の力を強く受け入れるからだのために、青いかみを持つ者もいることはいるようですが、それはほんとうに、とくべつな者。しかも、こんなにあざやかな青がみになるといことは、まずありません。リストールは自分がシルフィアであるということをおくす通しておくと、風のたみなんていう、でたための種族を作り上げて説明してました（ひよつとしたら、ほんとうにそんな種族の者たちがいるのかもしれないが。このアーケランド世界は、まだまだなぞだらけなのですから）。

ですからわたしは、その青いかみのことを目じるしに、リストールのことをさがすことができました。しかしいくらさがしても、そんな青いかみの者は見あたりません。リストールだけ、どこかほかの場所へつれていかれたのでしょうか？ しきかんですから、それも考えられます（それともまさか、かみの毛に絵の具をぬって、ほかの色にそめてしまったというわけではありませんよね？）。

いない、いない！ あきらめかけていた、そのとき……。

おや？ れつのいちばん前。ワットの兵士たちにまぎれて、ひとりだけ、マントのフードをかぶっている人物がいます。まさか！

やつぱり！ フードの影から、ちらちらのぞく、青いかみ！ いました！ リストールです！

しきかんであるリストールは、れつのいちばん前で、ワットの兵士たちといっしょにされて歩かされていました。これではいくられつの中をさがしても、見つからないはず。見張りのワットの兵士たちの中にいましたから。しかもその青いかみを、フードでかくしてしまっていましたもの、わからないはずでした（もう！ ちゃんとかみを出してよ！）。

とにかくこれで、リストールもレイミールも、このれつの中にいるということがわかりました。ですが、だからといって、とてもよろこんでなどいられるものではありません。ほかの大勢の仲間たちのこともふくめて、けがなどはしていないようでしたが、みんなほんとうに、つかれきっているようでした。かれらには、あたたかい食事と寝床が必要です。早く、助け出してあげたい！ ですがわたしには、どうすることもできません……。

去つてゆく、とらわれの者たち……。それを今は、ただ見守ることしかできません。した。ああ、自分のむりよくさが、はら立たしいくらいです！
と、まさにそのときのこと……！

わたしのこの思いが、こんなにも早く、天にとどくことになろうとは！

かれらが暗くさみしい森の中にさしかかかって、しばらくたつたころのことでした。とつぜん、だれもがよそうすらしなかった、おどろきのできごとが起こったのです！

「うわわーっ！ な、なんだー！」

ワットの兵士たちの、さけび声！ その声に、今まで下をむいてとぼとぼと歩いていただけだったわれらがとらわれの仲間たちも、びつくりして、あたりを見まわしました。すると！

まわりのうつそうとした森の木々のあいだから、ご、ごいーん！ ぎゅ、ぎゅいーん！ こ、このききおぼえのあるおかしな音は！ そう、いぜんリユインとりでのそばにいた、あのなぞの老人のうしろから、きこえた音ではありませんか！ そしてその音のしようたいと、ワットの兵士たちの上げたさけび声の意味は、すぐにあきらかとなったのです。

木々のあいだから、なん体もの、岩でできた巨大な人がたの兵士たちがあらわれました！ きこえていたおかしな音は、この岩の兵士たちが動くときに、手足のかんせつから出ていた音だったのです！

もうワットの兵士たちは、びつくりぎょうてんなんてものじゃありません。なにし

ろ、相手が悪すぎでした！ 目の前にあらわれたのは、身長が三十フィートはあろうかという、とんでもないほどの大きさの、岩の兵士たちでしたから！ からだは、ぶあつい岩のよろいで守られていて、頭にも、がんじょうそうな岩のかぶとをかぶっています（といつても、この兵士たちはもともとみんな、岩でできておりましたので、よろいやかぶとはただのかざりでしたが。そんなものがなくたって、じゆうぶんかたいのです）。そして、「この相手にはかなわない」とかんねんさせる、けつてい的なものが、その岩の兵士たちの手にはにぎられていました。

岩の兵士たちの手には、これまた岩でつくられた、巨大ないっぼんの剣がにぎりしめられていたのです！ こんな剣でおそわれたなら、ひとたまりもありません。そしてそんな岩の兵士たちが、すくなく見ても十五体ほど！ いっせいに森の中から、目の前にあらわれてきました！

もう、けつかは火を見るよりあきらかでした。なにしろワットの兵士たちは、ほりよを送りとどけるということをその大きなにんむとしておりましたので、大がかりな戦いをおこなうことなんて、はじめから考えにいれていなかったのです。やみにまぎれて、すくない人数でほりよたちのことを取りかえしにくるかもしれない者たちのことは、もちろんけいかいしてはいましたが、こんなに巨大な岩の兵士たちがぞろぞろとうじょうしてくるなんて、まったくもって、そうていがいでしたもの！

ですからかれらの人数は、必要以上に多くはありませんでした。ぐたい的には三十二名で、このにんむについていたのです（これはほりよたちを取りもどしにひそかな人数の者たちがやってきたとしても、それに対応できる、さいていげんの人数でした）。この人数の人間の兵士たちが、身長三十フィートはあろうかという巨大な岩の兵士たち十五体ほどと、まともに戦えなんていうことが、そもそもむりなことでした。

ワットの兵士たちは、ぎゅ、ぎゅいーん！「うわわわー！」つぎつぎに、岩の兵士たちのそのゆびさきに、ちよこんとつまみ上げられていきます！さらに、「ひええ！」と逃げようとする者たちにむかって、ばしゅっ！岩の兵士たちのその手のさきから、岩のついた大きなあみが飛び出して、兵士たちはみな、そのあみからめとられて身動きが取れなくなっていました。

気がついてみればもの数十びようほどで、すべてが終りよう！三十二名もいたワットの兵士たちは、ぜんいんあみでひとつにまとめ上げられて、ごちやませのじようたいのまま、あつというまに山とつまれてしまったのです！（それにしても、なんて手ぎわのいいこと！）

さてさて、これにはとらわれのわれらがリュインの兵士たちも、みなびつくりするやら顔を見あわせるやらで、大いそがしです（とうぜんの反応ですよ）。あまりにとつぜんのことで、なにが起こったのか？まだわかっていない者さえいました。

そんなかれらの前に、一体の岩の兵士が歩みよります。

そしてそのとき、またしても、みんなのどきもをぬいたおどろきのできごとが！

その岩の兵士の頭が、とつぜん、ぱかつ！ とひらきました！　そしてそこから、ひよっこりとあらわれたのは……。

「がーはっはっはっは！　たわいもないわい！」

あの岩のようにがんこそうな、なぞの老人ではありませんか！（岩の中から、岩のような老人！　なんてびつたりはまってるんでしよう！）なんとこの岩の兵士たちは、人が中に取りこんで、そうじゆうすることのできる、いわば巨大ロボットのような兵士たちだったのです！　なんてすてきな！　わたしも乗ってみたい！　あ、おほん、それとはかく……、どうやらこの老人は、わたしたちの仲間のようでした。とらわれの者たちは、きよとーんとしながらも、とりあえずその点では、ほっとしていたのです。

「おまえさん方、なんぎだったの。わしは、岩のけんじゃ、リブレストだ。ノランにいわれて、おまえさん方を助けにきたぞい。」

なんと！　岩のけんじゃですって！

そうです！　この岩のようにがんこそうな、おひげもじゃもじゃの老人は、アークランドに住む三人の名高いけんじゃたちのうちのひとり、岩のリブレストでした！（三けんじゃのうちのひとりには、もうすでに会いましたよね。木のけんじゃ、カルモトです。

さて、では、残るひとりは何？ 前にもいいましたが、そのうちとうじょうしまするので、お楽しみ。

ちなみに、ノランはこれらの三けんじやたちとはまたべつの、世界さいこうのけんじやとよばれている人物でした。）

さあ、これはたいへんなことになってきました！ 岩のけんじや、じきじきのお越しなのです。なにしろけんじやという者たちは、めつたなことでは、人前にそのすがたをあらわさないのです（大けんじやノランも、やっぱりそんな感じでしたよね。すぐにどこかへいつちゃうんですもの）。とくに岩のリブレストといったら、だれも知らない、どこか山おくのどうくつに住んでいて、そこからいつぽもそとに出てこないといわれているほどの、腰の重い人物でした。ですからなおさら、おどろきだったのです（それにしても、ノランもにくいことをしてくるじやありませんか！ ほんとうにこまったときには、やっぱりこうして、助けてくれるのです。さすがは大物ですわね！）。

さて、そんな岩のけんじやのことを前にして、リュインの兵士たちは、かんしやするやら、おそれるやら、このチャンスにサインをもらいたいけれど紙とペンがなくてくやしがるやら、いろんな反応にたいそがしました。ですけどここは、すみやかにつぎの行動にうつらなければなりません。せつかく助かったんです。自分たちのできる、さいこうのしごとを、これからしてやろうじやありませんか！（ところで……、つかまえた

ワットの兵士たちは、このあとリブレストさんがみんな、自身の魔法で作り出したひとつの岩のドームの中にとじこめてしまいました（このままワットの兵士たちのことを逃がしてしまえば、のちのちいろいろとめんどろなことになると思つたからでした）。

この魔法のドームは岩や地面の上にかぎり、いちにちにひとつだけ作り出せるというもので、なん十人ももの者たちのことを、魔法のききめがつづく二十四時間のあいだだけ、その中にとじこめておくことができたのです（もつとも、三十二名もの者たちをその中にいれたら、けつこうぎゆうぎゆうでしたけど……）。

リブレストはとらわれの者たちが東のレクタイルにはこぼれるということをやそうしておりましたし、ワットの兵士たちから（きびしく）きき出してかくにんを取ることまでできていました。そしてレクタイルまでは、歩いていけば、まるいちにちくらいかかる道のりだったのです。ですからリブレストは、そのことも考えにいれたうえで、この岩のドームにワットの者たちのことをとじこめて、その二十四時間のあいだ、ほかのワットの者たちに気づかれることなく行動できるようにしました。

もつとも、岩のドームにとじこめなくても、つかまえた者たちのことを木にぐるぐるにしぼりつけでもしておけば、いちにち以上でも時間がかせげたかもしれませんが、いくらワットの者たちとはいえそこまでしたらかわいそうだと、リブレストも思つたのです。それにそんなことをしなくても、二十四時間も時間がかせげればじゅうぶんだと、

リブレストも思っていましたから（そしてここでひとつ、説明をつけ加えておきます。いぜんにもお伝えしましたように、このアーケランドでは遠くはなれた場所とれんらくを取りあうためには、でんれいの鳥が使われることがいっぱいあったが、それにはじょうけんもひとつありました。このでんれいの鳥は、あらかじめくんれんして教えこんだ場所にしか、飛ぶことができなかつたのです（「とくていの人物のいる場所」というのもむりでした。あくまでも、ある一点の地点だけにしか送れなかつたのです）。ですから、ゆうずうをきかせていろんなところへ鳥を送りこむというようなことは、できませんでした。

そしてでんれいの鳥をくんれんするためには長い時間が必要になりましたので、ワットの者たちが、うばい取つたりユインのとりでへと送ることのできる鳥を持つことのできていないということも、リブレストはしようちしていたのです（あらかじめ、でんれいの鳥を敵のいる地のそのただ中に飛ぶようにくんれんしておくことなんて、いくらワットの者たちといえども、むりでしたから。そしてもちろん、これはベゼロイン तरीでも同じです）。ですからリブレストは、つかまえたこのワットの兵士たちがリユインの仲間たちのもとへとかけこまないかぎり、リユインのワットの者たちも、ほりよたちはまだ東のレクタイルにむかつてじゅんちように進んでいると思うだろうということをつまえたうえで、かれらを岩のドームにとじこめました）。

ちなみに、この岩のドームの中には水場やトイレなどもばっちり作りつけられていて、二十四時間ぶんのしよくりようや飲みものなども、ちゃんとじゅんびされていました。それに加えて、とじこめられた者たちが二十四時間のあいだにたいくつしないようにと、魔法のチェスばんやボードゲーム、カードゲームなども、たくさん用意されていたのです。まあ、気配りのいいこと！」

「けんじゃ、リブレストどの。」

ひとしきりのおれいの言葉がすむと、兵士のうちのひとりが、リブレストに近づいてきていいました。頭にかぶったフードを取ると、美しい、さらりとしたきぬのような青いかみが、あらわになります。そう、それは青いかみを持つ、失われしシルフィア種族の者のひとり、リストール・グラントでした（ちなみに、みんなの手足につけられていた「かせ」は、ワットの兵士たちの持っていたかぎによってすっかり取りのぞかれていますので、ご安心を）。

「わたくしは、リュインのしきかん、リストール・グラントと申します。けんじゃどのに助けていただけするなど、これほどこうえいなことはございません。心より、おれい申し上げます。」

リストールはそういって、リブレストに深々と頭を下げました。まわりの兵士たちも、みなリストールにならいます。

リストール・グラント。ねんれいは、二十二、三。リズより三つほども上でしようか？ しきかんとしては、とても若いねんれいです（でもライラの方が、もつと若いですが）。お伝えしておりますように、アーケランドではその人のうりよくを見るときに、ねんれいなど気にしないのです。マリエルがいい例ですよ（ね）。すらりとした長身。手足はとてもほそいですが、きんにくががっしりとしまっていて、力強く見えます。マントの下には、青いラインのはいったしんじゆ色のきぬの衣服を身につけていて、それが青いかみとよくはえて、全体にとてもしんぴ的なふんいきをかもし出していました。

そしてなにより。うくん、あきれるくらい的美男子です！ だまつて立つていたのなら、女の人なら、みんなすいこまれていってしまいそうなくらいでした（男の人でも？）。まるで、どこかのくにの王子さま！（ライアンもシープロンドの王子さまとして、とても気品のある顔立ちをしていましたが、いかんせん、ライアンの場合は、そのおこないが上品とはいえない部分が多くて……）シルフィアという種族は、もともとみんな美人ぞろいでしたが、リストールはその中でも、ぐんをぬいていたのです（いもうとのリズも、やつぱり、だまつていれば美人なんです。でもいかんせん、リズの場合は、そのおこないが上品とはいえない部分が多くて……）。

「おお、おまえさんがリストールか。」リブレストがこたえました（もじやもじやおひげのリブレストと、すらりと美しいリストール。うくん、まるで正はんたいです……）。

リブレストさん、ごめんなさい！」。

「おまえさんのことを、助け出してほしいと、わしはノランにいわれてな。シルフィアなんだってな？　シルフィアがまだ残っていたとは、わしもおどろきじゃわい。」

これをきいて、その場にいるほかのリユインの兵士たちは、びつくりぎょうてんです。「シルフィアですって！」「リストールしきかんが！」「たしかに、このかみは青すぎる！」「みんな口ぐちにさけばはじめました（みんなリストールがシルフィアだということは知りませんでしたから、それもとうぜんでした）。

リブレストさん、うっかり口どめされていたのを忘れて、しゃべってしまいました。じつはノランはリブレストに、「リストールというシルフィア種族の者が、リユインの兵士たちとともに、とらわれの身となってしまつてなあ。みんなといっしょに、助け出してやつてくれんか。」とたのんでいたのです。そのあと、「そうそう、やつがシルフィアだということは、まだ、みんなには、だまつていてくれ。いずれ、ときがきてから、話したいでな。」といつてもいましたが、リブレストはそれを、すっかり忘れていたというわけでした（やつぱりリブレストさんも、けんじやなんですね。うっかりなところは、けんじやにきょうつうのようです。いちばんうっかりなのは、やつぱりカルモトでしょうけど……）。

それはそうと。ノランはリストールがシルフィアなのだということに、もう気づいて

いたんですね。さすがはノランです。

リブレストはみんなのさわぎを見て、ようやく口をすべらせてしまったということに気がつきました（もう手おくれですけど）。ですがリブレストは、「すぎたことはしかたない」というタイプでしたので、そんなことはまったく気にもかけずに、「がつはつは！」と大きな声で笑い飛ばすばかりだったのです（いや、すこしは気にしてほしいのですが……）。

「そーいや、いうなど、いわれとつたわ。まあ、こまかいことは、どうでもいいわい。」
（いや、あんまりこまかくはないのですが……）

さあ、こまつたのはリストールです。みんなのさわぎを、おさめませんと。

「みんな、どうか、さわがないでほしい。」リストールはみんなのことを手でせいして、いいました。

「すまない。だますつもりは、なかったのだ。シルフィアには、とかく、いわくがつきまとう。西の大陸には、この力を悪用しようとする者が、数多くいる。みんなのことは、しんらいしている。だが、うわさとは、どこで伝わるものか？ よそくがつかない。みんなに、とんだめいわくがかかるともしれない。そのためわたしは、シルフィアであるということ、だまつていた。ゆるしてくれ。」リストールはそういつて、みんなに深々と頭を下げました。

「ゆるすもなにも！」これに対して、兵士たちはみんなおたがいの顔を見あつて、それぞれの思いをたしかめあつたのです。

「シルフィアだろうがなんだろうが、リストールしきかんは、われらのリストールしきかんです！ われらいちどう、心より、しきかんのことを、したい、そんなけいしております！ どうか、頭を上げてください！」

すばらしい仲間たちでした。しきかんと兵士たちの心が、みんなひとつに、まとまっていたのです。おたがいが、おたがいのことを、したい、そんなけいしあっている。人と人とのかんけいとは、こうありたいものです。

「ありがとう、みんな。」リストールは仲間たちに心からかんしゃして、もういちど頭を下げました。ふう、よかった。これで、シルフィアのけんは、いつけんらくちやくです（まったく、リブレस्तさんたら！）。

「リブレストどの。」リストールが、こんどはリブレストにむきなおつていいました（ここからは、だいぶまじめな、むずかしい話になります）。

「リュインにせめこんできたのは、たくさんのデルバグに乗った黒騎士たちでした。かれらは空から、夜のやみにまぎれ、とつぜんにあらわれたのです。われらのていこうもむなく、ふいをうたれたリュインのとりでは、なすすべもないままに、敵の手によつ

てうばわれてしまいました……」

おそろしいたいけんが仲間たちの中によみがえり、仲間たちはみな、かなしみにうなだれました。

リストールがつづけます。

「リュインの者たちは、みな、ろうの中にとらわれの身となりました。そして、あるとき、じやあくなる黒騎士たちが、わたしのもとへとやってきたのです。かれらは、北からやってくるある者たちのことを、とらえようとしていました。そのくわだてに、わたしの身をりようしたのです。それは、ひきような、とてもひきような悪だくみでした。」

おそろしい黒騎士たちの、よこしまなる悪だくみ……。それは、北からやってくるふとどき者たち、つまりわれらが仲間たちのことを、リストールの身をおとりに使って、おびき出そうというものでした！ セイレン大橋の上で、デイルバグのていさつ隊の一隊をロビーたちにたおされてからというもの、ワットの黒騎士たちは、しつように、そのふとどき者たちのゆくえのことを追っていたのです（ふとどきなのは、どっちでしょうか！ ロビーたちにとっては、とんでもないとばっちりです。

そして、「そのふとどき者たちのことを、ぜつたいにとらえよ！」とめいれいたしたのは、ほかでもありません。ワットの王、アルファズレドほんにんでした。アルファズレドは、ワットにたてつく者は、どんな相手だろうとゆるすわけにはいかなかったのです。

それをまげれば、みずからのしんねんを、まげてしまうことになるからでした。

ふとどき者たちの中にシープロンの者がいるということがわかったことで、アルファズレドのけつしんは、ますます強いものとなりました。シープロンたちのくにシープロンドは、かつての仲間、メリアンのくに。アルファズレドは、自分のもとからはなれていったかつての仲間たちに、自分の考えの正しさをしめす必要があつたのです。力こそ、せいぎ。力こそが、この世界にしんのまとまりをもたらす……。だからこそアルファズレドは、シープロンドをどうしても、せめ落とすつもりでした。

しかしシープロンドは、兵を持たない中立のくに。やたらにこうげきするわけにはいきません。そんなことをすれば、ワットはこのアークランドの世界の中で、くにとしてみとめられなくなってしまうから。

そんな中で、シープロンのふとどき者のそんぎいは、ワットにとつて、願ってもないざいりようとなりました。これでシープロンドに、ワットへのはんぎやくのつみを着せることができるのです。それがシープロンドをこうげきする、りゆうとなるのです。それこそが、アルファズレドのねらいでした。

同じく仲間だったムンドベルクのくに、レドンホールは、すでに落ちました。アルマークのペーカーランドも、これから落とそうとしています。アルファズレドのやろうとしていることは、かつての仲間たちに対する、見せつけでした。自分の考えこそが、せ

いぎなのだと。アルファズレドはかつての仲間たちに、そのことを思いしらせようとしていたのです。

ロビーたちはメリアン王のていあんにしたがって、西のひみつの道からベーカーランドへとむかいました。ですが黒騎士たちは、ロビーたちが西の地を進んでいったという、そのことを知りません。では黒騎士たちが追っていた、そのふとどき者たちとは？　そうです、それはロビーたちの身がわりとなつて南の街道を進んでいった、レシリア、ルースアン、ハミール、キエリフの、四人の仲間たちにほかなりませんでした。

読者のみなさんは、かれらがどうなつてしまったのか？　すでに知っています。かれらはリュインとりでのろうごくに、つながれてしまったのです。なぜそうなつてしまったのか？　つまりそのこたえこそが、リュインをせめた黒騎士たちのおこなつた、そのひきような作戦にほかなりませんでした。

黒騎士たちはリストールの身をしばり上げ、デイルバグの足にしばりつけました！　そして空高くから、かくれているレシリアたち、われらが仲間たちに対して、大声でさけんだのです。

「リュインのしきかんはずかつた！　ただちに、出頭せよ！　出てこなければ、しきかんの身のほしよははないぞ！」

なんてひきような！　レシリアたちがつかまつてしまったわけが、これでようやくわ

かりました。かれらほどの者たちが、そうかんたんにつかまるはずがありません。そこには黒騎士たちの、こんなにもひきような作戦がありました。そしてレシリアたちにこの申し出をこぼむことなどは、できるはずもなかったのです……（もしこの申し出をこぼんで、かくれたままでいたとしたら……？ 黒騎士たちはリストールの身に、ほんとうにおそろしい害を与えたことでしよう。ワットはみずからの力を見せつけて、相手をふるえ上からせて、いうことをきかせるというやり方を好むくに。その見せしめのためであるのなら、かれらはそのしゅだんをえらばないのです。たとえば、レドンホールの黒のウルファたちでした。やみにとらわれてしまったかれらのすがたは、たくさんのくにくにのたくさんの人々に、文字通りのきようふを与えていました。ワットはこんどは、そのまがまがしき力を、リストールの身におよぼしかねないのです。そうなつてしまったのなら、たとえそのあとリストールのことを助け出すことができたとしても、もはやかれは、やみにとらわれて、なにごともしなすこともできなくなってしまうことでしょう。

りゆうはのちに語られることになりましたが、このアークランドをほろびの道からすくい出すためには、それはなんとしてでもさけておかなければならないことでした。ですからレシリアたち、われらが仲間たちは、なおいつそのこと、みずからの身をぎせいにしてまでも、リストールのことをすくわんがために、ワットにその身をささげたので

す。自分たちがつかまれば、すくなくともリストールの身に、ワットの注意がこれ以上、そそがれることもなくなりません。かれの身に、必要以上のおそろしい危害が加えられることも、なくなるはずでした。なんという、いたましい話なのでしょう！ つづく、きぼうを信じて、レシリアたち四人の仲間たちは、そこまでのかくごを持って、ワットにその身を投じたのです。

「ぐむむむむ……なんてことじゃい！」リストールの話をきいて、リブレストはその岩のような両のこぶしをぎりぎりにとぎりしめながら、いいました。「ワットのがきんちよどもめ！ 好きほうだいなことをやりよつて！」

リブレストの怒りは、どんどん大きくなつていきます。

「リブレストどの。」リストールがつづけました。「そのふとどき者というのは、ほかでもありません。ベーカールランドの若き騎士、ハミール・ナシユガーと、キエリフ・アトハーグの両名。そして、めいゆう国シープロンドの、けいあいすべき友、レシリア・クレツシエンドに、ルースアン・トーンヘオン。そのかれらなのです。」

いつのまにか、リストールのそばに小さなレイミールがやってきていました。レイミールは兄のハミールの名まえをきいて、しよんぼりとうなだれております。レイミールはリストールから、兄のハミールがとらわれの身になつてしまったということを、すでにきかされてました。

「ふとどき者などというのは、もちろん、ぬれぎぬです。」リストールがさらにつづけます。「それはすべて、ワットのさくりやく。そして、リブレストどの。黒騎士たちは、かれらをほりよとして、つれていつてしまいました。かれらはデイルバグに乗せられ、北のシープロンドへとつれられていったのです。おそろしいさくりやく。われらがめいゆう国、シープロンドをせめ落とす、そのくわだてのざいりようとするために……」

仲間たちは、シープロンドへ！　ワットの者たちは、シープロンドをせめ落とすそのおそろしいさくりやくのために、とらわれの者たちの身をりようしようとしていたのです！　なんとということでしょう！　そんなことは、いつこくも早く、とめなければなりません！　（ワットの者たちが、シープロンドにせめこんでくる。シープロンドのかいぎの席で心配されたことが、今ほんとうに、起ころうとしていました！　そしてそのくわだての中で、ワットの者たちがどんな方法をもつて、とらわれの者たちの身をりようしようとしているのか？　それはまだわかりませんが、どうせワットのことです。ひきょうきわまりないことを、考えているにちがいありません！）

「リブレストどの。わたしは、かれらのことを、よく知っています。」リストールがいました。「かれらはわたしをすくうために、わぎわぎ、このリュインの地にまでやってきたのです。おそらく、かれら四人のやくわりは、きゆうせいしゆどのを敵の目から遠ざけるといふものだったのでしょう。南の街道をくだってきたのなら、そのやくわり

は、もうじゆうぶんに果たしたはず。あとは山道にそつて、敵の目をかわしつつ、安全なベゼロインの地へとその身をのがれさせることを、考えればよかつたはずです。しかしかれらは、もうひとつのやくわりを果たすため、あえて、このリュインとりでのすぐそばの地にまで、やってきたのです。こんな敵の地のさなかに、大きな危険をおかしてまで……」

リストールのいう通りでした。レシリアたち四人の仲間たちは、ロビーたちのために敵の目をひきつけるといふそのやくわりのほかに、もうひとつのひみつのもくてきをも、持っていたのです。それは……。

とらわれのしきかん、リストール・グラントを助け出すというものでした！

それはほんとうに、ごくひのもくてきでした。出発のまぎわに、メリアン王から、レシリアとルースアンだけに伝えられたのです（ですから、ごめんなさい。読者のみなさんも知らなかつたわけなのです）。メリアン王は、リストールがシルフィアだということ、そしてリストールだけが持つあるとくべつなやくわりのことについて、よく知っていました。リストールを助け出すことが、このアーランドの運命において、とても大きな意味を持つことになるということもです（それらがなんなのか？　そしてメリアン

王がなぜそれらのことを知っていたのか？　ということについては、このあとの物語の中で語られます。のちのちのお楽しみにも。それらのじょうほうは、きわめて重大で、せいさいなものでした。ですからメリアン王は、そのことを今は、レシリアとルースアンだけに伝えたというわけだったのです（ハミールとキエリフには、ちよつとかわいそうでしたけどね）。

ちなみに、リストールのことを助け出すようにとレシリアたちに伝えたメリアン王でしたが、もちろんメリアン王は、「大けんじやノランが岩のけんじやリブレストに、リストールのことを助け出すようにたのんだ」などということは知りません。ノランがこのアークランドにやってきたのは、ほんとうにとつぜん、旅の者たちがシープロンドを出発した、そのあとのことでしたから。エリル・シャンディーンのアルマーク王ですら、ノランがやってくるなどということはわからなかつたのです（お伝えしました通り、ノランはほんとうに、なんのれんらくもなくとつぜんやってくるのです）。

ですからメリアン王は、とらわれの身となつたリストールのことを助け出せるのは、今このとき、自分だけであるのだということを知りかいていました。リュインとりでのふいをつけて、とりでのはんたいがわからそこにふみこんでいくようなまねができるのは、ペーカーランドとはんたいがわの地にいる者たちで、しかも敵の目をのがれることのできるすべを持っている、レシリアたちくらいであるということ、メリアン王はよ

くしようちしていたのです。

じつさいには、ノランにたのまれたリブレストがそのやくめをひきつぐこととなりましたが、もしリブレストが動いていなかったのなら、ほんとうにリストールのことを助け出せるかのうせいを持ちあわせていたのは、メリアン王にいらいされた、レシリアたち四人の者たちだけにほかなりませんでした。メリアン王は、このようなことをすべて考えにいれたうえで、レシリアたちに、この重要なにんむをたくしたのです。

「リブレストどの。」ふたたびリストールが、重い表じようをしてリブレストにいいました。「わたしを助けるようにと、ノランどのがいわれた、そのわけは、もうごぞんじのことと思います。わたしには、大いなるやくわりがある。わたしは、そのやくめを果たそうとしていた矢さきに、ふこうにも、とらわれの身となつてしまいました。ですが今、あなたにこうして、助けていただいた。わたしは、今すぐにでも、タドウーリ連山にむかわなければなりません。」

タドウーリ連山？ それはシープロンドのくによりもさらなる高きにそびえる、せいなる山々の名まえのはずでした（かなしみの森の小川を渡るときには、ライアンが、その山のせいなるわき水の力を使いましたよね）。リストールの持つという大いなるやくわりというものと、そのタドウーリ連山とに、いったいどんなかんけいがあるのでしょうか？（ちなみに、リストールの果たすべきそのやくわりというものは、さいご

の戦いのはじまる、このときにおいて、おこなわなければならないものでした。ですからそれは、あらかじめ、果たしておけるようなことではなかったのです。そのりゆうについては、のちほど、そのときがきたらお伝えしたいと思います。」

リストールがつづけます。

「もちろんわれらは、うばわれたリユインとりでを、ふたたび取りもどさなくてはなりません。ですが、今のわたしには、その前に、いちばんに、気がかりなことがあるのです。それは……、黒騎士たちにつれていかれた、とらわれの者たち。わたしはかれらを、助けてやりたい！　かれらは、わたしのせいで、とらわれの身となりました。こんどはわたしが、かれらを助けてやる番です。かれらは、今朝の早くに、デイルバグの背に乗せられて、シープロンドへとむかいました。今からでは、とてもまにあわないとは、わたしも思います。ですが、万にひとつでも、かれらをすくえるかのうせいがあるのなら、わたしは、そののぞみに、かけたいのです。黒騎士たちのわなにかかろうとして、そののぞみに、かけたいのです。その思いをつなぐことができるのは、われらのみ。そして今、このときでしかないのです。どうかわれらに、お力をお貸し与えください！　お願いです！」

「お願いします！」「リプレストどの！」「力を貸してください！」

リストールの言葉に、兵士たちもみな口ぐちにさげんで、リブレストにお願ひしました。リストールの思いは、また、兵士たちにも、しっかりと伝わっていたのです。

そのあつい思いを前にして、リブレストは大きな口をいっぱいに食いしばって、「ぐむむむむ……！」とうなりました。そして……。

「ああつたりまえじゃーい！」

天もわれんばかりの、すさまじい大声！ 思わず兵士たちは、みなたまらずに耳を両手でおさえ、中にはそのまま、ぺたんと地面にしりもちをついてしまった者さえいました（なにしろまわりの木々の葉っぱがその大声でびりびりとふるえたくらいでしたから、とんでもない大声だったのです）。

「力を貸せだど？ そんなもん、いうまでもないことだわ！」リブレストが、そのまま大声を張り上げてつづけます。

「ここのリブレストに、まかせておけーい！ デイルバグだかなんだか知らんが、そんなもん、ものの数時間で追いついてみせてくれるわ！ ワットのがきんちよどもの悪だくみなんぞ、こっぱみじんうちくदैてくれる！ お前たち！ こうしちやおられんぞー！ 今すぐわしに、ついてこい！ つかまったそいつらも、シープロンドも、みんな

まとめ、さっさと助けにいくぞい！」

これをきいた兵士たちの、よろこびようつたらありませんでした。みんなこぶしを天につき上げて、「おおおーっ！」といっせいに、心からの声を上げたのです。

けんじやリブレスト。なんとも男気にあふれる、たよれる人物じゃありませんか！

わたしもすつかり、その心意気にほれこんでしまいました（はじめはわたしも、「なんだか、もじやもじやおひげの、変な人だなあ……」などと思っていました）。リブレストさん、ごめんなさい。

ところで……、リブレストはかんたんにいつているようですが、これはとんでもない、「むりなんだい」なことでした。なにしろデルバグたちがリュインを出発したのは、今日の朝。今から十六時間ほども前のことでしたから（これはリストールが、ろうやのまどからかくにんできたことでした。時計を取り上げられていましたので、せいりかくな時間まではわかりませんでした）。そのデルバグたちに今から出発して追いつこうというのですから、なみたいていのことではないと、すぐにわかりますよね。

リュインからシープロンドまでは、空を飛べるデルバグでいけば、必要ふかけつな休そくの時間をふくめても、まるいちにちくらいあればついてしまいます。ですからデルバグたちがシープロンドにたどりつくまでには、あと八時間とかからないはずでした（ひよつとしたら、もっと早く、六時間くらいかもしれません）。そんなにみじかい

時間の中で、ここからそのデイルバグたちに追いつこうなんてことは、まったくもって、ふかのうに近いことでした。リストールもそれをよく知っておりましたから、「万にひとつのかのうせい」といったのです。

ですがリブレストに、そんなことがわからないはずありません。なにしろ、けんじやなので。リブレストにはなにか、ひさくがあるようでしたが……、さてさて、いったいリブレストは、こんなにみじかい時間の中で、どうやって、デイルバグたちに追いつこうというのでしょうか？ それはこのあと、おどろきのてんかいの中であきらかにされますよ。こうごきたい！」。

「マグマばくはつ！ わしも二百年ぶりに、心の底からもえてきたわい！」
リブレストがそのおひげをぴーん！ とさか立てて、全身から白い湯気をふしゅー！ と吹き出しながら、さげびました（どういうからだなのでしょうか……？）。

こうして、リストールとレイミールをふくむ、リュインの二百名にもおよぶ白き力の者たち（せいにかくには二百三名でした）は、このたのもしい岩のけんじやリブレストと、その岩の兵士たちとともに、この夜のやみの中をふみ出していったのです。すべての者の心は、ただひとつでした。悪をくじいて、せいぎを守る！ かれらの心は、まさしくマグマのように、ふつつつともえ上がっていたのです。

待つてね、みんな！　そして、たのみましたよ、リブレストさん！（ところで、さっきいうのを忘れていましたが、二百年ぶりって、いったい今、おとしはいくつなの？　リブレストさん……）

（さて、物語はもうすこし、このリブレストたちの場面がつづきます。ロビーたちの旅の物語のつづきは、もうちよつとあとで……）

うっそうとした森の中。時間は、ま夜中。そこに、とてもたくさんの人たちが集まっています。その数全部で、二百四名！　そしてそれがいいにも、とんでもなく大きな岩の兵士たちが、全部で十七人！（こちらは、人というわけではありませんでした。ちなみに、かれらのそばに作られている岩のドームの中にも、三十二名のワットの者たちがいましたけど。）

そう、いうまでもなく、かれらは岩のけんじやリブレストにひきいられた、白き力の者たち。せいぎの者たちでした。かれらは黒騎士たちにつれ去られたとらわれの仲間たちのことを、助け出さんがため、そしてひきようなわなにかけられようとしているシープロンドのことを、悪の手から守らんがため、今そのけついに、もえているところだったのです。

さいごの旅へとむかう、ロビー、ライアン、マリエル、リズの四人の者たちは、大け

んじやノランのみちびきによる、ノランべつどう隊なわけでしたが、こちらは岩のけんじやリブレストにひきいられた、いわばリブレストべつどう隊といったところでしょう。これからそのリブレストべつどう隊の冒険が、はじまろうとしているところでした（そして……、ここでひとつ、重要な説明を加えておきます。リズレストにリストールのことを助けるようにいらしたのは、ノランでしたが、ノランはリブレストに、「リストールを助けたあと、そのままかれひとり北のタドゥーリ連山まで送りとどけ、あとは残りの兵力を使つて、なんとかリユインとりでを取りもどしてもらいたい」とたのんでいたのです。つまりベゼロインとりでのことを助けてやってほしいというしじは、ノランはしてはいませんでした。これはとても、ざんこくなことかもしれませんが、いくさのルールとして、兵力のすくない方にくにに対しては、とりででの戦いにもちいることのできるてきせい人数というものが、さだめられていたのです。もはやベゼロインとりでは、このルールにあてはまるてきせい人数、七百二十名が、すべて配置されていました（そしてこの人員をとちゆうでほかの者たちといれかえるようなことも、ルールとしてできませんでした）。ですからかれらリブレストべつどう隊の者たちが、このままベゼロインとりでにかけつけたとしても、仲間たちのことをこれ以上助けることはできなかつたのです。それはリブレストべつどう隊のかれらにも、よくわかつていたことでした。くやしいことですが。

さらに、これもとてもつらく、ざんこくなことでしたが、ノランはもはや、ベーカールンドの者たちがこのままベロインとりでを守りきることは、むずかしいだろうと考えていました。ただでさえ、あつとう的な数の敵を相手にしなければならぬというのに（リュインでのはいぼくのペナルティが加わり、ベロインの戦いでは、白き勢力の者たちは、自分たちの兵力の三、四ばいもの敵を相手に戦っていたのです！）、しかもこんかいは、あのおそろしい魔女の三姉妹たちも、それに加わるのです。こんどはどんなにおそろしくて、ひきような手を使ってくるのか……（いくらベーカールンドのきゆうていまじゆつしたちがそのたいさくを考えてきたとしても、相手はいくさのルールのすきをたくみについて、さらにその上をいってしまふのです）。

ですからノランは、運命のけつちやくのときは、そのさきにつづく、さいごの大いさでつけられるのだと見こしてしました（これはノランにとつても、とてもつらいことでしたが、ノランは感じようにはいされることなく、つねにれいせいにものごとを考えて動きました）。そのためその大いさにかけて、ノランはリストールのことをちやくじつに北のタドウーリ連山まで送りどけ、リュインとりでを取りもどしてほしいとのんだのです。さいごの大いさがはじまってしまったのなら、そのあとで、リブレストにはまた動いてもらうつもりでした。

そしてリブレストはノランのしじの通り、リストールを北の地へと送りどけること

になりましたが、それはこの通り、ノランのさいしよのしじとはだいぶことなるものとなりました。つまりリブレストはリストールを送りとどけることに加え、まずはとらわれの者たちとシープロンドのことをすくうべく、みずからの持つ岩の兵士たちの「全軍」をもつてしゅつげきしていったのです（これもまたのちに説明されることになります）。が、そのくになしよぞくしていない兵力（そこからの兵力）であれば、いくさにおいていつぼうの軍に新たな兵力が加わったとしても、加わったあとのごうけい人数が相手と同じ数までであれば、相手は兵士をついかすることができないというルールがあつたのです（加わったあとのごうけい人数が相手の数をこえる場合、相手はそれと同数までの兵士をついかできるというルールがあります）。リブレストひきいるリュインの兵士たちは、シープロンドのしよぞくではないそこからの兵力でしたから、このルールにあてはまりました（ただしさきほどもお伝えしました通り、すでにさいだいの人員が配置されているベゼロインとりに対しては、たとえそこからの勢力であっても、それ以上の兵力のつかはできませんでした）。そのためリブレストも、（相手の兵力をこえない）いちばん強力な手助けをすることのできる全軍をもつて、シープロンドにむかつたのです（もつとも、感じように流されて全軍でしゅつげきしていった、というところもだいぶ大きかったのですが……）。

そのほか、「そのくになしよぞくしない勢力がいくさに加わった場合、その勢力はこん

ご、そのくにの新たなしよぞくとしてあつかわれる」とか、「いくさの場に、そのくにに
しよぞくする兵力が新たに加わった場合、相手はその数にあわせた三ばいまでの兵力を
使うことができる」とかいいうルールもありましたが、もはやここまでくると、ややこし
すぎてよくわかりませんね……)。

そしてリブレストは、ノランのはんだんのことを考えにいれたうえでも、リュインと
りでを取りもどすのは、シープロンドへむかうにんむをゆうせんさせたそのあとでも、
じゅうぶんだとはんだんしていました(魔法の岩のドームのこうかがきれる前に、じゅ
うぶんもどってこられるとも思っていました)。リストールをはじめ、リュインの者た
ちは、こういったことをすべてきかされて、それをじゅうぶんしようちのうえで、リブ
レストのしきにしがたっていたのです)。

(やつと説明が終わりました。話のつづきにもどりましょう。)

さて、ついにかれらはその大いなるもくてきのための道のりを歩み出したわけです
が、じっさいにはかれらは、みずからの足で進んでいったというわけではありませんで
した。それってどういうこと? そのこたえは、けんじやリブレストのひきいる、岩の
兵士たちにあつたのです。

出発にあたり、リブレストは岩の兵士たちにむかつて、さつと手をふりかざしました。

岩の兵士たちはそれにこたえて、ぎゅ、ぎゅいーん！ と音を立てて、ひざをまげて地面にかがみこみます。

「さあ、さっさといくぞ！ おまえたち、こいつらに乗りこめい！ この岩の兵士たちなら、シープロンドまでの道のりも、なんのそのだわ！」

リブレストがそういうと……、なんと！ 岩の兵士たちのおなかの部分が、ごごいーん！ とひらいて、そこに人が七、八人ほども乗りこめそうな、空間ができたじやありませんか！ そこはこの岩の兵士たちにもつをはこぶための、しゅうのうスペースでした。ですがこんかいのように、人をはこぶためにも、じゅうぶんに使えたのです。うん、まったくもって、すごいロボット……、いえ、兵士たちです（そしてこれこそが、リブレストのひさくでした。リブレストはこの岩の兵士たちの足でもって、シープロンドまでむかおうとしていたのです。でもほんとうに、そんなにはやく走れるのでしょうか？ ものの数時間で追いついてみせてくれるわ！ などとっておりましたけど……）。

でもいっばいにつめても、そこに乗れるのは岩の兵士一体につき、十人がやつとでした。リュインの者たちは、全部で二百三名おりましたから、ちよつと計算きをたたいてみますと……。岩の兵士たちは全部で十七体いましたから、乗れるのは十人ずつの、百七十人。となると、残り三十三人のリュインの兵士たちがあまつてしまうのです。かれ

らはどうしましょうか？

なんのなんの。こんどは岩の兵士たちの頭が、ぱかつ！ そうでした、頭のそうじゅう席にも、人が乗れたのです。ここにそれぞれ、ふたりずつ乗りこめば……、ほら！ リブレストのひとりをおわせれば、ちょうどぴったり、三十四人ぶん！ なんとという、ぐうぜんぴったりな数字なのでしょう！（これはほんとうにぐうぜんでした。もし乗れない人がいたら、岩の兵士たちの背中にひもでくりつけて、おんぶしていいこうと思っていましましたが。）

「ぜんいん乗ったなー」リブレストがさげびました。なんとその声は、すべての岩の兵士たちのそうじゅう席と、おなかのかくのうこの中からきこえてきたのです。じつはこの岩の兵士たちは、それぞれが糸のない魔法の糸電話みたいなものでつながっていて、おたがいに話しをすることができました！ まったくもって、すごいロボットです！ いえ、兵士……、もう、ロボットでいいですよ！ こんなロボット、わたしもぜひ一体、自分用にほしい！（いちおうねんのためにいっておきますが、これはわたしがかつてにロボットとよんでいるだけなのであって、もちろんほんもののロボットというわけではありませんよ。みなさんはちゃんと、岩の兵士とよんであげて……、みんなもロボットとよぼう！）

「そうじゅうは、からだでおぼえろ！ さあ、わしに、ついてこい！ 全力で飛ばすぞ

！

リブレストがそういうと、岩のロボットたちは……。

ごいんごいん！ ごいんごいん！ ごいん！

ぎゅいんぎゅいん！ ぎゅいんぎゅいん！ ぎゅいん！

いさましい音を立てながら、地面をいきおいよく走り出しました！（しかもその目からはきいらい光が飛び出して、道をてらしていたのです！）

は、はやいはやい！ 馬でかけるのはわけがちがうくらい、はやいのです！（マリエルのじえつとこーく・すくりゅーとまではいきませんでした。）（そしておどろくべきなのは、その乗りごこちのよさ！）（こんなにいきおいよく走ったら、がたがたゆれて乗りものよいしてしまうんじゃないかと思っていました）（そこはやっぱり、けんじやさんのつくったロボットです。どんなにはやく走っても、そうじゅう席とおなかのかくのうこの中は、ほとんどゆれずにあんでいしていました）（よかった、これならみんなも、ロビーみたいな目にあわなくてすみますね！）（乗りものよいばかりするはめになつてしまっているロビーには、申しわけないのですが……）。

ちなみに、そうじゅう席にはレバーがふたつと、足でふむペダルがふたつあって、そ

れらを使って、これらのロボットたちをそうじゅうしました。右のレバーが、前とうしろに進むためのもの。左のレバーが、左右にまがるためのもの。右のペダルは、走るはやさのちようせつ。左のペダルが、ブレーキです。ちようど、自動車のそうじゅうみたいなものでした。そしてはじめはちよつととまどっていました。リユインの兵士さんたちもすぐにそのそうじゅうになれて、なんとかリブレストについていくことができました。

ところで、先頭をゆくリブレストの隊長きのそうじゅう席には、リブレストとレイミールのふたりが乗っていたのです。レイミールは「ぜひ先頭に立っていきたい」とお願いして、リブレストといっしょに乗せてもらいました。ロボットに乗ったレイミールのうれしそうなことといたら！目をきらきらかがやかせて、リブレストに教わりながら、自分でもちよつとそうじゅうさせてもらったりもしていたのです。やつぱりレイミールも、男の子。ロボット大好きでした。ライオンがこのことをきいたら、きつと「ほくも乗りたーい！」とじだんだをふんでくやしがることでしょうね。

もうひとつ。「これは、なんのボタン？」レイミールがそういって、そうじゅうレバーの下の方についていたボタンをおしてしまいました……、そのとたん、しゅごごごごー！岩のロボットのうでから、岩でできたミサイルがはつしゃ！まっすぐさきの丘にめいちゅうして、どごーん！地面に大きなあながあいてしまいました！

「ここらこら。たまをむだにしては、いかんぞい。」リブレストがそういつて「がつはつは！」と笑いましたが、レイミールは、ぼかーん。口をあけたまま、しばらく動くこともできなかつたのです。す、すごい……。

そしてみんなは、リブレストに助けられた森の中から、いちろ、北へ。シープロンドへとつづく街道めざして、岩場も荒れ地もなんのその。がしんがしん！ といさましい音を立てながら、つき進んでいったのです（なにしろこのロボットたちは、たいていのしようがい物なんて、まったく問題にしません。あるときなんて、目の前に大きな岩があつて、まだそうじゆうになれていない兵士さんたちが、「あぶない！ ぶつかる！」そこにつつこんでいってしまいました。つぎのしゅんかん、ぼごーん！ 大岩はこなごなになってちらばつてしまいました！ ぶつかつたロボットは、なんともありません。まったくもつて、タフなロボットです！）。

「丘を越えるぞー！」

リブレストの声が、それぞれのロボットたちの中にひびき渡りました。十七体のロボットたちは、がしん がしん！ と走つて、丘を乗り越えていきます。丘を越えたさきは、草木もまばらな、見渡すかぎりの平原になっていました。左の方には、いだいなる切り分け山脈のまつ黒なシルエツトが、ゆうゆうとつらなつております。そしてその山のみもとには、南北にのびる南の街道がありました。ここは、ベルグエルム、フェリ

アル、ハミール、キエリフの四人の騎士たちが、ロビーのことをむかえにいくときに、シープロンドへとむかつて進んでいった道です。こんどはその道を、岩のロボットたちに乗ったせいぎの者たちが、こちらもシープロンドへとむかつて、歩を進めていこうとしているわけでした。

「街道に出れば、こつちのもんじやい。かく、パイロットたちにつぐ！ 頭の上に、五つのレバーがあるな？ 見えるか？」

リプレストの声にしたがって、頭の上を見てみると……、なるほど、それぞれ色のちがう、五つのレバーがっていました。

「きいろいろレバーをひくんだ。シープロンドまでは、それで飛ばしていくぞい！」

いわれるままに、パイロットたちは、きいろいろレバーをがくん！ とひき下げます。すると……。

「うわわわっ！」

ロボットのからだだが、ぐぐいーん！ がごん！ がごん！ じゃきーん！ みるみるうちに、かたちを変えていくじゃありませんか！ そして……。

なんと！ さつきまで兵士のすがたをしていたロボットたちが、まるで地面の上を走る、船のようなすがたへと変わりました！ へ、へんけいするんですか！ すごいすごい！（と）ところで……、残る四つのレバーも、やつぱり気になりますよね。このロボット

にはまだまだ、おどろきのきのうがそなわつていたのです。ですがとても全部はしようかいしきれませんから、それはまた、べつのきかいに……。水の中にもぐつたりもできませんでしたけど……)

「こつからさきは、自動そうじゆうにはいるぞい！　ざひようせつてい！　四七六二、八七二三！　もくてき地は、シープロンドじやい！」

陸を走る船のすがたにへんけいしたロボットたちは、ぐいん！　ぐいん！　船の底にならんだたくさんのしやりん（このしやりんはゴムのようなそざいでできていたので）をきしませながら、たいらな街道の上を、さつきよりも数ばいははやいんじゃないか？　というくらいのはやさで、すつ飛ばしていききました！

はやいなんてものじゃありません、はやすぎです！　（これならマリエルのじえつとこーく・すくりゆうーよりも、ぜつたいにはやいでしよう！）

追っかける相手は、デイルバグに乗ったワツトの黒騎士たち。黒騎士たちの乗るデイルバグは空を飛んでいましたから、まっすぐもくてき地までいけるため、とてもはやいのです（ですけど、れんぞくして飛ぶためには、ひんぱんに休そくが必要でした。ですから、こちらとしては助かるのです。そのぶん、追いつく時間がかせげますから）。ですちならば、空を飛ぶデイルバグたちよりも、なおはやいもうスピードで、陸の上を走つ

ていくことができました！（まさに風のごとくです！ さすがはリブレストさん！

しかもこのロボットたちは、馬やデイルバグたちとちがって、休む必要がありませんでした。これならほんとうに、ものの数時間でシープロンドまでたどりつけてしまえそうですね！ なんともうすごい！

ちなみに、今までにとうじようした乗りものや生きものたちの中で、いちばんはやいのはなにかというところ……、それは、いがいやいがい、しらせをはこぶ、でんれいの鳥だったのです（すこし前の説明のところでもとうじようしましたが、またまたのごとうじようです）。かれらは重要なじようほうをいち早く伝えるために、とてもはやく飛ぶことができますようにくんれんされていました。なんと、馬で二、三日かかるような道のりでも、せいぜい三、四時間もあれば飛んでいってしまうのです！ はやい！

ところで、シープロンドまでむかえるようにくんれんされたでんれいの鳥が、今手もとにいてくれたのなら、すぐにシープロンドに危険を知らせるメッセージを送れましたけど、とらわれの身であったかれらが、そんなでんれいの鳥を持つているはずもありませんでした（もちろん、そんな鳥をワットの兵士たちが持つているわけありませんでした。ワットの兵士たちが持つているのは、自国の仲間たちにいる場所のみに飛ぶようにくんれんされた、鳥ばかりだったのです）。そしてさすがのけんじやリブレストでも、それにかわるほどのはやさでメッセージを送れるわざを使うことは、できませんでし

た。リブレストのせんもんは、岩のロボットをはじめとする、さまざまな岩の工作物をつくること。いくらけんじやでも、まったくばんのうというわけではなかったのです。夜の街道を、十七そうの岩の船がつき進んでいきます。めざすはひとつ、シープロンド！ とらわれの仲間たちのことを、シープロンドのことを、悪の手からすくわんがために。

「ゆけ、ゆけ！ あらし吹くとも〜！」

リブレストが上きげんで、いさましいマーチを口ずさみました。

「いつけ、いつけえ〜！ おそれることなく〜！」

レイミールのげんきな声が、リブレストの歌につづいて、ロボットたちの中にひびき渡りました。

そして時間は、ロビーたちのところにもどります。

「ありがとう。せわになったね。」

マリエルが、ここまであんないしてくれたりユキアに、出発前のおれの言葉を伝えているところでした。みんながいるのは、たきのみずうみの、そのほと。ロビーたちノランベつどう隊の四人は、これから、精霊王の待つおとぎのくに、イーフリープへと、

旅立とうとしているところだったので（ちなみに、マリエルはいよいよイーフリープへとふみこむにあたって、もう服を着がえていました。いわゆる、勝負服というやつです。こんかいの服は……、まさしく、まじゆつし！ ひらひらとしたレースのついた白いビロードのシャツに、ガーターベルトとコルセットのついた、黒いきぬのズボン。うらがえんじ色の、黒いあつ手のケープをはおっていて、ケープの前は、大きな赤い宝石でとめられていました。そしてなによりとくちようなのは、その大きな黒いとんがりぼうし！ 手にしたつえとあわせて、ここまでそろえれば、もうどこから見てもまじゆつしです。マリエルは精霊王のくにイーフリープに敬意をあらわして、まじゆつしとしての、せいそうのかっこうをしていくことにしたというわけでした（ライアンは、「なんか、ぼくの服とデザインかぶってるじゃん！」とぶーぶーいっていましたが）。

ところでマリエルは、このみずうみのほとりで服を着がえてしまうことにしましたが、もちろん着がえているあいだ、みんなにはうしろをむいているようにいつていたのです。「のぞくなよ。」とマリエルがいつて、ライアンが「だれが！」とどなりました。「ぼくたちは、これから、精霊王さまのところへいく。ラフェルドロード里長に伝えてくれ。われらは、白き勢力の仲間。きたるべきときは、すぐそこまできている。今こそ、おたがいに、力を分かちあい、助けあうときだと。」マリエルがリュキアにいいました。「うん、わかったよ。」リュキアがこっくりうなずいて、こたえます（ほんとうにわかつ

たのかどうかは、だいぶあやしいですが……)。

「ああ、それから、」マリエルがそういつて、なにやら魔法の言葉をとなえると……、ほわん！ マリエルの手のひらの上に、フットボールくらいの大きさの、もも色をしたわた毛のボールがひとつ、あらわれしました(これは「まじかる・おぶじえくと」というもので、いちど出してしまえば、あとはずっと、こわれるまでそのまま消えずに残るので、すぐに消える魔法とくらべると、だいぶむずかしい魔法でしたので、マリエルほどのまじゆつしでも、ボールいっこやロープいっぽんくらいを出すので、やつとでした(もつとも、ほんきを出せば馬車の一台くらい、マリエルなら出せましたが、そのあと二日は、ぐったりになってしまうことでしょう)。

「これは、ぼくからのプレゼントだよ。らんになんぐ・ふあずぼーる。レベル一から十まで、逃げるはやさをちようせつでできる。レベル十のこいつをつかまえられたら、たいしたものだね。」

魔法のボールを受け取ったりリユキアは、大よろこびでした。そしてさつそく、いきなりレベルのダイヤルを十にあわせると……、ひゅんっ！ 目にもとまらないくらいのはやさで、ボールが逃げ出したのです！

「待てえーっ！」ひゅんっ！ リユキアはそれに負けないくらいのはやさで、あつといるまにみんなの前からいなくなってしまうました。

「ちやんと里長さんに、でんごんが伝わるのかなあ……」リユキアの消えていったさきの丘をながめながら、ライアンがつぶやきました。

「さあ、それじゃ、いくぞ。」

リズがそういつて、みずうみの水の方へとむかつて、すたすたと歩いていきました。え？ みんなが思うまもなく、リズはさつさと、水ぎわに近づいていきます。

「ちよつ、いったいどこへ……」マリエルがいいかけましたが、つぎのしゅんかん……。

「ええーっ！」

みんなはびつくりして、さげんでしまいました。

なんとリズは、水の中にはいるのかと思いきや、そのままみずうみの水の上を、ちやぼちやぼ。へいきな顔をして、歩いていくではありませんか！

「え？ なに？」リズが水の上に立って、こちらをふりかえりながらそういいいます。

「あ、これ？」そしてリズは、自分の足もとをゆびさしていいいました。

なんと、精霊の種族シルフィアであるリズは、水の上をはずまずに歩くことができしました！ もちろん、ふつうに水の中にはいることもできましたが、ちよつと集中するだけで、こんなこともできてしまえるのです。リズにとつてはあまりにもあたりまえのことでしたので、なんの説明もなく、ふつうに歩いていったというわけでしたが、みんなやわたしたちにとっては、しょうげき的ですよね！

「シルフィアだもん、あたりまえじゃんか。それよりさ、早くしなよ。マリエルなら、おれの助けがなくなつたつて、魔法でついでこられるだろ？」

そのリズムの言葉に、マリエルは「ふん！」と鼻をならして、こたえます。

「とうぜんだよ！　じゃ、なくて、いつたいどこへいくのか？　つてこと！　精霊王のところへいくんでしょ？　精霊王のトンネルは、むこうの山の、さきじゃないか！」

マリエルがそういつて、むこうに見えている山のことをゆびさしました。そこはマリエルがノランからきいていた、アツプルキントにいちばん近い、精霊王のトンネルがある場所だったので（マリエルはほかにも、このアークランドにあるすべてのトンネルの場所をおぼえていました。その中から、いちばん近いトンネルをえらんだのです）。とうぜんマリエルは、これから大急ぎで、そこへむかうつもりでした。

「あーんなどこ、遠すぎていけないよ。」リズムが手をふつて、マリエルの意見をはねのけました。とうぜんマリエルは、むつとしてしまいます。

「じゃ、どこへいこうつてのさ。あそこが、いちばん近いんだぞ。」マリエルがいいかえします。ですがリズムは、へつちやらな顔をしたままで、いいました。

「アツプルキントのそとのトンネルにいく必要なんて、ぜんぜんないじゃん。だつて、おれたちの目の前に、トンネルはあるんだから。」

「な、なに？」思いがけないリズムの言葉に、マリエルがびつくりしていいました。目の

前に、トンネルがあるですって？ それはわたしも、はつ耳です！

「なーんだ、マリエル、知らなかったのか？ そーいや、ノランのじいさんにも、まだいつてなかったな。あの島のたきのところにも、トンネルがあるんだよ。」

なんと！ このみずうみのまん中にある、たきの島。その島の中にも、精霊王のトンネルがあるといいました！ 自分たちが「精霊王のトンネルをあけてください」とたのみにきた相手にはじめて会ったところに、その精霊王のトンネルがあるなんて！ なんて、どんぴしやりなんでしょう！

ということは……、わざわざアツプルキントまでリズのことをさがしにきて、とんだ時間のロスになってしまったと思っていたわけでしたが、そうではなかったわけでもくてきの人物ともくてきの場所が、じつはもうすでに、そろっていたというわけでした。なんてすばらしい！ てまがはぶけて、よかったよかった！（リズのしつたいも、これでちょうど消しですね。）

「ちよ、そんなこと、きいてないぞ！ なんでそれを、早くいわないんだよ！」マリエルが、ぶんぶん怒っていいかえしました。

「だって、きかれなかったからさ。」リズが、あいかわらずあつけらんとしたままで、そういいます。

「そ、そりゃ、きいてはいないけど！」

マリエルは頭の中がすつかり、こんがらがってしまいました。きかれないから、こたえない。それは正しいような気もするけど……、でもこの場合、きかれる前に教えるのが正しいはずなのであって……、リズのいいかげんさに二をかけて、三でわって……、ああ！ わけがわかりません！ リズと話しをしていると、いつもこんな感じになつてしまうのです。マリエルはこぶしをふたつふり上げて、「あー、もう！」とさげびました（まったくもつて、マリエルにどうしようとしてしまいます……）。

「んなこと、どーでもいいからさ。」リズが、うでをふつていいました。「さき、いつちやうよ？ トンネル、あけてほしいんだろ？」

リズはそういうと、ちやほちやほ、水の上を歩いていってしまいます。

「な……！ ま、待てたら、まだ、話は終わってないぞ！」マリエルがいましたが、リズはぜんぜん、知らんぷりでした。

「まあ、ここは、りくつぬきでいったらいいじゃん。」ライアンがそういって、マリエルの肩を、ぼんとたたきます。マリエルは、すっかり力がぬけてしまつて、「はあ……」と深いため息をひとつついて、あきらめました。

「マリエルの、まじかる・さぽーと。すいみん、るーきん、りろるー！」

マリエルが魔法の言葉をとなえると……、ふおんふおん！ マリエルと、マリエルの

そばにいるロビーとライアン、三人のからだは、ふわふわとした光につつまれました。これは、みずすましのじゅつ。この魔法を使うと、その通り、水の上をちやばちやば歩くことができたのです（いぜんかなしみの森で水の精霊の小川を渡ったことがありましたが、あのときは精霊が道をあけてくれたので、川を渡ることができたのです。こんどは、きよりも深さも小川とはぜんぜんちがう、みずうみが相手でしたから、精霊にたのんで渡らせてもらおうとしても、そうかんたんにはいきません。がんばって水の精霊にお願いすれば、みずうみの上を渡る方法もないわけではないでしょうが、ライアンもやっぱりここは、すなおにマリエルの魔法にたよることにしました。およいでいくのも、めんどろですしね。それに、たいせつなお菓子がぬれちゃったら、たいへんですから。

「なんか、さいきんぼく、戦いいがいの出番、くない？」ライアンがロビーに、ぶーぶーいいました。まあ、マリエルがいるので、そこはしかたありませんね。がまんしてね、ライアン）。

「ぼくのからだに、しつかりつかまつて、ゆつくり歩いてください。だいじょうぶです。落としませんから。いきますよー。」

マリエルはそういいましたが、じつはこの魔法は、地味ーなわりにはとつてもむずかしい魔法で、ちよつとでも気をぬくと、たちまち水の中に、どぼん！ 落つこちてしま

うのです。ですからマリエルほどのまじゅつしでも、この魔法を使っているときには、おしやべりすることさえできないくらいに集中が必要でした（「マリエルの、まじかる・うおーたー・すらいだー！」なんていう魔法で、水の上をびゅいーん！とすべっていったら、そうかいですけどね。さすがにマリエルも、なんでもかんでもできるというわけではありませんでしたから（そもそもそんな魔法は、ありませんでしたし……）。マリエルはまた、自分の使える魔法の中で、いちばんこうりつのいい魔法をえらんで、このみずすましのじゅつを使うことにしたのです（ちよつと地味でしたけど）。

ちなみに、ライアンは水の上にいるときに、マリエルのうしろから「わっ！」なんて、ちよつとやってみようかと思いましたが、水の中に落ちるのはいやなので、やつぱりやめておきました）。

ちよぼん、ちよぼん。みんなは、いつぼずついつぼずつ、しんちように、水の上を歩いていきました。なんだかふわふわして、変な感じです。まるでマシユマロでできた床の上を、ころばないように気をつけながら、よちよち歩いているみたいです。ずつときの方を見ると、リズがうでを頭のうしろにくみながら、よゆうしやくしやく、立っていました。みんながくるのがおそいので、水の上に立ちどまって、待っていたのです。わざとかた足で立ってみせたり、えつちらおつちら歩いてくるみんなの、まねをしてみせたりして、こつちをからかっていました。な、なんか、はら立つ！（でもマリエルは

集中を切らさないように、がんばってむししました。」

そして、ようやくのことで……。

「とうちゃーくー！」ライアンがそういつて、マリエルにつかまっていた手をはなして、いちばんに島にとうちやくしました（でもさきにリズが待っていて、「おそいなあ、さき、いつちやおうかと思つたよ。」とからかつてきたので、マリエルとライアンが、そろつていいました。「うるさい！」）。

たきの島は、とても美しいところでした。みずうみのまわりも、まさならくえんといつた美しさでしたが、この島はそれらの美しさを、みんな集めたといった感じだったのです。ま新しいみどりにあふれた、げんそう的な木々。色とりどりのくだものや、花々。あざやかな羽の色をした鳥たちが、あちこちでささやいております。きいろやオレンジ色をした大きな花たちが、くるくるとまわりながら、空中を飛びまわっています。た（この花はあるていど大きく育つと、つぎの成長の場所をもとめて、みずから飛びまわつて旅をするのです。なんともふしぎな花です（ここにリュキアがいたら、花たちを追いかけて、いつしよに飛んでいつてしまふことでしょうね））。

地面には、白い毛なみを持つたりすのような動物たちが、走りまわっていました。そのりすたちのまん中には、水の色をした大きなきがいつぽん、生えております。でもよく見ると、そのきのこには小さな足があつて、その足でよちよちと歩いていました

！（このきのことりすたちは、じつは友だちで、きのこの背中には葉っぱでできたふくろがひとつ、下げられていました。りすたちはそのふくろにたくさんの木の实をためこんで、きのこといっしょに、いどうして暮らしていたのです。きのこを食べる動物なんかきたら、りすたちがいっしょけんめい追っばらいましたし、大きな鳥が近づいてきたときには、きのこがけむりをびゅー！と吹き出して、相手を追っばらいました。なんともおかしな友じょうですね。）

「すてきなところだね。」ロビーがいました。

「うん、まあ、シープロンドほどじゃないけどね。」ライアンがいつものちようしで、こたえました。

「すごいエネルギーです。」マリエルがつづけます。「こんなところがあったなんて、うかつでした。ここは、このアークランドの、すべてのよい力が集まるところみたいですよ。」

マリエルがそういって、ためしにちよつとだけ、魔法の言葉をつぶやいてみると……。

ぼわんっ！

ちよつとしか力を使っていないのに、とんでもない魔法のエネルギーです！ つえの

さきから、ものすごい力のいなずまが、ばちばちばち！ はじけんばかりにあふれ出しました（あわててマリエルは、その魔法を消しました）。

「へええ、すごいね。」

ライアンがそういって、同じようになにかをつぶやいて、精霊たちに語りかけてみま
す。すると……。

ぼぼぼ！ しゅばばばあーん！

まわりの空気や地面が、まるでたつまきにでも飲みこまれたかのように、ぐるぐるとうずをまいてはじけ飛んでしまいました！ な、なんておそろしい……（もうすこしで、ロビーまでその中にまきこんでしまうところでしたが……）。

マリエルのいう通り、ここは魔法や精霊の力が、とんでもなく大きくはたらく場所でした。もしここで、マリエルとライアンのあのほんきのあわせわざが、さくれつしたとしたら……、考えただけでもおそろしい！ たぶんこの島ごと、みんななくなってしまうそうです……。

「この島は、精霊王がつくったんだよ。」リズがさらりと、とんでもないことをいいました！ 精霊王がつくったですって！

「むかし、精霊王が、このみずうみにあそびにきてさ。まん中に、島をつくったんでよ。なかなか、いきなことをするね。」

いき、ですか……。リズの意見はともかくとして、なるほど、どうりでこの島は、とんでもないエネルギーにみちているはずです。

「精霊王のつくった島に、精霊王のトンネルか。どうりで、精霊たちがさわぐはずだよ。」ライアンがそういって、手のひらを空中にかざしました。するとその手の上に、すぐに、風や水の精霊たちのすがたが、ふわふわと見えはじめたのです！（ずいぶんとひさしぶりに、かれらにお目にかかれたような気がしますね。やみの精霊さんたちになら、ついこのあいだ、会えましたか……）

精霊のすがたがかんたんには見られなくなってから、だいぶねん月がたちましたが、ここはそんなことには、おかまいなしの場所でした（むかしのアーランドがこんな感じだったのです）。まさにここは、「よい力」の集まる、精霊たちのらくえん。このアーランドでもゆびおりの、とくべつな場所だったのです（そして精霊の力は、魔法の力でもあるのです。魔法を使うときにはさまざまなしげんのエネルギーが必要でしたが、そのエネルギーとはすなわち、精霊の力によって生まれるものでした。ですからマリエルの魔法の力も、それによって、大きく高められたというわけだったのです。

ちなみに、マリエルは強くなった力でほんのちよつと、さつきリズにからかわれたし

かえしに、リズのかみの毛をもじやもじやにするいたずら魔法をかけてやろうかと思いましたが、やっぱりむだな魔法の力を使うのはやめておきました。

と思っていると……、すでにライアンが、リズの頭のとつぺんの毛を風の精霊にぐしぐしひっぱらせて、いやがらせをしていました……。マリエルはライアンと同じようなことを考えていた自分が急にはずかしくなつて、思わず顔を赤くして、「こほん。」とせきばらいをしてごまかしました。まったく、かわいい子たちです(こと)。

島は、そんなに大きなものではありませんでした。ですからそこからちよつと進んだだけで、もうさきの方から、たしかな水の音がきこえはじめてきたのです。それはこの島のまん中にあるという、たきの水の落ちる音でした。

みんなはきれいな水の流れる小川にそつて、歩いていきました。それはなんとも、こちのいいせせらぎでした。小川のまわりには、たくさんの水の精霊たちが見て取れまです。みんな、すいすい飛びまわつたり、ぴよんぴよん水の上をはねたり。水のつぶをボールがわりにして、それを取りあつてあそんでいる精霊たちまでいました(ちゃんとしたルールがきまつているのでしょうか？ しんぱんのような精霊までいました。なんともめずらしい光景です)。

この小川の水は、島のまん中のたきから流れていました。ですからこの小川をのぼつ

ていけば、たきのところまでいけるのです。

水の音が、だんだん大きくなってきました。たきは、すぐそのようです。そして、さいごのまがりかどをまがったところで……。

「あれ？ どうくつ？」

ライアンが、目の前のいがない光景におどろいて、いいました。てつきりそこに、どうとうとしたたきのすがたがあるものだとばかり、思っておりましたから。ライアンのいう通り、流れる水は、岩山にぽっかりあいたどうくつの中へと、つづいていたのです。そしてどうこうというたきの水の音は、そのどうくつの中からひびいてきていました。

「この中だよ。足もと、じやり道だから、気をつけな。」

リズがそういって、すいすいどうくつの中へとはいってしまいました。あわててみんなも、リズのあとを追いかけます。

どうくつの中は、気持ちのいい空気にあふれていました。息をすうつとすいこむと、さわやかなミントのようなかおりの空気と、こまかい水のつぶが、いっしょに鼻のおくをくすぐっていくのです。足もとにはすいしようのようにかがやくきれいなじやりが、しきつめられていました。そしてみんながその上をぎくぎくと歩いていくと、そのじやりがきらきらと光って、どうくつのかべを美しくてらし上げていくのです。

どうくつのかべもまた、すき通ったすいしようのような石でできていました。光にて

らされたそのかべの石が、こんどはべつべつの色の光でそれにこたえて、それがまた、べつの石にも伝わって……。それはまるで、七色の光のイリュージョンの、シヨールのよう。みんながいるのは、まさにその、とくとう席。シヨールステージのどまん中だったので。ロビーもライアンも、マリエルさえも、みんな思わずぼーつとなつて、目の前の光景に見いつてしまいました。気がつけば、たくさんの精霊たちが、あたりにまたたくげんそう的な光の中を、(まるでシヨールステージの上のダンサーたちのように)すすいとまいいどつていたのです。こんなにすてきなシヨールを見せられてしまつては、だれでも心をうばわれてしまうのは、とうぜんのことでした。

「みちくさ食つてないでさ、早くいくよ。」

とつぜん、夢の世界のそこから、リズの声がきこえました。みんながはつとわれにかえると、リズが手をぱたぱたとふつてあたりの精霊たちのことをはらいのけながら(精霊たちに対して、なんてばちあたりな!)、どうくつのおくへといつてしまうところでした。こんなにすてきな光景が目の前に広がっているというのに、まったくリズときたら! (でもリズにとっては、この夢のような光景もまた、ふだんから見なれている、ごくあたりまえのこの一部分にすぎなかつたのです。こんなにもすばらしいものが、あた

りまえないことになっている。よく考えてみれば、それはすてきなことなのかもしれない。たしかにリズミたいに、感動はうすくなってしまうかもしれない。ですが、美しいものがごくあたりまえに、美しいままにそんざいしている。こんなにしあわせなことは、ほかにないはず。このアーランドでも、わたしたちの世界でも。」

「ちよつと！ 待つてよー！」

「くらー！ さきにいくなー！」

みんなはそういつて、さきをゆくシルフィアのあとを追いかけました。

「な……、なんてすごい……！」

思わずロビーが、ため息まじりにそれだけつぶやきました。ほかの言葉が、ぜんぜん出てこなかったのです。それはエリル・シャンティーンの中ろうか、道のさきにそびえる女神リーナロッドのぞうを見たときいらいの、大きな感動でした。

どうくつの、そのいちばんおく深く。じやりの道は、深い池のほとりへとつながっていました。その池のむこう。岩かべから、どうどうと青いしんじゆのつぶのような水のしぶきをあげて、そのたきが流れ落ちていたのです。

その美しさ……。

すべてをつつみこむ、そんざい感……、やさしさ……。

七色の光につつまれた、まるでまぼろしのようなたき。たきのまわりには、この場所ではもうあたりまえのように見ることのできている、たくさんの精霊たちが、たきのせいなる力にさそわれて飛びまわっていました。しかしここには、それがいのほかの力がありました。ロビーはそこに、たしかに、女神のそんざいを感じ取ったのです。心なしか、腰におびたせいなる剣が、ふわりとかるくなつたかのように感じました。ものすごい力が、剣からあふれ出してくるようです。女神の力、精霊の力、そのすべてが、この剣に集まつてきているかのようにでした。それはなんとも、ふしぎな感かくでした。

「これが、精霊王のトンネルがある、たきだよ。」リズが、あいかわらずのちようしで、たんたんとういいます。「このたきにむかつて、力を使うんだ。すぐ、ひらくからさ。ちよつと、そのネットワークス、貸してみな。」

「ちよーつと、待ったー!」

リズの言葉に、とつぜんライアンがわりこみました。なにごとでしょうか？ リズがきよとーんとした顔をして、ライアンの方を見ます。

「やつぱりここは、このぼくにやらせてよ。こんなに精霊の力にあふれた場所も、ちよつとほかにないからね。ここならぼくでも、精霊王のトンネルくらい、ちよちよいのちよいだよ。」ライアンはそういつて「ふふん!」と鼻をならし、よゆうしやくしやくといったふうにな、おどけたポーズを取ってみせました。

「さあ、シープロンドいちの精霊使い、ライアン・スタツカートくんの力、見せてあげましょう！ ノランさんは、むりっていったけど、ふっふっふ、はたして、そうかな？」

どうやらライアンは、ノランから「精霊王のトンネルをあけるのは、おぬしにはむり」といわれたことが、ずっとひっかかっていたようなのです。そしてライアンは、はじめから「見てろー、ぼくのすごいとこ、思い知らせてやるんだから！」とひそかに思っていて、精霊王のトンネルもリズにたよらず、自分であけてやろうと思っていました（やっぱりそんなこと考えてたんですね。ライアンらしい）、じつさいにこの場所にきてみて、その精霊の力のあまりの強さに、「ここならばくにも、ぜったいにできる！」と自信を持ちました。こうなったら、ライアンが行動しないはずがありませんよね。というわけで、ここでリズをさしおいての、ごとうじょうというわけだったのです。でもほんとうに、だいじょうぶなの？

「おもしろさまから、いわれたでしょ。ライスタには、むりだつてば。」マリエルがあきれ顔でいいましたが、すでにライアンは、やる気まんまんでした。

ライアンはロビーから精霊王のネットレスを受け取ると（というより、自分からむしり取りましたか……）、りんとして、みずべのふちに立ちました。マリエルは「ふう……」とため息をついて、うしろにひっこんでおります（好きなようにやらせてやろう、ということです）。リズもうでをくんで、やれやれといった感じで見守っていました。そし

てロビーも、「ライアンならできそう」という強いきたいを持って、同じくうしろから見守っていたのです。

なにかわたしも、ロビーと同じく、ライアンにならできそうな気がしてきました（マリエルとリズは、きたいしてないみたいですけど）。これほど精霊の力にあふれた場所であるとはいえ、精霊王のトンネルをあけることができれば、もんくなしにたいした精霊使いです。伝説のシルフィア種族の者たちとも、肩をならべることができのですから。さあ、ここはみなさんも、ライアンのことをおうえんしてあげようじゃありませんか。がんばれー！

ライアンは精霊王の青いネックレスをにぎりしめ、そしてささやきはじめました。

「せいなる場につどいし、ぜんなる精霊たちよ。われとともに、大いなるみらいへのとびらをひらかん。」

ライアンがそういうと、あたりの空気がばあーっ！とざわめきはじめました。見ると、ここにもそこにもあそこにも、風や水の精霊たちが、この場をうめつくさんばかりに、あふれかえっていたのです！とくに、たきのまわり、そしてライアンのまわりは、まさに精霊だらけ！まるで精霊の海の中に、ライアンがひとりで浮かんでいるかのようでした（かなしみの森の小川でも、ライアンのすがたが見えなくなるくらいに精霊が集まりましたが、こんどはライアんどころか、まわりの景色やたきのすがたさえも、み

んな見えないくらいでした！）。なんともすごい！　こんなにたくさんさんの精霊の力が集まれば、ふかのうも、かのうになるかもしれない。これなら、いけるかも！

ライアンのすがたは、集まった精霊たちにかこまれて、まったく見えなくなりました。そしてささやきの言葉が終わって、さいごのひとこと！

「いざゆかん！　とびらのさきへ！」

「スピリチュアル・アストラル・ホーリーゲート！」

なんというすさまじい力！　さし出した青いネックレスにすべての精霊たちの力がひとつのかたまりとなつて集まり、それがたきの前の空間へとむかつて、いつきにはじき出されたのです！

ぎゅぎゅぎゅぎゅい〜！

青いネックレスからあふれるおそろしいまでの精霊の力が、そのままたきの前に、精霊王のトンネルのすがたをうつし出していききました！　すごい、やった！　ついに精霊王のトンネルが、ひらかれるのです！

「いっけえ〜！」

ど(い)い(い)ん！

ライアンがさいごの力をふりしぼって、トンネルの入り口に精霊たちの力をぶつけました！

「だからさあ、むりだつていったじゃん。」

リズが、(どうくつのすみっこのかべぎわで、ひぎをかかえてすわりこんでしょげかえっている) ライアンにいました。

「まあ、トンネルが出せたんだから、すごいことだよ。ぼくも、みとめるからさ。」マリエルがライアンの肩をぼんとたたきながら、つぶやきました。

けっかは、まあ、その……、そういうことでした……。

やっぱり精霊王のトンネルが相手では、ふつうの精霊たちでは、いくらたばになつてもかなわなかつたのです。でもそれは、風や水の精霊たちが悪いわけでも、ライアンのうでが悪いわけでもありませんでした。ライアン(と精霊たち)は持てるかぎりの、さいごの力をはつきしました。でもそれだけでは、だめなんですね。やっぱりノランの

いう通り、かたくとぎされることになってしまった精霊王のトンネルをあけることができるのは、もとからそれくらいの強力な力を持つている精霊たちでなくちや、だめみた
いだったのです。いくら精霊使いが、強力であったとしても（たとえば……、今の精霊
王のトンネルをあけるために必要な力を、「二百万精霊パワー」としましょう。そして精
霊王のネックレスの持つ力を、「百万精霊パワー」とします。シルフィアであるリズは、
もともと百万精霊パワーほどの力を持つておりましたので、リズが精霊王のネックレス
を使えば、ごうけい二百万精霊パワーとなり、このトンネルをあけることができました。
やみの精霊たちの場合は、ひとりひとりが「五十万精霊パワー」といったところでは
うか？　ですからやみの精霊たちがふたりで協力すれば、ネックレスを使つて、なんと
かこのトンネルをあけることがかのようなわけなのです（もつとも、協力できればの話で
すけど）。

ところが、風や水、火や土といった精霊たちは、いわばいっばんの、ふつうの精霊た
ちでした。かれらのようなふつうの精霊たちは、このような精霊の力があふれかえつて
いる場所であっても、どんなに力をあわせたとしても、ごうけいでせいぜい二、三十万
精霊パワーほどの力までしか出せなかつたのです。それ以上の数の精霊たちが集まっ
たとしても、ほんらいの力が弱いため、大きくなりすぎた力がちつてしまつて、それら
の力をひとつにまとめることはできませんでした。ですからライアンが精霊王のネッ

クレスまで使って、いくらがんばってかれらの力を集めたとしても、さいこうでも精霊たちの力とあわせて、「百三十万精霊パワー」ほどをかせぎ出すのが、やつとだったのです。

それではこんかいのように、トンネルのすがたをうつし出すくらいのことまでで、いいっぱいでした。それを知っていたからこそ、ノランは「むり」といったんですね。ライアンはそれを知らなかったというわけでしたが、それにしても、あんなにがんばったというのに、はじめから「あけられない」ときまつてたなんて、うくん、なんだか、気のどくなライアン……)。

ですが、(いくらライアンのせいではないとはいえ)ライアンは落ちこんだまま、動けません。ロビーがいくらがんばっても、だめでした。ライアンは、よゆうぶつて見せていましたが、じつは、ほんきのほんき、自分の持てるさいこうの力を出しきったのです。それでだめでしたから、その落ちこみ方も、さいこうちよう！ まあ、その気持ちもわかりますけどね……(うくん、どうしたもののやら)。

「しょうがないなあ。」

見かねたマリエルが、「ふう。」とため息をついて、なにかをささやきはじめました。どうやらまたも、なにかの魔法のようです。

「ちよつと、気が乗らないけど、しかたありませんね。」

マリエルがそういって、ライアンに魔法のじゅつをかけました。ほわわん！ ライアンのからだだが、いろいろな光につつまれます。いったいなんの魔法なのでしょう？ と思っていると……。

「やつほ〜！」

ええっ！ ライアンがとつぜん、大声でさけんでとび上がりました！ な、なにごと？

「精霊が、なんだつてのさ〜！ ほくは、ライアン・スタツカートだぞ〜！ シープロンドの王子さまなんだぞ〜！ かわいいんだぞ〜！ きやはははは！」

ちよ、ちよつとライアン、いったいどうしたの？

「じいしき・かじようのじゅつです。自分のいいところを大げさにじかくさせて、自信たつぷりにさせる魔法なんです。今のライスタをげんきにさせるには、これしかないと思ひまして。」

マリエルが、（口をあんどぐりとあけてかたまっている）ロビーに説明しました。「でも、ちよつと、ききすぎちやつたみたいですね……」

マリエルのいう通り、ライアンはもともと自分に自信たつぷりでしたから、それが魔法でますます強くなつてしまつて、そのけつか、こんなハイテンションなライアンになつてしまつたというわけなのです……。うくん、これなら、もとの方がよかつたかも……。

「こ、これ、どうするの？」ライアンのあまりの変わりように、ロビーが心配になつてマリエルにたずねました。

「この魔法は、しばらくは消せないんです。五分くらいでおさまるかと思いますが……。すみません。」マリエルがすまなそうに、ロビーにいいました。

ロビーは、自分のまわりではしやぎまわつている（そのうえ自分にすぐくからんでくる）ライアンに、またしてもなにもすることができず、その場に立ちつくして、ライアンのことをただただ、見守るほかありませんでした……。

「ほらほら、見て見て！　ロビーちゃん！　このポーズ、かわいいでしょ！　ほらく、こくんなサービスもしちゃう！　ちやちやつちや、ちやくん！　こくんなとこまで見せちゃうよ！　きゃははははは！」

「あらよ、つと。ほら、あいたぜ。」

ネットクレスを持ったリズが、たきの水しぶきにむかつて力をこめると……。

ぶおおくん！

すごい！ さつきライアンがあんなにもがんばってあげようとした精霊王のトンネルが、あつというまに、目の前にその口をひらいたのです！（魔法が切れて「正気」にもどったライアンが、それを見てまたしても、がーん！ リズがあんまりかんたんにトンネルをあけてしまいましたので、シヨックでまた、落ちこんでしまいました。あ、でも、もう魔法はいいですからね、マリエルくん！）

「さすがは、精霊王のネットクレスだな。とんでもないパワーを持つてるぞ、こいつ。」リズが、手にしたネットクレスをしげしげとながめながら、いいました。さすがのリズでも、自分の力だけでは、さらにかたくとぎされてしまった今のじょうたいの精霊王のトンネルをあけることなんて、とてもむりなことでしたから。このネットクレスの力が、トンネルのとびらをとぎしていたその力を弱めてくれたからこそ、こんなにもかんたん（？）に、トンネルの入り口をあけることができたのです（ちなみに、いぜんのじょうたいのトンネルであれば、精霊王のネットクレスがなくても、リズならばあけることができました。いぜんのトンネルなら、今のじょうたいのトンネルをあけるための半分力、百万精霊パワーほどもあれば、ひらくことができたのです。ですがリズは、トンネルのため

しにあげてみたことはありませんが、「べつに用がないからいいや。」といって、中にはありませんでした！　なんてもつたないない！

それからもリズは、イーフリープに行くことはありませんでした。「だって、めんどろっこだし。」というのが、そのりゆうです。それに、家で曲を書いている方が、楽しいみたいでしたから。うーん、さすがはリズ。

でもみんなには、そんなネックレスのことよりもなによりも、今いちばんきょうみをひかれてやまないものがありました。それはもちろん、目の前にひらかれた、この精霊王のトンネルです！

「すごい……！　さすがのぼくでも、はじめてのけいけんです。じつさいに、イーフリープへつづくトンネルが、ひらいているなんて……！」　マリエルが、目の前にひらいたぼんやりとかがやくふしぎなとびらのことを前にして、いいました。

「ほら、すごいよ、ライアン。ほら、見て。」　ロビーがそういつて、また落ちこんでしまったライアンのことをひっぱってきて、自分の前に立たせました。

精霊王のトンネル……。ただの伝説と思われていた精霊王が、じつさいに住んでいるという、物語の中だけにそんざいするはずのくに、イーフリープ……。そのおとぎのくにへとつづくふしぎのトンネルが、今自分たちの目の前に、こうしてひらいていたので。このアーケランドの中のいったいどれほどの人が、こんなけいけんをすることがで

きるのでしょうか？　こんなけいけんは、とくべつな、ほんとうにとくべつな者だけが、一生にいちどできるかできないか？　というほどの、きちょうなものでした。今まさに仲間たちは、（そして読者のみなさんも、これを書いてるわたしもふくめて）そんなとくべつなたいけんをしようとしていたのです。精霊王のもとへ！

「精霊王……。　精霊王！　はわわわ……。　どーしよー！」

われにかえったライアンが、急にそわそわしはじめました。むりもありません。精霊になれ親しんできた、シープロンドの者たち。その中でもライアンは、王子さまとして、小さいころからつねに精霊とかかわってすごしてきました。そんなライアンでさえ、精霊王なんてものは、夢のまた夢、とくべつの中のとくべつ。その伝説の精霊王に、今これから、自分が会おうとしていましたから。

メリアン王でさえ、精霊王に会ったことはありません。ルエルしきようさまだって、レシリア先生だってそうです。おそらくシープロンでは、はじめてでしょう。そのはじめてが、自分なのです！　強がっていたライアンですが、じつさいに精霊王に会うというこのときとなつては、さすがにしりごみして、そわそわしてしまうのも、むりもないことでした。

そんなライアンのことを見て、ロビーがいったのです。

「これはきつと、精霊王さまからの、しようたいじようだよ。」

「えっ?」

ロビーの言葉に、ライアンがおどろいていいました。

「精霊王は、なんでも知っている。ライアンのことも、もちろん知っている。ライアンが、シープロンドいちの精霊使いだつてことも。だから精霊王は、ライアンをここに、まねいてくれたんだ。」ロビーがつづけました。

「きつと精霊王は、ライアンがくるのを、楽しみに待つてる。だからライアンは、それにくたえてあげなくちゃね。ライアンは、すごいんだから。ぼくじや、精霊王を相手にするなんて、むりだよ。ライアンじやなきや。だから精霊王は、ライアンのことを、しようたいしてくれたんだ。」

ライアンはしばらく、きよとんとしたままでした。

ロビーの言葉は、おせじでも、ごきげん取りでもありません。ライアンはロビーのことを、いわれるまでもなく、よく知っております。それこそ、なんでも知ってる精霊王みたいです。ですからライアンには、ロビーの心がよくわかりました。ロビーはほんとうに、心の底から、自分にきたいしているのです。精霊王の相手がつとまるのは、ライアンしかいない。ロビーはそう、自分にきたいしているのです。

さて、ライアンの反応は?

ライアンはうつむいて、だまったままでした（あれ？ てつきり、「まーかせてよ！」
 といって、自信まんまんにいばりちらすとばかり思っておりましたのに。どうしたので
 しょう？）。

「…………ふ……、ふ、ふ……」ライアンが下をむいたまま、ぼそぼそいいました。ど、
 どうしたのでしょうか？ だいじょうぶ？

心配したロビーが、どうしたの？ といおうとした、そのしゅんかん……。

「……の、ライアン・スタツカートさまに、まかせておけーい！」

ライアンが、こぶしをふたつ、天高くつき上げながらさけびました！（よかった！
 やっぱりライアンは、こうじゃなくっちゃ！ 思った通りの反応で、わたしも安心です
 ！）

「そのほう！ よを、だれだと心得ておる！ おそれ多くも、シープロンドいちの精霊
 使いにして、王子。ライアン・スタツカートなるぞ！」ライアンは胸をのけぞらせて、い
 ばりちらしながら、ロビーにゆびをぴしっ！ とつきつけていいました（でも背がちつ
 ちやかっただので、あんまりえらそうには見えませんでした……）。

「やれやれ。やつぱり、精霊王と肩をならべられるほどのじつりよく者は、ぼくしかないんだから、しかたないのか……。ぼくくらいになると、みんなが放っておかないんだから、まったくこまっちゃう。」

いいぞいいぞ、そのちようし！ もう百パーセント、ライアンですなね！

「よかった、げんきになったんだね。やつぱりライアンは、げんきなすがたが、いちばんいいな。」ロビーがほっと胸をなでおろして、心から安心していいました。

たまにはへこんでしまうこともあるけれど、やつぱりライアンは、どこまでもライアンです。おちようし者のライアンです。じいしきかじようなライアンです。なまいきで、負けずぎらいで、へらず口のライアンです。お菓子が大好きなライアンです。かわいいと、自分でみとめているライアンです。

みんなが大好きなライアンです。

ライアンは、これでいいですよね！

ライアンがまた、いつものちようしで、マリエルヤリズにからみはじめました。マリエルとは、またわーわーきやーきやー、やりはじめております。そんなライアンのこと

を見て、ロビーは笑いがとまりませんでした。マリエルは、「ちようしのいいやつだ。」とあきれております。リズムも、「おかしなやつだな、おまえは。」と思わず笑ってしまいました。

「さあ、いくぞ！ なにをぐずぐずしてるんだ！」ライアンがうでをきつとふつて、兵士たちにしじを送るしきかんのようなしぐさをしながら、みんなにいました。

「ライスタがかってにわーわーさわいでたから、さきに進めなかつたんでしょ！」マリエルがぶんぶんいいましたが、これはもう、いつものやりとりでした。

「よし、いくぜ、ついてきな。」リズムがそういつて、池の上をちやほちやほと歩いていきましたが……。

「ちよつと待った！ ほくが先頭ー」ライアンがそうさけんで、とめました（やつぱり。そういうと思いました）。

またマリエルがみずすましのじゆつを使って、みんなは池の上を、たきの前のトンネルまで歩いていきます。そしてトンネルの前までたどりつくと、ライアンがいちばんにその中に飛びこみました（やつぱり。そうすると思いました）。ロビー、マリエルとつづいて、待つていたリズムも、やれやれといった感じで、トンネルの中にはいます（トンネルの中は、ほんとうにふしぎな空間でした。まわりのかべは、かたいようで、やわらかいようで、しかもぐねぐねと動いていたのです。その色も、赤いようで、青いようで、

白いようで……、まったくとらえどころがないといった感じでした。そしてはるかなむこうに、明るい光の出口がひとつ、見えていたのです。

ついにみんなは、精霊王の待つイーフリープへとはいりこむのです。そこで仲間たちは、どんなたいけんをして、なにを得るのでしょうか？ ノランはいいました。「そこでおぬしは、さいごのしれんを受けなければならん……」

つづく道のさきには、いったいなにが、自分のことを待ち受けているというのでしょうか？ ロビーはもういちどけついをかため、両手をぐつとにぎりしめました。

いよいよだ……。

ロビーは心の中で、そうつぶやきました。

「らーいあーん、すたつかーあとー！」

目の前には、うでをふって歩きながら歌っている、げんきなライアンのすがたがありました。

23、精霊王のふしぎのくに

おとぎのくに……、それはわたしたちの住む世界とは、時間も場所も、しぜんのなら立ちさえもことなる、ふしぎにあふれる世界なのです（今さらいうまでもないでしょうけど）。そのおとぎのくにの中のひとつを、みなさんはこれまでに（二十二章に渡って）たいけんしてきました。それはもう、いうまでもありませんよね。そう、このロビーの冒険の物語のぶたいである、アークランドです。

このアークランド世界は、まぎれもなくおとぎの世界でした。ですがこのアークランド世界においてさえも、なお、おとぎのくにというものはそんざいするのです（前にもいいましたけど）。

そのひとつが、精霊たちのくに。精霊たちの住むくには、おとぎのくにアークランドの中においても、まったくもつておとぎれることすらむずかしい、未知なる世界でした。そういう世界は、ほかにもあります。いちばんよく話に出るのが、死者たちのくに。あの世とか、この世とか、いいですよ。らくえんのような世界もあれば、おぼけがいっぱい住んでいる、ちよつとこわい世界まであるのです（フェリアルは、ぜつたいにいきたくないでしょうけど）。

ほかに、悪魔たちが住んでいる、魔界などとよばれている世界（みんなぜったいにいたくないでしょうけど）や、精霊よりもっとしんぴ的な、エーテルという、すがたを持たない生きもの（生きものとよべるかどうかともわかりませんが）たちが住んでいる世界など、わたしたちの目には見えないだけで、この世界のそばには、じつはたくさんの世界が、そんざいしていました。

ですが、そんなおとずれることすらむずかしい未知なる世界とはいえ、精霊たちの世界は、ほかのたくさんの世界の中でも、もつとも身近な世界であるといえることでしよう（それでも、「ちよつと、精霊のくにまであそびにいってくるねー」「夕ごはんまでには帰ってくるのよ。」などといった親子の会話が出ることなどありえないくらいに、近くて遠い世界でしたけど）。精霊の力というものは、わたしたちの住む世界のほとんどすべてのものごとくに、かんけいしていましたから（水の精霊がいなければ、水がなくなってしまう。風の精霊がいなければ、息をすることすらできません。わたしたちが生きていくうえで、精霊の力は、ぜったいに必要ふかけつなものでしたのです）。

しかし、こんかいわれらが仲間たちがむかうのは、そんな精霊たちのくの中でも、とくべつの中のとくべつ、伝説の中の伝説。もういうまでもありませんよね。精霊王の住む、ふしぎのくになのです。

イーフリープとよばれるそのくには、ただのお話だと思われていました。じつさい

アーケランドに住むほとんどの人たちが、そんなのはただのお話にすぎないと、今でも思っています。それはイーフリープが、この世界とはまったくまじわることなく、遠く遠く、あまりにも遠くかけはなれていたためでした。

どんなに力のあるまじゆつしでも、どんなにゆうしゆうな精霊使いでも（ライアンでも）、自分の力だけではイーフリープに出かけていくことなどは、できません。イーフリープとこのアーケランド世界とをつなぐ道は、精霊王のトンネルとよばれるとくべつな道がいいには、まったくありませんでした（このトンネルのそんごいは、ノランなど、ごく一部の者たちのみが知っているだけです）。そしてそのトンネルはかたくとぎざざれていて、ごくかぎられたとくべつな力をもちないかぎり、その入り口をひらくことなどはできなかつたのです（精霊王からおくられたネツクレスを使ったり、リズのようにとんでもないほどの精霊パワーを持っている者が、その力をぶついたりしないかぎりは、ですからどんなにすごいまじゆつしや精霊使いなどであっても、自分の力だけでは、このトンネルをあけることなどはできなかつたのです）。

宝玉の力が弱まったことで、このアーケランドの力のバランスはくずれてしまいました。それは精霊王のトンネルも同じでした。むやみにトンネルをあけてしまえば、くずれた力のバランスが、イーフリープ世界の中にまで広がってしまうかもしれないのです。そのためトンネルは、イーフリープ世界の中の精霊エネルギーによって、さらにさ

らにかたくとぎされてしまいました（そのかたさは、およそ二ばいになりました。いぜんだったら精霊王のネットワークさえあれば、ふつうの人でもすぐに、トンネルをひらくことができましたが、今ではそれに加えて、リスほどの精霊パワーの持ちぬしが必要になってしまったというわけでした）。かれらの世界とわたしたちの世界とは、かんぜんに切りはなされたのです。今までだって、このトンネルをあけることなどは、（それこそとくべつな力でももちいないかぎり）ほとんどむりなことでしたが、これでけつてい的にになりました。このトンネルをあけることなんて、ふかのうです。大けんじやノラにだって、むりなことでした。イーフリープはこうして、人知れず、伝説の中に消えていったのです……。ふつうだったら。

ですが今、ふつうではないことがはじまろうとしてみました。

精霊王は、なんでも知っているのです。あけることのできないトンネルを、ロビーたち、われらが仲間たちになら、あけることができるということも。

ロビーの持つ、青いネットワークの力。そしてロビーのことを助ける、仲間たちの力。それらがひとつとなれば、かれらはあけることのできないトンネルをあけて、自分のところまでやってくる。精霊王はすべて見通していました。

そして今、仲間たちはそのあけられるはずのないトンネルを自分たちの力であけて、精霊王の住むふしぎのくに、伝説のイーフリープ世界へと、ふみこもうとしているところだったのです。

トンネルの出口が、近づいてきました。

イーフリープへ、さあ、ふみ出しましょう。

「きたか……」

白くかがやく石でできたバルコニーに、ひとりの人物が立っていました。その人物は目の前に広がる美しい景色をながめながら、静かな表じょうをしてそうつぶやきました。

そしてそのうしろの白い部屋の中から、今もうひとりの人物がやってきました。その人物は小さなバルコニーへとゆっくりと歩みを進め、さきにいた人物のとなりに、ならんで立ちます。

「えんろはるばる、くくろうさまなことでごいいますな。」

あとからやってきた人物がいました。その声は、かなりのおとしよりの声でした。

白い美しいガウンをまとって、肩からは、大きな水色のたすきをかけております。その手には、金色の糸であんだ美しいかんむりをひとつ、持つていました。このかつこうは……？

そう、この人物は、シープロンドのしきようさま。ルエル・フェルマートしきようさまだつたのです。ということとは？ そのとなり、バルコニーに立つてゐる人物は……、その通り、メリアン・スタツカート王でした（ひよつとして精霊王？ と思つた方もいたかもしれませんね。とつぜん場面が変わりましたから。精霊王は、もうちよつとあとで……）。

「ふっ。」ルエルしきようさまの言葉に、メリアン王が小さく笑いました。「そうだな。かれらの思い通りには、ならんよ。」

かれらが見つめるさき。さしこみはじめた朝日にてらされた、シープロンドの美しい景色のそのむこう。みどりの平原のむこうから今、黒くうごめく雲のようなものが見えはじめてきました。それはゆっくりと動いていて、こちらへとむかつてくるところだつたのです。まさか、これって……！

そうです、シープロンドのお城のバルコニーから見おろした、そのさき。そこからやってくるその黒い雲のようなものは、すべて、黒のよろいかぶとに身をつつんだ、ワットの兵士たちでした！ その数は、およそ八百。ついにワットの軍勢が、このシープロ

ンドへとせめこんできたのです！（ワットの黒の軍勢は、今そのほとんどが、エリル・シャンディーンでの戦いにむけてしゅうけつしていました。ですからこのシープロンドにせめこんできたのは、北の地の守りについては、ごくわずかな兵士たちだけだったのです。それでも、これだけの数の兵士たちが集まりました。この八百人という数字は、シープロンドにとって、きょういのはずでした。なにしろシープロンドは、軍を持たないへいわなくに。ごえいのための衛士たちが、わずかに二百人ほどいるだけでしたから。さあ、シープロンドは、メリアン王は、このきょういに、いったいどう立ちむかおうというのでしょうか？）

今からすこし前のこと……。

このシープロンドのくにの門に、人間の男せいが三人やってきました。その者たちは黒い毛がわの服を着ていて、そのうちのふたりは、腰に大きな気味の悪い剣をさしていました。からだつきもがちりとたくましい、ふたりです。これはもう、あきらかにようじんぼうでした。武器を持たない残りのひとりのことを守るために、ごえいとしてついていたのです。では、その残りのひとりとは？

あとのひとは、うでにエメラルド色の花のマークのはいった白いリボンをつけていました。このリボンに、みなさんは見おぼえがありますよね。そう、このリボンは、使

者のあかし。そしていうまでもなく、この者たちはワットの者たちでした。つまりワットの使者たちが、シープロンドへとやってきたのです！　こうふくか？　戦いか？　そのこたえをもとめて。

「これは、アー克蘭ドの正式ながいこうである。」ワットの使者たちが、いちまいの紙切れを見せながら、門の衛士たちにいました（がいこうとは、取りきめをおこなうために、よそのくにの人たちと話しあうことです）。

「しよくんらシープロンドは、わがワットに対し、ゆるされざるつみをはたらいた。そのつみに対し、わがワットは、ここに、シープロンドへ、正式なつぐないをもとめるものである。こうふくか？　いくさか？　好きな方をえらぶよう、メリアン王に取りついでいただきたい。」

「その必要はないぞ。」

声の方を見ると、まさに今、そのメリアン王がふたりのシープロンのそつきんたちをつれて、衛士たちのむこうからこちらへとやってくるところでした。使者たちがやってきたということは、すでにメリアン王のもとへ、あのれんらくラツパによってしらせれていたのです。

「わざわざのごそくろう、たいへんごくろうさまです。どうでしょう？　あちらのあずまやで、ゆつくり、ハーブティーでもいかがです？　おいしいクッキーもありますよ。」

ああ、バターケーキの方がよろしかったですか？」メリアン王がおちつきはらったように、使者たちにはいいました。

「そうそう、じつは、新しい人形げきができたんですよ。これがまた、けっさくで。どうですか？ みなさんで、楽しもうじやありませんか。きみ、すぐに、人形げき屋をよんでくれ。」メリアン王がつづけて使者たちについて、それからこんどは、衛士のひとりにむかつていいました。

「のんきなことを、いつている場合ではない！」このたいどに、ワットの使者たちはすつかりおかんむりです。「しよくんらは、はんぎやくのつみをはたらいただ！ そのつみは、重いぞ！ アルファズレド王のとくしやなど、考えないことだ！ さあ、こうふくか？ 戦いか？ こたえてもらおう！」（とくしやというのは、とくべつなゆるしということです。）

ですがメリアン王は、またしてもすずしい顔をしていいました。

「はて？ はんぎやくのつみとは、どういうことですか？ さつぱり身におぼえがありませんが。そなたは、なにか知っているか？ ルーベルアン。」
いわれて、となりのルーベルアンがこたえます。

「さあ、なんのことやら、わたしにもわかりませんが。フォルテール、きみはどうかな？」
「こんどはルーベルアンが、となりのフォルテールにいいました。」

「はんぎやくつて、なんでしたっけ？　おいしいの？　なにしろここは、あらそいなどとは、むえんの地。そんな言葉の意味すら、おぼえておりませんね。」

「く……、この……！」

使者たちはこぶしをにぎりしめて、かんかんです！　ですけど、使者がぼうりよくをふるつてはいけません。メリアン王たちも、それがわかつていて、からかつていたのです（ほんとうなら使者をからかうなんて、してはいけませんでしたが、相手はワットの使者たちですもの、すこしくらいかまいませんよね？　わたしもちよつと、楽しんでしまっているんですけど。ぷぷ！）。

と、そのとき。道のむこうからゆつくりとした足取りで、ひとりの老人がやってきました。その人は、ほかでもありません。ルエルしきようさまだつたのです。

「これこれ、みなさま。神さまの前において、いいあらそいなどはいけませんぞ。」ルエルしきようさまが、メリアン王たちにむかつていいました。

「王さま。お客さまをからかつては、いけませんな。これは、とんだごぶれいを。ルエルしきようさまがそういつて、ワットの使者たちに頭を下げました。」

「おお、ようやく、話のわかる者がやってきたか。」使者たちは、しきようさまのたいどに、すつかりきげんをなおしたようでした。「まったく、このくにの王は、なんという王だ。これでは、話にならん。」

いわれたメリアン王は、しゅーん……、とちぢこまってしまいます。ルーベルアンとフオルテールも、王さまとならんでひっこんでしまいました。ここは、ルエルしきようさまにおまかせしましょうか。

「そなたは、しきようのようだな。では、じようしきもわきまえておろう。しよくんらには、ワットへのはんぎやくのつみがかけられておる。こうふくに応じなければ、ワットは武力によって、このシープロンドをせめ落とすだろう。われらとしても、そんなまねはしたくはない。さあ、早く、心をきめるのだ。ワットに、こうふくせよ。悪いようにはせんぞ。」

使者たちはそういって、ルエルしきようさまの言葉を待ちました（メリアン王にいても、むだだとわかりましたから。しきようさまなら、王さまと同じくらいのけんりがあるのです）。

ルエルしきようさまはしばらくだまっていたあと、「ほっほっほ。」とおだやかに笑います。そして……。

「りゆうがわかりませぬな。」

「な、なに？」思わぬしきようさまの言葉に、使者たちはおどろいていました。

「あなた方がわれらにさしずする、そのりゆうがわかりませぬ。はんぎやくですと？それは、だれのきじゆんによるものでしょう？この世のすべては、神さまのおぼしめしによるもの。われらは神さまのご意志にしたがつて、われらの道を進むのみでございます。あなた方の道ではございません。あなた方のさしずは受けません。」

ルエルしきようさまはおだやかにほほ笑んでいいましたが、そこにはかたいかたい、シープロンとしてのほこりといげんがみちあふれていました。

うゝん、どうにも、やくしやがちがいます。これではさすがのワットの使者たちも、どうすることもできませんでした。

「く、ぐむむむむ……！」使者たちは歯をぎりぎりとかみしめて、くやしがりました。「おのれ！おぼえておけよ！」使者たちはそういつて、そそくさと身をひるがえします。

「これでシープロンドは、われらの敵だ！ただちに、せめ落としてくれる！あとで泣きついてきても、もうおそいぞ！」

使者たちはそうはきすてるようにさけんで、馬たちに乗つて去つていきました（いかにも、悪やくといった感じですね）。

「べゝろべゝろべゝろ！」メリアン王が、去つていく使者たちにむかつてべろを出してやりました。ルーベルアンとフォルテール、衛士たちまでもが、そろつてそれにつづけて、

べろを出したり、おしりをぺんぺん！「やーいやーい！」とからかいます（ルエルスキょうさまに、「これこれ、まったく。」とあきれられてしまいました）。

いやはや、さすがは、メリアン王とシープロンドの者たちです。こんなワットのおどしなどに、まったく応じません（ライアンのくにですものね）。でも、心配なのはワットです。これでワットは、このままほんとうに、このシープロンドにせめこんでくることでしょう。シープロンドは軍を持たない、へいわなくに。ろくな武器ありません（衛士たちの持っているのは、ほんらいかざりのためのやりなのであって、戦うためのものではないのです）。ワットのおそろしい軍勢にせめてこられたら、ひとたまりもないはずでした。いったいかれらは、ほんとうに、どうするのでしょうか？

しかし……、その点についてはご安心を。このシープロンドには、まだまだ、みなさんの知らないひみつがかくされています。そしてそれこそが、たとえ大軍勢でせめてこられてもびくともしない、シープロンドのくにの強さにつながっていました。それはもうちよつとあとの、お楽しみ。このさきの物語の中で語るとしましょう。

そしてふたたび、時間は今へ。

まさに今、このシープロンドへ、ほんとうにワットの軍勢がせめこんできたところでした！（さきほどの、シープロンドのお城のバルコニーでの、メリアン王とルエルスキょうさまの会話。その会話へのいきさつは、こういうわけからでした。）

「くのにみなさまには、タドウーリのほよう地へと、出かけていただいております。ねんのため、でございますが。」ルエルしきようさまがいました。

「すぐに、帰ってくるだろうよ。」メリアン王がこたえます。「ワットのみなさんは、すぐに、お帰りになるからな。ワットもこれで、すこしはおとなしくなるだろう。」

それからしばらく、ふたりはだまって、かなたの平原を見つめていました。

とつぜん、ルエルしきようさまが「ほっほっほ。」と笑って、いいました。

「王さまも、ごりっぱになられましたな。あの冒険の旅から、もう、三十年でございますか。」

「そうだな。」メリアン王が、「ふふっ。」と笑ってかえします。「今ではわたしのむすこが、同じことをしている。親子とは、よくにるものだ。」

そういつて、メリアン王は手にしたブローチのこを見つめました。そのブローチはライアンに持たせたブローチと対になっている、あの星がたのブローチでした。ライアンの身に危険があれば、光ってしらせるというやつです。メリアン王はライアンが出発してからというもの、はだみはなさずこのブローチを持っていて、それこそ一分とあけずにながめていました（寝ているときは、さすがにむりでしたけど。ちなみに、今ブローチはぜんぜん光っていません。ライアンがげんきだからです）。

「ライアンさまは、ひとまわりもふたまわりも大きくなって、もどられましょう。」ル

エルしきようさまがいました。「そうやって、人はみな、成長をしてゆくのです。このさきも、そのまたさきも、ずっと、変わることなく……」

そうして、メリアン王とルエルしきようさまは、このバルコニーをあとにしたのです。「さて。ちよつと、あそんでくるとしよう。」

白いうかをひとり進みながら、メリアン王はむかしのことを考えていました。旅のこと。かつての仲間たちのこと。

「アルファちゃん……」メリアン王がつぶやきました。

「また、むかしみたいに、みんななかよくできたらしいのにね……」

メリアンの目には、うつすらと、なみだがあふれていました。

「いくぞっ！ それっ！」

ライアンがいきおいよく、トンネルのそとに飛び出しました！

ついにみんなは、精霊王のトンネルの、その出口へとたどりついたのです。そしてやっぱり、ライアンがいちばんに飛び出しました（出口のそとは光っているだけで、なんにも見えませんでした。ですからみんなは、意をけっして、そとに飛び出したのです）。

ついに、イーフリープへ！

ロビー、マリエル、リズも、ライアンにつづいてトンネルから飛び出します。さて、そこはいつたい、どんな世界なのでしょう？ さぞかし、あつちもこつちも、精霊にみちあふれているに、ちがいないんでしょうね。

ですが……。

「うわわっ！」「うわっ！」「おーっと！」

さきに出たライアンに、つづいて出たロビーが、どしん！ それからマリエルが、ロビーの背中に自分の頭を、ごっつん！ さいごにリズが、みんなにつまずいて、すってんころりん！ どしーん！

「いたたた……！」「な、なんです……！」「なんだよ、もうー！」

みんなそれぞれ、腰をさすったり、頭をおさえたり。いつたい、なにごとが起こったというのでしょうか？ そのこたえは、みんなが飛び出した、そのさきの場所にあります。

おちつきを取りもどして、あらためてまわりを見まわしてみると……、そこは小さな、部屋の中。大人が四人はいつたらいつぱいになってしまふほどの、小さな小さな部屋の

中だったのです。なるほど、こんなに小さな部屋に四人がいきおいよく飛び出したら、おたがいにごちーん！ ぶつかりあつてしまうのもとうぜんのことでした（いくらそのうちの半分が、ちびっ子でも）。

でも待つてください。ここはほんとうに、「部屋」なのでしょうか？

トンネルはみんなが飛び出すのと同時に、消えてしまいました（帰りはまた、ほかの出口を見つけないければなりませんね）。立ち上がつて見ると、床やかべやてんじょうは木でできていて、床の両はしには、同じく木でできた、赤いつるつるとしたペンキがぬられたベンチがつくりつけられております。ベンチはそれぞれむかいあうようにつくられていて、それぞれの席にふたりずつ、すわることができるようになっていました。ひとつのかべには小さなとびらがついていて、鉄のつてをひねると、とびらがあくようになっていたみたいです。

ですがそんなことよりも、いちばんに気をひくものがありました。それはこの場所をかこむまわりの四つのかべの、腰の高さより上の部分が、ガラスまどになっているということでした。つまり、ちようどこの木のベンチにすわったときに、そのまどから、その景色をながめることができるようになっているといふわけだったのです（あれ？ こんな場所つて、たしかどこかで見えたことがあるような……）。

そしてこの場所がどこなのか？ そのこたえが、そのガラスまどのそとにあつたので

す。

ここは……、はるかな空の上でした！ ええっ！

まわりはずうつと、海が広がっています。時間は、おひるごろでしょうか？ いいおてんきでしたが、おひさまのすがたはどこにも見えませんでした。すいへいせんのかなたには、まっ白な雲がかかっております。

いったい、今いるここって、どんなところ？ そしてみんながガラスまどに張りついて、あたりのようすをじっくりながめたときに、またそのこたえが出たのです。

「な、なんだー？ これー！」

ライアンが思わず、さけびました。

まわりはみんな海でしたが、下を見たとき、みんなは自分たちが今どんな場所にいるのか？ わかったのです。ここは海に浮かぶ、どこかの島でした。そしてそれは、ただの島ではなかったのです。そのあちこちに、色とりどりのまんまるなやねがならんでいて、もつとよく見てみると、くるくるとまわる木の馬の乗りものや、すすいと走るしゃりんのついた乗りものなどが、その地面には動いていました。そしてマリエルの出したじえつとこーく・すくりゅーの魔法のレールと同じようなレールが、あちこちに張りめ

ぐらされていて、その上を同じくトロツコが、びゅんびゅんかけめぐっていたのです！
たくさんの風船が、あちこちにふわふわと飛んでおります。どこからか、楽しい音
樂がきこえてきました。

こ、これつてまさしく……。

そう、ゆうえんちです！

そしてみんながいるのは、その「大かんらんしゃ」のゴンドラの中でした！ ええーつ
！ イーフリープって、ゆうえんちだったの！

みんなは見ただこともないそのふしぎな光景を、ガラスまどにぺったりと張りつきなが
ら、くいているようにながめ渡しました。それもそのはず。みなさんの世界だったら、ゆ
うえんちなんて今さらめずらしいものでもないかもしれないませんが、かれらはおとぎのく
に、アーランドの住人たち。こんな（あからさまな）ゆうえんちなんてものは、まだ
アーランドのどこにも、そんざいしていませんでしたから（カピバラ老人の鉄の馬や、
フログルたちのケロケロボート、けんじやリブレストの岩のロボットたちなどを、みん
な集めたら、ゆうえんちができるかもしれないけれど。カルモトの木のモーターボート
と、もちろん、マリエルのこーくすくりゆうーもいっしょに）。

ですから自分たちが今乗っているのが、かんらんしゃというものだなんて、みんなはまったくわかっていませんでした。あちこち見まわしてみても、ようやく、自分たちが乗っているのと同じ小さな部屋が輪をえがくようにほかにもいくつもあって（自分たちのいる部屋もふくめて、全部で十六もありました）、それらがゆつくりかいてんしているということなどが、わかったのです（そしておちついてみると、乗りものがながてな口ビーは、やつぱりベンチにしがみついて、「ひええ……！」とこわがりをはじめてしまいました。なにしろ、空の上ですもの）。

そしてみんながひとつ、気がついたことがあります。それはほかの小さな部屋にも、下の島にも、人や生きもののすがたがまったく見あたらないということでした（レールの上を走りまわっているトロツコにも、だれも乗っていませんでした）。小鳥の一羽や、虫の一ぴきさえ、飛んでいなかったのです。きこえてくる楽しい音楽とはうらはらに、みんなはなんだか、不安な気持ちになってきました。小さな部屋のとびらのすきまから、風がひゅーひゅー、はいりこむ音がひびいてきます。きしきしと、部屋のまわる音が、小さくきこえてきました。

「下に、つくみたい。」

ライアンが、せまってくる地面のことをのぞきこみながら、いいました。

「かつてにおりて、いいのかな?」

「早くおりよう。」ライアンの言葉に、すかさずロビーがこたえます（ロビーはこんなおつかない乗りものから、早くおりたかったのです）。

「とびらは、自分であけるみたいだね。よつ、と。」

ライアンがそういってとびらをあげましたが、かんらんしゃというものは、下についたからといって、そこでとまってくれるというわけではありません（乗ったことのある人なら、わかりますよね）。ですからまだおつかながっているロビーは、ライアンやマリエルにうでをひっぱられて、ようやく地面におり立つことができました。

「ふえー、すごいな。」

まつさきにおりていたリズが、かんらんしゃをかこんでいる鉄のさくの上に立って、あたりをきよろきよろとながめ渡しながら、感心していました（ロビーのせわをしておりましたので、ライアンはリズに、さきを越されてしまったのです。それより……、そんなところに立ったら、あぶないですってば、リズさん!）。

「ここにがあるもの、これ、みんな、精霊のエネルギーだけでできてるぜ。このさくだつて、ほら、鉄みたいだけど、鉄じゃない。」

リズがそういって、くつのさきつぽで、さくをこつこつとけりました。そして、なるほど、それはただの鉄ではなくて、こまかい火花のような精霊エネルギーが、ぱあつ!

とあたりに飛びちって消えていききました。

「なんだか、イーフリープのひみつがわかってきた……」マリエルが、こうふんしたようにうすであたりをかんさつしながら、いいました。「ここは、われわれの世界とは、あきらかにちがう。ぶつしつをかたち作っている、そのしくみすら、ちがうんです。イリアドルハのほうそくが、ぜんぜんつうようしない。これじゃ、ほんとうに、ただのお話だといわれるはずです。」

だれもが知らない、自分の持っているりろんがまったくつうようしない、お話の中だけのふしぎのくに……。マリエルはまだ知れぬ世界をまのあたりにして、胸の高まりがおさえられませんでした。未知なるもの……。新しいりろん……。それらを発見するころは、けんじゃをめざすまじゆつしたる者の、さいこうのしごとのひとつでしたから（とここで、イリアドルハのほうそくってなに？）。

「ここどこかに、精霊王が……」ライアンも胸を高ならせて、あたりをきよろきよるとながめ渡しながら、いいました。精霊使いならだれでもあこがれる、伝説の精霊王。その精霊王に、今自分が、もつとも近づいていたのです（でもちよつと、「ひよつとしたら、名物のお菓子屋さんがあるかも……」ときがしていたそうですが……）。

「ほんとうに、ここにぼくが……」ロビーがつぶやきました。

「……まったくなんにも、おぼえていない……」

ノランのいうことには、ロビーは十さいになるまで、このイーフリープで暮らしていたというのです。ですがノランやアルマーク王の説明の通り、ロビーにはまったく、なんのきおくも残されてはいませんでした（つていうか、ロビーつてゆうえんちで暮らしでたんでしようか？ だからこわい乗りものにも乗りすぎて、それがトラウマになって、乗りものがにがてになったのかも……。とまあ、それはわたしの、かつてなそうぞうなのですが）。

「とにかく、」リズがいました。「あちこち、まわってみようぜ。このあたりには、精霊王がいるようなパワーは、感じられないしな。まわってれば、そのうち会えるだろ。」

「それにしても、精霊のひとりもないのは、どうしてだろ？」すたすたと歩き出しながら、ライオンがいました。「みんな、おひるごはんの時間なのかな？ あ、精霊だから、ごはんは食べないか。」（そのうしろでは、リズがうでを頭のうしろにくみながら、「ぜんいん、はらいたで、トイレにはいつてるのかもな。」といていましたか……）

そうしてみんなが、このゆうえんちの中へと歩み出していった、そのときのこと……。

「おひさしぶりですね、ロビーベルク。」

とつぜん、うしろから声がしました！ みんながびつくりしてふりかえると……、そこに、みどりのきぬの服を着て、かがやくこがね色の長いかみをした、男とも女ともつかない、すらりとした美しい人がひとり、立っていたのです！ ええっ！

いつたいどこから……！ だつてきつきまで、そこには自分たちがいい、だれもいなかったはずでしたから（おかげでもないみたいですし）。ということは……？

そう、もちろんこの人は、ただの人ではありませんでした。このイーフリープの住人、精霊の種族の者だったのです（ちなみに、せいべつはわたしたちの世界でいえば、男ということになりました）。

「待つていましたよ。」その人が、ゆつくりとこちらに歩みよりながら、いいました。「とのぎみも、あなたに会えることを、心待ちにしておいでです。大きくなられましたね。」

その人は、おだやかにほほ笑んでいました。そしてもちろんこれは、ロビーにいつていたのです。

「リーファイ……」

ロビーが肩をふるふるとふるわせて、つぶやきました。え！ ロビー！ この人のことを、知っているんですか！ だつて、きおくはみんな、消えているはずじゃ……？

「リーファイ！ リーファイ！」ロビーが急に、さげびました。ロビーの中で、なにかがは

じけたような、そんな感じでした。

「会いたかった！ ずっと、会いたかった！ ぼくは、ひとりぼっちで……、ずっとひとり……、うわああん！」

ロビーはそういつて、そのリーファイという人にだきつきました。大きなみだを、ぼろぼろこぼして……。ロビーはまるで、母親とはぐれていた子どものように、わんわん泣いて、そのリーファイのうでの中に飛びこんだのです。

「つらかったのですね。」リーファイがロビーをだきかかえながら、静かにいいました。「ほんとうに、あなたはよくやりました。よく、がんばりました。」

仲間たちにはまだ、なにがなんだか？ よくわかりませんでした。ただライアンは、ロビーを取られてしまったみたいで、なんだかちよつと、いい気持ちはしませんでしたが。リーファイに、やきもちをやいてしまったのです。そんな中で、ただただロビーだけが、胸の中にふうじこめられていた強い思いをいつきにはくはつさせて、大声で泣きつづけていました。

「はじめまして、みなさん。」

そういつて、リーファイとよばれたその精霊の種族の人は、みんなに静かでないねいなおじぎをしました。

「わたしは、リフィルタルエ。精霊王のとのぎみにつかえております。みなさんを心より、かんげいいたします。よく、いらっしやいましたね。」

精霊王につかえている、こがね色の長いかみの、すらりとした美しい人……。みなさんはこの人物に、見おぼえがあるはずです。いぜん、わたしがひと足さきに精霊王の森のことをしようかいたときに（ちなみに、十五章のはじめです）、その森の中で出会った人物。そう、あのとときの人物こそが、このリフィルタルエ、リーフィとよばれる人物でした。

リーフィ。それはこのイーフリープで精霊王につかえている、イーフリープでの（精霊王いがいの）ゆい一つの住人でした（え？ ゆいいつなの？ とおどろかれるかもしれません）、このイーフリープという世界は、もともと精霊のエネルギーだけでできている世界。アークランドのように、精霊たちがそのすがたをじつさいにあらわしたりしているというようなわけでは、じつはありませんでした。さぞかし、すごい精霊たちがうようよいるんだらうな、と思われていた方は、ごめんなさい。ちよつと、きたいはずれだったかもしれませんね。でもここはやつぱり、伝説のイーフリープ。精霊のすがたはなくても、ちゃんときたいには、おこたえできるはずですよ。そしてこのリーフィは、イーフリープで暮らしはじめた小さなロビーの、その育ての親だったのです。

ロビーは五さいのときから、このイーフリープですごしてきました。まだ小さかった

ロビー。わけもわからず親のもとからはなれ、とつぜん、こんなところへとつれてこられたのです。もちろんそのときのロビーに、ここがイーフリープというとくべつな場所だなんていうことが、わかるはずありません。わけもわからない場所に、とつぜん放りこまれた、小さなロビー。そんな不安な気持ちにあふれていたロビーのことを、あたたくつつみこんだのが、リーファイでした。

リーファイはロビーに、あらゆることを教えました。べんきよう、うんどう、げいじゅつ、食べられる植物の見分け方から、肉や魚の料理のしかたまで……（もちろんこれらは、このイーフリープにはそんざいしませんでしたから、リーファイが精霊エネルギーを使って作り出したのです）。

ちなみに、このイーフリープでは精霊エネルギーをからだに取り入れることで、それがごほんのかわりになりました。じっさいにはリーファイが、アーランドと同じようなごほんのかたちにして、ロビーに食べさせていましたけど。いつの日か、ロビーがアーランドへと帰るときがくる。リーファイには、そのことがわかつていたのです。ですからリーファイは、そのときのために、ロビーにさまざまなことを教えこみました。

リーファイは小さなロビーにとつて、ただひとりの家族でした（イーフリープにいたロビーでさえ、精霊王のすがたを見たことはありませんでしたから）。いっしょに、泣き、笑い、怒り、かなしみ……。その思いは、きおくをなくしたはずのロビーの心のおく底

に、ずっと消えることなく、残っていたままだったのです。今ロビーはここで、そのずっとずっとと会いたかった心の底の家族に、ふたたびめぐり会えました。そのしゅんかん、ロビーの心の中に消えていたはずのきおくが、いつきによりみがえったのです。リーファイ、リーファイ……。そしてロビーは、そのあふれる思いを、リーファイにぶつけました。「精霊王に、つかえているんですか！」リーファイの言葉に、マリエルがおどろいてそういいいます。

「では、ぼくたちのことは、もう、いうまでもないはずです。精霊王のところまで、あんなにいたただけますか？」

「そう。精霊王からとくべつな力をさずかるようにと、ノランさんにいわれたんです。」ライアンがマリエルにつづけて、いいました。「あ、ぼくは、ロビーのせわやくの、ライアンです。ロビーの、せわやくのー。あと、いちばんの友だちのー。」

ライアンはまだ、リーファイにやきもちをやいたままでした。それで、すこしおちついてきたロビーのことをリーファイからささつと取りかえすと、いじの悪い感じで、リーファイにいったのです(まったく……)。

ですがリーファイは、「マリエルにいわれるまでもない」といった感じでした(ライアンのいじわるには反応しませんでしたが)。ロビーたちがやってくるということは、はじめからわかっていましたから。ですからリーファイは、おだやかにほほ笑んだまま、仲間

たちにいったのです。

「精霊王は、あなたたちのすぐそばにいらっしやいます。」

「えっ！」その言葉に、みんなはおどろいて、どこどこ？ とあたりを見まわしました。ですけどどこにも、精霊王のすがたはありません（まさか、あそこに飛んでくるくまの私たちの風船が、精霊王じゃないですよ？）。

そんなおどろいているみんなのを見て、リーファイがいました。

「精霊王は、このイーフリープ世界、そのものなのです。」

もういちど、ええっ！ ここが全部、精霊王ってこと？ それっていったい？（じゃ、じゃあ、あの風船も精霊王ってことで、まちがってなかったんですか？ じょうだんでいったのに。）

「精霊王は、ありとあらゆるもので、そのすがたをあらわされるのです。きまつたかたちというものは、ありません。あなたたちの見ている世界、すべてが、精霊王なのです。」リーファイが静かにいいました。つまりこのイーフリープ世界のすべてが精霊王のすがたなのであって、このゆうえんちも、精霊王そのものだといふのでした。きまつたかたちはないということなので、こんかいはたまたま、ゆうえんちのすがたになったというだけで、森や、町だったかもしれないということなのです（これで、このふしぎなゆうえんちのなぞもとけたというわけですが、それにしても、よりによって、なんでゆうえ

んち？ ライアンのお子さまっぷりにあわせてたんでしょうか？ そこだけは、いまだになぞのままでした）。

リーファイが説明をつづけます。

「ですが、言葉をかやすためには、精霊王はひとつの生きものかたちに、そのすがたを変えられます。どのような生きものかは、わかりません。人かもしれないし、一羽のちようかもしれません。そのすがたの精霊王に会うために、あなたたちはここで、いくつかのしれんを乗り越えるのです。」

「しれん？」

とつぜんのごとくに、みんなは思わずききかえしてしまいました（それが精霊王のしれんのごとなのでしょうか？）。

「あなたたちは、ここで、ほんとうのあなたたちのすがたをあらわさなければなりません。」リーファイがいました。「そこからの力は、ここではやくに立ちません。マリエルさん、あなたの魔法も、ここでは力をはつきしません。ライアンさん、あなたもここでは、精霊の力をかりることはできません。すべて、あなたたちほんらいの力のみで、このしれんを乗り越えるのです。それが、精霊王に会うための、かぎとなるのです。」

リーファイの言葉に、みんなはとまどいをかくせませんでした。かりものの力やわざは、ここでは使えないというのです。魔法もそこからのエネルギーが大きくかわりま

すから、使えません（魔法を使うためには、その場にあるさまざまなエネルギーが必要となるのです。そのそこからのエネルギーを使うことができないのであれば、また魔法も、使うことはできませんでした）。精霊のくになのに、精霊の力さえもかりられないということでした。そしてロビーの場合は、せいなる剣アストラル・ブレードの力も、どうやら使えないようなのです（それはロビーほんらいの力ではなく、剣の力ですから。ただの剣としてなら、使えるでしょうけど）。

それがほんとうなら、さあたいへん。それでみんなは、いったいどんなしれんに立ちむかわなければならぬというのでしょうか？（マリエルやライアンのちびっ子たちなら、力が出せなくても、ふつうに強そうな気もしますが……）

「ロビーベルク。」リーファイが、（ライアンのものになっている）ロビーにいいました。「あなたの力は、ここで、たしかなものとなるでしょう。もう、わたしの力は、必要ないはずです。アークランドの mirai は、あなたにかかっているのです。そして、あなたのお父さんの運命も。」

リーファイの言葉に、ロビーはしゃんとしせいを正しました（ロビーにだきついていたライアンが、あわててわきに飛びのきます。それでもロビーの服のはしっこだけは、つかんでいました）。そしてリーファイにまつすぐむきあうと、なみだのあふれた目をこしごしとふいて、しっかりと力をこめて、いったのです。

「リーフィ。ぼくは、リーフィのおかげで、大きくなれたよ。ほんとうにありがとう。」
ロビーはそういって、リーフィに深々と頭を下げました。

「そして、今のぼくは、ぼくをささえてくれるたくさんの人たちのおかげで、ここに立っている。かんしやしても、しきれないくらい。ぼくは、いくよ。ぼくの運命の中に。これからの道は、ぼくと、みんなで、作り上げていくんだ。」

ロビーの言葉に、リーフィはおだやかにほほ笑みました。

「ああ。わたしのやくめは、これで終わりました。」リーフィが静かにいいました。

「ロビーベルク、わたしは、あなたはだいじょうぶです。あなたのみらいは、アークランドにあるのです。わたしはこのイーフリープから、あなたを見守っていますよ。わたしはあなたを、ほこりに思います。ありがとう、そして、さようなら、いとしいロビーベルク……」

「リーフィ！」

ロビーがさげけんだときには、もうリーフィのすがたはありませんでした。ロビーはぐつと、あふれるなみだをこらえようとしました。ですがだめでした。ぼろぼろ、ぼろぼろ……。つきからつきへと、とどまることなく、なみだがあふれてきました。

「ぼくがいるから！ 泣かないで、ロビー！」その場にくずれこむロビーに、ライアンがいました。ライアンは、さつきまでリーフィにやきもちをやいていた自分が、はず

かしくなりました。ロビーの気持ち、痛いほどわかりました。ライアンは自分も小さいころ、お母さんをなくしています。今のロビーも、きつとそんな気持ちなんだ。ライアンの目にも、しぜんとなみだがあふれてきました。マリエルも、リズも、みんな、ライアンと同じ気持ちでした。

そして……。

ロビーがこのあと、リーフィに会うことは、にどとなかったのです。

「さあ、いこうよ。」

リズが、ロビーにいいました。ロビーはまだ、かんぜんには気持ちがおさまっていませんでしたが、ここで立ちどまっているわけにはいきません。自分をささえてくれる、みんなのためにも、リーフィのためにも。

見ててね、リーフィ……。ロビーは心の中で、かたくちかいました。

ぼくは、ぼく自身を取りもどす。おかみの姓のことも、お父さんのことも、ぼくの運命のことも、きつとみんな、なしとげて見せるから……。

そしてロビーは、リズとマリエルにむかってやさしくうなずくと、自分のことをとんで心配げに見つめるライアンに、笑顔を見せて、いいました。

「ありがとう、ライアン。」

「さーて、どれから乗ろうか？」ライアンがいろんな乗りものをきょうみ深げにながめまわしながら、いました（ロビーがげんきになったので、ライアンもげんきなのです）。リーファイが去ってしまったあと。みんなはこれからどこへゆけばいいのか？ 考えることになりました（リーファイはぐたい的な道のりのことについては、なにも話してはくれませんでしたから。それは自分たちで、考えなければならぬことのようなのです）。とにかく、（話しのできるすがたの）精霊王に会って道をしめしてもらわないことには、どうすることもできません（トンネルももう消えてしまっていましたから、帰ることもできませんし）。ですがそのためには、リーファイのいったように、いくつかのしれんを乗り越える必要があるといいました。そのしれんとは、いったいなんなのか？

みんなにはけんとうもつきませんでした（どう見たって、あたりの景色はしれんとはほど遠いほどの、楽しげなものでした）。ですからここはひとまず、ライアンみたいに、このゆうえんちにある乗りものやたてものをひとつひとつしらべていくいがい、なさそうだったのです（でもライアンの場合は、ちよつと、もくてきがずれているような気がします……）。

「ふーん、木のお馬さんか。」ライアンが、くるくるとまわっているきれいな木の馬た

ちのこのを見て、いいました（これはいわゆる、メリーゴーラウンドでした）。「かわいい王子さまのぼくには、ぴったりだろうけど、ちよつと子どもっぽいなあ。」（じゆうぶらんどもっぽいライオンには、よくあっているような気もしますが……）

「すいすい白鳥ポートに……、へえー、自分で走る、ゴウカアトーだって。こっちは、動物さんたちとあそぼう、ふれあい広場。って、なんにもいないじゃん。」

ぶつぶついつているそんなライオンのことを先頭に、みんなはゆうえんちの中を、あれこれ見てまわります。でもとくにしれんとよべるようなものは、なんにも見あたりませんでした（頭の上を走りまわっているすごいスピードのコークスクリューに乗れというのなら、ロビーにとつてはしれんになるかもしれないが……）。

「あそこに、サーカスのテントがあるぞ。」リズが、道のむこうのテントのことをゆびさしながら、いいました。「中に、くまとかラパルーとかがいて、戦えつていうのかも。それなら、しれんかもな。」（ラパルーというのはヒョウと牛をあわせたような、もうじゆうのことでした。ちなみに、このアークランドにも、サーカスはあつたのです。大きなまちには、ていき的にサーカスの一団がやってきていました。）

「そんなたんじゆんなわけないでしょ。まあ、とにかく、いつてみましょう。」マリエルがいました。

「こんにちはー。大人二まいに、子ども二まい、くださいーい。」ライアンがテントの入り口のカーテンをあげながら、いいました（このアーケランドでも、やつぱりサーカスを見るためには、チケットを買わなければなりませんでしたから）。

「子ども二まいつてのは、ぼくもはいつてるんじゃないだろうな？」マリエルがライアンにつつかかります。

「がらーんどうだな。」中をのぞきこんだリズが、がっかりしたようすでいいました。リズのいう通り、テントの中には、たま乗りのたまひとつ、ころがつていなかったのです。

「やつぱり、ここでもないみたいだ。ほかへいこうぜ。」
と、そのとき……。

ういいん、ぎつこん！ ういいん、がつこん！

な、なにになに？

とつぜん、テントのまん中あたりから、おかしな物音がきこえました。みんながびつくりして見てみると……、どこからあらわれたのか？ そこにさきほどまではなにもいなかったのに、なにやら人のようなすがたが、あらわれていたのです！

そしてよく見ると、それは人ではありませんでした。全身も色をした、うさぎ……、いえ、うさぎのすがたをした人形です。それは人と同じくらいの大さきの、ブリキでできた、(ぎこぎここと動く) 一体のうさぎの人形でした！(まるで小さなブリキのおもちゃを、そのまま大きくしたかのようにでした。)

そのうさぎのブリキ人形は、胸の前に両手で、小さな黒板をかがけていました。その黒板には白いチョークで、なにか書いてあるようです。みんなはおっかなびつくり近づいて、その文字を読んでみました。そこには……。

「しれんの間」

ええっ？　ここが、しれんの間？　サーカステントに、うさぎの人形。なんともしれんとは、につかわしくないような気がしますけど……。でもまあ、もともとの場所が、しれんとはかけはなれたゆうえんちなのですから、もうなんでもいいでしょう。

「へえー、おもしろいじゃんか。」リズが、「ふふっ。」と楽しそうに笑っていました。「なにが出るのか？　どつからでもかかつてきなよ。」

リズがそういったしゆんかん、テントの左右にひかれたカーテンが、ささーつとひらきました。そして……。左からは、大きなくま！　右からはラパルー！　それぞれ一頭

ずつが、中にはいつてきたのです！

これって、さつきリズがいった通りじゃないですか！ まさかほんとうに出てくるとは！ なんてたんじゅんな……、じゃなくて、相手はけっこうな強さのもうじゅうたちなのです。これはほんとうに、しれんでした。ふつうの人なら、ひええー！ といちもくさんに、逃げ出してしまふところでしょう。ですけどこちらは、ひやくせんれんまのつわものたち。くまやラパルーの二頭や二頭、なんてことはないはずです（ちなみに、このもうじゅうたちはサーカスらしく、頭にピエロのさんかくぼうしをかぶっていて、顔には赤やもも色やきいろで、ハートや星のもようなどがペイントしてありました。といつても、こわさはぜんぜん、変わりませんでしたけど……）。

「ここは、ぼくにまかせてもらいましょう。」マリエルが進み出て、魔法のつえをふりかざしました。つえのさきのもも色のすいしやうを、ぴしっ！ と相手につきつけて……。

「ぼわんと、ぷいん、ふおーむー！」

これは、ねむりのじゅつ。その通り、相手を眠らせるじゅつです。たくさんの相手にはきぎづらいのですが、相手が動物の二頭や二頭であるのなら、こうかはばつぐんでした。

「これで、戦う必要もないですね……、って、あ、あれー！」

「がおるー!」「(い)あー!」

マリエルの魔法もなんのその! 二ひきのもうじゅうたちはぜんぜんへいきで、こちらへとむかってきたのです! (たしかにマリエルは、魔法の力をひき出したつもりでした!)

「きいてないじゃん! しつかりしてよね、マリー。よーし、それじゃ、やっぱり、ここはぼくが!」ライアンがマリエルのことをおしのけて、前に出ました。

「風の力を、われに!」ライアーン……、ウインズ・ブレーズ!」

ライアンがそうさげぶと、おそろしいほどのいりよくの風の剣たちが、もうじゅうたち、ががーっ! とおそいかか……、りません! それどころか、なんにも起こりませんでした! どういうこと?

「さつき、リーファイがいつてたやつかも……」ロビーがふたりのちびっ子たちにいいました。「ここでは、魔法も、精霊の力も、使えないって。やっぱり、ほんとうだったんだ。」「ほんとに、そうくるー? じょうだんだと思つてたのにー!」ライアンが思わず、そういういます。ライアンはさつきのリーファイの話も、半分信じておりませんでしたから。精霊のくになのに精霊の力がかりられないって、そんなわけないじゃん。でもまあ、ぼ

くなら、たとえ精霊の力が半分になったとしたって、ぜんぜんよゆうだけどね。ライアンはそう、たかをくくっていました（そのため、ほんとうに精霊の力がかりられないのかどうか？ あらかじめためてみることもしていませんでした。ライアンらしいです）。

そしてマリエルは？ というと、これは「げんじつしゆぎ」の子でしたから、ほんとうに魔法が使えないのかどうか？ 自分でじっさいにためしてみ、けつかを自分の目で見てみたいと思いました（マリエルらしいですね）。それでねんのため、（どのルートでこのゆうえんちの中をしらべまわったら、いちばんこうりつがいいのか？ たくさんの計算をおこなったあとで）ために魔法を使ってみて、ほんとうに使えないのかどうか？ たしかめてみようとしましたが、（マリエルの長い計算にしばれを切らした）リズとライアンが（「もうー、さきいつちやうよ！」と）さつきとさきにいつてしまったので、あわててマリエルは、かれらのことを追いかけたのです。ですけどマリエルは、自分の力の強さをよく知っておりましたから、「まあ、ぼくなら、たとえ魔法の力が半分になったとしても、問題はないんだから、わざわざためすまでもないかな」と、そのあとはたかをくくってしまったというわけでした（このように、計算ずくで動いているわりには、ちよつと自信かじょうなところがあつて、それでへまをしてしまうところ、ほんとにもマリエルらしいですね。

ちなみに、すこし説明を加えますと……、魔法というものは、「ちよつとねんじれば、いっしゅんですぐに使える」というわけではないのです。マリエルほどのまじゅつしであつても、魔法を使うときには、どんなにかんたんな魔法であつても、まず「魔法を使うためのせいしんじようたい」に自分のからだを持つていつて、それから「魔法の言葉」となえなければなりません。ですからすぐに魔法が使えるかどうか？ ぱつとためすというようなことは、できなかつたのです。ですからマリエルも、今まであえてためすというようなこともなく、このしれんの間までやってきてしまつたというわけでした。でもまあ、いっしゅんでは使えないとはいつても、せいぜい五びようもあれば、魔法が使えるかどうか？ じゅうぶんためせましたけどね。たかをくくつてしまつていたことが、わざわいしてしまつたというわけなのです。

ところで、マリエルはさきほど、もうじゅうたちに対して眠りの魔法を使つたわけですが、それはマリエルが「使つた気になつていた」というだけのことで、じつさいにはなんの魔法の力もはたらいていませんでした。マリエルはあまりにもあたりまえに魔法の力を使つておりましたので、自分のからだに「魔法を使うためのせいしんじようたい」になつたかどうか？ なんていうことは、いちいち気にするまでもないことだつたのです。ですからマリエルも、じつさいに魔法の言葉をとなえてみるまで、魔法の力はたらいていないということに気がつきませんでした。以上、説明終わり！。

さあ、ほんとうにたいへん。ふたりのさい強なちびっ子たちが、ほんとうにその力はつきでけないのです！ ノランベつどう隊、あやうし！ ですが……。

ノランベつどう隊は、このふたりのちびっ子たちだけではいけません。さて、このあたりで、いよいよ、この人にもかつやくしてもらおうとしましょう。それは……、そう、リズのことでした（すいません、ロビーのかつやくは、もうすこしあとで……）。

「やれやれ、ここは、おれの出番みたいだな。」

リズが「ふう。」と息をついて、前に進み出ました。でも待つてください。いくらリズがシルフィアで、強力な精霊パワーが使えるといっても、それはあくまでも精霊の力。ライアンのときみたいに、また精霊の力は、ふうじられてしまうのではないのでしょうか？

いいえ、リズはライアンのように、「そこからかりた精霊の力」を使うわけではありません。リズは、リズの中にひめられている、「自分の精霊の力」だけで戦うのです（ここがシルフィアのすごいところなのです。シルフィアの精霊パワーは、そのからだの中にもともとそなわっているものなのであって、そのためその力は、かりものではない、自身自身の力として使うことができました。なんだかちよつと、ずるいような気もしますが……、やっぱりすごい）。リーフィも、いつてましたよね。ここではすべて、あなたたちほんらいの力のみで、しれんを乗り越えるのです。リズの力は、まさにその、「自分ほ

んらいの力」でした！

さてさて、リズはいつたい、どんな精霊パワーでもって、どんな戦いのわざをくり出そうというのでしょうか？（まさか、精霊バーンチ！とかいって、すででなぐるとか？ 精霊のたつまきでこうげき！というのも、ライアンとかぶってしまいますから、おもしろくありませんし。いや、べつに、かぶるとかおもしろいとかの問題じゃ、ないんですけど……）

でも（もう一回）待ってください。いくら強力な精霊の力をそのからだの中にひめているのだとしても、リズの武器は、ほんらい剣であるはずです。もと剣じゆつしなやくだすもの。ですからここはやっぱり、剣を使った方がいいんじゃないでしょうか？

と思いましたけど……、ここでわたしは、だいじなことをひとつ忘れていました。今のリズは、自分の剣を持っていないのです！（リズの剣は今、リズの家の床の上に、ほこりをかぶってころがってしまいましたから。ロビーたちもその剣をわざわざ、持ってこなかったのです。重いですから……）ロビーの剣をかりるといふ手もありましたが、「ここは、おれの出番みたいだな。」といってまで、さっそうと剣も持たずに前に進み出たというのに、またうしろにもどって、「やっぱりロビー、その剣貸して。」などというの、なんだかかっこ悪いですし……（いや、べつにかっこ悪いとかの問題じゃ、ないんですけど……）。

ですからやつぱり、リズにはなにかほかの考えがあるみたいでした（まさかほんとうに、自分が剣を持っていないということに、気づいてないわけじゃないでしょうから）。じゃあやつぱりここは、精霊パワーで戦うんですね、って思いましたが……、じつはリズの武器は、それだけではなかったのです（なんどもすいません）。

リズには（剣と精霊パワーのほかにも）もうひとつ、強力な武器がありました。それは今のリズが、「すべてをささげるー」といつてまで、のめりこんでいるもの。「世界の人たちのために、自分のできるいちばんふさわしいことをしたい」といつて、剣をすてまで、その身をささげている、あるものだったのです。

それは……？

音楽！

そう、リズは音楽にすべてをささげるために、人里はなれたぶつそうな山の中に住みはじめたのです。自分には剣よりもっと、人々のやくに立てることがあるんじゃないか？ リズにとって、それが音楽でした。

自分の作った曲で、世界中のたくさんの人たちのことをげんきにし、勇気づけ、助けることができる。こんなにすばらしいことはない。リズはそう思つて、音楽にうちこみはじめたのです。もちろん、剣のわざをみがいて、それで人々のことを助け、はげますことも、またそれを見ききした世界中のたくさんの人たちの心を動かし、勇気づけるこ

とができるでしょう。人々のことをすくう道には、さまざまなものがあるのです。その中でリズは、音楽が自分にいちばん、むいていると思いました（いいかげんなようできて、あんがいしっかり考えているんですね！ リズのことを、だいぶ見なおしてしまいました。よし、わたしも本を通してみんなをげんきづけられるように、がんばるぞ！ みんな、げんきになってー！）。

「青がみのぎんゆう剣士」。いつしかリズにつけられた、通り名です（青がみとは、青いかみの毛という意味です。リストールも青がみでしたよね）。音楽をかなでながら物語を語ってきかせる、ぎんゆうしじん。リズの場合は、それに剣が加わるのです。それで、ぎんゆう剣士。なんともリズにぴったりな、いえ、リズだけにあてはまる、とくべつなよび名じやありませんか。

リーフィのいった、「自分ほんらいの力のみで、しれんに立ちむかわなければならぬ」という言葉。ここでいう「ほんらいの力」とは、自分自身のみの力。自分ひとりですることのできる力のことなのです。精霊使いのわざや、まじゆつしの魔法の力は、そこからのたくさんさんの助けによってなり立っていますから、自分自身だけの力というわけではありません（精霊のわざはそのまま精霊の力をそこからかりるわけですし、魔法はその場にあるしぜんのエネルギ―をかりるわけなのです。ですから自分自身だけの力というわけではありませんでした。ちよつと、ややこしいですけど）。それに対してリ

ズの音楽の力は、まぎれもなく、そこからの精霊の力でも魔法の力でもない、リズ・クリスメイデインの力でした。そしてどうやらリズは、この音楽の力でもって、戦いにもぞもうとしているようなのです。でも音楽の力で戦うっていわれても、なんだかぴんときませんけど……、いったいそれでどうやって、戦おうというのでしょうか？（そもそも音楽って、戦うためのものじゃないし……）

「いくぜ、イー・マイナー・セブン！」

リズがさけぶと……。

なんと、リズの左手から、青白く光りかがやく光の剣があらわれました！（ちよつと！ そんなことができるんだったら、はじめからいってよ！）これはリズ自身の精霊エネルギーを、剣のかたちに変えたものでした（シルフィアって、こんなことまでできちゃうんですか！）。いわばこの光の剣は、リズのからだの一部だったのです！

そしてよく見ると、その剣はちよつとおかしなたちをしていました。剣みたいでしたが、そのやいばの上に、なん本ものほそい「げん」が張ってあったのです（全部で六本あるようでした）。これは……、がっきじゃありませんか！ つまりこれは、がっきの剣。もつとはつきりいえば、みなさんの世界でいうところの、ギターの剣だったのです

！ うーん、なんだか、すごいような、すごくないような……。やっぱりすごいかな。ファンタジーの世界ですから、それはほんとうはギターではなくて、リユートという、ギターみたいながつきでしたが、それでもこれはただのリユートではありません。いかなれば、エレキギターならぬ、エレキリユート！ リズの音楽パワーがそのリユートの中にぎゅいんぎゅいんひびいて、それをひくリズの手によって、こせいで力強い音色が、そこからくり出されるというわけでした。そしてその音色の力強さこそが、そのまま戦いのエネルギーとなって、リズのこの光の剣の強さとなっていたのです（音楽の力で戦うって、そういうことなんですね！ ようするに、このがっつき剣から出る音楽の音色の力を、戦いのエネルギーに変えて、敵をこうげきするというこのようなのです。これは、強いはずです！ なにしるシルフィアの精霊パワーと、剣じゅつしなんやくの剣のわざと、音楽家としての音楽の力が、すべてこのいっぽんの剣にしゅうけつしていましたから！）。

でゆるり、でゆるり、でゆるり、でゆるり、でゆるりーん！

ぴらり、ぴらり、ぴら、ぴらり、ぴらり、ぴらり、ぴら、ぴらりーん！

リズのギターソロ！（リユートソロ？）うーん、かっこいい！ って、ききほれてる

場合じゃありません。二ひきのもうじゆうたちが、目の前にせまってきていましたから！（そうでした！ もうじゆうのことなんて、すっかり忘れてしまっていましたね！ だ
いぶ説明が長くなってしまいましたから……。本を書くのって、たいへん！）

「エネルギーはもう、じゆうぶんだ。待たせたな！」

リズがえんそうをやめて、リユートの剣をかまえました！（どうやらエネルギーをた
めるために、ソロをひいていたみたいですね。このように力強い音色をこの剣にためて
いくことで、この剣はどんどん強くなっていくそうです。やっぱりずいぶんと、変わっ
た剣です。ちよつと、めんどくさい？）

「とき放て！ ミンストレル・シユリルサウンド！」

ぶいんぶいん！ ぶいんぶいん！ どつごおくん！

リズの剣から、大きな、かまのようなエネルギーがふたつ！ くまとラパルーにむ
かって飛び出していつて……。大ばくはつ！（なぜ、ばくはつするんでしょうか……。？）
サーカステントの中は、土ほこりと白いけむりで、いっぱいになってしまいました（い
つものパターンです）。

ごほんごほん！

しばらくたってから、ようやくけむりがひくと……。

そこにはくまとラパールのすがたはなく、かわりに地面に落ちていたのは……、小さなかわいい、くまのぬいぐるみと、ラパールのぬいぐるみ！ そう、じつはこれこそが、もうじゅうたちのしようたいでした！（さすがは、なんでもありのイーフリープですね。）

「かわいそうだから手かげんしてやったのに、人形だったのかよ。これなら、ほんきでぶつ飛ばしてやればよかったな。」リズが、やれやれといった感じでいきました。こ、これで、手かげんしてたですって？ リズもふたりのちびっ子たちに負けないくらいのおそろしい強さです！（音楽パワー、おそろべし！）

さて、これでぶじに、（ぬいぐるみの）もうじゅうたちをやつつけたわけです。精霊王に会うためのしれんは、これで終わったのでしょうか？

いえいえ、どうやらそんなわけには、まだいかないようですよ。

テントのむこうのかべにまで吹っ飛ばされてしまったブリキのうさぎが（そういえば、うさぎもいましたね。リズのパワーで、いっしょに吹っ飛ばしてしまつたみたいですよ。ごめんね）、ぎっこんがっこんと音を立てて、またこちらに歩いてきました（よかつ

た、こわれてなかったみたいですね)。そしてうさぎは胸の前に持っている黒板をみんなにむけて、それをくるりとうらがえしたのです。そこには……。

「ラウンド・ツー」

やっぱりきました、ラウンド・ツー！ わたしもこれだけでは、終わらないと思っていました！ さあ、こんどはどんなもうじゅうが出るんでしょうか？ やっぱりサーカスだから、ライオン？ それとも、トラでしょうか？

みんなが、こんどはなんだ？ と思っていると、テントの中すべてのカーテンが、さーつとひらいていって……。

がちやんがちやん、がちやんがちやん！

あつちからも、こつちからも！ ブリキでできたうさぎのたいぐんが、その手に（長さが二フィートほどもある）ふとくて大きなにんじんをいっぽん、にぎりしめて、こつちにむかつてきたのです！ その数はどう見ても、百体以上！ ひ、ひええー！

「ちよ、ちよつと！ こんな、きいてないよ！」ライオンが身がまえて、思わずさけ

びました。

「やつらみんな、目がほんきだぞ！」マリエルも手にしたつえをかまえて、ライアンにつづきます。

もも色や、赤いのや、青やきいろ。さまざまな色をしたブリキのうさぎたちが、マリエルのいう通り、目を血走らせて（ブリキですから、ほんとうはペンキでそのように、えがかれているだけでしたが）、上からもうしろからもおそいかかつてきました！　しかもみんな、手にしたにんじんのかたちをしたこんぼうを、ぶんぶんふりまわして！（一）、これはこわい！　夢に出そうですね！）

今やまわりは、うさぎだらけ！　かんぜんにかこまれてしまいました（しかもこのうさぎたちは、びつくりするほどすばやいのです！）。出口もすでに、うさぎでうめつくされています。もうこうなったら、やるしかない！

「相手にとつて、ふそくはないぜ！」リズがさげびました。「こんどは、ほんきのサウンドをきかせてやる！」

「ぼくだって、こんなうさぎの、百びきや二百びき！」ライアンがつづけていいました（精霊の力が使えないんですから、あんまりむりしない方が……）。

「しかたありません。ふりかかる火の粉は、はらわねば！」マリエルもさらにつづきます（魔法の力が使えないんですから、あんまりむりしない方が……）。

「ぼ、ぼくも、この剣で戦うよ！」ロビーも、腰の剣アストラル・ブレードをぬいて、うさぎたちにむかいました。魔法や精霊の力が使えないふたりのことは、ぼくが守ってあげなくちゃ！（リズの方は、自分の助けがなくてもだいじょうぶそうでしたから。ちなみに、前にもちよつといましたが、剣の力もここでははつきされませんので、今はせいなる剣も、ただの剣として使うしかないのです。）

せんとつかいし！

もうつきからつきへと、にんじんが飛びかっけてきます！（見た目はかわいいのですが、その力のおそろしいこと！ にんじん、おそろべし！）リズはかたっぱしから、そのリユートの剣で敵を切りふせていきましたが、なにしろ数が多すぎました。さつきみたいに、ひつさつわざのパワーをためているひまが、ぜんぜんありません。ですからリズは、「めんどうだ！ まとめて相手になつてやる！ 早びき、リフ・ウインズ！」目にもとまらないほどの早わざでリユートをひいて、小さなエネルギーをつぎつきと飛ばし、うさぎたちをほんぽん吹き飛ばしていききました（いろいろとべんりですね、音楽つて。ほんらいの使い方じゃないでしょうけど……）。

そしてロビーだって、負けてはいられません。せいなる剣をにぎりしめ、にがてなが

らも、せまりくるうさぎたちにえいえいと切りつけていったのです（それを見ていたリズに、「ロビーー！ もつと腰を落とせ！」とか、「足を使えるようにしろ！」とか、いろいろいわれてしまいました。さすが、もと剣じゆつしなんやく。やつぱり剣のことにかんしては、口をはさまずにはいられないようですね。でもリズさんも、そんなよゆうはないんじや……）。

しかしうさぎたちは、まだまだおそいかかつてきます（あとからも、つかであらわれたのです。ずるい！）。ロビーはリズの背中を守つて戦つていましたが……、しかくになつていた上空から、一体のうさぎがロビーめがけて、ぶーん！ にんじんをふりおろしました！ あぶない！

そのとき！

ひゅっ……、ががん！

なにかが目の前を横切つたかと思うと、大きな音とともに、ロビーの頭の上をいたうさぎの人形が、ばらばらにこわれて地面に落ちてきました！ な、なにが起きたの？

ロビーの目の前に、そのなにかが、上からしゆたつとおり立つてきました。そこに立っていたのは……。

「マリエルくん！」

ロビーがびっくりしていいました。そう、そこには、つえをかまえて「ふう。」と息をついている、マリエルのすがたがあつたのです！　これは、いがい！　魔法を使えないマリエルは、ライアンといっしょに、うさぎから逃げまわっているものとばかり思っておりましたのに！

「あぶなかつたですね、ロビーさん。上にも気をつけてください。」マリエルがれいせいな顔をして、せまりくるうさぎたちにびしっとつえをかざしながら、いいました。

「いい忘れましたが、ぼくのぼうじゅつは、ノランおししようさまじきんです。安心してください。魔法が使えなくても、ぼくは強いんですよ。」

「あ、そ、そうなの？」　マリエルの言葉に、ロビーがめんくらつてこたえます。

「それは、心強いね……」

せまりくるうさぎたちを、ついで、がん！　がん！　なぎたおしていくマリエルのこ
とを見て、ロビーは安心しつつも、「やっぱりマリエルくんって、いろいろすごい……」
とひとり思いました。

「ちよつと、ロビーー！　ぼくだって！　見てよ！」

ライアンの声がして、ロビーが、えっ？ と見てみると……。

「とりゃー！ せいー！」

ライアンが、せまりくるうさぎたちのにんじんをうででばばつとふりはらい、そのいきおいをりようして、ぶーん！ うさぎたちをつぎつぎと、テントのいちばんむこうはしにまで、かるがると投げ飛ばしていたのです！（そしてかべにげきとつしたうさぎの人形たちは、またしてもばらばらになって、こわれてしまいました。つ、強い……）

「いちおうぼく、ごしんじゆつなら、なんでも使えるから。まかせてよね。せやー！ ひつさつ、うらひつじ投げー！」

つぎつぎとうさぎの人形たちをばらばらにはかいしていく、ちびっ子たち。ああ、まったく、このふたりのことは心配するまでもありませんでしたね……。

「ふん。あまく見たようだな。」うさぎたちに、マリエルがいました。

「そのていどの動きで、ぼくに勝てるつもり？」ライアンが「ふふん！」と鼻をならして、マリエルにつづけました。

そして……。

「かわいいからって……」

ふたりのちびっ子たちはそろってそういうと、つえやゆびをうさぎたちにびしつ！ とつきつけて、ポーズをきめていました。

「なめないでよね！」

「やれやれ。ずいぶん多かつたな。」

「ふう、ふう。」と息をととのえながら、リズがいました。さすがのリズでも、これだけの数を相手にするのは、たいへんだったようです（うさぎたちのうちの七わりくらいは、リズがやつつけましたから）。

「あとかたづけが、たいへんだね。ま、いいけど。」ライアンが、もはやぼんこつになつたうさぎ人形の部品の山をつつつきながら、つぶけました。

「それより、これで、しれんは終わりなのかな？」ロビーがそういいます。そう、この戦いは、あくまでも、精霊王に会うために必要だというしれん。もしこのしれんが力をしようめいするためのものであるのだとしたら、もうじゆうぶん強さはつきしましたし、これで精霊王も、会ってくれるんじゃないでしょうか？

こんどは、どうなるんだ？ みんながあたりを見まわしていると……。

ぼんこつのうさぎ人形の山の中から、がらがらと音がして、はじめにあらわれたあのもも色のうさぎが一体、立ち上がったのです（立ち上がったといっても、半分部品の山にうもれて、かたむいたままでしたが……）。そしておなじみ。あの黒板の文字は……。

「おくにお進みください。おくにお進みください。」

やれやれ！　ようやく、このテントから出られるようですね！　そして黒板には文字といっしょに、白い矢じるしも書いてありました（その矢じるしはテントのてんじようをむいていましたが、それはただ、うさぎがまがつて立っているからでした）。どうやら、テントのおくのつうろをさししめしているようです。

みんなが用心して、そのつうろを進んでいくと……。

つうろは、テントの出口につながっていました。明るい光がぱあつとふりそそぎます。そこに出ると、そこには古ーいぼろぼろのやかたがいつけん、たっていました。かべにはつたがからんでいて、いかにもおぼけが出そうといった感じのたてものです。やかたのまわりにはたくさんのお墓がならんでいて、このやかたをよりいっそう、ぶきみなものに見せていました。

ですが……、かんじんのまわりの景色が、ゆうえんちです！　お空もまつ青！　飛びかう風船、楽しげな音楽。ですからこのおやしきも、そのせいでちつともこわく見えませんでした。

そしてよく見ると、お墓の石も、たてものも、ほんものの石でできているのではなかったのです。にせものの石で古く見えるようにつくられた、見た目だけのつくりものでし

た！ つまり、このたてものは？

ゆうえんちには、これまたよくあるしろもの。

そう、おぼけやしきです！

「ここへはいれ、つてことか？」リズが、おぼけやしきの前に立っていたひとつのかんばんをさししめしながら、みんなにいいました。そのかんばんにも、さっきのうさぎの黒板と同じように、「こちらにお進みください。こちらにお進みください。」という言葉が書いてあったのです。

「おぼけやしきか。」ライアンがいいました。「なかに、なーにがいるんだらうね？ フェリーがいたら、もつとおもしろくなるんだけどなー。」

ライアンはそういつて、「うふふ。」と悪い笑い方をします（たぶんフェリアルのこととをからかう、新しいアイデアでも思いついたのでしょう。なにを考えているんだか……。

ちなみに、このアークランドにもやつぱり、おぼけやしきというものはありました。夏のおまつりのときなんかには、たびたびあらわれたのです。こわさですすしくする。どこの世界でもにたようなことが考えられているんですね）。

「まあ、なにがきたって、ぼくたちの敵ではなさそうですね。」マリエルが、つえをかまえていいました。「今までのデータから考えれば、ここも、ぼくたちが力をあわせれば、問題はないでしょう。」（いかにもマリエルらしい。）

「じゃあ、さつきといこーぜ。」リズがあっけらかんとしたいいい方でそういつて、すたすたとたてものの入り口にむかつて歩いていつてしまいました。

「み、みんな、おぼけとかだいじょうぶなの？」ロビーがあわててみんなのあとを追いかけてながら、そういいます。「おぼけには、今まで、ろくな目にあわされてこなかったよ？」

ロビーのいう通り、おたまじやくしのかいぶつや、たましいをうばう影のおぼけ（かれらはほんとうは、おぼけとはちがいました、まあ、にたようなものですから）。おぼけには今まで、ろくな目にあわされていませんでしたから、ロビーの心配はもつともでした。

でもこのノランベつどう隊にかぎって、おぼけなんて、さつきのうさぎとたいして変わらないようなものでした。ライアンは、（かわいいわりには）きもがすわっていますし、「おぼけが出たら、びんにつめて持って帰ろうつと。」などといつております。リズは、「べつに、なんでも同じだろ」といつた感じですし……。マリエルにいたつては、「おぼけなんてものは、われわれがかってにそうよんでいるだけなのであつて、じつたいは、

ただのせいしんエネルギーにすぎません。せいしんエネルギーに意志がやどったとしても、なんのふしぎもありませんよ。」といつものちようしでした（いかにもマリエルらしい）。

「へいきへいき。早くいくよ、ロビー。おてて、つないでつてあげよつか？」ライアンがにこにこ笑つて、そういいます。ロビーはそんなライアンにひっぱられながら、「うん……」とうなるばかりでした。

「おじやましませーす。おぼけさん、いませんか？」ライアンがまつさきに入り口の門をくぐつてから、いいました。

「こんどは、がいこつでも出てきて、黒板を持つてるのかもな。」リズがあたりをきよろきよろとながめやりながら、つづけました。

ですが、あたりはしーんと静まりかえつていて、なんの物音もしません（どうやら中には、だれもないようでした。すくなくとも、生きている者は）。

門をくぐると、そこは小さなげんかんホールになつていて、左右に暗いろうかがそれぞれいつぽんずつ、のびていました。かべにはろうそくがいつぽんかかつていて、あたりをぼんやりとてらしてあります。さて、どうしましょうか？（右に進む？ 左に進む？ それともここで、アイテムを使う？）

「やつぱり、チケットがないとだめなのかな？ 大人二まいに、子ども二まい、おねがいします。」ライアンがいました（このアーケランドでも、やつぱりおぼけやしきにはいるためには、チケットを買わなければなりませんでしたから）。

「子ども二まいってのは、ぼくもはいってるんじゃないだろうな？」すかさずマリエルが、つつかかります（さつきと同じですね……）。

すると、びつくりすることが。かべにかかっていたろうそくのほのおが、とつぜん、ぼぼぼ……、と小さな音を立てて動き、それが矢じるしのかたちに変わったのです！（なかなか、こつたしかけですね！）

「こつちだつてよ。」リズが矢じるしのむいた方（左のろうかでした）をゆびさしながら、いいました。「危険はなさそうだし、いつてみようぜ。」

「こら、そんなにかんたんにしんようするのは、あぶないぞ。」マリエルがいました。が、リズとライアンは、もうすたすたと、ろうかを歩いていつてしまいます（なんだか、こんなパターンばつかりですね）。しかたなく、マリエルとロビーも、そのあとを追っかけていきました（ちなみに、ほんたいがわの右のろうかのさきはどうなっているのか？ という、そのさきはいきどまりになっていました。ほんらいこういうおぼけやしきにはかかりの人がいて、お客さんのことをあんないするものなのです。この場合では、「おやおや、おぼけのほのおが、みなさんのことを、左のろうかにあんないしています

よー……」なんて、説明するところでしよう。そのため、あんないする必要のない右のろうかのさきは、作られていませんでした。お金もかかりますしね。

そしてみんなが、暗いろうかをしばらく進んでいくと……。

「あれ？ いきどまりか？」 リズが急に立ちどまって、いいました。

そこはまるい広間になっていて、かべにはどこにも、とびらしいものはありません。

「あれー、おかしいなー。」ライアンが、かべをぺたぺたさわってしらべていると……。

「うわっー！」

手がするりとかべをつきぬけて、ライアンはそのまま、かべのむこうにばたーん！

たおれこんでしまいました！

「いててて……。なんだよ、もうー！」

どうやらこのかべは、まぼろしのかべのようでした（ここもほんらいは、かかりの人がお客さんをかべのむこうまであんないするところなのです）。おぼけやしきでおぼけのかべをすりぬける、「おぼけたいけん」といったところでしょうか？（なかなか、こつたしかけですね。）

「やれやれ、ちよつと考えれば、すぐにわかることじゃないか。」マリエルがあきれたようすで、ライアンにいいました。「ここに書いてあるよ。『ここは、おぼけのかべ。目に見えるものばかりがしんじつではない』。まったく、子どもだましのトリックだね。」

マリエルのいう通り、ライアンのたおれこんだそのかべの上に、古びた（ように見せてある）木のプレートがひとつついていて、そう書いてあったのです。すたすたとかべをぬけてくるマリエルに、ライアンがぶんぶんいいました。

「それ、さきについてよー！」

かべをぬけたさきは、またしても暗いろうかになつていました。あちこちにかんおけが立ってかけてあつて、いかにも中から、ミイラ男でも飛び出してきそうなふんいきです。が……。

なーんにも出ません。

ライアンがいくつか、かんおけのふたを（「せりやー！」と）あけてのぞきこんでみましたが、中はみんな、からっぽでした（ここもやつぱり、ほんらいはおぼけやくの人がこのかんおけの中にはいつてお客さんをおどかさすといつたぐあいでしたが、さきほどから、このおぼけやしきの中にはだーれもいませんでしたから、このかんおけもやつぱり、からっぽだったのです。ちよつとざんねん？）。

「つまらないなあ。さつきから、なんにも出ないじゃん。やる気あるの？」ライアンがぶーぶー、もんくをいいました（やる気といわれても……）。

「なんにも出ない方がいいよ。それより、しれんって、いったいなんなんだろう？」口

ビーがあたりのようすをきよろきよろ見まわしながら、つづけました。

「こんどは、おぼけが五百ぴき、とかか？ めんどくさいぞ、そんなの。」リズが「ふう。」とため息をついて、そういいいます。

「どうやらここが、もくてきの場所のようですね。」とつぜん、マリエルがいました。みんなが「えっ？」といって、見てみると……。

ろうかのさきに、入り口のとびらのない、四かくい小さな部屋がひとつあって、その入り口のアーチの上に、さがしていた言葉が書いてあったのです。

「さいごのしれんの間」

「やっとなついたか。」リズが「ふふん。」と鼻をならして、いいました。どうやら、気あいはじゆうぶんのようです。

「さいごだつて。これでようやく、精霊王に会えるみたい。」ライアンがわくわくしていいました。

「でも、おかしなことが書いてあるよ。」

ロビーがそういつてゆびさした方を、見てみると……、部屋の中にひとつだけあったとびらの上に、またしても古びた（ように見せてある）木のプレートがひとつついてい

て、そこには、こんなことが書いてあったのです。

「きょうふの部屋。ひとりずつはいること。」

きょうふの部屋？　なんだかこわそうな部屋です（しかも木のプレートの両がわには、けらけら笑う、がいこつのかざりがひとつずつ、つけられていました）。いよいよ中に、おそろしいおかげでも待ちかまえていて、おそいかかってくるでもいうのでしょうか？

部屋のすみには木のつくえがひとつあって、つくえの上には紙が山づみになっていました。その紙には、まるい金色のわっかが大きくひとつえがかれていて、そのわっかの上に書いてあった言葉は……。

「勇者のあかしのスタンプ」

さらに、つくえに取りつけられた、ひとつの金色のきんぞくのプレートには、こんな言葉が。

「きょうふの部屋の中に、スタンプ台があります。きょうふの部屋では、あなたは、お

のれのきょうふにうち勝たなければなりません。きょうふにうち勝って、スタンプをおしまししょう。スタンプをおせたら、すてきなプレゼントがもらえるぞ！」

つまり、そういうことみたいですね。この紙を持って、ひとりずつきょうふの部屋にはいる。そこでスタンプをおして、ここにもどってこられたら、かかりのおねえさん（たぶんおねえさんのような気がします）にそれを渡して、プレゼントをもらって、このおぼけやしきもクリアー！ ということらしいのです。うくん、やつぱり、しれんというよりは、ゆうえんちのアトラクションといった感じですね（もともとゆうえんちのアトラクションなので、とうぜんですが）。

でも忘れてしまいそうですが、ここはただのゆうえんちではないのです。精霊王のふしぎのくに、イーフリープなので、そんなにかんたんに、いくのでしょうか……？

「あはは、笑っちゃうね。」ライアンが、思わず笑っていました。「これが、さいごのしれん？ これこそ、子どもだましじやない。」

ライアンはそういって、つくえの上から紙をいちまい、ぱつとつかみます。

「こんなの、さつさとやつちやおうよ。ひとりずつらしいから、ぼくがいちばんにいくよ。」

「ふんふん。」と胸を張って、ライアンがまつさきにとびらにむかいました（やつぱり。

ライアンがいちばんにいくと思いました。

「ほ、ほんとにだいじょうぶ？」ロビーが心配してたずねます。

「なにが出るか？ わからないんだぞ。ここは、みんなदैいった方がいい。」マリエルがれいせいにぶんせきして、いいました。

「だーいじょうぶ、だいじょうぶ！ ぼくをだれだと思ってるの？ 二十びょうでもどつてくるよ。」

そういつてライアンは、さつさととびらをあけて中にはいつていつてしまいました（どきようがいいというか、なんとというか……）。とびらがばたん！ といきおいよくしまります（これは自動的にしまるしかけのようでした）。

そしてそれから、すこしたって……。

「みぎやー！」

とつぜん！ とびらの中からライアンのひめいが！ しかも、今までにきいたこともないようなひめいです！（みぎやー！ なんて、ふつうのライアンがいうはずもありません！）

「どうしたー！」

みんながとびらにかけよります！　ですが……。
とびらがひらきません！

「おいっ！　どうなってるんだ！」　リズがとびらをばんばんたたいて、ののしりました。

「ぼくの魔法が使えれば！　こんなとびらなんか、かんたんにあけられるのに！」　マリエルがこぶしをにぎりしめて、くやしそうにいました。

「ライアーン！」　ロビーはなんども、ライアンの名まえをよびつづけます。

そしてなすすべもないまま、それからしばらく時間がすぎて……。

ぎいい……、とびらがひらきました！　そして中から……、よろよろになったライアーンが出てきたのです！

よかった！　どうやら、けがはしていないようです。しかしかなり、すいじやくした感じでした。いったい、なにがあつたのでしょうか？

「ライアーン！　だいじょうぶ？」　ロビーがかけよって、たおれこむライアンのことを受けとめました。ライアーンは目もうつろで、放心じょうたいです。

「なにがあつたの！」

ロビーのといかけに、ライアンはようやく、小さな声でこたえました。

「あはは……、へいきへいき……。なんでもないよ……」

ライアンはそういつて、にぎりしめていた紙をロビーに見せます。

「ほら、スタンプ、おしたよ……。みんなも早く、中に、はいりなよ。ぜんぜん、たいしたこと、ないから。だいじょうぶ、危険は、ない、よ……」

ライアンはそこまでいうと、目をとじて、がくつと力を失ってしまいました。

「ライアーン！」ロビーがゆさゆさと、ライアンのからだをゆさぶります。ま、まさか！

「いたた……。生きてるってば。」ライアンが目をあけて、いいました（びつくりさせないでよ、もう！）。

「それより、早く、スタンプ、おしてきちやいなよ。これが、しれんみたいだし。みんなおせたら、起こしてよ、ね……」

「寝たな。」

すーすー寝息を立てはじめるライアンのことを見て、リズがいいました。

「いったい、中に、なにがあるってんだ？」

「でも、どうやら、危険なものではないみたいです。」マリエルがこたえます。「こんなに弱りきつているところを見ると、なにか、せいしん的なこうげきを受けたのかもし

れません。それが、きょうふということなのかも。」

「よし、ここは、ぼくがたしかめてきます。」マリエルがそういつて、つくえの上から紙を取りました。

「どうやら、ここには入れるのは、いちどにひとりだけらしい。どのみちみんな、はいるんだつたら、ぼくがさきの中をたしかめてきた方が、こうりつがいいでしょうね。」

マリエルらしいりくつでしたが、ほんとうにだいいじょうぶなんでしょうか？

「ぼくは、自分の感じようをれいせいにぶんせきすることができます。きょうふなんて、ぼくには通じませんよ。だいいじょうぶです。」

マリエルはそういつて、とびらにむかいました（「感じようをれいせいにぶんせき」というわりには、よく怒っているような気が……）。とにかくここは、マリエルにまかせるほかはないようです。

「マリエルくん、気をつけて！」ロビーの言葉に、マリエルはにこやかにうなずいて、とびらの中へとはいっていききました。

そしてそれから、すこしたって……。

「びびりや——」

とつぜん！ とびらの中からマリエルのひめいが！ しかも、今までにきいたことのないようなひめいです！（みぎやー！ なんて、あのマリエルがいうとは信じられませんか！）

「どうした！」

みんながとびらにかけますが、やっぱりとびらは、ぴくりともしませんでした。まったくもって、さつきとおんなじです！

そしてなすすべもないまま、それからしばらく時間がすぎて……。

ぎいい……、とびらがひらきました！ そして中から……、よろよろになったマリエルが出てきたのです！

よかった！ どうやら、けがはしていないようです。しかしかなり、すいじやくした感じでした（まったくもって、ライアンとおんなじでした）。そしてライアンとは、ちがうところが。それはマリエルの服やズボンが、よれよれになつていているところでした。しかも服のボタンが、ところどころ、はずれていたのです（いったいこれは？）。

「マリエルくん！」ロビーがさげびました。ライアンをかかえているので、かわりにリズが、マリエルのもとにかけよります。

「おい、だいじょうぶか？」リズが、たおれこむマリエルのことを受けとめながら、いきました。マリエルは目もうつろで、放心じようたいです（まったくもつて、ライアンとおんなじです）。

「なにがあつた？」

リズのといかけに、マリエルはようやく、小さな声でこたえました。

「ふ、ふふ……、へいきですよー、ぼくは、へいきですよー、なんてことありませーん……」

「ぜんぜんだめじゃんか、おまえ。」リズがいました（リズのいう通り、どうやらだめつぽいですね……）。そしてマリエルのその手には、ライアンと同じように、スタンプのおされた紙がにぎりしめられていたのです。

しかし、あのマリエルまでもが、こんなことになるなんて！

まったくもつて、このきようふの部屋、あなどれません！

でもじゅんちようとはいえませんでした、これでふたりが、このきようふの部屋のしれんをとつぱしたわけです。残りは、リズとロビーのふたり。やつぱりここは、かれらも、このしれんをさけて通るといふわけにはいかないようでした。

「よし、つきは、おれがいつてやる。」リズが「ふん！」と鼻をならして、いいました。「おれは、こいつらのようにはいかないぜ。」

「リズさん、気をつけて！」

ロビーのせりふがはいって、これで三人目。

そしてとびらがばたん！ としまつて、しばらくしたころ……。

「待て！ 待て！ やめろ！ うわああー！」

とびらの中から、リズのさけび声が！ またです！ もう、なにがなんだかわかりません！

そしてまた、しばらくたって……。

ぎいい……、とびらがひらきました！ そしてそこから出てきたのは……、全身ぐつしよりにぬれた、リズのすがただったのです！ ど、どうしたの！

リズは、「ぜい、ぜい……」と息をついて、びちゃっびちゃっど、いっぽいっぽ、こちらへと歩いてきました。そして手にしたスタンプのおされた紙を、ぐしゃ！ つとにぎりしめると……。

「ロビー……、敵は……、手ごわいぞ……」

ばたーん！ そのまま、その場にたおれこんでしまったのです！

「リズさん！」ロビーがいいましたが、リズはすでに、しゃべることすらできないほど

に、ぐったりしてしまっていました（ちなみに、リズのからだをぬらしていたのは、水ではありませんでした。なにか、くだものしるみたいなのです。まったくもって、わけがわかりません）。

リズでも……。これはほんとうに、よそうがいのことです。ですがここで、逃げるわけにはいきません（たおれていった、仲間たちのためにも……、つて、まだ生きてますけど）。ロビーは三人の仲間たちのことを部屋の床にそつと寝かせると、意をけつして、自分もスタンプの紙を持って、きょうふの部屋のとびらのとつてに、手をかけました。

ぎいい……、ばたん！

とびらがまりました。

そこは、うす暗い部屋でした。かなり広いようです。

なにもいません。なんの物音もしません。

目をこらして見てみると、部屋のおくに木のつくえがひとつあって、そこにスタンプ台がひとつ、おかれてあるのがわかりました。あのスタンプをおせば、しれんはおしまいです。ですが……。

そうかんたんにはいかないということは、すでに三人の仲間たちが教えてくれています。身をもって。

おそろおそろ、スタンプに近づきます。

そして、部屋のまん中にさしかかったころ……。

なにかが暗がりの中で動きました！ ロビーがはつと見てみると、そこにさつきまではなかった、おかしなものがあらわれていたのです！

それはみどり色と茶色の、人の背たけほどの、おかしな物体でした。しかも気がつけば、あつちにもこつちにも！ いったいこれは？

ですがそれらのなぞの物体（生きもの？）のしようたいが、なんなのか？ ロビーにはすぐにわかったのです。なぜなら……。

それは、ロビーのいちばんきらいなものだからでした！

ピーマン！ ピーマン！ ピーマン！

たまねぎ！ たまねぎ！ たまねぎ！

そう、それらのみどり色と茶色の物体とは、まさしく、ピーマンとたまねぎのことだったのです！ しかもそれらにはみんな、大きな口と、大きなひとつ目がついていました。

まさに、ピーマンおぼけに、たまねぎおぼけ！ そんなおぼけたちが、あつちにもこつちにも、うじやうじやいたのです！

「ぎぎやー！」

ロビーがさげびました！ ピーマンとたまねぎだけはだめです！ だめなんです！
ロビーは小さいころ、このピーマンとたまねぎのおかげで、死にそうな目にあいましたから！

ウルファであるロビーは、生のやさいが食べられません（食べられないこともありませんが、おなかをこわします）。ですがあるとき、ロビーがローストビーフのサンドイッチだと思つてかぶりついたものが……、生のピーマンと生のたまねぎスライスの、サンドイッチだったのです！ それも、中身山もりの！ のどにつまつて、はき出そうにもはき出せず、生のピーマンとたまねぎの、つんつんとしたにおいが、頭のおくまでしみ渡つて……、そのときにロビーがさげんだ声が、「いぎやー！」もう、じたばたするしかありませんでした。やつとのことでミルクを流しこんでおちついたころには、もう、ぐつたり。それからというものの、ロビーはなにをおいても、ピーマンとたまねぎだけはだめになってしまったのです。

そのときのきょうふが、ロビーにようしやなくおそいかかってきました！ そんなロビーに、おぼけたちがつぎつぎとふりかかってきます。あのつんつんとしたしげきのあ
るおいを、ふりまきながら。これはきつい！

あつというまに、ロビーのからだはピーマンとたまねぎの山の中に飲みこまれていっ
てしまいました（黒いしつぽと耳だけが、その中から飛び出していました）。それでもロ
ビーはさいごの力をふりしぼって、スタンプ台まではっていきます。がんばれ！ ロ
ビー！

ようやくのことでスタンプ台までたどりついたときには、もうロビーの頭の中は、
まっ白でした。そしてロビーは自分でもわけがわからないまま、なにも考えることもで
きずに、手にした紙に（ほんのうのままに）そのスタンプをおしたのです。

ベタンツ！

すると……。

部屋をうめつくしていたピーマンとたまねぎのおぼけたちが、さーっ！ まるで波が
ひくかのように消えていきました！ やった！ そしてあとには、もとのなにもいな
い、なんの物音もしない、広い部屋だけが残ったのです。

ロビーは、きょうふに勝ったのです！ でもロビーの頭の中には、そんなことはまったく、はいってはいきませんでした。なにも考えることもできません。あいかわらず、からだにはピーマンとたまねぎのにおいが、しみこんでおりましたから（おぼけたたちが消えたのに、このにおいだけはそのままでした。いつしよに消えてくれればよかつたのに！）。

ロビーはそのまま、よろける足でなんとかとびらまでたどりつくと、この（いまいましい）きょうふの部屋からぬけ出しました。そして、横たわっている三人の仲間たちとなり、そのまま、ぼったん！ たおれこんでしまったのです。

「もう、だめ……」

四人が目をさましたのは、それからなん時間もたってからのことでした。

24、ほんとうの強さ

美しい朝の光が、この土地のすみずみにまでふりそいでいました。じこくは、羽うさぎのこくげん。朝の六時ころです。夜のあいだにたまったたくさん水のしずくが、みずみずしいみどりの葉の上で、宝石のようにきらめいていました。おだやかな空、小鳥のさえずり。さきほこる花々、みのるくだもの。すべてのものが、この土地のへいわさをよくあらわしていました。

ですがいったいだが、ここにこんな光景があらわれることを、よそくできたでしょうか？ 白く美しいししょうのようなれんができずかれた、かがやけるみやこ。そのみやこにかかる、四つの白いネックレスのような、じょうへき。そのじょうへきのいちばんそとがわ。このみやこに通じる門の、そのさきのみどりの平原に、今まつ黒なおそろしい影たちが、ひしめいていたのです。それは……、そう、おそろしい黒の軍勢、ワツトの者たちでした。

ここは、美しき白のみやこ、シープロンド。

そのかがやけるみやこに、今黒の魔の手がせまろうとしています。

「いつでもよろしいですよ、王さま。」

白いネックレスの、そのいちばんそとがわ。つまりみやこのいちばんそとがわの、そのじょうへきの上。今そこに、ワットの軍勢にむかいあうかたちで、たくさんのシープロンの者たちが集まっていました。王さまに声をかけたのは、りつばなししゅうのされたきぬの衣服に身をつつんだ、ひとりの身分の高そうなシープロンです。それは王さまのそつきんのひとり、われらが仲間、ルースアンのおとうともある、ルーベルアン・トーンへオンでした。

「そうだな。」

こちらはメリアン王。メリアン王は、その手に、しきをとるためのみじかいつえを持っております。りつばなちょうこくのなされた、白い宝石でできたつえです。これは代々シープロンドの王宮に伝わるもので、とくべつな力を持っているとされる、魔法の品物でした（売ったら、たいへんなねだんがつくことでしょう。売りませんけど）。

メリアン王ははるかな平原を見つめたまま、しばらくもの思いにふけていました。が、やがて手にしたつえをぱつと前にふると、そつきんの者たちにいいました。

「よし、使者を送れ。これがさいごのチャンスだと、いってやるといい。たぶん、むだだろうがな。」

「むだでしようがね。」そういってルーベルアンが、衛士たちに（王さまからのつか

のそのメッセージのこともふくめて）あいずを送りました（このあいずは、手ばたしんごうのようなもので、遠くにいる相手にもメッセージを送ることができました）。それと同時にシープロンドの門がひらき、そこから、馬に乗った使者たち（これはフォルテールとホロウノースのふたりがとめました）が飛び出します。そしてワットののがわからは、いぜんにやってきたあの黒い毛がわを着た三人の使者たちが、ふたたびやってきました（話しあい、きたいできそうもありませんね）。

おたがいの使者たちが、顔を見あわせます。フォルテールとホロウノースは、さほうにのつとつて、馬からおりておじぎをしましたが、ワットの使者たちは、ぶれいにも、馬に乗ったまま話しをはじめました。

「話しあいのよちはないはずだ。わへいの道を破ったのは、そちらなのだからな。」ワットの使者たちがいいました。わへいですって？ よくいいます！ こうふくか？ いくさか？ なんて、きめつけておきながら！ フォルテールとホロウノースは、心の中で、んべー！ と舌を出してやりましたが、さすがにこの場は（じつさいにそんなまねをするようなことは）ひかえました。

「われらは、われらの道を歩むのみ。それは、なんら変わりありません。あとは、あなた方の心、ひとつでございます。これがさいごのチャンスだと、心得ていただきますよう。」フォルテールがいました（王さまにいえといわれたつかのメッセージのこと

も、しつかりいいましたね。

これをきいて、ワットの使者たちはあきれたように、手をふつていいました。

「まったく話にならない。それではこれにて、いくさのはじまりとしよう。われら、アルファズレド王あずかり、ロートタリスのマダン・レクグワース隊がお相手つかまつる。そちらの兵力は？」

「われら、メリアン・スタツカート王しき下。シープロン衛士、二百です。いくさのおきてにかたくしたがうことを、おちかいました。ホロウノースがこたえます。」

「心得た。われらもむろん、おきては守らせていただく。よりぬきの兵士、七百五十にてお相手しよう。では！」

そういつてワットの使者たちは、隊の中へともどつていきました。やつぱりさいごの話しいいなどというものは、きたいできませんでした。ですがいぜんにも説明いたしました通り、たとえワットの軍勢といえども、いくさのおきてはきちんと守ってもらえるようです。「三ばいの兵士たちまでしか使えない」というルールがありましたよ。そして「兵力が二百五十人にみたくない場合でも、二百五十人としてあつかわれる」というルールもありました。ですからワットの軍は、こんかい集まった八百五十人ほどの兵士たちのうち、(二百五十人の三ばいの)七百五十人の兵士たちだけが、戦いにさんかするというわけだったので。

ちなみに、ワットの軍勢がやってきたのは、ここから南東に進んだ地にあるちゆうとんちからでした。そこは「西のちゆうとんち」とよばれるロートタリスという場所で、北の地のけいびにあたる兵士たちがいるところだったのです。ベーカーランドにせめこむために、ワットの兵士たちは今そのほとんどが南の地へとうつつていましたから、シープロンドをせめ落とすにあたって、この北の守りのロートタリスの兵士たちが使われたというわけでした。いかなれば、「い残り組」といった感じですね。だからといって、べつに、弱いというわけではありませんでした。

ですがやはり、相手はつねに三ばい（またはそれ以上）の勢力でせめこんでくる、ワットの黒の軍勢。これに対して、シープロンドの衛士たちは、ろくに武器も持つておりません（かぎりのやりは持つていましたが、これでまともに戦うことなんて、はじめからむりでした。すぐにぼつきり、おれてしまいますから）。ワットの軍勢も、そのことはよくわかっていました。ですがかれらは、いっさいようしやなどしません。相手がどんなに弱くても、つねに全力でむかってくるのです。メリアン王をはじめ、シープロンの者たちも、そんなことは百もしようちのはずでした。ではいったい、メリアン王やほかのシープロンたちのよゆうは、ほんとうにどこからくるといえるのでしょうか？

ワットの軍勢が動き出しました。そのあちこちで、ぶきみなつのぶえの音色が吹きならされていきます。ワットのもんしようがそめぬかれたまっ黒なはたが、ゆらゆらとゆ

れていました。黒の軍勢の足音、よろいのなる音、たてがこすれる音、剣がゆれる音……。それらはまったくもって、この美しい空の下にはふっとりあいな、悪夢のようなしるものたちでした。

ついに、シープロンドの戦いがはじまったのです。

「やっぱり、むだでしたね。」せまりくる軍勢のことを見つめて、ルーベルアンがメリアン王にいいました。

「むだだったな。」メリアン王が「ふう。」と息をついて、それにこたえました。「さいごのチャンスだと、いつてあげたのに。」

「しかたない。では、せいなる山のお力を、おかりするでしょう。」

メリアン王はそういつて、手にした白いつえをさつとふり上げました。そしてそれをあいに、白いじょうへきの上にいる衛士たちが、つぎつぎと、なにかのはこをそうさしはじめたのです。それらはこは、じょうへきの上につくられたまるいやねのついたいくつかの小さな塔の下の、白い石の台の上に、それぞれひとつずつ乗せられています。はこの大きさは、はばが二フィートほどで、高さは一フィートほど。すみきつたとうめいなすいしようにつくられた、美しいはこでした。

これはいつたい、なにをするものなのでしょうか？ 衛士たちが、そのはこの上にえがかれたたくさんのものように手をかざしたり、なにかのスイツチのようなものをおしたりしていきます。そしてさいごに、はこのまん中にはめこまれていた、とうめいなドームに手をかざすと……。

ぶいいいいーん！ ばああああつ！

はこが、にぶい音を立てて動き出しました！ そしてそれと同時に、とうめいなドームが青くまぶしい光を放ちはじめたのです！

同じことが、あつちでもこつちでも起こっているようでした。それらのほこは、四つあるネットワークスのじょうへきの、そのそれぞれに、なんこかずつおかれていたのです。

はこから出る青い光が、あつというまに、白いじょうへき全体をつつみこんでいきました！ そしてそのちよくご。おどろくべきことが起こったのです。

じょうへきをつつみこんでいたその青い光が、しゅごごごごー！ うずをまくような大きな音とともに、じょうへきのちゅうおうへとどンドン集まっていきました！ そし

て、その光の中から飛び出したのは……。

「ぐがああああー！」

で、出たー！ まっ青なからだを持った、巨大なりゆうです！ それは、水の精霊の力を持った強力なりゆう、ウォーター・エレメンタルドラゴンというりゆうでした。どっひゃー！ こんなものが飛び出てくるなんて！

そして白いネックレスのじょうへきは、四つ。つまり……。

「ぐがああああー！」 「ぐるぐるぐるー！」 「がががるるるー！」

そういうことです！ 四つのじょうへきそれぞれから、エレメンタルドラゴン！ つまり全部で四体の巨大なりゆうたちが、飛び出てきたというわけでした！（このじょうへきにつくられたたくさんのすいしょうのはこは、それぞれが精霊たちにちよつとしたあいずを送るための、そうちでした。そのあいずにこたえて、強力な精霊たちが飛び出し、このくにを守るのです。いうなれば、この白いネックレスのじょうへきは、「敵をけちらすこうげききのうつき」の、精霊のバリアー。シープロンドはこんなに強力な四

重にも渡る精霊のバリアーによって、かたく守られていたというわけでした！ これになつとく。これではだれも、かなわないはずです！)

「え……？ ええっ？ えええーっ！」

おどろいたのは、ワットの兵士たち！ おどろいたなんてものじゃありません。それもそのはずですよ。シープロンドは軍を持たない、おとなしくに。ワットの兵士たちはこんな戦いなんて、ほとんど「かたちだけ」みたいなものだと思っていたのです。たくさんの兵士たちで、ちよつとおどかしてやれば、すぐに音を上げてこうさんしてくるだろうと。それがどうでしょう。いきなり巨大なエレメンタルドラゴンが、四体！うなりを上げて、こちらへとむかってきましたから！

「ぎゃああー！」「うわああー！」「やばい！ やばい！ ひええー！」

ワットの兵士たちはもう、大こんらん！ あつちへこつちへ逃げまどいます！ ですけど、むかつてくるりゆうたちは、ようしやしません。

「いっ！ おおおー！」

りゆうの口から、水のほのおが飛び出します！（ふつうりゆうというものは、その口からほのおの息を吹き出すことでゆうめいですが、このウォーター・エレメンタルドラゴンは水の精霊のりゆうでしたから、水でできたきりのような息を吹き出しました。ですからまさに、水のほのおといった表げんが、ぴったりだったのです。）そしてその水のほのおは、逃げまどうワットの兵士たちを、いちもうだじん！　ざざざあー！　みんなまとめて、あらい流してしまいました！

ざざざあー！　ずざざざー！　ばっ、しゃあーん！

あたりはもう、水びたし！　かわいそうなワットの兵士たちは、剣もたてもかぶとも、みんな流されて、まさにぬれねずみです！（中にはよろいまで流されて、シャツだけになってしまった兵士までいました。こうなったらもう、兵士だかなんだかもわかりませんね。）

そして、つぎのこうげきが！

とつぜん、水びたしの地面が、ぐぐぐぐ！　と持ち上がって……。

アッパー・パンチ！　どつごくん！

「ぎやあああー!」

地面の下から巨大なげんこつが飛び出して、ぬれねずみになったワットの兵士たちを、ようしやなく下からパンチしました! こ、これはきつい!

かわいそうなワットの兵士たちは、二十フィートほど飛ばされて、地面にできた水たまりの中に、ばつしやーん! 水びたしのうえに、どろまみれ! もう、ふんだりけつたります!

これは土の精霊でした。いっばんにはノームとよばれることもあります、ここで出てきたのは、そのこぶしだけ(それも、とく大きゆうの!)。ノームとはほんとうは、小さな人のすがたをしているのです。でも人のかたちでなくても、そのこぶしだけでじゅうぶんでした。なにしろそこらじゅうから、この(とく大きゆうの)土のこぶしが飛び出してきましたから!

パンチ! ノーム・パンチ! フック! ジャブ! ブロー!

ワットの兵士たちは両手を上げて逃げまどい、たたかれ、飛ばされ、ころんで、ばつちやーん! つぎつぎに水たまりの中へとたおれこんでいきます。もう、黒いよろい

着ていなくても、どろでまっ黒!

なんとおそろしい。メリアン王やそっきんの者たちが、ワットの軍勢の武力に対してもへいぜんとしていたわけが、これではつきりわかりましたね。「わがくには、神さまによつて守られております。」これは第六章の、ロビーたちの出発についてのかいぎの場で、ルエルしきようさまがいつていた言葉です。その言葉の意味も、これではつきりとわかりました。シープロンドは、神さま、精霊の力によつて、かたく守られていたのです。どんなに強い軍隊だつて、シープロンドにはかなわないのです。ワットの兵士たちはこんなかいの戦いで、そのことをいやというほど思い知らされました(そのかいぎの場面で、ワットの兵士たちにきいた話をわたしからみなさんにお伝えしたことがあります)が、そのとき兵士たちは、こういつていましたよね。「シープロンド? やめてくれ! もう、あそこだけは、こりこりだ!」あの言葉はつまり、こういうわけからだつたのです。かれらもまた、りゆうの息に流されて、土のこぶしにパンチされまくつた者たちでしたから……。

ところで……、精霊のりゆうやこぶしがあばれまくっているわけですが、これって「戦いのための魔法を使つてはならない」といういくさのおきてに、いはんしてるんじゃないの? と思われた方もいるかもしれませんね。精霊の力と魔法は、にたようなものですから。ですがこれは、いはんとはなりません。戦いの魔法とは、あくまでも、み

ずからが魔法の力を生み出して、その魔法の力で相手をこうげきするというもの。シープロンたちは、魔法で精霊たちを生み出したというわけではありません。シープロンたちは、精霊たちにちよつと、あいずを送っただけなのです。そして精霊たちは、みずからの意志でかつてにあらわれて、そして魔法の力ではない、みずからの持つほんらいの力によって、かつてに相手をこうげきしているだけでした。ですから精霊たちが、こうげきの魔法を使っているというわけでもありません。魔法ではなく、自分のうりよくで、相手をこうげきしているだけなのですから。

ちなみに、「そこからの勢力がいくさに加わった場合、その勢力はこんご、そのくにのしよぞくとしてあつかわれる」というルールがありました。精霊たちはこのルールにすら、あてはまりませんでした。勢力というのは、兵としてのかたちとして、はつきりとしてとどまることのできる者たちのことをいいました。ですがかれら精霊たちは、ぜんぜん、はつきりとした兵のかたちなどといったものに、とどまることできません（すぐどこかへ、ふいっと消えてしまいますから）。ですからこの精霊たちは、こんごも、シープロンドのしよぞくとしてあつかわれることにはないのです（あの巨大なウオーター・エレメンタルドラゴンでさえも！）。シープロンたちは、こういったことをすべてしようちのうえで、精霊たちにあいずを送りました。うくん、さすがは、したたかなシープロンたちですね。悪ぢえ（？）にかけては、ワット以上かもしれません……）。

「ええい！ なにをしているのだ！ こらー！ 逃げるな！ 戦わんか、ばかもの！」
兵士たちの隊のうしろで、ひとりの大きな男せいがさげんでいました。この人物はこの軍勢をしきしているしきかん、マダン・レクグワースという人物でした。ティガニアという、とてもめずらしい種族の人物で、トラの種族の者なのです（ティガニアはこのアークランドには、数えるほどしかおりません。西の大陸ガランタの、そのまたいちばん西のはしに住んでいる種族でしたから。なんでこんなところまでやってきたのかは、わかりませんが）。

「むりです！ りゆうが！ うわあー！」

ざぎざぎー！ しきかんにどなられた兵士のうちのひとりが、また水のほのおに流されていってしまいました。ほかの兵士たちもつぎつぎと、ノームパンチでぶつ飛ばされていきます。

「おのれー、シープロンどもめ！ こしやくなまねを！」マダンは両のこぶしをにぎって、ぎりぎりど歯をくいしばりました（どうやら、かなり怒りっぽい人のようですね。自分のじょうしじやなくてよかった）。

「いったん、しゃていがいにひけ！ こうなれば、あの切りふだを出す！ 使うまでもないと思っていましたが、やむを得ん！ やつらを前に出すのだ！」

マダンがさげびました。そしてその言葉にあわせて、隊のうしろから、まっ黒な四頭

の馬たちがあらわれたのです（しゃていがいにひけというのは、精霊のりゆうと土のこぶしの手のとどかないところまで、下がれという意味なのです。この精霊たちは、じつはみずからの力のみなもとであるネックレスのじょうへきから、遠くはなれることができますでした。じょうへきにかこまれたシープロンドのみやこの中ならば、自由にいきますることができましたが、こんかいのように、じょうへきのそとにいる敵に対しては、いちばん遠くても百ヤードほどまでしか、手を出すことができなかつたのです。それに気づいていたマダンが、ここで精霊たちにじやまされないうしろまで、下がれとめいれいたわけでした。おそろしい悪だくみをこれからおこなう、そのために……）。

レシリア！ ルースアン！
ハミール！ キエリフ！

ああ、なんてこと！ おそれていたことが、ついに！ ついにかれらが、その身をワツトにりようされてしまうときがやってきたのです！

シープロンドを、おそろしいわなにはめるために……。

ワットがかくし持っていた、切りふだ。それが、かれら四人のほりよたちでした。ワットはこのほりよたちを、いちばんりえきが生み出せるときに、いちばんひきような方法で使おうと考えていたのです。それが、今でした。

「あの者たちの身は、シープロンドを落とすさいに、りようできましょう。」これはリュインとりでワットの黒騎士たちが、とらわれのリストールの前で、しきかんのガランドーにいった言葉でした。あの者たちというのは、もちろん、とらわれのレシリアたち、四人の仲間たちのことにほかならなかったのです。

「シープロンドなぞ、かんたんに落とすことができるでしょうが、そなえに越したことはありません。万いちのことがあれば、やつらの身をれんちゆうにつきつけて、やみの力にでもそめてやりましょう。助けてほしくばこうふくせよと、シープロンドにせまることができます。いかにくせものメリアン王とて、こんどばかりは、ようきゆうをのむでしょうな。」

なんとというひどいことを考えつくのでしょうか！　そしてこれこそが、ワットの者たちの考えた、おそろしいわなでした。

レドンホールの黒ウルフアたちのことをおそった、おそろしいやみの力。こんどはレシリアたち、とらわれの者たちのことをも、同じ目にあわせようというのです。自分た

ちのだいじな仲間たちが、目の前でそんな目にあわされようとしていたのなら……、いくらかたいかくごの心を持ったシープロンたちであっても、ワットのようきゆうに、くつしないわけにはいかないでしょう（もし、ようきゆうに応じなければ、ワットはほりよたちのことを、ほんとうにやみに落としこんでしまおうでしょう。そして……、やみに落としこまれた者は、自身のその身に、たいへんなふたんを与えられることになるのです。こううんにも、レドンホールの黒ウルファたち、そしてベゼロインの戦いでたおれた者たちにおいては、まだそのやみの力にたえることができていましたが、ここで新たにやみに落としこまれた者たちが、そのやみの力にいつまでもたえられるというほしようも、どこにもありませんでした。それこそ運が悪ければ、その場でそのいのちまでをも、ただちに落としてしまいかねないのです！（そしてこのやみの力を取りのぞくための方法は、ざんねんながら、光の魔法をあやつるわれらが白き者たちには、見つけることができいませんでした。）

メリアン王をはじめ、シープロンドの者たちは、かたいかくごの心を持っています。ひとときの心のまよいのために、くにを危機にさらすようなことは、してはならないとこころえていたのです。しかし、いくらそれがくのためであったとしても……、目の前の仲間たちのことを、みずからの手で、みすみすそんな目にあわせてしまうようなことは、メリアン王にもとてもできることではありませんでした。このおそろしいわなの

ことをきかされたリストールの気持ちは、どれほどのものだったのでしょうか。ですからリストールは、その前に、かれらのことをなんとしても助けたいと思つたのです。

もし、万がいちシープロンドが勝ちそうなことになつたとしても、このほりよたちさえいれば、やつらも手が出せなくなる。四人のほりよたちは、いわば戦いに勝つための、ほけんでした（とところで、いぜんにもすこし説明しましたが、ここでやつぱり、このほりよというもののあつかいについて、もうすこしくわしく説明しておかなければなりません（ぜんぜん、おもしろくもないじょうほうですが）。

いくさで勝ちをおさめたくには、相手のくにの兵士たちの中から、ひとつのくにであわせて千人までを、いくさでのほりよとして自分のくににつれていくことができました。そしてこれも、いぜんにお伝えしたことがありましたが、ほりよをつれていくことは、いくさに勝つたくにのけんりとしてはみとめられていることでしたが、じつさいにほりよたちをつれていくようなまねをすることは、このアークランドではひとつのくにをのぞいて、ほとんどありませんでした。

そのくには？　そう、ワットです。ワットは戦いで得たほりよたちを、自分たちのくにのろうどう力として使い、くにのはつてんのためにりようしていました。

ほりよたちは、いご、法の名のもとにワットのくにのざいさんとしてあつかわれ、このごのいくさにワットがやぶれでもしないかぎり、ずっと敵の手の中ではたらかされた

り、ときにはいくさの手助けをさせられたりしてしまうことになるのです。

（ちなみに、ほりよを取ることには例外がひとつありました。「本軍をしきするしきか
んは、ほりよにすることができない」というきまりがあったのです。本軍とは、くにの
いちばん大きな部隊のこと。ペーカーランドでいえば、エリル・シヤンティーンの兵士
たちと白の騎兵師団のことをしきする、ベルグエルム、フェリアル、ライラの三人が、本
軍のしきかんにあたりました。ですからベゼロインが落ちたとき、かれらはほりよにな
ることはなく、ペーカーランドへともどされたのです（このルールは、たとえ本軍をひ
きいた戦いでなくても、本軍のしきかんであれば、てきようされました。ちなみに、リュ
インのしきかんであるリストールの場合は、本軍のしきかんでありませんでしたか
ら、このルールにはあてはまりませんでした。ですからワットは、リストールの身をよ
うしやなく、とらえたのです）。

しきかんでない兵士たちなら、ほりよに取ることはできません。ですがベゼロインで
戦った兵士たちは、そのほとんどが、やみのつるぎの力のぎせいになりました。です
からワットは、かれらをほりよに取らなかつたのです。取ろうと思えばほりよに取るこ
もできましたが、あえてワットは取りませんでした。あつとう的なまでにたたきのめさ
れた兵士たちを敵のもとへ送りかえすことによって、力の差を見せつけ、きようふさせ
ることが、そのねらいでした。）

レドンホールの場合は、黒ウルファの兵士たち八百人ほどが、すべてほりよとしてワットにつれていかれました。そこでかれらは、アーザスのおそろしいたくらみにより、やみの力をおびたやみの兵士として使われることになってしまったのです……。これは、「ちよつとやみの力こめちやうから、あとは、おもしろおかしく使つてよ。」という、アーザスのなんともひどすぎる気まぐれによるものでした。まったくアーザスには、人の心などというものは無いのです！

ですがそれでも、ほりよたちのあつかいについてさだめられた取りきめのことを、ワットは「破つてはいない」といいました。その取りきめとは、「ほりよたちの身をいたずらにきずつけることは、かたくきんずる」というものでした。やみの力にそめることは、べつにほりよたちのことをきずつけているわけでもないし、けがもさせていないというのが、ワットのいいぶんです。こんないいぶんは、まったくなつとくができませんが、それでもワットは、やはりこのいいぶんを通してしまっていました。

そしてワットの、そのいちばんひきょうなところ。それはこのほりよたちのことを、いくさの勝ち負けのためにりようしているというところでした。大きないくさでは取りきめとしておこなうことができませんでしたが、両軍あわせて千人以下とさだめられている小さないくさの場合では、じょうけんをしめすことによる、こうふくかんこくというものが、しばしばおこなわれます。これは、なにかをしてやるかわりに相手にこう

ふくをせまるというもので、ほんらいならば、おたがいのりえきになることをおたがいに考えて、いくさをするまでもなく、あらそいをかいけつするというもくてきのためのものですが、ひきようなワットは、「ほりよたちの身のあつかいをよくしてほしいのならば、いうことをきけ」ということを、そのこうふくのためのじょうけんとして使つてしまっていました。

たしかに、じょうけんの内ようのことはおたがいで話しあつてきめることでしたから、正式な取りきめとしてはさだめられていません。ですがこんなじょうけんは、まったくもつて相手の弱みにつけこむものであり、ひきようそのものです！　そしてそのひきようそのもののやり方を、ワットはこんなかいの戦いでもまた、おこなおうとしていました。

もつともワットの場合は、あつとう的なまでの兵力の差を相手に見せつけるというやり方を好みましたから、じょうけんをしめしてこうふくをせまるのは、とくべつな場合にかぎられていました。「兵士たちをそろえるのがめんどう」だとか、「武力よりもせいしん的に相手を痛めつけてやった方が、こうか的」だとか、そんな場合です。

こんなかいの場合では、武力でかなわなかつたので、やむを得ず、ということになるわけですが、それでもワットが、いぜんゆうりなじょうけんの上に立っているということに、変わりはありません。ワットはそのゆうりなじょうけんをさいだいげんにいかし

て、今までのやりくちよりもはるかにひきような方法でもって、シープロンドにこうふくをせまろうとしていました。とらわれの者たちのことを、悪しきやみにそめてしまおうというのです！

こんなことは、ぜったいにやめさせなければ！ でも、いったいどうすれば……？
やはりこのまま、おとなしくワットにこうふくするいがい、ないのでしようか？。

「ほりよたちを進ませろ！」 マダンが兵士たちにめいれいしました。

きたない！　なんてきたない！

四人の仲間たちはそれぞれ一頭ずつの馬に乗せられていました。しかも、両手をうしろ手にしばられて！　かれらの両わきには同じく黒い馬に乗った、黒いほのおを上げたおそろしい剣を持った騎士たちがふたり、ぴったりついて、その剣のさきをとらわれの者たちの方にむけていました。この剣こそが、アーザスのそのおそろしいやみの力のこめられた剣だったのです（ベゼロインの戦いで黒ウルフアたちの持っていた剣よりも、はるかにおそろしい感じでした。これは、やみの力がそれだけ大きいからなのです）。この剣で切られた者は、黒ウルフアの仲間たちやベゼロインの戦いでたおれた仲間たち

のように、やみにとらわれてしまいました。ひきようなワットは、そのなんともおそろしい光景のことを、シープロンの者たちの目の前につきつけてやろうというのです。

これを見ろ！ ははは、どうだ！ これで、手も足も出まい！ こいつらは、アルファズレドへいかじきじきのごめいれいにより、とらえられた者たちだ。おまえたちも、よく知っていることだろう。このふとどき者たちのしよばつのことについては、へいかはわれらに、いちにんされた。どうしようと、それは、われらの自由だ。やみの力にそめてやろうともな。だが、おまえたちがおとなしくこうふくするというのはなら、考えてやっつてやらんでもないぞ。われらにも、なさけはある。さあ、どうする！

というのが、マダンのせりふ……、のはずでしたが……。

「ほりよというのは、いったい、だれのことかの？」

とつぜん、うしろから声がしました！

「え？ あ、あれ？」マダンがそういつて、ほりよたちの方を見てみると……。

そこには馬しかいません。

だれも乗っていないのです！
そんなばかな！ さつきまで、そこにいたのに！ わけもわからず、マダンがうしろ

をふりむくと……。

「うわあああー!」「ば、ばけもの!」

口ぐちに上がる、部下たちのさげび声! そこには身長三十フィートはあろうかというほどの、おそろしい巨大な岩の兵士たちが、立ちはだかつていました! それも、な
ん体も!

「な、なんだあー!」マダンがどぎもをぬかれてさげびました。

こ、この兵士たちは! みなさんには、もういうまでもありませんよね。

岩のけんじやリブレストの、岩の兵士……、いえ、ロボットたち! かれらがついに、このシープロンドまでたどりついたのです! やったー! (それにしても……、まさにぎりぎり! あやういところでした! リブレストさんは「すぐに追いついてみせるわ!」みたいなことをいっておりましたが、じっさいには道の悪いところなどもあつて、けつこう時間をくつてしまったのです。それでも、とんでもなく早くこのシープロンドまでたどりついたことには、まちがいありませんでしたが。なにしろ、馬で二日はかかる道のりを、六時間半でやってきましたから! はやい!)

岩のロボットたちは、みな大きな岩の剣をかまえております。戦いのじゅんびは、ぼんたんのようでした。そして、そのいちばん前に立ちふさがっているロボットの、その肩の上には……。

レシリア！ ルースアン！

ハミール！ キエリフ！

ロープをとかれ、自由の身になった四人の仲間たちが、まさにけいせいぎやくてん！ マダンのことを、ぎろり！ にらみつけていたのです！

いうまでもなく、かれらは馬の背から、(リブレストのあやつる岩のロボットのゆびにちよこんとつまみ上げられて)ロボットのその肩の上まではこぼれました(ついでに、かれらのわきにいた騎士たちは、ロボットのゆびにぺちん！ とはじかれて、ノックアウト！ 二本のやみの力の剣も、ともにぼつきりおれてしまいました。やったー！)。そしてリブレストのいった通り、もうかれらは、ほりよなんかじやありません。今ふたたびこのしゅんかんから、ワットの悪に立ちむかう、自由のヒーロー、ヒロインとなったのです！

「ヒーローの、がきんちよども。すこーしばかり、いたずらがすぎたようだのお。」

もう勝負は、これでほとんどついていました。切りふだのほりよたちまで取りかえされて、ワットの軍勢は、もはや、ちりぢりのばらばら。兵士たちもみんな、戦意そうしつです。残るは岩のロボット兵士たちの前にいる、ごくわずかな兵士たちのみ。しきかんのマダン・レクグワースと、そのおともの十数人の兵士たちだけでした（ちなみに、ただほかの兵士さんたちは逃げまどつているだけでしたので、けがをして戦えないじょうたいになつていっているというわけではありません。ですからまだワットは、「戦えない者が多数となったとき、そのいくさは負けとなる」といういくさの勝ち負けのじょうけんを、みたくしていませんでした。じつさいにこのいくさの場から遠くへ逃げてしまえば、その者はもう戦えない者としてあつかわれましたが、まだかろうじて、かれらはこの場に見とどまつていましたから。でもかれらが遠くへ逃げ出すのは、もう時間の問題みたくですけどね。

ところで、リブレストの岩のロボット兵士たちについてですが、このロボットは中に人がはいつて動かしておりましたので、魔法で動いているというわけではないのです（いつてみれば、からくり人形みたいなものです。もつとも、中に人がはいつていない場合や、ここにくるまでの自動そうじゅうのときなどでは、しっかりとリブレストさんの魔法の力が使われていました）。ですからこれは、こうげきの魔法を使つてはならな

いという、いくさのルールいはんとはなりませんでした。

では、さきほど雨あられのようにぶっぱなした、ほのおの矢については？　じつはそれは、リブレストさんの作った「工作物」なのであって、魔法の力が使われているというわけではなかったのです！（いつてみれば、花火みたいなものです。その花火みたいな力が、剣のさきから出るように作られていました。よくできた「工作物」ですね！）ですからみんなもえんりよなく、この工作物の力をぶっぱなしたというわけでした。うーん、なんか、すごい！）。

「ぐむむむむむ……！」

マダンは歯をぎりぎりとかいしばって、くやしがりました。目の前には、巨大な岩のロボットたちがずらり。うしろには四体のエレメンタルドラゴンたちと、たくさんの土のこぶしたちが、よらばうたんと待ちかまえております（しかも土のこぶしたちは、人さしゆびをいっぼん、ちよいちよいと動かして、「カモーン！」といったふうはこちらのことをちようはつしていました）。どう見ても、自分たちの負けでした。ですが、このマダン・レクグワースという男、根っからの負けずぎらい。そしてあきらめの悪さにかけては、人いちばいだったのです。

「おのれ！　このマダンを、見くびるなよ！」

マダンはそういって、腰にさしていた二本の剣……、ではありません、おのを、しゃ

きん！ 両手にかまえました！ このティガニア種族のしきかんは、種族だけではなく、その戦い方までなんともめずらしいものだったのです。両手に、おの。二刀流ならぬ、二おの流？ まあ、よび名はいいとして、とにかくその大きなからだとあいまって、すごいはくりよくでした。

でも……、やつぱり相手が、悪すぎですよ。いくらティガニアがはくりよくたつぷりでも、相手はさらにはくりよくたつぷりの、岩のロボット兵士たちでしたから。背たけが五ばいほどもちがうのです。

それでも、マダンの気あいはじゆうぶんでした。全身から、オーラのような力があふれかえっております！ そしてマダンは、両手に持ったおのをぎゅぎゅっ！ とにぎりしめると、すさまじいはやさで、リブレストの乗る岩のロボットにむかってとっしんしていきましました！ すごい！

「受けてみよ！ デュアルアクス・デストロイヤー！」

「おい、おまえたち。おまえたちもいっしょに、吹っ飛ばされてみるかの？」
リブレストが、その場にいる兵士たちにいいました。それからしばらくして……。

ひゆううう……、ばっしやくん！

巨大なロボット兵士のこぶしに吹っ飛ばされたマダンが、どろの水たまりの中に落っこちた音でした……。ああ、だから、いわんこつちやない……。かわいそうなマダン・レクグワースは、「うくん……」口からあわを吹いて、そのままどろの中で、おねんねです。

「ひえええ〜！」「た、助けてくれ〜！」「こんなところにいられるか〜！」

これで、ほんとうにきまり。しきかんのマダンまで失ったワツトの軍は、そうくずれ。剣もやりもみんな放り出して、いのちからがら、どろだらけのぬかるみ道を走ったりころんだり、逃げ帰っていききました（ちなみに、マダンは六人の兵士たちにかつぎ上げられて、はこばれていきました）。

やったね、やった！ シープロンドの大しよりりです！ じょうへきの上から戦いのようすを見守っていたシープロンの衛士たちは、やりをかかげて大よろこび！ 口ぐちに精霊の力をたたえ、メリアン王をたたえ、そしてこのすばらしきくに、シープロンド

のことをたたえました（あの巨大な岩の兵士たちは、いったいなに？　とも思っていましたか）。

「メリアン王、ばんざーい！」

「シープロンドに、えいこう！」

「やーいやーい！　おとといきやがれ！　ざまーみろー！」

さいごだけちよつと、品がありませんでしたが……。

「兄さんー！」

リブレストの乗る隊長きのロボットのの中から、小さな見ならい兵士、レイミールが飛び出しました（さきほどはみごとなロボットさばきで、ワットの兵士たちのことをやっつけましたよね。もう、いちにんまえとっていいほどの、すばらしいはたらきぶりでした）。そのあまりにもとつぜんのできごとには、ハミールはもう、びつくり！　さつきからびつくりすることばかりで、もうなれっこになつてしまひそうでしたが、これにはほんとうにびつくりでした。リュインのとりで、その身のゆくえすらわからなくなつてしまつていた、おとうとのレイミール。その小さなレイミールが、とつぜんにあらわれた岩のロボット兵士軍団の中から、またもとつぜんにあらわれましたから！

「レイミール！ おお……！」

ハミールの胸の中は、もうありとあらゆる感じようでいっぱいでした。新たに生まれた、たくさんのおどろき。いぜんからあった、不安やおそれ。ずつとずつと胸の中をうめつくしていた、レイミールへの思い……。それらがすべてごちやませになつて、この若きウルファの騎士の心の中を、うめつくしてしまつたのです。

ですが今、それらの思いの中から残すべきものは、ただひとつ。ハミールはすぐに、自分の心の中のとよけいな部分をみなくしゃくしゃにまとめて、ぽい！ ごみばこにたたきこむと、いちばんだいじな思いだけをひとつ、ここにさらけ出しました。それは、そう、レイミールへの深い思いでした。

「レイミール！ 心配したぞ！ ぶじだったか！ よかった！ ほんとうによかった！ どれほどおまえのことを、心配したか！」

ハミールは岩のロボット兵士のその広く大きい肩の上で、ついに、おとうとのレイミールとさいかいを果たしたのです。

「ほんとうに……、ほんとうに……、うわああ！」

ハミールはレイミールの名まえをなんどもよんで、なみだを流して、その小さなから

だのことをうでの中にだきしめました。もうにとど、会えないのではないか……？ そんな考えさえ、かれの心の中からまったく消えていたというわけではありませんでした。さいあくのことすら、その頭の中にはよぎってさえいました。

レイミールのことをだきしめる、ハミール・ナシユガー。かれはこのとき、騎士でも、兵士でも、勇者でもありませんでした。ただただ、家族のことを思う、ひとりの人であったのです。

「よがっだなあ……。ほんどうに、よがっだなあ……」キエリフが、そんな友のすがたを見て、となりのルースアンとだきあいながらよろこびをあらわにしていました。

「レシリア、ルースアン、よくぞもどった。くろうをかけてしまったな。ハミールども、キエリフどものも、ぶじでなによりだ。」

すべてをさっしたメリアン王が、仲間たちの手を取って、心よりの言葉をおくりました。

「たいへんなにんむの旅に送り出してしまったことを、申しわけなく思う。どうか、ゆるしてほしい。」

かれらを危険なおとりとしての道に送り出したのは、ほかでもない、メリアン王でした。ですからメリアン王は、大きなせきにんを感じるのと同時に、かれらの身のことを、

たいへんに心配していたのです（かれらをおとりの旅に送り出すことは、メリアン王にとつても、もちろんとてもつらいせんたくでした）。

ふたたびもどつてきた、かれら。たいへんな目にあい、こんな旅になつてしまつたということは、だれにとつてもあきらかでした。ほんらいならば、かれらはおとりとしてのつとめを果たしたあと、自分たちもベーカーランドで、ふたたびロビーたちと落ちあうよていだったのです。それがこうして、このシープロンドまで、とらわれの者としてのかたちでもどつてきましたから。

そのりゆうは、メリアン王にはおおむねわかつていました。そして今、そのりゆうのもとなつた人物がひとり、かれらといっしょに目の前にやつてきていたのです。

「リステロント、いや、今は、リストールという名であつたな。」メリアン王がいいました。そう、レシリアたち、自由の身となつたわれらが仲間たちは、かれらが助け出すはずだったリュインのしきかん、リストール・グラントとともにやつてきていたのです。

「リュインのことは、痛ましいことであつた。ざんねんでならない。」メリアン王が、しずんだ顔をしていました。「だが、そなたも、リュインの者たちも、こうしてぶじに、わたしの前にいる。それだけは、まことによるこばしいかぎりだ。よくぞ、ぶじにまいられた。そして心より、そなたたちにかんしゃの気持ちをおくりたい。」

そしてメリアン王はそこまでいうと、急にかれらのうしろにしせんをやつて、その場

で深く頭を下げたのです。そこには……。

「ご、ごごいーん！　ぎゅ、ぎゅいーん！」

たくさん、岩のロボット兵士たち！　そしてそのロボット兵士たちの前には、そう、アーケランドの名高い三けんじやたちのうちのひとり、岩のリブレストが立っていました。

「けんじやリブレストどの。お会いできてこうえいにございます。」メリアン王がうやうやしく、リブレストにいいました。相手はとてつもない力を持ったけんじやのひとり。このアーケランドでも、もつともそんなけいすべき相手なのです。ですが……。

「よいよい！　かたくるしいあいさつは、ぬきだわい。」リブレストは手をぱぱとふつて、メリアン王に頭を上げさせました。

「おまえさんは、メリアンだな？　王になったんだったのう。あの、ひよっこ王子さまも、りっぱになったもんだわ。」

リブレストはそういつて「がっはっは！」とごうかいに笑い、メリアン王のもとへとつかつかやってきて、王さまの頭をがしがしとなでまわします（まるつきり子どもあつかいです。なん百さいだか？　わからないほどのリブレストから見たら、みんな子どもみたいなものでしたから）。どうやら三十年前の冒険の旅のことを、リブレストもよく知っていたみたいですね。

「この戦いは、さいごのきよくめんをむかえておるぞ。」

笑っていたリブレストが、とつぜんまじめくさった顔になっていいました。その表じようは、かたくこわばり、こわいくらいでした。

「ここにゐる、リストール・グラント。この者が、この戦いにおいての、大きなかぎにぎつておる。おまえさんには、いうまでもないだろうがな。」リブレストが、うしろにひかえるリストールのことをしめしながら、メリアン王にそいいます。

ノランも同じことをいっていました。「さいごの戦いでは、かれのそんぎいが、大きな意味を持つこととなろう。」いったいリストールには、どんなひみつがあるのでしょうか？（そしていぜんにもお伝えしました通り、そのひみつを、メリアン王も知っているようなのです。さあ、早く教えてください、王さま！）

「ことは、いっこくをあらそうでしょう。」メリアン王がいました。「リストール。今こそ、人も、精霊も、植物も、そのかきねを越えて、力をあわせなければならぬときだ。これは、そなたの運命ともいえるであろうな。もういちど、このアーケランドに、花の騎士たちの力をよみがえらせなければならぬ。それができるのは、もはや、そなたしかおらぬ。」

メリアン王の言葉に、リストールはだまつてうなずきます。花の騎士たちとは、いったい？

「わたしはすぐに、タドゥーリ連山へとむかいます。」リストールがいました。「もとより、わたしは、この地をおとずれるつもりでした。このアークランドは、めつぼうのときをむかえております。わたしのつとめは、まさに今。かれらのゆるしをこい、その力をあおぐときです。」

リストールはそういつて、その場にいる者たちにいちれいをする、そのままひとり、歩き出していきました。

かれの運命の場所、タドゥーリ連山へとむかつて……。

「待って！ だれも、いつしよにいかなくていいの？」レイミールが、去っていくリストールのすがたを見ながらいいました。ですがメリアン王もリブレストも、仲間たちも、動こうとはしません。ハミールはレイミールのうでを取り、静かにいいました。

「だれも、かれの助けとなることはできない。われわれではな。ここは、かれの力にかけるしかないのだ。」

ハミールはとらわれの身となっていたあいだに、レシリアからすべてのことをきかされていたのです。リストールのかこ、そして、その運命のことを……。

リストール。リステロント・グランテルド。かれは失われし大なる精霊の種族、シ

ルフィアの青年です（ここまでは、みなさんもよく知っています）。大むかし、このアーランドにもふつうに暮らしていたはずの、シルフィア。かれらがいなくなったりゆうは、いぜんにもお話ししたことがありました。人がふえ、アーランドの力のバランスがくずれたことが、そのいちばんのりゆうでした。

シルフィアをはじめ、たくさんの種族の者たちが消えていった、アーランド……。そして今からおよそ百年のむかし、このアーランドにおいて、もつとも大きな力を持った種族の者たちが、失われていったのです。かれらの名は、ネクタリア。大いなる植物の種族の者たちでした。

ネクタリアはこのアーランドの大地そのものといっているほどの、大きなそんざいでした。人のすがたをしておりましたが、その力は植物の力です。きれいな水と美しい光によって力を生み出し、そのちえとわざは、このアーランドの大いなるいしずえとなっていました（大むかし、さいしよのカピバルたちに数々のわざを伝えたのも、もともとはネクタリアたちだといわれています）。かれらがいなかったのなら、このアーランドもこれほどゆたかではいられなかったことでしょう。ネクタリアたちの力は精霊たちの力と同じくらいに、このアーランドにおいてとても重要なものだったのです。

そのネクタリアの力のけっしょうともいえるべきそんざい、それが「花の騎士団」でし

た。花の騎士団はこの世界のすべての種族の者たちとともに、ささえあい、ともに協力しあつて、このアークランドをはんえいへとみちびいていったのです。

ですがその花の騎士団も、どんどんと力をましていく人間たちのことを、しだいにおさえることができなくなつていきました（ほかの多くの種族の者たちではなく、ここでは人間だけのことをさしています）。多くの森が切りひらかれ、はたけが広がりました。たくさん動物たちがかいならされ、ぼくじようが作られました。これらはすべて、人間であるかれらが生きていくために、必要なものです。ですがネクタリアたちにとつては、とてもがまんにならないことでした。かれらネクタリアたちは、しぜんそのものごとから。しぜんを切りひらき、しぜんに反する生き方しかえらべない人間たちのことを、ぎもんに思うようになつたのです（もちろん、人間いがいのほかの種族の者たちでも、生きるためにはすくなくならず同じようなことはしています。ですが人間は、ほかの種族の者たちとくらべても、しぜんをはいすることのとても多い種族でした。ですからネクタリアたちは、人間たちのことを注意して見るようになったのです）。

そしてついに。

ネクタリアたちは花の騎士団とともに、そのすがたをこのアークランドからかんぜんに消していつてしまいました。

かれらがどこへいったのか？ 知る者はいません。

ただひとりのをのぞいては……。

そう、それがリストールだったのです。じつはリストールはそのむかし、ネクタリアたちの花の騎士団に、騎士として加わっていました！（これはたいへんにめいよなことでした。）

花の騎士団がこのアークランドを去るときめたとき、リストールにはかれらとともにゆく道もえらべました。ですがリストールは、残ったのです。ほんとうにこのアークランドに、みらいがないのかどうか？ 人間たちにのぞみがないのかどうか？ それらを自分の目でたしかめるためでした（それに、今までずっと暮らしてきたくにですもの、リストールにはどうしても、このアークランドを見ずるようなことなどはできませんでした。かれの家族やいもうとのリズだって、ずっと、ひっそりですが、このアークランドで暮らしてきましたから）。

こうしてリストールは、花の騎士団と、そしてネクタリアたちと、たもとを分けました。そしてリストールは、その身を新しい仲間たちのもとにおくことにきめたのです。それが人間たちのみやこ、ベーカーランドの白き者たちのものでした（そしてそのとき、ずっと剣に親しんでいたいもうとのリズが、リストールといっしょについてくることに

なりました。「せっかくだから、この剣のうでまえを、どつかでやくに立てられないかなあ。」というのが、リズのものぞみでした。それからリストールは、兵士たちのしきかんとして、(リズはその剣のうでまえを買われて、剣じゆつしなんやくとして)ベーカーランドでの日々を送ることになったのです。そして今、(リズとリストールの)その運命は動きはじめました。

かつて自分も加わっていた、花の騎士団。このアークランドのことを見かぎり、去つていった、その花の騎士団に、もういちどアークランドの力となつてくれるように、お願いしに行くこと。それこそがリストールにかせられた、リストールにしかできない、大いなるやくわりだったのです(ノランやリブレストのいつていた「リストールの持つ大きな意味」というのは、このことをさしていました)。

そしてリストールがなぜ、今このタイミングでネクタリアたちのところへむかったのか? いぜんにもふれましたそのりゆうのことについて、ここでお伝えしておきましょう。それはリストールが、だれよりもネクタリアたちのことについて、よく知っていたからでした。リストールは、ネクタリアたちへのお願いは、さいごのさいご、このアークランドがめつぼうの危機にある、まさにこのときにおいてしかできないということを知っていたのです。ネクタリアたちは、かつてこのアークランドのことを見かぎり、

去っていききました。そのかれらに、「このアークランドがいつか危機になった場合は、助けてほしい」なんていう、虫のよすぎるお願いを、あらかじめしておくなんてことができるはずもないと、リストールはよく知っていたのです。

ネクタリアたちは、とてもプライドが高く、高貴な者たちでした。そんなかれらに、あらかじめそんなお願いなどをしたとしても、かれらを怒らせることになるだけであると、リストールは知っていたのです。「われらの助けがほしいというのなら、なぜそのときにこないのだ？ これでは、われらの力を、戦いのほけんとしてりようしているようなものではないか。」

ですからリストールは、今このさいごのときにおいて、(リュインのしきかんとして、リュインでのいくさのじゆんびをすっかりととのえ終えたうえで)ネクタリアたちのもとへとむかおうとしていたのです。かれらに通じるものは、ただひとつ。一点のくもりもない、まっすぐな心。心からの敬意。ただそれであるということ、かれは知っていましたから)。

「リステロントは、このアークランドのみらいにかけたのだ。」メリアン王が、去っていくリストールの方を見つめながら、いいました。「花の騎士団に、その思いがとどくことを、願おう。」

花の騎士団が去っていった土地。それこそが、シープロンドの聖地とたたえられてい

る、タドゥーリ連山でした（ですからリストールは、「タドゥーリ連山に行く」といいました）。そのためもあって、リストールはたびたび、このシープロンドの地をおとずれていたのです。そしてそれが、メリアン王たちがリストールのことやその大いなるやくわりのことについて、よく知っていたりゆうでした。リストールはメリアン王をはじめとするシープロンの者たちに、みずからのそのやくわりのことについて、話していたのです。リストールとシープロンたちは、ともに、とても深い友じようをむすんでおりましたから（もちろんペーカーランドの仲間たちとも深い友じようをむすんでおりましたが、このせんさいな問題を伝える相手としては、やはり、精霊のことにもネクタリアたちのことにもくわしい、シープロンの者たちがふさわしかったのです）。

「かれならきつと、うまくやれる……」

遠い山道に消えてゆくリストールのすがたをさいごに見送りながら、レシリアが静かにつぶやきました。それは、このアーランドのすべての人たちにむけての、メッセージのようでもありました。

「さあて！　ぐずぐずなんぞ、しておられんぞ！　取ってかえして、ワットたたきをはじめにやらん！」

リブレストが隊長きのロボットに乗りこみながら、仲間たちにさげびました。たくさ

んの大きなつとめを、果たし終えたかれら（とらわれの者たちのことをすくい出し、シープロンドのことを守り、そしてリストールのこともぶじに送り出したのです）。ですがかれらのしごとは、まだまだ終わってなどはいませんでした。かれらのつぎなる戦いは、これからすぐにはじまるのです（ちなみに、かれらはシープロンドのえん軍としてかけつけたわけですので、かれらはこんご、シープロンドのしよぞくの勢力というあつかいになるのです）。

ですけど、このシープロンドでこんご、いくさがおこなわれることなんて、ありそうにないでしょうけどね。ゆいいつ、このシープロンドをおそうりゆうのあつたワットでさえ、シープロンドのおそろしさは、いやというほど知ったでしょうから……。

それと、とくに説明していませんでしたが、かれらは岩のロボットたちのそうじゅうに必要な三十四名をのぞいては、すべていっばんの兵士として、剣を持つて戦いの場に加わっていたのです（かれらの持つ剣は出発の前にリブレストが岩をけずつて、みんなあつというまに作り上げてくれました。さすが、岩のけんじゃです）。ですけど……、ほかの勢力（精霊たちと岩のロボットたち）が強力すぎて、かれらのかつやくの場面がほとんどありませんでしたね……。ですけどそれは、けつかるんでしょう。かれらはもちろん、シープロンドにこんなに強力なえん軍（精霊たち）がいるとは、思いもよみませんでしたから。シープロンドのこの精霊のバリアーのことについては、ほんとうにシー

プロンドの者たちがいいには、(ベーカーランドの者たちでさえ)だれも知らない、ごくひ中のごくひのことだったのです。

ベーカーランドとワットの、さいごの戦い。その戦いにおいて、今のかれらにできる、いや、かれらにしかできない、とくべつなしごとがありました。それは……。

「ワットのれんちゆうがもどらんうちに、リユインとりでをうばいかえす！ そのまま、ベゼロインまでとつげきじやい！」

「おおお——！」

そうです、かれらにしかできない、とくべつなしごと。それはまさに、ベーカーランドのふたつのとりでを取りもどすという、その大なるつとめでした！（とき、ここにきて。かれらはおそろしいじじつを知ることになりました。それはリストールがタドウーリ連山へと出発する前、ベーカーランドからシープロンドへとどいた、一羽のでんれいのたかがもたらしたものでした。そのじじつとは……、ベゼロインとりでが敵の手に渡ったということ。このおそろしいじじつをきいて、仲間たちの心のどうようは、やはりかくせませんでした。おそれていたことがついに、げんじつのものとなってしまったのです。ベゼロインが落ちた。それは黒の軍勢の者たちがエリル・シャンディーンのすぐそばにまで、しゅうけつすることができるようになったということ在意味していました。もはやエリル・シャンディーンへとつづくさいごの守りが、失われた

のです。

しかしわれらが仲間たちが立ちどまることは、けつしてありませんでした。リブレストの言葉に、仲間たちの心はなおいつそうのこと、そしていつきに、もえ上がったのです！)

まずは、リュイン。ワットの黒の軍勢はみな、ベゼロインへとしんげきしていきました。リュインのとりでは、今「手うす」なはずです。まさかこんなところに、思わぬふく兵がいようとは、思ってもいないことでしょう。まさに今、今がリュインとりでをふたたびせいぎの手に取りもどす、大きなチャンスだったのです（ここでひとつ、さいごのいくさのことについて、そしてこのリブレストたちの行動のことについて、お伝えしておきましょう。軍を持つすべてのくには、「本軍」と、それがいの隊というものがさだめられていて、この本軍は、そのくにおいてのもつとも重要でいちばん強力な軍勢のことをいうのです（さきほど、ほりよたちのことについての説明のところでも、この本軍についてふれました）。

この本軍をもちいたいくさにおいてやぶれば、そこが自分のくにでなくても、みずからのくにがやぶれたのと同じあつかいになるのです。ですから本軍は、ここいちばんという、さいごの戦いするときにおいてのみ使用されるものでした（シープロンドの場合）はもともと軍を持っておりませんでしたので、衛士たち二百名が、そのまま本軍という

あつかいにされました。そしてワットは、ベーカーランドとのこのさいこの大いさにおいて、もちろん本軍をひきいてきたのです。それはぜったいに負けるわけにはいかないという、ワットの強い意志でもありました。

ですがもし本軍がやぶれたとしても、そのくに自体がやぶれたことにはならない、例外がひとつあったのです。それが、とりでのそんざいでした。相手国からうばい取ったとりでをひとつでも持っているのであれば、もし本軍がやぶれたとしても、持っているとりでをすべて相手国にかえすことによつて、くに自体がやぶれたというあつかいではなくすることができのです（その場合、とりでを相手にかえすことによつて、本国にひき下がるだけですむのです）。

ですからワットがベーカーランドとのさいこの大いさにやぶれたとき、リュインとベゼロインとりのどちらかいつぼうでもワットの手にあったのなら、ワットはすべての力を失うまでにはいかずに、本国にひき下がるだけですみました。それを防ぐためにも、リブレストたち白き勢力の者たちは、それらふたつのとりでを取りもどすべく、けついにもえていたのです）。

「リブレストどの。ちよつと、お待ちを。」

いざ出発、というときになって、とつぜんリブレストの下の方から声がしました。見

ると、それはメリアン王でした。どうやらおともたちの目をぬすんで、ひとりでこっそり、近づいてきたようなのです。いったい、なんでしょう？

メリアン王がつづけけます。

「ノランどのに、いろいろ話をきかれてきたとか。それで、その、ライチャ……、いえ、わたしのむすこ、ライアン王子のことは、なにかきいていないでしょうか？」

やつぱり、そういうことでしたか……。アルマーク王にでんれいの手紙を送った、メリアン王。ライアンのことをよろしく。けっして、危険なところへとむかわせないこと。素晴らしい書きましたが、それからかえってきたでんれいの手紙には、そのことについてのへんじが書いてありませんでした（アルマーク王からのへんじの手紙には、「ライアン王子をふくむきゆうせいしゆどのたちが、ぶじにこのエリル・シャンディーンへとたどりついた」ということと、「レシリアたち、南の地にむかった者たちについては、いまだたどりついていない」ということの、ふたつのことしか書いてありませんでした）。ブローチが光っていないので、ぶじであるということはわかっていましたが、今ライアンがどこにいるのか？ それすらもメリアン王には、よくわからなかつたのです。ちゃんと、エリル・シャンディーンにとどまっているのでしょうか？（でもメリアン王には、うすうす、そうじゃないとわかっていました。アルマーク王がライアンのことをちゃんとひきとめておけるなどとは、はじめから思っていますませんでしたから。いちおう、手紙の

さいごに、おどしの言葉はそえておきましたけど。」

「おお、わしも、くわしくはきいておらんのだがの。」リブレストが、もじやもじやのおひげを手でとのえながら、いいました。「きゆうせいしゅっちゅう、ウルファのまんがあるんだそう。そいつが、おとものもんといっしよに、イーフリープへむかうのだということだ。今は、そのまつさいちゅうだろう。おまえさんのむすこが、エリル・シャインディーンでそのきゆうせいしゅっちゅうやつといっしよだったとは、きいておるが、イーフリープまで、だれがおともについていったのか？ そこまではわしもきいたらん。ノランもすぐに、べつのしごとに走ってしまっただから。」

それをきいて、メリアン王は「イーフリープ！ ああ……、そうですか……」とだけいって、がっくりと肩の力を落としてしまいました。そしてとぼとぼと、もときた道をひきかえしていったのです。リブレストは首をひねっていましたが、気を取りなおして、ふたたびロボット兵士の中にも乗りこんでいきました。

「ふーむ、ノランか。」そうじゅう席に乗りこんだリブレストが、もくてき地までへのしんろをせつていしながらつばやきました。

「ノランも、ハウゼンくんも、うまくやってくれるといいんだが。」（またハウゼンくんという名まえです。前にもいってましたよね。この人は、だれでしたっけ？）

「なんです？」リブレストの言葉に、となりの席にすわっていたレイミールが、レバーをひきながらたずねます（隊長きのふくそうじゅうしは、またレイミールがつとめました。もう、かなりのうでまえですものね）。

「なあに、よそは、よそ。うちは、うちだわ。しつかりつとめを果たさんとな。レイミール、陸走しやりん船モードに、切りかえ用意！ 出発するぞ！」

「イエス・サー！」

こうして、十七体の岩のロボット兵士たちは、ふたたびもときた道をリユインとりでへとむかって、大ばく走！ 陸を走る十七そのの船となつて、かけぬけていきました。

「ちよつと！ せますぎないか？ これ！」いちばんさいごの船のかくのうこにぎゆうぎゆうにつめこまれたハミールとキエリフが、おしあいへしあい、いいました。

「がまんしてください。背中にしばられていくより、ましです。」まわりの兵士たちがそういつて、新たに加わったふたりの仲間たちのことを、なんとかなだめました（ただでさえ、人でいっばいでしたのに。兵士さんたちもたいへんですね……）。

「どうかしたのですか？ 王さま。」

岩のロボット兵士たちのことを見送りながら、ルースアンがいました（ルースアンとレシリアは、花の騎士団のふっかつにかけて、このシープロンドに残りました。うま

くネクタリアたちが力を貸してくれたのなら、いつしよに戦いの地へとおもむくつもりだったのです。いつぼうハミールとキエリフ、レイミールは、やはりいてもたってもいられず、リブレストといっしょにすぐに飛び出していったというわけでした。

「いや……、なんでもない……。ちよつと、頭痛がしてな……」メリアン王がそういつて、頭をかかえながらひっこんでいきます。メリアン王の頭痛のりゆう、それは読者のみなさんにならおわかりでしょう。

「ぜつたいこれ、イーフリープまで、ライちゃんもついてったな……」
アルマーク王からのへんじがないということは、つまりそういうことでした……。

波の音がきこえていました。おだやかなようき、気持ちのいいそよ風。

ロビーは静かに目をひらきました。それからしばらく、ぱちぱちぱち、まばたきをくりかえして、まわりの明るさに目をならします。

「えっ?」

ロビーは、がぼっ! と身を起こしました。いったいここは?

たしか、ゆうえんちのおぼけやしきで、たいへんな目にあつて、その床にたおれこんで、気を失ってしまったはず……。そこまではおぼえていました。ですが今、ロビーがいるところは、あきらかにその場所とはちがうところだったのです(つまりうす暗いお

ばけやしきの中ではなかったということですが。

あたりはここちよいそよ風の渡る、しばふでした。波の音が、ゆるやかなリズムで、こだまとなつてきこえてきます（どこからきこえてくるのでしょうか？）。すぐにロビーは、自分のとなりにライオンが寝ているということに気がつきました。よかつた、とりあえず、ライオンはぶじのようです（ふつうにぐーぐー寝ていましたから。よだれまでたらして……）。ケーキの夢でも見てるんでしょう）。

「ロビーさん、気がつきましたか。」

声が出た方をふつと見ると、それはマリエルでした。しばふのむこうから、こちらへとやってきたのです。

「マリエルくん、ここは……？」ロビーがまだ半分からだを寝かしたまま、マリエルにたずねました（なんだか足に、力がはいりませんでした。これはたぶん、ピーマンとたまねぎのせいでしょう）。まわりを見渡してみても、しばふがすこしむこうのさきで消えているだけで、なんにもなかったのです。

「わかりません。ぼくもさつき、気がついたばかりです。ぎつとしらべましたが、どうやらここは、海のまん中の、だんがいぜつべきの島みたいです。まわりにも、なんにも

見えませんが。」

「だんがいぜつべきっ？」

マリエルの言葉に、ロビーはおどろいてようやく立ち上がることができると、そのままよろける足で、しばふのふちまでいってみました。

「気をつけてください。あぶないですよ。」

その言葉にしたがって、しんちように下をのぞきこんでみます。すると……。

ひええ……！

まさにそこは、だんがいぜつべき！ 下までかるく、三百フィートはありそうでした！ そしてそのはるか下で、岩かべにうちつけられた波が、ぎぎあー！ しぶきの音を立てていたのです（波の音がしていたのは、こういうわけからなんです）。その高さには、ロビーは思わずうしろに飛びのいて、しばふにぺたん！ としりもちをついてしまいました。

「どーする、これっ？」

はんたいがわから、リズがやってきました。リズもマリエルのつき、同じくらいの高さに起きて、今はんたいがわのがけをしらべてきたところだったのです（ちなみに、リズの服はからからにかわいていました。たしかきょうふの部屋から、びしょびしょになって出てきたはずでしたけど。いいおてんきだから、かわいたのでしょうか？）。

「ほんとうになんにもない、しばふだけの島だぞ、ここ。どうやったら出られるんだ？」

マリエルやリズのいう通り、ここははしからはしまでが三十ヤードほどしかない、ほんとうに小さななんにもない島でした。そのうえ、まわりをだんがいぜつべきにかこまれていましたので、出るにも出られません。すでにマリエルがためしてみましたが、やっぱり魔法も、使えないということでした。や、やばいんじゃない？ これって。

「ろんりに考えてみても、」マリエルがあごをなでながら、いつものちようしでいいました。「ここはまだ、イーフリープの中と見て、まちがいないでしょう。ライスタの精霊の力も、あてにはできません。そうなると、いったい、なにからはじめればいいのか……」

「とりあえず、こいつ起こそうぜ。」リズがそういって、ライアンの肩をゆさゆさとゆさぶりました。「こら、ライアン。起きろって。」

それでもライアンは、なかなか起きません。「しょうがないやつだ。」マリエルがまた、おみみふーふーのじゅつ（魔力なしバージョン）でも使ってやろうかと、考えはじめたとき……。

「みぎやー！ ななふしー！ いやー！」

とつぜん、ライアンがさけび声を上げて飛び起きました！ な、なにごと？

「ど、どした？」リズはびっくりして、うしろにぺたん！ としりもちをついてしまいました。マリエルもロビーも同じくびっくりして、どきどき！ なりひびく胸をおさえます。

「あ、あれ……？ なにもいない……。あ、ロビー。マリーも。リズ、なにやつてるの？そこで。」ライアンがあたりのようすをきよるきよるとながめ渡しながら、きよとーんとした顔をしていました。

「なにやつてるの？ じゃないよ！ いきなり、びっくりするじゃんか。なんだよ、ななふしー！ って！」リズがしりもちをついたまま、こぶしをふり上げてぶんぶんいいます。

その言葉をきくと、ライアンはからだをぞわわーっ！ とふるわせて、顔を青くしてしまいました。どうやらまた、なにかを思い出したようすです。

「い、いないよね！ ななふし、いないよね！ だめだよ！ だめだよ！」ライアンがそういつて、からだ中をばたばたと手のひらでたたいて、そこになにかついていないか？ たしかめはじめました。どうやら、ななふしというそれが、からだにくつついていないかどうか？ しらべているみたいです。

「ななふしって、あのななふし？　木のえだみたいな、へんな虫だろ？」リズがいいました。

みなさんは、ななふしというこんちゆうを知っていますでしょうか？　手足のかんせつがいつぱいあるように見える、おかしなかたちをした虫のことです。リズのいうように木のえだみたいなすがたをしていて、えだにばけているものや、葉っぱみたいなすがたをしているものもいます。ななふしはみなさんの世界と同じく、このアーケランドにも、同じようなすがたの虫として暮らしていました。

そしてこのななふし。ふつうの人なら、「べつに、ただの虫だろ」って思うだけかもしれませんが、ライアンにとってはまったくそうではありませんでした。なにしろライアンは、大の虫ぎらい！（ここまでの旅の中でも、ちよいちよいそんなことをいつていましたよね。）しかもこのななふしという虫は、ライアンの中でもいちばんの、だめだめな虫だったのです。

「そんなのいないよ。だいじょうぶだから、安心して。どうしたの？　ライアン。」ロビーが、あわてふためくライアンのことを心配していいました。ちよつといつもと、ようすがちがいましたから。

ライアンはなにもいないということがわかると、「ふううー。」と深いため息をついて、それからようやく話しをすることができました。

「よ、よかったー……。ちよつと、やな夢見ちやつたもんだからさ……。ただの夢だよ。だいじょうぶ……。」

さて、このあたりでお待ちかね。このライアンのおかしな行動のこともふくめて、読者のみなさんにおひろめしておかなければならないことがあります。それは……。あのきょうふの部屋の中で、なにが起こったのか？ ということ！ ロビーはいちばんのきょうふ、ピーマンとたまねぎにさんざんな目にあわされてしまいました。やっぱりライアン、マリエル、リズの三人も、ロビーと同じく、自分のいちばんだめなきょうふのものにおそわれてしまいました。それがいったいなんなのか？ 知りたいですよね？（べつにいい？）

ライアンのいちばんのきょうふ。それはもうおわかりの通り、このななふしという虫でした。きょうふの部屋にふみこんで、しばらくしたころ。ライアンは自分の肩になにかがついているということに、気がついたのです。「ん？」ライアンが、肩に目をやってみると……。

「みぎゃー！」

大きな、ななふしが一ぴき、肩にくっついていました！ 自分の目と鼻のさきに、ななふし！ もうライアンは、大パニック！ そしてぎゃーぎゃー走りまわっているうち

に……、足にも一ぴき！　うでも一ぴき！　つぎからつぎへと、ななふしたちがあらわれたのです！　もう頭の中は、まっ白！　言葉も出せません。口からあわを吹いてたおれるすんぜんに、ライアンはスタンプ台までたどりついて、まっ白な頭のままで、スタンプをポン！　すると、あたりや自分のからだの上にななふしたちは、みんな消えていつてしまいました。ライアンはさいごの力をふりしぼって、そのままよける足で、ふらふらと部屋の出口までたどりついたというわけだったのです……（シンプルなだけに、いちばんきついパターンでした）。

こんどはマリエルの番。マリエルは自信たっぷりです、きょうふの部屋の中へとはいっていきましました。そしてすぐにスタンプ台を見つけて、「張りあいもないですね。ふん。」鼻をならして、そこに近づこうとしたとき……。

「スタンプがほしいの？　ぼうや。」

とつぜん、なにやら、なまめかしい声が！　マリエルがふりかえると、そこには……、おほん、なんとというか、色っぽいというか、お子さまむけではないというか……、そんな、おはだかむき出しの、うすーい服を着たおねえさんがひとり、立っていたのです。そのおねえさんが、マリエルの方にゆつくりと歩いてきて……。

「かわいいぼうやね。おねえさんが、あそんで、あ・げ・る。」

「ぴぎゃー！」

マリエルの頭が、ほん！ けむりを上げて、かんぜんにシヨートしてしまいました！
そしていつのまにか、右からも左からも、同じようなすがたをしたおねえさんたちが
やってきて、マリエルのことをすっかり取りかこんでしまったのです。

マリエルのいちばんにがてなもの。それはこんな感じのおねえさんでした（なんと
うか、そんな感じのおねえさんでした）。じつはマリエルは、若いじよせいが大のにがて
だったのです。ふれることはおろか、近づくことさえほとんどできません。リズの場合
はもともと男だと思っただけで、それがじつは女だとわかってから
も、あんがおいだじようぶでしたが、こんなふうにもとから「色っぽさ、ばくはつ」と
いった感じのおねえさんは、かんぜんにアウトでした。べんきようやりくつで通した頭
の中が、かんぜんにシヨートしてしまふのです。

そんなマリエルのことをよそに、もうおねえさんたちは、やりたいほうだい！ 「うふ
ふふふ。」マリエルのことを、なでたり、もんだり、つまんだり……（ひねったり、ひっ
ぱったり、こすったり……）、くちやくちやにしてしまいました（マリエルの服がぐしや
ぐしやだったのは、このためです。だれですか？ うらやましいなんていつている人
は）。

そして、どのくらいの時間がたったのでしょうか？（じつさいには、ほんのちよつと
の時間でしたが。）マリエルはかんぜんにぼろぼろになって、きようふの部屋の床にたお

れていました。おねえさんたちは「ふふふ、またあそびましょうね、ぼうや。」といって、消えてしまっていました。マリエルの耳には、それもとどいていなかったのです。やがていしきを取りもどしたマリエルは（いしきを取りもどすまでの時間も、じつさいにはほんのちよつとの時間だけでしたが）、まっ白な頭で、「はは……、ははは……」かんぜんにごわれてしまいがらも、スタンブをポン！ 出口へとむかったというわけでした……（気のどくなマリエルくん……）。

さいごにリズ。スタンブ台にむかったリズは、ふいにびちやびちやという水のしたたるような音をきいて、ふりかえりました。そこにあらわれていたものは……。

パイナップル！ 人の背たけくらいもある手足の生えた大きなパイナップルが、二十体ほども！ そのからだからパイナップルジュースをしたたらせながら、リズに飛びかかってきたのです！

「待て！ 待て！ やめろ！ うわああー！」

リュートの剣を出すひまもなく、リズのからだはもうパイナップルだらけ。百パーセントのパイナップルジュースで、びしょびしょです（リズがびしょびしょだったのはこのためでした）。じつはこれこそが、リズのもつともだけなものでした。パイナップルジュースです。パイナップルジュースの、あのあまみをふくんだすっぱさ。ふつうの人にとってはジュースとしてとてもおいしいものですが、リズにとってはもうじごくでし

た。思い出しただけで、口がまがってしまいそうなほどだったのです。リズは小さいころから、パイナップルだけは大めでした。リゆうは自分でもわかりません。はだにあわないとでもいいでしょうか？ パイナップルジュースがはだ（とくに口）にふれると、かぶれてかゆくなくなってしまふのです。それに、そのにおいも大めでした。

まったく、このきょうふの部屋というやつは、いじが悪い！ その人にとっていちばんだめなものを、ようしやなくなたきつけてくるんですから！

こうして四人の仲間たちは、みんなそれぞれに、いちばんだめなものをもらってしまつたというわけなのです。これが、あのきょうふの部屋の中で起こつたことでした。ライアンはそのきょうふを今ふたたび、夢に見てしまつたというわけだったので。リズに肩をゆさぶられて、肩にとまつていたななふしのことを、思い出してしまつたというわけでした（もしあなたがこのきょうふの部屋にはいったとしたら、なにが出てくるでしょうか？ わたしの場合は……、ぶるる！ 考えただけでもおそろしい！

ところで、このきょうふの部屋の中からもらってきたきょうふのものの名ごりは、しばらくはそのまま残ってしまいました。ライアンやマリエルの場合は、ななふしとおねえさんでしたから、部屋のそとまでついてこなかったからいいのですが、ロビーのピー

マンとたまねぎのおいと、リズのパイナツプルジュースについては、しばらくは消えずに残ってしまったというわけなのです。そして今ようやく、このきょうふのものたちの名ごりは消えました。リズの服がかわいていたのは、そのためだったのです。ロビーのからだからも、ピーマンとたまねぎにおいては消えていました。でもまだロビーは、力を出せずにいるようですが。

こう考えてみると、なんだかりズが、いちばんかわいそうでしたね。においだけならまだしも、いちばんきらいなもので、しばらくからだがびちよびちよでしたから……。

ちなみに、マリエルの服がぐしゃぐしゃなのはもちろんそのままでしたから、マリエルは目がさめたとき、あわてて服をととのえて、かみもきれいにブラシをかけたのです。みんなが起きないうちにすませてしまおうと、だいぶあわてたことでしょうね。

さて、きょうふの部屋の物語については、このあたりで切り上げて……、ほんらいのお話の方をさきに進めましょう。

みんなはあらためて、自分たちのおかれていますようきょうふのことを考えました。しかしどう考えても、いったいなにをすればよいのか？ 思いつきません（ここでいつまでも、そよ風に吹かれておひるねしているわけにもいきませんし）。まわりを海にかこまれた、だんがいぜつべきの島。まさにぜつぼう的なじょうきょうふです。魔法も使えま

せんし、精霊の力もかりられません。船が助けにでもこないかぎり、ここからだつしゅつすることはふかのうでしょう。

ふつうだったら。

そう、ここはふつうの場所ではない、イーフリープ。ずっと変わらず、このままということはあり得ないのです。

「あれ……？ あつ！ あれあれ！」とつぜん、ライアンがさげびました。

「どうしたの？」「なに？」「なんだ？」みんながたずねます。

ライアンはしばふのむこうをゆびさして、いいました。

「ねこー！ ねこねこー！ ねこちゃんがいるよ！」

びつくりしてみんなが見てみると、なんと、たしかにむこうのしばふの上に一ぴきの青いねこがいて、気持ちよさそうに寝そべって、しっぽをペロペロとなめて毛づくろいしているところだったのです！

「どこからきたんだ？ さつきは、なんにもいなかっただぞ！」マリエルが、信じられな
いといったふう
に身を乗り出していいました。

「いや、もう、そんなことはいってもしようがない。ここは、今までの世界とはちがう

んだ。なんでもありつてやつだな。」リズが、「ふう。」とため息をついて、マリエルにつづけました。

「あのねこちゃんが、なにか助けてくれるのかもしれない。とにかく、近づいてみようよ。」

そしてそのロビーの言葉にさんせいして、みんなはその青いねこのそばまで、そうつと近づいていくことにしたのです（いきなり近づいたら、逃げてしまいかもしれませんが、でしたから）。

「ちゅちゅち。ほーら、こわくないよー。おもしろいよー。」ライアンがキャンディーをいっぽん取り出して、地面にはいつくばり、それをねこにむかつてふりふりふりながらいいました。ですがねこは、知らーんぷい。そっぽをむいたまま、「くああ。」と大きなあくびまでしていたのです。

「ちよー！ このぼくが、ここまでやってるのに！ このねこめー！」ライアンはとたんに、ぶんぶんいい出しました（どっちがあそばれてるのか？ わかりませんね）。

「ねえ、リーファイがいつてたよね。精霊王は話しをするとき、生きもののすがたになるつて。まさか、あのねこが……！」

ロビーがそういったとたん……。

その青いねこが、すつく！ とうしろ足二本で立ち上がったのです！ そして……。

「待っていたぞ。」

そのねこが、口をひらいてしゃべりました！

それはなんとも、ふしぎな声でした。そうです、ロビーのいう通り、やつぱりこのねこ、いえ、この人こそが、伝説の精霊王その人にほかなりませんでした！（ゆうえんちのつぎは、だんがいぜつべきの島に、青いねこ！ まったくこのイーフリープという世界は、よそくのつかないことばかりです。）

「よくきたね。わたしの家にきなさい。お茶でも出そう。」

青いねこ、精霊王はとつぜんそういうと、くるりとむきを変えて、うしろの方に歩き出しました。でもわたしの家って、そこにはしばふしかありませんけど……。

そう思ったとたん！

今までしばふしかなかったその場所に、いつからあったのか？ 木と白い土のかべでできた、いっけんの小さなかわいらしいおうちがたっていたのです！ ほんとうにとつぜんでした。ですけどそのおうちは、まるでなん年も前からそこにあつたかのように、あたりまえのように、そこにあつたのです。

みんなは言葉も出せません。あまりにもとつぜんのことでしたので、まだ心のじゅんぴというやつがうまくできていかなかったのです。ですけど、そんなことをいつている場合ではありませんでした。目の前に、あの伝説の精霊王がいるのです！ だれもがげいけんすることのできない、とくべつな伝説の中に、みんなは今いました。

「いこう……」リズがなんとか、(かたまつてしまっている)みんなのことをみちびいていいました。マリエルも、ロビーも、ライアン(まだキャンディーを持って地面にはいつくばったままでしたが)も、ぎくしゃくとした足どりで歩き出します(立って歩き出してからは、いちばん張りきっていたはずのライアンが、いちばんきんちようしていました。きんちようのあまり、手と足がいつしよでしたし)。

ねこの精霊王が家の入り口までたどりついて、とびらのわきに作られていた「ねこせんよう」の小さなあなから、中にするりとはいりこんでいきました。つづいてリズが、木のとびらのとつてに手をかけて、そうとそとがわにひらきます。

家の中は、まるでいなかのおばあちゃんのおうちのようでした。床にはあついおりものカーペットがしいてあって、その上に、六つのいすをそなえたがんじようそうな木のテーブルがひとつ、乗っております。テーブルにはきれいなテーブルクロスがかかけられ、そのうしろの石づくりのだんろでは、火があかあかともえています。しつそなつくりの、それでいてあたたかみのある家具が、ならんでいました。しよつきだなには、お

花のもよりのティーカップやお皿が、きれいにならんでおります。本だなには、みんなが知っているどうわの本が、たくさんならんでいました。

「席につきなさい。」

どこからか、精霊王の声がしました。部屋の中に見とれているうちに、みんなはねこの精霊王がどこにいったってしまったのか？ わからなくなってしまうていたのです。その声は上からしたようでもあり、地面の下からきこえたようでもありました。

みんながはつと気がつくのと、いつのまにかテーブルのいすのひとつの上に、青いねこがちよこんと乗っていました（頭がテーブルの上に出るように、そのいすにはクツションが三つ重ねられています）。いわれるままに、みんなもそれぞれの席に腰をおろします（ふしぎなことに、みんなははじめから、「自分の席はここ」とわかっていたのです）。

「つかれたらう。飲みなさい。」

声があったかと思うと、そのつぎのしゅんかん……。

ええっ？ とつぜん自分の目の前に、あたたかい飲みものがそそがれたカップがひと

つ、おかれていました。いつからそこにあったのか？ まったくわかりません。テーブルの上はずっと見ていたはずなのに、カップがあらわれたしゆんかんがわからなかったのです。というより、あらわれたとかいうような話ではありませんでした。まるで席につく前から、そのカップはもともとそこにあったかのように、みんなにはそう思われたのです（さきほどから、ふしぎな感じがつづきます）。

カップの中には、みんながそれぞれいちばん好きな飲みものはいっていました。リズは、ストレートティーにお砂糖ちよつと。ロビーはあまめのミルクティーに、シナモンパウダーを浮かべて。マリエルはココア（べんきょうにはつきものですね）。そしてライアンのカップには、あま〜いあま〜いミルクセーキが、（しかもとく大のカップに）たっぷりそそがれていたのです。

その飲みものの、なんともいえないふしぎなみりよく……。みんなは声も出せず、いただきますのひともいえずに、思わずひとくち、その飲みものを口にしてしまいました。そしてびっくり。

「う、うまいー！」

そのあまりのおいしさに、みんなはごくごくと飲んで、あつというまにカップはからになってしまいました（まるでカルモトの家でお茶をごちそうになったときみたいですね）。そのはずでしたのに……。

ふと見ると、今飲みほしてからになつてしまつたはずのカップに、またもと通り、もとのあたたかい飲みものがそがれていたのです！ しかもそれは、飲んだあとに新しくそがれたというようなものではなくて、まるつきり飲む前のじょうたいにもどつているという感じでした。カップに口をつけたあとすらも残つていないのです（でもおなかにはしつかり、あたたかい飲みものがつめこまれていました。ですからたしかに、飲んだのです。まったくもつてふしぎなことです）。

みんながふしぎがつていると、またしてもびつくり。テーブルの上に、いつからそこにならべられていたのか？ たくさんのお菓子が、お皿にもりつけられてならんでいました！ クッキーにチョコレート、マカロンにシフォンケーキ、シロップのかかつたフルーツに、ねじれたキャンデー、砂糖だま。そしてライアンの前には……、ちょうとく大きいゆうの、クリームたっぷり三だん重ねのデコレーションケーキ！

みんなはまたしても言葉を失つたまま、いただきますのひとこともいえずに、思わずひとくち、お菓子を口にはこんでしまいました。そしてまたびつくり。

「う、うまいー！」

そのあまりのおいしさに、みんなはつきからつきへと、むちゆうでお菓子に手をのばしてしまいます（ふだんはぜつたいにそんなことをしないようなマリエルまでもが、おぎようぎ悪く、両手で手づかみでお菓子をばくばく食べてしまいました。それほどおい

しかったのです。あつというまにお皿はからになっていき、ケーキはみるみる小さくなっていました。

そして、みんながおなかいっぱいになったころ……。

「どうやら、げんきがもどったようだな。」

どこからか精霊王の声がしました。みんなは、はつとわれにかえります。見ると、テーブルの上にはなにも乗っておりません。もうじゆうぶんに食べて、飲んだからでした（とくにライアンは、もう大まんぞく。しあわせいっぱいといった顔で、へにやっといすにもたれかかっていたのです）。

ところで、この飲みものや食べものはいうまでもなく、精霊王のとくべつな品物でした。口にした者をたちまち、げんきまんたんにしてくれるのです。みんなはよほどつかれていたのか？ ごくごくばくばく、飲んで食べてしまいましたね。ほんとうは、ただのひとくちでもことたりしましたが）。

「そ、そうだ。こんなこと、してる場合じゃない。精霊王にお話を……」（いっばいになったおなかを両手でかかえながら「ふう。」と息をついていた）マリエルがいました（そしてその自分のすがたをきやつかんの見えたマリエルは、たちまちはずかしくなっ

て、しゃきつとしせいを正しました。「これじゃ、ライスタといっしよだ……」。

「ほら、ライスタ。精霊王さまだぞ。まかせろって、いつてたじゃないか。」マリエルが、横にいるライアンの服をちよいちよいとひっぱりながら、小さな声でいいました。あこがれの精霊王、その相手がつとまるのは、精霊使いのたつじんである自分しかない！ とライアンは息まいていたのです。

ですが……。

「な、なに——」マリエルの、おどろきのひとこと！

寝ています！ ライアンはおなかがいっぱいになって、そのままいすの背にもたれて、むにやむにや……、気持ちよさそうに寝てしまっていました。ラ、ライアーン！

ですけど、ライアンをあんまりせめるわけにもいきませんでした。みんながおなかにつめこんだお菓子や飲みものは、精霊王の言葉の通り、げんきをまんたんにしてくれるものでしたが、同時に、つかれたからだをともしラククサさせる力もあつたのです。つまりあんまり食べたり飲んだりしすぎると、からだがほかほかあたたかくなって、すごく眠くなつてしまいました。

といつても、いくらがつがつごくごく、食べたり飲んだりしていたとはいつても、み

んなはそこまで眠くはなっていないかったです。ですがライアンの場合は、なにしろ三だん重ねのデコレーションケーキを、まるごと全部食べましたから！ それは眠くなりますよね……（しかもミルクケーキも、とく大のカップですくなくとも五はいは飲んでいたので。やつぱりライアンは、けっこうせめてもいいかも……）。

あこがれの精霊王。夢にまで見た伝説のイーフリープでの、運命的な出会い。そのいちばんかんじんなシーンで……、ここぞというその大いちばんのところ……。

かわいそうに。ライアン、たいじょうです。

「あーあ、起きないぞ、こいつ。」リズが、ライアンのからだをゆさゆさゆすったり、ほほをぺちんとひっぱたいてみたりしながら、いいました（ためしにマリエルが、耳に「ふー！」息を吹きかけてみましたが、やつぱり起きません。だめみたいですな。もう、そつとしておきましょう……）。

「な、なんてやつだ。あとでしつこく、くすぐってやるからな！」マリエルがぶんぶん怒っていいました（く、くすぐるの？）。

「と、とにかく、精霊王さまにお話をきかないと。」いちばん右の席にすわっていたロビーが、左のみんな（ライアンいがい）にいいました。「マリエルくん、お願い。」（ライ

アンがいないので、こんなときにはまず、さほうやれいぎのことをいちばんよく知っているマリエルにお願いするのがいちばんいいだろうと、ロビーは思ったのです。

「わ、わかりました。」マリエルが、ややきんちようぎみに、「こほん。」とせきばらいをしてからこたえます（いくらマリエルでも、相手は伝説の精霊王。きんちようしてがちがちになってしまうのも、むりはありません。たとえ、すがたがねこでも）。

「わたしたちは……」マリエルが、いいかけたとき……。

「いわずともよい。」

精霊王の声がひびきました。そうです、精霊王はなんでも知っていますのです。今さら自分たちのことやここにきたもくてきのことなどは、話すまでもありませんでした（きあいをいれていたマリエルは、ちよつとひようしぬけしてしまいました）が。

するとそのとき、またしてもふしぎなことが。

さつきまで目の前のいすにちよこんと乗っていたはずのねこ（精霊王）が、いなくなっていました。ずつとねこ（精霊王）からは、目をはなさずにいたはずなのに。

「あ、あれ？」みんな（ライアンいがい）があたりを、きよろきよろさがしていると……。

「こによ方が、話しやすいよね。」

「えっ?」さつきまでねこ(精霊王)がすわっていたいすの方から、とつぜん声がしました。しかもさつきまでのような、なぞめいたふしぎな声ではありません。そのうえ、どこからきこえてくるのか? わからないような感じでもありません。はつきりと、目の前のいすのところから声がしたのです。

みんな(ライアンいがい)がそろって、そちらに目をやると……。目の前のいすに、青いかみの、青と白のデザインのかわいい服を着た、見た目もかわいい八さいくらしいの男の子がひとり、すわっていました! ええっ!

みんな(ライアンいがい……、この場面にかぎり、これから「みんな」とある場合は、ライアンいがいの三人ということでお願ひします)は、またしてもびっくり! でももうそろそろ、なんでもありのこのイーフリープのびっくりにも、なれてしまわないといけませんね。

「ねこだと、動くにははらくにやんだけど、話しづらくて。やっぱり、こつちによ方がいいね。」

男の子はそういって、おしりから生えた長いしっぽをテーブルの上まで持つてきて、ふりふりと動かししました。そう、このとくちょうのある話し方からもおわかりの通り、

この男の子は、ねこの種族、ラグリーンのすがたをしていたのです。長いしっぽのほかにも、頭の上には大きなねこの耳がふたつ、ぴよこんと乗っていました（でもラグリーンとはちがうところが。それは背中が羽がついていないということです。いすにすわるのにじやまだから、消したんでしょうか？ べつにどうでもいいですけど……）。

「え、え？　せ、精霊王さまですか？」マリエルが、ねこの男の子にたずねます。なんだか、あまりにもくだけたといいますか、それっぽくない感じでしたので……（なんかもつとこう、おごそかでりっぱなふんいきがあふれているものだとばかり、そうぞうしておりましたから。これじやリユキアと、たいして変わりません……）。

「そうだよ。」男の子（精霊王）があっけらかんとした感じで、こたえました。どうやらほんとうに、この男の子が精霊王でまちがいないようです（まあ精霊王はどんなすがたにもなれるということでしたから、こんかいはたまたま、このすがただったということなのでしょう。お子さまふたりのらい客たちに、あわせたのでしょうか？）。

「あんまり話しをしたこともやいから、しゃべるだけで、つかれちゃうんだよね。人によすがたにやら、人としやべるにもらくだから、こによすがたでがまんしてね。」精霊王がいました。

「あ、はい。それはもう……」みんなは「どうぞ精霊王さまのお好きなように」といった感じでいいましたが、しようじき、「なんでラグリーン……？」と心の中で思いました。

「それはそうと……」精霊王がつづけけます。「みんなやは、にやにしにきたによ？」
ええっ？ さつき、「いわずともよい。」っていつていませんでしたっけ？

「ごめんごめん。じょうだんだよ。」精霊王はそういつて、「きやはは！」と笑いました
(うくん、まるつきり、ラグリーンの子どもになつています……)。

「大きくにやつたね、ロビーベルク。会えてうれしいよ。」精霊王がつぜん、ロビー
にいました。

「わたしは、きみの成長を見守ることしかできなかつた。なにもできずにいたことを、
すまないと思つている。だが、それはきみ自身の運命なのだから、わたしには、どうす
ることもできなかつたのだ。そしてきみは、ここにもどつてきた。それは、新たな力を
得るためだろう？」

「え……、あ……、は、はい。」ロビーが思わず、こたえます。とつぜんのことに、頭
がこんらんしてしまつたのです。それに今さつきまで精霊王は、ラグリーンの男の子の
話し方をしておりましたのに、とつぜんこんなおごそかなしやべり方になつたので、そ
れもびつくりしてしまいました(つていうか、ふつうにしゃべることもできるんですね
……)。できればこのあとも、ふつうにしゃべってもらいたいのですが……)。

ノランにいわれ、そこでどんな運命が待ち受けているとも知れず、この伝説のイーフ
リープまでやってきたロビー。そこは、かつて自分が住んでいたことがあるという、と

くべつな場所でした。そのとくべつなイーフリープで、今ロビーは、さいごの運命の力を手にいれようとしていたのです。

新たな力。女神の力持つせいなる剣、アストラル・ブレードの、その大いなる力をひき出すためのしかく……。悪の魔法使いアーザスとのさいごのけつちやくのときにむけて、それは必要なものだといいました。いったいそれは……？　ロビーはこのイーフリープで、どんな力を手にいれるというのでしょうか？

「ロビーベルク。きみは、その力をすでに得ている。」

ええっ？　精霊王のいがない言葉に、リズもマリエルも、思わずロビーの方にむきなおつてしまいました。ロビーもとうぜん、おどろきをかくすことができませぬ。

「でも、ぼくは、なにもしていません。」ロビーがいました。ですが精霊王は、静かな表じょうをしていったのです（子どものすがたをしておりましたが、やつぱり目の前にいるのは、伝説の精霊王なのです。そのいげんと底にひめた力の大きさは、はかりしれないものでした）。

「その力を持つための、ししつ。きみはこのイーフリープで、もうじゆうぶんにそれをしようめいした。人を思う心。人をしんらいする心。きみはその心をもつて、自分のほんらいのすがたをさらけ出し、こんなんやきようふにうち勝った。それはなによりも、きみ自身の強さ、じゅんすいさを、あらわすものだ。きみがこのイーフリープで乗り越

えた、あのしれんこそが、世界をすくうさいごの力を得るための、かぎだったのだよ。」
なんと！ あのおかしなしれんの数々は、そういうことだったんですね。人のことを
思いやる心を持って、せまりくるこんなやきようふに、自分自身のほんらいのすがた
でもつてうち勝ってみせること。それがさいごの力、つまり剣のたいなる力をひき出す
ために、必要なものだったというのです（それならそうと、はじめからいつてよ！ と
いいたいところですが、いったらやっぱり、しれんにならないですものね）。

あのしれんの数々は、剣のそのしんの力をひき出すための方法を、ロビーに学ばせる
ためのものでした。女神のつるぎ、アストラル・ブレードは、「いつわりのない自分ほん
らいのすがた」をさらけ出し、「こんなんやきようふを乗り越える強い心」を持って、「人
を思いやるそのじゆんすいな思い」をあらわにしたときに、そのしんの力がかいほうさ
れるようになっていたのです（かなりとくべつなじょうけんです）。これらのとくべつ
な三つのじょうけんのことを、あのしれんの数々はロビーに伝えていたというわけでした
（これらの三つのじょうけんについては、剣のしんの力をかいほうするためのじょう
けんとして、はじめからそのようにさだめられていたことでした。そしてこのことがさ
だめられたのは、はるかなむかし、この剣がレドンホール石の中にふうじられたとき
のことだったのです。これはそのむかし、とあるひとりの人物の強い願いによって、き
められたことでした。そしてその人は、あるとてもかなしいできごとのすえに、この剣

を石の中にふうじることになりましたが、その人の願いを受けて、剣の力をかいほうするためのこの三つのじょうけんのことを剣に与えたのは、ほかでもありません。はるかなむかしにこの剣のことを人々に与えた、女神ライブラ自身にはかなりませんでした。

剣はこうして、そのしんの力がかいほうされるときを待ちつづけました。いつの日か、さいごのときにあたつて、この剣の力の意味をりかいした、「自分の意志をついでくれる者」が、この剣のことを手にするそのときを……。

そしてついに今日、ロビーがここに、その思いをついだのです。はるかなむかしの、とあるひとりの人物の、あつく強い、その思いを……。

この人物がなに者なのか？ それはこの物語のさいごの方で、わたしはみなさんにお伝えしたいと思っています。そしてなぜその人物は、剣の力をかいほうするための三つのじょうけんのことを、この剣に与えるように女神にお願いすることになったのか？ その物語、とてもかなしいひげきの物語のことについても、わたしはいつかかならず、みなさんにも語りたいと思っています。このロビーの物語につながる、とてもとてもかなしい、その物語のことを……)。

(しれんの内ようについて) ぐたい的にこまかく見ていきますと……。

イーフリープでは、魔法も精霊の力も使えませんでした。それは剣の力をかいほうす

るためのじょうけんのひとつ、「自分ほんらいのすがたをさらけ出さねばならない」ということを教えていたのです（そこからの力が取りいれられないということとは、すなわち自分自身の、まっさらなほんらいのすがたということになるのです）。

サーカステントの中のしれんでは、ロビーは仲間とともに力をあわせて戦い、かれらのために力をつくそうとがんばりました（魔法や精霊の力を使えないふたりのちびっ子たちのことも、ロビーは「ぼくが守つてあげなくちゃ！」と助けようとしていましたよね）。あのしれんでは、ロビーは「だれかのために力をつくしたいという、思いやりの心をあらわすことが必要だ」ということを教えられました。

それから、さいごはわかりやすいですね。きょうふの部屋のしれんでは、そのまま、「こんなんやきようふにうち勝つ、強い心を持たなくてはならない」ということを、ロビーは教えられたのです。

もつとも、教えられたといっても、いわれなかつたらせんせん、あのしれんにそんな意味があつたなんてことは、だれにもわかりませんでしたけど……。わかるはずもないですよ。でもこれらのしれんを乗り越えたことによつて、ロビーは知らず知らずのうちに、劍の力をかいほうするその三つのじょうけんのことをりかいし、それを劍の力をひき出すための、自分の新たな力として得ていたのです（さすがは精霊王の用意してくれたしれんです。かなりへんてこなしれんだったことは、ひていできませんが……）。

そしてロビーの得たこの力こそが、ノランのいつていた、「アーザスのことをうち破るために必要な、さいごの力」というものにほかなりませんでした。ロビーは剣のしんの力をかいほうする力、アーザスのやみをうち破り、このアークランドをすくう、そのきゆうせいしゆたるさいごの力を、こうしてきずかったのです（主人公レベル、さらにアツプ！ といったところでしょう。もつとも、はつきりとたしかかな力を受け取ったという感じではありませんでしたので、ロビーもやつぱり、まだこんわくぎみだったのです（ファイナルビーム！ とかいうひつさつわざでもおぼえたというのなら、はつきりしてるんですけどね……）。ですがロビーがこのイーフリープで得た力というのは、やはり必要ふかけつな、重要なものでした。

今までも、ロビーは敵をおそれることなく、だれかのためにつくそうとしてこの剣の力を使ったことがありました。ですがそれは、まだ剣の力を、ばくぜんとつかんだままの力だったのです。ロビーがこのイーフリープで得た力は、いうならば、剣の力をひとつにまとめ、そのさきにひめた、そのさいごの力をひき出すというものでした。この力を得るためには、ふつうならなんかけつも（あるいは、なんねんも）そのためのしゅぎようをつむむ必要のあるものでした。ロビーがこのイーフリープで受けたしれんは、そんなしゅぎようをいつきにひとまとめにして、ロビーに学ばせるほどのものだったので（さすがは精霊王のしれんです）。

ちなみに、ノランはこの剣を使いこなすために長いしゆぎようが必要になるということも、知っていました。そのこともありましたが、ノランはその必要ふかけつなとくべつなしゆぎよう、しれんのことを、精霊王にたくしたというわけなのです。でもいくらそんなにすごいしれんだとはいっても、いわれなければ、ぜんぜん、あのしれんにそんな力があつたなんてことは、わかるはずもないですけどね……。

そんなロビーに、精霊王がまた、静かにつづけました。

「ロビーベルク、よくききなさい。きみがこのイーフリープを去ってから、世界は大きく変わってしまったのだ。悪しき勢力はますます強大となり、人々の心に、うたがいの気持ちが生まれた。おたがいをそんちようすることを忘れた者、敬意をほううことを忘れた者の、なんと多いことか。かつてのネクタリアたちのように、アークランド世界を見すてようという者は多い。

「人は、人が生きるうえで、もつともだいじなもの、人としてのほこりを失いつつある。このままではほんとうに、アークランド世界はほろびるだろう。アーザスは、そこに生まれた人の弱き心をりようし、悪しき力をたくわえている。きみの手にした力は、その悪しき力をうち破る力。人の弱き心をくじき、アークランド世界をほんらいの正しき道へと、みちびくための力だ。それこそが、きみのもとめていた、さいごの力。悪に守ら

れたアーザスのやみをうち破り、世界をしんにすくうために、必要な力なのだ。」

マリエルも、リズも、ロビーと同じく、精霊王の話をくいているようにきいていました。精霊王の話はとてもむずかしい話でしたが、とてもだいいじな話なのだということ、だれにとつてもわかりました（ロビーのきゆうせいしゅとしてのやくわり、心がまえのことと話すのと同時に、この世界そのもの、人のそんざいそのものの意味のことも、精霊王は話していたのです。こんなにだいいじな話はほかにありません）。

精霊王がつづけます。

「ロビーベルク、きみは、ほんとうの強さを持っている。ほんとうの強さとは、ごぶしの強さではない。人をねじふせる力でも、したがわせる力でもない。どこまでも人を思いやる、じゅんすいな心。それが、人のほんとうの強さ、ほんらいあるべき強さを生み出してくれるのだ。かなしみの森で、ただひとりすごしてきた日々が、人のことを思いやる、きみのそのじゅんすいな心を、いつそう強きものへと変えた。宝玉の力、そして人としての心。世界をすくえるのは、ロビーベルク、それらの力をあわせ持つ、きみしかいない。」

精霊王のいう通り、力で相手をねじふせたとしても、それはけつして勝つたということにはなりません。相手の弱みにつけこんだり、みずからの立場をりようして、人をおさえこみ、したがわせる。そんなことは、正しき者のやるべきことではありません。そ

んなことは、けっして強いことではありません。なげけないことです。精霊王はこのイーフリープから、そんなことをいやというほど見てきました（そしてノランにもわかつていたのです。アーザスの悪をうち破るために、さいごに必要なもの。世界をすくうために、さいごに必要なもの。それはこぶしの強さでも、剣をふるうわざでもない。人のことを思いやる、ロビーのそのじゅんすいな心、それにほかならないのだというこ

とを）。

宝玉の力、人としての心、それらの力をあわせ持つ、きゆうせいしゆたるロビー。精霊王はそんなロビーに、さいごにこう伝えました。

「さいごに、その剣に力を与えてくれるものがある。それは、剣の力の意味をりかいしたきみならば、おのずと得ることができらう。」

精霊王はそういつて、いすからぴよこんとおり立ちます。

「ロビーベルク。わたしがしてやれることは、もうない。きみはもう、必要なすべてのものを持つている。あとはきみの力で、きみのさいごの運命の中へとむかうのだ。さいごの旅のことについては、ラグリーンたちに、道あんないをたのんでおいた。かれらに助けをこうとよい。」

そして精霊王は、ぴよこぴよことした足取りで部屋のおくのとびらの前までいき、とつてに手をかけました。

「会えて、うれしかったよ、ロビーベルク、マリエル、リズ。ずっと寝てたね、ライアン。また会おう。いつの日か。」

精霊王はそういつて、とびらのむこうへ消えていきました。

ちちちち……、ぱたぱたぱた！

とつぜん、小鳥たちが目の前を飛び去っていきました。あまりにもとつぜんのことに、ロビーたちみんなには、しばらく、なにが起こったのかもわかりませんでした。ですが、しだいに頭の中がはつきりしてくると、みんなは自分たちの身になにが起こったのか？ りかいすることができたのです。かれらはまたも、どこかべつの場所に立っていました（ここでもライアンは、まだ地面でぐーぐー寝ていましたが）。

「い、い、い……？」

あたりをきよろきよろながめ渡してみても、みんなはここがどこなのか？ わかりました。目の前には、美しい水めんをたたえた、おだやかなみずうみ。白い砂がそのまわりをかこんでいて、あたりには色とりどりの花々がさきほこつております。みずうみのまんな中には、あざやかなみどりにおおわれたしんぴ的な島がひとつ、浮かんでいました。

そう、ここは、たきのみずうみです！ みんなは、そのみずべに立っていました。つまりイーフリープへとむかうその出発の場所に、みんなはふたたびもどつてきたのです。

!

ひゅんっ！

とつぜん、目の前をすごいはやさで、もも色のふわふわしたボールがいつこ、飛び去っていきました！　そしてそれにつづいて……。

「待てえー！」

そのボールに負けないくらいのはやさで、だれかがすっ飛んできたのです！　それがだれだか？　みなさんにはもうおわかりですよ。そう、それはあのラグリーンの男子、リュキアでした。リュキアは今、マリエルからもらったボールを追っかけて、お空を飛びまわっていたところだったのです。

「リュキア！」マリエルが大声でさげびました。さけんだときには、リュキアはもうかなりむこうの方にまでいってしまっていました。ききききーっ！　マリエルのよぶ声に気がついて、（空中で）うしろ足で急ブレーキ！　すぐにみんなのところへともどってきたのです。

「あれえー？ お兄ちゃんたち、たきよ島に、ごようじじやなかったによ？」リユキアが、首をかしげていいました。

「ようじがすんで、今もどつてきたところだよ。」マリエルが、それにこたえてそういいます。

ですがリユキアは、「あはは。」と笑っていました。

「うそだあー。だって、今さつき、あによボール、もらったばかりだよ？ まだ、二十びようもたつていにやいじやにやーい。」

ええっ？ これは、どういうことなのでしょう？

リユキアは、うそをいうような子じやありません。とつてもすなおなのです（それはすぐにわかりますよね）。マリエルにはそれがわかっておりましたから、あごをなでながら、「うーん……」とうなつて考えこみました。

「どうやらぼくたちは、もとの場所にもどつてきただけではなく、時間も、もとの時間にまでもどつてきたようですね。」

なんと！ でもそれなら、リユキアのいつていることもなつとくがいきます。そして、マリエルのいう通りでした。みんなはイーフリープへとむかうそのちよくせん、みずみのほりでリユキアとわかれた、そのちよくこの時間にまでもどつてきたのです！ すごい！（きようふの部屋の前でなん時間も寝てしまっていましたから、助かりま

した。おくれた時間も、取りもどせましたから。そのうえ、リュキアとわかれたあと、みんなはみずうみの上を歩いていったり、精霊王のトンネルの前でひともんちやくあつたりしていたわけですが、それらの時間もすべて、取りもどすことができたのです。

もしあなたがみずうみのほとりに立っていて、かれらの去つていくところを見守つていたのだとしたら。かれらがみずうみの上を歩いていったそのすぐあとに、かれらのすがたがまるでまぼろしのように消えていって、気づいたときには、イーフリープからもどつてきたかれらが自分のすぐそばに立っていたというような、ふしぎなたいけんをすることでしょう。リュキアのいう通り、みんなはほんとうに二十びようほどこで、この場所にくたたびもどつてきました（これが、やみの精霊の谷とイーフリープとのちがいです。やみの精霊の谷でも、やはり同じように時間がすぎませんでした。でもやみの谷の場合は、その中ですごした時間だけがすぎませんでした。でもやみの谷のように、その入り口の近くからそこにむかうまでの道のりにかかった時間までも、なかつたことにしてしまうのです。さすが精霊王のくに、イーフリープ。ちよつとほかと、かくがちがうといった感じですね）。

「じゃあ、てつとり早くすませちゃおうぜ。」リズが、アップルキントの里の方をしめしながら、いいました。「かれらが、道あんないをしてくれるんだろ？ 怒りの山脈だけ？」

ロビーのさいごの旅、怒りの山脈への道のり。精霊王はラグリンたちが、その道あんないをしてくれるというのです。今思えば、さいしょにラフェルドロード里長に会ったときにも、ラフェルドロードはそんな感じのことをいっていました。かれはあのとすすでに、精霊王から自分のそのやくわりのことについて、きかされていたのです。

「イーフリープ……。ふしぎなところだった。」マリエルが、いまだに自分がそこにいたのだということが信じられないといった感じで、いいました(まだ頭がすこし、ぼうつとしています)。

「イーフリープでぼくらが得たものは、はかりしれません。それは、この世界のしくみ、そのものといつていいくらいのもです。ほんとうに、きちょうなたいけんだった。」(マリエルらしい言葉でしたが、リズはそのうしろで、「そんなに、なにかもらったわけ?」とロビーにいいながら、頭をひねっていました。なんともリズらしい。)

「ロビーさん。いよいよ、さいごの旅になります。」マリエルがつづけて、まじめな顔をしてロビーにいいました。

「あらためて、ともにゆけることをうれしく思います。ロビーさんが思い通りの力をはつきできるよう、力をつくします。」

「う、うん……。」ロビーは小さく、うなずきます。ですがロビーには、いえませんでした。さいごの旅は、自分ひとりだけでいかなくちやならない。マリエルくんとも、リズ

さんとも、ライアンとも、もうすぐおわかれになっちゃうんだということを……。

「では、いきましよう。リュキア、ボールを追っかけるのはあとにして、里長さんのところまで、もういちどつれてつてくれるかな？」

マリエルの言葉に、もつとボールであそびたかったリュキアは、さいしょ「ええーっ。」としぶりましたが、すぐに「しようがないなあ。」といつて、みんなのあんないをもういちどひき受けてくれました。

「ボールなら、よべばいつでももどつてくるよ。なんなら、もういっこあげようか？」
マリエルがそういつて、ボールを出そうと、手のひらをかざしたとたん……。

ぼわわわわんっ！

「うわっ！」思わずマリエルがびっくりして、うしろにのけぞってしまいました！

なんと！ みんなの目の前に大きさが二十フィートはあろうかというくらい、巨大な魔法のボールがひとつ、あらわれたのです！ ええっ！

「な、なんだこれー！」マリエルが、そのままべたん！ としりもちをつきながら、そのボールを見上げて、信じられないといったふうにいいました。「ぼくは、ふつうのボールを出そうとしたただけぞー！」

「イーフリープのせいかな。」リズが、自分も、ぶおん！ リュートの剣を出してみてもいいです。その剣はイーフリープで使ったときよりも、さらに力強く、しゅうしゅうと湯気まで立てていました！

「今なら、岩でもかんとんに切れそうぞ。なんか、強くなったっていうより、力のコントロールができなくなってるみたいだ。でも、ま、ほっときやいいんじゃない？ そのうち、もともにもどるだろ。」リズがあっけらかんとして、つづけます。

「むせきにんなこというなよー。」マリエルがまたぶんぶんいいましたが、自分ではどうすることもできません。ここはリズのいう通り、もとのように力を使えるようになるまで、自分のからだをすこしずつならしていくがいなさそうでした（うまく使えばもつと強力なパワーも出せそうですけど、まあ、やめておきましょう。今でもじゆうぶん強いですからー！）。

「とにかく、里までもどりましょう。」さいごに、マリエルがいました。

「ここは、しゅやくのロビーさんが先頭です。さあ、ロビーさん、いきましよう！ リズ、たのんだよ。」マリエルはそういって、ロビーの背中をおして、リュキアのあとについていきました。

「つまり、おれがこいつ、背おっていくのね……」

リズが、やれやれといった感じで、「ふう。」と深いため息をつきます。リズの足もとには、よだれをたらして気持ちよさそうにむにやむにやと眠っている、ライアンのすがたがありました。

さいごの道のりがはじまろうとしています。

25、背中に乗ってもういちど

「こんなでつかい戦い、ひさしぶりだぜ。ひやはははー！」

目の前に広がる、果てしない平原。そのはるか地へいのさきを見下ろしながら、今ひとりの人間の少年がいました。

平原のまん中には、ゆたかな水をたたえた大いなる大河が、ゆうゆうと流れています。その少年が立っていたのは、海の色まじった白い石できずかれた、巨大なとりでの白いかべの上につき出た、物見の塔の上でした。

「あそびではない……。これは、けいやく……。われのつとめを、果たすのみ……」

少年のうしろに、少年よりもはるかに大きく、全身を黒と金色のよろいかぶとでがちりとかためたおそろしい感じの男がひとり、立っていました（少年とくらべたら、まるでくまとうさぎでした）。いえ、男といました。はたしてこの者に、ほんとうにせいべつがあるのでしょうか？ なぜなら、その者の顔は……。ひええ！ あのやみの精霊にそっくりな、まっ黒な影のような顔！ そしてその影の中にぽっかりと、赤いふたつの目がかがやいているだけだったのです！（なんとというおそろしさでしょう！）その影の者が、すがたかたちと同じくらいおそろしげな、うなるような声で、少年の言葉に

そうこたえました。

「あいかわらず、おもしろくないやつだね、おまえは。」ふたたび少年が、自分のうしろに立っているその影の者にいました。「見ろよ！ この、戦いの大ぶたいを！ もう百年も、たいくつな日々とうんざりしてたところだからな。おれさまの力を、ぞんぶんに見せつけてやるよ。ひやははは！」（ひや、百年？ いったいこの少年は、なに者なのでしょう？ 見た目は、ごくふつうの、「せいかくの悪そうな」少年でしたが……）

みなさんのごそごすの通り。ここはベーカールンドのそのふたつのとりでのうちのひとつ。エリル・シャンデーインと同じ海の色まじった白い石できずかれた、ベゼロインのとりででした。おそろしい魔女たちのさくりやくにより、なすすべもなく悪の手落ちることとなった、巨大なとりで。ベゼロインとりでは今や、きたるべくこのさいごの戦いにおいての、ワットの黒の軍勢のほんきよちとなってしまうていたので……。

その黒の軍勢のほんきよちとなった、ベゼロインとりで。そのとりでの上のいちばん高いところにじんどっているからには、この少年と影の者は、黒の軍勢の中でも、そうとうにくらいの高い者たちにながいありません。そしておどろくなかれ。じつはこの者たちは、わたしたちの思っている以上の、とんでもなくおそろしい者たちだったのです。

やみのけんじやガノン。それがこの少年のしようたいでした。人間の種族の者で、身長はライアンと同じくらい。小がらで、きゃしゃなからだ。夜のやみのように黒い、肩までのびたつややかなかみ。そでのない黒いチョッキと、同じくそでのない白いシャツを着ていて（そでがないため、二のうでがむき出しになっていました）、手にはさきつばにむらさき色の石のはまった、鉄のつえを持っています（マリエルのつえにしています）。そしてその話し方からおわかりの通り、負けん気が強く、おれさまなせい（ワットの魔女つゝ三姉妹の三女、エカリンの、「男の子ばん」といったところでしょうか？）というところは、かなり悪いせい（かくです）。見た目は十三さいくらいに見えましたが、さきほどのかれのせりふからもおわかりの通り、そのほんとうのねんれいはなぞにつつまれていました。

これらのことは、ただの見た目でした。なにしろ、けんじやとよばれているほどのじつりよく者です。よほどの力がなければ、けんじやなどとはよばれません（それがよいけんじやでも、悪いけんじやでも）。そしてその通り、このやみのけんじやガノンは、このアーケランドのれきしの中において、たくさんのくにぐにが生まれるそのいぜん（むかしから、数々の悪名をとどろかしている人物でした（それはもう、とびつきりのわろがき……、いえ、悪者でした））。

そのおそろしき伝説のガノンが、黒の軍勢に加わっていたのです！ りゆうはどうあ

れ、それはこのアーラクンドのぜんなる者たちにとって、おそるべききょういであることにほかなりませんでした。

そしてガノンのうしろに立つ、影の者。黒と金色のよろいかぶとに身をつつんだ、暗黒の騎士。そのしようたいを知ったら、気の弱い者ならば、あまりのおそろしさに腰をぬかしてしまうかもしれません。このおそろしい影の者の名は、ギルハッド。ほかでもありません、このギルハッドは、やみの中の悪魔たちのことをひきい戦う、魔界のくにの王だったのです！（いわゆる、魔王というやつです！ ひええ！）

なぜそれほどのきょうふの者が、こんなところに……！ 悪いじょうだんだというのなら、怒らないからそうだといいてほしいくらいです。しかしこれは、げんじつでした。そしてすべては、やみのけんじやガノン、かれのそんざいによるものだったのです。

ガノンの力のみなもと、それは文字通り、やみの力、魔の力でした（アーザスが手にいれた力も、このやみの力でした）。ガノンは長年に渡るおそるべきけんきゅうによって、ついに悪魔たちをもしたがえる、そのおそろしきすべを身につけたのです。

魔の取りひき。ガノンはその取りひきによって、人間のげんかいはるかにこえたそんざいとなりました。そのためとしを取ることもなく、ねんれいは十三さいのままです。まっていたのです（これで、なぞのひとつはとけました）。そしてガノンのよび出した、きゆうきよくの魔。それこそが、この魔界の王ギルハッドでした。

ふつうだったら、魔界の王がひとりの人間になど、したがうはずがありません。へたをすれば、いのちさえも、あつというまにうばわれてしまいかねないのです。それほどこの取りひきはむずかしく、危険なわざでした。ですがガノンはおそるべき力を持つたけんじや。ふつうなどという言葉は、かれには通じないのです。魔界の王すらもしたかわせるほどの、じつりよく、それがこのやみのけんじや、ガノンでした（ガノンのおそろしさを、伝えることができたでしょうか？）。

魔のけいやくによつて、悪魔の王すらもしたがえる、やみのけんじや。そして、魔そのものの、魔界の王ギルハッド。このふたりの者が加わつた、黒の軍勢……。さいごの戦いがひとすじなわけはいかないということは、だれの目においてもあきらかでした。われらがベルグエルム、フェリアル、ライラ、そしてぜんなる白き勢力の者たち、かれらはいつたい、このおそろしきげんじつに、どう立ちむかえばよいのでしょうか……。？

「見ろよ。おまえの部下たちも、やつと、ごとうちやくだぜ。」

ガノンが塔の上から、とりでのうしろに広がる大平原をさしながら、ギルハッドにいました。部下たちですつて？ 魔王の部下たちつて、それはまさか……。

「ずいぶんと、待たせてくれたぜ。でも、ま、あいつらだつたら、それでも上できか。けいやくのぶんは、きつちりとはたらいでもらうからな。おまえもだぜ、ギルハッド。ひやははは！」ガノンはそういつて、高らかに笑いました。

白のとりで、ベゼロイン。そのはいごの大平原に今、おそろしい光景が広がっていった。草も土も、まるで見えないのです。空気がすらもなくなってしまうんじゃないか？ それほどにうめつくされた、黒い影……。そう、この大平原をうめつくしている、黒い影、それらはすべて、黒のよろいかぶとに身をつつんだ、おそろしき黒の軍勢の者たちでした……。

そのいつかくをしめる、魔の兵士たち。それはギルハツドの部下たち。ガノンが魔界からよびよせた、悪魔の兵士たちでした。かれらはガノンのいう通り、まさに今、魔界のとびらを通って、この大平原の地へとあらわれてきたところだったのです！ 人間の兵士たちも、悪魔の兵士たちも、かいぶつの兵士たちも、みなひとつとなつて、じんどつていました。かれらのもくてきは、ただひとつ。ベーカーランドをほろぼすこと。そのためだけに、つき進んでくるのです。

「いったい、ベーカーのやつらが、どこまで持つかな？ すこしは、楽しませてくれよ。」

ガノンのぶきみな笑い声が、ふたたび、この暗い空の下にひびいていきました。

「あれえー？ みんなや、どこいったによかにやあ？」

ラグリーンの里にもどつたりユキアが、あたりをきよろきよろとながめ渡ししながら、

首をかしげていいました。

「おかしいですね。人っ子ひとりいいない。いったい、どこへいったのか。」マリエルもあたりを見まわしながら、ふしぎがります（人っ子というより、ねこっ子といった感じですよ）。

ふたりのいう通り、もどつてきたラグリーンの里には、さいしよにここへきたときのようなラグリーンたちのすがたが、まったく見あたらなくなっていました。そのへんのしばふでひる寝をしている者や、空をぶかぶか、ただよっている者もおりません（とくに説明していませんでしたが、そういうラグリーンたちはみんながここにきたとき、ふつうにいたのです。説明を忘れたわけじゃありませんよ、うん）。みんなそろって、大ひなたぼっこ大会にでも出かけたのでしょうか？ いえ、今にかぎっては、そんなことはありませんでした（いつもだったら、あり得るかもしれません）。かれらはきたるべくさいごのときにむけて、かれらなりに、その運命をむかえ入れるじゅんびをしていたところだったのです。

「やっぱり、もどられましたね。」

ふいに、上の方から声がしました。見ると、だんだんばたけのようなたくさんの小さ

な広場のそのひとつから、今、かわのチョッキを着たふたりのねずみの種族の者たちが、こちらへとおりてくるところだったのです。かれらは、そう、ラグリーンの者のめい友である、ラットニアの者たちでした。

「ラフェルドラードどのより、でんごんをうけたまわっております。『われらは、ラグリーンの聖地、ヒアキムいせきにて待つ。さいごの旅立ちのときは、今だ』と。かれらは、あなた方が去っていくのと同時に、かれらの聖地である岩山のいせきへとむかわれました。ラフェルドラードどの、あなた方がすぐにもどられるということを知っていたのです。」

そう、ラフェルドラードは精霊王から、すべてをきかされていたのです。かつてのウルファの少年、ロビーベルク。かれがふたたび、自分のもとをおとずれるとき。そのときこそが、もういちど、かれのことをみちびくべきとき。このアークランドのみらいを分ける、運命のときなのだ。そしてその運命に敬意を払い、すべてを受けいれるため、かれらはかれらの聖地であるヒアキムのいせきという場所にまで、出かけました。その場所は、ラグリーンの者のそのつばさにせいなる力を与えるとされている、とくべつな場所でした。さいごの運命のときにあたって、ラフェルドラードをはじめとするラグリーンの者たちは、その聖地で、ロビーたちのことを待ち受けているというのです。

「ヒアキムいせきですか。」マリエルがいました。「ぼくの頭のじしよをひもとくと

……、『ヒアキムいせき。大いなるつばさの種族、ギルフィンたちがきずいた、みやこのあと。ギルフィンたちが去ってからだいぶひさしいが、いまだにこのいせきには、数々のふしぎな力が眠っているとされる。なぞ多きねこの種族、同じくつばさ持つラグリーンたちは、ギルフィンたちのまつえいとされる種族であり、かれらはこのいせきを聖地とあがめて、重要なぎようじやまつりごとをとりおこなうとされる。』なるほど、たしかにラグリーンたちにとつて、とても重要な場所のようですね。ぼくらの旅立ちを見送るのには、ふさわしい場所です。」

すごい！ マリエルの頭の中には、魔法のじしよがまるまるいつさつはいつているんですね！ さすがは、べんきよの先生のうちの子。ライアンにはまねができません！（でも「お菓子大ひやつか」とかいふ本なら、まるまるいつさつはいりそうですけど。）

「よけいなりくつなんて、どうでもいいからさ。」リズがいました。「早く、そのヒアキムいせきつてとこ、いこうぜ。こいつ、すつげえ重いんだよ。」

そうでした、リズはさつきからずつと、「ケーキをたらふく食べておなかぼんぼんになつているライアン」と、「ライアンのお菓子がぼんぼんにつまったかばん」を、背おつていたのです。さつきともくてきの場所までついてしまいたいという気持ちも、わかりますね（ぐくろうさまです）。

「ヒアキムいせきにやら、すぐそこだよ。」リュキアが、里のむこうの岩山のことをゆ

びさしながら、いいました。「ひゅんっ！ って飛んでったら、たつたによ十びようでついちやう。近い近い。」（いや、きみはそうかもしれないけど、みんなはひゅんっ！ って飛べないから……）

「じゃあ、道あんないをお願いね、リュキアくん。それじゃ、ぼくたちは、そこにむかいます。ありがとうございました。ええつと……」ロビーがリュキアにあんないをお願いしてから、でんごんを伝えてくれたラットニアのふたりにおれいをいおうとしましたが……、名まえが出てきません。みんな、舌をかみそうな名まえばかりでしたので、ロビーはかれらの名まえを、ぜんぜんおぼえていなかっただのです（ロビーはとうり、ライアンとリズ、それとリュキアも、かれらの名まえをぜんぜんおぼえていませんでしたけど。マリエルはおぼえていたみたいですが。さすがです。ちなみに、わたしもいまだにかれらの名まえは、ひき出しの中のメモを見ないと思いつせません……）。

「ラン克蘭ドール・ラルールツールです。ロビーさん、どうぞ、お気をつけて。」ラン克蘭ドールがいました。そうそう、そういう名まえでしたね。

「ありがとうございます、ラン克蘭ドールさん。」ロビーがかしこまって、こたえます（親しみをこめて、みようじはしょうりやくしていいました。親しみをこめてですよ）。

「プリンクポント・パルピンプルラツクルです。アークランドの命運は、あなたにか

かっているのです。心より、旅のせいこうをおいのりいたしております。」プリンクポントが敬礼をし、深くおじぎをしながらいいました。ラン克蘭ドールも、それにつづきます。

「ありがとう、プリンクポントさん。」ロビーはほこり高きウルファの敬礼を、このほこり高きラットニアの勇士たちにささげました（ちなみに、かれらのリーダーであるリーリングル・リマシリングルスタールは、ラグリーンたちといっしょに、ヒアキムのいせきまでおもむいていました。里に残っていたこのふたりのラットニアたちは、ロビーたちにでんごんを伝えるという、そのめいよあるおるすばんをひき受けていたのです）。

「どーこーがー、近いんだよー！」

リズがその背にライアンをかつぎながら（ロープでしっかり、からだにしばらくけてありました）、岩かべにしがみつき、ひいひいいつてさげびました。

リュキアのいう通り、たしかにヒアキムのいせきはすぐそこでした。ですけどそれは、やっぱりラググリーンたちにとつての話。ひゅんっ！　って飛んでいけない仲間たちにとつては、ヒアキムのいせきは、けわしい岩の道を越え、切り立ったがけをのぼっていくいがいたどりつけないという、とんでもなくやつかいな道のりのさきにあるいせき

だったのです！

「もんくいわないの！ これも、ロビーさんのためだろ。」マリエルが同じく、ひいはいいいながら、岩山をよじのぼっていききます（ところでマリエルは、がけをのぼる前にまた新しい服に着がえていました。こんどはかわいいのに加えて……、動きやすい服。がけのぼりにてきたうんどう着（ジャージ）に、着がえていたのです。胸に大きく、「ファイアンリー」の名まえいり。こんな服まで持ってきていたんですね。なんとも用意がいい。ちなみに、色は上下赤です）。

「だ、だいじょうぶ？ ふたりとも。ライアンなら、ぼくが背おっていくから、むりしないで。」ロビーがいいましたが、マリエルは「ロビーさんには、むだな体力を使わせるわけにはいきません。」と行って、ききいれてくれませんでした。

おわかりの通り、みんなは今、まっすぐ上へとつづいている切り立ったがけを、よいしょよいしょとのぼっているところでした。高さは八十フィートほど。ですがこのくらののがけなら、このノランベつどう隊にとつては、どうつてことないはずだと思うのですが、なぜかれらは、こんなにもくろうしているのでしょうか？

じつはそこにはまた、みんなの思いもよらないこんななが、かかわっていたからなのです。

まず第一に、この場所の岩のすべてが、「魔法をはじき飛ばす」というとんでもないせ

いしつを持った岩だったということ！ マリエルはさつそく、ふわふわえんぼんのじゆつを使って上までのぼろうとしましたが、(ちなみに、イーフリープ帰りでしたから、まだ力をコントロールするのにだいぶくろうしたのです。でもそこは、持ち前のゆうしゆうさでなんとかしました。っていうか、なんとかできちやうものなんですネ……。さすがマリエル) えんぼんを出したしゆんかんに、ぶおんっ！ 魔法のえんぼんは岩山にはじき飛ばされて、はるかむこうの空に吹っ飛んでいって、きらりん！ お星さまになつてしまいました。

「な！ なにおーう！ それならー！こんどは岩山をのぼりやすくするため、仲間たちのからだを羽のようにかかるくする、ふわふわはねはねのじゆつという魔法を使いましたが、魔法をかけたしゆんかんに、ぶおんっ！ みんなのからだの中から、今かけた魔法のエネルギーがみんな岩山にはじき飛ばされて、はるかむこうの空に吹っ飛んでいって、きらりん！ お星さま二ごうになつてしまったのです。

そういつたわけで……。みんなは自力でロツククライミングしていくほか、なくなつてしまったというわけでした。それでもほんらいシルフィアであるリスなら、魔法がなくても、こんな岩山くらいはすすいすいのぼつていけるはずでしたが、なにしろ重いライアンを背おつておりましたから、さすがにむりだったのです。そのうえこの岩山には、上にロープをひっかけられるようなところも、なにもありませんでした(せめて上に、

すっかりとした木のいっぽんでも立っていてくれたらよかったのですが。さききのぼつて上からひつぱり上げるのも、ひつぱる人がぼろぼろとした地面に足を取られてすべり落ちる危険が大きかったので、やめました（この岩場や地面はとももろく、たとえくさびをうちこんだとしても、それがすぐにはずれてしまいました。いちどリズが上にくさびをうちこんで、そこにロープをたらししてみましたが、そのロープをのぼろうとしたとたん、ずぼつ！ くさびが岩からはずれてしまったのです。ですが手足を使つてゆつくりしんちように大きな足がかりをえらんでのぼつていけば、たとえライアンを背おつていたとしても、のぼれないこともありませんでした。ですからみんなはしかたなく、からだひとつで、この岩山をのぼつていくことにしたのです。それでもねんのため、みんなはおたがいのからだをロープでしばつて、つないでいきましたが。魔法も山のぼりの道具も使えないとなると、こんなくらいのことしかできませんでしたから。

ちなみに、みんなのものつはあらかじめリズがさききのぼつて、上においてきてくれました。なにしろ、「ライアンのお菓子がばんばんにつまったかばん」や、「マリエルの服がいつぱいにつまったかばん」など、にもつが多かったですから……。小さなリキアでは、みんなをはこんでいくのもむりですし、しかもリキアは、「さきに、里長さんとこいつてるねー。早くきてねー。」といって、ひとりで飛んでいつてしまったのです……。せめてにもつくらいは、上にはこんでいつてもらいたかったです……。まさ

に、だめだめづくし！

そしてふたつ目のこんなん。それはこの場所の空気が、すごーくうすいということでした。ですから、ふつうだったらこんなていどのロッククライミングならへっちゃらなリズムでさえ、ライアンを背おって、息を切らして、ひいはあいつていたというわけなのです。

「こいつ、起きたら、まず、ひっぱたいてやるからな、おれ。」リズムが岩山をのぼりながら、胸にわき起こるもえたぎるけついをあらわにしました。

それから、十分ご……。

「ほら、ついたぞっ！」リズムががけのてっぺんを乗り越えて、たいらな地面にライアンのからだをどきさっ！と放り出して、いいました。「おれはもう、こいつ背おうのだけは、かんべんだぞ。こんなにちっこいのに、なんでこんなに、重いんだよ、まったく！」

リズムがそういつて、地面に手足を放り出して寝っころがります（よっぼどつかれたんでしようね。おつかれさまです）。そしてそのあと、マリエルとロビーもようやくのことで、てっぺんまでたどりつくことができました。

やれやれ。とんだところでたいへんな目にあってしまったが、とにかくみんなはこうして、ラググリーンたちの聖地、ヒアキムいせきのある山のとっぺんにまで、たどり

ついたのです。

そこは強い風の吹きすさぶ、さみしい岩場でした。あちらにもこちらにも、大きくて荒々しい岩がごろごろしています。植物はほとんど生えていません。そしてあたりの岩山をよく見てみると、なるほどたしかに、この場所が大むかしのまちのいせきだということがわかりました。

そのほとんどはくずれ落ちてしまっていて、たてものはほとんど、がれきの山になっていました。ですがいくらか、りっぱなはしらの数々や、あずまやのやねなどが残っております。そしていせきを進むみんなの前に、とつぜんそれはあらわれました。

大きな岩山の影からあらわれたのは、それぞれがなんとも巨大な、つばさを持ったライオンのような生きものの、ふたつの石ぞうだったのです！　なんと巨大な、つばさを持つたライオンという、みごとなちようこくなのでしょう！　まるで今にも動き出して、飛びかかってくるふんいきです。高さとともに、見上げるほど。七十フィートほどもあるのでしょうか？　それらの巨大な石のぞうが、まるでそのさきのべつ世界へとつづく門のように、ふたつならんで、ででーん！　とそびえたっていました。

「ふええ……、すごいー」ロビーが見上げて、思わずいきました。それはまるで、エリル・シャンデーーンのぎよくぎで見た女神リーナロッドのぞうのような、みごとさだつ

たのです（見た目の力強さでは、目の前のこのライオンのようなぞうの方が上かもしれない）。

「ギルフィンたちの神、ティアとギルムのぞうですね。」マリエルが同じく、見上げながらいいました。「いい伝えによれば、かれらは風そのものをあやつり、風とともに、この地におり立ったといわれています。ぼくの頭のじしよをひもとくと……」

「ひもとかなくていいよ。べつに、きょうみないし。」リズがやれやれといった感じからだ中をマツサージしながら、いいました（リズの「にもつ」は今、ロビーが背おっていました。マリエルじや、ライアンを背おっていくのはむりですから。マリエルはロビーにむだな体力を使わせたくありませんでしたが、さすがに今のリズでは、いうことをきかせられそうもありませんでしたので）。

そのとき……。その二体の石ぞうのむこう、そこは石だたみの広場になっていましたが、その広場から五、六人ほどの者たちが、こちらへとやってきたのです。それはこの場所のげんざいのあるじたち、つばさ持つねこの種族、ラグリンたちでした。

「もどつてきたにや。さいごによ力を、手にいれたか。」

ききおぼえのある、力強い声。それはラグリンの里アップルキントの長、ラフェルドロードでした。りっぱな服そうをした身分の高そうなラグリンたちや、ラットニアの使者たちのリーダー、リーリングル・リマシリングルスタールもいっしょです。は

しつこにはおなじみのリユキアがいて、となりにいる大人のラグリーンのしつぽにいたずらをしていました（じつとしていっているのはむりのようですね。「こら、やめんか。」年長さんのラグリーンに怒られておりましたが）。

「は、はい。その、たぶん……」ロビーがこたえましたが、ロビーにはまだ自信がありませんでした（まだあれからじつさいに剣を使ったわけではありませんでしたので、ほんとうにそんな力を自分が得たのかどうか？ はつきりしないからでした）。

「心配はいらにゃい。精霊王を信じるによだ。」ラフェルドロードがこたえます。たしかにその通りでした。精霊王のいったことでも、それは信じていいのです。

「ラフェルドロード里長、ぼくたちには、さいごの旅をむかえるじゅんびができています。」マリエルがみんなの前に進み出て、さほうにのつとつたおじぎをしながらいきました（服そうはジャージのままでしたが……）。「精霊王は、おっしやいました。あなた方、ほこり高きラグリーンの者たちに、助けをこえと。さいごの旅の道のりは、あなた方の、そのつばさにかかっているのですね？」

マリエルのいう通りでした。「ラグリーンの者たちに、道あんないをたのんでおいた。」あの精霊王の言葉は、そういうことだったのです。ロビーのさいごの旅、アーザスの待つ怒りの山脈へのさいごの道のりは、このラグリーンたちのほこり高きつばさによってひらかれました。かつてロビーが、かれらのその背中のつばさによって、運命の

地にまではこぼれていったように……（うしろの方では、リズが「ようするに、ラグリーの背中に乗っかって、飛んでけつてことだろ？ なにをもったいぶったいい方してるんだか。」とぶつぶついつていましたが。ま、まあ、その通りなんですけど……）。

「かつて、きみをはこんだときも、ここからだつた。」ラフェルドラードが静かな声でいいました。「わがつばさは、ギルフィンによ力。いにしえよりによ、そによ力をもつて、ロビーベルクよ。わたしは、今、ふたたび、そにやたによつばさとにやろう。さあ、まいられよ。」

ラフェルドラードがそういつて、ロビーのことを手まねきします。

いよいよ、このときがやってきたのです。

ですが、そのとき……。

「むにやむにや……、まかせて……。せいなるタドウーリの名において、精霊王さまに、心よりの敬意をひようします……」

ロビーの背中から、急に声が。そう、それはライアンでした。さいごの、ときここに来て、ようやくライアンが目をさましたのです（だいぶ寝ぼけているようですが……）。「やつと起きたか！ まず、おれからやらせろ！」リズがそういつて、ライアンのほほ

をぺっちん！（あいをこめて）ひっぱたきました。「さんざん、くろうかけさせやがって！」

「ふえ？ なになに？」ライオンがわけもわからず、びっくりしてそういいます。

「つぎはぼくです。こいつ！ なんて寝てるんだよ！」マリエルがそういつて、ライオンのわきばらを、こしょこしょ、こしょこしょ！（ねんいりに）くすぐりました（ほんとうにくすぐるんですね……）。

「わひやひやひや！ なにすんのさ、マリーー！ やめ……、わひやひやひや！ そこだめー！」

なんだかわけがわかりませんが……、とにかくライオンが目をさましたのです。ですがそれによって、みんなはこれから、とつてもたいへんな目にあうはめになってしまいました。

「あーあ。どうすんだ？ あれ。」リズがうしろの方を親ゆびでゆびさしながら、マリエルとロビーのふたりにいいました。

「まさか、あそこまで泣くなんて……。計算がいです。」マリエルが口をほかんとあけて、どうしたものかとつぶやきました。

みんなのしせんのおさき。その地面の上には……。

「なーんーでー、起こしてぐれながつだのさー！　びえええーん！　ぶわわあーん！　ぶわか、ぶわかあー！　びえええーん！」

大泣きしながら地面をころげまわる、ライアンのすがたが……。

あこがれの精霊王。アークランドのすべての精霊使いのだいひょうとして、そしてシープロンではじめて、自分が精霊王とのえつけんをつとめることになるはずだったのです。それがまさか、精霊王とひとことも言葉をかわすこともなく、眠りこんでしまふなんて！　なんとというふかく！　とうぜんライアンのそのあふれんばかりの感じようは、起こしてくれなかつたみんなに対して、ばくはつしてしまったというわけでした……。

「お、起こそうとしたんだよ。でも、ぜんぜん起きないんだもの。きつと、精霊王さまのくれたケーキ、食べすぎたんだよ。あんなに食べちゃうから……」ロビーがなんとかとりつくろおうと、ころげまわるライアンのことをせつとくしようとしてましたが……、ロビーの言葉も、あんまりききめがないみたいですね。どうやらこのまま、しばらく放っておくしかなさそうです（マリエルの魔法も、岩山にはじき飛ばされて使えませなし……）。やれやれ……。

「びええーん！　ロビーの、ぶわかあー！」

岩山から吹きおろされる風が、ほほにあたって通りすぎていきました。アツプルキントの里からほど近い、岩山の上のいせき。里ではあんなにいいおてんきでしたのに、このいせきの空は、どんよりとあつい雲におおわれていたのです（ひみつめいた場所というのは、たいていこんな空をしているものです）。そのいせきのもつともしんせいな場所。石のはしらが立ちならぶその広場のまん中に、今ロビーと仲間たちは立っていていました（ライアンだけは、いまだにむこうの地面の上で、ひぎをかかえてぐずりこんでいましたけど）。

「いだいにやるぞせん、ギルフィンによ力を、わがつばさにー！」
ラフェルドロードが空にかた手をかざし、まるでじゅもんのように言葉をとなえました。すると……。

とつぜん、ラフェルドロードのその背中のつばさが、まばゆいばかりのこがね色の光につつまれました！　そして、つぎのしゅんかん。

ぶおんっ！　ばさっ！　ばさっ！

そのこがね色のつばさが、なんばいもの大きさにまでふくれ上がって、はばたきまし

た！そしてつばさだけではありませんでした。ラフェルドロードのからだは、さきほど見たギルフィンの神さまたちの石ぞうのような、力強くたくましいすがたへと変わったのです！（これが、せいなるいせきにやどったギルフィンの力！ すごい！）

風の力をあやつつたとされる、かつての種族、ギルフィン。今この石の広場は、そのギルフィンたちの残した大いなる力にあふれていました。風がぐるぐると、広場のまわりをまわりはじめます。そしてその風はやがて、広場のまん中に立つラフェルドロードのもとに集まり、そのこがね色のつばさの中へとすいこまれていききました（ちなみに……、このギルフィンの力はこの場所ではか得ることができないのはもちろんのこと、いちにちにいちどだけ、それもせいぜい数時間ていどしか使うことのできない、とてもとくべつなものでした。そして怒りの山脈までの道のりは、そのギルフィンの力でたどりつくことのできる、ほぼぎりぎりの道のりだったのです。ですからギルフィンの力を使うために、ラフェルドロードのことをエリル・シャンティンなどのほかの場所によびよせておくというようなことも、できませんでした。怒りの山脈への出発は、ほんとうに今このとき、この場所からでなければならなかったのです）。

「さ（せい）い（い）によ、旅立ちによときだ。」ラフェルドロードがこがね色のつばさをはばたかせ、ロビーにいました。「そにやたはここから、ただひとりで、怒りによ山脈へとむかわにやければにやらにやい。それは、わかっているにや？」

ラフェルドロードの言葉、それはロビーが思っていた通りのものでした。ノランはなにもいいませんでした。ですがロビーには、だれにいわれることがなくともわかっていたのです。あるいはロビーの腰の剣が、そう教えたのかもしれない。運命のけつちやくをつけるため、さいごの戦いの場にむかうことができるのは、アーザスにたいこうすることのできる力を持った、自分だけなのだ……（たとえアーザスとちよくせつに戦うことがなくても、そこへたどりつくまでにはどうしても、アーザスのそのよこしまなる力の前にそのすがたをさらけ出さなくてはならないのです。それがアーザスの力にたいこうすることのできない者であったなら……。そう、みんなといっしょにいけば、かれらをいたずらにきずつけてしまうだけでした。だからこそロビーは、ただひとりだけで、さいごの道のりの中にむかおうとしていたのです……）。

「は……」

ロビーが静かにこたえました。すでに心は、かたまっていたのです。ですが……。仲間たちはそうではありません。マリエルもリズムも、きゆうせいしゆであるロビーのことを助けみちびくそのやくわりは、旅のさいごのさいごのときまで、つづくものだとばかり思っていましたから（とくにマリエルにとつてこの旅は、ししようであるノランからいつかわされた、はじめての大しごとでした。ノランのきたいにこたえ、さいごまでりっぱにそのやくめを果たしてやろうと、はりきっていたのです）。

「おまえ……、なにいつてんだよ。」リズがロビーに近づいて、いいました。

「まさか、ひとりでなんて、むちゃです。」マリエルも、ロビーの前にまわっていいました。

しかしマリエルとリズのふたりは、そこではつきりと、りかいしたのです。かくごをきめ、自分の運命のことをきとった、ロビーの目。その目はきゆうせいしゆとしての力強さとほこり、そして不安とかなしみ、それらのものであふれていました。

ロビーとともにいくことは、もうできないのだと……。

リズもマリエルも、それ以上なにもいうことはできませんでした。すでにロビーの運命は、自分たちのおよぶことのできない、手のとどかないところにまでいつてしまっていたのです（たとえむりやりついていったとしても、もう自分たちではそこでロビーのために、なにか力になってやれるようなことはないのです。むしろ、ロビーの足手まといになってしまっただけでした。マリエルもリズも、そのことをここで、りかいしたのです）。

「ありがとう、マリエルくん。ありがとう、リズさん。」ロビーが、仲間たちにやさしいひとみをむけていいました。「ぼくのつとめを、果たしてきます。だいじょうぶ、心配

しないで。きつと、うまくやるから。」

リズもマリエルも、うつむいたままにもいえませんでした。胸にあついものがこみ上げてくるのが、感じられました。マリエルの目には、なみだがあふれていました。くちびるをぎゅつとかんで、手にしたつえをぎゅつとにぎりしめて……。

「もどつていこよ。」

リズが、ふりしぼるようにそういいました。ロビーは静かにうなずいて、このすばらしき友、青がみのぎんゆう剣士リズの手を、がっしりとにぎってあくしゅをしました。そして。

「ありがとう、マリエルくん。きみがいてくれて、ほんとうに助けられたよ。心から。」

ロビーはそういつて、うつむいていたマリエルのことを、ぎゅつとだきしめました。

と、そのとき……。

ロビーは自分のうしろに、小さな影が見えるのに気がつきました。ロビーにはそれがなんだか？　すぐにわかりました。もう、なんべんもなんべんも、見てきた影。小さなすがたに、力いっぱいいのげんきと明るさと前むきさをつめこんだ、いちばんの友。その友の影だったのです。

「ライアン……」

ロビーがそういつて、ゆつくりとふりかえりました。そしてそこには、ロビーの思っ

た通り、ライアンのその小さなすがたがあつたのです。

とうとう、このときがきた……。

ロビーはそう思いました。この旅をはじめたときから、おそらくはかなしみの森の自分の家のほらあなを出発したときから、ロビーにはなんとなくわかつていたのです。自分の運命の中へとふみこんでいくとき、そのときがきたら、ぼくはただひとりで、さきへ進まなくちゃいけないなくなるのだらうと……。

ライアンは泣きはらしてまっ赤な目をして、しばらくだまっていたまま立っていました。両手のこぶしをぎゅつとにぎって、口を、きつ、と、ま一文字にむすんで。

「ライアン……」

ロビーがふたたび、ライアンの名まえをよびました。そして、ようやく……。「なに、かっさにきめてんのさ……」

ライアンがぼそつと、こわいくらいの顔をしていました。

「ライアン、きいて。」ロビーがいいかけました……。

「ロビーの、ばかあー！ ぼくがいなくちゃ、なんにもできないくせにー！」

ライオンが、その思いをばくはつさせました。ずっとせわがやけて、ぼくがめんどろを見てあげなくちゃ、どんな危険な目にあうか？ わかったもんじやないロビー。ぼくがついてあげなくちゃ、なんにもできないロビー。ロビーをほんとうに助けられるのは、ぼくだけなのに。ロビーのことなら、ぼくがいちばんよくわかつてるのに！

「ばかー！」ライオンはそういって、ロビーのからだを両手でぽかぽかたたきました。「うわああーん！」大声を上げて、ライオンは今までいちばん、泣きました。

ほんとうは、ライオンにもわかっていたのです。エリル・シヤンディーンにたどりついで、アルマーク王やノランからたくさんのしんじつをきかされたときあたりから、ロビーの運命が、もう自分の手にはおよばないところまで、いつてしまっているのだと。ですがライオンは、それからずっと、そのことを深く考えないようにしていました。きつと、ぼくが助けてあげられる。なにか、いい手があるよ。ライオンはさいごまで、ロビーにくつついていく方法を考えていたのです。

ほんとうならライオンのやくわりは、ロビーをアルマーク王のもとへとどけたところで、終わっていたはずなのです。ですがライオンは、(アルマーク王をおどして)ついてきました。さきのばしにしてきていた、ロビーとのわかれ。それがとうとう、やってきてしまったのです。

ライアンは、それを受けいれたくありませんでした。でも、受けいれなくてはならないのです。しかしライアンには、自分の気持ちをおさえることなんてできませんでした。ですからどうしようもないこの気持ちを、ただただロビーに、まるで子どものようにぶつけるしかなかったのです。ライアンの気持ち……、それは、痛いほどのものでした。

「ひとりでいくなんて、だめー！ だめだめ！ いっちゃやだー！」

ロビーにくい下がりがりつづけるライアンに、マリエルとリズが近づいて、その肩をつかみました。

「おい、いいかげんにしろよ。」リズが、ききわけろといわんばかりに、きつくいいました。

「きいたろ。もう、ぼくたちじや、ロビーさんを助けることは……。」マリエルが、そういうかけたとき……。

「そんなの、わかってるもん……。」ライアンが小さくいいました。

「ぼくがいちばん、よくわかってるもん……。」

ライアンはそういって、その場にへたりこんでしまいました。からだ中のすべての力が、ぬけてしまったかのようにでした。

「おまえ……。」

「ライスタ……」

リズもマリエルも、そのときになつてはじめて、ライアンのほんとうの気持ちを知つたのです。ライアンは胸が張りさけそうなくらいに、つらいのです。でも、どうすることもできない。それがわかつているから、よけいにつらいのです。だからこそ子どものように、だだをこねることしかできなかつたのだと……。

「ライアン……」ロビーがしゃがみこんで、ライアンのことをだきしめました。強くだきしめました。

「ライアン、きみに出会えて、ほんとうにうれしかった。しあわせだった。ずっとひとりぼっちだったぼくに、きみは、勇気と力を与えてくれたね。きみは、ぼくにとつて、光そのものだ。」

ロビーはそういって、ライアンのほほにそつとキスをしました。ロビーの目には、なみだがあふれていました。

「きみは、ぼくのいちばんの友だちだよ。それは、いつまでも変わらない。」

ライアンはようやくやくになつて、ロビーのことを見ました。ロビーはやさしい顔をして、自分のことを見つめていました。なにも変わっていません。なにか変わるなんてことは、すこしも思えませんでした。

「帰つてこないと、しょうちしないから……」ライアンが鼻をすすつとすすつて、目を

「ごしごしとこすりながら、いいました。「ほくを怒らせたなら、こわいんだからね。」

「あはは。」ロビーはそこでようやく、声を上げて笑いました。「そんなの、知ってるよ。だって、帰ってこなかったら、ぼく、ライアンに殺されちゃうもの。」

ライアンはちよつとだけ笑って、いいました。

「よく、わかっているじゃない。とっておきの大わざだって、まだ残ってるんだからね。」ふたりはそのまま、まるでそこだけ時間の流れがとまってしまったかのように、いつまでもいつまでもだきあっていました。

ここがね色のつばさが、空高くまい上がっていきます。

その背にロビー、ひとりを乗せて。

そのつばさからおうごんの光のつぶが、きらきらとこな雪のようにまいちつていきました。そして空に浮かんんだそのこがね色の光は、小さく遠く、あとにはなまり色の空ばかりが、広がるのみとなったのです。

「いつちやつたな……」

リズが「ふう。」と小さく息をついて、いいました。マリエルはずっと、空を見上げたままでした。

ライアンはなんともいいようのない、ふくぎつな表じようを浮かべていました。口ビーのことを信じてる。でも、ぼくがいなくて、ほんとうにだいじょうぶなんだろうか？ もしも、このまま……。

ライアンの胸が、ぎゅんぎゅんと音を立てて、しめつけられていきました。

「げんき出せよ。あいつなら、やれるさ。」

そんなライアンの肩をぽん！ とたたいて、リズがいました。ライアンはうつむいたまま、小さくうなずきます。

「ロビーって、たいしたやつだよ。おまえもいぜん、おれにそういったら？ おれのあにきのこと。あにきがたいしたことないやつなのか？ って、なまいきな口をききやがったよな。」リズが遠くの山をながめながら、つぶやきました。

「あいつなら、だいじょうぶ。たいしたやつなんだからさ。」

たきのみずうみのほとりで、ライアンにはげまされたリズ。こんどはリズが、ライアンにそのおかえしをしてあげる番なのです。ライアンはリズの方をむいてにこりと笑うと、小さな声でいきました。「ありがとう、リズ。」

ふと見ると、ライアンのすぐそばにマリエルが立っていました。そしてマリエルはライアンの手をだまつてにぎると、はつきりとしたいい方でしたのです。

「ぼくたちは、ノランベつどう隊の仲間だ。でも、ライスタ、きみは、ただの仲間じゃ

ない。」マリエルはそういつて、ライアンの手を自分の胸におきました。「まじゅつしのほこりにかけて。きみは、ぼくの、そんなけいすべき友達だよ。」

「えっ……」ライアンは思わず、顔を赤らめてしまいました。あのマリエルが急にこんなことをいい出すなんて、思ってもいませんでしたから。

「きみは、ほんとうのやさしさ、強さを持っている。それこそが、ノランおもしろさだが、いつもぼくにいつていることだ。きみとロビーさんのことを見て、その意味が今はつきりわかったよ。人のあるべきほんらいのすがたを、きみは教えてくれたんだ。心から、きみをほこりに思う。」

マリエルの言葉に、ライアンはすっかりはずかしくなっていました。ですがマリエルは、ほんきでいつていたのです。マリエルの、いがないちめんを見たようでした。「や、やめてよマリー。そんなの、はじめからわかってることじゃない。」ライアンが、なにを今さらといったようにいました。「ぼくははじめから、強くて、かわいくて、りっぱなんだよ。」

ライアンの言葉に、マリエルは急におかしくなっていました。やつぱりライスタは、ライスタのままだ。こうじゃなくちゃ。そしてマリエルとライアンは、ふたりで「ふふ。」と笑いあいました。はじめはけんかばかりしていた、マリエルとライアン。こうしてかれらは、ここに、とわの友じょうをちかいあつたのです。

「おい、かつてにもり上がるなよ。」リズが、ふたりのあいだにわつてはいつていいました。

「おれは？ おれも、そんなけいすべき友達ちだろ？ マリエル。」

マリエルは、はあ？ といった顔をして、リズのことを見ました。でもすぐに、「ふつ。」と笑つていったのです。

「まあ、いちおう、リズのこともみとめてあげるよ。」

「なんだよ、いちおうって！」

そして仲間たちは、おたがいの顔を見あつて笑いました。

「ぼくたちも、ここでぐずぐずしているわけにはいかないぞ。」マリエルがまじめな顔をして、仲間たちにいいました。「ロビーさんのために、ぼくたちにも、なにかできることがあるはずだ。」

さいごの旅へとむかったロビー。ですがロビーは、ひとりではありません。たくさん心のささえ、仲間たちの思いとともに、旅立ったのです。はなれていても、ロビーと仲間たちの心はひとつでした。ベルグエルクの心も、フェリアル心も、みんなロビーといっしょだったのです。そしていちばんたいせつな、あなたの心も。

そのとき、その場に残ったたくさんのラグリーンたち（とラットニアのリーリングル）

の中から、なんんかかのラグリーンたちがみんなのもとへとやってきました。

「ラフェルドロード里長より、もうひとつによでんごんを受けたまわっております。」
りっぱな服そうをした身分の高そうなラグリーンのひとりだが、みんなにいいました（同じような服そうをしたラグリーンたちが、全部で三人おりました。かれらはこのヒアキムいせきをかんりしている、しさいさまたちでした。このいせきはかれらラグリーンたちの、いのりの場でもあつたのです）。

「これは、精霊王よりいつかわされたもによです。ロビーベルクどによよ助けとにやれる道が、ひとつだけあると。さいごによ道によりをゆける者は、ロビーベルクどによよみ。されど、ロビーベルクどによよ助け、すくうためによ、もうひとつによそによ道を進めるによは、かれによ仲間によ、あにやた方だけだということですよ。」

これをきいて、マリエル、リズ、そしてライアンの三人は、急に目の前がぱあつと光りかがやいたかのような思いになりました。とくにライアンは、なおさらだったのです。

「ロビーを助ける道！ それこそぼくに、うってつけじゃない！」

マリエルもリズも、きょうみしんしんでラグリーンのしさいさまたちにくいがりましました。

「どんな道ですよ！」

「早く、教えてくれ！」

そして仲間たちは、しさいさまたちからおどろくべきことをきいたのです。

「そんなものが……！　ほんとうにあるとは！」　マリエルが目をまるくしていいました。

「へええ、おもしろい。そいつを見つければいいんだな？」　リズが、やったろうじやんといった感じで、「ふふっ。」と笑みを浮かべながらつづけました。

そしてライアンは……？

「いたたた……！　ちよ、ちよつと、待つて待つて！　にやー！　痛いー！」

見ると、うしろの方でライアンが、ラグリーンのしさいさまのひとりに馬なりになって、またがっているところだったのです！　ひめいを上げていたのは、そのしさいさまでした！（な、なんてばちあたりな……）

「早く早く！　早く飛んでよ！　さつきと、それを見つけないといけないんだから！」　ライアンがそういつて、またがっているしさいさまのことをせつつきました。しさい

さまは地面をばんばんたたきながら、ひめいのようにいいました。

「まだ、飛べにやいんだってば！ ギルフィンによ力をつばさにこめにやいと、重くて人は、はこべにやいんだから！ やーめーてー！」

マリエルもリズも、やれやれといった感じで頭をかかえます。まわりのラグリーンたちも、リーリングルも、口をぼかんとあけてなにもいうことができませんでした。

「いぎ、しゅっぱーつ！」

ライアンが大声で、出発のあいずです（やつぱり出発のあいずはライアンでした）。

「セイレン大橋まで、大人一まいと、子ども二まい！ ラグリーンとつきゆうびんでーす！」

「子ども二まいってのは、ぼくもはいってるんじゃないだろうな？」

（どこかできいたやりとりをしてから）こうして仲間たちは、ラグリーンたちの背に乗って空高く出発しました（三人のラグリーンたちの背中に、それぞれひとりずつ乗っていきました）。ロビーの旅立ちのあと、とつぜんに新たな旅の道のにらに出発することとなった、かれら。大いなるギルフィンの力持つラグリーンたちのつばさにはこぼれて、かれらはいったい、どこへむかうというのでしょうか？ 話しのようすでは、なにかすごいものを見つけにいくみたいですが、それはいったいなんなのでしょう？ そし

て、セイレン大橋ですって？ 旅のはじめにワットのおそろしい黒騎士たちにおそわれてしまった、あの美しいちようこくの橋。その橋にこれから、いったいどんなようじがあるというのでしょうか？

たくさんのなぞがまだまだ残されたままですが、それはどうぞこの物語のさいごのさいごのところまで、取っておいてください。きつとあなたは、そこで、どれらいものをもくげきすることになりますから……。

高く高く、あの空のむこうへ……。

こがね色のつばさがロビーを乗せて、このアーランドの空の上をかけぬけていきました。あらわれては消えてゆく、丘や森や、小川の流れ……。空気が、ごうごうという大きな音の流れとなって、すぎ去っていきます。それは自分がまるで、風そのものになったかのようにした（ギルフィンたちが風の力をあやつるといわれているりゆうも、よくわかるような気がします）。空を切りさき、前へ前へ。かれらは文字通り、このアーランドの風となって、おどろくべきほどのはやさで、この空の上をすべるように進んでいったのです（ところで、ロビーはふしぎと、この空の旅にきようふを感じませんでした。ふつうだったら、こんなに高い空の上をこんなはやさでかけぬけていったら、「ぎゃー！」ってなってしまうはずでしたのに。むかしに乗ったことがあるから、なにか

とくべつな力でもはたらいっていたのでしょうか？ これは著者のわたしにもロビー自身にも、説明のできないことだったのです。

つばさのはばたきは、さらに強く。雲のそばにまでのぼってきていました。もくてきの地までは、できるだけ高く、雲にまぎれていった方がよかったです。よけいな敵の目から、ロビーのことを守るためでした。

この空の旅でいちばんこわかったのは、あのデイルバグたちでした。デイルバグに乗った黒騎士たちが、どこを飛びまわっているものか？ わかったものではありませんでした。ですがこのとき、その心配はもうなかったのです。なぜならデイルバグの黒騎士たちはみんな、さいごの大けっせんへとむけて、ペーカーランドへと出かけていたからでした。

それはほんとうならば、ぜんぜんよろこべるようなことではありません。ですが今、ここでかれらに会ってしまうことは、いちばんさげなければならぬことでした。から、その点では、つごうがよかったといえるでしょう。しかし用心に越したことはありません。こがね色のつばさは人目を遠ざけ、なるべく目立たないように、それでいていちばんの近道を、かくじつにつき進んでいきました（ただ飛んでいくというだけではありません。ラフェルドロードはつねに安全かつ早くいける道をえらびながら、飛んでいました。これは空の旅のことを知りつくしているラフェルドロードだからこそ、で

きることだったのです。

景色はつきからつきへと、あつというまに変わっていきます。だれも知らない、魔法のエネルギーにみちたひみつのまちのそばを通りすぎていったかと思えば、いつのじだいのものなのか？ 銀色に光りかがやくなぞめいた塔が林のように立ちならんでいる、しんぴの丘の上を飛ぶこともありました。またあるときなどは、ロビーも思わずびつくりして、口をあんぐり！ とほうもなく大きなまるい岩が空に浮かんでいて、その岩の表めに大むかしの都市が、張りつくようにきずかれていたのです！（ラフェルドラードにきいても、あんなのは見たこともないということでした。そしてそのなぞの浮かぶ都市は、ゆっくりと空をただよっていて、つきはどこにあらわれるのか？ わからなかったのです。ロビーが見たのは、まったくのぐうぜんでした。うくん、おいしい！ 場所さえわかれば、ぜひたんけんに乗りに出してみたいものです。）

まったくこのアーケランドは、まだまだなぞだらけの場所ばかりでした。ロビーは空の上から見て、はじめてそれらのことを知ったのです。かなしみの森のとしよかんのどの本にだって、それらのふしぎなものについては、ただのひとことも書いてありませんでしたから。

世界はまだまだ広いのです（わかつているだけでも、西の巨大な大陸ガランタが、ドーン！ とそびえているのですから。この世界のすべてをたんけんしつくせる冒険家な

んで、きつとどこにもいないことでしょう。赤毛のほうろうのルルム、シェイディー・リルリアンにだつてむりなことです。ロビーを乗せたこがね色のつばきは、そんな広い広いふしぎの世界の上を、ただひとつのもくてき地へとむかつて飛んでいきました。

今ほどのあたりでしょうか？ アップルキントを出発してから、もう一時間か、あるいは二時間ほどもたつているように感じられました。ロビーはなんだか、雲の切れまからおひさまのすがたを見ました。おひさまはまだまだ高く、これからさらにのぼつていつております。ということ、まだおひる前。イーフリープですごした時間がそのの世界ではまったく流れていかなかったからこそ、ロビーたちはこんなにも早く、この場所を通りすぎることができていました。

それでもロビーには、流れる時間がとてももどかしく思えました。もう黒の軍勢は、エリル・シャンディーンへのこうげきをはじめているのかもしれない。ベーカーランドの人たち……。ベルグエルムさん、フェリアルさん、ライラさん……。そして南への道を進んでいった、ハミールさん、キエリフさん、レシリアさん、ルースアンさん……。かれらは今、どこでどのようにすごしているのでしょうか？ この場所にいるロビーには、それを知るすべはありません。ですがかれらは、ゆるぎなき力を持つたえいゆうたち。ロビーがもつともしんらいしている仲間たちなのです。かれらのことを信じよう。

ぼくは、ぼくのできることを、せいっぱいやるだけだ。ロビーはこのギルフィンのこがね色のつばさの上で、ロープをにぎりしめるその手に力をこめました（ラフェルドロードのからだには、その背に乗る者が落つこちないようにするためのそうびがつけられていました。ロビーは自分のからだをそこにむすびつけ、そしてそこにつけられているたづなのようなロープを、しっかりとにぎっていたのです）。

風はますますごうごうと、そのいきおいをまして流れていきました。

こがね色に光りかがやく、しんぴ的な植物たち……。その場所に立つ木々は、まるでおうごんでできているかのような、ふしぎなこがね色のががやきを放っていました。のびるえだも、葉もつるも、すべてがあわくほんのりとした、美しいかがやきにみたされていたのです。左右にならんだ木々は、まるでそのさきの世界へとつながる、門のようでした。その門のあいだには、古い古い道がいつぽん通っております（この道はこのアーケランドが生まれるいぜんから、この場所にありました！ 気の遠くなるような大むかしです）。そして道の上には、やがて木々のえだがあつくおおい重なつていき、道はそのまま、こがね色に光りかがやくおうごんのトンネルへと変わっていきました。

そのこがね色のトンネルの中を、ひとり歩いてゆく者がいました。すらりとほそく、それでいてたくましいからだつき。白と青の美しい衣服。そしてなによりいちばんい

んしよう的だったのは、そのさらさらと美しい、青いかみでした。

この青がみを見れば、みなさんにはかれがだれだか？　すぐにわかると思います。そう、かれはリュインのしきかんにしてリズのお兄さん、失われしシルフィア種族の青年、リストール・グラントでした。リストールは今、シープロンドのくにのそのまた上の山、せいなるタドウーリ連山のそのひみつの地の中へと、分けいつているところだったのです。

かつてアークランドをはんえいへとみちびいてくれた、植物の種族ネクタリア。それから百年あまり。かれらも花の騎士団も、このアークランドからすがたを消していきました。かれらが消えていった土地、それこそが、このタドウーリ連山のせいなる土地の中だったのです。そしてこのこがね色に光りかがやく木々の門のあるところを知っている者は、今やこのアークランドには、ただひとりしかいませんでした。それが、リストールだったのです。

リストールは花の騎士団を去るとき、この門の場所、そしてそのひらき方を、ぜったいに口にしないというやくそくをしていました。もししゃべれば、ネクタリアたちはこの門をえいえんにとぎし、そしてにどと、この世界へはもどつてこないことでしょう。リストールはまさに、アークランドとネクタリアたちのことをつなぐ、きぼうのかけ橋そのものだったのです。

だれも知る者のない大むかしのひみつの道を、ひとりゆくリストール。その胸に、かたいかたいこころざしをひめて、かれは進んでいきました。

今のかれには、いつもとちがうところがひとつありました。それは……、なんにも持っていないということ。リュインのしきかんであるかれは、剣のうでまえもたいしたものでした。いもうとのリズとはなんども戦って（れんしゆうとしてです。けんかじゃありませんよ）、おたがいにいっぽもひけを取らないほどのよきライバルになっていたのです（これは兄といもうとだからこそといったところでした。ふつうだったら、剣じゆうしなんやくをつとめるほどのうでまえのリズには、いかにしきかんであるリストールといえども、よういにはたちうちできるものではありません。だってリズは、あのライラとも肩をならべるほどの、剣のたつじんでしたから。ほんとうの家族であればこそ、リストールはリズの剣のたちすじを読んで、ごかくに戦うことができているのです。まあリズは今は、音楽の道にうつってしまいましたけど……）。ですがかれの腰には今、剣はさしてありませんでした。かばんもポーチも、なにも身につけておりません。リストールはほんとうに、まったくの手ぶらのままで、ここにやってきたのです。

しかしいくらせいなる地といっても、思いもよらない危険がとつぜんにふつてこないともかぎりません。武器のひとつくらいは、持っていくのがふつうでした。ですが

……。

リストールはこのほうもんがとてもとくべつなものであるということをし、よくりかいていたのです。失われしネクタリアたち。かれらはこの世界にひきもどすことができるかどうか？ それはひとえに、自分のこの両の肩にかかっていたから。

リストールはその強いかくごをあらわすために、武器もなにも持たずにここへやってきました。それはネクタリアたちへの、思いのあらわれからのことでもありません。かれらと会うのに、武器や道具はなにもいらなかったのです。必要なのは、自身のその強い心のみ。かれらにはただひたすらに心をひらき、そして心をひらいてもらうほか、ありませんでしたから（ちなみに、リストールもリズと同じように、シルフィアの力によって自分の精霊エネルギーを剣のかたちに変えて、敵をこうげきするというようなこともできましたが、リストールはそんなことをふだんからおこなっているというわけではありませんでしたし、できればそんな力は使いたくなくとも思っていたのです。リストールは自分が持つ剣は、あくまでも、ペーカーランドのほかの仲間たちと同じく、ふつうの剣であるべきだと思っていました。ですからリストールがこの地に剣もなにも持たずにやってきたのは、やはりネクタリアたちに対しての、しろうじきな心のあらわれにほかならなかつたのです）。

そのとき……。

ひゅんっ！ ぼぼんっ！

とつぜん、リストールの足もとの地面になにかが飛んできて、それがみどり色のかがよく光の波となつて、ばくはつしました！（ば、ばくだん？）

ですがリストールのからだには、なんのけがもありませんでした。見ると、リストールの立っているそのほんのちよつとさきの地面に、いつぽんの矢がささっていたのです（その矢の頭にはこがね色の羽が取りつけられていて、それがほわほわと光っていました）。そしてリストールの、その足もとの……。

植物のつるです！ 飛んできた矢からはじけた光がリストールの足にふりそそぎ、それがほんものの植物のつるとなつて、リストールの足にからみついています！ そしてさらにおどろくべきことが。

リストールの足にからみついたその植物のつるは、ぐんぐんとのびていつて、そのままりストールのからだをすつかりしりつつけてしまったのです！ これでままったく、身動きが取れません。いったいこれは……？

「ふたたびきみに会うことになろうとは、思いもしませんでしたよ。」

とつぜん、頭の上から声がひびきました！（それはふわふわとした、とらえどころのない声でした。）リストールがしせんを上にもかけてみると……、こがね色にかがやくえだの上で、ほそくて美しい、人間のようすがたをした男の人が四人、こちらのことを見下ろしていたのです。しかもそのうちの三人は、こちらへとむけて弓をかまえたままでした！（さきほどの矢は、かれらが放ったものでした。）

かれらはみな、美しいデザインのみどり色のよろいを着ていました。ですがよろいといつても、そんなにごちごちとしたものではありません。その表めんはとてもなめらかなで、たくさんの葉っぱや花があしらわれていました。そしてこのよろいは手足を動かすのにさまざまなることもなく、そのうえとてもかるいのです（じつさいこのよろいには、ほんものの木や葉っぱがざいりようとして使われていました。でもおどろくほどがんにょうで、騎士たちが着こむぶあついよろいと同じくらい、かたいのです）。

そしてかれらはみな、これまた美しいデザインの弓を持っていました。こがね色の羽のついた矢のはいったケースを、背中につけておきます。腰には小さな剣も見えました。これはあんまり使っていないようでした（弓を使うことばかりのようでしたから）。かれらのかっこうからわかること。つまりかれらは、この土地のことを守る兵士たちでした。しかし兵士といつても、よろいかぶとにがっちりと身をかためた兵士たちではなく、このように、さつそうとした身のこなしで森の中や木々の上をゆきかつて、えも

のをねらう。かれらは、いっばんにはレンジャーとよばれている、森のかりゆうどたちだったのです。その中のひとりは今、木のえだの上から、リストールにむかつて声をかけたというわけでした。

「ひさしぶりだね、クライユルト。変わりがなくてうれしいよ。」

兵士の言葉にこたえて、リストールがとてもおちついたようすでそういいました。からだ中を植物のつるでしばられているというのに、ぜんぜん気にもしていないようすです。それにリストールは、かれらのことをよく知っているようでした。ということは……？

「なにをしに、もどってきたんです？ もういちど、花の騎士団にもどりたいんですか？ ざんねんながら、それはできない。きみも知っているはずだ。騎士団は、いちどぬけた者を、ふたたびむかえ入れることはしない。」

クライユルトとよばれたその人は、そういつて、リストールのことをじつと見つめました（こんどはふつうの声でした。ききほどはまだ、かれらのすがたはいわば精霊のようなそんざいだったのであって、はつきりとした言葉でしゃべれなかつたのです。ですからふわふわとした、とらえどころのない声でした）。見た目のねんれいは、リストールと同じくらい。みどり色がかったこがね色のかみ、深いエメラルド色のひとみ。そしてみなさんのごそうぞうの通り、このクライユルトという人物をふくむかれら四人の者た

ちは、みなネクタリア種族の者たちだったのです！

かれらのすがたかたちは、ふつうの人間とあんまり変わりませんでした（みなリストールと同じくらいのとしの青年たちでした）。ですがひとつだけ、かれらがネクタリアだとすぐにわかることがありました。かれらの頭の横には、いちりんか、あるいはいくつかの、美しい花がさいっていたのです！これは人それぞれでちがう花がさいっていて、クライユルトの場合では、大きな白いゆりの花がいちりんさいっていました（ちなみに、この花は取れても、しばらくするとまたさくそうです。ですけどむりに取ろうとすると、わきばらをくすぐられてはいるかのように、とてもくすぐったいのだということでした。ネクタリアでないときよくわかりませんが……）。

クライユルトはとても美しい人でしたが、その目はつめたく、リストールのことを見すえたままでした。

「わかっている。わたしがきたのは、そのことではないよ。」リストールがおちついたようすのまま、クライユルトにいいました（ほんとうなら手のひらをクライユルトにむけてなだめたいところでしたが、しばらくしているのでできませんでした）。

「クライユルト。わたしはアーランドに残って、いろいろなものを見たよ。」リストールがつづけます。

「人々はたしかに、しぜんにさからっているかもしれない。だが、かれらには、われわ

れが知らない、いいところだつてたくさんある。アーケランドには、きぼうがあるんだ。そのアーケランドが今、めつぼうの危機にある。わたしは、アーケランドを助けたい。わたしはそのために、ここへやってきた。」

クライユルトとかれの三人の仲間たちは、みなリストールのことをじつと見つめていました。それはまるで、リストールの心の中を読み取ろうとしているかのようにでした。かれらはこのかつての仲間に対して、まだうたがいの心をすてきつてはいないようでした。

「きみたちの力を、ぜひ貸してほしい。もういちど、アーケランドのために力を貸してほしいんだ。わたしを、セハリアさまのところへつれて行ってほしい。かならず、セハリアさまの心を動かしてみせる。」

リストールがかたいけついのもと、かつての仲間たちにはいいました。それでもクライユルトたちはまだ、リストールに対してのけいかいとこうとはしません。

ですが……。

やがてかれらも、その表じょうをゆるめたのです。リストールの心には、一点のくもりもありませんでしたから。

「われらには、きみをむかえいれるきむはない。」クライユルトが、つめたくいい放ちました。

「われらはきみを、すぐに追いかえさなければならぬ。だが、きみのその心にこたえないのは、われらネクタリアの、はじだ。ネクタリアはなによりも、めいよを重んじる。そしてきみのその心にも、われらは敬意をはらう。」

クライユルトはそのまま、しばらくのあいだだまっています。そしてそれからようやくのことで、こうつげたのです。

「リストール、かつての友よ。きみに、なにができるのか？ やつてみるといい。きみの力を、ためしてみるといい。セハリアさまのところへ、きみをつれていこう。そこからさきは、きみだけの力で、道を切りひらくのだ。われらはだれも、きみを助けることはできない。」

ひみつの場所の、そのいちばんひみつの場所へ……。

ここはタドウーリ連山のおくの、そのまたおく。シープロンドの者たちすらだれも知らない、しんぴの場所でした。立ちならぶ木々はおうごんのががやきを放ち、草のいっぼんいっぼんにいたるまでが、すいしょうのかががやきを放っておりす。さきほこる花々は、まさにこの世にふたつとない宝石のよう。これらのものがしぜんのまま、あるがままに、この大むかしの広場の地面をうめつくしていました。

銀色にかがやく小さなとんぼのような生きものたちが、すいすいと空中を飛びか

いきます。そしてそのあとにつづいて……。

今この広場につづくいっぽんの古い石だたみの道を、なんんかの者たちがこちらへとむかつて歩いてきました。やってきた者たちは、五人。そのうちの四人は、みな同じようなみどり色のよろいを着ております。手には長くて美しい、弓を持っていました。そしてその四人の者たちが、まん中にいる五人目の人物のことを、取りかこんでいたのです。

いうまでもなく、五人目の人物、それはリストール・グラントでした。そしてかれのことをかこんでいるのは、かつてのリストールの友、クライユルトをはじめとするネクタリアの者たちだったのです（ところで、ネクタリアであるかれらは、見た目はみな人間の青年のようでしたが、ほんとうのねんれいはまったくわかりませんでした。ネクタリアは、ぜんぜんとしを取らないのです。そしてシルフィア種族のリストールも、ほんとうのねんれいはだれにもわかりませんでした。たしか花の騎士団がアークランドを去っていったのは、百年もむかしのことだそうですが……。つてことは、リストールもすくなくとも、百さい以上ということに……。うん、あんまりそのことについては、考えないようにしましょう。あと、リズムもそのときリストールといっしょにいたわけですから、百さい以上ということに……）。

広場にはたくさんの石のちようこくが、あちこちにころがっていました。それらはみ

な、こけむして植物のつるがまきつき、小さなたくさんの花々がさいております。よく見るとそれらのちようこくは、やりを持った兵士たちだったり、本を広げた学者のすがただったり。そしてそれらのちようこくは、すべて、ふしぎなかがやき方をするみどり色がかつた石でつくられていました。この石は、どこかで見たことがあります。そう、セイレン大橋やその橋の上の石のちようこくと、同じ石のようでした。この広場にあるちようこくも、あの橋の上のちようこくをつくった者たちと、同じ者たちがつくつたものなのでしょうか？ ですがそれも、今となつてはしらべようもありませんでした。これらのちようこくは、もうなん千年という、遠い遠いむかしにつくられたものでしたから。

その広場のそのいちばんおく、そこには同じく気の遠くなるような大むかしにつくられた、ひとつのさいだんのあとがありました。もうすっかり植物がしげり、そのすきまからわずかに、みどり色の石ぐみが見えているばかりです。そしてそのさいだんのわきに、なんん人かのネクタリアの者たちが立っていて、こちらのことをじつと見つめていました（頭の横に花がさいていましたから、すぐにネクタリアだとわかりました）。

その中のひとり、その人はほかのだれよりもまばゆい、光を放っていました（じつさに光っているわけではありません。光りかがやいているかのようなすばらしい人物ということですよ）。もう見ただけで、この人がネクタリアの中でもとてとくべつなそ

んざいであるのだということが、すぐにわかったのです。その人は、女の人でした。背が高く、すらりとしていて、長く美しいおうごんのかみ。その大きなすいこまれるようなこはく色のひとみは、静かな夕暮れのみずうみの、水めんのよう。白地にもも色で植物のようがデザインされた、みごとなよろいを着ていて、腰には同じく、白ともも色でデザインされたさやにおさまった、大きな剣をさしております。そして頭の横には、ネクタリアであることをあらわす花。この人の場合は白ともも色のまじった、美しいらの花がさいっていました（それも、たくさん）。

リストールたちの一行がこの広場にやってくると、まわりからどよめきの声が上がりました。見ると、さきほどまでは気がつきませんでした。この広場のまわりをいちめん取りかこむように、たくさんのネクタリアの者たちが集まっていたのです（かれらは自分たちのけいはいを消す、たつじんたちでした。とつぜんあらわれたり消えたりするのは、かれらのとくいわざだったのです。まるでモーグだったころのロザムンディアの、ゆうれいさんたちみたいに……）。かれらはリストールのことを見て、とてもおどろきました。このせいなるネクタリアの地にそとからの者がやってくるなんて、今までいちどたりとて、なかつたことでしたから。

そんな中、先頭をゆくクライユルトが白いよろいの女の人に近づき、うやうやしくおじぎをしていました。

「もと、花の騎士、リステロント・グランテルドにございます。セハリアさまに、かきゅうの用あつて、まいったと申しております。」（かきゅうの用というのは、ひじょうにさしせまった、だいじな急ぎのようじのことをいいます。）

クライユルトがそういうと、リストールのことをかこんでいた兵士たちが、左右にすつとしりぞきました。

兵士たちの中からすがたをあらわした、リストール（ちなみに、かれらのもとではリストールはほんとうの名まえ、リステロントという名まえを名のつていました。リストールという名は、かれがベーカーランドにうつつてから名のりはじめた名まえだったのです。でもややこしくなつてしまいますので、ここでもそのまま、リストールという名でよばせてもらいますね）。リストールはセハリアというこのネクタリアたちの長にむかつて、深々と頭を下げました。そう、クライユルトのたいどころもわかる通り、セハリアはかれらネクタリアたちのすべてをおさめる、いだいなる花の騎士団の長だったのです！ どうりで、ただごとならないふんいきを持つているはずでした（ネクタリアたちは、みずからのくにを持ちません。そのかわりに、かれらは花の騎士団をけつせいして、かれら種族たちのことをまとめ上げていました。セハリアはその花の騎士団の長。つまりそれはネクタリアの中でも、いちばんえらいということなのです。くにの中でいえば王さまか女王さまと同じくらい、えらいのでした。おまけに、このはくりよく

たつぷりのそんざい感！ クライユルトやリストールがちぢこまってしまふのも、わかりますよね。ちよつとライラに、にてるかも）。

セハリアはリストールのことを、じつと見つめていました。こうごうしいまでの美しさ、まばゆさ。このセハリアという人に見つめられたのなら、どんな人物だつて、そのみりよくのとりこになってしまふことでしょう（すいません。わたしもそのうちのひとりです）。じつさいセハリアの目にはふしぎな力があつて、見つめた者のその心のおく底を、読み取ることができました。ですからかのじよの前では、どんなかくしごともあるされないのです。それはリストールも、じゅうぶんにわかつていたことでした（もとよりリストールは、うそをいうつもりなどは、みじんもありませんでした）。

「クライユルト。」

セハリアがとつぜん、クライユルトのことをよびました。その声はいげんにみちていました。ほかのネクタリアの者たちと同じく、つめたい声でした。

「そなたのつとめは、なんであつたか？ いかなる者も、そとの世界より、このしんせいなるネクタリアの地に、ふみいれさせてはならぬ。知らぬはずではあるまいな？」

これをきいて、クライユルトは「ははつ。」ときようしくして、身をちぢこませてしまします。どうやらこのセハリアという人は、いげんたつぷりなのに加えて、か・な・り、こわい人のようですね（やつぱりライラにしていますね）。

「そ、それはじゆうぶんに、しろうちしております。ですが……」

「よい。」クライユルトがさいごまでいうまでもなく、セハリアが口をはさみました。「そなたは、その者と仲がよかつたようだな。ともになんども戦い、ネクタリアの地を守つたあいだから。気持ちがわからぬでもない。」

セハリアの言葉に、クライユルトはもういちど、「ははっ。」とちぢこまりました。

セハリアのいう通り、クライユルトはかつてリストールのいちばんの友として、たくさんの冒険をともししてきたのです。だからこそクライユルトは、ネクタリアのおきてを破つてまで、リストールのことをこの地にまねきいれました。そつけないつめたいたいどを取つていたクライユルトでしたが、その心の中では、かつての友にふたたび会えたことを、とてもうれしく思つていたのです。そしてリストールも、そのことはよくわかつていました（ほんとうの友だちというものは、口に出さずとも、心で通じあえるものなのです）。

「だが、おきてはおきて。そのほうには、追つて、ばつを与える。心するがよい。」セハリアの言葉に、クライユルトは深々とおじぎをして、わきに下がつていきました。

そのあいだも、リストールはずつと身動きもしないまま、セハリアに頭を下げつづけていました。ここではむやみに口をひらいてはいけないということを、かれはよく知つ

ていたのです。セハリアはその心を見通す目で、リストールのことをじつと見つめつけていました。

あたりには、なんともいえないぴりぴりとしたきんちようが走っております。そしてようやく、セハリアが口をひらきました。

「頭を上げよ、リステロント。」

セハリアがそういうと、リストールは、すつと頭を上げ、しせいを正しました。そのひとみは、じつとセハリアの目を見つめております。どんなかくしごともない。わたしのすべての気持ちを含み取ってほしい。リストールのかたいけついのあらわれでした。

「騎士のくらいを投げうってまで、えらんだ道。そなたはそこで、なにを見、なにを得たのか？ 今こそ、そのしんかをとうべきとき。申してみよ。」

セハリアのするどいまなざしが、つきささらんまでにリストールにむけられました。ネクタリアのすべて、花の騎士団のすべてをつかさどる、セハリア。リストールがむきあっているのは、セハリアというひとりだけの人物だけではありません。今まさにリストールは、ネクタリアというひとつの種族そのものを、相手にしていたのです。それはあまりにも大きく、そしてあまりにも力強い相手でした。

リストールの思いが、ためされるときです。

「わたしは、」リストールが、静かに口をひらきました。

「わたしは、アーケランドにきぼうを見ました。かの地には、みらいがあるのです。かがやける、みらいが。そのみらいが今、失われようとしています。」

リストールの言葉に、まわりのネクタリアたちはひそひそと、となりの者たちとなにかを話しはじめました。しかしリストールは変わることなく、力をこめて話をつづけます。

「アーケランドでは、多くの者たちが、まちがった道を進んでいます。しぜんをないがしろにし、おのれのよくぼうのために動いております。ですが同じく、多くの者たちが、まちがいを正し、みらいを切りひらこうともしているのです。みらいは、人が切りひらくもの。きまったみらいなどというものはありません。」

「かれらを見かぎり、見すてることは、たやすい。ですがそれは、あまりにも早まった考えです。かれらから、みらいを切りひらく、そのおこないをうばってはなりません。それは、すべての種族の者たちとて、同じこと。すべての種族の者たちが、みらいを切りひらく、ひどしいけんりを持っているはずです。」

「そしてそれぞれの種族は、そのために、力を貸しあつていくべきです。ひとつの種族のみがすぐれていたり、おとつていたりするなどということは、ありません。われらはみな、びょうどうにこの世界に暮らす、みらいを持つ、ひとつの仲間であるはずなのですから。」

リストールの、たましいのこもつた言葉たち。いつのまにか、ひそひそと話しをしてきた者たちも口をとぎし、リストールの言葉にすっかりその心をかたむけていました。

リストールは、そしてもういちどセハリアに、いえ、すべてのネクタリアの者たちに頭を下げ、地面にひざまずいていいました。

「どうか、かれらがみらいを切りひらく、そのための力をお貸し与えください。かれらは今、そこからのおそろしい力によつて、めつぼうの危機にさらされております。それは、かれらの運命をはずれていくものです。かれらには、どうすることもできない力です。かれらにもういちど、みらいをお与えください。それができるのは、あなた方において、ほかにないのです。どうか、お願いです。」

リストールは頭を下げたまま、ただただお願いしました。リストールにできることは、もうそれだけでした。いうべきことは、みんないったのです。すべての心を、出さしたのです。これでだめなら、もうリストールには、どうすることもできませんでした。

どれほどの時間がたったのでしょうか？

長い長いねん月を生きてきたリストールにとつても、それは気が遠くなるほどのとき
に感じられました。自分のまわりには、もうだれもないかのように感じられました。
このまま頭を上げたら、自分のまわりには、やみばかりが広がっているのではないか？
そんなふうにはさえかれには感じられたのです。

アークランドを見かぎり、去っていったネクタリアたち。かれらはリストールの心
に、どうこたえるのでしょうか？ リストールの言葉は、かれらの心にどうひびいたの
でしょうか？

すべては、ネクタリアのたみのすべてをまとめ上げる、セハリアの心ひとつでした。

「そなたは、」

セハリアの声がひびきました。もうネクタリアたちはみんな、光のむこうへ去って
いつてしまったのではないか？ そんな思いすら生まれていた中で、セハリアの声は、
まさにきぼうの光でした。

しかし……。

「ずいぶんと、口がたっしやになったものだな。それも、アークランドで得たものか

「？」

その言葉をきいたりリストールは、思わず顔を上げてしまいました。セハリアが自分のことを、じつと見つめております。その表じようは、変わらずつめたままでした。

だめだった……。リストールはそう思いました。セハリアさまを怒らせてしまった。ちようしに乗つて、しゃべりすぎてしまった……。リストールはそう思いました。

「そなたのいったことは、なにもまちがつてはおらぬ。そしてそなたの心は、すべてわたしの心にとどいた。それはみとめてやろう。」セハリアが、表じようを変えることなく、感じようをこめることもなく、つづけました。

「そなたの心には、一点のくもりもない。すべて、まことのことを申しておる。それのみとめよう。」

「だが、」セハリアはそこで、急にくるりとうしろにむきなおりました。その目のさきは、遠くみらいを見すえているかのようでした。

「そなたの申したこと、それはすべて、そなたひとりがそう感じておるだけだ。きぼうだと？　すべての者に、ひとしいけんりだと？　知つたふうなことを。ひとつの種の運命など、だれにもきめられぬ。ほろびの運命がさしさまつているのなら、あまんじて、それを受けいれるのみ。だれに、その運命を変えることができようか？　そんなものは、ただのげんそうにすぎぬ。夢まぼろしの、はかなききたいにすぎぬわ。」

遠い遠いむかしから、この世界に生きてきたセハリア。かのじよはわたしたちがそうぞうすることもできないくらいに、たくさんのことを見てきたのです。たくさんの種族の者たちが、かのじよと出会い、そしてわかれていきました。かのじよにもどうすることもできない、ほろびの運命の中に消えていった者たちのことも、セハリアは数えきれないほど見てきたのです。

セハリアの言葉は、かるがるしいものではありませんでした。セハリアはけっして、ほかの者たちのことを、つめたく見放したいわけではなかったのです。ですが、ただすくいたいという気持ちだけで手をさしのべるだけでは、どうにもならないこともあるのだということ、セハリアはだれよりもよく知っていました。めつぼうの危機にある世界。その世界にそとの世界の者たちが、あんに手をさしのべてよいものか？ おのれのむりよくさからくるぜつぼうを、ふたたび胸の中にあふれかえらせることになるだけではないのか？ セハリアは今ふたたび、そのまよいの中に立たされていたのです。それはリストールの心のその大きさを、はるかにこえている思いでした。

「なにが正しく、なにがまちがっているのか？ それはおそらく、だれにもわかるまい。」セハリアが、だれにいうともなくそういいました。もしかしたら、自分の胸の中にもういちどといかけていたのかもしれない。セハリアは古い古い石だたみの上を、こつこつと歩いていきました。

「リステロントよ、そなたの申したことは、くうきよなげんそうにすぎぬ。だが、ときにげんそうとは、げんじつの世界以上にしんじつを語るものだ。」セハリアはそういつて、その両のひとみをとじました。

そしてセハリアは、そのまま静かに、こういったのです。

「そなたのげんそうに、乗ってみるべきなのか……」

これをきいて、リストールは思わず身を起こしていいました。

「そ、それでは……」

そして、リストールはそこで、セハリアからのさいごの言葉をさずかったのです。それはリストールがはじめにのぞんでいたものとは、ちがうものでした。ですがその言葉こそが、ほろびのときをむかえようとしているアーランドのことをすくう、まさしくきぼうの光となったのです。

セハリアがふたたび、そのひとみをひらきました。そのすがたはさらにこうこうしく、さらなるしんぴの光にみちあふれているかのように感じられました。

「かんちがいをするな。わたしは、そなたの口車に乗せられたのではない。ただ、アーランドというひとつの世界のかちを、この目でみずから、もういちど見さだめたいと

思ったただけだ。すべてのネクタリアたちをすべる、花の騎士団騎士長、セハリア・シリロウの、この両の目でな。」

セハリアはそういって、ほんのわずかですが、口もとをゆるめました（つまり笑ったということですよ。セハリアが笑うなんてことはめったにあることではありませんでしたから、ネクタリアの者たちはみな、とてもおどろいたものでした）。

や、やった……！ ついにやったのです！

セハリアの心は、ネクタリアの心。リストールはついに、ネクタリアの協力を得たのです！

セハリアがその力強き右うでをさつと横にふり、いげんにみちあふれた声で、配下のネクタリアの者たちにめいじました。

「ただちに、したくをせよ！ われらはこれより、アークランドにしんげきする！ リステロント、部隊のしきは、そなたにまかせてよいのであろうな？ わたしをがっかりさせるでないぞ。」

リストールはただただかんしゃの心をもって、このいだいなるネクタリアの長に、敬意の気持ちをおぼわすばかりでした。

「ありがとうございます！　ありがとうございます……」

ゆうきゆうのえいちをほこる、花の騎士団。ネクタリアのそのたのもしきせいえいの者たちが、今百年のさいげつを越えて、ふたたびアーケランドの地へおもむこうとしています。かれらの力は、これからむかえるさいごの運命のうずの中に、どのようにひびき渡り、そしてまじりあつていくのでしょうか？

それぞれの道が今、ひとつにあわさろうとしています。

26、なまり色の空の下

暗くふきつな雲が、頭上にあつくたれこめていました。ほんらいならばおひさまの光がさんさんとふりそそぐ、まひるも近い時間だというのに、あたりはまるで、夜のそばりがおりたかのように、うす暗かったのです。ときおり、かちやかちやと、剣やよろいの立てる小さな音がきこえてきました。ですがそれはいは、みな声を立てる者もなく、すべてがしーんと静まりかえっていたのです。

その静けさの中、ふいに地面のむこうから、なにかのひびく音がきこえてきました。それはもうなんべんもきいて、おなじみになってしまった音。地面を小さくゆらしてかける、大きな生きものの音。そう、それは、馬のかける音でした。広い平原のあなたから今、二頭の騎馬たちと、そしてそれぞれの背にまたがった、ふたりの人物がやってきたのです。

近くまでやってくると、かれらが白いよろいかぶとに身をつつんだ、兵士たちであるということがわかりました。白いきぬのマントをはおっていて、そしてそのマントには、われらがきぼうのしるしがぬいこまれていたのです。それはベーカーランドの白きもんしょう。そう、かれらはわれらがベーカーランドの、ゆうかんなる兵士たちでした。

兵士たちは騎馬たちの背からおり立つと、急いでその場にひざまずき、手みじかにほうこくを伝えました。

「敵軍、すでにベゼロインへのじん、ととのえ終えております！　もはや進軍は、時間の問題かと！」

兵士たちのそのさきには、ほうこくを受けたかれらのしきかんたちが立つていました。エメラルド色のもようのはいった白いよろいに身をつつんだ、美しいこがね色のかみの少女。そしてベーカーランドのきぼうのもんしょうのはいった騎士のくさりかたびらに身をつつんだ、はい色のかみの者たち。そうです、かれらはわれらがえいゆうたち。劍のたつじん、ライラ・アシユロイ。しんのリーダーたるベルグエルム・メルサル。そのベルグエルムのたのもしき仲間でありいちばんの友でもある、フェリアル・ムーブランド。かれら三人のしきかんたちでした（ベルグエルム、ライラ、そしてフェリアルフアンのみなさん、お待たせいたしました。さいきん、かれらの出番がすくない？　このあとしつかり、かつやくしてもらいますから）。

「そっか。」

ライラがあなたを見すえながら、きびしい目をしていました。そのさきには、かすみのかかった大地のむこうに、かつての自由のとりで、ベゼロインとりでがあるので（そのとりでは今や敵のものとなり、そして黒の軍勢は今、そのとりでにじんどっている

ところだったのです。ふたりの兵士たちはそのベゼロインとりでのようすを、ていさつにいつていました。

「とくしに伝えよ。ベーカーランドは、われら白の勇士、千二百でむかえうつと。」

「はっ！」

ライラの言葉に、ほうこくにきた兵士たちはふたたび騎馬たちに乗りこんで、仲間たちのもとへとかけていきました（今は戦いの前。いくさのはじまりにはそれぞれの軍の使者たち、とくしたちが、おたがいの兵力をたしかめあつて、それからそれに見あつた兵士の数で、戦いはじめられるのです。ふつうの戦いであれば、おたがいの兵の数をたしかめあえばそれでよかつたのですが、相手がワットの場合はべつでした。黒の軍勢の兵の数が、こちらの兵力の三ばいにみたないということは、ほとんどあり得なかつたからです。黒の軍勢は相手の兵の数にあわせて、その三ばいの「とくにゆうしゆうなる兵士たち」をえらんで、戦いはじめるのがつねでした。数だけでも多いのに、しかもそれらがすべてうでいきぞろいときていましたから、ワットの黒の軍勢が強いのもうなずけるわけなのです。

そしてもうひとつ……、われらが白き勢力にとって、とても不利となるいくさのルールがありました。それはいぜん、ベゼロインとりでの戦いのにきに、わたしがすこしだけお伝えしたものののですが、もういちどくわしくお伝えしておきましょう。

それは、「同じ相手国との十四日以内でのれんぞくしたいくさの場合、前回の戦いで負けたがわのくにの兵力には、そのくにが前回の戦いで使用した兵力の四十七・五パーセントぶんが加わっているものとしてあつかわれる」というものでした（かなりややこしい文章ですが……）。これはつまり、こんかいのペーカーランドの兵力の千二百に、さきのベゼロインの戦いでもちいた七百二十名の兵力の四十七・五パーセントぶんの兵力（三百四十二名）を、加えてあつかわなければならないということになるのです（はすうは切りすてます）。つまり、じっさいの人数は千二百ですが、このペナルティの数字を加えたぶんの（千五百四十二名の）兵力があるものとして、ペーカーランドはいくさをはじめなければなりません。これにより相手国のワットは、その三ばいまでの兵力を、このいくさにもちいることができます（つまり計算すると、ワットは千五百四十二名の三ばい、四千六百二十六名までの兵力を、このいくさにもちいることができます。おそろしい数字です！）。これはくるしい戦いをいられている白き勢力にとつて、ほんとうにきびしいルールでした。

「えん軍は、のぞめませんでしたね……」ライラのとなりに立っているフェリアルが、ライラにいいました。「ノランどのは、まかせておけとおっしゃいましたが、ほんとうに、この兵力でたちうちできるのでしょうか？」

「やるしかないのだ。」ライラが前を見すえたまま、フェリアルの言葉にこたえました。

「今は、そんなことをいっている場合ではない。与えられたじょうきようで、さいだいげんの力をひき出すことが、われら、しきかんのつとめであろう?」

「そ、それはそうですが……」

フェリアルはそういつて、うしろをふりかえりました。草原のむこう、そこにはよく見なれた、エリル・シャンディーンのみちとお城がそびえています。かれらがいるのは、まちからしばらく進んだ、小高い丘の上でした。この丘のすそのにそつて、白の勇士たち、ベーカーランドの兵士たちと白の騎兵師団の騎士たちが、黒の軍勢のことをむかえうつべく、じんを張っているところだったのです。

ですがフェリアルの心配の通り、その数はあつとう的にすくないものでした。このくにを守りきれるかどうか? それはだれにも、いいきれることではなかつたのです(兵士たちの数は千二百人。そのうちエリル・シャンディーン of 兵士たちが四百、白の騎兵師団の騎士たちが三百五十、残りの四百五十は戦いのときにだけ集められる、ベーカーランドの者たちでした(この四百五十名の者たちはふだんはそれぞれのまちや村でほかのしごとをしていて、ていき的にエリル・シャンディーンをおとずれて、お城のしごとをしたり、戦いのくんれんを受けたりしていたのです。こんかいの戦いにあつて、それらすべての者たちが、兵士として集められました)。

「ライラどののいう通りだ。」ベルグエルムが、フェリアルにいいました。「きみの気持

ちは、よくわかる。だが、今は、目の前の戦いに集中するときだ。」

ベルグエルムには、フェリアルルの気持ちはよくわかっていました。なぜならベルグエルムもまた、フェリアルと同じ気持ちだったからです。フェリアルが目をむけていたさき、それはエリル・シャーンデーアのまちやお城ばかりではありませんでした。かれが思いをむけていたのは、その場所にいる仲間たち。ベゼロインの戦いで、おそろしき魔女たち（そしてその影にひそむアーザス）のさくりやくによって、やみにとらわれてしまった、その仲間たちになっただけなのです。

「かれらなら、きつと助かる。」ベルグエルムがフェリアルルの肩に手をおいて、つぶやきます。「この戦いが終わったら、ワットトの者たちに、かれらをもともどすよう、きつくめいじてやろう。魔女たちへのおしおきも、しっかり果たしてやらなければな。」

ベルグエルムはそういって、ほほ笑みました。そのじょうだんまじりの言葉は、友のフェリアルルの心を、とてもやわらげてくれました。おたがいにいちばんつらいときにこそ、はげましあい、助けあうことができる。それがほんとうの友だちというものなのです。

「ありがとうございます。」フェリアルルが、にこりと笑ってこたえました。「そうですね。」

「もうにどと、あんなまねはさせぬ。」ベルグエルムとフェリアルルのやりとりを見て、ラ

イラが横からいました。

「われら、白き勢力の底力、今こそ思いしらせてくれよう。」

そういつて、ライラは静かに、隊のもとへと歩き去っていきました(ここでひとつ、重要な説明を加えておきます。かれら、このさいごの戦いにのぞむベルグエルムたち、そして白き勇士たちは、リストールがネクタリアたちのえん軍を取りつけるというその大いなるしめいのために動いているのだということ、知りません。それはほんとうにさいごの大きなかけであつて、うまくいくほしうなども、やはりどこにもないことだつたのです。そのためノランはリストールに、この大いなるしめい、かけのことは、仲間たちにも話すべきではないだろうと伝えていました(そしてこれはかくにんの取れたことではありませんが、ノランはアルマーク王にも、そのように伝えていたようでした)。もちろん、大きなのぞみが残されていると仲間たちが前もつて知つておけば、かれらの大きなはげみとなり、勇気ともなつたことでしょう。ですがもしリストールが、ネクタリアたちの説得にしつぱいしたら……。ノランはこれらすべてのことを考えにいれたうえで、仲間たちには、このえん軍のかのうせいのこととはふせておきました。

そのことについて、じつはノランの中にも、大きなまよいがありました。さいごの戦いでは、えん軍の助けがふかけつなものとなる。えん軍のきぼうすらないじょうきよう

の中で、ベルグエルムたち、白き勇士たちのことを、このままつらくきびしい戦いの場に放り出してしまつてよいものか？　しかしノランは、やはり大けんじやという立場の点からいっても、かくじつにいえるようなことではないことをかるがるしく口にしてしまつていいような、そんな人物ではなかつたのです（これはノランにとつても、とてもつらいことでした）。そのため、さいごの戦いにのぞむベルグエルムたちにとつては、これまたとてもつらく、ざんこくなことかもしれないかもしれませんが、ノランはかれらには、くわしくはなにも伝えることなく、みずからのつとめの中に走つていきました。

「かのじよも、仲間たちのことを気にかけているのだ。」ベルグエルムが、去つていくライラのうしろすがたを見ながらいきました。「仲間たちのことは、今は、城の者たちにまかせよう。今は、前に進むべきときだ。」

「はい。」フェリアルがこたえます。

「この戦いでは、ガランドーも、敵のしきをとるだろう。おそらく、デイルバグ隊のな。」ベルグエルムがライラの背中を見つめながら、小さくつづけました。「われらは、かれと、あいまみえるかもしれない。それを、ライラどのもわかつている。ふくぎつな気持ちだろう。だが、かのじよはそのことを、すこしもおもてに出さない。りっぱなしきかんだな。われらも、かのじよの心にこたえなければ。さあ、ゆくぞ。」

そしてベルグエルムとフェリアルは、おたがいそれぞれのしきする隊の中へと、進ん

でいったのです。空はますます暗く、ほほにあたるつめたい風は、なにかのふきつな前ぶれであるかのようにでした。

むらさき色をしたぶきみなかみなりが、ごろごろと黒い空の上を走っていききました。はい色をしたこうもりのような生きものたちが、ぼさばさと、あたりの岩から岩へと飛びかっついていきます。

なんとというさみしいところなのでしょう。そしておそろしげなところなのでしょう。地面には、かれ木ばかりがぼつんぼつんとさみしげに立ち、がいこつのようなもようを背中に持った大きなかぶと虫のような生きものたちが、がじがじとその木のかわをかじっていました。まつ黒なインクのような水をたたえた池があちこちにあつて、その水めんには、ぼこぼここと大きなあぶくが立ちのぼつております。その池のほとりには、同じくまつ黒なやぎのような動物たちや、黒い木のみきのようなからだを持った人のかたちをした生きものたちが集まってきていて、ごくごくとその水を飲んでいました。

ここはいったいどこなのか？ こんな場所は、このアークランドで今までみなさんが見てきた、どんなところにもあてはまりません。やみの精霊の谷にすこしにいました。が、いくらやみの精霊とはいえ、それでもあそこは精霊たちの住む地です。精霊のエネルギーが、（それがやみの精霊のエネルギーであつても）あの土地にはあふれていまし

た。ですがこの場所には、精霊のエネルギーなんてものは、すこしも感じられません。なにかじやあくな力によって、精霊のエネルギーも、そのほかのよいエネルギーも、みんなすいつくされてしまったかのようにでした。ここはそんな、ふきつなところ。あとには、からつぽのむりよく感、そればかりが残されている、なんとも寒々しいところだったのです。ほんとうにここは、アークランドなのでしょうか？

今その黒い空のかなたから、小さな光があらわれました。それはこのぶきみな空のやみを切りさく、すくいのような光でした。点のような小さな光はだんだんと大きくなり、やがてそれは、こがね色のつぶのような光となります。そしてついに、その光の光たちがはつきりと目に見て取れるものになりました。

むらさきのいなびかりにてらされて、そのこがね色の光のしよたいがあらわになりました。それはしんぴ的なおうごんのかがやきにつつまれた、大いなるつばさの光だったのです。

ばさっ！　ばさっ！

力強いつばさのはばたき。そしてそのおうごんのつばさの背には……、われらがきゆうせいしゆ、この物語の主人公、そう、ロビーが乗っていました。ついにロビーが、ラ

フェルドラードのその背中に乗って、このおそろしい土地の空へとやってきたのです。つまりここは……?」

そう、みなさんのごそうぞうの通り、このなんとも寒々しいふきつな黒の土地は、まぎれもなく、悪にそまつたやみの魔法使いアーザスの住む、怒りの山脈でした!

「見えたぞ。」

ラフェルドラードが、その背に乗ったロビーにいいました。

「あれが、魔法使いによ城へとつづく、けっかいだ。」

けっかい? いぜん、モーグだったころのロザムンディアのまちには、魔女のアルミラのかけたのろいのけっかいが張られていました。その中にはいる者をこぼみ、あるいは出る者をこぼむ。そんなおそろしいのろいのけっかいが、ここにも張られているというのです。しかしここに張られているのは、アルミラがかけたのろいのけっかいよりも、はるかに強力で、はるかにおそろしいものでした。それもそのはず。このけっかいを張りめぐらせたのは、ほかでもありません。やみの魔法使いアーザス、ほんにんでしたから!

「わたしは、たびたび、ここによ場所までやってきた。アーザスによようすをさぐるためににや。」ラフェルドラードが前を見すえたまま、ロビーにいいました。「だが、空からでは、あによけっかいを越えることはできにやい。アーザスによ城へとゆくためには、

地上から、歩いて、けっかいを越えてゆかねばにやらにやいによだ。」

「アーザスの、けっかい……」

ロビーはおうごんのつばさごしに、かなたの空に広がるそのおそろしげな光景を目にしました。それはまさしく、悪夢の中の世界そのものでした。まっ黒な空の中に、むらさきと赤のもやもやとしたけむりのようなものが、うごめいていたのです。それはほんとうに、生きているかのようでした。ぐにぐにとそのかたちをたえず変えていて、その中に馬の頭やへびの頭のようなものがあらわれては、また、もとのけむりへともどつていくのです。あるときなどは、大きな人のようなかたちとなって、その巨大なこぶしをあたりになんのもくてきもなく、ふりおろしていました。そしてそのあとには、ただむらさき色のぶきみなかみなりのエネルギーだけが、ごろごろとまきちらかされていくのです。

ロビーははじめて、アーザスのそんごいをじかに感じ取りました。今まで、ベルグエラムや、フェリアルや、エリル・シャンティーンの人々から、その話だけをきかされてきたロビー。ロビーはここにきてようやく、自分のじっさいのはだで、アーザスのそのおそろしき、力を、感じ取ることとなったのです。

アーザスは、たしかにここにいる……。

ロビーには、それがはつきりと感じられました。腰の剣が、ずしりと、その重みをましたかのように感じられました。

「けっかいのさきは、どうなっているんですか？」

ロビーがラフェルドロードにたずねます。アーザスの待つ、怒りの山脈。そこはロビーにとつて、まったくもつて未知なる世界でした。すこしでもやくに立ちそうなことは、知っておく方がいいに越したことはありません。ですがロビーのその思いは、ほとんどかなえられなかったのです。

「わからにやい。けっかいによさきによ世界は、アーザスによやみによ魔法によつて、大きく変えられてしまつてゐるからだ。かつてこによさきは、三十年前によ、あによ大いにやる冒険によぶたいであつた。アークランドをおそつた赤りゆうが、こによさきによ山で、さいごをむかえることとなつたによだ。それいらい、こによ山に分けいった者はいにやい。アーザすがいはにや。」ラフェルドロードが、ロビーのしつもんによこたえていました。

「アーザスはここに、みずからによ城をきずいた。わたしはいぜん、けっかいによすきまから、ほんによすこしだけ、そによ城を見ることができたことがある。それはにやんともいいようににやい、おそろしい城だつた。アーザスは、そこに住んでゐるといわ

れているが、それがほんとうによことにやによかどうかはわからにやい。こによさきは、きみは、自分によ目と足で、道を乗り越えてゆかにやければにやらにやいだろう。」

ラフェルドラードの言葉に、ロビーはしばらくだまっていたままでした。敵の待つ、さいごの地。そこはかつての、大いなる戦いの場所。そして今は、よこしまなる魔法でゆがめられてしまった、のろわれたる土地であったのです。ですがロビーは、おじけづいたりなどはしませんでした。そこがどんなところであろうとも、どんなものが待ち受けていようと、ロビーは進まなければならないのです。ロビーはひとりではありません。仲間たちの思いと、つねにいっしょなのです。おそろしいアーザスのろいのけっかいのことを前にしても、ロビーの心はかたくかたく、変わることはありませんでした。

「けっかいの入り口まで、どうかお願いします。そのさきは、ぼくひとりでいきます。」

ロビーはけっかいの心を持って、ラフェルドラードにいました。ラフェルドラードはなにもいわず、ただそのおうごんのつばさに力をこめて、その思いにこたえました。その背に乗った勇者に、さいだいの敬意をこめて……。

それから、こがね色のつばさは、こののろわれたる土地の中へとおり立ったのです。そこはさきほど説明しました通り、ぶきみな生きものたちのうごめく、寒々しい土地でした。じつさいこの場所におり立った者は、ラフェルドラードをのぞいては、このアー

クランドでは数えるほどしかないことでしょう。その中の四人は、みなさんもよく知っているあの四人です。今はそれぞれがひとつのくにの王さまとなっている、かつての王子たち。そう、それはノランとともに赤りゆうたいじの冒険へと出かけた、アルマーク、メリアン、ムンドベルク、そしてアルファズレドの、四人の者たちでした。そして今、ムンドベルクの子、ロビーベルク、ロビーが、このろわれたる土地の地面をふみしめていたのです。みずからの、その大いなる運命にしたがって……。

吹きぬける風は、このきせつにはそぐわないあつい風でした。わずかにちりちりと、砂やはいのつががほほにあたつていきます。なにかのこげたようなにおいが、あたり中に立ちこめていました。地面や岩かべはなにもかもまつ黒で、それはまるで、やみがそのまま、砂や石に変わつてしまったかのようにでした（これらのものはすべて、かつてこの場所でおこなわれたりゆうとのげきせんによつて、生まれたものだといえます。りゆうの怒りのエネルギーが荒れくるい、この土地のすべてのものをやきつくし、やみとはいばかりにしてしまったのだということでした。そのりゆうがたいじされてから、もう三十年あまり。それでもいまだに、その怒りのエネルギーはおさまることなく、この土地をむしばみつづけていたのです）。

「あそつだ。」

さきに立つラフェルドロードが、前の方をゆびさしながらいいました。そこはごつご

つとした黒い岩のせり出した、暗い暗い場所でした。地上にまつ黒なあながあいていて、うつかりそこに落ちてしまったとしたら、その者はなん日もなん日も落ちつづけていつて、その果てにこの場所にたどりつくことになるのではないか？　そこはそんなおそろしいそうぞうすら頭の中に浮かんできてしまうかのような、きぼうとはまつたくむえんの、おそろしげな場所だったのです。

「あによトンネルが、アーザスによ城によ、ふもとによ地へとつづいている。だが、トンネルによさきによそによ地が、今、どうにやつているによか？　それはわたしにもわからにやい。」

黒い岩がやねのようにせり出した、その場所のまん中。そこにまるで、すべての光をすいこんでしまうかのような黒いトンネルが、ぼつかりと口をあけていました。やみの精霊の谷でも、はぐくみの森の地下いせきでも、ロビーはこんなにおそろしげな気持ちにはなりませんでした。あのトンネルのくらやみの中に、百体ものおそろしげなかいぶつたちが待ちかまえているのではないか？　中にはいったとたん、すべてのいのちのエネルギーが、そのやみの中にすいつくされてしまうのではないか？　そんなふうになさえロビーには思えました。

ですがロビーは、ここを通過していかなければならないのです。

「おそらく、アーザスはきみがここにきたことに、気づいているだろう。」ラフェルド

ロードがいました。「ここよトンネルは、力持つ者しか通ることはできにやい。わたしはいぜん、ここよトンネルによ中にはいったことがある。だが、わたしはそこで、にやんともいいようによにやい、おそろしい力にひきさかれそうににやつたによだ。にやん百という白い手が、わたしによからだにまきついて、わたしによことをひきさこうとした。わたしは、いによちからがら、どうにか逃げ出すことができたが、ここよトンネルを通ることは、にやみによ者では、むりだということを知った。」

「ここよトンネルには、アーザスによによるいがかけられているによだ。光によ力にやくして、ここよトンネルをにゆけることはできにやい。だが、きみにやら、それができるだろう。たとえアーザスによ目が、ここよしゆんかんにも、きみにむけられているとしてもにや。」

ロビーは静かにうなずきました。さいごのための、さいしよのいつぽをふみ出すときです。ロビーはその手をラフェルドロードにさし出すと、やさしくほほ笑んでいいました。

「ありがとうございます、ラフェルドロードさん。いつてきます。」

ロビーはそういつてラフェルドロードとかたいあくしゆをかわし、ペこりとおじぎをすると、その暗い暗いトンネルの入り口へとむかったのです。

「あ、それと、」トンネルの入り口で、ロビーが急にふりかえりました。「もどつたら、

ライアンに伝えてください。おいしいお菓子があつたら、きつと、持つて帰るからと。」
そしてロビーは、そのやみの中に消えていきました。

ロビーの腰の剣が、青白い光を放ちはじめます。このトンネルが、あまりにも暗かったからでした。ロビーがそう思わずとも、しぜんと剣が光つて、あたりをともしてくれたのです（はぐくみの森の地下いせき、いらいですね）。

ロビーは青く光る剣をぬいて、そのつかをぎゅつとにぎりしめました。なにかここにきて急に、ロビーはこの剣が前にもまして、自分の意志を持つているかのように感じられました。剣と言葉をかわすことはできません。ですがたしかに、感じたのです。わたしの力を使いなさい。もうじき、すべてが終わります。けつちやくのときは、すぐそこなのですと（これもイーフリープでロビーが得ることになった、新たな力のためなのでしょうか？）。

「けつちやくのとき……」ロビーは思わず、そう口にしていました。

アーザスとの、さいごの戦い。ですがロビーには、もうひとつ、とてもともたいせつなやくめが残されていました。父であるムンドベルクを、やみからすくうこと。それがロビーの背おった、そしてロビーにしかできない、さいごのつとめだったのです。

待っていてください、お父さん。

ロビーはやみのトンネルのそのさき、一点を見つめながら、心の中でいいました。ぼくがかならず、助け出すからね。

せいなる剣のせいなる光をもつてしても、さきを見通すことのできない、暗い暗いトンネル。そのおそろしいやみのトンネルの中にあつても、ロビーのその目は、くらやみのむこうに、かがやく光をたしかに見すえていたのです。

トンネルの道は、とちゆうでなんどもまがりくねっていました。そしてそとはあつくはいまじりの風が吹きつけておりましたのに、このトンネルの中は、ひんやりと、いえ、背すじがこおりついてしまいうまくないにつめたく、そのうえぶきみだったので（おぼけ？）と思つたしゆんかん、背すじがぞぞーつと寒くなったことはありませんか？ このトンネルの中は、いつもそんな感じのつめたさなのです。

白い手か……。ロビーはラフェルドロードの言葉を思い出し、トンネルのかべやてんじように剣の光をあてながら、進んでいきました。この剣なら、切つてやつつけられるかな？

しばらく進むと、トンネルはすこし広くなつているところにつながっていました。石

のはしらがあちこちに立っていて、それらがずっと上のてんじょうにまで、つながっておりません。剣の光にびっくりして、きいきいいいながら、まつ黒い影が飛び去っていきましました。はつきりとしたすがたは見えませんでした、たぶんこうもりみたいなものだろうと、ロビーは思いました（じっさいはこの生きものは、このアーケランドとはべつの世界から飛んできた、シヤグフェイという生きものでした。この生きものはむささびににいていましたが、やみからやみへ、しゅんかんいどうして消え去ることができたのです。ただし光のあたるところでは、しゅんかんいどうはできません。ですから剣の光にびっくりしたこの生きものは、自分のつばさで、大あわてで逃げていったというわけでした）。

石のはしらの立ちならぶ広間が、そこからずうとつづいていました。のぼったり、おりたり。それぞれのはしらからは黒い水がしたり落ちていて、地面に黒い水たまりをつくっております。そしてなんどか、それらの水が小さな流れとなつて、ちよろちよろと道を横切っていました（それらの流れの水の上には黒いぷるぷるとしたボールがいくつも浮かんでいて、それらがちよこまかと水の上を動きまわっていました。これらはこのトンネルの中に集まったしぜんのエネルギーがアーザスのろいとくつついて生まれた、へんてこな生きものたちだったのです。うかつにつつついたりすると、ぼちゅん！ ぼくはつして、つつついた者の顔をまつ黒けによごしてしまいました。ただそれ

だけなのですが……)。

そして(そんなへんてこな生きものたちのむれを、なんとか通りすぎていったあと)、どれほどの道のりを歩いてきたのでしょうか? ロビーはふいに、立ちどまりました。ロビーには、すぐにわかったのです。

いる……。

ロビーは剣をかまえて、あたりをけいかいしました。目にはまだ、ぜんぜんなんにも見えません。ですけどロビーにははつきりと、それがわかりました。ラフェルドロードのいつていた、白いおぼけのような手。それがこの広間のあたりいちめんから、飛び出してくる。ロビーにはそう感じられたのです。

そして……。

ロビーの感じた通り、つぎのしゅんかんには、ロビーはそれこそなん百というおぼけのような白い手たちに、すっかりかこまれていました!

いったいどこからあらわれたのか? あたりをじっと見張っていたにもかかわらず、まったくわかりませんでした。気がついたらもう、白い手たちは、かべやてんじょうや、地面やはしらから、どんどん飛び出してきていたのです。

ベルグエルムだったら、「ロビーどの、ここは、わたしが!」といって、剣で切りこんでいくことでしょう。ライアンだったら、「こんなの、ぼくがまとめて吹き飛ばしてあげ

る！」といって、（危険きわまりない）ひっさつわざを使い始めることでしょう。そしてフェリアルだったら、「ぎゃー！ おぼけー！」とさけんで、腰をぬかしてしまうはずです（「おぼけかんけい」ですから、こればかりはしかたありませんね）。

ですが……、ロビーはひとりなのです。心はひとりではありません。勇気はひとつではありません。ですがロビーはもう、ただこのいつぽんの剣だけをにぎりしめて、自分の手と足で、目の前の敵に立ちむかつていかなければなりませんでした。ひとりでの冒険というのは、そういうものなのです。

ロビーはあらためて、今までの道のりのことを思いかえしていました。ほんとうなら、ぼくははじめから、たったひとりで、危険な旅の中へとふみこんでいくはずだったんだ。思いもかけず、たくさんのすばらしい仲間たちに出会えて、助けてもらった。たくさんすばらしいものを、見つけることができた。ほんとうにぼくは、しあわせだったんだ。

ロビーは、剣をぎゅつとにぎりしめました。

みんなの思いに、ぼくはこたえなくちゃいけない。

白い手たちは、にゆるにゆるとのびて、そしてふわふわとただよっております。それ

らはまるで、海の中にゆらめく海草のむれのようにでした。ですがこの手は、そんなになまやさしいものではないのです。ラフェルドラードはもうちよつとで、この手にしめ殺されてしまうところでしたから。ロビーは全力をもって、この手とけつちやくをつければなりませんでした。

ですが……。

ロビーが剣をかまえたとたん。おどろくべきことが起こったのです。

白い手たちがぎざざーっ！ と海の波のような音を立てたかと思うと、いつせいに、もときたやみの中へとひっこんでいってしまいました！ それはいつしゆんのあいだのできごとでした。トンネルはふたたび、もとの静けさの中へとつつまれていったのです！

てんじょうから落ちてきた水てきが、ぽちやんと地面の水たまりの上に落ちて、波を広げました。白い手たちは、あとかたもなく消えてしまったのです。

いったい、どういうことだろう？ ロビーがそう思ったとたん。またしても新しいできごとが起こりました。

トンネルのくらやみのむこうから、ぼちやぼちやという音がきこえてきました。それはゆつくりと、こちらへ近づいてくるみたいです。しばらくたつて、ロビーにはそれが、足音なのだということがわかりました。ですけど足音にしては、なにかが変でした。どこか、ぎこちない感じがするのです。まっすぐだったり、まがつていたり。強かったり、弱かったり。そんなおかしな足音でした。まさか、またおぼけ？ ロビーはそう思いましたが、すぐにそうではないということがわかりました。その足音を立てていた者が、やみの中からそのすがたをあらわしたからです。トンネルのくらやみのむこうから、やつてきたのは……。

小さな十二さいくらいのねんれいの、ひとりの女の子でした！ これはいい。どうしてこんなところに、こんな女の子がいるのでしょうか？

その子はとてもかわいらしい子で、白いレースのシャツに赤いひらひらとしたドレスを着ていて、同じく赤い、ひらひらとしたスカートをはいていました。足もとには、いろいろな子ども用の長ぐつをはいております。胸には大きな白いリボンがひとつついていて、そのまん中は、かがやく大きなひとつのきいろい石でとめられていました（この石は服のボタンにも使われていました）。かみの毛と両のひとみは、きらきらとしたこ

はく色。かみを両がわでかわいくツインテールにむすんでいて、頭にはひらひらとした、白いかみかざりがつけられております。そして肩には、黒いうさぎのぬいぐるみがひとつ、ちよこんとすわっていました。

見た目は人間の女の子のようでした。ですがそうではないということがはつきりわかる、あるものがあつたのです。それはなんとも、おどろくべきものでした。

この子は、人ではなかつたのです（じゃあおぼけ？　そうでもないのです）。つまり生きものではありませんでした（じゃあやつぱりおぼけ？　ちがいますつてば）。

この子は「人形」だったので！　手足のかんせつには人形であることをしめす、つなぎ目ははいつていました！

はだは人そっくりでしたが、よく見るとかたそうな木でつくられていて、その上からていねいに絵の具がぬられているということがわかりました（絵の具といっても、水でこすつても落ちないくらいしつかりしていました）。顔も、いわれるまではわからないくらい、人そっくりに作られていました。そしてよく見れば、そのこはく色のひとみは、それもそのはず、こはくそのものがはめこまれていたのです。

いったいこの人形の子は、なに者なのでしょう？（なに者というか、人形ですけど。）

ですけどそれは、よく考えたらわかることでした。ここは怒りの山脈、アーザスのねじろなのですから。こんなところに、こんな魔法で動く、人形の子がいるとなれば……。

そう、この人形の女の子は、まぎれありません。アーザスにつかえ、そしてアーザスからこの場所に送られてきた、使者だったのです！（見た目はぜんぜん、かわいい女の子でした。ですけどこの子はまさしく、アーザスのやみの魔法、のろいの力によつて動いていたのです。まあでも、頭がかぼちやでからだがたまねぎの人形よりは、ぜんぜんましですけど。）

その子は手足をぎこぎこ動かしながら、ぼちやぼちやと長ぐつの音をひびかせて、ゆつくりとロビーの方へ歩いてきました。その歩き方はやつぱり、人形でした。いつぱいっぽ、からだのバランスを取りながら、ふみしめるように歩いてきたのです（足音がへんでこだったのは、このためです）。そして……。

「ロビーさまですな。」

人形の子が首をかしげて、にこりと笑っていました！（やつぱりしゃべるんですね！）おどろいたことに、その子は人形であるのにもかかわらず、ほんとうの人のように目や口が動いて、表じようを変えることができるようなのです（ふくわじゆつの人形みたいに、かたかた動くのではありません。ほんとうに生きもののように、なめらかに動くのです。さすがはアーザスです。悪いとはいっても、大魔法使いであることにちがひ

はありませんでした。

「お待ちしておりました。わたしは、アーザさまのめし使い、ソシーと申します。」ソシーと名のつた人形の女の子は、そういつて、ぺこりとおじぎをしました。

「ここでロビーさまのことをおむかえするよう、いいつかわされてきました。番犬のおててが、そそをいたしまして、たいへん失礼いたしました。」

番犬のおてて？ それつて、さっきの白い手のことでしょうか？（番犬なの？）

「ロビーさまには手出しをしないようにと、めいじておりましたのに。わたしが、ひっこむようにめいれいたしましたので、ご安心を。おしおきに、こんばんは、ごはんぬきにしますから。」

「え、えつと……、そんなのは、いいですから……」ロビーは思わず、あたふたと手をふつてこたえてしまいました（ごはんぬきつて、いったいあの手が、なにを食べるんでしょうか？ なぞです）。

「それより、えつと、アーザス……、さん、の、めしつかいさんなんですか？ ぼくに、その、どんなごようじなんでしょうか？」（思いもかけずかわいらしい子が出てきたので、ロビーもすつかり、こんらんしています。）

ロビーのといかけに、ソシーはもういちどぺこりと頭を下げて、いいました。

「ロビーさまのことを、アーザさまのもとへと、おつれするようにとのめいれいにこ

ございます。ロビーさまがいい、このトンネルを通すことのないようにと。ですが、おひとりでこられましたので、よろしかったですね。もし、お仲間がごいっしょでしたら、その方たちには、おひきとりいただきますよう、わたしの方からせつとくしななければいけないところでしたので。」

ソシーはにつこり笑っていいましたが、そのゆびのさきからするどいやいばが飛び出てきたのを見て、ロビーは思わず背すじがぞつとしてしまいました。やつぱりこの子は、アーザスの手下なのです。悪意がないとはいえ、やみの者たちの仲間であることに、ちがいはありませんでした（「おひきとりいただくようにせつとく」というのは、つまりこのやいばのつめをもって、力づくで追いかえずとということを意味していたのです）。

「では、ロビーさま、まいりませうか。こちらでございます。お足もとに、お気を付けてくださいませ。」

そしてロビーはソシーにいわれるまま、おそろおそろでしたが、かのじよのあとについていくことにしました。ロビーはラフェルドロードの言葉を思いかえしていました。アーザスの目が、このしゅんかんにも、きみにむけられているとしても……。あの言葉はまさしく、その通りだったのです。悪の魔法使い、アーザス。その者はどこまでも強力で、おそろしいそんざいでした。だれであろうと、いつまでもその目からのがれつづけるなどということは、できるはずもなかったのです。こがね色のつばさに乗って、口

ビーがこの地にやってくるということ。そしてひとりこのトンネルを通って、自分のもとへとやってくるということ。それらをすべて、アーザスは見通していました。

のぞむところだ。ロビーは心の中で、強くない放ちました。

ぼくのかくごを、思い知ることになるぞ。

ロビーはソシーの肩ごしに、遠く、まだ見ぬアーザスのすがたを思い浮かべていました。

「あの……、ソシー、さん？ まだなんでしょうか……？」

ロビーがしびれをきらして、前をゆく人形のソシーにたずねました。あれから、どのくらいの時間がたったのでしょうか？ 白い手（番犬のおてて）の出た広間から、このソシーにあんないされて、もうすくなくとも一時間以上も、この暗いトンネルの中を進んでいるようなのです。トンネルの中はあちこちに分かれ道があつて、たしかにあんないがなければ、すぐ道にまよってしまいそうな感じでした。ですがそれでも、どうにもおかしな感じがしたのです。こんなに長く、このトンネルがつづいてはありますがありません。トンネルのそと、空の上から見た感じでも、山をぬけてそのさきまでは、たいしたきよりではありませんでした。のろいのけっかいのせいで、ロビーにはそのさきの地上

がどうなっているのか？　そこまではわかりませんでした。ラフェルドラードの話からしても、アーザスのいるという城までは、そんなに遠くはないはずなのです（もつともアーザスの城がいつまでもそこにあるというほしよは、どこにもありませんでした。アーザスは、大魔法使い。自分の城を動かして、ほかの場所にいどうさせてしまうことなど、たやすくできたのです）。

「もうじきですよ。もうじき、すべてがよくなりますから。わたしにすべて、おまかせください。」

ソシーがロビーの方をふりむいて、いいました。

「あつ、ロビーさま、そこは危険です。あとニヤード、右を歩いてくださいませ。ちようど、ぱつくんじゆうが飛び出してくるところですから。」

ぱつくんじゆう？　いわれるままに、ロビーが右にニヤード、よけて歩いていくと……。

「ぱくんっ！　がちがちがち！」

ひええ……！　ロビーがそのまま歩いていこうとしていた、まさにその場所の地面から、とんでもなく大きな口が、ぱくんっ！　飛び出して、その歯をがちがちとかみなら

してました！ あ、あぶなかった！ こんなのかみつかれたら、ひとたまりもありません。ふたたび地面の中にひっこんでいくかいぶつ（ぱつくんじゅう）のを見ながら、ロビーはどきどきとなる胸をおさえました。

「ですから、わたしにおまかせくださいと申しております。」そんなロビーのことを見て、ソシーがつづけました。「心配にはおよびません。あなたさまに危害を加えるつもりなど、ございませんから。ロビーさまのおいのちをいただくと思えば、いつでもいただけるのですよ。でも、そんなことをしたら、アーザスさまにしかられてしまますから。」

こ、こわい……。やっぱりこの子は、アーザスの手下。こおりのようにつめたい心を持った、おそろしい相手なのです（まるで人形のようなつめたさです。人形ですけど）。しかし「わたしにまかせるように」といったソシーの言葉は、もっともなものでした。このトンネルは、危険だらけ。ロビーひとりで進んでいけば、いつまたあんなおそろしいかいぶつに、おそれないともかぎりません（しかもこれらのかいぶつたちは、悪意を持つてはいませんでした。おなかかへったからとか、なわばりに近づいたからとかいうりゆうで、こうげきしてくるのです。ですから人の悪意に反応するロビーの剣、アストラル・ブレードも、かれらにはききめがありませんでした）。くやしいことですが、このトンネルはソシーのあんななくしては、ぶじに通りぬけることは、いくら光の力を

持つロビーであつてもむりなようでした。ここはおとなしく、ソシーにしたがうほかはなさそうだったのです（それにソシーほんにんも、とんでもなく強そうですし）。

ですが……。

これは、まぎれありません。ソシーの、いえ、アーザスのわなだったのです。

アーザスが今、いちばんほしかつたもの。それはロビーの持つ剣、アストラル・ブレードではありませんでした（もちろんそれも、とつても必要でしたが）。それは、時間だったのです。

もうじき、すべてがよくなりますから。ソシーの言葉です。この言葉はまさに、そのことをあらわしていました。もうじきエリル・シャンディーンの大平原で、白き勢力と黒の軍勢、そのさいごの戦いがはじまろうとしていたのです。その戦いの果てに、アーザスがのぞんでいたこと。それはただひとつ、エリル・シャンディーンの王城にそなわる青き宝玉のことを、その手の中におさめるということでした（戦いに負けたくには、相手のぞむ土地や物などをひき渡さなければなりません。ワットはもちろん、ベーカーランドの青き宝玉のことをひき渡すようによろきゆうするつもりでした。青き宝玉の女神の光のかがやきは、悪しきやみをうちはらいます。ですからやみの力を持つアーザ

スは、いくらその光の力が弱まっているとはいえ、青き宝玉のそばに近よることができませんでした。そのためアーザスはワットの者にめいれいして、宝玉の力をすぐに、自分の魔法の力でもって、取りこんでしまうつもりだったのです。部下であるワットの者にちよくせつ青き宝玉に手をふれさせることができれば、その者を通して、宝玉の力を自身の持つ赤いキューブの中に取りこんでしまうことが、アーザスにはかのうでしたから。おもてむきは、青き宝玉の力をうばい、その力をもしのぐ赤いキューブの力をもつて、ワットにさらなるはんえいをもたらすというやくそくのもとで……。

アーザスはその戦いのけつちやくがつくまでのあいだ、ロビーを自分のもとへとたどりつかせないようにと、ソシーにめいれいしていたのです。むだな遠まわりをしてロビーのことをつれまわし、さきに青き宝玉のことをもその手の中におさめてしてしまうまでの時間を、かせぐために……（そしてそのあとでゆっくり、ロビーの持つ剣を手にいれるつもりでした。かんぜんとなった赤いキューブの力によって青き宝玉のことをなきものにしてしまう前に、さきに宝玉の力を取りこんでしまうことができれば、剣の力を待たずとも、そのぶんアーザスは、自身の持つキューブの力をさらに強力なものにすることができたのです。アーザスはその力を、ロビーに見せつけてやろうとしました。そうなればロビーから剣をうばい取り、キューブの力をかんぜんなものにするなどということは、さらにかんたんなことになるのです。

もちろん今のままでもロビーをやつつけることなんて、アーザスはたやすいことだと思っていました。ですがアーザスは、自身のそのさらなる力を見せつけることに加え、青き宝玉の力を、そしてこのアークランドそのもののもその手の中におさめたというじじつまでも、ロビーにつきつけて、ロビーの心にかんぜんなるぜつぼうをうえつけてやろうと考えたのです。ロビーのその心を、ぐしやぐしやおしつぶしてやろうとしました。なんとというひどいやつなんでしょう！ アーザスはそのために時間をほっし、ソシーにめいれいして、ロビーをこうしてつれまわさせていたのです。ロビーのことをよりいっそういたぶって、楽しむ、そのためだけに……。

時間がなによりもたいせつなのだということは、ロビーももちろんしようちいしました（いつさいこの戦いがはじまって、アーザスのそのよこしまなるさいこのやみの力が、みんなのもとにふりかからないともしれないのですから）。こんなところで、むだな時間をついやすわけにはいきません。ですが……。

もはやロビーには、どうすることもできませんでした。ひとりでさきに進もうにも、こんなにいりくんだところにはいりこんでしまつては、もう道もわかりません（ソシーはわざとロビーのことを、このトンネルのいちばんふくざつで、しかもいちばん危険な場所へと、さそいこんでいました）。危険なかいぶつたちから、のがれるすべもないのです。それにアーザスの手下であるこのソシーという子をなんとかしないことには、はじ

めからそれもむりでした。ロビーはまんまと、アースにしてやられてしまったのです。

「あの丘の、むこうへ、バスケットを持って。」ソシーの上きげんな歌声が、暗いトンネルのかべにこだまして、どこまでもひびいてきました（歌まで！よくできたお人形です。あまりじょうずとはいえませんでしたか……）。

そのとき……！

ロビーのからだに、ふしぎなことが起こりました。まるで深い深い海の底にまで、自分のからだがいずみこんでいくかのような、ふしぎな感かく。

あたりはまっくらでした。そしてそこから、ひとつの光が生まれて……。

ロビー、ついに、さいごのときがきました。

その光の中から、いげんにみちた、ふしぎな声がひびいてきたのです！（女の人の声のようでした。）

だれ？　くらやみの中で、ロビーはその光にむかってさげびました。
あなたはだれ？

ロビー、さあ、立ち上がるのです。道は、あなたの前にひらけています。進みなさい、
ロビー。

そして光はまた、もとのくらやみの中へと消えていったのです。

「待ってー！」

ロビーがさげぶと、目の前にはただ、もとの暗いトンネルばかりが広がっていました。すべては、いっしゆんのあいだのできごとでした。道のすこし前には、ソシーのすがたもあります。いったい今のは、なんだったのでしょうか？　夢か、まぼろしか。

「どうかされましたか？」ソシーがきよとんとした顔をして、ロビーのことを見ていました。「待てとおっしゃるのなら、なん時間でもお待ちいたしますが。」

そのとき、ロビーは手にした剣のことで見えておどろきました。剣から今までに見たこともないような、うねかえったうずのような力があふれていたのです！

そして……。

ばああーっ！

！
剣からまつ白い光があふれ出して、トンネルの中をまばゆく白く、てらし上げました

「きやー！」ソシーがその白い光にてらされて、ひめいを上げます。

「こわい、こわい！ やめて！ その光、やめてえー！」

ソシーは手で顔をおおって、ちぢこまってしまいました。なにがなんだか？ わかりませんでした。とにかくこれは、大きなチャンスです。このまま、アーザスのところまで！ もうアーザスのわななんか、足どめされている場合ではありません！

「アーザスのところまで、ぼくをつれていくんだ。」ロビーが、白い光につつまれた剣をソシーにつきつけながら、いいました。

「もうぼくは、まどわされぬ。きみのおどしは、もうきかないぞ。」

「わかりました！ わかりましたから！」ソシーが顔をおおいながら、泣く泣くこたえます。「その光を、消してください！ 絵の具がとけてしまいます！」

それをきいて、ロビーは剣を半分、腰のさやにしまいました（自分でもどうやればこの光を消せるのか？ わかりませんでしたから）。これで光は半分ですが、あいかわら

ずトンネルの中は、まひるのように明るいのです。

「きみがなにもしなければ、ぼくもなにもしない。」ロビーがおちついた声で、つづけました。「まっすぐ、アーザスのところまでつれていくんだ。よけいなことを考えたら、こうだぞ。」

そういつてロビーは、腰の剣をちよつとだけ長くひきぬきます。白い光がさらにはげしく、トンネルとソシーのことをてらし上げました。

「なにもしません！　いうことをききますから！　アーザスさまのところへ、おつれます！　だから、ゆるしてえー！」

ちよつとかわいそうになってきましたね。ほんとうはロビーだって、こんな、相手をおどかすようなまねは、したくはなかったのです（それはみなさんも、よくおわかりですよね）。これ以上ひどい目にあわせるのも、ロビーのキャラクターじゃありませんし、もうかんべんしてあげましょう（ロビーはせいぎの主人公なのですから。ライアンだったら、ようしやなさそうですけど……）。

ロビーは剣を半分以上、さやにしまいました。そしていつでも剣をぬけるぞといったそぶりを見せながら、大急ぎで、ソシーにいったのです。

「さあ、早くあんないして！　時間がないんだから！」

空にはえんえんと、あつい雲がつづいていました。きおんは朝よりもっと、ひくく
なっているみたいです。今にもひと雨、きそうなふんいきでした。つめたい風がひとす
じ、ひゆううと、まるでむれからはぐれたいっぴきのけもののように通りすぎていきま
した。

じこくはもうすぐ、みつばちのこくげん。おひるちようどをむかえようとしていまし
た。みつばちのこくげんというのに、あたりはだいぶ、ものさびしげです。ほんらいな
らば、おひさまがいちばん高くのぼる時間でした。しかしそのおひさまも、あつくたれ
こめた雲のむこうにかくれ、そのかがやきはずんぜん感じられなかつたのです。

そしてこの日、この時間。それはこのアーケランドのれきしに残る、大きな大きなと
きとなりました。なぜなら……。

ぶおおおーっ！　ぶおおおーっ！

あたりいちめんに、ぶきみなひくいつのぶえの音がこだましました。
そしてその音につづいて……。

「おおおーっ！」「いーがあーっ！」「ぐおおおー……！」「

そのつのぶえの音をもかき消す、たくさんのたくさんの、おそろしいおたけび！
さらには……。

がち！ がち！ がち！ がち！

うちつける、はがねのこだま！ それはまるで、ぜつぼうの海によせる波のように、この平原のすみずみにまでぶきみに広がっていききました。

もう、おわかりでしょう。これらのもの、それはすべて、ワットの黒の軍勢の者たちの立てる、おそろしいいくさの音たちだったのです（がちがちという音は、かれらがその手に持ったおそろしい武器を、同じくおそろしいやよろいにぶつけて立てている、その音でした。むかいあういくさの相手を、いかくし、きようふさせるために）。
ここはエリル・シャンディーンのまちの前まで広がる、大平原。大河ティーンディーンのその大いなる流れのすそに広がった、静かなる平原でした。その静かなる平原のむこうから今、剣とたてとよろいかぶとに身をかためた黒の軍勢の者たちが、はしからはしまで、悪夢のような黒いかべとなって、おしよせてきたのです。

みつばちのこくげん、それが戦いのはじまりでした。おたがいの軍が使者と使者とを

かわしい、このじこくに戦いをはじめよう、取りきめられたのです。ベーカーランドの兵は戦える者をみんな集めても、ようやく千二百。いっぽうの黒の軍勢は、いうまでもなく、この戦いでもちいることのできるそのさいだいの人数でした（せいにかくには、いぜんにもお伝えしました通り、四千六百二十六名でした。ほんとうにきつちり、数が守られていければの話ですが）。しかも黒の軍勢のかれらは、ただの兵士たちではなかったのです。かれらはみな、戦いのエキスパート。せいえいぞろい。ひとりで五人ぶんもはたらけるほどの、つわものたちばかりでした。

さらに、それだけではありませんでした。かれらがみな「人」であったのなら、まだわれらが白き者たちの戦う勇氣も、ちぢこまつたりはしないことでしょう。ですが黒の軍勢は、人だけではなかったのです。

たくさんの、かいぶつの兵士たち。巨大なくまのようなかいぶつや、目玉だけのかいぶつ。へびやかげのようなかいぶつ。そしてここに書くこともためられるような、なんともぶきみな生きものたち……。それらが同じくらいおそろしいかいぶつのしきかんのもとに集められ、隊をなしていたのです。

そして……、もつともおそろしき者たち。それはみなさんももうごぞんじの通り、やみのけんじやガノンによびよせられた、魔界の王ギルハッド、そしてそのもとにつどつた悪魔の兵士たち、そのかれらでした。かれらが金色にふち取られた黒いよろいかぶと

に身をつつみ、そのかぶとのあいだからまっ赤な目をのぞかせながら、こうしんしてくるのです。その手にとんでもないほどに大きな、もえるサーベルをいっぽん、にぎりしめて……。

のろわれたる土地からよびよせられた、おそろしいかいぶつたち。そして魔界の王ギルハッドそのものにひきいられた、悪魔の軍勢の者たち……。こんなにおそろしい相手か、今までにいたでしょうか？　今までベーカーランドの勇者たちも、ワットの軍勢とはなんども戦って、たくさんの勝ちをおさめてきました。しかしこれほどおそろしい戦いが、今までにあったでしょうか？

なみの者であれば、そのおそろしいすがたを見ただけで、腰をぬかすか、剣を投げすてて、逃げ去ってしまうにちがいありません。それがふつうなのです。ですがそんなことが、できるはずもありません。そしてわれらが白き勇者たちが、そんなことをするはずもありません。おそろしさは、かれらも感じていました。ですがかれらが、にぎった剣をはずすとき……。それは敵のなきけようしやのないこうげきの前に、もはや戦うこともできないほどの、深いきずを負ったときだけなのです。この戦いは、そういう戦いでした。いくさのおきては、たしかにそんなざいします。ですがそのおきてにしたがつていてもなお、いのちを落とす者があらわれてもせんぜんおかしくない、そういう戦いでした。今までにない、このアーケランドの運命をきめる、だいじなだいじな戦いでした。

エリル・シャンディーンの戦いがはじまったのです。

ばばばばー！ ばばばばー！

平原に、美しくもいさましいラツパの音色がひびき渡りました。これは、ベーカーランドの白き勢力の者たちのラツパです。

「勇者たちよ！ ふるい立て！」ライラの力強い言葉が、その音色のあとにつづきました。

「勇気とわざを、見せるは今ぞ！」

いのちをもあずけることのできる、すばらしいしきかんの言葉。それは白き勇者たちの心をふるい立たせ、力づけ、はげましました。すばらしいエネルギーとなって、戦う者たちの心にしみ渡っていきました。ただそこにいるというだけで、すべての者たちの心はひとつにまとまり、かれらにいつも以上の力をひき出させることができる。それがしきかんというものなのです。そしてライラは（ちよつぴりこわいところもありました）そのすべての面において、もんくなしにすばらしいしきかんでした。

「おおおーっ！」

丘の上に、白き勇者たちのいさましい声がひびき渡ります。かれらは白の騎兵師団の

人間隊の騎士たち、そしてライラのもとにいきましい剣のくんれんを受けた、せいえいの者たちでした。

「ほこりを胸に！ 今こそ、われらがあかし、立てるときー！」

そのむこうで声を張り上げたのは、われらがベルグエルムでした。ベルグエルムもまた、白の騎兵師団の隊長。ウルファの隊をまとめ上げる、すばらしきしきかんなのです（今まで冒険のぶたいばかりでかれのかつやくを見てきたみなさんにとつては、しきかんとしてのベルグエルムのすがたに、ちよつとまどいを感じるかもしれないね。ですがほんとうのかれは、いくさの場において、このように兵士たちのことをまとめてみなをしようりへとみちびく、しきかんであるのです。でもわたしもふくめて多くの方が、こう思っているはずですよ。ベルグエルムには、冒険の旅の方があつていふつか、そんなに遠くないことでしょう。ベルグエルムがいくさの場でみんなをひきいていなくてもすむむときが、やってくるはずですよ。そう、いくさのない、へいわな世の中が）。

「きずついた友のため！ われらがほこりのため！ 戦うときだー！」

「おおおーっ！」

ベルグエルムの言葉に、かれのもとにつどった勇者たちはみな、剣をかかげてふるい立ちました。

「副長ーっ！」べつの隊の中から、だれかがさげびました。

「フェリアル副長からも、お言葉をひとことー！」

それはベルグエルムの隊の、ちよつとむこう。もうひとつの隊をひきいる、われらがフェリアルにむけての言葉でした。その言葉をきいて、隊のみんなは思わず笑みまでもらして、フェリアルのことをはやし立てはじめます。

「ああ、うむ。」フェリアルはそういって、「こほん。」とせきばらいをしてから、いげんにみちたいい方をしようどがんばって（フェリアルにとっては、それはなかなかむずかしいことのようにでしたから）言葉をつづけました。

「きみたちは、すばらしい勇士たちだ！」フェリアルがこぶしをふり上げて、さげびました。

「ともに戦えることを、ほこりに思う！ みんな助けあって、がんばろう！ 勝つてぶたたび、この手にえいこうをつかむのだ！ みんなのために！ 祖国のために！」

すなおで、そしてちよつと古くさい、フェリアルの言葉。フェリアルはまだまだ、力やけいけんからいつたら、隊長に上がるのにはふじゆうぶんかもしれません。ですがそれでも、みんなの心をつかみ、ひきつけるすばらしいみりよくが、フェリアルにはあったのです（それはみなさんも、よくごぞんじですよ）。

「おおおーっ！」

そしてみんなも、そんなフェリアルルの言葉にしつかりとこたえました。

「だいじょうぶですよ、副長！」ひとりの若い騎士がさげびました。「おぼけはみんな、わたしたちでやつつけますから！」

隊の中から、大きな笑い声が生まれます。みんなフェリアルルの「弱点」については、もう知りつくしておりましたから。

「副長には、とびきり強そうないぶつをおまかせします！」

また、笑い声。このフェリアルルの隊はライラやベルグエルムの隊とはちがって、だいぶくだけたふんいきでした。みんなフェリアルルのよき仲間たちであり、よき友人たちでした。立場こそフェリアルルは白の騎兵師団の副長としてしきかんのやくめを負っておりましたが、そこからはなれば、ほかの兵士たちと同じ、みんなともに剣を学び、わざをきたえあつた、仲間たちだったのです（とうぜんベルグエルムやライラからも、きびしいいくんれんを受けてきたのです）。フェリアルルはそのにくめない、それでいてやるときはやる、そんなキャラクターによって、みんなからとてもあいされていました（ちよつとどじで、目がはなせないというのも、フェリアルルの人気りのゆうのひとつでした）。このさいこの戦いにおいても、それは同じでした。みんなはそんなフェリアルルのもとにつどい、ともに戦い、そしてともに助けあうのです。

「進軍！ 進軍！」

ぱぱぱぱー！ ぱぱぱぱー！

高らかなラツパの音がなりひびき、いくさの場におたけびがこだましました。黒の軍勢とあいまみえるときが、ついにやってきたのです。平原のむこうからとどく、おそろしい地ひびき……。どんよりとかげる空の下、そのかすみのかかったふきつな空の下から今、まっ黒な影たちがその地ひびきとともに、すこしずつ、大きく、広がっていきましました。

「はじまってしまったな……」

エリル・シャンディーンの王城の、ぎよくぎの間。そのバルコニー。アルマーク王があなたの平原を見つめながら、つぶやきました。

「すべては、運命のなすままです。」アルマーク王のとなりには、エリル・シャンディーンのきゆうていまじゆつし長、ルクエール・フォートが立っていました。ルクエールは遠く空のむこうをながめやり、重々しいふんいきで、アルマーク王にいったのです。

「きゆうせいしゆどのがせいこうすれば、われらは勝ちへの道をおさめます。ですが、しつばいすれば……」

「ほろびの道……。たんじゆんな話であるな。」アルマーク王がしせんをバルコニーの手すりにおろし、その手すりをこぶしでかるくたたきながら、こたえました。「光とやみ。そのどちらが正しいのか？ それはだれにもわからないことなのかもしれぬ。」

アルマーク王の心をおおっていたもの。それはアルファズレドのことでした。いつか、このときがやってくる……。三十年前のあの冒険のさいごのときから、それはわかつていたことでした。りゆうの力を手にし、しはいの道をえらんだアルファズレド……。かれのえらんだその道も、またアルファズレドにとつては、せいぎだったのです。「デルンエルム、せわをかけるな。」アルマーク王がうしろをふりかえり、そこに立っていたデルンエルムにいました。「わたしに万いちのことがあれば、あとのことをたのむぞ。」

「めつそうもないことにございます。」デルンエルムがふりしぼるように、そういいました。「そのようなことは、たとえ万がいちであつても、あつてはなりません。」

「そうありたいものだな。」アルマーク王はそういつて静かに笑みを浮かべ、デルンエルムの手から、ひとふりの王のつるぎを受け取ります。せい剣、ロスフォールド。ペーカールランドの王家に代々伝わる剣で、しよだいの王イエヒユリーが女神リーナロツドの

力をそのやいばにさずかったとされる、名剣でした。

アルマーク王は剣のつかをぬいて、そのやいばをすこしだけひき出しました。せい剣は銀の光を放ち、こな雪のような光のつぶをあたりにちらせています。ひとめでそれが、すばらしい力をひめたしんぴの剣であるということがわかりました。この剣はぜんなる心あふれる者の手にあつたとき、そのさいだいの力をはつきするのです。まさにアルマーク王にはぴったりの、光の剣でした。

「このつるぎを手にするのも、ひさしぶりだ。」アルマーク王は剣をふたたびさやにおさめると、そういつて、なんともふくぎつな表じようを浮かべました。かつてアルマーク王はこの剣とともに、さまざまな冒険の数々をこなしてきたのです。それにはもちろん、あの赤りゆうたいじの旅のこともふくまれていました。アルマーク王はこの剣をもつて、あのおそろしき赤りゆう、スラインドガルと戦ったのです。アルマーク王は今ふたたびこの剣を手にして、そのときのたくさんの、つらい旅のできごとのことを思い起こしていました(そのいちばんさいごのできごとは、友であるアルファズレドとの、わかれました)。

「わがつばさの友人は、きげんをなおしてくれたか？」アルマーク王が、ふいにいいました。つばさの友人？ そのとき。

ばさっ！　ばさっ！

バルコニーのそこから、鳥のはばたくような音がきこえてきました。いえ、ただの鳥にしては、はばたきの音が大きすぎます。じゃあ、ただの鳥じゃない鳥でしょうか？
それもちがいました。

「ひひーん！　ひん！　ぶるるるー！」

これは、馬の声！　ということとは……。

「やれやれ、まだ、ごきげんななめのようだな。」

アルマーク王がにが笑いを浮かべながら、まどのそとのその「友人」に対していいました。

バルコニーの下から飛んできたのは、一頭の、つばさを持ったまっ白な馬のすがたをした、なんともふしぎでなんとも美しい生きものでした。この生きものを知っている方も、多いことでしょう。そう、ペガサスです！　見た目は馬にそっくりですが、その背中にはとても大きく、そして美しいつばさが生えています。そして今、バルコニーの下からやってきたこのペガサスには、ほかのペガサスとはちがう点がひとつあり

ました。それはその頭の上に、いつぼんのつのが生えているということです。これはユニコーンとよばれる生きもののつのでした。ふつうペガサスにはつのがなく、ユニコーンにはつばさがないのです。ですから、つのとつばさ、その両方を持つているこのペガサス（それともユニコーン？）とりあえずペガサスということにしておきます。ややこしいですから）は、とてもめずらしいのでした（ペガサス自体、はじめからとてもめずらしいのですが）。

「ほかの馬と同じにんじんをあげてしまつて、悪かつた。だいじょうぶ。おまえは、ほかの馬とはちがう。とくべつだよ。今さら、いうまでもないだらう？」

アルマーク王がそういつて友のことをなだめました。ペガサスはそつぽをむいて、きげんをそこねたままです（どうやらかなり、プライドの高い相手のようです。ほかの馬と同じにんじんを与えられて、かなりきげんをそこねてしまつたようでした。うん、あつかいにくい）。

「わかつたわかつた。こんど、フィルカーから、また新しい魔法のにんじんをしいれるから。」

これをきいて、ペガサスはちよつと（というそぶりでしたが、じつはかなり）、きょうみをひいたようでした（ペガサスはとても頭がよく、人の言葉をりかいてできるのです。自分で話すことはできませんが）。フィルカーというのは西の大陸ガラランタのそのまた

北にある島で、そこでは魔法の馬たちが、たくさんかわれていたのです。そこで作られている魔法のにんじんは、すべてのにんじんの中でも、さいこうきゆう！ いっぱいなんシリルもするという、とんでもないねだんのにんじんでした（このにんじんいっぱいと同じお金で、やきたてパンなら五百こは買えることでしょう。なんてぜいたくな！）。

ペガサスはようやくきげんをなおしたようで、そのままバルコニーの上へとおり立ちました。つばさを下げて、その背に乗り手をむかえいれるかっこうです（やれやれ）。

ちなみに、このペガサスはお伝えしましたようにとてもプライドが高く、人のいうことなんてぜんぜんきかなかったのです。ゆいいつ、このペガサスの友じょうを勝ち取ってその背に乗ることをゆるされていたのは、アルマーク王ただひとりだけでした（ペガサス自体も、一頭しかおりませんでした）。ですからほかの者たちだけでこのペガサスに乗って旅をするというようなことも、まったくむりだったのです（アルマーク王が乗ってれば、さすがにこのペガサスも、ほかの者をそのうしろに乗せるくらいのことはいくらもはしてくれましたが）。

アルマーク王がひとりでこのペガサスに乗ってロビーのことをむかえにいたり、ロビーのさいごの旅のともをしたりというようなことも、いろいろな危険や問題が多かったため、できませんでした。いちばんの問題は、やはり安全せいの問題です。いくらペ

ガサスで空を飛んでいたとしても、おそろしいデイルバグに乗った黒騎士たちに見つかってしまおうということは、大いにあり得ましたから。ですからアルマーク王も、ロビーの安全や旅のせいこうのかのうせいを上げるために、地上から危険をかいひして進んでいくことのできるベルグエルムたちやマリエルに、ロビーのことをみちびくそのだいなやくめをたくしました。

そして怒りの山脈へのそのさいごの道のりのことについては、アルマーク王はノランからも説明を受けていた精霊王に、そのすべてをたくしたのです。

「みやこの守りは、たのむぞ、ルクエール。」アルマーク王がそういつて、ペガサスの背に乗りこみました。その腰には、せい剣口スフォルドが。

そう、アルマーク王はさいごのけつちやくをつける、そのために、アルファズレドと戦うけつしんをしたのです。アルマーク王は今、かれみずからのその新しい運命の中へと、ふみこんでいこうとしていました（アルマーク王は今、たしかに感じ取ってしまいました。アルファズレドがさいごのけつちやくをつけるために、このさいごの戦いのおきにおいて、自分のところへむかってきています。ですからアルマーク王は、それにこたえるため、みずからアルファズレドのところへむかおうとしていたのです。

ところで、このアークランドでは国王みずからがいくきの場におもむくということ、ほとんどおこなわれていませんでした。おもむくこともできましたが、まじゆつし

たちやしきかたちによって、とめられることがほとんどだったので。やはり王の身というものは、配下の者たちにとって、自分たちのほこりのしようちようたる、だいじなものでしたから（そして兵士たちもきちんと、そのことをわかつていました。たとえ戦いの場にじっさいに王さま自身がいなくても、かれらはそのうしろにひかえる王さまのそんざいをはだで感じ、そのたのもしき心のささえを得ていたのです）。ですが今、さいごの戦いへとのぞむアルマーク王のことをとめることなどは、配下の者たちにも、だれにもできることではありませんでした）。

「ご安心ください、王さま。」ルクエールが手を胸におき、この勇者たる王にさいだいの敬意をしめしながら、いいました。「わがでしのロクヒューとマレインが、すでに守りをかためております。いくさの飛び火を、けつしてみやこにはいれさせませぬ。」（いくさのおきて、その中には「戦いの場ではないところにくさのひがいをもたらしてはならない」というものがありました（王城の場合はじっさいの戦いがそこでおこなわれていなかったとしても、戦いの場の中に加わりません。やはり城というものは、いくさのかめめでしたから。ですがそれにとりあうみやこなどの場合は、戦いの場としてはみとめられています）。ですがこんかいのようなくべつなくさでは、そのひがいがまちの中にまでおよんでしまうということは、じゅうぶんに考えられることだったのです。それを防ぐため、みやこの守りのために残った三人のきゆうていまじゅつした

ち、ルクエール、ロクヒュー、マレインの三人は、エリル・シャンディーンのみやかに、魔法による守りのバリアーを張りめぐらせていました（いぜん、ベゼロインとりでの戦いの際にもかれらは魔法のバリアーを張っていましたが、こんかいはまちそのものをおおうのですから、大きさがぜんぜんちがいます。ですがこのまちは、ただのまちはありませんでした。そう、このまちにはかの大けんじや、ノランの魔法があちこちにかけられていたのです。

そのひとつが、まちの空をただよう巨大な浮かぶ島たち。はじめてエリル・シャンディーンのみちを見たとときにも、それはおどろきでしたよね。これらの島はまちの美しさをえんじゆつし、まちを水のひがいに守っているのと同じに、このまちをそこから危険から守るといふやくめをも果たしていました。

これらの島のまん中には魔法のエネルギを大きくさせる力があって、まじゆつしがそこにバリアーの魔法をかけると、バリアーはこれらの島からどんどんと広がっていつて、あたりをすつかりおおいつくしてしまうのです。つまりすくない人数のまじゆつしでも、いくつかの島さえあれば、まち全体をバリアーですつかりおおいしてしまうことができます。さすがはノランの魔法、すばらしいですね。まったくむだがありません。

「心強いな。」アルマーク王がベガサスのたづなをたしかめながら、静かにほほ笑んで

こたえます。

「では、たのむぞ。」

そしてその背に勇者たる王を乗せたペガサスは、お城のバルコニーからさらに高く、このなまり色の空の中へと消えていったのです。

ぽつぽつと小さな雨つぶが、その雲のあいだから落ちはじめてきたときのことでした。

27、人の心

「ひゃああ！ こんな雨、ふるなんてきてないよ！ だれか、ふるっていった？」
頭のとっぺんからくつのさきまで、ずぶぬれ。今ひとりの若者が、このどうくつの中へと飛びこんできたところでした。その若者は、人間の若者でした。せいべつは男で、としは十六さいほど。やせていて、きやしやなからだつき。晴れた空の色をしたフードのついた、まっ白なきぬの服を着ていて、青いえりのまわりには小さな白いお星さまのかたちをしたボタンが、たくさんぬいつけられていました（これはただのかざり用のボタンでした）。大きな青いスカーフで、胸もとがかざられております。たけのみじかい青いズボンをはいていて、くつは同じく青。肩からは青と白のしましまでデザインされた小さなかばんをひとつ下げていて、きらきらとかがやく金色のボタンが、そのかばんをかわいくかざっていました。

これほど青と白のデザインのものばかりに身をつつんでいましたが、その若者はそれとは対しよ的な、とてもいんしよ的なかみの色をしていました。肩までのびたそのかみの色は、もえるような赤。青いりボンのついたまっ白なぼうしをかぶっておりましたので、よけいにそのかみは、きわ立って赤く見えます。そしてそのひとみの色は、き

らめくすいしようのようなむらさき色。あれ……？　これってだれかに、にているような……？

「こんな、人っ子ひとりいない山の中のでんきのことなんて、だれが気にするんだよ！」

赤いかみのそのかれのあとから、もうひとり。同じくらいのねんれいの男の若者がどうくつの中に飛びこんできて、いいました。こちらはさいしよのかれにくらべると、背も高く、からだつきもがっしりとしています。うすいみどり色をした鉄のよろいを着ていて、腰には大きな剣がいつぽん、さしてありました。背中には茶色い大きなリュックをひとつ、しょっております。かみの毛は、まつすぐのびた黒いかみ（雨でびしょびしよだから、まつすぐになつているのかもしれないが）。そしてそのうでは、みどりの木をデザインしたもんしよのはいった、わんしよをひとつ、はめていました。

あとからはいつてきたこの若者、かれにはあるとくちようがありました。それはひとめでわかるとくちようです。頭の上にぴよこんとつき出た、ふたつの耳。おしりからぴよこんと飛び出した、大きなしつぽ。そう、かれは動物の種族の者。それもおかみの種族、ウルファの若者でした。ですけどウルファの者で、かみの毛が黒。ということ……、この若者はロビーと同じく、黒のウルファだったのです！　これはびつくり！

黒のウルファは今やそのすべてが、ワットの黒の軍勢によって、とらえられるか、自

由をうばわれるかしているはずでしたのに。いったいこの若者は、なに者？

「まったく、おまえといっしょにいると、いつもやつかいごとにもまきこまれるな。だいたい、こつちの山が近道だつていったのは、おまえだろうが。」

ウルファの若者が両手をひぎにおいて、ぜいぜいいいながらもんくをいいました。どうやらここにくるまでのあいだにも、かなりたいへんな目にあつてきたようです。それも、赤いかみのあいぼうのせいだ。

「まあまあ、そんなに怒らないでよ、テルくん。しばらく休めば、ぼくの魔法もふつつするからさ。あはは。」そのあいぼうのかが、へらへら笑いながらこたえました。どうやらこつちのかれは、かなりのんきというか、あつけらかんというか、らくてん的というか……、あまりストレスをためこまないタイプの方です（なんかうらやましい）。と、それよりも、魔法？ このかれは、まじゆつしの方です。どうりだからだつきもきやしやで、武器も見あたらないはずです（かれらの武器は、手のひらからどーん！ と出てきますから。マリエルやライアンみたいに。あ、ライアンはほんとうは、まじゆつしじゃないんですけど……）。

「この！ もとはといえ、かんじんなときにおまえが魔法を使えなかつたから、こんな目にあつてるんだろ！ おれがいなかつたら、今ごろおまえは、あの世いきだつたんだぞ！」

テルくんとよばれたウルファの若者が、赤いかみのまじゆつしにいいました。つまりそれは、こういうことなのです。ここにくる前、ふたりはとある悪い人たちに、取りかこまれてしまいました。その悪い人たちの本部をたたいてやつつけるのがこのふたりのもくてきでしたが、いざけつせん！　というところになって……、ぼふん！「あ、これ、べつの魔法のじゅもん書持つてきちやつた。五時間たたなきや、魔法、使えないや。ごめん。」「な、なにー！」

というわけで、ふたりはいのちからがら、ここまで逃げてきたというわけだったのです……（わかりやすいてんかいですね。そしてまじゆつしのかれの言葉の通り、まじゆつしは使おうとしている魔法とはべつのまちがったじゅもん書やつえを使つてしまふと、魔法のエネルギーが、ぼふん！　全部吹っ飛んでいってしまった、五時間ほどたないと、魔法がまったく使えなくなってしまうのです。こわいですね。マリエルだったら、ぜったいにこんなしっぱいはしないでしょうけど。カルモトだったらやりそうかな？）。

「わかつてるつて。ぼくだって、ぼくなりにもじめにやつてるんだから。それより、早く、服、かわかそうよ。ぼく、かぜひいちゃう。」

そういつて赤いかみの若きまじゆつしは、「くちちゃん！」と小さなくしゃみを飛ばしました。

それからふたりはしばらく、この安全な（たぶんですけど）どうくつの中で、ひと休みすることにしたのです。これからふたりは急いで、仲間たちのもとへと帰らなければなりません。作戦がみごとにしつぱいしたということを伝えるのは、気が重かったのですが……。

「あーあ、ぼくにもっと、強い魔法の力があつたらなー。」たき火の前で足をぶらぶらさせながら、赤毛のまじゆつしくんがいました。「テルくんの剣にたよらなくたつて、どつかうん！ ぼくがぎやくに、テルくんのこと、守つてあげられるのに。」

「あのなあ、おれはもう、子どもじゃないんだぞ。それに、いつもいつてるだろ。おれのこと、テルくんつてよぶなよ。テルベルつて名まえが、ちゃんとおるんだから。」テルベルと名のつたウルファの若者（テルくん）が、赤毛のかれにいつてかえします。

「えーつ、テルくんは、テルくんじゃない。テルベルウー、なんて、いいづらいよ。」
「テルベルウーじゃない！ テルベル！」さらにかえつてきた言葉にテルベルがまたもんくをいいましたが、あいぼうの方はまるつきり、相手にしておりません（なんか、ふしぎなコンビですね。でもなぜか、気があつていような感じです）。

「いいじゃん、テルくん。だからぼくのこと、アーちゃん、つてよんでいいよつて、いつてるでしょ。」

「だーから、子どもじゃないんだからな！ もう、おれたちはりつぱな、ウエステイン

王団の一員なんだぞ。まったくおまえは、いつまでたってもあいかわらずだな、アーザス。」

え？ ア、アーザスですって？ それって、あのアーザス？ 悪の大魔法使いのアーザス？

「わーかつてる、って、いつてるじゃない。見ててよ、ぼくは今に、エプロルドさんだつて負けない、強いまじゅつしになつてみせるからさ。そのために、ぼくはもつともつと、力がほしい。あーあ、どつかに、力が落つこちてないかなー。ぼくが、よくに立ててあげるのに。」

アーザスがそういつて、あたりをきよろきよろとながめ渡しました。

「らしくして強くなれたら、せわはないつて。力は、自分できよろ上げるもんだぞ。」そういつてテルベルは、わきにおいていた自分の剣を取り、そのつかをぎゅつとにぎりしめます。

「見てろよ。おれはもつともつと強くなつて、王団の隊長になつてやる。それでいつの日か、自分の王国をきよろくんだ。強い強い、ウルファの王国をな。」

「そしたら、ぼくのこと、きよろていまじゅつしに使つてよ。」アーザスが、につこり笑つていました。「それまでには、ぼくもけんじやよりも強い、大まじゅつしになつてるからさ。」

「おまえが、きゆうていまじゆつし？」テルベルはそれをきいて、思わず吹き出してしまいます。

「おまえが、それだけの力をつけられたら、の話だけだな。まあ、夢見るだけは、自由だけ。」

「ちよ、笑わないでよ！ きめた！ ぜったい力をつけて、テルくんのこと見かえしてやるんだから！ よーし、見ててよ。ぼくのほんとうの強さを、思い知らせてあげるんだからね！」

「まあ、がんばれよ。」アーザスの強がりには、テルベルは「あはは。」と笑っていいました。

はるかむかしのことでした。ウルファの王国、レドンホールができる前のお話です。これからこのふたりが、それぞれのそのふくぎつな運命の中へとまきこまれていくことになるのですが、それはまた、べつのぶたい、べつのじだいでのお話……。

そして時間は、ロビーのこの冒険の物語の中へとつつていくのです。

「ひるむな！ じんけいをととのえろ！ 守りのすきをつけ！」

あたりにこだまする、戦いの音、音、音。そのあらしのような戦いのただ中で、隊の

しきをつとめるしきかந்தちのさげび声がどろいていました。

エリル・シャンディーンの戦いがはじまっていたのです。ふり出した雨はさあさあと、白くほそい糸のように戦いの場をおおっていました。よろいやたてや、劍のさきから、たまつたしずくがぼたぼたと落ちていきます。ですがかれらには、そんなものを氣にとめているよゆうなどありませんでした。目の前に立ちはだかっているのは、おそろしいワットの黒の軍勢。黒いよろいの兵士たち、そして見るもおそろしい、かいぶつの兵士たちでしたから（その軍勢の中に、とらわれのわれらが仲間たち、黒のウルファの者たちがいなかったということは、まださいわいなことでした。ですがそれも、よろこんでいいことなのかどうかはわかりません。なぜかれらは、すがたをあらわさないのでしょうか？ それはかんたん。かれらがもはや、兵士として戦うことができなくなっていたからなのです。

黒のウルファの者たちはみな、ベゼロインの戦いのあと、さらに深いやみの中へと落ちこんでいってしまいました。これはやみにとらわれたかれらをあやつって、むりに戦わせたことがげんいんでした。やみにとらわれた者をむりに戦わせることは、その者の中からだに、たいへんなふたんと与えることになるのです。れんぞくしていくさに送り出すたりなどすれば、かれらのからだはもうにどと、使いものにならなくなってしまうことでしょう。それはワットにとつても、大きなそんしつです。

ですがワットにとつて、このいくさに黒ウルファの者たちが使えないなどということ
は、大きな問題ではありませんでした。なぜなら……、かれらよりもつと敵の力をそ
ぎ落とし、きょうふをうえつけることのできる、おそろしい兵士たちがたくさんいまし
たから。それはつまり、たくさんのかいぶつの兵士たち、そして魔王ギルハツドのひき
いる、悪魔の兵士たちのことなのです。

なかでも、このかいぶつの兵士たち。かれらはまさに戦いのために生まれてきたかの
ような、おそろしい兵士たちでした。いぜんにもしようかいしております、巨大な目玉
だけのかいぶつや、くまやへびや、とかげのようなかいぶつたちが、ここぞとばかりに
たくさん。そしてそれがいいにも、とつぜん消えたかと思うと、つぎのしゅんかんには
白き勇士たちのそのまっただ中にあらわれて、やみのたつまきをまきちらし、そしてふ
たたび、はなれた場所にあらわれる、そんな、影のような生きもの。さいしよはふつう
の大きさですのに、こうげきを受けるたびに大きくふくらんでいく（そしてますます強
くなっていく）、いのししのような生きもの。そしてごぞんじ、色とりどりのさまさまな
巨人のかいぶつたちも、黒の軍勢にはたくさん加わっていたのです（この巨人族の者た
ちは三日ぶんの食べものをあげて「ぞんぶんにあばれさせてやるぞ。」とやくそくしてや
りさえすれば、かんたんに悪の軍勢に味方するのです）。

かいぶつの兵士たちと、ワットの人間の兵士たち。かれらはじつにたくみに、そして

ずるがしこく、われらが白き勢力の勇士たちのことを追いつめていききました。大きな口を持った目玉のかいぶつたちについていえば、このかいぶつたちはまずそのたくさんの小さな手のさきから、ぼひゅーん！ ビームを出して、白き勢力の仲間たちのことをふらふらにしてしまいます（かいぶつたちの持つているこれらのさまざまなのうりよくは、これらのかいぶつたちが生まれつき持つている自分ののうりよくでしたので、魔法ではありません。ですからいくさの場で使っても、おきてのいはんとはならなかつたのです。黒の軍勢の者たちはそういうところをよくしようちのうえで、かれらかいぶつの兵士たちのことを仲間に加えていました。じつにずるい）。そこに、影にかくれていたワツトの兵士たちが、剣をかまえてとつげき！ うち負かしてしまうというぐあいでした。はじめは安全なところにおいて、相手が弱つたところを痛めつける。じつにワツトらしい、ひきような戦い方です！（しかも痛めつけたあとは、ふたたび、かいぶつたちの影に急いで逃げていくのです。）

もちろんわれらが白き勇士たちも、かいぶつたちなどに負けない、じつにすばらしい戦いぶりをくり広げていました。しきかんのベルグエルムやフェリアル、ライラと同じくらいにはいかないまでも、かれらはみな、すばらしく強い（そしてとてもこせいな）戦いのわざを持つていたのです。敵の剣がまさに今、よろいの上にもふりおろされて、ばきーん！ そのまま、こうげきを受けたその者は大けがを負って、地面にばたん！

劍をふりおろした敵はまさにその光景を見ていました。ですのに……。

「おい、どこを見てるんだ？ おれはこっちだぜ。」

「な、なに！」

ワットの兵士がびつくりぎょうてん、うしろをふりむくと……、ばちーん！ 劍のつかで、したたかにいちげき！ 目の前には、お星さまがたくさん！ 白目をむいてノックアウトです。いつのまにうしろにまわりこんだのでしょうか？ すごい！

ですが、たぜいにぶぜい。たしかに白き勇士たちの中には、つわものたちがそろっています。しかしお伝えしました通り、かれらのうちの多くは、戦いにそれほどなれていない、ふだんはふつうのせいかつを送っているりんじの兵士たち。しだいしだいに黒の軍勢との力の差が広がっていくことは、目に見えていました。

そのとき。

「デイルバグだ！」

だれかがさげびました。その場にいる者のみんなが、空を見上げます。

ああ、ついにかれらがやってきたのです。あのおそろしい、デイルバグのかいぶつたち！　そしてその背にまたがる、きょうふの騎士たちが！

「うわああー！」

遠くの方で、仲間たちのさけび声が上がりました。目の前の敵と剣をまじえながら、みんながそちらを見ると……、ああ、なんてこと！　今ふたりの兵士たちが、デイルバグのそのするどい両手のかぎづめにつかみ上げられて、空へとはこばれていつてしまつたのです！　そして、なんてひどいことを！　デイルバグに乗つたその黒騎士は、小高い丘の上、三十フィートほど上空から、その兵士たちのことを地面に放り投げました！　地面にげきとつしたかれらは、「うう……」とうなつて動けなくなりました。もうかれらは、戦うことはできないでしょう……。

「きゆうえんを！　きゆうえんを！」

ひめいにもたさけび声が、あたりにこだましました。

「だめだ！ 守りきれない！ うわああーっ！」

なんとという戦いでしよう。なんとという光景でしよう。

まだ戦いがはじまってから、二十分ほどしかたっていない。ですが地面には、あちこちに、うち負かされて、くるしみ動けなくなっている者たちが、あふれていました。

「ここです。ここが、出口です。」

ついにやってきた、その光。もうなん時間も、黒いかべにかこまれた暗いトンネルの中を歩いてきたような気がします（じつさいにはこのトンネルにはいつてからここまで、二時間くらいかかったでしょう？ 半分以上の時間は、ソシーのせいだからかもしれませんが）。出口の光は、とても明るく思えました。ですがそれは、暗いトンネルの中に長い時間いたからの話。トンネルのそとはひるまでもなお暗い、赤むらさき色の暗雲のあつたこれこめる、ぶきみな土地が広がっているばかりだったのです。

ロビーは剣をかざして、トンネルのそとのようすをおそろおそろたしかめてみました。（剣の光でソシーがまた、「ひええ……！」と顔をおおつてうずくまってしまいました）。ほそいさげ目のたくさんある、赤茶けた地面が広がっております。たいらなところは、すこしばかりしかありません。でこぼこした地面には、同じくでこぼこした岩が、あち

ここにころがつていました。まわりは高いものからひくいものまで、たくさん

の岩かべにすつかりかこまれております。中にはとてもしぜんにできたものとは思えないほどの、おかしなかたちをした岩やかべまでありました（おそらくりゆうの怒りのエネルギーやゆがんだ魔法の力によって、かたちが変わってしまったのでしよう）。さらには、地面に動くものを見つけてよく見てみると、それはまっ黒なねぼねぼとしたものがぐにぐに動いて、手のようなものをあちこちにのぼしているという、気味の悪いしろものでした（これはトンネルの中の川に浮かんでいたボールと同じ、しぜんのエネルギーとのろいの力があわさってかたちとなったもので、これをつついたりすると、ぼちゅーん！ ぼくはつして、つつついた者の全身をまっ黒けによごしてしまいました。ただそれだけなのですが……）。

トンネルにはいる前、この土地にやってきたときに感じた、砂やはいまじりのあつい風。その風はますます強く、この場所に吹き荒れていました。とつぜん、えものにかみかかるとゆうのつめのように、きようぼうなとつぼうがおそいかかってくることさえありました。それは岩をもくだき、ばらばらの小石の山にして、空高くうばい去っていくのです。あたりにぶきみにひびき渡る、ふつふつというマグマのにえるような音。そしてたえまない、火とこげつきのにおい。

この場所はまさしく、りゅうの怒りののろいのかかった、怒りの山脈、そのまったただ中でした。

「この道をまつすぐいって、橋を越えれば、アーザスさまのお城へとたどりつきます。でも、お城の中は、わたしにもごあんないできません。お城の中は、いつも、部屋やろうかの場所が変わってしまふからです。正しい道がわかるのは、アーザスさまがいいおりません。」ソシーが、目をおおっているゆびのすきまからおそるおそるロビーの方を見ながら、いいました（もう剣はさやにしまつてありましたけど）。ゆびのむこうから、ロビーがまつすぐ自分のことを見つめております。やっぱりまだ、うたがわれているのでしようか？

「う、うそじゃありません！　ほんとうです！　わたしでも、アーザスさまのいらつしやるお部屋へは、いったことがないんです！」

ソシーはけんめいになっていいましたが、ロビーはもう、この人形の女の子のことをうたがったりなどはしていませんでした。ロビーにはふしぎと、ソシーがうそをいってないかということがすつかりわかつたのです（相手がたとえ、人形であつても）。これも、このふしぎな光を放つ剣の、新しい力なのでしょうか？

「わかつてるよ。よく、あんないしてくれたね。」ロビーがやさしい顔で、ソシーのこ

とを見ながらいいました。「きみはもう、帰るところにもどつていいよ。ここからさきは、ぼくひとりでも、だいじょうぶだから。ありがとう。」

ロビーのやさしい笑顔。ソシーは今まで、だれかにこんな笑顔をむけられたことなんてありませんでした（アーザスにもです）。ソシーのやくめは、アーザスに害をなす敵を、あざむき追いはらうこと。今までソシーはアーザスのそばで、たくさんのつわものたちのことをわなにかけて、その（いつもはしまつてある）するどいつめでおどかし、追っばらつてきたのです。そのたびにソシーにむけられるのは、きようふとにくしみのまじつた、つめたいひとみ。今までソシーは、それをなんとも思つてはいませんでした。それがあたりまえでしたから。ですけどこのロビーという少年は、ちがったのです。ソシーはいつものように、ロビーのことをだまし、わなにかけました。必要ならばいつでものちだつてうばえるんだぞとまでいって、おどかしました（これはたんなるおどしでしたが、いつもこうかはばつぐんでした）。ですけどロビーは、ちがったのです。そんな自分にやさしいほほ笑みを送つて、あんないしてくれたことへのおれいまでいってくれました。こんなことはソシーにとって、はじめてのたいけんでした。

わたしは、あなたのことをわなにかけて、だまそうとしていたというのに……。

ソシーは思わず、胸がきゅんとなつてしまいました（お人形ですけど）。

なんでそんなにやさしいの？

ソシーは今まで、こんな気持ちになったことなどはありませんでした。胸のおくにごみ上げてくる、あついおもい……。ま、まさか、ロビーに、恋？

「どうかしたの？」まごまごしているソシーに、ロビーがいました。

「い、いえ、なんでも！」ソシーが両手をぶんぶんふつて、それにこたえました。

「あ、あの、わたし、アーザスさまのお城までは、ロビーさまのこと、ちゃんとごあんないします！」ソシーがつづけけます。「だ、だから、もうちよつと、おそばにいさせてください！」

「え？」ロビーは思わずたずねてしまいましたが、ソシーは顔をまっ赤にして（お人形ですのに）、目をそらしてしまいました。

そんなソシーにロビーはちよつときよとんとしなながらも（ロビーにはそういうことは、まだよくわかりませんでしたが）、やがてかのじよに手をさしのべて、いいました（ソシーがトンネルのすみっこにおりましたので、手をさしのべたのです）。

「ありがとう。じゃあ、お城の入り口までお願いね。だいじょうぶ、剣は、ちゃんとしまつておくから。さつきはごめん。ぼくも、つい、むちゆうで。」

さし出されたロビーの手をおさるおさるにぎつて、ソシーはますます顔を赤くしてし

まいりました。そして顔からぼふん！ 湯気を立てて、いっぱいいっぱいのはじょうたいになつて、ロビーにいったのです。

「は、はははい！ せいいっぱい、つとめめさせて、いたたきますす！」
ロビーは首をかしげて、ふしぎがるばかりでした。

ぎゅ、ぎゅいーん……。

うす暗い空のもと、暗い影を落とすひっそりとした木々のあいだから、同じくらいひっそりと、おかしな音がなりました。そしてつぎのしゅんかん。

「うてえー！」

ごおん！

ひゅるるる……。

どつごおくん！

めいちゅう！ え？ なんのことか？ ですつて？

「ごほん！ ごほん！ な、なんだあ〜！」

まっ白なけむりの中から今、ごほごほいいながら、黒いよろいを着た兵士たちがたまらずに飛び出してきました。たいくつで大きなあくびをしたり、うつらうつらしていたところに、どかん！ とこのいちげきです。なにがなんだか？ わけもわからないまま、手にしたやりも放り出して、かれらはとりでの入り口のそとまで走って逃げてきました。

かれらのいでたち、それを見れば、かれらがなに者か？ ということがすぐにわかりました。かれらは今ではすっかりおなじみ、そう、黒いよろいすがたの、ワットの（いっばんの）兵士たちだったのです。

「全兵！ とつげ〜き〜！」

その声のあとに、さらなる追いうちが！

ぎゅいんぎゅいん、ぎゅいんぎゅいん！ ごいんごいん、ごいんごいん！

こ、この音は！

「ぎやああく！ なんかきた〜！」

ふいをうたれたワットの兵士たちは、もうなすすべもありません。地面にはいつくばつて、あつちへすつてん！ こつちへころりん！ けんめいに逃げまどうばかりでした（そしてそのほとんどは、あつというまに、飛んできた岩のあみからめ取られて動けなくなつてしまいました）。

なにがとつげきしてきたのか？ みなさんにはもう、おわかりですよ。

ここはリュインのとりで。そして今、ワットにうばわれたそのとりでを取りもどすべく、十七体の岩のロボットたちに乗った白き勇士たちが、とつげきしていったのです！（はじめの「どつご」おおくん！）は、このロボットのうでからはつしやされた、岩のミサイルでした。いぜんレイミールがまちがつてはつしやさせてしまった、あれです。ちなみに、こんかいのこのミサイルをはつしやさせたのも、またレイミールでした。こんどはちゃんと、敵のどまん中にめいちゆう！ すばらしいうでまえです。それにしても、このミサイル、おそろしいりよく。こわいですね。

ところで……、かれらはまた、このリュインの地にとんでもないほどの早さでたどり

つくことができず。シープロンドでリストールのことを見送つてからここまで、かれらは岩のロボットたちの「陸走しやりん船モード」でつつ走つてきたわけですが、かかった時間は六時間十分！ シープロンドへむかうときも六時間半というきょういスピードでたどりつくことができたわけですが、それよりもさらに二十分も早く、この地に帰つてきたのです。これはいきとちがつて、よけいな森や岩場を通つていなくてすんだためでした。かれらはこのさいこの戦いの場に、文字通り「とつてかえして」きたのです。

そのけっかは？ もういうまでもありませんよね。なにしろワットの兵士たちは、今のほとんどが、さいこの大きな戦いであるエリル・シャンディーンの戦いへとむかつていきましたから。そのためこのリュインのとりでは、敵のしゅうらいにそなえたさいいげんの人数、六十人ほどしか、兵士たちが残つていなかったのです。そしてそのかれらも、まさかほんとうにこのとりでおそつてくるような敵がいようとは思つてもいけませんでしたから、かんぜんにゆだんしてしまいました（かれらのしきかんたちもみな、エリル・シャンディーンの戦いの場にいつていて、るすでしたから。先生がるすにしていたら、せいとたちはのんびりしちやいますよね。それと同じなのです）。

「せいぎの怒り、思い知れ！ ロック・ディーズィング・ジャステイス・ブロー！」
逃げまどう兵士たちへの、ようしやない岩のパンチこうげき！

「ぎやああく〜！」ワットの兵士たちは下の地面ごと飛ばされて、ひゅううう……、べつちゅん！ とりでの見晴らし台の上に来て、大の字に吹っ飛ばされてしまいます（それでもちゃんと計算して、大けがをしない位には手かげんしてあげていました）。それからロボットたちは、とりでのかべをよじのぼって……、「なんだなんだ？」と見晴らし台に飛び出してきた兵士たちにむかつて、さらなる追いうち！

「せいぎの剣を、受けてみよ〜！」パイロットのかけ声がかかり、一体のロボットが見晴らし台の上に、どん！ 飛びうつって剣をかまえました！

「ロック・デイスハートニング・ジャステイス・トルクブレード〜」（長い〜）

巨大な岩の剣が、ぶううん！ たつまきのようにあたりをなぎはらいます！

「ぎやああく〜！」ワットの兵士たちはそのたつまきにあおられて、まるで葉っぱのように飛ばされてしまいました（さつきからワットのみなさんには、「ぎやああく〜！」ばかりでかわいそうです……）。

気がついてみれば……、ものの三分ほどで、すべてが終りよう！ リユインのとりでに残っていた六十名ほどのワットの兵士たちは、ぜんいん武器も投げすて、両手を上げて、白はたこうさん！ みんなまとめて岩のロープでひとくりにされて、とらえられてしまいました。ばんざーい！（やはりよきせぬめんどろが生まれることをさけるために、リブレストたちはワットの兵士たちを、みんな残らずつかまえてしまうことにした

のです。リュインとりでのつくりのことであれば、こちらにはとてもたのしい仲間たちがいて、とりでのどこに入り口があるのか？ ということもすべて分かっていますから、そこをみんなふさいでしまうことで、ワットの兵士たちのことをみんな、とりでの中に追いこんでしまうことができました。そのため仲間たちは、ずいぶんとあっけなく、ワットの者たちのすべてをとらえてしまうことができましたのです。そしてもちろん、つかまえたワットの者たちには、リュインのろうやの中にはいつてもらうことにしました。ワットのみなさんには気のどくですが、まあ、しばらくそこで、頭をひやしていただきますね。」

そして。

ふしゅうう……。

一体のロボットの、頭のとっぺんがひらいて……。

「がーっはっはっは！ たわいもないわい！」

「ごんじ、リブレストさん！ おつかれさまです！」

「リュインのねずみみたいじも、これで終りようだわ。」

「おおーっ！」

しきかんにつづいて、あたりのロボットのパイロットたちも、つぎつぎと（ロボットの頭の上から）あらわれました。

「けんじやリブレスト、ばんぎーい！」「ペーカーランドに、えいこう！」「われらは、むてきだ！」

「リユインをわれらの手に、取りもどしたぞ！」

よろこびにわきかえる、白き勇士たち。ほんとうにほんのすこし前まで、かれらはここで、ほこり高き日々を送っていたのです。それがとつぜんにおそわれ、とらわれの身となり、たいへんなくろうのもと、今こうしてふたたびこのとりでを取りもどしましたから、そのよろこびもとうぜんのことでした（さいごはずいぶん、あっけなかつたですが……）。でもそれは、かれらが強すぎるからなのです。こんな巨大な岩のロボットたちなんて、ほんとうはほとんど、はんそくわざですものね。

ちなみに、こんかいのように、くにとくにとの正式ないくさではない戦いがとりででおこなわれる場合、そのための取りきめもしっかりとさだめられていたのです。やはりとりでというものは、文字通りそのくにとつてのかなめとなる、ひじょうに重要なものでしたから。そのためとりでの戦いについても、いろいろな場面に応じて、こまかく重要なルールがもうけられていました。

まずは、「いくさいがいの場合において、とりでを四十人以上の者たちでこうげきする

ことはできない」というルール。つまり四十人以上の者たちでとりでをこうげきしようと思つたら、それはくにとくにとの正式なくさあつかいにしななければならぬということなのです。四十人以上の者たちを使ってかつてにとりでをこうげきして、それで戦いに勝つたとしても、とりでを使用するけんりはみとめられず、相手にそのとりでをかえさなければなりませんでした。

こんかいの戦いの場面でも、じつはリブレストたちはこのルールをしっかりと守つて戦いをおこなっていました。かれらがとりでにせめこんだのは、十七体の岩のロボット兵士たちに乗つた、三十四名の者たちのみ(岩のロボット兵士たちはただの「工作物」でしたので、兵士としての人数に数えられませんでした。ちよつとずるいですが……)。リブレストたちはこの人数をしっかりとワットの兵士たちにしめしたうえで、戦いをはじめていたのです(いちばんはじめにぶつばなした岩のミサイルについては、かんぜんにふいうちでしたが……)。

そしていくさではないとりでの戦いであれば、まじゆつしと兵士たちは、ともに戦いをおこなつてもよいときだめらていましたが、やはりとりでをせめるがわのまじゆつしについては、魔法で相手をこうげきすることがきんじられていたのです(とりでを守るがわのまじゆつしの場合は、とくべつな取りきめとして、魔法で相手をこうげきすることがみとめられていました。これはいわゆる、「ふりかかる火の粉ははらわねば」とい

うやつです)。ですからリブレストも、魔法ではない岩の「工作物」のロボットたち（と岩の「工作物」のミサイル）を使って、とりでをこうげきしました。

ちなみに、相手の人数が四十名みまんであるか？ ということや、こうげきの魔法が使われていないか？ ということについては、とりでにそなえつけておくことがぎむづけられているきようつうの魔法センサーによつて、しつかりとかくにんされました。いはんがかくにんされると、このセンサーによつてそれが本国へと伝わり、すべて明らかとなつてしまうのです。しつかりしたシステムができていますね！。

しかしかれらには、つかのまのよろこびにさえよいしれている時間ありませんでした。リユインとりでを取りもどしたことは、そのさきにあるもつと大きなしめいへの、さいしよのいっぽにすぎなかつたのです。敵の待つもうひとつの、そしてさいごのとりで、ベゼロインのだっかん。それこそがベーカークランドをしようりへとみちびくための、そしてこのアークランドを悪の手から取りもどすための、かれらの大いなるしめいでした。

「もう、いくさははじまつてしまつているのでしょうか？」見晴らし台の上から、下にいるリブレストへ心配げに声をかけたのは、われらがゆうかんなる仲間のひとり、ハミール・ナシュガーでした。「この大きなとりでにさえ、ワットの兵はほとんどいませんでした。となると、敵軍は今、ひとつにしゅうけつしているはずです。」（ちなみに、ほ

かでもありません。さつき見晴らし台の上で、剣で敵をなぎはらう大わざをくり出してワットの兵士たちのことを吹っ飛ばしていたのは、このハミールだったのです。すばらしいいちげぎでした。わざの名まえは、かれが考えたんでしようか……?」

「エリル・シャンディーンが、心配でなりません。」リブレストのとなりのロボットの
上から、こんどはハミールのめい友、キエリフ・アートハーグがいました。「仲間たちは、きつと、くせんをしいられているはず。われらの助けが必要です。」(ちなみに、ほかでもありません。さつきとりでの前で、強力なパンチのひつさつわざをくり出してワットの兵士たちのことを吹っ飛ばしていたのは、このキエリフだったのです。すばらしいいちげぎでした。わざの名まえは、かれが考えたんでしようか……?)

「うむ。もろもろ、その通りだわい。」リブレストが「ふん!」と鼻をならして、こわいくらいの顔をしていいました。

「だから、わたしたちのやくわりは、ひとつだわ。わかるな?」

そのリブレストの言葉に、岩のロボットたちの上から飛び出ていた仲間たちは、そろって口もとをゆるませます。

「ベゼロインを、われらの手に!」ハミール、そしてキエリフが、そろってさげびました。そして、それにつづいて……。

「おおおーっ!」

仲間たちのみんなが、こぶしを天高くつき上げてさけんだのです！

「そういうこつた！」リブレストがにやりと笑みを浮かべて、みんなの気持ちにこたえ
ました。

「ぐずぐずしては、おられんぞ！ われらのしんげき、とまらず！ さあ、いくぞい！
おつぎは、ベゼロインじゃい！」

リブレストさん、さいこう！ なんとというカリスマせいなのでしょう！ もうなんと
いうか、オーラがちがいます（顔はこわいですけど）。リブレストはけんじやであり、戦
士であり、そしてもんくなしに、さいこうクラスのしきかんでもありました。みんなの
力をなんばいにもひき出し、勇気を高める。このすばらしきしきかんのそんざいは、白
き仲間たちの心を大いにはげまし、すばらしいだんけつの力をもって、かれらの思いを
ひとつにまとめ上げたのです（ずっと山おくにひっこんでるだなんて、ほんとうにもつ
たいない！）。

「からつぽにしてはおけんからな。」リブレストがそういつて、なにやらじやらじやら
と、上着のポケットからなにかを取り出しました。

リブレストが取り出したのは、小さなミルク色の、まんまるの石でした。それも、た
くさん。

「るすは、こいつらにまかせておくとしよう。こいつらになら、みんなまかせて欲しいよぶだわい。」リブレストはそういって、まんまるのそれらの石を、とりでの入り口にむかつてばらばらとばらまきます。すると！

地面に落ちたそれらの石が、見る見るうちに、身長三フィートほどのちっちゃな岩の兵士たちへとすがたを変えました！ まさにみんなが今乗っている岩のロボットたちの、ミニチュアばん。それをまるっこく、デザインしなおしたような感じですよ（なんかかわいい）。手にはこれまたちっちゃいながらも、ちゃんと岩の剣がにぎられています。

「せいれーつー！」リブレストの言葉に、岩のちびっ子兵士たちがびよこびよこ歩きながら集まって、横に二れつになって、びしっ！ きれいならびます。その数は、みんなのロボットたちのぼいの、三十四体！（ちなみに、ミルク色の石いっこから、一体のミニチュア兵士があらわれます。つまり、ポケットに三十四この石がはいつていたわけです。かなりの量ですね……）

「るすばんは、おまえたちにまさせるぞ。このとりでを守りぬけ。」

リブレストがそういうと、ちびっ子兵士たちはみな手をちやかちやかと動かして、それにこたえました（たぶん、「りようかい、ボス！」というへんじをしているんだと思います）。

「さあて、乗ったな！」それから、リブレストがロボットに乗りこみ、かくパイロットたちにはいいました。「今いちど、陸走しやりん船モード！」

ロボットたちが、ぐいいん！ ふたたび、岩の船のかたちへとすがたを変えていきます。

「ぎょひようせつてい！ 一三九五、七二〇九！」

もう休むひまありません。そして休む気もありません！ わき立つせいぎの心をもやしたわれらが勇士たち。かれらに乗せた十七体の岩のロボットたちは、こうしてつぎなるもくてき地、ベゼロインへとむかって、新たなしんげきをかいししていったのです。

もうだれにもとめられない！

リブレストべつどう隊、出動！

「いよいよですね、キャプテン。」

リブレストのとなりで、副そうじゅうしのレイミールがいました（リブレストのことをキャプテンとよぶのが、すっかりはまってしまったみたいですね）。

「いよいよ、あれが見られるんだ。楽しみだなあ、うふふ。」

「こちらこちら、あそびにいくわけじゃないぞい。」にこにこしているレイミールに、リブレストがこたえました。「だーが、わしもちよっぴり、胸がおどるわい。」

そうじゆうかんをにぎる手に力をこめて、リブレストがさいごにいいました。

「お待ちかね。こいつのほんとうのパワーで、れんちゆうに大あわを吹かせてやろうかの。」

このロボットの、ほんとうのパワー？ それはいったい……？

ぽつぽつとふり出した雨。そのうす暗い空のもと、たくさんの水けむりを上げながらかれらは進んでいきました。いっちよくせんに、さいごのもくてき地へとむかつて。

もうもうとわき上がる水じょうき。はるかなならくの底へとつづく岩のさけ目から、ぶしゅー！ 大きな音を立てて、まっ白なあつい湯気が立ちのぼっていきます。

あたりの岩や地面は、もえるような赤一色にそまっていました（そしてあちらこちらの場合では、ほんとうにほのおが上がってもえていたのです）。地面に落ちている小石をふみしめるたびに、ぱきっ！ というかわいた音を立てて、小石はこなごなにくだけてしまします。ときどき、赤い道は流れるようがんのかたまった、まっ黒な川にぶつかることがあります。おそるおそる足を乗せてみますと、その表めんはすつかりかたまっていて、その上を歩くことができました（ですがまだじんわりとあついでした。

あんまりじつとしていたら、やけどしてしまふことでしょう。

まさに、じごくのような場所。そう、ここは怒りの山脈。アーザスの城へとつづく、りゅうの怒りにおおわれた、もえるように赤い岩と火の土地だったのです。

ロビーと人形の女の子ソシーは、今そのじごくのような赤い道を、アーザスの城へとむかつて進んでいるところでした。思いもかけず、ともに道をゆくこととなったロビーとソシー。ソシーはアーザスの手下です。それは変わりありません。ですがロビーは、このおそろしい道をゆくの、たとえそれが敵のがわの者であろうとも（そしてお人形であろうとも）、ともにゆく者がいてくれることをうれしく思いました。この場所にきていたら、だれだってそう思うはずです。どんなにゆうかなな者であろうとも、心がくじけてしまいそうになるほどの、のろわれた場所……。ロビーは、もえるけついを胸にひめています。待ち受ける運命へのかくごなんて、とつくのむかしにできております。ですがそれでも……。この場所のいっぽいっぽをふみしめるたびに、自分の気持ちがおしつぶされていくということが、ロビーにはわかりました。

この場所は、そんな場所でした。りゅうの怒り、そしてアーザスののろい……。そんなおそろしいエネルギーたちがいりまじって、まるであらしのように吹き荒れている、そんな場所なのです。だれだって、こんなところにひとりでいたいはずありませんでした。

「もうじきですよ、ロビーさま。」ソシーがロビーのうでを取っていいました。「あとすこしで、アーザスさまのお城が見えてきます。」

ソシーは上きげんで、ロビーにぴったりくっついていました。さきほどまではすっきり赤くなってどぎまぎしてしまっていました。しだいにロビーのそばにいられることが、うれしくてしかたなくなってきました。自分にできることなら、なんでもしてあげたい。ソシーはすっかり、ロビーにむちゅうでした（やつぱり恋なのでしょう。ロビーはなんだか、くすぐったい気分でしたが）。

そして、そのせまい岩かべのあいだをくぐりぬけると……。

「きた……。ついにここまで……」

目の前に広がる光景を目にして、ロビーは思わずそうもらしました。

そこに広がっていたのは、おどろきの光景でした。

そしてなんとも、おそろしい光景でした。

赤い道は大きなひとつの岩山をぐるりと取りかこむように、つづいていました。そこから右にむかって、道がいつぽんえだ分かれしております。そのはるかさきは、切り立った岩かべにぽっかりと口をあけている、黒いどうくつの中へと消えていきました。ど

うくつのはるかな上には、まっ黒なけむりにおおわれた、山のいただきが見えかくれしております。その山こそが、怒りの山脈のそのてつぺんでした。そしてその山の岩かべに口をあけたそのどうくつこそ、ほかでもありません。三十年前、ノランにみちびかれたアルマーク、アルファズレド、ムンドベルク、メリアンの四人の若き王子たちが、おそろしい赤りゆうとのさいごのけつせんへとぞんだ、そのぶたいだったのです。

ですが今、ロビーの冒険において重要なのは、そちらの道ではありませんでした。ロビーの目をくぎづけにしたもの。それが今まさに、ロビーの目の前にあったのです。

そう、アーザスの城でした。

なんとというおそろしい城なのでしょう！ 赤い道は、岩山の上にきずかれています。その城のまわりをかこむ、だんがいぜつべきのふちにそつてのびていました。だんがいは目もくらむような深さ、そして大きいです。落ちたらまず、助かりません。その底がないかのようなまっ黒なあなの上に、巨大な石づくりの橋がいつぽん、かけられていました。その橋が、がけのむこうにそびえるアーザスの城へとつづく、ゆいいつの道になっていたのです。

ですが、そんなだんがいぜつべきや石の橋よりもなによりも、いちばんおそろしいの

は、やはり目の前のアーザスの城、そのものでした。

こんなものが、この世にそんざいするのでしょうか？　そしてそんざいしているのでしょうか？

城……、たしかにそれは、アーザスの住む城でした。ですがその城は、みなさんが思えがくどんなお城にもあてはまらないことでしょうか。どんな悪夢にだって、あらわれないことでしょうか。

もはやこれを、城とよんでいいのでしょうか？

そのたてもの、城は、赤くぐにぐにとぶきみに動きまわり、まがつたりのびたりしていました。その表めんには、たくさんの目や口や手がついていました。どろどろとした赤やもも色やオレンジ色のゼリーのようなものが、そのいちめんをはいずりまわっていました。目をかたどったもようのはいった数えきれないほどたくさんのとびらやまどや塔が、その中からとつぜんあらわれては、またぐにぐにとしたかたまりの中へと消えていきます。あちらでもこちらでも、大きなあわがぶくーつとふくれ上がっては、ぼふん！　というにぶい音を立てて、はじけていきました。意味を持たないうめき声のような音が、あたりいちめんにひびいていました。

アーザスは、なんというものを作り上げたのでしょうか。

この城は、生きていたのです！（みなさんはこの城のことを、すでに目にしています。

ですがそのときは、この城の一部分しか見ることはできませんでした。第十六章のはじめ、アーザスが花にかこまれたテラスの中で、本を読んでいる場面がありました。あるときみなさんは、このおそろしい城の一部分を見たのです。読みかえしてみるのもいいですが、あんまりいい気持ちにはなれないでしょう。」

「なかなか、すてきなお城でしょう？」ソシーがにこにこして、ロビーにいいました。「アーザスさまが、人のたましいを生きたバリアーに変えて、この城を守らせているんです。うかつに近づいたら、ばくん、と食べられてしまいますよ。あ、でも、ロビーさまはへいきです。アーザスさまが、ロビーさまには手を出さないように、めいれいしてありますから。」

ソシーはむじやきにいいましたが、ロビーはなんとも、やるせない気持ちになりました。この城のことをひとめ見たロビーには、すぐに、ソシーのいった言葉の意味がかりかいてきたのです。ソシーのいう生きたバリアーとは、このアーザスの城のひょうめんをおおっている、その気味の悪いゼリーののような物体のことをさしていました。そう、このゼリーはまさに、人の生きたましいそのものでできていたのです！この城のまわりには、こんなかわいそうなたましいたちが、生きたバリアーとして、それこそなん百年千と使われていました。いったいアーザスは、人のいのちをなんだと思っっているのでしょうか！ロビーの手が、わなわなとふるえました。

「こんなことを、ゆるしてはいけないんだ。」ロビーがそういつて、きつ、と口びるをかみしめました。ですがソシーには、ロビーの気持ちが変わりません。ソシーはアーザスによって作られました。ですからアーザスにとつてあたりまえのことは、ソシーにとつてもまた、あたりまえだったのです。

人のたましいの力を悪用したエネルギー。やみのエネルギー、のろいのエネルギー。それらのものは、みんなぜつたいに手を出してはいけない、まちがった力です（魔女のアルミラも、まちがった力に手をそめました）。ですがアーザスにとつては、そうではありませんでした。すばらしい力、あふれるほどの力。力をもとめるアーザスにとつて、力のしゅるいなどはどうでもいいことでした。それがどんなきんだんの力であろうとも、強い力さえ得られれば、それでよかったです。

ソシーもまた、アーザスと同じ考えをうえつけられていました。それがどんなしゅるいの力であろうとも、強い力が得られるのであれば、それを使うことはあたりまえのことだと思っていたのです。ですからソシーにとつては、人の生きたたましいをバリアーにりようするなんてことは、あたりまえのことなのであつて、なにも悪いことだなどとは思っていませんでした。かのじよにとつては、このおそろしい城も、すばらしい力にあふれた「すてきなお城」だったのです。

ですがロビーは、ソシーのことを悪く思ったりなどはしませんでした。ロビーには、

すぐにわかったのです。ソシーの心はアーザスの悪い心によって、もともと悪く作られてしまっているんだ。そもその悪は、アーザスただひとりなのです。アーザスとのけつちやくをつけ、ソシーからアーザスのやみの力を取りのぞいてしまえば、ソシーもきつと、正しい心なおるんだ。人の心を取りもどすんだと。

「ソシー。」ロビーがいました。「この世界には、ほんとうにたくさん、すてきなものがあ。きみの知らないすてきなものが、山ほどあるんだ。」

「ぼくもまだ、ほんのすこしのことしか見ていない。でも、それでも、とてもとてもたいせつなものを、たくさん学ぶことができた。人を思いやる心、それは、そのとってもたいせつなものうちの、ひとつだよ。」

ロビーはそういって、ソシーの手を取りました。

「きみは、やさしい。だからきみには、ぼくのぶんまで、もつとたくさんの世界を見てほしい。みんな終わったら、ソシー、きみは、その世界に出るんだ。ぼくはたぶん、もう、ここから出られないと思う。いっしょにいけないらよかつただけ……。きみはきつと、その世界で、たいせつなものをたくさん見つけることができるはずだよ。」

え……？ ソシーはとまどいの表じようを見せました。ソシーにはロビーのいつていることが、よくわからなかつたのです。今までソシーは、このアーザスの土地からひとりではなれたことなどは、いちどもありませんでした。アーザスのおともとして、「悪い

人たち」のことをこらしめにいったことならあります。ですがそのときでも、ソシーはアーザスのそばにずっとついていて、その世界のことをじっくり見てみようだなんてことは、ぜんぜん考えてもないことでした。ですからソシーは、その世界のことなんて、ぜんぜん知らなかったのです。知りたいと思ったことすらありませんでした。ソシーにとっては、ただアーザスのそんざいだけが、すべてでしたから。

ソシーにとっては、この場所がふるさとなのです。生みの親のアーザスさまのことをさしおいて、この世界からひとりはなれるだなんてことは、ソシーにはまったく考えられないことでした。そこになにかたいせつなものがあるなんてことは、考えたこともありませんでした。

そして、ロビーのいった言葉です。

ぼくはたぶん、もう、ここから出られない。

ロビーはずっと前から、そう感じていたのです（ライアンとわかれることになるだろうと感じていた、そのときから）。アークランドをすくうため、アーザスのことをうち破るために、ぼくはそれとひきかえに、いのちを落とすことになるだろう。ロビーはそう感じていたのです。

それはもちろん、はつきりとだんげんできるようなものではありません。ですがロビーの心からは、どうしても、その思いが消えることはありませんでした。ぼくは、アーズと運命をとにもすることに。それが自分の運命なら、それで世界をすくうことができるのなら、ぼくはウルファのほこりを持って、それを受けいれよう。ロビーはその思いを、かくごを、胸にひめつづけながら、ここまでやってきたのです。でもライアンには、とてもこんなことはいえない。そう思いつづけながら……。

ロビーのその思いは、ソシーのその作りものの心にも、たしかに伝わりました（人の心ではない、お人形の心にもです）。ソシーはただ、ロビーといっしょにいたいだけ思っていました。ですがロビーの思いを前にして、しだいにソシーの心には、おそろしいげんじつがつきつけられていったのです。

アーズさまは、ロビーさまのことを、なき者にしようとしている……？

ソシーはアーズに、こういわれていました。ここにやってくるロビーというウルファの少年のことをあざむいて、時間をかせいでおいで。その気になれば、いつでもいのちだつてうばえるんだぞと、おどかしてやればいい。それはただのじょうだんだとばかり思っていました。ロビーというその相手のことを、ちよつとおどかしてやるため

の、ただのじょうだんだと。でもアーザスさまは、ほんきで……。

「そんな……」ソシーのからだだが、かたかたとふるえました。

「いや……。いやです、ロビーさま！ ずっといつしよにいてくださいー！」

ソシーがロビーに飛びつきました。ロビーの両うでをゆさゆさとゆすつて、ひつしにくい下がります。ですがロビーの目を見たとき、ソシーにはこれは、自分にはどうすることもできないことなのだ、はつきりとわかりました。

「ぼくの、運命なんだよ。」ロビーが、おだやかな顔をしていました。「ぼくは、自分のしめいをやりとげる。そして、ぼくのちかいのことも、きつと果たしてみせる。」

ロビーのうでをつかむソシーの手の力が、弱まっていききました。はじめて、人を好きになったソシー。はじめて、人の心にふれることのできたソシー。なんとという運命なのでしょう。その相手はもうじき、自分の手のとどかないところへといつてしまおうとしていたのです……。

「ふええ……」

ソシーは、ひつくひつくと泣きました。こはくのはまったその作りもののひとみからは、なみだをこぼすことはできません。もしソシーに、なみだを流すことができたのなら。きつとそのひとみからは、大つぶのなみだがぼろぼろあふれ出ていたことでしょう。ソシーはたくさん泣きました。人の心を持って、たくさん泣きました。

ロビーはそんなソシーのことを、やさしくだきしめてあげました。

「あの橋を、渡ればいいんだね。」ロビーが、ゆく手に待ち受けるいつぼんの石の橋をさして、いいました。

赤い道のさきに、にぶいは色の石でできたぶきみな橋がいつぼん、かかっています。はば三十フィートほど。城の入り口まで長さ百ヤードほどもある、巨大な橋でした。

橋の両わきには、らんかんがつくられていました。そしてそのらんかんの上に、ぶきみなものが乗っていたのです。およそ七ヤードごとに左右ひとつずつ、おそろしい悪魔のような生きもののちようぞうが乗っていました（じつさいには乗っているのではなくて、らんかんと同じ石からほり出されていました）。みなさんの世界でも、古いお城や教会などのやねの近くで、にたような石のぞうを見ることができません。それはガーゴイルとよばれる、悪魔などのすがたをかたどった石ぞうで、雨を流す「雨どい」のやくめを持つているほか、魔よけのこうかがあるともされているものでした。

ですがこの橋のらんかんに乗っている石のぞうは、魔よけなんてものではぜったいにありませんでした。むしろ、わざわいをもたらすためにつくられていたのです！ つまみこれは、この橋にかけられたわなでした。かんげいできない者がこの橋を渡って、わ

が家にやってこようとしたり……、ぼん！ 石ぞうの目や口から、おそろしいいりよくののろいのエネルギーが飛び出して、おそいかかるのです。

ほんとうなら、ロビーがこの橋をぶじに渡ることなど、できようもなかったことでしょう。ですがロビーには、わかったのです。アーザスは、ぼくのことをむかえいれて……。ロビーはこの橋を渡つてもだいじょうぶなのだということを、はつきりと感じ取っていました（はじめは時間をかせぐようにソシーにめいれいしていたアーザスですが、ソシーがそのつとめにしつぱいしたということは、アーザスにはすぐにわかりました。アーザスには、ロビーとソシーのいるところがわかるのです。ですからかれらがトンネルをぬけて自分の城の入り口のところまでやってきたということも、アーザスにはすでにわかっていました。それが意味することは？ そう、つまりソシーが、時間かせぎのつとめにしつぱいしたということなのです。こうなつてはもうアーザスも、時間がかせぐことはできません。それならばよていをへんこうして、もうロビーのことをむかえいれてしまおう。もはや楽しみは、早い方がいい。それがアーザスの考えでした）。

「わたし、アーザスさまのことを、せつとくしてみせます。」うつむいていたソシーが、急にロビーにいいました。

「ロビーさまのことをひどい目にあわせないように、せつとくしてみせます。アーザスさまは、ロビーさまの持つ、なにかをほしがっていました。くわしくはきけませんで

したけど。だから、それを渡せば、ロビーさまのいのちまでは、うばったりしないはずですよ。」

ソシーがいいましたが、ロビーにはわかっていたのです。アーザスは、そんなにあまい相手ではないということ。

「だから、アーザスさまのところまで、いつしよにいかせてください！ 道はわからなけれど……。きつと、おやくに立ってみせますから！」

そんなソシーの言葉に、ロビーがやさしくいきました。

「ありがとう、ソシー。その気持ちだけで、じゅうぶんだよ。でも、ぼくは、ひとりでいかなくちや。きみは、安全なところにかくれているんだ。すべてが終わったら、ここから逃げ出すんだよ。」

ソシーはいてもたってもいられませんでした。なんとかしなければ、ロビーさまは、ほんとうに殺されてしまう！

「いきましようー！」ソシーはロビーの手を取って、ひつぱりました。たまらずロビーも、ソシーといっしょに橋のそばまで近づいていきます。

「この橋なら、安全です。アーザスさまは、ロビーさまのことをこうげきしないように、この橋にめいれいしてあります。ですから、ロビーさまならだいじょうぶ。それにもちろん、わたしもだいじょうぶです。わたしは、このお城の住人ですから。」

「ちよ……、待って、ソシー！」ロビーがいましたが、ソシーはロビーの手をぐいぐいひっぱって、いうことをききません。そのうちソシーはロビーからはなれて、ひとりであつてに橋の上までいつてしまいました。これでは、いつしよにいかないわけにはいきません。しかたない、安全なところまでだったら、いつしよに……。ロビーがそう思ったときでした。

「ロビーさま、早くいきま……」ソシーの言葉が、そこでとぎれました。にぶい、なにかの音がひびいたような気がしました。

「え？」

ソシーの声。そして……。

「ソシー！」

ロビーのさけび声。

はじめ、ソシーにはなにが起こったのか？ まったくわかりませんでした。しかししだいにソシーは、おそろしいじじつを知ることになったのです。

足が……、ない……。

くずれていく、自分のからだ。ソシーのからだは、下半分がかんぜんに切りはなされ

てしまっていました。おなかのあたりが、ぼろぼろにくだけていました。

おそろしい、悪魔のわな……。

かんげいできない者がこの橋を渡って、わが家にやってこようとしたら……。

そう、アーザスはソシーのことを、かんげいできない、その相手にえらんだのです……。ロビーに協力している、じゃま者。もはやソシーはアーザスにとって、それだけのそんざいになっていました。そ、そんな……。だってソシーは、アーザスが作ったはずなのに……。

「ソシー……」

ロビーがもういちどさげんで、ソシーにかけよりました。ソシーは目を見ひらいて、きょうふの表じょうを浮かべております。信じられない。まさか。ソシーの心は、ぜつぼうにみたされていました。

アーザスさまにうらぎられた……。

「ソシー……」ロビーがソシーのからだをだき起こしました。すこしはなれたところに

は、ソシーの人形の足がふたつ、ころがっていました。

「口、ロビーさま……、わたし……」ソシーはそれ以上なにもいえず、ただきようふのあまり、口をばくばくさせるばかりでした。

ロビーの中に、怒りがわき起こりました。今まででいちばんの、ゆるせない怒りでした。

「そんな……、ソシーは、自分の味方なのに……」ロビーはそういつて、橋のむこうを見上げました。そこにはあのおそろしい、生きたたましいにおおわれた城がそびえていたのです。アーザスの待つ、城が。

「アーザスー！」

ロビーは怒りのあまり、あらんかぎりの声でさげびました。

「ぼくはぜつたい、おまえをゆるさないぞー！」

しかしロビーのさげび声は、ただむなしく、こののろわれた山の中に消えていくばかりでした。

「せいぎのたて持て！ 女神リーナロッドの名のもとに！」

おそろしいいくさの音たちがみちる中、それをかき消さんばかりの大声がその場にひびき渡りました。横いちれつにきれいにならんだ、騎馬、騎馬、騎馬。その数ぎつと、三百五十！ それぞれの騎馬たちの上には、白いよろいかぶとに身をつつみ、美しいマントをひるがえした、せいぎの騎士たちが乗っていたのです。そのマントにも、よろいの胸の部分にも、ひとつのもんしよがきぎみこまれていました。それはもちろん、われらが白き王国、ベーカールランドの白きもんしよだったのです。

「われら、アルマーク王あずかり、白の騎兵師団！」

「おおおーっ！」

いさましいかけ声とともに、白き騎馬たちがいつせいにかけ出していききました。そう、かれらは、われらがきぼう。このアークランドをやみからすくうべく立ち上がった、白き勢力の、そのちゆうしん的そんざい。ベーカールランドの白の騎兵師団だったのです。

ついに！ 白の騎兵師団がそのさいだいげんの力をもって、さいだいの敵とあいまみえるときがやってきました！ かれらのさいだいの敵、それはただひとつ。かれらにあだなす黒の軍勢、よこしまなるやみの力によってこのアークランドをはめつへ追いやろ

うとたくらむ、まがまがしき悪によってみちびかれた、黒の軍勢なのです。

おそろしいデイルバグたちのとうじょうにより、白き勢力の者たちは、見るまにそのいきおいを失いつつありました。もつともゆうかんなる者たちでさえ、デイルバグとその背に乗った黒騎士たちのことを前にしては、くせんをしいられたのです（ベルグエルムとフェリアルがかれらと戦ったときのことを思い起こしてみれば、それはよくわかります。デイルバグに乗った黒騎士たちは、劍のうでまえもさることながら、相手の弱みにつけこむというじつにずるがしこい戦い方をするのです）。

そんな中、まさにきぼうの光といえるそんざいこそが、われらが白の騎兵師団でした。かれらはしばらく、戦いの流れを読み取っていました。へたに動かず、けつしてあせらず。いちばん必要なときに、いちばん必要な力を、仲間たちのもとへと送りこむ。それが、すぐれたしきかんたちにひきいられたかれら白の騎兵師団の、もつともたいせつなやくわりだったのです。

そして今、かれらはそのもつとも必要な力を、もつとも必要としている仲間たちのもとへと、そそぎこむときをむかえていました。

デイルバグたちは白き勢力のたくさんの部隊に、かいめつ的なひがいを与えました。しかしまだ、白き勢力の守りのかなめは、くずれてはおりません。戦いのほんすじ。白き勢力のじんけいのかなめといえる、ちゅうおうの守り。そこをくずされては、この戦

いはこちらの負けです。そしてまさに今、敵は、まわりをかこむたくさんの勇士たちの守りをくずし、そのちゆうおうの守りを切りくずさんとして、もうこうげきをかけてきたところでした。

白の騎兵師団、まいる！ われらがベルグエルム、フェリアル、ライラの三人のしきかんたちにひきいられた白の騎兵師団のせいえいたちが、ついに剣をかまえて、つぎつぎと敵のただ中へとつげきしていきます！

「白きつるぎ、いざまいらん！」ベルグエルムがまつさきに、敵のまん中へと切りこんでいきました。

「せいぎのやいばは、くじけず！」フェリアルがすばらしいひらめきとともに、敵のところ深くもぐりこんでいきました。

「アークランドのために！」

強い！ 強い！ 強い！ かれらは、騎兵。馬に乗って戦う騎士たちです。馬に乗らなくたって強いということは、ベルグエルムやフェリアル、ライラの戦いぶりを見たことがあるみなさんであれば、すぐにわかることですが、そのかれらが馬に乗って戦うなら、これはもうさい強なのです。もうじゆうのすがたをしたかいぶつの敵が、「がおお

！」おそろしいつめをふりかざしておそいかかろうものなら……、ざしゆん！ かいぶつのつめは根もとからばっさり切り取られてしまつて、使いものにならなくなつてしまひます。長いやりをかまえたへびのようないぶつの兵士が、「きしやー！」ひとつきにしてやろうと、こちらへまつすぐにむかつてくるものなら……、ひゆひゆひゆんつ！ たちまちやりはこま切れにされて、地面にぽろぽろちらばつてしまひました。

白の騎兵師団、かれらの戦いぶりは、まさにむてきと思われるほどのものでした。敵にかこまれピンチにおちいつている味方たちのもとにさつそうとあらわれては、まわりの敵たちをばつたばつた！ やつつけてしまうのです。戦いのただ中にいるわれらが仲間たちにとつて、これほど心強く、はげみとなるものもありませんでした。

しかし、それでも……。

どんなに強い騎士たちでも、どんなにたくみなじんけいで、どんなにたくみなせんじゆつをもちいたとしても、黒の軍勢のいきおひは、その上をいつていたのです。それはまさに、数と力のぼうりよくでした。

ゆつくりと、すこしずつ、白の騎兵師団の勇士たちのいきおひも、敵のもうこうげきの前におされ気味になつていききました。ふるう劍のひらめきは、すこしずつ、ちよつとずつ、にぶつていききました。かける馬のはやさは、いつぽ、またいつぽと、おくれていききました。どんなにすばらしい力も、どんなにきたえ上げられたわざも、えいえんにつ

づくということはないのです。

「敵が多すぎます！ とつばされる！」

ひとふりで三人の敵をうちたおすほどのうでまえを持つ、白の騎兵師団のせいえいたち。そのかれらのうでをもつてしても、黒の軍勢のそのまがましいまでの悪のいきおいは、あつとうされるばかりでした。

「持ちこたえろ！ じんけいをいじするのだ！」

かれらの先頭に立つて剣をふるう、いちばんのつわもの、ライラ・アシユロイ。かのじよのさけびもむなしく、白の騎兵師団のじんけいは、しだいにくずれつつありました。

そして、もつともおそるべき相手があらわれたのです。

ああ、なんというおそろしきなのでしょう！ くせんをしいられているわれらが仲間たちにとって、それはまさに、悪夢そのものでした。

右手の戦場では、敵のじんをくずさずととしてまわりこんでいた仲間たちが、空からのデルバグたちのこうげきによって、ばらばらになぎはらわれていました。

左手の戦場では、かいぶつの吹き出したどくの息によって、多くの仲間たちがせきこみ、地面にうちたおされて、動けなくなっていました。

ですがそれらのどんな光景よりも、目の前にせまりくるその光景は、おそろしいものだったのです。

魔王ギルハッドがやってきました。

ほのおのたてがみを持ったしつ黒の騎馬にまたがり、その手に黒いほのおを吹き出す巨大な剣をいつぽん、にぎりしめて……。

「う、ううう……！」

なみの者であれば、さけび声を上げて逃げ出してしまふほどの、きようふ。われらが白の騎兵師団の騎士たちは、あらゆるきようふにうちかつくんれんを受けていました。痛みやくつうやぜつぼうにたえる、強い心を持ちあわせていました。

ですがそんなかれらであつてさえも、せまりくるこのきようふのそんざいにむかつては、言葉を失い、ひやあせをたらし、がくがくとふるえる足をおさえるのでせいっぱいになってしまったのです。

「隊れつをくめ！ 守りをじゆうし！ とつばされるな！」

ライラのかけ声がひびきます。ですがその場にいる白き勇士たちの頭の中には、そんなライラの言葉ですら、まんぞくにはいつてはきませんでした。

「うう……、おのれ！」ひとりの騎士がわれも忘れて、ギルハッドにとっしんしました！これはライラのしじにはない、めいれいはんの行動です！ですがこのあつとう的なきようふを前にして、だれにかれを、せめることができましょう。頭で考えることもできず、ただただきようふにおし流されて、かれは動いてしまったのです。

「やめろ！…もどれ！」

ライラの声は、もはやかれにはとどきませんでした。そして……。

がしん！…ごおおお！

ギルハッドの剣がふりはられました！そして、ああ、なんとということでしょう！黒いほのおのうずがあたりをつつみこみ、ごう音とともに、大地と、そしてとっしんしていった騎士と騎馬のことを、やきこがしたのです。騎士はそのまま気を失い、騎馬から落ちて、こげた地面にうつぶせにたおれふしました。

おそろしいいちげきをまのあたりにした仲間たちは、なおいつそう、おそれ、たじろぎ、剣を持つその手をきようふにふるわせました。ゆいいつ、かろうじてれいせいさをいまだかかずにいられたのは、かれらのしきかんであるライラ、ただひとりばかりであったのです（今魔王ギルハッドにむかいあっているのは、ただライラの部隊ひとつだ

けでした。ベルグエルムもフェリアルも、それぞれのいくさの場で、数えきれないほどのたくさんの敵たちと、はげしくいさましい戦いをくり広げていたのです。

魔王ギルハッドが、ゆつくりとこちらへ歩みを進めてきます。その金色にふち取られた影のように黒いかぶとのすきまから、赤い目をぎらつかせた、ギルハッドのすがおが見て取れました。なんとというおそろしい生きものなのでしょう！ 人ともつかず、けものともつかず、たくさんの小さな手のようなものが、顔のまわりでうねうねと動いているのが見えました。しゅーしゅーという湯気のような音が、よろいのすきまからぶきみにもれ出していました。こんな生きものが、この世にそんざいしていいのでしょうか？

「白の騎兵師団……、しきかんどのお見受けする……」ギルハッドがひくくうなるような声で、ライラにむかっていいました。

「われは、ギルハッド……。ガノンとのけいやくによりまいった……」

その言葉に、ライラは、きつ、と歯をくいしばり、手にした美しい剣をギルハッドにつきつけます。

「わたしは、白の騎兵師団、人間隊長、ライラ・アシュロイ！ このさきへは、いっぽも進ませぬ！ そなたは、そなたのくにへと帰るがいい！」

剣をかまえるライラ。ギルハッドはなにもいわず、黒いほのおを吹き出す剣を高々とかまえました。そして、それをあいずに……、まわりからとつぜん！ おそるべき者た

ちがつぎつぎとあらわれたのです！

それはギルハツドのひきいる、魔界の軍勢の兵士たちでした！ この兵士たちはあるじのギルハツドのそばになら、遠くはなれた場所からでも、(そこがべつの世界でないかぎり) いっしゅんにしてあらわれることができたのです。今や白の騎兵師団、ライラ隊の者たちは、魔王ギルハツドのひきいる悪魔の軍勢に、すっかり取りかこまれてしまつていました。

「あきらめろ……。おまえでは、われには勝てぬ……」

ギルハツドのそのけもののような赤い目が、ぶきみにきらめきます。

「ぬかせ！ ばけもの！」

ライラがギルハツドにとっしんしました！ このアークランドでさい強といわれる劍の使い手、ライラ・アシユロイ。そのライラがついに、魔王ギルハツドと劍をまじえるのです！

なんというすさまじい、劍のあらし！ ライラの劍はいつさいのむだがなく、つねにときかくに敵の守りのすきをついて、その劍をたたき落とすのです。しかし、こんかいばかりは……。

きん！ きん！ がしん！ がしん！

つぎつぎとひらめき、ふり下ろされる、ふたつの剣。相手がなみのつわものであるのなら、もうとつくに、勝負はついていることでしょう。ライラのあつとう的なしょうりに終わるはずです。しかし、こんかいばかりは！

ひらめくたびに黒いほのおのうずをまき起こす、魔王のつるぎ。ライラはそのほのおのあいまをぬってじつにたくみに騎馬をあやつり、敵の目のとどかない位置から、でんこうせつかのいちげきをくり出していききました。ですが、なんてこと。ライラの剣はことごとく、ギルハッドのその黒きやいばの前に、はじきかえされてしまったのです。

なんとという強さ！ しかもギルハッドはライラの剣を受けとめるたびに、そのけものじみたじやあくな口もとをゆるませて、ぶきみな笑みを浮かべました。そう、ギルハッドはまだまだ、ほんきを出してはいないのです！

「あれは……！ ギルハッド！」

ちゆうおうの守り、その左手からベルグエルムがさけびました。ベルグエルムはちゆうおうの守りの左にあいた守りのあなをついてきた、たくさんの敵たちのことをくいとめるために、わずかな数の騎士たちをひきいてふんとうをつづけていたのです。

「ライラどのだ！」

ちゆうおうの守り、その右手からフェリアルがさけびました。右の守りは、ほとんど

くずれかかっています。フェリアルルのひきいる白の騎兵師団の騎士たちが身を張ってふみとどまっていることによって、かろうじて、その守りは持ちこたえられていたのです。

ベルグエルムもフェリアルルも、目の前の戦いで手いっぱいでした。とても、ライラを助けに行くことなどはできません。ですがそれは、はじめからわかっていたことでした。この戦いは、とくべつ。おたがいに助けあいたくとも、とても、そんなよゆうすらないだろう。そのことはかれらにも、よくわかっていたのです。

「ライラどのー！」

ベルグエルムもフェリアルルも、ライラの身にさいだいの危険がせまっているということは、すぐにわかりました。ですがかれらには、もはやどうすることもできなかったのです。手をのばせばとどきそうなどころにいる友さえも、助けてやることができなない。この戦いは、そんな戦いでした。かれらにできることは、ライラの身をあんじて、ただその名をよぶことだけだったのです。

こきゆうをととのえる、ライラ。そしてふたたび、人わざとは思えないほどの、もうこうげき！ ですがギルハッドはまたかるがると、それらのこうげきのすべてをかわし、受け流してしまいました。

しだいに、ライラのからだにもつかれが見えはじめてきました。これほどのこうげきをくり出しても、敵はそれを、ものともしないのです。ライラはけっしんしました。

これしかない……！

ライラは剣をまつすぐ前にむけて、かまえました。こうげきを一点に集中！　こんしんの力とわざをもつて、このいちげきにすべてをかけるのです。

これはいわば、すて身ともいえるこうげき。ライラのとつておきの大わざでした。自分のぼうぎよをすべてぎせいにして、敵にさいだいのいちげきをたたきこむのです。しかしそれがかわされたとき……、そのだいしようは、はかりしれないものでした。自分のからだをまつたたくのむぼうびのまま、敵の前にさらけ出してしまふのです。

ライラはふつうならばぜったいに、このわざをしようとはしません。しかしこのおそるべき魔界の王に対しては、もはやこれいがい、手だてはないのです。

「わが、たましいの剣！　受けてみよ！」

ライラが、ギルハッドにとつげきします！　ギルハッドは剣をまつすぐにかまえ、ラ

イラにむきあいました。そして、つぎのしゅんかん！

がきーん！ ごおおおお！

あたりはまつ黒なほのおにおおいつくされました！ そのちゆうしんにいるライラとギルハットのすがたは、まったく見えません。はたして、勝負のけつかは……！

やがて、黒いほのおがしゆうしゆうというぶきみな音とともに、消え去っていきました。あたりには、火のもえるいやなおいおいが立ちこめています。

まわりをかこむ仲間たちは、その勝負のけつまつをかたずを飲んで見守っていました。いったい、どつちが……？

「う、うわああー！」

白の騎兵師団の、せいえいなる騎士たち。その騎士たちのぜつぼうのさけびが、あたりにひびき渡りました……。

黒いほのおの消えた、そのさき。まつ黒にやけたその地面のまん中に、ライラがたおれていたのです……。手にした剣のやいばは、こなごなにくだけちっていました。白い

よろいはやけこげ、きぬのマントはぼろぼろにやけ落ちていました。そしてそのライラのことを騎上から見下ろす、むきずのギルハツドのすがたも……。

「ライラさまー!」「そんな!」「うそだー!」

おそろしいげんじつをまのあたりにして、騎士たちの動ようはかくせませんでした。このアーランドでいちばんの剣の使い手、ライラ・アシユロイが、こんなにもあつとう的なまでにはいぼくしたのです……。こんな相手に、どうやって立ちむかえというのでしょうか?

「うう、う……」

そのとき! ライラがくるしそうなうめき声を上げました。よかった! まだ息があります! いくさでは、相手のいのちをうばってはなりません。ですがやむを得ず、はげしい戦いの中でいのちを落とす者がいることも、またじじつでした。しかしライラは、生きています!

「ライラさまー!」「ライラさまー!」

騎士たちが、ライラにかけようとしています。ですが……。

「待て……!」

ライラがそういつて、もはやつかのみとなった剣を地面につき立てて、その身をよろよると起こしました。なんとというせいしん力なのでしょう! これほどぼろぼろにな

りながらも、なお、ライラは立ち上がるのです！

「まだ、勝負はついておらぬ……！」

立ち上がり、つかだけの剣をかまえる、ライラ。

「部下たちには……、ゆびいつぽんとて、ふれさせはせぬぞー！」

しかしもうだれの目からも、ライラのはいぼくはめいはいはくでした。

「もう、じゆうぶんです！ ライラさま！」

「ほんとうに死んでしまいます！」

騎士たちの、ひつうなさげび。そしてそのむこうから、むじひな赤い目を光らせながら、魔王ギルハッドがおそろしいうなりを上げていいました。

「みとめてやろう……、おまえは、ほんものの戦士だ……！」

ギルハッドはそういつて、黒の騎馬から音もなく地面におり立ちました。その手に黒き魔界の剣を持ち、ゆつくりと、ライラのもとへ歩みよつていきます。

「わが、さいだいの敬意をもつて……、おまえに、戦士としての、めいよあるさいごを
与えてやろう……。かくごするがいい……！」

そんな！ もう勝負は、ついているのに！ これはおきて破りです！

ギルハッドの剣が、ライラの前につきつけられます。ライラにはもはや、あらがう力も残されてはいませんでした。

「ギルハッ……」

ギルハットの剣がふりかざされる、まさにそのとき……！

ばさっ！ ばさっ！

とつぜん！ 頭の上から大きなつばさのはばたく音がきこえ出しました！ 騎士たちはいつせいに、空を見上げます。そこで、かれらの目にしたものは……！

「デイ、デイルバグ！」

上空から今、ひとつの黒い影が、この場にまいおりてきました。それはまさしく、ワツトのおそろしき黒のかいぶつ、デイルバグだったのです！

なんとということ！ ギルハットだけでも歯が立たないのに、デイルバグまで！ もはや、ゆうもうかかなくなるべーカーランドの白の騎兵師団とて、この戦いの場を切りぬけることなどはふかのうでした。ふかのうに思われました。

しかし！

「うおおおー！」

デイルバグに乗った、ひとりの黒騎士。その黒騎士がいつちよくせんに、ギルハッドにむかつてとっしんしていったのです！ これはいったい！ どういうことなのでしよう！

がががん！ はがねのぶつかりあう、すさまじいまでの音！ そして、ごおおお！ それにつづく、黒いほのおのうずまく、すさまじいまでのうなり声！

ぎやあ！ ぎやあ！ ほのおにやかれるデイルバグの、おそろしいなき声。そして、それにつづいて……。

「ぐおおおお……！」

こ、これは！ 魔王ギルハッドが胸をおさえて、くるしみにその身をよじらせているではありませんか！ ギルハッドのよろいかぶとのあいだからは、まっ黒なけむりが、しゅうしゅうと音を立てて吹き出していました。

ギルハッドの胸には、いつぽんのおうごんのつるぎがささっていました。どこかで見おぼえのある、この剣は……！

これは、ガランドーの剣です！ まっ黒なよろいかぶとにはふつりあいな、みごとなこがね色の剣。これはガランドーがいつも腰にさしていた、あのこがね色の剣にまちがいありません！ ということは！

「お、おまえは……！」

おどろきに飲みこまれていた騎士たちが、ようやく、とっしんしてきた者のすがたを見てさけびました。

「ガランドー！」

そう、デイルバグに乗った、ワットのしきかん。ベーカーランドのうらぎり者。ガランドー・アシユロイが、今かれらの目の前に立っていました。しかし……。

ガランドーのからだはギルハッドの魔界のほのおによって、ぼろぼろにやきこがされてしまっていました。よろいほろほろにくずれ、かぶとはまつぶたつにわれて地面に落ちていました。

それでもなおガランドーは、よろめきながら、いつぽいつぽ、ライラのもとへと歩みよっていったのです。

「ライラ……」ガランドーが、ライラにそうつぶやいたとたん……。

ばたん！

「ガランドー……！」

地面にたおれこむガランドーに、ライラがよりそいました。ほのおだけではありません。なるエネルギーによって、ずたずたにひきさかれてしまっていたのです。もはやいしきをたもっていることすら、おぼつかないじょうたいでした（そしてガランドーのこんし

んのいちげきをその身に受けたギルハッドも、大きなダメージを負っていました。そのからだにひめた魔界のエネルギをすべて出しきってしまったギルハッドは、もはや、この世界にとどまっていることすらできなくなっていたのです。ギルハッドはみずからの暗黒のほのおに身をこがされながら、魔界へと送りがえされていきました。しばらく、おそらく数年ほどは、もとの力を取りもどすこともできないでしょう。

ギルハッドの部下の悪魔の兵士たちにも、同じことが起きていました。王のギルハッドがたおされた今、かれらもまた、みずからの力をこの世界にとどめておくことができなくなっていたのです。かれらの消えたあとには、ただ黒いよろいかぶとと、巨大な剣のみが残されているばかりでした。

「ガランドー……、なぜ……！」ライラがガランドーのからだをだきかかえながら、うったえかけました。その目からはぼろぼろと、大きななみだのつぶがあふれています。

「こうするほか、なかったのだ……。おまえを守るために……。ゆるしてくれ、ライラ……」

ガランドーの目からも、いもうとと同じ、同じ思いのこもったなみだがあふれかえっていました。

多くの言葉をかわさなくとも、ライラにはわかったのです。ガランドーは、なにかがれることのできないりゆうのために、ワットにむかったのだと。それがいもうとである自分をすくうためであったのだということを、ライラはのちに、知ることになるのです。

ですが今は、これだけでじゆうぶんでした。ライラのうでにあるガランドーは、むかしのガランドーそのままでした。兄の、家族であるガランドー、そのままでした。

「兄さん……」

失いかけてゆく、ガランドーのいしき。ライラはいつまでも、兄のそのからだを、ぎゅっとだきしめつづけていました。

28、戦いのゆくえ

「もうそろそろ、けっちやくがつきそうね。」

あついこうちやのはいったティーカップをゆうがに口もとにはこびながら、今いすにすわったひとりの若い女の人が、静かにほほ笑んでいました。その前にはひとつのティーテーブルがおかれていて、きれいなレースのテーブルクロスがかかっております。そしてその上には色とりどりのくだもの乗ったお皿に、クリームたっぷりのマフィンの乗ったお皿、そしてクッキーにマカロンなど、たくさんのお菓子が乗ったお皿などが、ならんでいました（さらに頭の上には魔法のパラソルがかかっていて、雨も防いでくれたのです）。

「あれだけ強いみんながいるんだもん、あつたりまえだけどねー。」

むこうから、赤毛の長いかみをたばねた小さな女の子がひとり、にこにこしながらやってきました。その手にはまた、新しいお皿を持っております。そしてその上には……。

「どーせ、ひまだし。ほら、これー。アルーナが作ったんだよ。あの子、こーいうのじょうずよね。」

アルーナ？ この名まえは！ あのおそろしくてずるがしこいワツトの魔女っこ三姉妹のうちの、ひとりの名まえではありませんか！ ということは、ほかのふたりは？

そう、お皿を持った小さな子は、三姉妹の三女エカリン・スフルフ。そしてゆうがにお茶を飲んでいる黒いかみの美しい女の人は、この三姉妹の中でもいちばんおそろしい力を持った、長女のネルヴァ・ミスナディアだったのです。

エカリンのさし出したお皿の上には、こんがりきつね色にあがったお菓子が乗っていました。そのほかにも、白いクレープにつつまれた、きれいな色をしたお菓子も乗っております。あれ？ でもこれ、ほんとうにお菓子でしょうか？ テーブルの上に乗っているものからそうぞうして、ふつうにこれもまた、お菓子だと思ってしまうましたが……。

「……アルーナとくせい、かにはるまきです……！」

は、はるまき？（なんではるまき？）

「……アルーナ風、生はるまきもあるです……！」（ま、またはるまき……）」

ティーテーブルのむこうに作られたとくせつのちようり場から、さんかくきんとエプロンがたのアルーナがすたすたやってきて、顔の横で手をぴしっ！ と立てていいました（おなじみのポーズです。あいかわらずのふしぎっ子ですね。ちなみに、かけてい

るも色のエプロンには、ひよことにわとりと目玉やきの絵がデザインされています。すごくいくみあわせです……。

ところで、アルーナだけまだ、かみの毛の色を伝えていませんでしたね。かのじよのかみはやや茶色がかった、美しいこがね色でした。

ここはどこでしょう？ このお茶会はそとでひらかれていました。空は雨もよう。ぽつぽつと小雨が落ちはじめています。きおんはぐつと下がってきていました。上着なしでは寒くてたまらないでしょう（そのためかのじよたちは自分のからだのまわりに魔法を張っていて、そこを歩いてきなおんどにたもつていました。これは、どこでもかいてきのじゅつ。このじゅつをかけると、あつさ寒さから身を守ることができたのです。むずかしい魔法で、ふつうは五分もたせるのがやつとです。マリエルでも、せいぜい十分でした。ですが魔女たちはなんのくろうもなしに、なん時間でもこの魔法をもたせることができたのです。これはつまり、かのじよたちの使っているおそろしい悪魔のエネルギーの、そのじゃあくなる力のためでした）。足もとは海の色まじった、白い石だたみ。まわりは同じ石でできたひくいかべで、ぐるりとかこわれております。そしてそのかべの横には……、やりを持った黒いよろいかぶとに身をつつんだ、ワットの兵士たちが数人、見張りに立っていました。

ここは、ベゼロイン。かのじよたちがいるのは、そのいちばん上。かなたのリユイン

の地、そしてエリル・シャンディーンへとつづくその道を見下ろす、見晴らし台の上だったのです。

かのじよたちは、エリル・シャンディーンの戦いにはさんかしていませんでした。いくさのおきてとして、まじゆつしは戦つてはいけないことになっていましたから。助ける魔法なら使つてもいいのですが、このおそろしい黒の軍勢に、助けがいるでしょうか？ かのじよたちはそういうわけでこのベゼロインに残り、もてあました時間をお茶会をひらきながら、つぶしていたというわけでした（みんながひつしに戦つているというのに！）

ちなみに、このベゼロインとりに残っているようにかのじよたちにしじしたしたのは、ワットの黒の軍勢のおえら方たちでした。もはやさいごの戦いがはじまつてしまったため、このベゼロインとりの守りのことなどは、ワットもほとんど重要に考えていなかったのです。もしこのとりでがうばわれたとしたって、どのみちこのままワットがベーカールランドに勝つてしまえば、ベーカールランドもそのだいしようとして、このとりでをふたたびワットに明け渡さなければなりません（それに、今さらこのとりでをおそう者なんているはずもないだろうと、ワットも思つていたので）。そのためワットはひとりでも多くの兵をさいごの戦いにかり出し、このベゼロインとりの守りは、必要さいていげんの兵士と魔女の三姉妹さえおいておけば、じゆうぶんで

あると考えていました（それに、これはいくさのこまかい取りきめのひとつとしてきめられていることでしたが、いくさにさんかする兵は、たとえひかえの兵であっても、その戦いの場にしゆうけつしていなければならぬというルールがありました。このルールもありましたから、ワットはそのほとんどの兵力を、いくさにさんかさせるためにしゆうけつさせていたのです。もともと、こんなルールがなくなつて、ワットはいくさの場に全兵力をしゆうけつさせていたでしょうけど）。ワットはもはやかんぜんに、さいごの大いくさに全力をかたむけていたのです。

「それにしてもさー。エカリンが手をひたいにかぎして、あたりをきよろきよろとながめ渡しながらいいました。「まだ、こないのかなー？ おそいよねー。さっさと、やつちやえばいいのに。」

「手がかかるのよ。」ネルヴァがそういつて、またお茶をすすります。「あれだけの相手ですもの、王さまも、したくがたいへんなんでしょう。」

「早く、きてくんないかなー。そしたらすぐ、わたしたちもおうちに帰れるのに。」エカリンがそういつて、「うふふ。」と笑いました。「まあ、でも、ベーカーのみんなには、さいなんだけどねー。」

「これでかれらも、自分たちの立場を知るんじゃないかしら？」ネルヴァがいいました。「どちらが上に立つべきなのか？ かれらにじつくりと、わからせてあげないと

ね。」

そういつて「ふふっ。」とほほ笑むネルヴァに、エカリンがくすくす笑っていいました。「ネルヴァアつて、ほーんと、せいかくわつるゝい。」

そのとき、エカリンの頭に「ごちん！ とげんこつがひとつ。」

「……はるまき、さめるです……！ 早く、食べるです……！」

「いたたた……！ わかつてるわよ、もうー。いったいなー。」エカリンが、頭をおさえ、えていいました。

「わたしのことは、いいですから……、どうか、さきへいつてください……」
だきかかえる手の中からきこえる、とぎれそうな声……。

ここは、怒りの山脈。アーザスの城の、その前。そこにかけられた、いっぽんのぶきみな石の橋の上。今その橋の上を、ロビーがかけていました。その両の手に、ソシーのからだをしっかりとだきかかえながら……（ソシーの二本の足は、背中のかばんにしまつてありました）。

アーザスのゆるせないうらぎりにより、ソシーのからだはぼろぼろになつてしまつていました。悪魔のわなからはつしやされたおそるべき悪のエネルギーは、ソシーのおなかをつらぬき、そのからだを半分にしてしまったのです。ソシーがもし、人形でなかつ

たのなら……、考えるだけでもおそろしいことでした。しかしたとえ人形のからだであつたとしても、悪魔のわながソシーに与えたダメージは、そうぞう以上におそろしいものであつたのです。

「きみをおいてはいけない。きみを助けるには、これしかないんだ。アーザスに、きみをなおさせる。どんなことをしてでも、きみを助けるからね。」ロビーは強いけついの心をもつて、いいました。

ロビーは急いでいました。急ぐ必要がありました。なぜなら……、ソシーのからだからは、ソシーのことを動かしているのちの魔法のエネルギーが、どんどんともれ出していたからなのです！ ロビーはたしかに、感じ取っていました。女神のせいなるつるぎの力が、ロビーにそれを教えたのかもしれない。このままいのちのエネルギーがみんなソシーからもれ出してしまえば、たとえそのあとどんな魔法を使つても、アーザスほどの強力なまじゆつしであつたとしても、もうソシーのことをもともどすことはできなくなるのだと……。

今からトンネルをひきかえしたとしても、とてもまにあいません。このままでは、いのちのともしびの力がみんなもれて、ソシーはただの人形にもどつてしまう！ そんなことはさせない。ソシーはようやく、人の心に気づいて、これからほんとうの世界をはじめるときなんだ。ぜったいに、ソシーのことを守ってみせる！

「ロビーさま……、ごめんなさい……、ごめんなさい……」

ソシーは消えゆくような声でそういつて、ひとみをとじました。なみだをこぼせない、ソシーのそのひとみ……。ですがロビーはたしかに、そこになみだのつぶを見たように思いました。

ソシーを助ける方法は、ただひとつ。そう、そのいのちのエネルギーがかんぜんにもれ出してしまう前に、アーザスにめいれいして、ソシーのことをなおさせるのです。それがソシーをすくうことのできる、ただひとつの方法なのです。のぞみはともうすいものでした。アーザスがそんなことを、ききいれるはずありません。ですが、やるしかないのです。ソシーを助けるためには、それしかないのです。ロビーにはそのことが、すぐにわかりました。

けついを胸に、ロビーは走りました。このおそろしい橋の上を、あらんかぎりのはやさでもつて。

悪魔のわなは、たしかにロビーのことをおそつたりはしませんでした。しかしそこを通すソシーにちよつとでもすきを与えれば、またわなの力が、ソシーのことをおそうかもしれないのです。ロビーはたえずけいかいし、わなに気をくばりつつけながら、自分の身をたてにしてソシーのことを守りつつけました。

そしてついに、ロビーはこの橋を渡りきったのです。

なんというところなのでしょう。橋を渡りきったところは、広場になっていました。地面は、はい色の砂をぎつちりとかためたよう。空気は重く、あついようなつめたいような、そんなぶきみな感じをおびております。大きな石のはしらがたくさんならんで、ロビーはそのはしらのひとつにさつとかけよって、身をかくしました（どこかにまだ、わながあるかもしれませんでしたから）。

ここまではまだ、ふつうのものでした（それでもじゆうぶんにおそろしいふんいきを保持していました）。

しかしここには、もうひとめでふつうではないとわかる、おそろしいものがあつたのです。

それは、アーザスの城への入り口でした。

巨大な、はい色の砂をかためてつくった石の門が、はしらのむこうにどんとそびえていました。門の高さは、五十フィートはゆうにあるでしょう（ロザムディアのまちの南門にも負けないくらい巨大です）。その門は、びつちりととじていました。とじているように思われませんでした。門がひらいているのか？ とじているのか？ なぜはつきりとわからないのでしょうか？ それは……。

その門全体を、ぶくぶくとあわ立ちうごめく、ゼリーのようなかたまりがおおいつくしていたからなのです！ それは遠くから見た、あの城をおおいつくしていた生きているバリアーの、一部でした。近くで見るとそのバリアーの、なんとおそろしいことか！ たくさんの目や口や手が、そのゼリーのかたまりのようなバリアーの中に浮かび上がっては、消えていきました。目はばちばちとまばたきをくりかえし、きよろきよろとこちらのことを見つめてきます。口はなにかうわごとのような言葉をつぶやき、声にならないうひめいを上げていました。たくさんのおぼけのような手はなにかをつかもうとして空中にむなしくのびていき、またひっこんでいきました。

こんなものが巨大な門のまわりにまわりつき、この門をほとんど見えなくしてしまっていたのです（ですから、あいているのか？ とじているのか？ よくわからなかったのです）。いったいこんな門を、どうやってくぐりぬけたらいいのでしょうか？（たとえかぎがあったとしても、かぎあなすら見えないのですから。）

ですが、このすべてのものをこぼむかのようなおそろしい門ですら、ロビーはぶじにくぐりぬけることができました。なぜなら……。

がごん！ ぎ、ぎ、ぎ、ぎ……。

ロビーがはしらの影から門のことをかんきつしていた、まさにそのとき。きょうふの門は自分から、その口をひらいていったのです！

それは門の大きさから見れば、ほんのすこしのすきまができただけにすぎませんでした。しかしそれでも、人が通るのには、じゅうぶんすぎるほどの広さだったのです。

「アーザス……」ロビーは静かにつぶやきました。そう、この門をあけたのは、まさしくアーザスほんにんだったのです。橋のわなをロビーにむけなかったのと同じ、アーザスはこの門をひらいて、ロビーのことを自分のもとにまねきいれていました。

もはやアーザスとの運命のけっちやくのときは、目の前……。ロビーは意をけつして、はしらの影から門の入り口へと走りました。門がひらいたときに地面に落ちてちらばった生きているバリアーのかけらが、ぐにぐにと動いて、ロビーの足にしがみつこうとしてきます。ロビーはひよいとそのかけらをよけて、入り口の中に飛びこみました。

門の中は、まっくらでした。そしてロビーが中にはいったとたん、その巨大な門は、ふたたび、ぎぎぎという大きな音とともに、とぎされたのです。

がごん！

ロビーとソシーは、まったくのくらやみの中にいました。ですが、つぎのしゅんかん。ほ、ほほ、ほ……。

石のかべにつくられていたいくつかの明かり受けの上に、青白いほのおが、ひとりで

にともっていったのです！ それはなんとも、ぶきみなほのおでした。よく見ればそのほのおの中に、くるしそうにうめく、人の顔のようなものが浮かんできたのです。ああ、なんということでしょう。このほのおもまた、生きていたのです！ アーザスは城のバリアーに使ったのと同じ、人からうばったたましいのエネルギーでもって、このほのおをともしていました。しかも、ただの明かりを得るために！（なんてひどいことをするのでしょうか。こんなことはいっこくも早く、やめさせなければ！）

ロビーはソシーのことをだきかかえ、生きたほのおにてらされたそのはい色の石の道を、ゆつくりと歩いていきました。かかえるソシーのからだだから、すこしずつ、ですがかくじつに、いのちのエネルギーがもれ出しているのが感じられました。急がなければなりません。ソシーはずっと目をとじ、荒い息使いをしたままでした。もはやしゃべることさえも、こんななんじょうたいでした。

ロビーはからだ中のあらゆる感かくを使って、このさいこの道のりの中を進んでいきました。道はぜんぜん、わかりません。ソシーのいった通り、城の中はたくさんのおうかやとびらで、あふれていました。これはほんとうに、めいろです。ですがロビーには、ふしぎとアーザスのいるところまでの道すじがわかるような気がしました。アーザスがロビーのことを、みちびいているのでしょうか？ それともせいなる剣の、そのふしぎな力のためなのでしょうか？ はっきりとはわかりません。しかしそれはもはや口

ビーにとって、重要なことではありませんでした。今はいつこくも早く、アーザスのところへたどりつくこと。それだけがすべてだったのです。

待っている、アーザス……。ロビーは心の中で、かたくちかいました。

ぼくがかならず、つぐないをさせてみせる。

消えかかつてゆく、ソシーの作りもののいのち……。人形であるとはいえ、ロビーのうちの中にあるソシーにやどっていたのは、たしかにひとつのいのちでした。守るべき、いのちでした。

ロビーはこの暗いめいろの中を、ソシーとふたり、かくじつにアーザスのもとへとむかって歩みを進めていきました。

戦いのゆくえは、もはやだれの目にもあきらかになつていました。おそろしき魔界の王ギルハッドとその悪魔の兵士たちのことをうちたおした、白き勢力の者たち。ですがそれでも、よこしまなる黒の軍勢のいきおいは、いぜんとしてどまるところを知らなかつたのです。あちこちでさいごのていこうをつづける、白き勇士たち。ですがその勇士たちの剣も、いつぼん、またいつぼんとおられ、はじかれ、地面に落ちていきました。よろいはひびわれ、たてはわれていきました。白き勢力のそのさいごのかなめ、ちゆうおうの守りは、もはやほうかいすんぜんでした。その中でいまだあきらめることなく勇

気の剣をふるいつづけていたのは、われらが仲間たち、白の騎兵師団の長ベルグエルムと、副長のフェリアル部の部隊、ばかりとなっていたのです。

あれから。

うちたおされ、もはや剣を取ることもできなくなつた、ライラとガランドー。ふたりはそのまま、ともにいしきを失い、戦いの場にたおれてしまいました。仲間たちはふたりをかかえ、急ぎ、手あてのために、エリル・シャンディーンのまちまで送りました。まぢの人たちがおどろいたのは、いうまでもありません。あのさい強の剣のうでの持ちぬしであるライラ・アシユロイが、こんなにもぼろぼろになつて、もどつてきましたから。この戦いは、だめかもしれない……。人々の心に、そんな暗い影のような気持ちが生まれはじめていきました。遠く雨にけむる、戦いの地。おそろしい戦いの音ばかりが、そこからひびいてきます。そのようすは、ここからは見て取ることはできません。です。が人々の心には、そこにおそろしい悪夢のような光景ばかりが、思ひえがかれていききました。

そして人々の心に与えられた、もうひとつのおどろき。それはガランドーのことで。ベーカールランドをうらぎり、ワットに加わつた、ガランドー・アシユロイ。かれのことはここエリル・シャンディーンのまちの人たちにも、とうぜん伝わっていました。そしてたびたび広がる、黒いうわさ。ガランドーがデイルバグのかいぶつたちをあやつ

り、たくさんのにやまちをおそっているということ。あのおそろしき悪のげんきょう、魔法使いアーザスとも、しんみつにつながっているのだということ……。

その今ではワットののおそろしいしきかんになり下がってしまっているのだというガランドー・アシユロイが、今こうして、白の騎兵師団の長であり、かれのじつのいもうとでもあるライラといっしょに、ぼろぼろになつてはこぼれてきたのです。しかもワットの者ではなく、今や、ベーカーランドの者として……。

のちに人々は、ガランドーについてのすべてのしんじつを知ることになるのです。すべては、いもうとのライラのためであったのだということ……。

ライラはこの戦いののち、ベーカーランドのしんのえいゆうとして、長くたたえられることになりました。もともと高かったライラの人気は、そうしてますます、高いものとなったのです（なにしろ強くて美しくてかつこいいのですから、人気も出るはずですから）。かなりこわい、というところまでふくめて。

そしてこのとき……、ライラにかけられていたアーザスののろいの力は、もはや消え失せていました。すべてが終わり、そののろいのもととなった力が、失われたためです。

ですがベーカーランドの人たちがガランドーのことを受け入れるためには、すくなくらずの時間が必要となりました。しかしそれは、いたしかたのないことでした。アーザ

スにおどされてのこととはいえ、ガランドーは、あまりに多くのつみをおかしてきたのです。その中には、このエリル・シャンデーンのまちの人たちにも、ちよくせつにかかわることまでもがふくまれていました。つまりまちの人たちの家族や多くの友人たちのことをも、ガランドーはきずつけてきたのです。

すべてが終わったのち、ガランドーはひとり旅立ちました。それはみずからのおかした、たくさんのあやまちのためでした。ガランドーは、立ちもどりつつあるアークランドを、みずからの手で、みずからの方法で、すくつていきたいと考えたのです。それがこの自分に与えられた、しめいなのだと。

ライラとガランドー。ふたりのきょうだいの物語は、こうして、つぎのじだいのもとへとひきつがれていきました。人々の、心から、心へ。いつまでも、とわに……。

そして時間は、今このときへ。

いさましい戦いをつづける、ベルグエルムとフェリアル。そしてかれらのひきいる、白き勇士たち。ですがそれもはや、さいごのきよくめんをむかえていました。

「戦えない者が多数となったとき、そのいくさは負けとなる。」

そのいくさのルール。もはや白き勢力の者たちがそのルールにあてはまる数にまで戦える者の数をへらしていつているということは、あきらかでした（つまりもつとこまかくいうと、もとの人数の二十ぶんの一人の人数にまでせまっているということです。それほどに、かれらの人数はへっていました）。そしてかろうじてそのさいごの人数をたもっていたのが、われらがベルグエルムとフェリアル、白の騎兵師団の一部隊ばかりだったのです（しきかんのライラを失ったライラ隊の騎士たちは、ベルグエルムとフェリアル、この戦いはベーカーランドのはいぼくに終わるのです。ベルグエルムもフェリアルも、そのことはもうわかっています。ですからかれらはなおのこと、力をふりしぼって、そのさいごのふんとうをつづけていたのです。負けるわけにはいかない！ その剣のいちげきは、強き心の力によるいちげきでした。戦いつづけ、からだはもうぼろぼろ、ふらふらになっていました。ですがかれらの心の力は、いっこうに、おとろえるということとはなかったのです。その剣には、たくさんの仲間たちの思いがこもっていました。アーランドの人々の思いがこもっていました。ここでたおれるわけにはいかないのです。かれらの剣は、この場に残った、このアーランドのさいごのせいぎの剣でした。その剣がおれるとき、このアーランドのせいぎはおれるのです。黒のやみがおとずれるのです。

「きぼうをすてるな！ きぼうはつねに、われらとともにある！」

ベルグエルムがせまりくる敵をうちたおしながら、仲間たちへとさげびました。それはこの物語のはじめ、ロビーのほらあなの中で、フェリアルといった言葉でした。その言葉が今、こんなにも重く仲間たちの心にひびき渡るといふことなどを、だれがそうぞうしたことでしょうか？

「仲間を信じるんだ！ 戦っているのは、われらだけではない！ すべての仲間だ！」
フェリアルが、れっせいになっっている仲間たちのもとへと飛びこんで、敵の剣をはじき落としてからさげびました。それはいつも、ベルグエルムがフェリアルにいつている言葉でした。仲間を信じる、その強き思い。それはいつでも、さいだいのピンチのときにおいて、助けをもたらし、こんなんを乗り越えさせてくれる、大いなる力となるのです。フェリアルはその思いをつねに胸に、そのせいぎの剣をふるいつづけてきました。敵をおしとどめ、さいごの守りをかためる、ベルグエルムとフェリアル。かれら、白の騎兵師団。ですが、戦いのゆくえはときこにきて、だれもがよそうだにしなかつた、さいだいの悪夢をむかえることとなつたのです……。

「な、なんだ……？ あれは……？」

ふいに、あたりが暗い影につつまれました。もともと暗かったものが、なお暗く。

黒の軍勢……。ワットはきたるべくこのさいごの大いくさにむけて、持てるかぎりの力を集め、あらゆるしゅだんをもちいて、さいだいの軍勢をきずき上げてきました。ワットの兵士たちの中でもせいえいの者たちは、もちろんのこと。あのおそろしい、デイルバグたちに乗った黒騎士たち。遠くのろわれた土地からよびよせた、おそろしいかいぶつの兵士たち。そしてさらには、この世界とはちがう世界、悪魔たちの住む魔界からさえも、かれらはそのまがまがしき悪の力を、よびよせたのです（そのおそろしい軍勢、魔王ギルハッドと配下の悪魔の兵士たちの軍勢によるきょういは、もはや消し去られました。ガランドーとライラの、ふたりのえいゆうたちの手によって……）。

相手はわずかに、千二百（じっさいには、千五百四十二人のあつかいでした）。しかもそのうちの三ぶんの一ほどは、ふだんは兵士ではない、りんじの兵士たち。ですがワットがようしやすることなどは、ありませんでした。ワットもベーカーランドと同じく、この戦いにすべてをかけてきたのです。たとえひきようでひれつであるといわれようと、ワットにとつて、この戦いに勝つことこそがすべてでした。そのためにかなるしゅだんをもちいることになろうとも、ワットがためらうことなどは、なかったのです。こうしてワットは、そうぞうをはるかにこえるほどの力をかき集めました。その兵の数、なんと六千。そしてその中からベーカーランドの兵力にあわせ、この戦いにもちい

ることのできるよりすぐりの兵士たちすべてを、えらび出したのです（残りの兵士たちはよびとして、戦いの場のうしろにひかえています）。しかしそれでもなお、ワットがこれとどまるといふことはありませんでした。

どんなことがあっても、どんな手を使つても、勝たねばならない。そのために、さいごのとどめとなる、さいだいの力を手にいれたい。そしてワットのその願いは、かなえられたのです。魔王ギルハッドさえも上まわるほどの、さいだいの悪夢として……。

「くる……！　なにかがくる！」

ベーカーランドの白き勇士たち。そのしゅんかん、かれらは身の毛もよだつほどのきようふを感じ取りました。かみがぴりぴりとさか立ち、はだにぞくぞくとさむけが走りました。剣をにぎるその手に、じつとりとひやあせがにじんできます。馬たちは得体の知れないきようふにむきあつたあまり、なき声を上げ、ぶるぶるとそのからだをよじりつづけました。

風が変わりました。ほそい雨は変わらず、さあさあとふりつづけています。ですがあきらかに、さきほどまでとは空気がちがうのです。この寒空の下でもはつきりとわかる、ねつき。火のもえる、なにかのこげたにおい……。

そのとき、かれらははつきりとそれを目にしました。耳にしました。空のかなたからこちらへとむかって、なにかがやってきたのです！ とほうもなく大きな、きょうふそのものが……！

ばっさ！ ばっさ！ ばっさ！

空の上からひびき渡る、暗く重々しい巨大な音。それが巨大なつばさのはばたきの音であるということがわかったとき、勇士たちの心はまるで巨大なかぎづめでわしづかみにされてしまったかのように、ぐしゃぐしゃになってしまいました。どんなにゆうかんで、どんなに強い心を持っている者たちでさえも、こんなとほうもないきょうふを前にしては、もうなすすべもありませんでした。

だめだ……。

かなわない……。

剣を持つかれらの手から、しだいに力がぬけていきました。かれらの頭をしはいして
いるものは、もうぜつぼう、それがいになにもありませんでした。

「う、うわあああーっ！」

空の上からふってくる、巨大なほのおのかたまり！ それはようしやなく、白き勇士たちの中へと吹きつけられました！ 逃げまどうたくさんの仲間たち。馬はひどいやけどを負い、地面にたおれました。よろいはこげ、たてはもえ、剣はしゃくねつのほのおを受けて、あつい鉄のかたまりとなって地面に落ちました。

それはベーカーランドのそのさいごのきぼうをもうちくくたための、ワットのおそろしい、さいごの切りふだだったのです。

「とどまるな！ さんかいしろ！」

とつさに、ベルグエルムがみなにさけびました。もはやベルグエルムでさえも、この相手に勝つためのしゅだんはなにも思いつきませんでした。ただただ仲間のぎせいをすくなくするために、ばらばらになって逃げることしか、できそうもないとさとつたのです。

「うしろへまわれ！ ようどうじんけい！ ねらいをつけさせるな！」

フェリアルがさけびました。ですがフェリアルもまた、ベルグエルムと同じでした。もはや、なすすべもない……。フェリアルの頭の中は、そんな思いでみたされていました。せめてこれ以上、仲間たちがきずつくことだけは、さけなくては……。

かれらの前にあらわれたもの。
それは、りゆうだったのです。

りゆう（英語ではドラゴン）。みなさんもよく知っていることと思います（りゆうについてはこれまでのお話の中でも、たびたびその名がとうじょうしてきました。ロビーたち旅の仲間たちが、カルモトのことをさがして、西の街道の山道を進んでいったときなどです）。それはたくさんの物語の中にあられ、たくさんの人々のことをふるえ上がらせてきた、おそろしいかいぶつでした。巨大なつばさとしっぽを持ち、その口からおそろしいほのおを吹きつける、さいだいにしてさいあくのかいぶつ……。そのりゆうが今、さいごのきぼうにすぎるベーカーランドの白き勇士たちの前に、立ちはだかつたのです（場合によっては、よいりゆうというものも、お話の中にはとうじょうすることもあります。たとえば、シープロンドのウォーター・エレメンタルドラゴン。げんみつにいうとかれらは精霊であって、ほんもののりゆうというわけではありませんでしたが、それでもかれらは、よいりゆうということになるでしょう。ですがみなさんには、はつきりとお伝えしておかなければなりません。今ここでとうじょうしたりゆうは、りゆうの中でもとびきりにおそろしくて、とびきりに悪いやつだったのです。ざんねんなかぎりです）。しかも悪いことに、そのりゆうはりゆうの中でも、いちばんの大きさでした

(子どものりゆうなら、まだ馬くらいの大きさです。しかし、としをへて力をましたりゆうともなれば、その大きさはまるで小山そのものといったくらい大ききになりました)。

ワットの手にいれた、さいだいにして、さい強の切りふだ。それこそが、この「もも色りゆう」でした。おそろしい力を持った赤りゆうと白りゆうを、親に持つりゆう。その両方のおそろしさを、かねそなえたりゆう。それが、このもも色りゆうだったのです(もも色のりゆうなんて、見た目はちよつとかわいい気もしますが、その中身を知れば、とてもそんなことをいってはいられないでしょう)。

ワットはいつたいたいどのようにして、このりゆうを手にいれ、そして手なずけたのでしょうか? ふつうりゆうという生きものは気しようが荒く、とても手がつけられるようなしるものではないのです。ましてやそれを手なずけて味方にするなんてことは、いくらワットといえども、ひとすじなわではいかなはずでした。しかしそれをかのようにするものが、ワットにはあつたのです。

大魔法使い、アーザスのそんざいでした。

そう、このりゆうはアーザスによって、ワットにおくられたものだったのです! そ

してこのりゆうの力こそが……、ベーカールランドにやってきた使者が口にした、「アーザスがこのさいこの戦いにおいてもちいてくるといふ、そのいちばんのまがまがしきやみの力」、そのものでした。光の力にすぎる、白き勇士たち、きぼうのたみたちの、そのさいこのきぼうをもうちくなくためた……。

そして、とほうもなく大きな力をおびた、りゆうのそんなさい。それこそが、アーザスが怒りの山脈にとどまっている、そのいちばんのりゆうだったのです。

怒りの山脈。かつてノランにみちびかれた四人の若き王子たちが、そこに分けいり、アークランドを荒らす赤りゆうをたいじしました。しかしそのときのかれらには、知るよしもなかったのです。赤りゆうスラインドガルが、みずからのしそんを残していたということを……。そうです、その赤りゆうのしそんこそが、今日の前にあらわれた、このもも色りゆうでした！

もも色りゆうは怒りの山脈のそのかくされたどうくつの中で、静かにときを待つていました。いつの日かじゆうぶんに力をたくわえ、親である赤りゆうを殺された、胸にもえ立つた大なるふくしゆうのことを果たす、そのときを。

しかし赤りゆうをたいじした四人の中には、ワットのアルファズレドもふくまれていません。それならなぜもも色りゆうは、ワットに味方しているのでしょうか？

それもすべて、よこしまなる魔法使い、アーザスのさくりやくでした。

アーザスはいいました。「きみのお父さんのことをほろぼしたのは、ベーカーランドのアルマークというやつだよ。かれは、悪いやつでね。悪い魔法を使って、きみのお父さんの力をうばい取り、動けなくしてしまったんだ。それから、助けをこうきみのお父さんのことを、ひきようにも、剣でつらぬいたんだよ。こんなに悪いやつを、きみは、このままにしておけるかい？」

たしかに赤りゆうにさいごのいちげきを加えてたおしたのは、アルマークでした（それはたんなる、ぐうぜんでしたが）。しかしアーザスのいったことは、まったくのたためです。もも色りゆうにベーカーランドへのふくしゆうをさせようとするための、さくりやくでした。

ほんとうならば、こんなうそにりゆうがだまされるなんてことは、まずありません。りゆうというのはとても頭のいい生きもので、相手が自分をだまそうとしていることなんて、かんたんに見破ってしまふのです。しかしこんかいは、相手がちがいました。あのアーザスなのですから。

アーザスは自分の言葉の中に、たくみに、たぶらかしのじゆつの力をおりませいでいました。相手の感じようを高め、怒りかられてわれも忘れてしまふように、しむけたのです。父である赤りゆうを殺されたもも色りゆうは、アーザスのそのじゆつに、まんま

とひっかかってしまいました。ふくしゅうの心がめらめらともえ、そしてその怒りは、アルマーク王のいるベーカールランドへとむけられたのです。

こうしてもも色りゆうは、悪の魔法使いアーザスのもとで、ふくしゅうのときを待つこととなりました。そのふくしゅうのときこそが、まさしく今、このベーカールランドとのさいごの戦いのときだったのです。「まだ、こないのかなー？ おそいよねー。」「手がかかるよ。あれだけの相手ですもの。」「この章のはじめ、ベゼロインとりでの上で、魔女のエカリンとネルヴァが話していた言葉です。あれはまさしく、このりゆうのことをいっていました。」

ドルーヴ。この名まえをみなさんはいぜん、きいたことがあるはずです。第十六章のはじめ、アーザスが花のテラスの中で、ムンドベルクと話しをしていたときのことです。ムンドベルクはいいました。「もはやこれ以上、ドルーヴのやつめを、おさえつけておくことはできません……」そう、そのなぞの名まえ、ドルーヴのしようにたいこそが、このもも色りゆうだったのです！ アーザスはこのりゆうを手もとにおくため、そしてみずからも赤りゆうの残したおそろしいほどの怒りのエネルギーをりようするために、りゆうのすみかである怒りの山脈に自分の城をきずき上げました（どんな力でもりようするアーザスにとってこの怒りのエネルギーはともみりよく的なものでしたから、その点からいっても、つごうがよかったです。そして……、ムンドベルクのいう通り、もは

やアーザスほどの大魔法使いであっても、そのおそろしいほどの怒りのエネルギーをたくわえたも色りゆうのことを、おさえつけておくことはできなくなっていました。そのためアーザスは、いつこくも早くこのりゆうの力をさいごの戦いにもちいるために、リユインをふいうちでおそわせたのです。こうしてついに、そのよこしまなるけいかくはじつこうにうつされました。

ところで……、このも色りゆうドルーヴはさいごのけつせんへとむけてワットにおくられました。そのときりゆうは、セイレン河の上流のはるかな上空を飛んでいきましました。それはまさに、ロビーたち旅の者たちが、セイレン大橋の下のカピバラ老人の小屋で一夜を明かしていたときのことだったのです。第四章のいちばんさいご、眠りにつくロビーの横で、ロビーの剣が青く光り出したことがありました。あの光こそ、このも色りゆうのとてつもないほどの悪意に反応して光った、その光だったのです！ 遠くはなれていても、なお、その悪意に剣が反応する。このりゆうのおそろしさは、ほんとうにはかりしれないものでした。）

さいごの戦いをつづける、白き勇士たち。その勇士たちにむかって、りゆうはようしやなく、その怒りのほのおの息を吹きつけていきました。ちりぢりになって逃げまどう、われらが勇士たち。もはやかれらの守りは、かんぜんにくずれ去ってしまってい

した。じんをくむ、それどころではもうありませんでした。ただただ、このおそろしいもも色りゆうのその悪夢のようなこうげきから身をかわすことだけで、せいっぱいになっていたので。たとえベルグエルムでも、フェリアルでも。

あと数十。それだけの兵がたおれれば、このいくさはペーカーランドの負けです。このアーケランドの運命をきめるさいだいの大いくさは、まもなくけつちやくのときをむかえようとしていました。ペーカーランドの、しんのはいぼくというかたちによって……。

ときはまもなく、子ぎつねのこくげん、午後の一時ころになろうとしていました。戦いのかいしから、およそ一時間。ただそのわずか一時間のあいだに、このアーケランドの運命がきまつてしまおうとしていたのです。こんなにおそろしい一時間が、いまだかつてあったでしょうか？　こんなにおそろしい悪夢が、いまだかつてあったでしょうか？　目の前につきつけられているのは、ぜつぼうと、きょうふ。そのぜつぼうときょうふは、たおれてゆく仲間たちと、そしてもも色のかいぶつというさいあくのかたちによって、かれらの前にあらわれていました。

「りゆうの背に、だれかがいるぞ！」

りゆうの飛びかうその下を、馬でかいくぐり、かけつづけながら、だれかがさげびました。そしてよく見てみれば、その通り、このもも色りゆうのつばさの、つけねのあたり。そこにひとつの、まっ黒な人影が見えたのです。その人物は全身まっ黒なよろいに身をかためていて、同じくまっ黒なかみを風になびかせていました（かぶとはかぶっておりません）。身長六フィートはあろうかという、大きなからだ。そしてえものをねらうたかのように、するどいまなざし。首もとになにかきらりと、黒い光が光ったように見えました。

その人物はりゆうの首につけられた、たづなをにぎっていました。そう、さながら馬にまたがる騎士のように、この人物はこのもも色りゆうに乗っていたのです。

りゆうが、地面のすぐ近くにまでせまってきたす！　そしてそのまま、ひとりの騎士の乗る騎馬にむかって！

「うわあああ！」

りゆうの、おそろしいきばのならんだ巨大な口。その口がその騎士を、馬もろともとらえました！　くつうにあえぐ、白き勇士。そしてりゆうはその勇士を馬といつしよに、近くの地面の上に、べつ、とはき出したのです。地面にたたきつけられる、われらが仲間。またひとり、ペーカーランドの白き勇士が戦いの場から失われました……。

「アルファズレドだ！」

りゆうのしゆうげきをすんでのところでかわした、騎士のひとりがさげびました。りゆうの口にとらえられるその仲間の横で、かれはりゆうのつばさの起こすとつぷうに流されながらも、それを見たのです。そう、りゆうの背に乗っていたのは、ワットの黒の王。かつてアルマーク王たちとともに赤りゆうたいじの旅へと出かけた、あのアルファズレド・セルギアティス・ルーイエ、その人でした。

白き勇士たちのあいだに、しゆうげきが走りました。今まで、ワットとの数多くのいくさをこなしてきた、かれら。ですがいちどだつて、アルファズレドほんにんがいくさの場にもみずからあらわれたことなどは、なかったのです。

この戦いにかける、アルファズレドの思い。それはたんなるくにとくにとの戦いというだけでは、ありませんでした。アルファズレドにとつて、いくさそのものは、たいしたもくてきではなかったのです。アルファズレドの、そのしんのもくてき。それはただひとつ、長年に渡るアルマークとのいんねんの、さいごのけつちやくをつけることでした。

かつて、肩をならべて数々のこんなんを乗り越え、ともに戦ってきた、ふたりのえいゆうたち。ときにはげましあい、ときにささえあいながら、かれらはいつも同じ道を歩みつづけてきました。よき友として、よきライバルとして。

アルファズレドが、赤りゆうの持つ黒のメダルのことを手にいれるまでは……。

黒のメダルはアルファズレドがほんらい持っていた人としてのがんぼうを、目ざめさせたのです。それまでもアルファズレドの心の中には、しはいへの願いというものがそんざいしていました。くるしい旅の中で、たくさんのくるしむ人たちのことを見てきたことよって生まれた、しはいへの願い……。自分にもつと力があれば、かれらを見ちびき、まとめ上げ、助けることができるのだ。アルファズレドのその思いは、アルマークによつてなんとなくおしとどめられてきました。そんなものは、まちがった考えだ。人々のことを助けるのに、力など必要ではないと。しかしアルファズレドのその思いは、かくじつに、かれの心の中を大きくしめていったのです。そこにあらわれた、りゆうの力のメダル。アルファズレドのまよいは、それを手にしたときに消えました。

もはや、ためらうことなし。今こそ、みずからのつとめを果たすとき。

アルファズレドはその思いを胸に、力のかぎりをつくしてきました。すべては、このアークランドをすくうため。人々の心を、くるしみからとき放つために……。それが、アルファズレドのせいぎだったのです。

そしてついに、アルファズレドはさいごの戦いの場へと進んでいきました。それはアルマークとの、さいごのけっせん。さけることのできない、運命の戦いでした。

「アルマーク……」

おそろしいもも色りゆうの背に乗って、アルファズレドは静かにいいました。

「おれとお前の、どちらが正しかったのか？　さいごのけつちやくのときだ……」

アルファズレドを乗せたりゆうは、そしてふたたび、空高くまい上がっていききました。

「もどつてきたぞ。」

木々のあいだに身をひそめる、大きなからだ。そのからだのあいだから、今美しい白のマントに身をつつんだなんん人かの者たちがあらわれて、もどつてきたその人物のことをむかえいれました。

「どうだった？」その中のひとり、りっぱな衣服に身をつつみ、その下に美しい銀のくさりかたびらを着こんだたくましい青年が、もどつてきた小がらなからだの少年にいいました。

「とりでの中は、ほとんどからっぽだよ。みんな、戦いの場に出はらっているみたい。残っているのは、見張りと、それに……」小がらなからだの少年が、そこで言葉をにぎしめず。

「どうした？」りっぱな身なりの青年が、たずねました。

「とりでの上に、なにかいるみたい。よく見えなかったけど、なにか、ふしぎな力がは

たらいているのがわかった。魔法かもしれない。」

少年の言葉に、その場にいる者みんなが顔を見あわせて、考えこみました。

「魔法、か。」

そのとき、かれらのうしろに立っているその大きなからだのなにかの中から、ひとりの人物があらわれて、かれらにいったのです。

「そいつはおそらく、ワットの魔女どもだな。」

もじやもじやのおひげ、岩のようにがんこそうな顔立ち、ずんぐりとしたからだ。もういうまでもありませんね。そう、この人物は、岩のけんじやリブレスト。そして話をしていたのは、われらが白き仲間たち。ウルファの騎士ハミールとキエリフ、そしてレイミールをふくむ、リュインの白き勇士たちでした（そしてもちろん、大きなからだというのは、かれらの乗る岩のロボットたちでした）。

岩のロボットたちに乗ったかれらリブレストべつどう隊は、ついにここ、ベゼロインとりでのその前までやってきたのです。そして今、その小さなからだをいかしてレイミールが、とりでのようすをさぐりにいつてきたところでした（レイミールはこういうことがとくいだったのです。かくれんぼでは、だれにも見つかったことはありませんでした）。

「あの悪名高き、三姉妹！」ハミールが思わずさげびます（となりのキエリフに「しーっ

！」としかられてしまいました。ここは敵地の目の前でしたから。なんだかいぜんにも、同じようなことがあった気がします……。」「われらはなんど、あいつらにくるしめられてきたことか。」

「ベゼロインのかんらくにも、やつらがからんでいるにちがいありません。」キエリフが、リブレストにいいました（かれらはこのとき、まだベゼロインが落ちたそのくわしいいきさつのことまでは知りませんでした。それはシープロンドにとどいた手紙にも、あえて書かれていなかったのです。シープロンドの人たちの感じようをよけいにしげきするべきではないという、心づかいからのことでした。そしてその心づかいが今、われらが仲間たちには、助けとなっていたのです。おそろしい魔女たちのさくりやくによつて、仲間のウルファたちが悪魔のような作戦にりようされたということを知れば、かれらはこのとき、われも忘れて、とりでの上にいる魔女たちのもとへとむかつていってしまったことでしょう……）。

「おそろく、そうだろうな。」リブレストがそのもじやもじやのおひげを手でいじりながら、むずかしい顔をしてこたえます。「だが……」

「やつらの悪行も、これまで。」リブレストのかわりに、キエリフがいました。「われらの力、ぞんぶんに見せつけてくれましょう。」

そしてそのキエリフの言葉に、リブレストもハミールも仲間たちも、みんなにやりと

笑みを浮かべ、そのこぶしを胸にあてて、ここにさいごのちかいを立てることとなったのです。

「いざ、まいらん！ ベゼロインをわれらの手に！」

「おおうっ！」（もちろん小さな声でさげびました。）

「おまえたち！ いよいよ、さいごの大いちばんだぞい！」

リブレストの声が、岩のロボットたちの中にひびき渡りました。

「作戦名、ビッグワンズ！ みな、ぬかりないな？」

リブレストの声にこたえて、みんなは岩のロボットたちの手をぎゅいんと上げて、こたえます（ビッグワンズ？ いったいどういう作戦なのでしょう？）。

「では、いくぞ！ もくひょう、ベゼロイン上部！ 魔女どもがいる見晴らし台じゃい！」

ついに、岩のロボットたちがしゅつげきしました！ かれらのさいしゅうもくてき地、ベゼロイン。ワツトのきゆうていまじゅつしたる三人の強力な魔女たち、そのおそろしい敵たちのもとにむかつて。

しかし……。

あ、あれ？ ちよつと待つてください。

ロボットの数が……、いち、にい、さん……。

全部で五体しかないじゃありませんか！

さきほど木々の影で話しをしていたときには、ちゃんと十七体のロボットたちがせいぞろいしておりましたのに。ですが今、しゅつげきしていったロボットたちの数は、どう見ても五体しかいなかったのです。

「かれらに、すべてをまかせよう。」今ひとりの兵士がロボットの頭の上から顔を出して、去つていくロボットたちへ乗りこんだ仲間たちのことを、見送っていました。「われらの思いを、果たしてくれよ。」

これはどういうことなのでしょう？ ベゼロインへとしゅつげきしていったのは、たった五体のロボットたちのみ。そして残りの十二体のロボットたちは、中にいる兵士たちとともに、そのままこの場に残っていたのです！

ベゼロインのだっかんは、かれらの大きなもくひようであつたはず。それにはやはり、そのための大きな戦力となるこのロボットたちは、十七体すべてをもちいるべきでした。にもかかわらず、今そのロボットたちのうちのほとんどが、この場に残っていたのです。しかもさらに、おどろくべきことが。

たった五体でしゅつげきしていった岩のロボットたちでしたが、そこに乗っていたのは、ロボット一体につき、なんと一名！ つまり全部でたった五人の者たちだけが、ベゼロインへとむかってしゅつげきしていったということでした！

さあさあ、これはいったいどういうことなのか？ リブレストさんは、いったいなにをたくらんでいるのでしょうか？ そして作戦名、ビッグワンス。そのなぞの作戦の
しょうたいとは？

すべてはこのあと、あきらかになるのです。

「なにかしら……」

ベゼロインとりでの、その見晴らし台の上。お茶会のテーブルの席で、今長女のネルヴァが、ふいに口をひらきました。

「あぐ、あぐ。らーにー？ れるば？」エカリンが口の中をはるまきでいっばいにしながら、たずねます（これはもちろん、アルーナとくせいのはるまきでした。ちなみに、「なーにー？ ネルヴァ？」といいましたが）。

「なにか、胸さわぎがするわ。いやな感じ……」ネルヴァがその顔つきを、きつ、と正して、あたりのようにすに気をくばりはじめました。

「えー？ べつにー、なんにも感じないけどー？」エカリンはそういって、つぎのはる

まきにまた、ばくり（よく食べますね……）。

「ちよつと、あなた。」ネルヴァが、見張りに立っている兵士のひとりのことをよばわります。「戦いのようすは、どうなつていて？ なにか、動きがあつたのかしら？」

いわれて、兵士はあわててしせいを正すと、かしこまつていいました。

「はっ！ もはやわが方のしゅうりは、かくじつなものとなつております。さきほど、アルファズレドへいか、おんみずからが、ドルーヴに乗つて戦地へむかわれましたとのこと。ベーカーランドの息の根は、これでかんぜんに、とまるものと思われます。」

「なんだー、もう、ドルーヴちゃん、いっちやつたんだー。」兵士の言葉をきいて、エカリンがさんねんそうにいいました。「その前にわたしが、がんばつてねー、つて、頭なでなでしてあげよーと思つたのにー。」（そういつてまた、はるまきにばくり。よく食べますね……）。

ちなみに、このベゼロインとりでから戦いの地までは、きよりは近いのですが、このあたりはまわりを高い岩山にかこまれていえるうえに、道がまがつていたため、ここからちよくせつ戦いの地をかくにんすることはできなかつたのです。もも色りゆうドルーヴのすがたなら、戦いの地にむかう前にはるかな岩山の上に見ることもできたでしょうが、魔女たちはお茶会の方に気を取られておりましたので、エカリンもりゆうのすがたをかくにんすることができませんでした。はるまきを食べるのにいそがしかつたです

から……)

「気のせいかしらね……」ネルヴァがふっとけいけいをといて、つづけます(魔女のけいかいというのはおそろしいもので、どんなにたくみに近づこうとしても、けいかいしている魔女にはすぐにさとられてしまうのです。まるですべてのほうこうに、目がついているかのよう)。

「もうじきわたしたちも、ここをひき上げることになるわ。その前に、わたしもなにか、食べようかしら。あら、おいしそうね、アルーナ。」

ネルヴァのそのしせんのお皿から、今両手にひとつずつ大きなお皿を持ったアルーナが、こちらへとやってくるところでした。そして、そのお皿に山もりにもりつけられていたのは……。

「……お待たせです……! アルーナとくせい、チャーシューはるまきです……!」
ま、またはるまき……。

「……アルーナのさいしんさく、ふわふわチーズはるまきもあるです……!」(たしかにおいしそうですけど……)

「またはるまきーっ? もう、あきちやったよ。」エカリンが思わず、ぶーぶーいいました。(さつきからもうエカリンは、はるまきを三十本以上も食べていましたから)。それをきいたアルーナは、お皿をエカリンの前において、ごちん! げんこつをひと

つ。

「……食べる子は、育つです……！ 育ちざかりの子は、食べるです……！」

「いったーっ！ それをいうなら、寝る子は育つでしょー！」 エカリンが頭をおさえ、もんくをいいます。

「おあがりなさい、エカリン。」 ネルヴァが、あつあつのはるまきに、ぱくり、かぶりついていました。「アルーナちゃんのはるまきは、えいようまんてんなのよ。」

「わかったわよー、もうー！」

エカリンはそういって、しぶしぶ、またはるまきの山に取りかかりました（もんくをいしながらも、エカリンはいちどに二本ずつも、ぼくついて食べましたが……）。

ところで、アルーナのこのはるまきには、ほんとうに魔法のえいようだったので、まっています。魔女にとって、それはいちばんのえいようだったので、これを食べればどんな魔法を使っても、つかれることがありませんでした。でもはるまきばかりじゃ……。せめて、ほかにもあつたらよかつたのに……）。

そのときのこと。

かのじよたちの耳に、とんでもないほどの大声がとどいてきたのです。

「たのもーう！ 岩のけんじやリブレスト、まかりとおるー！」

とりでのかべがびりびりゆれるほどの、大声！（じっさいテーブルの上に乗っていたカップやお皿が、かたかたゆれて四インチもはしにずれたほです。はるまきが落つことなくてよかった。）

「な、なににー！」エカリンが思わず、「ひええーっ。」と飛び上がっていました（まわりの兵士さんたちもみんな思わずしりもちをついて、びつくりぎょうてんです）。

魔女たちが、とりでのかべに近づいてみると……。

とりでの前に、巨大な岩のロボットたちが五体、横いちれつにびしっ！ とせいれつして、ならんでいました！ そしてそのまん中の一体、そのロボットの頭の上から今、もじゃもじゃおひげの老人、岩のけんじやリブレストが、こちらをじろり！ にらみをきかせながら見上げていたのです。

「あれは……！」ネルヴァの顔が、おどろきの表じようにつつまれました。

「岩のけんじや……。ほんとうに、かれがやってきたの……？」

ネルヴァはもちろん、リブレストのことはよく知っていました。山おくの岩のどうくつにこもっていて、めったなことでは人前にそのすがたをあらわすこともない、伝説的なまでのすごうでのけんじや。まさかほんとうに、そのリブレストがやってくるなん

て。

「な、なによあれー！」立ちならぶ五体の岩のロボットのことに前にして、エカリンがさげびました。「ぜんぜんかわいくなーい！」（そ、そつちですか……）

ついに顔をあわせることとなった、リブレストと魔女たち。いつぼうは、このアークランドで三本のゆびにはいるほどの、けんじや（ノランをいれれば四本ですが）。いつぼうは、悪名高き悪のちえにたけた、三人の魔女たち……。このおたがいがぶつかりあつたとしたら、それこそそれきしに残るくらいの大げきとつになるだろうことは、だれの目にもあきらかなことでした。

「おまえさんが、ネルヴァ・ミスナディアだな。」リブレストが、ネルヴァのことを見すえていい放ちます。「悪名は、ききおよんでおるぞ。ずいぶんと、はでにあばれてくれておるらしいのう。」

リブレストの言葉に、はじめは顔をくもらせていたネルヴァでしたが、しだいにもとのよゆうを持ったほほ笑みの表じようを浮かべて、いいました。

「おほめにあずかり、こうえいですわ、けんじやさま。けんじやさまこそ、なんのごようじかしら？ わたしは、ごしようたいしたおぼえはありませんけど？」

ネルヴァとくいの、ひにくたつぶりの言葉（となりではエカリンが「そうよそうよ！」と手をふり上げ、そのとなりではアルーナが首をこくこくうなずきつづけていました）。

「おまえさんに用がなくても、こっちはあつての。」リブレストが口もとをゆるませながら、つづけます。「ずいぶんと、おまえさんたちにうらみを持つている者たちがいてな。わしはそいつらに、力を貸してやらねばならん。いつてる意味はわかるだろう？」

その言葉に、ネルヴァは「ふふ。」と笑ってこたえました。

「らんぼうなしゆだんに出ようつてわけね。でも、いいのかしら？ けんじやさまがそんなことをなされて。わたしたちは、おたがいに、力を持つ者。それなりのかくごは必要になるわよ。」

それをきいて、となりのエカリンもぶんぶん怒つて口を出します。

「そうよ！ わたしたちがほんきになったら、あんたなんて、かるーくぶっ飛ばしちゃうんだから！」

「……口が悪いです……！ 相手はけんじやさまです……！」アルーナがそういって、ごちん！ げんこつをひとつ（「いだっ！」と頭をかかえるエカリン）。

「けんじやさま。悪いですけど、うちのいもうこのいう通りよ。いくらけんじやリブレストでも、げんえきの魔女三人の力に、かなうのかしら？」ネルヴァはそういって、その右手を目の高さにかざしてみせました。その手はとたんに、ぶきみな青白いほのおにつつまれます。おそろしいほどの力がそこにやどっているのだということは、すぐにわかりました。

「そうよそうよ！ ネルヴァ怒らせたら、こつわいよー！ あんたなんて、ばらばらに吹き飛ばしちゃうんだから！」 エカリンが「んべっ！」と舌を出して、口を出します。

「……口が悪いです……！ にどもいわせるなです……！」 アルーナがそういって、ごちん！ げんこつをひとつ（「いだっ！」と頭をかかえるエカリン。なん回目でしょうか……？）。

さて、いぜんにもお伝えしました通り、いくさではまじゅつしのことをこうげきしたり、まじゅつしどうしで戦ったりすることはきんじられています。しかしそれはあくまでも、「いくさ」でのルール。こんかいのように、いくさいがいの戦いの場面であれば、かれらのことをこうげきしたり、まじゅつしどうしがおたがいに戦ったりしてもいいのです（ですがこれもすでにお伝えしておりますように、たとえいくさのあつかいではないとはいえ、それがとりでおこなわれる戦いの場合では、やはりいくつかの取りきめがあるのです。その中のひとつが、「とりでを守るがわのまじゅつしであれば、こうげきの魔法を使って相手をしりぞけてもかまわない」というものでした（ふりかかる火の粉ははらわねばという、あのルールです）。ですから今、ワットの魔女の三姉妹たちは、リブレストたちのことを魔法で追いはらってもいいわけです。いっぽうリブレストの方は、「「工作物」ではこうげきできるものの）やはり取りきめとして、魔法でこうげきすることはできませんでした。

それならばと、読者のみなさんの中には、このように考えた方もいるかもしれませんが。この戦いをいくさということにしてしまえば、魔法たちもいくさのルールにしたがつて、魔法でこうげきすることはできなくなるんじゃないの？ そうすれば、あとは残りの兵士さんたちをやつつければ、こっちの勝ちになるじゃんかって。たしかにその通り。ですけどそれは、いくさあつかいに行うことができればの話。いくさとはそのくにしよぞくする正式なけんりを持った使者が、そのいくさをおこなってもいいという国王のサインのなされた正式なしよるいをしめさなければ、せんげんすることはできないのです。ですからやみくもに「これはいくさだ！」とさけんだとしても、それはいくさとしてみとめられませんでした。いくさとは、あくまでもくにとくにとでおこなわれる、とくべつなもの。だれもがむやみやたらにいくさがおこなえるようでは、こまるのです。そんなことをしたら、あちこちで、戦いがはじまってしまいかねませんもの！

さらにそもそも今は、そのいくさ自体をおこなうことができなかつたのです。「同じ相手国とのいくさを、同時にふくすうの場所でおこなうことはできない」。それがそのりゆうでした。つまりげんざいベーカールランドとワットは、エリル・シャンディーンでのさいごの大いくさのまっさいちゆうなのです。ですからこのとりででの戦いをいくさとしてあつかうことは、はじめからできませんでした（また、「いくさはさいいていでもどちらかいつぼうのじっさいの兵力が四十人以上でなければ、はじめることができな

い」というルールもありました。ですからこんなにすくない人数では、やっぱりいくさは、はじめることができなかったのです。ベゼロインとりでにいるワットの兵士たちは、四十人もいませんでしたから」。

しかし、おそろしい魔法の力を持った三人の魔女たちが相手。そんなことは、リブレストは百もしようちのうえでした。そしてそのことをよく知っていたからこそ、リブレストはたった五体のロボットたちで、たった五人の人数で、ここまでやってきたのです。

さあ、それではいいよ、リブレストのそのなぞの作戦がじつこうにうつされるときでした。

「なあに、わたしもこれでなかなか、悪ちえがはたらく方のお。」リブレストが、にやりと笑っていました。「まっこうから立ちむかうことだけが戦いではないと、よく心得ておるのだよ。」

「わしのもくてきは、このとりでを取りもどし、おまえさんたちにはすみやかに出ていつてもらうことだ。それができれば、なにもおまえさんたちと、ほんきでやりあおうとは思わんでな。」

リブレストの言葉の意味とは？　そしてそのとき、リブレストは四人の仲間たちにむ

「かっつて、さけんだのです。」

「いくぞー！ きゆうきよくがっつたい！」

きゆ、きゆうきよくがっつたい？ そしてリブレストが、そうさけぶのと同時に！

ぎゆいいいん！ がしん！ がし、がしーん！

五体のロボットたちがまたそのすがたをへんけいさせていき……、おたがいのからだをそれぞれひとつの場所へと、よせ集めていきました！ こ、これは、もしや！

がしん！ 一体のロボットが、巨大な右足になりました！

がしん！ もう一体のロボットが、巨大な左足になりました！

がしん！ つづくロボットが、巨大な右手（巨大な岩の剣つき）になりました！

がしん！ さいごのロボットが、巨大な左手（巨大な岩のたてつき）になりました！
それらがみんな、リブレストの乗るほんたいにくみあわさって……。

がっしーん！

とんでもなく大きな、一体の岩のロボットがかんせいしたのです！

これぞきゆうきよく！ 五身がったい！（すてきすぎるー！）

今や、とりでの見晴らし台にまでその頭がとどくかというくらいに巨大なロボットが、魔女たちの前に立ちふさがりました！ もちろん、さすがの魔女たちでさえも、びつくりぎょうてんしたのはいうまでもありません。

「な、なによそれー！ そんなのありー！」エカリンが思わず、「ひええ……！」とアルーナのうしろにかくれながら、そういいます（ちょうどロボットの目が、エカリンのことをじろりとらむ場所にありましたから）。

これこそリブレストとレイミールが楽しみにしていたのも、わかりますよね。レイミールは「力」でした。レイミールが楽しみにしていたのも、わかりますよね。レイミールはロボット大好き、男の子。しかもこんな巨大なロボットを自分でそうじゆうできるなんて、まさに夢のようなことでしたから（そしてがったいしたことによって、このロボットはいぜんよりはるかにました力とのうりよくを、はつきすることができるようになりました。リブレストはもともと、ここいちばんというさいごのときにあたって、この

きゆうきよくロボの力を使おうと考えていたのです（シープロンドの戦いの場面では、まっさきにとらわれの者たちのもとへとかけつけていったため、がったいしているひまもありませんでした。そして戦いのじょうきようを見きわめたうえからでも、がったいするまでもないと、リブレストははんだんしたのです。戦いの兵力にかんしては、強力なえん軍が、すでにとうじようしているようでしたから。

そしてリュインのとりでをせめるさいにあたつては、やはりがったいするまでもないとわかつていました。いくさの場から遠くはなれたとりでにワットの強力な者たちがいるとも、思っていませんでしたから（もしいたら、がったいしていたかもしれませんが）。

それから、さいごに残るベゼロイン。このとりでを取りもどすことは、かれらのさいごの大しごとといえました。ですからリブレストは、レイミールにだいぶせがまれていることでもありましたが、ベゼロインとりでにせめこむときにあたつては、はじめから、このきゆうきよくロボの力を使ってやろうと考えていたのです（そして今、とりでにワットの魔女たちがいるということがわかったことで、リブレストのそのけっしんはさらにかたまっていたというわけでした。このきゆうきよくロボットの力で、魔女たちをやっつけてやろうというのです！）。

ちなみに、レイミールはしっかりと、このロボットのそうじゆう席にすわっています

た。そしてがったいしたため、そのそうじゅう席の場所はいぜんとはちがつて、腰のあたりにふたりのパイロットたち、胸の部分に三人のパイロットたちがすわるようになっていたのです。胸のそうじゅう席のまん中にリブレスト、むかつて右にレイミール、左にハミール、腰のそうじゅう席の右にキエリフ、左にはリユインの兵士のひとり、若きバーン・ルーフオニツクがすわっていました。はつとうじょうバーンは、からだは小がらでしたが、はんしやしんけいにとでもすぐれていて、このロボットのそうじゅうにはうってつけだったのです。とつぜんリブレストに名まえをよばれてパイロットにんめいされましたので、ちよつとびっくりしてしまいました。そしてもちろん、われらがウルファの仲間たちのうでまえにかんしては、いうまでもありません。

「こつちの兵は、この一体のみじやい！」ロボットの口から、リブレストの声がひびきました（そうじゅう者の声の口から出るようになっていたのです）。「おまえさんたちが、おとなしくこうさんしないのなら、しようがないの。この岩の兵士の力で、おまえさんたちを追っぱらわにやならん。」

「そんなこと、できると思ってるのー！」エカリンがアルーナの影から、こぶしをつき上げていました。「いったでしよー！ あんたなんかじゃ、わたしたちには勝てないんだから！」（そのわりには、アルーナの影にかくれちゃつてるみたいですが……）

「下がってなさい、エカリン、アルーナ。」ネルヴァが前に進み出ます。「ちよつと、お

ほのおが晴れていきます。見たくないものが、そこにあるはずでした。しかし……。
え？ ええっー！

なんと！ ロボットには、きずひとつないではありませんか！ あれほどのばくはつ
のちよくげきを受けたというのに！ これはいったい！

「さすがは、アークランドいちばんの魔女だわい。」

ロボットの口から、リブレストの声がひびき渡りました。

「まさか、これほどの力だとは思わなかったぞ。」

ぎゅいん！ じゃきん！

巨大な岩の剣をつきつけて、ポーズをきめる巨大ロボット。それに対して魔女たちは
……。

「ええーっ！ ど、どういうことー！」エカリンは信じられないといったようすで、目
をまるくしてしまいました。となりではアルーナが、両手を両のほほにあてて、口をあ
んぐり。

しかしいちばんおどろいたのは、やはりネルヴァほんにんです。なにしろ全力とはい
かないまでも、かなりのパワーをこめて、ひっさつのいちげきを放ったはずでしたから。

ば、「このロボットのまわりを魔法の力のおよばないところにしてしまう」というものだったのです。

このロボットのまわりでは、五つの精霊の力がおたがいに輪をえがいて、おたがいの力をうち消しあっています。つまりそれは、魔法をうち消すバリアーのようなものだったのです。ここに魔法がふれると、その魔法は五つの輪のあいだをぐるぐるまわって、そのあいだに、みんな消えてなくなってしまうというわけでした（まあ、しくみについてはむずかしいので、べつにおぼえる必要はありませんけど。わたしもききました。がよくわかりませんでしたから……。ようするに、魔法がきかないロボットということなのです。

ちなみに、このきゆうきよくロボにそなわる力は、やはりこのほかにもさまざまなのがありました。魔法がきかないというのは、あくまでも、このロボットの持つそのきゆうきよく的な力のうちのひとつにすぎなかったのです。ですがとても全部はしよつかいしきれませんから、それはまたべつのきかいに……。マグマの中にもぐったりもできましたけど……）。

そんなしくみのことについて、ネルヴァはすぐにかいしたというわけだったので（さすがは長女です）。

ところで、この岩のきゆうきよくロボでなくても、「魔法をきかなくさせるぼうぎよの

魔法」というものもありましたが、その魔法のこうかにはひとつ、けつてんがありました。それは「そのぼうぎよの魔法のこうかをさらにうち消してしまう魔法」というものがあって、その魔法を使われれば、ぼうぎよの魔法のこうかですら失われてしまうのです（ちよつとややこしいですけど）。そしてもちろん、三人の魔女たちにも、魔法のぼうぎよの力をうち消してしまうというその魔法のことを、使うことができました。ですからぼうぎよの魔法を使って魔女たちにそなえたいうで相手をこうげきしようとしたとしても、すぐに魔女たちにそのぼうぎよの魔法を消されてしまつて、かえりうちになつてしまうのです。

そのためこの方法は、ぼうぎよの魔法をうち消すことのできるまじゆつしが相手では、いっばんにはむだな戦りやくとして、使われることはありませんでした。ですがリブレストのこの岩のきゆうきよくロボの力は魔法のものではなく、五つの精霊エネルギーをもちいた、リブレストのたくみな「工作」のわざによつて生み出されているものでした。ですから魔女たちには、このロボットにそなわつた、魔法をきかなくさせるといふ「工作」のわざによるその力を、魔法でうち消してしまうというようなこともできなかつたのです（これが魔法によつて生み出されている力であれば、魔女たちにはかんたんに、その力をうち消してしまうことができましたが）。そのため、ふつうなら魔女たちに対して

取ることのできないような、この戦りやくが使えました。ネルヴァはこういったこともすぐにかいいておりましたので、それをふまえたうえでも、「やられたわ。」といったのです。さすがは長女です。

「おまえさんたちの魔法は、この岩のきゆうきよく兵にはきかん。そしてわしらの兵は、このきゆうきよく兵、一体のみ。これがどういうことか？ もうわかつたろうな。」これこそリブレストがたつた五体のロボットたちだけで、たつた五人の者たちだけで、この場にやつてきたりゆうでした。ベゼロインに魔女の三姉妹たちがじん取つていふということがわかつたとき、リブレストはすぐに、この作戦を思いついたのです（あのビッグワングズという作戦です。これは「力の強い一体ずつの兵士たち」というほどの意味の言葉でしたが、なるほど、いわれてみればたしかにその通り）。魔法のきかないこのロボット一体だけなら、魔女たちは手が出せません。へたにほかの者たちをひきつれていけば、その者たちに、魔女の魔の手がのびてしまうかもしれない。ですからリブレストは、そうじゆうに必要なさいていげんの人数だけをひきつれて、この場にやつてきたというわけだったので（そしてリブレストは、このきゆうきよくロボがじつさいにがつたいするところを、目の前で魔女たちに見せつけてやろうと思つていました。その方が、インパクトがありましたから。悪名高い魔女たちをへこませてやるのには、こうか的だと思つたのです。がつたいする前に魔法でこうげきされるかもしれないな

いという点については、リブレストは「さすがの魔女たちでも、けんじゃたる自分との会話のとちゆうで、いきなりこうげきしてくるようなことはないだろう」と思っており、心配していませんでした。じっさいにこうげきされそうになったとしたら、大あわてでがっつたいする必要がありましたけど……。

ちなみに、このきゆうきよくロボットの力はリブレストがその中に乗っていないければ、ひき出すことができませんでした。ですから「きゆうきよくロボをなん体も」というわけには、いかなかったのです。せいぞろいしたら、さぞかし大はくりよくでしょうけど。ざんねん）。

「ず、ずつるーい！ そんなの、ルールいはんじやない！」エカリンがぶーぶーもんくをいいましたが、もはやかのじよたちには、どうすることもできませんでした。かのじよたちが魔法も使わずに、こんなビッグなロボットと戦って、勝てるわけもありませんでしたから（いくらおそろしい魔女たちとはいえ、魔法でこうげきできなければ、そのこうげきの力にかんしては、ふつうの女の子と変わりないので。マリエルみたいにつえでがんがん、相手をぶちのめすわざを持っているというのなら、話はべつですけど……（それに、かのじよたちがルールについて、もんくをいえるはずもありませんよ。今までさんざん、人の道のルールをむしした、悪さばかりしてきましたから！）。

ちなみに、ぼうぎよの魔法なら使って身を守ることでもできましたが、身を守っている

だけでは、勝てるわけありませんよね。それにロボットが魔女たちのそばに近よれば、ぼうぎよの魔法ですら消えてしまうのですから、おんなじことなのです。

「むこうの方が、いちまい、うわてだったみたいね。」

ネルヴァが両手を上げて、目をとじ、ふたたび静かな笑みを浮かべながらいいました。

「いいわ、こうさんしましょう。」

「ええーっ！ そんなー！」 エカリンが思わずさげびます。「このとりで、あげちゃうの？ 怒られちゃうよ。」

しかしそんなエカリンですら、もう勝負のけっかはわかっています。見張りの兵士さんたちがいくらがんばったとしても、この巨大ロボットは、たおせそうもありませんでしたから（たとえあとからなにか手立てをこうじようと思っていたとしても、今はどうしたって、このとりでを明け渡すほかにはなかつたのです。ここで意地を張っても、あつというまにこの岩のきゆうきよくロボットのゆびにぺちん！ とはじかれて、それでおしまいでしたから。

そして……、リブレストはこのとりでをワットの者たちがこのあとすぐにふたたび取りもどしてしまうようなことは、むりであるのだということを、よくこころえていました。お伝えしました通り、エリル・シャンデーインのいくさのさいちゆうでは、このとりででまたべつのいくさをおこなうことはできません（エリル・シャンデーインのいく

さの「一部」としてこのとりでで戦いをおこなうことはかのうでしたが、もしそれでこのとりでを守っている者たちをいっぼうの軍が大勢で追いはらったとしても、それは本戦の戦いの一部としてあつかわれるだけで、それでとりでを持つけんりをうぼうということはできないかったです。いくさではなく、四十人を下まわる人数でとりでにせめこむのであれば、とりでを持つけんりをうぼうこともできましたが、四十人くらいの人数であれば、リズレストはわけなく、このロボットの「素のパワー」でぶつ飛ばすことができるかとわかっておりましたから。このようなわけで、リズレストは自信まんまん、このとりでにせめこんでいったというわけなのです。

「さすがは、長女だわい。ものわかりがいいの。」リズレストが、にやりと笑っていました。「なーに、おまえさんたちのことを、どうしようなどというつもりは、わたしには、さらさらない。もとより、きゆうていまじゆつしたるおまえさんたちの身がらを、こうそくしたりすることなども、できんしな。すぐに立ち去ってくれば、それでいいわい。」(リズレストのいう通り、すべてのくへの取りきめとして、きゆうていまじゆつしのことをとらえたり、ほりよに取ったりすることなどは、やはりきんしされていまして。それはいくさにおいても、それがいの戦いの場面においても、同じだったのです。)

「かんしゃしますわ、けんじやさま。」ネルヴァがきゆうていまじゆつしのりゆうぎで

おごそかに頭を下げて、いいました。「このとりでは、おかえしします。ですけど……」
ネルヴァがまた目をして、「ふふ。」と笑ってからつづけました。

「今さらこのとりでを取りかえしたところで、けっかは、変わらないんじゃないのかしら？ 戦いのようすを、ごぞんじなくって？ わが方のしよりは、もくぜんですのよ？ どのみち、このとりでも、なにもかも、ふたたびワットのものになるんですから。」
ネルヴァがよゆうを見せつけているわけ、それはやはり、そういうことでした。さいごの戦いがワットのしやうりに終われば、すべての力を失うペーカーランドは、そのすべてをワットにささげなければなりません。まちなも、とりでも、青き宝玉すらも……。戦いがワットのしやうりまちがいなしというこのときにあたって、かれらがこのとりでにこだわる必要などは、もはやありませんでした。ですが……。

これをきいて、さすがのリブレストもその表じようをくもらせました（ロボットの中心にいたので、そこからは見えませんでしたけど）。ペーカーランドがやぶれば、このとりでもふたたび、ワットのものとなる。もちろんけんじやリブレストが、そんなことを知らないわけがありません。ではなぜリブレストもまた、ネルヴァと同じく、大きなよゆうを見せているのでしょうか？

それは、かんたんなこと。

リブレストはベーカーランドが負けるなどとは、みじんも思っていないからです！

「ワツトの、しょうりだと？」リブレストがそういって、「ふん！」と鼻をならしました。

「さすがの魔女さんも、さきを見通す力までは、持つておらなんだようだの。悪のしょうりなんぞ、あり得んわ！ がきんちよどもが、いくら集まったところで、がきんちよは、がきんちよ。ちえを持ったけんじんには、かなわんというこつた。さあ、そうそうに、立ち去れい！ わしの怒りが、ばくはつする前にな！」

リブレストが怒りしんとう、いい放ちました。ぴりぴりと、空気がゆれるほどのオーラ。いくらこうげきの魔法を使わないとしても、リブレストがほんきで怒ったら、それこそ大地はひびき、山はゆれ、どんなことになってしまうのか？ そうどうもつきません。これにはさすがの魔女たちも、おそれをいだかずにはいられませんでした（リユニオンをふくむこれらのとりでは、ベーカーランドの、文字通り、かなめでした。へいわを守るための、大いなるたてでした。これらのとりでがあることで、敵のしんにゆうを防ぎ、悪に目を光らせつづけ、人々の暮らしを守りつづけることができているのです。まさにこれらのとりでは、このアーケランドのぜんなる人々にとつての、きぼうでした。これらのとりでを取りもどすということは、きぼうを取りもどすこと。いくさのならわ

しなどにはもはやかんけいなく、これらのとりでを取りもどすことは、ベーカーランドの白き者たちのたましいを取りもどすことほどの、大きなしめいであつたのです。そしてリブレストは、かれらのその思いを、よくしようちしていました。ですからなおさらのこと、怒つたのです。

だれもなにもいわず、しばらくの時間がすぎていきます。そして……。

「いきましよう、アルーナ、エカリン。」ネルヴァがそういつて、静かに歩き出しました。

「かつてにさせておけばいいわ。」

「ちよ、待つてよ、ネルヴァー！」あわてて、エカリンがあとを追いかけます。

「……は、はるまき、持つていくです……！」アルーナがあたふたと、はるまきをもちつけたお皿を持つて、あとにくつついていきました(そしてとりでの兵士さんたちも、しきかんたちがいなくなつてしまつては、たまつたものではありません。魔女たちのあとを、「ひええ！」とあわてて、追いかけていきました)。

こうして、ベゼロインはここに、白き勇士たちのもとにもどされたのです。ですがそのとき、エリル・シャンデーインの平原では、さいごの戦いの、そのさいごのけつちや

くがなされようとしているところでした。戦いのゆくえは魔女のネルヴァのいう通り、だれの目から見てもあきらかでした。ペーカーランドのはいぼく、それがこの場においてくつがえされるなどということは、どうしたって、考えられるようなものではありませんでした。

運命は、どのように動くのか？

そして、せいぎのゆくえは？

おそろしいほのおを吹きつけるもも色のりゆうが、エリル・シャンデーインの王城へとむかつて飛び去っていききました。

さいごのけつちやくのときがやってきたのです。

29、けつちやくのとき

ちちちつ、ちちちち……。

あざやかながね色をした小鳥が二羽、美しいなき声を上げながら、頭の上を飛び去っていききました。空は雲ひとつない、かいせいです。春のおひさまは、さんさんとてりかがやいていました。吹きぬけてゆく、ここちのいいそよ風。それに乗ってはこぼれてくる、草のかおり。みどりのしばふのそのところどころには、白やきいろやもも色の、小さな花々がさきほこっていました。しばふのむこうに広がるのは、いただきに雪をいだいた、ゆうだいな山々。そのすそのに広がる美しい大地の上には、すんだ水をたたえたきれいなみずうみを、あちこちに見て取ることができます。流れ落ちる、いくつかのゆうがなたきのすがたも見られました。

まことにここは、へいわそのもの。いちにちじゆうなにもせず、ただこのしばふに寝ころんでいられたのなら、どんなにしあわせな気分ひたれることでしょうか。

今そのしばふの上に、ふたりの子どもたちがならんで寝そべっていました。手足を大の字に広げて、ここちいいおひさまの光を、からだいっぱいにあびていたのです。ひと

りは白く美しい、とてもりっぱなきぬの衣服に身をつつんでいました。かみは白に近い、しんじゆ色。金の羽のかみかざりをつけていて、その肩にはりっぱなもんじようのはいった、さんかくのかたちをかざりものがつけられております。もうひとり黒くなめらかなビロードの衣服に身をつつんでいて、やはりその肩には、もんじようのはいったかざりがひとつつけられていました。かみは黒。腰のベルトには宝石のかざられた、小さな短剣がいつぽん取りつけられております。

ふたりとも、ひとめでどこかのくにのりっぱな身分の子どもたちであるということがわかりました。そしてその通り、かれらはとあるふたつの王国の、王子さまたちだったので（肩についているもんじようは、それぞれの王国のものでした）。身なりだけでなく、そのととのった顔立ちも、かれらの中身をよくあらわしていました。ですがかれらのねんれいはまだかなり若く、ふたりとも八さいか九さい、そのくらいであるかのようにでした。

「気持ちのいいところだね。」しんじゆ色のかみの男の子が、うつとりとした顔をしていました。

「おれの、ひみつの場所なんだ。」黒いかみの男の子が、ひとみをとじたままこたえませんでした。

「だれにもいふなよ？ おまえだけだからな。」黒いかみの男の子は、そういつて「ふ

ふ。」と笑みを浮かべます。「おれは、見こみのあるやつにしか、しんせつにしてやらな
いんだ。」

黒かみの男の子が近づきました。

「城のれんちゆうも、くだらないやつらばかりでさ。自分のりえきばかり考えて
る。おれは、れんちゆうから見たら、ただのかざりみたいなものさ。」

黒かみの子は、そういつて「ふん！」と鼻をならします。

「そんな。アルちゃんはりっぱだよ。」しんじゆ色のかみの子が横をむいて、黒かみの
子にいました。「ぼくも早く、アルちゃんみたいになりっぱになりたい。」

いわれて、黒かみの子が「ふふ。」と笑つてこたえます。

「おまえは、じゆうぶんによくやつてるよ。おれなんかよりも、はるかにうまくな。お
まえには、城のせいかつがあつてる。おれにはむいていないんだ。」そういつて、アル
ちゃんとよばれた黒かみの男の子は、からだを「うくん……！」とのぼして、大きなあ
くびをしました。

「あーあ、早く、大きくなりてえな。そしたらおれは、冒険の旅に出るんだ。悪いやつ
らをばつたんばつたん！ 残らずやつつけてやる。」黒かみの子がそういつて、両手を動
かして、剣で敵をやつつけるしぐさをしてみせます。「おれは、いつか、このアー克蘭
ドをひとつにまとめ上げてみせる。そして、みんなが笑つて暮らせる、へいわな世の中

を作るんだ。」

「アルちゃんなら、きつとできるよ。」しんじゆ色のかみの子が、にっこり笑っていました。「ぼくも、大きくなったら、アルちゃんといっしょに冒険の旅に出たいな。剣はまだ、にがてだけど、きつと強くなって、アルちゃんのことを助けられるようにするから。」

「よし、やくそくだぞ。」黒かみの子がそういって、しんじゆがみの子の手を取って、その手を大きくふりました（これは、ゆびきりげんまんみたいなものでした）。「早く、強くなれよ。おれたちがそろったらむてきだつてこと、みんなにわからせてやろうぜ。」

「やくそく。」しんじゆがみの子がそういって、またにっこり笑います。

「ぼくたちは、ずっと友だちだよ、アルちゃん。」しんじゆがみの子がいいました。「ベーカーランドも、ワットも。」

ベーカーランド……。ワット……。

そして、しんじゆがみと黒かみの、ふたりの王子さまたち……。

もうおわかりでしょう。このふたりの子どもたちは、おさなきころの、アルマークと、アルファズレド、まさしくそのかれらだったのです。

「あたりまえさ。」小さなアルファズレドが、「ふふっ。」と笑ってアルマークにいいました。「おれのとおりは、いつでも、おまえのためにあけといてやる。おれたちは、ふたりでひとりみたいなものだからな。ペーカーランドとワットも、いつまでも友だちだ。」アルファズレドはそういって、アルマークの手をにぎります。

「いいから、おれのことば、アルファってよべよ。アルちゃんって、がらじゃないぜ。それに、おまえだって、アルちゃんだろ？」アルマーク。」

「うん、まあ、そうなんだけどね。」小さなアルマークが、そういって笑いました。「じゃあ、アルファちゃんにしようか？」

「それじゃ、こないだきた、あいつみたいだろ。あの、シープロンの、メリアンとかいうやつ。いきなりおれのこと、アルファーちゃん！ とかいつて、だきついてきやがって。おかしなやつだな、あいつは。」

それをきいて、アルマークは思わず「あはは。」と笑ってしまいます（ペーカーランドとシープロンドはむかしからのつきあいでしたから、アルマークはメリアンのことも、このころからよく知っていました。だいぶ変わった子だな、とアルマークもずっと思っていたのです）。

「アルファでいいよ。その方が、おれも気らくだからさ。」アルファズレドがいいまし

た。

「わかった。」アルマークがこたえます。

「アルファ。」

おひさまの光のふりそそぐ、空の下。

ふたりはいつまでも、そのしばふに寝そべって、あつい夢を語りあっていました。

ぐわー！　ぐわー！

つめたい小雨のふりしきる、なまり色の空の下。そのまつ黒なつばさをはばたかせて、今大きな二羽のからすが、いちもくさんに雲のむこうに飛び去っていきました。それはかなたからせまりくる、なにかおそろしいエネルギーからのがれるためでした。風に乗って、この空気から伝わって、ぴりぴりとふるえるような、なにかのもえるような、きなくさいエネルギーの波がここまでとどいてくるのです。

そしてその力のみなものは、すぐにあきらかになりました。あつくたれこめる、その雲のむこう。そこから今、なにかとつもなく巨大なきようふのものが、こちらへとむかってやってくるところだったのです。

雲のあいだから飛び出してきた、その巨大なからだ。おそろしいかぎづめを持った、ふたつの手。とげのならんだ、大きなしっぽ。全身はあつくかたいうろこで、すっかりおおわれております。そしてその背中からは、おそろしいほどのエネルギーを放つ巨大なふたつのつばさが、ばっさばっさ！ はばたいて、その巨大なからだをちゆうに浮かせていました。

なによりもおそろしいのは、その顔でした。ぎらりと光る、金色のひとみ。頭にふたつ、鼻の上にひとつ、大きなつが生えております。鼻からはもくもくと、白いけむりが吹き出ていました。そしてその巨大な口。そのあいだからは、いつぼんいつぼんが人の背たけほどもあろうかというおそろしいきばが、ならんで生えていたのです。

この生きものは、伝説に名高いりゆうでした。からだの色は、くすんだもも色。そうです、このりゆうはエリル・シャンディーンの戦いにおいて、ベーカーランドの白き勇士たちのことをふるえ上がらせた、そのもも色りゆうでした。かつてアーランドを荒らした、赤りゆう。その赤りゆうの子であるこのもも色りゆうは、今まっしぐらに、エリル・シャンディーンの王城へとむかって飛んでいるところだったのです。その下では、いまだ白き勇士たちが、けんめいの戦いをくり広げているところでした。しかし戦いのけつまつは、もはやあきらかだったのです。このもも色りゆうが、これ以上手をくださずとも……。

もも色りゆうドルーヴは、まさに今、自身のそのふくしゆうのちかいを果たさんとしているところでした。まっしぐらに、エリル・シャンディーンへ。そしてそこにいるふくしゆうの相手、アルマークのもとへと。

その背に同じく、アルマークとのさいごのけっちやくをつけんとしている、アルファズレドのことを乗せて……（このもも色りゆうのことを手にいれたアーザスにとつて、いくさの勝ち負けにこのりゆうの力がちよくせつにかかわらなくても、それはたいした問題ではなかったのです。アーザスのもくてきは、ただひとつ。さいごの戦いにおいて、ペーカーランドの者たちに、ただひたすらのぜつぼうを与えること……。そしてそれはもはや、果たされていきました。ですからこのりゆうのことをまかされていたアルファズレドは、もはやいくさの勝ち負けなどにはかんけいなく、さいごのおのれの運命のために、このりゆうとともに、アルマークのもとへとむかったのです。そしてアルファズレドがそうするだろうということは、このりゆうのことをアルファズレドにたくしたアーザスにも、よそくできていました）。

雨にくもった空のむこうに、エリル・シャンディーンの白き王城が見えてきました。その前には、ちゆうに浮かぶたくさんの魔法の小島をそなえた、まちなみが広がってお

ります。その小島から広がる魔法のバリアーが、エリル・シャンディーンのまちをすっかりとおおいつくして守っていました。これはいぜんにも説明しました、ノランの魔法の力によるものです。そしてその魔法の力を大きくさせてじつさいにまちを守っていたのは、ペーカールランドの若ききゆうていまじゆうつしたちである、マレイン・クレイネルとロクヒュー・テオストライクの、兩名でした。エリル・シャンディーンのまちなみは、もつか、このふたりのまじゆうつしたちの手によつて、守られていたのです（この守りの魔法をずっとたもちつづけるのには、ノランの魔法の力に加え、かれらほどの魔法の使い手の力が必要だったのです）。そしてきゆうていまじゆうつし長であるルクエール・フオートは、アルマーク王じきじきのいらいにより、エリル・シャンディーンの王城の守りをおおせつかつていました（まことにこの三名のきゆうていまじゆうつしたちの力がなかつたなら、人々はとても、この場にとどまつていることなどはできないでしょう）。かれらはまさに、このエリル・シャンディーンの守りがたな、そのものだったのです。もも色りゆうが、エリル・シャンディーンのまちなみに近づいていきました。しかしりゆうは、とてもかしこい生きものです。まちが魔法のバリアーによつて守られているなどということは、いわれるまでもなくわかつていたことでした（そしてこのまちにいくさのひがいをもたらしてはならないというルールのことも、もちろん知っていました）。ドルーヴのもくてきは、このまちではないのです。ただひとつ、アルマークのいる

王城、それだけでした(たとえ王城が強力なバリアーによって守られていたとしても、ドルーヴはおかまいなしに、そこにつっこんでいくつもりでした。まさに力わざで、魔法の守りをとつばしようともくろんでいたのです。ドルーヴほどのおそろしいりゆうならば、できないことではありませんでした)。

それでも色りゆうドルーヴがその怒りにもえて、もえさかるほのおの息をいつでも敵に吹きつけてやれるという、まさにそのとき……。

「アルファ！」

とつぜんにさけばれた、アルファズレドの名まえ！ ですが、ここははるかな空の上。いったいどこから、その声はきこえたのでしょうか？

ばさっ！ ばさっ！

つばさのはばたきとともに、その声はりゆうの頭の上からひびいてきたのです！ そしてりゆうの背に乗るアルファズレドが、その目を高く空にむけると……。

今そのしせんのださきから、白いつばさを持った白い馬に乗ったひとりの人物が、こち

らへとむかつてまっすぐにおりてくるところでした！ 白いよろいに身をつつみ、その手にきらめくいっぼんのつるぎを持った、ひとりの人物。そのかみは、かがやくようなしんじゆ色……。そう、この人物は、まぎれありません。ユニコーンのつの持つペガサスに乗った、ペーカーランドの白き王、アルマーク・クリステイア・ペーカー、その人だったのです！（アルマークはアルファズレドとのさいごのけっせんにのぞむため、ひとりペガサスの背に乗って飛び立ちました。ワットの王城、アルファズレドのもとにむかうつもりだったのです。しかしその道のりは、思いもかけず大きなへんこうをとまなうことになりました。道のとちゆう、アルマークはふきつな影を目にしました。それはまさしく、きようふそのものでした。アルマークはかなたの空を飛びゆく、もも色のりゆうのすがたを見たのです。そしてアルマークはそのりゆうの背に、運命の相手のすがたを見ました。そう、アルファズレドです。アルマークは大きく空をまがり、りゆうの背に乗るアルファズレドのことを追いました。そしてついに、アルマークはそのアルファズレドのもとへと、たどりついたのです。）

「アルマーク……」アルファズレドがちゆうを見上げてそうつぶやき、腰におびた剣をぬき放ちました。黒いオーラを放つ、まっ黒なやいばを持った、おそろしきつるぎ。これは力をもとめるアルファズレドがついにいきついた、きゆうきよくの力を持つやみの魔法の剣でした。その名も、ガルヴァード。この剣で切られた者はそのからだからいの

ちの力をすい取られ、そして剣を持つ者は、ぎやくにその力をましていくのです。それと同時に、剣のやいばもさらに、その力をましていきました。力が、力を生む。おそろしい剣です。

とつげきしてくる、アルマークのペガサス！　そして……。

がきいーん！

ぶつかりあう、剣と剣！　白きつるぎ、せい剣ロスフォルドの光のエネルギーと、黒のつるぎ、よこしまなる力持つガルヴァードのやみのエネルギーとが、ともににはじけ、空中でばちばちとエネルギーの火花をちらしていききました。

ふたたび、体勢をととのえるアルマーク。アルファズレドもりゆうのその巨大なからだをあやつって、アルマークにむかいます。

もういちどむきあつた、ふたりのえいゆうたち。そして……。

がききーん！

ふたたびぶつかりあう、二本のつるぎ！　剣のエネルギーはこの暗くにこつたなまり

色の空の中をも、かがやく光とやみにそめ上げました。

「アルマーク！」アルファズレドがさげびました。「おれとおまえと、どちらが正しかったのか？　今こそ、そのこたえを出すときだ！」

アルファズレドを乗せたりゆうが、アルマークにむかつていきます。そしてアルマークもふたたび、まっこうからりゆうに立ちむかつていきました。

「アルファ！　おまえに、わたしはたおせん！　いつわりの力にすがった、今のおまえにはな！」

がきいーん！

うちかわされ、はげしくはじける、剣のエネルギー。もえさかるほのおのように吹き出したそのふたつのエネルギーは、そのままおたがいになりぎりとおしあい、ぶつかりあい、ふたりのえいゆうたちのからだをまるでからみあう二ひきのへびたちのように、取りかこんでいきました。

やいばをまじえたまま、かれらはおたがい、いっぽもひきませんでした。剣をにぎる手に、さらに力がこめられていきます。目の前には、かつての友のすがたがありました。おたがいに、えいえんの友じょうをちかいあつたはずのふたり。それが今では、かわすやいばのさきにしか、その顔をたしかめあうことができないのです。なんという運命なのでしよう。なんといつかなしみなのでしよう！

アルファズレドの口もどが、わずかにゆるみました。

「なかなか、うでを上げたな、アルマーク。いつも、おれのあとをついてくる、ひよっ子だったくせに。」

アルマークもその口もとをゆるませ、それにこたえます。

「おまえのとなりの席を、勝ち取ったわたしだぞ。努力をおこたったのなら、おまえに申しわけが立たないからな。わたしも、成長しているんだ。」

ぎゃりん！

剣がふたたびはじかれました。アルマークの乗るペガサスが、はずみで空中によろよろと投げ出されます。そしてそこに！

ぐおおおー！

もも色りゆうの、おそろしいほのおの息。そのほのおはペガサスのつばさをかすめ、すんでのところ、アルマークのからだをはずしていききました。まともにくらつたら、ペガサスもアルマークも、そのままその身をやきこがされて、まつさかさま。勝負はいっしゅんのうちについてしまったことでしょう。まことに、おそろしい相手です。

アルマークはこきゆうをととのえ、今いちどアルファズレドにむかいあいました。

「アルファ、きみは、わたしのもくひようだった。そんなけいしてもいた。」アルマークが剣をかまえて、アルファズレドにいました。

「だが、今のおまえはちがう。今のおまえの力は、おまえ自身の力ではない。いつわりの力だ。今のおまえは、わたしのあこがれたおまえではない。わたしがもういちど、おまえに、むかしの心を思い出させてやる。ともに夢を語りあつた、あのころの心をな！」アルマークがとつげきしました！　しかし……！

もも色りゆうドルーヴは、そのときすでに、つぎのこうげきへのわなをしかけていたのです。さきほどのほのおは、アルマークのことをこうげきにゆうりな位置へとみちびくための、さそいでした。アルマークがアルファズレドにむかつていく、まさにそのとき。その目のとどかないところから、もも色りゆうのそのおそろしいこうげきが、アルマークのことをとらえたのです。

びゅっ！　空を切る、なにかの音。そして、そのいつしゆんのち……。

「ぐはっ……！」

アルマークの口からもれる、くるしみの声……。

アルマークはそのまま、ペガサスとともに落ちていきました。アルマークのからだか

ら、ぼろぼろと、くだけた白いよろいのはへんがこぼれ落ちていきます。

アルマークをおそったもの、それはりゆうのそのしつぽでした。りゆうのその長いしつぽは、アルマークの目のとどかないしかくから、ふいをつけて、ペガサスのからだとアルマークのわきばらをうちすえたのです。いくらよろいに身をつつんでいるとはいえ、このいちげきはまさに勝負をきめる、そのいちげきとなり得るものでした。

ですが……。

われらがベーカールンドの白き王は、まさしくえいゆうでした。りゆうのいちげきをまともにその身に受けながらも、アルマークはふたたび、落ちていく空中で体勢を取りもどし、その場にふみとどまったのです！

エルダー・エリル・アーマー。アルマークが身につけていた、せいなるよろいの名まえでした。このとくべつな力を持つ魔法のよろいがなければ、アルマークはひとたまりもなく、からだをうたれ、骨をくだかれ、小雨のふりしきるこの空の中を、まっさかさまに地上へとむかって落ちていってしまっていたことでしょう。そしてそのさきに待ち受けているものは……、ただひとつの、悪夢のようなけっかであったはずです。

アルマークはふたたびその手にせい剣をにぎりしめ、頭上のりゆうに立ちむかいました。しかし、せいなるよろいのおかけでおそろしいりゆうのこうげきをなんとかくいとめることができたものの、アルマークの受けたダメージは、そうとうなものでした。う

ちすえられたわきばらからは、血がにじみ、なんとも痛々しそうです。そして、せいなるよろいエルダー・エリル・アーマーは、ぼろぼろにくだけちり、もはやよろいとしての力はほとんど残っていませんでした。つぎにまたりゅうのこうげきを受ければ、そのときこそ、助かることはできないでしょう。

さらに、アルマークの乗るゆうしゆうなるペガサス。かれもまた、りゅうのしつぽのいちげきをその身にあげて、かなりのダメージを受けていました。もはやかれも、今までのようには、そのつばさをかすることはできないはずです。しかしこのペガサスは、まことにえいゆうをその背に乗せるのに、ふさわしい生きものでした。乗り手のアルマークがえいゆうなら、このペガサスもまた、痛みやきようふにたえることのできる、まこととえいゆうだったのです（ちょっとせいかくは悪いですけど）。このペガサスは、クリーブという名まえをつけられていました。そしてそれはそのもの、「力持つえいゆう」という意味の言葉だったのです（ですから気がるに、馬などというあつかいをしてはいけません。へたなことをすれば、そのうしろ足で、キックされてしまいますから）。

クリーブの背に乗るアルマーク。その目はまっすぐに、りゅうへ、そしてその背に乗るアルファズレドのもとへとむけられていました。もも色りゅうのそのおそろしい金色のまなざしが、アルマークのことをぎろりとにらみつけております。このもも色りゅうドルーヴも、また悪のえいゆうとよべるものでした。いっしゅんたりとも、ゆだんは

できません。アルマークはりゆうのその口に、つめに、足に、そしてしつぽに、ゆだんなくしんけいを集中させました。

アルファズレドが、その黒のつるぎをアルマークにつきつけました。その目はまつすぐ、アルマークのことを見つめております。アルファズレドの顔からは、さきほどまでの笑みはもはや消えていました。おそろしいまでのまなざし。すきのまつたくないその動き。目の前にいるのは、おそろしい黒の軍勢をひきいてアークランドのそのすべてをしいしようともくろむ、ワットの黒の王、アルファズレド・セルギアティス・ルーイェ、まさしくその人だったのです。

アルファズレドを乗せたりゆうが、アルマークにとっしんしました！ アーザスによつてたぶらかされた、怒りのりゆう。今こそ、親である赤りゆうをたおされた、そのうらみを晴らすときなのです。このりゆうはまさしく、怒りのエネルギーのかたまり、そのものでした。もも色りゆうドルーヴは、今までなん十年と、暗いどうくつの中でひっそりとふくしゆうのときを待ちつづけていたのです。その怒りのエネルギーがばくはつした今……、ドルーヴはまさしくふくしゆうのおとなつて、そのほんらいの力をなんばいにもふくれ上がらせていました。ただひとつ、アルマークのことをうちたおす、そのためだけに。

「これで終わりだ、アルマーク！」アルファズレドがさげびました。「これが、おれの

せいぎ！ おまえは、せめて、おれのこの手でほうむってやる！」

劍をかまえてとつげきしてくる、アルファズレド！ アルマークは身じろぎひとつせ
ず、そのすべてを受けいれようと待ちかまえました。りゅうのつばさのはばたきは、
ねつきをおびたすさまじい風となつて、アルマークの全身をおそいました。しかしアル
マークは、まっすぐ前を見すえたまま動じません。りゅうの口から、ほのおが吹きつけ
られます！ ですがアルマークは、すでにそれを見切っていました。つばさを下げるク
リーブ。ほのおはその上を通り、アルマークのかみをすこしだけこがして、うしろの空
に消え去っていきます。それからすぐに、怒れるりゅうのその両手のつめが、アルマー
クのことをひきさかんとおそいかかりました。しかしアルマークはまたしても、そのつ
めをひらりとかわし、りゅうのうでのその中を、かいくぐっていったのです。そして
……。

た！

「うおおおー！」

アルマークがさけび声とともに、その身ひとつでアルファズレドに飛びかかります！

アルマークのねらいは、はじめからひとつでした。おそろしいりゆうのそのこうげきをかわたすための、いちばんのしゅだん。それはりゆうのこうげきのとどこかないところに、その身をおくということなのです。それはまさしく、アルファズレドのいるところ。りゆうのその背中の上にほかなりませんでした。

そう、アルマークはクリーブの背から、アルファズレドのいるりゆうの背のそのもとへと、ただひとり飛びうつったのです！

クリーブがひとり、空高くはなれていきます。しかしもも色りゆうドルーヴの心は、ただひとつ、アルマークのみにむけられていました。ドルーヴはつばさを動かして、その背に乗ったアルマークのことをふりはらおうとしましたが、だめでした。アルマークとアルファズレドのふたりがいる場所は、まさにりゆうのしかく。こうげきの手のとどこかないところだったのです。ドルーヴは齒をぎりぎりとならして、いきり立つばかりでした（へたなことをすれば、味方のアルファズレドまでまきぞいにしてしまいますから。それはアーザスからも、かたくとがめられていたことだったのです。そしていくら怒りかられたドルーヴとて、そこまでばかりではありませんでした）。

りゆうの背の上で、ふたたびあいまみえるふたり。そしてふたたびうちかわされる、

劍と劍。それはおたがいに、いつぽもひき下がることのできない戦いでした。たとえこの身がほろびようとも、かれらはおたがいに、それぞれのけつちやくをつけなければならなかったのです。ひとりは、かつての心を相手に取りもどさせるため。そしてもうひとりは、自分のえらんだ道が正しかったというじじつを、相手につきつけるために……。

「もどつてきたぞ！」アルマークが、かわす劍のやいばのあいだから、そのむこうにいるかつての友にいました。「このねばり強さは、きみから教わったものだ。三十年前の、あの冒険の旅の中でな！」

アルファズレドが、するどいまなぎのままこたえます。

「ひよつ子に、このおれがこえられるとも思っているのか！ おれは、力にすべてをささげた！ 今のおまえなど、もはや、おれの敵ではない！」

上空に吹き荒れる風は、すさまじいほどのものでした。それに加えて、りゆうのからだから吹き出されるおそろしいまでのエネルギーが、びりびりと、ふたりのからだにうちつけられていくのです。足もとは、りゆうの背の、そのうろこの上。まさしくここは、このふたりのえいゆうたちの運命をきめるにふさわしい、さいごのけつせんのだたいでした。

「あのととき！」アルマークがふたたび、さげびました。「なんとしてでも、きみをとめるべきだった！ すべては、わたしのせきにんだ！ だからわたしは、今、この身のす

べてをささげても、きみのことをとめてみせる！」

アルファズレドが悪の道に進んだ、そのさいだいのきっかけ。それはかれの首にかか
る、ひとつのりゆうの力のメダルだったのです。アルマークはアルファズレドがそのメ
ダルを取ることを、とめることができませんでした。そのことはずっと、アルマークの
心をしめつけつけていたのです。

「ほざけ！ おまえに、なにができる！ ぬるま湯につかりきった、ふぬけたおまえに
！」

アルファズレドがそうさげんで、手にしたつるぎガルヴァードのやいばに力をこめま
した。とたんに、黒のやいばからしつ黒のエネルギーがわき起こり、アルマークにおそ
いかります！ そしてアルマークもまた、せい剣口スフォルドのやいばに、あらんか
ぎりの力をこめました。その光の力が、悪のやいばの力にあらがっていきます。

ぎりぎりときしむ、ふたつのやいば。強力な魔法の力を持つ二本のつるぎから、まる
でいなくすまのように、魔法のエネルギーが吹き出していきましました。まことに、全身ぜん
れい。その戦いは、白と黒。ぜんと悪。それぞれのえいゆうたちのその力の大きさを
しようちようするかのような、すさまじい力と力のぶつかりあいでした。

光とやみ。うちかわされる二本のつるぎ。しかし……、黒のえいゆうのそのおそろし
いまでの黒の力は、もうひとりの白きえいゆうの力を、大きく上まわっていたのです。

「ぐわあああつー！」

アルマークのそのいつしゆんのすきをつけて、悪のやいばガルヴァードから放たれた黒のいかずちが、せい剣口スフォルドの守りを破り、アルマークのからだをうちすえました！ アルマークはそのまま吹き飛ばされ、りゆうの背の上にたおれこみます。すかさず、もも色りゆうドルーヴがその背を大きくかたむけ、アルマークのことをふり落とそうとしました。ドルーヴの背の上をすべっていく、アルマーク。あぶない！ 落ちる！ そしてアルマークのからだがりゆうの背の上からはるかな地上へとむかつて落ちていこうかという、そのとき。アルマークはりゆうのそのうろこのいちまいに手をかけて、なんとかそのふちにふみとどまったのです。しかしもう、勝負のゆくえはあきらかでした。まさに、ぜつたいぜつめい。アルマークのつるぎ、せい剣口スフォルドは、りゆうの背の上からはるかな地上へとむかつて、落ちていってしまったから……。

「むだだ。」アルファズレドがガルヴァードのやいばを、りゆうの背のふちにしがみつくアルマークにつきつけて、いいました。

「しよせん、おまえのいうことなど、夢物語にすぎない。この世界は、力こそがせいぎ。弱き者は、力ある者にしたがうのみだ。」

アルファズレドがその黒のやいばをかまえながら、ゆつくりと、アルマークのもとに近づいていきます。もはやアルマークには、なにもなすすべは残されてはいませんでした。

「さうばだ、友よ。」

アルファズレドの剣が、アルマークの上にふりおろされようとしていました。

「ここだ……、アーザスは、ここに……」

暗きめいろの果て、ロビーとソシーはその門の前にたどりつきました。

めいろの中には、生きもののけはいはまったく感じられません。あるのはただ、くるしみにあえぐたましたちの、声にならないひめいだけだったのです。

めいろの中は、しんと静まりかえっていました。ロビーの歩くくつの音だけが、ただかつんかつんとひびいてきました。てんじようは高く、そのさきはやみにつつまれていて、まったく見えません。いったいどこまでこのてんじようがつづいているのか？
ぜんぜんけんとうもつきませんでした。

めいろの中にはたくさん黒い川が流れていて、その上には黒い石でできたぶきみな橋がかけられていました。黒い流れははるかな下にあつて、橋はその流れから、百フィートほど上にかけていられたのです。橋には悪魔のようなすがたをした生きものの石ぞうが、たくさんならんでいました。それはソシーのことをおそつたあのおそるべきわなの石ぞうに、そつくりでした。ロビーは意をけつして、ソシーのことをかばいながらそれらの橋の上を走りぬけてきましたが、それらの石ぞうには、なんのわなもしかけられてはいませんでした（あるいはしかけられていたのかもしれないが、アーザスがそれをとめていたのかもしれない）。

数えきれないほどたくさんのかいだが、めいろのあちこちにつくられていました（のぼつてみたらただかべがあつただけということも、なんどかありました）。ロビーはそれらのかいだんを同じく数えきれないほどのぼつたりおりたりしていききましたが、かいだんをのぼつたはずなのに、たどりついたところはさつき見えていた下の階の広間、というようなこともなん回もありました。ですからいつたい、自分のいるところはどれほどの高さのところなのか？ それすらもぜんぜんわからなかつたのです。まことにこのめいろは、ちつじよやじようしきとはまつたくかけはなれた、でたらめきわまりない悪の道でした。

ロビーは自分の感かくにみちびかれるまま、このめいろの道を進んでいきました。も

しこれがロビーでなかったとしたら、このめいろにふみこんだ者はあつというまに道にまよつてしまつて、アーザスのそのやみの魔法の力に取りこまれ、えいえんに、このおそろしいやみの中をさまよいつづけることになるでしょう（あるいはその前に力つき、たましいのほのおとして、アーザスにその力をすいつくされてしまうことでしょう）。そして、どれほどの時間がたったのでしょうか？ ロビーはついに、その巨大な門のその前へとたどりついたのです。

それはこれまでに見てきたものの、そのどれよりもおそろしい門でした。高さは三十フィートほど。血のように赤いぶきみな石でできていて、そのあちこちに、ゆがんだ目や口や手をかたどつたちょうこくがなされていました。それはこのアーザスの城のこゝとをつつんでいた、あの生きているバリアーにそっくりでした。門の上にはおそろしいすがたをした生きものの石ぞうが二体、むかいあうかたちで取りつけられております。そしてその二体の石ぞうが、手にいだいていたもの。それは今までだれも見たことのないかのような、ぶきみながやきを放つひとつの石でした。かたいか？ やわらかいか？ それすらもはつきりしません。さつきまでのかたち、つぎのしゅんかんには、ちがつているかのような、そんなきみようないんしょうを受ける石でした。そしてその石には、このアーランドにあるどんな本にもものつていないと思われる、おそろし

い悪のもんしようがきざみこまれていたのです。たくさんの星を重ねたような、まるでたためなかたち。そしてそのまん中に、もえる目をかたどった寶石がひとつ、はめこまれていました。その目が、門の下に立つロビーのことを、ぎろりとらみつけていたのです（このもんしようはアーザスに力を与えている、そのやみの世界のもんしようでした。まともな者が、うかつに手を出すべきちしきではありません）。

ロビーは門のとびらに、そつとその手をかけました。ぐ、ぐ、ぐ……。門と同じ赤い石でできた重いとびらが、ゆつくりと、その内がわに動いていきます。ロビーは門の中心をのぞきこみました。中はまっくらです。なにも見えません。しかしロビーは、たしかに感じました。

アーザスは、このおくにいる……。

ロビーは腰の剣をぬきました。剣のやいばは、今は静かながやきにもどつていました。まるで、きたるべくさいごの戦いがわかつていて、それに心静かにそなえているかのように……。剣の光が、うでの中にあるソシーの顔を静かにてらしました。ソシーはずつと、荒い息使いをしたまま、目をあけることはありません。深いやみの底の中で、ソシーは今、せまりくるその悪の力に、ずつとあらがいつづけているかのようでした。

劍のかすかな光にてらされた道を、ロビーは進んでいきました。この道はあきらかに、今までの道とはちがいました。空気があつくべたついでいて、じつとりとしていたのです。まるですぐそばに、あついようがんのかたまりがあるみたいに。そしてしゅーしゅーという、吹き上がる湯気のような、なにかの生きもののこきゆうのような、おそろしげな音。その音がこの道のあたりいちめんから、なりひびいていました。

息をすうたびに、ロビーは顔をしかめました。胸がやけつくようです。とても、まともな生きもののすうような空気ではありません。ロビーはなるべく空気をたくさんすいこまないように、静かな足取りで、この道を進んでいきました。

道はすこしさきで、ゆるやかなのぼりかいだんにつづいていました。ロビーはしんちように、そのかいだんをふみしめていきます。のぼったさきは、長いろうかになつていました。ろうかの床はつるつるとした、なめらかな黒い石でおおわれております。同じくなめらかな黒い石でできた両がわのかべには、まるいすべすべしたガラスのような石が、同じかんかくでたくさんならんでうめこまれていました。そしてロビーが、そのろうかに足をふみいれたとたん。

ふいいん。そのまるい石たちが、つぎつぎに赤い光を放つていったのです。それはロビーの進むその足取りにあわせて、道をてらしていききました。そしてしばらくいった、そのさき。ロビーはそこに、なにかとてつもないほどの力をひめた、あるもののそんざ

いを感じ取ったのです。

アーザスでしょうか？ いえ、ちがいました。人ではなく、それよりもっと、おそろしげなもの。それはまるで、この世界のきょうふそのものが、そこにあるかのような……、そんななんともいいようのない、ぶきみな力でした。

しかしロビーはそのそんざいに、いぜんにも感じたような、ふしぎなつかしきをおぼえたのです。それは女神リーナロッドよりさげられた、すべてをつかさどる大なる力。そう、青き宝玉です。エリル・シャンティーンの王城のてっぺん、あの場所で見えたあの宝玉のその力を、ロビーはふしぎにも今ふたたび、ここで感じ取りました。

青き宝玉の力を持つ、もうひとつの力。それがなんだか？ 読者のみなさんにはおわかりのことでしょう。

そう、それはまさしく、アーザスの作り上げたもうひとつの宝玉。赤いキューブにはかならなかつたのです。

アーザスの、赤いキューブ……。

ロビーは心の中でそうつぶやくと、剣をかまえて進みました。そのさきに待ち受けるものが、なんであるのか？ ロビーにはもうわかっていました。ロビーの旅の、そのさいごのもくてき地。アーザスの赤いキューブのあるその場所へと、ロビーはついにやってきたのです。

赤い光にてらされたそのろうかは、やがてひとつの広間につづいていました。そこははしからはしまでが三十ヤードほどあろうかという、大きな広間でした。てんじようは高く、まるいドームのかたちをしております。かべにはさきほどのろうかにならんでいたものと同じ、赤くかがやくつるつるとした石が、たくさんならんでうめこまれていました。それらの石のかがやきが、この広間をほんやりとてらしていたのです。

ですがこの広間にはいったしゅんかん、ロビーの目にまつさきに飛びこんできたのは、ただひとつのものだけでした。それはこの広間のまん中、その空中に浮かぶ、ひとつの大きな四かく形の石だったのです。

血のように赤い、ぶきみにかがやく巨大な石……。そう、まさしくこれこそが、アーザスの作ったそのよこしまなる赤いキューブ、そのものでした（いぜんにもお伝えしたことがありましたが、みなさんはこの赤いキューブのことを、すでに見ているのです。それは第七章のはじめ、アーザスとムンドベルクのふたりが赤い石の浮かぶ暗い広間で、話しをしていた場面です。あの広間こそが、まさにこの場所でした）。

「これが……」

ロビーが思わず、つぶやきました。エリル・シャンディーンの王城で、青き宝玉の前にはじめて立ったとき。ロビーはその中に、とてつもないほどの力を感じ取りました。そして同時に、なつかしさも。ロビーは今、あのときとまったく同じ感じを受けていま

した。

そのとき……。

ロビーは、はっと、なにかべつのけはいを感じ取りました。ロビーがあわてて、うしろをふりかえってみると……。

いつからそこにいたのでしょうか？ 長く赤いかみを背中までたらし、黒いガウンをまとったひとりの人物が、そこに立っていたのです。ほっそりとした、きゃしゃなからだ。うす手の赤いセーターを着ていて、その腰には、黒いかざりのついたベルトがたれ下がっていました。ととのった顔立ち、そして、つり上がったむらさき色のひとみ……。

ついにアーザスが、ロビーのその目の前にあらわれたのです。

「待っていたよ。」

アーザスがその口もとに笑みを浮かべながら、静かにいいました。

「よく、きてくれたね、ロビーくん。」

アーザスはそういって、よゆうしやくしやく、とことこと広間のむこうの方に歩いていきました。

ロビーはアーザスにそのせいなる剣をつきつけて、いい放ちます。

「おまえをゆるすことはできない！ おまえは、たくさんものをうばい、たくさんの人たちのことをきずつけ、そして、くるしめてきた！ そのつぐないをするときだ！」

ロビーのつるぎアストラル・ブレードが、青白い光を放ちました。ロビーの思いと、そしてアーザスのそのあふれんばかりの悪意に対して、反応していたのです。

「ソシーのことを、なおすんだ！ ぼくのお父さんをかえせ！」

ロビーは歯をくいしばってアーザスにむきあいましたが、アーザスは横をむいたまま、まったく取りあうそぶりを見せません。赤いキューブに近づいて、その表めんをゆびでつつん、つつついでいました。

「アーザス！」ロビーが剣をつきつけて、さけびました。するとアーザスは、ようやく今ロビーのことに気がついたといわんばかりのようすで、いったのです。

「ああ、ごめん。ええと、なんだつけ？ その人形のこと？ ムンドベルクさんのことだった？」

ロビーは怒りにかられてこたえました。

「その、両方だ！ おまえはみんなからうばったものを、かえさなければいけないんだ！」

するとアーザスは、「ふう。」と大きなため息をついて、かえします。

「よくばりだね、きみは。ロビーくん。ぼくが、なにをうばったって？ そんなのいち

いち、おぼえていないなあ。」

「ふざけるな！」ロビーがさらにつめよりました。「この子を見ろ！ おまえがやったんだ！ おまえのせいで、ソシーは今、死にかけているんだぞ！」

するとアーザスは、ロビーの手の中にあるソシーのことをちらつと見て、いったのです。

「そんなこわれた人形、わざわざ持ってきたの？ おかしな人だね、きみは。ぼくはただ、いらぬいから、すてただけなのに。」

なんとというひどい言葉なのでしょう。今までずっと、ソシーはアーザスのためにはたらいてきたのです。アーザスのめいれいで、たくさんのひどいことまでソシーはやってきました。アーザスがほめてくれること、それはソシーにとつて、なによりもうれしいことでした。ただそれだけが、ソシーの生きが이었다つたのです。それなのに……。

「ゆるせない……。早く……。早くソシーをなおすんだ！ 今すぐに！」ロビーがいました。あまりの怒りに、ロビーの手はわなわなとふるえていました。

「いいよ。なおしてあげても。」アーザスが、けろつとした顔であつさりといひ放ちます。「その人形がほしいのなら、ロビーくんにあげるよ。でも、そのかわり、ぼくもほしいものがあるんだ。」

アーザスの顔が、よこしまなる笑みにつつまれました。その顔は、じゃあくそのもの。

さきほどまでとはあきらかに、なにかがちがうようでした。

「きみの持つてる、その剣。それはもともと、ぼくのものでね。ぼくが見つけたものなんだよ。きみのごせんぞが、ぼくから、その剣をうばったんだ。」

アーザスの手から、黒いけむりのようなエネルギーがわき起こります。なにかの魔法が、はたらいっているようでした。

「だから、ぼくに、かえしてくれない？ かえしてくれたら、その人形のこと、なおしてあげる。」

アーザスが「うふふ。」と笑って、ロビーにいいました。しかしその笑顔が、まさにおそるべき作りものの笑顔であるということは、ロビーにはすぐにわかったのです。アーザスは、ぼくのことをだまそうとしている。そして、そんな手にかかるようなロビーではありませんでした。

アーザスは、とくいのたぶらかしのじゆつをロビーにかけたのです。今までアーザスはこのじゆつを使ってたくさんの人たちのことをたぶらかし、自分のつごうのいいようにあやつつてきました。その中には、強い心を持ったいだいなえいゆうたちも、たくさんふくまれていました。アーザスの力は、そんなえいゆうたちの心をもねじまげ、あやつつてしまうのです。その中でも、いちばんのえいゆう。それはレドンホール力強きウルファアの王（そしてロビーのお父さん）、ムンドベルク・アルエンス・ラインハットで

した。ムンドベルクもまた、影となったその半分のからだを、アーザスのこのじゆつによつてあやつられていたのです。もはやみずからの意志を持たない、あやつり人形のようなそんざいとなつて……。

ロビーの持つ劍が、そのかがやきを強めました。そしてその劍は、ロビーの心の中にちよくせつ、こうささやきかけているかのようでした。だまされてはいけません。アーザスは、やくそくを守るつもりなど、はじめからないので。

ここにくる前、ソシーに出会つたあのトンネルの中できいた、ふしぎな声。その劍の声を、ロビーは今、ここでもきいたのです。それはロビーのことを守る、せいなる声。まさしく守りの女神の、その声のごとくでした。

ロビーは劍を強くにぎりしめて、いいました。

「ぼくをあやつることは、できないぞ。おまえに、劍は渡さない。この劍は、このアーランドの、みらいを守る劍だ。おまえのような悪の手になど、渡すものか！」

アーザスの顔から、笑みが消えました。その顔は、とてもおそろしいものでした。今までの作りもののアーザスのすがたが消えて、ほんとうの悪のすがたが、そこにあらわれたかのようにでした。

そして……。

「いいよ、それでも。」

とつぜん、ロビーの耳のそのすぐうしろから、アーザスのその声がきこえてきました！ ロビーはすぐさまうしろにむきなおつて、剣をかまえます！ しかしそこには、だれもおりません。ロビーは、はっとして、もういちど前をむきました。すると、さつきまでアーザスがいた場所にも、もはや魔法使いのすがたはなくなっていました。ロビーはあたりを、きよろきよろと見渡します。しかしアーザスのすがたは、どこにもありませんでした。

「くれないのなら、うばえばいいだけのことだから。」

ふたたび、アーザスの声がひびきます。ロビーはその声が出た方をむいて、さつと身がまえました。赤いキューブの影に、アーザスのすがたがあらわれていました。その顔にははじめのときと同じく、よゆうのある笑みもどっていました。

「せっかくだから、かれに、そのしごとをまかせることにするよ。ぼくは、うんどうがにがてで、戦いにはむいていないんだ。きみのごせんぞにも、よく、しかられていたよ。『おれのおにもつにならないように、ちよつとは、からだもきたえろよ』、つてね。ふふ、

なつかしいなあ。」

そのとき。広間に通じるそのろうかのむこうから、その人がやってきたのです。

こつ、こつ、こつ……。くつ音をひびかせながら、その人物がゆつくりとこちらへ近づいてきました。あらわれたその人物……。全身をまつ黒なよろいにつつんでいて、手には黒いけむりにおおわれた、大きな剣をいつぽんにぎりしめております。おしりから生えた、大きな黒いしつぽ。黒かみの頭の上には、同じく黒い、大きな耳がふたつ飛び出していました。

もはや、いうまでもないでしょう。ロビーの前にあらわれたのは、やみにとらわれ、アーザスにとらわれてしまっている、ロビーのお父さん、ムンドベルクだったのです。その目はまつすぐに、ロビーのを見つめていました。しかしその目に、感じようを持った人らしいところなどは、みじんも感じられませんでした。ロビーにそのせいなる力をたくすため、このアークランドを悪の手から守るために、ムンドベルクはその身のすべてを、ぎせいにささげたのです。そして今、そのからだはアーザスによって、むじょうにもあやつられてしまっていました。

「お父さん！」

ロビーがさげびました。

「お父さん、ぼくです！　ロビー……、ロビーベルクです！」

ついに出会えた、自分の家族……。それが、こんなひげきの出会いになるうとは、なんとかなしみの運命なのでしょう。かわいそうなロビー。ですがロビーに、そのひげきをかなしんでいるよゆうなどはありませんでした。ロビーはこれから、あらんかぎりの力と心、そのすべてをふりしぼって、やみにとらわれた父のことをすくい出さなければならぬのです。おそらくは、剣と剣でもって……。それができるのは、ただひとり、ロビーだけでした。

ロビーのよびかけにも、ムンドベルクはまったく反応を見せませんでした。うつろな表じようをしたまま、ただ目だけをまっすぐに、こちらへむけていたのです。もはやムンドベルクの耳には、だれのよびかけもどいてはいませんでした。それがわが子である、ロビーのよびかけであつても……。ムンドベルクに話しかけ、めいれいをくだすことができるのは、もはやアーズただひとりだけだったのです。

「お父さん！」ロビーがもういちど、ムンドベルクによびかけました。ですがそれがむだだということとは、もはやロビーにもあきらかでした。ロビーはただ口びるをかみしめて、剣をぎりぎりとにぎりしめることしかできませんでした。どうすることもできないくやしき、やるせなさが、ロビーの心の中をうめつくしていました。

「むだだよ。」赤いキューブのむこうから、アーザスがいました。「その人は、もう、自分がだれかもわかっていないんだから。でも、きみにここへきてもらうためには、その人が必要だったんだ。そのために、わざわざレドンホールをほろぼしてまで、きてもらったんだから。そのためだけにね。」

アーザスはそういって、「くつくつく。」という、あのきみの悪い笑い方をしてみせました。

「あ、でも、かれの作ったハンバーグは、なかなかおいしかったよ。けっこう、やくには立ってくれたかな。おふろそうじとかもね。」

なんとというひどいやつなのでしょう。アーザスはその通り、「ロビーのことをおびき出す」、そのためだけに、ムンドベルクのことをその手もとにおいていたのです。すべてはロビーの持つ女神の剣、アストラル・ブレード、それを手にいれるために……（そしてほんとうにアーザスは、この剣を手にいれるためだけに、レドンホールをほろぼしたのです。なんてひどい）。

ふういんされたやみの世界の中で、ふたたび力を取りもどし、この世界にもどってきたアーザス。かれがまっさきにむかったさき、それがアストラル・ブレードのもとでした（そのようすのことについては、いぜんムンドベルクとデルンエルムの会話の中で語られました）。そしてまだ力がたりなくて、剣を取りもどすことができないと知った

アーザスは、それからアークランドのありとあらゆる場所で、その悪のかぎりをつくすこととなったのです。力、力、力。アーザスがもとめたのは、ただひたすらに、力でした。アークランドでいちばん強い軍を持つ、ワット。アーザスがかれらと手をくんだのも、いわばとうぜんのことだったのです（自分のつごうのいいようにかれらのことをあやつつて、その力をりようするために）。

そしてアーザスの言葉の通り、剣をほしがるアーザスが必要としたものこそが、レドンホールの王ムンドベルクでした。アーザスは、いずれムンドベルクが剣をどこか安全なところへかくすだろうということも、よちしていました。それがムンドベルクのむすこであり、同じく剣の力を使うことのできるロビーベルクという少年のところだろうということを、アーザスがよそくすることは、たやすいことだったのです。アーザスはロビーのこと、そして剣のゆくえを、持てるかぎりの力をもってさがそうとしましたが、だめでした。さがしものをするためのどんな魔法を使っても、それらはすべて、はねかえされてしまったのです。アーザスは思いました。剣は今、強力ななにかの力によって、守られているにちがいない。そしてロビーベルクもまた、同じところにいるはずだ。そのよそうはあたっていません。剣もロビーも、アーザスの魔法をはねかえしてしまう精霊王の力を持った森、かなしみの森の中で、ひそかに守られ、ふたたび世にあらわれるそのときを待っていたのです（それらのことは、これまでの物語の中でみんな語られま

したね)。

しかしアーザスは、ぜんぜんあわてませんでした。今までなん十年、なん百年と、待ちつづけてきたアーザスです。今さらすこしくらい待つことになったからといって、そんなものはアーザスにとつて、どうということではありませんでした。

こちらからわざわざさがしまわらなくても、ムンドベルクのことを手もとにおいておけば、そのむすこであるロビーベルクといつしよに、剣はかならず自分のもとにやってくる。そしてまさに今、アーザスのそのよそうは、げんじつのもとなつたのです。まことに、アーザスのおそろしき、ずるがしこさは、わたしたちのそうぞうをはるかにこえるほどのものでした(ちなみに、アーザスはやってくるロビーによつて赤いキューブがはいされるかもしれないなんていう心配は、まったくしていませんでした。みじゆくなおおかみなどに、自分のものである剣を使いこなせるわけがないと、アーザスは思っていたのです。それにアーザスがかんたんに、キューブに近づくことをゆるすわけもあります。じつさいこのキューブには、剣の力をはじきかえす、ぼうぎよのバリアーが張つてあつたのです。このバリアーをくぐりぬけてキューブをこうげきすることは、よいいなことではありません。それは赤いキューブのことを見たロビーにも、ちよつかん的にわかつたことでした。ですからはいするべきキューブのことを目の前にした、ときここにきて、ロビーはこう、さとつていたのです。このキューブをは

かいするためには、この剣の力で、ちよくせつアーズスのことをたおさなければならぬいと……)。

ロビーのもとに、父であるムンドベルクが、ゆつくりとその歩を進めてきました。その手には、黒いけむりにおおわれた、よこしまなる剣がにぎられております。これもともと、ムンドベルクの持つ自身の剣、エルフィールドとよばれる剣でした。この剣は、持ちぬしの心の強さを力に変えて敵をうつことのできる、名剣だったのです(じつさい三十年前の冒険では、ムンドベルクの方がアルマークより、剣のうでまえは上でした。そしてアルファズレドはそのムンドベルクよりも、さらに剣のうでまえでは上をいつていたのです。ちなみに、メリアンは剣を持つて戦ったことなんて、いちどもありません。かれの力は武器ではなく、精霊の力によるものでしたから)。

しかし今ではその名剣も、アーズスのよこしまなるやみの力によって、けがれた悪意のあるやいばへと変えられてしまっていました。もはやこの剣は、けむりのようなやみのエネルギーにおおわれた、暗黒のつるぎへと変わってしまったのです(そしてこの剣で切られた者は……、ベゼロインで戦ったあのウルファの仲間たちのように、やみにとらわれてしまうのです)。

「ムンドベルクさん。」

アーズスが、にこやかな顔をしていました。

「その子の持つてる、その剣。ぼくは、それがほしいんだ。ぼくのところに、持つてきてよ。その子は、やつつけちやつてかまわないから。」

「……はい、アーザスさま……」アーザスの言葉に、ムンドベルクがはじめて口をひらきました。その声は、心を持たない、つめたいくりもののような声でした。

そのとき。ロビーのうでの中で、ソシーがひとこと、つぶやいたのです。

「ロビーさま……」

荒い息使いをしながら、ふりしほるような声でつぶやかれた、自分の名まえ……。ソシーの声は、ほんとうに、心を持った人の言葉そのものでした。

人形であるはずなのに、人と同じ心を持ったソシー。そして人であるはずなのに、つめたく心を持たないそんざいとなってしまったムンドベルク……。ロビーはソシーのことを、ぎゅつとだきしめました。そしてロビーはソシーのことを、戦いできずつくことがないように、この広間の安全なすみの床に、そつと寝かせたのです。ロビーはソシーの上に、自分のあたたかいマントをかぶせてあげました。

「待つてね、ソシー。」ロビーはしゃがみこんで、ソシーの手を取っていいました。「すぐに、もどつてくるよ。」

そしてロビーは、その手に女神のつるぎアストラル・ブレードをにぎりしめ、みずからそのさいごの運命の中へとむかって、ふみ出していったのです。

ぶきみにかがやく、赤いキューブのその前。今まさにそこで、父と子の、ひげきの運命の戦いがはじまろうとしていました。いっぼうの手には、光りかがやくせいなる剣。いっぼうの手には、黒いエネルギーにおおわれた、よこしまなるつるぎ……。

ロビーがその手ににぎられたせいなる剣を、ゆつくりとかまえました。

「お父さん。今、ぼくが、あなたを助けます。」

ロビーはそういって、腰をひくく落としました（これはここにくる前のこと、イープリープで、リズに教えてもらったことでした。しれんの間で、ブリキのうさぎのたいぐんと戦ったときのことです）。

しかしロビーの目の前にいるその相手は、そんなロビーのことを、はるかに上まわる力を持っていたのです。

ムンドベルクがいつしゆん、その身をひるがえしたかと思うと……。

ふうんっ！ 黒きやいばがすさまじいはやさで、ロビーにおそいかかりました！ ロビーには剣でむかえうつ、そのひまもありませんでした。なんとかそのやいばをかわしましたが、そのはずみでロビーはからだのバランスをくずし、そのまま床の上にはたん！ あおむけにころがってしまったのです。

あわてて、大急ぎで立ち上がるロビー。ロビーはもういちど、自身のその剣をかまえました。相手は剣をかまえたまま、身動きひとつしません。たおれたロビーにそのままとどめをさそうと思えば、できたはずでした。ロビーのひたいには、あせがにじんできました。

ですがロビーは、立ちどまることはしませんでした。どんなに力のある相手であろうとも、どんなに戦いたくない相手であろうとも、今は剣をかまえて、むかつていかなければならないときなのです。

ロビーは大きく息をついて、気持ちをおちつかせました。まよっている場合などではありませんでした。わずかでもすきを見せれば、こんどこそ、ロビーは助からないでしょう。ロビーは手にしたそのせいなる剣に、すべての感かくを集中させました。お願います。ぼくに力を与えてください。ロビーはしぜんと、剣にそうよびかけていました。

ふたたび、ムンドベルクの剣がふりおろされます！ しかしロビーはこんどはしつかりと、そのやいばを受けとめました。気持ちをおちつかせたぶん、相手の動きがぼんやりとですが、わかるようになったのです（これは剣が相手のやみのエネルギーのを感じ取って、その動きをロビーに伝えているためでした）。

きん！ きん！ がきん！

広間の中にひびき渡る、剣と剣のぶつかりあう音。黒きやいばがロビーの剣にぶつかるたびに、そこからじやあくなるやみのエネルギーが吹き出して、ロビーのことをつみこもうとしてきます。しかしロビーがそのせいなる剣をふるうたびに、その悪しきやみの力はまるでけむりをちらしたかのように、空気の中にただ立ち消えてゆくばかりでした（これはせいなる剣にこめられた、光の力によるものでした。女神の光の力は、悪しきやみをうちはらうのです）。

しだいに、ロビーの剣はムンドベルクのことをおすようになっていきました。剣のうでからいったら、ムンドベルクの方がロビーよりも、はるかに力は上です。しかしやみにとらわれている今のムンドベルクにとって、ロビーの持つこの光の剣のやいばのかがやきは、みずからのその動きをにぶらせるのにじゅうぶんなものでした。

ムンドベルクがじりじりと、あとずさりをしていきます。その顔にはあきらかに、くつうの表じようがあらわれていました。もともとはみずからがだいに守り受けついできた、せいなる剣。その剣の力を前にして、ムンドベルクのそのやみにつつまれた心の中に、なにかが生まれはじめているかのようでした。

ロビーはそのすきを見のがしませんでした。剣のあつかいになれていないロビーでしたが、それでも持てるかぎりの力とわざをつくして、ムンドベルクのことを追い立てていったのです。

勝てる……！　そしてロビーがそう思って、ふるう剣のやいばにさらなる力をこめようとした、そのとき。思いもよらないべつの力が、ロビーのその思いをうちくたくこととなりました。

ばりばりばりばり！

とつぜんひびき渡った、大きな音！　そしてつぎのしゅんかん。

ロビーが見たものは、ムンドベルクのその赤いはずまをまとった、黒のやいばの影だったのです。

「うわああああっ！」

剣から放たれた赤いはずまが、ロビーのことをうちすえ、そのからだをつつみこみました！　そのいりよくは、おそろしいほどのものでした。ロビーはそのまま、広間のかべまで、いつきに吹き飛ばされてしまったのです。

「がはっ！」

広間のかべに、背中をしたたかにうちつけるロビー。ロビーはそのまま、そこから床

まで、十五フィートほど落ちていきました。

地面にはいつくばって、ごほごほとせきこむロビー。その口からは、血がにじみ出ております。そしてロビーのからだからは、赤いはずまのエネルギーが、まだばちばちと音を立てて、ぶきみな赤いけむりを上げていました。

アーザスの赤いキューブ……。ロビーのことをうちすえたムンドベルクの剣にやどった赤いはずまは、その赤いキューブから飛び出した、よこしまなるいはずまでした。そしてそのいはずまを生み出したのは、いうまでもありません。アーザスです。アーザスはキューブから生み出したいはずまをムンドベルクの剣にやどらせて、その剣で、ロビーのことをおそわせました。なんてひどいことを！

「やっつけたかな？」

アーザスが赤いキューブの影から、こつこつとくつ音を立てながら出てきました（自分分はキューブの影で、ふたりのたいけつをずっとけんぶつしていたのです。アーザスはそうしようと思えば、いつでもロビーのことをおそうこともできました。もちろん、さきほどのいはずまをロビーにちよくせつぶつけて、おそうこともできたのです。ですがアーザスは、ロビーのじつの父であるムンドベルクにおそわせてロビーをやっつけた方が、なんばいも楽しいと思いました。ほんとうにひどい）。

「だめだなあ、もっと、楽しませてくれないと。思わずぼくが、力を貸しちゃったじゃ

んか。」アーザスはそういつてムンドベルクの背中をぼんとたたき、「ふふふ。」と笑います。

「……申しわけありません……」ムンドベルクがつぶやきました。その目は、じつと、たおれたロビーのこを見つめていました。

「まあいいや。これで、じゃま者はいなくなつたからね。」アーザスがそういつて、ふたたびこつこつと歩き出します。そのさきにあつたのは……。

アーザスはひよいとからだをかがめて、地面からあるものをひろい上げました。それは、いうまでもありません。ロビーの手からはじけ飛んだ、せいなるつるぎ、アストラル・ブレードにほかならなかつたのです。

剣を手にするアーザス。その顔は、しんにじゃあくなものになつていました。ああ、ついにおそれていたことが。剣がアーザスの手に渡つてしまつたのです！

「ふ、ふふ、ふふふ……」アーザスがひときわ、ぶきみな笑い声を上げました。その目はただまつすぐに、剣のやいばにむけられております。

「あつはつはつは！ ついに手にいれた！ ぼくの剣！ ぼくの剣だ！」

アーザスはそういつて、剣を高々とかけました。とたんに、アーザスのからだからおそろしい赤いほのおがわき起こつて、剣のこをつつみこみます。そして剣から吹き出したさらなるエネルギーが、こんどはアーザスのそのからだのこを、つつみこんで

いきました（この剣がアーザスによって見つけられたというのは、まさしくほんとうのことでした。はるかなむかし、アー克蘭ドの東のくに、ウエステインというくにに、この剣はもうひとりの女神ライブラの手によってもたらされ、そして長く失われていたのちに、アーザスによってふたたび見いだされたのです。アーザスはこの剣に、あらゆる力のかのうせいを見ました。そしてアーザスはこの剣とともに力をましていき、やがてこの剣のために、その身をほろぼすこととなったのです。そのせいなる剣が今ふたたび、アーザスに新たなる力を与えようとしていました）。

アーザスがその剣を、ぶん！ とひとふりします。すると、なんとという力なのでしよう。剣のやいばから赤いエネルギーが、びゅん！ 飛び出して、そのエネルギーが広間のかべを、まるで紙のように切りさいてしまいました！ ずずん……。切られたかべがごなごなになってくずれ落ち、床にがれきの山を生み出します（ソシーのいるところとはべつのところでしたので、よかったです）。

「きみに、この剣をあやつるなんてことが、そもそもむりなことだったんだよ。」アーザスがじゃあくな笑みを浮かべながら、たおれているロビーにむかっていいました。「この剣は、ぼくが持っているのが、いちばんふさわしいんだ。」

「う、うう……」ロビーがふりしぼるように、声を上げます。「か、かえせ……。それは、おまえが持っていては、いけないものなんだ……！」

しかしアーザスはそんなロビーのことを、鼻で笑うばかりでした。

「ふふふ。でも、まあ、きみにはおれいをいわなくちゃね。この剣を、ぼくにとどけてくれたんだから。ありがとう、ロビーくん。」アーザスはそういつて首をかしげ、にこつと笑つてみせました。

「ムンドベルクさん。」アーザスが、立ちつくすムンドベルクにむかつていいました。「もういいよ。じゃあ、あとかたづけは、お願いね。それが終わつたら、好きなどころにいつていいから。今までも、ごくろうさま。」

剣を手にいれたアーザスにとって、もはやロビーもムンドベルクも「いらぬもの」でした。アーザスにとって、かれらはほんとうに、ただのゲームのこまにすぎなかつたのです。ゲームが終わつていらなくなつたら、ぼい。まるでごみばこにまるめた紙くずをすてるかのように、アーザスは今、かれらのことを放り出そうとしていました。

今までなんどとなくおこなつてきた、アーザスのその心のないおこない。

しかしそれこそが、アーザスのその弱さだったのです。

アーザスは人の気持ちなど、まったく気にかけていません。かけらも思いやりの心を持つとうなどとは思つていませんでした（もともと持つていないかのように）。

ほんとうの強さ、それはロビーがイーフリープで、精霊王から教えられたことです。人の持つ、ほんらいあるべきすがた。そしてそこから生まれる、ほんらいあるべき力。それはアーザスとは、まったく対しよう的な力でした。それは、人を思いやる心、人をいつくしむ心。そして今、その心こそが、さいごのこの運命のときにおいて、ロビーに大いなる力を与えることとなったのです。

「……どうしたの？」ふいにアーザスが立ちどまって、ムンドベルクの方をふりかえりました。「もういいよ、って、いったはずだけど？」

もういいよ、とは、もうロビーのことをしまつしていいよ、という意味でした。そしてそのやくめ、あとかたづけのことを、アーザスはムンドベルクにやらせようとしたのです。

しかし。

ムンドベルクは剣をにぎりしめ、立ちつくしたまま動こうとしません。今までムンドベルクは、アーザスのどんなめいれいにもしたがってきました（それこそ、ごほんのしたくから、おふろそうじまで）。ですがはじめてムンドベルクは、アーザスのめいれいをききいれなかったのです。その目をじっとロビーにむけたまま、ムンドベルクは身動きひとつしませんでした。

「なにをやっている。」アーザスが、いらついた声を上げました。こんなことは、はじめてでしたから。人が自分の思い通りに動かないこと、それがいちばんアーザスにとつて、はらの立つことだったのです。

アーザスが、ムンドベルクのそばにつかつかどやってきました。その顔は、怒りにつつまれていました。

「ぼくに、にど、同じことをいわせるな！ あいつをかたづけろ！ めいれいだ！」アーザスがおそろしい怒りとともに、ムンドベルクにめいれいしました。ですがそれでも、ムンドベルクは動こうとはしなかったのです。

ムンドベルクの中に生まれはじめていた、なにか。それはまさしく、わが子であるロビーに対する、思いでした。影のそんざいとなり、アーザスのやみの力にしはいされていてもなお、ムンドベルクのその心のおく底に眠るロビーへの思いは、かんぜんには立ち消えてはいなかったのです。

ロビーはよろよろと、そのからだを起こしました。そして自分のことを見つめるその相手、まごうことなき父であるムンドベルクにむかつて、さけんなのです。

「お父さん……！ やみの力と、戦ってください！ 自分を取りもどして！」

「……う、うう……！」ムンドベルクの顔が、くつうにゆがみました。歯をくいしばり、身をよじらせながら、ひっしに自分の中のやみの力にあらがっていたのです。ロビーの

声は、たしかに、ムンドベルクのその心にとどいていました。

「お父さん！」ふたたびよばれる、ロビーの声。それはムンドベルクのそのかたいやみのからをこじあける、すくいの声でした。

しかし、そのとき。

「おまえはもう、いらぬ。」

アーザスがそういつて、ムンドベルクのことをゆびさしました。すると……！

ばりばりばりばり！ そのゆびさきから赤いいなずまが走って、ムンドベルクのことをつつみこんだのです！

「ぐああああー！」

くるしみにあえぐ、ムンドベルク……。アーザスの怒りは、すさまじいほどのものでした。それはなみの者であればいっしゅんのうちにそのいのちを失ってもおかしくないほどの、力でした。しかしムンドベルクもまた、よういにはくらべる者のないほどの、まことのえいゆう。かつてアルマーク、アルファズレド、メリアンらとともに、このアーランドをすくう冒険の旅に出た、そのひとりだったのです。

ムンドベルクは自身のそのさいごの力までふりしぼって、赤いいなずまにあらがいました。そして！

「うおおおー！」

ムンドベルクは、アーザスにつかみかかったのです！　こんなことは、アーザスはまったくよそうすらしていませんでした。アーザスのからだはまるで小さな子どものように、ひよいと持ち上げられたのです！

「な、なにをする！　やめろ！」アーザスがさげびます。そしてつぎのしゅんかん！

ばりばりばりばり！　びしゃーん！

「うわあああつー！」

アーザスのひめいがこだましました！　ムンドベルクはアーザスのからだを、赤いキューブのおそろしいまでのエネルギーの中に、たたきつけたのです！　いくらアーザスとはいえ、生身のからだでこのキューブのエネルギーにふれては、ひとたまりもありませんでした（赤いキューブに張られたバリアーは剣の力をはねかえすものでしたが、生身のからだをはねかえすようなものではありませんでした。まさかアーザスも、自分がそこに飛びこむことになるなんて、まったく思ってもいませんでしたから）。そしてそれと同時にもうひとり、ムンドベルクもまた、赤いキューブのそのじやあくなるエネルギーのちよくげきを受けて、みずからのその身をやきこがされてしまったのです……。すべては、かくごのうえのことでした。ムンドベルクはわが身をぎせいにし

て、アーザスのことをうちたおそうとしたのです。それはわが子であるロビーのことを、助けるためでもありました。

床にたおれた、アーザスとムンドベルク。ムンドベルクは荒い息使いをして、もはや身動きひとつ取れないじょうたいでした。そしてアーザスは……？ アーザスはついに、うちたおされたのでしょうか？

しかし待っていたのは、まさに悪夢のような光景だったのです。

床にたおれたアーザス。アーザスは、はあはあと荒い息をついて、しばらくその場にたおれふしていました。しかしそれも、わずかばかりのあいだのこと。つぎのしゅんかん、アーザスのからだに、おそろべきいへんが起こったのです。

アーザスのからだからまっ黒なエネルギーがあふれ、アーザスのことをつつみこんでいきました！ そのエネルギーはアーザスのまわりをおおいつくして、そのからだをすっかり、見えなくしてしまつたのです。そして、そのやみが晴れたとき。ロビーはそこに、なんともおそろしいすがたを見ました。

それは、やみそのものでした。今やアーザスのからだは、そのじやあくなるやみの力と、かんぜんにひとつとなつてしまつたのです！ その目はまさに、悪魔のよう。ととのつた顔立ちを見るもおそろしい、魔物のような顔に変わつてしまつていました。その

赤いかみはじゃあくな力によってさか立ち、波のように動いていました。なん十年も、なん百年も、やみの世界の中にとらわれてきたアーザス。そのあいだにアーザスのすがたは、こんなにもおそろしいものへと変わってしまったのです。ふだんのアーザスはアーザスが自分の魔力によって、むかしのすがたをうつしたものでした。アーザスのほんとうのすがた、それこそが今目の前にあらわれた、このおそろしい魔物のようすがただったので。赤いキューブの力にうたれ、みずからの身にかけていた魔法の力をたもつことができなくなってしまったがために、アーザスはこのしんのすがたをあらわしました。

「よ、よくも……、よくも！」アーザスがおそろしい声を張り上げて、さげびました。「ぼくをこんな、みにくいすがたにさせたな！ ゆるさない！」

アーザスはそういつて、たおれているムンドベルクのことを、きつ！ とにらみつけました。そして……。

「みんな、おまえが悪いんだ！」アーザスがそういつて、身動きのできないムンドベルクのことを、そのやみにつつまれたけもののような足でけりつけたのです！

「よけいなまねをしてくれる！ よくもぼくに、こんなことを！」

アーザスが怒りにかられて、ムンドベルクのことをけりつづけます。

「や、やめろ！」ロビーがたえかねてさげびました。しかし、やみと一体になったアー

ザスの力は、いぜんにもまして、おそるべきものとなっていたのです。アーザスの手から、やみの力を持った黒いいなずまが飛び出して、ロビーのことをおそいました。

「うわあつー！」いなずまにうたれるロビー。ロビーにはもはや、なすすべもありませんでした。

「みんな、やっつけてやる！ だれも、ぼくのじやまができないように！ ぼくのことをばかにしたやつらに、ぼくのほんとうの力を、見せつけてやるんだ！」

アーザスがそういって、その手にロビーの剣、アストラル・ブレードをかまえました。その剣はアーザスのそのしんのやみの力が加わって、なおいつそうのこと、強力なものとなっていました。

女神の力持つ剣をにぎりしめた、アーザス。いったいどうやって、こんなおそろしい相手に立ちむかえばいいというのでしょうか？ アーザスはおはや、人ではないのです。やみの力につつまれた、おそるべきかいぶつになっていました。

「もう、終わりだよ。」

アーザスがおそろしい顔をして、いいました。その目はひたすらにつめたく、ロビーのことを見下ろしていました。

「さ（い）は（この）剣で、ぼくがちよくせつ、やっつけてあげる。」

アーザスが、ひたひたと、そのやみの両足をひきずってロビーのもとに近づいていき

ました。

そして、まさにそのとき……！

ぼんっ！

なにかが、はじける音がしたのです。それは、とても小さなものでした。ですがその力もたらしたけっかは、つぎのはるかに大きな力へとむかつて、つながっていったのです。しかしそれは同時に、ひとつのざんこくなじじつをも、生み出すこととなりました。

広間のはしからひとすじのエネルギーが、アーザスにむけて放たれたのです。それはあざやかなオレンジの色をした、かがやくいのちのエネルギーのいかずちでした。ですがそんなエネルギーが、いったいどこから……？

からーん！

そのエネルギーのいかずちは、剣を持つアーザスのその右手をつらぬきました。はずみで剣は空中にまい上がり、そのまま広間の床に落ちて音を立て、その上をすべってきます。とつぜん、思いもよらないこうげきを受けたアーザス。アーザスはさいしょ、なにが起こったのか？ わかりませんでした。しかしつぎのしゅんかんには、アーザス

はそのすべてをりかいしたのです。おそろしい怒りの感じようが、アーザスの心の中にあらしの雲のようにわき起こっていききました。

「おまえ……」

アーザスがエネルギーの放たれたその場所に、怒りのまなざしをむけました。そこに横たわっていたのは……。

「ソシー……」ロビーがよろよろと起き上がって、さげびました。そう、アーザスにむかつてそのさいごのいのちのエネルギーを放ったのは、まさしく消えゆくいのちのともしびにつつまれた、ソシーだったのです。

「アーザス、さま……」とぎれそうな声で、ソシーがけんめいにアーザスにいいました。

「もう、やめてください……。こんなことは、やめて……。ロビーさまを助けて……」ソシーのそのかた方の目のあつた場所には、黒くぼつかりとしたあながあいていました。ソシーはここから、その持てるかぎりのいのちのエネルギーを放って、ロビーのことを助けようとしたのです。ロビーさまの足手まといにばかり、なつてはいられない。わたしにできることをしなくては……。ソシーはたとえ自分のいのちとひきかえにしても、アーザスに心をいれかえさせ、ロビーのことを助けたいと思いました。

なんとというひげきなんでしょう。ソシーの中に残った、消えゆくいのちのエネルギー。そのエネルギーをソシーは全部、使いきったのです。アーザスのために、ロビー

のために。それが意味することは、ただひとつでした。

ソシーは静かに、もうひとつのその目をとじました。そして……。

ソシーのそのこはくでできた作りもののひとみが、ふたたびひらくことはなかったのです。

「ソシーー！」ロビーがさげびました。ロビーはすべてをりかいました。ソシーがそのさいこのいのちをもやして、自分のことを助けてくれたのだということ……。

「そんな……、そんな！」ロビーの目に、大きななみだのつぶがあふれ出しました。しかし、ソシーのそのいのちのかぎりをつくした思いも、アーザスの心にはとどくことはなかったのです。

「よくも……！　よくも、こんなことを！　この、できそこないめー！」

アーザスの手から、黒いいなずまが飛び出しました！　そしてそのいなずまは……、なんてことを！　ひとみをとじたソシーのそのからだを、ようしやなくうちすえたのです！　もうソシーは、なにもできないのに！　そのさいこのいのちまで、使い果たしたというのに！　もはやソシーはひめいを上げることもなく、黒いかずちのほのおに、ただこがされていくばかりでした。

「おまえは、ぼくが作ってやったんだ！　そのおんを、忘れやがってー！」

アーザスが、怒りのこもった言葉をソシーにあびせました。アーザスはまったく、れいせいなじょうたいではありませんでした。怒りにわれも忘れて、ソシーのことをのしりつづけていました。

そのとき！

ぶおおん！ ばああーっ！

とつぜん！ この広間全体を、目もくらむほどの光がつつみこんだのです！ 怒りにわれを忘れていたアーザスは、とつぜんの光にひめいを上げて、その目を両手でおおいました。いったい、なにごとが起こったのでしょうか？

広間をてらす、まばゆいばかりの青白い光。そしてこの光は、みなさんがいぜんセイレン大橋の上で見たあのときの光と、まったく同じものだったのです。そう、デイルバグに乗った黒騎士のことをつらぬいた、あのせいなる光と……。

光はやがて、ゆっくりとおさまっていききました。そしてその静かなかがやきの中、せいなる光にその全身をつつまれて、ロビーが立っていたのです。その手に、女神のつるぎ、アストラル・ブレードのことをにぎりしめて……。

「ゆるせない……」ロビーが小さく、つぶやきました。その目はまっすぐに、アーザス

にむけられていました。

「おまえだけは、ゆるせない！ おまえはぼくが、この手でたおす！」

ロビーがゆつくりと、アーザスに近づいていきます。にぎりしめたその剣からは、とてもないほどの力があふれ出ていました。

「だまれ！ 死にぞこないの、負け犬め！」アーザスがさげびました。その手からはまっ黒なやみのエネルギーが、おそろしいうずをまいて吹き出していました。

「もういちど、その剣をうばいかえしてやる！」

アーザスの手から、黒いいなずまが飛び出します！ そのいなずまはこれまでにないほどの、いちばんのおそろしい力をひめたやみの力のいなずまでした。

ですが！

ばりばりばりばり！ ばしゅうう！

黒のいなずまはロビーのその剣のやいばにぶつかり、そしてそのまま、まるで水がじょうはつするみたいに、空気の中に消えていつてしまったのです！

「そんな！」アーザスの顔に、おどろきの表じょうが走りました。「どうして！ その剣は、ぼくの剣だぞ！ ぼくの力をはねかえすなんてことが！」

アーザスがそういって、もういちど、こんどはやみのエネルギーの矢を作り出して、ロビーに雨あられのようにあびせかけました。

しかし！ ぼしゅう！ しゅう！ しゅうう！ その矢はことごとく、ロビーの剣の前に消えていってしまつたのです。

「そ、そんな……、うそだ……」

アーザスの顔が、ぜつぼうの色につつまれました。今までぜつたいなまでの力を追いもとめ、その力をもつて、すべてをしはいしてきたアーザス。そのアーザスの力を、かつて自分の力であつたはずの剣が、受けいれずにはねかえしていたのです。

「キューブ………！ ぼくにはまだ、キューブがあるんだ！」

アーザスがそういって赤いキューブのもとにかけより、その力をあやつつて、ロビーのことをおそおうとしました。しかし、またしても。

ふいいん！ しゅううう！ キューブの力は、アーザスのそのよびかけにも、こたえようとはしなかつたのです。キューブからあふれるそのじやあくなるエネルギーは、ただうずをまいて、ロビーの持つその剣の力の中にすいこまれてゆくばかりでした。

今や剣はかんぜんに、ロビーのその大いなる力とひとつになっていました。ロビーはアストラル・ブレードの力をひき出すそのアーケランドをすくうきゆうせいしゆたる力を、ここにかんぜんに目ざめさせたのです。みんなのたくさんの、思いとともに。ソシーのとうとき、思いとともに……（剣のしんの力と、ひとつとなつたロビー。そのため剣は、ロビーの持つせいなる力がいひの悪しき者の力などにこたえることなく、アーザスのそのやみの力をはねかえしたのです。そして剣の持つせいなる宝玉の力は、そのしんの力がかいほうされたときここにいたって、おそろしいほどの力をひめた赤いキューブの力をも、かんぜんにふうじこめることとなりました。そのためアーザスが自分で作つた赤いキューブさえも、アーザスのよびかけにこたえることはなかつたのです）。

ムンドベルク、そしてソシー。ふたりの思いが、さいごに、ロビーの持つそのしんの力を目ざめさせました。そして……、このロビーのことを思う気持ち、人からたいせつに思われるその心こそが、イーフリープで精霊王が去りぎわにいつていた、「剣に力を与えるための、そのさいごの力」だったので（この力はアーザスとのさいごのけつちやくのぶたいである、このときこの場所において、かいほうされなければならぬもの）でした。人からたいせつに思われる心。自分のことをささえ、助けたいと思つてくれる

心。それらはロビーはすでに、これまでの冒険の中でもささずかっできました。ロビーのことをささえる、たくさんの人たち。そして、リズ、マリエル、ベルグエルム、フェリアル、ライアン、そのかれらの思いです。ですが剣のそのしんの力をひき出すためには、さいごのこのときにおいて、そのことをりかいする必要があります。そのことをロビーに教え、さいだいの力としてささずけてくれたのが、ムンドベルクとソシーの、ふたりの思いだったのです。

だれかのために力をつくしたいという、ロビーの強き思いと、ロビーのために力をつくしたいという、みんなの強き思い。その思いが、ともにあわさったとき。女神のつるぎアストラル・ブレードは、そのさいだいの力をはつきすることになりました。それは自分のことしか考えていないアーザスには、ぜったいに得ることのできない力でした（ソシーからの思いも、アーザスにはとどいておりませんでしたから）。

もはや同じく剣の力を持つアーザスにさえも、みんなの思いによってつまれたこの剣の力を、とめることなどはできませんでした。アーザスに、かけていたもの。それはだれかのことを思いやる、心でした。自分のことを思いやつてくれる、たいせつな人たちからの心でした。

そして。

いちばん信じていた、自分の剣。自分の作った赤いキューブ。だれよりもいちばん信じていたはずの、それらの力。

アーザスは、信じていたその「力」にまでも、見放されたのです。

アーザスのそのさいごのよりどころが、失われたしゅんかんでした。

今やアーザスは、ただひとりでした。かれのことをささえ、助けてくれる者は、もうだれも残ってはいませんでした。しはいしていたはずのムンドベルクも、なんでもいうことをきくはずのソシーも、いちばんしんらいしていた、力にさえも……。

そして人はただひとりになったとき、もはやなにをなすこともできないのです。アーザスのその弱さが、かんぜんにかたちとなってあらわれたときでした。

「アーザス……」

ロビーがアーザスに近づいていきます。その目はかたく、けついにみちたものでした。

「これが、おまえの弱さなんだ。人は、ひとりでは、なにもできない。みんながいてくれるから、たいせつな人たちがいてくれるから、人は、なんばいも、なん十ばいも強くなれる。」

ロビーがアストラル・ブレードをふりかざしました！

「みんなの思いを、あわせることができる。それこそが、人の、ほんとうの強さなんだ！」

「や、やめろ！ やめろ！ うわあああ！」

ぶおん！ ばしゅううう！

アーザスのそのやみのからだだが、アストラル・ブレードによってまっぶたつに切りさかれました！ その悪しきやみのからだのあいだから、ものすごいきおいで、やみのエネルギーが飛び出していきます。それは今までなん百年とためこんできた、アーザスの悪の力のみなもとでした。そして、それと同時に……。

びきっ！ びき！ びききっ！

広間のまん中にあつた、赤いキューブ。その石の表めん、いくつものひびが走っていきました。そしてつぎのしゅんかん！

ばりーん！

アーザスの作り上げたよこしまなる赤いキューブは、かんぜんになごこなになつて、地面に落ちていったのです！そしてそれはあつというまに、しゅうしゅうと赤いけむりを上げて、空気の中に消えていってしまいました。

アーザスのその悪しきやみの力が失われたことで、赤いキューブもまた、そのよこしまなるやみの力を失ったのです。アークランドをおびやかすアーザスのやみの力のきょういは、こうしてここに、かんぜんに消え去りました。

アーザスのからだから、どんどんとやみのエネルギーが吹き出していきました。そしてそのさいごの残りまで、すっかり出しきったとき。そこにはただ、ひとりの人間がたおれているばかりだったのです。その顔からは、もうすっかり、やみのけはいは消えていました。それはむかしむかしにウイステインというくにに住んでいた、ひとりのあどけない少年のすがたでした。

悪の大魔法使いアーザスは、むかしのままの、アーザス・レンルーにもどつたのです。きゆうていまじゆうつしにあこがれる、夢多き見ならいまじゆうつしだった、そのころに

……。

消えてゆく、そのいしきの中。アーザスはむかしのきおくを取りもどしていました。今までのアーザスはただただやみの力にしはいされ、みずからの心をねじまげられてしまっていた、かわいそうなそんざいであっただけなのです。アーザスはすぐに、自分の身に起こったことをりかいました。長い長い悪夢から、ようやく目ざめたような思いでした（アストラル・ブレードによつて切りさかれたのは、アーザスのその悪しきやみの部分だけでした。その中に眠っていたアーザスほんらいのからだは、きずつくことなく、ここにかいほうされたのです）。

ほんとうの自分を取りもどしたアーザス。その胸の中には今、ひとりの友のすがたが思い起こされていました。それはかつてアーザスとともに多くの夢を追いかけていた、たいせつなたいせつなその人のすがたでした。

テルベル・ラインハット。かれは剣のしゆぎようにはげむ、ひとりの夢見るウルファの少年でした。そしてこのテルベルこそが、のちにレドンホールというくにをきずき上げることになるのです。テルベル・ラインハットは、げんざいのレドンホールの王、ムンドベルク・アルエンス・ラインハットの、そのごせんぞでした（つまりロビーのごせんぞでもありました。そして……、いぜん女神のつるぎアストラル・ブレードのことをレドンホールの石の中にふうじることとなつた人物のことについて、わたしがみなさん

にお伝えしたことがありますが、その人物こそほかでもありません。このテルベルだったのです。アーザスの持っていた剣をかなしみのうちにふうじることとなった、テルベル・ラインハット。かれのその深い心のうちがわは、遠いアーザスのむかしの物語の中において、ともに語られることになるでしょう。

つめたい石の床の上、アーザスの心の中には今、さまざまな思いがあふれかえっていました。もはやもどることもできない、遠い遠いむかしの思いで……。たいせつな友は、もう、この世にはいないのですから……。

「ごめんね、テルくん……」

遠き、友へ。思いをつぶやくアーザスの目には、大きななみだのつぶがあふれていました。

30、つづくみらいへ

はるかなむかし、みどりの草のたなびく美しい土地がありました。そこにはわたしたちの見たこともない木々がしげり、ふしぎな実がえだいっばいにみのり、きおんは一年を通しておだやかで、夏があつすぎることも、冬が寒すぎることもありませんでした。

大地は気まえよく、さくもつのみのりをささずけてくれました。西のはまに広がる海は、魚や貝や海草などを、必要なだけ人々に与えてくれました。

まことにこの土地は、人々の考えるりそうきよう、そのままでした。すぎることもなく、たりないこともない。ささやかなそののぞみを、なに不自由なく住人たちに与えてくれる場所。それを人は、りそうきようとよぶのです。

生きものたちはさそわれるがままに、この土地に集まり、暮らしはじめました。たくさん人間たち、そして動物の種族の者たち、さらには精霊やもつとふしぎな生きものたちまでもが、この土地にひかれてやってきたのです。たくさんのがおこされ、まちが生まれました。たくさん新しいぶんかやわざが、生み出されていきました。そしてれきしが、きずかれていきました。

それにともなつて、さいがいやわざわいもすくなくなからず起こりました。ですがそんな

ことが起こるたびに、人々はともに力をあわせ、それらのこんなんを乗り越えてきたのです。

長いねん月をへて、たくさんの住人たちがあらわれるようになって、その土地の美しさはいぜん変わらないままでした。空気はすがすがしいままでした。水はきよらかなままでした。海も山も、むかしと変わらず、いだいなるそのしぜんのままのすがたをほこりつづけていたのです。

そしてじだいはうつり、今このとき。

その土地に、新たなるきよういがおおいかかりました。

ですが人々はふたたび、このこんなんを乗り越えてゆくのでしょうか。そしてこの美しいしぜんのままの世界を、守りぬいてゆくのでしょうか。

みずからのきずいてきたれきしに、新たないちページをきざんでゆくのでしょうか。

そこに住む者たちによって手が加えられ、新しいものが作り出され、さらにゆたかになつていく。世界とは、そういうものなのです。人が作つていくものなのです。どんなわざわいやこんなんがおとずれようとも、それは新たなれきしとなつて、人々の心に伝

えられていくことでしよう。そしてその心はまた、のちの世の人々にひきつがれ、つぎのこんなんに対しての大きい力となるのです。

そして今、新たなるこんなんが、人々のその目の前につきつけられていました。せまりくる、黒の力。それに立ちむかってゆく、人々の物語。それがこの物語なのです。

この土地の名まえは、アークランド。この物語は、そのアークランドの人々の新たなれきしのいちページをつづる、戦いの物語なのです。アークランドの物語なのです。

そしてそのアークランドに住む、ひとりのおおかみの少年、ロビーの物語なのです。

それぞれの物語は今、さいごのけつまつのときをむかえようとしているところでした。

白と黒、ふたつの王国の戦いに、ついにまくがおろされるときがやってきました。ともにいだいなる力を持った、ふたりのえいゆうたち。かれらの戦いは、このアークランドをかけた戦いでした。おたがいの生き方、ほこり、せいぎをかけた戦いでした。エリル・シャンディーンの戦いの場の、はるかな上空。そこにかれらのすがたはありました。おそろしいもも色りゆうの、その背中の上。今かれらはそこで、このアークランドのみらいをきめる、さいごのけつまつせんをくり広げていたのです。そしてその戦いはもはや、

けつちやくのときをむかえようとしていました。白きえいゆうの、はいぼくというかたちによって……。

しかし、アークランドのмираいはそのしゆんかん、大きく変わっていくこととなるのです。アルファズレドがりゆうの背にしがみつくアルマークに、そのさいごの剣をふりおろそうかという、まさにそのとき。運命の女神の力は、そのさいごのさいごで、白き勢力のせいぎにほほ笑みかけました。

アーザスのそのよこしまなるやみの力のきよういが消え去ったとき、同時にこのアークランドに、かつてのかがやきを取りもどされたのです。そのかがやきとは……。

ふおおおんっ！ ばあああーっ！

あたりをつつみこむ、青と白の、目もくらむほどの光、光、光！ それはまったくつぜんにおとずれました。今やエリル・シャンデーインの王城は、そのすみずみまで、その光の中に飲みこまれてしまっていました。広がるまちなみ、家々のやね、通り、水、空に浮く小島、すべてが、その青白い光の中につつみこまれていきました。

まちの人々はさいしょ、あまりにもとつぜんのことに、わけもわからず、みな手をか

ざして空を見上げるばかりでした。しかし人々がその光のしようたいに気がつくまでには、長い時間はかからなかったのです。すぐに人々の心に、かつてのきぼうが生まれはじめていきました。その光はまさしく、このアーケランドのきぼうの光、そのものだったのです。

みなはとなりの者と手を取りあい、ぴよんぴよんとびはねながら、からだ中でそのよろこびの心をあらわにしていました。そして、人々が口ぐちにさげんだ言葉。それはみな、つぎのようなひとつの言葉ばかりだったのです。

「宝玉だ！ 宝玉だ！ 青き宝玉の光が、よみがえった！」

まさしくその言葉の通り、その目もくらむような光は、エリル・シャンティーンの世界、そのてっぺんから放たれていたのです！ そこにあつたもの、それはまさしく、このアーケランドのきぼうの力、青き宝玉にほかなりませんでした。

ロビーの戦いによって取りもどされた、力のバランス。アーザスの赤いキューブがはいされた今、青き宝玉はついに、そのほんらいの力を取りもどすことになったのです。おさえこまれていたその力を、いつきにはき出すようなかたちとなって。

宝玉のかがやきははじけんばかりのエネルギーの波となって、この土地のすみずみま

でをてらし上げていきました。空も、山も、みずうみも、河も。まさに今、レドンホルのその古きいい伝えの言葉の通り、このアーランドに光がもどったのです！

そして宝玉の光がよみがえった今、ひとつの力強きエネルギーが、同時にそこから飛び出しました。それはロビーの持つ剣から生まれた、あの青白い光のいかずちのエネルギー、そのものでした。ロビーの、みんなを助けたいと願う強い思い。その思いにこたえて、剣から生み出された光の力が、まさに今、エリル・シャンディーンとその青き宝玉の中から飛び出したのです。

エリル・シャンディーンにせまりくる、そのさいだいの敵をうちほろぼさんがために。

「この光は……う？」

とつぜんその身にふりそそがれた、まばゆい光。アルファズレドはふり上げたつるぎを持つ手をとめて、かなたの空を見やりました。そこにはベーカーランドのみやこ、エリル・シャンディーンの王城がありました。そしてそのてっぺんから、この光はふりそそいでいたのです。

「青き宝玉……」

つぎのしゅんかん、アルファズレドはすべてをりかいました。宝玉の守り、その守りを持つベーカーランドには、いかに強力な軍勢を持つアルファズレドとて、今までよ

ういにはせめこむことはできませんでした。なにがなんでも、どんなぎせいをはらつても、ベーカーランドをうちほろぼさねばならない。アルファズレドはそうして、悪の魔法使いアーザスと手をむすんだのです。アーザスはワットののために、ベーカーランドの青き宝玉の力を弱めることをやくそくしました。それが赤いキューブというかたちとなつて、あらわれることとなつたのです(しかしアーザスのほんとうのもくてきは、このアークランドをほろぼし、自分ひとりの手の中だけにおさめてしまうことでした。ワットのためというのは、あくまでも、おもてむきのことだったのです)。

アルファズレドにとつて、もはやアーザスのしんのねらいなどは、どうでもいいことでした。アーザスがそのじゃあくなもくてきのためにワットのくにの力をりようしようとしているということも、アルファズレドにはすくなからずわかつていました。ですがアルファズレドはあえて、アーザスのそのさそいに乗つたのです。すべてはベーカーランドを、アルマークのことをうちたおす、そのひとつのために……。

アーザスの力によって弱められた、青き宝玉の力。その力が今ふたたびもとにもどされたのだということ、アルファズレドはこのときりかいました。赤いキューブがかいされたということ、そしてアーザスがもはや、うちたおされたのだということも。

しかしそれでもなお、アルファズレドの心はゆれることはありませんでした。このままおのれの運命にまくをおろすことになろうとも、さいごにそのけつちやくを、この手

でつけないければならない。それはまさに、今このときだけなのだ。

アルファズレドが、剣をにぎったその手にふたたび力をこめました。しかし、まさにそのしゅんかん！

「ごおおおおお！ ぼぼんっ！」

すさまじいまでの、エネルギーの波動！ その力はまさに、はるかエリル・シヤンディーンのいただきにある青き宝玉から、まっしぐらに、この場所へとむけて放たれたのです！

「ぐ………！ ぐわあああー！」

アルファズレドのさけび声が、この場にひびきました。なにが起こったのか？ アルファズレドにはりかいすることができませんでした。とつぜん、あたりをつつむ青白い光が急にその大きさをましたかと思うと、足もとのりゅうの背が、大きくかたむいたのです。りゅうの背の上をすべり落ちてゆく、アルファズレド。もはやこの場にそのからだをとどめておくことは、ふかのうでした。

もも色りゆうドルーヴは、青き宝玉から放たれたすさまじいまでの光のエネルギーに、その身をつらぬかれたのです！ ドルーヴはひと声、おそろしいだんまつまのさげび声を上げて、そのままはるかな地上へとむかつて落ちていきました。かつてこのアーランドのへいわをおびやかした、赤りゆう。その赤りゆうの子、ドルーヴは、ここに女神の青き宝玉の力の前に、うちほろぼされたのです。宝玉の力は、すべてのアーランドのぜんなる人々の力。ドルーヴは人々の、そのぜんなる力の前にやぶれ去りました。

しかしその背に乗ったふたりのえいゆうたちの運命は、いまだけつちやくをむかえていないままでした。りゆうの背になんとかしがみついていたアルマークは、ああ、なんてこと！ ふりはらわれ、そのままこの空の中へと放り出されていってしまいました……。そしてアルファズレドもまた、同じ運命をむかえることとなったのです。

アルファズレドのからだはりゆうの背中からふり落とされ、そのまままっさかさまに、はるかな地上へとむかつて落ちていきました。もはや、どうすることもできませんでした。落ちてゆくその中、アルファズレドの頭の中には、かつてのたくさんの思いでたちがよみがえっていました。小さかったあのころ、ともにひみつの草原の上で、夢を

語りあつたふたり。ともに冒険の旅に出て、ともに同じ道を歩んできたはずのふたり。いつからなのでしょう？ そのふたりの思いが、おたがいに、べつべつのところへとむかつていつてしまったのは……。

おれは、まちがっていたのか……？

うすれてゆくいしきの中、アルファズレドは静かに思いました。しかしもう、どうすることもできなかつたのです。あとほんのすこしのちには、自分のいのちは、この世界から消え去ってしまうのですから。アルマークのいる、この世界から……。

アルマーク……。アルファズレドはさいごに、思いました。

これが、おれたちの運命なのかもしれんな……。

アルファズレドはそうして、みずからのそのさいごの運命の中に、その身をゆだねたのです。

「さうばだ……。アルマーク……」

アルファズレドは消えゆくような声で、そうささやいていました。

そのとき……。

ばさっ……！ ばさっ！ ばさっ！

かなたから、つばさのはばたく音がきこえてきました！ これは……！ この音は……！

そう、それはまさしく、アルマークの乗るあのユニコーンのつの持つペガサス、クリーブのつばさのはばたきの音だったのです！

「アルファア！」

その背からひびき渡る、ひとりの人物の声。それはまさしく、アルマークのものでした！ そうです、アルマークのその身がりゆうの背から投げ出された、そのあと。かなたの空からその主人のもとへと、かけつけた者がありました。それこそが、このクリーブだったのです！ アルマークはとっさに、そのクリーブのからだにしがみつきました。そしてその背になんとかまたがることできると、そのまままっしぐらに、アル

ファズレドのもとへとむかっていったのです。

友を助ける。そのひとつのために……。

「アルファア！ つかまれ！」

アルマークの声が、ふたたびこの空中中にひびき渡りました。のばすうでのさきには、落ちてゆくアルファズレドのそのすがたがありました。アルファズレドはその声にひかれて、ゆっくりとそのひとみをひらきます。アルファズレドはそこに、アルマークのまぼろしを見ているのだと思いました。さいごのさいごで、かつての友のすがたを、そこに見たのだと。

しかしそれがまぼろしではないとわかったとき、アルファズレドは目を見ひらいて、アルマークのそのすがたをくいいるように見つめたのです。なぜ……、なぜアルマークが、おれを……。

「アルファア！」

アルマークのその手のさきが、アルファズレドのその手にふれました。アルファズレドはゆっくりと、自分のその手をアルマークにさしむけます。なぜなのでしょうか？

アルファズレドは自分でも、わかりませんでした。しかしこのとき、アルファズレドは

ただ自分の心のみちびかれるがままに、友のその手を取ったのです。

がしっ!

アルマークは空中で、アルファズレドのその手をしつかりとにぎりしめました。そしてそのままクリーブのからだをアルファズレドによせると、かれのからだをしつかりとだきかかえて、ペガサスのその背の上へとはこびいれたのです。

ペガサスの背の上で、ふたたびあいまみえるふたり。アルファズレドは、はあはあと荒い息をついて、そのまま下をむいていました。しばらくは、なにもいうことができませんでした。

そしてそれから、ときがすぎて。

「なんのつもりだ? アルマーク……」アルファズレドが下をむいたまま、うしろにいるアルマークにいました。

「おれは、おまえを殺そうとした。すべてののけつちやくをつけるつもりだった。それなのに……、なぜ、おまえはおれを助ける……?」

その言葉に、アルマークは静かにほほ笑むと、友のその背にむかつていいました。

「なぜかな? ただ、わたしには、きみを見ずてはできないかった。きみが、わたしの友人だからかな? 友を見ずてることが、ざんねんながら、わたしにはできないんだ。」

アルマークがアルファズレドのそのうでに、自分の手を重ねます。

「わたしは、強くなつただろう？ きみに負けるわけにはいかないんだ。わたしはずっと、きみに追いつこうとしてきた。だから、これから、きみの背中を追わせてくれるとうれしい。きみはいつまでも、わたしのもくひょうなんだ。」

アルファズレドが、ふるえる声でいいました。

「おれは……、おれは……」

しかしアルマークはアルファズレドの手を取って、やさしくいったのです。

「むかしのわたしたちに、もどろう、アルファ。ともにきそいあい、はげましあい、強く大きくなつていけばいいんだ。ペーカーランドも、ワットも。」

アルファズレドは、なにもいえませんでした。その目には、たくさんのなみだがあふれかえっていました。

そのとき……。

ばりん！

アルファズレドの首にかかるあのりゆうの力のメダルが、音を立ててくだけちりました！ ばらばらと、そのかけらが空にちつてゆきます。それは青き宝玉の、そのせいな

る力のためでした。女神の宝玉がほんとうの力を取りもどしたとき、宝玉のそばによつた悪しき力のそんざいは、すべてその力を失うのです。宝玉の力はさいごのときこゝにきて、アルファズレドの持つその悪しきメダルの力を失わせました。アルファズレドの心が、その悪のじゅばくからとき放たれたしゅんかんでした。

つばさを持った白馬が今、エリル・シャンデーインの王城へ、青き宝玉のもとへと飛び立つてゆくところでした。その背にむかしのままの心をいだいた、ふたりのえいゆうたちのことを乗せて。

アルファズレドのそのなみだのつぶが、すぎてゆくこの空の中へと消えていきました。

すまない……、アルマーク……。

思いはアルマークの心に、たしかにとどいていました。

青き宝玉の光は、戦いの場のそのすみずみまでをもてらし上げていました。そして

ちろん、われらが白き勢力の者たち、ベルグエルムも、フェリアルも、その光の意味するところをすぐりにいかしたのです。それはまさしく、このアーケランドのきぼうをつなく、光そのものでした。

ぜつぼう的なまでの戦いをくり広げていた、ふたり。そして白き勇士たち。

あれから……。

もも色りゆうドルーヴのしゆうげきにより、白き勇士たちはかいめつ的なまでのひがいを受けていました。弱りきつていたところへ、さらなる追いうちを受けたのです。それからすぐに、アルファズレドを乗せたドルーヴはエリル・シャンデーンの王城へとむかつて飛び去っていきりましたが、仲間たちはもはや、その力のげんかいはるかにこえたじようたいになってしまっていました。

ドルーヴのそのおそろしいほのおの息によって、仲間たちの乗る馬はみなたおれ、きずつき、ちりぢりになってしまっていました。そして白き勇士たち自身も地面へと投げ出され、もはやその手に武器を取ることすら、ままならないじようたいになってしまっていたのです。そこへせまりくる、黒の軍勢の者たち……。仲間たちの目の前にあるものは、もうぜつぼう、それだけでした。

「いじうふくしろ。いのちまでは取らぬ。」

騎馬に乗った黒の軍勢のしきかんのひとり、ベルグエルムたち白き勇士たちの前に進み出て、その手に持った剣をかれらにつきつけていいました。白き勇士たちはみなすつかり、敵に取りかこまれてしまっていました。馬はもう、一頭も残つてはおりません。ベルグエルムのはい色の騎馬も、フェリアルルのゆうしゆうなる騎馬も、ドルーヴのほのおの前に追いちらされてしまつていたのです。かれらの手には、ただいっぽん、ぼろぼろになつた剣がにぎられているだけでした。

ベルグエルムにもフェリアルにも、もうこのじようきようをくつがえすしゆだんはなにも思いつくことはできませんでした（すでにかれらの人数は、いくさの勝ち負けをきめるための人数である「全体の人数の二十ぶんの一」を下まわる、そのぎりぎりのところまでへつていました。このままきせきが起こらないかぎり、かれらがその人数を下まわつてしまうことは、もはやあきらかだつたのです）。かれらにできることは、ふたつにひとつ。こうふくするか？ それともさいごまで戦つて、その運命をむかえいれるか？

ベルグエルムもフェリアルも、みなその手に持った剣をぎりぎりとにぎりしめました。その手には、血がにじんでいました。剣をふるいにふるつたがために、その手のかわは破れ、もうぼろぼろになつてしまつていたのです。それでもかれらは、剣をふるいつづけていました。

黒の軍勢の者たちが、せまってきました。さいごのけつだんをしなくてはなりません。ベルグエルムもフェリアルも、みなそのひとみをとりました。そしてふたたび目をひらいたとき、かれらの心はなおかたく、ひとつにきまっていたのです。

われらは、仲間を信じる！　そして運命を信じる！

ロビーどののために！　アークランドのために！

「うおおおおー！」

ベルグエルムもフェリアルも、みなさいごの剣をかまえて、目の前の敵たちに立ちむかっていききました！　そのあまりのいきおいには、さすがの黒の軍勢の者たちも、おそれをいadakazuにはいられませんでした。いっしゅんのうちに、黒の軍勢の兵士たちがつぎつぎとうちたおされていきます。それはまさに、白き勇士たち、かれらのさいごのせいぎの力、そのものでした。

しかし……、その力が長くつづくということとは、あり得なかつたのです。たおしてもたおしても、つぎつぎにあらわれる、新たな敵の軍勢。その戦いは、はじめからぜつぼう的でした。それははじめから、わかっていたことでした。しかしかれらは、あきらめ

ることなどはできなかつたのです。かれらがこうふくしたそのしゅんかん、ペーカーランドのはいぼくがけつていしてしまうのですから。そのあとにたとえどんなきせきが起ころうと、そのけつていがかくつがえされるといふことは、ないのです。

ここで負ければ、すべてが終わる……。かれらの思いは、ただひとつでした。それだけは、なんとしてもさけなければならぬ。どんなじょうきようであろうとも、たとえ目の前の光景に、のぞみがまつたくなかつたとしても、われらはきぼうを信じてつき進むのみ。

あきらめるわけにはいかない！

仲間を、きぼうを信じるんだ！ その強き思いが、かれらのことをただつき動かしていました。

そしてそんな、まさにそのときのこと……。かれらのその思いは、ついに天にとどいたのです。青き宝玉の、そのきぼうの光とともに……。

「なんだ！ これはいつたい、どういうことだ！」黒の軍勢のしきかんが、あわてふためいて、あたりを見渡しながらいいました。戦いの場は、いつてん、青白い光によつて、すつかりつつみこまれてしまったのです！ 黒の軍勢の者たちはみなひめいを上げて、

逃げまどうばかりでした。なにしろ宝玉の光は、かれらの身につけているよろいやかぶとやたてを、あつくやきこがし、その黒きつるぎをやきこがしましたから。

戦いの場は大こんらんとまりました。目の前にせまりきていた黒の軍勢の者たちは、そのまましきかந்தたちのしきも失つて、防具をぬぎすて、武器を放り投げて、ちりぢりになって、戦いの場のこうほうへとひき下がっていったのです。

仲間を信じるみんなの思いにより、ぎりぎりのところでつながった、ひとつのきぼう。そのきぼうをばねにして、かれらはここから、つづくさらなるきぼうへとむかつてつき進んでいきました。つづくかがやき、きぼうを信じて。

そして……。

かれらのその思いは、まさに、つづくさらなるきぼうへとつながっていったのです。運命がいちどきぼうへのかいだんをのぼりはじめたのなら、どんなときにだって、そのきぼうの光はさらなる光をもたらしてくれました。

光が光を、きぼうがきぼうを。

ひゅん！ ひゅん！ ひゅん！ ひゅん！ ひゅん！

とつぜん、戦いの場に大きな風の音がなりひびきました！ りゆうのつばさの音でも、デイルバグのつばさの音でもありません。それは今までにだれもきいたこともないような、ふしぎな風の音でした。

そしてその場にいる者たちは、みなそれを見たのです。
それはかなたの空からやってくる、巨大な空飛ぶ船たちでした！

これはいったい！ ベルグエルムもフェリアルも、みなとても信じられないといったように空を見上げていました。今やこの戦いの場の空には、数えきれないほどたくさん、巨大な羽を持った船たちがせいぞろいしていたのです！（その羽がばたばたと動いて、この船たちのことを進ませている音です。そしてさきほどのひゅんひゅんという風の音は、この羽が立っている音でした。）それらの船たちにはみな、同じもんしようがえがかれていました。それはみどり色をした、木と葉つばをあしらった、ゆうがなもんしようだったのです。

「あのもんしようは……！」ベルグエルムがおどろきの表じようを浮かべて、いいました。かれはそのもんしようのことを、よく知っていました。たびたび本の中にあらわれ

る、そのもんしよう。それは今は遠いかなたへとすがたを消してしまったという、あるひとつのいだいなる種族の者たちの、もんしようだったのです。その種族とは……？

「ネクタリアア！　ネクタリアアだ！」

そうです！　このもんしようは、はるかむかしにこのアークランドを去っていった、その伝説的なまでの植物の種族、ネクタリアアたちのもんしようでした！

「ネクタリアアの者たちが、このアークランドへともどつてきた！」

みなは剣をかかげて、いつせいによるこびの声を上げました。そしてそんなかれらの頭の上から、今かれらの味方たるネクタリアアの者たちの、きぼうの船たちがまいておりましたのです。それは白くなめらかな木でつくられた、なんとも美しい船たちでした。船のまわりは、かがやくこがね色のしんちゆうでかざられております。それらはすべて、植物をあしらったデザインになっていました。そしてまるで船そのものがいつぽんの巨大な木であるかのように、葉やくきや花や根が、そのまわりを取りまいていたのです（そしてじつさいそれらのものは、ほんものの生きた植物でした。まさにこれらの船た

ちは、生きていたのです。

そしてこれらの船たちの、そのいちばんのとくちよう。それは船の上に取りつけられている、大きな白くてまるいふしぎな物体でした。それらはいっそうの船につき四つか五つついていて、ふわふわと風になびいていたのです。そしてよく見ればそのひとつひとつが、小さなわた毛の集まりであるということがわかりました。

これは……！ みなさんもたぶん、この物体のことはもうなんでも見たことがあるはずです。それは春の野原にさきほこる、小さなきいろい花のわた毛でした。そう、それは……、たんぽぽです！ これらの船の上に取りつけられているもの、それは巨大な、たんぽぽのわた毛でした！（いったいどこに、こんなものがさいているのでしょうか？）そしてその巨大なわた毛が風を受けて、これらの大きな船たちのことを、ちゆうに浮かべていたのです（そして船に取りつけられているいくつかの羽によって、これらの船たちのことを進ませていました）。ほんとうにすごい。

「どうやら、まにあつたようだ。」

今その中のいっそうの船の上から、青いかみをしたひとりの青年が顔を出していいました。かれのことは、もういうまでもないでしょう。そう、それはまさしく、青いかみを持つ美しきシルフィア種族の青年（そしてリズのお兄さん）、リストール・グラントだったのです！

ついにリストールが、みずからのときふせたネクタリアの軍勢をひきいて、この地へやってきました！ほんとうに、あやういところでした。あともうすこしくるのがおそかったなら、このアーランドのれきしは、大きく変わってしまったはずです。リストールのそんざいが、大きな意味を持つということ。そして時間がないによりもたいせつなのだということ。ノランのいつていたそれらの言葉は、まさしく正しい言葉だったのです。

(そしてもし宝玉のかがやきのもどらないうちに、かれらがこの戦いの地へやってきていたのであれば……、かれらの力は空に浮かぶ巨大なひとつのじゃあくなる力によってふうじこめられ、ばらばらに追いはらわれてしまっていたことでしょう。その空に浮かぶじゃあくなひとつの力とは？そう、ドルーヴです。宝玉の光がもどっていないければ、アルファズレドはアルマークのことをうちたおし、そして新たな敵であるネクタリアたちのわた毛の船の軍勢にむかって、そのおそろしい力をぞんぶんにはつきしていたはずでした。いかにネクタリアの大軍勢とて、巨大な悪であるドルーヴにまっこうから立ちむかつて勝つことは、とてもむりなことだったのです。空飛ぶ船たちはいこうもむなく、その上のネクタリアの者たちともどもほのおにやかれ、かじをこわされ、なすすべもなくうちたおされてしまっていたことでしょう。もも色りゆうドルーヴのそ

んざいとは、それほどに、だれもがよそうすらできないほどのおそろしいものでした（これがネクタリアでなくとも、ほかの勢力であつても、けっかは同じことでしょう。たとえ数千、一万の大軍勢であろうとも、このもも色りゆうのじやあくなる力は、かれらのことをかんとんになぎはらえてしまえました）。

ロビーが宝玉の力を取りもどしてくれただからこそ、ベルグエルムやフェリアルたちがきぼうを信じてさいごまで戦つてくれたからこそ、ネクタリア、かれらの力もまた、ここにすばらしききぼうの力となつて、光りかがやくこととなつたのです。ネクタリアの者たち、そしてリストールや、リストールのことをささえてくれたたくさんの方々。かれらのそんな思いはここにまさに、ロビーやベルグエルムやフェリアルやみんなの思いにつづく、きぼうの光となりました。それはまさしく、みんなの思いのけつしよう、人の持つほんとうの強さでした。）

リストールのそばには、三人の者たちが立っていました。そのうちのふたりは、シープロンドからリストールとともにこのわた毛船に乗つてやつてきた、レシリアとルースアンでした。かれらはこのさいごのときにあつて、わずかでも力になれることがないかと、船に乗せてもらったのです（かれらがいなかったのなら、リストールの身にワツトのおそろしい魔の手がのびていたかもしれせん。そうなつていたら、このネクタリアの軍勢も、ここにやつてくることはなかつたはずです。かれらの力はまた、まことに

このアークランドをすくう、大きな力となりました。

そしてもうひとり。リストールの横にはみどり色がかったこがね色のかみを持つ、リストールと同じくらいのおねれいの青年が立っていました。その頭の横には、大きな白いゆりの花がいちりんさいております。つまりかれは、ネクタリアの者でした。かれの名まえは、クライユルト・エルクライト。そう、リストールの、そのいちばんの友でした。

「われら、ネクタリア、花の騎士団、七千！ われらはここに、ベーカーランドのえん軍として加勢する！」

クライユルトの声が大きなこだまとなって、黒の軍勢の者たちの上にふりそそぎます（たくさんの植物のパイプの中を通って、その声なんばいにも大きくなったのです）。これをきいた黒の軍勢の者たちは、ますますあわてふためきました。

「えん軍だつて？」「きいてないぞ！」「まさか、そんな！」

えん軍、七千！ なんとというたのもしい力なのでしよう！ 花の騎士団の力はまさしく、大いなるきぼうの力だったのです。それを知っていたからこそ、ノランはかれらに、リストールに、大きなぞみをかけました。

えん軍、それはいくさの場においての、新たな力をあらわすものでした。戦いのその中で（そのくんにしよぞくしていかない）新たに戦える者たちが加わったのなら、それはえん軍として、そのくんにの兵力の中に加わることができるのです。そして……、ワットがかき集めたそうぜい六千の兵たちをすべて加えたとしても、今やベーカーランドの白き勢力の力は、それを上まわっていました。

（いぜんにもお伝えしたことがありましたが、このえん軍についてのルールとして、「そのくんにしよぞくしていかない」とからの兵力であれば、いくさにおいていつぼうの軍に新たな兵力が加わったとしても、加わったあとのごうけい人数が相手と同じ数までであれば、相手は兵士をついかすることができない」というルールがありました。さらに、「加わったあとのごうけい人数が相手の数をこえる場合、相手はそれと同数までの兵士をついかできる」というルールも。ですからこんかい、七千のえん軍を加えたベーカーランドは、さいしよの兵力の千五百四十二とあわせてごうけい八千五百四十二もの兵力となりますから、ワットは自身のそうぜい六千におよぶ軍勢をこえるぶんについては、新たな兵力をついかすることがかのうなわけです。ですけど……、そんな兵力はもうワットにも、どこにも持ちあわせてはいませんでした。ワットはこんかいの戦いにむけて、かのうなかぎりの兵力をかき集めたのです。それで六千の軍勢なのですから、ネクタリアアの七千の軍勢が、いかに強大な勢力であるのか？ おわかりでしょう。）

「えん軍！ えん軍！」

白き勇士たちのあいだに、大きなかけ声がわき起こりました。それは黒の軍勢の者たちに、自分たちの新たな兵力のことを伝えるためのものでした。

「われら、白き勢力、八千五百四十二！ げんざい、七千と、そして八十六名！」（いくさの勝ち負けがきまる人数は、はじめの兵の人数の二十ぶんの一。この人数まで兵がへつたときにその軍勢は負けとなるわけですが、もしえん軍がこなかったのなら、白き勢力のもとの兵力、千五百四十二の二十ぶんの一である七十七人（はすうは切りすてます）にたつしたときに、負けがきまつてしまつていたのです。そしてえん軍がくる前の残りの人数は、ベルグエルムとフエリアルフエリアルの部隊の、わずかに八十六人のみでした！
ほんとうに紙ひとえのところで、運命は分かれたのです。）

そして、仲間たちのそのかけ声の中……。

「ぜんかん！ かまえ！」

頭上のたんぽほのわた毛船たちのあいだから、大きな声がひびき渡りました！ その声はまさしく、このネクタリアたちのきずき上げたいだいなる花の騎士団の長、セハリ

ア・シリルロウの声でした。いつそうのわた毛船の上、そのまん中にそびえたつ、しれい塔。今そのしれい塔の上にも、もも色でふち取られた白く美しいよろいに身をつつんだ、セハリアが立つていたのです。風になびく、おうごんのかみ。そのかみの横には、白ともも色のまじった、たくさんの美しいいらんの花がさきほこつていました。そして、りんとしたそのまなざし。その手には、自身のもも色のやいばのつるぎがいつぽん、しつかりとにぎられております。そして今セハリアは、そのつるぎをふりかざして、配下のネクタリアの者たちにむかつて、しどう者たる者のカリスマあふれる声で、戦いのめいれいをくだしているところでした（なんてさまになっているんでしよう！かつこよすぎます！）。

「うてー！」

セハリアが、そのもも色のつるぎをふりおろしたしゅんかん。

しゅごごごおお！ ぼんっ！ ぼん、ぼぼんっ！

わた毛船たちの横にあいたたくさんのまるいあなから、大きな黒いものが、ぼぼんっ！ いつせいに飛び出して、そしてそれはまるで雨のように、黒の軍勢のそのまうえへ

とうちこまれていきました！ それはみなさんの世界のむかしの軍かんなどに取りつけられている、たいほうのたまのようでした。しかしそちらは、鉄のかたまり。もちろんわれらがネクタリアたちが、そんなぶつそうで「ゆうがでない」ものを、使うはずがありません。では、これらの船からふりそがれたものとは？

「うわああつ！ な、なんだー？」

黒の軍勢の兵士たちが、口々にさげび声を上げました！ そのからだには、たくさんの植物のつるがまきついております！ そんなものが、いったいどこから？ こたえはひとつでした。ネクタリアのわた毛船からは、大きな黒くてまるい、植物のたねがふりそそがれたのです！ そしてそのたねからたくさんの植物のつるがのびていつて、あたりの敵の兵士たちに、つきつきとまきついていきました（あまりののびの早さに、さいしょにつかまった兵士などは、はるか二十フィートほども空にのび上がっていつてしまつたほどでした！）。

「われら、ネクタリアのほまれ！ 今こそ、その劍に乗せて、悪をうちはらうときぞ！ リステロント！」

セハリアの力を持った美しい声が、いくさの場にひびき渡りました。そしてその声に

あわせて、わた毛船の上から、その両手にゆうがなデザインの剣を二本かまえたネクタリアの美しい兵士たちが、つぎつぎとそのすがたをあらわしていったのです（レシリアとルースアンのすがたも、その中にありました）。

「みな、つづけ！　かつての友じょうのために！　ぜんなる世界のために！」

花の騎士団のしきかん、リストールの声がひびき渡りました（リストールは騎士団のしきかんとして、この戦いをまかされていました。そしてセハリアは、その騎士団のいちばん上に立って戦いのようすを見きわめる、そうだいしようということになるのです）。そしてその声とともに。

「おおおーっ！」

ネクタリアたちの数えきれないほどたくさんのおたけびが、いちめんに広がっていききました。それからかれらは、なんともネクタリアらしい、じつにゆうがな方法をもちいて、戦いの場のそのただ中におり立っていったのです。

ずぎざぎざあーっ！　かれらのからだがあつというまに、たくさんのいちまいいちまいの葉っぱのすがたへと変わっていききました！　それはまるで、木の葉のふぶきのようでした。あちらでもこちらでも、今やこの戦いの場の空は、みどりやきいろ、赤やオレンジといった色とりどりの葉っぱで、うめつくされてしまったのです！　そしてそれから。

その葉っぱのふぶきは黒の軍勢の中へと吹きこんでいくと……、そこでふたたびより集まって、もとのネクタリアの兵士たちのすがたへともどつていききました！

もう黒の軍勢の者たちは、人間たちもかいぶつの兵士たちも、わけへだてなく大パニックでした。とつぜん葉っぱのもうふぶきが吹きつけてきたと思つたら、目の前に剣を両手にかまえた敵の兵士たちが、数えきれないほどたくさんあらわれていましたから！

「ずぎああー！　ずぎああーつ！」

ネクタリアの兵士たちがそのからだを葉っぱに変えて、流れるように敵のあいだを通りすぎていきます。そして、かれらが通りすぎたあとには……。

「うわっ！」「なにーっ！」「ぐおお！」

黒の軍勢の者たちの、数々のさけび声！　かれらの手には剣のかわりに、大きないちりの花がにぎられていました！　そしてよろいもたてもかぶとも、たくさん植物の根が張りめぐらされていて、ひびだらけ。もはや使いものにならなくなつてしまつていたのです（ネクタリアたちの戦い方は、相手をいたずらにきずつけるようなものではありません。あつというまに敵の力をうばい去つて、戦えなくしてしまふ。それがネクタリアたちの「ゆうがな」戦い方でした。うくん、かつこいい！）

そしてレシリアとルースアンのふたりも、すばらしいかつやくぶりで戦いの力に加

わっていました。風に乗ってさっそうといくさの場にあられ、手にした同じく二本の剣で、敵をばったばったとうち破つていったのです。かれらは剣も使えるんですね！
強い！

それからもちろん、リストールとかれのいちばんの友クライユルトのふたりも、ともにわたがいの背中を守りあいながら戦いの場に加わっていました。

「むかしを思い出しますね、リステロント！」

クライユルトの言葉に、思わず笑みを浮かべるリストール。かれらのすがたは、まさにむかしのままのふたり、そのものでした。その友じょうは、はなれているあいだにも、ずっと変わらず、つづいていたままだったのです。

ベルグエルムもフェリアルも仲間たちも、みな夢を見ているような気分でした。かれらのきぼうはまさに、ぜつぼうのふちからよみがえったのです。ベルグエルムもフェリアルも、仲間たちに、アーランドの女神に、ネクタリアの者たちに、そして世界をすくう光をもたらしてくれたロビーに、心からのかんしゃの気持ちをおくりました。

そして。

その心は、さらなるきぼうの力へとつづいていくことになるのです。

ぼうーっ！ ぼうーっ！

ふいに、どこからかひくい物音がひびいてきました。それはどこかできいたことのあるような、そんななじみのある音でした。いったい、この音のしようたいは？

「あ、あれは……！」それを目にした仲間のひとりが、おどろきの声を上げました。それは、いくさの場のむこう。母なる大河ティーンティーンのかなたからやってくる、たくさんの大きな影たちだったのです。

「まさか……！ うそだろ……！」

みなはとても信じられないといったようすで、わが目をうたがうばかりでした。しかし夢やまぼろしではありません。それはたしかに、そこにあらわれたのです。

「ポート・ベルメル船団！ ガランタのポート・ベルメル船団が、アークランドにやってきた！」

その言葉の通り！ まさしくそれは、西の大陸、こんごう大陸とよばれるガランタの、そのいちばんのみなどまち。ポート・ベルメルというまちからつかわされた、ぜんなる力の大部隊でした！

その大部隊はポート・ベルメル船団とよばれる、船の一団でした。西のガランタにお

いても、かれらの船団の戦力にかなう者は、ほとんどおりません。そのポート・ベルメル船団が、なんと、西の海をはるばる乗り越えて、大河ティーンティーンをさかのぼり、このいくさの場へとかけつけてきたのです。なんというすくいの船たちなのでしょう！ それにしても、いったいだれが、かれらのことをよびよせたのでしょうか？（そしてさきほどのぼうーっ！ という音は、この船たちの出す、むてきの音だったのです。むてきというのはまわりの人たちに船のそんざいをしらせるための、ふえのようなやぐわりを持つ音のことです。みなとなんかに入ったときに、耳にすることができずはらず。）

「ベーカーランドの人たちよ！ おそくなつてすまんな！」

とつぜん、かれらの船のその先頭のいつせきから、ひとりの男の人がひよっこり顔を出して、ベルグエルムたちのいる方にむかってさげびました。赤やきいろやもも色のいりまじった、どはでなかみの毛。サーカスのピエロが着ているような、色とりどりの水玉や星などのもようがはいった、どはでないでたち。こ、このかつこうは……！ まさか！

そう、こんなにもしゆみの悪い……、いえ、どはでなかつこうをしている人が、ほか

にいるはずありません！ ポート・ベルメル船団のそのすくいの船の上からあらわれたのは、まぎれもなく、あの木のけんじや、カルモトにほかならなかつたのです！（おひさしぶりです！ それにしても、どうして！）

「カルモトどの！ カルモトどのではありませんか！」

大こんらんのいくさ場の中、ベルグエルムもフェリアルもびつくりぎょうてんして、やつてきたその船のもとへとかけよつて、あらんかぎりの声でさけびました（船の先頭までは、まだ三十ヤード以上もはなれておりましたから）。

「おお！ ベルグエルムくん、フェリアルくんか！ なんとというみじかい名まえだ！ 忘れようにも忘れられんぞ！」 カルモトがさけんでかえします。

「きみたちには、たいへんにせわになった。ほんとうに、かんしやをしても、しきれないくらいだ。わたしに、アルミラとむきあう、そのきつかけを与えてくれたのだから。心かられいをいう。ありがとう！」

カルモトはそういつて、頭を地面すれすれまで下げて、ペこり！ とおじぎをしました（それと同時に、からだのどこかでぼきつ！ という木のおれる音がしましたが……）。

「今こそ、そのおんをおかえしするとき。アークランドのために、わたしも力をつくす

ぞ。あとは、わたしたちにまかせておけ。」

そうなのです、カルモトはアルミラとけつちやくをつけるためのそのきつかけを与えてくれたロビーたちにおんがえしをするために、西の大陸ガランタのポート・ベルメル船団をひきつれて、ここにえん軍として加勢してくれたというわけでした！（ポート・ベルメル船団の者たちとはカルモトは親しくつきあっていて、かれらはカルモトのいうこととなら、たいていのことはきいてくれたのです。まさか遠くアーケランドまでしゅつげきしていくことになろうとは、かれらも思っていなかったでしょうけど。）

ベーカールランドへとむかう西の道で、ぐうぜんに出会うことになった木のけんじやカルモト。ロザムンディアのまちの人々（とフェリアル）のことを助けたいというロビーのそのけつだんが、カルモトとみんなのことをひきあわせ、カルモトとのこの大きな友じょうを生むことになったのです。そしてその友じょうが今、まさにこのさいこの大いぐさの場において、これほどまでに大きな力をもたらすことになりました。

（ところで、ノランはさいしょ、とらわれのリユインの者たちのことを助けるそのしごとを、カルモトにお願いしようとしていたのです。カルモトはいぜん、ベーカールランドからほど近い、切り分け山脈のいちばん南のはしの山の中に、塔をたてて住んでおりましたから。ですがそこに送ったノランの魔法の手紙は、「あてさきふめい」でもどつてきてしまいました。カルモトはノランに伝えていたその前の住所から、かつてにひっこし

てしまっていたのです！　そしてひっこしたさをノランに伝えるのを、「うっかり」忘れていました。

そのひっこしたさがどこだか？　みなさんはもうごぞんじですよ。そう、あのうちすてられた西の土地に立つ、いっぽんの巨大な木、ルイーズの木のところ。まさかノランも、カルモトがそんなところにひっこんでいるだなんて、思ってもいませんでしたから。そのためノランはカルモトをすぐに見つけることができず、見つける時間もなく、リュインのことはかわりに、（すこしはなれた地に住んでいる）リブレストに願いましたというわけでした。

リブレストがいつてましたよね？　「ノランのやつも、やつかいなしごとをおしつけてくれるわな。」って。あの言葉は、こういうわけからだったのです。そして、つづくリブレストの言葉。「たまには、いいわい。ハウゼンくんにも、おんがえしせんとな。」あの言葉はつまり、カルモトにおんを感じているリブレストが、カルモトのかわりをつとめることで、そのおんをかえそうとしていたからの言葉でした（どんなおんがあるのかは、わかりませんけど……）。ハウゼンくんというのは、カルモトのみようじだったのです。どうりで、どこかできいたことがあると思つたはずでした。はじめてカルモトに出会つたときに、カルモトが自分の名まえを名のつていましたが、そのときわたしたちは、ハウゼンというみようじを耳にしていたのです（名まえの方は長すぎて、今でもさっぱり

きおくにありませんけど……」。

そしてもうひとつ。カルモトがガラランタにおもむいたそのもくてきは、今やすっかり果たされてしまいました。つまりカルモトのいもうとであるアルミラは、カルモトにつれられて、ヴァナントの魔法かんごくの中につながれることになったのです。今アルミラはそこで、おのれのつみをつぐなう日々を送っています。カルモトのいうことには「ほんの百年ほど」で、そのつみはあらい流されることになるだろうということでした。いつの日か、ふたたび、きょうだいが手を取りあえる日がくるといいですね！ カルモトさん。）

「見たとこ、おお！ ネクタリアの者たちも、加勢にかけてくれたか！ かれらとは、じつにひさしぶりだ！ もう、二百年になるか？ それはそうと、わたしの方も、力強い助っ人をつれてきた。ポート・ベルメルの、ポメラニンの者たちだ。かれらの力も、さうとうなものだぞ。」

ポメラニン？ それはいったい？

すると、カルモトのその声にあわせて、そのきれいなそうしよくのなされたまるっこい船から、たくさんの小さな人影が飛び出してきたのです。

「おまかせください！ 小は、大をかねる！ われら、ポメラニン、しのびの者たち！」
それはなんともちっちゃくて、かわいらしい、動物の種族の者たちでした。くりくり

とした、つぶらなひとみ。まるっこい顔。きいろや茶色のかみをうしろや上でたばねていて、身長はせいぜい、四フィートもないくらいです。かれらはみな、きいろと黒のツートンカラーの、おそろいのユニフォームを着ていました（よろいではありません）。同じデザインの半ズボンすがたで、ひじやひざこぞうには、かわでできたパットをつけております。そして半ズボンのおしりからは、小さなかわいらしいしつぽが、ぴよこんと飛び出していました。

ポメラニン、その名まえをきけば、かれらがなんの動物の種族なのか？ おわかりでしょう。そう、かれらは犬の種族。それもその名の通り、ポメラニアンの種族の者たちだったのです（どうりで見た目もかわいらしいはずです。カルモトとなぜ仲がいいのかは、ふめいですが……）。

「われら、ポート・ベルメル船団、二千！ ベーカーランドのえん軍として、加勢いたします！」

そしてその言葉につづいて……！！

「いっつけえー！」

船の中からいっせいにポメラニンの大部隊が飛び出して、かれらはそのまま、黒の軍勢のそのまった中へとつつこんでいきました！

「ごろごろ！　　ごろごろ！　　ごろごろ！　　ごろごろ！」

これは！　なんとという変わった動きなのでしよう。かれらはそのまるっこいちっちなやなからだをまんまるにまるめて、そのまま地面の上をごろごろごろごろ！　すごいはやさでころがっていったのです！（なるほど、ひじやひぎこぞうにパットがついているのも、なつとくです。地面でこすれないようにするためでした。それによろいを着ていないりゆうも、これでわかりましたね。よろいを着ていちゃ、重くてごろごろ、ころがれませんもの。）

そしてかれらは黒の軍勢の者たちのそのもとへととうちやくすると……、そのまま、どつちーん！　体あたり！（まるでボールがいきおいよくぶつかつたみたいに。）「ぐわっ！」　黒の軍勢の者たちはそのまま四ヤードほども吹き飛ばされて、地面にたおれふします。そして、そこにすかさず。

「そーれっ！　やっちまえ！」

たおれた兵士たちのひとりひとりに、それぞれ五人ずつほども！（大きなかいぶつの兵士たちに対しては、その三ばいほどの人数で）ポメラニンのしのびの者たちがわらわらとまとわりついて、その手に持ったこんぼうやら鉄のぼうやらで、たこなぐり！　敵の兵士たちはたまらず、ノックアウト。あわを吹いて、「うーん……！」のびてしまいま

した（かわいいすがたのわりには、なんてあげつない戦い方なのでしよう……。かれらにかなう者はほとんどいないというのも、うなずける気がします……。ゆうがなネクタリアたちとは、えらいちがいですね）。

今やポート・ベルメル船団の二千人のポメラニンたちの力が加わり、戦いの場においてをふるうわれらが白き勢力の兵の数は、九千人以上！　なんとというたのもしい数なのでしよう！（じつさいの兵力は、ごうけい九千のえん軍を加えた、一万五百四十二というあつかいになります）。

ちなみに、もちろん黒の軍勢の者たちのうち、はじめは戦いに加わっていません。かえの兵士たちも、いうまでもなく、もうとつくにこの戦いの場に加わっていました。まさかかれらも、自分たちがじつさいに戦いの場に加わるなどは、思ってもいなかったでしょうね。）

ネクタリアたちや、ポメラニンたち。そしてわれらが白き勇士たち。かれらはみないちがんとつて、敵の波をつぎつぎにうち破つていきました。そのせいぎのいきおいには、黒の軍勢のおそろしいかいぶつの兵士たちでさえ、おじけづき、武器を放りすてて、逃げ出していくほどだったのです。しかしわれらが白き勢力の者たちは、もはやようしやなどはしませんでした。ぜんなる力は、さらなるぜんなる力を生む。きせきの力は、このうえなお、とどまるところを知らなかったのです。

ひゆううう……。ひゅひゅうう……。

空の上からひびいてきた、とつぜんの物音。そして、つぎのしゅんかん。

ぼーん！ ぼぼん！ ぼぼぼーん！

つぎつぎとまき起こる、ばくはつの音！ いったいなにごとでしょう！

見ると、今このいくさの場の空いちめんをなにかの青白いたくさんの物体が、じゆうおうむじんに飛びまわっていました。もっとよく見ると、それらはポメラニンたちと同じくらいの大きさの、動物の種族の者たちのようでした（すくなくともそのように見えました）。そしてそのなぞの者たちが空の上からつぎつぎに、白い、なにかまるくてふわふわしたものを、下の敵たちにむかって落としつけていたのです。それがさきほどのひゆうううという物音を立てて、地面にぶつかって、ぼぼん！ 大ばくはつを起こしていたというわけでした。いったいこれは？

「ぐわっ！」「な、なんだこれは？」「う、動けない……！」

ばくはつして飛びちったその白いものをその身にあげた敵の兵士たちは、みなそういつて、身をよじらせました。見れば、さきほどの白くてまるかったものが、ねばねばとした水あめみたいなじょうたいになって、敵のからだにまとわりついていたのです！そして動けば動くほど、それは糸のようなものにかたちを変えて、敵のからだをぐるぐるとしぼりつけていきました（今ではすっかりあたりいちめん、この糸で手足をしぼられて動けなくなつた敵の兵士たちのすがたがありました。かれらはもう、なすすべもありません。まさに「手も足も出ない」じょうたいでした）。

そしてそれから……。

きいーん……！ きいいーん！

またしても空を切りさいてむかってくる、なにかの物音。そしてよく見てみれば、その音は空の上を飛びまわっていたあの青白い色をしたなぞの者たちが、その身を急こうかさせて、つぎつぎといくさの場にとつげきしていく音だつたのです！

かれらのすがた、それはなんともめずらしいものでした。白くすき通つた、かがやくようなはだ。白と青でデザインされたそでのないベストのような服を着ていて、えりも

とをむすぶひものさきからは、白くてまるいぼんぼんがふたつ、かざられております。おそろいの青い半ズボンには、雲とつばさをあしらった、なにかのものしようなようなワツペンがひとつ、くつついていました。そして手には、かれらのすがたと同じく、なんともめずらしいデザインの、青いハンマーのような武器をひとつ、かかえていたのです。

かれらは男とも女ともつかない、なんとも美しくてかわいらしい顔立ちをしていました。しかもみんなおんなじ、まだ八さいくらいの子どものように見えたのです。そしてそのいちばんのとくちよう。かれらのかみはリズやリストールと同じく、すき通るようなかながやく青色をしていました。そしてその青がみの上からは、腰までとどくかというくらい、大きなふたつの青い色をした、うさぎの耳がたれ下がっていたのです。そしてかれらはその耳をばたばた動かして、空を飛んでいました！（ですがそれはただほんとうにばたばたと動かしているだけで、じつさいにこの耳によつてからだをちゆうに浮かべているのだとはとても思えませんでした。かれらが空を飛べるのには、なにかほかのりゆうがありそうです。）

さらに、かれらのおしりからは、ぴよこん！ まるくてかわいいうさぎのしつぽが飛び出していました（それもかみの毛と同じく、青でした）。つまりかれらは、空飛ぶうさぎの種族ということになるのです。ですけどこのアーケランドにこんな空飛ぶうさぎ

の種族の者たちがいるなんてことは、今までだれもきいたこともありませんでした（ふつうのうさぎの種族ラビニンたちや、空飛ぶねこの種族の者たちならいましたけど）。

この世界にはまだまだ、みんなの知らない種族の者たちもたしかにそんざいしています。ですが今、目の前にあらわれたこのふしぎな種族の者たちは、その中でも飛びぬけて変わった者たちでした。いったいかれらは、なに者？ どういうりゆうがあつて、かれらはこの場にかけてくれたのでしょうか？（味方であることには、まちがいなさそうですが。）

そのなぞの青うさぎの者たちは、そのまま糸にからめとられて動けなくなっている敵のただ中へと、つつこんでいきました。そして……。

がっこーん！

手にした大きな青いハンマーのような武器で、かれらは敵の兵士たちのことを、もんだうむよう、なぐりつけたのです！（もう動けないのに！）

かれらはなぐりつけた敵の近くに、ふわん！ おり立つと、そのまますたとその敵のそばまで歩いていきました。そして相手のすぐ目の前に立つと、そのままむごんで、じいつ、その敵のこゝろを見つめはじめたのです（しかも顔色ひとつ変えない、む表じようのままです）。

「な、なんだ！ おまえは！」動けない敵の兵士が、そういったとたん。

がこん！

ふたたび青うさぎの者が、手にしたハンマーでその敵をいちげき！（もう動けないのに。）

「ぐわっ！」

敵の兵士はたまらずぶつ飛ばされて、地面にたおれふします。そしてその青うさぎの者は、たおれた敵のその頭のすぐ横まですたすたと歩いていくと、そのまま、ちよこん。しやがみこんで、目の前から相手の顔を、じいつ、またしてもむ表じようのまま見つめはじめました（いったいなんなのでしょうか……？）。

「や、やめろ！ なんなんだ、おまえは！」そして敵の兵士が、ふたたびそういったとたん。

がこん！

たおれている相手に、またしてもハンマーがさくれつ！（三回目です。なんだかちよつと、かわいそうな気もしてきましたね……）もう敵の兵士は、かんぜんにノックアウトです（動けない相手をようしやなくぶちのめす。かわいすがたと顔をしているわりには、なんてえげつない戦い方なのでしょう……。そのえげつなさは、ポメラニたち以上かもしれません……）。

そして敵の兵士が、つぎのようにいったときのことでした。

「わ、わかった……！ おれの負けだ！ もう、かんべんしてくれ……！」

その言葉をきくと、青うさぎの者は、にこつ！ まんめんの笑顔を見せると、ふたたび耳をぱたぱた動かして、空の上へと消えていったのです（うくん、ほんとうに、なんだったのでしょうか？ なんだかちよつと、こわい……。」「た、助かった……。」「たおれた敵の兵士がそういつて、頭を地面の上に、ぼふっ！ もたれかけさせてしまったのはいうまでもありません）。

そしてそのとき……。

「アークランドの者たちよ！ わたしもびりよくなから、力を貸すぞー！」

空の上から、よくひびくたくましい声がひびき渡りました！ みんながそちらの方を見てみますと、ひゅううう！ どこからともなくいちじんのたつまきがあらわれて、そのたつまきを見るまにぐるぐると、白いへびのようなすじとなつてからみあい、まわりはじめていききました。そしてそのたつまきの中からあらわれたのは……。

なんともふしぎ！ たくさんの白いすじがより集まって、人のすがたをかたち作つていったかと思うと……、つぎのしゅんかんにはそこに、まっ白な服を着たひとりの老人が立っていたのです！（これはなにかの魔法でしょうか？）そしてさきほどの声は、こ

の老人がさげんだ言葉のようでした。

その老人は、ほんとうに白づくめでした。人間のおじいさんのようなすがたで、長くてさらさらしたまっ白なかみを、みつあみにしてうしろでひとつにむすんでおります（おじいさんだからかみが白いのか？ それとももともとなのか？ わかりませんが。ちなみに、かみのさきはまっ白なりボンでとめられていました）。ひよろりとした背かっこうで、その（色白の）顔はやせこけておりましたが、長くてりっぱな白のおひげのおかげで、じつにどうどうとして見えました。全身には足のさきまでとどくほどの、白いガウンをまどつております（とうぜん、はいているくつも白ですし、腰にまいているベルトも白でした）。そしてその（色白の）手には、長さが六フィート近くもありそうな、白くて長いつえをにぎっていました（このつえは木のように見えました、なにからできているのか？ ぜんぜんわかりませんでした）。

こんなかっこうでしたから、その場にいるみんなはひとめ見ただけで、すぐにわかったのです。この人はなにかしらの魔法を使う、まじゆつしであるのにちがいないと。そしてじつさい、その通りでした（そのまんまですいません。まあこんなときには、ひねりを加えてもしようがありませんし）。

「ずいぶんとおそくなつてしまつたが、どうやらまにあつたようだな。かれらがほんとうに、よくやつてくれたようだわい。」

とつぜん、その白づくめのおじいさんのとなりにもうひとりのおじいさんがあらわれて、いいました。こちらはたつまきではなくて、ひゅうう……、というすこしの風が吹いたかと思つたら、つぎのしゅんかんには、もうそこにあらわれていたのです。いったい、このおじいちゃんたちはなに者？（ぜつたいにただ者ではないでしょうけど。）

しかし白づくめの老人の方は、みなさんはじめて見る顔でしたが、もうひとりの老人の方、それは読者のみなさんにとつても、とてもなじみのあるなつかしい顔でした。

全身うすよごれて、すりきれた衣服。茶色のくたびれたマント。肩からは大きなかわでできたかばんをひとつ、かけていて、足もとにはぺたんこのくつをはいております。そして手には、そのさきに白いすいしょうのはまった、長い木のつえを持って……。だれだかもう、おわかりですよ。

そう、そこにあらわれたこの老人は、まさしく世界さいこうのけんじやとうたわれる、ノラン・エルセルファス・クーシー、その人でした！

ついにノランが、この戦いの場にやってきたのです！ ノランはほんとうに、よく動いてくれました。まず、このいくさのまきにきぼうの力となつた、ネクタリアたちのえん軍。かれらを動かすために、リストールをふくむリユインの者たちのことをすくい出すようにと岩のけんじやリブレストにはたらきかけてくれたのは、ノランだったので

(そしてそのノランの声にこたえて、リブレストとたくさんの仲間たちがすばらしいかつやくをしてくれたのは、みなさんもごぞんじの通りです。さらに、リストールのことを守るためにそのいのちを張ってまでつくしてくれた、レシリア、ルースアン、ハミールに、キエリフ、かれらもほんとうにすばらしいはたらきをしてくれました)。

そして新たなえん軍。木のけんじやカルモトによびかけて、木の軍勢の者たちをこの場にかけてつけさせようとしてくれたのも、ノランでした(ですが、それはしつぱい。さきにお伝えしました通り、カルモトの大きなうっかりにより、ノランはカルモトとれんらくを取ることができずに、あてにしていたえん軍をよびよせることができまませんでした。でもそのかわりに、ロビーたちがその大きなやくめを果たしてくれることとなったのです。さいしよのよていだった木の軍勢の者たちではなくて、それよりもっと、大きな勢力。ガランタのポート・ベルメル船団という、強力なえん軍となったわけですが。

ちなみに、この「木の軍勢の者たち」というのは、カルモトの作り上げた木の兵士たちのことではありません。木の兵士たちはただの木からカルモトの魔法により作り上げたものですので、こうげきの魔法を使つてはならないという、いくさのルールにはんしてしまうのです(魔法で兵士を作つてそれでこうげきすることは、こうげきの魔法を使つていることになるのです)。そのかわりノランはカルモトに、はるかなむかしにさかえたという木の王国に眠る、八百名ほどにもおよぶ木の軍勢の者たちのことを、え

ん軍としてつれてきてほしいとたのむつもりでした。この木の軍勢の者たちは、切り分け山脈のおく深く、だれも知る者すらいないうちすてられた土地に、ひっそりと眠りつつづけている者たちでした。この木の軍勢の者たちは、いちど目ざめさせると三日ほどでそのかつどうを終え、もとの山の中にみずから帰っていつてしまいます。そしてふたたび、百年の眠りについてしまいました（よく眠りますねー）。その木の軍勢の助けをかりることができるのは、木のけんじやである、カルモトだけだったというわけなのです。

ノランはただ、かれらのことをせつついただけかもしれない。しかし人の力というもの、みんなの力なのです（それが人のほんとうの強さなのだ、ロビーもいっていいましたね）。ノランの力は、みんなのことを動かす力。そしてみんなの力はまた、ノランのことを動かす力となるのです（ノランがほんとうに力あるけんじやといわれているのは、そういうりゆうがありました。たくさんの人の力を、かりることができる。こんなにしたのもしいことはありません。ノランには、そのいだいなる力があるのです）。

そしてノランはここにきて、さいごにもうひとつのえん軍をよびよせてくれました。

わたしはいぜんから、みなさんにお伝えしていました。このアークランドにはノラン

いがいいにも、三人の力強きけんじやたちがいると。ひとりには木のけんじや、カルモト。もうひとりには岩のけんじや、リブレスト。そして……、ここまできたら、もうおわかりでしょう。ノランのつれてきた、えん軍。それはまさに、三人目のそのさいごのけんじやのもとにつどいし、けんじやの力のえん軍だったのです！

お待ちせいたしました。ついに、そのすがたがあきらかに！

さいごのけんじやの名まえは、ランスロイ。空のけんじやとよばれている、力強き白のけんじやでした。そしてそのランスロイこそが、今ノランとともにこのいくさの場にあらわれた、さきほどの白づくめのおじいさんだったのです！（思えば、とうじょうのしかたもやつぱりすごかったですよね！）

空のけんじやランスロイ、それは木のけんじやカルモトや岩のけんじやリブレストよりも、さらに伝説的なまでのそんざいでした。みんながその名まえを知っていました。が、じつさいにそのすがたを見たという者は、ほとんどとっていいくらいにいなかったのです（全身白づくめの衣服を着ているといううわさがありましたので、白のけんじやともよばれていたのです。そしてそのうわさはほんとうでしたね）。

それもそのはず、ランスロイはみんなの目のとどくようなどころには、まったくいま

せんでしたから。つまり巨大な木の中の家や山おくのどうくつなど、どこかにかくれ住んでいるのなら、まだ見つけられないこともありません（かなりのくろうは必要でしょうけど）。しかしランスロイは、そんなところにさえもいなかったのです。それはつまり、足で歩いては見つけることができないということでした。すくなくとも、つばさを持っていたり、空を飛ぶ魔法が使えたりしなくては。

そう、ランスロイは空の上に住んでいたのです！ それも一年中あつくれたれこめた、まっ白な雲の中に。これではいくらさがそうとしたって、見つかるはずありません。ランスロイは人の世界から遠くはなれたその空の上で、長い長いけんきゆうせいかつを送っていました（まさに雲の上の人ですね）。

そのランスロイのえん軍、じつはそれこそが、さきほどからこの空の上をばたばた耳で飛びまわっている（そして動けなくなつた敵をぶちのめしまわっている）、あの青いうさぎの者たちだったのです。

あのうさぎの者たちは、じつははつきりとした生きものたちではありませんでした。見た目はうさぎの種族の者のようでしたが、ほんとうは雲と風のエネルギーで作られている、いわば精霊のようなそんざいだつたのです（ですから空を飛べるのも、なつとくでした。かれらは精霊のようなしんぴ的なエネルギーによって、空を飛んでいたのです。やつぱり耳で飛んでいたわけじゃなかったんですね）。ランスロイは空の上高くに

飛びまわっていたかれらのことを見つけ、かれらと意志のそつうをはかることにせいこうしました。そう、かれらはランスロイが作った魔法的な生きものというわけではなくて、もともとのアークランドの空の上に住んでいた者たちだったのです（そしてかれらはランスロイがかれらのことを見つけたそのときから、もともとうさぎのすがたをしていたのです。まったくもって、じつになぞの者たちです）。かれらは言葉を話すことはありませんでした、ランスロイは魔法の力をもつて、かれらと会話をするのができました。そしていつしかランスロイのまわりには、数えきれないほどの青うさぎの者たちが、集まるようになったのです（すっかりなつかれてしまいましたね）。

かれらは（かれらの言葉でいいあらわすのなら）レビラビという者たちで、はるかなむかしから、このアークランドの空の上に住んでいるのだということでした。かれらは食べることも眠ることもしません。雲と風のエネルギーをその身に受けて、暮らしていることができたのです。そしてかれらは自分たちのすがたを、好きなように変えることができるのだということでした。ちがうデザインの服にしてみたり、ちがうかみがたにしてみたり（ずいぶんとべんりですね。そしてあのハンマーのような武器も、じつはかれらがそのからだの一部のかたちを変えて、作り出したものだったのです）。ふだんは空飛ぶうさぎのすがたをしておりましたが、それをいつまでつづけるのかはわからないのでした（かれらはだれかひとりが気まぐれでそのすがたを変えると、みんないつせ

いに同じすがたに変わっていくのです。ちよつと前までは、空をおよぎまわるイルカのすがただったということですが、それもまたおもしろいですね。そしてしばらくたってそのすがたにあきる（？）と、またもとのうさぎのすがたにもどるのだそうでした。きほんはうさぎというところは、変わらないみたいです。

そのレビラビという者たちが、今ランスロイ（とノラン）のよびかけにこたえて、このいくさの場にかけてくれました。そしてレビラビたちはほんやりとしていて深く考えていないようにも見えますが、この世界をあいすることにかけては、だれよりも強い思いを持っていたのです。かれらのもくてきはただひとつ、このアーケランド世界のへいわを守ることに。ランスロイはレビラビたちに、ひとつだけいつてきかせました。「必要以上に戦ってはならんぞ。相手がこうさんすれば、それでよいのだからな。」そしてレビラビたちは、その「いいつけ」をじつにすなおに守ったのです。つまり……、相手がこうさんするまではずっとなぐりつづける必要があるのだと思って、その通りに行動しました！（ようするに相手がこうさんするまでのあいだの戦いが「必要な戦い」なのだ、レビラビたちは受け取りました。じつにすなおというか、なんというか……）あのなんともおかしな（そしてえげつなくてちよつとこわい）戦い方は、そういうわけからだったのです（そして、なるほど、相手が「おれの負けだ」といったとたん、にっこり笑って、戦うのをやめましたよね。あれもランスロイのそのいいつけを、しっかりと

守っていたというわけです。ほんとうにすなおです。

ちなみに、はじめに敵に投げつけていたあの白くてふわふわしたまるいものは、自身の持つ雲のエネルギーを切り取った、ばくだんのようなものでした。レビラビたちはこの雲のエネルギーを使って、敵をこうげきすることもできたのです。これはレビラビたちの持つ自分ほんらいののうりよくでしたので、いくさで使うことができました。おそろしいハンマーのこうげきよりは、こつちの方がましですね。

「われら、ランスロイ空軍、千八百！ およばずながら、ベーカーランドのえん軍として、加勢つかまつる！」

ランスロイのたくましい声がひびき渡りました（ひよろりとしたからだのわりには、いい声です。ちなみに、レビラビたちのズボンについている雲とつばさのもんしょうは、ランスロイの使っている空のもんしょうでした。ランスロイがレビラビたちに「われらの軍のあかしとして、このもんしょうをつけるといい。」というと、レビラビのひとりかさつそく自分のからだのデザインを作り変えて、そのもんしょうと同じデザインのワツペンを、ズボンの上に作り上げたのです。そしてひとりがそれを作ったら、みんなが自分のズボンに、おんなじワツペンを作っていました）。

さあ、これでいよいよ、戦いの場につどいしわれらが白き勢力の兵の数は、一万人をこえたのです！（ついに一万人の大台をとつばです！）ワットの黒の軍勢がいかに兵士

たちをかき集めたとはいえ、いかにおそろしい力を持ったかいぶつの兵士たちをそろえたとはいえ、このぜんなる力の前には、とうていおよぶものではありませんでした。ときここに来て、戦いの場に立ちつくす黒の軍勢のかれらが思い知ったこと。それはただひとつ、「かなわない」、それだけだったのです。

黒の軍勢の者たちは、今やその数を三ぶんの一以下にまでへらしてしまいました（もともと六千人でしたから、つまり二千人を下まわっているということでした）。ですがわれらが白き勢力、よりつどったぜんなる力の者たちは、なお力強く、その悪しきやみの軍勢に立ちむかつていったのです。

数の力を失った、ワットの黒の軍勢。そうなったかれらほど、もろいものはありませんでした。もともと黒の軍勢というのは、あつとう的なまでの数の差、武力の差によって、相手を痛めつけるという者たちなのです。それができなくなつた今、かれらはましまりの取れない、ただのごちやごちやとした集まりの者たちにすぎなくなつていました（かれらはきちんとしたいくさのくんれんなども、ほとんど受けていませんでしたから）。ですからかれらはしきかんとちのいうこともきかず、ひええ！ われさきにと、いくさの場のうしろへ逃げつづけていったのです。

ベゼロインまでもどるんだ！　そこでもういちど、体勢をととのえてやればいい！

黒の軍勢の者たちは、みなそう思っていました。しかしかれらはそこで、またしても、つづくぜんなる力のはんげきを思い知る事になったのです。

「ベゼロインだ！」

追っ手からのがれ、ベゼロインまでたどりついた、黒の軍勢の者たち。かれらがそういつて、ほっと胸をなでおろした、まさにそのときのこと。かれらはそこで、思わぬものを目にしました。

「な、なんだ……？　あれは？」

黒の軍勢の者たちが目にしたものの、それはとりでの上をうめつくさんばかりにじん取っている、敵の兵士たちのすがただったのです！　そして見たこともないようななにか巨大な岩のようなかいぶつたち、そのあいだに立ちつくしていました！（もはやいうまでもありませんよね。これらの者たちはもちろん、けんじやリブレストのひきいるリユインの二百名の勇士たちと、岩のロボットたちなのです！）

「ど、どういうことだ！　ベゼロインは今、魔女の三姉妹たちが守っているはずだぞ！　敵の手に渡るなんてことが！」

黒の軍勢の者たちはみなとても信じられないといった顔をして、ただただあわてふた

めくばかりでした。そしてそんなかれらのことをむかえうつかたちで、ベゼロインの上のわれらが仲間たちがさげんだのです。

「われら、せいぎのたみ！　アークランドの白き勢力！」

その言葉につづいて、かれらのうしろからあらわれたのは……。

な、なんと！　これは！

それは目をうたがってしまいそうなくらいの、なんともおどろくべき光景でした。そこからあらわれたのは……、たくさんのウルファの者たち！　しかもただのウルファではありません。黒いかみ、黒いしっぽ……。

そう、あらわれたのはワットにとらえられ、やみにとらわれてしまっていたはずの、レドンホールの黒のウルファの者たちだったのです！

さあ、たいへんなことになってきました。今やベゼロインとりでの上は、リュインの人間の兵士たちとはい色ウルファの兵士たち、そしてレドンホールの黒のウルファの兵士たちによって、すっかりうめつくされていたのです！（黒のウルファの人数は、全部

で八百人ほどもいました！」それにしても、いったいどうして、とらわれの黒ウルファの者たちがここにいるのでしょうか？

「どうやら、あてがはずれたようだのお。」

一体の岩のロボットの頭の上からそういったのは、もちろんリブレストでした。あわてふためいている黒の軍勢の者たちに対して、そうだったので（ちなみに、あの五身がったいのきゆうきよくロボは、今ではもとの五体のロボットたちにもどつていたのです。ここでの戦いではロボットの数すべてそろつていてる方が、つごうがいいからでした。ちよつともつたいたいような気もしますけど、もう魔法のこうげきを受けることもありませんかからね）。

「われら、岩のリブレストひきいる、べつどう隊、二百四名！」リブレストが、見下ろす敵たちにむかつていい放ちました（岩のロボットたちについてはいわゆる「工作物」あつかいになりますので、兵の数には加えられませんでした。でもじつさい、おそろしい兵力ですけどね……）。

「そして、われら、レドンホールの黒のウルファ、八百二十七名！ 義により、ベーカーランドの白き勢力にすけだちいたす！」

そういつて、かれらはその手に持った大きな剣をかまえ……、いえ、ちがいました。かれらがかまえたのは、剣ではなかつたのです。かれらが持つていたのは……。

なんともおかしなかたちをした、岩でできた「つつ」のようなものでした。長さは四フィートくらい。つつのさきつぽにはなにかロケットみたいなかたちをしたものがひとつ、取りつけられております。手にぎる部分がどうたいから下にのびて、それをにぎったうえで、全体を肩にかつぐようなかたちでかまえました（なんだかどこかで見たとような気が……）。

「もくひよう、よーし！　ねらえい！」

じゃきん！　じゃきじゃき、じゃきーん！

リブレストのかけ声にあわせ、黒のウルファもリユインの者たちも、さらには、ぎゅいいん！　ごいいん！　岩のロボットたちまでもが、いつせいに、そのつつのようなもはやロボットのうでを、黒の軍勢の者たちにむけてかまえました！　それから……。

「うていー！」

リブレストの、ごうれいっか！

しゅばっ！　しゅばしゅばっ！　しゅばばばばっ！

なすすべもなく逃げまどう、敵の兵士たち。かれらは剣もたても放りすてて、逃げるのでせいっぱいでした（とここで、こんなにくさんのロケットランチャ……、いえ、武器を、リブレストさんはどこから持ってきたのでしょうか？（たんじゆんな剣なら岩をけずってあつというまに作り上げることができましたが、こんなにふくぎつな武器では、さすがにむりですよ）。こたえは、岩のロボットたちにあり。このロボットたちの足やからだの中には、たくさんの武器がしゅうのうされていたのです。カバーをばかっ！ とあけると、その中にはなん百という岩の武器がかくされていました。いろいろひみつがあるんですね！）。

「がっはっはっは！ 逃げろ逃げろ、がきんちよどもが！ このリブレストと仲間たちがいるかぎり、このとり地には、いっぽも近づけさせんぞい！」リブレストが、ごうかに笑いながらいいました。

今や黒の軍勢には、うしろに下がって力をととのえるための、そのささえとなる場所すらもまったく残されてはいなかったのです。それはほんとうに、リブレストとその仲間たちのおかげでした。その仲間たちに新たに加わった、黒のウルファの者たち。それではこのあたりで、かれらがどのようにしてこのリブレストべつどう隊に加わったのか？ そのわけをご説明することにしましょう。

魔女の三姉妹のことをしりぞけ、ベゼロインとりでをうばいかえすことにせいこうした、われらが仲間たち。それからリブレストをふくむ五人の者たちが、うしろにひかえている仲間たちのことをとりでによびよせようと、むかえにいったときのこと。かれらはそこで、思わぬものを目にしたのです。それは南の山の方からあらわれた、たくさんの黒いすがたの者たちでした。ワットの者たちか！ とつさにかれらは身がまえましたが、すぐにそうではないということが知れました。頭の上につき出た、ふたつの耳。おしりから生えた、大きなしっぽ。そして、その黒い毛の色……。そうです、その者たちこそが、かれらレドンホールの黒のウルファの者たちでした！ でもやみにとらわれているはずのかれらが、どうやって自由の身になれたのでしょうか？ そのこたえはひとつ、青き宝玉の力でした。

ときここにきて、おさえつけられていた光の力をいつきにはき出すかたちとなった青き宝玉は、黒ウルファのかれらの中にふきこまれていたそのおそろしいやみの力ですら、うち消したのです。その強大な力は、たとえエリル・シャンディーンの王城からなんマイルとはなれていたとしても、ひびき渡りました（さすがにワットやレドンホール、怒りの山脈の中までには、その力はとどきませんでした）。そして、ベゼロインとりでからほど近い、南東の山がく地。そこに、ワットのかりのちゆうとん地があつたのです。そこはいくさに必要な品物や兵士たちのことを一時的に集めておくための場所で、ベゼ

ロインにせめいるさいに、ワットの者たちが使つていたところでした。黒のウルファの者たちは、まさにその場所にいたのです。ベゼロインをせめ落としたあと、ワットの者たちはもはや戦いには使いものにならなくなった黒ウルファたちのことを、この場所におしこめるようにしておいておきました。それも、とりでをせめるときに使つてもう用済みとなつた、たくさんの黒鳥や、こわれた武器などといつしよに。そう、黒のウルファの者たちは、まるつきりがらくたのようなあつかいを受けて、ここにおしこめられていたのです（なんとというひどいあつかいなのでしょう！　今までさんざん、いいように使つておいて！）。

そして宝玉の光がひらめいた、そのしゅんかん。

「……な、なんだ？　ここはどこだ？」

青き宝玉のそのせいなる光の力を受けて、黒ウルファの者たちのことをおおつていたやみは、消え去りました。そしてかれらはたちまち、ほんらいの自分を取りもどしたのです。

「どうしてわれらは、こんなところにいる！」

見張りのワットの兵士たちがかけつけたときには、もうかれらはおしこめられていた。そのたてもののとびらをぶち破って、そとに飛び出していくところでした。そして、あわれ見張りの兵士たちは、黒ウルファたちのせいぎと怒りのてっけんを受けて、ノックアウト！ 黒ウルファたちはそのままちゆうとん地の中をあばれにあれば、そして今までのことのすべて、さらには西のエリル・シャンデーの地でさいごの大けっせんがおこなわれているということなどを知ると（それらはもちろん、つかまえた敵の兵士たちからきき出したのです。こぶしでもって）、いてもたってもいられず、武器をうばつて、西の地へとむかつてしんげきしていったというわけでした。その黒ウルファの者たちが、われらがリブレストべつどう隊の者たちに出会ったというわけなのです。

そしてもうひとつ、忘れてはならない仲間たちのそんざいがあります。それは……、そう、ベゼロインでの戦いで黒ウルファたちの持つていたやみの剣で切られ、やみの力にとらわれてしまった、白き勇士たちのことでした。かれらは今、エリル・シャンデーの王城でふたたびもとの自分を取りもどす、そのときを待っていたのです。そしてまさに今、そのときをむかえることになりました。

「かれらが、かいほうされた！ やみの力は、はらわれた！ 宝玉のおかげだ！」

かれらのせわをしていたお城の者たちは、みな口ぐちにさげびました。青き宝玉はベゼロインでの戦いでたおれたかれらたくさんの仲間たちのことをも、また、その悪しきやみのじゅばくからとき放つたのです。正気を取りもどしたかれらは、もちろん、もういてもたつてもいられません。ワットの黒の軍勢に対する怒りが、めらめらとあふれかえつてきました。

「われらも戦うぞ！　ワットのおうぼうを、ゆるしてはおけぬ！」

「おおーっ！」

そうしてかれらはいくさのしたくもそこそこに、剣をひつつかむと、それぞれの騎馬たちにまたがって、いくさの場にむかつて飛び出していったのです。兵力、六百五十八。さらなるせいぎの力のとうじょうでした。

そして、ちょうどそんなときのこと……。

みなさんは、あとひとり、敵の大物が残っているというところをおぼえていますでしようか？　それは魔界の王ギルハッドとその手下の軍勢のことを、この戦いの地によびよ

せたちようほんにん。そう、やみのけんじやガノンです（そういえば、いましたね！ すっかり忘れて……、いや、ええと、とにかく、かれがまだ残っていたのです）。ガノンもまた、おそろしい力を持ったまじゆつしでした。ですがまじゆつしは戦ってはならないという、いくさのルールがあります。ですからガノンは自分でよびよせた悪魔の軍勢の者たちに戦いをまかせ、自分は小高い丘の上に住んどつて、戦いのようすをじつと見守っていたというわけでした（見守つてというより、高見のけんぶつといった感じでしたけど。取りまきのふたりの美女たちにうちわでばたばたあおがせて、自分はパラソルのかかったいすにふんぞりかえり、ジュースを飲んでいたので。そのすがたはまったくの、わがままなおぼっちゃんといった感じでした。いかにもガノンらしい）。

「お、おい……、いったい、どうなってるんだー！」

白き勢力のえん軍たちがどんどんとあらわれて、戦いのようすがすっかり変わつてしまふと、ガノンはいすから飛び上がつてあわてふためきました。ギルハツドがやぶれたときも、「あのやろう、あっさり負けやがった！ 使えないやつだな、まったく！」とどくづいていただけでしたが、ときここにきて、ガノンはほんとうにあわてていたのです。まさか、ワットの黒の軍勢が負けるなんてことが……。そんなことになつたら、おれのハーレムはいかかはどうなるんだ！ 話がちがうぞ！（やつぱりガノンは、ワットとそんなやくそくをしていたんですね、まったく……。え？ ハーレムつてなに？ で

すつて？ よい子のみんなは知らなくていいです！

「おのれー！ こうなったら、おれさまの魔法で、じきじきに、ベーカーランドのれんちゆうをやつつけてやる！」

これはルールいはんです！ まじゆつしは、いくさで戦つてはいけないのですから！ でもガノンはまだもう、やけつぱちでした。どうしても、自分の（ハーレムの）やくそくをワットに守らせる。そのためにはルールいはんだろうが、そんなものはおかまいなしだったのです（ほんとうにひきょうなやつです！）。

「見てろよー！ おれさまのこのさい強のついで、ベーカーランドのれんちゆうを、ぎったんぎったんの、ぼったんぼったんの、けちよんけちよんにして……」

そのとき。

ぼん！

「……ええ？」

ガノンの持つそのつえのさきつぽから、黒いけむりが上がりました。そしてつえはそのまま、ぷすぷすというかわいた音を立てるだけの、ただのがらくたになつてしまったのです！

「な、なにー！ ちよつと！ これ、どうなつてんの！ いなずまよ、出る！ で、出ないよー！ そんなあー！」

宝玉の力はガノンのそのやみの力をも、はらいのけたのです。つえはもう、使いものになりませんでした。そしてガノンほんにんもたよりきつていたそのやみの力を失い、もはやただのひとりの、わがままなおぼっちゃんになつてしまつたのです（ガノンの魔法はすべて、やみの力によるものでした。ですからやみの力を失つた今、ガノンはまったく、魔法を使うことができなくなつてしまつたのです。しかもうばい取られたやみの力は、同時に、ガノンのまじゅつしとしてのそのもともとのししつの部分すらうばい去つていつてしまいました。もはやガノンがこんご、魔法を使うことはもうむりでしょう。いくら魔法のべんきようをしたとしても、魔法を使うためのそのもともとの根つこの部分まで失われてしまつているのなら、どうにもなりませんでしたから。

ちなみに、ほんとうのガノンはもうなん百さいといふねんれいで、魔法の力によつて今の少年のすがたをうつつしていましたが、ガノンは魔法のくすりによつてそのすがたをたもつていました。そしてそのくすりのききめはやみの力にかんけいなく、なん百年とずっとつづくものでしたので、ガノンのすがたはそのまま、変わることはなかつたのです。ふこう中のさいわいというやつでしょうか？）。

このようなわけで、ガノンはそれから、このアーケランドのためにせつせとその身を

つくしてはたらくことになりました。もうだれも、かれのわがままをきいてくれる者はいないのでから。これですこしは、いいせいかくになつてくれるといいんですけどね。

「ぜつたい、リベンジしてやるー！」大きな豆ぶくろをかついだガノンが、空にむかつてさげびました。

「こら！ さつさとはごばんか！ 新入り！」

「はいっ！」

新しいせいかつ（にもつはごびのアルバイト）、がんばってください、ガノンくん！（友だち作れよ！）

（さいごの敵もかたづいて、これですべてがいつけんらくちやく。）

こうして、このアーケランドの運命をかけたさいごの戦いは、終わりのときをむかえたのです。

そのけつまつは……？

ペーカーランドひきいる、白き勢力の大しようり！ 黒の軍勢の者たちはみな剣をすてて、かぶとをぬいで、口ぐちにさげびました。

「負けだ負けだ！ もう、ゆるしてくれー！」

いくさの場にはじめから、ずっと立ちつづけている者たち。ベルグエルムもフェリアルも、ぼろぼろになった剣をずっとにぎりしめながら、今なおこの場に立ちつづけていました。そしてかれらの心の中は……、もはや言葉でいいあらわすことなんて、とてもできっこないでしょう。

いまだかつてなかったほどの、さいあくのぜつぼう。そのぜつぼうのふちから、かれらのもどつてきたのです。のぞみを信じつづけた、かれらの心、そしてたくさんの、アーランドのきぼうのたみたちの力によって……。

「た、隊長……」フェリアルがなみだをぼろぼろこぼして、ベルグエルムにいました。しかしベルグエルムはそんなフェリアルの肩にそつと手をおいて、やさしくほほ笑んでいうばかりだったのです。

「なにもいうな。よくやった。われらはほんとうに、よくやったのだ。今はただ、すべの仲間たちにかんしやしよう。」

ベルグエルムとフェリアルは、そういつてかたくださいました。それ以上のことは、もう必要ありませんでした。

勇者たちの戦いは、こうしてここに、まくをおろしたのです。

ほんとうに、長い長い道のりでした。ここまでみんなといっしょに旅をつづけてきてくれた読者のみなさんに、わたしは心から、おれいをいいたいと思います。

ついにわたしは、この物語のさいごの場面を書くときをむかえたのです。この物語を書くにあたって、わたしはさまざまな場所をめぐり、さまざまな人たちに会ってきました。時間にして、まるまる三年のさいげつ。その中のひとつひとつの出会いが、わたしに大きな力と、勇気を与えてくれたのです。それらのたくさんの出会いがなかったのなら、わたしは今こうして、ペンをとっていることはなかったでしょう。この物語は、みなさんの物語。みんなの力をあわせることによって生まれた、みんなの物語なのです（主人公がロビーであることに、ちがいはないんですけどね）。

さいごにあたって、みなさんにこうしておわかれのあいさつをのべるきかいを与えてくださったことを、かんしゃいたします。ほんとうにありがとうございます。このごあいさつは、この物語のげんこうをすつかり書き終えたあとに、つけたしたものです。やはり、ともに多くの時間をすごしてくださいましたみなさんに、ひとことおれいをいってお

きたかったものですから。

ですがもう、わたしはいかなくてはなりません。わたしの住む世界へのとびらが、じきにしまつてしまいますから。

さいごのさいごに、わたしの名まえをみなさんにお伝えしておきたいと思います。わたしの名まえは、ゼルダ・エルリツチ。みなさんの住む世界とは、べつの時間、べつの世界に住んでいる、きろく物語作家です。このアーランドでのけいけんは、わたしにとって、ほんとうに意義の深いものとなりました。わたしはぜひまた、この世界にもどってきたいと思っています。

では、みなさん。いつまでもおげんきで。またいつの日か、お会いできるといいですね！

「父さん！ ソシー！」

今やがらがらとくずれ落ちてゆく、アーザスの城……。そのただ中、かつてアーザスのよこしまなる赤いキューブのあつたぶきみな大広間の中で、ロビーはさげびました。

アーザスがうちたおされてからというもの、アーザスのやみの魔法の力によつてたもたれていたこの城のかべやはしらなどが、つきつきとくずれ落ちていったのです。てん

じょうから、くずれた石のはへんがばらばらとこぼれ落ちてきました。その中でロビーは、たおれている自分のじつのお父さん、ムンドベルクにむかつて、かけよっていったのです（これはムンドベルクがいちばん、ロビーに近い場所にいたからでした。ソシーの方が近ければ、ロビーはまず、ソシーのもとへむかったでしょう）。

ムンドベルクの手を取り、そのからだをだき起こすロビー。ムンドベルクは赤いキューブのエネルギーにうたれて、もはや息もたえだえのじょうたいでした。

「父さんー」

ロビーがもういちど、父のことをよびました。そしてムンドベルクは荒い息をしながら、ようやくのことで、ロビーのそのよびかけにこたえたのです。

「ロ、ロビー……」

ムンドベルクはゆっくりとそのひとみをひらいて、わが子であるロビーのことを見つめました。ついに、運命によって分けられていた親子が、ひとつのところにもどったのです。ムンドベルクのことをしはいしていたアーザスのやみの力は、もはや消え去ってしまいました。アーザスがやぶれたときに、いつしよにその力も消えていったのです。しかしムンドベルクのからだをむしんでいたものは、それだけではありませんでした。ロビーに剣をたくすため、ムンドベルクはみずから、影の世界の者となっていましたから。（この影の世界というのは、アーザスのふういんされていたやみの世界とほとんど同

じものでした。アーザスから剣を守るため、ふつかつしたアーザスが剣を取り出すことのできないように、この剣はこの影の世界の中へとふういんされたのです。いかにアーザスとて、ふつかつしたばかりで力の弱いじようたいでは剣のふういんを破ることはできませんでしたし、かといってムンドベルクのように影の世界の者になってしまえば、まだ力の弱いアーザスはそのまま影の力に食いつくされ、もとの自分にもどることもできず、いずれはムンドベルクがそうなったように、ぬげがらのようなじようたいになってしまうことでしょう。アーザスはそのことをよく知っておりましたので、ふういんされていた剣の前にさいしよにあらわれたとき、デルンエルムに「もう一回、やみの世界にもどるのも、ぜったいいやだしね。」といったのです。これは影の世界の者となって剣を取り出そうとすれば、自分もふたたび、ふういんされていたやみの世界と同じような世界にひきもどされてしまうということを、知っていたからの言葉でした。ちなみに、アーザスは「やみの世界」といいましたが、アーザスにとってはやみの世界も影の世界も、どちらも同じようなものでしたから。」

その影の力はアーザスがやぶれた今なお、ムンドベルクのからだを深くむしばんでいました。みずからの意志をようやく取りもどしたというのに、ようやくわが子にさいかいることができたというのに、もはやムンドベルクのからだはその影の力の前に、今にもかき消えそうな、はかないそんざいとなつてしまつていたのです。じつにざんこく

なことですが、これはムンドベルクがロビーの思いを受けて、ふたたびみずからの意志を影のしはいの中から、よび起こすことができたからのことでした。ぬけがらのようなじょうたいになっていたからだにふたたび意志をよびもどしたことによつて、こんどは肉体を持ったからだそのものが、そのからだから分かれてかき消えていった影の方のすがたに、取つてかわつていつてしまったのです……。しかもその影のすがたさえも、今ものすごい早さで、やみの中に消えてしまおうとしていました。影の者となつたからだにもういちど自分の意志をよびもどすということは、それほどに、その肉体にふたんをかけることだったのです。

そのからだはほんとうに影のように、あたりの景色の中にとけこんでしまつていました。かかえるロビーの手には、もはや、あたたかいぬくもりは感じられませんでした。

「父さん……」

ロビーはふるえる両手で、父のことをしっかりとかかえていました。しかしその父のからだは、もう空気のように、かるいものになつてしまつていたのです。そのからだはすぐにでも消えてしまふそうだということの、あかしでした。

「ロビー、大きくなつたな……」ムンドベルクがそういつて、静かにほほ笑みました。その目はロビーのことを、しっかりと見すえております。しかしムンドベルクの目には、もうほとんどロビーのすがたはうつつてはいませんでした。さいごのときがやつて

きたのです。

「ぼくのことを、守ってくれたんですね……。ありがとう……」ロビーはそういつて、父のその手をぎゅつとにぎりしめました。ロビーの目からはぼろぼろと、なみだがこぼれ落ちていました。

「ロビー……」ムンドベルクがその手をよろよろと起こして、ロビーの肩におきました。「ほんとうに、すまなかつた……。おまえのことを、ひとりぼっちにしてしまつて……」

しかしロビーは、首を大きく横にふつて、いったのです。

「そんなことは、いいんです。ぼくのそばには、いっだって、たいせつな人たちがいるんだつていうことに、もう気づけたんだから。父さん、あなたがいつも、ぼくのことを、見守つてくれていたのだということも。」

ムンドベルクはひとみをとじて、あふれるなみだをこらえようとしました。しかしそれは、かないませんでした。ムンドベルクのそのひとみから、大つぶのなみだがぼろぼろとこぼれ落ちていきました。

「ロビー……、いや、ロビーベルクよ……」ムンドベルクがもういちどひとみをひらいて、いいました。「おまえはもう、ほこり高き、いちにんまえの、レドンホールのウルファだ……」

「ここにおまえに、わが代々のラインハットの姓をさずける……。ロビーベルク・アル
エンス・ラインハットよ……。おまえは、われらがほこり高き、レドンホールのたみ。そ
しておまえは、これからのレドンホールのことをになう、みちびき手となるのだ……。」

ここに、ロビーのちかいは果たされたのです。ロビーベルク・アルエンス・ラインハッ
ト。それがロビーの、ほんとうの名まえでした。

そしてロビーが受けついだものは、それだけではなかったのです。ロビーはレドン
ホールの新しいみちびき手として、これからのくにのみらいを作っていかななくてはなら
ないのですから（なにせロビーは、王子さま、レドンホールのしどう者なのですから）。
しかしそれはロビーにとつて、とてもほこり高く、めいよなことでした。ロビーは今、
いちばんだいいじなものをすでに手にしていたのです。それは仲間、たいせつな人たち、
そして、人と人とのつながり、そこから生まれる力。その力があるかぎり、ロビーはも
うだいじょうぶです。レドンホールのみらいもだいいじょうぶです。アーザスによつて
ほろぼされた？ そんなもの、けちらしてやればいいんです！ こわされたらもういち
ど、つくりなおせばいいんです！ たくさんの人たちの新しい力を得て、前よりももつ
と、すばらしいくにに。

みらいとは、そうやって作り上げられていくものなのですから……。

ロビーはしげんと、ウルファの敬礼のしぐさを取っていました。ムンドベルクの目には、もはやそのすがたもほとんどうつてはいませんでした。ムンドベルクにはそれで、じゆうぶんでした。みらいへとつなぐ、そのきぼうを、光そのものを、さいごのこのときに得ることができましたから。

「レドンホールのみらいを、たのむぞ……」

そして、ムンドベルクがそういって、そのひとみをとじていったときのこと……。

ふおおおん！ ばあーっ！

とつぜん、ロビーの横におかれていた剣が、強く光り出しました！ その光は今までのような、青と白の光ではありませんでした。なんともあたたかく、やわらかな、こがね色の光だったのです。その光はこの広間全体を、つつみこんでいきました。そしてロビーはそこで、なんともおどろきの光景を目にしたのです。

剣から飛び出したそのこがね色の光が、たおれているムンドベルク、そしてソシーの

ことを、つつみこみはじめたではありませんか！ ロビーはびっくりして、うでの中の父の顔を見ました。こがね色の光はほんのりとしたねつを、ムンドベルクのからだにやどらせておきます。そしてさらに、おどろきのできごとが。

さきほどまで空気のようにかるく、今にも消えてしまいそうなくらいに弱々しかったムンドベルクのからだに、はつきりとした力をもどっていききました！（これはまさにきせきでした。影の世界の者となり、影のそんざいとなつた者が、もとにもどつたことなると、今までのれきしの中でただのいちどだつてなかつたことなのです。影の世界の者となるということは、やみの力にとらわれるということよりも、もつともつと重いことでした。それは今までの自分がまるつきりべつものになつてしまふということと、同じことだったので。その影の世界の者となつたムンドベルクのからだは、今かくじつにもとのすがたを取りもどそうとしていましたから、これはもうきせきというほかありません。それが今げんじつに、目の前で起こっていました！）

ムンドベルクのからだに、もとの通りのしつかりとした重さをもどっていきます。その顔からはつめたい影の世界の色は消え、かわりにほんらいの人としての、あたたかなはだかもどつていきました。ロビーはもう、びっくりするばかりでした。そして広間のむこうでは、同じことがソシーのからだにも起こつていたので。そしてそちらのできごとの方が、ロビーにとってはもつと、おどろきのできごとでした。

アーザスのわなにより、半分のからだとなつてしまったソシー。そのソシーのからだがかがね色の光につつまれて、どんどんと、もとの人のかたちへともどつていったのです！ しかも、ただ人のかたちになつたではありません。なんとなんと、ソシーは人形ではなく、いのちあるからだを持つた「人」そのものにすがたを変えていきました！
ええーっ！

今やそこにたおれているのは、ほんとうにひとりの少女でした。かみも顔もお洋服も、すべてもとのソシーのまんまです。ただひとつ今までとちがうところは、ソシーがほんとうに、生きた人のからだになつていてるところでした。

そのとき……！

「ロビーベルク。あなたはほんとうに、よくやってくれました。」

ロビーの頭の中に、いぜんソシーと出会つたトンネルの中でもきいた、あのふしぎな声か、ふたたびきこえてきたのです！ それはなんともあたたかい、すき通るような美しい声でした。

とつぜんのごとに、ロビーはきよるきよるとあたりを見まわしました。しかしこの場には、そんな声のもととなるようなものは、どこにもありません。この声はほんとうに、

ロビーの頭の中だけにひびいていたのです。

「あなたはだれ？ どこにいるんですか？」ロビーが声に出してたずねました。ですがその声はそのまま静かに、ロビーの頭の中にひびいてくるばかりだったのです。

「わたしは、ライブラ。このアーケランド世界の女神です。」

ライブラ！　なんと、この声のぬしはこのアーケランドの守り手たるふたりの女神たち、リーナロッドとライブラのうちの、そのライブラそのものでした！（今ロビーはこの世界の女神さまと、ちよくせつ話しをしていました！　なんてすごいことなのでしょう！）

「ほんとうにとくべつな力のもとに、わたしは今、あなたと話しをしています。ですが、この声があなたにとくべつなことは、もうこれでさいごになるでしょう。わたしたちの力が、このアーケランド世界にちよくせつとどくことは、ないのです。この世界は、あなたたちのもの。われらがその手をじかに貸すことは、もうできないのですから。」

女神の力、それは宝玉や剣といったすばらしき魔法の品々の中に、たしかにそんざい

しているものでした。ですがライブラの言葉の通り、女神がちよくせつこの世界に手をほどこすことは、ふかのうだったのです。女神のその手は、この世界がつくられてさいしよの住人たちの手に渡されたときに、すでにこの世界のもとをはなれていました。世界をつくっていくのはその世界に住む住人たちなのであって、女神ではないのです。それが、すべての世界のおきてでした。今女神ライブラが自身の住むそのとくべつな世界からロビーに話しかけることができていたのは、ライブラのいう通り、ほんとうにとくべつな力によるものだったのです。その力とは、剣とロビーのつながり、そのものとおよべるものでした。そのロビーのきゆうせいしゆたるとくべつな力が、今ライブラとちよくせつ、意志のそつうをはかることをかのうにしていたのです。

（そしていぜんトンネルの中できいたあのふしぎな声も、まさしくこの女神ライブラのものだったのです。イーフリープで剣の力の意味を学び、新たなる力を身につけたことによつて、ロビーは女神ライブラとのきよりをちぢめ、そのけつか、女神の声をじかにきくことができるようになっていました。そして剣はそのとき、その新たなる力によつてアーザスの悪しきわなをうちはらうべく、ロビーの思いにこたえて、せいなる光を放つて、ロビーのことを助けたのです。）

「あなたの思いが、この剣にやどるさいごの力をひき出しました。それは、いのちの工

エネルギー、そのものです。そのエネルギーが、あなたのたいせつな者たちのことをすくいました。かれらをすくったのは、ロビーベルク、あなた自身なのです。」

「いのちの力……」ロビーはそういつて、うでの中のムンドベルクのことを見ました。ムンドベルクのからだからは、たしかに、新しいいのちの力があふれかえっていました。

「ロビーベルク。」さいごに、ライブラの声がひびきます。

「わたしは、あなたに、心からかんしゃしています。あなたのような者がいれば、この世界はだいじょうぶでしょう。アークランドを、よろしくたのみましたよ。ありがとう、ロビーベルク……」

そういうと、ライブラの声は消えていきました。それはほんとうに、わずかばかりの時間でしかありませんでした。

そしてそれつきり、ロビーの頭の中に女神の音がひびくことは、にどとなかったのです。

広間はふたたび、もとのうす暗い明るさの中にもどっていききました。剣からはもう、なんの光も出ていませんでした。そして目の前につきつけられている、ほかの大きな問題がひとつ。てんじょうの岩が、がらがらと音を立てて、大きなかたまりとなって、広間のあちこちにくずれ落ちてきていたのです！ もうこの城は、だめでしょう。早くここから、だつしゆつしないと！ とても危険なじょうたいでした。

「父さん、早く、ここから逃げましょう！」

ロビーがムンドベルクのことをゆきぶつて、いいました。ですがムンドベルクはまだ、とても歩けるようなじょうたいではなかつたのです。いくらもとのからだを取りもどし、やみのじゆばくからとき放たれたとはいえ、長い長い悪のえいきようは、ムンドベルクのからだを、まだかんぜんにはいやしきれてはいませんでした（なん時間も寝ていたあとに、とつぜん「今すぐ起きて、ダンスをしましょう！」といわれたつて、そんなにつごうよくからだは動いてくれるはずありませんよね？ ちよつとたとえは悪いのですが、ムンドベルクのからだは今、まさにそんな感じでした）。

ロビーはムンドベルクのからだを肩にかつき上げ、そのままよろよろと歩いていきました。むかつたさきは、もちろんソシーのところへです。ソシーはひとみをとじて、くーくー眠っていました。ロビーはあらためて、おどろきました。ソシーのからだはほんとうに、人そのものになつていたのです（人間といつていいものかどうか？ まだわかり

ませんでしたので、とりあえず、人とよんでおくことにします。見た目はまったく、人間でしたが。耳はふつうの人間の耳でしたし、しつぽがついているわけでもありませんでしたから。

その顔はほんとうに、かわいらしい少女の顔でした(その寝顔に、ロビーはちよつと、どきつとしてしまったものです)。あのいのちのエネルギーを放ったかた方の目も、今ではちゃんと、もとにもどっております(ちなみに、ロビーの持ってきたソシーの二本の人形の足は、今でもそのまま、ロビーのかばんの中にはいつていました。新しいソシーのからだを作り上げたのは、剣のいのちのエネルギー、そのものだったのです。あとでこの人形の足は、ソシーにちゃんと、かえしてあげましょう。たぶん、「いらない」というかと思えますけど。

ところで……、わたしはみなさんにここでひとつ、あやまらなくてはなりません。ソシーがそのいのちのエネルギーのさいごまでを使ってロビーのことを助けてくれたとき、わたしは、「ソシーのそのこはくでできた作りもののひとみが、ふたたびひらくことはなかったのです。」といいました。ふつうにきけば、これはソシーが死んでしまったということを、あらわしているものと思うことでしょう。ですがじつは、そうではなかったのです。それは文字通り、「作りもののひとみがふたたびひらくことはなかった」という意味でした。この「作りもののひとみ」という部分。これはつまり、「人形としてのひ

とみ」ということなのです。ですから人形ではなくなつた今のソシーの目は、もはや作りもののひとみではないわけでした。いわば、「人としての、新しいひとみ」でしょう。この新しいひとみの方は、このさきちゃん、ひらくのです。つまりソシーは、ちゃんと生きていくということでした！ そんなの、いんちきじゃん！ っといわれてもしかたありませんが、読者のみなさんをだますようなことをしてしまつて、ほんとうに申しわけありませんでした。でもソシーが死んでしまつたというより、こつちの方が、ずつといひけつまつてすよね！ ですからほんと、ゆるしてください！。

「ソシー。」ロビーが声をかけてソシーのからだをゆさぶりましたが、やつぱりだめでした。ソシーは深く眠りこんでしまつていて、とても起きてくれそうもなかつたのです。今までのたくさんの悪の力のえいきょうが、ソシーのことを深い眠りにさそつていました。たいへんな目にたくさんあつてきましたから、しばらくのあいだは、このまま静かに寝かせておいてあげましょう……。

といいたいところでしたが、やつぱり、今のこのじょうきょうです。早くここから、だつしゆつしなくてはなりません！ ロビーは三人の人たちのことをかかえてここからだつしゆつするなんてことは、とてもできそうもないと思ひました（だつて、あのめいろですもの！ あそこを帰つていくことを考えたら、だれだつて気がめいつてしまはずです）。せめてどこかに、そとに出られる近道でもあつたらいいんですけど……。

ロビーはあたりをきよろきよろ見渡してほかの出口をさがしましたが、やつぱりだめでした。道はこの広間にはいつてきたあの入り口がいい、どこにも見あたらなかつたのです。

あれ？ でもその前に、ちよつと待つてください。ロビーは今、「三人の人たちのことをかかえてここからだつしゆつするなんてことは、できそうもない」と思っていたわけですが、「三人」かかえるとは？

そう、この広間にはムンドベルクとソシー、かれらのほかにも、もうひとりの人物がたおれていました。それは……、そう、アーザスです。

ロビーはアーザスがもとのすがたを取りもどしたとき、すでにかれを助けることを考えていました。あんなにたいへんな戦いをくり広げたあとだというのに、ロビーはなんてやさしい子なのでしょう。もとのすがたを取りもどし、床にたおれている、アーザスのことを見たとき。ロビーはアーザスがただ、やみの力にしはいされていただけの、かわいそうなそんざいであつただけなのだということをりかいましたのです。かれもまた、自分の父と同じじょうたいだつたのだと。ですからロビーは、アーザスのことも助けなければと思ひました。きつとこのさき、アーザスにも、新しいみらいが待っているのだと。

ロビーは、たおれているアーザスに近づきました。アーザスはひとみをとじたまま、

動きません。ソシーと同じく、アーザスもまた、深い眠りの中にあるようでした。

ロビーは、まよいませんでした。まよっていてもしかたありません。やらなくてはならないのです。ムンドベルクを左の肩にかかえ、自分のかばんを前にかけて、その上にソシーのからだをおいて、ひもでくくりつけました。そしてこんどはアーザスのことを、そのかた方のうででしたかりとひっぱっていったのです（ちよつと地面をずるずるひきずることになってしまいました。それはかんべんしてください。ほかのふたりを落つことさないうようにするだけでも、せいっぱいでしたから）。

とにかく、この広間からそとに出ないと……。ロビーはそう思つて、広間の出口によろよろと歩いていきました。ロビーのまわりに、くずれてきたてんじようが、どしん！ががん！ つぎつぎと落ちていきます。いつそれが、自分の頭の上にふりそそがないとも知れません。ロビーはできるかぎりのはやさでもつて、広間の出口にむかいました。

そしてついに、広間の出口にたどりついた、そのとき。

ロビーはそこで、いまだかつてないほどの、おそろしいものを見たのです。

「そ、そんな……」

ロビーは、がくぜんとしました。全身の力が、ぬけていくようでした。

ロビーの見たもの、それはてんじようから落ちてきたたくさんのがれきによつて、そのすべてをうめつくされてしまった、かつてのろうかのすがただったのです……。

ロビーは三人のことを床において、ひつしでそのがれきを取りのぞこうとしました。しかしそれは、むなししいばかりの努力でした。ひとつのがれきを取りのけても、そこに新しいがれきがまたがらと、音を立ててくずれ落ちてくるのです。これではいつまでたつても、このがれきをみんな取りのぞくなんてことは、とてもふかのうでした。

こんなにひどいことがあるでしょうか？　こんなにざんこくなことがあるでしょうか？　やつとのことです。敵をうちたおし、父とのさいかいを果たし、ちかいを果たし、そしてたいせつな人たちのことまで助けることができたと、ここから出ることができないなんて！　もうじきに、この大広間もがれきでうめつくされてしまおうでしょう。そうなれば……、もはや残されたロビーたちが、助かることはないのです。ロビーはその場に、ぺったりとすわりこんでしまいました。三人の者たちはみな、ずつと気を失つたまま眠りこんでおります（今ではムンドベルクもまた、深い眠りの中に落ちてしまつていたので）。自分も気を失つていたので、せめてこのざんこくなさいごを、見ることもなかつたらうに。ロビーはちよつと、そう思つてしまいました。

ロビーは腰につけていたアストラル・ブレードを手に取りました。もういちどこの劍が、助けをもたらしてくれるんじゃないか？ そのロビーのきたいは、はかないものでした。劍はもはや、なんのかがやきも放つてはおりません。そのさいこのエネルギーまで、使い果たしてしまつたからでした。ふたりのとうとき、いのちをすくうために……（そしてこの劍がもとの力を取りもどすまでには、長い長い時間がかつたのです。それはもう、なん年もあとになつてからのことでした）。

ロビーは、かんねんしました。もうなにもすることもできませんでした。思えば自分は、ふたたびもとの世界へもどることなんて、できないものと思つていました。みんなには、そしてライアンには、ほんとうに申しわけないと思つていました。でも世界をすくうためにぼくのいのちが必要なのだというのなら、それはしかたのないことだと、ロビーは思つていたのです。

ですが今は、そうではありませんでした。世界をすくうきゆうせいしゆとしてのつとめを、果たし終えたロビー。自分はまだ、生きてこの場に立つていたのです。ロビーは自身のおそろしい運命を乗り越えたのだということ、感じていました。そして……、ソシーのそんざいです。ムンドベルクのそんざいです。ぼくのこの身ひとつなら、いくらでもぎせいにささげてもいい。ここへくる前、ロビーはそう思つていました。しかし今は、ソシーがいるのです。ムンドベルクがいるのです。そのうえ、思いもかけ

ずもとの人間にもどることになった、アーザスもおりました。

かれらのいのちは、ぼくがきめていいことじゃないんだ。

ロビーはそのことに気づきました。それはまさしく、守るべきいのちだったのです。このさき、新たにどんな危険が待ちかまえていようと、ロビーは全身ぜんれいをつくして、かれらのことを守らなくてはなりません。そのためにはまた、自分のことも守らなくてはならないのです。自分がここでたおれてしまったら、いったいだれが、かれらのことをすくうのでしょうか？

しかし今となっては、もうすべてが手おくれでした。くずれ落ちてゆくがれきのそのただ中で、ロビーはもう、それを見つめることしかできませんでした。

ロビーの頭の中には今、さまざまな思いがめぐっていました。今までの旅のこと、かなしみの森での日々のこと。ベルグエルムさん、フェリアルさん、マリエルくん、リズさん、たくさんの仲間たちのこと。そして、その中でも、いちばんの思い。それはロビーのいちばんの友だち、ライアンへの思いでした。どんなときでもげんきいっぱい、みんなのことを心からはげましてくれた、ライアン。わがままで、おちようし者で、お菓子が大好きで、すごくこわいところもあって……。

やっぱりぼくは、ライアンのところに帰りたい……。

もういちど、いっしょに笑ったり、怒ったり、泣いたりしたい……。

「ごめんね、ライアン……」

くずれ落ちてゆくがれきの中で、ロビーは静かに、そうつぶやきました。

そんな思いからなのでしょいか？ ふいにロビーはそれがれきの落ちる音の中に、人の声をきいたような気がしました。それも、ただの人ではありません。それはロビーが今、いちばんききたいと思っていた人の声……。そう、ライアンの声だったのです。

まさか、そんなわけがあるはずもない。ロビーはこのさいごのときに、まぼろしの声をきいたのだと思いました。ライアンのことを思うあまり、まぼろしの声がきこえてしまったのだと。

しかし……。

つぎのしゅんかん、ロビーは、はつと心をふるわせて、立ち上がりました。まぼろしなんかではありません。ロビーはまたしても、そこにライアンの声をきいたのです！

「……ロビー……！」

まちがいありません！ ライアンです！ がれきの落ちるその音にまじって、たしかに自分のことをよぶ、ライアンの声がひびいてきたのです！ ロビーはもう、われも忘れて、むちゆうになってライアンのことをよびました。

「ライアーン！ ライアーン！ どこにいるのー！」

そしてそのあと。このかつてないほどのぜつぼうをうち破るすくいぬしが、まさにロビーの、その目の前にあらわれることになりました。それも、ただあらわれたというわけではありません。それはだれもがそうぞうすらできないほどの、とんでもないしゅだんでもって、とつぜんにこの場にまいおりにきたのです。

とつぜん！

どつごおおーん！ がらがらがら！ がつしやーん！

な、な、なにごと！ あたりはあつというまに、まっ白いけむりにつつまれてしまいました。その中から、しゅううーっ！ というおかしな音と、そしてがらがらというが

れきのこぼれ落ちる音だけが、ひびいてくるのです。そしてほどなくして、そのけむりが晴れてみると……。

なんとなんと！ そこには今までだれも見たこともないような巨大な鉄のかたまりが、でーん！ とあらわれていました！ その鉄のかたまりが、てんじょうのまるいドームをつき破つて、この広間の床の上につつこんでいたのです。これはいったい！

その鉄のかたまりは、なにかの乗りもののように見えました。そしてじつさい、乗りものだったのです。四かくてほそ長いかたちをしていて、なんのきんぞくでできているのか？ よくわからない、すいしょうのようにつやつやとした青と黒のかがやきを放っていました。

その乗りもの下の部分には、たくさんのしやりんがついていました。それらのしやりんが、くるくると空まわりをしております（あんまりいきおいあまつてつつこんできましたので、しやりんが空まわりしてしまっていたのです）。そしてしゅううーっ！ という音のしようたいは、その乗りものの頭の上についているえんとつや、しやりんのまわりから吹き出る、まっ白なじょうきでした。

乗りものの横にはとびらがいくつかついていて、たくさんのまどがあつて……、つて、あれ？ これつてどこかで、見たような……。も、もしかして……！

そう、まさにみなさんの目の前にあらわれたこの乗りものしようたいは、みなさん

の世界でもおなじみの、あの乗りものでした。それは……。

きかんしゃです！

き、きかんしゃが！ どうしてこんなところに！（そしてどうしてつつこんできたのでしょうか！）

あまりのできごとにより、ロビーは腰をぬかして、ただただ目をまるくしてしまえばかりでした。そして、そんなロビーの前に、とつぜん。

「ロビーー！」

きかんしゃのうんてん席にあたるところのとびらが、ばんっ！ いきおいよくひらかれて、そしてそこから……。

「ラ、ライアン！」

ロビーがさげびました。なんという、おどろきと、うれしさと、ありがたさなのでしよう！ そのきかんしゃの中からあらわれたのは、その通り、ロビーのいちばんの友だちの、ライアン・スタツカートだったのです！（まぼろしなんかじゃありません。ほんものですよ！）

そしてそこからあらわれたのは、ライアンだけではありませんでした。

「まったく！　なんてめっちゃくちやなことをするんだよ！　れっしやがこわれちゃつたら、どうするつもりなの！」

もんくをぶーぶーいいながら、出てきたのは……、ベーカーランドの若ききゆうていまじゆつし、マリエル・フィアンリー！　そして……。

「やれやれ。まあ、でも、ずいぶん早くついたから、いいじゃんか。それに、まさに、どんぴしゃの場所だったみたいだしな。ようロビー。げんきか？」

このあつけらかんとしたもののいい方、まさしくそれは、失われしシルフィアの種族の青年、リズ・クリスメイデインだったのです！

今やここに、なつかしのノランベつどう隊がせいぞろいです！　でもこれはいったい、どういうことなのでしょう？

思えばかれらは、ロビーが怒りの山脈へとむかうその場面で、ロビーとおわかれしました。そしてそのあと、ラグリーンの里長ラフェルドラードからのでんごんで、かれらはあるべつのにんむをいい渡されたのです（そしてそれはもともと、精霊王からのでんごんだったみたいです）。なんだかあるものをどこかに見つけにいくとか、「セイレン大橋へ、しゅつぱうつ！」とか、そんなことをいつていましたよね。あれから、かれらのそのにんむのことについては、物語の中ではひとこともふれられていません。読者のみ

なさんの中には、そのことをちよつときみしく（ふまんに？）思っていた方もいたのではないでしょうか？ とくにライアン、マリエル、リズ、かれらのフアンの方々は（その中でもとくに、「ライアンがぜんぜん出てこないー！」と思っていた方は多かったですかもしれないね）。

じつはわたしはあえて、かれらのそのにんむのことについてはふれなかったのです。だつてふれちゃつたら、このさいこの場面をお伝えする楽しみがなくなっちゃうじゃありませんか！ あ、いえ、わたしのことはともかく……、読者のみなさんにとつても、その方がよかつたはずです。ひみつがかんたんにはれてしまつたら、おもしろくありませんものね。今ライアンたちが乗ってきたこの巨大なきかんしゃのこと、そしてかれらがそれに乗ってロビーのことをきゆうしゆつにむかうというそれらのことについては、さいごのさいごのこの場面までの、いちばんのひみつだったので（ロビーにしらせていなかったのは、今思えば、かわいそうだったかもしれないませんが……。で、でも、すくいのぬしがいもかけずにあらわれた方が、もつとうれしいはずですから！

ところで、ライアンたちがそのにんむに旅立つ場面のさいごで、わたしはみなさんに、こうお伝えしていました。「きつとあなたは、そこで、どえらいものをもくげきすることになりますから……」。そう、あの言葉はまさに、このことだったので。空を飛んでつっこんできた、きかんしゃ。じゆうぶんにどえらいものだと思いますが、どうでしょ

うか？ すくなくともロビーにとつては、どえらいものだったようです。

「みんな！ いったい、どうして！」

ロビーがむちゆうで、仲間たち（とくにライアン）のもとにかけよって、たずねます。そんなロビーに、ライアンが「えへへ。」と胸を張って、まんぞくそうにいました。

「ほんとうにロビーは、ぼくがいなくちゃだめなんだから。ぼくが助けにこなかったら、今ごろロビーは、がれきでぺつちやんこになってたかもだよ。かんしゃしてよね。」ライアンが素晴らしいと思いますが、ロビーはちよつとだけ、つつこんできたきかんしゃのことを見ました。そしてちよつとだけ、こう思ったのです。もしこれがぼくの上につつこんできたのなら、ぼくはもつと、ぺつちやんこになってたと思うんだけど……。

（ですが、ご安心を。このきかんしゃには人のそんざいを感じ取ることのできる、リーダーのようなものがついていたのです。ですからこのきかんしゃは、人のいない広間のまん中をめがけてつつこんできました。いくらライアンでも、そのくらいのこととはちやんと考えていたのです。でも、いくらそうだったとしても……、やつぱりいきなりつつこんでいくのは、あぶなすぎですよね……。

そしてロビーのことを見つけることができたのも、このリーダーのおかげでした。ですからみんなは、ロビーのいるこの広間めがけてつつこんでいくことができたのです。もつとも、このリーダーは人のそんざいを感じ取るというだけでしたので、それがほん

とうにロビーであるのかどうかは、じつさいにたしかめてみるまではわかりませんでした。まあでも、こんなところにいる人なんて、そうはいまませんでしたから。

ちなみに、ロビーはムンドベルク、ソシー、アーザスの三人といっしょに、同じところにおりましたので、リーダーにはひとつの大きな光としてうつっていました。ですからやってきたライオンたちには、そこになん人の人たちがいるのか？ ということまではわからなかったのです。さすがにこのリーダーも、そこまではありませんでしたから。）

まあ、それはいいとして。さあ、ライオン、マリエル、リズ、これはいったいどういうことなのか？ 教えてください！

「あのあとね、ぼくたちは、みんなそろって、ある場所にむかったんだよ。」ライオンがいいいました。あのあとというのは、つまりロビーがラフェルドロードの背に乗って、怒りの山脈にむかったあとのことです。

「ロビーさんを助けることのできるものが、そこにあるということでした。それこそが、このカピバルのわざのしゅうたいせい、魔法れっしやだったんです。」マリエルが、うしろにそびえているきかんしゃ（魔法れっしやというのが正しい名まえのようです）のことをしめしながら、いいました。

「ちよ！ ぼくがいおうとしてたのに！」ライオンがマリエルの頭をぐいっとおし下

げて、その上に自分のからだを乗せながら、つづけます（ほんとうになかよしになったものです）。

「とにかく！ この魔法れっしやつていうのが、セイレンのみずべの山おくに、かくしてあつたんだつて。これを使えば、空をびゅーっ！ って飛んでいって、ロビーのことを助けにむかえるつていうんだよ。だからぼくたちは、ラグリーンたちの背に乗つて、まずはセイレン大橋にむかつたんだ。れっしやを動かすためには、この人の助けがいるつていうから。」

そういつてライアンは、れっしやのとびらの方をさししめしました。そしてそこから、よっこらせ、とあらわれたのは……。

「そういうことじゃな！ まったく、びっくりしたぞい。いきなりげんかんのとびらをぶち破つて、空飛ぶねこの者たちが、つつこんできたんじゃからな。」

あなたは……！ カピバラ老人！ セイレン大橋の下のあの小さな小屋に住んでいた、カピバラ老人じゃありませんか！

そう、マリエルの言葉にもありました通り、この魔法れっしやはカピバルのくの中に、ひでん中のひでん。まさに「もんがいふしゅつ」の、さいこうのわざだったので。そしてそのわざをあつかつてれっしやのことを動かすためには、やはりカピバルのさいこうのわざが必要でした。そのさいこうのわざを持っている者こそが、ほかでもあ

りません。かつてのカピバラのくにの重要人物、カピバルたちのたましいともよべるすいしようのこゝを持つてゐる、あのカピバラ老人だったのです（あの出会いが、まさかここまで大きなものになるうとは！ やっぱりこれも、運命だったのかもしれないね。

ちなみに、ライアンはカピバラ老人の家をたずねたそのときにも、やっぱりこんかいと同じようなことをしたみたいですね。つまりラググリーンたちの背中に乗ったまま、いきおいあまつて、どっかくん！ 入り口のとびらをぶち破つて、中につつこんでいつてしまったのです……。カピバラ老人にけががなくてよかつた……。)

そしてこの魔法れっしやこそが、アーザスの城の中からロビーのことを助け出すことのできる、ゆいいつのしゆだんでした。アーザスがたおされれば、その城のことをついでいるバリアーは消え失せ、さらに城そのものも、もとのかたちをとどめることができなくなつて、くずれ落ちる。その中からロビーのことをつれ出せるのは、この魔法れっしやだけだったのです。精霊王はそのことを、よくわかつていました。ですからライアンたちロビーの仲間たちに、この魔法れっしやに乗つてロビーのことを助けに行くようにと、伝えたのです。

（たとえラググリーンたちでも、アーザスの城のその中にまでははいりこめません。へたをすれば、城のほうかいとともにラググリーンたちまでまきこまれて、そのいのちを

失つてしまうことでしょう。くずれ落ちていく城の中につつこんでいくことのできる、強力な魔法の乗りもの。それこそが、このカピバルのわざによつてつくられた、魔法れっしやだったのです。なにしろあのいきおいで地面につつこんでも、れっしやにはきずひとつついていませんでしたから、どんなにがんばりようか？ よくわかりでしょう。

ところで……、読者のみなさんの中には、こう思った方もいるかもしれませんね。こんなにべんりなものがあるのなら、はじめからこの魔法れっしやに乗つて、アーザスの城へとむかつたらよかつたじゃんかって。ですがそれは、むりだったのです。ごぞんじの通り、アーザスの城のまわりには、アーザスのろいのけっかいが張られていますから。あのけっかいを越えてゆくのは、いかにこの魔法れっしやといえども、ふかのうでした。それにもしけっかいをとつばできたとしても、アーザスが自分の城の中に、このれっしやのしんにゆうをゆるすわけありません。こういったわけで、この魔法れっしやはアーザスがたおされ、のろいのけっかいも消え去つたあとで、「ロビーのことを助ける」というそのためだけに使われることになったのです。さすがにこれで旅をするというわけにも、いきませんでしたし。大きすぎて、目立ちすぎでしたから。そんなことをすればワットの者たちに、「わたしたちは、ここですよー」と教えているようなものなのです（それにこのれっしやのねんりようも、そんなに長持ちするというものでもあり

ませんでしたし。)

「ま、そういうこと。そんでおれたちは、ここに来たつてわけ。」リズがあいかわらずのちようしで、あつけらかんといいました。

「ちよ！ かつてに話を、まとめないでよ！ 終わつちやうじゃんか！」ライアンがリズのことをおしのけて、またしても前に乗り出してつづけました。

「長く、くるしい旅だったよ……。まあ、ぼくだから、なしとげられたんだけど。ロビーのことを助けるために、なんどもなんども、つらいこんなを乗り越えてきたんだ……。ほんとうにたいへんだった。」

ライアンがそういつて、「うんうん。」とひとりでうなずいてみせます。ですが。

「なにいつてんの。ずっとラグリーンの背中に、乗つてただけでしょ！」マリエルがいきました。

「ちよ！ ばらさないでよ！ せっかくロビーに、うんとかんしゃしてもらおうと思つてたのに！」

ライアンがそういつて、マリエルとまたわーわーはじめます。ですがこれは、いつものことです（ほんとうになかよしになったものです）。

そのとき。

「ありがとう、ライオン。ほんとうに、きみがいてくれてよかった……」

ロビーがそつとライオンに歩みよって、そのからだをぎゅつとだきしめました。とつぜんすることに、ライオンはとたんに顔を赤らめて、はずかしくなってしまう。

そして。

ここにきてライオンは、ようやく、そのほんとうの心のうちをロビーにうちあけました。

「ロビー、ほんとはね……」ライオンが、小さな声でいいました。「ぼく、ロビーのこと、心配でたまらなかつたんだよ……。アーザスつてやつに、やられちゃうかもつて……。だから、だから……」

「わあああー！」

ライオンはもう、声を上げて泣いてしまいました。そうです、ライオンはじょうだんつぼく、勝ち気なふうをよそおってはおりましたが、ほんとうはロビーのことが、心配で心配でたまりませんでした。まにあわないんじゃないか？ ロビーが死んじゃうんじゃないか？ ライオンの心の中は、ずっと、それらの思いではちきれんばかりだったのです。ロビーが今、そのやさしきでライオンのことをつつみこんだとき。ライオンのおさえつけられていたそのほんとうの思いが、せきを切つて、おもてに出てきてしま

いました。

「だいじょうぶだよ。きみが、助けてくれたもの。」ロビーはそういって、泣きじゃくるライアンのことをさらにやさしくだきしめました。「いったでしよ？ きみは、いつだって、ぼくのきぼうなんだって。」

ふたりはしばらくのあいだ、ずっとだきあっていました。マリエルもリズも、そんなふたりのことを、ずっと見守っていました。

「やっぱり、このふたりにはかなわないや。」マリエルはそういって、鼻をずっとすすりました。

さあ、だっしゅつです！　いくら魔法れっしやがあるとはいえ、いつまでもこんな危険な場所にいるわけにはいきません（ちなみに、みんなの今までのやりとりはすべて、てんじょうのがれきの落ちてこない（ひかく的安全な）れっしやの影でおこなっていましたので、ご安心を。そしてもちろんムンドベルクたちのからだも、がれきの落ちてこない、（まだ）安全な広間のすみに寝かされていました）。

「さあみんな、乗った乗った！　こんなところは、早く、おさらばせんと！」カピバラ老人がそういって、魔法れっしやのうんでん席に乗りこみました（うんでん席のあるいちばん前の車両のうしろには、ふたつの客車がくっついていました。そこには全部で五

十人ほどの人たちが、乗れるようになっていたのです。もつとも、ぎゅうぎゅうに詰めれば、百人以上は乗れましたけど。

「みんな、手を貸して。お父さんたちを乗せないと。」ロビーが、みんなにむかっています。

「この方が、レドンホールのムンドベルクへいかなんですね……」マリエルが、ムンドベルクのすがたを見てつぶやきます。「影の者となったムンドベルクへいかが、こうしてぶじに、もとのすがたにもどることができたなんて。ほんとうにきせきです。よかったです。ほんとうによかったです。」

ムンドベルクのことはずでにロビーが、みんなにかいつまんで説明をしていました（ほんとうに、急いでかいつまんでだけでしたけど）。女神の剣の力によって、ムンドベルクが助かったということ。そして女神ライブラのこと。ですがその身が助かったとはいえ、ムンドベルクがふたたびもとの力を取りもどすためには、まだ時間がかかりそうですということも。おそらく、しばらくはこのまま、ぐったりと寝こんだままでしょう。

「うわっ！ これ、アーザスってやつじゃない？」

そういったのはライアンでした。ムンドベルクの横に寝かされていたアーザスのことを見て、そういったのです。たしかに、ライアンがおどろいたのもむりはありません。ロビーはこのアーザスのことをうち破るために、いのちがけでここまでやってきました

から。

「うん。でも、ここに居るのは、もうおそろしい悪者のアーザスじゃない。かれは、むかしのかれに、もどったんだよ。かれも、やみにとらわれていただけに、すぎなかつたんだ。だから、かれのことも助けなきや。」

ロビーの言葉に、みんなはさいしよ、「うくん……」とうなっているばかりでしたが、やがてロビーの顔を見て、にっこり笑ってみせました。

「まったく、ロビーにはかなわないや。ほんと、お人よしなんだから。」ライアンがいきました（ライアンはそういつて、リズの方をふりかえります。リズは、「はいはい。おれがはこぶんだろ？ わかってますよ。」とぶつぶついいながら、アーザスのことをその背にかつぎ上げました。ムンドベルクやアーザスのことをはこぶのには、からだの小さなライアンやマリエルのちびっ子たちでは、たいへんでしたから）。

（アーザスとムンドベルクのことを、リズとロビーでさきにれっしやにはこびいれてしまつてから）そしてさいごに、ソシーです。ソシーのこともちよつとだけ、ロビーはみんなに説明していましたが、やっぱりみんな、この女の子がもともと人形だったなんというところが、とても信じられないといったようすでした（だつてどこからどう見ても、ふつうの女の子でしたから。ロビーでさえ、いまだに信じられないくらいだったので）。

「早く、げんきになってくれるといいんだけど。」そういつて、ロビーがソシーのことをだき上げました（やっぱり安全のことも考えて、ふたりのちびっ子たちにはこんでもらうのはやめておきました）。からだの小さなソシーは、ロビーひとりでもかんとんに持ち上げられたのです（ですからちよつと、おひめさまだっこみたいなかたちになりましたが）。そして、そんなときのこと。

「……………う、ん……………、ロビーさま……………」

ソシーが寝ごこで、ロビーのことをよびました。そしてソシーは眠ったまま、ロビーのそのからだにぎゅつとだきついたのです（これはただ、寝ほけてのことでしたが）。

ロビーはとたんに、まっ赤になってしまいました。今までは人形でしたからまだよかったです。が、こんどはソシーは、生身のからだなのです。ロビーは女の子にだきつかれるなんてことは、もちろんはじめてのことでした（人形のときのソシーのことはべつとして）。ですからロビーは顔から湯気を出して、はずかしがってしまったのです。

これを見たライアンは……………。

「ちよ！ ど、どういうこと！ なんなの、それ！ ぼくがないあいだに、なにしてたの、ロビー！」

ライアンはすつかり、ソシーにやきもちをやいてしまいました。ま、まあ、気持ちはずからなくてもないですけど……………。

「な、なになって、べつに、なんにも！ ソ、ソシーはほんとうに、アーザスの手下だった子で……」

ロビーがひつしになってべんかいました。ライアンはぐいぐいつめよって、ききいれません。

「ぼくというものがあらー！ うわきしてたの！ ゆるさないよ！」ライアンはそういって、逃げるロビーのからだをぽかぽかたたきながら、そのあとを追いかけます。マリエルもリズもカピバラ老人も、あつけにとられて、口をぽかん。「あいつら、このままおいてっちゃおうか？」リズがいましたが、マリエルもまた、「そうした方がいいかもね……」といて、うでをくむばかりでした。うくん……。

こうして、ロビーたちを乗せたこの魔法れつしやは、アーザスの城の中から出発していったのです（まずはバックで、どつかくん！ てんじょうのかべをなぎたおしながら、そとに飛び出していきましたが。でももういくらこわしたとしても、だれももんくはいいませんよ。この城はもはやこのさき、だれも住むことはないのですから）。そこから見ても、アーザスの城はもうぼろぼろにくずれ落ちていました。城をつつんでいたあの生きているバリアーも、もはやかたちを持たない赤い水の流れとなつて、はるかな谷底へとむかつて流れ落ちていたのです。そのバリアーから、そして城の中からも、きいろいろかがやきを持った光のようなものがつきつきにあらわれては、空に立ちの

ぼっていきました。これらはアーザスによってうばわれていた、人々のたましいのエネルギーだったのです。たましいたちがもとの場所にもどることは、もはやないでしょう。ですがこのたましいたちは、つづくみらいのいのちの中へと、生まれ変わってゆくのです。それがせめてもの、すくいでした。

さまざまなものが変わってしまった、アークランド。ですがそれらもやがて、新しく生まれ変わってゆくことでしよう。

きつと、もとのアークランドよりも、もつともつと、美しく、かがやかしいものへと……。

アークランドの運命をきめる大いくさが終わり、まず大きく変わったことは、やはりワットでした。ワットの持っていた「ほかのくにといくきをするのできるけんり」は、とうぶんのあいだ失われることになりました（これは軍を持つくにあれば、どこでも持っているけんりでした。ですがこのアークランドではワットいがい、このけんりをみずから進んで使おうとするくになどは、どこにもなかったのです）。これは心を取りもどしたアルファズレドみずからが、くにのつぐないのひとつとして、そのようにき

めたことでした。とうぜん、ワットの多くの高官たちからのもうはんたいがありました。が、アルファズレドはこのけつていをおしきつたのです（それがアルファズレドのアーランドに対する、せめてものつぐないの心でした）。

そしてワットは今までにしんりやくしてきたたくさんのくにぐにや人々に対して、これからなん年もの時間をかけて、つぐなっていくことになりました。ワットのくにのたぐわえは、あつというまになくなっていききました。そしてその軍勢も。ワットの軍勢はそのほとんどが、お金でやとわれた「よう兵」とよばれる兵士たちでした。かれらにお金をはらえなくなったワットは、そのため、くにの持つほとんどの兵力を失ったのです。残ったのはワットのお城にもとつかえていた、わずかな数の兵士たちばかり。そしてその中には、あの魔女っこ三姉妹のすがたもありました。

ベゼロインとりでを取りかえされたことは、かのじよたちの大きなせきになん問題になりました。とりでを取りかえされたときにエカリンのいつていた通り、やつぱりだいが、「怒られた」のです。そのためもあつて、この魔女の三姉妹はそのごの長きに渡つて、ワットのつぐないのそのさいせんたん立つて、たくさんのしごとをこなしていかなければならなくなりました。それこそ、しよるいのせりりから、ざつ用の山まで。

「なんでわたしたちが、こんなことまでしなくちゃならないのよー！」たくさんのしよるいの山にかこまれて、そのしよりをおこないながら思わずもんくをいつたのは、エカ

リンでした。もうさつきからエカリンは、なん時間も、このしよるいの山のせいに追われっぱなしだったのです。ですがそこに……。

ごちん！ げんこつがひとつ。それはやつぱり……。

「……これも、しごとです……！ もんくいうなです……！」しよるいの山をかかえたアルーナが、そういつてエカリンの頭をたたいていききました。

「いっただー！ もう、いやー！ ネルヴァから、上の人についてよー！ ネルヴァだったら、いうこときいてくれるでしょ！」エカリンが、すこしはなれたつくえにむかっているネルヴァにいいました。ネルヴァもまた、たくさんのくにくにに對してのしはらいのふり分け方をきめる、その計算に追われているところだったのです。ですがエカリンの言葉に、ネルヴァはほほ笑んだまま、こういうばかりでした。

「アルーナちゃんという通りよ。これも、わたしたちのたいせつなしごと。やばんなことをしているよりは、ずっとましじゃやない。わたしたちは、これでいいのよ。」

ネルヴァの、いがいな言葉。もつとずつとおそろしいことを、考えているような人だとばかり思っていましたけど（それこそライアンみたいに）。ネルヴァの人らしい、いがないいちめんを見たような気がします。

「……わたしたちは、これでいいです……。みんなにごめんなさいしたら、好きなことをすればいいです……。それまでちゃんと、はたらくです……。わたしたちは、めぐま

れてるです……。しあわせなんです……。エカリン……」

アルーナがいました。そしてまた、通りすがりに、ごちん……。ではなくて、こんどはアルーナは、エカリンの頭をやさしくなでてあげたのです（ひよつとして、はじめても）。

アルーナにそんなことをいわれては、エカリンももう、なにもいえませんでした。

「わ、わかったわよー、もうー。」エカリンはそういつて、また（まだだいぶ、しぶしぶのままでしたが）しよるいの山に取りかかりました。

ワットの魔女の三姉妹。かのじよたちが晴れてそのつみをつぐなつて自由の身になれたのは、それからだいぶたつてからのことです。うわきでは、かのじよたちはワットにわかれをつけて、遠い遠いくにへと旅立つていったということでした。かのじよたちは今そこで、新たな日々を送っているということでした。

旅立つ前。

「みんな！ まつたねー！」エカリンが笑顔で、ふりかえつていいました。

そして、アルファズレド。かれはそれからしばらくお城にとじこもり、今までのおのれの生き方を見つめなおす日々を送っていました。そしてそんなかれのもとになんども足をはこんだのは、アルマークだったのです。今ではアルマークはベーカーランドか

らの正式なお客さまとして、ワットをおとずれることができていました。アルマークのそんざいは、アルフアズレドの大きなすくいでした。かつて、ともに手を取りあつたふたり。むかしのままといふわけには今でもいきませんでした。それでもこのふたりのえいゆうたちは、かつての友じょうを取りもどしていたのです。ワットもベーカーランドも、これでだいじょうぶでしょう。このふたりがいるかぎり、そしてその思いが、つぎの世代へと受けつがれてゆくかぎりは……。

それから、ソシーとアーザスのそのごのことです。ペーカーランドについたロビーたちは、そこでノランたち、けんじやのみなさんといっしょになりました（ノランとカルモト、リブレスト、ランスロイの、ごうかメンバーです！ この四人をいっしょに見られるなんてことは、このさきにどとないでしょう）。まずはみんな、おたがいのことをたえあいます。ロビーは四人のけんじやたちそれぞれみんなから、あくしゆをもとめられました。「ほんとうに、よくやってくれた。」口ぐちにおくられるけんじやたちからの言葉に、ロビーはすつかり、きようしゆくしてしまつたものです（ライアンが横から、「ねえ、ぼくは？ ぼくは？」としつこくいつていました）。

「この者は、わたしがあずかろう。」そういつたのは、ノランでした。ノランはいまだ深い眠りの中にあるアーザスのことを見て、いつたのです。

「この者は、もはや、このアーケランドのそとにその身をおいた方がいいだろう。このアーケランドには、かれにとつて、思いでが多すぎる。ここにいても、かれ自身、つらくなるだけだろうからな。」

そのわきに静かに立っていたのは、ソシーでした。ソシーはすでにその眠りからさめて、アーザスのそばに、ずっとつきつきりだったのです（目がさめて、自分が人のからだになつていているということを知ったときの、ソシーのおどろきようつたらありませんでした。まあ、とうぜんでしょうけど）。

「きみは、どうするのだ？」 ノランがソシーにたずねました。「ここに、残るかね？ それとも、わたしといっしょにいくか？」

ソシーはずっと、うつむいていました。そしてそれから顔を上げて、ロビーのことを、じつと見つめたのです。ソシーの心の中は今、大きなまよいであふれていました。それはノランのいった通り、アーザスについていくか？ それともロビーとともに残るか？ ということだったのです。

「わたしは……」ソシーがロビーのことを見つめながら、いいました。

「わたし……、わたし……」

そんなソシーに、ロビーがやさしく語りかけます。

「きみは、自分の思った通りの道をえらばいいんだよ。きみにとつて、なにがいちば

ん、たいせつなことなのか？ 心にすなおにきいてみればいいんだ。」

ロビーの言葉に、ソシーはまたうつむいてしまいました。ロビーははじめて、ほんとうに好きになった相手。ですがアーザスもまた、ソシーにとつて、とてもたいせつなそんなざいだったのです。

そしてソシーは、けつだんしました。ソシーはしっかりと顔を上げて、ロビーのことを見ました。

「ロビーさま……、わたし、アーザスさまのおそばを、はなれるわけにはいきません。」
ソシーの言葉に、ロビーはやさしくうなずきます。

ソシーがつづけました。

「アーザスさまは、わたしのことを作ってくれた、たいせつな人。その人が、これから、新しい道をふみ出そうとしていゝんです。わたしはそれを、助けてあげなくちゃいけないんです。今のアーザスさまには、わたしが必要なんです。」

ロビーはソシーのもとに歩みよつて、その手をやさしくにぎつてあげました（ちよつと、ライアンのしせんが心配でしたけど……）。でもライアンも、こういう場面ではしかたがないと、りかいしてくれているみたいです）。

「かれのことを、しっかり守つてあげてね。そして、いつでも好きなきに、もどつてきて。ぼくは、いつでも、きみのことを待つてゐるから。」

ロビーの、やさしい言葉。そしてその言葉に……、ソシーはこんどこそ、そのやわらかなこはく色のひとみに、ほんもののなみだのつぶをあふれかえらせたのです。

「ありがとうございます……、ロビーさま……。わたし、きつと……」

ロビーはそんなソシーのことを、そつとだきしめてあげました（それを見ていたライアンは、しばらくだまつていましたが、五びようくらいたつて、「はいはい、そのへんがいいんじゃないかな。」といって、ロビーのことをぐいっとうしろにひっぱつてしまいました。せつかく、感動的な場面でしたのに……。やきもちやきにも、こまつたものですね。まるで、メリアン王みたい）。

アーザストソシーは、こうしてノランとともに旅立ちました。アーザスの目がさめたのは、それからなん日もあとになってからのことです。アーザスはソシーのことを作つたということを、ほとんどおぼえていませんでした。やみからかいほうされた今となつては、アーザスはやみにとらわれていたそのあいだのことを、ほとんど忘れてしまつていたのです。ですがソシーにとつて、アーザスが自分のことを作つたたいせつな人なのだということに、変わりはありませんでした。思いではこれから、作つていけばいいんです。ふたりの新しいみらいは、ここからはじまつてゆくのですから……。

アーザストソシーの物語は、ここからまた、はじまるのです。

ノランが旅立ち、そして三人のけんじやたちもまた、それぞれの世界の中へともどつていきました。カルモトは今でも、あの巨大なルイーズの木に住んでいて、学問とけんじゆうの日々を送っているのです（こんどはちゃんと、ノランにも住所を教えておきましたので、ご安心を）。

ちなみに、カルモトのつれてきたポメラニンたちは、みんなにせいだいに見送られ、かれらのふるさとポート・ベルメルまで帰つていきました。その口にみんな、大きなソーセージやハムを、くわえながら。かれらにその「おれい」をするために、ベーカールاندのお城のお肉はみんななくなつてしまいました。まあそれは、しかたのないことです。リブレストもまた、岩の口ポットたちをひきつれて、「なかなか楽しかったわい！

じゃあの！」といって、自分の住む岩の世界の中へともどつていきました（レイミールはリブレストから、「きねんに」といって、あの小さな岩のミニチュア兵士たちを作るミルク色の石を十二こもらいました。今レイミールはその兵士たちのことを相手に、剣のわざをみがいているということ。早く、いちにんまえの騎士になれるといいですね！）。そしてランスロイもまた、「さらば！」と（たくましい声で）いって、あのふしぎな者たち、レビラビたちをひきつれて、空の上の、雲の中の世界へと帰つていったのです（それこそ、風のように立ち消えていきました）。

ところで、けんじやたちとともにネクタリアの者たちもまた、かれらの住むタドウー

リ連山の聖地の中へともどって行くことになりましたが、新たに変わったことがひとつ。セハリアのめいを受け、百年のさいげつを越えて、今ふたたび、かれらの中からたくさんの者たちが、このアークランドにもどってきたのです！それはネクタリア全体の数からいえば、まだまだすこしばかりの者たちでしかありませんでしたが、これから生まれ変わろうとしているアークランドの者たちにとつて、これほど勇気づけられ、はげみとなるものもないことでしょう。またむかしのように、ネクタリアの者たちとアークランドの人たちがともに手を取りあつて暮らしてゆけることのできる世界がきずかれるのも、そう遠いことではないはずですよ。

そして、カピバラ老人のそのごのこともお伝えしておかなければなりません。カピバラ老人はときここにいたつて、ひとつのたいなるけつだんをしました。それは……、そう、カピバラのくにのさいけんです！ 今こそ、かつての美しいカピバラのくにのすがたを、取りもどすのです。みんなはその思いに、できるかぎりの協力をおしみませんでした。南の地にちらばつていたカピバルの者たちも、みんな集まつて、心をひとつにして、老人の思いにこたえました。そうして長いねん月ののちに、カピバラのくにはみごとくに、さいけんを果たしたのです！

その場所はもちろん、セイレンのみずべでした。ワットのつくつた数々のみにくいた

てものはみんなこわされ、その上にカピバルのわざのすばらしいけんちく物が、つぎつぎとつくられていったのです（あのガラスのようにとうめいで美しい空中どうろも、ふっかつです！）。今ではセイレンのみずべはいぜんにもまして、美しい場所になりました（カピバラのくにはシープロンドと同めいをくんで、土地の美しさを守るかつどうをつぎつぎにおこなっていききました）。そして、あのセイレン河。よごれたへどろの河となつてしまつていたあのセイレン河も、今ではすっかり、もとの美しい流れを取りもどしたのです。シープロンドの人たちにとつて、ライアンにとつて、メルにも、アークランドのぜんなる者たちみんなにとつても、こんなにもうれしいことはないでしょう（わたしも、読者のみなさんにとつても）。

カピバラ老人はその新しいカピバラのくにの、さいしよのしつせいとなりました。そしてそのカピバラ老人のもと、数々のすばらしきわざとともに、くにはますますさかえていくこととなつたのです（でもいぜんのようにわざをほかのくにぐに売り渡すようなまねは、けつしてしませんでした。そのかわりに、かれらはそのわざをおしみなく、ほかのくにの人たちにも分け与えたのです）。

ところで……、さいごまで「カピバラ老人」のままで通すのもどうかと思ひましたので、読者のみなさんにはここで、かれの名まえを伝えておきたいと思ひます。かれの名は、ジェーガン・ロックウオート。このアークランドがつくられてまもないころのい

いなる冒険家メンバーたちのうちのひとり、アライン・ロックウオートの、しそんでしたが、それはまた、べつの時間、べつの物語……)。

そしてさいごに……、ロビーのことです。

エリル・シャンティーンにもどつてきた、ロビー。そんなかれのことをいちばんに出むかえたのは、やはりかれらでした。それは……、そう、ロビーの家族ともいえる仲間たち。ベルグエルムとフェリアル、ふたりの騎士たちだったのです。

多くは語りませんでした。仲間たちはおたがいのすがたを見るなり、そのままかく、だきあつたのです。その目には、たくさんのなみだがあふれていました。そのなみだのひとつぶひとつぶが、今までのたくさんのこんなんや、かなしみ。思いでや、うれしき。それらのことを深くあらわしていました。

「おがえりなさい、ロビーどの……」フェリアルがさいごに、それだけいいました。そしてロビーはそんなフェリアルに、ベルグエルムに、ライアンに、あらためて、言葉をひとつとておくれたのです。そのひとつとて、ロビーの思いのすべてがこもっていました。

「ただいま……。みんな……」

こうして、旅の者たちはそれぞれの場所へと帰っていったのです。

ライアンは、シープロンドへ。

「また、ちよいちよいあそびにいくからね。それなりのかんげいを、よろしくー。」（この「それなりのかんげい」というのは、もちろん、「お菓子をどつきり用意しておいてね」という意味だったのです。）

ところで、エリル・シャンデーンにはライアンのことを出むかえていた、とくべつなもうふたりの人物がおりました。それは、そう、レシリアとルースアンです。ネクタリアとともに戦っていた、かれら。そのかれらがいち早くライアンたちのことを出むかえるために、エリル・シャンデーンのものもとへともどっていました。

レシリアのすがたを見るなり、ライアンはわれも忘れて飛びついてしまいました。ほんとうならかのじよたちには、もうとつくに出会えているはずだったのです。思いもかけず、たいへんなこんなの中へとまきこまれてしまった、レシリアとルースアン。そのかれらに今、ようやくのことできいかいすることができましたから。ライアンもレシリアも、なみだを流して、ただぎゅつとだきあうばかりでした。

「よがっただなあ、ほんどうに、よがっただなあ……」その横で同じくなみだを流しながら、

ルースアンとハミールがだきあっていました（なんだか前にも、こんなことがあったやうな気が……）。

ちなみに、ハミールとキエリフ、小さなレイミールも、レシリアたちとともにもどつてきていました。仲間たちはすでに、かれらのすばらしいかつやくぶりをたたえ、おたがいのくろうをねぎらいあつていたのです。ほんとうにおつかれさまでした！）。

ですがそんな感動的な場面に、ひとだんらくがついたあと。

レシリアはライアンに、こんなことをいったのです。

「さあ王子、かくごはできていますね？ 今までのべんきようのおくれは、しつかりと取りもどしてもらいますから。シープロンドにもどつたら、まずは、算数のドリル、十さつ！」

「ええーっ！ そんなあー！」ライアンがさげびました。

そしてロビーとベルグエルム、フェリアルの三人は……。そう、かれらのもどるべきさは、ひとつだったのです。それはかれらの祖国、レドンホールでした。

レドンホールのかには荒れ果てていて、どこから手をつけたらいいものか？ それすらもわからないほどのひどいありさまでした。ですがかれらは、そのひとつひとつのこなんんに、ひるむことなく立ちむかつていったのです。みんなの力をあわせれば、でき

ないことなどないのです。かれらの力をあわせれば、どんなことだってなしとげられることでしょう。レドンホールのくには、こうしてそれからなん年ものさいげつをかけて、すこしずつすこしずつ、もとの美しさを取りもどしていくことになりました。

悪しきやみの世界からかいほうされたムンドベルクは、そのご正式に、王の座をロビーにゆずり渡しました。それはロビーがまだ、十九さいのときでした（のちにムンドベルクにきちんとかくにんしましたところ、ロビーがアークランドをすくうこんかいの冒険に出たとき、ロビーは十五さいだったそうです）。ほんとうならまだまだ、王になるようなねんれいではありません。ですがムンドベルクはもはや、自分のやくめは終わったのだと考えていました。あとはロビーのうしろで、そつと、かれのことを見守っていくべきなのだと。

「王さまなんて！ ほくにはまだ、早いですよー」ロビーがそういったのは、とうぜんのことでした。なにしろ自分が王さまだなんて、どうしたって、そうぞうできるようなものではありませんでしたから。しかしそんなロビー（ロビーベルク王とよぶべきでしょうか？ なんだかしっくりきませんけど）のことをいちばんに助け、ささえてくれたのは、やはりベルグエルムとフェリアル、ふたりだったのです。

ベルグエルムは、新しいレドンホールのしっせいになりました。父であるデルンエル

ムから、そのやくめを受けついだのです。ベルグエルムなら、まさにうつつけでしよう（ちなみに、これはあんまり声を大にしていうべきではないのですが……、ペーカーランドの白の騎兵師団の長、ライラは、そのごなんども、レドンホールのベルグエルムのもとをおとずれたのです。そしてベルグエルムもまた、ペーカーランドのライラのもとをたびたびおとずれました。あくまでもうわさですけど、ふたりは「いいかんけい」になっっているのだとか……。ほんとかどうかはわかりませんがね。ベルグエルムにきてみて、「い、いや、それは……、ごほん！」と行ってごまかされるばかりでしたから。ライラには、こわくてきけませんでしたし……。でもほんとうにそうなら、みんなおうえんしてあげようじゃありませんか。なかなか、おにあいのおふたりですしね。いろいろがんばれ！ ベルグエルム！）。

そしてフェリアルは、レドンホールのすべての兵士たちのことをたばねる「ウルファ長」になりました。もちろんフェリアルも、「ええーっ！ わ、わたしがウルファ長ですか！」とびっくりぎょうてんでしたけど。ウルファ長というのはすべてのウルファの兵士たちの中でも、いちばんえらい人のことなのです。はじめはベルグエルムやほかの人たちに助けてもらえばなしでしたが、今ではだんだんと、かたにはまってきたようでした（とにかくがんばれ！ フェリアルウルファ長！ おばけに負けないでね！）。

ロビーはこうして、たくさんの人たちの助けのもとで、新しいレドンホールのくになっていくことになったのです。ところで、ロビーの剣は？ あの手はとうなつたのでしょうか？ ご安心を。女神のつるぎアストラル・ブレードは、きちんとロビーとともに、レドンホールにもどってきました。そしてその剣は、ベーカーランドの青き宝玉とともに、この新しいアーケランドのみらいをささえるための、大いなる力となったのです（力を使い果たした剣がもとの力を取りもどすためには、やっぱり時間がかかりましたけど）。今ではベーカーランドとレドンホールは、おたがいに助けあって、それらの女神の力の大きなかごを、このアーケランドにもたらしていました。剣と宝玉、このふたつの力によって、アーケランドをへいわにまとめ上げること。それこそが、アーケランドのふたりの女神たちのぞんだ、りそうのすがただったのです（それまでにほんとうに、長いねん月がかかったものです。でも今は女神たちも、きつとほほ笑んでいることでしょう）。

ふたりの人物が、どこかの森の木々のあいだの小さな広場で、話しをしていました。「ロビーベルクが、ほんとうによくやってくれましたね。」かがやくように美しいがね色の長いかみをなびかせながら、ひとりの人物が静かにいいました。

「われらがアーケランドに手をさしのべることは、これでしばらく、ないだろう。」も

うひとりの人物の声が、静かにその場にひびき渡りました。

「新しいアークランドをつくっていくのは、かれらなのだ。」

そういうと、ふたりのすがたはまるでまぼろしのように、空気の中へと消えていったのです。

ひとりは、ロビーの育ての親、リーファイ。そしてもうひとりは、イーフリープの精霊王でした。

「ここに、このアークランドをすくいたもうた、しんの勇者をたたえる！ ロビーベルクどの、こちらへ。」

ここはエリル・シャンディーンのもの、そのぎよくぎの間でした。そして今、あらためてロビーをはじめとしたすべての仲間たちが、一同にこの場につどっていたのです。

声のぬしは、アルマーク王でした。そしてアルマーク王の影から、きようしゆくそうに前にあらわれたのは……、もちろん、われらがきゆうせいしゆたる、ロビーだったのです。

今ロビーの目の前には、仲間たちをはじめ、さまざまなくにのそうそうたるメンバーがせいぞろいしていました。シープロンドの者たち、メリアン王もエレナも、きていました（ちなみに、メリアン王はライアンの手を、がっしりとにぎっていました。かつて

にどこかへ行ってしまわないためです。ライアンはだいぶ、めいわくそうでしたが……)。

けんじやたちをだいひょうして、カルモトがふたたびやってきてくれました。そのおともとしてついてきてくれたのは……、フログルのカルルとクプル！ なつかしい顔です。あいかかわらず、げんきそうです（ちなみに、カルモトはこのエリル・シャンディーンにくるにあたって、六人の木の音楽隊の者たちをいっしょにひきつけてきたのです。ですがかれらといっしょにお城の中にはいろうとしたところ、「申しわけありませんが、そちらの方々は、いっしょにお通しするわけには……」とお城の兵士たちにとがめられてしまいました。カルモトは木の音楽隊に「おいわいの」たいこのマーチングをどんどんならさせながら、いっしょにお城の中にはいろうとしたのです。やっぱりそれじゃ、おごそかなお城の中には、いれられませんよね。さすがに、うるさすぎです。カルモトはだいぶ、ふまんそうでしたが）。

そしてロザムンディアからは、ティエリーしさいさまとミリエムです。今ではすっきり、もとのからだにもなれたようですね。気が長いところは、もうなおっているのでしょうか？（ロザムンディアのまちはすっかりそうじが終わって、もとの美しいばら色のまちなみを取りもどしていました。今では西の街道も、またもとのにぎわいを見せているそうです）。

ちなみに、テイエリーしさいさまのすがたを見るなり、ライアンが「うわっ！」といってメリアン王の影にかくれてしまったのは、いうまでもありません。また「かわいー！」といって力づくでもみくちやにされるのだけは、かんべんでしたから。ライアンのかわいさは、四年たつてもぜんぜん変わっていませんでしたので。」

はぐくみの森からは、チップリンク・エストル。おともには村長さんのほさやくの、ティッドとロラがついてきていました（というより、チップの方がおともでした）。ふたたびチップに会えるなんて、うれしいかぎりですね。だいぶ、大きくなっているようです（はぐくみの森もまた、もとのにぎわいを取りもどしていました。森もすっかりきれいになって、ふたたび旅人たちへのもてなしがはじまっているそうです）。

マリエルもリズもリストールも、そしてラグリーンの里アップルキントから、ラフェルドロードとリュキアもきていました（リュキアの見た目は、ぜんぜん変わっていませんでしたけど）。

ちなみに、リズはこんかいの旅のことをあらわした新曲をはっぴょうしていました。それは今まででいちばんというほどの、大ベストセラーとなりました。エリル・シャーンディーンのまちでは、いつもリズのその曲が、ミュージックベアたちによってかなでられていたのです。それでもリズはあいかかわらず、あの山おくの小屋に住んでいるみたいですけど。やっぱりあそこが、おちつくみたいですね）。

カピバラ老人とカピバルの者たちもきていました。そして小さくくの王さまたちや、その家族の人たちまで、みんながこの場にやってきていたのです（ぎんねんながら、アルファズレドとワットの者たちだけは、この場にはいませんでした。かれらも早く、みんなと同じ席につけることを、わたしは願っています）。

そんなあふれんばかりの人たちの前に、今王さまの座を受けついだロビーが、かちんこちんになって立っていました。そう、この集まりはロビーが王さまになったことをおいわいする、その集まりだったというわけなのです（この集まりのしゅさい者は、アルマーク王でした。ですからみんな、お客さまとしてエリル・シャンデインに集まっていたのです）。

ロビーのあいさつに、みんなが、しーんとなつてちゆうもくします。ですがロビーはまだ、人前で話すことなんて、やっぱりなれていませんでした。

「あの……、ええと、その……」ロビーがいいかけましたが、やっぱりうまく言葉が出てきません。ゆうべあれだけ、スピーチの文章を考えてきましたのに！ そんなとき。

「ロビーベルク王、ばんざーい！ ほら、みんなも、たたえてたたえて！ ばんざーい！」

やっぱりロビーに助け船を出したのは、ライアンでした。

「ばんざーい！　ばんざーい！　アークランドの勇者！」

もう、ロビーの言葉も必要ありませんでした。みんなはただただ、せいっぱいのかんしゃの心を、このレドンホールの若き王さまにむけておくつたのです。それでいいじゃありませんか。百の言葉をのべるより、こっちの方が、よっぽどすなおというものです。

ロビーのまわりはもう、たくさんの人であふれかえっていました。みんなロビーにあくしゆをもとめ、ロビーは「あわわわ……」と、もうもみくちやです。と、そこに。

「ロビーベルクどの。」

やってきたのは、アルマーク王でした。

「いや、今はもう、ロビーベルク王といわなくてはなるまいな。そなたを心から、ほこりに思う。そして、ありがとう、勇者よ。」

アルマークはそういって、ロビーの前にひざまずきました。その場にいるほかのみんなも、アルマーク王にならって、そろってロビーにひざまずきます。もちろんロビーが大あわてしてしまったことは、いうまでもありません。

「や、やめてください！　そんな！　もったいないです！」

ロビーがいましたが、そんなロビーの手を取って、ライアンがにこにこしながらい

いました。

「ま、今はこのまま、受け取っておいたらいいんじゃない？　せつかく王さまが、頭を下げてくれてるんだしよ。めったにないチャンスだよ。」

ライアンの言葉に、ロビーはなにもいえず、ただただ頭をかいて、「うくん……」とうなるばかりでした。

「さあさ、みんな、はいったはいった！」

入り口のとびらをあけて、ひとりの人物がいました。今かれはこの場にやってきたなん人も新しいお客さんたちのことをむかえるために、大いそがしだったのです。ですがかれのあんないも、すぐにおしまいになりました。なにしろせまいところでしたから、こんなにたくさんのお客さんたちのことを、みんな中へいれるわけにはいかなかったのです。席はすぐにいっぱいになって、みんなはこんどは、そとにらんだ長いテールのもとに、じゅんばんについていきました。

いったいここは、どこでしょう？　古びた大きな、げんかんの木のとびら。そのわきには、こうしのはまったすすけたまどがひとつ、ありました。とびらの中は、なんとも見ばえのしない、ほらあなになっていて……。

読者のみなさんには、ここがどこだか？ もうおわかりになったかと思えます。ここは、そう、かなしみの森の、ロビーのほらあなでした！　そしてさきほどから、お客さんをむかえるために大いそがしになって動きまわっているのは……、それもはや、おわかりでしょう。そう、かなしみの森の、ゆいいつのお店、「スネイルのぎつか屋および食りよう品店」のあるじである、あなぐまのスネイル・ミンドマンだったのです！

そのスネイルがさきほどからまねきいれているのは……、そうです、それはこのかなしみの森に住む、たくさんの動物の種族の者たち。ロビーのことをはじめはこわがっていた、そのかれらでした。

スネイルはいいました。「おまえさんともどつてくる、そのときには、わしはおまえさんのことをみなにふれてまわって、おまえさんをかんげいできるようにしておくよ……」。そしてまさに今、それがほんとうのこととなったのです。

もはや、説明の必要もないでしょう。ロビーは今、ほんとうに心の底からかなえたかった、その思いを果たしました。それはこのほらあなにたくさんの友だちをよんで、パーティーをひらくということだったのです。お城での大パーティーにくらべたら、ほんとうにささやかで、小さなものかもしれませぬ。ですが今のロビーにとつては、このパーティーはほかのどんな大えんかいくらべても、もつとはなやかで、ごうかなものでした。

ロビーのまわりは、たくさんの方たちであふれかえっていました。ベルグエルムもフエリアルも、もちろんいっしょでした。マリエルもリズも、みんな集まってくれました。そしてそのとき、入り口の木のどびらをあけて、ロビーのいちばんたいせつな人はいつてきたのです。その手に大きなケーキのはこを、山ほどかかえて。

「おそくなつて、ごめん！ 森のおばあちゃんのやいたホワイトケーキ、いっぱいもらつてきたよ！ もう。ちゃんと用意しておいてね、つて、いつといたのに。ぼくが取りにいかなくちゃならなくなつたじゃないか。」

それは、そう、ライアンでした。ライアンはそのままケーキのはこをどさつとテーブルに山づみにすると、それからロビーの方へ近づいて、そのうでを取つていったのです。「さあみんな、集まつたね！ あらためて、しようかいするから。この人が、ロビーだよ。ぼくの、いちばんの友だち！」

そのばん、ロビーのほらあなに笑い声がたえることはありませんでした。

ロビーはここに、いちばんのしあわせを得たのです。

ロビーのこの物語は、これでおしまい。